

現代文學全集



PL
811
I85
1931

Miyake, Setsurei
Miyake Setsurei shū

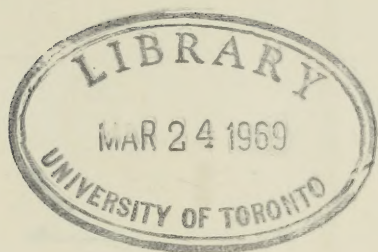
CALL NO: PL 811 I85 1931	AUTHOR: Miyake,
EAS	TITLE: Miyake Setsurei shu VOL: UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

COPIES OF SLIPS FROM THIS FOLDER
DATE CHARGED:

三宅雪嶺集

杉浦非水裝幀

改
造
社
版



PL
811
I85
1931



(昭和五年十二月十日) 書庫前の三宅雪嶺氏

「三宅雪嶺集」目次

卷頭寫眞(影影)

序 詞(筆談)……………二

我 觀 小 景……………三

宇 宙……………四六

眞 善 美 日 本 人……………三五

偽 惡 醜 日 本 人……………三九

冒 頓……………二五八

西 鄉 隆 盛 と ガ リ バ ル デ ー……………三〇四

二 元 帥 を 中 心 に……………三三七

東 西 英 雄 一 夕 話……………三四九

東 洋 へ 來 れ る 歐 米 人……………四二一

黒 黄 白 人 對 等 觀……………四二七

明 治 年 間 に 於 け る 思 想……………四三三

變 遷 の 一 斑……………四三三

言 と 字 と 文……………四二七

歲 時……………四二七

新 年 と 舊 年……………四四七

老 か 壯 か 舊 か 新 か……………四四八

生 命 の 長 と 幅 と 厚……………四四八

勤 勉 と 餘 裕……………四四九

寒 月 梅 花 を 照 す……………四五〇

如 何 に 浩 氣 を 養 ふ……………四五一

雪 中 松 と 白 色 緑 色……………四五二

大 寒 よ り し て 立 春……………四五三

紀 元 節 の 意 義 を 知 れ……………四五三

紀 元 節 と 梅 の 節 句……………四五三

梅 花……………四五三

源 は 遠 く 水 は 清 か れ……………四五三

男 兒 祭 女 兒 祭……………四五四

春……………四五五

五 月 幟 と 五 月 柱……………四六四

兩 節……………四六四

花 風 去 り 葉 風 來 る……………四六五

正 に 六 月 の 霖 雨……………四六六

優 等 生 よ り も 實 力 生……………四六六

七 月 の 學 生……………四六七

本 月 輩 出 の 新 人 物……………四六七

卒 業 式 か 始 業 式 か……………四六八

卒 業 に 伴 ふ の 悲 哀……………四六九

何 處 へ 旅 行 す……………四六九

歸 省 す る 幾 萬 青 年……………四七〇

休 暇 は 惰 樂 を 強 ひ ず……………四七〇

夏 は 天 然 娛 樂 多 し……………四七二

避 暑 地 域 は 廢 物 利 用……………四七三

登 山 か 水 泳 か 其 他 か……………四七三

陽 曆 に 於 け る 八 朔……………四七四

冷 靜 熱 動 共 に 銷 夏 す……………四七四

銷 夏 法 に 就 き……………四七五

游 泳……………四七六

無 休 暇 よ り 良 成 績……………四七六

暑 中 何 を か 得 る……………四七七

暑 中 休 暇 の 意 義……………四七八

陽 氣 な る 夏……………四七八

夏 期 休 暇 の 坐 禪……………四七九

何 處 に 如 何 に 暑 中 を……………四七九

過 ぐ す か……………四八〇

夏 日 將 に 盡 き ん と す……………四八五

休 暇 後 に 精 神 爽 快 か……………四八五

如 何 に 學 業 に 就 く か……………四八六

天 漸 く 高 し 清 し……………四八六

燈 火 稍 可 親 と は 何 ぞ……………四八七

活 動 に 可、安 靜 に 可……………四八七

秋 色 を 観 て 人 事 に 及 ぶ……………四八八

秋 草……………四八九

齊 しく 彼 の 月 を 賞 す……………四九〇

秋 は 高 く 露 氣 清 し……………四九二

百 鍊 して 秋 水 の 光……………四九三

九 月 十 三 夜 の 賞 月……………四九四

月 星 の 光 に 親 づ も 妙……………四九五

鏡……………四九五

天 長 節 の 過 去 將 來……………四九六

私 の 小 春 日 本 晴 れ……………四九六

霜 露 降 り 木 葉 落 つ……………四九七

日 英 兩 國 の 黃 葉 季……………四九七

秋 景 漸 く 冬 景 に 變 ず……………四九八

冬 に 入 り て 何 の 感……………四九八

政 治 季 節 と 火 事 季 節……………四九九

雪……………五〇〇

年 の 終 末……………五〇〇

老 の 到 る 到 ら ざ る……………五〇二

前 原 一 誠……………五〇三

邊 見 十 郎 太……………五〇三

(附) 山 と 水……………五二四

弱 國 に 出 づ る 英 雄……………五二四

成 功 に 就 き……………五二四

同 二四〇 我 が……………五二四

日 本 の 雄 大 性……………五二四

世 界 外 交 の 三 勢 力……………五二四

驕 奢 階 級 へ の 反 感……………五二四

梅 花 趣 味 は……………五二五

今 何 状……………五二五

職 業 と して の……………五二五

學 問……………五二五

同 二五三……………五二五

年 譜……………五三四

肯錫明月種梅正

懷私真正山木暮原題

清秘

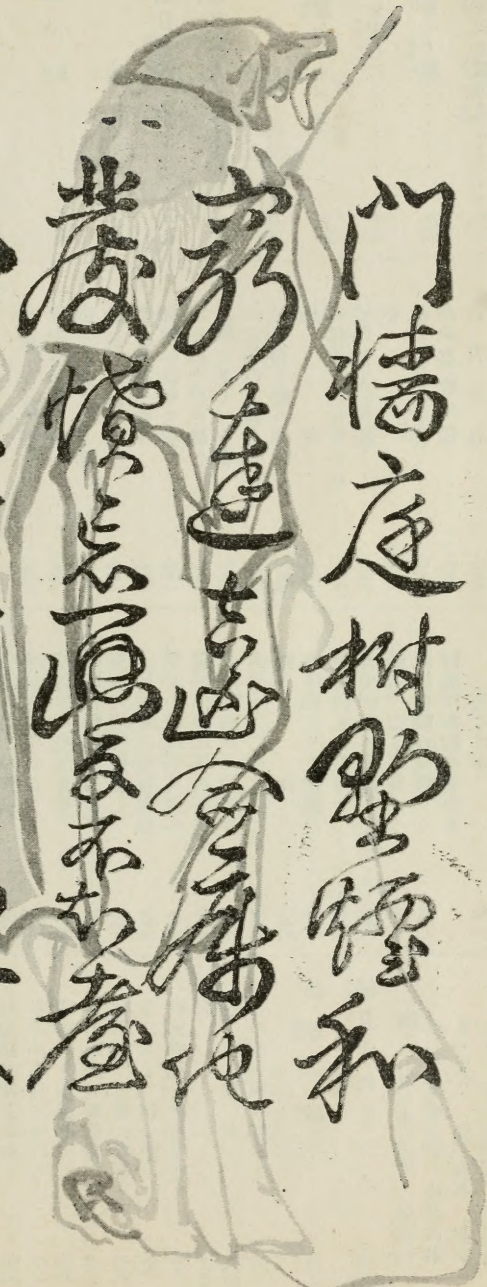
門牆庭樹助幽雅和

新造古函會屏地

茂增志道不亦卷

不先七十正年友每

旌



我 觀 小 景

凡 例

一 昨年九月亞細亞第十一號に我觀の一編を設け、哲學に關して陳述すること有らんと欲し、先づ其の緒言を作て曰く、余は哲學に關して未だ一たびも私見を開陳せしことあらざるなり。名を哲學會の發起人に列するも、其の例會に演說せるは僅に一回、亦固より簡疎にして道ふを須みず。會の雜誌を發刊するや、其の第一號に載するの説は、亦特に以て責を密ぐに過ぎず。哲學會の講義を擔ふも、時には則ち哲學史の梗概を説き、時には則ち先輩の論著を講述するのみ。嘗て哲學涓滴といふ一小冊子を著すも、以て少しく諸家の意想を表明し、評陳せんとするに在りて、務めて私見を聞ふことを避けたり。故に谷本富氏が哲學會雜誌に於て、高橋五郎氏が國民の友に於て、丁寧にかの著を評するを辱せしも、會

て一辭の以て答ふことあらざりき。蓋し哲學の道ひ難く、辯じ易からざるや、片々たる小疑問と雖も、坐談の頃、笑話の間、輕忽粗率の思考を以て之を遇し、之を解明せんとするは、甚だ其の事に不忠なるものにして、亦決して爲すを得べからざるなり。乃ち今自ら拙らざる、敢て哲學全體に就て、縱に私見を加へ、諸を大方に質さんとす、抑も以なくして爾せんや。

第一 志の之く所、已れが欲するがまゝに爲して其の能力を伸ばすは、人生愉快の事たり。呱呱たる孩兒、襁褓の中に在り、且ほ既に其の早蕨の如き手指を揮うて玩具を弄し、而して自ら娛むなり。人の尤も厭惡する所の者は何ぞ、曰く束縛、束といひ、縛といふ、其の手を枷し、其の足を鎖するの名、轉じて其の感情思想を抑制する所以を表するに至る。獄舎何物ぞ、礎して柱し、柱して

梁し、梁して聳す、亦好機迎にあらずといはんや、乃ち地に盡して之を爲すも入るべからざるもの、我が自由を奪はるといはいざらんや。我に自由を與へよ、否らずば我に死を與へよ、生死も亦大なり、或は泰山よりも重しといふ、而して之を輕すること鴻毛膏ならず、萬骨爲に枯れ、血を曠野に蹀み、以て自由を買ひし迹、欺くべからざるなり。自由既に得たり、人間世界を以て百年事なかるべきか。足ることを知らざるの已むなきや、久しいかな、馬を險坂に驅る、坂盡きて而して馬退むべからず、横溢せる能力は必ず其の至る所を窮めて止まんとし、劍鋒底に鳴り、肉體裏に生じ、氾濫の勢、平地に波を起し、事を好み、禍を微ひ、大亂を醸成して以て快を一時に食るに至る、皆能力を伸ばすの愉快已むべからざるか。顧みんと欲する所涯りなし、有る所を盡して其の欲する所に徇へんとす、難い哉。位九五の尊を履み、八十載の餘威に藉て、二世豊富の蓄積を傾け、力を四夷に伸ばし、思を神仙に驚せ、豪客駢侈、洵に人生の果報を享け

盡すも、秋風起つて白雲飛ぶを見れば、漢武も亦恨として歡樂極て哀情多しと歌ふを免れず。豈我が行路を妨ぐるの亞爾伯山あらん、不能の二字は愚人の字畫に於てのみ之を見ると、孤島の嶮隸、遽然として上國の天子たり、意氣跌宕、八荒を併呑するも、區々たる歐土の霸略、其の智を彈し慮を竭して、且つまゝならぬ世事をかこちしこと幾許ぞ、かくして拿破翁の生涯は瘴煙蠻雨、幽囚の裡に展轉反側して終れりき。風雲際會、志を上游に伸ぶる者の成就する所如何、況んや居り難きの下流、必らず居らざるを得ず、積威の人を約するに足らなき者が、非望を増長して、徒に手足をもがけばとて、易をか爲さんや、易をか成さんや。奈何せん、人の欲望の抑ふべからざるや、久安無事、毎に中より動くの能力、勃々として禁ぶべからざるに苦しむ、但だ力足らず、時會せず、鬱々として不平なるや、則ち便ち慷慨し、悲憤し、居れば則ち忽々として喪ふ所あるが如く、行て之く所を知らず、以て自ら傷り自ら損す。渠は知らんや、人生愉

快事、獨り筋骨の能力を振うて、同輩の動物を制御するに止らず、別に天地の形骸に非ざるありて、自ら其の欲する所に徇ひ、其の能力を伸ばすに於て縛々として餘地あるべきを。顔淵喟然として歎ずらく、龍めんと欲するも能はず、既に再才を竭す、立つ所ありて、卓爾たるが若し、之に従はんと欲すと雖も、由るなきのみと、由るなきの歎ありて、且つ龍めんと欲するも能はず、斯て饑食飄飲、屢々空しうして其の樂を改めず、一の愉快にあらざらんや。炒豆を嚼着して、千古萬古の英雄兒を嘲殺罵殺す、亦一の愉快なるか。桃花流水、悠然として間吟放浪、天地の心に通じ、鬼神の幽と語り、鏗爾として金石より出るが如く、恍惚として天上より來るが如し、亦一の愉快なるか。若し夫れ哲學が思想の運用に其の能力を縱にすることを得るや、至り極る所を知らざるのみ、言へば咎あり、議すれば刑あり、世間無數の惡態、盡く是れ抑制の現象なり。獨り哲理に至ては、其の思想を驚するや、帝にかの動物の拘率を受くることなきのみ

ならず、無邊際を極め、無量劫を閲し、恢乎たり、廓如たり、物の以て抑制すべきあらず、固より冕旒其の頭を束し、其の身を拘す、南面百城の以て樂を易ふべからざる所なり。余は乃ち愉快を這裏に取り來らん。
第二 我を認むる者斯に各々獨立の心なきを得ず、而して斯に又獨立の作用なかるべからず。唯國家に觀るも亦復然り、此の國家や、以て彼の國家に別つ所あれば、此の國家の彼の國家に對する、亦獨立の作用あらざる可らざるなり。我が邦の以て森々羅敷せる海外列國の間に別つ所以、而して自ら立ち、而して自ら別つ所以、それ如何とかなす。兵力を言はんか、十萬の陸兵、四十隻の艦船は邊海の警に應ずるだに覺えなし、財力を言はんか、八千萬の歲計、其の謀求に苦んで、羸々として民力の休養を説く、何を以て歐土列邦の間に比數せんや。固より以て今日の貧弱に安じて止むべきにあらず、日月匪弛、富強の實を擧げんこと、當務の急といふべからずばあらず、抑も是れ歲月の效方に之を積むの後に

望むべく、且々の能く辨すべきにあらざり、
 而して國家が以て自ら地歩を占めて、獨
 立の作用を示すや、一日も緩うすべから
 ざれば、方の以て伸ぶべきあらば、直ち
 に由りて國光を揚ぐるを勉む、固より其
 の所なり。今日に當りて、以て彼に頡頏
 して速に效を奏すべき者を求む、それ
 唯學術に在るか。學術の進暢、亦資金
 に須つあるや、歐土文物の盛、特に其の
 學校の衆多、教授の道に於て整理せるを
 以てせず、而して博物の館、展覽の場、
 機巧、技藝の苑、彬々として完備せる
 者、以て之を致すといふ。蓋し學術の知
 識を一般國民に播布するの道に於ては、
 必らず爾らざるを得ざらん、夫の單に一
 國學術の品位を高うするが若きは、必
 ずしも斯の如く大げふに、斯の如く彬々
 たるを待たざるなり。物理學、化學、其の
 以て學理闡明の用に應すべきの機械材料
 は、之を備ふる必ずしも莫大の費を抛
 つを要せず。且つ百科の學術、定論の
 未だ立たざる者、指數に勝へず、苟くも
 思想を此に用ゐんと欲するあらば、處と
 して思を潛むるに便せざるはなけん。

たとひ艱深の學理之を闡明するの難事た
 るを以て之を舍くことあらんも、東洋諸
 國、歐人の足跡到らざるの地決して少し
 とせず、蹶起して探檢の途に上らば、地
 質、生物、社會、生理等の學科に於て、新
 資料の裒然として吾が前に疊積し、吾が
 新知識を啓發するを待つが如きを見ん。
 現在種族の狀態を觀察して、之を古時
 の狀況に比照し、因りて世態に關する
 の理論を發揮せしことの較著なるは、近
 時歐土學術世界の實情なり。引んや種
 族、開化、皆其の源流を異にし、交通阻
 絶、悠久に互りて、曾て相知らず、而し
 て別に居然たる一大國民を形成せる東洋
 の現象に於て親切に研究するあらば、其
 の學術の資料に於て獲る所無量にし
 て、因りて學理の一新を致すことあらん
 は、殆んど疑ふべからず、是れ學士書生
 の須らく勉むべき所にあらずとせんや。
 然れども糧を棄んで萬里の征途に上る、
 猶ほ是れ多少の資金を備ふるなかるべか
 らず、所謂學士、書生、毎々窮乏を免
 れざるは古今の常態、何を以て遂に幾
 千の資を辦せん。唯哲學が、以て擔石の

儲なくして、縱に思想の上に振ふを得
 べし。夫の哲學の變遷を纏めて、其の史
 跡を研究するが若きは、亦往古來今、東
 西諸邦の陳籍を涉獵して、遍く其の旨を
 窮めざるべからず。但だ斯學の理論を攻
 察して、玄を詢し、微を探るは、實に純
 乎たる思想の運用に屬し、紛々たる齷齪
 紙片の力に籍ることなくして、兀坐靜
 觀、形影相憑り、而して絶大の事、至
 妙の理、方寸の内に盡えて、施て顯幽の
 境界を照破するを得ん。茅茨破藪、月
 啼り風笑ひ、偏仄として剛卷の中に在
 りと雖も、以て浩々の氣を抑塞すべから
 ず、余が揮で取るべきの學術は蓋し此
 に在り。

第三 學理の闡明は、十二分の精密を要
 す。一生を學術に委せる者、古より多
 からずとせず、五十年の生涯、之を不窮
 の事業に就じ了る、消日其の道を得ずと
 すべからず。粗漏の觀察、忽略の研鑽、
 輕易に淺見を披露するは、學術を汚すの
 罪免るべからず、而して適に由て自ら
 辱しむるに足る耳。但だ事實資料を蒐集
 して、其の據證を精確にするは、固より

歲月を積み、彙類の由りて精緻を致し、若くは機械の由りて完璧に歸するの甚だ喫緊なるを見ん、其の純乎たる理論を考究するの事は、夙く中年以前に成熟するを以て常とするが若し。天文學者、物理學者の若きも、數理を應用して、理論の節々精緻、一絲違はざるを致すは、類然たる老境に至りて方に成就すれども、其の梗概は則ち早く壯時に定まる者比々皆是れなり。ニュートンが其の理論の完備精細を極めしは、固より老年に在り、而も重力の法は既に少壯の時に發見されたり。哲學を攻むる者に在りては尤も然りとす、詩人が字句の烹鍊を極むるは其の老境に在れども、想像の豊富は寧ろ少時に若かずといふ、哲學の思想を蘊せ、能力の運用を縱にするは、頗る詩に類することあるなり。從來哲學者、誰れか其の定見を立てざりし者ぞ、デカルト、二十四歳、ノイブルフに居りて、初めて其の意見を定めたり、其の議論の完備せしは遙か後年に在りしも、大段の此の時に立てる者、竟に大に變ぜざるなり。ヒュームが哲學の著作は二十六七の

交に在りて、爾後全く筆を哲學に絶てり、所謂ヒュームの懷疑哲學は實に此の少時の著書なりとす。ライブニッツが初めて哲學に關する一家言を著せし餘も、蓋し此と大差なし。カントが其の新哲學を以て一代を動かせしは六十歳の頃に在り、而も其の意見の端緒は三十前後の著作に於て頗るこれを認むるを得べし。渠れ自ら其の諸子の著論に感ずる所あり、斯に其の新學說を啓發せられしを告白すと雖も、評に其の立論の結構を案ずれば、其の少著に淵源するや、逡蹊の蔽ふべからざるあり。フキヒテが書を著してエナの教授に聘せられしは三十一二の頃と覺ゆ。シェリングは其の少齡にして家言を發表せるを以て名ある者、實に三十歳にして、一家哲學の思想、傾注して遺す無く、更に壽を享くること五十年、一事の傳ふべきなかりき。シュツペンハウエルが大著、其の三十二の時に成り、ハルトマンの著作は二十二の頃より二十五歳の間に完結す、所謂不意識の哲學は即ち是なり。更に眼を放て諸々他の哲學者を觀るも、其の一家の定見を立

つるは概ね三十前後に於てせざるなし、哲學の識見が此の時期に定まるは、思ふに必然の故あるならん、かの四十五十にして聞ゆるなきは、彼れそれ竟に成るなきを以て之を識するも、誤れりとすべからざるなり。余や今犬馬の齡、亦三十歳に滿てり、若し幸にして學ぶ所全く空しからず、聊か一家の見を哲學の上に立つべからしめば、今や實に其の時なり。今にして以て立つべからずば、後の立つや竟に望むべからず、則ち哲學に關する意見を發表せんと欲するあらば、今を舍いて將何れの時を以待たん。其の陋劣にして觀るべきなからしむるも、時は至れり、復進むべきの前途なきを奈何せんや。歲月の效を積めるにあらず、涉獵の勞を取れるに非ず、便ち輕率にして其の見る所を述ぶ、陋劣の識は固より免れざるを知る、而も識を恐れて敢て述ぶる所なからしむるも、陋劣なる者世も亦假して高尚ならしむべきにあらず。陋劣は我在り、述ぶると、述べざるとに在らずば、一念の述べんことを欲する、斯に斷然として之を述ぶるも亦可ならずとせ

んや。哲學の意見、述ぶべきや既に決す、抑も如何にして之を述べんとするか、是れも亦一問題なり。哲學の研究は、一國の私事にあらず、弘く列國の學者に示して、其の意見を叩くを當然とせば、之を述ぶるに尤も廣く一行はるゝの國語を以てすべし、之を著すに一巻の書冊を以てすべし、然らずば之を載する、哲學會雜誌の更に適當なるありといふ。是れ皆非なり。外國語を以て之れを述べ、而して外國人をして普通に解得すべからしむるは、難きこと言語に絶せり、必ずや大に外國人の刪語を経ざるべからず。斯の如くして假りに其の文字に遺憾なきに至るも、效果の以て勞を償ふに足るは、殆んど識るべからざるなり。獨語の英佛語と相距ること幾何ぞ、獨逸の哲學書の英佛人の眼に上る者、寥々として晨星の若きのみ。且つ獨逸は哲學の國なり、シヨットンハウエル絶妙の筆を以て超倫の理論を發揮す、而して其の國人の曾て其の書名をだも知らざること四十年、厭世の大家をして、絶望悲憤に其の世を卒

へ、徒らに地下に盛名を擔はしむ、國人大家に負かずと謂はんや。乃ち今絶海の東、日本國の一寒士が、呂律の合はぬ外國語を以て、聊か著作する所あればとて、何人か注意を此に傾くる者あらん。之を大家に贈れば、絶東の異邦人が著作を珍異として、御世辭に充されたる簡短なる返書を與へ、書架の飾りとして一隅に列陳せらるゝことは之あらん、書中の消息、仔細に咀嚼して、異邦人の腦力を檢せんことは、萬望むべからず。寧ろ若かんや、述ぶる者が述べ易く讀む者が讀み易きの邦語を以て之を記し、聊か邦人が其の思想を練磨するの資に供せんには、其れ或は思想深遠の人、踴躍風發、新説を發揮して全世界に表白するや、資を以て其の理論を啓發するの料に供せらるゝを得ば、是れ且暮に之に逢へるなり。これを著すに冊子を以てし、若くは之を哲學會雜誌に載するは、洵に其の讀者の一部に届られんことを恐る。余は固より此を以て専ら哲學を攻むるの徒の評議に任せて足れりとせず、苟くも獨立の思想を發揮して、事功を創立せんとするの

人は、探て參攷に資するあらんことを欲して已まざるなり。且つ人の稱して哲學者とし、而して自らも亦哲學者たるを許す者時に或は哲理の思想に置てし、而して事理を剖析するの能に富む者、却て思ひもかけぬ種類中より出づることあり。余は寧ろ胸心の異類人と語るも、白頭生面の哲學者と談するを願はず、是れ一亞細亞を掃で、特に之を掲ぐる所以、余も以て轉錄甚だ其の處を得たりと爲す也。

終りに臨み且つ言ふ、余が意見の爾劣は言ふを待たず、而も今日に當りて以て力の之に尙ふべきなし。昔千里の馬を求めて、其の骨を買ふ者あり、余は實に骨を售らんとする者、庶くば賦馳駢馳を接して至り、勇を鼓して新説を發揮する者翁然として起らんか、余の至願なり。余は洵に郭隗なり。

次いで其の第十二號に定義上と題して云く、

哲學とは何ぞや、既に此の間を得、斯に必らず之が定義を與へざるを得ず。抑も定義それ輒く道ふべけんや。(一)夫れ

哲學なる名辭は、我より作れるに非ず、
素英語のフキロソフキを譯せる所、其
の語原は蓋し希臘のピタゴラスに發せり
と云ふ。然れども其の語原こそピタゴラ
スに歸すべけれ、固より之が以前に在り
て、哲學の源流は既に已に開けたり、爾
來後世代、此の名辭を用ひて、各々其の
家言を立てし者、指屈するに勝へず、而
して立つる者が此の名辭に就て、各々一
種の概念を有するは亦其の所也、夫の
支那に在りて、性理といひ、致知といふ
も、ただ相類する者あり。それ既に斯の
名辭あり、則ち斯に多少概念ありて形づ
くらるゝの已むべからずとせんに、諸家
其の宗を異にして、歸趣する所を知るべ
からざれば、一を取て他を捨て、而して妄
斷して哲學の定義、全く此に止まれり、
いふを得ず。唯我が立つる所を擧げて、
我が哲學は是れと謂うて足れり、即ち思
想する所ある者が、自ら其の思想を反
省するに、謂ゆる哲學なる者と相似たり
といふに過ぎず、亦甚だ漠たらざるや。
(二)且つ哲學なる名辭の下に包括せらる
べき思想は、複雑多方極まれりとす。今

之に定義を與へんといふ、是れ之が概念
を語言に上すといふなり。夫れ概念の己
れの心、論議するや、ただ明瞭にし
て、自ら以て哲學と爲す所の義に於て、
曾て晦澁を患へずと雖も、之を語言に
上するや、則ち最も簡なるの辭句を以
て、かの複雑多方の義を表せんことを要
す。既に複雑多方の義を表するに、最簡
の辭句を以てすれば、其の用ゐる所辭々
句々、皆一々に複雑多方の義を宿せざる
を得ずして、既に辭々句々、皆極難多方
の義を宿すれば、其の辭々句々、亦一々
に之に定義を下さざるを得ず、是の如く
ば曷の窮極があらん。要するに哲學の定
義をして、極めて簡明に、而して極めて
解し易からしめんとするは、至て難事に
して、其の極を要せば、必らず其の議論
の全體を通俗するに非ざれば、定義の以
て立つべからざるを見る也。
然れども先づ定義を與ふるは、我に在て
は聊か其の概念を表出するを得、而して
人に於ては、且つ以て標的を示すを得る
の利あり。所謂哲學の定義に於て、其の
正鵠を得んこと固より覺束なきも、哲學

の道ふ所、哲學に非ざる者の道ふ所と
辨別あるは問ち或は之を得るに幾し、
抑も形あるの物、感覺の以て知覺すべき
者は、之に關する概念を表出するや、直
ちに其の實物の具する所、形色聲臭を
以てすれば、言ふ者既に言ひ易く、而し
て聽く者亦解し難きを患へずと雖も、か
の特に思想に屬するの事に至ては、動も
すれば漆桶掃帚、其の全體に關する概念
を表出して、人をして聞く曉諭して遺憾
なからしむるの極めて望み難きあり。當
に説く者の以て明かに此の概念なるべ
からざるのみにあらずして、聽く者も亦
多少、聞いて而して解すべきの思想を有
するなきを得ず。若し夫れ説く者の理義
にして、嘗て遍く世に行はるゝ所に非
ず、而して一家獨造のみに係らしめば、
其の思想を一括し、之が概念を作りて以
て創めて聞くの人心に入らしめんとす、
其の難きや益々甚し。然れども議論に
入るの前に當て、其の綱領を擧げて概
念を拈出し、以て標的を示すは、已むべ
からざるの順序たり、たとひ拈出せる
概念にして難解難知の義たらしむるも、

かの標的の立たざる、其の論述する所の範圍、竟に何れに屬するかを知らざるに比するに、猶ほ愈るなり。

且く我が哲學の概念を拈出せんか。顧ふに所謂標的を立てて之を示すとせんも、其の在る所の何れの方なるを示さず、突如として標的を看よ、標的を看よと號ぶ、四顧倉皇として目眩せざらんや。人に教ふるに某の都邑を以てせんとす、先づ他の知る所の地を據とし、此を距る幾里程、何れの方向に位すと示し、然る後其の標山帶河、形勢の詳細を説く、是に於て他の眼中、宛として其の都邑を睹る、是れ必出の序なり。我が所謂哲學の概念を説示せんと欲す、先づ一般普通に知らるゝ所、行はるゝ所を據として、觀察を下す、亦必由の序と謂はん。苟くも哲學といふ名辭を知る者、渠れ皆多少之が概念を有せざることなく、其の概念も亦皆多少、所謂哲學に涉らざる者なければ、執へて以て據とし、對校して而して我が概念を發揮すべからざるなきが如し、而も若し其の普通に知らるゝ所、行はるゝ所を求めば、かの哲學會雜誌が常に

其の表紙裏に載する所より便なる有らざらん。是れ甚だ意を用ふるの文字といふべからざれども、亦泰西哲學者の意見に於て頗る參酌し、幾くは大なる瑕疵なき者と謂ふを得んか。但だ哲學の義を釋するに於ては、其の曖昧にして錯誤すること、蓋し此より甚しきはあらず。其の況に曰く、

哲學者。所以論究思想之原理事物之原理之學也。是故思想所及。事物所存。哲學莫不關焉。定心理之原則者。是爲心理哲學。定論理之原則者。是爲論理哲學。論政法之原理者。謂之政法哲學。論社會之原理者。謂之社會哲學。論道德之原理者。則倫理哲學也。論美術之原理者。則審美哲學也。論宗教之原理者。則宗教哲學也。其他文學史學教育學。與夫百科理學。亦莫不各基于哲學之道理由于哲學之法則矣。故先哲稱哲學云論定諸學之原理原則之學。而又於哲學中。特有所論究原理之原理原則之原則之大宗學。名之曰純正哲學也。

何ぞ其の言の茫として捕捉すべからざるや。曰く哲學は思想の原則、事物の原理

を論究する所以の學なりと、是れ或は編者が以て哲學の定義と爲す所たるか。而して之に繼ぐべし。則ち云ふ、是故に思想の及ぶ所、事物の存する所、哲學關らざるなし、某々の原則を定むるは、某々哲學とし、某々の原理を論ずるは某々哲學なりと、則ち謂ゆる哲學の義、之をかの謂ゆる科學といひ、理學といふ者に視るに、會て分別するなきに似たり。凡そ學術と謂ふ所にして、其の語尾のロギーを以て終る者は、皆以て哲學と稱するを得べく、則ち哲學の義や、單に學といふに同じく、謂ふ所心理哲學は則ち心理學に同じく、論理哲學は則ち論理學と同じく、社會哲學は社會學、倫理哲學は倫理學と稱ぶなからん。然るに其の下に於て、先輩哲學を稱して諸學の原理原則を論定するの學と云ふと曰ふを見れば、亦疑なき能はず。謂ゆる先輩の稱する所は、蓋し主としてフキヒテの徒の言に取るあるか、コントの若き、スベンサルの若き、亦太だ相類する所ある者、而も此等先輩が謂ふ所の哲學は同より純然たる哲學にして、かの理學と分別するなきの學

にあらざるなり。其の下に於て又曰く、
哲學中に於て、特に原理の原理、原則の
原則を論究する所の大宗學あり、之を名
けて純正哲學と曰ふと、此の所謂純正
哲學こそは、世人が之を理學に簡別して、
特に哲學と謂ふ所なるか、即ち編者が
單に哲學といふ所の者は、果して何を以
て所謂科學といひ理學といふ者と簡はん
や。然れども世人が理學に簡別して哲學
といふ者は、則ち編者が以て純正哲學
と爲す所なることは、纔かに明かなる
を得たり、且つ所謂純正哲學の義とす
る所は何如。曰く原理の原理、原則の原
則を論究するの學と、原理の原理、原則
の原則、是れ果して何の義とする所ぞ。
起手には則ち單に哲學として之が義を
釋して云ふ、思想の原則、事物の原理を
論究するの學と、斯れ亦足るに非ずや。
何を苦して更に原理の原理、原則の原
則といふが若き蛇足の釋義を下さざる
べからざる。原理の原理、原則の原則を
論究する者あらば、更に原理の原理の原
理、原則の原則の原則を論究する者あら
ざるを得ず、編者は則ち何くに標榜を建

て、此より以てを所謂純正哲學の論究
すべき區域とせしか。編者は又原理、原
則の二語を對用したり、所謂原理といふ
語は、原則といふ語を以て差別する所あ
るか。思想には則ち原則といひ、事物に
は則ち原理といふ、心理と論理には則ち
原則といひ、政法以下には則ち原理とい
ふ者、亦か前の二者が思想に屬し、後
の數者が事物に屬すといふを以てするに
似れば、原則の思想に關し、原理の事物
に關すと爲すは、蓋し編者の意ならん。
夫れ單に原則といひ、原理といふ、均し
く之れ究竟の道理に義を取るを常とす、
今乃ち故らに對用して思想には原則とい
ひ、事物には原理といふ、人をして疑
を其の差別に生ぜしむるを致す、辭を設
くること曖昧、人を誤るも亦已甚し。且
つ既に原理を以て原則に對し、而して事
物を以て思想に對すれば、則ち更に此に
一の疑問を生ぜん、所謂原則の原則、原
理の原理を論究すといふ者は、それ思想
の原則の原則と事物の原理の原理とを併
せて論究せざるべからずとするか、將單
に思想の原則の原則を論究し、若くは單

に事物の原理の原理を論究す、斯に可な
りとするか。ヘーゲルは全く思想を論究
せる者なり、リュキエスの流は則ち事物
の原理を究めたりと謂ふべし、是れ兩つ
ながら之を純正哲學に屬すべきや否。
且つ思想と事物と殊別に論究すとせば、
其の兩者の關係は、何如に之を究明す
べき、思想の原則を究明するや、勢必
らず事物の原理を明らむべく、事物の原
理を究明するや、勢必らず思想の原則
を明らむべしといふ歟、時としては然る
ことあらん、而も是れ豈必ずべけんや。
思想は則ち其の原則を究明し、事物は
則ち其の原理を究明するも、かの兩者
の關係に至ては、依然として知るべか
らざるあらば、竟に將に之を奈何せんと
する。シェリングの若き、乃ち思想と事
物との關係を保たんと欲し、斯に哲學を
呼んで絶対の學といひしにあらざや。今
乃ち漫然として、思想の原則、事物の原
理といひ、更に原理の原理、原則の原則
といふ、常に勉めて晦澁を増すのみな
らず、又濫りに假定を雜ふ、寧ろユーベ
ルウエトが哲學は原理の學なりと曰ふの

較晦澁を減じ、兩して假定を濫用することなきに若かざるに似る也。哲學は原理の學なりといふ、其の義や亦甚だ漠然たるを免れざるも、原理を究明するの謂、即ち哲學たるを認知せば、聽く者以て微しく方向を知り、庶くは亡羊の數なきを得んか。但だ單に原理の學といふ、其の太だ漠然として、其の定義の或は循環の過に陥るなきかを疑ふ。且つ言へ、原理とは何ぞ、原理なる者の存立する、人の以て發見すべき所なるか、則ち原理なる者、必ずや一種の面貌を具するなきを得ず、而して原理以外、非原理なる者の以て原理に簡別すべきあるか。哲學は原理を究明すべき者ならば、其の非原理なる者は、抛棄して顧みず、斯に可なるか。若しかの非原理なる者、這裏皆實に原理の在るありとせんか、是れ竟に非原理なきなり、究竟するに原理を究明するといふも、竟に其の何の義を成すを見るなからん。人の善く言ふ所を聽く、曰く眞理を發見せんと、渠れ等は眞理なる者を以て、溪の底、岩の窟に潛在して、時有りてか人の眸子に入り來

ること、金といひ、銀といふ者の若く然りとなす乎、それをして顧みて一たび其の言ふ所の意味を思はしめば、茫然として自ら失せざらんや。嗚呼何をか哲學と謂ふ、哲學のそれ竟に定義を下すべからざる也耶。

篇を續で所志を果さんと欲せしも、偶々俄に南航の舉ありて事中ごろにして絶えぬ。今年四月南土より歸り、宜しく再び前志を繼ぐべかりしも、多事匆卒、加ふるに別に考究する所あるより、今に至て未だ果さず。因て思ふ、精思博辨、前日の所志を成して遺憾なからんは、自今而後、旬月の際期す可くも思はれず、或は終生着手し難きやも測られず、而して全く所志を抛つて、前日の告白を空しうするも、亦至て負心の事と爲す、乃ち其の要を擧りて、梗概を簡説し了る、異日機あらば、更に博參旁照、以て前志を成すに及ばんか、而も是れ固より必期すべからざる也。

一 平日雜誌に新聞に時事を漫評し、聞て學校に授業することあるも、概するに學術研究の事に於て、關係の極めて疎遠なるを免れず、又最も資力に乏しくして、書籍を

購求すること能はず、學理の討究事情皆適せざるなり。但だつれんの折り多少の致思なきにあらざして、時に據べて以て篇を成すある已。かの常に大學に在て、専ら學術に従事し、其の書庫に據り、實驗室に出入して、博覽稽査の便ある者は、原より當に人に學術に奮ひ、其の所見を述ぶること縱横自在を得べし、亦其の職分なり。但だかの異日に人に奮はんといふに口を籍て、他人を冷笑し、一世を睥睨するは、甚だ取らざる所と爲す。云ふ、當に一生の力を竭して、千載必傳の言を立つべしと、然るも凡そ人の望む所、是より愚なるあるか、千載に傳ふる者、必ずしも超卓の言にあらず、道徳纏連ぶる所、決して秀絶と爲すべからざるも、而も老子は遂に道教の祖として、奉崇今に衰へず、リストールの教、中世に盛を極むるも、而も其の衆の爲に尊奉せられしは、方に其の淺薄の處にあり、夫の天文に關する言の如き、全く觀るに足らずして、而して久しく人の據る所と爲れり。偶々精算の言を立て、久しく埋没して、數百歳の役に顯はるるありと雖も、是れ其の時や、人の知識識

に此に類する説を認知する程度に迄到達せる者にして、特に其の人に待つるに非ざれば、其の顯はるゝや、聊か先見若くは暗合の虚譽を博するに止まり、寸毫も世に裨益する所あるに非ず。凡そ一派の開祖として、永く後世に名ある者、必ずしも其の力あるを以てせず、儼然に出づる者十に八九、而して眞に名を傳ふるとて亦何かせん、乃ち今自ら期して大に百世に傳はらんことを望む、俗物の慾のみ、孩兒の見のみ。今は當に其の爲さんと欲する所を爲すべし、笑ふべくして笑ひ、泣くべくして泣き、喜ぶべくして喜び、怒るべくして怒る、茲に足る、其の傳不傳を問ふは、鄙陋の至りなり、況んや異日に大に奮ふを名として、其の今の爲す無きを蔽はんとする者の若き、固に言ふに足らざる哉。

一、本書を讀む者、或は其の舉例の泛濫に過ぎて、論述の漫漶に失するを咎むるあらん。但だかの全體の立言、務めて簡潔を期し、究めて冗雜を避けたり。讀者の必らず一過讀了せんことを冀ふ、又既に短篇小冊、通讀に難からざれば、讀了に至らずして、妄りに疑念を拂き、まざらんことを冀ふ也。

一 本書は、之を内藤虎次郎、山芳三兩氏に口述して、託して文字を成せる所なり。後稍々點竄を加ふると雖も、文字の責は、素より二氏に在り。

序論

事先づ定義を要するか、其の定まれる義を求むといふか、時移れば則ち義も亦變じ、甚しきは今者の往者と全然相反する者あり、其れ焉くに往てか一定不易の義を求め得るとせんや。アルケミーありて斯に化學あり、アストロロヂーありて、斯に天文學あり、然るにアルケミーの化學と、已に其の義を異にし、アストロロヂーの天文學と、亦旨を等しうせず、今日盛に行はるゝ諸の學科、動もすれば原をアリストートルに歸せんとするも、而も其の言を立つるや、復決して二千年前の説と軌を同じうせざるなり。但だ名の存する所、實未だ全く變ぜざる者あり、其の變遷の跡を尋ね、其の脈絡の由を釋れば、其の間亦多少の貫線を見ることがなれば、あらず、かの其の名の既に舊に仍らざる者

は之を索むるに由なきことありと雖も、近世盛行の學科にして其の前の時代の創稱に係る者に至ては、たとひ説く所理論の日月に遷遷變化する、復創起の當日に同じからざるも、其の名にして猶ほ存して改らざるや、其の義の一致も亦盡く壞られざるを看るなり。夫れ哲學なる者は、かの諸學科の中に在て、由來最も尙しき名稱の一なり、斯の學を爲す者、古今千百、各々自ら定義を立て、其の甚だ衆くして互に異なるや、概擲着、問く亦少からざるも、總て而して之を通觀するに、自ら一貫の義存するを見ずんばあらず。夫れ孔子の老と、孟の揚墨と類なり、故に其の道とする所を争ひて、正邪相距くを得、若し以て醫方、曆數の事を律せば、則ち端章甫を以て、越人に質するよりも甚し、類を同じうせざればなり。是故に新たに一科の學を起して、獨創殊異の言を立つる者、彼れ其の學の定義、少しも從來在る所と一致すべき者なければ、是れ并せて其の名を更むるの便とするに若かじ。苟くも既に存するの名を用ゐる者、其の立言の旨に於て、前人の言を非とし、一家の見を創むるも、其の講ずる所や、竟に前人と類を同じうせざるを得ず、類を同じうすれば、則ち其の間亦多少の一致を存すべきは、

争ふべからざるなり。今既に哲學といふ辭を用ゐる、其の立言の旨をして、世の哲學者と大に逕庭あらしむとも、其の講ずる所や、既に哲學の名に籍らざるを得ざらしむるときは、亦當時所謂哲學と其の類を同じうし、而して多少一致する所以の者なきを得ず、則ち今哲學の定義を立つるに於て、亦當時の哲學に關する觀念の傾向を察するなかるべからざる也。意ふに今日所謂哲學の定義、區々にして定まらず、而も人之を哲學と謂ひ、我も亦之を哲學と謂ふ、固より相一致する所以の者なきを得ず。云く、哲學は知る所の全體を統合するの謂なりと。知る所の全體を統合すること、限りて哲學と爲すべからずとするも、哲學として已れの知る所の全體を統合し得ざるべからずとは、今日一般に承認する所ならんか。以爲らく百科學術の進達は、促して知識の闊博を致し、知る所の畛域益々廣し、乃ち剖して之を析し、全體の上より其の交互連絡の何如を觀る、是れ統合の法なり、凡そ我れの知る所は、彼と此と常に多少連絡す、極めて下らしむとも、其の共に我の知る所たる一事、已に以て連絡の端を見るべし、是より以往、連絡を精にするの道、亦多量なり、或は理想の能力に任じ、或は實驗の證

徴に籍り、而して統合既に充たれば、斯に髮髻として原理の現前を見ると。顧ふに得る所の原理、其れ亦必ず確實不易なるを得るか、胡爲してか之を得たる、知る所の連絡を釋ぬるに由るといふのみ、而して所謂知るとは何ぞ、自ら以て知れりと爲し、而して此に満足するの謂か、唯自ら然りとして満足するのみにして、知れりと爲す所の果して眞を得て、復動かすべからざる者なるやは、必ずすべからざる也。認知の憑むに足らざりしや、昔は以て正確と爲し、而して今より之を見れば、全然誤謬たるを免れざる者指使するに違あらんや。人智進むこと一寸、乃ち昔者の誤を見ること一寸なり、日月に進むの知識あらば、是れ日月に見はるゝの誤ある也、而して此の全幅誤謬の知識を把り來りて、其の連絡を釋ね、以て確乎不動の原理を得べしといふ、難い夫。即ち其の個々の知識は誤あるも、其の連絡は終始變ぜずといふか、何を以て爾か言ひ得るか、徒らに強言峭過するに幾からずや。哲學ありしより數千歳、學者孰れか原理を發見すと言はざらん、而して末だ一人能く後人の非議を絶ちて、争ふべからざるの理教を發揮せる者あらず、是れ固より其の所、答むべからざるのみ。己れの知れるだけの全體を統

合し、而して統合の際に順序を得たりと思惟する所、其の順序の何たるに拘らず、將他より看れば毫も順序を得ざるに拘らず、自らは是を稱して原理といふ、講學の道、此より過ぐること能はず、但だ宜しく全體を統合すべくして、乃ち反て一偏に僻し、強ひて偏見を立てて、以て衆理を隸屬せしめんとするが如く、考へらるゝは、則ち大謬と稱せらるゝ耳、而も自ら謬なしとせば、復奈何ともすべからざるなり。通常謂ふ、哲學は原理を考究するの學なりと、所謂原理は、亦實に其の知る所を統括し、貫通して、紊るゝなからしむることを得るといふなり、而も所謂原理、豈叢中の石を索むるが如く、暗裏に選を尋ぬるが如く、必らず一定不動の箇の物ありて、之を發見すと謂ふを得んや。好し、之が發見を當れりとすも、其の原理の存在することを必ずするの理安くにか在る、原理といひ、原理の考究といひ、畢竟何の義ぞ、乃ち強ひて箇の物ありと想像して、此を據として一定の學理を建てんとすも、根柢既に定まらず、何を以て能く爲さん。或は以て究竟の原因結果を求むると爲す、而も所謂究竟の原因結果、果して之れ有りや否、人の知る所眞に海り無きか、此を以て萬象の因果を述了し、

而して誤なしといふは僭に似る也。ロスマニ
は哲學を謂て究竟其址の學といふ、是れも亦
知る所の其址を素むといふに在り、而も所謂究
竟其址の有無、亦知るべからず、蓋し眇々た
る一夫、纔に認知する所の事、左綴右綴、少
しく連絡の見るべきあれば、則ち早計満足、以
爲らく究竟原理此に在り、凡そ有る所萬象、
盡く以て推言すべしと。而して其の知る所既
に局し、見る所亦偏し、其の局知に自ら満
ちて、其の偏見に自ら得たりとするは、消々
たる者概ね然りとす、是れ豈盡く據るべけん
や。更に哲學を以て諸科學全關の理論と爲すあ
り、意ふに近代科學の進歩、竟に萬象を包括
して濶濶なき能はず、科學を統合するを以て、
能事畢れりとせば、亦眇しく偏せるを見ざらん
や。又更に此を以て完全に統合せる知識なり
と爲すあり、而も所謂完全に統合せる者、亦
眇々たる一夫、以て然りと爲すに過ぎずして、其
の果して統合の完全といふことを得るや否は、
固より必ずすべきに非ず。凡そ是等の假定、假
定の小なる者、而して尙強ひて事を生じて、妄想
の紛雜を増し、偏傾を長ぜんとす、日新の理學
を尊重する者にも、フキロンフラス、ストーン
の語は免れざるにや。

知る所の全體を統合するは、特に哲學者など
いふ一種の人物の從事する所に限るとせず、衆
人或は之を爲して自ら覺えざることある也。
知ることを欲して之を勉むるは、生と共に生
ず、孩提の兒、亦暗を惡んで而して明を好む、
蓋し人の明を好むは、光線の必らず愛樂すべし
といふにあらざるなり、明處の以て物色を辨じ
易く、自ら動くに便にして、危険の患少き
を以てなり、此の習ひや生民と共に存し、積ん
で今日に至り、乃ち危険を慮るの念、轉じて
暗處を恐るゝの情と爲り、孩提の兒も亦之を存
するを致す。故に物の辨ずべきあれば、暗處も
亦厭ふ所にあらず、盲者は暗夜を恐れず、マン
モース洞の魚は全く目を失へり。但だ此等の
光を要せざるは、實に殊例に屬す、光なきは固
より光あるの知る所多きに若かざるなり、曙
光燦として放てば、禽喜んで鳴き、獸欣んで
奔る。光の必須は、人の自然に知る所、上帝
といふ語の起原、大抵光に取る、舊約御世紀の
開卷、上帝の先づ發するの言は、則ちそこに
光あれと云ふなり、我が神代史、亦大神天
窟戸を閉ぢて、六合暗黒、百妖盡く起り、其
の開くるに及び、天地清明なりしを以て、史上
の重大事と爲せり。光は即ち知ることに與りて

最も大なる者、以て知ることを重ずるの念、生
民と共に自ら著しきを見るべし。知ること
の重ぜらるゝこと斯の如きを以て、其の事の利
害に關らずして、直接の必須なき者も、苟
も疑はしきことあれば、必らず之を精究查明し
て、知られざる所なからしめんとするは、人の
情、自ら至る所なり。昔は劍客の徒、技を學
んで頗る熟するも、猶其の造詣の池深を驗せ
んと欲し、則ち武者修業として六十六州を遍歴
せり、是れ其の技の通國に華たるを明かに認め
んことを欲するに在り。山に行く者、溪谷の遠
幽なるは何れの方、瀑布の練を懸くるは何れの
方、徑路の羊腸たるは何くに通下と知る、其の
用斯に足り、而して其の樂亦滿ちぬべし、而
るを必らず判棒を抜き、蒙茸を伐して、絶頭を
踏まんとする者、固より登高の興、濟勝の力
を極むるに在らずんばあらざるも、又群精萬壑
連絡の形勢、一日の下に擠まるの更に大に樂し
むべきものあればなり。蓋し頭を仰げば翠微鼻
を屢して峻峻、赤巖少しとせざるも、此の如
きは群山疊沓、皆當面一峯の掩ふ所となり、其
の勝概を悉すを得ず、然るを一旦最高峯頭に
立ちて、噴氣青天に通じ、眼を放て某山某水、
皆其の來脈を指示す、快言ふべからざる者あ

る也。東西洋の交通未だ開けざりしや、歐洲より印度に赴く者、皆跋山涉水、迢々として陸路に由れり、而して謂ふ、大西洋に航して極に達すれば、地獄に陥没し、惡魔の棲窟に墮落すと。既にして輿地の圓球たるの理、漸く人心に入り、コロムブス乃ち以爲らく、既に圓球たらば、其の底を過ぎて行くべからざるの理なし、西行して極まれば、竟に必らず東に出でんと、自ら其の説を行ひ、而して其の理を實にせり。流れを見て源を思ひ、煙を見て火を思ふ、人の其の祖先の來歴を知らんことを欲し、更に測りて人類の大起原を知らんことを欲するは常情なり。之を解して云ふ、人類の發達、亦他の動物と等しきのみ、萬斯の年數、進化の效、以て今日の美好を致す、人類の特生して別に自ら發達せるにあらざり、其の原本を推せば、蠢爾たる下等動物と異なるなしと、最も此の説を徵明して、論斷を下せる者は、ダルウィンなり。鱗潛羽翔、獸奔蟲匍、以て非情木石の屬に至るまで、地上の萬象、皆其の行動作用を見る、森々たる星宿、皎々たる日月、以て彗星隕石の屬に至るまで、天に麗くの萬象、亦皆其の行動作用を見る、天の行動、地の行動と各々自ら作用して相關らざるにあらざり、一林橋子の地に落

つる、遙々たる星宿の運行と同一動力に繋るを觀察して、之が數理を明かにせるは、即ちニュートンなり。所有萬象、其の行動は皆力に之れ由る、力の發する所、進んで窮らず、人の爲すあらんとするは意志に基く、意志なる者は實に勢力の要素なり、力と意志とは折つべからず、天地間の勢力は盡く意志なりとし、萬種の行動、之を意志に一歸せる者はショッペンハウエルなり。人の知るや涯ありとせんか、涯なしとせんか、其の涯を知りて自ら盡り、知之を盡る所に盡して、自ら満足する者あり、而して又一物知らざれば、悶々堪へず、必らず之を理解せざれば已まず、其の議る所に於て、一毫の疑惑なきに至らざれば、自ら満足する能はざる者あり。夫れ知の至るを以てするも、自ら知ることの盡せりとして之に満足するのみにして、亦助々たる一夫が知る所に過ぎず、天下皆其の小知に満足して、終古眞知なからんか。意ふに小知を以て自ら損せず、各々其の時に處して、自ら信じて眞知とする所を違ふは、人事の經過に於て、決して易るべからざる所とす、コロムブスの西航して、新大陸を發見するや、以て印度の一部となし、死に至るまで疑はざりき、而も其の誤認の故を以てコロムブスの

米洲航行を并せて無用とするを得ず、蓋し世界周航の成るや、其の序に於て、先づ此の一着の誤なきを得ざるなり。昨の誤あり、而して後今の眞見はる、今の眞や、亦後の誤たらざるを得ざれば、則ち誤の以て限りあるべからず、必らず一偏の知を執て、其の眞實確乎として萬世に互るべしと謂ふは、大妄想ならずとせんや。則ち大妄想なりと雖も、其の時に處す、自ら其の時に當るの言あり、前を匡し後を啓く、自ら其の分を竭す、當時の言は、則ち當時の眞、其の萬世に互るの價なきを逆め料りて、一概に之を輕ずべからず、涯あるの知を以て、萬世に互るの眞を求むる、身を終ふまで成るなからん。一步而前、盡く未來なり、未來茫茫、現在の物、皆此に至りて全きを期すべからず、是故に眞實は、即ち時に當るの眞實茫茫たる未來が、現在の眞實をして、何如に變化錯治するも、斯世界の命や安んぜざるべからず、争ふに力なければ也。請ふ今の時に當り、聊か我が知る所を述ぶ、可ならんか。

考究法

知の力は生と共に在り、而して知の量は長ずると共に進む、孩提の童も多少の思想あり、爺

に褒められて懼び、嬢にあまえて樂む、既にして家塾に入り、既にして學校に入り、やゝ弱冠に至れば、身世の變轉、乃ち此を驅りて、北馬南船、生境に入り、生人に接せしむ、書を讀んで前人の言を聴き、新聞を閱して新起の事を知る、是れ皆其の知見を増して、其の思想を殖する所以にあらざるなし。平居靜處、腦裏に往來する思想多少、是れ其の常なり、乃ち或は時に隨ひ事に隨ひ、緒に觸れて暢發すれば、墨々として發起すること、夏雲の岫を出づるに異ならず、是れ亦思想の殖する一端なり。新經驗は新知識を生ず、顯微鏡益々精なれば、微更に微を析すべく、微の知識益々加はる、望遠鏡益々精なれば、大更に大を明らむべく、大の知識益々加はる、或は時の往古來今を究め、或は處の縱長横延を極め、近くは身邊萬殊日に變するの境遇、彼れ亦畢く知識の域を擴め、思想の用を洪にする所以なり。知識思想の日に以て長するや斯の如しと雖も、其の知る所聞く所、自ら信じて然りとするや、亦明確なるあり、否らざるあり、其の明確にして復毫髮の疑惑なからんことを欲するに及んでは、蓋し至難とす。顧ふに疑へば則ち安からず、而して大に安んずべき所を求めて、其の明確を

庶幾せし者、古よりして林の如き也。デカルト之を求めて、先づ疑を其の至る所に窮め、疑窮つて而して後疑ふべからざる者來る、曰く我は考ふ、獨り是は則ち斷ち手として動かすべからずと、而も此の言も亦今は則ち行はれず。後の學者、既に此の言を非とし、而も其の謂ふ所哲學は、則ち亦必ず確乎不易の箇の物を索め得ざるべからずと信すること、實白脱せず、念々自ら此に在り、謂ふ一たび不易の箇の物を發見し、而して此より以外萬疑千惑の刃を迎へて解くべしと、恆の言に所謂眞理を發見すと云ふ者は、亦是れ此の意のみ、異なる哉、今に至りて猶ほ紛々然たる也。夫れ疑を其の至る所に窮め、而して有る所の物、必ず疑はずんば止まず、業已に異なり、其の疑ふや、それ何に資て而して疑ふか、若し資る所なからんか、其の疑の果して當れるや否、已に知るべからず、蓋そ更に進みて其の疑ふ所以を疑はざるを得んや。已に明確の索め難きを以て、先づ疑うて而して後疑ふべからざる者を得るとなす、而も其の疑ふべからざる者、即ち明確とする所の者、取て我が唯萬殊の思想を貫穿して、一括之を説き、以て渙然氷釋して餘滓なきを得ると否と、亦未だ知るべから

ず。疑ふべき者あり、疑ふべからざる者あり、此の疑ふべからざる者を取て、彼の疑ふべき者を釋く、何を以て其の當るを必せんや。座を遠りて土瓶あり、茶碗あり、是れ目前に在りて、復疑を挿むべからず、而も目前の土瓶茶碗の存在確實なるを以て、崑崙山窟に人の在る有るを推定せんとす。其の波交渉、甚しきを奈何せんや、所謂眞理、天の那の曲、地の那の角、若くは腦の那の窟窟、箇の物の潜在するありとし、而して一旦偶爾之を發見することありとせんと、只箇の物を發見して、而して此より以外萬殊の物、其の明かならざる者をして、由て以て一旦洞然として明通せしむるに至らんとす、豈此の理あらんや。又言ふ者あり、曰く先天の理を索めんと、カントに至りて、大に精力を此に傾注し、感性に於ける先天の理、悟性に於ける先天の理を發見したりと謂はる。水或は類に過ぎしむべし、而も之を撃たずんば以て見るべからず、乃ち先天の理あるも、其にして緒に觸れて發動するにあらざれば、以て其の存するを明らむべからざるは、彼れ固より之を然りとせり、先天の理は經驗と交渉なしといふも、而も發動して認識せらるること、豈經驗を外にして爾り得ると爲すべけんや。且つ先天の理の獨

り存するを論ずも、後天の理は、實に先天の理の啓發する所とせば、先天後天の交渉、それ何れの處にか畛域を設けて之を班たんや。是れ竟に差別なきか、若し差別ありとせば、偏に先天の理を明らむるも、以て普通の知識が由て明確なる否とに於て、又何の益する所あらんや。凡そ此等の學者、動もすれば輒ち眞と云ひ假と云ひ、以て知識の性質に差別を立つるは、猶ほ之れ昔者の人が物の重量に於ける思想の如きか。彼等は金石を以て重量ありとし、雲烟を以て重量なしとす、其の均しく重量ありて、特に處に於て輕重の差あるのみなるは、曾て思ひ到らざる所なりき。其の眞を求めて以て假に及ぼし、實體を探つて而して現象を究めんといふが若きは、則ちかの獨り金石に重量ありとせる者と問なき耳。

物に輕重あり、輕重の品級、宜しきを得んことを要す、若し輕き者にして或は下に在り、而して重き者にして或は上に在らん、は、則ち物皆其の處を得ずして、紛糾駁雜、以て整理すべからず。知識に明確の處あり、不明確の處あり、其の明確に親ますして、而して其の不明確に憑る、則ち思想の順序混亂して、一定の經紀を爲すべからず。大に知識の濼く擴まるは、其

の既に知る所より、以て其の未だ知らざる所に及ぼすなり、而して其の進むや、寧ろ類推の法に由らんか。既に知るの一事あり、而して未だ知らざるの他事あり、則ち未だ知らずと雖も、見る所、聞く所を以てするに、其の既に知るの事に似ることあり、乃ち類を以て之を推し、而して其の似ざる所に及ぶ、嬰我の眼に觸るる所、先づ其の命と類と、而して其の似る所は、先づ器具なり、他人を視れば、則ち其の既に父母に知得する所を以て之を推し、爺が嘗て怒りし聲色を以て、他人の瞋目叱罵も亦近づくべからざるを知り、娘が嘗て笑ひし聲色を以て、他人の怡顏婉辭の亦甘ゆることを得べきを察す、新たに一物に値へば、其の質と其の用と、必らず其の素より執る所の器具に形どりて之を推す也。かの全く類推すべからざる者の若きは、竟に其の勢態をだも得ること能はず、生れながらにして盲なる者、竟に光の觀念を生ずること能はず、之に目を教へんと欲す、其の圓きを銅盤に比すれば、則ち其の響を并せて之に似たりとし、其の明を燭火に比すれば、則ち特に其の形を取りて之に似たりとす、昔人已に之を喻ふ、類の推すべきはたれば也。類を以て推すや、先づ己れの最も明かに知る所を以て、

其の未だ明かならざる所に及ぶ。我に體あり、心あり、而して他人を見れば、而も我の如く、肢體我の如く、其の運動も亦我の如し、乃ち他人の心あること、亦必ず我の如きを推知す、心は見るべからず、而して世人の皆之あるを信する者、實に其の形の我に似るより推すのみ。下りて獸類に及ぶ、其の形や頗る我に類せざるも、其の耳目鼻舌あり、飲食行臥、我に近き者あるを見るや、則ち其の心の稱と我に似る者あらんを意ふ、其の禽鳥の屬に於ける、亦復此の如し、更に下りて鱗介昆蟲に及んでは、其の形や益々類せず、而も其の生育し、動作し、食餌し、死滅するや、亦少く類する所あり、則ち猶ほ取て之を生物の數に入る、草木の萌芽し、長育し、繁茂し、結實す、亦人の生長に於て、相類推すべきあるや、則ち亦之を生物の數に入る。石に至一は、頑然として其れ知ることなき、類せざること尤も甚し、而も其の一の成形を具へ、一の位置を占めて、之を動かさんとすれば、自ら多少、抵抗あり、則ち其の性質に於て、我の體あると類するあるを、之か一物體たるを確定す、應て有る所萬物、凡そ見ざる所、所、類に因りて之を推す、然らずんば人の見る所、觸るる所、徒らに其の形に著る

る者のみ、其の内部の特性特質に至りては、茫として捕捉すべきなし、己れより類推せるにあらずして、それ何に出て之を知らんや。

蓋し知識の複雑多岐を纏んと統制すべからざる、唯其の己れと最も直接せる者、乃ち最も明確に幾しとす。夫れ日夜の思ふ所、以て休むべからず、山深く、水白く、見る所に隨て、感興限り無く、人間の交際、由りて念を動かす所何ぞ窮らん、歡べば則ち欣々、困れば則ち愀々、皆他と交渉して起る所にあらざるはなく、乃ちかの他人の喜憂に感じて、己れも亦爲めに悲歡の情に促され、不意の幸に値ひ、不測の禍に罹る、有爲轉變、世間の状態、傍觀して心を動かす所は者に至るまで、其の心を世と相渉らざるの地に置き、其の耦を知ることなからしむるは難い哉。それ唯夢幻乎、夢幻に在て思ふ所感ずる所は、曾て他と交渉し、他の刺戟に由りて起るにあらず、而して獨り自ら思ひ自ら感ず、覺醒の時に於ける思想感念の物の動かす所となるが如くならず、故に或は夢に酒を飲む者、且にして哭泣し、夢に哭泣する者、且にして田獵すと云ふ、夢幻の喜憂、爲に覺醒の悲歡に關らず、夢幻の以て獨り己れに關して、物と相渉らざればなり。其の次を身體とす、身

體の以て保たるゝや、衣食住といふ也、衣や、食や、住や、皆身外に在りて、而して身體と相關る、而して衣や、食や、住やの由て生ずる所の者も、亦由て以て身體と相關るを得べし、是より以往、其の牽聯を繰ねて、以て關係を推究せば、有る所無量の物、盡く關係を履するを得ず、身體の保存する所以、何ぞ其れ實にして大なるや、則ち一指を彈じ、一毫を抜く、亦物と相關るなくばあらす。然り而して其の相關する有る所無量の物は、彼れ皆身外に在る也、當に身體と相距ること遠漠なる、空に麗くの日月星辰の若きのみならず、乃ち衣食住の由て成る所、乃ち衣や、食や、住や其の物に至るまで、一として身體と相關れて存せざるなし、相關れて存する者、我れ何に由りて其の形を透して、更に其の内部の性質を知るを得べけんや。唯夫れ其の身體は則ち手足の動く、自ら動く所以を知り、體温の存する、自ら存する所以を知り、我と共に存じて、終始離れず、是れは則ち獨り自ら知るを得る所也、身外の物、皆特に其の形に著るゝ者を見る、其の内部よりして知るべきは、獨り其の身體のみ。蓋し人の知識、

夢幻

き也、其の物體に在て、内部よりして之を知ることを悉す者、身體に若くなき也。則ち凡そ有る所、應難多方の知識、其の關係を繰ねんと欲する、先づ夢幻と身體とより推して、以て其の外に及ぼさざるべからず、何となれば是れ其の最も己れと直接せる所なれば也。

夢幻の不稽なる者と判定せられたるや久し、醒めて後思ふ、固より不理散漫にして湊合貫通するなし。髮髻捉ふべきが如く、而して淡乎逐ふべからず、惘然擊すべきが如く、而して泛爾として笑ふに耐へたり、忽ち近くして、倏ち遠く、倏ち亡うて、忽ち獲る、遂に端倪を知らず。満山櫻花研を篋ひ芳を發す、巖榿牙として而して水清駛す、萬象さながら畫圖の中に在り、吟聲湧に起ると共に、笛聲嘯として、一葉の扁舟中流に横り來る、太白、東坡、等舟にあり、即ち共に流に隨て吐月橋を過ぐ、太白善く吟び善く飲み、座客當る無し、已にして皆陶然として醉ふ、東坡洞簫を吹き、退之三絃を鳴らし、子厚歌うて舞ふ、紛手たり擾手たり、忽然として羽衣天上より墜落し來ると見れば、

萬屋半七落膽して垢衣悄然たり、願れば於
 園摩掛にて薙刀を揮ひ、遂に河剣を舞はして
 我舟に迫らんとす、家驚き走て堤に上る、ハ
 百松樓上人の呼ぶにつれ、座敷に入りて障子
 を開けば、聴客堂に満つ、ヒヤと呼び、ノーと
 啼び、籠單、ヒツコメ、馬鹿野郎と罵る、家然
 兵児帯の壯士疾進して、辯士を壇下に號落す、
 巡查來る、鉦聲ガラン、後藤奮然として議
 兵席の前に立ち、將に大に論難する所あらん
 とす、大久保背後より不意に西郷を斬る、首飛
 んで、望木に嘯み附き、見る見る、大禿頭顱と爲
 り、眼光鏡の如く、圓々として空中を旋轉す、
 伊藤頭を抱へて逃げ廻り、井上起たんとして馬
 糞に躓きて倒る、更に大聲を發して火事火事と
 呼ぶ、突隙天を衝き、黒煙蓬勃、大風倏忽と
 して塵土と爲る、浩々乎として平砂限りなし、
 天穹塵の如く、四野を籠蓋す、看るに兩隊の列
 を正して進むあり、其の乗る所の騎馬を見るに
 皆鞍背に脈管ある者なり、其の人を仰ぎ見る
 に、眼瞼み肉落ち、亦骸骨に脈管ある者とな
 る、而して我手を見るに、脈管果々として骨を
 纏ふ、噫嘻是れ何の爲めぞ、遽然として醒むれば、
 冷風颯々、樹梢に蟬あり、其の聲や幽渺。
 而して夢遂に端倪を知らず。

夢幻より不稽、人皆然りと爲すなり、然れど
 も好夢を夢むと謂ひ、惡夢を夢むと謂ひ、介然
 として疑念なき能はず、或は卜を煩はして其
 の吉凶を判するに至るも亦稀れならず、小説、
 劇曲を作る者の如きは、毎に夢幻を挿入して趣
 味を構へ、標榜有無の間に不盡の諷刺を爲す、
 而して賭る者、聽く者取て怪むべしと爲さず。
 後醍醐帝南木の夢は、傳へて今日に至る、或は
 以て一時の權略に出でたる架空の虚説なりとす
 るも、人尙ほ其の史跡を喜びて、善く坊間の
 談柄たり。基督の舊約書亦無數の夢を載説す、
 或は夢中神に接侍せりと謂ひ、或は夢中神靈に
 感得したりと謂ふ、其の預言者と稱する者の如
 きは、多く夢中に神靈に感得したる者なり。後
 世の人、是を以て時代の習俗荒唐を好むと爲
 すも、而も信者は固く其の實存を疑はざるのみ
 か、今代開明の人其の異蹟を信せざる者と雖も、
 尙互に嘖々として之を説き、纏れ以て怪異な
 りとせず。其の經文の如きは八方に拂布し、
 萬邦に流傳し、信奉驚喜する者鮮しとせず、亦
 世人の深く怪まざるを認むるに足るべし。又斯
 の如き奇異の事蹟を除斥するも、中には誰かに
 夢中名吟を得たるあり、コレリツチの如き其の
 一人なり。彼嘗て夢に忽必烈の詩を作り、醒め

て直ちに筆を執りて記す、未だ尖ならずして人
 の來訪に遇ひ、對談一霎頃、再び前草を紹が
 んとせるに、夢中の詩興飄忽として飛び失せ、
 楞腹遂に一字を爲す能はずして止みたり、而し
 て紙片を續して未完の章を讀む、絶妙の文
 字、雲ありて之を纏る者の如し。是れ彼が精神
 の常態を失へるよりして然に至れるか、抑も
 文人の夸張放誕とするに足らざるか、若く
 ば以て實存すべきの事なりと爲すか、未だ知り
 易からずとせんも、人は尙ほ實存せりと爲し、
 鮮くも實存し得べき者たるは、皆信じて疑はざ
 る也。夢幻固より不稽、人皆然りと爲すなり、
 而して人の自ら惑ふこと已まざる者は、又其
 の故なきにあらざる也。思ふに夢幻單單に不稽
 なりとて委棄すべき者ならんや。其の實存
 重を居くべき値ありて存せんか。
 夢幻を不稽なりと爲す、何ぞ、其の實物に接せ
 ずして、飄りに妄想を逞しくすと謂ふにあり、
 徒だ觀念に留りて、絶えて實物と交渉せずと
 云ふに在り。乃ち神靈は臥床の上に横臥して、
 屹立歩行するの想を爲し、周圍の暗黒なるに、
 太陽の赫々として萬物を照すと爲し、而して滿
 山の櫻花を觀て其の花容に恍惚し、怪牙たる巖
 石、馳走の水を觀て其の風趣に戀々し、舟なき

に吐き橋下に粘し、人なきに大白と俱にし、笛を聞き、酒を飲み、人水の半七より、藏刀を揮ふ於園に及び、八百松の招箭を聞き、堂上の聽客を視、怒罵の叫喚に驚き、兵兒帯の壯士を視て、ガランノ、の鈴聲を聴き、死せる西郷大久保より、雀ける後藤井上に及び、梁木に噛みつける首を視て、空中を輪轉する大禿頭を視、馬糞を糞、火事を糞、沙汰を糞、高陸を糞、雷籠を糞、鞭膏を糞、脈管を糞、而して體氣は骨に依り、胸々然として床上に在り、以て妄想にして不時なりと爲すの所因なり。然れども覺醒の時、果して此の如き觀念なしとする歟。

夢幻は脈管貫道なく、前想後想、全然滾谷を練きて、鼻く矛盾す。乃ち爾世の人と舟を浮べて櫻花を賞す、俟備にして半七天上より降下し、於極端力を揮ひ、忽然八百松樓上演説會の光華と變じ、壯士、騎士、巡査を視る、未だ終らざるに、ガランノの鈴聲と共に義勇に變じ、西郷を視、後藤井上伊藤の諸伯を視て、大久保の西郷を敵するを視、忽ち大禿頭を視、馬糞を糞、突然として火事に變じ、又一變して沙汰と爲り、鞭膏と爲り、脈管と爲る、片々落落々思想聯貫なく、前後盡く矛盾撞着し、影の如く風の如く、飄忽去來して、一も流合せ

ず、以て矛盾にして不審なりと爲すの所因なり。然れども覺醒の時、果して此の如き矛盾なしとする歟。

夢中間、或は自ら是れ夢にあらざるやを疑ふことあり、而も夢中途に醒時の觀念をば懐くべからざるなり、若し醒時の觀念を懐き得ば、是れ已に夢にあらざりして覺醒なり、夢中に在て如何に夢たるを疑ふも、尙見れ夢中の夢のみ、決して覺醒にあらざり、而して夢中は醒時の觀念を懐くべからずと雖も、而も夢中は是れ夢にして更に覺醒せんかを疑ふことあるは算ふべからず、かの覺醒の時、則ち何如、亦此の如きの事なしとする歟。

覺醒は夢幻と均しく觀念なり

夢幻は徒だ觀念に留る耳、更に實物と交渉する所なし、眼りに妄想を逞しくするに過ぎずといふ、然れども覺醒の時之に類せずとするか。曉起朝餐に對すれば、今日も亦必ず醒然迷き離れんと謂ひ、某は入院療養中なるがじに全愈したらんと謂ひ、郷里に水災あり人々は囂困難なるべしと謂ふが如き、其の語る所一も實物と接するにあらず、居る所は家宅の一室にして、視る所は蔬菜を盛りたる一箇の瓢のみ、而

して明かに目前に存存する者の如くに、相語りて候ます。又新聞を手にす、内閣に變動ある事、某大臣退き某大臣進んで任に當るとの事、某翁は云々某子は云々、別室に籠居して世事に關せざる者の如くなるに、何日何時に某々訪問したりとの事、之に疑て又極々の雜評を下すも、是亦盡く實物に接する者にあらず。某々は如此々々の人物なりと評するも、其の實未だ一面の識なく、或に其の風采相貌だも望見したる事なき者あり、而も全く面前に其の人の靴履たる者の如くに評語を加ふ。曰く彼には云々の癖あり、故に云々の事には過するも、云々の事には過せず、從來是々の実策あり、又是々の功績ありし、思ふに又前日の技を再演して、此の如くに切り捨けるなるべしと、皆實物に接せずして、謠々手明白の判定を爲す也。又企鵝の事に何如、阿立銀行の營業期限はじに近づきたり、鐵道の擴張は遂に如何なるべき、この先々資料を注入して固定と爲らば、經濟上の影響は亦又如何。授支那鐵道の未來は到底知るべからざるか、李鴻章の如き有爲の資を以て、開國の主義を持するも、猶ほ反對者の阻遏に勝つ能はず、永久に鐵道の布設を見るべき見込なきか。今支那人材李鴻章に襲ぐべき者、張之洞な

りとす、彼れ能く業を卓張し得るか。さるにても、惜しむべきに曾紀澤なる哉、彼れ公使として國命を辱めず、清佛葛藤の生ずるや、俄め佛國の動靜を測知し、内閣の變動起ると共に交渉事件自ら熄むべきを申説せり、果然フエリ一内閣倒れて、クルルペー空しく死するに至りては、其の議力の大を看るとや謂ふべき、國藩の子たるに恥ぢず、而して才を伸ぶるの地を覓ず、杞憂として遂に易簣するに至りては、誠し憐れむべし。頃來一流の英行概して地位を獲難く、二流三流の輩却て得意の地位に立つ者、抑も何の謂れがある、高材敵多きか、人事意の如くならざるか、英雄草野に泣くは古より然るか。獨り彼れグラツトストン、老いて益々壯、將に又大に顯はれんとするは、是れ實に例外と謂ふべし。扱て又獨の鱗血老相、彼れ再び樞要に立つて一權力を有すべしか、日耳曼今帝の意は如何、そも彼れ出でば歐洲大陸の安危、其の傾向は如何、若彼れ従来の成績多く時進に出て、眞の能力別に見るに足らざるかと、意氣軒昂、薄々として論じ來り、論じ去るも、皆一度も實物に接する事あらざり、居る所は室内の一隅にして、障壁之を圍み、而して己れは乃ち兀として踞坐する耳。コロンブス博

覽あり、則ち又以謂らく、コロンブスはマルコポロの紀行を讀んで大に感動せり、マルコポロは紀せり、日本には黄金多く、宝殿草塔の屋上黄金を以て之を積ふに至る、忽必烈之を奪はんとして、其の野望を果せりきと、而してコロンブスも實に斯の黄金國に達するの企望ありしなり。嗚忽必烈、彼は實に世界に於ての絶大版圖を拓ける、不世出の傑物なり、東方日域海に臨み、西の方今の露西亞本藩を寇す、初め其の祖成吉思汗斡難河の邊りに勃興してより、其の諸兒將として四方を侵略し、遂に露の全土に及びしなり。要するに其の間大なる天險、以て邦國の境と爲すべきなく、茫々たる大陸、空に連りて涯際を見ず、中央亞細亞よりポルツツク海に至る迄は、鞭を曳けて踏過すべく、ひた押しに進行すべし、故に中央亞細亞に於ける勢力は、即ち大陸數千里に跨有すべきの勢力なり。現代東歐に勢力ある者、直ちに西比利亞を横絶して成を太平洋に震ふも亦是れが爲なり、唯曩には之を東より西に及ぼし、今は之を西より東に及ぼし來る耳。聞く西比利亞の鐵路、全通するの日に及ばずと、思ふに其の成るの日に、日本海に面して之に應ずる港灣の必要を認むべし、東洋に及ぼす所の影響鮮少なりと

せんや、米國の太平洋に處する政略も、亦必らず一變すべし、而して星加坡五連河竣工の日に至らば、宇内の通商貿易及政治の局面に至大なる變化を齎さざる無からんやと。古今に上下して、未來を揣摩し、縱横に想を爲せし、議論風生す、而も亦皆盡く實物を去り、箸を振りて虚空に描する者にあらずや。其れ然りと、果して幾許の差異ありと爲す邪。然れども曰ふ、覺醒に在ては、必らず實物に因りて感覺を生ずること、斷ふべからず、日視る所の者は、獨り觀念のみにあらずして視るべき實物の存するなり、細いて上天を瞻る、天若々たり、是れ實に宇内を籠蓋する所、俯して下土を觀る、一條塊々、滄あり、是れ實に萬邦に連なる所、舟車を用ゐて以て東西萬里に横ざるべし、假令身は親しく其の邊きに至らずとするも、實物存し、日視て知得し、之を邊きに推及するは、以て妄想と爲すべからず、其の邊に實物として存するにあらざやと。然れども實物を知得すると云ふは何如の意義なるか、我が前に茶碗あり、又卓すあり、問を擲て又杖を擲てて視る、初め小にして復たなり、已に其の大小を異にす。又日視て手觸る、見る所觸る、所其

の外面のみ、其の内部に至りては、卿かも知り得るなし、學理に由り其の成分を究析して、初めて其の性質を知る、而も性質を探究すれば、遂に極限を得るなし、人あり、蠻人に與ふるに猿鼻樞を以てせしに、彼れ直ちに猿邊を纏うて去れり、是れ物の用を認るなり、麥酒の瓶子は曾てギヤマン德利とて插花の器たりき、蟲除けに用ふる硝子球は、曾て至重なる床間の粧飾物たりき、此の類鮮しとせず、物の質と用と、遂に極むべしとせんや、且つ山の巍々として聳ゆる、高く雲霄を摩して、矗立堂々、翠黛抹し、彩霞鏤く、八面玲瓏何等の美觀ぞや、河の濛々として流るゝ、委蛇として、左曲右折、滾々濁々、一帶の素練を平野の間に曳く、又何等の美觀ぞや、然れども、莫て其の傍に赴けば、山路崎嶇、岸崖側峙し、樹木森々、荆棘離々、遂に進むべからず、漸くにして攀登すれば、岐路數條、深谷霧暗く、險阻益々加はる。又河に臨めば、激湍沫を飛ばし、岸角を嚼み、深き處は渦紋を巻き、淺き處は頑石を嚼み、敗馬粉紛々として漂ふ、橋梁半ば朽ちて、棧架半ば墜つ、心悸し神戰く、均しく斯の山なり、均しく斯の河なり、前には望んで美と爲せし所、後には近いて全く意想の外に出づ、同一の實物

に對するも、距離異なるに從ひ、觀も亦異なる也。富嶽を詩歌に吟賞する者は、必らず登山したる者にあらずと言ひ傳ふ、西行法師屢々富士の吟詠あり、而して彼れ嘗て一度も山に登りし事なかりき、若し乃ち登る者は徒らに黒色の燒石、燒礫葉々として、堆積するを視るのみ、夏尙ほ寒く、肌膚粟立、氷塊の崖牙たるを視るのみ、又他觀なし、均しく富士山なり、或は美と爲り、或は醜と爲る、同一の實物に對して觀全く異なるは何ぞ、日月星辰、森嚴として天に麗る、而して日月は猶盆の如く、星辰は猶螢火の如し、然れども星學者之を測量するに及んでや、其の螢火の如き者、或は千萬億里の廣表を有し、我生息する地球を數億倍したる大塊なるを知る、我れ實に實物を視るなり、而して千萬億里の大世界を視て、乃ち螢火の觀を爲す、是れ果して物の性質を知得せりと謂ふべき乎、今徒に實物を知得すと謂ふも、同一實物に就て知得する所、多々相異なる此の如し、則ち那れの邊か是れ實物の眞相を知了せりと爲す邪。然れども曰ふ、實物實に種々の觀あり、唯之を領受する感覺に至りては確認すべき者たり、例令列星螢火の如き觀あるも、其の螢火の如く

觀ふるのみにても、已に實物の與ふる影響として争ふべからずと。斯の如くんば、已に實物の交渉を去る者、依頼すべきは獨り感覺あるのみ也、乃ち實物は我が感ずる如き者にあらずして、我は唯我が感覺を保つと謂ふに外ならず、是れロックが初めて、凡ての知識は外物の經驗より來ると立論せるに、バルクレイ之に隨て出でながら、天地間の萬象を唯一の心意と解釋せざる能はざりし所以なり、フキヒテ、ヘーゲル、ショッペンハウエル、亦皆萬象を唯一の心意に歸する者なり、唯或者は萬象の觀念と、自己の心意との區別を立つること、太だ困難なるよりして、かゝる至難の解釋に従事するを患なりとし、若くは唯一の心意と解釋するは、如何にも妄想に涉る如く思惟するを以て、之に左袒するを好まざる耳。萬象の觀念に止まるを明かにせんには、觀念の起因を論じ、且つは自己心象相關の理を極むる等、實に至極の難事、未だ其の理を極盡する能はざる者ありて、明晰ならずして已むと雖も、而も唯觀念のみとの抗論に對しては、其の然らざるを反證して、之を打破る能はざるに似たり。唯萬象皆觀念と解釋し了るは、無益なりと云ふが如き、薄弱なる辯論に止まり、十分に其の論據を擊碎した

る論者あらし。唯物論者中、名ある者と雖も、斯の世界は自己の思惟せる世界に留まると謂ふ事をば、打破ること能はず。亦特に此の如きは龍蹄に類すると爲し、學術の進歩に益なしとして、委棄するに留まれり。然れども遂に物と觀念との極同一に歸するに至りては、容易に破るべからざるの状あり。

然れども曰ふ、好しや覺醒と夢幻、均しく之を觀念なりと爲すも、醒時の觀念は、或る部分に限定せられ、稜然として序を逸び、而して變化に極まりあり、又假令觀念を一切没却して、己れは從ふ、莫なからんと欲するも遂に能くせず、必らず其の當時外界の状勢に驅られ、之に依りて進まざるべからず、決して夢幻の如く、妄想、支離、譏諷、顛轉なるに到らずと。然れども夢幻と雖も、觀する所は部分の限定なきにあらざりて、決して、撞に觀念を變じ得べからざる者たり、而して其の顯はるゝや一々に實際に出で、或は悲み、或は傷み、或は喜び、或は怒る、或時は疾痛して腕の疲勞を覺え、或時は危難迫りて走る能はず、大に自ら苦悶す、焉ぞ猥りに妄想を逞しくするのみとせん。然らば覺醒の夢幻に於ける、遂に何如なる相異を有すると爲す耶。

覺醒は夢幻と均しく矛盾す

竹頭木に接ぐが如く、狗尾貂に續ぐが如く、終始貫がず、後先圖斷す、亡羊漫漶、端倪すべきなし、夢幻の境を乃ち然りと爲す、烏ぞかの覺醒の時、亦復此の如くならざるを諷らん耶。且に東隣の人、病癒えて選院せるを賀し、而して某に西家の人が暴に疾んで卒するを弔ふ。昨新聞を閲して、某大臣冠を掛け、勝景を覽めて選院するの風説を讀み、而して今は則ち其の意を顯して熱心事に當り、同列の閣員と施政の順序を討議すとの報を得、廟議某の事を決すといふかと思へば、翌日又談話して紛擾を生ずと、ふ、此に生絲價昂り、利市太盛すと聞けば、彼に海外出稼の民、皆返還せられとし、膏を貿易商に及ぼす辭からざるの儀あり。今の新聞を讀みしは、信譽の備前數町の小庭を控へ、蟬鳴き狗吠るゝの處、突如として出でんことを思ひ、門を出づること十町、日本橋銀座、萬家堂を轉ね、塵埃空に激り、車往き馬還り、熱鬧繁華、喧嘩として汽車に乗じ、山走り水飛び、行くこと數時間、萬景鬱鬱として、瀟湘瀟湘たり、關河寒、孤嶺の山に入る、

かの出づる時の喧嘩、止まる時の瀟湘、此の間

果して何の相闘る所かあらんや。倭首西北の風沙を捲けば、則ち皇々として宵に火を戒む、既にして彌生の空濤濤として、花候風氣たれば、則ち知遊地々として、其の歩跟々たり、事あれば別ち行旅數百里、時には則ち暑に中てられ恙を得、疾を養うて書を讀み、書飽いて琴を學ぶ、後よりして之を視れば、斯の如き無窮の變態轉化、或は其の間響給の存する者あるに似たるも、而も失火、飄花、行旅、疾病、讀書、彈琴、此と彼と、其の間響して何の相闘る所かあらんや。童兒四五歳、嬌舌不調子なる知識を陳ぬ、既にして小學に入り、漸くに進んで高等中學に入る、素好法律に在るを以て、大學に入りて之を攻めんと欲せしに、之を攻むる者太た衆くして、供給日に修れるを見るや、以て益なしと爲して、更に工學の需要多きを以て、志を變じて工科大學に入る、業既に卒へて、架橋修路、屹々として事に従ひ、資財漸く豊にして、請負工事を爲すに至り、竟に商賈の伴に入り、而して業務の便宜、稍も政治家と交遊す、不意に商賈を讓りて、俄に損耗を致し、乃ち去て政治界に参はり、選まれて衆議院議員となる、竟に推されて議長と爲り、聲望隆赫、進んで内閣に列す、忽ちにして攻撃回瀆、直ちに其

果して何の相闘る所かあらんや。倭首西北の風沙を捲けば、則ち皇々として宵に火を戒む、既にして彌生の空濤濤として、花候風氣たれば、則ち知遊地々として、其の歩跟々たり、事あれば別ち行旅數百里、時には則ち暑に中てられ恙を得、疾を養うて書を讀み、書飽いて琴を學ぶ、後よりして之を視れば、斯の如き無窮の變態轉化、或は其の間響給の存する者あるに似たるも、而も失火、飄花、行旅、疾病、讀書、彈琴、此と彼と、其の間響して何の相闘る所かあらんや。童兒四五歳、嬌舌不調子なる知識を陳ぬ、既にして小學に入り、漸くに進んで高等中學に入る、素好法律に在るを以て、大學に入りて之を攻めんと欲せしに、之を攻むる者太た衆くして、供給日に修れるを見るや、以て益なしと爲して、更に工學の需要多きを以て、志を變じて工科大學に入る、業既に卒へて、架橋修路、屹々として事に従ひ、資財漸く豊にして、請負工事を爲すに至り、竟に商賈の伴に入り、而して業務の便宜、稍も政治家と交遊す、不意に商賈を讓りて、俄に損耗を致し、乃ち去て政治界に参はり、選まれて衆議院議員となる、竟に推されて議長と爲り、聲望隆赫、進んで内閣に列す、忽ちにして攻撃回瀆、直ちに其

の職を罷めらる、其の一身の經歷として之を記せば、自ら條理の貫通するありて、法律を學ぶの吾、工業を修むるの吾、商賈の吾、大臣の吾、竟に一の吾たるを失はずと雖も、法律の工業と、工業の商賈と、商賈の大臣と、固より相聞らず、而して法律の吾、固より工業の吾たらんを料らず、工業の吾、尙商賈の吾、大臣の吾たらんを料らんや。

此の如き矛盾、寧ろ獨り一身の經歷とのみ云はんや、世事毎々皆然り。高山彦九、三條橋上に立て北岡を拜する者、尙其の當時の世態、前代と背反するの甚しきに感ずるにあらざや。坡老江に臨んで、今古に俯仰し、曹孟徳が壘を横へて詩を賦せる、一世の雄、今安にか在るを歎じ、文采を風景に假り、感愴を遊觀に寓す、而して赤壁の名、蓋し是れより噪し、而も坡の時、尙百餘歳の後、忽必烈の版圖、東西の海洋を貫通するを圖らんや、尙又六百歳の後、國家更に滿清の有となり、四億の生靈、嬋婁胡服して、新たに露なる者と地葉を接し、日夕兢々として、戒心絶えざるべきを圖らんや。邦國の四陲、有爲備邊の間に經るや、往々にして此の如し。雅典の殘址、荒涼蕭條として、ペリ

クレスの盛時、復進ふべからず、神聖羅馬帝國

の跡想んで、繁華空しく一場の夢と作る、ギツボン乃ち月明散影を詠うて、四も人聲なく、低徊して懐に感ぜ、坐して前朝を追想し、而して羅馬衰頽史、是に於てか作る。佛王路易十四の時、尙其れ昌なりしや、再傳して十六世に至り、而して革命の亂、王の頭は亂民の爲めに斷せられ、寇患四集して國運旦夕に在り、倏ち見る形勢一變、守を變じて攻と爲し、拿破崙其の間に以て、應軍團圍四隣を克服し、聲威煥赫、古該撒の政、參ふるに新開化を以てし、絶代非常の勢力を伸べんこと、反掌の間にして、而して一敗忽諸、荒陬に老いぬ。路易十四の時に當りて、誰れか大西洋の西、亞米利加の地、寰宇第一の富國を成就すべきを意はんや、乃ち合衆國の創業者、華盛頓と雖も、其の百年の間、四境を兼へて、更に新大陸統一を致すべきを意はざりし也、又其の政治の腐敗する甚しき、議會の議員専ら賄賂を以て圖ひ、更に會社若くは行政諸官よりして利得を博するを旨とするに至らんを意はざりし也、當時自由の思想、平和の思想、之を今日に視るに、若何ぞ天淵のみならん。合衆國の獨立するに當てや、英國の罷弊、殆んど其の極に達し、復振ふべからざるが如くなりき、既に米の殖民地を

の跡想んで、繁華空しく一場の夢と作る、ギツボン乃ち月明散影を詠うて、四も人聲なく、低徊して懐に感ぜ、坐して前朝を追想し、而して羅馬衰頽史、是に於てか作る。佛王路易十四の時、尙其れ昌なりしや、再傳して十六世に至り、而して革命の亂、王の頭は亂民の爲めに斷せられ、寇患四集して國運旦夕に在り、倏ち見る形勢一變、守を變じて攻と爲し、拿破崙其の間に以て、應軍團圍四隣を克服し、聲威煥赫、古該撒の政、參ふるに新開化を以てし、絶代非常の勢力を伸べんこと、反掌の間にして、而して一敗忽諸、荒陬に老いぬ。路易十四の時に當りて、誰れか大西洋の西、亞米利加の地、寰宇第一の富國を成就すべきを意はんや、乃ち合衆國の創業者、華盛頓と雖も、其の百年の間、四境を兼へて、更に新大陸統一を致すべきを意はざりし也、又其の政治の腐敗する甚しき、議會の議員専ら賄賂を以て圖ひ、更に會社若くは行政諸官よりして利得を博するを旨とするに至らんを意はざりし也、當時自由の思想、平和の思想、之を今日に視るに、若何ぞ天淵のみならん。合衆國の獨立するに當てや、英國の罷弊、殆んど其の極に達し、復振ふべからざるが如くなりき、既に米の殖民地を

の跡想んで、繁華空しく一場の夢と作る、ギツボン乃ち月明散影を詠うて、四も人聲なく、低徊して懐に感ぜ、坐して前朝を追想し、而して羅馬衰頽史、是に於てか作る。佛王路易十四の時、尙其れ昌なりしや、再傳して十六世に至り、而して革命の亂、王の頭は亂民の爲めに斷せられ、寇患四集して國運旦夕に在り、倏ち見る形勢一變、守を變じて攻と爲し、拿破崙其の間に以て、應軍團圍四隣を克服し、聲威煥赫、古該撒の政、參ふるに新開化を以てし、絶代非常の勢力を伸べんこと、反掌の間にして、而して一敗忽諸、荒陬に老いぬ。路易十四の時に當りて、誰れか大西洋の西、亞米利加の地、寰宇第一の富國を成就すべきを意はんや、乃ち合衆國の創業者、華盛頓と雖も、其の百年の間、四境を兼へて、更に新大陸統一を致すべきを意はざりし也、又其の政治の腐敗する甚しき、議會の議員専ら賄賂を以て圖ひ、更に會社若くは行政諸官よりして利得を博するを旨とするに至らんを意はざりし也、當時自由の思想、平和の思想、之を今日に視るに、若何ぞ天淵のみならん。合衆國の獨立するに當てや、英國の罷弊、殆んど其の極に達し、復振ふべからざるが如くなりき、既に米の殖民地を

失ひ、乃ち更に濠洲に向て囚徒を送り、而して濠洲今日に至りて、嚮手として其れ隆に、加邦太繁瘠の地、亦優に一國たるの資を成せり、諸殖民地の陸昌日に加はり、乃ち全領土を擧げて、イムベリアル、フェデレーション、同盟結合して以て世界に當らんと欲するに至る、盛極れり、而して慢心生ず。言ふ者あり、一國自ら一國の職分あり、各々獨立して其の務を盡せば、斯に足る、以て尙ふるはなし、英國事あり、新西南上之が爲に戒嚴し、濠洲事あり、亞弗利加南端の殖民地之が爲に擾動し、印度事あり、加那太之が爲に狼狽す、爲すなきのみと、而して恐懼新たに起る。若し露佛同盟して蘇士を閉れば、則ち印度孤立すべく、億萬の土人心を懸きば、落々たる客寓の英人、以て之を支ふるに足らず、且つ濠洲方に支那人を放逐せんと務むるも、而も其の兵備を較せば、則ち以て支那の艦隊に當るに足らず、其の勢や亦炭々乎として殆い哉。其の盛に誇ると、其の憂を慮ると、間唯數段、形勢の條ちに變ずる、實に意外に在り、孰れか逆め之を料らんや。寧ろ獨り人間の歴史乃ち然りと云はんや、許大の地球、其の變化、亦復是の如きのみ、蓋し無量劫の前、太陽の大、直ちに地球に達して、太陽

失ひ、乃ち更に濠洲に向て囚徒を送り、而して濠洲今日に至りて、嚮手として其れ隆に、加邦太繁瘠の地、亦優に一國たるの資を成せり、諸殖民地の陸昌日に加はり、乃ち全領土を擧げて、イムベリアル、フェデレーション、同盟結合して以て世界に當らんと欲するに至る、盛極れり、而して慢心生ず。言ふ者あり、一國自ら一國の職分あり、各々獨立して其の務を盡せば、斯に足る、以て尙ふるはなし、英國事あり、新西南上之が爲に戒嚴し、濠洲事あり、亞弗利加南端の殖民地之が爲に擾動し、印度事あり、加那太之が爲に狼狽す、爲すなきのみと、而して恐懼新たに起る。若し露佛同盟して蘇士を閉れば、則ち印度孤立すべく、億萬の土人心を懸きば、落々たる客寓の英人、以て之を支ふるに足らず、且つ濠洲方に支那人を放逐せんと務むるも、而も其の兵備を較せば、則ち以て支那の艦隊に當るに足らず、其の勢や亦炭々乎として殆い哉。其の盛に誇ると、其の憂を慮ると、間唯數段、形勢の條ちに變ずる、實に意外に在り、孰れか逆め之を料らんや。寧ろ獨り人間の歴史乃ち然りと云はんや、許大の地球、其の變化、亦復是の如きのみ、蓋し無量劫の前、太陽の大、直ちに地球に達して、太陽

失ひ、乃ち更に濠洲に向て囚徒を送り、而して濠洲今日に至りて、嚮手として其れ隆に、加邦太繁瘠の地、亦優に一國たるの資を成せり、諸殖民地の陸昌日に加はり、乃ち全領土を擧げて、イムベリアル、フェデレーション、同盟結合して以て世界に當らんと欲するに至る、盛極れり、而して慢心生ず。言ふ者あり、一國自ら一國の職分あり、各々獨立して其の務を盡せば、斯に足る、以て尙ふるはなし、英國事あり、新西南上之が爲に戒嚴し、濠洲事あり、亞弗利加南端の殖民地之が爲に擾動し、印度事あり、加那太之が爲に狼狽す、爲すなきのみと、而して恐懼新たに起る。若し露佛同盟して蘇士を閉れば、則ち印度孤立すべく、億萬の土人心を懸きば、落々たる客寓の英人、以て之を支ふるに足らず、且つ濠洲方に支那人を放逐せんと務むるも、而も其の兵備を較せば、則ち以て支那の艦隊に當るに足らず、其の勢や亦炭々乎として殆い哉。其の盛に誇ると、其の憂を慮ると、間唯數段、形勢の條ちに變ずる、實に意外に在り、孰れか逆め之を料らんや。寧ろ獨り人間の歴史乃ち然りと云はんや、許大の地球、其の變化、亦復是の如きのみ、蓋し無量劫の前、太陽の大、直ちに地球に達して、太陽

地球、一箇の中に在りしを、其の回轉の際、外縁揮ひ去らるゝ、別一箇にして地球を成さるゝ、而も地球と月とを兼ほ一箇の中に在り、既にして地球の回轉、亦揮ひ去られて、月乃ち別に一箇を成し、回轉億萬劫、勢力次第に消耗して、漸く小に漸く固く、混沌たる者漸く平を成し、漸く分れ、山河作し、時には則ち蛟龍變蛇、大きに變を請ふし、變化の大樹、蒼森天を蔽せり、而して今は則ち六尺神軍の人間、植物の界に繁殖す、寧ろ獨り驅るべきの跡然りと爲さんや、古より今に至る、人間思想、累代として變ぜざるあらんや。之を近きに審ふるに、稻米を以て穀禾の最尊と爲し、國の理實と爲し、以て民命を養ぐべき、是を合きて有ることなしと謂ひし者、儼かに十數歳月の前に在り、而して今は則ち以て遊業爲し、尤も乏しき者と爲す。王政復古、三義定す、存存院あり、編輯論出でて、民選議院論行はれ、自由主義、憲政主義、十數年の間にして、國情の變遷、殆んど目眩せんと欲す、維新前の康南海、陶國家、固より今日ある意は、乃ち現存諸老も、初めより此に至るを期せざりし也。之を述ぶに例せん乎、嘗て信ずらく、日月星辰、皆神物なり、天に横ぶるの銀河、神或は之を渡ると、而して人

を稱し人を稱するは、彼れ皆其の能なりと爲す、既にして言ふ、統々たる者、統々たる者、燦々たる者、決して神物にあらず、皆一定の規律ありて、大地を覆回する者のみと。既にして又評ふ、相成の直ちに大地を覆回するにあらざり、乃ち其の太陽に環繞するや、太陽之を統率して大地を覆回するなりと、而して復太陽の大地を覆るにあらざり、乃ち地球の太陽を覆るなり、日つ太陽を覆るの界、其の數限りあり、太陽此と共にして、更に他の大なる太陽を覆ると言ふ、而して地球の宇宙に於ける、虚空の一點埃に過ぎずと説くに至る。斯く如き變遷、之を演變の事者に照さば、思想の浮動、會て定まらなきや、益々、明瞭なるを得ん、所有現象、皆矛盾より成ると説く者あるに至る、偶然にあらざるなり。物一なれば認識すべからず、認識すべきは、差別すべき者あれば、差別とは寧ろ矛盾の謂なり。老子云に、無相生、無相成を言へり、差別の物と物とを傳るは、人の之を思ふこと也。後に、則ち更に言ふ者あり、物の關係、常に矛盾を以てするのみならず、物の相結ぶるも必ず彼此相反する者たり、相反し、而して後相結ぶ、既に結んで一となれば、則ち更に之と相反する者出で、而して更に新たに相結ぶと

フ、ヒトよりヘトヘトに至り、遂に此の說を主張し、所有現象の成る、皆此の法則に由ると爲す、其の法則を法則を執て、直ちに多種多様の現象を演じてんと勉めしが故に、則ち牽強附會、事實を顛倒すを免れずと雖も、物象の矛盾して判明する所以を説きしは、世蓋し認めて然りと爲さざる無からんか、進化論者の概ね六合の進化を結合と分離とに歸する、著しく異なるを見ず。人類の組織、食糧を得たるべき炭素の結合と、呼吸したるべき酸素の離散とを結合する天體の求心力、遠心力に於けるが如し、外物の觀察を受けて、且つ利とし、且つ害とし、一現象を二様に混すも、組織上亦已に能はざる者あるに似たり。實に矛盾して差別あるは認識の由て生ずる所とも謂ふべく、即ち認識の究極の境に生ずる、疑ふべしと爲さず、無始而遷變の現象、前の存や無となり、前の無や則ち有り、所謂所有現象、皆矛盾より成るといふ者、世界しむに足りや。或は曰、從睡の時、ことひ矛盾あるが若きも、轉化の際、自ら多量の連續あり、此より彼に轉る、高を去りて低に墜るが如く、其の形や全く異なる、是れ一轉、轉化の法則を存し、かの夢幻の境、突如として此あり、突如

として彼あり、變轉頓忽として、捕捉し難きが若くならずし、走れも亦深く省せざるのみ、夢幻の境、亦皆無故の破綻あらんや。此より彼に移る、亦自ら連絡あり、夢の時に當りて、以て實在となして、曾て其の變轉を怪しまざるは、是が爲なるのみ。矛盾を以て、覺醒を夢幻に別つ、其れ果して何に據りて之を言ふ歟。

死

夢幻は觀念なり、而して矛盾あり、覺醒も亦觀念なり、而して亦矛盾あり、二つの者の此に於けるや、竟に明かに其の差異を見るべき所なきなり。蓋し其の夢に於てや、其の夢なるを知らざることあり、而して自ら以て覺醒と爲す、則ち覺醒の時、自ら以て覺醒と爲す者、彼れ果して夢幻たらざる、焉ぞ能く之を必せんや。唯かの夢幻より覺めし時、乃ち嚮者の夢幻にして、今者の覺醒たり、而して夢幻の前も亦覺醒たり、覺醒と覺醒との間に介まりて、暫く此に夢幻あるを知る、是れは則ち其の差異明確疑ふべからざるなり。假りに猶ほ之を疑つて謂はん、今の所謂覺醒、乃ち亦夢幻なるなからん乎と、而も且つ今者の明かに嚮者の夢幻たるを知り、夢幻の覺醒と覺醒との間に介まりて、其の濃濁辨り

難きを思ふは、竟に欺くべからず。故に今者の覺醒あり、然る後昔者の夢幻にして、夢幻の前更に覺醒ありしを思ひ、夢幻、暫く覺醒と覺醒との間に介まるを知る、抑も覺醒の某の境に於ける、夢幻の覺醒に於けるが如きあると否は、則ち思議の外に在り、覺醒の前、果して覺醒に超越するの境あること、夢幻の前後に覺醒あるが如きと否とは、則ち思議の外に在り、是れ今の覺醒を以て大夢と爲すも、其の未だ大夢に至らざるや、以て其の大夢たるを知らざることありと、然りと雖も請ふ更に之を思はんか。夫の夢幻に於てや、固より別に覺醒なる者ありて、其の今の境より正確なるを思ふ能はず、而も夢幻の内、又時ありてかその或は是れ夢幻ならんことを疑ひ、其の或は覺醒に至らんことを意ふ、而して果して覺醒あり。今や覺醒、亦固より別に覺醒より超越せる者ありて、更に正確なるを思ふこと能はず、而も覺醒の境、固より夢幻より正確なり、則ち其の時に於て、或は是れ大夢にして、或は別に超越せる大覺あらんことを意ふことあらば、是れ其の意ふや夢幻の覺醒を意ふよりも正確なりと謂ふことを得ざらんや、覺醒の某の境と相關る、夢幻の覺醒と相關るが如きことある、未だ必ずしも思議すべからずとせざるなり。夫れ生れて知あるの前、知るべからざるなり、生終るの後、亦知るべからざるなり、生の前と後と、唯其の意識なきは則ち思議すべし、此より而外、萬皆思議の外に在り、意識なき、思議すべからざる、生の前後の間、即ち斯に生あり、而して多少の觀念を得、而して過去未來億萬年、四方上下億萬里、皆其の思議の中に入る。思議すべき者、竟に有生の間、過ぎず、覺醒の一生に過ぎず、而して覺醒の一生、而外、知識及びべからず、若し知識果して生の前に及ばんか、彼れ方に生の前に在り、而して未だ生せざるの時ならんか、若し果して生の後を知ることあらんか、彼れ方に生の後に在り、而して既に死せるの時ならんか、覺醒の一生、決して生の外に出でて其の前後を知ることはざるなり。生の前後は知るべからざること、乃ち然りと雖も、生の前後あるは自ら能く之を知る、既に之れあるを知る、其の思議すべからざるを以て之を棄れば則ち己む、人の生や涯あり、而して知を覓むるや涯なき、涯あるを以て涯なきに隨ふ、必ずや生の外に出でて、以て是ることを求めざるを得ず、是に於てか意識なき生の前と後と、亦必ず索むる所に在り、索めて而して得ず、勞て而して效なからしむとも、

既に求めて足ることを此に求めんとす、嘗て偶然の故ならんや。有生の間、求めて而して足ることを得ず、更に之を生るの前後に求む、生るの前は意識を以て準ずべからず、生るの後は意識を以て準ずべからず、意識を以て準ずべからざるは、觀念として死なり、乃ち生るの前後死にして、生の後も死なり、覺醒の一生は死と死の間に介まりて存す、而して覺醒に在る時に死に待つこと、夢幻に於て覺醒を期するに類すること無しとするか、請ふ嘗試みに之を言はん。

曰く自由、人の之を尊び之を求むること、一に何ぞ殷なるや、之が爲めには嘗て萬骨を相らし、萬金を糜し、流血漂杵の慘を死せしこと、其の幾回なるを知らざるなり。其の義を究問すれば、漠然として明かならず、而も此の字面に對すれば、則ち肅然として敬意を起すを免れず、而して凡そ人事百端、浸々として日月に自由思想の活被する所と爲る、固より云はん、幾くは眞の自由を得んと、眞の自由將何くに之いて之を求めんか。眞の自由は制限あることを得ず、而して生れ一世に在る者、何くに之くとしてか相闘る所なからん、相闘る所あるは、則ち制限を受くる所あるなり。假りに世も羈絆を脱し、制限を受くる所なくして、而して自ら爲

すとせん、意志の向ふ所、唯決を此に取る彼を捨てて此を擇ぶ、唯其の欲するがまゝなりあるか、此を擇ぶは擇ばざるべからざる者あるか、何爲ぞ捨てるべからざる、何爲ぞ擇ばざるべからざる、捨つると擇ぶとは、我が自由に在るか、而も捨つる者は彼たり、擇ぶ者は此たり、是れ既に眼あり、既に局する有り、備して而して通きを得ざるは、其の境遇なるか、是れ自由の失へるや久し。十全の自由は、想像すべからざる所なり、而して人の自由を擴張せんことを求めて已まざるなり、求めて已まず、究竟何れの境に至らんと欲する、必ずや死の類か、生の前後と後とは死なり、死は意識なし、意識なきの境を想像す、則ち以て、制限を去り、盡すべきなり。又曰く、平等と、品彙差あり、等類別あり、輕重偏頗、宜しき所にあらざるなり、全く差別を絶ちて、一に平等と尊せん

と、是れ其の說なり。抑も有る所差類、何くに之くとしてか差別なからん、唯夫一人類の進歩、漸くに故造の差別を減するが如く、兵族品等の思想既に廢滅し、貧富階級の情念亦將に排せられんとすと雖も、此に廢すれば則ち彼に墮り、或は人爲の差別、廢滅して得ずなきを

得んも、夫の我が克つべからずして、而して克たるを免れず、常に我が爲す所に抵抗して、之を排擲する者、擧々として我を繞る、夫れ頑石途に當れば、我が行くこと趣想たり、茫々たる天地、我が力易ぞ及ばん、此を擧ぐれば彼れ廢し、營々とし、追逐し、精強氣沮し、絶噴突を貽す、差別全絶の境の若きは、竟に人の想像すること能はざる所なり。何くに之いてか平等を求めん、而して人の平等を求むること已まざるなり。必ずや死の類か、生の前後とは死なり、死は意識なし、意識なきの境を想像す、則ち以て差別を減盡すべきなり。

善は人の尊ぶ所なり、必ずや其の至れるを人に尊しとす。願ふに善を爲す、必らず惡に對して之を爲すなり、惡にして絶無ならんか、何ぞ善を爲すに要せん、則ち善を爲すの惡なきを得ざる、斯に惡の必要を見る、而して善を爲すや、必らず惡を減盡して、善たるに必要なる物件を破却せんことを期す、既に異しむべしと爲す也。人を殺すを得ざれば、人を傷くを得ざれば、是れ善を爲すの常とす、而も正當防衛を行ふに方ては、一人を保護するの故を以て數人若くに數十百人を殺死するも、以て當然と爲して咎むる所に在らず、其の父罪を犯せば、子之が

爲に體し、其の子罪を犯さば、父之が爲に隠す、亦以て當然と爲して咎むる所に在らず、斯れ如くにして殺し、斯の如くにして欺く、因て以て害を衆に及ぼすも、責めざる所に在る也。若し夫れ國と國と、其其相見え、懐難相當るや、敵を殺すこと萬千、伏虎野を蔽ひ、流血海を染むるも、以て殘酷と爲さず、國際の裁判、尊厳折衝の際に當ては、披髮縱橫、敵手を驅逐して、敵掌の間に續弁するも、以て醜海と爲さず、并に德義の責めざる所と爲す也。且つ夫れ善を爲すは、種愛に在り、一視同仁に在り、其の敵を并せて之を愛するに在り、善を爲す者の敵は惡人なり、則ち惡人を并せて之を愛せざるべからず、善此の極に至り、他を愛するの全きを求めば、我が生命を犠牲にして、惡人の糞糞を糞にするも、亦爲すべきか、乃ち此に至らざるも、己れに薄うして人に厚うするは、免れざる所に在るか、必ずヤタイモン、オプ、アゼンスの若き者が、それ之に庶幾せん。善を爲すの己れに利あらざること此の如きかな、然り而して善の爲さざるべからざるは、世途に疑はず、唯かの善を擴めて其の至る所に極め、以て至完全純の善を求めんか、必ずや亦死の類か、全く意識の外に出でざるを得ず。傳に言ふこと有り、詩云、

子儀明德、不大輝以色、子曰、華色之于於、以化民、末也、詩云、德音、如毛、毛猶有倫、上天之載、無聲無臭、至矣。美は人の求むる所なり、然らば則ち美の至純なるや竟に何如と爲す。美とは何ぞや、美麗をいひ、宏壯をいふなり。美麗は以て少しくも偏なるべからず、以て少しくも時なるべからず、人の美を言ふか、其の長を言へば、則ち云ふ一分を増せば太極に、一分を減すれば太短なりと、其の色を言へば則ち云ふ、丹を施せば太紅に、粉を施せば太白なりと、其の目や鼻やを言へば則ち巨ならず纖ならずと云ふ、見るべし、其の以て完全と爲す所は、則ち皆極めて尋常なるに在るを。而も所謂不脛不紅不白、不巨不纖、是れ人の想像し易き所ならんや、脛短の識を絶し、紅白の識を絶し、巨纖の識を絶す、斯に意識なきのみ。美麗は以て已甚なるべからず、何をか已甚ならずと謂ふ、多數人の喜く有る所の者なり、多く庸常に離れざる所の者なり、然り而して所謂庸常多數の人は、以て美麗と爲すべからざるなり、庸常に超越して、而して庸常に離れず、斯に以て純眞の美麗と爲すべくば、美麗たること、亦難しとせざらんや。山水の勝を観る、或は峻拔斬絶、或は突兀

崔嵬、或は葱鬱幽邃、或は平衍澗池、山の美なるか、或は浩浩蒼茫、或は澄碧深澗、或は奔激澎湃、或は清冷消澗、水の美なるか、而も觀て而して之を評するや、彼の絶壁、以て此の殘山、盡頭を補はんことを思ひ、此の瀑布以て彼の猿口曲處に懸けんことを思ひ、江の岸を隔てて、數峯の青を欲し、湖の心に近うして亭子の藏を欲し、煙火畏たる邊、此か楮林あるに宜しく、不毛の禿阜、參隴の趣を損するを嫌ふ、剪裁安排、好奇の念を逞しうし、并せて天工の意に満たざるを歎するに、免るべからざる所、則ち純眞の美麗、究竟意識の外に在り。且つ恆言に之れあり、純眞の美麗に對すれば、以て我を忘るべしと、蓋し以て爲らく、眞の美なきのみ、故に好惡内に亂れ、是非外に亂る、苟くも純眞の美麗をして現前せしめんか、嗜術として稱を喪ふが如く、茫然として吾れ我を忘る、美麗の吾れと以て析つべからず、而して主客の觀合して一と爲る、此の瞬時の感ば則ち亦意識あることなし矣。宏壯は宜しく以て限あるべからず、眼あれば則ち其の宏壯や窮する時あり。唯夫の世の有る所、物として限無きはなし、項羽の勇識に旺なり、而も其の眼あるや、烏江に窮す、アキレスの怒識に熾なり、而も

其の限あるや、踵を傷けられて斃る、迅雷雷軸に震ひ、海濱崖岸を拍つ、壯ならざるに非ず、而も其の響くや數里の外に出でず、仰いで星辰の森として羅列する、天の蒼然として黠黒なるを觀み、其れ遙くして至り極まる所なきか、而も眼及ぶ所はそれ局せるかな。惟然り、以て宏壯と爲す所と雖も、限なきを得ず、限あれば、則ち以て宏壯の極と爲すべからず、必ずや死の類か、遠なく際なく、宏壯の極、此より尙ふるは莫し。人の死に臨むや、不可思議の感、無邊際の想、油然として起り、悚爾として動く、垂死の意想たるや、固より此の如き者あらん、而も知の測るべからざる、想像の思議すべからざる境に臨み、因て生ずる所至宏壯の感、蓋し亦參はることあり焉。

眞は人の索むる所なり、而も生の間に於て、以て至眞を極むることを得べきか。理學の所説は萬象の云爲、之を勢力若くは運動に歸するに在り、勢力や、運動、轉々化々、而して萬象形を成す、而して此より以上、進むこと一層、宥として料るべからず、漠として知るべからざるなり。蓋し嘗て宇宙の眞を索めし者、視るものと二方よりす。其の一に曰く、所有萬象、相因相待以て成らざることなし、彼は是に因り、是

亦彼に因る、是彼相待ち、而して物乃ち成る、夫れ他に因り他を待つ者、是れ其の成るや已れよりすと謂ふを得ず、則ち其の存在する所以、蓋し他の力之を爲す、其の自立實在せるが如きは、徒らに其の外觀觀相のみ、而して世の有る所、顯現事相は相因相待ならざるなれば、則ち真相實體は、全く視聽意思の及ばざる所に在り、是れ實に老莊、佛の小乘數、スピノザ等の道ふ所にして、其の所謂實體の意識の外に在るや、有生の今より死の境を想ふが如く、杳として知るべからざる也。其の一に曰く、萬象の云爲は、相因相待に在り、相待の關係は、即ち存在の由て成る所、有あれば無あり、有は無に對して有、無は有に對して無なり、物必ず相反あり、矛盾の契合、斯に眞の顯現を見る、眞を認めて而して同じく矛盾の實在を許し、矛盾に即して眞の存在を見る者は、佛大乘の教、フキヒテ、ヘーゲル等の學之を道ふ。唯夫れ矛盾の義たるや、釋する者多方なり、或は矛盾に參ふるに協合を以てす、以て爲らく協合、矛盾に對して存する所なりと、且つ道へ、矛盾の協合と、其の相屬するや、亦一矛盾たるに非ずや、矛盾乘して世の實相たらんか、是れ此の矛盾に對する大矛盾あらざるを得ず、此

の矛盾に對するの大矛盾は、濶の所謂協合なるべからず、協合の矛盾たるや、かの尋常の矛盾に對して之を觀るのみ、矛盾と協合とを超越せる矛盾に對する大矛盾は、矛盾の存在、全く絶せざるの觀地ならざるべからず、此れ眞意識の存する所ならんや、蓋し意識を形成する者は矛盾、則ち全く矛盾に反する者、意識の存するを得ざる所なり。ヘーゲルは先づ存無の差別未だ生ぜざるの前に觀る、轉々化々、有無あり、萬象あり、紛々転々、闢亂して亂れず、而して後之を純全精神に歸一す、純全精神、一轉して又有無未分の境に入る、然りて復始なり、始まりて而して終りに之く、是れを彼れが哲學に於ける思想の無窮循環とす、而して循環して初めに返るや、常に有無未分の境と爲す、此の境や、則ち意識なきの境なり。是に於て、他の學者と同じきを得ざるを見る、ヘーゲルは以て有無未分の境よりして、轉々化々、思想の啓發、萬象を開展すと爲し、而して他の學者は云ふ、苟くも有無の差別未だ生ぜざるの境あるか、有無の差別、何ぞ此より生ずるを要せん、此より生ずるを要せば、則ち初めより有なるのみと、要するに差別なき無きの境に、即ち意識なきの境、意識なきの境、かの死と何ぞ辨ば

んや、且つ人の生の間を眞として足ること能はずして、必らず其眞を生の前、生の後に求むるは、蓋し性の自ら然るか、先天の理と云ふ者あらずや、之を釋する者多岐なりと雖も、生の前よりして存するの理と謂ふは、萬不可なきなり、靈魂不滅といふ者あらずや、其の言ふ所や固より生の後に在り、所謂靈魂、其の不滅にして永存するや、必らず今の狀の如く然るにあらず、其の狀や今の世に在りて意識想像すべからざる所なるも、其の永存は則ち以て必有と爲すなり、人性の體ふ所、自然に此に在り、眞を其の至極に窮めて已まざれば、究竟意識なきの境、即ち生の前と生の後に没入する、其れ儼然ならざる者あるなり。

一生の覺醒、其の前と後とは意識あることなし、有るなきの境、實に一生の間にして、以て足ることを得ざる所、是ることを此に求めんとする所なり。方に今覺醒に在り、方に生の前に在らず、焉ぞ能く生の前を知らん、又方に生の後に在らず、焉ぞ能く生の後を知らん。然りと雖も夢幻の時にして、猶ほ或は別に覺醒なる者あるを得んことを思ふ、而して果して之れ有り。乃ち孰れか其の觀念や、夢幻よりも大に正確なりとして疑はざる覺醒の一生に處し

て、生の前と生の後とあるを得んことを思ふ、而して其の果して之あるや、更に大に信すべき者ありと謂ふことを敢てせざる者ぞ。孰れかかの生の前と生の後と、其の境や更に覺醒の生よりも明確にして、徒其の體々として生に廣かれて懸解するを得ざるを以て、此の光明世界を觀るを得ざること、猶ほかの夢幻の中、夢幻よりも明確なる境を想ふを得ざるが如き者ありと謂ふことを敢てせる者ぞ。

身體

均しく之れ直接の關係ある者なり、然るに其の夢幻は直接の意思にして、殆んど外物と交渉する無きに拘らず、斷じて之を不穩とし、輕視到らざる莫く、而して其の身體に至りては、實に無上の重きを之に居く也。夫れ動たる六尺の軀幹、之を然邊際の宇宙に比すれば、何ぞ

畜に滄海の一粟のみならん、然れども萬象斯の小軀幹に接して、初めて精確と判定せられ、肢體の觸れて、十指の能く上下に弄び得るに非ざれば、則ち其の間に幾分の疑議を擧げて、其の接して精確なりと認識したる者を標準とし、以て間接に之を較量し、之を推定するを常觀と爲す。且つ身體の組織を以て唯一絶対

の組織と爲し、表裏せる萬象、山嶽河海より日月星辰に至る迄、頑冥無知の塊體にして、其に比するに足らざる下劣なる者と定められ、草や、樹や、能く生じ、能く育し、根幹枝葉、整然たる機能を備ふるも、固より以て身體に比すべくもあらずと爲し、空に翔る禽、陸に奔る獸、地に鳴く蟲、水に遊ぶ魚、能く生じ、能く育し、能く嘔み、能く食ひ、能く行き、能く歌ふも、亦固より以て身體に比すべくも非ずと爲す也。人體の起原を論ずる者出で、是れ元下等動物より進化し、其の初めに、漸れば、猿猴の類に近似すとの説を唱へしに當りては、多くは皆之を排斥して、人體はさる察々の動物より成るべき者にあらず、洵に是れ天地間特種龍錫の靈體なりと爭へり。乃ち其の下等の動物より進化し來るを認容する者と雖も、亦人體を以て最も進化したる者と爲し、萬有の進化を論ずるも、其の極處に至れば、乃ち人體を以て終結の點と爲せり。且つ人間萬載の動作は、擧げて

斯の身體を保存するの一途に出づ、飲食に論なし、衣服住居、糞穢を糞る者、錦綺を飾る者、茅屋に寢處し、樓閣に高樓麗するの差違あるも、身體の保存は、竟に其の主眼たらざるなし。周圍の患害、努めて之を防禦し、毛髮齒牙の微に

至る迄、衛生の道を講じて怠らず、又豫め患害の及ばん事を畏れて、防衛の術、百方手を盡し、而して患害の及ぶ所、一人の能く知り得る所にあらず、一人の能く防ぎ得る所にあらざるを以て、相爲めに群處し、以て相共に防衛する也。人間凡百の動作は、實に主として身體の保存に在り、命ありては、種種、上下幾百世紀、人間ありて以來の行爲、概して斯の一語より出で來れり、而して前代未聞の開化文明と稱する處に在るも、人間行爲の大牛、亦身體保存の一途を脱する能はず。

斯の如く重視する身體、果して何物ぞや。其の歸を尋ねるに、極めて多數なる細胞の集合に因りて組織せらるゝ耳、而して其の組織は頗る整齊にして、又完美を盡せり。今人體を中央より左右に剖解せば、其の間に小異同なきにあらざれども、殆んど同一なる一雙の半身を得べし、而して二百有餘の骨骸、參差相倚りて基礎を構成し、四百有餘の筋肉、其の周圍に纏着し、又消化器あり、又呼吸器あり、又神経系あり、各々其の適當なる位置に安排せられ、包むに三層の皮を以てし、掩括して靡めて乾たる形體を成す。其の體の動作や、極めて隨意にして、機能盡く相統一し、居坐を欲せば、筋肉屈伸し

て、骨直ちに伴隨し、若神經に應じて、全身の機能之に協ふ、起立を欲せば、脚尖より頭部に至る迄、盡く度々に合ひ、能く頭腦を脊骨上に安置して、全體の中心を失はず、歩々亦能く其の中心を保ちて、決して傾倒の憂あるなし、而して斯の動作を整ふるは、實に瞬間に在る也。起居運動、以て身體を勞役し、其の組織の漸く減するに従ひ、乃ち飲食して、次第に之を補足す、肉口中に入れば、齒之を破碎し、唾液之を滑かにし、咽喉より胃管を通じて、胃囊之を受け、胃液を分泌して消化を助け、或は直ちに血管に入り、或は十二指腸より小腸を經過する間、胆汁、腸液を混じて、十分消化に適せしめて後、其の營養分を乳糜管と血管に因りて、血液中に輸入し、血液の循環と共に心臟に入り、肺を通じて初めて眞血とし、再び心臟より體內を循環して、日つは消耗せる勞務物と交替して、組織缺所を補足し、且つは管中を流動する也。已に營養分に不足するなきを以て、全體を組成する細胞、皆生存して各自に幾許の動作を爲し、之を分ちては終始熱を發し、之を合しては方と爲りて外物を動かし、能く統一して一體と爲れども、萬種の機能又各自に活動して、間斷なく、実吾なし、

身體の組成何ぞ夫れ巧妙なるや。然れどもかの無邊際宇宙は異して此の如き動作、此の如き統一を存せずと爲す耶。

體は獨り組織と活動力を有する已ならず、又心意を有す。脚尖微傷を受くるも直ちに感じ、蚊蚋指頭に止るも直ちに痒を覺え、四肢五體何れとして感覺あらざるはなし、而して喜んで雀躍の態を作し、哀んで神々の容を顯はし、或は怒り、或は笑ひ、或は愛ひ、樂む、是れ獨り體軀ある已ならず、滿たすに感情を以てする也。且つ能く知る。動作すれば、組織缺乏し、飢ゑ又渴す、乃ち許多の餌食を索出し、牛羊鯨より禽蟲草果に至る迄、之を捕へ之を採り、而して之を食ふ。寒氣甚しく過分に體熱を奪ひ去らるゝや、乃ち織りて布を爲し、裁して被服を爲し、纏うて熱を保存す、陰濕の體熱を害するや、乃ち家屋を構へて之を防ぎ、而して此等の材料を獲るの捷速なるを欲するや、乃ち萬種の機具を製して之を給す。猛烈なる迫害の四圍を防がん爲めには、乃ち鎧鎧鎧より、水を防ぐの堤防、雷雲を避くるの雷雷計に至る迄、充足せざるなく、害の未だ及ざるに、預め早く之に備ふ。是れ獨り體軀と感情ある已ならず、實に智力を存する也。又其の能く行動靜止

するや、周圍の外方を假らずして、能く自ら爲す、牛や馬や、役々して行く、啗々として止まる、而も我獨り行かんと欲すれば能く行き、留まらんと欲すれば能く留まる、斧を揮つて、丁々として樹を鋸る、迫る者あるを待つに非ず、又能く寝ね、能く食ひ、能く動作し、皆我より之を爲して、外方を假らず。是れ獨り體

軀と感情、智力ある已ならず、又實に意志を存する也。夫れ此の如くなれば、身體は徒に外観の形體に留まらず、心意此に具はりて偉大なる動力を有する、靈妙無比の組織と謂はざるべからず。然れども是れ特に身體に限るとするか、かの無邊際の宇宙は果して此の如き靈妙なる組織を有せずと爲す耶。

身體の組織を唯一絶好の組織と爲し、萬有中の靈長として、自ら信じて誇稱すること、洵に此の如き也。而も斯の自信して誇稱する者、亦其の死を免れざるは、常に悲む所なり。天長へに若々、地久しく悠々、山嶽々として聳え、河濶々として流る、天地依然、山河舊の如し、花落ち花開き、觀相似たり、日月盈昃望み相等しきも、唯我は遂に死なき能はず、自ら靈長を誇る者と雖も、此處に至りては、皆惻然として憂ひざるなく、憂ひて而して死を免る者あるな

し。然れども無邊際の宇宙も亦果して身體の如き運命を有せざる耶。仰ぎ瞻れば、群星燦たり、宇宙は果して身體よりも靈妙にして、寧ろ絶大なる動物と爲すべきに非ざる耶。

宇宙は身體と均しく機關なり

遠くして之を望む、物の大皆指頭の如く、人物、樹木、丘山、數寸の間に蔽はれざる無し、而して星辰は則ち點々として小の極なり。蓋し物の目に映する、角度の伸縮あり、以て遠近に隨つて小大を爲すこと、自然に此の如し、但だ經驗の致す所、嘗て實物に觸接して、其の小大を明らかにする者在りては、遠きに在りて映ずる所小なるも、必ずしも以て實に小なりとせず、然れども是れ既に經驗の效たれば、かの經驗の漸く及び難きや、則ち臆推度漸く疎にして、其の全く絶ゆるに至ては、或は大過謬に陥るは、亦處々免れ難き所なり。晴夜空を仰ぐ、未だ嘗て炳たる列宿を見ずんばあらずと雖も、望むべくして即くべからず、人間の觸接するを得る所にあらず、夫れ高うして之を仰ぐと、平かにして之を望むと、其の距離の差あるにあらざるも、高き者の毎々認めて小と爲さざるは、經驗の極めて難きに由るか、日月の方に

出で、方に没する、大さ車轂の如く、而して其の天に中するや、小なること無盡の如き、其の故を解する者、區々にして一ならず、或は云ふ、視の習ひ、微細隱約を遠しとし、赫灼朗明を近しとし、遠き者を大とし、近き者を小とす、是れ其の故なりと、或は又云ふ、平かにして之を望む者は、日常の經驗、能く遠き者の毎に大なるを豫想するを得、而して高き者は則ち仰いで之を見るに、以て經驗の基準を用ゐるに難し、窄隘よりして之を窺ひ、大小の準擬すべき者あらざらしむるも、天に中するの月、地平に在るの月と、猶大小の異あるを覺ゆる者は、亦身體の重力に應じて、平定するの習慣を積成せるに由ると。要するに上に在る者の觸ち觸接すべからずして、而して星辰は則ち又其の遠遠實に全く經驗の外に在りてを以て、由て形づくるところの思想が、著大の過謬に陥りしは、亦當然と謂ふべく、乃ち其の直徑億萬里の大星球に至りても、以て見る所の如き微なる光體にして、旋々轉々、大地に隸屬する者と爲して、曾て異と爲さざりし也。抑も經驗の漸積漸進、機巧の力に籍りて、遠遠なる大虚空に懸る物を窺ふこと、殆んど身接して手觸る、が如きの効果を

得るや、是に於てか彼の微なる緯粒の如き光

體、其の實絶大にして、地球の之に視ること、芥子の須彌に於けるのみならず、適に之に驅られて其の際に周旋するに過ぎざるを知る。地球は我の居る所なり、而して既に其の微小を知る、而も其の自ら我の身體を視るや、蓋し翁は誇詡して以て最尊至靈と爲さざる無し、所謂萬物の靈、一の套語と爲すのみならず、而して實に以て然りと爲す、四顧して俯仰す、山の崎つを視る、謂ふ頑大なるのみ、水の流るゝを視る、謂ふ卑劣するのみ、日月星辰の運行するを視る、謂ふ機械的勢力の推行的みと。ライブニツツ、ゲオルフの若きは、かの列宿森羅せるも、人類の生息に適するは、獨り此の地球あるのみ、否らざれば至善なる上帝が何故に特に吾人をして茲に在住せしむるかを解すべからずと言へり、而して後の學者亦以爲らく、人類生息の爲には、地球より適せるは莫し、且つ太陽系に在て、かの木星土星の猶ほ熱燄燄々として絶えざるは、以て人類の生育すべき所にあらず、水星金星も亦適せず、獨り火星が、望遠鏡之を窺へば、海陸形を成し、兩極に雪を見、雰圍氣の存する、彷彿として認むべし、以て生類を孳殖すべきに近しと雖も、其の幅小なるは、以て人類の進化を極めて、其の能事を盡さしむるに足

るべくは憂えず、則ち太陽系の人類ある、獨り我が地球のみなるは疑を容れずと。但だ夫の他の星系に至りては、或は其の云爲實かに人類に超越するの境遇に在る者あらんも、亦未だ知るべからず、然れども是れ竟に空想に屬し、之を然りとするも、然らずとするも、徒らに辨ずる者の異同に屬す、且つ他星系をして、或は果して人類あらしめ、或は果して更に人類に超越する者あらしめんも、此の如き波體を具し、此の如き云爲ある者、自ら斷じて以て尙ふる者なしとするは、人間の常想乃ち爾る也。近日學理、漸く有機無機兩界の畛域を滅せんとし、所謂無機物、亦生機を具するを言ふと雖も、仍ほ是れ僅かに其の生機微動するを認むるに過ぎず、而して生物の進化、人類を至極とするに至ては、萬口一辭、曾て違言なし。乃ち萬有神教の徒の若き、宇宙を以て生物となし、神之が命たるを倡説すと雖も、其の言ふ所は觀念上の考究に出で、想像を實在の外に馳せたる者、物理の研究に在ては、資て論列するに足らずとす。然らば則ち人間が物類發達の至極にして、森羅せる萬象、微は昆蟲菌若土茸より、大は山河日月星辰に至るまで、靈蠢懸絶、比數すべきにあらずと爲す、甚しい哉人の自ら視ること

太だ駭泰なるや、千古迷謬、今に至て未だ覺けざるなり。眇たる軀體、地球の殼に蟻附して蠕動す、地球よりして之を視る、既に其の微細、焦冥の巨象に於けるが如きを視る、然るを況んや地球、大なること億萬斯倍の巨星球が、無數の地球を引率して、無邊際に行進するもの、亦無量數にして、整々亂れず、乃ち此の絶大活動力ある宇宙を以て、斷じて慈頑不靈と爲して疑はず、渺たる滄海の一粟を以て、萬有の靈長自ら居る、寧ろ其の疑はざるを疑うて、而して其の自ら信するの只矢矢に値するを思ふべからざるか。

晴夜仰いで天を觀れば、蓋し八千數星を得、其の或は鮮明、或は微茫、相錯綜して光明均しからざるを以て、其の撒布無數なるが如きも、實際數ふべき所は此の如きに過ぎず。但だ既に光明均しからず、微茫あり、更に太微茫あり、以て相重疊するは、亦適に其の更に甚太微茫あり、最太微茫あり、而して其の實に在る所を視る所に止まらざるべきを見ずなり、乃ち望遠鏡を取て之を窺へば、斯に直ちに百萬數を得、鏡益と精なれば、數益と衆く、其の遼遠なる者に至ては、唯其の光の地球に達するを以て、早く已に五百萬年を費す者あり、蓋し猶

ほ遠き者あらん、特に未だ究明轉到ならざるのみ。夫れ其の宏遠此の如きを以て、其の衆多此の如きを以て、其の規律統制、果して何如と爲す、一道微明、天に横はる銀漢の者あらずや、蓋し無數星體、運行的方向、自然に一致する所あり、殆んど一平面上に聯聯するあり、故を以て夏秋の交、其の積疊せる方向に對すれば、方に此の如き一道の大星帯を見る也。若し積疊の星系限局ありて、茲に一團體を爲し、而して此の團體を距ること無量數程の處、又此の如き團體あり、此等無數團體、又相關聯して、括して一大團體と爲り、此の如き大團體の等類、又相關聯して、括して一至大團體を爲さんか、此の如くにして已まず、其の窮る所捺る可からず、而して之れを窮むるは人力の能く及ぶ所にあらざるなり。且つ退いて銀漢の在る所に際を立てて、定めて一團體と爲し、而して其の規律統制を視る、其の秩序整肅、程不議、李光弼、信玄、モルトケの師を行る節制と雖も、以て比すべきにあらず、月の地球を旋り、地球の太陽を旋り、太陽のまた他の大太陽を旋る、更にかの星宿の若き、其の些少の遊星を除却して、森然として眼を射る者は、彼れ皆一の太陽たり、既に太陽たり、彼れ各々率ゐる所許多の遊星あらん、而

して此れ皆視覺の外に在り、其の太陽の若き、亦我が星系の太陽に億萬倍する者あれば、率ゐる所遊星の數、亦我が太陽系に億萬倍する者なきを得ず、其の餘流星の若きに至りては、其の數恆河沙を以て之を量るも、蓋し盡すこと能はず、斯の如き無量數の大小星體、乃ち肅々然として、其の中心とする所に共うて、旋轉序を亂さず、偶々星相衝突して、破砕劫灰することありとするも、是れ實に千萬の一失、其の全體の秩序は、則ち億萬の星を驅りて一定の規律に従はしむるを過たず。此の秩序あり、而して航海の術、以て過なくして而して鯨鯨の眼に投ずるの難に免るゝを得、此の秩序あり、而して天文の學、以て謬なくして而して研究の正鵠を失はざるの望あり、若しかの無量數の物をして、一日秩序なからしめんか、かの無量星體、錯々紛々、紛々雜々、何くに之いてか其の端倪を覚めん、而して學術皆廢せん。固よ人間の測知推度する所、範圍極めて小、北斗七星、其の相聯絡して北方に定在すること、尤通常に然るが如し、彼れ實に運行列那を含めざるに疑なし、而も是れ人類世界の生命以て能く其の寸運分移を辨すべからざる所ならん、推して而して他の無數星に及ぼす、蓋し覺かに

人間測知推度の方の上に絶す。仍ほ是れ天文の榮然斐然、其の秩序ありて亂れざるは、人の覺に疑はざる所、而して其の一定の中心に共うて、順次旋轉するは、誰乎動かすべからざるに幾き也。且つ星體の妙用、其の徒らに旋轉序あり、且つ轉じ、且つ中心を求めて運行すといふに止まらんや、彼れ無量數の物、皆個々にして其の體の云爲に在て、其れ必らず大活動力を見はす者あるなり。かの月の如き、其の體微小其の作用早く素く故に頭爾として塊結、水や空氣や、皆塊中に凝收せられて、活動全く已む、地球に在ては、其の表面の猶ほ變化絶えざるを見る、地層の積疊漸く厚きも、其の堅固せるは、僅に其の外殼數里、是より以內、溶解溶深して、收縮の傾向極めて熾に、適ち火山の噴裂あり、適ち地震の慘烈あり、木星土星に在ては、零圍氣の其の體を包裹して、能く其の熱を保存し、熱の發蒸斷えずして、亦隨る光を發する者あるが如し、乃ち太陽に至りては、光熱の活動、非常雄偉、熱瓦斯の迸發すること、一瞬にして數萬里に達し、而して引いて收縮するを常として、金鐵皆熔け、蒸してヒステ體を爲し、炎氣猛怪、活動の強大酷烈、地上人間の想像及ぼざる所とする也。乃ち天に麗く

の衆星、其の大皆太陽に加ふ、其の有餘の元素を灼銷して瓦斯體と爲し、一吞一吐、猛炎を噴吸する、力たる量るべからず、此等星體、皆自ら其の體より熱を發する所、蓋し重力の作用、諸元素の共に中心に向て注下するや、其の波動化して熱と爲り、反撥して而して逃發す、凡そ自ら熱を發する者、此より巧妙偉大なる者あらんや。見ずや夫の人身活動の要機、亦動作して熱を發するに在り、動作止み發熱過まれば、則ち死す、星體の熱を發する、其の何の爲にするを知るべからざるも、其の巧妙偉大は則ち掩ふべからず、而して人知の測度すべき所、活動の作用、此に止まる者の如きも、其の實更に至大至妙の活動ありて得て知るべからざる者ある、畢竟想と爲さんや。夫れ星體の個々、各々億萬數程に相離れて存すと雖も、其の離るるや、徒らに離るゝに非ず、精氣なる者ありて、虚空に過滿し、見ることを得べからざる所なれども、かの光の相照互徹に則ち實に其の作用に因る、引力の作用も、亦物の相接觸するありて、之をして然らしむるなばあらずとせば、豈別に一種過在の物質あるを推すべからざらんや。則ち見る可からざるの間、見る可からざるの物の層々重沓、以て見るべき、見るべからざる

の萬象をして生々化々せしむるあるは、疑ふべからざるが如く、電気磁氣の原を推し因を窮むれば、益々以て此の推測を實にせしむる者あるなり。全宇宙は無邊無際、這裏の云爲、竟に人力の及ぶ所に非ず、唯彼の皎々たる銀漢を以て際とし、其の衆星の眷衆を以て視て一團と做し、姑く此を日して宇宙とせんか、其の能く統一して、而して能く活動するや、何ぞ人身に類することの甚しきや、而して其の絶人は則ち比數の及ばざる所たり、是を極大の身體といふ、斷じて謂ふ不可なしと。

然れども身體の細微、皆緊固密接して、此の一個體を形づくる、かの燦爛たる星辰、たとひ彼れ皆個々に太陽にして、自ら非常の活動を爲すを以て、個々の細胞が自ら動作するに似たりと爲すも、其の個々相互に懸絶して、會て形を具せる個體、身體の如きを組成することなしと謂ふか。且つ言へ、分子の大なる者、亦相離るるの大なるを要す、凡そ分子、一として旋動せざる莫く、唯其の單純なるや、旋動極めて簡單、例へば猶ほ夫の石の如し、塊然として其の動作を外に呈はさず、旋々有體に至りては、其の動作較著にして、細胞の編接の如き、或は密接して強固の組織を成す者ありと雖も、其の

編接の力薄弱にして、潰散分崩に易く、乃ち血液中の白血等、若きに至りては、血漿中に自在に游離して、優に餘地を存する也。人身の細胞をして、團して一個體を爲さず、而して徒らに地面に平敷匍匐せしめば、砂礫の礙する所と爲り、岩石の隔つる所と爲り、竟に其の活動を送しうすること能はず、是れ其の團して身體を組織し、以て砂礫を蹂躙し、岩石を突破して、其の活動に便するの形を具するの方に向ふ所以、而も若し其の體をして過大ならしめんか、又不利なるあり、何となれば形體を密接するの力は平方を以て進み、而して重力壓下の運動益々難く、體の動力、自ら其の重力に堪へざるに至る、是に於て其の身長に伸びずして、而して其の個體の數に増す、斯に生疑の孳殖を致し、而して社會を形成す、人之が分子たり、個々にして分離して、個々にして動作す。云ふあり、人の動作、恣睢にして自ら爲す、會て定節なし、而して星辰は則ち其の一の中心に共うて旋回するや、概ね一定にして其の則を變ずる所なく、頑然死守、機械的動作を爲すに過ぎず、人と以て比すべきにあらずと。且つ言へ、人の猶ほ蠻俗夷態に在るや、其の動作の不

繩、繩墨に合せざる者多きも、漸く進んで開明の域に入るや、則ち亦漸くにして秩序整齊、紀律の中に固せらるゝ天明けて起き、昏夜にして寝ね、飲食し、作息す、種族と雖も皆然り、而して其の事の整齊に趨くや、則ち亦時の定限あり、眠食動息、皆時を以て致て溢らず、吏人晨朝九時衙に赴き、午下三時放衙す、動息紀あるにあらざるや、汽車汽船、時を以て發着し、乗る者數百千、便ち命を時に聞か、行止律あるにあらざるや、機械の整理漸くに進めば、則ち人の動作之と共に繩墨に就く、村里聚落の民、市邑を繞りて、資して而して業を營み、巨市通邑、又國都を繞りて、資して而して貨を通ず、合して而して之を觀るに、關係連絡の機、亦星辰の運行に異ならず。星辰も亦時ありてか定期の外に脱す、かの星雲の運動、極めて不規律なるが若き、かの彗星の乍ちに現はれ乍ちに隠れ、或は數年一來、或は數十年一來、或は一來して復來らざるが若き、其れ然らずや。夫れ眇たる身軀、以てかの絶大の宇宙と相比すべきにあらざる、身體具する所の性質、之を宇宙に求め得べからざるなく、而して宇宙具する所、之を身體に求むるも、盡く得べきに非ず、宇宙の活動至大にして泥ふべからず、眇

たる身軀、乃ち地球具する所多少成分、太陽の光熱と相昵んで生ずる所に過ぎず、而して所謂地球、所謂太陽、之をかの大宇宙に視るに、偏隅曲竇に浮遊せる點埃も當ならず、則ち全大宇宙は、其れ眞に言語に絶し、思想に絶せる、靈大至洪の身體なる哉。曰く、筋肉骨格あるを尊しするにあらず、而して心意あるを尊しとす、人身の妙用、かの筋肉骨格といふのみならず、又至絶至妙の心意ありと云ふのみ、無量數の星辰、組織して形成する所、大宇宙、其の能く統一し、能く活動すと云ふと雖も、所謂心意、肩何くにか之を求めん、草木の芽して萌し、單子葉し、雙子葉し、莖し、幹し、枝し、莖し、葉し、華し、實し、形具し體整ひ、而して榮枯す、人に類せざらんや、尙以て人と比すべからずとする者は、心意なきが爲めと謂はずやと。噫、かの活動せる大宇宙、亦果して斷じて心意なしと言ふことを得るか。

宇宙は身體と均しく心意あり

蚤の身體に在り血を噴ひて飛跳するや、我が身體の一部は、固より彼と争うて、何等の働作をも爲し得ざる也。想ふに、廣布せる皮膚、滿面の鬚毛、蚤は漢々たる原野に優悠自適の生

を營み、日にありては、湖海の鏡面を開くを觀、眉にありては、森林の機を觀、口にありては、空洞なる穴の無間地獄を觀、鼻にありては、突兀たる積丘の峰嶺として聳ゆるを觀なるべし、而して往くとして活潑々の運動を作すこと吾れ蚤の如き者に誇らずんばあらず。蚤よりして我が身體を觀ば、固より活動力なき、固くたる一箇の無機物、穿ちて而して飲食を獲べき者たるに過ぎず、而も斯の無機物とも見ゆる遲鈍なる身體は、實に全體の上に非常敏捷の活動力を有するなり、唯蚤は遂に心意を有する大動物なるを知ること能はざる耳。我れ地球上に立つ、山川嶺として知覺なく、幾多天に懸れる光輝ある圓體の徒らに回轉するを認む、然れども亦馬ぞ我が宇宙を無機物視する、猶蚤の體軀に奔跳して己の如く活潑なる者なしとして、人體を知覺なき者と思惟するに異ならざるを知らんや。彼の海山嶺より、彼の滿天無數の列星より、あらゆる萬有を包括せる斯の大宇宙は、亦實に絶大の機關を形成し、而して亦實に絶大の心意を具備する也。宇宙に感情あり馬。夫れ飢うれば喰はんはんと欲し、渴すれば飲まんと欲し、苦痛を與ふる者は斃さんと欲し、喜びあれば雀躍して飛ばんと

欲す、是れ之を人に感情ありとは謂ふ也、乃ち刺戟に對感し、平を得ざる所をして、平を得せしむる也。今我れ萬有を觀る、其の運動皆平を求むるに非ざるなし。山高く聳えて、深谷に臨む、乃ち漸次に頽落して埋没せんとするにあらずや、物の刺戟に逢へば、萬體盡く抵抗力を顯はすにあらずや、其の力内に蓄積すれば、火山と爲りて外に破裂し、大に顯はるるにあらずや、太陽は遊星を牽き、遊星は太陽を離れんとし、而して終始相輪轉するにあらずや、是れ皆平を求むる者なり。然れども、斯の如きは、宇宙働きの極めて疎雜なる者のみ、其の實は全宇宙を通じて、感應の到らざる限なく、如何なる微細なる働作も其の影響實に無限境に徹底す。火を點すれば熱發す、其の熱精氣に通じて、漸く散じて漸く微に、下九泉に入りて、其の極限を知らず、上九天に上りて、又其の極限を知らざる也。手を舉ぐれば地球の中心幾分の傾きを免れず、而して地球と密接の干係を有せる太陽も亦必らず幾許の傾きを免れず、而して太陽の廻るべき太陽も亦其の影響を免るべからず。其の力の微なるは固より言説する能はざる程なりとするも、空を指す隻手は、其の力實に全宇宙を動かすに足る也。其の

力の何たるを問はず、宇宙に徹底して至らざるなきは、實に今日の定論なりとす。人能く物に觸れて感ずると謂ふ、然れども其の感ずる所、宇宙に比すれば其の精粗果して如何。目能く物を視ると雖も、暗夜に在て物色すべからず、而して犬と猫とは能く視るを得べし、乃ち人は犬猫の明に如かざる者あるにあらずや。光線を三角玻璃に通ずれば、直ちに七色の光線を視る、而して其の赤色より寧ろ光波の長き者、紫色より寧ろ光波の短き者に至りては、遂に感ずること能はざるにあらずや。一雙の明眸秋毫を判つと誇るも、亦尙此の如きに留まる耳。凡そ人の感得する所は極めて鮮し、唯學術の進歩と共に、次第に感得に苦む所の者の顯はれ來るあり、精氣の存體は、人の尤も感ずるに難しと爲す所、是れより微細なる者に至りては、固より人の感得せざる所なりと雖も、而も斯の宇宙には更に此れより微細なる者、幾層々伏在するやを知るべからずとせば、茲に宇宙働きの微妙を知るべからざらんや。宇宙の全く感覺なき者の如くなるは、是れ徒に一局部の偏見なり、全體の上より觀察すれば、如何なる微細の力も必らず波及して剩す所なし、乃ち感應の赫著なるを想像すれば、寧ろ是れより赫著なる

者を想像し得べしと爲さんや。宇宙に智力あり焉。夫れ能く道理に通じ、能く道理に從ひ、能く道理に忤はざる、是を人に智力ありとは謂ふ也。今我れ宇宙を觀る、往くとして道理に背馳するを看ること無し。ライオンイツ事理の充足を唱へて曰く、事々物々必ず其の故ありて生ず、若し其の故なくして起る、何故に故なくして起れるかを釋ねれば、乃ち起るの由むを得ざる所以顯はると、是れ洵に不易の言とす、宇宙の事、眞に道理に由りて充足され、道理に忤ふ者未だ嘗て之あらず。人宇宙の一部分を究明し、箇々斷定を下して理會せりと爲す、而して一旦事實と相協はざるに至れば、乃ち假令自己の考案を是なりと信するにせよ、事實を以て誤れりと斷言するに躊躇せざる能はず、必らずや自己究明の誤謬、若くば事實觀察の誤謬、二者其の一に歸せざるべからず、決して萬有に誤謬ありとして、此の如きは當に此の如くならざるべからずと爲すを得ざる也。萬有は必らず充實せる道理を具備せる者と定めざるべからず、若し其の一部分と雖も、道理を缺く處ありとせんか、乃ち諸般の科學は遂に成立すべからず、何となれば、科學の成立は、實に萬有の究明するに從つて、着々道理の顯表を見

るべきが故に、只其の道理を尋ねて極處に至らんと希望するにあればなり。技藝にありても亦然り、唯萬有の道理を具備して、活動する所以を知り、以て之が力を假るに留まる耳。而して其の力の平均は皆一定の分量を有す、乃ち空氣の壓力は水銀を上る三尺餘、水を上る三丈餘に限れり、此の理ありて、削めて水銀を以て風雨針を造り、又噴筒を以て水を空中に撒布するを得。物體を空中に投すれば、引力の爲めに漸次其の力を失ひ、遂には全く停止して動かさず、而も其の物體再び落下する時は、尙ほ最初之力を以て落下し來る、此の理ありて、戦時に白砲を用ひて彈丸を敵陣に射撃するを得。所謂人の智巧を振ひ、才能を振ふと稱する者、皆萬有僅少部分の力を假るに過ぎざる此の如き也。而して萬有は些かも間隙なく、道理充足して徹底せざるなし、若し人にして果して智力ありとせば、乃ち僅一萬有の一部を知り、又僅に其の知れる力を假りて行動するに止まる、其の根元たる絶大の萬有は、固より以て絶大の智力ありと謂はざるべからず。

宇宙に意志あり馬。意志は苦樂の顯はるゝに過ぎずと爲すも、將又別に意志ある種種の心象儼存すとなすも、發せんと欲して發するの謂たるや、疑なし、乃ち人は爲さんと欲して爲す、是を人に意志ありとは謂ふ也。今我れ萬有を觀る、所在の現象一も發せんと欲して發するにあらざるは無きなり。凡そ勢力なる者は常に發せんと欲するの意味を包含し、皆意志の類たるに過ぎずとは、シヨッペンハウエル之を斷言し、ハルトマン後に和して之を唱道せり。人の意志發せんと欲して發する者とせば、萬有盡く意志を備ふと謂ふべからざらんや。今石を轉りて空中に投ぜ、石空を研りて滾轉として飛ぶ、而も石の行く處は正に石の行かんと欲する所に行くなり。今拳を揮つて物體を打撃す、以て物體の抵抗力を知るべし、夫れ抵抗とは打ち來る物を拒絶するなり、意志斷として玆にあり。且つ太陽は遊星を牽引せんとし、而して遊星は離去せんとして回轉す、往くしとて宇宙の働作、爲さんと欲して爲すにあらざるなし。唯一髮微妙の間、其の間に發せんとするの意志を包含するを以て、乃ち意志なきが如しと雖も、宇宙間の働作稱して働作と曰ふ者、孰れか是れ無意志と解釋するを得べき者ぞ、人間の意志は、僅かに徴々たる小身體に顯はれて、手足を動かさしむる耳、斯の絶大の宇宙、人體に比すれば固より絶大の働作を爲す、其の意志も亦必らず

絶大なる者あらざるべからず。曰く、人は獨り感情、智力、意志あるのみならず、之に伴うて意識の存するあり。腦髓之を考へ、脊髓神經を通じて其の働作を顯はす、神經の末端に刺戟を受くるあれば、痛痒を感じて、腦髓又之を考ふ、乃ち腦髓は意識の存する所、而して是れ實に身體に於ける至重の特質なり、今宇宙に感情ありとするも、徒らに活動するに留まりて別に識る所あるにあらず、智力ありとするも、徒らに一定の道理内に活動するに留まりて、別に識る所あるにあらず、意志ありとするも、徒らに相打撃して發するに留まりて、別に識る所あるにあらず、若し識る所ありとすれば、人間に存在する腦髓の如き者、果して何處に在りと爲すか、望遠鏡を轉りて仰いで天を瞻る、落々たる頑丸の輪轉するに過ぎず、固より人間の靈妙なる心意を有する者にあらざる也。然れども人體を解剖せば、腦髓や、脊髓や、神經や、皆唯細胞の集合に留まり、聊か色澤を異にし、成分の僅かに相異なるを認むるに過ぎず、如何に腦髓を分析するも、意識果して何處にある、念慮果して何處にある、其の印象果して何處にある、竟に認む可らざるにあらずや。人類に意識ありと思ふは、自己體驅

を有し、又意識を具へ、而して他人の體軀自己に等しきを視て、是亦意識を具ふと思惟するに留まる也。意識は遂に見るべからず、意識は遂に觸るべからず、是れありと謂ふは、外部に顯はるゝ所より推測し來つて是れありと爲す耳。

人體に感情あり、斯に亦宇宙の感情あり、人體に智力あり、斯に亦宇宙の智力あり、人體に意志あり、茲に亦宇宙の意志あり、乃ち森羅の列星の如き、乃ち精氣の如き、乃ち更に精氣より微細の物の如き、乃ち微細の物より更に微細の物の如き、此等尚に幾層々の極を知るべからずとせば、人體腦髓の如き作用を爲す者、即ち宇宙の腦髓と稱すべき者の儼存する所なしとせんや。夫れ人體の外形に視る、その働作何ぞ靈々爾として微弱なる。六尺に満たざる小肉剛を以て局々として小活動をなすこと、之を斯の宇宙の働作に比すれば何如と爲すや、而も先づ此れに計して意識ありとなす、其の絶大なる働作をなす宇宙が、通常人體の意識より遙かに超越する所の優秀の意識を具備せずと謂ふは寧ろ大膽に過ぐると爲さざるを得る耶。

減

生の前知るべからざるなり、生の後知るべからざるなり、知るべからざるや一と雖も、生の後に呼んで之を死と謂ふ、而して是れ實に意識の及ばざる所、又全く意識の絶つ所として名くる也、故に自己に在りて死と謂ふは、意識を失ふに留まるべし。然れども自己と形體を同じくする者頗る多し、我れ海に成者が生れて而して成育せる者視たり、且つ我が親聞する所を以て、彼も此もあらゆる人群皆盡く生れて而して成育せる者なるを知れり、我れ又海に其の或者が活動力を失ひて棺桶の中に投ぜらるるを視、而して漸次に消滅して最後には何物をも留めざるを視たり、且つ我が親聞する所を以て、彼も此もあらゆる人群皆盡く其の免れざるの最後なるを知れり、乃ち生れ、乃ち成育し、乃ち活動力を失ひ、乃ち消滅し、此の如くに乃ち王侯も貴人も、匹夫も匹婦も、古今の萬骨皆枯れて跡なきを知る也。是を以て意識の上より曰へば、死と謂ふは意識を失ふに留まれば、人の身體を以て一物體と見做す時は、形骸の爆裂して、血肉は變じて窒素、水素、炭素、酸素、燐鐵等と爲り、骨片依然石灰質の故態を存するも、亦久しからずして消散するを謂ひ、其の形骸の頽敗に屬するに名くる也。人に在りては之を死と謂ふが、若し他の物體にして此の

若くならば之を滅と稱す、世俗に於て名を異にするのみ、事や同じ。

目にも觸るゝ所萬物、早か晩か、皆滅に趨く也。草や木や、走獸飛鳥や、彼れ能く嬌然として咲き、能く轟然として茂り、咆哮して山谷を震はし、一轉して九天を摩するも、其の終るや倏忽たり。手にする所の玩器、屋を榘ふ所の珍具、皆永久保存せられて終期なき者の如く、而も一として頽敗を免れ得るなし。徒に此等の物に止まらず、其の視て以て極めて宏大の觀を爲す者も、亦此の數を免るゝこと能はずして、其の終りや相率ゐて頽敗に歸せざるなし。窟間の小流、溪々として注ぎ、流れて河と爲り、蕩々として海に入る、而して降雨水量の益すに隨ひ、終始砂土を掠めて、遂には全く地面を平かにするに至る。ナイヤガラの瀑布は宇内の奇觀と稱す、而して其の水の直下する所の崖巖、水勢の掠むる所と爲りて、年々一尺の亢隆を減すと謂ふ、其の崖巖の全く掠削せられて、奇觀空しく人口に留まるの年代據指して數ふべき也、何物か遂に能く頽敗を免るゝ者ぞ、乃ち此の地球の如き、彼の太陽の如き、亦實に其の運命を脫離すべからざるなり。今夫れ地心の熱漸を追うて減却す、減却微と雖も、

必ずやその熱の全く消散して、内部冷たたるべきの時あらんか、而して其の時は、乃ち環陸の海水、悉く中に吸収せらるゝの時にして、尙足らずして空氣も亦其の吸収する所となり、地球は到る所岩石の累々たる、砂礫の漠々たるを克るのみならん。太陽亦常に熱を泄なき空中に散じ、終始熱を發散して、遂には全く之を失ひ、赫々たる日輪萬古に消滅せる光輝は失せて、闇々たる暗黒の一物體と化すべき也。他に輝く所の列星は概ね太陽より甚しく大なる太陽なるが故に、我が太陽の全く光輝を失ふに至るも、尙久しき間燦然として輝くべしと雖も、唯限あるの光熱を泄なきの空間に發散せば、其の運命の歸する所、又必ずや光熱を失ひて暗黒の物體に化すべきのみ、而して宇宙は遂に暗黒深々の中に没せられ、光なく、熱なく、極寒極冷の境に到着すべき也。且つ曰ふ、遊星の太陽を回轉するや、常に幾分か精氣の抵抗を受け、其の抵抗力極めて微少にして計算に上らざれども、大太の年歳を経るに従つて影響を受けること鮮少なからざるべく、空間を飛び廻る力漸次に脆弱に赴き、強大の制する所とな爲りて漸く太陽に接近し、遂には迫りて太陽と相撃ち、もろ共に微塵に碎けて散じ

て星雲の如き者と爲り、而して輝く群星亦皆同一の運命を受けて星雲と爲り、大なる距離の中に散落せる者、漸次收縮して再び星と爲り、而して回轉し、而して相撃ち、而して又散ずと。且つ又曰ふ、小星強大の制する所とな爲りて、大星と相撃つや、等しく微塵と爲りて星雲と化するも、既に精氣の抵抗を受けて、小星相撃の力何程か薄弱と爲り居るを以て、衝突して熱を發し、星雲に變ずる事あるも、又再び原始と均しき至大なる星雲たる能はず、而して其の收縮して時に或は周圍より新たに遊星を分出する事あるも、決して今日の如く中心より遠き距離に及ぼす能はず、故に再び星體の組成を造る事あるも、其の組成は之を前に比して寧ろ距離の相近き者たらざらばならず、而して又撃碎飛散し、而して又遊星を出し、而して又星體の組成を造り、星の系統は範圍漸次狹縮して、最後には皆歸着して一團を成し、其の系統の異にして落々たる者、總て同一の作用運命を経て、大星小星、森列せる群星、遂には皆歸着して、至大にして絶大なる一箇の星塊を空中に留むるに至る、是れ全く活動力を失ひて、光なく、熱なく、極めて冷々たる群星の骸骨のみと。且つ又曰ふ、其の骸骨たる物體も、亦實に勢力の顯はるゝに過ぎ

ざるのみ、猶ほ風の水を掬めて、波紋を生ずるが如し、風にして去らば、則ち沫々として一碧水ならざらんや、物質の本素は流動體の狀にして、或る勢力の加はりたる者とするも、或は勢力が特殊の狀態を以て發作し、而して茲に物質世界を現出せりとするも、且に勢力に應じて其の形を造せる者、馬ぞ勢力に應じて其の形體を失はざらんや、勢力は永遠無爲に非ず、群星の骸骨、光なく、熱なく、毫末も活動力なきの一大塊も、亦漸次に其の形を失ひ、全然物を留めざるに至るべし、是に至りて空の空、虚の虚也。而して是れ遂に疑ふべしとせんや。宇宙は固より絶大なり、其の消滅の期亦固より人類の能く測知する所にあらざるなり、然れども畢竟長短は比較上の音辭たるに過ぎず、蟪蛄蚋蚋遊りして人の命數を見れば、呱呱として生れ、溘然として呼吸絶つの間、亦實に測知すべき所にあらざるなり、乃ち測知すべからざるを以てや、以て人生の朝露の如くならざるを争はんや、人類よりして宇宙を見れば、其の消滅の期眞は天永く地久しきを感じず者あらんと雖も、億萬倍の大なる者は、又億々萬年を以てして、永久なりと爲さざるなり、今斯の宇宙、固く絶大なる活動力を有する者に於ては、無量劫

の間も太だ短促なりとなす所にあらざらんや。而して其の如何に絶大なる者も、終に頽敗して滅に赴き、萬體軌を同じくして死するに至りては、寔に定數たるを怪むべからざる也。

大凡勢力は皆發出を以とす。而して或は部分の變化を爲し、或は全部の變化を爲す也。今夫れ或物が全く消失し、或物が形を異にして顯はれ來るは常に觀る所、而して宇宙の物體時ありて幾許か形體を變更するは亦疑ふべからざる所なり、其の變更は疑ふべからずと雖も、而も其の勢力を至りては永久に存在して、如何に微少なる勢力も亦無邊に波及するを爭ふべからざる也。人の身體は種々なる勢力を發し、熱と爲りて空間に散ずるあり、電氣と爲りて空間に散ずるあり、而して其の思想を運らすや、腦中の分子亦幾多の變化を來し、たとなく、小

となし、發する所の勢力、皆遠く波及せざる無し、而して人類は實に宇宙に生れて宇宙に死する者たり、其の思想も宇宙と共にする者なれば、人々の思维する所に從ひて起る所の勢力は、何處に相傳へて遂に消滅するの期あるべからざる也。斯の絶大なる宇宙も已に能く活動して心意を有す、其の熱や、電氣や、皆發散して波及するのみならず、其の思想に伴ふの勢

力も亦必ず波及する所なくんばあらず。想ふに精氣は極めて微細なる者、人の能く感觸したる所にあらざるも、而も實に空間に充足しつゝあり、今又電氣の如く、磁氣の如きは、一種の猛力を顯はしながら、物質に滲入し易からず、彼の引力の如きも、一箇の物體ありて隔離せる遠き間に其の力を及ぼすと云ふが如きは死んど信すべからず、必ずや或物ありて相連契し、互に力を波及する者となさざるべからず、而して此の若くに次第に極を究めば、物體漸次微細と爲りて、通常謂ふ所の物體の性質を全く具備せざる者あるに及び、遂に恍乎物質界を出でて空間を要せざるやに考へらるゝあるに至らんとす、而して此に至りて寔く觀念を絶ち、之を追究するに、意識を離れて死に至らざれば、達すべからざるの狀あり。物の滅するや其の窮極する所、皆靈妙の境に入りて思議すべからず、思想に供ふべき腦の勢力の如きも亦其の傳はる所洵に斯の境に在らんか、而して其の處は遂に此の世界に在りて知るべからざり。處なりと雖も、此の勢力の動作が及ぶ所を追究すれば、必ず其の物の儼存すべきを必須とする也。抑も手觸れ、目視る所の者、實に其の表觀のみ、實際の活動勢力、寧ろ手觸るべから

ず、目觀るべからざるの境に在りとす、我目前に森々たる萬象皆實に固結の爲めに存在し得るのみにしこ、其の力にして一旦消失せば、碎けて微塵となり、散じて行く所を知るべからざる也。氷跳て瀧と爲り、流れて川と爲り、注いで海となる、而して其の之をして然らしむるの勢力は遂に見るべからざるにあらざや。億萬の群星輝いて天に在り、回轉して暫くも息まず、而して之をして然らしむるの勢力は遂に見るべからざるにあらざや。之を究め、之を極めば、物體の形質漸く形質を絶ち、歩々意識の及ぶべからざる境に抵らんとす、是を以てライブニッツは物體の空間に在りて見ゆる間は、思想の發達せざる照濠にして、此の若き者は實に存せずと曰へり、是れ或る點に於ては、争ふべからざる事とす。是を以てテートの徒は不可見世界を辨

じ、不可見世界に種々の段界ありて、次第に微妙なる境界を成し、層々として相窺ると曰へり。種々の段階ありと定むるは固より空想に過ぎずとするも、推理の上幾許か此の如き方向に進まざるべからざる者ある也。人の此の世に於て知る所極めて鮮し、而して遂に知るべからざる者あり、其の知る所の者、唯偉かに道理上此の如くならざるべからずと云ふ境に留まる耳、我

れば、必ず其の物の儼存すべきを必須とする也。抑も手觸れ、目視る所の者、實に其の表觀のみ、實際の活動勢力、寧ろ手觸るべから

れ、我目前に森々たる萬象皆實に固結の爲めに存在し得るのみにしこ、其の力にして一旦消失せば、碎けて微塵となり、散じて行く所を知るべからざる也。氷跳て瀧と爲り、流れて川と爲り、注いで海となる、而して其の之をして然らしむるの勢力は遂に見るべからざるにあらざや。億萬の群星輝いて天に在り、回轉して暫くも息まず、而して之をして然らしむるの勢力は遂に見るべからざるにあらざや。之を究め、之を極めば、物體の形質漸く形質を絶ち、歩々意識の及ぶべからざる境に抵らんとす、是を以てライブニッツは物體の空間に在りて見ゆる間は、思想の發達せざる照濠にして、此の若き者は實に存せずと曰へり、是れ或る點に於ては、争ふべからざる事とす。是を以てテートの徒は不可見世界を辨

じ、不可見世界に種々の段界ありて、次第に微妙なる境界を成し、層々として相窺ると曰へり。種々の段階ありと定むるは固より空想に過ぎずとするも、推理の上幾許か此の如き方向に進まざるべからざる者ある也。人の此の世に於て知る所極めて鮮し、而して遂に知るべからざる者あり、其の知る所の者、唯偉かに道理上此の如くならざるべからずと云ふ境に留まる耳、我

れ、我目前に森々たる萬象皆實に固結の爲めに存在し得るのみにしこ、其の力にして一旦消失せば、碎けて微塵となり、散じて行く所を知るべからざる也。氷跳て瀧と爲り、流れて川と爲り、注いで海となる、而して其の之をして然らしむるの勢力は遂に見るべからざるにあらざや。億萬の群星輝いて天に在り、回轉して暫くも息まず、而して之をして然らしむるの勢力は遂に見るべからざるにあらざや。之を究め、之を極めば、物體の形質漸く形質を絶ち、歩々意識の及ぶべからざる境に抵らんとす、是を以てライブニッツは物體の空間に在りて見ゆる間は、思想の發達せざる照濠にして、此の若き者は實に存せずと曰へり、是れ或る點に於ては、争ふべからざる事とす。是を以てテートの徒は不可見世界を辨

が観る所は、我が観ざる所の明瞭なるにあらざらんば明瞭なるべからず、而して我が観ざる處は遂に明瞭なることを得るに由なし。夫れ若くは死に至りて希くば事體の完成を得ん歟。

歸結

觀此の童、未だ嘗て虎を見ざりし者、虎の何如の物たるを問ふあれば、答ふるに其の狗に類して、而して更に大に且つ猶猛なるを以てせん、凡そ未だ識らざる所を問ふ者あれば、概ね類推を以て之を答す。夫れ我が知る所、其れ亦多方にして且つ等し、其の最も接近せるを夢幻とし、身體とす、而して此を岸として、推して其の餘に及ぶ。境、覺醒の時より確實なるは莫し、其の性質を究むれば、亦夢幻と以て異なること無きなり、宇宙の大無邊、包む所萬象麗雜、方物すべからず、其の組織を釋ぬれば、亦身體と以て擇ぶなき也、覺醒の觀念たる、宇宙の體形たる、斯を以て之を推せば、斯の如くにして方に其の斐靡を得、而して其の直接に覺知する所と少差なきを見る矣。且つ夫れ所謂宇宙、止是れ宇宙といふ觀念のみ、山や、河や、草木や、禽獸や、殊に山といひ、河といひ、草木といひ、禽獸といふ觀念に外ならず、在る

所の萬象云爲、若し觀念に非ずとせば、則ち復其の何たるを謂ふべからず。何だかの所謂觀念、其の活動の由て出づる處所を探究するに、必らず斷斷を指さす、斷斷なる者は、亦身體の一部部なり、今若し斷斷を破壊したらんか、所謂觀念、知らず何に由て有ることを得ん、心靈の存没は、形體の生死に超絶すと云ふ者ありと雖も、斷斷は斷絶するもの所處は、竟に其の知覺あるを信すべからざるは、理固に然りと爲す。覺醒の觀念や、宇宙の體形や、其の存在を究むるに、此の如く便ち了すと云ふ、然り而して更に問ふことを要する者あり、曰く其の存在や、何如に存在するか。虎の狗に類して而して大且つ猶猛なりと云ふも、其の平居動止、獸を餌し由に棲む等、諸特異の性質、繼いで亦釋ぬる所とならざるを得ず、是は則ち虎の何如に生活するかの疑問とする也。

何如に存在するか、此の問題の究極すべからざるや、屋間の海水を泄して、萬古にして止まらざるが如く、事とする所なければ、則ち已む、苟くも事とする所あれば、以て之を類屬して、何如にの一語に括すべからざるなし、且つ其の個々の形に局して、繁瑣屑々たる末事を念き、其の明白較著なる者を擧げん。蓋し存在

に關する思想、古よりして以て大に相異なるなき也、老子の有無相生じ、難易相成し、長短相較べ、高下相傾け、音聲相和し、前後相隨ふを説くや、是れ固より物の相對に象するを言ふこと尙し、波斯火教の猶未だ波羅摩教と岐分せざるや、早く已に物の有無善惡、相對して存在するの說あり、其の後漸く進んで論理益々精巧なり、近時三斷法の理、大に掘明せられしより、云ふ物必らず兩々相反するあり、相給んで而して一となる、而して之に反する者又生ず、而して又相給び、又相反する者起る、一體一合、轉化して而して開展すと、スペンサルの如き亦云ふ、意識上の事、關係に因て成らざることなし、乃ち生命の若き、亦内部外部の關係を調和するを之れ謂ふのみと、今日の知識、物象の存在を以て、必らず對待の狀に於てすと云ふは、確乎として到かすべからざるに似たり。夫れ夢幻と覺醒とは、均しく觀念なり、身體と宇宙とは、均しく物體の機關と爲せる也、而して心の物と、關係實に此に存在す。心は物に非ず、物は心に非ず、而も心の心たる、其の際限を推して之を究むれば、漸くにして物と相近づく、心とは何ぞや、心といふ活動あるのみ、而して活動の由る所、一に斷斷の作用に之れ

歸せざるべからざるに至る。物の物たる、其の
 際限を推して之を究むれば、漸くにして心と
 相近づく、物とは何ぞや、物といふ觀念のみ、
 觀念の由る所、一に心意の作用に之れ歸せざ
 るべからざるに至る。願ふに其の意識に現はる
 るや、以て純一なることを得べからず、純一
 なければ以て名くべからず、以て意識あることを
 得べからず。物の心と、以て折つて二と爲す
 べからずと雖も、以て物と謂ふや、則ち心に非
 ず、以て心と謂ふや、則ち物に非ず、而して其
 の現はるゝ所性質、全然相反す、其の相反す
 る所以は、即ち存在の成る所以也。其の心に
 在りては、勉めて物と相關せんことを欲し、其
 の物に在りては、勉めて心と相關せんことを
 欲す、心の作用に在りて、外物の刺激の爲め
 直ちに思念を起すことなく、獨立自恣にして、
 羈縻せらるゝ所なきを夢と爲す、而して其の
 支離漫漶、據を取るに足らざる、此を尤も甚
 しとす、其の物に接すること益々密にして、而
 して知覺する所益々明確なり、乃ち覺醒の時
 に在て、其の憑空結撰、周を極め緻を極むと
 雖も、其の一たび感覺に現はるゝ所と相衝突
 するや、かの極周極緻の結撰、脆くも一卑近
 感覺の鋒に敗亡して、自ら以て誤となさざる

も、亦再考を要するを免れず、目の即いて視る
 所、膚の即いて觸るゝ所、其の知覺や覺明
 較著、尙ふるなし、微に入り細に入り、瞑目暗
 想儼かに髮髻を得る者と、同日にして語るべか
 らず、則ち是れ心の作用、物に接するに須つ
 て、而して益々彰明を加ふるを見る。而して物
 の表象、赤心に接すること愈々密なれば、其
 の確實益々加ふ、重んずべき、孰れか身體に若
 くあらん、宇宙萬有、其の大身體に倍し、罷し、
 而して億萬無量なる者何ぞ限らん、而も以
 て防たる六尺の軀に易ふべからず、而して其の
 日撃するは、心想するよりも確に、其の手觸る
 るは、日撃するよりも確なり、且つ物の性質、
 其の内に蘊す、外よりして之を視るべからず、
 而して能く其の臆測揣摩を逞しうして、必ずし
 も中らざるべからざるは、かの我が意志の身體
 に活動するに因り、類を以て之を推し、斯に勢
 力なる者あり、物因て以て運動すと謂ふのみ、
 則ち是れ物の表象、心と接すること最も近き
 を、最も明確なりと爲す也。物より之を視る彼
 が如く、心より之を視る此の如く、儼然として
 分あるが如く然り、是れ異しむに足らず、蓋し
 究竟の模様を求むれば、凡そ事とする所ある、
 斯に相反の關係を見ざるはなし、知識は相反

より生じ、存在は相對によりて成る、而形上、
 形而下、此の律に入らざるなければ、則ち亦
 竟に此の相反相對に反對する所以の者無きを得
 ず、是れ知るべからざる所なり、此を名けて死
 と曰ふ、蓋し死に至りて、而して全體の關係圓
 成して遺す無し矣。
 願ふに反對の象たる、亦一端に非ず、白と云ふ
 者あるか之に反するを黒となすか、而も青や、
 黄や、赤や、亦以て白に反する者と爲すべから
 ざる無し、人の知識や已に一端に非ざれば、其
 の反對の因より必らず一端なるを得ざるや、其
 の果して以て意識なきか、將意識の上へ超脱す
 る者あるか、抑も別に一種の作用あるか、皆未
 だ知るべからざるなり。現世の有る所事情萬
 變、人を誘うて知を覓むるの念を起さしめざる
 莫し、其の究竟は皆現世に求むべからざれば、
 則ち其の現はるゝや死後に於てせざるを得ず、
 自由なり、平等なり、善、美、眞なり、其の絶
 對、不羈を求むれば、皆後して死後に入る、則ち
 所謂死後の境、生に於て未だ満たざる萬望望
 を荷うて而して來る者、それをして今の生に於
 けるが如く、相反相對に局らるゝの意識なる者
 あらざらしむる、豈此に類して而して更に超
 出する者あらずとすることを得んや。夢幻と覺

醒と均しく矛盾す、特に夢幻に在りて其の矛盾
激急なるを見る、且つ生し、且つ滅し、躍起す
る現象、節々にして、盡く矛盾す、夫の覺醒の
時に在りては、矛盾稍く緩漫なりとするのみ、
頗る理路の纏ゆべきありて、脈絡一貫、原委
瞭然なるを覺ゆ、是れ夢幻の及ぶ能はざる所、
而して夢幻よりも人に明瞭なりとする所以也、
乃ち覺醒の猶ほ矛盾に免れず、猶ほ曖昧に醒せ
ざるを懼らざるとし、而して更に超越して確實の
基址を求めんとすることあり、而して一旦其の
境に入るるとせんか、生の境に在りて、苦思百方、
而して遂に觀想すべからざる絶対的存在、斯に
遽然として理會され、而して一死の經驗、永く
大夢に煩悶せし既往を稽むなきを知らんや。夫
の境に在りて、固より以て意識ありて、好惡の
情、差別の念、内に圓潤する者あること、今の
生の如しと謂ふことを得ず、而も又安んぞかの
意識なければ、則ち理會と類を同じうするの作
用も亦之なしと斷するを得んや、安んぞ死後の
理會、意識に籍らずして、而して意識よりも超
越し、絶対的存在、洞然として明白ならざるを
知らんや。但だ夫れ夢に方りて、其の夢たるを
知らざれば、生に方りて生を躡むるの感たるを
知らず、而して死の境や、死に至らざれば、竟

に全く理會すべからず、死か死か、我をして一
に漂渺の際に望迷はしむるか。
既に超越せる明瞭の境を以て、生の後にありと
爲し、而して藹々然として君か牧かとするを突
ふ、則ち死を求むるの退急なる、跛躄の腹に投
じ、猛獣の中に火化し、溝瀆に經れて、待生淨
土を欲する者蓋すべしと爲すか。意ふに、かの
夢幻なる者、亦見ざるを欲して、而して見ざるを
得べき者にあらず、其の將に寐ねんことを叱
惡夢の神を驚ふを患ひて、之を避けんことを叱
めて百方すとも、其の魂交はるや、夢の果し
て好果して惡、我より之を爲すこと能はず。乃
ち亦覺醒の時、心の作用、自然に夢幻なる者の存
在を須す所以の者あり、好夢惡夢、夢幻の中、
自ら哀歡あり、而して其の覺めて而して形開
くや、爽然として快適なるを覺ゆる者、豈特に
其の身の疲勞より癒えたるが故に爾云はんや、
亦尋常覺醒の時曾て想はざるの境に入り、其の
心神を清新にするもの、與りて方あらずんばあ
らず、猶ほ之れ塵務拵々、心悶え神煩はざる、の
時、暫く禪定に入りて休息を取るが如き也。然
るを況んや、覺醒の明確乃ち覺かに夢幻に超ゆ
るとするを以て、而して其の生の前と後との間
に介まりて、其の永遠の境地に暫く休息を與ふ

るとする所以の者、是れ豈更に大なる條理の存
するありて然らずとするを得んや、五十、七十、
大夢の中に逍遙し、靈享快樂、固より喜んで之
を享くる可なり、患難苦痛、又讒んで之に處せ
ざるべからず、蓋し測るべからざるの係累、免
るべからざる者ありて、而して用ゐらるゝ所あ
るを信せば、蟲臂眞正、將何をか辭すべけん、此
の生に在りて、生の能、爲す所を盡さば、其の
爲すや徒爲に非ずして、其れ必らず將に大に玄
深の間待つことあらんとする者歟。
億萬の星宿、燦として天に滿つ、而して見る
べからざるの數、更に無量と爲す、中には或
は人類の棲息、我が地球と相類する者あらん、
或は其の境遇の人類に順適すること、更に之
に過ぐる者あらん、或は棲む所生類、覺かに
人類に優る者あらん、而も我は則ち生れて此の
地球に在り、地球載する所人類、其の始めより
生々死々する者を算せば、其の數や殆んど限る
べからず、徒らに其の名を聞いて其の人を識ら
ざる者幾許ぞ、而して其の名を併せて之を聞知
せざる者、量るべからざるなり、今の生息する
所十數億萬、我の交際遊處する所幾許ぞ、途
を行いて而して往來する者を見る、我は一日に
して萬千に及ぶ、彼れ皆一瞥見して而して別る

るや、終身復會期なき者なり、同じく校舎に在りて、日夕親炙する者、一旦業卒へて而して校門を出づ、其の半は則ち竟に生涯の別と爲る、然らば則ち我の終始交際遊處するを得る者、千百歳の上下に、尙友するを得る者、是れ豈別に深故ありて然るにあしざらんや、夢幻の時に方り、見る所の人衆し、或は特に名を史書に知る者、或は現に面識する者、其の我と相關するや、大に覺醒の時に異なりと雖も、彼れ亦必らず我と多少の關係ある者なり、則ち覺醒の時に方りて、終始交際遊處し、若くは相尙友する者、彼れの我と、豈此に相關する所以の深故なしといふを得んや。彼 突 歡 喜 樂、僅に五十七の一生に終ると爲し、倒行逆施、一己の利欲に徇へて、莘々として唯人を欺き人を虐し、以て惡報なきを恃む者、其れ或は一旦生の後に之くや、かの夢幻の中、其の愛人を虐殺すと見て、覺めて而して冷汗背に洩き者に似ること無しとせんや。生の後、其の處る所固より必らず今世の若しと謂ふことを得ず、而も今の生に在りて、所謂道理なる者の究竟に接すること莫しと謂ふ、人固より衷心此の如く偏執なる能はず矣。

事理を究極して絕對の境に至る、意識の及ば

ざる所、沖淡希夷、端倪すべからず、而も其の知るべからざるを以て、直ちに斷じて此の境あるべからずと爲すは僭す。尋常所謂意識の世界、全く此に終らしむとも、意識の外、豈別に存する者なからんや。所謂存在といふの語をして、意識あるが故に之れ有り、意識なき、斯に存在あるを得ずとし、而して求むべきは則ち此の生に在りて之を求めざるべからずとせんか、仍ほ是れ求むる所、以て此の生に於て充足すべからず、求めらるゝの事、亦此の生に終るべからず、乃ち絕對の若き、已に求めて此の生に充足して終るを得ざれば、此の生に絕對の事理を求めて得べからずとして、敢て其の存在を撥無し、放棄して顧みざるべきあらんや。夢幻の想ふ所、覺醒に在りて相關する所なしと謂ふべからざれば、鑑みて以て覺醒の求むる所、更に覺醒より超越するの境に相關する者あるを知らば、其れ亦幾し。且つ夫の宇宙萬象、塵雜多端なりと雖も、是れ既に頑冥不靈にして生機なきの物體にあらず、其の機關あり、心意あるは、身體と以て異なるなし、而して彼の身體なる者は、宇宙の組織に一微點塵を形づくること、猶ほ其の社會の組織に一員たるがごとく、以て宇宙をして其の自ら絶大の動物たるを成さ

しむ。天文学は此の大動物の體形機關を觀る者なり、物理学は此の大動物の官能活動を察する者なり、化学は此の大動物の成分を明かにする者なり、此等の學、皆冷然として頑冥無生、潰然たる死物體に臨む者にあらずして、而して實に活機濼々、渾體變動する、大の極、壽の極なる人物の生活態狀を究明する者たり、此を以て更に非常大なる生物学に屬すべき也、更に非常人なる社會學に屬すべき也、又寧ろ更に超越せる倫理學に屬すべき也。所有萬象、其の皆生あり、心靈あるを知るや、仰いで天の蒼々たる、日月星辰の此に麗くを觀、木石非情の物を操持轉動す、冷然として曾て情之と相感することあらずとするも、其の實は徒らに此の如き而已にあらずして、適に非常至靈の活氣を轉發し、大生理を経營する、大動物の作用を見、而して日々に其の靈活の動作と相接するとする所以を明察する、之を名けて哲學と謂ふ。哲學なる者は、我の知る所を擧げて、我と均しき心靈あるの體となし、以て其の知を純括して遺すなからしむる所以、而して其の知の域を擴むる所、かの諸々學科の愈々發達するや、哲學は則ち資て而して益々明かなり矣。

宇宙

題言

宇宙と名づくる此の一書は、實の名に副はずとも、世に人の多き、全く讀む者なしと限らず。或は初め數頁を讀み、没趣味として捨て置き、或は三四ヶ處を抜き、卑近なり驚くべき迷誤なりとして抛つべし。唯幾人かは全巻を通讀するの忍耐力を具へんが、文字よりも意義を採り、部分の斷定よりも全體の理路を辿り、直ちに現實なる宇宙に融合せんとするの有るべきや否や。絶えて無くして稀に有り、誰かに一人は有り。而も其の一人も之を能くするに非ず、作に能くせんと思むるのみ。一人とは誰ぞ、斯く言ふ者自らの事。

序

無限の連続の一部として無限の連続を辿ひ、漸く此の結果を得る。範圍の狭き、内

容の乏しき、有るか無きかに微なる一點螢光の千丈萬丈黒闇なる深谷に於けるより遙に微なるも、この處、この時、この我が意識に宇宙の是の如く現れ來れるを明言せざる能はず。力の足らずして到達する所の豫め確定せしかど、若し一年事に専らならんか、之に優ること遠きを得んが、既に境遇の許さず、許すも移るを肯んぜず、茲に如く斯くして安んずるに決意す。蕪雜は極めて蕪雜にせよ、古人の一個視せし太陽と同列なるを約一億まで計へ上ぐる當代知識の擴充に與り、相伴ひて何事にか一二歩を進む。來るべき十年百年の後を察してこそ今の淺薄をも數息すれ、過ぎ去りし千年の前を踏ふれば、寧ろ今の大に満足すべきを覺ゆ。過去の人は現在の進歩を促し、者、現在の人は過去の儘に止らず、過去の勞を講ずると同時に、現在に爲すべきを爲し、將來の進歩を促すべき順序に

して、斯く貧しき記録も現に生存する者の當に爲すべき事業も考へしに出づ。口を開けば愚を知らるれど、愚なる者が愚を掩へると能く何をかせん。獅皮を被りて沈黙し、以て衆を愚くは、誠鳴して相應の荷を負ふに執れど。富ます且つ貴からずして一頃の田に値せざる事に従ふは、愚之に過ぎたる無きも、智者の滔々唯富を求め唯貴を求め、積みて愈々積まんとし、昇りて愈々昇らんとし、是れ以外に少しの思ふ所あらず、少しの爲す所あざざるを奈何せん。愚者なかりせば、誰か富貴に縁なき事を試むべき。尺も短き所あり、寸も長き所あり、愚者の眼よりは、愚者も智者も各々一得一失、愚の及ぶ可らざる猶ほ智の及ぶ可らざるが如し。愚も斯く心得るに至り、遂に救ふべからざるか、救はれざるを厭はずして眞に愚の愚たるを見るべきか。愚者の甚しきは世間に多からず、其の多からずして到る處大智中智小智の智を磨きつゝあるを慶賀すると共に、時に一層愚なる者の出でんことを望む。

明治四十一年十月十一日東京に於て

凡 例

一。校書は毎月二章宛雑誌に掲載し約二年半に完結すべき豫定を以て起稿せし者、略ぼ豫定通りなるを得しかど、後より考ふれば、期間を五年とし總てを倍大にする方宜かりしなり。されど初め自身及び他人の經驗に徴し、規模を大にして中途に廢するの已むを得ざるに至らんを恐れ、成るべく内輪に見積りて必成を期しにき。必成を期し必成せしと雖も、結果は斯く不完全にして、顧みて憾みなきを得ず。而も今更變改するも容易にあらず、事は多くして是は流水の如く去る、寧ろ餘力を他に費すに若かず。

一。本書は雑誌に分載せしが爲め、後集めて訂正せしも、尙ほ幾許か分載の跡の遺れり。隨つて純然たる著書と稍く形を異にするあるが、元形の上にして、特に意を害する無し。

一。本書は一卷として獨立するも、若しシリーズにせば、之に次ぐに人類に關するを以てし、更に次ぐに特殊の民族に關するを以てし、大にして粗なるより小にして

て精なるに及ぶべき順序なり。而も必ず之を遂行すと曰はず、事情の許さば或は少しく其の順序を履むことも有らんと曰ふのみ。

一。本書は、各篇の接續、各章の接續、時に緊密時に緩慢なるが如きも、要するに一定の順序を追ひ、前後の牽すべからざる者あり。されど尾に至りて首に還り、聊か環の端なき狀あれば、必しも第一篇第一章より始むべしと定めず、何篇何章よりするも甚しき差支なし、唯全部を通觀しさせば可。

一。本書は能く限り平易にせんとし、餘儀なく術語をいへるゝにも、慣用のものを用ひ、濫に自ら造らず、又譯もせざれど、尙ほ暗誦を免れざるは、一は注意の足らざるに因り、一は冗蔓を避けんとせるに因る。説明に益すべき者も、煩くして割愛したるの勢からず。而も斯くて割愛したるも或る部分の専門家に有らざるもがなに見ゆるあらん、中庸を得るの難きは今に始まらず。

一。本書を紙質製本を良くし、購讀に便ならざる嫌ひあり。普及の趣旨に反する

第一篇 見地

第一章 回顧

第一節 顧みるに、驚きは發明の母なりとは、多少の理を含む。同様に身や思ひ連綿に於て驚し格言と爲れる。或る出来事に驚き、驚きて之を觀、觀て之を考ふるに、世間を通じ概ね然り。人智の進まざりし時、驚くべきに驚かずして、驚くべからざるに驚きしの多く、其の觀察や幼稚、其の推理や幼稚、知識として殆んど混沌たり未成形たりと謂ひて可。年代の推し移るにつれ、經驗漸く積み果なり、觀察推論並び進み、動もすれば分業に馳せ、觀察を主とせると推理

を主とする相撞着するを免れず。(「開明の推理も其
「實證も其後」)「雨々烈しく争ふ間、百聞は一
見に如かずといひ、論より證據といふの打ち勝
ち、實事に據る觀察の勢を増して空想に據る
推理の跡を消むるを見る。(「實證も其後」)「さ
れど觀察の推理を制する形あるは、推理を主と
する者の空想的に造り上げし所に拘泥し、之を
變改するを得ざるが爲にして、推理其事は姑く
も廢すべきに非ず。迷妄の伴ひし斷案が確實な
る證明の下に碎くる後、鍊せられたる推理は
精細なる觀察と相協ひ相助けて與に俱に大に
伸ぶるを得、科學の成立は是より微すべし。

未開人は身外に於て新星彗星の現出、風雨
雷電の變化に驚き、身内に於て疾病の異狀な
る、醫藥の有効なるに驚き、果を觀て因を考
ふ。隨て星學及び化學は科學中最も歴史多き
ものに屬す。

第二節 先づ星學を稽ふるに、天を仰ぎて運
を卜するは太古よりの事、支那にては、日月の
蝕せる、天子以て天の戒むる所と爲し、范增の
出でて仕へる、先づ天を觀、孔明の歿せる、將
星陣に際ちぬ。周、太祖の漢に代りしとき、四星
張に聚り、宋、秦社の國を啓きしとき、五星在に
聚れりと傳へられ、祥瑞妖孽勝へて計ふべか

らず。歐洲のアストロロギーは、即ち天象を以
て人事を卜せしもの、天象の事は希臘に於て比
較的善く知られしも、一般に占卜の行はるゝ多
く、中世に及び、學者と不學者とを問はず、地
球は中央に位して動かず、天體は盡く一晝夜
に之を一周し、星辰は皆各々人間の運命を司
ると信じ、裁判的として國及び人に關するを卜
し、自然的として動物及び無生物に關するを卜
する迄に整ひしが、天動説の確められてよ
り、地球果して他の諸星と同じく太陽を運るな
らば、特に此の地球にのみ禍福の來らざるの明
白となり、アストロロギーは爲めに根本的打撃
を被りたり。されど天象にて占ふことは遂に消
滅せず、コペルニクスの不足を補ひ誤謬を正し
しケペレルさへ星の位置と其の下に生れし者と

の關係を打消さんとせざりき。(「時と星の生れし
太陽及び金星は婦女、木星は巨木、土星は天
上星形而上は智慧に現れ、各々運命を司る」と云ふ) 十九
世紀の初め、プファフ星占書を著し、近年メー
エル星占書を出版せり。(「今日にては星占書は
ガリレオ望遠鏡にて查察し、ニュートン數理
にて推斷し、十八世紀の終りにハルシエル鏡筒
を四次にして略ぼ星學を整備し、爾後望遠鏡の
構造愈々巧みを加へ、肉眼にて數千を計るべき
星をは數千萬に達せしめ、尙ほ寫眞を以て其れ

以上に出でしめたり。アストロロギーは字義に
於て星學なるも、空想を逞うし種々の弊害を
伴ひしが爲め、アストロノミーの語を以て此と
區別するの避くべからざるに及べり。アストロ
ノミーは主として觀察に基づき、妄りに想像を
加へず、觀察の精密を致せるは、實に其の勝
を制せる所以なるが、觀察の精密は其の最も
貴ぶ所にせよ、單に觀察のみなるかといはば、
決して然らず、先に空想の爲めに妨げられし推
理の、空想の壞れしに乘じ、觀察と一致して
大に活動せんは、順序の當然なり。ニュート
ンの重力説は一の假定たりき、光素説の比な
らざりしも、假定は則ち假定たりき。ハルシエ
ルの星學説も或る程度まで假定たりき。(「假定
想と明晰に區別し難く、既述の結果を以て判す外」)太陽は更
に大なる太陽を運り、天體は盡く銀河の中に
在りて全形圓なりとか、月球の内部冷却し、
空氣を吸収して一の生物を留めざると同じく、
地球も全く生物を絶つに至るべしとか、太陽に
して地球に被らす光熱を減せば、生物をして
棲息に堪へざらしむべしとか、地球と或る星と
衝突し雙方壊滅すべしとか、地球は遠心力に
依りて太陽と離るゝも、少しづつ太陽に引き附
けられ、遂に投入して星雲の舊に還るべしとか、

個々人々の運命に關する説こそ出でざれば、地球全體の運命に關する説一にして足らず。太陽の黒點は地球の作物に影響し、測りて以て相場を知るべしとか、地球は一の磁石にして、内部の變動外面に現るれば、以て震災を前知すべしとかいふは、實に昔日の占卜を取りて代れるなり。唯前に空想を逞うしむをば、後に緻密なる觀察と緻密なる推理とに依りて之を成し、二者の一致を缺くの場合、其の缺く所以のものを究めずんば已まず。

第三節

次いで化學を稽ふるに、薬品として人の最も欲するは、壽を延ばすと福を得るとに存し、支那にては秦始皇徐福に命じ童を遣り蓬萊に不死の薬を求めしめ、漢武帝人を遣り蓬萊に安期生を尋ねて不死の薬を求めしめ、更に丹沙を化せんことを欲しぬ。丹を煉ること一返して白銀と爲り、二返して黄金と爲るとして、煉丹の事頻りに行はれたり。歐洲にて、羅馬帝カリギネラ華黄より黄金を製するの試驗場を設け、後其の盛んに行はるゝを見しが、不死の薬を製することも又行はる。ローガー・ペーコンは碩學として馳はれし者なるに、劣等の金屬を黄金に化し得べきを信じ、又不死の薬を作るべきを信じ、「王水」王水とは濃硫酸と濃硝酸の混合液に溶かし、黄金は不

死の薬なりといふゲビルの説を採用し、法皇ニコライ四世に説りけらく、嘗て一老人に會せり、此の老人シシリーに耕し、時、黄金の瓶に黄金の液體あるを視、其の靈なるべきを想ひて飲みしに、爾來大に強健と爲り、全く少壯に復したりと。ペーコン自らも亦屢々黄金水を服用せり。ヴァレンチンは總ての藥物皆鹽と硫黄と水銀とを混じ、之を醇化すれば金銀と爲るといひしが、此に和せる者の言に曰ふ、此の三つは各々地と氣と水とに相當す、而して更に一物の命名されざるあり、假りにアルカヘストとす、萬病の薬なりと（「スラス」の說）

アルケミーを學びし者は後二派に分れ、一派は新たる化合物を發見し若くは之を分析するに努め、以てケミストリーの進歩を促せり。他の一派は舊に依り靈薬を煉り黄金を製するを旨とし、其の用語も亦亦精、百合、綠龍等の奇異なるを呼び、七種の薬は七座の星に當り、七位の天使に當ると爲し、アルカヘストの存在を唱へ、不死の薬の存在を唱へ、老人を壯年に復らしめ得べきを唱へたり。初めは二派混同し、ベツヘル、スタールの如き、ケミストリーの始祖なれど、アルケミーの幾分を容れて不可思議を口にせり。されど分析及び化合の試驗益々進を

加へ、チオフレー、ベルハーベ、ハーレス、ブランク、マルグラーフ、カベンジツシュ等、皆各々新發明を爲し、ラボアシエに至りて明かにケミストリーを一の科學と爲しむが、アルケミーに類せる事は急に消滅せず、ギルタンネルの論せるやう、十九世紀に於て必ず劣等の金屬を黄金に化するを得べく、爾く黄金を製造するよりして一切の庖厨器具は金製又は銀製となり、鋼鐵鉛の銹毒なきが爲め、壽命も隨て延長すべしと。不死の薬を作るの可能なるを明言せざりしも、多少此に似るものを製し得べしとせり。斯かる學者の少からざりしに拘らず、實驗に専らなりし人々は更に功を奏し、世にケミストリーありて、アルケミーなきことと爲れり。

アルケミー既に消滅してケミストリー全勝を収めたるも、而も是れ不死の薬を製し黄金を造り得るといふ妄想の壞れしに止まり、假定は曾て衰へず、却て益々盛況を呈し來れり。ダルトンの原子説は純然たる假定なるも、能く實驗に應じて便益を興ふる多し。後原子の性質は電子の分量にて變ずるの漸く知らるゝに至りしが、電子の分量にて原子の變ずべくんば、一の元素を他の元素に變じ、劣等の金屬を黄金に化するの不可能事ならざるを斷言すべし、但だ其

の方法の未だ知らざるのみ。(一九〇六年八月、ウヰ
ロロギー及びアルケミーの如く顯著なる實驗の
伴はざりしが爲めに今日まで維持せられたるも
の、今日此に従事しつゝあるは、前世紀の初めブ
ラフのアストロロギーに於ける、ギルダンネ
ルのアルケミーに於けると、五十歩百歩の差、
漸次過去に葬らるべきに非ずや。其の思考を研
磨せる功績は永く没すべからざれど、今の知識
に與るの多からざるの掩ふべくも無し。

第二章 位置

第五節 今の知識は今の科学及び準科学の
中に存し、此等の中に存せざるは未だ知識と稱
し易からず。(科学に程度あり。程度は無し。科学と準科学とを
科學に合はさず。) 諸科学に於て今日知り得る限り
を知るべしとするが、從來科学は個々別々に存
立し、相互の關聯明白を缺き、隨て之を體系
的に採列すること、夙に必要を感ぜられ、又屢々
試みられたり。千八百二十八年、アルノツトは
數學を以て科學の準備とし、科學として物理
學、化學、生理學、及び心學(アルノツトの心學は社
會學を以てす。)を擧げにき。後數年、コムトは單純より複雑に
及ぶべしとし、第一數學、第二星學、第三物理
學、第四化學、第五生物學、第六社會學に大別

し、次いでスペンサーは抽象的より具象的に
及ぶべしとし、抽象的として論理學及び數學、
具象的として星學、地質學、生物學、心理學、
社會學等を擧げ、六十五年ミルは前二者を評
し其の異同を辯ぜしが、後體系に就て論ぜる者
なきに非ざれど、寧ろ寥々たる姿にして、四十
年間特に新説とすべき無く、總じて大同小異な
るのみ。(ミルは進化論を論じ、體及)他の方面に新説の
續々出でしに比例し、此の方面の殆んど中絶の
觀あるは、近く四十年間の進歩の各科學特殊の
部分に著しく、大體の上に徴々たればなり。
前世紀の前半に、生物學、心理學、社會學等、
種々新名稱の成りたれど、後半には或る部分に
長足の進歩を遂げつゝ、新科學として新組織の
立てられたる、極めて少し。(種々科學の少からざるを
立てられど、進化學の位置に在り。)

第六節 現實なる諸科學の體系は到底理想の 如くなるを得ず。凡そ科學は科學者自らの位置 の爲め、即ち一は其の時代、一は其の居る處、 言ひ換ふれば時間の關係と空間の關係とにて 制限せらる。孰れの科學も論理的に考ふるが儘 に成立たず、各々時代の事情の伴ふあり。或 る必要の下に若干人の究察し、其の究察せし成

果の更に他の人々に依りて改められ補はれて漸く體を備ふるもの、當初人を促して究察せしめし必要は、論理的順序に於てすることあり、其の人の性癖よりすることあり、或は社會の缺乏を去さんが爲めなることあり、人生の歴史が一部分論理的にして一部分偶然と見ゆる如く、

科學の歴史も亦然り、アルノットが科學を分類するの粗なりしは當時の科學の彼が如き状態なりしが故にて、コムトは後に用ひてだけ便利を得たること少からず。されどコムトの星學に於ける觀念は尙ほ頗る單純にして、唯幾何學的及び力學的の法則を發見するに止まり、月及び火星の地形を考へ、若くは太陽の成分を知らんとするは、星霧説と均しく全く取るに足らずとせり。實は此等天體の一部に關する事は、或は望遠鏡にて、或は光線の分析にて既に明かにせられ居りしに、全く棄てて顧みざりしは不注意至極と謂はざるべからざるも、又幾許か

斯かる研究の重きを置かるゝまで進まざりしに由らずとせず。物理學及び化學に於て、原子説の無益なること、光熱の波動説の粉出説と同じく無用なること、引力の如き、電氣の如き、決して理解し得べきに非ざることを言へる、皆過去の甚しき者なれど、時代は未だ彼をして

悟らしめざりしなり。其の謂ゆる超越生物學は後の心理學に當るも、後の心理學と較べて何の言ふを値せざるは、實に神經系に關する事の精しく知られざりしに出づ。少しく後の時代より觀れば、コムトの言ひし所は兒童と雖も其の誤謬を指摘するに難からず。

知識は歳を送うて堆積するもの、現代の知識の過去の知識に優るが如く、將來の知識は現代に優るべし。一層の改善を見ると共に、別改善に改善を加へ二層の改善を見ると更に、別に新たな發明に接し、改善と發明と、愈々出でて愈々多きと同様、知識も一年は一年より充實し擴張するが常なり。時として天才の現はれ、突如として或る視密を看取することあれど、普通の順序として知識の進歩は時代の經過を待つの外なく、如何の事より如何の邊に新事實新理法の發見せられざるを保すべからず。太陽の光線を分析し、地球に存せざる元素あるを確かめ、ヘリウムの名稱を附けしに、後該元素の諸成團に發見せられし如き、豫め計りて能くすべき所ならず。X光線の如き、ラヂウムの如き、紫の待ち設けざる所に出でたり。新

たる器械が軍事上より工夫され、延いて實戰に益を興ふること稀れならず、無線の電信電話

の如きも、海軍にて研究され、他の研究に苦む所を補へり。多少の順序の認むべき無きにあらざるも、如何なる科學の先んじ、如何なる科學の從るゝかは其の時に於てせずんば定まらず。或は對象的なもの先んずるあり、或は具象的なもの先んずるあり、現に成立せる諸科學は皆各々異なる段階に在るも、果して其の孰れか最も進み孰れか最も後るゝやを斷言するに易からず。人類に關せるは最も複雑にして最も進歩せずとの言あるも、さらば數學は完成の境に到達したりといふべきか、物理學、化學は十分の進歩を遂げたりといふべきか、此等の學は猶ほ今後大に爲すべきことあり、或る意味に於て人類に就て知られしよりも知られざる事あるに非ざるか。何學の進むや、何學の進まざるや、將其の何狀にて進止するやは、其の時代に徴すべきのみ。

第七節 時代につれて進歩すべくんば、現在

の各科學が漸次開發後し、理想の體系に近づくべき筈なるが理想の體系とて概ね人類の居る處より宇宙を觀察して立つる所にして、萬有の大小輕重と對應するに非ず。吾人は已れの棲息する此の地球に關して知らざる事甚だ多し、地質學に於て判明せりとするは僅に地皮のみに

して、更に深く内部に入りて如何なるやは明かならず。或る者は地球の内部は頗る重量の重なる物にして金若くは白金なるべしと説く。而して此の洞明を缺ける地球は膨たる蒼海の一粟の幾億分の一にも過ぎざる極微物なりとせば、暮夜天窓に明滅せる無数の星に就きて抑々如何にして之を知悉すべきか、知り得たるは運行の類に過ぎず、光線の分析にて星の成分を知り得べきにせよ、知り得ざるは幾何なりとする。(「第九百九十四頁」)

太陽の成分は略ぼ知られたれど、其の面上に發現せる火焰の暴風は想像だも及ばざる程にて、燃えたる水素の一秒間数十里の速力を以て十萬里の高きに昇降する、日蝕皆既の際、コロナの瞬間に現滅する、考ふれば考ふるほど愈々驚くに非へたり。此と較ぶれば我が地球に於ける氣象學は兎戯に等し、今の氣象學を一の科學とせば、太陽の面上に現はるゝ火焰の流動のみにて、優に一の科學とするに足り、其の黒點全部は勿論の事、黒點の一部分つつにても、各一の科學とするに足り、之を外にして一の科學と爲すべきもの擧げて計へ難く、其の我が地球に百萬倍せるを積ぶる、たとひ容量の大なる割合に研究すべき無くとも、其の多きこと推して知るべし。而も地球の百萬倍にして

研究すべき事の多き此の太陽は一の星たるに過ぎず、夫の星羅せるは大抵之と同じき太陽若くは之より遙に大なる太陽にして、太陽系なる者は一層大なる太陽を運ること恰も我が地球の月と共に太陽を運るが如し。地球の太陽に對し、太陽の一層大なる太陽に對すると同一事の他に言はるゝ、其の幾種なるかは得て計ふべからず。限りなく多き中に我が地球に對て更に幾倍大に、幾倍複雑に、隨て棲息せる生物の幾倍進歩せるものなしとせず。(「第九百九十四頁」)

假りに科學の體系は單純より複雑に入り若くは抽象より具象に入るとなし、大別して物理學、生物學、社會學を擧ぐるも、皆我が居る處よりして言ふに止まり、決して宇宙の體系に對應する者にあらず。(「第九百九十四頁」)

宇宙の體系に對應するには物理學に地球に見えざる多くの現象を加へ、生物學に地球に見えざる多くの生物を加へ、社會學に地球に見えざる多くの社會を加ふるを要す。されど此の如きは果して爲し得べきの事たるか、我が地球の太陽を運り、太陽の宇宙を運行する間、位置の轉ずるに應じ、良好なる器械にて觀測せば未だ知られざりし種々なる事物の判明し、密に火焰を以て蔽はるゝ星の組織を知るのみならず、之を圍繞せる遊星中

に生物の棲息するを知り、其の間化の程度を知り、又光線以外或る不思議なる方法に依りて彼等と思想を交換するに至らざるを斷言すべからざるも、其の幾世代之後なるとは淡として知られず。(「第九百九十四頁」)

科學は時代と共に進むも、科學の體系と宇宙の體系と相對應するの日はあるを期すべからず、絶對的に不可能ならずして、要するに時間の問題なりとするも、千年萬年にて此に到らじ。ニエートンは渺茫たる真理の海濱に二三の小石を拾ふが如き感ありと曰ひしが、事誠に然り、哲學とても何ぞ然らざらん。

第三章 渾一の觀念

第八節 哲學

哲學(philosophy)は明治年間に於ける譯語なるも、支那哲學といひ、印度哲學といひ、數千年前より東洋に存在せるにも適用され、其の名辭を冠するもの中、切れ入りの短句あり、順序立ちし文章あり、或は幾篇數十篇の長きに互れるあり、孰れも多少共通の意義の認めらるゝと共に、一定義及び範圍は曾て歸せず。若し或る體系的知識を與ふれば一の科學として目すべき筈なるも、科學との關係に就て大體三段の見解を経たり、第一は獨斷的にして排斥を

行とし、第一は能く、第二は獨りより擧げて獨立に勉め、
 第三は綜合に隨けり。コトが如き程度を三制に用ひし
 して、學問の進歩あるを、たゞは難するの
 第一は能く、第二は獨りより擧げて獨立に勉め、
 第三は綜合に隨けり。コトが如き程度を三制に用ひし
 して、學問の進歩あるを、たゞは難するの

第一は能く、第二は獨りより擧げて獨立に勉め、
 第三は綜合に隨けり。コトが如き程度を三制に用ひし
 して、學問の進歩あるを、たゞは難するの
 第一は能く、第二は獨りより擧げて獨立に勉め、
 第三は綜合に隨けり。コトが如き程度を三制に用ひし
 して、學問の進歩あるを、たゞは難するの

凡そ知識の体系的なるは、各の進歩の程度に應
 じて科學者には、準科學と爲すを得べくんば、何
 物も科學の外に立つことを要せず。是に於て第
 三の問で来るが、其の言ふ所に依れば、科學の理
 は各科に別れ、全體に通せず、哲學は其の全體に
 通するを求む、即ち哲學といは、科學なりと、原
 理の科學にして、諸科學の科學なりと、コトト及
 びスベンサーは此の意義に於て哲學を作らんと
 試みたり。されど原理の科學といひ、諸科學の
 科學といふは何事なるか、各科學に於て個々特
 別、理を究むれば、體にて互るべき普通の理を
 尋ねよとは、一應理あるが如く聞ゆるも、實は
 十分に理解せられ居るか、或、可能性として假
 定せられ居るのみなるかは疑はし。

物理學に論ずる所、生物學に論ずる所、社
 會學に論ずる所、皆或る範圍を以り、各範圍
 内に於て研究し得らる、之けを研究し、其の當
 時に在りて其の範圍内の事に關し是れ以上を
 研究し得ずと爲して擧げなし、然るに普通の理
 として更に附け加ふる所あらんとする、則ち何
 物を以てすべきか。(スベンサーの「科學の哲學」)
 從來科學の科學として、
 凡そ知識の体系的なるは、各の進歩の程度に應
 じて科學者には、準科學と爲すを得べくんば、何
 物も科學の外に立つことを要せず。是に於て第
 三の問で来るが、其の言ふ所に依れば、科學の理
 は各科に別れ、全體に通せず、哲學は其の全體に
 通するを求む、即ち哲學といは、科學なりと、原
 理の科學にして、諸科學の科學なりと、コトト及
 びスベンサーは此の意義に於て哲學を作らんと
 試みたり。されど原理の科學といひ、諸科學の
 科學といふは何事なるか、各科學に於て個々特
 別、理を究むれば、體にて互るべき普通の理を
 尋ねよとは、一應理あるが如く聞ゆるも、實は
 十分に理解せられ居るか、或、可能性として假
 定せられ居るのみなるかは疑はし。

や、其の徒らに名目たるに止まり、實質を究索
 するにつれ、次第に茫漠に歸するが如きあらざ
 るか。今日迄の事實上觀察すれば、哲學が原理の
 科學として諸科學に貫徹せる所、決して多しと
 せず、殆んど全く之れ無しといふも妄ならざる
 べく、折角調べ上げし原理は諸科學に於て有れ
 ども皆無きと知し。

第九節 されば斯かる事は、盡く無益なるか
 といふに、諸科學に對し悉くは然り、諸科學
 の外に原理を考究し、以て諸科學に益せんは、
 容易に期すべきに非ず。されど諸科學に益する
 と益せざるとを問はず、人は萬有の錯雜して其
 間聯絡の絶ゆるに安んずる能はず、何等か一以
 て之を貫かんことを欲して已まず。各科學にて
 特殊の觀察を爲し、特殊の研究を遂げし結果、
 種々なる事理の判明するも、特殊のままなるは、
 殆も幾多の水波に橋なく舟な して渡り得ざ
 るが如く、時として適當に堪へざるものあり。通
 行に連絡を要すると以り、知識に體系を要し、
 體系の體系を要す。故に第一の觀念が諸科學
 に何の益するあらざるも、之れ無くんば安んぜ
 ず、之れを得るがために、自ら満足し得ること少
 からず。第一の觀念を確實にせんとして、認識
 の源泉を導くあり、現象の裡面に第一義を尋

ぬるあり、各種の理法を結合すべき普通の理を尋ぬるあり、方法は區々なるも、要するに一を求むるもの、諸科學との關係如何よりは、ひたすら思想錯雜の苦痛より免れんとするなり。但し宇宙はヘーゲルの言へりしが如く關係の金剛網とすべく、何邊よりするも、何事よりするも、總ての聯絡を尋ぬるを得。變より觀れば變ならざるなく、常より觀れば常ならざるなく、半變半常より觀れば半變半常ならざるなく、其の關係を尋ぬるに易あるも、事として萬般に涉らざるあらず。(註子、自其體之能而能其體、而能之則不能以一獨自其不) 隨て或る點より推し及ぼし、宇宙を渾一視せば、茲に姑く満足するを得んも、渾一の觀念は此に限れるに非ず、一貫の理路は尙ほ他に多く存在するや必せり。宇宙は水なりとして満足せし者あり、火なりとして満足せし者あり、數なりとして満足せし者あり、精神なりとして満足せし者あり、物體なりとして満足せし者あり、意志なりとして満足せし者あり、力なりとして満足せし者あり、進化なりとして満足せし者あり、各々多少の理を具へ、一貫としてかなるべきにせよ、孰れも事茲に了れりと爲すを得ず、關係の結集なる宇宙は聯絡を尋ぬるに於て際限あるべくも無し。而も

際限なきも、渾一の觀念は求めざらんと欲して得べからず。

第十節 諸科學の統一といふも、此の類の意味に於てする外なく、其の統一は科學其の物に特別の利益を興ふるやは極めて思東なく、哲學にして斯かる統一を事とする者ならば、自ら一の科學と爲り得るやも極めて思東なし。科學に在りては、範圍内の事物に就て研究を累ね、其れ以外に出づること少く、各科學皆然りとせば、統一に専らなるは科學の事とし難し。此の複雑なる宇宙は探査の出發點に於て究極なく、或る方面より總てを觀想するを得、他の方面より亦均しく總てを觀想するを得。哲學が統一を念とせば、それは各自一の出發點よりするもの、衆の相一致する者ならず。或る者は比較的多數人の贊同を得て或る時代に維持せられ、一時は科學らしき形を呈するも、其の時代を過ぐれば人皆過去の一説として記憶するのみ。(科學に變遷するも、此の如く種々ならず。即ち、大體變遷するも、全體の探査を果すが如き無し)更に新たななる者の代り出づるあるが、同時代にても甲の立つる所は乙に於て取るに足らずとし、乙の眞理として固執する所は、甲若くは丙に於て謬論として排撃し去る。今日何の哲學か科學の如く後人の手を假りて益々發達すべしとして許さるゝか、

コム 及びスベンサーの哲學は多く、獨逸哲學者之目的に哲學にあらずと爲す所のもの、されど獨逸哲學者の粹たるヘーゲルの如き、ショペンハウエルの如き、果して眞を得たるかと問へば、何人も然りと答へず、其の思辨の雄大なるを稱するは則ち稱するも、設けられし基礎の上に愈々益々築き上げんとせず、又築き上げ得べきをも思はず。哲學者の言として今日に存するは、皆各自の思考を發表せる者にして、自ら渾一を求めて之を得たりとするに過ぎず、未だ科學とするに足らず、準科學とさへ稱し易からず。若し多くの渾一的觀念を集め、其の相互の關係を尋ねて一定の理法を發見せば、茲に純然たる科學の成立を見んも、斯の如きは哲學よりも哲理的哲學史たるべし。哲學は將來科學たるべきや否やは疑問なれど、現在に於て科學たらず、原理の科學にも非ざれば、諸科學の科學にも非ず。(物質學、化學、其の物理學、是の科學に非ず。此の如く種々なるに哲學は必ず人衆に非ず)

第十一節 惟ふに、プラトーンが哲學者は宇宙を渾一視する者なりと言ひしは、言ひ得て善し。初期の哲學者は心を考へ、物を考へ、當時の科學とすべき者を、盡く包括したりしが、後各部分個々に體系を盡へて科學と爲り、一派の

徒が哲學固有の領分と爲し、所も、認識論として妨げず。譬へば哲學は君主の位置を占め、各科學は各官廳たらざるか。昔時君主は總てを親らし、武となく文となく皆其の裁斷を待ちしに、後政務の増加し、事業の増大せると共に、次第に臣下に委ね、君主に代りて其の局に當る人々は各々責任を帯びて事務を執掌し、君主自らは何事に對しても責任を負はず、最も接近せる宮内省も別に一省として存し、君主は超然として凡百の上に立ち、各官廳の執れにも與らずして、而も亦其の總てを統轄し、必要に應じて之を運用するを怠らず。哲學も初め一切の事物を自家領分内に入れしが、次いで科學たるものあれば順次離れて存せしめ、而して己れ自らは科學の體系の外に立ち、諸科學を運用するを以て任とし、實際運用せざるも、運用すべきものと認む。一科學は直接に哲學に及ぶべきも、只故に哲學として諸科學以外に事を成さずとするは謬想たるも、己れ自ら一の科學たりといふも亦遠隔に失せん。

第四章

國情との關係

第十二節

渾一の觀念は人々互に異同あり、

小兒は父母玩具及び室を以て總てと爲し、女子は家を以て主と爲し、他は盡く此に附屬せるやに考ふ。男子も女子の如く考ふるなきに非ざれど、多く家外の事に興り、家外に爲すべきの少からざるを知り、一村の事を事とする者は一村を主と爲し、一市の事を事とする者は一市、都府の事を事とする者は都府、其の關係の廣きに應じて眼界も亦隨て廣く、以て一國に及び、隣國に及び、列國に及び、延いて全世界に及び。かくて同じく渾一の觀念なるも、或は小なるあり或は大なるあり、或は甚だ大なるあり、個々の稟性及び境遇にて種々の差違を免れざるが、概すれば時代に伴ふ所なしとせず。

往昔時を含み腹を鼓ちて天空を眺むる、則ち日月や頭上に周り、無数の星辰均しく運行し、晝夜交代して曾て則を易へず。而して寒に木を焚き、暑に水に浴し、馬に鞭ちて物を運び、牛を役して田を耕すや、天の覆ひ地の載する、昔人間の爲めにて、善事に禱禱あり、惡事に嫉摩あり、物として人の爲めに存せざる無しと考へたり。時代の進むにつれ、次第に知識の増進し、草木山川、乃至外邦の風土を知りたるも、日月星辰の眼に映ずるは舊に依りて舊の如く、依然として頭上に周り、依然として地を照らし、概

れも人事と多少の關係を有し、天地の中間なる人間は萬物の靈長なりと見え、夫の天地の化を範圍して過たず(鳥)と云ふこと、種々の解釋あるにせよ、最も重きを人間に置けるに相違なし。人間の學は人なり(語)と云ふも、人を以て宇宙第一の物と爲し、なり。

此の如く宇宙を考ふる時代は、何人も此の如き觀念を脱する能はず、其の當時に於ける渾一の觀念は皆幾許か此の傾向を帯びざるあらず。倫理説を始め人に關する事が、普遍なるべき哲學史の大部分を占むるも之が爲めに於て、人は萬物の靈長たる限り、人事を知悉するは即ち知識を充盡する所以、宇宙萬般の事が人事の下に統一せらるゝとするも、怪むに足らず。斯か觀念の動搖し始めしは、天動説の壞れて地動説の行はれ、創造説の壞れて進化説の行はれしに因る。星辰は人間の頭上に廻り、禍福を司ると思はれたるに、實は然るに非ず、各自に軌道を決めて動き、我が地球と何の關するなく、我が地球は太陽を廻り、太陽は他の更に大なる太陽を廻り、同じく宇宙に懸る無数の星辰中に在りて、地球は眞に微小言ふに足らざる者、其の微小言ふに足らざる者の上に蠢動する人間を知悉したりとて、由りて宇宙の事を知悉した

りとすべからざるの漸く知らるゝに至り、且つ人類は下等動物より進化し、下等動物は一層下等の生物より進化し、生物は無機物より進化せる者にして、人間の事を知悉するには必ず下等動物を知り、下等動物の生物を知り、更に無機物をも知るを要し、遍く此事を知るに非ずんば人間の事を知悉し難く、特に宇宙の事を知悉すべからざること亦漸く知られぬ。宇宙の潤大なるを感ひ來れば、前に人間の學は人なりといひしの餘りに餘きに過ぐるゝ意なきを得ず。

第十三節

されど人の知るに程度あり、(第七節「五色」)富士山は遠く隔りて望むも、之を知るといふべく、近づきて望むも、之を知るといふべく、其の頂巔に登りて雲海縹緲の趣を檢するも、亦之を知るといふべく、均しく富士を知ると謂ひ得るも、其の知るの間に多大の光進の存するあり。地家の太陽を運るを知るにも、斯かる名題を記憶するに止まるあり、地球の一端微物たるを目のあたり見るが如く感ずるあり。毎に天空を仰いで星の形質及び位置を考察する間、眸に入るの大き如何に拘らず、彷彿として絶大なるもの宇宙に散在するを認めずとせず。普通には、地動説を信ずるとも、眼に映ずるの即ち天動なるが故に、其の謬れるを知り

つゝ地球を宇宙の中心とするの傾向あり。進化説を信ずるとも、其の説の基にざると、其の事實を目前に見ざるとの爲めに、遠く無機物の漸進たる状態に遡りて探究するよりも、特に人類に就て考察し、人類のみにて足れりとするの傾向あり。知行合一の困難なるが如く、同じく知ると云ふも、實際に於て知らざると異なるなく、天動説若くは創造説に於けると同様の結果に終るゝは、不思議にあらず。此等の事理を大に明瞭を賜へ、さながら實地を踐みしが如く分明ならしむるには、猶ほ多くの年代を経過せざるべからず。人々皆多分時代の支配を被ることとて、己れ獨り超然域外に出でんは極めて難し。

かくて時代は殆んど抵抗するに由なきが、同一の時代も國情に因りて違ふ所あり。天動説の行はれし時代は、孰れの國も略ぼ類似したりしかど、類似の間固より異なる無きにあらず。支那印度及び中世の歐洲に行はれし宇宙觀は互に相似、總じて人間を下位と爲し、世界を善しと云ひ惡しと云ふは、盡く人事より割り出し、人事以外に就て多く思慮を費さず。此の點に於て一に出でたりしも、支那と印度と中世の歐洲とに於て哲學的思想の各々異なりしは言

ふを俟たず。支那には支那風あるのみならず、南北に別れ、更に地方にて異なる者あり、印度に印度風あり、而して地方的に異なる者あり、歐洲に歐洲風あり、而して地方的に異なる者あるなり。地動説の證明せられ、人間が一小星に棲息するの轉明するに至りしは近世の歐洲に於てにして、其時此に似たるものなきに非ざりしも、明かに其の理を察知せず、明かに察知せしは全く近世の歐洲に於てなるが、其の歐洲に在りても、之が影響を受くるに、或は烈しきあり、或は烈しからざるあり、大別すれば海國たると陸國たるとにて等差ありとす。

第十四節

歐洲に於て伊太利、西班牙、葡萄牙、及び英國、佛國の如きは皆海國とすべく、ゲルマニア即ち獨逸兩國は陸國たり。海國は外國との交通頻繁にして、國人多く波濤を瀉りて種々の國土を觀種々の國民に接し、又大上の星の換るをも望見し、而して世界に對する觀念に富む。地動説の如き、亞米利加發見の如き、地球一周の如き、皆孰れも海國の賜に非ざるは莫し。人なれど、伊國に其研究の便利をなすべし。之に反し、往年の獨逸は此の點に於て頗る印度と似たり、共に海に面する處なきに非ざるも、之を利用するの便利を缺き、國土は比較的大な

る陸地にして、高山あり、長江あり、曠原あり、密林あり、民族の階級に分れて貴族僧侶勢力を占め、加ふるに國外よりの侵略稀れならず、或る時は統一して帝國と爲り、或る時は分裂して割據の態を成し、而して人民は常に蒙族の爲めに虐げられ、重敵苛徴に苦みたるが、此の如き國情にては、臂を振ひて事を敢てするの念に乏しく、寧ろ退隱して心に慰まんことを欲するなり。(圖より二書相違す所多く、少くも俄及び地勢の異なり、印度に終日沈思冥想を事とする者多く、思辨の緻密なるが上に更に微細に分析するあると

見るのみにて、進んで取らんとするも得て能くし難く、強ひて心に慰むる所あらんとし、さてこそ音樂も徒らに儀式的に奏せず、是れにて暫く煩悶の志を求め、又知識ある者は其の知識を活世間に用ゐず、空に馳りて冥想に耽り、動もすれば寢食を忘るゝに及べり。爲めに觀察の進歩し人間は渺たる小星に變動する者なるを知るも、猶ほ冥想を以て全能と爲し、種々の觀念を綜合し分離し、意の欲するまゝに組み合して歲月を送るの少からざるを見たり。獨逸哲學の印度哲學と相似るは偶然にあらず、兩ながら沈思冥想して心に慰藉を求めしなり。

第十五節 海國に生まれし者は日常の生活に於て陸國に居る者と同じからず、即ち科學に説し海國を以て國外に出遊し、異風殊俗の國民と交際して觀察する所廣く、經驗する所多し、マルコポロや、コロンボや、カボットや、皆己れの經驗に徴して、從來人々の想ひ到らざる處に足を置くべき處あるを確信し、而して遂に其の確信せし點を踏出して大發見を成し、他多くの發見者も亦皆多少此に類せる所あり、坐して冥想するよりは、進んで新なる經驗を得るを旨とし、敢々波々進取を計るに思む。是を以て思索の緻密なるに於て陸國の冥想者に及ばざるも、經驗より推して判斷するに於て頗る優る所あり。陸國の人が己れを獨斷を基礎として冥想に耽るに對し、海國の人は自他の實績を基礎として活きたる思考を逞しくし、は、地動説の殆んど全く伊太利に成り、進化説の殆んど全く英佛に成りしに徴して知るべし。特に英國は海國中の海國にして、觀察より得たる知識を基礎として考ふるに、最も長ぜり。進化説の創首たるダルウキンの如き、ワレースの如き、室内に冥想して進化の理を提出せしに非ず、世界を遍歴して考察し得し材料に依りて念ひ到りたる所、而して此の二人は共に哲學者の班に列せざ

るに、宇宙に對する眞正の知識の分量に於て謂ゆる哲學者なる者に比し孰れを優れりとすべきや容易に決するを得ず。(圖よりマルク、英國にイニエナリ、十八世紀に於て人種學の學問を發達せし者)

獨逸には主觀的に進化を論ぜし者少きに非ざれば、(シュレンク、ゲルハルト、フーバー)孰れも冥想より得たることとて進化説は則ち進化説なるも、科學上に特別の利益を興へず、科學に益するに於て到底海國の進取的なるに譲らざる能はず。但し今の獨逸は往年の獨逸にあらず、大強國として歐洲に霸たらんとし、且つ商工業を以て世界と競争しつゝあり、前の陸國漸く變じて海國と爲らんとし、民心も亦隨つて變ずべし。暫くして科學の研究は著しく進みて學問の諸國を凌駕せんとするに至れるが、科學の研究の著しく進みし丈け前に獨歩たりし冥想的哲學の却て退歩せるの嫌ひなきに非ず。

第五章 印度及び獨逸

第十六節 印度婆羅門の徒は初め普通の生活を爲し、妻を娶り、子を得、然る後妻と共に森林に隱れ、後更に妻と別れ、全く世間と離る。

其の意にいふ、妻子存放及び財產は皆斷情の妙

げたるもの、譬へば黒雲の月光を掩ふが如く、水波の月影を亂すが如し、月を見るに、先づ雲を拂ひ、水を靜かにするを要すると同じく、眞を體せんとせば、萬種の煩累を絶ち、獨り自ら冥想せざしべからずと。〔冥想は無念無想文字の上にて別なれど、釋者は前者の二方法を以て〕而して獨り自ら冥想するや、初め神靈の前に居るかに感じ、次いで神靈に近づくを認め、更に神靈と似、最後に神靈と合一し、茲にサユラムの位に達す。而して是れ一朝にして得べきに非ず、乳より酪、酪より生酥、生酥より熟酥、熟酥より醍醐の成るが如く、相當の順序を踏まざるべからずとせらる。斯かる事は他の諸教も多く大差なく、口に梵といひ佛といふとも、漸次一切の妄念を去りて眞を悟らんとするは總てに通じて一と謂ふべし。佛教の變化し種々派別してさへ此の點の相類するを失はず、天台は五味の譬喩を活用して備さに順序を立て、果成れば成く常樂、百界千如、三千世間、一念の中に具はると爲し、禪も外道禪、凡夫禪、上乘禪、大乘禪を分ち、此心即ち佛と悟るを最上乘の禪と爲すとせり。

にては慾念の熾んなるの心を亂さんことを恐れ身を苦めて到らざる無きものなり。但だ其の慾念を去りて悟り得る所の何事なるやは聊か疑ひなしとせず。デユボアの言に據れば、一苦業者の自白せし所左の如し、曰く予は四ヶ月間悟道者〔悟道者は悟者〕に従ひて修行せり、彼はベラプラムに近き閑靜の地に住みしなるが、余は其の教を守り、毎夜眠らずして無念無想を事とし、能ふ限り息を込め、殆んど窒息せんとして初めて吐き出し、爲めに渾身汗に塗れたるが、斯くする間、時として日中に月の徘徊するかに念ふことあり、師は之を聞きて悦び、以て前途有望なりと爲し、前より一層苦しき業を授けたり、されど餘りに身體の疲勞を來し、到底堪へ得べからざりしが故に、終に其の處を去れりと。〔是れ頗る疲勞に堪へず、一を以て多くを律し難きも、此の如きの少きにあらず。〕世俗と離れ、慾念を去り、無念無想の境に入りて神靈と會し、最後に我は即ち神靈なりといふに到達せんとするは、外より觀て無益の業の如しとす。當人自らは得々として満足の色あり、却て他の生業に驅驅たるを蔑視し、白人の印度に勢力を占め、政治に商工業に著しく力を

顯はし來るを見るも、其の妄念に驅られて徒らに罪障を作り、畜生界に徘徊せる憐むべき者なりと言ふを憚らず。白人は彼等の難行苦業するを見、憐むべき愚物として之を目すれど、白人自らは亦彼等の爲めに憐むべき愚物として目せらる。彼等を以て濟度すべからざる者とせんか、彼等は斯く言ふ者を以て濟度すべからざる者とす。

第十七節 白人の印度に於ける行者を觀る、乃ち憐むべき愚物として目するを禁じ得ざらんが、然らば白人の本土たる歐洲にて如何の狀なるやといふに、申せば此に彷彿たる者あり、特に新プラトーン派に於て然りとすべく、其のエクスタシーは即ち常樂の境に到達せる利那といふべし。〔新プラトーン派の處は思は難きなり〕近世の人は之を觀て暗黒時代の教と爲し、以て近世を推すに足らずといふも、スピノザの如き稍々此に似る所あらずや。曰く、道理の至れるは本體即ち神靈を覺知することにして、善の善なるは之を認識し之を敬愛することなり、神靈を知るや、心中全く清淨と爲り、滄泊を極め、高尚を盡す、人々茲に達すれば、爭亂紛擾を見んと欲するも得べからずと。カントは獨斷を排して批判を事とし、何處まで先天的にして何處より

後天的なるやを究めんとしたるが、究竟其の特色として観るべきは、印度哲學及び中世哲學に比して科學的なりといふに在り、觀察して判斷するに傾けるに在り。されどカントは本體を意識の外に置き、吾人の知り得べきものに非ずと説きしかば、其の説を發展するに務めしフキヒテは、更に總てを批判するに最も確實なるものを求め、竟に自我を以て動かす可らずとせり。

(自我の方法は科學的の同一性なり。カントのヒュームを稱して批判的事物的科學的の同一性を稱す。)

曰く、イはいなりといふの争はれざるは、形式に於て然るのみにて、イなる者あらば則ちイなりとの意味なれど、之に代ふるに自我は自我なりとの命題を以てせば、十分に獨立のものとするを得、何となれば世界に唯自我のみ疑ひ難く、事を疑ふにも、事を知るにも、常に其の基礎と爲らざる無ければなりと。次いで演繹し、自我は自我なりといへば隨つて自我は非我ならずとの命題を生じ、非我は即ち世界を指すの稱なれば、自我と世界と相對し、事々物々自我の反射と見做すべしといふに歸着せり。

シエリングは、自我若し非我の爲めに制限せらるれば、是れ相對にして絕對にあらず、必ず其の上に絕對のもの無かるべからずとし、仍りて名狀し得られざる絕對を擧げて曰ふ、自我を

自我たらしめ萬有を萬有たらしむるの本源は自我と萬有との上に立つ絕對無限の靈に在り、冥渺にして輒く名狀すべからざるも、能く無數の相反對するを統一して調和融合せしむるに足る。ヘーゲルはシエリングの此の如き名狀すべからざる絕對を置きしを離れて、斯かるは暗夜の鳥と均しく、其の有無を判定する能はずといひ、睿智にて絕對の本體を知ると言へるを評し、是れ短統にて放發されたると同様なりといひ、又本體が物心兩界を開發すと云へるを評し、是れ青赤兩色のみを有せる畫工の一を以て人物を描き他を以て山水を描くと同じく、唯有り合はせの事物を使用せるのみといひしが、彼自らば總ての物々相對なりとし、純有純無を首位に置き、曠日して宇宙を創造するに力を致し、他の獨斷を咎めつゝ遂に獨斷より離れざりき。

(ヘーゲルの非對稱性中にも、萬有の對稱性を相稱して相稱し、一己の非對稱性を出でざるを對稱し、フキヒテの自我、シエリングの絕對、ヘーゲルの純全純神は、夫の印度行者の獨坐冥想して宇宙の事に茲に盡くとすると同日の論にあらざるも、其の最も異なるは分析の密なること是れのみ。印度に在りても分析を密にする者なしとせず、特に數日の多きに於て寧ろ他に優れど、分析の間幾回も同一事を層出すの失あり。第二十二) 獨逸哲

學は分析の方甚だ嚴密、一髪を分析して苟もせざる所あるが、其の嚴密なるは即ち批判的なるが故にして、批判的なるは即ち觀察して判斷するが故なり、神靈に到達するに先だち知識は何様のものなるやとして之を觀察し分析するなり、印度哲學と異なるは主として此に存す。獨斷して冥想するに至りては、印度と大差なく、宛ら異語同想なるあり。カント以後辨證法の巧みを極むるあるに拘らず、之を繼承し之を盡備するよりも再びカントの批判に歸りて知識其の物を究むるの勢を生じ、殊に重きを認識論に置くことと爲れるも、故なきにあらず。然るに謂ふ所の認識論は認識を以て科學的材料とせんとし、而して未だ科學とする程に進まざる者、今後一の科學たるべきか、將心理學の進歩と相俟たざるべからざるかは、一に各人の意見如何にあるも、其の研究方法は他の科學と同一ならんとするの傾向あること疑ふを要せず。

第十八節 印度哲學は殆んど全く冥想を事とし、獨逸哲學は冥想に交ふるに觀察を以てすと謂ふべきが、單に冥想としては後者遂に前者に及ばず。印度に晝夜唯冥想して餘念なき者あるも、獨逸に斯くまで冥想に耽るありと覺えず。彼等は斯かる冥想を以て笑ふべしとせんも、其

の笑ふべしとするは、即ち己れの多く観察を交ふるに出づ。(或は既述あり、哲学者に就かずしては、思ふに、科在りて科より遠く、思想より遠く、哲学者に就かずしては、思ふに、彼等は印度行者の如く全く世間より離れて閉目冥想せんとせず、更に観察に依りて能ふ限りの知識を得、一層細密に分析し擧列せんとするに勉むるが、其の観察は如何なる邊にまで及ぶかといへば、尙ほ甚だ發險なるを免れず。從來既に仰明せし所の宇宙に就てさへ頗る冷淡にして、舊に依り沈思冥想して得たる所を綜合し分解し、而して哲學は科學と別にして、科學の究察し得ざる所を究察し得べしと想ひ、科學者の望遠鏡顯微鏡を用ゐるを見、是れ焉んぞ普遍の原理を探るに足らんやとして淺むの色あり、其の觀察を専むは恰も婆羅門教徒の慾念を専むに似たり。故教徒が慾念を制して冥想を逞しくし、依りて以て自ら神靈たるを得べしとすると同じく、哲學者にして科學以外に別に思考を擬らし、能く真理を求め得べしとし、獨り自ら高くするあるが、科學者より觀れば却て其の爲す所の怪しく思はるゝに非ずや。印度にては冥想の極端に馳せ、獨逸は正に其の中途に在り、獨逸哲學者の印度哲學者を笑ふは、猶ほ酒を飲み他の酔ふを笑ふが如きもの、若し獨逸哲學に科

學者の及ばざる所のものありとせば、印度哲學に獨逸の及ばざる者ありとすべし。獨逸哲學は直指人心見性成佛といふ程に心を専らにする能はず、而も又大に觀察を事とするを得ず、さればとて此の二つを兼ね得ずにも至らず、恰も中途に彷徨せる形あり。(或は遠く觀察) 第十九節 哲學といへば獨逸に限り、獨逸は哲學の本場と思はるべく、實際獨逸に多くの哲學者の輩出し、今猶ほ其の人に乏しからず、諸家の議論を順序立て、獨逸哲學史即ち哲學なりと斷定し得るやに見ゆるも、該哲學史の頂上はカント、フヒヒテ、シェリングを経てヘーゲルに至り、シOPENハウエルに轉する所に在り。然に其の主要なる部分は印度哲學にも見るを得べく、特にシOPENハウエルは印度に負へる所多く、身智俱に亡びて無餘涅槃に入らんとせり。唯獨逸、佛蘭西、希臘、羅馬、印度、中國、日本、各處に於て、近時世を風靡せるニイツエは、純粹の哲學を以て自すべからざるも、亦此の邊に負へる所少からず。而して是れ事の自然なるもの、其の印度波斯といふを以て蔑視せず、敢て

第六章 獨逸及び英國

茲に學ばんとせるは、爾すべき事にして、若し一層深く攻究せば、尙ほ別に得る所ありたるべし。然るに此の如きは日新の世運に伴ひて知識を開發する所以の道ならざるより、更にカントの批判に復して一種の觀察を事とし若くは科學的研究に身を委ぬるの多きを加へ、中には頗る力を此の方面に致し、現に致しつゝある者あれど、斯かるは獨逸哲學の特色とすべきものならず、却てヘーゲルが勞働者の仕事にして哲學にあらずと嘲りし英國哲學に類し來れるなり。

第二十節

或は獨逸を揚げ英を抑へて曰ふ、獨逸は幾世代を通じて堅實なる發達を遂げ、時に進み時に退くの變調を呈せず、外來の勢力は之を壓伏するに餘りに孱弱にして、國民の向上發達は總じて内部よりし、徐々漸々に開けたる結果、諸階級皆略ぼ同一の性格を長せしめ、農夫をして宮殿に移らしむるも、容易に閑雅の風を帯びざると共に、驕奢に流れ闘争を事とせんとせず、人々同じく平等に安んじ、罪なき娛樂を好み、外人に對し蔑しくして壓制なり、(内部は然らず) 之に反し英國は上層と下層との間に鴻溝の劃せらるゝあり、良家の文明的なるは何人も否定せず、多くの人は以て近代文明の

生ぜし高風及び企業の最良標たりと爲すも、
 繼りて其の以下を見れば、忽ち舊の階級と變
 じ、喧嘩、博奕、飲酒、賭博等起らざるなく、未開
 蕃族と不潔を均しするに至る、蓋し英國開化
 の新たにして一般階級に普及せざるが爲めなり
 と云々。(一)此等は一概に言ふべきに非
 ずして、獨逸人の性質が多少定まる所あり、境
 遇の變化に伴ひて變ずるの速きは、其の順を逐
 りて文明に進みしといふよりも、本來の民性な
 ると海外に出でて奮闘奮争するの盛んならざり
 しとに由らずとせず。之を市町村に觀るも、交
 通頻繁ならざる所の家々は多く身分の定まり、
 急劇の變化の生ぜざるが常にして、獨逸人の着
 實なるも必ずしも文明の故ならざるべし。

古代の印度は當時の諸國に對し比較的文明と
 いふべかりしも、今の印度は決して文明と稱す
 るを得ず、半開を以て呼ぶの適當なるべきが、其
 の階級は甚だ嚴にして犯すべからず、各自守る
 所の儀式は外に出づるも易へず、船中にて自ら
 食事を調理し、自ら器皿を洗ふなど、變化を
 忌むこと獨逸の比にあらず。印度の此の如くな
 るの文明なるが爲めならずとせば獨逸人の一階
 級の固定せるも、他に理由を求めざるべからず。
 往時米洲及び其他の發見せられ、列國の競ひて

殖民地を造りし時、獨逸の多く加はるなく、歐
 洲の世界に於ける發展に關係なかりしを見る
 も、以て國俗を推すべきに非ずや。(二)米洲の
 八十年戦争(一八一七—一八二一)は、獨逸人の
 世界の中頃より次第に勢力を顯はし、領土を外
 に擴張せんと勉めしが、殆んど皆他國の領有
 若くは勢力範圍に屬し、新たに指を染むべきの
 極めて困難なるに拘らず、能く眼りの方略を運
 らし、阿弗利加に幾分、太平洋に幾分を得、尙ほ
 中米南米を窺ひ、而して更に公海の利權を握ら
 んとし、巨大なる商船を造りて頻りに往來航馳
 せしむ。(三)此等は獨逸人の雄飛の第一、然るに未
 だ意の如くならざるは海軍の足らざるが爲めに
 して、若し國旗を以て商船を保護することを得
 ば、往くとして可ならざるなげんとて、現く皇帝

の如き、我が將來は海洋に在りと呼び、機會さ
 へあれば海軍を擴張し、國土を海國とするの
 意あり、其の歩を進むるにつれ、民情の次第に
 變ずる、知るべきのみ。
 從來獨逸人の外國に移住する、移住と同時に
 外國化し、本國と利害相關せざる有餘なり
 して、主權に屬する殖民地なきに出づる者にし
 て、今後種々畫策して新領土を拓かば、たと
 ひ黄金山の發見せられ若くは金剛石坑一發見せ

られて恰も潮の浦が如く人の集まるを望み得
 ざるにせよ、國外に許多の關係を生じ、關
 係に關係を生じ、人民は斯の新勢に順應し、
 舊時の着實なると違ひ、冒險的投機的に事を成
 さずと限らず、而して一般に眼界の擴ると兵
 に、學者も閉目して冥想するよりは直ちに實社
 會實世界を相手とするの心を深し得ざるべし。
 獨逸は元來學問を以て鳴り、近來科學の進歩の
 特に著しく、哲學も科學を加味するの少から
 ざるやう爲れるが、科學のみを以てしては獨逸
 の獨逸たる特色を認むべからず。科學の發達は
 他の文明諸國にも亦之れ有る所にして、哲學を
 科學的にせんとするは英國實に之が先驅にして
 寧ろ英國の特色とすべし。

第二十一節 國情よりして獨逸と最も異なる
 所のものを擧ぐれば、先づ指を英國に屈せざる
 を得ず。獨逸と哲學的思想の最も異なるは英國
 にして、列國は獨英の孰れかと系統を同じくし、
 否らざればこれを折衷し若くは全く中立なりと謂
 はざる可らず。但だ英國に獨逸の謂ゆる哲學者
 なるもの甚だ少く、ペイコンの如き、時代も
 時代とて幼穉とも淺薄ともいはるべきが、其の
 説く所は常に當時の時弊に中りしのみならず、
 今日に在りて行は中れる無しとせず。彼は哲學

の無用に歸せし所以の者を擧げて、へりき、事物の試験に従事するは人の人たる品位を墜すと誤解すること、宗教の陋事を迷信して正理を顧みざること、先哲の意見を固信して其の範圍を脱せざること、實物に就て實理を究めんとするも速に成功を見ざるが爲めに之を中絶すること、此等は其の主なる者にして、之を改むるには、第一に諸般の事物悉く之を實驗に徴すること、第二に古來傳ふる所何等の格言名説も之を放棄することを要すとし、尤も重きを歸納法に置けり。後世の形而上學者は概ね此の如し。其の説く所は固より偏せざるに非ず、歸納法の初より演繹法と相待つは明かにして、何時も實驗に徴せざるべからずといふの理なく、格言名説を放棄すべしといふも暴に幾しとすべけれど、中世の哲學に對して爾く斷言するの適切なりしなるべく、之が影響は決して淺からず、影響といふの語弊あらば、かゝる勢は滔々として禦ぐべからざりしと謂ふべし。然るに哲學はホップス、ロツクを経てヒュームに至り、ペーコンの期せしが如くならず、折れて獨逸に入りたり。ペーコンの言に依れば、コムト及びスペンサーの如き、稍も可なりとせん。

リユイスは十九世紀のペーコンを以てコムト

を目し、力は其れ以上なりと言へり。スペンサーは自らコムトの影響を被らざるを辯解するに勉めしが、實際之を被らざりしならんも、同一の勢に逢着せしは争ふを得ず。而してスペンサーは後れて出でしだけ其れだけ整へる所あり、當時收拾し得し諸科學の成果を以て宇宙を解釋せんと試みたりしが、獨逸哲學者の眼よりせば、僅かに其の不可知的論の不十分なる認識論と見らるゝのみにして、之を除きて哲學の名を値せずとせらる。〔獨逸哲學者は自國の習慣に鑑み、他國の人が「女之禮」然るもスペンサーの哲學に對して斯かる評を下すは全く獨逸の立場より見ての事にして、其の己れの特色とする所と異なるの故を以て一概に哲學にあらざるとは誤れり。分化結合及び行はるゝを進化とし、以て總てを論ずる所猶ほ十分なりとするを得ず、生物學といひ、心理學といひ、社會學といひ、倫理學といひ、皆各々個々に纏まりながら、宇宙を渾一的に觀るの點に於て頗る缺くる所あるも、宇宙の事實を究察して宇宙を説明せんと欲し、何處迄も英國流たるを失はず、哲學を一手販賣せんとする獨逸の潮流の外に立ち、別に體系を作りたる、さすがなりと謂はざるべからず。〕

近世獨逸哲學は近代科學より前代の遺説を棄つること多し、哲學史と稱する可らずし實めに哲學系統とし、
〔獨逸の科學に拘らざり、クローネクセン〕純粹の英國流が一のスペンサーを頂上とせば、甚だ其の人に乏しきの感あらんも、其の乏しきは即ち困難なる所以にして、ペーコンが實物に就て實理を究めんとするも速かに成功を見ざるが爲め之を中絶すと歎ぜし程ありて、英國流の哲學は目を閉ぢて空想を弄ぶが如く容易ならず。
英國は何事にも事實を貴ぶの風あり、科學に於て特に他に優らざるの觀あるもの、亦餘りに實際を主とし、科學の抽象的に互るを好まざるに因る。英人は到る處實際上に實際の事を爲し、學問上の研究に深く心を委ねざるも、極めて實際の知識に富めるより、學校の形式の進まざるに對合はして時にニュートンの如きダルウキンの如き傑出せる人物の出づることあり。スペンサーの企てたりし所は印度哲學者若くは獨逸哲學者の冥想して考へ得し所と違ひ、一朝一夕に成らず。隨て其の企てたりし所を不十分なるとし、更に新たなるを作らんとするも容易の業にあらざるべし。畫工は怪物を描き易く、尋常の物を描き難し。英國哲學は其の難きを試むる者にして、獨逸も近來漸く此の方に傾かんとする狀あり、今後或は英國流の哲學に於て英國を凌駕せんも知るべからざれば、

其の凌駕するは從來獨逸哲學と稱せしと大に異なるものなり。

第七章 攻究の効果

第二十二節 觀察といひ、實驗といひ、事實

といひ、實證といふ、意義必ずしも定まらず、幾分の疑ひを免れざるも、知識の進歩は多く此の邊より來るといひて可。場合に依り之を離れて推理し得ざるに非ず、時として兩するの却て思索に便利なるを覺ゆれど、要するに知識の進歩に與ること多からず。ヘンリー・モーアは幽靈が嘗て無く、現に無く、永遠に之れ無なしとせられつゝ、何處にも噂せられ且つ恐怖せらるゝこと、實に最大不可思議なりと言ひ、世に幽靈の存するかに考へたり。されど何人が之れ有りとし、又如何に噂の絶えざるにせよ、無きものは究竟無きもの、幽靈の千姿萬態に描かるるも、孰れも皆空想に出でて空想に終る。〔基督教學に於ける幽霊の益を生ずる〕固より空想に成れりとして詩若くは小説に益し、時として新たなる攻究を促すことあるも、近世文明の要素たる知識に幾何の加ふる所ありたるか。徒らに考ふる間、材料に限りあり、如何に之を組み立て組み

直すも、有る者は有り、無き者は無し、無よりを生ずるは有無の概念を變ぜし上の事にして、斯くするとも、僅に認識攻究の方法に益するのみ。

既に知れる所を分類せば、際限ある無きも、恰も芥子を分つが如く、限りなきも何の得る所あらず。例せば、二十七賢聖を立て、隨信行、隨法行、無相行、須陀洹果、一來向、一來果、不退向、中般、生般、有行般、無行般、樂慧、樂定、轉世、現般、信解、見得、身證、退法相、守護相、死相、住相、可進相、不壞相、慧解相、俱解相、不退相と爲すが如き、數の多きのみにて、何等知識に益せず、九賢聖として妨げなきと共に、勞をだに厭はずんば八十一賢聖とするを得ん。〔論實〕或は人間の下に修羅、畜生、餓鬼、地獄を置き、上に天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛を置くがあるが、こは宇宙に此の如き階級の存すとするか、將人類の階級を比喩し、極善極惡の間に等級を設けしなるかの判然たらざるのみならず、三界に減するも、三十界に増すも、考へ次第なりと謂ふべし。華嚴に行號の十佛と稱し、正覺佛、願佛、業報佛、住持佛、化佛、法界佛、心佛、三昧佛、性佛、如意佛といへるも、亦考へる儘に分類し得る所にして、己れ

の頭腦より編み出す如何に合併して單純にするも、如何に分解して複雑にするも、元來在る所を取扱ふものにて、究極出立の當初と異ならず。天台に即凡見佛、即佛現凡といひ、眞言に即身成佛といひ、煩はしき順序を立てて煩はしき儀式を設けし本、一步も現在の外に出でざるは初より知識の量の定まり居ればなり。〔此等は知識の益に益するも、益に益せず。而して益を二増進するが故に必ず實を以て之と限る。〕

第二十三節 デカルトは一切の事物を疑ひ

て曰ふ、夢中の事甚だ明かにして而も假空たるが如く、感覺より來るものも、知力に屬するものも、疑はんとすれば盡く疑ふを得べし、理學に説く所の一定の法則も、決して信を置くべからず、二が四、圓は方ならずといふは眞實と覺ゆるも、焉ぞ鬼神の我を欺き、然らざるものを然りと辨識せしむるに非ざるを知らんやと。次いで又曰ふ、如何に疑ふも、疑ふといふ事のみは除き難し、疑ひて彼を除き、疑ひて此を除くも、其の疑ひ自らは除くべからず、隨つて疑ふ所の我といふ事も除くべからず。我あらざれば、何に由りて疑ふか、我あらざれば疑はんとするも得ず、苟も疑ふ、即ち疑ふと思ひ得る以上、我といふ事は必ず存在す、然るを以て、我は思ふ、故に我は在りの

二向を指し、確實なる基礎と爲すなりと。然るに後上帝も亦疑ふべからずとして、其の確實なるべきを言ひ、而して上帝に人を欺かずといふより推し、初め疑ひし所、最早や疑ふを要せず、明瞭なるものは皆信すべしと爲せり。是れ已れの認識せる所に就き、試みに打壞を敢てせんとして能はざりしより、更に几百を許すことと爲れるもの、後に得たりしと稱する上帝も、初より念頭に存せし所にして、總じて常に同一範圍内に律得し、一たび棄てたりしを後再び拾ひ上げしなり。

確實なる基礎を得んが爲めに懷疑を極めしデカルトが現實の宇宙に對し何様の知識を有せしやといふに、實に下の如し。宇宙間物質の存在せざる無し、固體の存せざる處必ず流體あり、一物の見えざる處にも流體あり。而して凡そ動は靜に對するものにして、流體の流動するは其の中の固體が静止するに因れば、吾人人類及び流體中に存する固體は悉く静止せりと爲さざるを得ず。然らば諸星は静止するや、將運動するやの疑問に關し、プトレメウスは天動説を採り、コペルニクスは地動説を唱へ、プラーエは太陽の諸星を率ゐて地球を周り、地球の静止せるを論ぜしをば、デカルトは盡く之を

否認し、宇宙は無限なり、空間は虚無に非ずといふを根柢とし、渺渺たる空間は何れの處も空虚ならず、無限一體の物質を形成し、回轉して已むことなく、地球や諸星や皆此内に在りて流體と共に運動す、故に諸星は他の星に對して常に其の位置を變ずるも、接近せる流體に對し毫も位置を變ぜざれば、之を静止せりととして不可なきこと、猶ほ逆行せる舟中に平臥する人を指して静止せりと謂ひ得るが如し。且つ天體の運動は旋轉の形を取り、中心に近づくに従ひて速度を加へ、軌道は全く正圓に非ずして種々に變形す、故に地球の軌道も亦正圓にあらず中心に近づくに従ひて速度を加ふと爲し、又世界の未だ形成されざりしに方りて、唯若干の物體宇宙に散在せるのみなりしが、何時となく回轉を始めて無數の物體相突き相摩り、固體は角を缺かれ、時として間隙を生ずれば小片附着して之を充たし、斯くして碎片の小なるは次第に中心に捲き込まれ太陽若くは恆星と爲りて光を發ち、其の粗なるは中心を離れて遊星と爲り、透明稀薄なる流體其の間を充たす。凡そ物體は回轉すれば必ず其の中心に外部に向つて飛び去らんとする力あり、此の力即ち光の原因にして、太陽及び恆星の光を放つは内部の物質細片

が此の力、爲めに飛び去らんとするに因ると爲し、一層其の中心に捲き込まれ太陽若くは恆星と爲りて光を發ち、其の粗なるは中心を離れて遊星と爲り、透明稀薄なる流體其の間を充たす。凡そ物體は回轉すれば必ず其の中心に外部に向つて飛び去らんとする力あり、此の力即ち光の原因にして、太陽及び恆星の光を放つは内部の物質細片

第二十四節

デカルトは數學に達し、幾何學に功あり、若し觀察實驗を事とせば、宇宙に關する知識は此の邊に止まらざりしならんに、徒らに疑ひ始めしが爲め、特に新たに參與する所あるを得ざりき。コペルニクスの説ける所は不十分なりしかど、宇宙に關する確實なる知識は此に在りとすべく、プラーエに至りては説く所一層誤れるも、其の宇宙に關する知識に功あること争ふべくもあらず。説く所に誤謬多くとも、中に幾許か當れる所あれば、其の當れる所は決して動かすべからざる性質のものなり。デカルトは獨り自ら考ふるに止まりし故に、總てを疑ひ盡して空も疑ふ能はざる處に達せりとて、其の疑ふべからずとせる上帝は後常に疑はれたり。コペルニクスはデカルトの如く濫りに疑はず、濫りに絶對的確實なる者を求めず、唯循々然觀察を事とせる間に於て多く得る所ありき。疑ひて而も疑ふことを得ず、眞に確實とすべきは、上帝にあらずして望遠鏡

に依り測定したりし所のものなりとす。星辰を
 類測する器械の從に進むに伴ひて之に關する
 知識も亦細く進めり。若しデカールトにしてコ
 ベルニクムと同様の方法を採りしならば、必ず
 や、實なる知識を寄與したるべきに、其の否ら
 ずして冥想を事とせしが爲め、遂に非常の苦心
 を重ねて彼の如き結果に終れり。（デカール）

されどデカールトが知識の本源を導ねんとし
 たるは善し、其の言に曰ふ、總ての知識は之を
 分解して最も單純なる處に達す。時は、直覺に
 依らずんば知ること能はず、演繹法は直覺よ
 り始まるものにして、直覺を措いて更に其の起
 源を見附せず。若し觸見のものを基とせんか、
 其の前に已に之を見る能見のものなかるべから
 ず、若し又知らるゝものを基とせんか、必ず之
 に先ちて知る所の力なかるべからず、彼を基
 とし此を基とするも、先だつものは知力にして、
 演繹法の基礎は實に知力中の最も精確なるも
 のに外ならざれば、何事を悉し措いても吾人の
 第一に攻究すべきべからざる重要な問題は
 知識の性質及び其の範圍を定むるに在りと。デ
 カールトの言ひし所に即ちカントの哲學の出
 發點にして、カントは此の點に於て人に益せる

の少からざりしも、更に愈く進むに隨ひて益す
 る所少なく、要するに其の次に論ぜし所は既
 に知られしを順序立てたるに過ぎず、認識論を
 開きし外、新たに確實なる知識を寄與せしや否
 やは疑はし。（カント） 現世の宇宙に對し其論を演ぜしたりし
 も、此に於て比喩的確實なる知識を與へしは
 ラプラス、ハーシェル等にして、其の言ふ所に
 多少の誤謬あるにせよ、觀察して得たりし所
 は何處までも確かなるの希望あり。ヘーゲルは
 一の觀念發展して宇宙と爲るといふ奇妙なる論
 理を編み出し、其の能力洵に驚くべきものあ
 りしが、此の宇宙に對し幾何の確實なる知識を
 有せしやと問へば、殆んど之を無しと謂ふべし。

彼は此の宇宙を以て全く言ふに足らざるかに想
 ひ、精確に觀察して之を調査するを無用の事と
 爲し、自然科學に反對し、ニートンを罵り、
 プリンシピアを破滅せんと努めたり。されど彼
 れが斯く觀察して調査するを無用の事と爲し
 し間、觀察の器械に愈々進歩して已まず、其
 の夢想だもせざりし事は久しからざるに續々と
 して知られぬ。
 推理は必要なるも、唯前日冥想して從來著べ
 し所の觀念を適合するに止まるは、決して知識

の進歩する所以の者ならず、徒らに考ふるよ
 りは、直接に宇宙に對し感宜に觸れ來る所の
 ものを考究するの便れるに若かず。知識の性質
 及び範圍を考ふるの不可なるに非ざれど、理に
 廣く無邊なる宇宙、眼前に横はるあるを棄て
 て顧みず、唯如何にして之を知り得やといふ
 事のみを究むるは、以て渾一の知識を得るの順
 序たりとすべからず。ジョン・ハンターの嘗に
 學生を戒め、考ふる勿れ、試みよ、考ふる勿
 れ、試みよと言へりしは、既に生理學攻究に於
 ける論旨のみにあらず。

第八章 現象の觀察

第二十五節 考ふる勿れ、試みよといふこと、
 ハセツト之を謂て曰ふ、是れ善し或る種の眞
 實なるを信するより、更に他の事の必ず眞實な
 るを考ふる勿れ、其の果して眞實なるや否やを
 試みよ、之を試みよ、之を斷定せよ、斯く斷
 ぐるの事より斯くくの事の出づるを容易に許さ
 勿れ、必ず其の果して然るや否やを試みよと
 いふの義なり。科學の歴史は知識の進歩を論ず
 り、毎頁或る程度の爲めに知識の進歩を妨
 げられしを示さざる無し、而して其の誤謬の大

多数は觀察より來れる誤謬に非ずして、考ふるより來れる誤謬なり。人は知識の權力たるを信じて、之を握るに急なるも、其の握りし所は單に影に於てのみ、即ち己れの誤れる思考の爲めに真理の光を遮りて生ぜし影に於てなりと。(「パセツト」は、文中に抑せしむる疑を答ふるべき、パセツトの解釋は此も並進の意義を以てなりとす) パセツトの解釋は此の如くなるが、是れ總ての科學に就て亦言ふことを得ん。

哲學は考ふることなりとの定義を下す者ある程にて、哲學と考ふるとは全く離るべからざるが如く、哲學より考ふることを除けば何物を殘さず、新たに試むべき餘地なきやに思はるゝも、考ふることの解釋次第にて必ずしも然らず。考ふることは試みることを併せて言ふを得れど、普通に哲學といふは普通に謂ゆる考ふることのみを指し、考へて結果を得るに急なるの餘り尙ほ觀察し試験すべき部分の頗る廣きを忘るゝの傾向あり、獨逸哲學の多くは即ち然り。同じく獨逸哲學者の中、他の多くと違ひ、汝々として觀察試験を事とせるあるも、「ロツマエ」其れきへ歸着する所の略ぼ同一ならんとする疑ひなきに非ず。ヴントは生理學を基礎として心意を攻究し、一々實驗に徴して大に得る所あり、心理學の方面に偉功を奏せるも、進みて一

般哲學に入るに及び、從來の羈絆を脱すること多しと見えず。ヘツケルは生物學を基礎として哲學を立つ、其の心と物とを一元に歸するは猶ほ聽くべきあるも、究竟一元に歸するに重きを置き、宇宙の査察法に盡くとせる觀あり。されど宇宙は斯くして判知し得るほど爾く小なるべきか。身體は人生に密接の關係あるにせよ、身體の調査を了へたりとて、以て直ちに宇宙の事を判知するを得るか。生物は人類を包含するもの、最下等より推して人類の發達し來りし所以を知るべきも、依りて以て宇宙の事を判知するを得るか。僅に此等の事物を觀察し賞識したりとて、幾億々々里に亙り幾億々々年に彌れる宇宙全體の事を判知せんは聊か思東なし。彼の如きも固より觀察試験し稱揚すべきあれど、人に關する僅少の部分に拘り、廣大無邊の宇宙を有る無きかに見過すは、形而上學者と擇ぶ所なしといひて可、宇宙の渾一的觀念は此の如くして得らるべきに非ず。

第二十六節 形而上學者は認識を以て本と爲し、「第四節」あらゆる現象は皆附隨して顯滅し、其の本を究むれば復末を問ふを要せずとするが、其の謂ゆる現象とは抑々何事を指すか、本體を假定し、其の映寫し來る所をいふか、將

本體と一にして、唯發現の形式の異なるのみなるか。此の類の事に就き種々の議論あり、或は舊想を新裝し、冥想して絶対を求むるあるが、認識ありて現象なきは有れども無きに異ならず。認識は現象ありての認識にして、眞惑の起るも此の現象よりするもの、認識を推究し、多元か一元かを決するの必要なりとも、無數無量の現象に注意より免れ居るを奈何せん。特に認識論を旨とするは善きも、現象を帯ねずして能く一切を解し得るとするは木に緣りて魚を求むるに類せずや。廣大無邊の宇宙は普通に考ふるよりも遙かに多く注意すべき者にして、其の無限無際なると共に之を絶對的に究むるの到底不可能たるのみならず、其の一部分を明かにするも猶ほ容易ならず、唯だ力の及ぶ限り之を究察するは、初より全く棄てて願み干單に閉目冥想すること遺し、生理學に據りて心意の動靜を觀察し試験するは甚だ可、生物學に據りて人類の發達し來りし所以を觀察するも亦可、攻究の目的を或る一部分に限る間、斯くするの當然なるを見るも、苟も想を逸せて宇宙全體に及ばんとせば、成るべく全體に亙りて觀察し、能はざるに至りて已むなく止まるべきのみ。(「第四節」)

第二十七節 凡そ現象を知るに程度あり、其の性質に關しては一部を以て或は全體を推すことを得、一杯の水を分析せば、以て世界に於ける水を知るを得べく、更に他の地に赴きて新たに分析するを要せず。空氣を分析するも金若くは銀を分析するも亦同じ。花崗石は成分の比例處によりて異なるれど、猶ほ一を以て他を推すべく、草木及び動物は各々其の生出する土地に隨ひて多少の差違を呈するも、一方に見る所に於て他の多くを推すに難からず。更に歩を進め、地球に元素とする所のものは、宇宙の何處に於ても元素たりとすべく、即ち光を分析シフラウンホフェル線を見て萬億里の遠きに於ける元素を辨識するを得。或は地球に就て若干の地層を觀、其の各々幾萬年を経過せしかを定むるを得。此の如く物の性質は坐ながらにして能く之を知るといひて妨げなきが、分量は則ち否らず。

第二十八節 分量は明かに數字の上に現はれ、幾億々々里も幾億々々年も、數字を以て之を言ひ顯はすに何の難きことあらず、一片紙に盡すを得べきも、而も實際に於て世人の數字の上に現はれし分量の爲めに如何に誤られたるかを察せざるべからず。幾億々々は數字として紙

隅の一行に滿たす、人は視て以て尋常事と爲し、毫も驚異するなきも、謂ゆる趙括の兵法の價値なきは此の邊より來らざや。(趙括の兵法を以て簡の極めで誤れば也)趙括は如何にして出兵すべきか、如何にして山に據り野に陣して戦ふべきかを論じ、座上優に良將たるの資格を具へしかど、實戰に臨みて一敗地に塗れしは他の故ならず。兵を率ゐて一日十里を進むは、容易に似て容易ならず、況んや懸軍長驅して數百里を行くこと、老将は聽いて談何ぞ容易なりと曰はん。分量は數字に詳らかにするも、實境に臨まずんば十分に會得し難し、富士山は標録を倒にしたるが如く、之を望めば絶頂に遊覽するの妙なるらしきも、愈々登れば頗る疲勞を覺え、往々苦痛を感ずるに至る。何人も自ら以て善く知れりと爲し、而して愈々境に臨んで喫驚するは、實に此の分量なり。一町の距離は僅々言ふに足らざるも、深き一町の谷や、人其の岸に臨み俯瞰して戰慄す、上に獨木橋を架せりとせんか、二三尺の深さに架せるの疾驅して往返し得るに拘らず、進まんとして一歩だも出でざることあり。但だ屢々踏みて慣るれば、則ち漸く易し。

夜間空を仰いで群星の燦然たるを見る、是れ

即ち滌然なき宇宙なるも、人は之を望み見て驚くべきを感ぜず、點々螢火の如きを見て螢火の如く看過し去る、或は其の各々地球に幾億倍なることを知り、兒女に語りて曰ふ、空明の群星は皆悉く螢火の如く見ゆるも、實は極めて大にして、一々世界を形成する者なりと、されど自らも數字上に之を説くを知るに過ぎず。吾人の棲息する地球は、直徑一萬二千七百基米、數に示すの容易なれど、直徑一萬二千七百基米の球は大略何程の者なるかを想像し、目のあたり視るが如くするのは殆んど得て能くすべからず。之を想像に浮ぶるには、山に登り、水を渡り、其の幾何倍なるかを測り、辛うじて彷彿の間に庶幾すべきのみ。山に登らず、水を渡らず徒らに想像するに止まらば、たとひ考へ得たりとて甚しき誤謬を免れざらん。己れの住する都市に割合はして他國の都市を想ひ、其の隆盛壯大なるを感歎して已まざるに拘らず、己れの棲息する地球を想ひて一小球に過ぎずと爲すは實に地球の大きさを想像するの困難なるに出づ。地球さへ猶ほ然りとせば、太陽は地球の一百萬倍なりといふこと、唯之を口にするに止まり、目のあたり視るが如く想像すべからざる、言ふ迄もなし。太陽は地球に一百萬倍し、群星の中、太

千年萬年を經るも決して知ること能はずとするあり、稱して不可知的と爲す。不可知的に推理よりするあり、觀察よりするあり。カントの如き、スペンサーの如き、共に推理よりして不可知的を認め、如何に現象を究察するも其の本體を知ること能はず、單に意識に現はれ來りし所を知るに止まるとせり。されど推理よりする不可知的は解釋次第にて可知的たるべく、現に不可知的を否定せる說一にして足らず、且つ不可知的を言すも、其の何たるの知られざるのみにて、少くとも存在の認めらるゝは其れだけ知識中に入り込める者にして、絶對的に不可知的と爲すべからず。之に反し、觀察よりする不可知的は解釋に依りて變せず、如何に解釋を下すも、依然として不可知的たるを失はず、唯多少時間問題の注意を要するのみ。(昔は地理に取扱す不可知にして、觀察よりする不可知的の行方無をたり) 間はざり。觀察よりする自家意識と稱してはなすべし。

第三十節

當代人の實地に就て觀察し得ざるもの擧げて計へられざるが、中に早晚然るを得るの明白なるあり、ヒマラヤの絶頂を窮めしは古來嘗て之れなく、海拔二萬九千尺の高山に登るの全く不可能たるらしきも、氣球の是れ以上に掲りたる以上、後日之を能くし得ると看做すべし。(千九百四年ペルソン及びグースター) 大洋の底に達

するも全く不可能事らしけれど、これ亦急に斷言し難し。今日まで屢々探検して屢々失敗に終りし南北兩極も、何時か十分に觀察せらるゝの口あるべく、其の他地球上に在る所の多くは、口下世に知られずとも後知らるべきが、獨り地球の内部は如何にするとも見る能はず、其の世に知らるゝ地皮は地球の直徑一萬分の一、多くとも數千分の一のみ、其れ以下の地層の如何なる狀態なるやは、將來他の事より推定し得べきも、直接の觀察は永遠に斷念する外なし。

月は地球を距る僅かに十萬里、其の地理の知られたる、我が地球に於けるに譲らずといひて妨げなく、火山、構造の說明に頼むあれど、是れ亦甚しき困難とせざるが、而も其の常に殆んど同一の方面を亮し向くるに因り、裏面の大部分は永遠に互りて判明せず、如何に苦心して觀察するも益なからん(地球の左側の極、幾分互に掛り無き) 最も近く最も小なる月さへ猶ほ此の如くんば、地球より四千萬里にして地球に一百萬倍せる太陽の如何にするも判明せざるの多きこと言ふ迄もなし。昔日に比して明白を加へたるの少からず、向後更に益々知らるゝならんも、其の程度は知るべく、到底人智を以て觀測すること能はず、又推察をも及ぼし得ざる所あり。太陽

が諸遊星を率ゐて運行しつゝあるヘルケレス座の或る星に至りては、全く判明を缺くも當然の事にして、今日の望遠鏡及び寫真術に依りて觀察し得らるゝ約一億の群星中幾分か狀態の知られたるは僅々計ふべし。光線の地球に達するに數萬年を費して始めて到るといふ遠距離に散在する星の如き、たとひ光に依りて觀察し得らるゝだけ觀察するも、現在尙ほ存在するやは、數萬年を經過せる後ならずんば確かむべからず。

天體用の望遠鏡の一層精良と爲り、他の諸器械も一層進善せば、以て計へ得る星辰の數は愈々多きを加ふべく、其の一々の恆星に附屬せる遊星も亦漸く知られ、内部の狀態の觀測せらるゝも少からざらんが、假りに今後一千年を經若くは一萬年を經、現に目眩せる星の宇宙全體一として明白ならざるなきに至るとするも、空間は則ち限界なきなり、如何に大漠の廣大にして殆んど究むべからざるにせよ、空間の限界なきに比して極めて微小なるを免れず。地球の月を伴ひて太陽を周り、太陽の遊星を伴ひて或る中心の星を周るより推せば、現に在る所の一億の群星は幾多同様の團體と共に更に大なる團體を周らんも知るべからず、然るに現に天空

に繋げる群星の中にさへ光線の地球に達するに數萬年を要するあれば、此より全く隔絶せる圓盤の帶星は、光線地球に達するに幾千萬年幾億年を要するも測り難く、恐らくは遂に到達すること無しとして差支なし。此等の星を知るには光線以外の或る力を藉らざるを得ず、斯かる力を活用する方法を發見するも、限り無き空間に存在せる一切の物を知らんは到底爲し得べからざる事にして、要するに空間を究むるは人の想像をだも許さず。(空想を取らざる事を知るを得べきを讀)

第三十一節 之と同じく過去及び將來に就て知られざる所の早晚知らるゝあるべく、人類の歴史も既に記録の前に出で、能く一萬年に遡るを得、尙ほ原人時代を尋ねて數萬年に遡り、更に現在の地形を成す迄に數百萬年を経過せること及び其の順序を知るべし。加ふるに月の嘗て地球より離れしこと、及び地球の嘗て太陽と合體し直徑三十億里に互れる巨大の球たりしことも、今の遊星に據りて推斷するに難からざるが、是れ以前は頗る茫漠なりとせざるはず。太陽系を始め他の多くの星辰が一大中心を求め、絶大絶廣の星霧たりしことも幾許か考へられざるに非ざるも、其の以前は則ち何如、

一の知るべきなし。宇宙の成りしは決して突如たりしに非ず、量るべからざる以前より引き續き引き續き成立し來り、無限なる時間に如何なる變化を遂げしやの知るべからずんば、現に觀る所を盡く推し究め得るも、過ぎ以前に起りし幾多の變遷は斷念せざる能はず。既往に遡りて測り知るの難きのみならず、將來の事も亦知り易からず、今人の知能にては百年後を知るさへ困難なるが、更に進歩せば優に之を能くすべく、或は二三百年乃至一千年の後を知り得るとするも、一萬年の後を如何と見る。地球の内部の冷却せば如何なるべき、太陽は後半に如何なるべき、夜間天空に見ゆる群星の總ては後如何なるべき、以上の問題も盡く解き難きにあらず、能く推して知るを得るとするも、無限なる將來に於て如何なる變化を爲すべきやは到底知り得られざる事なり。吾人の知る所は無限の空間と無限の時間との中に在りて喩ふべからざる極小部分に止まる、今後人智の益々發達し器械の益々進歩するに伴ひ、知り得べき範圍の大に擴がるべきも、無限の事を週く知らんは全く不可能事にして、無限は永遠無窮に不明なるに至る。(一時を以て有限すべし、然し無限なるもの有りて無限の時間と空間を以て有限すべし、然し無限なるもの有りて無限の時間と空間を以て有限すべし)

第三十二節 推理よりする不可知的は必ずしも不可知的にあらず、カント及びスペンサーの以て不可知的と爲し、所の者は、他の多くの人々は之を不可知的とするを肯んぜざるが、而も觀察よりする不可知的は全く不可知的にして何人も之を奈何ともする能はず。觀察よりする不可知的は眞の不可知的にして、推理よりする不可知的の必ずしも不可知的ならざると違へるに、世人は却て推理よりする不可知的に重きを置き、觀察よりする不可知的を不問に附するの傾向あり。夜間天空を仰いで銀河の横たるるを見るは、是れ實に吾人の世界とする所の極限にして、其の暗黒なる部分は即ち無限に及べるもの、前方に果して何物の存在するやは如何にするとも知るに由なし。顧みて過去を憶へば、何れの時代に遡るも際限なく、將來を想ふも亦同じく際限なく、此も彼も皆適として知ること能はず。かく吾人は不可知的の間に在りて、而して不可知的に就いて少しの悟む所あるなし。スペンサーは初め推理して不可知的を認めしが、晩年に及びて更に空間の無限なるに喫驚せり、眞に不可知的とすべきは即ち彼に在らずして此に在り。無限の空間には不可知的なるもの存する幾何なるを知らず、無限の時間に

も不可知なるもの存在する亦幾何なるを知らず、斯かる不可知なる空間と時間との中に在りて現象と本體とを對比し、而して本體の判明するとせざるを云々して相争ふは寧ろ滑稽に失せずや。(唯際よりする不可知の無意味に於て論議せざるべからず) 不可知的は吾人の目を蔽ちて視る所に在り、徒らに本體の知り難きに苦み、之を探討するに専らなるが如き、抑も此の宇宙を如何にせんとするか、宇宙の事は既に悉く判明して復問ふを要せずとするか、知らざるを知らずとするには先づ此の邊より決定するに若くはなし。然るに世の冥想者は概ね之を忘る、蓋し全く之を知らざるに非ざるも、唯數字上に物を観て輕々に斷じ、眞に其の絶大なるの驚くべきに想ひ到らざるに在らず、否らば何ぞ唯人事のみ攻究し、以て宇宙全體の事を判知し得べしとせんや。

第二章 可知的宇宙

第三十三節 空間は無限、時間は無限、此の無限の内に如何なる事物の存在するやは竟に得て究むべからず。現に視る所の星辰の團體は無限の空間に在りて一塵を形づくるに過ぎざるが、僅に一塵を形づくる此の團體に在りては、遠

距離の星は光線の地球に到達するに數萬年を費すとせば、若し此の團體以外、更に他の團體の存するある、則ち其の團體に屬する星の光線の地球に到達せんこと、如く到達すと假定し、幾億年を要するやも知り難し。幾億年前なるの既に到達せるあるも、視官に觸れ得ざること論ずるを俟たず。無限の空間には、我が地球の屬する星辰の團體の外、他に團體の之れ無きやも知るべからず、又之れ有るの多きやも知るべからず、或は多くの團體相聚りて一大團體と爲り、多くの大團體相聚りて更に絶大の團體と爲り居るやも知るべからず、其の孰れが當り軌れが當らざるやは皆誰かむるに由なし。星の星霧より成りしは、既に星霧の星形に變ぜんとしつゝあるに因りて辨知せらるゝも、(五十六節) 星霧以前は則ち如何なりしか、無より有の生ずべきに非ざれば、或は眼に見えずして而も能く活動せしやも知るべからず、又現在の世界の如きものが滅壞して氣體に變ぜしやも知るべからず、無限の過去に何の變化ありしやは窮極すべくもなし。過去に於けると同じく將來も然り、自ら熱を變ずる星が漸次冷却し、終つて空氣なく水なき焦土の地と化するの、月の現狀に察せらるゝと共に、或る大なる星に引き

付けられて此と衝突し、衝突の結果再び前の星霧に復ることの想像せらるゝが、其の同一事を繰り返すべきや、將前よりも遙に複雑と爲るゝとするも、其の將來の果して如何なるべきやは漠として知られず、過去と將來と均しく無限、無限の時間は何の變化ありしや、何の變化あるべきやは窮極すべくもなし。カント及びスペンサーの不可知的を言ひしは、其の事の知るべからざるを言ひしに止まり、存在は明かに認めしものにて、其の存在を認めしだけ可知的といふべきが、而も此の無限の空間と無限の時間との内、現に視る所の星辰の團體を外にし、如何なる事物の存在するやは全く知ること能はず、存在するや否やも知られざるは眞に不可知なる者ならずや。無限の渾に存在さへも認められずして全然疑問に屬するある以上、攻究し得る限りを攻究して原因結果の斷明かなるに及ぶとも、絶對的に判明せんことを期待し難く、常に幾許か知られざる所あるを許さざるべからず。無限にして究むる能はずんば、偏く絶對的に判明せりといふも、其の究むる能はざるに比例して實に皮相たるに過ぎず。されど現に視る所の星辰の團體を除き、一切

の事物永遠に知る可らざるかといふに、必ずしも然らず、天王星の運行に據りて天王星の存在を未だ見えざるに違かめしと同様、我が地球の属する星雲の廣域を攻究するの節り、他に斯く斯く、剛體の存在せずんば決して彼ら如くならざるべきを推量し、以て他の剛體の存在を知り、或は其の致を知り、或は其の力なるもの大さを知るに至らざるを必し避し。且つ星雲に關する攻究の益々進み、其の星雲と爲らざりし以前に、默意を知るを得、星と星との衝突に因りて星と爲るか、衝突する他の状態、移るかをも知るを得、かくて過去も將來も共に一層の明白を致さんも測られざるが、而も此等ノ事は急速を期すべきに非ずして、漸く判明するとも、其の未だとせざるをばす。漸く判明するとも、其の未だ判明せざる時に比し極めて僅少にして、無限は依然として無限たるを失はず、隨て如何に明白とする所も常に幾分の不明白を免れず。

第三十四節

不可知論は不可知的として措いて問はず、可知論の對照、何處なるやを尋ねるに、之を可成むること特に難からず。不可知論は、無知なるを以て、夜間天を仰いで銀河の横を眺れば、處々支を分つも、總じて輻満き一線を見る、之を離れて星の筋をもなし、其

の海峽は遠路の名に非らず長き電線を成すは、無数の星辰の積み重なりて見ゆるが故にして、恰も一大盆の中に在りて其の縁邊を望見すると同じく、究竟扁平なる剛體とすべし、宇宙の形を問ふものあらば、扁平なる圓錐の空間に懸れるなりと答へて可なり。而して此の盆に仰たる宇宙の中に散在する星辰は、個々獨自に存在するにあらず、孰れも一定の規則に依りて運行しつゝあり、時として互に衝突するあるも、最大多数に就て撞すれば、小なるは大なるを運り、大なるは更に一層大なるを運り、順序正しく行動す。乃ち吾人の宇宙とする所は決して無限にあらず、其の限界は明かに照に映じ、其の限界内に於て著明列星の者は、一定の規則を守らざるなし。吾人の宇宙とする所のもの外、更に他に斯かる宇宙の存在するや否やは、尙に今日不明なるのみならず、永遠に互りて不明なるべきも、吾人の以て宇宙とする所の限界ありて形體を備へ、秩序井然たるは少しも疑ふを要せず。

宇宙といふ語は

淮南子に往古來今謂之宙、四方上下謂之宇とありて時間空間を併せ言へるなるが、今日には二個の譯字に相當す、即ち一はユニヴェルスに當り、一はコスモスに當る。

ユニヴェルスは廣域の義にして、ありとあらゆる物を包括し、萬有と譯するも差支なし。コスモスは秩序の義にして、ありとあらゆる物の能く順序を保つより出でたり。ユニヴェルスとコスモスと、兩者がら宇宙を言ひ表はすに適し、其の孰れにても可なれど、兩つを合せるに若くはあらず、即ち宇宙とは合る所の總てが順序正しく存立すといふに屬す。元宇宙といふ語は茫漠に失して易きが、此の兩つの意義を合せりとせば、稍々明晰に成し。天を仰いで銀河の横はるを觀れば、宇宙の限界は明かに窺むべし、而して大小無数の星は皆各々一定の規則を以て運行しつゝあり、宇宙の事實事物たるは疑ふべき無し。

第三十五節

吾人の以て宇宙と爲す所の者は實に此の如くなるが、之に關する觀念は古來、唯三段階の變遷を經たり。最初は天地人の觀念とすべく、即ち上に天の覆ふあり、下に地の載するあり、人其の中間に位す、人は萬物の靈長にして、一切の事物悉く人の爲めに在すといふもの是れなり。自前代迄の學問は天地人に次いで天體の次第に判明し來り、吾人の住する地球は静止不動の者ならず、一個の星にして他の遊星と同じく太陽を周るの知られたれど、多くの

星は空しく耀くのみにて特に何の意味あるに非ず、蓋するに地球は宇宙間最も主要なりといふものは是れなり。ライブニッツは曰へりき、此の地球は彗星中にて最も善美なり、否らずんば何故に神が人間を此の地球に住はしめしかを解するを得ずと、(「善美」及「善」を「善」に譯す) 彼れ固より地動説を知らざるに非ず、地球の彗星に在りて殊に小なるを知らざるに非ざりしかど、從來の習慣に由りて善く思ふせざる能はざりしなり。(「今日ても、地球の彗星を善く思ふ者、無き」) 然る後望遠鏡及び其の他、器械に依りて天體の知識大に進み、現に觀らるゝ限りの星を計ふれば一倍に近く、中に大なるあり小なるあるも、其の多くは彗星を伴ふべきものにして、普通に星と呼ぶべきは少くも十倍以上に出づべく、更に小なるを擧げて流星、類に及ばば、地上の沙よりも多からん。斯く無數の星の體系を作りて運行し夜間望見するが如き壯觀を現はすは、決して偶然に然りとすべからず。一倍以上、十倍以上、計ふべからざる無数の星が、各々順序を遂うて運行すといふのみにて、單に無機物の無意味に存するに非ざることの自然に懐に浮び來るべく、之を攻究すれば攻究するほど益々其の大なる有機體たるを知り、宇宙は何ぞやとの問に對

し、大なる有機體と答ふるに躊躇せざることと爲らん。(「蓋するに地球は宇宙間最も主要なり」といふものは唯一の比喩にあらず、全くの實事、全くの實物にして、扁平なる圓體亦も盆の如きもの活動し、明かに其の形體を認め、明かに其の動作を認むべく、夫の生物學に據りて動植物を調査するが如くに調査し、生理學に據りて人體を調査するが如くに調査すべき筈なり。但だ其の範圍の餘りに調査するが爲めに之を調査するの極めて困難なるも、要するに大小の差に止まり、斷じて調査の不可能なるを決定すべからず。

現代の星學は宇宙生理學の初歩といふべきもの、而も宇宙を攻究するに先づ此に據るの外なし、此に據らざらんには、如何に考ふるとも何の得る所あらず。宇宙は冥想して創造すること能はず、想像を以て變更すること能はず、全くの實事、全くの實物、明かに眼前に見ゆる者にして、何の疑ふを要せず、又何の疑ひを容るべからず。夜間天空を仰いで群星の耀けるを觀る、是れ即ち吾人の宇宙とすべきもの、夫の光輝なき黒闇たる底なきの空間に別の宇宙ありや、將無邊無際に入りて一物の存在せざるやの知り難きも、可知的宇宙の大なる有機體なる

ことは暗々として明けし。 (宇宙を生理界と爲し、此故に之を「眞の體」と爲す) 第三十六節 宇宙の總括して目せられ、秩序ありとして目せらるゝは昔時よりの事にして、時代を経ると伴ひ、其の總括する所の愈々多きを加へ、秩序といふ事の愈々複雑に解せらるるを見る。(「自著」) 夜雷燃燭として眼に映ずるは、今猶ほ昔の如く、北辰は依然として北に在りては、大形に見ゆる者は眞に大なりと認められ、月と日と交代して地球を照らし、星は其の附屬物に過ぎずとせられたり。次いで月は必ずしも大なるに非ず、星辰の中より大なるあるの知られしかど、地球の不動にして天體、盡く之を運るとすること舊に異ならず。次いで地球も亦一の彗星にして、他の彗星と同じく太陽を運るの知られしも、而も太陽を以て宇宙の中心なるかの如くに思へり。然る後夜間天空遙に白雲の飄舞せりと見ゆるは無数の星辰の相重疊せるが故にして、其の一角に在りて他の一角を眺むるも現に吾人の瞻ると大同たるを失はず、地

ざる變異あり。往昔攻究の足らざるは空想を以て補ひ、空想を以て補ひしも因襲の久くして争ふべからざることと爲り、之を變ずるに多くの不愉快を感じ、已むを得ざるを看て失望せること淺からず。初は死して魂地に止まり魂天に昇ると爲し、或は天使に導かれて神の前に到ると爲し、が、漸くにして天に上もなく下もなきことの知られ、天に昇るといふの空想に過ぎざるの確めらるゝや、更に轉じて謂ふ所の天は有形に非ずして無形なり、物質的に非ずして精神的なりとの解釋を下し、幽る狼狽の體らくなりしが、實は爾く狼狽すべき事にあらず。〔百八十六頁、百九〕夫のコロムボは西方より世界を回航して印度の寶庫を開かんとせるとか、或は日本に黄金餘きを聞きて此處に到らんとせるとか傳ふるが、其の西方を指して航行し果して陸地に着せしや、己れ自らは遂に印度に到達せりと思ひしも實は然らず、豫期せし寶石黄金をも發見し得ざりしかど、南北亞米利加は實に廣大なる土地にして、發見當時の人は寶石を取り黄金を取る能はざりしにせよ、幾百年後の今日には大なる文明國の興り、富強世界に冠たるを見る。繪畫及び彫刻に、基督若くは天使の手を舉げて天を指さすを覽ること幾何なるを知らざる

が、其の手を舉げて指させる天は何等敬崇すべき物の存するに非ず、唯幾多の星辰の位置せるに止まり、究竟手を下げて下を指さすと異ならざれど、而も一億近き大なる物體が秩序整然として運行するは、實に驚嘆するに勝へたり。宇宙を總括する觀念は、往昔日月を群星の主宰と爲し、時代と較べ、今日に在りて幾萬倍の大を加へたりと謂ふべく、又僅かに遊星の運行を知りし時代と較べ、秩序は實に千種萬態を通じて、一貫するに至れりと謂ふべし。殆んど無數の星が無限の空間に懸りて綿密に順序を逐ひて動きつゝあるは、決して無意味なりと解し難く、幾年代を累ねて査察し來りし所に據れば、此の宇宙は眞に驚くべき者にして、今は最早や神の何處に在るを尋ねべき時ならず、絶大至廣なる有機體の如何なるものなるやを攻究せば、復他を顧みるの違なげん。當代の有らゆる科學は此の絶大至廣なる有機體の調査を事とするもの、若し人あり自然科學の何なるやを問はゞ、一塵に均しき我が地球に在りて如何にして宇宙大なる有機體を攻究すべきかといふに力を致す者とすべし。眇たる人體を攻究するにも、尙ほ生理學、解剖學、組織學、醫化學等あるより觀れば、絶大至廣なる宇宙を攻究するに如

何ばかり多くの學科を要するやは誠に測り知るべからず。現に自然科學として存するは管を以て天を窺ふに似たるも、調査すべき事項は眼前に在り、夜間幽かに天空に浮べる銀河是れにして、之より離れ之に類せる者の存在するを觀ざるは、確かに宇宙に形體あることを言ひ得べきが、地球に居りて之を調査せんは容易の案にあらず。多くの星の中、光線の地球に達するに數萬年を費すありて、最大遠距離に在る星の狀態は竟に知り難し。望遠鏡にて能ふ限り之が調査に従ひ、近來益々成功に赴き、遊星の地形の知らるゝ略ぼ地球の地形の知らるゝと同じきに至れるも、恆星を觀測するに方りて其の效力極めて薄し。今はレンズの直徑三尺なるあり、増して五尺とし、一丈とし、而も能く光線を中途に遮らるゝ無からしめば、依りて大に明瞭を加ふべく、反射鏡も亦同じく然り。此の如き大口徑の望遠鏡は今俄に得んことを望むべからざるも、子孫の世に之を期して妨げなし。大口徑なる望遠鏡の成れりとして、十分の觀測を遂ぐる能はざるも、今日未だ明かならざる所の大に明かなるべきを信すべし。

第三十九節 宇宙は觀察するのみにても既に甚だ困難なり、星學は星一般に就て攻究する

が、目下知られたるの尙ほ僅少なるが故に、斯く漠然たる有様にて経過し得れど、實は多くの分科の下に分類すべき筈。星の運行及び構造を攻究するは物理学及び化学の最も興るべき所なるが、現在の物理学及び化学は猶ほ地上の現象を注とし、其の星に及ぶは寧ろ餘業たる觀あり。星學にして一層進歩せば、物理学と化学とは共に範圍を擴大し、天體の攻究に任ずるに至るべく、兩ながら此の大なる有機體の組織を研究すること爲らん。地質學といひ、生物學といへば、今は唯地球のみに限れど、總ての星は皆地質の尋ねべきあり、或る星は生物の尋ねべきあり、凡そ自然科学と稱せらるゝは、宇宙大なる有機體を調査する上に於て猶ほ甚だ知らざるあり、今日の智力にて奈何ともし得ざる所なれど、將來何様の方向に進むべきかと云へば、恰も生理學、解剖學等を以て人體を攻究すると同じく、有機體として宇宙の形態及び構造を攻究すべしと斷言せざる能はず。自然科学は無意味なる物體を攻究するものならず、以て雜駁の有機體を攻究するは、偏狹なるも甚し。宇宙其物は大なる有機體なり、大なる生物なり、隨て之が攻究には宇宙的生理學、宇宙的解剖學、宇宙的組織學、宇宙的醫化學ともいふべき

ものを要し、現在の科學は其の準備に過ぎずとす。一、科學の目的は、形たる人體に在りてさへ猶ほ判明を缺く少からざれば絶大至廣なる宇宙の能く判明せんは到底期すべきに非ずと思はれんも、或を逐ひて諸科學の進歩するは、即ち宇宙の何なるやの少しづつ判明するものと認むべし。

第四章

有機體說の變遷

〔精くは宇宙の有機體を體統せる說の變遷〕

第四十節 宇宙を有機體は有るものとす。人の自然に念ひ及ぶべき所、一たび念ひ及べば復之を疑ふの困難なれど、之を明瞭にするは近代諸科學の任にして、猶ほ大に將來を待たざるべからず。古來の有機體說を稽ふに、時として客觀的なるあり、時として主觀的なるあり、時として相互に錯綜せしあり、而して客觀的の入り込み易くして却て進歩の晚かりしは、正に主觀的の入り込み難くして却て進歩の早かりしと反對なりと見ゆ。

多少知識ある者が靜坐默想すれば彷彿として小我大我の現はれ來り、隨て自己と宇宙を合同せしむるの傾向あり。孟軻の萬物皆備於我矣といひ、將浩然の氣を説き、塞于天地之間、其

爲氣也、配義與道、無是餒也といへる、柳子厚の悠悠乎與灑灑乎、而莫得其涯、洋洋乎與造物者遊、而不知其所窮といひ心凝形釋、與萬物冥合といへる、共に然り。佛主之於印度人は最も冥想到に耽り、常に五官を閉ぢて思考を專にするに務め、其の佛敎として發達せし中にも、百界千如、三千世間、一念の中に在り、若し心無くんば已む、允爾も心あれば即ち三千を具すと言ひ、解釋の區々なるにせよ、唯心説よりして汎神敎に及ぶの跡あり。希臘哲學にも亦此に類せるの多きが、比較的に觀察の進みし支け、單に冥想して神と合一せんことを欲せるもの外、更に現實の世界に重きを置き、神の如何にして斯く表現するかを理せんと欲せるあり。同じく汎神敎ながら精神的方向よりせるあり、物質的方面よりせるありて、クセノファネスとヘラクリトスとの差を生ぜしが、後世汎神敎として成立せるは主として主觀的のものにし、客觀的なるは多く行はれず、殆んど客觀的汎神敎なしといふ有様なり。是れ一は基督教との關係に因り、又一には客觀的に攻究するの困難なりしに因る。

第四十一節

基督教は汎神敎を好まず、人格を具へし神の事實上に存在することを望み、人

の冥想して神と同一體と爲るを想ふを畏れ多き次第と爲せるが、均しく汎神教にても、主観的に考ふる方にては神の存在を否認せず、純然たる無神教に非ざるを以て嘗て甚しく排斥されしことなし。人格と多神あり、名之を別つたり、其等第一新約の中、神は愛なり、愛に住める彼は神に住み、神は彼に住むとあるは、汎神的に解釋し得べきものにして、新プラトーン派の汎神教は此と平行して行はれ、動もすれば合一するに及びり。中世の學者にして基督教を奉ずる者は寧ろ斯かる傾向を帯び、陽に人格ある神を信じながら陰に汎神的に解釋せり。ギオダルトノ・ブルーノは新たに汎神説を鼓吹せし者、デカート及びスピノザは共に少からざる影響を被りたりしが、中にもスピノザは最も論理的に汎神教を敷衍したりとせらる。(スピノザは「神の神を説く」)

されど獨逸哲學者は多く此の調子にして、カントの如く批判的なるを除き、苟も獨斷的に流れてし哲學者、即ちフキヒテ、シェリング、ヘーゲル等、皆幾許か汎神説として目するを得、而して基督教の存在論は之を排斥せず、略として此等の人の言を引いて自ら強うする所あり。此の如き意味の汎神教は宗教と衝突せず、間々衝突して攻撃を受けしことあるにせよ、多數の上

より觀れば、宗教界に於て默許のまなりしのみならず、往々獎勵せられたりと謂ふべし。然るに客觀的に考ふるに至りては、汎神教は直ちに無神教と解せられ、又無神教とするも差支なし。客觀的に考へて神の存在を説けるなきに非ざれど、客觀的に考へて存在の認められし神は、基督教の神と相一致し難、爲めに學院より迫害を被り、發達を妨げられたること少からず。而も客觀的に考ふるは確かに眼界の廣きものにして、彼の徒らに眼を開けて冥想すると趣を異にし、確實なる知識を得るに庶し。ギオダルトノ・ブルーノはコペルニクスの地動説に伴ひて汎神教を立てし者、頗る客觀的の攻究を交へ、日月星辰は盡く神の標章、直ちに此の宇宙を指日し神の表現とすべし。宇宙論を以て學問として、人格する者(神)を考へらる、と云へりしが、種々の行き違ひよりして学院より迫害を受け、後遂に火刑に處せられたり。ブルーノの説きし所は、新たに科學的に宇宙を觀察するの權輿として需すべく、當時不十分ながら天文の著く判明し、此と伴ひて星の運行を調査し、其の規律正しきの決して偶然ならざるを想ひ、茲に神の存在を認めしなり。後天文の愈々判明し、自然科學も益々進歩し轉り、宇宙の

機體説も更に益々精細を加ふべき筈なりしが、常に学院の勢に壓迫せられて、然るを得ざりしなり。神の存在を認めてすら、直ちに星辰を指し神の表現なりと明言するの困なるより推す、則ち初より神の存在を認めざる場合、如何の窮途に達せんや知るべきのみ。

第四十二節 神といふ觀念は習慣上何人の頭腦にも浮び出づれど、必ず先づ神の存在を確定して、然る後に一切の攻究に及ばざるべからざといふことなし。或る攻究の結果として神の存在を認むるならば兎も角、初より斯かる事を假定して攻究に従事するは完全なる攻究法たりとするを得ず。故を以て宇宙の攻究を事とせんとする者は神の存在を假定せざるの稀れならざるが、是れ宗教家の癖で最も忌むべしとし、有らゆる惡名の下に壓迫を加ふるを厭はざる所、虚心平氣なる宇宙觀の擧げべくして出でざりしは、概れ之が爲めなり。且つ自然科學を修むる者は一部分の攻究を専らにして殆んど此に全力を注ぐより、更に全體として如何なるやに就て考ふるの違なく、又此に就て考ふるの興味を有せず、居常器械と首引し、偏に之に違はれて他を顧みず、且つ漫りに臆説を逞しくせずといふ謙遜の心よりしても全體に互れる臆説を取

てするに躊躇せしかば、自然科学より觀て宇宙の有體たり生物たるを説けるは極めて少し。彼れや是れやにて客觀的に汎神教に類するは、主觀的に汎神教に類するより遙かに難し、客觀的に宇宙の活動を認むるは徒らに冥想して能くすべきに非ず、多くの歲月を費し多くの器械を用ひて漸く考へ及ぶべきのみ。

されど星學者にせよ物理學者にせよ、思考力の超秀せる者は勢ひ茲に考へ及ばざる能はざりき。ブルーンは身の宗教家たるにも拘らず、宗教の傳説を奉信するを拒み、千歳争はれざるアリストテレス哲學を爭ひ、地動説の尙ほ紛々たる際、早くも太陽系の唯一ならず、斯かるもの他に多く之れ有るべきを言へりし程にて、宇宙に對しても世の擾々たる者と同じく之を無意味視して満足する能はず、其の洪大なるに驚き、其の巧妙なるに感じ、直ちに宇宙を以て神の表現なりとするに至れり。ニュートンが人の感官に依りて物を知り、神の感官に依らずして物を知り、神の總てを包含するより、空聞を目して神の感受官と稱するも不可なしと言へるは、其の物理上に於ける思考力の大きなに似合はず、猶ほ宗教の迷信に逐はれたりとせらるゝが、實は則ち然らず、(宗教系を宇宙の構造を引用する

求め空の如く何の) 林檎の地に落つると同一の理法に因りて星の運行を看取せる位、到底此の宇宙を無意味に存在すとするに堪へず、何等か生命あるやう考へざらんと欲して得ざりしなり。單に一部分の攻究を専らにせば則ち已む、苟も宇宙全體に及りて究察せば、必ずや此の邊に念ひ到らざる能はざらん、ニュートンは單に信教よりして茲に到れるに非ず、恰も美術家が獵師樵夫の意に介せざる山水の景を觀て其の美に打たるゝと同じく、尋常人の以て不可思議とせざりし此の宇宙の行動の巧妙なるを驚歎せしなべしと思はる。フェヒネルは物理學に

長じ、心意物理學の基礎を造り、ヴントをして之を大成せしめしだけありて、宇宙を輕くしく看過せず、星辰の團體に精神の滿つるを主張せり。其の説く所は汎神教なるも從來の冥想的なると違ひ、頗る物理を加味せる所あり、心意物理學に比し不十分なるにせよ、世に輕んぜられ居るが如く輕んずべきものにあらず、却て大に見るべき無しとせず、但だ初の神の存在を假定せしが爲めに混亂を避くる能はざりしならん。眼識の透徹せることブルーンの如く、ニュートンの如く、フェヒネルの如くんば、絶大至廣なる宇宙の何等かの意義あるを看取するに相違

なければど、宇宙其物に生命ありとし、人格的神の立場を失はしむるの類は、直ちに基督教より無神教呼はりせられ種々の點に不便を被るを免れず。ニュートンの神力を重んぜしは宇宙の狀態より考ふる所ありしに囚らんと、若し少少此の邊に介意せる無きにあらず、若し全く介意するを要せざりしならば、更に一層攻究を極むを得、而して續いて出でし科學者も亦多く宇宙に生命ありとして攻究するに力を用ひたるべし。

無神教なる聲の極めて惡く人の耳朵に響くを以て、多くの學者は此の如き事の爲めに累を受くるよりは成るべく靜かに己れの修むべき所を修むるを欲し、障らぬ神に崇りなしとせるが、元宇宙は決して無意味のものならず、幾許か有機體と見做すべきものなるは、自然に人々の考へ及べる所にして、かゝる口調の認むべきは一に足らず、ダルウキンは明かに之を言はざりしも、生物の細胞の相集りて一の小宇宙を形成するを言へるは、言ひ換ふれば則ち宇宙の大生物たるを意味すとすべし。

第四十三節 知識の發達は最初客觀的の多

きに似たれど、稍と發達せる以上、主觀的に考察して然る後客觀的に發明するの普通の順序たるを見る。進化の理は夙に主觀的に知ら

れ、吉来類(キライ)の誤(まち)頗(お)多(お)し、支那(シナ)にも之(これ)れ有(あ)り、印度(インド)にも之(これ)れ有(あ)り、希臘(ギリヤ)にも之(これ)れ有(あ)り、特にフキヒテ、シエリング(シエリング)及びヘーゲル(ヘーゲル)は十分に此(こ)の理(こと)を言(い)ひ表(あらわ)はせりとすべきが、而(しか)も進化論(ジブン)の世(よ)に重(おも)きを占(お)めたるは、其(その)客觀(きやくくわん)的に事實(じじつ)を引(ひ)きて一々(いちいち)證明(しやうめい)せる後(のち)の事(こと)なり。宇宙(うちゅう)の有(あ)り機體(きたい)たり生物(せいぶつ)たるも主觀(しゆくわん)的(てき)の況(きやう)神教(しんきやう)として世(よ)に知られしも、之(これ)を客觀(きやくくわん)的に確言(かくげん)せんとするに至(いた)りて多く(おほく)の疑(うたが)ひを免(ま)れざりしが、次(つぎ)いで自然科學(じぜんがく)の進歩(しんぷ)せるは、即(すなは)ち其(その)有(あ)り機體(きたい)たり生物(せいぶつ)たるを證明(しやうめい)し始めんとせるなり。歐洲(おほく)にても今日(こんにち)如何(いか)に之(これ)を證明(しやうめい)するとも、宗教(しゆきやう)上の迫(せま)害(がい)を被(あ)る虞(あや)なく、たとひ之(これ)れ有(あ)るも、極めて微弱(じやくじやく)にして、其(その)範圍(はんい)亦(また)狭隘(きやくがい)、却(かえ)て將來(しやうらい)宗教(しゆきやう)の側(がわ)よりして宇宙(うちゅう)の有(あ)り機體(きたい)たり生物(せいぶつ)たりとの説(せつ)を借(か)らんとすること、猶(なほ)ほ夫(その)の進化論(じぶん)の宗教(しゆきやう)に應用(えんよう)せらるゝが如(ごと)くならんも、唯(ただ)宗教(しゆきやう)を畏(おそ)るゝ習(な)ひの性(せい)と爲(な)り、未(な)だ之(これ)を敢(あ)てする風潮(ふうしゅう)に達(いた)せず。(四百六十一)

第五章

偶然性必然性

第四十四節 有機體といふ語は一般に通用し、謂其自らにて能く理會せらるゝに似たり、謂其自らにて能く理會せらるゝに似たり

れど、實(じつ)は顯(あらわ)る判明(はんめい)を缺(か)くものあり。其(その)今日(こんにち)の如(ごと)く通用(くわんよう)するに至(いた)りし所以(ゆゑ)を稽(たず)むるに、人は初め己れ自身(みづか)を標準(くわんじゆん)とし、以(もつ)て漸次(じぜん)他(た)に推(お)し及(およ)ぼせり、即(すなは)ち早くより己れ己れの生存(せいぞん)するを知(し)り、己(おの)れの肉體(にくたい)あるを知(し)り、内に臟腑(ちやくぶ)ありて動(うご)き、外(ぐわい)に四肢(しじ)ありて動(うご)き、一體(いつたい)として自在(じざい)に活動(かつどう)すること、鐵車(てつくる)の比(ひ)ならず、形體作用(けいたいさくよう)の整(ととの)ひて殆(たいてい)んど足(た)らざるなく、小天地(せうてんち)とするの適當(うたう)なるに考(かん)へ及(およ)べり。然(しか)るに己(おの)れ自ら(みづか)と同じ(おな)じき者(もの)は己(おの)れ一人(ひとり)ならず、人(ひと)といふ人は孰(たゞ)れも同(おな)じ様の(よう)の形體作用(けいたいさくよう)を具(も)ふ。畜(ちく)に人(ひと)のみならず、牛馬(うま)犬(いぬ)家(け)より家畜(かちく)乃至(乃至)一切(いっけい)の獸類(じゆんるい)、一切(いっけい)の鳥類(ちようるい)、一切(いっけい)の蛇類(じやくるい)魚類(ぎよくるい)、皆(みな)略(りやく)ぼ人の如(ごと)く嗅(か)ひて人の如(ごと)く成長(せいじやう)し、人の如(ごと)く男女(なんにや)を別(わか)つ。草木(そうぼく)の萌芽(もへい)が、根(ね)にて營養分(えいようぶん)を吸(す)ひ、一定(いてい)の壽命(じゆまい)を卒(すま)へて枯死(こし)するも、亦(また)全く異(こと)なりとせず。固(かた)より自然(じぜん)に眼(め)に觸(ふ)れしものにて、一々(いちいち)意識(いしぎ)に現(あらわ)はれしに非(あら)ざれど、知らず識(し)らずの間に纏(まと)りて生物(せいぶつ)と稱(な)し、各(おの)々(おの)々(おの)々)必要(ひつや)なる機關(きくわん)を具(も)へて或(ある)る作用(さくよう)を達(いた)げつゝありと爲(な)せり。

然(しか)るに時代(じだい)の推移(とい)に伴(とも)ひて人智(じんち)は益(ますます)進歩(しんぷ)し、生物(せいぶつ)の範圍(はんい)も類似(るいじ)より類似(るいじ)に及び、顯微鏡(けんばいきやう)にて僅(すこ)かに見(み)るゝ極微物(ごくばいぶつ)をも含(こ)むに至(いた)り、更に研究(けんきゆう)の積(た)りて、生物(せいぶつ)は皆(みな)細胞(さいぼう)又は細胞團(さいぼうだん)より

成(な)り、細胞(さいぼう)は個々(こご)自(みづか)らの働(はたら)きを爲(な)し、此(こ)の個々(こご)自(みづか)らの働(はたら)きを爲(な)すものこそ即(すなは)ち生物(せいぶつ)の個體(こたい)にして、有機體(じゆうきたい)の根本(こんぽん)とせらる。而(しか)して細胞(さいぼう)は皮(かわ)あり、核(かく)あり、明(あきら)かに或(ある)る機關(きくわん)を具(も)ふ。而(しか)して細胞(さいぼう)は皮(かわ)あり、核(かく)あり、明(あきら)かに或(ある)る機關(きくわん)を具(も)ふ。而(しか)して細胞(さいぼう)は皮(かわ)なく、全く機關(きくわん)らしきもの見えざるあり、其(その)分子(ぶんし)は一種(いっしゆ)の活動(かつどう)を爲(な)すも、普通(つうず)の意(い)味(み)に於(お)いて機體(きたい)と指目(さしめ)すべきなく、而(しか)も同時(どうじ)に其(その)生命(せいめい)あるを否認(ひにん)し難(がた)し。乃(な)ち前に有機體(じゆうきたい)即(すなは)ち生物(せいぶつ)生物(せいぶつ)即(すなは)ち有機體(じゆうきたい)とせられしは、初(は)め己(おの)れの身體(しんたい)より考(かん)へ、多(おほ)くの機關(きくわん)を具(も)へ、自我(じが)なる一個(いっご)の體(たい)を成(な)せるを標準(くわんじゆん)として他(た)に推(お)し及(およ)ぼし、苟(なほ)も類似(るいじ)の機關(きくわん)を具(も)ふるを總稱(そうしやう)して有機體(じゆうきたい)とし生物(せいぶつ)としたるなるが、更に機關(きくわん)の見(み)えざるものあるや、依然(いぜん)として有機體(じゆうきたい)と生物(せいぶつ)とを同一(どうい)視(し)しながら、有機體(じゆうきたい)を以(もつ)て文字通(もんじつう)り機關(きくわん)を具(も)へざるべからずとせず、如何(いか)なる形(かたち)あるも、作用(さくよう)さへ同じ(おな)じければ、己(おの)れと同じ(おな)じく有機體(じゆうきたい)とし生物(せいぶつ)とすべきに定(さだ)めたり。(四百六十七) 若(も)し有機體(じゆうきたい)に機關(きくわん)の明(あきら)かに見(み)るべきを要(もと)せば、生物(せいぶつ)と區別(くわつべつ)するの當然(たうぜん)なるも、元機關(もとくわん)は己(おの)れの身體(しんたい)に準(したが)ひし者(もの)にして、外形(がいけい)上の事(こと)たるに過ぎず、外形(がいけい)は千差(せんさ)萬別(ばんべつ)、全く同じ(おな)じきを求(もと)むれば遂(つい)に得(え)べからず、必要(ひつや)なるは形體(かいたい)にあらずして作用(さくよう)なり。

作用の同じくれば形態は特に問ふ所にあらず、
形體に附屬するは多くは偶然性、作用の必然性
なるを異なり。分子間の變化にて機關の用を爲
さば、機關の見るべきなきも、以て存機體とす
るに妨げなし。有機體の機字に拘泥し、機關の
有無のみを檢するは無用の事、有機體の機字に
たる本素を忘るゝに終らん。要するに存機體に
就て人の初めに認めし所と後に認めし所と多少
の相違あるを察せざるべからず。

第四十五節 人も動もすれば組織に考へ、有機
體の機字に拘泥し、機關の見えざるものを有
機體とするの妄なるを説くが、是れ思はざるの
甚しきものにして、かく偶然性に拘れば、爲め
に驚くべき誤謬に陥らん。或は動物を以て必
ず飲食し且つ脱糞する者と限定せしが、(一)此
此等は如何に人が偶然性に拘るやを察するに足
る。動物は概ね飲食し脱糞するも、必ず然ら
ざるべからざる理なし、飲食及び脱糞なきも
の考へ得ざるに非ず、又其の見えざるもの一
にして足らず。有用の物を吸収して無用の物を
排棄すといはゞ尙ほ驚くべきも、脱糞に至りて
は單に日常視る所より確定し來れるのみ。草
木の類は同じく吸収し且つ排棄するも、絶えて
脱糞の跡なし、如何に吸収し如何に排棄するや

は偶然性に屬し、此の點に關しとして尋ねべ
きは新陳代謝といふべきのみ。凡そ生物は皆幾
許か體内の新陳代謝せざるなく、或る細胞の死
し、新たなる細胞の之に代るは一變に認めらる
る所なり。即ち新陳代謝は生物に缺くべからず
とすべきも、其の新陳代謝は、明かに眼に見ゆる
を要せず、蛇の冬季數月窟中に潛居するや、
微動だもせず、恰も死せるに異ならず、隨て
新陳代謝は甚だ遲緩なり。草木の種子は往々新
陳代謝の見るべからざるものあり、數百年前
の種子にして探いて萌芽せるあるが如き、其の
間新陳代謝は殆んど全く之れ無しといひて可
而も其の種子は決して死せしに非ず、確かに生
命を有せしなり。新陳代謝の見るべからざるを
以て生命にあらずとするも亦誤謬なり。

さらば生死は如何といふに、是れとて深く問
ふを要せず。生きたし生くるものは死せざるな
く、如何に長命するも終に死を免れず、草木
の種子の數百年の久しきに亙りて生を保つあ
るも、自ら限りなきを得ず、必ず播種して萌
芽せざる時あるべく、究竟死は生物として避く
べからずと考へらるゝが、實は未だし。現に眼
に見る所にては、生きたし生くる者は必ず死
するも、其の死するといふは歸納的にして、其

の必ず死せざるべからざるを決定せんこと其た
困難なり。ヒドラの如く、身體を分截すれば分
截せるまゝに生存し、更に分截すれば又更に分
截せるまゝに生存するものは、善く善くば界限
なく存続せんも知るべからず。細胞に變化ある
は言ふ迄もなけれど、其の細胞も幾個に分れつ
つ、最も舊きもの永く存在するを言ふに難か
らず、但だ細胞中の分子に變化あるは争ひ得ざ
るも、こは容易に見ること能はざらん。謂ゆる
生物は早晩死するの普通なれど、(一)生物の死あるは必然性とすべからず、飲
食及び脱糞は勿論の事、吸収及び排棄も、新陳
代謝も、死も、生物に必然性ならず、生物は生
きさへせば足る。

第四十六節 人の有機體といふに考へ及びし
初に測りて觀るも、此等の事を以て必然性と
すべき理由を發見せず。人は總じて手足を動か
し、又内臓の間斷なく働くあれど、人として必
ず手足を動かさざるべからずと限らず、戰場に
出でて手足を睡たれ、而して療治の宜しきを得
て生命を完くするを得ば、依然として人たるを
失はず。内臓も疾病の爲めに全く働きを止む
ることあるも、其の働きを止むるの故を以て死
なりと定むべからず。乃ち手足あり内臓あるは

人たるに偶然性の附屬物にして、必然性に非ずといふべし。人には自我として認むべきものあり、如何に稱呼するとも、如何に形容するとも、死も角己れ自ら事を決定すと爲すべく、其の備く認めらるる以上、人たるに妨げなし。(無自の觀念に於ては、生命の觀念を此に聯するを疑ふが如く、機械的とは生命の有無を以て生命の有無に自ら認むるなし) 若し頭首にて事を決するを得ば、頭腦は即ち人たり、頭腦にて事を決するを得ば、頭腦は即ち人たり、何れも自我と認むべき部分あれば其の部分は即ち人たり。かくて人自ら自我を認めて生命ありとするが如く、他にも自我同様に認むべきあれば、其の意識の有無に拘らず、生命ありとするに躊躇せず。自我なる者は、言ひ換ふれば自ら運轉し若くは運轉する一力ありと見るべきものにして、如何なる形態を具ふるかは、關すべき所ならず。苟も自ら運轉し若くは運轉する力ありと認めれば宜しく之を稱して生物とすべし、有機體の機字に拘泥せず、以て生物と同一視せんとならば、更に之を稱して有機體とすべし。宇宙を有機體と観するには、最も此の邊に意を致すを要す、普通には有機體といふ意味より考へ、有機體は必ず或る一定の機關ありと限らば、宇宙の有機體たるを聞いて大に怪むを免れざるべき

が、是れ漠然有機體の語を使用して其の意味を究めざるに座するもの、有機體の何たるかを確かむれば、漸次怪むの念を減ぜん。生きとし生くるものは、既に人類及び禽獸魚貝草木に限らず、肉眼にて見るべからざるもの擧げて計へ難く、一滴の水中にも幾十種の生物あり、此等極微なる生物には他の有機體に見るが如き機關を具へざるあるも、今は皆有機體の中に列せらる。人類と顯微鏡的の極微生物とを對比し、差別の甚しきに拘らず、均しく生物として有機體とするより考ふる、則ち更に宇宙に於て及ぼして其の均しく生物たり有機體たるを察するに於て何の難きかあるべき。從來有機體の關係を究むるに苦心し、今日に及びて猶ほ十分に明瞭せざるも、其の苦心せるは寧ろ歴史的事實を確むるの困難なりしに因る、即ち一は嘗て地熱の熾んなるに伴ひて生ぜし多様の變化より遂に生物の發生するに至れる點の明かならざるに苦心し、又一は今日如何様にするも無機物より有機物の發生するを目撃し得ざるに苦心するなり。(第二章第二節) 有機物と無機物との連絡は容易に解せられざるも、宇宙全體としての有機體たる本素を具ふるは、斷々として疑ふべからず。人類及び禽獸魚貝草木をのみ有機體

と稱せし習慣よりして斯かる事に考へ及ぶの困難ならんも、是れ唯習慣よりせるもの、久しき習慣の打破せられしは珍らしからず、此の習慣も亦必ず破らるべし。從來有機體とせし所と、宇宙をも同じく有機體とせんとする所との相違は、宇宙は太初より存在して活動せるに、普通有機體は地熱の冷却せる時更に太陽の光熱を受けて發生せるもの、即ち或る星と他の物との關係より發生せるものなることは是なり。短く言へば宇宙は太初よりの生物にして、普通の有機體は關帶して發生せる生物とす。前者を原生物界といひ、後者を副生物界といふ。(第三章第十一節)

第六章 宇宙の力及び機關

第四十七節 有機體と生物と異なる體なるも、有機體に必ず機關の備はるを要すとせば、生物中に機關の見えざるあるを以て之を區別せざるを得ず。生物中に機關の見えざるあるは、機關なきが爲めなるや否やの疑はれ、ヘツケルの謂ゆるモノラに核なしとの意に就て種々の非難あり、是れ核なきに非らずして核あるも未だ知られざるなりとは多くの一致する所なるが、假りにモノラを核なしとして如何の結論を生ず

存す、即ち無限の間に獨立して存立し、獨立して運管し、千變萬化して盡くことなし。星霧として猛烈に活動し、群星として運行するに大なる速力を以てし、人の感知する所にて、光の如き、電氣の如き、一瞬にして幾萬里に達す、更に理を推せば愈々考へて愈々妙を認む。試みに手を導くれば、地球の中心忽ちにして動き、延いて太陽に及び、延いて無邊に及ぶ。其の波及するの幾時間にしてするやは明かならざれば、若し最初に計算にして長くれば、是れ比較的大なる影響の事とし、更に小なるは更に短きに於てし、最も微なるに至りては即刻反應ありと稱せざる能はず。今日方に於て知らるゝは斯く甚だ尠少にして、總じて電氣氣の下に解せらるゝの傾向あり、依りて幾分の明瞭を加ふるにせよ、宇宙全體に在りて九牛の一毛にも足らず、宇宙全體としての力及び行動は唯科學の進歩につれ尠かつつ窺ひ得るに過ぎず。

宇宙全體として尠より少しの力を離らず、活潑地に活動する、單に是れのみにて、生物に勞働するを察すべく、更に微妙なる力の普遍して、微妙なる運動を呈しつゝあるを見れば、愈々宛然と存在するに非ざるを知るべし。

生物必ずしも機關を備ふるを要せずと

いふよりせば、此の力を以て生命の存するを認むるに足る、泥んや宇宙には機關なしとせず、今日まで知られたるの少きも、其の少きものさへ猶ほ運轉の妙を極むるを稱せざるべからざるをや。從來知られたる星は一度に近く、鈍れも皆一定の順序を守りて運轉す、一人類の驚愕の如く分業の跡の見えざるも、一度に離るもの或る中心を求めて規則正しく動くは既に數稱に備せずや。核の有無さへ判然たるざる原形質を生物と呼び、一倍存留の大なる物體が規則正しく動くを稱して無生物とするは寧ろ奇怪なる次第ならずや。今日まで斯かる夢想に陥りて敢て異とせざりしは全く習慣の致す所、此の邊の事は深く考ふる所なる可らず、畢竟皆一部分を見て他を見るの違なかりしに由来せるなり。普通には目前の動植物を見て生物と爲し、其の他に考へ及ばず、總じて石若くは土と同じく生命なしとして放置す。科學者は一層深く攻究する所あれど、概ね或る一部分に限られて全般に及らば、獨り一人の類が自然を窺じて宇宙の美、想、及び、其の決して偶然に存せず必ず生命ある靈性と爲し、少くとも獨り研究すべき者とするなり。今の知識を以てして到底十分に宇宙を知り得ざるも、凡そ

事物は彼と此とを較べて比例することを忘るべからず、僅かに形を成して動くか動かぬかの細胞を生物と呼びて遂かに無機物より進歩したりとし、却て廣大無邊の宇宙を無機物として劣等視するは餘りに偏せずや、今少し此比例を取りて考ふべし。

第五十節 普通に謂ふ所の生物とは何ぞ、宇宙成立より言へば殆んど斷として言ふに足らざる者ならずや、宇宙の間に在りて晚く出現し、而して早、消滅すべき運命を有するもの、常に形の微なるのみならず、存在も亦短し。群星の中には地球より一層進歩せるものあるべく、一層永命化を續くるものあるべし、而も其れにても地熱の冷却するか、又は光熱、輿ふるもの冷却するかせば、生物は漸く消滅するを免れず、其の星の狀態に在りて熱の強かりしに方つて生物なく、星として漸く弱きに過ぎたて無機物なし、生物に先んじ生物、後れて幾億々々年の進歩せんも知こべからず。生物の有無に拘らず、宇宙は絶えず活動し、進化して已むこと無し、乃ち原生物の生命の永遠に在りて竭きざるに反し、新世界の生命は時時短命なると察しとすべく、兩者の間に於ける長短の差、甚しき何物も、窺ふべきならず。されど

今日生命ありとして見るべきは、宇宙全體と今の謂ゆる生物と形の小大壽の長短に於て固斷絶するの甚しきも、道理の上よりならずんば、便利の上よりして二種類に分つべし。若し夫れ徒らに動植物のみを見て是れ以上に全く生命なしとするが如きは、蝸牛角上に住みて牛馬を知らざると異ならず。

第七章 力の知られし部分

第五十一節

生物の有する生命の不可思議として信ぜらるゝこと、昔も今も大差あらず、今尙ほ此に就て知られざる所多し。知られざる所ありて不可思議とするの不可なけれど、知られざる所ありて不可思議とせば、生物に比して知られざる所の遙かに多き宇宙は、更に一層不可思議とすべきに非ずや。

人は固より宇宙を以て不可思議と爲し、智力の到底及ばざる所として感歎するも、普通に通考ふるに方りて其の最大部分を擧げて死物同然と見做すの狀あり。己れに近きものを以て最も優れりとし、然らざるを以て、盡く劣等なりとするの一般に行はる。『カールトは下等動物の生命は、計の運轉する一面』五行として木火土金水を擧げしが如

き、未だ明かに植物を生物に入れず、寧ろ土に類すと爲し、もの、地水火風といへるは、全く無生物に限り、此等無生物に或る因縁ありて生命の結び附けば、茲に生物の生ずと認めしなり。然る後分析の漸く密を加ふるや、分析すべからずと假定すべきを元素とし、時代と共に其の數を増し、五十年前六十有餘の算せられしに、今は約八十に上れり。是れ確かに知識の進歩たるも、諸元素を無生物視するは依然として替らず、時として其の凝聚力若くは抵抗力あるより或る程度まで生命ありと解せしあるも、極めて單純にして生物の生命と同日に語り難しとせり。總じて元素は固體たり液體たり將氣體たるも、本質は永遠に變ずること無く、而して生物の死して盡く本來の元素に還るを見れば諸元素を死物とするの甚だ當然らしく、爲め一面に於て有機物無機物の漸次進寄れるに拘らず、全く相異なりとして取扱ふの常なりき。されど

る、形こそ種々なれ砂礫其の物は恆に同一なりと爲し、が、(『言四十九』)ラヂウム發見以來大修正の避くべからざるに及べり。

近來元素に關する攻究の益々進むにつれて之を構成せる原子も亦益々明かならんとし、初め諸元素皆各々原子を異にすといひ、或は異にせずといひ、言ふ所彼此相同じからざりしも、原子の如何なる状態の下にも變ぜざるを認むるに於て一致し、ばも砂礫を集散すると一般、現は

ラヂウムは一の元素にして其の當に光熱を發するの如何なる原因よりするかの討究せられたる結果、分子内の變化にあらず、原子内の變化にして、原子の必ずしも變化せざる者ならざるの推定せられたり。今日の假定にては原子は電子より成るもの、原子中に存在せる電子は恰も太陽系の如くに運行し、其の運行の變化に因りて種々の力を發す、而して其の運行は決して永久的ならず、或る時間に限らるゝものにして、ラヂウムの存在期限は二千年、恐らくは元素中最も短命なるべく、其の絶えず強烈なる光熱を發する丈け早く變化するを免れざらべし。他の光熱を見えざる元素は此の如く期限の短からず、幾億年に亘り若くは幾億々々年に亘り持續するあらんも、期限なきに非ざるは確かならん。總ての元素は原子より成り、總ての原子は電子より成り、其の電子は絶えず幾分の變化を遂げざる莫く、或る期限に到達すれば變じて他のもつと爲り、他のもつと爲りて更に或る期限に到達すれば、復變じて別のものと爲る。即ち有らゆる元素は或る期限間其の固有の形質を維

持し、既に或る期限を超過すれば、變じて他のものと爲らざるを得ず、實に組成する所の電子は多少變化しつゝありて、一瞬も同一の意ならず、百年の壽命なる者より觀れば何の變化なきが如くなるも、億々年の壽命を有する者より觀れば多様變化あり、甲元素は何時の間に乙元素と化し、乙元素は何時の間にか再變して丙元素となり居らんも測られず。此の假定は或は遙からず改まる無きを保せざるも、其の中間の幾分かは動かざる理を含まん。

第五十二節

原子の單純なる者ならずして自ら少しづつ變化するは、疑ふを要せざる事なるべし。生物の個體は細胞にして、細胞は自ら運轉し活動の著しく見るべきあり、是れ細胞中の分子の間斷なく變化するが故にて、生物の特微たりとせらるゝが、諸元素の原子が間斷なく變化するは此と變化の状態を異にするも、性質に於て頗る相似たりと謂はざるを得ず。細胞の自ら運轉するの不可思議たらば、原子の自ら運轉するも亦不可思議たらば、細胞は分子より成り、分子は原子より成り、原子は各々絶えず働きつゝありとせば、則ち生物は分子若くは原子の集合せる方法の稍々異様なるに過ぎず。而して原子中に電子ありて動くこと恰も群

星の運行するが如くならんか、更に語を換へて群星の運行すること原子を絶對的に大にしたると同じと謂ふを得べし。電子の變化するが爲めに原子に一定の期限あり、甲元素の乙元素と化して乙の丙と化すべくんば、宇宙間にも斯かる變化なしと定むべからず。從來の說に據れば、宇宙は初め星霧の形なりしも後漸次凝結して多數の星と爲り、今尙ほ星と爲りつゝあるもの少からざるも、幾年かの後に各小星は運る所の中央の大星に近づきて遂に相衝突すると共に星霧と爲り、諸星皆前後して同一の運命を經、順次集合して太初の混沌に復歸すといふ事なるが、斯く宇宙の滅滅するは、太初の混沌に復歸するに非ずして、別に新たなる宇宙の成立するもの、今日まで甲宇宙の乙宇宙と爲り、乙宇宙の丙宇宙と爲り、丁宇宙と爲り、戊宇宙と爲り、變化又變化し來り、今後幾變化せんも知られず。(此の以上は假定なり、事實を論ずるに非ず)

此の如き變化を呈すべくんば、生物の變化に比して孰れを驚くべしとするか、寧ろ前者の驚歎に堪へざるを覺えずや。されど如上の變化は皆人の感官に觸れ若くは觸れ得べしと考ふる所のもの、感官に觸れ得ざるものに至りては現に判明せるの僅少ななるも、其の僅少な

ものさへ一層一層驚歎に堪へずとすべく、未だ判明せざる多くの如何に驚くべきかは誠に觀察に餘りあり。

第五十三節

原子が電子より成れりとして種々に計算の立てらるゝは知識の進歩として慶すべきも、其の電子の何たるやは、頗る明白を缺く。電子が或る中心を求めて運行するは何を以て能く然るを得るか、電子と電子との間に何物の接觸するか、電子の運行して電磁を發し、光熱を生ずるあるが、斯く力の出づるは如何なる順序に於てするか、此等は皆漠として明かならず。凡そ力は力と命名せるに止まり、其の何たるやは解し易からず、眼に映ずる紙や茶碗や、幾多分子の凝集力に依りて成れるもの、倒れ或る物の落ち來りて凝集力の消失せば、再び原形を見んとするも得ず、而して其の凝集力は、唯名あるのみにて、絶えて眼に映ずることあらず。川の混々として流れ、流の聲として響つる、皆明かに視るべきも、之をして流れしめ之をして聲さしむる所の力は毫末も見えず。更に一層大なるものに至りては、地球は太陽を周り、太陽は更に大なる太陽を周り、他の一切の星も皆各自一定の運動を遂ぐるも、其の爾する力は眼に視ること能はず、手に觸るゝこ

と能はず、全く空虚に於てするのみ。晴夜天を仰げば、群星の散點するを見るが、相互に幾千萬里幾萬億里若くは幾億々々里を隔てて、順序正しく運行し、而して遠心力といひ、求心力といひ、軌道に計算に合へるあるが、是れ或る透明なる物質の之を結び付けて然らしむるか、將宇宙全體皆力にして、物質として見るは力の一部分に過ぎざるかは、未だ研究の幸へざる所、則ち之を判知するの困難なるも、見えざる力の普遍することを許容せざる能はず。(宇宙全體皆力と稱す、但だ理論上、感官に觸るゝものに就てさへ知られざるの多大なるより推せば、感官に觸れざるものに就て知らるゝの少きは怪むに足らず、力は眞に知り難きものに屬す。)

宇宙に在りて感官に觸るゝ働きを大とすべきか、又は感官に觸れざる働きを大とすべきかは、容易に斷言するに由なく、究竟、力に就て知らるゝの甚だ少きを憾まざるべからざるが、儼かに知られたる部分にても働きの極めて著しきと、小は分子を形成せる原子を形成する電子の彼が如く運行するあり、大は地球の周れる太陽の更に他の諸星と共に周れる宇宙が此の如く運行するあり、若し知られざる部分の知らるゝ呢、如何に驚歎すべきやは想像だも及ば

ず。曾て打ち壞す可らずとせられし原子の永久存在するに非ず、中に含める電子が變に因りて其の質を變ずることの知られしが、攻究の愈々進むに隨ひて從來知られざりし所の判明を致すの多かるべし。變化すまじき原子さへ變化すとありては、變化の常なる雜多の現象に就て、今後如何なる事の知られんかは豫め測るべからず。

宇宙の廣大無邊なる、今日までの知識にては特に多く知る所ありとするを得ず、唯力の働きの妙にして、幾億々々里を隔てて相感應するに驚くのみ、斯かる玄妙なる働きに較べて此の地球上に於ける生物の働きを如何に見るべきか。生物は己れの直接關係よりして夙に知られしも、顧みて生命の解し難きを以て不可思議と爲し、生物以外の諸物は何の變化なく、全く死物同然としたるが、是れ強ち無理ならず、生物以外の諸物は漸く變化の早く驗知し得べきにあらざれど、器械の改善し觀察の進歩すると共に初め氣付かざりし處に種々の變化あるの知られ、中に言語に絶する至大の働きの現はるゝあり、前に一滴の水中に幾十種の生物の存在すといふの珍とせられしに、今や何の珍たらず、今日にては極微の一原子中に幾多の電子の運りて

一の世界を形成せるの知らるゝに及べり。夫れ極微の一原子中に猶ほ電子の世界を形成するあり、而して廣大無邊なる宇宙に群星ありて運行すること電子と異ならず、是をしも不可思議といはずんば何をか不可思議とせん。普遍に生命とする所のものに不可思議の語を用ふるよりせば、宇宙に對し不可思議といふの甚だ不足なる感なからず、少くとも不可思議、最も不可思議なるものと謂ふべし。單に力の知られたる部分に就て言ふも、かく判定せざるを得ず。

第八章 機關の知られし部分

第五十四節 宇宙の生物に均しきは一應早く了解し得べし、仰いで無數の星を觀れば自然に細胞と比較すべきに想ひ到らん。生物の細胞は相密接し、群星の互に隔ると大に異なれど、後者の各々規則正しく運行して亂れず、恰も一體の如くなるより察すれば、密接すると隔離するとの特に重きを置くべきに非ざるを知るに足る。既に無慮一億の星の計へられ、尙ほ此に附隨せるものの幾億なるやの想察せらるゝあり、其の略は皆平面上に運行し、一絲も紊れざる觀あるは、細胞に髣髴し、而も絶大とすべきに似

たれど、更に仔細に考ふれば、斷る疑ふべきなからず、無数の星の散在するは果して宇宙に缺くべからざるか、將偶然に生ぜし附屬物たるに過ぎざるかは急に決定し易からず。

空間に懸れる幾億の星に就て知られたる所は極めて少く、容積も距離も全く知られざるもの舉げて計へられざれば、其の全體の組織を考ふるの猶ほ早きこと勿論なれど、今日迄のところ、太陽系の如きを幾個となく繰り返し、而して諸中心の中心とすべきありと認めたるが、姑く太陽系を以て推すに、太陽に八個の遊星各々衛星を率ゐて廻りつゝあり、一の機關の整然たるが如くなるも、諸遊星を合せりとて容積に於て太陽の六百分の一、質量に於て七百四十分の一に過ぎず、人を以て譬ふれば、一指に若かず、樹木を以てすれば、一枚のみ、斯く微小なるも、は、之れ有るも之れ無きも何の輕重する所ならず、容積に於て諸遊星に六百倍し、質量に於て七百四十倍せる太陽、太陽系の殆んど全部を包含すと謂ふべし。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百。

遊星の衛星に於けるよりも太陽の遊星に於けるの遙かに大なるより推し、宇宙の中心たる最大なるもの他、總ての星に於ける、太陽の諸遊星に於けるよりも更に遙かに大にして、或は幾千百倍若くは幾萬倍せんも知る可らず。固より全然一の想像に止まり、實際は爾く大ならず、却て比較的甚だ小ならんも測られざるが、太陽系を以て計算する限り、宇宙の中心なる大々の太陽、單獨にして宇宙間に於ける物質の最大部分を占め、之を運れる遊星及び衛星を運れる遊星は、唯其の一片だに過ぎざるを斷定すべし。乃ち無数の星は眼に映じて燦然たるも、月の大きく見えて甚だ小さきと同じく元毫も言ふに足らず、有るも猶ほ無きが如くにして、唯中心に位置せる最大なるもの唯我獨尊の狀なるを推想し得ざるにす。

第五十三節 かく、宇宙は何なるやの問ひに對し、一個絶大なる地球と答へ、群星を生物の細部に準ずるの甚しき妄想たるを思ひ得んも、更に讀りて考ふれば、強ち妄想として斥くべからざるものあり。太陽系の諸遊星は合一するも容積に於て太陽の六百分の一に過ぎず、何等言ふを値せざる如くなれど、遊星の大なる距離を隔てて運行するを觀れば、一概に太陽の高

能なるを決定し難し。太陽の直徑三十五萬里、(地球の六六)地球と月との距離十萬里、(距離の四一)にして該直徑内に存在し得るより察し、以て彼れの非常に大なるに驚くの外然るも、諸遊星中距離の最も遠き海王星は太陽を隔ること十億里、(距離の四一)實に太陽の直徑の三萬倍にして、之を一周するに一百六十四年を費す。其の體は小なれど、其の大なる軌道は尋常視し去るべからず、太陽の容積に驚かば、又遠き遊星の軌道に驚かざるを得ず、以て推し行けば、宇宙の中心なる大々の太陽の如何に大なるにせよ、之を運れる星辰の機定せる距離は實に言ふべからざるほど大なるものにして、此の絶大なる距離に比すれば、中心に位置せるものの率ろ小なるを見ん。幾億の星の幾億々々里の間に散在する、即ち其の總てを合せし容積の比較的甚だ小にして、中心に對し泰山の一塵に及ぼさるも、最早や有るも無きも異ならずと認むる能はず、容積にして意味あらば、距離も亦意味あるべし。況んや太陽系に於ける遊星はボーデの法則に依りて順序正しく存在せるをや、其の何故に然るやの明かならざれど、三、六、十二、二十四、四十八等、順次前者を倍數にして此に四を加へし割合にて配列し、偶々例外例あれば

油濱等と稱して已むべきのみ。〔第六十八〕斯かる劇烈なる活動の全く偶然に存するや否やを別とし、顯微鏡にて纔かに見る細胞の動作と較べて孰れを不可思議とすべきやは、多く考ふるを要せざるべし。

星の多くは唯命名せられしのみ、其の狀態の知られたるは極めて少し。宇宙全體として機關を成すか、各部分として機關を成すか、機關を成せば如何の狀に於てするかは、共に未だ判明せざるも、地球を以て遊星を推し、太陽を以て恆星を推し、假かばかり知り得たる部分にても絶大なる活動の演ぜられ居るを認むるに難からず。且つ其の相關聯して複雑を極め、而も一々數理に合はざるなく、偶々合はざれば究の足らざるが爲めとせらるゝ所、正に機關の整全たるかの如く然り、而して人の却て無機物視し死物視するは斷る奇。

第九章 宇宙の太初

第五十七節 宇宙の活動は現に日進するが如く、計へ舉げらるゝ一億の星と此に附隨する幾億の小星と、皆大なる運力を以て運行しつゝあり、少くも運行しつゝありと想定せられ、生物

の體内に於ける運當に比し、寧ろ人に優るとも少しの劣る所あらず。されど生物の始め終り、即ち如何にして生まれ、如何にして長じ、如何にして死するや、殆んど皆判明し、特に短命なるは一函の内に實驗するを得べく、最も長壽にして幾千年に及る樹木も、一生運當に知するの難からざるに、宇宙に於りては全く之と反し、其の幾億々々年前に於りて幾億々々年後に於るやは少しも知ること能はず、又想像だに易からず。人類の地球に現はれて以來茲に幾萬年、今後更に幾萬年の末に續くべきも、宇宙に對して極めて短しとすべきは言ふを俟たず、況んや個人一代の壽命をや、彼此相距るの遠き、何物の譬ふべきなし、蜉蝣の身を以て宇宙の始め終りを見んこと、全く不可能事に屬す。無量無限ともいふべき、數の間立ち、人の見る所に僅かに一瞬時に止まり、餘は唯辛うじて推測するのみ、生物に於けるが如く觀察せんは思ひも寄らざるなり。

宇宙の始め終りを觀察するに全く斷念せざるを得ざれど、之を推測するの途は少しと爲さず、中には既に疑を容るべからざる途に至りたるも亦之れ有り、星霧説の如き即ち其の一なり。〔五等星、ハートン〕地球を擲るに隨ひ

て熱を感ずるの暖き事、比較的なる遊星即ち木星上星の表面よりして尙ほ然ある事、一層大なる太陽の光熱ある雰圍氣を以て掩はるゝ事、諸星及び太陽の皆略ぼ同一平面に在りて同一方向に運行する事、幾多星霧機關として氣體を現はせるあり、若干星狀の火雲に包まるゝあり、又頗る我が太陽の組成に似たるもある事、以て推し察れば初め宇宙全體に氣體たりしといふに想ひ到るの難からず。〔ロバート・マッセル〕但此時として反對論あり、謂ゆる星霧に氣體なるあらず、氣體と見ゆるは望遠鏡の不完全なるが爲めにして他日製作の精良を加ふると共に、其の氣體にあらずして實は星群なるの明かにせらるべしといへり。星の運動を以て推測するに、總ての星霧を星群たりと斷定するは、今日の知識を以て敢てするに難るべき所、畢竟するに氣體なるもあれば星霧なるもありとする外なく、氣體に於て從來の星霧説の動かざるを許すべし。

第五十八節 かくて宇宙の太初は氣體なりしといふに踏着するが、其の原因に就ては未だ何

等の定説あらず、從來多く行はるゝは印度の
神説に類し、成りては壞れ、壞れては成り、
又成りては壞るゝといふに在り。即ち初め渾沌
たりし氣體が漸次收縮して回轉し、回轉につ
れて外側なるもの離れ、離れし環の轉まりて
星となり、斯かる事幾萬回か繰り返されて無數
の星辰の散在するに至れる次第なるが、或る期
間を經過すれば、前に相離れて散布せし群星又
漸く中心に近づき、愈々近づき愈々速度を加
へ、遂に衝突して星霧と爲り、斯かる事幾萬
回か繰り返し、最後に大中心に及び、宇宙を舉
りて渾沌たる氣體の舊に復り、更に再び收縮
し、回轉し、散じて群星と爲るべしとの事な
るが、此の類の推測は宇宙を無機物とし死物と
すると同様、餘りに事を容易視せるなり。小星
の順次中心の大星に近づくの想定し得られざ
るに非ざるも、元億を以てさへ計ふべからざる
永遠の事變にして、之を證明すること極めて難
く、現在の智力にては到底之を能くするに堪へ
ず。今宇宙を通じて氣體と爲るべきか、特或る
部分の氣體たる間に他の部分が固体と爲りつゝ
あり、其の固体なる部分の氣體に化する時、氣
體なりし或る部分の更に固体と爲り、氣體と固
體と絶えず交雜するあるべきか、抑又宇宙全

體として幾億々々年の後に壞滅するも、以前と
同一の變化を繰り返すに非ず、ラヂウムの數千
年にして他物に變じ、諸元素皆各々或る壽命を
保ちて他物に變ずるが如く、他の異なる形體を
表現するに至るべきか、此等の事は多少臆斷し
得られざるにあざざれど、今は想像の甚しき
に涉らず、唯宇宙の太初の氣體なりしを認定し
置くの穩かならん。兎にか、初め氣體なりしも
漸次收縮して現在の狀態と爲り、而して
尙ほ絶えず收縮すと信ぜらるゝが、之を生物の
細胞より發生し漸次膨脹すると較べて著しき
懸隔ありと見えんも、實は否らず、寧ろ頗る相
近きものあり。

第五十九節 單純より複雑、不定より確定に
遷るは宇宙も生物も全く一、進化は分化結合の
並び行はるゝ、美なりとするも、宇宙と生物と共
に同じと謂はざるを得ず。但し宇宙は初め漠と
して尠大、後漸く收縮して小となり、生物は初
め渺として微小、後漸く膨脹して大となるの差
違あり、此の點に於て前者は進化とするも發達
とし難く、後者は進化とするも同時に發達とし、
進化發達同意義に見做し得と説く者あれど、是
れ偶然性に拘泥せる言にして理に認むべきある
に非ず。收縮といひ膨脹といふは元何事なる

か、生物は微小なる細胞の増殖して大となるも、
小が大となるに非ず、之をして大ならしむべき
酸素水素窒素炭素等皆當初より存在し、唯散在
せしものが、漸次集合して一の形體を成し來れ
るに過ぎず（是は補より成結晶に入りて大なる事可なり）空
中水中土中等の若干の元素の收縮して生物と
いふ半同體と爲ること、宇宙間に漸次集し氣體
の收縮して星系と爲れると何ぞ異なりとせん。
細胞は初め機關の見るべきなく、漸くして中
に核を生じ、分裂して積重し以て組織を成す。
星霧に在りても此と同じく、單に雲霧の如くし
て何物の見えざるあり、又中に幾個の星と見ゆ
るあり、或は明かに星の運行するあり、火雲
中に星の點するは即ち核の生ずるに非ずして
何ぞ。

宇宙は初め漠たる氣體にして、さながら原形
質の名狀し難きに似たり、後漸く收縮して内
部は比較的多く密集し、外側に在りて離れし者
も同じく内部より密集して恆星と爲り、之を圍
繞せし者亦凝固して遊星と爲り、遊星を圍繞せ
し者更に一層凝固して衛星と爲れり。太初宇宙
間に充填磅礴せし氣體は、かゝる順序にて大小
幾億の星を成し、現に今尙ほ大小の星と爲らん
とするの擧げて計へられざるが、其の既に星と

爲りしもの、及び將に星と爲らんとするもの、無数の群體皆緊密に關聯し、各々一定の軌道を運行し、總て一の平面上に存在する有様なるは、以て如何に秩序の整然たるかを察するに足る。細胞は外間より養分を吸收して多くの細胞となり、集まりて一の體を成し、相互に關聯す。其の最も大なるは人類、社會にして、之が組成分子たる個人は最早や密接せず、各々獨立して行動するらしきも、而も書動きて夜休み、其の動くも、一定の路を踏み、出でては入り、往いては復り、而して全體として活動するのみならず、其の活動する、實に土地なる一の平面上に於てす。宇宙が太初淡たる氣體にして、後漸く收縮して幾億の星を現出し、以て今日に至りしは、爾後に地の固まると同じく自然に然るものにして、生物と一體に見るべからざるが如く考へらるゝも、爾後に地の固まるは進化の極めて單純なるもの、其の順序に於て一般の進化と異なるあらず。若し氣體の收縮するを以て此に似たりとせば、細胞の養分を吸收するも亦此に似たりとすべく、社會の形成するも亦此に似たりとすべし。

宇宙に對し進化と發達とを別にし、生物に對し之を同じくするは、殆んど無意味の言なり。

發達に小より大と爲るの意味ありとせば、是れ疑ひも無く進化の或る模式に過ぎず、即ち養分を吸收すべき周圍の物體より細胞を離し、而して其の細胞の變遷する跡のみを觀て言へるもの、其の細胞及び此に養分を供給する所の周圍の資料全體の變遷より觀れば、決して小なるの尺と爲るに非ざるを知る。細胞に養分を供給する所の周圍の資料は、當初明かに眼に見えず何處に存するやの注意せられず、隨て度外視せられしけれど、其の初より存せしは言ふ迄もなき事に、初より存する以上、小なるもの大を致すとて發達を尋常の進化より區別するの必要なし。若し發達を以て細胞の變遷を稽ふるの便利上の語とせば不可なきも、實に於て進化と異なるかに思ふは大なる誤りなり。何れの場合にも無より有の生ずることあらず、小なるもの大を致すは、小の積じて大と爲るに非ず、他のものと集合し化して大と見ゆるのみ、大と爲るべき資料は最初より存在せるなり。宇宙の收縮すといふは、一切の資料當初より明かに認めらるゝが故にして、結果に於て生物の膨脹すると異なる無し。深たる氣體たりしとは、生物の未だ核を生ぜざる原形質の状態なりしと同じく、太初に於ては正しく彼

と此と相對比することを得。
第六十節 最大なる問題に關し人々多く一致するが如く、宇宙の太初に就て古今東西種々觀念の同じきものあり。日本紀の卷頭に淮南子等を引き、古天地未剖、陰陽不分、溘沌如雞子、溘而含牙、及其清陽者薄濁陰者濁向爲天、重濁者滄而爲地、是情也。之合揅易、重濁之凝場難、故天先成而地後定、といへるも、語の末に拘泥せんば、其の自然に進化の理に考へ及べるを見るべし。重濁者、溘沌也、溘沌收縮すと伴ひて外側に在るもの遷次に星と爲り、中央は猶ほ溘沌として定まらざる所あるが、初め溘沌にして後次第に溘沌し來るは、誠に重濁を以て喻ふべし。大凡動物は皆卵胎より出づ、更に一級生物の上にて言へば、皆或る細胞より出づ、即ち宇宙の太初氣體なりしと相對比して何の難きを覺えず、徒らに實證の語に拘りて宇宙と生物とを差別するが如き、知識の進歩せりといふよりも其の弊を受けしものと謂ふべし。虚心にして考ふれば、宇宙と生物と同一の路を取るに想ひ及ぶべし、但だ宇宙は終りに其大にして想像だも及ばず、一々之を説明せんこと竟に得て能くすべしに非ず、而も其の困難なるの

故を以て無意味なる無機物と爲すは、思はざるも甚し。

第十章 星系の複雑

第六十一節 星學は近來著しく進歩せりと
いふも、それは唯以前と比較しての事にして、星系全體に關して知られたる所は猶ほ僅々に止まる。隨て萬里の距離が遠方より望みて殆んど一點と見ゆるが如く、今日までの星學の進歩も、絶大なる星系に對し果して進歩と稱すべきやの疑はしきも、而も之が反面に於て微かなる一星の僅かばかりの運行にて知識に裨益するの多きと同じく、今日までの進歩に依り星辰に就て頗る明瞭を加へたりと感ぜらるゝ所なきに非ず、而して其の最も重なる者の一として星系の極めて複雑なるを擧ぐべし。

往昔星系を稱ふるの甚だ單純なりしは言ふを俟たざるが、近世に至りて觀測し調査せし所も、研究の進歩につれて尙ほ單純なるの判明し、望遠鏡の進み寫眞術の進むと共に複雑として知られたるの愈々益々複雑と爲り來れり。現に觀る所の星系は即ち現に見得る所の宇宙にして、其の何様の形を存するやは銀河にて推定す

べしとは人々の略ぼ一致する所、實に我が太陽系も盡く其の中に含まれ、總じて河の形を成すは平面の切口と見做して差支なきこと、最早や疑を容れず（米、リッック及びイェルケス、英、ペルーコワ等）に材料を供せたる）則ち一括して平面形とするも、固より厚さなき平面形にあらず、分枝岐出し、大體に於て三叉と見ゆ。斯かる形を成すの何故なるや、斯かる形に於て大小幾億、星は如何に回轉を全くするや。衛星の遊星を運り、遊星の太陽を運りて、茲に一の太陽系を成し、同様の體系即ち回轉若くは楕圓狀の繰り返さるゝより推せば、之を單純といふべきに似たれど、圓狀若くは楕圓狀よりも寧ろ螺旋狀を成すの多くして、或は螺旋狀の積み累なり、星系全體に一の螺旋狀を成すやも知るべからずとするに至りては、運行の複雑なること想像も及ばざるあり。

第六十二節 星霧は漸次明瞭を加へ來れるが、其の形狀區々にして一ならず、或は環狀、或は波狀、或は紐狀、或は鎖狀、或は扇狀、或は箒狀、一々形容するに堪へず、而して螺旋狀若くは螺旋狀の傾向あるを特に多しとす。若し宇宙の太初を以て星霧に類すとせば、其の進遷するに方りて此等形狀の或るものを占

むべく、多數が螺旋狀若くは螺旋狀の傾向あり、星系全體として亦同じく螺旋狀を成すを推定し得べきも、螺旋狀に種類あり、銀河の分枝岐出せるは即ち螺旋の逃れる處、各部分も其れ、螺旋狀にして、試に千狀萬態なるべし（シゲス、ス、如く、極めて多岐、何れも、無）

星辰の中に不規則なるあり規則正しきあれば、體系として螺旋狀なるもの時代を經過して漸次楕圓狀に改まり、遂に太陽系に如く秩序整然一線されざるの時あるべきを想ひ得ざるにあらず。されど不規則なるの規則正しく爲るは之れ有るも、規則正しとは必ずしも圓狀にして小なる星の大なる星を運るに限らず、星霧の種々なるが上に、既に明かに星霧を成せる者にも種々なるあり、重複星の二重三重四重五重六重なるが如き則ち然り。（一重星は上つたれ、今一重二重）此に就て未だ大に知られず、中には相互に關係なきものにして恰も重疊せるが如く眼に見ゆるあるも、又小なる星の大なる星を運るに非ずして、容積相均しき星の互に運るあり、即ち或る共同中心を畫きて運るあるなり。將

又其の各々が一個の星に非ずして幾個の集合より成れるを察する、則ち組織の極めて複雑なるを認めざる能はず。宇宙即ち星系全體として如

何の組織を成すや、太陽系の如きを無数に繰り返し、究極の中央に大々の太陽の存在するや、又は重複星の如く多くの星の集團して他の星と互に運行するや、或は大中心もあり重複して一箇を繞するもあり、嗚へて言はゞ、獨立的なるや、共相的なるや、又は立君共相的なるや、其の軌れなるやを知るの端緒をだに得ざれど、多くの星が單純なる體系を成さざるの一事は確實にして、決して太陽系を以て據すべからず。中央星を運るとも、相互に運るとも、軌道と云ふ軌道は一も同じき無く、個々特異分ち異なるあり。少しづつ、相違も、變動を言ふる群星に在りて著大の差違を生じ、雲泥・霄壤ならざるに至るべし。一見すれば僅だ單純にして、各自過次に序を逐て運行するも、河の分岐岐用し絶えて一線なる處なく、且つ其間種々の形狀を成し、重複の上に重複するらしきを論じ、以て全體にも部分にも甚だ複雑なるを察すべし。

如ふるに一切の星長皆多少の變化を經ざるは無く、概して收縮し若くは收縮せんとしつゝあるべし。かなるべく、變光星の多きを觀るも、以て其の變化の著大なるに驚かざるを得ず。變光星の條、明光を發ち倏ち暗黒と化するは、原因を一に限るべからざれど、之を組成せ

る流星群の相互に衝突して水素の網を成すもの多し、而して其の極めて遙遠なる空間に演ぜられたるが如くとして地球より見ゆるを以て推せば、其の範圍の甚だ大にして、活動の非常に猛烈なるを想ふべし。變光星の如く一定して光を放たず、或は一層星よりも強く輝き、一年ならずして一等星と爲り、或いは全く消滅するあり、或は九等星なりしもの依然光を増して二等星と爲り、數日を經て次第に光を減するあり、其の變化の何に由來するかの明白を窺くも、兎もかく尋常の變動に非ざるや明けし。其の變動の著しきは常に見るべからざるも、又歌で珍らしとせど、少くとも數百年に一回、假りに數百年に一回とし、億々の久しきに言ふれば變動の多きに至るべく、以て宇宙間に輝ける群星の中に如何に多大の變化の行はるやを推察すべし。變光星は主として流星群の衝突に由るか、或は星と星との衝突するに由るか、若し星と星との衝突して光を發するあらば、是れ正しく星として淘汰し去られたるもの、今日觀る所の如く多くの星が各々一定の軌道を守りて運行するに至るまでに、既に幾回か斯かる淘汰を經來りしならん。

第六十三節 星雲が驚くべき大容積を有し、後に太陽系全體を包含するに堪へながら、爾かに微光として現はれ、變光星が輝く味に較する活動を演じ、而して他に何等影響する所あらざるを見る、則ち如何に巨星が互に相離り、大なる運動を經ぐるに離々として餘地あるかを推し得るべし。而も是れ兎も異とするに足らず、太陽系全體に或る方向を指して一分百甲に離れる星を以て運行し居るも、數百年を以て何層の變化を眼に觀せず。天象星は之に相當する速力を以て運行するも、殆んど少しも與も見えず。更に幾倍せる速力を有するの少からざるに拘らず、天文は萬世に於りて替らざるが如し。一彈に百千倍せる速力を以て絶えず運行しつゝ幾千萬、久しき特に見るべきの變化なく、嗚呼あては難く、其の速さばかり位置の變動せるを言ふ、大速力を以て大運行するを察する次第にて、星雲の著大なること驚く人力より得ざる所とす。

かくて、系は極めて複雑にして、極めて變化を遂げ、而も諸星各々自由を運動するだけ空間地を占むるか、其の態に致すまでも、幾多の淘汰を來るるなり。成立の當り或は流星群の衝突の最も猛烈なりしあり、或は星雲の著くは液態なる星の相衝突せしことあり、被毀すべ

きは破壊し、變造すべきは變造し、存留すべきは存留し、其の結果として異様の形態を成せる星の相互に犯さずと見ゆるに至れるなり。目今のところ、何處にも急劇なる變化の現はれず、北辰は依然として其の位置に在り、大熊星は依然として其の位置にあり、他の諸星亦皆一定せる位置に在りて何異狀なし、觀る者乃ち其の甚だ單純なるに想ひ及ぶが、實は多くの時代に多くの變化を經、組織も動作も極めて複雑なるものにして、検査すればは悉するほど其の複雑なるを認むべし。〔天文の觀時を始めてより既に數千年に達するに、恒星は其の位置を以て進行し、變化するが如く、其時命を以て恒星の運動する星といふ意味は今尚ほ多し〕

現在の恆星は皆少しづつ各自の位置及び形態を變じつゝあり、幾萬年幾億年の後に小變質みて大變化と爲り、北辰は北辰たるを失ひ、大熊星は大熊星たるを失ひ、一切の星辰盡く現狀を失ひ、星系全體として何の形狀を呈するや殆んど思想を超越するものあり

以て單純なりとするは僅少の時間に僅少の部分を観察しての事のみ、永遠に亘り全體を通過すれば、其の複雑を極め變化を極むる、唯不可思議とする外なし。

生物の活動を視て其の靈妙なるを稱するは、之が始め終りを見るの易く、其の絶えず眼前に

變化するが爲めにして、宇宙を以て比較的單純なりとするは、其の眼前に變せず、變ずるも少きに因る。而も其の眼前に變ずるの量が爲め幾億々々年間に千變萬化するを忘るゝに至りては、感らざるも甚し。生物の複雑なるか、星系の複雑なるか、生物に變化多きか、星系に變化多きか、宜しく察する所あるべし、必ずや比較するだに苦しむべきを感せん。

第十一章 無光星

第六十四節 星系の組織は彷彿として尋ねべきも、其の眼に映ずる最大部分は有光恆星なり、即ち自ら烈しき光を發すること我が太陽と同等のものなり、之を運れる遊星の見るべきは僅かに計ふべきのみ。星系の如何の形にして如何に活動するやは恆星を観測して判斷する外あらざらんが、さらば現在、恆星は果して星系其のまゝを表現するかといへば、必しも然りと斷言するを得ず。

恆星に種類ありて彼れ此れ一ならず、其の光を観るも、白色なるあり、青色なるあり、黄色なるあり、赤色なるあり、白色なるは光熱最も強く、青色なるは之に次ぎ、黄色なるは又

之に次ぎ、赤色なるは又更に之に次ぎ、此より以下、光輝愈々薄く、遂に全く暗黒なるに及ぶ。普通恆星と稱するは光を見ての事にして、光なきは未だ多く注意を拂はれず。光なくして全く觀るべからざるは容易に知り得ざるべきも、他の星の運行より推して測定すべきこと無しとせず、即ち或る星を観測し、他に暗闇の之を掩蔽するなれば、斯くく之の變光なかるべしと爲し、或は他に之を牽制するなくんば必ず斯くく之の運行を遂ぐべしと爲し、以て光なきもの存在するを斷定することあり、若くは又分光研究の結果、眼に見えざる處に星の存在するを確むることあり。アルゴル星が一定時間内二等星より四等星に降るは或る時機の之を掩ふが爲めと推測せられたるが、人或は以て無光星を運るとし、或は一の遊星に蝕せらるるとす。議論の決せざる者一にして足らざればからず、種々の研究に依りて存在の證明せられたるあれど、宜しく在るべきものに比して猶ほ極めて少しと謂ふべく、寧ろ言ふの價値なかるべきも、而も無光星は常に遊星に限らず、恆星にも之れあり、剩へ其の少からざるを假定する 當然なるを發見。

第六十五節

空間に散在せる無光恆星の容積甚だ大にして星系に種々の關係を有すること、我が太陽系に徴して推知すべし。太陽系内の諸遊星は、必しも太陽よりの距離に比例して容積を異にせず、土星は最も遠距離なる海王星天王星より大にして、木星は土星より更に大、而して地球より遠き火星は地球より小なるも、概括して地球よりも遠きは近きより大なりと謂ふべし、海王星は木星の十五分一なるも、地球の五十四倍なり。木星は土星の九分一、地球は土星の四分一、蓋し太陽が星霧の状態に在りて直徑二十億里以上の容積を占めし時其の周圍に在りて離れしものは收縮して後に離れしものより大なるべき筈にして、但だ初めに離れしは比較的稀薄にして、質量に於て爾後の小なるに劣るは或は免れざる數なり、海王星の最も大ならざるも恐らくは其の故ならん。固より多様の事情あることとて、一概に言ふべきに非ざれど、大體に於て然るを明言すべし。星系の如何なる形を成すやは今尙ほ不明せず、果して盡く一の大なる中心を運るや、將、部々々に中心を畫きて別個に運りつゝあるや、全體に關し洸として知るべからざるも、總じて或る中心より離るるの遠きものは近きよりも大なるべき傾向あり

とす。一の大なる中心を運るも、一部々々に或る中心を畫くも、遠距離に在る星は比較的、大にして、延いて他の星に影響する。少からざるべし。海王星の發見せられたるは天王星の軌道に異常あり、何處にか之を牽制するものある疑はれしに出づ。一の海王星が他の遊星の運行を制限すると同じく、遠距離の恆星は近距離の恆星を制限すべく、特に距離愈も遠くして容積亦隨て大なるべくんば、其の影響を及ぼすや知るべし。容積の大なるは光熱の減ずるも速し、土星や、木星や、現に流形を呈露し、尙ほ幾分かの熱を發しつゝありと信ぜらる。若し遠距離の恆星に容積の甚だ大なるの多しとすれば、其の光熱を減ずるも亦近かるべく、目下肉眼にては勿論、望遠鏡にても窺ふ能はざるにせよ、早晚器械の精良を加ふると共に望見し得らるべき理なるが、月辰の成立せし運速は其の距離の遠近に比例するもの、距離の遠きは早く成立し、距離の近きは遅く成立し、光熱の減ずるも或る程度まで此に準ずべし。〔目下望遠鏡の減ずるは、人目と異なり、或る光を吸すべし〕早く成立したりとて、容積の大なるは冷却することも速く、他星が光を失ふに方して尙ほ赫々たるべけれど、さればと

一期限なきにせず、幾億々々年を経過すれば終りに冷却せざるを得ず。星系の最も遠き部分は何の容積にして幾何の年代を経過せるやは、今日に在りて全く知ること能はず。如何に多くの年代を経過せるも、其の容積にして此に堪ふる迄に大ならば依然として光熱を發すべく、之を經過するの極めて多くんば少しも光熱を發せず、暗黒中に隠れ居るべし。其の孰れが當れるやは判斷するに出なきも、太初星系の現はれしより後、量るべからざる多大の年代を経過せるを疑ふべからず。星系全體の直徑は幾何里に互るやは何人も言ふを得ず、想像するだに不可能事に屬す。假りに一の大中心ありとせば、是れ曾て現宇宙の總てを包容せるものにして、一瞬間を以て如何なる何事も成るを以て計りしむるは、其の今日日撃するが如き状態と爲るまでに幾年代を経過せるやは眞に想像にも餘りあり。太陽系其の物も遠く隔れる星より望めば單に一點と見ゆべし、太陽系と同等のもの、若くは此より大なるもの、幾萬なるを知らず、渾沌たる氣體が漸く收縮して茲に至るまでには想像を超越せる年數を経過したるべく、中に就て特に遠きもの、即ち特に古きも

のは、如何に容積の大なるにせよ、最早其光熱を減ること著しく、或は赤色と爲り、或は暗黒となれるあるべし。最初に飛つくらし星は容積極めて大なるべきも、元空氣より薄く、收縮するに及びて意外に小形となり、當初の容積ほどに光熱を發するの永からざりしならん。最も遠く隔れる恆星の光線の地球に達するに數千萬年を要するならんが、たとひ能達すること、極微細の極にして、現在の器械を以て何等感ずる所あるを得ざらん。此の如く遠き恆星は光熱の有無すら判明せずして殆んど永遠に見ること能はざれば、其の存在は唯唯かに他の運行若くは分光研究若くは他の方法に據りたる時期に於て推測せられんことを冀ふべく、而も斯くしてさへ猶ほ其の幾分を知るに止まらん。されど其の暗黒にして見えざるは多く大なる恆星にして、尋常の遊星と違ひ、他に影響を及ぼすの著しく、而して他に影響を及ぼす何處よりするの知れ難ければ、星系全體の知り難きこと言ふを俟たず。今日知られたるは有光恆星の一小部分に止まり、無光恆星の知られたるは絶えて無くして僅かに有るのみ、有光恆星の遍く知られて更に無光恆星に及ぶは洵に容易の事にあらず。星系を觀測す

れば觀測するほど愈々其の複雑なるを知るべきが、單に有光恆星にても猶ほ知られたるの少きを思へば、以て其の複雑を極むるを推すに足る、若し更に無光恆星の加はりて互に相牽制するの事ふべからざれば、其の如何に複雑なるや言語絶え思想絶えたりとす。

第六十六節 星系の生物と比較して單純ならざること 明々白々なれど、生物の組織の皆各組織を成し、中にも最も進めるは骨あり肉あり、筋脈あるを見らば、星系の要素たる星が數度の幾億なるや測り難しといふに止まり、果して如何なる機能を有するやの判明せざるは、頗る劣等視し、無機物とし、無生物とするの可なるが如きも、是れ實は謬想なるを免れず。星系に有能とすべきの何事なるや、最も主要なる星辰の何處に存するやは、固より判明を缺くも、其の判明を缺くの故を以て星系に機能なしと斷言するは早計に失せん。星系に有能は必ずしも生物に必要ならず、肉も臟腑も必要ならず、機能も謂ゆる官能のみに限らず、普通に見るが如き官能なしとして、機械能なきを必ずしやべけんや。

河の中、幾多の大なる星、規則立ちて散在し以

て總てを統合し居らんも測られず。且つ星は白色なるの常態なるや、青色なるの常態なるや、將黄色赤色なるの常態なるや、抑又暗黒なるの常態なるや。此等は皆眼に觀て言ふ所にして、實は其れ以外なるの常態なきや、暗黒にして光なしといふも、觀に觀ての事にして、若し精良の器械を懸れば尙ほ明かに光の見るべきやも知り難し。今日に在りては光の變化の何が爲めなるやの知られず、自らより青色より黄、次いで赤、次いで暗黒となるは部分的盛衰を以て示すとも見ゆれど、研究の進むに伴ひて斯く單純に解釋すべきに及ぶるの判明せん。

有光恆星は規則立ちて存在し、加ふるに進んで此に隨ひ、加ふるに無光恆星の散在して暗に相牽制するあり、而して其の今日知られたる部分の極めて少きより察すれば、星系の最も複雑を極め、容易に生物を以て比較すべからざるを判定するに足らずや、然るに世に星系を目して單純なりとし、瑣細なる生物に劣れりと考ふるあるは寧ろ怪むべきに至りなり。

斥鵝の鵬程九萬里を笑ひ、我れ鷹隼して上ること數初に過ぎず、下りて蓬蒿の間に翔翔す、彼れ奚にか適かんとすと云へるは、自ら小に安ん

こと、人間より觀て眞に怖るべしとするも、而も其の一たび過ぐるや山は依然として聳え、川は依然として流れ、さしも凄まじかりし狀況も有りとも雖も猶ほ全く無きが如し。暴風暴雨の活動如何に烈しくとも、以て直ちに地球の劇甚なる活動とするは大なる謬見たるを免れず。太陽面上の活動は地球に於けると同日に語り難く、幾萬倍の猛烈を加ふるの争ふべからざるも、其の大なる實體に對し、瑣々言ふを值せざること、亦争ふべくもあらず。猛烈なる火焰の間に黒點の斑々たるは即ち其の内部の外より見ゆる所、火焰は唯之を掩うて突出し上下するのみ。火焰の立ち騰ること十萬里に及ぶあるも、直徑三十餘萬里の大球よりして特に不權衡なるを見ず、喻ふれば浮雲の山嶽を掩ふが如き觀あり。有光星として眼に映ずるは雰圍氣に光熱の存する間の事、無光星とは其の光熱の大に減せるもの事、觀測の便利上著しき差違あるも、雰圍氣に光熱あると無きとは星の實體に幾何の差違ありとするか、人の驚くの驚くべきに於てせず、驚くべからざるに於てすること、珍らしきにあらず。

太陽が地上の電氣氣を變ずるは主として黒點の關係よりし、黒點多ければ影響多く、少ければ影響隨て少し。其の何の理なるやは明かならず、或は光熱と離るべからざるあり、光熱の減すると共に同じく減せんも測られざれど、光熱といふも程度問題にして、既に暗黒と爲りたる無光星も極めて精緻なる器械を用ゐて能く量るべきことなしと限らず。(光の見る或は分帯帯を測定) 死灰同様に視らるゝ月の如き一衛星さへ、猶ほ多少の空氣、多少の水蒸氣あるやに疑はる、假りに之れありとせば、幾分の熱を發することを言さざるべからず。外面に光熱なきも、内部に全く光熱を留めざるに至るまで多大の年代を要す、外面の光熱に徴して活動の有無を推定するは、餘りに早計に失せん。太陽面上の火焰が猛烈なる勢を以て奔騰し昇降し、數刻にして十萬里なるは、眞に驚くべきが如きも、宇宙に於ける現象として特に彰著なるにあらじ。若くは其の表面の活動より他の遊星に變動を生じ、流水の滾々たる、生物の生々するを見ること、正しく人類の感歎する所なれど、星辰其の物に在りて僅に緒餘、仰々しく言ふべきに非ざらん。

太陽の光熱に就ても種々の説あり、其の容易に冷却せざるは絶えず流星の雨下するが爲めなりとは、今多く採用せられず、近來總てを收縮の結果に歸する傾向にして、毎年二百二十尺、或は三百尺といふ) 收縮せば能く彼が如き光熱を發するに堪ふべく、現在の容積より算して尙ほ確かに數百萬年の久しきに續かんとする事なるが、ラヂニウムの發見と共に新たに此を基礎として論ぜざるあり、曰く、太陽の光熱は地中の熱と均しく盡く、ラヂニウムに由來す。ラヂニウムの消滅する時は即ち光熱の消滅する時なりと。是れ以外にも種々の議論あるが、今日にては收縮説の一般に行はるゝ有様にして、恆星にせよ、遊星にせよ、衛星にせよ、皆斷えず收縮しつゝある事實なりと謂ふべく、而して光熱は此に附屬する迄にて、其の有ると無きとは深く問ふを要せじ。他星の電氣氣に及ぼす影響も亦同じく附屬性のものにして深く問ふを要せざらん。見れば無光星と有光星と判然たる區別あり、前者の暗黒にして死せるが如きに反し、後者は烈しく活動して其れだけ生命ありとすべきに似たれど、實は強ち然りとするを得ず。無光星と有光星と其の差別は表面に於てし、眼に映ずる所こそ甚しく異なれ、實體を査察して意外に差違の少きに想ひるべし。雰圍氣の烈しく動くは、一種の活動たるも、星の實體に與るの多きものならず。星の實體よりせば、其

の活動は運行の外に収縮を以て最も重要な事となす、光熱を發する間は収縮の稍と著しきを見んも、星辰の活動は究竟斯かる邊に存するもの、餘は附屬に過ぎず。

第六十九節 星といふ星は一として静止せず、死物と同一視すべきに非ず、其の活動の較著なるは、外に於て空間を運行し、内に於て自ら収縮するに在り。収縮は事頗る單純に聞ゆるも、元極めて有效なる動作にして、種々の變化は大抵此より出づ、若し星系に細胞の運籌に類するものありとせば、それは個々獨立して収縮することとなりとすべし。有光星の表面に火焰の逆捲くは、活動の重なる者にあらず、活動は斯く輕少なるもの謂ならず、以て活動の重なる者とするは小なる標準にて律せるなり、地球に百萬倍せる太陽及び更に大なる星に在りて特に言ふべき事ならず。多くの恆星は太陽と同じく光輝を放ちつゝあるが、其の光輝は周圍氣の動けるよりし、以て活動といへば活動ならざるに非ざるも、各自の實體は此の類の事を演ずるに緯々餘裕あり、直ちに指して恆星の活動とするは偶々恆星を小にするに終り、恆星は斯の如く小ならざるべし。但し當今星系に就て知らるゝは猶ほ僅々にして、恆星は太陽を

以て推し、遊星は地球を以て推すの例なるも、太陽とて未だ知らるゝの多からず、地球さへ十分に知られたるに非ず。近年天體の相影響するの甚だ複雑なるの判明し始め、光熱を主とするの不可なると共に皮相に屬する此の光熱も單に光熱に止らず、研究の進むにつれて變化の多様なるの知らるべく、X光輝陰線光線との關係のみにても容易ならずとす。此等の如く之の知らるゝのみ、他は之の如く、多くの小影響を以て考へ來れば、全體として如何に著大なる活動を爲しつゝあるやは、推斷に難からず。目下人の星辰を觀測する、唯其の光に依るの外なく、他に推測の方あるも、是れ亦間接に光を假らざるを得ず。然るに斯く大切な光も星の實體に増減するの多からず、實體よりせば収縮が主にして餘は從たるのみ、収縮の事は甚だ明瞭を缺くも、其の明瞭を加ふるは即ち宇宙の秘機の洩るゝものなるべし。星辰に關せる知識は猶ほ少量にして、以て其の動作を説明するの困難なるは言ふまでもなきが、研究は唯進むありて退くあらず、其の進むに比例して星系全體に生命あることの判明し、終には普通の生物に超越せる絶大の生物たるの明かなるに至らん。

第十三章 種々なる軌道

第七十節 新たに或る道理の知らるゝも、習慣の爲めに之を採用することを得ず、其の知らるゝの猶ほ知られざると異ならざるあり。星系の極めて濶大、極めて複雑なるは、最早や疑ひなけれど、人の平生爲す所は毫も此と關係なく、唯差し懸れる事に逐はれ、之を大にして一國內の事更に大にするも地球上の事、地球以外は僅かに日蝕月蝕の如きに注意を分つのみ、夜間高く天上に標幟たるあるも、何等意に留むるなく、又意に留むる必要もなし、斯かる事は考ふるとも考へざるとも生計に損益なし。夫の暮夜空を仰いで沈思し、誤りて溝中に墮り、扶け呉れし老女より足を地に着けて頭を星の中に没する勿れと思ふされしは、今に於て意味を失はず。星學の進歩は近半頗る較著にして、往年に比し全く新たなる面目を具ふるも、大多數の人の與り關せざること依然として替らず。今は太陽を以て星系の最も重なるものとせず、有りりと有らゆる恆星は殆んど皆太陽と大同小異、中に此より大なるあるの明白なるに至りたれど、尙ほ一般に星系を目して甚だ單純な

たれど、尙ほ一般に星系を目して甚だ單純な

りと概括し去るの風あり。

人は舊に依りて生物を宇宙間最も進歩せるものと爲し、固く信じて疑はざるが、其の斯の如くなるは、元生物の間斷なく變化するに拘らず、

是以以外の物の概ね固定し、日月も星も一定の軌道を往いて還るのみにて、如何に形の大なるにせよ、如何に物料の多きにせよ、究竟機械的に止まり、遂に他の自動的なる同一視すべからざればなり。されど科學の進歩せるや、生物も亦一々規則を履み、妄りに其の外に逸せざるの知られ、草木鳥獸は勿論の事、人類も各々

定まれる所あり、其の組織せる社會は最も複雑なりと稱せらるゝも、猶ほ歴史的及び統計的に順序の爭ふ可らざるの判明し、其の年々歳々益々判明し來ると同時、初め全く固定せりと思はれし自然界の意外にも不規則なる事あり、尙ほ其の不規則なる事の頗る多きの知られんとする傾向あり。星系全體に關せる知識の缺乏し、部分の明かなるも少く、其れさへ臆測を交ふるの嫌ひあれど、而も研究の進むに隨て其の複雑なるの證明され、更に複雑なるが上に愈々複雑なるの測定せらるべし。大なる中心ありて一切の星辰悉く之を運るか、若くは各部分を成して別々に運るかは未だ判斷の端緒をだ

に得ず、將螺旋運動の多きをいふも、其の詳かなるを知り得ざるが、調査の届くだけ夫れだけ複雑なるの知らるべきを斷定して可。

第七十一節 恆星中に二重三重等なるの少からず、互に相運るあれば、又巴形に運るもあり、運行は到底一様に見做すべからず。實に種種變態として認りながらんが、而も一定の軌道に於てする限り、中心の何狀なるかの疑はしき迄にて、往いては還り、還りては往くの既に略ぼ定まり、いはゞ循環的なるに過ぎず、種類の多くとも、畢竟するに單純なるを免れず、生物の機能にも循環的なるの多けれど、循環中に幾許かの變化あり、全く同一事を繰り返すこと無し、是れ其の星系に異なる所とせらるゝが、星系は大抵規則立てりと思はるも、決して變則の行動なきを必ずすべからず、之を必せんは不可能事に屬す。既に計へ上げられし一億の恆星中、種々なる軌道を運るあり、重複星の如きも確かに命とすべく、其の攻究の進むにつれ、奇絶怪絶なるの知らるべきが、現在の知識にては深く之を尋ぬること能はず、強ひて推斷するも想像たるに止まる。而も知らざるを知らずとして、如く太陽系のみに就いて觀察するに、尙ほ軌道の單に循環的ならず、如何に運行する

かの測るべからざるあるを認む。

太陽系は比較的單純にして、附屬せる諸衛星は皆同様の方向に還り、相互に犯すことなし。されど同じく太陽系に在りても、星の如く變則なるあり、斯くも變則なるは多く類なかるべし。其星の肉眼にて觀るべきは極めて少く、時に現はれ來りて人を驚かせるが、望遠鏡を假れば常に多くの星の散在するを見る、或る人は以て海中の魚よりも多しと爲せり。(ハケル)而して此等の星は遊星と軌道を均しせず、自在に他の軌道に入り込み、自在に之を滑り抜け、往々直角的に之を構斷し、或る時は極めて太陽に接近し、其の半徑にだも足らざる邊まで來り、而して又何れの遊星よりも速く飛行し去る。其の幾割が太陽を運り幾割が太陽より遅れ去るやの明かならざるも、既し知られしは約八百、一たび去りて復還らざる者あるを疑ふべからず。凡そ物體の太陽を運るの單に楕圓形に於てせず、雙曲線若くは拋物線に於てするは夙に推斷せられたりしが、其星の多くは乃ち拋物線に於てし、飛行して何處に往くやの測り難し。其の近づき來る時、近傍の星に引かれて西門せる軌道を描き、其の去るに際して亦近傍の星に引かれ、來るにも去るにも、多くの星の間を滑り廻り、直

織間織の時態を顯はす。固より中には數千年にして還り來るの明白なるあり、或は數百年にして還り來るの推測せられたるあり、(三分の二は三年にして) 遠きは數千年にして還り來るの想像せらるゝあるが、竟に行方不明なるの少からざるを許さざる能はず。

然るに是れ皆太陽系にて觀る所の事、一の太陽系にて猶ほ然りとせば、殆んど無邊際なる星系全體に在りて、此に似て一層大なるものの幾何なるやを知るべからず。一切の恆星盡く太陽と同じく、特に選れて大なるなくんば、其の間に出入來去する彗星も亦太陽系に準ずべけれど、太陽よりも大、中に幾百倍幾千倍するありとする、則ち彗星と同質にして更に甚だ大なる者あるを想ふべし。彗星の性質に就て尙ほ研究の十分ならざるも、或る程度まで星霧と同じとせられ星霧と同じきもの分裁して飛び、更に潰散して流星と爲るを考へ得ざるに非ず。幾多渾沌たる星霧の浮動すると共に、我が地球より見ゆる彗星に幾百千倍大なる彗星ありて、星と星との間を滑りて奔るを想ふべく、又或は大なる星霧が茫々たる空間を縫ひつゝ飛ぶをも想ふべし。(俗に彗星の掃帚と云ふ星の運行に比し、掃帚の掃帚より早くし、速くは是れ如し)

運行すべきが、地球より望めば十年二十年に何等位置の變化なく、百年にして尙ほ見るべきなく、數千年にして始めて見ゆれば、漸かに輝ける星霧も數千萬年の間に不規則なる軌道を描いて空間の或る一方より他の一方に轉徙するを察すべし。

彗星は星と星との間を滑り廻り、廻りながら流星を墜し、時として自ら全く流星に化する事あり。五に一に墜す。流星の地上に墜つる一年一億五千萬と算せられしことあれば、其の廣く星辰間に墜つる數の夥しきこと、推して知るべし。斯く無量の流星の墜落して如何なる結果を生ずるやは容易に決し難きも、大小の彗星が宇宙を運りて流星を墜すは、影響の性質こそ明かならざれ、影響の無視すべからざるは言ふを要せず。時を定めず、處を定めず、遍歴して流星を散布すること、必ず何かの意味あらん。されど臆論を繼にせず、唯知られたるに限るに、彗星の太陽より選れて抛物線的に飛び、右星に引かれて右し、左星に引かれて左し、大星に引かれて俄かに角度を變じ、全く別系に加はるなど、軌道の不規則なること名狀するに堪へざるを憂ゆ。普通の遊星に據り、普通の恆星に據りて、軌道の一定を確信せるものも、一たび

彗星に想ひ到れば、星の運動の盡く規則正しきに非ず、盡く循環的なるに非ず、全く破格なる者の少からざるを知るべし、軌道の單純なるを説くは遠慮も甚し。

第七十二節

生物の機能の複雑にして、各部分の作用の均しからざるは、星の運行と同じからざる所以とせらるゝも、多くの細胞は果して働かざるを異にするか。生物の大規模に現はるゝ人類の社會には、種々なる變化の生出するも、其の間自然に定まれる所あり、之を設計せしものは一人の生死より、盜賊の數、製作品の數、郵便物の數まで大抵豫め判知すべく、絶えず高下するも、其の高下する程度を推測し得べし。更に小なる團體、及び又更に小なる一人の身體に在りても、一定の範圍の處へ可らざるあり。筋肉の伸縮、血液の循環とて、順序の固く定ま

れるあり。之を星系に於ける彗星の一たび去りて復還らず、何處に行きしやの測られざるあるに比し、尙ほ以て不規則なりとすべきか。尤も彗星の軌道は豫め定まらずとはいへ、星系全體より觀れば自ら定まる所あり、何處より來れるは何處に去るべきか、行く／＼近傍の星に左右され、動もすれば行方不明と見ゆるも、畢竟如何に落ち着くべきかは、後日漸々判明せん

が、軌道といへば楕圓形にして、循環的なりと考ふる習ひよりする、則ち甚しき變則の道にして、軌道といふべき軌道ならずとすべし。其の何の作用あるやは別とし、星辰の運動は簡單にして規則正しといふを修正するに餘りあり。生物は細胞は變化多くとも、時計の機械と一般、精巧ながら豫め確定せる者にして、變化の妙を悉すこと星系に譲らざるを得ず。

其星は當代相製の望遠鏡にて、觀測せらるゝに止まり、距離の遠きは全く知るに由なし。太陽系には、孰れも太陽に近づいて光輝を增し、漸く遠ざかりて漸く幽かに、遂に見る可らざるに終れば、他系にても、將何處に在りても、大なる星に近寄らざれば光輝の見難きものとす。乃ち空間に無數の其星あるも、光の見えざるの多く、隨つて容積も種々、運行も種々なるべく、觀測法の進むに伴ひ、新たに理解し得る所の甚だ多かるべし。其星と星霧との關係の明瞭を加へ、其星の流星を塵しつゝ飛行し、附近の星に及ぼす所の影響の知らるゝ時は、即ち恐らくは星辰の重複して相運るの判明し、螺旋狀に運るの判明する時にして、星系の單純ならず、實は生物よりも遂に複雑にして遂に變化多きことと決定せん。

第十四章 種々なる組織

第七十三節 星は皆收縮しつゝありといふこと、甚だ無造作に聞え、此に伴ひて多様の事象の現はるゝも、雲の昇り雨の降るくらゐに考へ、深く注意を拂はざるの常なるが、雲雨の變ずるさへ、普通に輕々看過するほど爾く單純なるにあらざり、特に無量の天象に至りては、有らゆる語を以て其の複雑なるを形容するも尙ほ及ばざるべし。遠近の星は元素に於て略ぼ相同じく、大抵我が地球に見る所とすべく、時に見るべからざるあるも、全體を通じて大同小異なるを喪ふなく、而して孰れも皆漸々凝結せんとする傾向なれば、單純の方面よりし一單純なりと概観し得ざるに非ざれど、一たび複雑なるに想ひ到れば惘然として自失せざるを得ず。

星は大別して星霧狀なるもの、太陽狀なるもの、及び遊星衛星狀なるもの三と爲すが、其の星霧は今日唯僅かに窺ひ知られしのみにて、實は知られしと云ふまで知られしに非ず、現に計へられしは全數の幾分に過ぎず、他の多くの知らるゝとも、永く見えざるの少からざるを否定すべからず。未だ星霧と爲らず、何の形を成

さず、又固より光を發せざるあるをも、順序として許し置くの當然なり。呼びて星霧とするは光あるもの事、光なきは有りといふも無きに異ならず、而して其の如何にして光を發するやは頗る理解に苦む所、近來流星群として説明し、無數の流星相衝突して蒸氣を生ずるが爲めとするが、元根處ある言なるも、其の星霧たるや極めて稀薄、幾億里の廣きに擴りて尙ほ透明、其の中に居れば星霧中に在るの否やの感ぜられざらんと想はるゝ程にて、(スコット)斯かる稀薄なる物質に在りては、流星群なりと推して知るに足るべく、其の相衝突して彼が如き光を發するやは聊か疑はざる能はず。されど現に觀る所を以てせば極めて稀薄にして而も光を發し、極めて透明にして而も流星群の衝突し居るを事實とすべし。近き例として其星の在るあり、厚さ數萬里に彌るの大を以てして、少し、他星の光を妨ぐるることなし、雲の蔽ふこと數十尺なれば、爲めに前面に位置する何物をも識別せざるに、數萬里の厚さにして此の如く透明なりとは、奇とせずして何とかなすべき。(エリッソネット球の雲層上)「星霧の光を放ちつゝ透明なるは、流星群を以て説明し得ると假定するも、其の活動の狀態を考ふれば、組織の異様なるに

驚かざるべからず。

流星群の衝突すること、一の解釋たるに相違なきも、實は幸うじて知識慾を満足せしむるに止まる。彗星の何物たるやも未だ明瞭ならず、星霧は尙ほ更らの事、其の如何の狀にして如何に活動するやは、大に攻究するを要す。而も星霧の漸次收縮し、萬億年を経て、太陽と同じき形を具ふるは、争ふべくもなし、現に恆星中に星霧と太陽との中間に位置するものあり。其の或るものは太陽に千百倍し、千萬倍すると察せらるゝが、容積の大なると共に又頗る稀薄にして、他年縮小するに及び、或は太陽と容積を同じくし、場合に依り一層縮小するもあるべし。斯言へば甚だ簡單なるも、太陽として明白を缺くの少からず、攻究するに隨ひて愈々新事實の顯はれ、豫想よりも遙かに複雑なるの推知せられたれば、容積此と相若き、若くは更に大、若くは更に大なるものは、皆各々限りなき攻究に値し、大小の段階多き丈け攻究に忙殺せらるべし。

第七十四節 星霧の形狀は區々にして一ならず、多くは螺旋形又は螺旋形たるべき射向ありとせらるゝが、斯かる形を成さざる以前に於て既に幾様の變化ありしとすべく、同じく流星群

の衝突にても、稀薄なるに於けると濃厚なるに於けると著しき差違あり、漸く濃厚にして漸く螺旋形と爲り、更に球形を占めて太陽に類する迄に如何の變化を經るやは推察だも易からず、唯彗星の際に微かに想像し得るのみ。今後幾千萬年、太陽の收縮して遊星を成すことあるべきも、地球の地層を積へ、幾層々の規則正しく或は不規則に累積するより推せば、太陽面上の活動全く休止するまで、變化に次ぐに變化を以てし、變化の形容し難きや明けし。〔年三百日收縮すべしとの説あり。〕將地球の收縮して月と等しき荒蕪なる光景を現するまでに、亦多くの變化の伴ふべく、竟に人類絶滅の期を想察するに及ぶ。人類の絶滅は己れの運命に關するが故に、自ら重大視せらるれど、由來自然界の變遷は人類に遠慮留難なく行はれ、人類の以て無用とし禍災とする所も間斷なく演ぜらる。人類こそ無用有用の差を立つれ、大となく小となく各々變遷の中途ならざるなし。

氣體なるの液體と爲り、更に固體と爲るまでに、實に論ふべからざる多大の變化を經たるべきが、星系は決して一様に變ずるに非ず、現に氣體なるあり、液體なるあり、又固體なるあり、種々なる組織のもの相錯綜して存立す。氣體の

極なるは殆んど絶對的に稀薄にして到底計量するを得ざるべし、我が太陽系全體の斯かる者の中に在らんと測られず。星霧として日に觸るは流星群の衝突して光を放つに因とするも、二億年を経て數億年を氣體部分の多きは疑ひなき所にして、窺真衛に據り此の類のもの數十萬の多き上るべきの知られたり。將來該衛の赫妙を加ふると共に、益々數の増加し來ることならん。星霧は渾沌溟溟の狀にして、漸く或る形を占めんとするなるに、猶ほ此の如く多し、收縮して太陽狀に近似せるは即ち恆星とし輝くものにして、窺真にて一億と計へられたるは、經ね是れなり。太陽狀を成せるもの斯くまで多きを觀れば、其の一々に伴へる遊星の如何に多きかは言ふを要せじ。我が太陽系に遊星の少からざれば、太陽より大なる恆星の周圍に多くの遊星の伴ひ、其の遊星にそれら變遷の程度あり、太陽と同じく赫々たるあり、或は此に似て幾分の光を發するあり、或は全く暗黒なるあり、均しく遊星といふも、種々難多なりと爲すべし。而して其の遊星に衛星の伴へるの少からず、又絶えず流星の射出するあり、流星にも大なるあり、小なるあり、其の最も小なるは砂石と擇ぶ所なし。見るべし、星霧

も、恆星も、衛星も、將流星も多くの種類の錯綜して、存在することを。星系成立の順序より言へば、星霧状よりして太陽状、太陽状よりして遊星衛星状と爲り、現に散在せる無数の星は皆此の外に出でずとすべきが、其の然るを認むると共に、各種のものと同時に存立するを忘るべからず。

第七十五節 星として如何なる形を成すの最も常態なるやは、遂に判定するに由なし、天空に燦爛たるものが若干を除いて盡く恆星に屬し、各々光熱を發し、明かに活動の見るべければ、以て主體と爲すべきが如くなれど、是れ唯人目に映じ観測に便利なりといふに止まる。此等恆星の外に数十萬の星霧あり、各々新たな運命を以て種々の現象を顯さんとし、更に幾億の遊星あり、又更に一層多くの衛星あり、略ぼ表面の活動を止めて全く固體と爲らんとす。乃ち中に就て恆星を常態とすべきか、星霧を常態とすべきか、將遊星衛星を常態とすべきか、之を判別するに何等標準を見出す能はず。一々の星に氣體、液體、固體の變遷あるべけれど、星系全體の上に如何なる變遷の現はるや、當今の知識の能く決する所ならず。星系全體に或る順序の確實なるあるにせよ、總じて

星霧状より太陽状、太陽状より遊星衛星状に移るの常なるか、若くは星霧の太陽状と爲り遊星衛星状と爲る時、前に見るべからざりし氣體の收縮して新たに星霧状を占め、其の星霧状より太陽状に遷る時、又別に新たに星霧と爲る者の出で来るあるか。星霧の幽かなる光を放つを視れば、未だ光を放つに至らざるあるをも聯想すべし、光は流星群の衝突より生じ未だ衝突す。其の幾何なるを考ふべからざるも、決して少しとすることを得ず、而して同時に他の諸星の並び存するを怠へば、極々の太初は始く措き、星系としては新たなものの絶えず出で來りて順次變遷し去るが如きあらざるか。星系は現に存在する所に限るとし、單に其の變遷すべきを言ふは速斷に失せざるか。幾萬里の厚きを果ねて耀きながら、透明にして小星の光をすら遮らざるある、則ち有るか無きかの知れざる極めて稀薄なる氣體の存在し、其の漸々收縮して星霧状に移るべきを想ふは、強ち無理なりとせず、見るべからず、測るべからざるが爲めに究竟推察するだけなるも、向後其の推察の次第に確かめらるゝに至らざるべきか。宇宙の盡く力なるは夙に唱へられし所、見えざる處より見ゆる星霧の現はれ來り、太陽状に變ぜし星霧を取り

て代り、新陳代謝して已まずといふは、之を具體的に言ひ表はすにあらざるか。究極の將來の如何なるべきやは、之を言ふの不可能事なるも、現に認知し能ふ限りには、種々なる組織の相並びて存立すること、恰も人類社會に老若男女の並び存立し、而して其の個々互に特殊の状態を有すると同じと爲すべし。老若男女並び存立するも、其の孰れかを以て社會の最も主要なる分子とせんこと甚だ難し、老人の然るを言ふべからざるも、さればとて壯者の然るを言ふべからず、又中年の然るを言ふべからず、唯老若男女錯綜して茲に社會の成立し且つ存續するを言ふべきのみ。生物の體內に舊新細胞の存するも此に類す、星系全體として亦斯の如きものあらざるか。即ち純然として氣體なるあり、氣體より液體に移るあり、或は液體より固體に移るありて、斯く順序を遂うて老成するかと思へば、亦全く見えざる處より氣體と爲りて現はれ出で、いはゞ星の卵を供給することあらざるか。

人に多くの種類ありといふも、夫の星系に於て星霧状より恆星状と爲り、遊星状と爲り、衛星状と爲り、終に全く固結するに對し、素より以て言ふに足らず。特に生物の細胞に至り

ては、何様の種類ありとも、寧ろ甚だ單純なりといふべし。何れの細胞も概ね相似、葉脈の著しきなし。然るに人動もすれば生物を以て星系より複雑なりと爲し、無数の星長を死物視するが、是れ小に拘りて大を忘れたるの甚しきもの、星系は決して斷く單純なるにあらざり。星に種々な組織あり、其の種類は擧げて計へ難く、將來研究の進むにつれて益々其の多きの判明し來るべし。

第十五章 最も知り易き星

第七十六節 遠きを以て近きを推すことあるも、近きを以て遠きを推すの一層易く、一層多きこと、言はばもなり。恆星中太陽最も近く、而して太陽を以て他の多くを推察するを得。遊星中地球最も近く、現に吾人は其の上に居るが故に、以て他の遊星を察するは勿論、星辰一般をも察するの稀れならず。吾人は望遠鏡にて空を望み、顧みて我が地球を稽ふることあるも、近きよりして遠きに及ぶは順序の當に然るべき所なり。

同じく遊星といふも、決して一様ならず、太陽系内の遊星さへ個々皆異なれば、他の諸系に

屬する無量の遊星の、互に相違ひ、中に極めて異様な者の存するを想定するに難からざるが、其の既に自らの光を失ひたるは、地球を以て推すの頗る便利なるを覺ゆ。地球は比較的最も多量調査され、八十に近き元素を知れること、分光研究にて天體の元素を知れること、皆吾人の居る處に於て研究し證明せるなり。遊星は各々情狀を異にするも、その形質的變遷は百年千年にて觀られず、如何に變遷し來り、如何に變遷し去るやば、幸うじて時測する外なく、而して根據とする所は要するに我が地球にして、地球は宇宙的知識を得るの實驗室と謂ふべし。『現在地球の地質學』我が地球の變遷が何様に進げられしかば、地質學の任じて當る所にして、爲めに判明したるの少きにあらず。

初め氣球にして、漸次液體と爲り次で固體と爲り、以て今日の狀況を呈するは、該學の星學と相應じて詳かにするを得る所、其の詳かなるに隨て、星辰の構造も次第 明かにせらるべき筈、されど地質の變遷の幾何が地球固有の働作にして、幾何が太陽の力を混じたるか、若し地球固有の働作のみにして太陽の力の混ぜざりしならば、目下何の形狀を占め居るかは、容易に言ふべからず。地球の事は近年大に明白

を加へたるも、全體として尙ほ幾分の知識を得たるに止まり、大部分は依然として茫漠たるを免れず。

第七十七節 斷崖絶壁を視れば層々相果なり、其の相果なるの善く顯明立ち、間と不規則なるあるも、自ら然るべき理由あるの認めらる。然にて成れる岩に一定の順序あり、水にて成れる岩にも一定の順序あり、孰れも皆争ふべからざる性質のもの、其の順序を觀れば、以て地質の偶然にして成れるに非ず、一上一石と雖も由りて來れるの久しきを判定するに足る。但だ普通にて人の感歎する所に已れ自らに照らして感歎するのみにて、地球其の物に在りて著しき働作とすべきやは疑ひなしとせず。幾個の層、順を逐ひて積み累なり、裂けて一大斷崖と現はる、故、元地熱の漸々減退せしに因るも、太陽の影響を受けたることも少からず。地殼漸く成るや、空圍氣の下層に砒酸鹽の瓦斯體なるあり、上に水蒸氣あり、又上に空氣あり、後更に冷却すると伴ひ、砒酸は砂石と爲り、水蒸氣は水と爲れること、誠に變遷の自然なるものなれど、地球固有の働作の外、太陽の力の加はり、特に水の形づくられし後、其の働きの目醒まししく顯はれたるを見る。收斂の結果と

く列擧するを得れば遙かに月を凌駕すべく、而して各と相應に猛烈なりしとせば、總體として驚くべき劇甚の活動なりしは想像に難からず。然るも是れとて寧ろ地球の表面に屬するの事、地球全體に於て一小部分を占むるのみ。噴火する丈け噴火すれば、かゝる動きは竟に終りを告ぐべく、終りを告ぐれば尋常の土塊と異ならず、地球面上の噴火は斯くして順次休止し、新噴火も次いで休止し、全く其の形を失ふに至るべし。

第七十八節 而も仍りて地球内部の活動なきを断定すべからず。地熱は漸く冷却するも、其の速度は極めて遅し、今日地質に就て知らるる所は僅かに成立し薄き地殻のみにして、内部の如何なるべきやは何人も明言するを得ず。地震は屢く起り、特に珍らしとせられざるが、其の人に感知せらるゝは震動の稍々著しき者にして、人に感知せられず器械にて知らるゝは一々計ふるに堪へず、器械の精巧を加ふるに従ひ、大地の間斷なく震動し居ることの測定せらるべし。地震は大抵地下十里以内にて、誠に皮相の動搖なれど、震動毎に幾分の附設ありとせば、百年千年にこそ見るべき變化にけれ、幾萬年を経過する間、寧ろ桑田の碧海と成るの

みならざらん。收縮の繼續すれば、地殻は如何に陥り、内部は如何に變すべきやは、確むべき無し。地球は皮の成れるのみにて、變動の大に進行せるにあらざり、皮を剥げば全く渾沌たる者に於て、其の邊に何状を呈すべきを解決するは、將來の事に屬す。變遷の早く進行せしといはるゝ月も、單に外部の觀測せられ、内部は一切窺ひ知るを得ず、外面に於てさへ、一山より直線の散出し、千里の長きに互るの解し難きものあり。而も月を外にして地球より一層變遷の進みしものを見るべからずとせば、遊星の變遷を明かにするの困難なる、推して知らる。

地球は最も知り易しといふも、其の知り易きは僅に地殻に限らる。地層は多く規則立ち、研究に便なるも、全球の數千分の一に過ぎず、固より以て全體を探ること能はず、總じて地熱の冷却するのみとし、其の他を問はざるは單純に失し速斷に失せん。地熱の冷却するは疑ひなけれど、冷却すると共に既に多大の變化を現はし來り、今後更に如何なる變化を現はすべきやは推斷に餘りあり。たとひ別に新層を成さず、種々なる元素の混濁して凝固すべしとするも、小變の積むの久しければ、結果の頗る重大なるものあるべし。且つ地熱は冷却すといふも、全

く冷却したり、爾後少しの變易なきに至るべきかと問へば、返答に窮せざるなけん。由來熱は收縮又は或る他の變化に伴へるもの、而して物は絶對的に静止すとは、如何にするも考ふるを得ず、冷却すといふも程度問題にして、物は分子間、少くも電子間、絶えず幾何か變易しつゝありと謂はざるべからず。〔地熱の冷却すると水も冷めて氷となり、氷の融解するは人の呼吸するに同じなり。〕地球の活動は果して人の呼吸するに同じなり。地球の活動は果して人の呼吸するに同じなり。地球の活動は果して人の呼吸するに同じなり。

これより以往漠として知られず。地球は遊星中最も近くして最も研究し易きに、これに就て知らるゝの斯く表面に止まれば、他の諸遊星の始終を察すること容易の業にあらず、恐らくは不可能といふの適當なるべし。されど知られし丈けにても、其の活動の甚だ大にして、考ふるに従ひて愈々大なるの推定せらるゝを、手ふべからず。太陽の作用を離して考ふるも、地熱の冷却に伴へる變遷の意外に複雑なるを認むべし、太陽の作用を併せ考ふれば、尙ほ更らるるにして、普通に有機體とし生物とするは皆此に屬す。〔地球に知られざるのものをわれと、比較的最も知り易く、而も更に一層近くして小なるに及ばざるは、〕

第三篇 副生界

第一章 兩生界の關係

第七十九節

地球は最も近くして知り易きに、其の知らるゝ所の僅に表面に限れるより推せば、他の遊星に就て知らるゝの多からざることを察すべし。太陽は最も光輝ありて觀測に便利なるに、其の知らるゝは概ね雰圍氣の状態にして、其れさへ十分なるに非ざれば、他の恆星に就て知らるゝの甚だ少きこと勿論の事とすべく、特に望遠鏡の力の及ばざる邊は、想像を以て臆斷するだも尙ほ難し、實に星系の知られたるは一小部分に過ぎず、大部分を判定し得るの何れの日なるやを言ふの困難なるが、既に知られし所に據りて稽ふれば、星系は全體として統合し、且つ極めて複雑なるものと爲すべし、新たに知らるゝ所は、一としてこれを證明するの材料たらざる無し。恰も壯大なる宮殿の廻廊に立ち、構造の精、裝飾の美を觀て感歎し、愈々入り、愈々感歎し、更に深く入るに及びて層一層感歎すべきあるを想察すると同じ

く、實は全體として寧ろ失望すべきやの測られざるも、現に居る處にて判斷する限り、唯其の感歎すべきを覺え、絶えて其の感歎すべからざる。覺えず。最大なる星ありて中央に俯し、有らゆる系統の星辰の悉く之れを運るか、將多くの部分的中心ありて、部分毎に或る中心を運るのみなるか、若くは此の二つの兼ね行はれ、互に相戻らざるか、抑又全く別殊の順序に於てするか、未だ何等の緒を見出し得ざるも、夫の銀河が一帶を成して河の如く映じ、此を離れて星の稀れなるを見れば、以て星の徒らに散在せず、全體として或る一定の形を占むるを信すべく、又知られたる星の運行及び成分に徴し、其の組織の甚だ複雑なるを信するに難からず、知識の十分ならずとも、總括して考ふることも必しも絶望ならず。約するに統合して而も複雑、且つ大なる力の大なる機關に現はるることを疑ふを得ず。〔第三篇第六卷〕生命の有無に關し議論區々なるも、生命といふの一種の力なるは否定すべくもなし、其の如何なる力たるやの判明せざれど、普通に此に伴へる現象とするは、統合して而も複雑、自らの力にて自ら運行すと認むべき所に存す。此の意味よりせば、星系の實質の何たるに拘らず、必ず生命ありと

斷定せざるべからず。凡そ全體は全體として觀るを要す、全體として觀て意味あるものは、部分を觀て意味の解せられざること多し。星系を究明するの容易ならざるも、其の既に知られし所を以て或る程度まで推考し得べしと爲すべく、而して其の全體として集合し活動しつゝあるは宛に疑ふべからず。全體として集合し活動するには、各部分皆相依り相待つ。一部分にて何の意味なきも、全體に於て須臾も離れ難き關係を有し、如何に遙かなるものも、如何に微かなるものも、密に關係せざる無けん。〔ツッツの宇宙の如くならん、科學の觀に於り〕一小石と雖も關係の六合に互り永遠に及ぶべし、其の存在するは萬種の關係に於て此處に存在せざるを得ざるやう決定せらるものと、言ひ換ふれば星系が今日の如く現はれ居ると同様の必然的命數を以て現はれ居るもの、星系の何處にか現狀と異なる所あらんには、此の一小石にも何處にか現狀と異なる所あるべき筈、若し此の一小石の存せずば、延いて現星系に何等かの差違を生じたるべし。何物も、何事も、相關聯せざるなく、星系全體の關係よりせば、一微塵も十分なる意味あり。山が空しく聳え、河が空しく流れ、特に何の意味なしと

みゆるは、部分的に観るが故にして、他との關係を絶つに於て意味を失ひ、有りとも無しが如くなるは、獨り是れのみ非ず、身體より一の細胞を取り出し、其の何たるやを問へば、返答に惑ふの少からざるべし。勝たる地球の或る現象を除き、宇宙を擧りて無機物と爲し、生命なしと爲すは、孰れも皆關係を絶ちて觀察せるに出づ。一たび全體との關係を觀んか、山も、河も、一石も、將一切の無機物も絶たなる活動に與らざる莫く、而して其の活動は普通と呼びて生命とする所の種々の資質を備ふ、生命ありと謂はずして何かせん。

第八十節

されど今日まで知られたる所にては、其の活動の著しく現はれ來れるは星の悉く收縮する事にして、收縮の何なるやは頗る明白を缺くも、兎もかく此に重きを置かざるを得ず。星系全體として收縮し、各部分も亦收縮し、轉回するも、光熱を發するも、其の他複雑なる働を現はすも、皆此に伴へるもの、收縮に動力表現の麻觀せられたるなり。收縮といへば、甚だ單純なるが如きも、此に伴ひて幾多の現象の現はるを觀れば、其の單純視すべきに非ざるに想ひ到らざる能はず。(收縮は必ずしも、非ざるに非ざるに、形體が或る程度に收縮して、其の收縮に依りたる物質が普通に通じて進化を爲す、或は收縮を

爲す處で、物質が全體の收縮するよりして大小幾億の星を生じ、星の收縮する時、太陽に於けるが如き猛烈なる活動を現はし、漸くして地球に於けるが如く、地層を積み果ね、火山噴出し水を流動せしむ、其の變遷の跡を尋ぬるに、唯驚歎するの外なく、先づ見て複雑とせるもの、愈々見て愈々複雑なるを認む。而も大體に於て一様の趨勢とする習ひなるが、一部分の冷却し、他の一部分の猶ほ熱を保ち、冷却せると熱を保てると物理的及び化學的に錯綜混交するに方り、一種の現象を生ずるあり。單に冷却するに止まれば、地殼の成り、氷にて掩はれ、次いで空氣だになき上塊と爲らんも、他より冷却を妨げられ、或る年代の間、氷にて掩はるべきの掩はれず、空氣の吸收さるべきの吸收されざれば、單に冷却する場合と多少形狀を異にするの避け難く、夫の有機物若くは生物と叫ばるゝは實に此の間に生ぜる者とす。同じく收縮の趨勢に促されしなるも、單獨に冷却せざるより起れる現象にして、何星にも豫め

一定せる順序を以て生出すべしとするを得ず。今日此の類の事に關し知識の得られたるは、一小星たる地球に於てのみにして、之を外にし少しの觀察せられたる無し、有機物といひ生物

といふは幾億の星辰中唯地球上に認知されし者にして、若し果して地球に限られたらんには眞に勝手として眇たる小事と云はざるべからず。されど此の現象の一般星系に於ける地位は全く推考せられざるに非ず、大略其の現出すべき事情を分ちて二とす、一は星自らの變動、一は星と他の星若くは星に準すべき者との關係なり。

星の冷却すると共に種々なる變動の生じ、既に地殼の成るも、硫酸の五斯體なることあり、硫酸の沙石と爲るも、鹽類又は炭酸又は水蒸氣の掩ふことあり、其の稍々冷却し、而して猶ほ地熱の熾んなる時、地層の或る成分に化學的變化を與へて、謂ゆる有機物たらしむることあらん。而も多くの有機物の現はるゝとも、雰囲気濃厚にして地殼の薄き時代は、變動も比較的急速なるべく、順應するに至らずして滅び、能く生存するは下等なる種類に屬すべし。星と他の星若くは星に準すべき者との關係より生ずる變動は此と逆ひ、有機物をして環象に順應するの邊あらしむるの多からん。若干星の相關として一概に言ふべからざれど、互に均衡を保てるは關係の維持せらるゝこと、地殼に於ける變動の比にあらず、月は噴火の熄み水の絶えてよ

り數十萬年或は數百萬年ならんも、地球との距離に見るべきの差違ありたりと思はれず。地球の漸く冷却し、水を氷結せんとせるや、太陽之に熱を與へて水を氣化し、更に雨として降り、丘陵を平にし土沙を濕し、場所に依り分子に依り化學的作用（何れの化學的作用なるは未だ明と決定し得ざるを以て或る組織を成さしめ、尙ほ之をして周囲の事情に應じ、漸次形體を變じ、幾十萬年幾百萬年を経過せる間、變改に變改を累ね、常初と別種の觀を呈せしむるに及ぶ。目今見る所の植物及び動物は即ち斯くして生ぜるもの、其の形體の順序を踏みて次第に統合し次第に複雑と爲れるより、稱して發達といひ進化といふ。苟も地球と同じ星あり、又太陽と同じ星ありて之を照らさば、必らず此と同一の現象を生ずべき理なるが、全く同じき星の他に之れ有るべくもあらず、何處にか多少異なる所あるに相違なく、隨て結果の現はるゝにも多少異なる所なきを得ず。

第八十一節 我が太陽系の遊星中、稍と地球に類せるは、唯一の火星あるのみ、他は或る有機物の存在を想すべきも、到底人類に似たる者あるを想すべからず、況んや他の系統に屬する遊星に於ては、事皆漠然たる想像範圍にし

て、或は全く有機物の存在せざるあるべく、或は最下等の有機物の存在するあるべく、或は人類より遙に進歩せる者の存在するあるべし、此等想像に出づるは眞實なるを言ふべからざる同時、又其の虚妄なるを言ふべからざるを得る事は或は實際に有るべし。されど如何なる遊星ありて如何なる有機物の存在するにせよ、星系全體に在りて主要なる部分を占むる者ならず、有機物といふは或る星の冷却するに際して生ぜし副産物なりとすべし。其の星にして一元素より成り、自ら冷却するのみならば、半途に異物の生ずべくもあらねど、多くの元素の交雜し、剩へ他星の影響を被り、早く固結せるあり、晩く固結せるあり、又容易に固結せざるあり、錯綜して或は合ひ或は離るゝ間、一種の現象の生出するは勢の然るべき所なり。但し何様の有機物も星の成分の或る變化に伴へるものにして、何れの星にも之れ有りとするを得ず、又其の存在を永久なりとするを得ず。

原生界は星系全體として生命あることにし、本體的に根本的なり、副生界は或る星に生命を託する者にして、屬性的、枝葉的なり。原生界に於ける自ら進歩する生命と、副生界の自ら活動するは原生界と相似たりとすべき

も、一は星の上を生ずるもの、一は幾億々々里に擴り、幾億々々里に互り、大小の懸隔、離の以て驗ふべきなし。原生界は全體として活動し、無量の力を現はし、各部分盡く相關聯し一塵といへども意味なきはあらず。副生界は絶大なる生物に附隨して生ぜるもの、他と離るべからざる關係を有し、決して偶然とすべきに非ざるも、部分的に觀るに於て、時として偶然とすべし。地球が冷却するに方りて太陽より光熱を受け、爲めに分子に變化を生じ、謂ゆる有機物と化せしむ、若し地球にして或る度まで冷却せず、太陽にして或る度まで熱を與へずんば、斯かる有機物の存せざるならん。原生界の生命に較ぶれば、副生界の生命は誠に蜂蟻も畜ならず。物の價値は大小に在らず、且つ有機物の存在するは存在せざるべからざる理由あらんも、兩生界の本末は最も明白なるものあり。人の副生界を重んずること當然の事情に出づれば、原生界の何たるを思はず、擧げて之を無機物として無生物とするは、人事を解釋するに少からず誤謬に陥るものなり。斯の絶大なる宇宙は豈無く無意味ならんや、生物を考ふる、則ち先づ孰れか從なるを察せんこそ肝要なれ。

第二章

生物の發現

第八十二節 原生界は總括して絕對的に獨立し、永遠無窮に活動すと爲す、宇宙は唯是れのみ、之を離れて何物も無し。副生界は此に附隨せる一現象にして、容種及び存在期間よりせば、極めて微々たるもの、特に言ふを値せざるに似たるが、其の一種時異の性質を帯び、吾人自ら直接に之が一部を形づくるが爲めに、少くも便利上他の現象と別ちて攻究するの適當なるを認む。但し其の原生界に從屬し、之を離れて存在せざるは、須臾も忘るべきに非ず。

有機物と無機物、生物と無生物との限界は、最早や撤去せられたりたる筈なれど、人尙活動もすれば最も重きを有機物といひ生物といふに置き、他の物物一切を輕んずるの狀あり。生物を以て此の一地球の表面に限り、大小幾億の星辰を擧げて無意味に存在すとすは、眞に滑稽の沙汰ながら、其の當に事實なるのみならず、往々之より甚しきあるは、掩ふことを得ず。

事斯の如くなるに種々の事情よりし、中には言はずして明かなるの少からざるが、單に或る迷信若くは或る習慣の爲めに漠然人類を第一位

に置き、萬事萬物此に附屬すと認むるを除き、稍合理的に判斷する者を見るに、大略三種に別る。(1)有機物(2)無機物(3)生命(4)生命の境界(5)生命の如何に置きを置くべしと言へり) 第一者は曰ふ、若し生無生の境界にして判然たらずんば、一方のものを他に移し能ふべきに、科學研究の頗る進めるに拘らず、總じて生物を造り得ざるは、何處にか根本的に異なる所あるを以てにあらざやと。されど生物を造り得ると否とは、特に輕重する所ある無し。造るといふが無より有を生ずる義ならば、造り得ざるは獨り生物にあらず、無生物と雖も亦然り、相當の材料なくして小石をだも造るべからざるなり。將或る形狀より他の形狀に變ずるの義ならば、將來知識の進みて元素より遙かに複雑なる有機化合物を造るに至らざるを保し難し、生物を造るも或る金屬を黄金に化するより易からんも圖られず。且つ生物を造るは、謂ゆる無生物との關係を究むるに利益なきに非ざれど、究竟物好きの事に過ぎず、創造説の盛行せし時代こそ之が聯絡を尋ねるに急なるべけれ、本來別造ならざり認めらるゝ今日、故ら之を急にするを要せじ。

物の研究は何ぞ其の物を造り得て然る後始めて可なりとせんや、觀察のみにて聯絡の確かめら

れたるは到る處に之れあり、人力を以て造り得ずとて生物を特別視するは誠に幼稚の見解なり。

第八十三節 第二者は曰ふ、若し無生物より生物の出でたらんには、何が故に新たに生物の出づるあらざるか、最下等の生物は殆んど無生物と擧ぶ所なしと見ゆべけれど、何時何處に其の無生物より變ぜりといふを聞かず、現に存在する所は皆幾十萬年前より繼續し來れるもの、無生物の如何にして生物と爲れるやは遂に考ふるに由なしと。是れ第一に比し人造より自然に遷れる丈け優れるらしきも、怪むに足らざるを怪むに於て則ち相同じ。新たに生物の出づるなく、存在する所の、皆幾十萬年前より繼續し來れるの眞實なるべきも、新たに出現せざるは、獨り生物にあらず、無生物にも亦珍らしとせず。

火山の爆發するに方り、溶岩の流出するの常なるが、其の休止するや、復斯かるものを見ず、見んと欲するも得べからず、舊噴火口に間く金剛石の發見せらるゝが、さればとて金剛石の斷えず生じつゝありと思はれず。石炭の類にても、其の諸處に採掘されながら、近時新たに爾く化する者あるべくもなし。或る時期に、或る狀勢の下、或る特別のものを生ずるも、其の

狀勢の變ずると共に、成果の變ずるは事の然るべき所なり。嘗て無生物の生物と爲るべき時期、即ち地層の或る成分が一種の化學的變化を受くべき時期ありならん。言ひ換ふれば原始期水成岩の漸く成らんとする頃、地熱強く、雰囲気も濃く、今日混交し難き若干元素の化合して有機有機中間の物の生じ、漸次變化して有機物と名づくべきに至れること、強ち推察すべからざるに非ず。結晶體の發育を認め得るより察すれば、或る時期に中間物質の多く存し、中に生物に近寄り、遂に生物と爲れるあるに想ひ到らざる能はず。其の詳細は得て知るべからざるも、詳細の知られずして豫め信すべきもの一にして足らず、實は十分に詳細なるの絶無なりと謂ひ得べければ、先づ大體の上にて判定し置き、徐ろに研究の進むを待つて宜しからん。

無生物の生物と爲れる状態は、化學に於て次第に明白を加ふべきも、史的事實を確かむるは古生物學最も興りて力ありとするに、該學は進歩せりといふものの、此の邊に關し全く冥昧に屬す。古生物の殘存せるは大抵其殼若くは骨骸の類にして、稍々軟かきは微かに沙上に印記せるに過ぎず、其れさへ數は甚だ少し。假りに原形質の如きものの發生せし時期ありとするも、其の能く化石して殘存し、以て調査の資料に供し得んは到底望むべきにあらず。「化石切實に精査するを論ずべし或は少」古生物學の效能は茲に竭き、是より以往他の補助たるに止まらんが、化學に於て幾許か光明を興へ、或る狀勢の下に生物の發生すべきの知らるゝ曉、其の狀勢の僅かに原始期に存し、長くとも少しぐ太古期に入るのみにて、爾後再び有り得ざりしことの知らるべし。何等下等の生物も偶然に生ぜず、或る狀勢の下に辛うじて生ずるのみ、或る狀勢の下に生ずべきものが他の狀勢の下に生ぜずとて何の異とすべしかある、事の頗る明白を缺くも、此の點は斷定するに難からず。

第八十四節 第三者は曰ふ、無生物は生物に化成し得るも、現に人類社會を觀れば、其の無生物と違ふの雲泥も齊ならざるに驚かざる能はず、無生物も種々の力を具ふれど、人類社會の自然界に打ち勝ちつゝ進む有様は眞に偉なりと稱せざるべからず、地中より金屬を掘り出し、用ゐて雑多の器械を造り、車を以て陸を走り、船を以て海を駛せ、或は飛行器を以て空中を飛ぶ、因より頑たる岩石の共に比すべき所ならず、下等有機物は特に見るべきなきも、其の高

に驚くものは、無生物の變化にも驚かざるべからず。

生物は人類社會に於て其の働きの洪大なるを見るべく、人類が種々の發明を遂げ、多くの器械を作り、以て自然界に臨むは、之を征服すといふの必ずしも妄ならざれど、自然界を征服せりとて、果して幾何の痕跡を残すかと問へば、誠に僅少に止まる。山嶽を貫きて隧道を通ずるは、大工事なりとせんも、實は僅かに小孔を穿つもの、而して其の山嶽とも地上の小獣に過ぎず。堅盤を造りて海洋を横絶するは、さながら樹葉を水上に泛ぶるが如く、百千の艦船も去つて跡なく、波濤は逆捲くまゝに任すの外なし、而して其の海洋も畢竟するに水の窪に溜りたるのみ。人力を以て自然界を征伏すといふは、山海の極小部分に人工を加ふるを指しての事にして、雨が山を削り海を埋むるを稽ふれば、復誇るに足らざるを知る。更に雨と爲るやう水の蒸發するは、太陽より四散する熱の數十億分一（二十億分の一）を受けて然るを稽へ、又更に太陽が遊星を率へて他の諸恆星と廣く運行するを稽ふるに於ては、さしもの人類の働作も、小の小、微の微なるものと爲らざるを得ず。有機物の最優等にして此の如くんば、其の一般

を通じ推して知るべきに非ずや。人類が己れに近き所に厚くし、先づ同類を以て最も主要なりとし、次いで鳥獸草木山川に及ぶは不可ならず、徒らに遠きに走るも何の利するなきも、利なり害なりは便宜上の事、一々眞偽と伴ふにあらず。近き物の大きく見え遠き物の小さく見ゆると均しく、處世上に大を小とし小を大とすることあらんも、事實に於て亦然りと爲すに至りては大なる誤謬なりと謂はざるべからず。仰いで觀れば太陽は東より西に轉ず、隨て日出日没と稱して可なるも、眞に地球を運ると信ずるは誤れるの甚しき者ならずや。爾く信せりとて、何等損失を被らざるべけれど、道理の貴ぶべきを知るものは斯くして安んずるを得ず。地球の一小星にして太陽を運ることを知れりとして此の故を以て人類を蔑視するが如きあらず。己れ自ら生物に屬して生物を最も主要なりとし、而して大觀するに際して人類の働きをも眇手として小なる者とする、抑々何の不可あるべき。（非ず。第二十三節の義）

第八十五節

第四章 半生物及生物

幾億の星辰は各々個體として運

動し、構成にも多數の變化を爲し、仔細に檢すれば瞬時も同一状態を保たざるが、人の眼孔に映ずる所にては全く變化せざるの少からず。數千年前に觀測せられたるの今尚ほ依然たるは、固より依然たるにあらず、砲彈に數千倍する速度を以て動きしなれど、容積の甚だ大なると距離の花だ遠きとの爲めに、萬々里に及ぶ移動も特に識別せられず、全く停止せるかの如くなる者にして、其の構成も此と同様、絶えず變化しつゝありながら、數千年間に覺知すべきなきを通じて觀れば、位置の變化すると同じく、構成も變化し或は以前と全く異なる状態を呈するに至るべし。地球の地殼も常に固定せりと見ゆれど、百萬年千萬年の後に多大の變化を顯はすべし。固定せりと見ゆるは即ち無生物視せらるゝ所以のものなるが、知命なる生物に比較してこそ變化の遅けれ、曾て變化の停止せらるゝ容積の大なるより推せば、決して變化を以て遲しとすることを得じ、固定せるとするは蟬蟻に生死あるを視て人に壯老の變あるを想はざると同し。

地殼は地球全體につれて變化し、單に頑たる岩石と爲すべからざれど、部分的に觀るも亦全

無生物にあらず、頑たる岩石にせよ、其の岩石も一概に生物と異ならざるを認むべし。頑たる岩石として構成は頗る複雑にして、濫りに概括するを許されず、凝聚するにも網状なるあり、針状なるあり、星光状なるあり、扇骨状なるあり、若くは板状、葉状、粒状、葡萄状等、種々雑多にして、其の結晶するや、軸の數、位置及び長さにて幾様にも類別すべし。同じく硫酸より成れる結晶體の中、水晶の如き、瑪瑙の如きあれば、又砂の如きもあり。一見して差違なくとも、實は物として幾分の差違なきはあらず。結晶は普通に固體とせらるれど、結晶水を要するは、熱の加はりて水の消滅すると共に體を喪失すれば、幾許か液狀を帶ぶとすべし。水の混ずるも固體として現はるゝ以上、固體として取扱はざるを得ざるべきが、結晶物に從來存在する所に限れるに非ず、液狀の結晶物も必ずしも造り得とせず、既に石鹼の如き半固體なるを造り、尙ほ進んで結晶せる精液を造らんとし、稱も成功に近づけるあり。能く「オレマン之」尋常の結晶にも發育の認むべきあり、中毒と見做すべきもあり、半固體なる分子の層動き易くして其れだけ變化することも早く、其の最も著しきに至りては存在の

狀態に於て生物と擇ぶ所なかるべし。生物は礦物と結晶の形を異にすれど、廣義に於ける結晶の部類に入るべきもの、其の全く別物と目せらるゝは兩者の中間體を成すもの發見せられざりしに因る。生物は分子の動きつゝ、結品の體を保てる者にして、固く凝結せると程度の違へるに過ぎず。液體若くは一部分液體なる結晶物は種々の方法にて造り得らるべく、其の複雑なるは多くの點に於て生物に類せんが、生物の主たる成分は炭素水素酸素窒素にして、此の四素を化合すること容易に成し遂ぐべからず、數時代に望み難きも圖られざるが、四素其の物は動る處に之れあり、自然に化合する機會の多きものと謂はざる能はず。而して其の化合せるは最も動的性質を有する結晶體なりといふは他にあらず、炭素の結晶せるは諸元素中最も堅固なる金剛石にして、窒素の難れ易きは爆裂藥の爆發を以て推すべく、其の相合ふに於て、固く結合すると同時に、一刻も静止せんとせず、能く靜的にして能く動的なるもの生出するなり。生物の成分の大半は炭素にして、水素酸素之に加はり、而して窒素の加はるの多きに隨て活動の増大すと認むべし。斯かる化合物は液狀にて結晶

し、他の化合物と異なるが、新たに造られ、若くは造られんとする半固體の結晶物とも同じからず、唯四素の化合して然る後形成する者に於て、荷、其の化合せざる間、如何に形狀の類似するも、到底等一視するを得ず、石鹼の如き結晶物を造れりとして、以て實驗的に生無性を聯絡し得たりと爲し難し。されど無機有機の限界が炭素の製造せられて薄弱と爲り、糖分の製造せられて愈々薄弱と爲り、若し更に蛋白質の製造せらるれば、全く撤去せらるべく、而して是れ決して希望なき事ならず。其の違げらるゝとも、生物の造り得るを速斷すべからざれど、生物を以て礦物と全く異なる一種特別のものとするの必要は最早や之れ無し、生物は謂ゆる炭素化合物の下に類別すべきなり。從來の試験の何たるにせよ、化學の進歩と共に類似生物の製造に長じ、半生物よりして次第に眞生物に近寄り得ることを信すべし。

第八十六節 他の星に在りても、大抵地球と同じき元素を有し、定まりて結晶する物は定まれる途を探るの外なく、若し生物らしき生物あらば、炭素化合物にして、是れ以外に存せざらんが、同じき元素なりとて、存在の比例まで同じからんことを必ずべからず。存在の比例の同

じからずとも、化合の比例の同じければ、成果も亦同じかるべけれど、化合の比例の同じからは思案なし、或るものは同じきも、或るものは異にして、時として意外に多く異なるるべし。存在の比例の違ひ、其の化合を促す熱度の違へば、何等か異なる化合物の生ぜんことを期し得べし。單體なるの同じきは勿論、水の如き、空氣の如きも、同じからんも、同じく炭素化合物にして全く地球に見る可らざるなきに非ざるべし。即ち結晶せる半固體にして、無生物とも生物とも定まらざるあり、發生の明かにして而も猶ほ生物と呼ぶべからざるあるべし。例せば岩石と同じき外貌を備へながら、幾許か周囲の物質を吸收し、漸次成長し漸次繁殖するなきを保すべからず、無數の星辰の中、かく生無生の中間物體を含むの少からざらんか。

生物は炭水酸窒の四素を主とするも、其の化合せる比例の異なるが爲め、將又他の元素の加はれる比例の異なるが爲め、甚しく異なりたる形を現はさずとせず。宇宙間に於て四素の化合し、他の元素の加はる比例は、必ず我が地球に於けると同じと限らず、同じとするも圍繞物の異なるより成果に大なる差違を生ずるあら

ん。現に地球にても、生物にして動植物の孰れにも屬せざるの稀れならざるが、他の星には、或は動植物の極めて少く、満目中間生物の滋蔓せるあるべく、或は動植物もなく、中間生物もなく、盡く生無生の中間物體なるもあるべく、或は全く別類にして想像の外なるもあるべし。生物を以て我が地球に見る所のみとするは、副生界の範圍を餘りに狭くし、宇宙間の至微至小なる者とするなり。太陽系にて猶も我が地球と同じきは火星にして、其の面上に我に類する生物の存在を類察し得るも、(觀るに足るが故に)の生及環境上の推し可能の少からざる。他の遊星に之を想察せんこと頗る難し、熱に過ぐるか、寒に過ぐるか、若くは棲息すべき氣體又は液體なくして、到底生存し得べくもあらず。而も生物の質は必ず地球に於けると同じからざるべからざると同じからざるべからざるに非ず。地球に於けると同じからざるべからざるに非ず。元生無生の間に明白なる限界の存せず、地球にては比較的明白なるも廣く考察する場合には、中間物體の多く存在するを許し、尙ほ地球に見る所と異なる生物の存在するを許すを要す。同様の元素より成りしもの中、頗る異なるるを觀、以て其の然るを察すべし。水星は太

陽の光熱を受くるの烈しく、地球の生物と同じきものの生存し得ざらんも、別に此に堪ふる生物の存在するを不定するに由なし。木星土星は未だ陸地の成立せず、自ら熱を發しつゝあるべきも、濃厚なる液體中生物なしとすべからず、生物なくとも半生物の存せん。

第八十七節

今日の知識にては、副生界の事は獨り之を我が地球に認むべく、更に他の遊星に認むるに尙ほ多くの歳月を要せんも、以て單に地球上の一現象とするは、事を小にするの餘りに甚しきものなり。如何に小なりとて、其の小なるの故を以て價値なしとすべからざるも、幾億を計ふる星辰中の渺たる一小星に現はるゝ偉かの現象に徴し、以て生物世界といふを特出せんとするは、寧ろ奇異なる次第ならずや。物體の變化は必ず地球と同じき状態に於てせざるべからざる理なし、異なる状態の下に異なるる成果の生ずべくんば、他の幾多遊星の間、地球に見えざる種々なる結晶體の存し、中生無生の中間なる半生物もあり、或は眞生物にして尋常と形質を異にするもあるべし。大體より觀れば、宇宙は唯原生界の活動するのみにて、物として生命を具へざるなく、復生無生物を分つを要せざるも、多くの星の中に半生物若

陽の光熱を受くるの烈しく、地球の生物と同じきものの生存し得ざらんも、別に此に堪ふる生物の存在するを不定するに由なし。木星土星は未だ陸地の成立せず、自ら熱を發しつゝあるべきも、濃厚なる液體中生物なしとすべからず、生物なくとも半生物の存せん。

くは生物と見做すべきありとせば、特に副生界を別にするの便利にして、其の範圍もさまで狭小なるにあらず。我が地球の生物は特種の狀態の下に生存し、他星に棲息するに堪ふるの極めて少からんも、生物を以て此の類のものに限らざれば、其の散布する所も頗る廣く、或は幾億の遊星に亙るべしと察せらる、原生界と比べべくも非ざれど、又大ならずとせず。但だ其の知られたるは地球に於てせるのみにて、他の一星だも手掛りを得たるなし、其の知り難きこと多く原生界に譲らず、而も範圍の狭からざるは豫め信じて可なり。若し夫れ生物を以て地球に限り、密に他の遊星を問はざるのみならず、宇宙全體を擧げて無生物とし無意味とするに至りては、思慮なきの至りなり。

生物は我が地球に觀る所のみにて十分の知識を得ること能はず、他星の生物を通じて漸く眞の意味を解すべし。幸に他の一星の生物の幾分か知られたらんには、生物學は頗に長足の進歩を遂ぐべし、其の知られざるだけの爲めに無益に勞苦するの少からざらん。或る星には無生の間なる半生物の多かるべく、或る星には動植物の間なるの多かるべく、或る星には全く別類なるの多かるべく、廣く星辰を遍歴す

る者あらば、現に地球にて一意専心攻究しつゝある所のもの最も明白なる事實なるを認めん。吾人は一歩も地球より外に出づる能はず、知らざる所なきを欲するも其れ能く得んや。

第四章 循環的變化

第八十八節 玻璃壘に水を盛りて火上に置けば水の沸騰して昇り且つ降るを見る、是れ循環的運動の甚だ簡單なる者なり。循環的なるの一層大規模なるは廣く地上に行はれ居るが、理は一にして事は更に複雑なり。即ち太陽の熱の河澤海洋に加はるや、水は蒸發して上騰し、冷氣に會ひて雲と爲り、雨となり、雪と爲り、霰と爲り、下りて泉を潤し、水流をして涸竭すること無からしむ。人は此等に就て恆む所なきも、凡そ一定の物質に一定の力の加へらるれば概ね此に類せざる無く、かく循環的運動の明かに見えざるとも、循環的變化は到處に之れあり。無機物といひ、有機物といひ、無生物といひ生物といひ、段階の種々なるにせよ、要するに地殼の或る成分及び空圍氣の或る成分の化合して變化を生ぜるに過ぎず、一塵一毛と雖も新たな物質の附加せられたるあら

ず、如何に變化の現はるゝも、同一範圍内に於ける波瀾たるに止まる。

地殼も空圍氣も早くより間斷なく變化し來りたり、地殼の熾んたりし時、變動の烈しきは勿論なるが、其の漸く減じて略ぼ現今の形を成し、以來太陽の光熱作用は益なる活動力として存し、爲めに變化を被れるの少からず、層重せる幾地層は多く斯くして生ぜるなり。地殼に於ける物體は一を以て律し難く、均しく鐵物といふも、結晶して種々なる狀態を呈す。水酸二素の化合物は水蒸氣として凝結し、謂ゆる六の花と爲り、形狀の種類幾百の多きに出づ。是れ以外にも、化合して異様の物體と爲り、異様の結晶を示す擧げて計へられざるが、特に炭素化合物の中には全く普通の結晶物と形を異にしつゝ、事實に於て頗る相似たるあり、其の異なるも新たに他の物質及び力の加はりてに非ず、前より有りし物質及び力にて變化を遂げたるなり。(水は成温結晶、普通の結晶物は周圍の物質の附着するに因りて成長し、生物は周圍の物質を吸收するに因りて成長し、附着すると吸收するとの差ありといふも、これは單に物質の附加はる形の異なるのみ、(吸收するに非ず)人造化合物に細胞を具へしむること

能はざれど、糖と硫化銅との混合物を鐵化ボツ
タシニム鹽化ソジニム混入の水に浸すと、種
子の如き粒子より膨大し、芽の如きを生じ、
莖の如きを生じ、氣温及び毒物の爲めに變化を
受け、一見植物と異ならずとの報あり、他に
も此の類例あり。吸收して成長するは生物のみ
に非ず。

第八十九節

藻類の下等なるは形態に於て殆
んど無機物と擇ぶ所なし。其の最も單純なる

は單一なる原形質にして、顯微鏡に照らして僅
かに見るを得べく、斯かるものが圍繞物に促さ
れて漸々に變化し、千萬年を経て隱花類數十
萬種を生ぜりと認むべきが、孰れも地及び空氣
より養分を取りて成長するもの、其の機官の
整へるは根より水素窒素の類を攝取し、葉より
炭酸二素を吸ひ、日光を藉りて酸素を吐き、炭
素を留む。水素窒素は前より存在せる所、炭
酸水素も前より存在せる所、前より存在せる
炭酸水素四元素が主成分として化合し、或る形
を占めたるに外ならず、分合して更に他の形
を占め、幾回か變化し、幾回か繁殖するも單
竟するに同一範圍を出づるなし。初めに岩とい
ひ、水といひ、空氣といひ、後に植物といふ、
名稱は異なるも、其の名稱は形の變易せる上

に附けられたるのみ。

原野に雜草の茂り、若くは森林の蕃鬱たるあ
り、千年萬年を経て替らざるもの、蓋し草木の
萌芽し、暫茂し、枯死して、本來の元素に還
り、地中に浸没して新たに萌芽すべきもの、肥
料と爲り、かくして復た新たな植物に化し、
暫茂し枯死して更に本來の元素に還り、以て新
たに萌芽すべきものの肥料と爲り、新たな植
物と化するなり。〔此處に養分と云ふは、植物の體に蓄積する
ものなり。〕
同一の事を繰り返して幾回幾十回幾百
千萬回に及び、減ずることなく、増すことな
し、萬古練なるも異とするに足らず。若し暫
茂し枯死せし植物を去除し盡し、本來の地に
於て本來の元素に還ること能はざられば、新
たに萌芽するものが養分を取るの十分ならずし
て、爲めに成長するを得ず、結實するを得ざ
るに至る。沃土の時として瘠土と爲るは此に因
る、即ち前より存在せる元素に缺損を生じ、
同一事を繰り返さんとして得ざるなり。植物
を自然のままに放置して其の能く成長し暫茂
するは、若干元素の化合して植物と爲り、還
りて若干元素と爲り、還元せる元素の更に
又化合して植物と爲るが故にて、循環の遺
りなき行はるなり。

第九十節

地上より直接に養分を取る所の
植物は皆此の如くなるが、其の廣く暫茂する

に及びては、自ら地中より直接に養分を取ら
ずとも、爾く養分を取る所の植物より養分を
取る者の生ずるを免れず。現に植物にして植
物より養分を吸ひ取る寄生木の如きあるが、此
等は他の植物と異なるなけれど、概観すれば
地中より直接に養分を取るべき機官を具へず
して生存し得るものは、其れ丈け他邊に働きを
伸ばし得る筈にして、動物も活動するも此に
由來するの多し。動物といふも下等なるは植
物と異なるの僅かにして、外形に於て差別する
の困難なるも、地中より養分を取るを要せざる
が故に、周圍の狀態に順應する餘力あり、其
の狀勢次第にて比較的多く發展するを得べし。
多くの種類ありて、顯微鏡的に小なるもあり、
屎象に數倍せるの大なるもあれど、大抵植物
より養分を取りて生存し、植物なくば生命を繋
ぐに由なし。雜多の動物曠野に棲息し、草根
樹葉を喰みて生存す、在る所の草根樹葉を盡せ
ば、更に他に移りて之を求めざるべからず、移
りて尚ほ得ざれば、死滅を避くる能はず、死滅
して本來の元素に還れば、植物の肥料と爲り、
之をして成長し暫茂せしむ。元植物の成分か

異なるる形を現はして動物と呼ばるゝ迄にて、植物より動物、動物より植物、輾轉して變ずる、是れ亦循環の行はるゝなり。

然るに多様の動物群生し、大小強弱の漸く顯はるゝや、單に植物より養分を取るに止まらず、植物より養分を取る所の動物よりして養分を取るあるに至る。養分を他に取りにて成長するのみなる條蟲の如きもあれど、植物より養分を取るの器官を具へずして能く動物より養分を取り得るには、消化器官の小なるに伴ひて活動器官の大を加ふべき順序にて、鷹や鷲や、豹や獅や、肉食動物の概ね跳躍を自在にし、搏撃に巧みなるは、固より其の處とす。而も肉食動物の生存するは食餌と爲るべき弱小動物の存在する間の事、弱小動物滅盡すれば、去りて他に移りて之を求めざる能はず、移りて尚ほ得ずんば、餓えて斃死し、壞腐して元素に還り、菜食動物の食料たりし植物の肥料と爲る。いはゞ植物を組成せし元素の菜食動物と爲り、而して又更に本原に還るもの、是れ亦循環の行はるゝなり。

第九十一節

土壤は位置の種々なる質の種々なるとの爲めに、植物の養分を取るに適應あり、適せざるあり、若し到る處に養分を取

り得べくんば、之を食ひて生存する菜食動物は限りなく繁殖すべく、動物を食ひて生存する肉食動物も限りなく繁殖すべく、而して肉食動物の互に競争するよりして、漸に勝つ鳥類に勝つ獸の出で、尚ほ此等に勝つ強猛なる鳥獸の出づるを見るべきが、由來養分供給する土壤に限りあり、隨て植物に限りあり、隨て菜食動物に限りあり、隨て肉食動物に限りあり、限りあるが故に限りなく猛鳥猛獸の出でんことを期すべからず。肉食動物多くして食料たる動物を食ひ盡せば共倒れと爲らざるを得ず、菜食動物多くして食料たる植物を食ひ盡せば共倒れと爲らざるを得ず、植物繁茂して地中の養分を吸ひ盡せば已れも亦消滅せざるを得ず。地中の養分に限りあり、養分の存する間に於てこそ種々の變化を見るべく、是れ以外に於て何様の變化をも見るべからず。有るものは有り、無きものは無し、千變萬化も有るべき範圍内に於てなり、人類は豫め之を知る、猿猴は火の盡きんとして薪を加ふべきを知らざるも、人類は之を知りて薪を加ふるを怠らざるも、同様の理を以て有用動物の盡くるを憂ふれば之を飼養し若くは之が蠶糞を禁じ、有用植物の盡くるを憂ふれば之を培養し若くは之が濫伐を

禁じて其倒れより免るゝに務む、實に地上の物は限りあり、地上の方も限りあり、他星より受くる所にも限りあり、無機物といひ、有機物といひ、無生物といひ、生物といふは、約するに地殼及び雰囲気に於ける或る成分の化合して循環的變化を遂ぐるを指す。

初め地中の熱にて種々の變動を經、其の熱の減少してより、尚ほ引續き太陽の光熱にて種々の變化を受け、水酸二元素の化合物は液體と爲りて流れ、氣體と爲りて昇り、液體若くは固體と爲りて降り、斷えず土沙に變化を及ぼし、無数の年代を經過する間、或は濃厚なる炭酸瓦斯の之に結ぶあり、或は之と離るゝあり、炭素化合物の生出し、幾變化して後、茲に植物と爲り、動物と爲り、人類と爲りたりしが、而も是れ在來の地殼及び雰囲気に於ける或る成分の化合して變化せるもの、一時有機物といひ生物といふ波瀾を捲き起すも、波瀾一たび靜まれば本來の無機物といひ無生物といふに歸す、言ひ換ふれば土壤及び空氣より出でて土壤及び空氣に還るなり。地を掘れば石炭あり、構成岩石と似たるが、是れ植物の化成せるもの。石灰石の山を爲せるあるが、是れ動物の化成せるもの。海には珊瑚礁の島嶼たるあるが、是れ亦動

物の化成せるもの。即ち往昔生存せし生物は斯くして岩石の一部分を成して今日に殘存す、無機物より出でて無機物に還り、無生物より出でて無生物に還りしなり。畜に水の蒸發して雨と爲り雪と爲り、降りて再び江海に還るを以て循環とすべからず、現に吾人と同じく生息する所の生物も、若干元素の循環にあらざる莫し。個々に分離すれば一々見るべき事あるも、總體より察すれば地殼及び勞圍氣に於ける或る成分の化學變化するものにて、少しく昇りて植物と爲り、次いで素食動物と爲り、更に肉食動物と爲り、茲に頂巔に達し、此より以上に昇るには豫め補ふ所なきを得ず、之を補はずして飽食已むこと無くんば相共に絶滅して遺類なきに終る。人類は僅かに此の循環を知り、能く之に順應して生存するを得るなり。かくて生物の生存するは無生物を通じての循環にして、同一物質の種々に變化する者なるを認むべし。

他の星辰に在りては、或は地殼及び勞圍氣の我が地球より一層複雜にして、植物も我れと形を異にし、動物も我れと形を異にし、場合に依り、動植物ならざる生物の多かるべきも、是れとて突如として生ぜし現象にあらざる地殼

及び勞圍氣に於ける或る成分の化合せる物にして、循環的に變化すること恰も玻璃埤内の水の熱を受けて循環的に運動すると同じ。昇るといふは正しく降るといふの反對なるも、同一物質の形を變ぜるに過ぎず、無機有機、生無生物亦然り。

第五章 植物

第九十二節 地殼及び勞圍氣に於ける或る成分の循環的に變化し、植物と爲り、動物と爲り、更に元素に還るが、其の變化の多少は、假りに出立點を認め、此より遠ざかるの多少を以て定む。無機物と有機物、無生物と生物は、本來全く離ること無く、類似の認むべきの少からずして、特に鐵物植物の最も接近するを從ゆ。

鐵物植物は頗る相近く、間々外形に於て區別し難きことあり。鐵物にして植物と見ゆる草木水晶の如きもの一にして足らず。荷木と混交せらるゝなきも、數畝若くは數十間の柱狀を成して屹立するの稀れならず。(葉理)植物は組織こそ普通鐵物と大差あれ、形貌は必ずしも然らず、幹の直立し枝の分支するは、寧ろ事

の簡單なるものなり。且つ植物が周圍の事情に支配せらるゝ、多く鐵物に譲らず、周圍の事情の良好なれば殆んど無限なく成長し、殆んど隙限なく存続す。西岡弗利加に生じ、東西兩印度に移植されたるパオバは、幹の周りに二十間に達し、米洲西岸のシダーは高さ六十間を越えて、澳洲のユーカリプタスは八十間に及ぶ、而して其の或る者は五千年(六千年と)を経過せりと算定せらる。かくて植物は動物より大きに於て遙かに優り、壽命に於て亦遙かに優るが、其の爾く巨大にして爾く長壽を保ち、而も絶えて運動の見えざるは、比較的岩石に近しとせざるか。周圍の事情の良好なるまゝ、何處迄も成長し、何時迄も存続するに反し、其の事情の悪しき時は、成長の困難なるのみならず、凋萎枯死して跡を絶つことあり。石炭の五洲に到る處に發見せられ採掘せられて猶ほ容易に掘きざるを考へ、又化石せずして消滅せしもの頗る多かるべきを考ふれば、以て其の實て如何に發生發したりしやを推すべし。而して其の當時なる腐木として存在せし羊齒類は今多く見るを得ず、其常地方に幾分の殘存せるなきに非ざるも、是れ以外なるは、極めて微小、中に無節狀を成し、すにだも二倍びざるあり、若事情の往昔と違ふ

に出づ。

同じく現代に在りても、熱帯より温帯寒帯に進むに隨ひ、異殊の植物の明かに帯を成すを見る。椰子の繁茂する處あり、榊及び山毛櫨の繁茂する處あり、松及び樺の繁茂する處あり、又唯唯かに地衣の存する處あり。我が日本にても、氣候に應じて數個の帯に區劃せられ、時として密樹帯、黒松帯、山毛櫨帯、白檜帯、價松帯の擧げらる、各々一定せる溫度に從ひて繁茂し、之を侵して成長するに堪へず。地球上の植物の數十萬種に上れるに拘らず、一地方に茂生するの草かに數千種なるも之が爲めのみ。順適せる氣候の下に飽くまで茂生し、逆行せる氣候の下に萎縮して衰滅すること、夫の液體たる水が百度にて沸騰し、零度にて凍結すといふが如く簡單ならざるにせよ、少からず此に類すと爲して妨げず。動物とて事情の良否に影響せられ、能く免るゝは一も之なけれど、成長にも壽命にも略ぼ一定の制限ありて、之を破らんこと甚だ難し、之を破るとも僅々にして、如何に事情の良ければとて、五尺なるべきは一丈なるを得ず、五十歳なるべきは百歳なるを得ず、十世二十世にて大なる變化を呈せず、植物の事情次第にて著しく變

すると同じからず。植物も制限の存せざるに非ざるも、其の制限は茫漠に失し、若し良好なる事情の變かば、何ほど長大し何ほど生存するやも圖られず。周囲の事情に支配せらるゝの多く、或は大に膨脹し、或は非常に縮小する所、動物と動物との中間に位するを示さずや。

第九十三節

地球にても植物は既に已に大なる變化を經、多くの種類を現はせり、以て推し來れば、他の星辰に異類の多きこと想像に餘りあり。我が地球にてさへ變化の知り難きの少からず、今日熱帯温帯に暢茂する植物は嘗て寒帯地方にも暢茂せしことあり、其の如何にして然るやは種々の議論を免れず。或は南北兩半球の代るゝ一萬一千年毎に夏期に於て太陽に近づき、さる場合に北半球は今日より暑かるべしと説き、或は由りて生ずる差の決して大ならず、たとひ大なりとするも、嚴冬の依然として存すれば、扁柏及び木蘭の水海馬に繁殖すること無かるべしと説く。或は地熱の熾烈なりしよりして説き、或は地熱の熾んなりしも既に不導體なる地殻の成れる以上は氣候に影響すること薄しと説き、或は炭酸瓦斯の多量に存在し、水蒸氣と混交して太陽より受く

る熱を貯藏したりと説き、或、同時代に動物の遺骨の發見せられしを擧げ、若し漸く炭酸瓦斯の多量なれば、動物は到底棲息するを得ざりし筈なりと説く。其の他異論の紛々たる次第なるが、何れにせよ嘗て地球に熱温寒三帯の差別なく、略ぼ同一の熱度の善かりし時代ありしを認めざるべからず。(同時代に同一の熱度なりしを推し) 眇たる此の地球に斯かる多大の變化あり、其の如何にして生ぜしやの容易に解し得ずとせば、他の多くの星辰に何様の變化あり、其處に生ぜる植物に何様の影響を與へしやは、遂に全く解し得ざらん。

植物は周囲の事情に支配せらるゝの多きもの、而して我が地球さへ事情の明白を缺けば、他星に就て茫として言ふこと能はず。されど地球に就て既に知られし少からず、更らに知らるべきの一層多し、以て未知の境に入るに必ずしも不可ならず。究極の證明の望むべからずとも、或る程度まで他星の知識を得ることあらん。若し地球に幾層倍する星あり、植物の繁殖するに良好なる事情の具はれりとせば、則ち其の植物の成長すること我れの比にあらざり、存続すること亦我れの比にあらざり、鞏固きこと數里數十里、雲間に參入して上部の見る可ら

ざるあるべく、數萬年數十萬年に轉りて翠色を改めざるあるべく、樹木の翅果に似て一層機官の整備し、恰も蟲の飛ぶが如きあるべく、自在に杖策を動かし若くは蔓を捲き附けて餌を捉ふるあるべく、地に依らず、水に依らず、空中に浮動して生存するあるべく、想像を運らばば如何様にも按出するを得べし。斯かるものは固より之れあるを斷言すべからざれど、亦之れなきを斷言すべしに非ず、假令に屬すといはば屬するものの、植物と名づくべき生物の唯獨り我が地球に見る所に限るべからざるは少しの疑を容れず。若し植物は如何なる事情の下に如何なる變化を爲すかの明かにせられ、而して他の若干星の地殼及び雰圍氣の如何なる状態なるかの明かにせらるゝ時あらば、別種植物の存在する事が十分に證據立てられざるも、猶ほ幾分の手掛りを得、研究者の眼界を廣くするの莫大なるべし。其の然らざる間は、植物の知られたりといふも、眞に極小部分に過ぎず。

第九十四節 問題をして地球の植物は如何なる者なるやといふに止まらしめば、從來の研究を以て稍々解決したりとせんも、凡そ植物は如何なる者なるやといふに存せしめば、今日まで何程をも知り得ざりしと爲さざる能はず。

無數の星辰を究めんは全く不可能事なるも、少くとも若干星に考へ及ぶ所なるべからず。星の事として必ずしも望遠鏡を使用して其の表面に現はるゝ現象を目撃するを要せず、單に過去及び現在に成立せる所を以て主要なりとせず、謂ゆる植物性のもは如何なる事情の下に如何なる變化を生ずべきやを緻密に攻究し、詳細に類別せば、以て植物の眞正なる概念を得るに庶し、其の無生物との關係及び動物との關係に對する考察も、爲めに恐らく一變することならん。斯かる事は遂に望み難きも、早晩之れ有るを豫想すべし、現に觀る所の植物の形態分類等を以て植物學を完成し得べしと爲すは、自ら該科學を小にする者なり、必ずや植物が變化すべき限りを究察し、究竟如何なるものの宇宙に存在し得るやを考へざるべからず。斯く着手するに際しては、中に妄想の加はり、或は無益の事の混入あるべきも、一利一害は何事にも避けられず、地上の現象を攻究する側、別に宇宙的に考ふる所なくんば、餘りに小局に偏するの嫌ひあり。(一節に植物の考へ及ぶ可
能性を考ふる)

日今の知識を以てしては、地球の如き状態のもの唯我が地球にして、稍々似たるは火星のみ、其の或る部分の時として綠色を呈するは植物の急に茂盛せるならんと察せられぬ。之を除きて植物の生存するに堪ふべしと思はれるが、現地球の植物の生存するに堪へずとも、他に生存するに堪ふる植物なきを必ずべからず。今後研究の進むに隨ひ、地熱猶ほ熾んたりし時或る植物の生存せるの知られ、推して以て木星土星等に及ぶことあるべく、或は遊星にして全く植物の存せざるを確かむることあるべきが、幾億を以て計へらるゝ星辰中には想像し得る限りの生物の存在するを考ふるも、強ち妄想とせざらん。儼め此に就て考察し、然る後我が地球の植物の如何なる地位を占むるかを尋ねれば、聊か植物の何たるを識得し能ふべし。萬有を生體無生物に分ち、生物を植物動物に分つは、全く便利上の事にして、假りに生類なき星より來る者ありとせば、或は總てを動物として取扱ひ、若くは宇宙的生物に伴へる瑣細なる現象として觀ん。

第六節 植物の範圍

第九十五節 普通に植物といふは我が地球に限りての事、地球に於て如何なる形態を現は

し、如何なる種類に分れたるかを尋ねるに止まる。地球上の植物は現に日に轉るゝが如く、之れが研究法も略ぼ整ひ居れど、植物性を具ふる者は茲に盡きたるに非ず、幾億の星辰間、甚しく形態を異にしつゝ、尙ほ遂に植物に編入せざる可らざるあるを推想せざる能はず。地球にては、礦物植物動物に三大別し、各自の範圍の明白らしきも、區別は固より絶對的に存せず、實例の相近づけるの少なからず、可能性を考ふるに及び、之を混一するの難からざるべきを認む。礦物と植物とは、中間物體の以て區別を打消すなきも、さる物體の存在し得べきを許すべし、植物と動物とに至りては中間と見做さるゝの稀れならず、動物にして一處に固着すること海綿珊瑚の如きあり、植物にして水中に動くこと硅藻の如きあり、若し海綿珊瑚より固着し、硅藻より動くあらば、孰れか植物孰れか動物なるを判別するに苦まん。地球にてこそ著しき中間物體の見えざれ、他の多くの星の亦均しく然ることを斷定すべからず。

植物と動物とは、一、澱粉に富み、一のグリコーゲンに富むなど、細胞の化學的成分も同じからず、外形に於て更に多くの差違の存するあるが、要するに周圍の事情の致し、所にて、

如何の場合にも必ず然りと限れるに非ず。澱粉もグリコーゲンも分量一定せず、甚だ多きあり、甚だ少きあり、混淆せる者を考ふるのと難からず、外形の類似し、全く區別すべからざるを考ふることも亦難からず。若し藻類に似て根莖葉の別なく、而して細胞組織の一層簡單なるあれば、礦物と離るゝ僅々なるべく、樹木にしてオジ草の如く、風雪若くは或る災害に會ひて枝を垂れ、且つ根莖草よりも餌食を捉ふるの自在なるあれば、動物に類するの多かるべし。地球上の植物は植物の概念の由て來れる所にして、全く此と形態を異にするは植物と名づくべからざれど、決して植物の範圍を畫せるに非ず、星辰に關して知識の極めて乏しきにせよ、地球と異なる状態の知らるゝと共に、尋常植物と異なる者あるに想ひ到らざる能はず。既定標準の下に可能性の考へ得べきもの擧げて計へられず、宜しく之を植物の範圍内に入れ、唯不可能と爲さざるを得ざるに至りて則ち已むべし。可能性の及ぶ所甚だ廣く、礦物に接觸し、動物に接觸し、其の限界を撤去して總てを包括し、區別をして或る便利上の認定なりと解せしむるに終らん。現に行はるゝ植物の定義は便利上に出でし

者にして、日常觀るところ、礦物と違ひ、動物と違ふが故に、此等より區別したるに過ぎず、從來眼に映ぜし儘に判定し、漸くして誤りなるを氣附けるもの少からず。平行線の延びて一線と爲ると見ゆるが如く、眞に然らずして一應然りと認めらるゝあり、嚴密なる研究も意外に便利を混する者にして、程度の差違に強ひて區別を立て、區別のまちがひが爲め、各々別物なりと見做し、其の關係を尋ねるに苦心するの多し。礦物の幾許か植物と異なるを以て二者全然相異なりとし、植物の幾許か動物と異なるを以て二者全然相異なりとし、人類の幾許か普通動物と異なるを以て二者全然相異なりとし、更に人類をば萬物の靈長と爲し、自ら居ること愈々貴くして、遠きを見ること愈々賤しく、人類と普通動物の間、動物と植物の間、特に有機物と無機物、生物と無生物の間に甚しき懸隔を認めたるが、大抵便利より定めし所にして、本來確乎として動かすべからざるに非ず。

第九十六節 指を以て眼を遮れば、百尺の樹木を見るべからず、丘陵の前面に横はるれば、天を摩するの高天も見えず、指は大きに於て樹木に若かず、丘陵は高山に若かざれど、位置の爲めに斯かる顛倒を生じ來る。礦物と

いひ、動物といふは、相互の間に多少の差違あるに因るも、實は假定せられし程に隔離せるにあらず。地球にては比較的多く差違の現はれ、隨て區別を立つるの自然なるも、其れさへ聯絡の見るべきあり。他の星には必ず區別の困難なるあるべし。幾多星の間に地球と植物の種類を異にするの多く、或は鑛物と似、或は動物と似、區別の判然たらずして、寧ろ一とするも、二若くは三とすべからざること、其の成分に徴して推知せらる。形狀の區々なるにせよ、孰れも皆炭素化合物にして、簡單なるを鑛物とし、複雑なるを植物とし、更に複雑なるを動物とし、若し中間物體の存在せんには、同類間の差に過ぎざるの明白なるべし。地球に中間物體の少きが故に、聯絡せるを幾個に切斷し、各自獨立せるかに認めれど、中間物體の多き處にては斯かる煩はしき手数を費すを要せず、星辰が種々變化を經るの際、地殻及び空圍氣に於ける或る成分の變化し、一種の形を占めて一種の色を呈し、特に綠色を呈するの多く、間々離れて運動する者もありと解すべし。

宇宙間に散點せる大小の星を遍歴し、仔細に狀態を査察せば、唯其の絶大なる活動を演じつゝあるを知り、是れ以外に別種の活動ある

に念ひ及げざらん。太陽系の遊星さへ、多くは地球同様に植物動物の區別ありと思はれざるのみならず、鑛物植物の區別の成り立てりと思はれず。假りに或る星に三者の明晰に區別せられ、少しの中間物體なく、鑛物は純然たる鑛物、植物は純然たる植物、動物は純然たる動物、而して又人類に似て遙に進歩せる者ありとするも、同時に他の或る星に全く生物なきを認定せざる能はず。容積の大なる星は光熱猶ほ熾んにして烈火の暴風吹き荒み、生物の向ひ近づく可らざるは勿論、鑛物と雖も頓に溶解して氣化するを免れず、星霧の渾沌たるに至りては眇たる差別を念ひ煩ふの邊なく、ひたすら絶大なる活動を感歎す外あらず。爾く觀測すれば、稱して鑛物といひ、植物といひ、動物といふも、地殻及び空圍氣に於ける或る成分の變化にして、恰も渺茫たる海洋の波濤の上下し、高低の以て魚鱗の安危を決するも、畢竟するに表面の微動たるに止まるに異なることなしとす。

第九十七節 若干の區別を設け、各々限界の

儼然たりとしながら、他より觀て同一範圍内に争ふに過ぎざるの珍らしからず。地球に在りて鑛物植物動物を別つは、別すべき點を認めて

の事なれど、本來の形質よりも習慣の便利に出でたるもの多し。地上の現象は概ね鑛物に屬せしむべし、鑛物の範圍を擴むれば植物を包括すべく、植物の範圍を擴むれば動物を包括すべし。無生物より生物を別つが如く、鑛物より植物動物を別つとも、植物動物を相互に對峙するかに考ふるに至りて妥當を缺くの恐れあり。地を掘りて成長せる所の最大部分は植物にして、他星より望見すれば、綠色なる大小の斑點此處彼處に散在するなるべく、是れ皆森林若くは草叢にして、眸裡に入るは唯斯の如きのみ。近接して視察するに及び、綠色なるものの中に或る小なる物體の動き、草叢より養分を取りつゝあるを知るべし。綠色なるを指して植物と名づければ、此より養分を取りて棲息する微細なる物を附屬せしむるの自然ならざるべきか。或る植物は草叢に匍匐し、若くは木より木に飛ぶといふの不可なるを見ず。植物は決して動くべからずと限らず、現に或る部分の動くあり、又獨立して動くあり、一層運動の著しければ、動物と擇ぶなげん、動物は大別に於て植物に屬すべし。炭酸水素を主とする化合物として植物及び動物を鑛物に入るの廣きに過ぐれば、少くも運動する植物として

動物を目すべし。便利の爲に何様にても差支なけれど、順序の存する所を忘るべからず。

星辰に或る生物の存在せば、それは必ず何種かの植物なり。火星に人類の生存するをいひ、他にも人類の生存するの屢々話頭に上るをも、此等は容易に想定し得べきに非ず、寧ろ之れ無しとするの當らんも、而も植物の存在を想定し得べきは甚だ多く、遊星にして稍々地熱の冷却せば則ち植物ありとして謬らざるべし。植物

は殆んど地殻の成立と伴ひて生出すべき者に於て、地殻の事情次第にて種々に變化すべし。意を以て計ふる星辰には植物の科を殊にし類を異にする、到底想像するに堪へず、植物との中間、動物との中間は勿論、奇異なる質を具へて何物とも名狀すべからざるあらん。群星に涉りて概括すれば、動物と植物とを對するの必要なく、有機物と無機物、生物と無生物とを對するの必要もなく、相對するとも、劃然たる區別の存せず、今日地球上に行はるゝと同日の談にあらざらず。徒らに小區域を設け、小區域の内に小差別を立て、差別又差別すれば、識らざらず大體を忘るゝに至る。科學的攻究の緻密を加ふるの質すべきは言ふ迄もなけれど、其の緻密を加ふると共に小區域に踞踏し、愈々小に

明かにして愈々人に暗きを致すの疑ひなしとせず。現在の人類は地球以外に出づる能はず、小區域内に蠢動するの邊くべからざるも、星辰に關する知識の近時漸く進み、頗る希望を前途に馳すべきことと爲れる以上、又全體に考へ及ぶの必ずしも不可ならず。

第七章 植物及び動物(上)

第九十八節

植物を廣義に解すれば、植物は概ね此より養分を取りて生存し、動物は概ね植物より養分を取りて生存す、植物も動物も養分を取る所なくんば、生存するに由なし。分量に於て、鐵物は遙かに植物より多く、植物は遙かに動物より多し、即ち鐵物は殆んど地球の全部を構成し、植物は其の外に茂生し、動物は僅かに植物の茂生する間に棲息するのみ。三者互に形質を異にするも、其の異にするは組織の單純複雑なるに由來し、本來全く相離るゝに非ず、二大別し、三大別し、各々一世界を組み立つると考ふるは、便利上より出でし假定に過ぎず。若し地球上に植物ありて動物なかりしならば、特に植物を生物とし、鐵物を無生物として區別するの必要あるやの疑はしく、

或る部分に綠色なる物、或る部分に褐色なる物、紅色なる物の地を掩ふを見、以て結晶組織の稍々複雑なるものと認むるならんと想察せらる。

動物の分類法は區々にして一定せず、容易に一定すべくもあらねど、時代相應に多少一定に近づける無しとせず。近年單細胞動物と複細胞動物とに分つ普通なるが、假りに單細胞動物ありて複細胞動物なしとせば、其の細胞に植物の細胞と違へるあるの明かなるにせよ、特に動物と名づけて植物と區別するに想ひ到らざるべし。實は違へりといふも、僅かばかり化學的成分の異なるものにて、膜や、原形質や、液や、核や、略ぼ相同じければ、尙ほさるの事なりとす。動物として特別に取扱ふは、複細胞動物の存在するが爲めにて、此邊に見るべきの差違ありとせんも、而も是れとて一概に言ふべからず。複細胞動物は或は七八門に分ち、或は十數門に分ち、其の多くは植物と區別せんことを僥倖なくする者ならず。散布する所唯海綿類腔腸類のみなれば擧げて植物の中に列するの自然ならずや、海月の水面を掩ふも、植物として扱げなけん。表皮類も然り、海膽の如き、海鼠の如きの多くとも、植物より離さ

るべからずとせず。扁蟲類も、圓蟲類も然り。環蟲類も亦然り、蚯蚓の匍匐し、蛙の游泳するも、其の故を以て植物より離さざるべからずとせず。節肢類に運動の敏捷なるあれど、尚ほ植物より離さざるべからずとせず。蟻群を以て森林の鬱蒼たるに對するは滑穢に庶からずや。軟體類とても兎るゝ能はず、蛤の如き、蝶螺の如き、何の異とすべきぞ、蚶や烏賊の巨大にして能く動くに至りて、聊か目を驚かさんも、是れ丈けにては未だ植物より離さざるべからずとせず。

第九十九節 動物として植物より區別するの必要なを感ずるは、脊椎類の存する故にて、若し此の類なくんば、盡く植物の或る部門に屬せしむることと爲り居るべし。脊椎類は形意に於て既に大に植物と違ひ、稱へ之れ有るが爲めに世界の顯かにして活氣に富むを感ず。河海湖沼に魚族の遊び、時として蛟鱷の浮び、池に蛙鳴き、叢に蛇爬ひ、上に鯨鷹及び鳶鳥の翔り下に獅虎及び牛馬の歩む、孰れか地上の單調を破るものならざる。斯かるもの存せず、唯草木の發生し、海月蚯蚓の類の動くに止まれば、天籟の桐葉を搖かして清響を傳ふるも、世界は甚しく寂寥に流れ、之を招くも、之

を斥けるも、感應の如何を知るべからず。蠅蠅の喧しきも、小形にして落葉に均し。脊椎動物の現はれて游泳し跳躍し飛行するより、世界萬般の活動するかに見え、茲に別殊の物として植物より離すに至りたるらしきも、恐らく是れ丈けにては未だ十分ならず。

第一百節 直接若くは間接に全く植物に依頼し、植物と主成分を同じくする動物を植物以外に置き、尙ほ相對立して生物を形づくるとするは、單に複細胞動物に脊椎類の存するが爲めにあらざる、實に脊椎類に人類の存し、人類の位置より觀察すればなり。人類は常に人類の事を念とし、爾餘の物を觀るに其の人類に利するや否やの點よりし、利すれば取り、害すれば捨て、利も害もなきを放置して顧みず、己れの居る處の比較的甚だ小部分にして、他の大部分の何等利害の關係なきより、殆んど一切を問はざらんとする狀あり。平素人類を以て萬有の本位と爲し、形意の類似よりして他に推し及ぼし、牛馬なり犬鷄なりの有情物なるを察し、延いて介蟲以下に及び、動もすれば更に下りて植物に及び、生きとし生ける物と云へするも、而も元人類本位にして、隨意に己れの位置を高め、自ら宇宙間の特別なる者として以て他に臨むが爲

めに、萬有の聯絡に縛を生じ、人類と普通動物と全く異なりとし、動物と植物と全く異なりとし、植物と植物と全く異なりとし、中間の轉換を充たすに力を用はず、因襲の久しき容易に改むる能はざるなり。(一節四十四)

今日こそ進化論の必要は略ぼ承認され、多く怪まるゝ所なけれ、曾て人類と普通動物とに對然たる境界なく、相持續することの言はれし時、議論難々、幾年か決着せざりき。(二節二牛一節一) 動物と植物とは、接續するとも人事に抵觸するなけれど、今尙ほ生物の二大別として相對立するは習慣に依りて然るのみ。動物植物を合せて、動物より離し、萬有の二大別として對立するとも、亦習慣によりて然るのみ。便利よりせず、發達の順序よりせば、二大別三大別するよりも、寧ろ大中小の範圍に分ち、大なるは中なるを包括し、中なるは小なるを包括すとすべし。然るを相互に各自の範圍を守り、兩脚若くは、單足の形を成すかに考ふるは實に其の小なるの最も己れに近くして、中なると同等以上に見え、中なるの稍近くして大なると同等以上に見ゆるに關る。地球にては人類と普通動物とを接續する物の存在せず、動物と植物とを接續する物、植物と動物とを接

續する物も多く現存せず、爲めに境域の判然たるが如く、久しく離して別種の物とし、種々に觀察し研究せる結果、漸く之を接續するの可なるを認めたるが、是かく習慣の力の強く、理に於て明かに然るを見るも、猶ほ識らず知らず、從來通りに區別するを免れず、今後幾年間には尙ほ然らざるを得ざらん。他の多くの星の中には、かく分類すべき事情の存せざるあるを考へ得ざるに非ず。

第九節 我が地球にても、人類と普通動物との中間に位せるもの發掘せらるゝあり、(一) 猿猴類とを接續する者にして、若し斯かるもの多數に存在せんには、接續如何は初より問題と爲らず、之を確かむるは當然の事を當然とすることと聞えん。顕微鏡的單細胞の外、動物と植物との中間に位するもの多く現存し、植物と動物との中間に位するもの多く現存せば、接續に就て何の異論なかるべし。分割して別種なりとするは、一に目に觸る、中間物體の現存せざるよりの事なり。現存せずとも、其の存在し得ることは決して考ふべからざるに非ず、地球にても發掘せらるゝの少からざるが、幾億の星の中には其の甚だ多きものあるを想は

ざらんと欲して得ず。或は中間物の存する處は即ち生存競争の最も劇甚なる處にして、其の物は正に死生を決すべき運命を存す、苟も繁殖する者は皆執れにか定まれるなれば、何處にも中間物の遺存すべき管なしと言ふ者あれど、是れ必ずしも然りと限らず、事情次第にて何様の中間物も他と與に俱に存在するを得べし。地中より發掘せる、人猿中間者と同じきもの或る大陸中の隔離せる處若くは遠洋の島嶼中に生き残り居るべきを假定するに難からず。地球にして今幾倍か大ならば、さるもの遺存し得べき餘地は一層多く、各類間の中間物は勿論、單細胞ならざる動植物も十分に存在すべし、事情の良好なれば、何の中間物も存在を難んぜん。

中間物の多く存在せば、植物動物三者の接續し、進化は一々眼前に現はれ來り、區別の單に程度上に存するの明白にして、特に此に就て研究するを要せざるべし。但だ地球の現狀は之を許さず、觀察のみにて頗る眞實を知るに苦むべきものあり。實は動物より植物、植物より動物、而して普通動物より人類と、組織の單純複雜を以て自然に進化の理を現はし居るに、中間物の不足なるが故に、遂に人類より推して

動物を離し、植物を離し、萬物を區分し視るの習慣を生じ、近時之を打破るに少からざる力を費すに及べるなり。改修は大抵意外の長日月を要するが、習慣の惰力も意外に強きものにして、近時惰力を制し、次第に眞に返つて形あるも、尙ほ容易に改まらざる無しとせず。便利上舊に依りて差支なくとも、之が爲めに誤られざるやう注意せざるべからず。

第八章 植物及び動物(下)

第九節 植物より植物の出で、植物より動物の出で、結晶組織の次第に複雑を加ふるは、力を蓄積し及び放散するに最も變化多き方法に於てせんとするものと見ゆ。(非ずれば、陽より光熱及び或る他の力を受くるが、植物の多分は之を受けて之を放つこと極めて簡單なり。岩石の光熱を受くる、幾何かを反射し、幾何かを吸收し、吸收する所も放出するが儘に任す。爲めに分子に變化を及ぼすも、水分を含めるが膨脹し若くは收縮する位の事にて、化學的變化の起るとも、一再すれば爾後久しく安定するの多し。植物は受くる所の光熱の爲め

に種々の變化を現はし、種々高等なるは、單に眼に見ゆる所にて、萌芽し、成長し、枝を分ち、葉を生じ、花を開き、實を結び、孰れも作用の明白なるあり。動物に至りては一層甚しく、力の發現して活動の著しきを覺ゆ。人事に準ずれば、植物は鑛物よりも、動物は植物よりも、力を經濟的に活用することと爲れるなり。〔同一力を以て植物多量の事を成すを經濟的とす。〕

鑛物ありて植物あり、植物ありて動物あり、鑛物は植物の爲めに損失せざるの明かなるに、植物は動物に食はるゝあるよりして、之が爲めに損失するかに目せられ、競争に於て動物の植物に打ち勝つものと曰はるゝが、實は然らず、植物は動物に害せらるゝよりも寧ろ利せらるゝと爲すべし。植物の位置より觀れば、己れの或る部分を動物として現はし、以て自ら繁殖に便する者にして、動物に害せらるゝは一時の事若くは一小部分の事のみ、全體に於て互に相待り相助くる所あり。例せば植物の炭酸瓦斯を吸ひて酸素を吐き、動物の酸素を吸ひ一炭酸を吐くが如き、植物の葉及び實が動物の食料と爲り、動物の排泄物が植物の肥料と爲るが如き、將或る植物の生殖が蟲類の媒介に依りて催進せらるゝが如き、皆顯著なる事

實とす。

唯恐雌蕊の風に媒介せらるゝあるも、此の類の花は大抵色悪しく、香もなく、蜜もなし。花にして美色を呈し、佳香を發し、甘味を蓄ふる

あれば、唯昆蟲を誘致すといふを以て解釋せらる。蜂や蝶や、他くまで載れ、其の返報らしく花粉を身體に塗りて飛び去る。或る蟲の嗜好する花は形狀及び大小此に適し、毛にて他蟲の侵入を防ぐと共に、該蟲の徒らに去るを許さず、

必らず花粉を運ばんことを僞儀なくす。若し斯かる花の開かずんば、斯かる昆蟲の生存するに困難なるべく、斯かる昆蟲の存せずんば、斯かる花の開くの無益なるべく、其の相助くること頗る密なるを見る。種子の散布するも亦然り、

自然に葉を脱して直下の土中に落つるあり、風に蔽られて稍々隔れる處に飛び去るもあれど、動物の口に入り又は身體に附着して一層遠隔の地に運ばるゝあり。獸類の草叢を通過する際、

身に種子の附着するの少からず、餌を求めて速きに行くや、行く／＼之を落すべし。鳥類の行くこと更に遠く、動もすれば海上を横絶するが故に、其の種子を輸送すること推して知るべし。各鳥に就て觀れば、全く運ばざるあるべく、

運ぶものも一年二年にて何程にも上らざるべき

も、幾百年幾千年延いて幾萬年に及び、其の額の莫大なることならん。風のみにては此の如きを得じ。

第三節

かくて動物が植物の繁殖するに效用あるの明かなれど、植物が動物の爲めに害せらるゝをも看過すべきに非ず。飛蝗、浮塵子、

浮塵子の如き、稻麥類に大なる害あるもの、往々にして籾麥類に横はるの慘狀を現はすことあるが、事は稻麥に限らず、他の多くの草木にも

各々害蟲ありて之を枯死せしむるの珍らしからず、甚しきは千里の間青色を見ざるに至ることあり。隨て植物は動物の威を逞しくする

に及びず、弱者が強者に滅さるゝは避くべからざる所なりといふも、是れ未だ見解の足らざるなり。飛蝗、蠱蝨、浮塵子、及び爾餘一切の

害蟲は、皆植物に害あるも、植物全體として繁殖する上に幾何の害ありとすべきか。植物は若干種のみにあらず、幾千萬種を計へて尙

ほ餘りあり、或る種の植物が或る蟲の爲めに害を受けたりとて、全體に比較して僅かの事なり。或る種の植物が全く食ひ盡されたるにせ

よ、土中に残れる根又は種子より新たに發芽するを妨げず、或は根も絶え種子も絶えたりと

も、他の植物の代りて繁殖するに於て何かあ

るべき。且つ害蟲なくば、或る種の植物の茂生し、他種の種子の風又は動物に運ばれ來りて此と競争するあるも、由りて變化の途げらるゝの迎かるべし。又或る種の植物が、成長し、枯死し、腐敗して肥料と爲り、而して種子の幾回か生死を繰返し、幾回か肥料と爲るも、地味に變化を及ぼすの遅からんが、害蟲の群がり來りて青草を食ふや、莖葉の養分を盡さずして肥料と爲るのみならず、此等害蟲の絶えず排泄物を遺すに加へ、害蟲自らも死して肥料と爲り、幾萬年を経過する間、漸次土地を膏腴にすべし。

害蟲の猛威を逞しくする、恰も暴風の來るが如し、時として非常なる暴風の大損害を被らすことあるも、風力の度は大體に於て定まれりとす。飛蝗空を蔽ひて日光爲めに暗く、草葉を食ひ盡して樹皮に及び、極めて慘澹たる光景を呈することあるも、是れ稀れに有る事にて、常に然るにあらず、通常植物を害するに略ぼ一定の度ありて或る限りを超ゆることなし。植物を害するの蟲あれば、此の蟲を食ふの蟲及び鳥あり、鳥の多くは蟲を食ひて生存し、之をして甚しく増殖するに至らしめず。而して斯かる蟲食の蟲も鳥も排泄物と己れの身體の腐れると

を遺して植物の肥料とす。歌類の中にも植物を食ひて生存するあり、其の内に繁殖するに方りては數百里間の草を食ひ盡し、更に愈々進みて止まる處を知らざらんとす、而も斯かるもの多ければ、又之を食ふの猛獸あり、比例して増殖し、他の増殖するを制限する所あり。而して皆排泄物と遺骸とを以て地味を良くす。

第一百四節 地味を良くせるの首功に蚯蚓を推すべきは疑ふを要せざる事なるべし。蚯蚓は頻りに土を掘り、土を食ひ、中に含まれたる僅かの養分を取りて他の多くを排泄し、幾億々匹が幾萬々年間に排泄せる所の能く各地の野を掩ひ谷を埋むるに足ること、眞實なりとして可なり。則ち蚯蚓は地味を良くするに與りて最も力あるべきも、而も地味を良くするもの獨り是れのみならず、有りと有らゆる動物は、斯くまで效能の著しからずとも、皆幾許か與る所なきに非ず。即ち動物が或る種の植物を食ひて排泄し、己れの身體も次いで死して腐敗し、斯くすること幾回なれば、其の肥料と爲るの渺少な

らじ。植物に吸收せらるれば、茲に盡き果て、同一事を繰返す間に漸々地味の良くなるべき筈なり。或る種の植物の減少し又は絶滅するも、他

種の代りに繁殖すれば、差引き何の損失あるなし。特に塘質少き土壤に墾ふる灌草の動物に食はれて肥料と爲り、之に墾へざる者を發生せしむるに於ては、其れ丈け植物の發達に益せりと爲さざるべからず。蚯蚓の如く穴を穿つなけれど、昆蟲の穴を穿つもの少きにあらず。草の稍と大なるの地を踏りて跳奔するも土壤を柔かにする所あり、長年月を計算すれば、濫りに輕んずるを得ざらん。植物全體の上よりしては、動物に害せらるゝの即ち小部分を犠牲にする者にして、大部分は爲めに益々繁殖するの傾向あり。

森林に、草叢に、各々動物あり。葉を食ひて生存する蟲あれば、此の蟲を食ひて生存する蟲及び鳥あり。葉を食ひて生存する鳥及び獸あれば、此の鳥獸を食ひて生存する猛鳥及び猛獸あり。而して植物も動物も氣候に應じて種類を別ち、寒帯に寒帯の植物動物あり、温帯に温帯の植物動物あり、熱帯に熱帯の植物動物あり。熱帯地方は喬木灌木交雜して暢茂し、仰いで碧空を見す、内に種々なる動物の徬徨跳躍し、互に喰むべきを喰みて生存し、劇烈なる競争の演ぜらるゝの屢々なれど、大體に於ては、何の變化なく、森林は依然として蒼鬱、大

小樹木相交はりて暢茂し、藪藪之れに纏繞して旋繞行す。大樹の廣く散布せざりし時、かゝる森林は到る處に之れあり、當今にても森林の繁茂せる計ふるに勝へず、以て如何に植物が動物と共に自然の調和を得るかを推察すべし。

第五節 人類の各處に散布するにつれ、森林を伐採し、或は草叢を焼き、植物に害を興ふることに殆んど極まれりとすべきに似たれど、實は然らず。社會發達の或る時期に於て伐採を繼にするに於ても、其の甚しきに過ぎんとするや、之れが弊を察して之を止め、更に種樹して其の後を補ひ、又樹木なき處に造林し、以て植物の増殖を計る。或る種の草は無用有害なるよりして焼くも、其の焼きたる跡に新たに別種の草を播種し、礦物荒蕪なる土地をも、灌溉の方宜しきを得て植物の成長に適せしむるに及ぶ。往時不毛の地の現に膏沃の地と化して葎類の發生するを見るの稀れならず、或は沙汰に水を引き、植物爲めに利用せんことを企つるあり。植物が人類の手に寄せられしは一部分に止まり、人類の加工に依りて繁生暢茂を增せるの途かに多し。動物は種々植物の爲めにし、其の進歩して人類となりて

より益々之が爲めにし、いはゞ動物は植物に依りて生存し、而して之を繁茂せしむるに務むるとせん。植物として必ず或る種の遺存せざるべからずと限らず、種多の種類に分れたるも實は植物性のものを繁殖せんが爲めにして、植物性のものを繁殖するは、受くる所の力を空しく放散せず、成るべく純化多く費さんとするに在り。機官の單純なる甲種の代りに稍々複雑なる乙丙の出で、乙丙の代りに更に複雑なる丁戊己の出づるは、即ち此の旨意に協ふものならずや。或る種の植物が動物に害せらるゝを見、植物を以て弱者の地位に立つと爲すは、誠に思はざるに出づ。植物と動物とは決して相隔離せず、動物は植物に依りて生存するもの、植物は動物に依りて利を受くるもの、孰れよりも蔽とするが如きあるべきに非ず、究竟或る植物の善く活動するをば、暫く名づけて動物とするのみ。

第九章 動物の繁殖

第六節 植物は動物と自然に相調和する所あり、各々繁殖して或る限度に達せる以上、大に増すことなく、大に減することなし。人類

の増でざりし時、及び出でて尙ほ少かりし時、森林、草叢、蕪蕪茂生し、中に飛禽走獸、大小種多の動物の棲息し居りしが、人類の増すにつれ、一時此に害を興へ、丘山を藉秀にし、原野を赤土に化したるの稀れならず。されど漸くして必要に迫られ新たに樹木を移植し、若くは藪類を播種するの多く、歳月の經過と共に無樹の山に殖林し、不毛の地に灌溉し、耕作するの愈々廣きを加へ、終には到る處何等かの草木を見ざるなきに至るべき筈。究竟動物は植物を著せしむるものと見做して不可なし。

動物に多くの種類あり、或は三十六七萬種を計へ、或は一百萬を計へ得べきを豫想す。普通に下等高等と區別し、順序の稍々明かなるも、此邊聊か注意を要する無からず。人類は己れ自らを最高等と爲し、形質の己れに近きを高等とし、漸次遞下して最下等に及ぶが、其の間動もすれば、中間の生じ、事の變時に流るゝは、自然淘汰と進化との關係よりす。一處に曰ふ、自然淘汰に生存せるは其れだけ高等の域に入れらるゝも、謂ゆる優勝劣敗一處に於ては、其の勝者、自然淘汰の勝り必す勝つことを保證せざるは、優勝に何を以てせざるを以て、一にして、優れるの勝り、劣れるの敗れたるなり、幾百萬年の繰返中、劣者は漸

第七節

動物は周囲の事情に制せらるゝと多く、特に植物に依りて生存すれば、繁殖するにも植物に依りて限られ、一旦必需の植物を食ひ竭せば己れも次いで消滅せざる能はず。随つて其の繁殖せんとするや、必需の植物を食ひ竭さずして生存し得る範圍内に於てせんとを要し、兩も又同時に其の範圍内に成るべく多く繁殖せんことを要す、否らずんば遂からず消滅するを免れず。最初より動物は盛んに繁殖せんとせるものにて、繁殖は其の缺くべからざる性能とすべく、數十萬種に分れたるも、世界各地に分布せるも、大部分此に由來し、若し繁殖するの必要なくば、かゝる事の行はれざりしならん。絶えず生存競争し、不適者滅びて適者存すとは、變化の一部分に就て言へる者に於て、動物相互の競争を觀れば、頗る劇烈なるものあり、一種の生存するが爲めに若干種の消滅する無しとせざれど、生存するもの、消滅するもの、共に齊しく動物にして、孰れが敗れ孰れが勝つとも、苟も動物にして多く殘存せば、則ち動物として繁殖するに害あるなし。生存競争とは動物が繁殖する爲めに身體を分ちて能ふ限り廣く散布し且つ永く存在せんとせざるに基づく者にして、一の附帶せる現象に過ぎ

ず。情も細胞の積み累なる中に、舊きもの消滅し新たなもの生ずると同じく、たとひ不適者として消滅するの多きも、全體の上に於て唯益と動物の繁殖するを見る。初め種々なる分子を發生せるが、中に幾種も適するあり、適せざるあり、適するは生存し、適せざるは消滅す、發生するの少くば、適する者も少く、頗る繁殖し難しずべし。多數を發生し、運命に任せてこそ初めて植物の蕃衍し得る範圍内に十分繁殖するを得るなれ。競争の主旨は最適者を出して多く繁殖せんとするに在り。

動物の競争は激烈を極めしも、爲めに動物の減少せず、却て増殖せるを認む。小鳥は昆蟲を喰ひ一已まず、而して自ら猛鳥の爲めに食はるゝの少からず。獸類に在りても、強者力を逞しくして弱者を食へば、更に一層強き者ありて之を食ふ、かくて權衡の維持せらるゝの普通なるが、假りに斯かる事なく、唯強者弱者を食ふのみとするも、弱者多ければ則ち強者の食餌乏かにして、食餌乏かなれば之を食ふもの増加するは必然の數にして、一方の減じて他方の増加し、差引勘定、動物全體の上に數字の變化を現さず、而して弱者の減少して強者の増加せるだけ其れだけ生存に堪ふる

ことと爲るなり。人類に至りて動物を殺すこと頗る多く、自らの増加する反比例に他一般の減少するかに見ゆ。大小の鳥獸群り居り、人類の繁殖すると伴ひて跡を絶ちしの儘かならず、豺狼途に當るといふの一片の比喩ならず、實事として存せしも遠き昔時ならざるに、今日にては或る深山曠野を除きて之を見んこと難し。(マウリス島のドド鳥、ロドリ)かくて近年は到る處に鳥獸の減少する數あるが、觀りて考ふれば、或る種類の動物の滅するとも、動物全體として減少するに非ざるなり。

第八節

動物にして人の手に罹り滅せざるあれど、絶滅せずして殘存するの擧げて計へ難く、或る種の如きは前代よりも多く繁殖せりと謂ふべし。害蟲は殺茶に害ありとして頻りに打ち潰はるゝも、其れさへ遍滅せず、蠶の蠶は繭の爲め、蜂の類は蜜の爲めに飼養せらる。漁具の精巧を加へて魚介の減少すること多けれど、甚しく減少せんとせば、漁獲を禁止し、尙ほ併せて新種を放ち移すに務む。鯉の居らざりし湖水に鯉卵を孵化せしめ、鮭の居らざりし河川に鮭卵を孵化せしめたるが如き、孰れも魚族の繁殖に利せるなり。鳥類は食料として捕獲せらるゝも、減少せるの明かなれば、之が漁獲

を禁じ、新たに繁殖せしむるの方法をも講ず。
食料としてのみならず、目を癒ましむるの料
として之を飼養するの漸く多きを加ふ。獸類も
屠殺せらるゝべきに拘らず、牛馬羊豚は愈々
増殖し、兎の如きも間々繁殖し過ぐ。或るも
の「單に食ふが爲めに養はるゝも、總じて養
ふ所」は食ふ所の數より遂に多く、若し各
國に於ける家畜の數を計れば實に甚だ多きこ
とならん。食料たるに適せず、利へ入畜に害
を與ふる猛獸とて、大に減少すれば、再び
之れが保存を計り、少くも動物園に其の種を絶
たざらんことを望み、狹隘なる欄檻に獸類の兒
子を成育せしむるの難きを諒ふ。知識の進歩し
て博物の標本を要するの多きに隨ひ、かゝる獸
類を保存せざる能はざることと爲るべし。要す
るに動物の減少するは或る種に屬する物に止ま
り、全體として愈々益々増殖すべし。今日生存
せる高等動物は、元單純なる動物より發達し來
り、而して其の種類の多きを致せるは、動物性
のものを増加せんとし、或る種の不適當なれば
他種を以て代へんとする者にして、いはば雙萬
の候補者を備ふると同じ、苟も大勢の退化と
爲らざる限り、如何に淘汰の急なるとも、隨じ
て前より減少することあらざらん。

第十章 動物の段階(上)

第九節 自然淘汰に殘存せるは甚だ多し、
動物の段階が分化及び合化の程度にて定まら
ば、其の優等なるもの獨り殘存し得るに非ず、
劣等なるものも齊しく存在し、最も劣等なる單
細胞動物さへ尙ほ優等な盛んなりと謂ふべし、動
物は總體に段階を追うて進まず、進むものあり、
進まざるものあり、優者劣者相混淆して存立す
るの常にして、其の間多少絶滅せるあるも絶滅
せるとして強ち劣等なりと誤らず、孰れの段階に
も幾分の絶滅せるあり、中には進みて却て絶滅
に墮れりと疑はるゝあり。若し一種も絶滅せず
盡く存在し居らんには、進化の順序を見るに
便利にして、分類法も現在と異なるべきも、今
日のところ何種のものも幾何絶滅せしや、明か
ならず、或は意外に多かりしやも測り難く、
或は意外に少かりしやも亦測られず。但だ現
存する所に就て審みれば、人類に接近せるほ
ど愈々進化し來れるの争ふべからざるが、此に
關し聊か注意を要すべき無からず。
分化及び合化の進みたるは、活動も隨て顯
著なる筈なれど、體軀の大小に應じて少からざ

る差違あり。如何に組織の複雑なればとて、體
軀の甚だ小なるは甚だ大なるに比して力の及
ばざること遠し、單に單純複雑を以て推すべ
からず、又同時に體軀の大小を考慮の中に入る
を要す。葉の如き、蜂の如き、各々社會を作り
て分業的に勞作し、膏に菓を造るに巧みなもの
みならず、食餌の缺乏せる冬季の用に備ふるが
爲め最め之を蓄積し、且つ外敵を禦ぐに於て
到らざる無く、能く自他軍族の差別を認らず、
己れの軍族に屬する者をば數ヶ月後に遠距離に
於て判識し扶助する所、頗る智力の發達せる
を認めざる能はず。(葉の社會)。然るに爾く智力の
發達せるに拘りず、勝手たる昆虫として劣等視
せらるゝは、體軀の餘りに小なるに出でずや。
他の優等視せらるゝは、實に構造の複雑なるに
由れるなきに非ざれど、多くは複雑なる構造を
活用するよりも、體軀の幾百倍し幾千倍し幾
萬倍幾萬々倍するを待むの體あり。昆蟲類には
體軀に割合して智力の驚かざるほど進めるあり
とも、體軀にて彼の如く小なる間、到底脊椎類
に對抗すべくもあらず、僅に巢を良くして自ら
衛るに止まる。優等と稱せらるゝ動物にも、行
動の鋭鈍より言へば、劣等として可なるあ
るも、尙ほ優等たるを失はざるは體軀の頗る

大なるか、若くは頗る大なると同類なりと見らるゝに因る、苟も體驅にして大なれば、たとひ比例して力量の強からずとも、幾許か強かるべく、既に大にして且つ強からんか、遅々として蠢動するも、小動物は其の足下に蹂躪せられて死せざる能はず。

第四十節 優劣は分化及び合化の程度に存するも、體驅の大小を忘るべからざること以て知るべしとするが、分化及び合化の表現する際、何れの部分が最も注目すべきかと尋ねるに、言ふ迄もなく脳髓なり。脳髓の増大するにつれ各機官の益々整備するの自然にして、體驅の如何に大なるも、腦の小なるは活動も不十分なり。

體驅の大なるは何等かの利益あれど、同じく大なるものの中、腦の大なるは最も優れりと爲すべし。體驅の小なるとも、唯腦の大なるの故を以て、他の大なるに優れるの少からず。其の比例の何様なるやの明白ならざるも、概括すれば體驅の小なるに反比例して脳髓の大なるは、以て能く缺くる所を償ひて餘りあり。現今の動物にては、寧ろ體驅の最も大なるもの、重量に於て人類の約一千倍に當り、力を以て能く此と争ひ得るなし。小舟にて之を追ふものは一たび其の觸るゝ所と爲りて没没し舟と人と共に消滅することあるが、其の遂に人類の支配を免れざるは、腦の比較的甚だ小なればなり。腦量は人類の五倍に當り、大は則ち大なるも、巨大なる體驅と比して殆んど言ふを値せず。陸上動物の中、象の體驅最も大にして重量人類の約五十倍に當り、力も相應に強きが、其の腦量は人類に四倍するのみにて、體驅に釣合はざる所あり。而も餘に較ぶれば、腦の體に比例して頗る重きを見るべく、其の智力を以て優れるも故なきに非ず。此の二つを除けば、凡ての動物は腦量に於て人類に劣り、馬の如き、牛の如き、體量は人類に數倍しつゝ、腦は之より輕し。狸々や、ゴリラや、體稍と人類より重く、而して腦量は三分一に足らず。

動物の大なるは總じて體驅の比例に於て人類に若かざるが、其の小なるは同く人類に近く、鼠に於て略ぼ相同じく、時として勝れるを見らる。鼠の智力の逞しきも偶然にあらざるべし。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、或るものは人類の選擇せる屋内に棲息し、人類の藏蓄せる物資を食ひ、人類と競争して已まず。人類に於て種々なる器械を裝置し之を捕へんとするも、巧みに脱し、動もすれば兎の香餌のみを食ひて遁逃し、甚しきは何に附着せる毒料を水に洗ひ

て食ひ去り、遊境に處して能く繁殖するは、實に體驅の比例の人類に近似せるが爲めならん。則ち體驅の比例の人類に近似せるにせよ、尙ほ以て人類と同一視せんは思ひも寄らざる事にしめて實際遙かに下位に落つるは、體驅の比例の同じくとも、其の體驅極めに小にして、此に準せる腦の推して知るべく、到底目醒ましき活動に堪へざればなり。體驅の小なること鼠の如きは、腦との比例の唯僅かに人類と同じといふのみにて不可、實めて腦量の今日に十倍し居らば、禍を避くるに困難ならざるべし、體の小なるほど割合に大なる腦を要するなり。若し人類より大なる動物ありて體驅の比例の人類と同等ならば、其の働きは人類より秀で、優に之を制すべし。象の體驅をしゝ人類と同一比例ならしむれば、其の働きの大なること驚歎するに勝へたらん。象の體驅をして人類と同一比例ならしむれば、象よりも幾層超出し、當代人類の夢想だも爲し得ざる智力を揮ふべし。されど地球の面積より察すれば、寧ろ體驅餘りに大に過ぐ、彼が如く大にして、而も人類の比例に於て腦を活動せしむるの餘地ありとも覺えず。其の餘地なきよりして現に小なる腦を有し行動の遲鈍なるを免れず。

第四百一節

分化及び結合の進みて體軀も漸次大なるを致し、とせば、人類を以て最も適度なりと爲さざる能はざらん。而しての如く、地球に在りては、體軀の大きき人類の如く、體軀の比例人類の如きに足り、今後はれ以上に

出づるも、決して多きを傳ざらん。かくて人類は動物中最も進化せる者たるに相違なきも、各部分悉く然るを必ずべからず、各部分に就て觀れば、劣等なる附屬に屬して人類より優れるあり、獸鳥の中に視官聽官嗅官の人類に優りて鋭敏なるの認めらる。地上を走るに足跡に若くはなく、空中を飛ぶには翼に若くはなし。驚の高く飛翔し、人目の得て視るべからざる處に在りて、而も地上に餌食の横はるを看取し、機宜しきを察りて下降し來ること、尋常の官能の能くする所ならず。人類は頭腦大にして此に伴ふの構造を要せるが爲め、他の部分を犧牲に供せるの少からず、走ること能はず、飛ぶこと能はずして、種々に工夫し、延いて脚の發達を促せるもあるべく、脚の發達に伴ひて雜多の器械を製し、地を走るの獸、空を飛ぶの鳥の如くならずして善支なきが故に斯かる機官の進まざりし所もあらんが、身體の構造に於て必ずしも多く他に優らざるを許さざるべからず。

動物に必要な部分は、其の必要の度に應じて各發達する所あり。獸類の疾驅を要するものは、之に適せる脚蹄を有し、樹梢に上るを要する者は、之に適せる四肢を有し、中には能く尾を曳ひて足らざるを補ふもあり。鳥類中にも、翼を以て自在に翔翔するあれば、又以て敵を搏撃するあり、善必要に應じて特に具ふる所あり。蛇も龜も、それ、機官の整へるあり、他の安りに獲致し得ざる所に屬す。魚類に於ても然り、昆蟲類に於ても然り、降りて海綿に觀、單細胞動物に觀るも、悉く然らざる。英く、孰れも己れの生存するに適當なる機官を備へ、他をして其の境遇に在らしめば遂に生存し得ざるが如き状態に在りて能く生存するに堪ふ。人類は有らゆる點にて他に優れるに非ず、種々の長所を合せて平均するに於て優れるを見るのみ。言ひ換ふれば人類の腦髓は比較的最も大にして其の體軀は不十分ながら之を働かすに適當し、或る點の他より劣れるに拘らず、嚴寒酷暑何れの地に往くも能く順應して生活し、他の動物の一定の氣候に慣れ、其の圏外に出でて生命を保つ能はざると同じからず。實に人類は略ぼ緯度の制限に打勝ち、地形の制限に打勝ち、世界の廣きに散布し、愈々益々増殖して

て已まざるなり。されど此の一事だけにては、人類の優等なるを證據立てず、劣等なるものにして能く異なる氣候に堪へて各處に散布する無きにあらず、人類の優等にして、今日まで地球上の進化し得る限りを盡せりと爲すは、平均點數より言へるものにて、取り除けなしに優れりとするは誤れり、或る部分の發達を完くするに幾許か他の部分の發達を缺くのみを得ざるべし。

第十一章 動物の段階(下)

第四百二節

動物は單なる細胞に過ぎざる者多し、幾許か積み累れるも少からず、大に積み累れるも亦少からず、而も孰れが最も生存して繁殖するに適するやば容易に言ふを得ず、單細胞動物及び比較的單純なる複細胞は、各自一個として甚だ微弱なれど、數の多くして且つ繁殖し易きが爲めに、往々著大の成績を現はすことあり、石灰岩の如き、珊瑚礁の如き、皆小の能く大を成せるを事實の上に示しつゝあり。則ち働作の結果に於て單純なるの必ずしも複雑なるに譲らず、却て凌駕すること無きにあらずるも、優劣にして分化及び結合の程度に存せ

ば細胞の個々相分離するの極めて劣等にして、其の積み果りて分業的構造を爲すの多きだけ益々優等なりと謂はざるべからず。

單細胞動物は數の無量なるのみにて、分中へ活動するも、唯數の無量なるのみにて、分及び合化の認むべきなく、其の認むべきは複細胞動物に於てなり。複細胞に在りても、未だ發達せざるは僅かに細胞の寄り集まり、分業の有るか無きかなるが、漸くして營養生殖等の機官を分ち、後更に進むに及び、常に分業の嚴密を要すのみならず、團體として體內に分業する外、同形個體の多く集まりて大規模的分業を事とするに至る、即ち謂ゆる社會を形成するに至る。社會は細胞の積み果れる體の更に積み果れるも、蟻、蜂、蜂の如き、實に明白なる事柄に屬す。蟻蜂の類は個々身體の構造の複雑なるに如へ、其の形成せる社會も亦複雑にして、分化及び合化の著しき者あり、以て進化の高地位を占むるとすべきに似たり、尤細胞の積み果れるの多からず、分及び合化の逆めるとも、依りて力の強からんことを期する能はず、其の層強からんことを期するに、細胞の層多く積み果ることを期するの當然なるべし、動物の増大は體の小さなを種々所

るも、其の増大に應じ相當の營養機官を要するが故に、勢ひ小體のまゝなるを得ず。

蟻や、蜂や、巧みに巢を造り、孜孜として掘るも、蟻は則ち蟻、蜂は則ち蜂、以て大に力ありとするを得ず、他の昆蟲の蠢々として蠢動すること推して知るべし。春柝類は概ね昆蟲より大、中に萬倍し倍倍するもありて頗る力を伸ばし得べき筈、又現に伸ばすもあれど、體の大なるに比例して活動すと爲すべからず、此側よりせば昆蟲の優れるの少からざるを見る。昆蟲をして比例的に力を増し、春柝類の種々大なる物と同じからしめんか、眞に驚くべき力を揮ふことならん。例せば蚤が馬と同じき大さならば、一飛びに日本海を越え、又はロツキー山を越へべし。此に較ぶれば春柝類は總じて活動の鈍き方にして、其の最も活潑なる者も何ほ言ふに足らず、蓋し營養を結合するに大さの平方にて増加するに心を引き下ぐる重力は立方にて増し、營養の大なるほど活動の鈍るべき順序にして、體の小さなより強くと、比例して強きを得ざるべきなり。地球の面積現在に幾倍し、地形も隨て複雑ならんに、或は體の大なること葉の如く、而して體量五十分の一の體量を具へ、人に智力を顯はすあらん

も測られざれど、我が地球にては漸かる者の現出するを許さず、一食に百千魚を吞むが如きものは、多く集合して相助け若くは相争ふに由なく、さらぬだに妨礙を爲れるの多きに、何ほ體量を増進するの機會を得ざるを以て、甚しく遅鈍たるを免れざる委となれり。此より小なるは漸くまでならざるも、體量に比例して昆蟲の鋭敏なるに企て及ぶの困難ならん。されど昆蟲の鋭敏なるとて、割合に鈍敏なりといふに止まり、大なるに打撃つ。

第百十三節 社會に關して、春柝類の多くは群集するの密ならず、密なるも分業するの少、魚類は十里二十里に互りて一海上を泳ぶことあるも、唯徒らに群集するのみ、鳥類に至りて分業の認めらるれど、極めて少數の間に於てし、若くは極めて漸弱なる關係に於てし、蜂、蟻及び蜂の社會と同日に群集し、社會を形成する事の即ち動物進化を決定する主なる標準ならば、此等春柝類は社會に劣ると爲さざるを得ず。然るも此にして力の優れるのみならず、社會として特に劣らずとせらるゝは、或る意味の含まるゝが爲めならずや。即ち地に社會的狀態の甚し、劣れるは、現實社會の見るべき無き進にて、優秀なる社會を形成する

の中途に在り、いはば發達すべき者の未だ發達せず、恰も小兒の有様なりといふが如くに解せらるゝが爲めならずや。無脊椎類は社會を形成するに至るとも、蟻若くは蜂の爲す所を頂上とす。確かに社會として稱すべきも、要するに彼の如きのみ。若し新たに發達の途を啓くあらば、蟻蜂と身體の構造を異にする者の手に成らざるべからず。脊椎類の將に出でんとする、社會形成の點に於て蟻蜂に劣れるの遠きも、苟も新たに發達するには、此遠よりせざる能はず。

脊椎類にも雑多の種屬あり、或は水中に棲み、或は陸上に居り、孰れにても競争の熾にして、體大に力強きの鼓暈し、體小に力弱きの生活を妨げらるゝの常なるが、而も強者とても弱者を食ひて生命を保つ以上、弱者に依頼すること厚く、若し弱者の絶滅せば、己れも次いで絶滅せざるを得ず。而も弱者に限り、之を淘汰して食を求むるには、久しく一處に留まらず、餌を分ちて遷るの餘儀なかるべし。爲めに強者も弱者も均しく大なる社會を作ることを嫌はず。かく強者弱者の並び生存して或は自ら御り或は他を襲撃する間、特別に智力を練れるは人類なり。是れとて初め多く

他の脊椎類と異ならず、小群を成して穴居し、若くは樹上に棲みしが、幾萬年を経過して口數も増加し、集團も大に加へて社會と爲り、各社會間の通路が縱横に地球上に設けらるゝ今日の狀態に進めり。

第百十目節 人類も蟻蜂に比して體軀の割に進歩せりと爲すべからざれど、世界各處に散在せる社會を觀れば、大に優れる所あるを争ふべからず。蟻蜂類は僅かに地中に巢を造り、又は樹上に巢を出して中に社會を成すに止まるとも、人類の社會は此と比較を超越する迄に發達せるなり。該社會の益々分化合化するに伴ひ、益々自然力を活用し、水なき地に灌溉し、曠時の沙漠に青草を茂らすなど、從來動物の棲息し得ざりし處に種々の動物をして棲息し且つ繁殖せしめ、更に擴がりて米に鎖き、南米氷洋に及び、遠からず何處にも人類若くは或る動物の影を認めざるなきに至らんとす。生物中人類の爲めに絶滅せるあれど、生物の爲めに大に繁殖せるもあり、生物をして地上に普及しむるには、人類最も與りて力あらん。十萬年前の昔に溯れば、人類ありとて他の高等動物に優らず、社會を形成するに於て蟻若くは蜂に劣りたらんと想像せらるゝも、既に今日となり

ては他に能く比すべき無し。蟻及び蜂の社會は是に於て殆んど全く言ふの價値なし。分化及び合化は力を蓄へて之を有效に費すの途なるとか、蟻及び蜂の如き小なる體軀にては、如何に進歩するも著しきを得ず、人類の大きにして漸く人類の如き社會を形成すべきのみ。多くの脊椎類も漸くに蟻蜂に優らざるのみならず、社會を形成し得ざるに於て之に劣るの明かなるも、而も畢竟するに昔人類が社會を形成するの準備たりしと見做すべし。人類にして社會を形成するに至らずして、疾く既に絶滅したらんか、脊椎類を日し分化及び合化の程度に於て無脊椎類に劣れりとするの避く可らざるも、人類の進みて社會を形成するに至りし後、人類に接近せる脊椎類を擧げて無脊椎類に優るとし、脊椎類中人類に近きほど優等なりとすること、事の當に然るべき所なり。複細胞動物は一たび昆蟲類に於て進化を極めんとせしも、更に發展して脊椎類の現出し、茲に莫大なる進歩を見る。則ち脊椎類の無脊椎類に優れるは、人類の社會を形成するに及びて判明し來りたる次第にして、此の意味を体にし、脊椎類個々に就て觀れば、必ずしも無脊椎類に優れるを斷言すべからず、個體として優れるとも、社

會を形成し得ざるの點を以て劣れりとすべし。人類の社會とて、蟻及び蜂の社會に比し其の大小の割合に優秀の域に達し居るやは疑はし。

脊椎類の事は種々に研究され、體量、腦重の比例も多少判明したれど、無脊椎は猶ほ頗る茫然に流れ、蟻蜂に就てさへ知られざるの多し。されど蜂蟻に於て特に缺點とすべきの體量の小なることにして、彼の如き小體にては彼の如き意志を以て發達の極度とすべきの掩ふべくも無し。假りに體量を長大せしめ得るとするも、外皮の堅硬なる彼の如くにては屈伸の自在を得ざること、鱗よりも甚しかるべし。體量の長大を必要とする限り、何等か脊椎類の如くならざるを得ざらん。脊椎類にても成るべく體量に器械を固着せしめ、他の物を借りて器械とする人類を以て最も優れりと爲す。地球に於て大體小體の孰れを可とするやの言ひ難けれど、甚しく小なると甚しく大なると共に不可にして、體量、腦量の比例の秀でし人類は其の最も宜しきを得たるべし。此より推して脊椎類の全體に及ぶべきも、單に分化及び合化の程度を察し爾餘の事情を度外視すれば、時として無脊椎類に重きを置かざる可らざることあり。

第十二章 人類

第一百十五節 人類が如何に他の高等動物と形質を異にし、又如何に之を同じくするやは、曾て類りに好奇心を以て尋ねられたる所、今は彼此密接の關係あるの信せられ、唯益々此を精細にするに務めつゝあるのみ。由來人類を以て一種特別とするの習慣あり、偶々他と同列に觀るべき場合に臨むや、頗る異様の感念に打たれ、能ふ限り反對の理由を擧ぐるに傾き、而も尙ほ類似せるの明かなれば、更に異點を求めて是れ全く關係なき所なりといひ、後其の固執するに足らざるの明かならんか、更に又或る異點を求め、是れこそ全く關係なき所なりといひ、順次異點を求めて而も順次類似せるの證明せられたる結果、異點問題は、盡く程度問題に變じ、關係の判明せずとも豫め程度の差として研究に從事せば早晩其の然ることの確かめらるべしと定まり、今より願れば前に無關係と爲さんとしたるの何の意よりせるやの冷しく思はれん。但だ兩者の關係未だ詳かならず、若し今日一々事實的の證明を得んと欲せば猶ほ確定せざるの少からざるを許し置くべし。

人類は猿類に屬すといふの動かし難きが如くなれど、謂ふ所の猿類は何様の範圍にして、中に幾許の種類あるかの判然たらず、現在せる猿類を以て人類の親類とせば、其の甚だ遠き親類たるを認めざるべからず。人類に進化し來りしまでに雜多の種屬の其の間在存せし疑はれざるが、最近種屬は最早や今日に於て見るを得ず、地中より發掘せる遺骨中にも亦見出されず。西半球の猿類の齒數、鼻形等に於て東半球の猿類よりも人類と違へるの多く、人類も初め東半球に現はれ出でしこと略ぼ確かむを得たれど、而も同じき東半球に在りても、猿類人類を十分に接觸する者の發見せられたる無し。〔馬類を見せられし如き有力な種は〕されど今後此の種屬の發見せられたりとして、其の効果は人類進化の順序を精密にするに止まり、是れよりして猿類に於ける人類の位置を變ずることあらざらん。生存競争に方りて、關係の遠く競争の緩なるの相共に存在し、關係の近く競争の急なるの孰れか一方の消滅するは數の速くべからざる所に於て、間々殘存せるあれば、幸にして然れりとすべし。人類は特質の計ふべきにせよ、指して特別のものとするよりは猿類より斯かる者の變化し來れるを感歎するの適當なり。

第百十六節

猿猴中にも猩々の如きゴリラの如き人的の稱あれど、人類と較べて殆んど全く言ふに足らず、或る時代に於て人類が特別に現出せし者若くは特別に創造されし者と信ぜられたるの偶然ならざるを見る。而も是れ近きに精しくして、能かの差違をも大なりと爲せるも、遠きに對し斯かる差違の存するも猶ほ存せざるかに看過したるの稀れならず。世に人心の異なること面の如しといひ、人々個々の面を以て相異なれりとするが、これ居常接近して熟知する所あるが故にして、牛馬の類に對して此の如く思はず、牛馬とて面の同じきに非ず、之を牧する者は一々面を識別して認ること無し、若し人類相互に疎遠なること牛馬に於けるが如くんば、人の面も亦尙く相異ならずとすべし。人類と他の猿類と、一見して既に大差あるが如く、後者は渾身長毛に掩はれて獸類らしく見ゆるも、前者にも毛なきにあらず、唯長短及び多少の差に過ぎず、兩者の筋骨にも種々の差違あれど、是れとて多しとするを得ず。中に就て最も重きを置くべきは、其の直立せると否とに在り、固より根本よりして相違へるに非ざるも、特に兩者を差別すれば先づ此邊に於てすべし。直立するると否との何に由來せるやは猶ほ十分

に説明せられず、或は人類の腦髓大にして重く、頭を前方に垂るれば歩行も呼吸も困難にして、已むなく起立して重きを體の上部に支ふるに至りしなりと言ひ、或は頭を前方に垂れて俯すればとて、此に應じて頸部の筋肉の強きを得、又此に應じて前部の形を變ずれば歩行にも呼吸にも難きを感ずる無しとし、人類の直立するは斯かる必要よりせしに非ず、實は手を以て器械を使用するが爲めに雙脚にて立たざる可らざるに至りしなりと言ふが、此等の事は與に俱に行はれたりと見做して姑げなし。即ち頭部重くして體の上部に据ふる力を費すこと少く、加ふるに手を以て器械を使用するよりして、遂に直立するに及べりとすべし。頭の主たるにせよ、手の主たるにせよ、兎にかく直立して手足を分れ得たるは身體の構造に種々の影響を及ぼし、他に類なきかの觀あらしめたり。〔輪を打て、其の骨を便用する、猿の手にては、人能く使はる。〕手足の分業は獨り人類ならず、他にも之れあり、昆蟲にさへ之れあれど、其の最も著しきは人類にして、延いて多様の差別を生ぜり。されど單に身體を觀れば、彼此の間甚しく異ならず、手足の分業よりして骨筋筋肉皆其れん、相應する所あるも、其の他と異なるは究竟程

度の差にして、人と猿猴とを比較するに、一々對照すべきあり、馬の如きと較ぶるも猶ほ相似たるの明かなるあり。差違の顯著なるは直立するると否とよりせる身體の構造のみに存せず、實に此と伴ひて起りし現象全體に存すとす。元人の直立せしは頭の重きにも因り、手を使用せしにも因れど、頭の重きを振へ、且つ手を使用するに至りしは、即ち爾せざるべからざる境遇に立ちしが故にして、頭と手とにて大なる事業を成し得たりといふよりも、寧ろ事業を成すべく儉儉なくされて頭と手の發達を致せりといふべし。而して其の境遇にも自ら造り出し自ら觀りて以て刺撃を被れるの少からず、此の間關係の頗る複雑にして、總括して群動物に超越するを覺ゆ。

第百十七節

人類の身體は進化の現はれし一部分のみ、是れのみにては差違甚だ少く、以て多しと爲すは謬想に過ぎざるも、此と伴ひて生じ來りし變化は既に大なるものあり。體の量を增し手の巧みを加へし反面に於て、身體の他の部分を犠牲に供せし所あり。牙や爪や攻守の武器は殆んど皆銳利を失ひ、狗と闘ふに容易ならず。氣候の防備も次第に薄らぎ、冬季に毛の厚きを加へ寒氣に堪ふること獸類の如

きを待ず、赤裸露膚にて雪中を歩すれば立ちどころに凍死するを免れず。則ち人類は斯くして失へる所あれど、而も手を用ひて武器防禦具等を造り、他の自然に備はれるより遙に優れるを致し、如何なる猛獸鷲鳥をも制し、如何なる寒暑暑をも凌ぐに足る。劍槍弓矢、衣服家屋の類、其の初めて造られて以来、種々なる變化を累ね、年代と共に益々精良巧緻を加へ、大小銃砲を放ち、汽車汽船を走らし、數十階の鐵骨石造に昇降するに至り、戰艦の叢中に俯伏すると瘡痕も嘗ならず、而も人類の此の有様なるは、皆も只類の殻中に居み、蜘蛛の網中に集ふと同じく、身體に附隨せる器械を使用せるなり。鐵網のみを比較して異同を云々するは宜しきを失へり。

人類は體軀のみにて他の高等動物と僅々の差に過ぎず、附屬せる多くの器械を加ふるに於て初めて其の著大なるを見るべきが、是れとて唯徒らに其の大きさに驚くべきに非ず。人類が種々の器械を備ふるは他と大に異なる所なるも、而も是れ何等奇とすべきなし、體軀の差は少く、器械の差は多けれど、其の大なる器械は僅か計りの體軀の差より生ぜしもの積み累りたる結果に外ならず、珊瑚蟲の幾世代を經過して

鳥獸を形作りしと同じく漸を遂ひて成れるなり。初め石を割り若くは磨礪し、執りて以て礮を打ち、或は樹木を伐る。而して其の作りし器械は、其の人近くも尙ほ身後に遺存し、身後に遺存せるの多ければ後繼者に於て之を作るを要せず、別に他の必須物を造るに力を致し、或は木を編み土を造りて家を造るべく、其の更に多きに及ぶや、其の後繼者は新に之を造るの勞力を省いて體の或る必須物を作りんとす。銅を鑄見し、鐵を鑄見し、用ひて以て石器に代へ、鐵を造り、車を造り、或は堤防を築きて水の氾濫するを停め、此等にして略ぼ成れば、又他にに移り、他より更に又他にに移り、時の必要に應じて絶えず何物かを造りて已ます。前に造りし物の幾分は消滅するも、他の幾分は残存し、残存せる上に更に残存し、年々減するよりも加はるの多きを普通の状態とす。人の身體は或る期間を経て消滅するも、器械は身體よりも残存し、其の幾十年間に積み累れる所は自らにして莫大の分量に達す、是れ身外に器械ある人類と之なき動物との間に大差ありと見ゆる所以なり。

第百十八節 人類が多くの器械を備ふるは、全く動物と異なるらしきも、要するに瑣細なる

物の積み累りて此に至りしにして、元身體の構造に少しの差ありしより胚胎し、特に腦量の増大に關聯せる手足の分業に基づけり。即ち手足の分業よりして僅少なる殘存物の積み累りて身邊に多くの器械を備へ、其の器械の裡に生活するに及びぬ。身體に附帶せるものは身體と共に消滅すれど、其の造りし器械は然らず、微蠶が石灰質を分泌せるの積累層疊して岩石を形成せると同様、木質石質金質等腐敗の遅きものも多く殘存して積み累りざらんこと、微蠶も得ざるなり。同じく猿類に在るも、他の種屬と少しの差違あり、其の差違よりして比較的久續性の器械を作り、歲月を積み時代を經るに隨ひて益々多きを加へ、以て今に至れり。本来腦量の差違を以て甚だ多しとするの謬想たるも、常に僅少の差違に止まるとするも亦謬想に屬す。體軀の差違の少くとも、此に關聯して生ぜし差違の大なるを認むべし、されど是れ尙ほ人類を個體として觀ての事、其の個體として發達せるの争ふべからざれど、而も人類の事は然に較れるにあらず、人類の方を見るべきは其の社會を結成せる所に在り、其の個體として發達し來れるも、實は社會として進歩するに適應しに關り、多くの器械を製造して年々積重し、當代の

盛況を呈せるも、亦其の社會を作りしに因る。他の高等動物には未だ社會といふべき程のものを作れるなきが故に、人類を以て此と較ぶる際、勢ひ個體としての人類を探るの常なるも、他は人類たるの域に達せず、人類に至り初めて從來未だ形成されざれし社會を形成せるなり。即ち無脊椎類の一部なる蟻蜂が小なる社會を作りし以來、久しく社會らしき社會の作られず、而して脊椎類の一部なる人類が茲に大なる社會を作れるものとす。

第十三章 人類の社會(上)

第四百九節 社會を以て人類の社會の如きに限れば、人類の外に社會と名づくべき無く、僅かに蟻蜂に於て之に幾きを見るべきが、最低度のものより推し來れば、物として社會形成の素因を含まざるなしと謂ふべし。凡そ物は多少群を成して存在するの常にして、空氣の輕くして上に集まり、水の重くして下に集まり、岩石の更に重くして一層下に集まること、幾多個體の相集まると均しからざるも、同類の相集まれるに相違なし。各地層の順次成重するも、石炭方解石を初めとし、鎖脈を形作れるも、亦

然り。如何なる鎖物といへども全く孤立するは極めて稀にして、偶々之れあれば、別に然るべき理由の存するあり、決して故なく離れたるに非ず。此の如きは相集まりとして、重力壓力等の結果にして、有機的組織と異なりといふも、要するに程度差のみ、根元を別にせりとすべからず。單細胞は到る處に存し、硝んど塵埃と擇ぶなけれども、而も或る處に少く、或る處に多し、相互の間に特殊の關係なきも、相集まりて一團を成すあるの疑はれず。叢は草の相集まれるもの、林は木の相集まれるなり。海綿の如き、海月の如き、其の附着し若くは浮遊する、自ら相集まる所あり。蚯蚓の場所に依りて大に集合し、甚しきは土壤の質を一變するに至る。昆蟲は多く一處に定住せず、蝶や、蟬や、隨意に飛び廻り、又は隨意に樹梢に鳴くも、猶ほ集合して生活するを失はず、他の或るものに至りては集合の稍と組織立てるあり、蟻蜂の類を最も著しとす。脊椎類も此と同じく、孤獨にして終るは極めて少し、群集の状態にこそ組織立たざるあれ、大抵幾許か群集せざる無し。魚類は相集まりて泳ぎ、中には巢を作りて棲むもあり、多くの集が互に聯絡を通ずるが如きなけれど、連続して

群を成すの珍しからず。(鳥の如き)鳥類は家族團樂の見るべきあり、大群として謂ゆる鳥合の衆たるも、相共に一定の方向を指し、警戒を得て飛散し、警戒の解けて前狀に復し、能く速きに遷ることあり。雁の隊を整へて進出し、互に相助くるは、廣く世に知らる。狼は平素群居せざるも、冬季食を求むる際、多數共同して敵を襲ふ。馬は狼群に襲はるれば、弱き中に置きて圓陣を作り、後脚を揚げて薄り來る敵を蹴り、以て同族を安全にす。プल्लीリ・マルモツトは集群を以て丘を掩ひ、海狸は協力して土工を起し、堤防百五十間の長きにも及ぶ。猿は築造の術に長ぜざるも、群集の形狀を整へ、老若主長として衆を指揮し、秩序を維持し、聽かざるを罰すること頗る酷、因より群集と稱集と交通し、緩急に臨んで相救護するの足らざるも、時として一大集團を成し、森林の一隅を占據するに至る。此の類のことは未だ社會的組織を爲せりとすべからざるも、或る程度まで此に近寄れる者にして、其の整へるは蠻族と孰れか儼れるやの判じ難し。人類は社會的組織に於て最も秀で、人類なくば社會の效能も顯はれざれど、是れとて初めに方りて多く島に優らず、動もすれば蟻蜂に劣れる有様にして、爾後幾歳を経、

幾世を經、漸く百千萬の相集まりて分業し大社會を結成せるの今日に及べるなり。斯かる社會の幾十を以て計へられ、互に相勵み、相助けて、地上全體に關係を有する所、他に類なしとせんに、畢竟するに程度之差にして、其の最も低きは岩石草木、次いで動物を通じ、或は高く、或は低く、遂に人類に於て最も高きを致せるなり。

第二百十節

社會的組織に高低ありといふ

は、分化及び合化の程度にて進化を定むるが故にして、必ずしも以て種屬の存滅に影響すと斷定すべからず。社會的組織の極めて低く、個々單獨に存在するが如きものの能く生存し能く繁殖するに反し、程度の高くして却て久しきに存續せざる無からず。單細胞の蔓術するは言はずもがな、昆蟲の中、獨り蟻蜂の永續するにあらず、蠅の如く、各々意のままに飛び、相互の間に何の關係なきも、容易に絶滅せず、往々驚くべき速度に於て増殖す。蟻蜂は社會的組織を成して生活に便利を得れど、昆蟲は斯かる組織なくば生活し得ずと限らず、同じく蜂にして絶えて群を成さざるあるは、群を成さずして生存し得るやう身體の構造せられたるなり。群居せざるゴリラは群居する他の猿猴より何程の不

便なるべし。社會的組織を成すべしとの生活狀態に大差を生ぜるは、人類社會の發達し、他の動物に少からざる影響を及ぼし、後事のなり。有史以來、人類に従ふものは存在し、従はざるは消滅に就かんとし、獅虎の強猛を以てして猶ほ驅逐せらるゝを免れず。動物の人類の意に逆ひて而も盛んに繁殖しつゝあるものあれど、此等も漸を以て支配せらるべき傾向なるとせず。人を累はし人に憎まらるゝ蚊の如き眞の如き、未だ絶滅せず、速かに絶滅すべくも有らぬも、下水改造家庭改築等にて減少せる處あれば、全く持て剩しものにあらず。蟻蜂の社會的組織を營ふるは、自ら生存するに情適せる機關を見ふる者にして、或る小蟲を使役する外、他の動物と競争し、之を征服し之を支配するに至らず、人類の社會的組織を營ふるは、自らゆる動物をして命を聽かしめずんば已まず。程度の異なるも、眼前に現はるゝ結果に大なる差違あり。

分化及び合化の程度よりせば、蟻蜂社會に類するべきあるも、其の故を以てざる組織なき動物に勝つとも見えざるが、人類は社會よりして得る所甚だ多し。若し十人二十人の小家族を成すに止まり、各小家族相互に助けざれば、他の動物と闘ひて之に打勝つゝ困難ならんも、多數の相集まりて大なる社會を結成せるや、到處として勝を制せざるなく、時として違かに打勝つ得ずとも、早晚之を能くし得るを必ずすべし。即ち分化及び合化の進めるとして、小規模なるは依りて利益を得るの少く、苟も大なる利益を擧げんとせば必ず大規模に於てせざるべからざるを察するに足る。蟻蜂の類は體驅の餘りに小にして力を伸ぶるの多きをを得ず、社會的組織の複雑なるにせよ、専ら種屬の繁殖を事とするに止まる。彼等の社會に女王あり、婿あり、勞役者あり、女王は産卵を職務とし、己れに代るべき者を産み、多くの雄を産み、又多くの雌を産む。其の卵質の如何にして分るゝやの明かならず、或は食物に由來すべしとの事なるが、兎にかく女王は種屬の繁殖に缺くべからざる所にして、自ら首長の位置に立ち、他の一切は皆之に服従す。勞役者は夜々囓勉して食物を運び、或は卵を運び、或は競争に從ふ。婿たる者は唯生殖の爲めに存するのみ、既に用務を了れば、繼ね勞役者の爲めに殺害せらる。職務の分擔實に善く整ひ、皆唯守るべきを守りて敢て或は怠らざるが、元是れ斯くせんば種屬の繁殖を得ざるが爲めにして、斯く

若し地球に
して現状のままに續き、大なる變化の現はれず
んば、人類社會の狀態は愈々益々進遷し、力
を活用するの漸くべきに至るべく、人類の印
せざる處、ヒマラヤ山嶺の如き、南北兩大洋
の如き、空中の如き、土中の如き、若くは太平
洋大西洋の底の如き、皆力の及ぶを見るべし。
社會的組織の效果は、斯くして初めて大に現
はれん。

第十四章 人類の社會(下)

第二百二十三節

社會は家族的より國家的に移
り、次いで國際的に移る。分割、判然たざる
も、其の傾向あるや開けし。動物の多くは幾許
か家族的たるを失はず、蟻蜂に別れてより、二
者相近づくことあり、或は其の兒を守り、或
は其の兒を守り、或は皆相共にするあり。
蟻蜂類は家族と國家とを兼ね、女王は家母たる
と同時に事實的國母にして、他の諸員は盡く
力を盡せて之を助け、後継家族後継國家を作る
に汲々たり、但だ國家を成して内帯に分業する
も、若干國家の間に關係の成り立てる無し。
時として烈しく戦ふことあるも、大抵各自の集

間に閉ぢ籠り、出でて食を求め、入りて之を分配
し、一國の安全に専らなるもの如し。其の
食を求むるの地域頗る廣く、一の國家と他の國
家と腐蝕を生ずるの多からず、隨ひて彼此交
渉して協同するにも至らざるならん。春推類の
社會を構成する、最も小なるは僅かに親子の
間に止まり、稍々大なるは幾個家族の混交して
數百員若くは數千員に達し、兩して人類に於
て家族の相集まりて國家と爲り、更に又國際的
と爲るを見る。

家族的關係の何狀なるやは略ぼ明白なれど、
國家的の職か曖昧に失し、或は一の部落に名
づくべく、或は國際的なるに名づくべし。家族
の精練しつゝ、相點約して事を執るを封建とする
が、斯かるは國家にして尚も國際的關係を有す
るもの、其の漸く統合し又ま統合の者に於て同
列國家と契約するは、即ち今日の謂ゆる國際的
關係なり。今は國際的關係、業結の掛けし
みにて、十分の發達を遂ぐるに尚ほ多くの歲月
を要せんも、進歩の加速度なるより察すれば、
各國家の交際も處を逐ひて益々密なるべし。(一)
上に離れて經濟上に合へるの少からず、學問
藝術に至りては殆んど境界なし。されど人類

が盡く一の國なる國家の下に歸するは容易の
事ならず、之に先ちて交通機關の遙かに進み、
尙ほ人口も大に増殖して何れの地にも人影を
見ざるなきに至らざるべからず、到底千世二十
世の能くする所にあらず。唯戰爭しつゝ、歩一
歩統合に傾くこと疑ひなし。

人類の長處は社會を結成するに在り、蟻蜂
の家族的國家的に止まると違ひ、更に國際的た
らんとし、絶えず社會として發達し、底止する
所を知らず。孤立し若くは小群を成して生存し
得ざるに非ざるも、かくては幸うじて生存する
のみ、特に方を顧みずを得ず。力を驅はすは
主として社會的に活動するが爲めにして、相
助け相救ふに本來の性能なりと謂ふべし。如何
にして他の動物に對し着々勝を顯し來れるか
と問はざ、言ふ迄もなく此の相助け相救ふに出
でたり。然るに既に他の動物に勝る、之に代りて
大に繁殖し、山野に人に遇ふこと益々多し、
遇ふが如くなりては、動もすれば相援助するの
必要を忘れ、互に敵視して排擠を事とすること
あり、爲めに他の動物に行はるゝ生存競争の
依然として人類間に行はるゝの認めらる。生
存競争は實に此の間にも行はるゝに相違なき

同一の働きを爲し難し。故て子を複雑の地に置くも、艱難の状態を異にす、海人や故さらに艱難に投げ入るゝは普通の人情の許さざる所なるをや、況んや人類の遺傳は他の動物に如く明かならず、其の産まるゝ時、種々なる事情のたづさはありて、智者の子も不幸にして愚と爲り、愚者の子も幸にして智と爲るの例れならざるをや。才能を世々にして人類の類類に超えせんが如くならんこと、遂に得て能くすべからざらん

第二百二十四節

人類は既に廣く地上に分布し、生存競争の行はるゝこと他の動物に於けると同じく見えんも、墜る處に社會を形づく、競争も社會に於てし、淘汰も社會に於てし、相争ふと雖も、又必ず相助けざることはせず。各階級互に筆を張り、時に勝敗の著しきあるも、孰れか最後に勝を制するやは容易に言ふを得ず。備主より觀れば被備者は生命を之れ懸くものなれど、被備者より觀れば備主は己れの勢力に對し報酬を拂ふものに過ぎず。強者といひ弱者といふは、時代通用の名稱にして、或る時は甲を上とすべく、或る時は乙を上とすべし、判然として優劣の別れ、永遠に續くが如きことあらず。家族的に定まるとも國家的

に變じ、國家的に定まるとも國際的に變じ、國際的に定まらざる間、永遠の必せられず、而して其の定まるの何れの日なるを知るべからず。然らば人類の上に立つべき超人の終に出現せしかといふに、若し超人を以て常人以上の人とせば固より幾人もあべき筈、既往に於て常人に優りし人物の出でたるが如く、現在にも出で、將來にも出づべく、人口を増加するに伴ひて益々多しとせんが、唯其の別殊の階級を成し子々孫々に傳ふるは極めて思慮なし。何れの社會にも時代相應の階級あり、上級なるは優等とすべきに似たれど、久しきを過觀すれば、孰れも皆疑はし。一フリドリと二世は巨人稱を以て、事以此に應ニユートビアンセルの類」

人事は性質よりも裝備に由來するの多く、即ち惡事を忌むは社會的制裁に因り、知識の進むは社會的教育に因り、壽命の延ぶるは社會的衛生に因り、此等設備の整へる處に愚者も愚と見えざることあるが、特に其の間に優るべきの目醒ましき者は、未開社會の人に比して人に優りたる所あり、社會の設備の盡く敷敷し、家内も、家外も、子の産まるゝも、其の養育せらるゝも、一々規定通りに行はるれば、超人の遺傳も或は想像し得ざるに非ざれど、此の類の

事は僅かに想像に止まるゝ。國家として各地に割據しつゝある時代は、如何なる階級も固定せりと想像すべからず。幾千年後は勿論の事、百年二百年の間にも種々の變化を免れざらん。實に超人が高く人類の上に立ちて一階級を組成する情も人類の類類に於けるが如くなることは、國際的結合の成立してより遂かに後ならずんば、存無をさへ判知するに由なし。幾回か形づくられんとして幾回か崩壊し、遂に確立するに至らざるべし。されど一代限りの超人が時々處々に存在するは疑ふを要せず。愚人に優れる常人あり、常人に優れる超人ありとせば、何の異とすべからず。

第十五章 超人

第二百二十五節

人類が階級の上に一階級を占むるが如く、超人が人類の上に一階級を占むること極めて難し。同一の社會に在りて爾く其のしき懸隔を生ずるに至らざるべし。而も尋常に優れるを超人とせば、超人とすべきの少きにあらざ、かの俊傑と稱せらるゝは概ね然り。俊傑も大體に於て凡人と異ならず、體格にも、五官の働きのにも、特別の差違あるなく、解剖

して比較すれば、後傑の優傑たるを識別するに苦む。但だ時として小差の大差と見ゆるあり、力士大砲は身丈六尺四寸餘り、普通より高きこと僅かに一尺にして、極めて鋭く計りの大男と呼び嘯さる。能力に於ても、少しの差違よりして、一を後傑といひ、一を凡人といふ。百日後の大氣を必する能はず、百年後の事業を必する能にざるは、何人も免れず、下世に出の英傑と云ふも之を能くせず。若し平素人事に與ることなく、時ありて局外より社會を觀れば、多數の群りて奔走するを認むるのみにて、英傑が後傑たるかを判別し得ざらん。特に一局席に注目せるが、めに、後凡の差を立つることと爲れるものにて、同様に他の方面に注目すれば、到る處として差別なきはあらず、前に差別なしと爲し、何にも漸く差別の現はれ出づべし。超人ありとも何ぞ大に尋常と異ならんや。

されど人多ければ差違も隨て多からざるを得ず、通常六尺以上なるを大男とするも、時として七尺に餘れるあり、幾時代を通じて觀れば八尺なるあり、當今生存しつゝある露人マタノールは九尺に餘る。此と同じく能力の秀でたるは何れの時代にもあるが、間々大に秀でたりとすべきあり、最も傑出せるは、恰も常人の群類に於けるが如し。其の如何にして生まれしやは、之れが個體の事情を細悉せざんば判定すべからず。單に遺傳よりせしに非ざるに父も爾く傑出せず、子孫も爾く傑出せざりしに徴して推すべし、故く時のハズミにて最惠事情を綜合せる者とする外なし。(ハバークホイス) 而も斯かる繁物なりとて、其の能力に限りあり、未開の氣界に生まると、文明の國に生まると、活動の上にならざる處あり。本来能力の秀で、困難せる社會的設備を整へ居らば、其の傑きは昔人の夢想だもせざりし所に出づべく、ニエトンの思考、エチソンの工夫は、實に希臘羅馬人の想像以上なりとす。現在の眞仕と較べて已に斯の如くなれば、將來設備の益々盛び、各方面の研究に便利を與ふるの多大なるとき、今人の夢想だもせざる所もあるべし、今日未嘗有の發明とせる事も、其の時に及びて尠も言ふを備せずと見えん。前數千年を通じての進歩よりも、近き數百年の進歩の一層著しきものあり、此の如速度よりすれば今後數百年間に於ける進歩の更に幾層か著しかるべきを察するに足る、況んや數千年の後をや。少くとも數萬年間は尙ほ此の勢を以て續くべけれ

ば、社會、進歩の遂に驚くべき速に到達することならん。

されど數萬年後の進歩の如何に著大なりとも、此に與るは今の人類と實質に於て大差なきもの、頭腦の大さも何程の差なく、五官も何程の差なく、手を下して操する所も全く現代と性質を異にせず、幾多不變なる機械設備へらるゝにせよ、要するに光熱電氣等及び之に類似せる力を活用するに過ぎざらん。光より遙かに遙かなる波動を感じ、極速の星を知るに數百萬年を費せる所のものを以てせず、幾かの時間を以てするに至るや否や、兼め言ふこと能はず。進歩は地球の狀態に應ずべく、地球の限界以外に出でんことは遂に不可能事たるべし。過去の超人よりも現代の超人の優り、現代の超人よりも將來の超人の優るとするも、相互の間に漸進の劃せらるべきに非ず。身長九尺なるは、高きは則ち高く、宛如怪物の觀あるも、尙ほ未だ常人に似するを得ず、稱して超人中の超人といふも、亦恐らくは然らん。千年に一人、若くは萬年に一人、一見して人間以上の能力ありと認めらるゝあるべけれど、眞に人間以上と爲すに足るやは疑はし。將來の社會は今日と比較すべからざる程に進歩すべきも、

界せしるに地球上の人類の進歩に止まる。恐らくは金星に往來するに至らざるべし。

第二百六節 而も人類を以て單に地球に存在せしるものと限るべからず、地球の人類は、地球に於けるが如くなれど、他星のものも必ずしも地球に於けると同じありしらん。金星に於て知らるゝ所は極めて僅少、生物の有るや無きやの確たるゝも噴火星水星の二あるのみにて、餘は疑ひも感らず、察覺たる一億の恆星は噴火の果も五兆しき者とすも當然なるが、此等恆星に於ける進歩は幾層を以て計ふべく、中に必ず生物の存在し、植物の存化し、動物の存在するあらん。尤もや、梅道や、或る程度まで一級し、進化の順序も水素が、一貫すべきに因り、生物の用で、植物の用で、動物の用するも、皆何れかの點に於て一致する所あるしければ、同じく太陽系に屬する他星にも容積に於て地球に千三百倍するあれば、他の星系に屬するものの中、地球に幾千倍或は幾萬倍し、而して水陸既に覆つしられ、其の位置形狀の地球に同じに狀すべしとあるべし。植物も地球に見ざるが如きあるべく、動物も地球に見ざるが如きあらん。其の人類に相當せるは、地球の人

類より劣れるものあると共に、又優れるものあるべく、中には大に優れるあり、類型の繁華と此の如く甚だ大にして、感省も五官ならず、六官も皆若くは其れ以上に於けるもあるべし。地球にても人類の目に感ざる色を識別し、其の耳に感ざる音を識別すと感せらるゝ動物あり。他の進星には尙ほ更の事にして、土中の噴火にも光を感するあらん。知識の進びにつれて感省の鋭とすも、或は一種の機省を具へ、一瞬幾億千里を走らざるも極めて微かなる電氣を感じ、遠方の出来事一瞬時に知得する無しとせず。此の類の事は種々に想像せらるゝが、必ずこれありと断定し難きもの論なるも、幾億の進星に於て斯かるものなしと断せざるの一層大膽に違ふべく、其の存在せざるを言ふよりも、寧ろ其の存在を認むるを覺かなりとす。人類以上の人類、即ち眞の超人たる者は、或る進星に棲息する者にして、其の能力の如何に發達せるや地球を以て推し測り難し。

されど他の進星よりして地球に到來せる者未だ嘗て之れ有りざるは、以て進星より進星に通應する程に能力の進まざるを言ふべく、寧ろ何等かの方法を用ひて地球に通信せる者なきは以て其れ程にも進まざるを採すべし、若し能力

の著大ならんには、能く地球に於ける人類を知り、之に對して相當の意志を發すべきなるに、其の然らざるより察すれば、彼が進歩の程度も驚くに足らずとすべきに似たれど、かく考ふるは即ち我が人類の肉體功徳なる所以なり。地球より他の星に行はば眞に愉快とせられ、何等の旅行若くは火星旅行などの想像せられしこと一再ならず、我が以て愉快となす所に就して、他の亦然るべきを推察し、彼にして人に進歩し得らば必ず星界を遊歴するならんとするが、他の星に行くこと果して幾何の困難あるべきか、月又は火星に近く進まざるも、必ず行かざるべからずとせんか、言へば幾多の進星を知得にして可なるか、他の進星に於ては、或は他の或る進星と往來交通しつゝあらんも察されざれば、固く幾億の進星を遊歴するべしと断れ得て能くすべきに非ず。一地球に立ち寄らざるとして何の怖むべき無し。特に何等かの方法にて地球に通信し來るを言ふに至りては、自ら過大視するも餘りなりと認むべし。彼は何の必要ありて地球に通信せんとすべしか、地球に於ける人類の智力を測り、之に通應する通信方法を發出する程ならば、通信を

須たずして地球の事情を知悉せるに相違なし。通信問題は元來の戲事のみ、子供らしき好奇心を満たさんとするのみ、以て他星の人類を律するを得ず。幾億の遊星中、地球の人類に優ると遠き者あるべく、其の星に於ては或る距離までの間に運行する遊星に往來することあるべきも、坐がらにして諸星の事情を詳かにし、甲星乙星の何程の進歩にして、丙丁の未だ爾く進歩せざるを知り、地球の狀態をも逐一觀視し、豫めて茫茫の間を遍歴するを要せざるべし。智力の最高度に進めると、直ちに地球に到來すべきを想ふは昔時の人が仙人を想ひたりしと同じ、眞の超人たる者は斯かる無益の事を試みず、地球の人類の想像するよりも遙かに超越せる事に務めん。

第二百二十七節

地球に地球相應の超人あり、過去に現在に在る超人ありしが如く、將來亦之れ有り、常人の考へ及ばざる所を知るべきが、前に超人の獨り得たりし所も今日より觀れば尋常普通のことにして、何人も知らざる無きあると同じく、日下超人の獨り知り得る所も將來尋常普通の事と認められしべし。現に斷々として疑ふべからずと定れるものも、後に其の謬想たるの明かなる日あらん、況んや他星の

超人は地球現在の超人より幾層倍の進歩を遂げたるあるべければ、我が以て動かざる定説と信ずる所も、彼より觀て言ふに足らざるやも知るべからず、一定不變の理と斷定するは僭妄なるに庶し。而も研究は閉關なく進み、強ひて此に限りを附せんとするの宜しからざるにせよ、今日地球に在りて是認する所は爾すべき理由ある者にして、或る點に於て動くことなし、即ち何人といへども其の同様の身體を有し、其の同様の境遇に在れば、其の同様の判斷を下さざるを得ず。眞實と稱する所の常に動搖するも、其の或る部分は確定せりとして妨げなし。往昔太陽が地球を運るといひし、近代に至り地球が太陽を運るといふに改まり、人の考ふるの心臟作用なりといひし、腦髓作用なりといふに改まりしが如き事あれど、太陽の赫々たる光輝を望み、一年毎に同一關係に復するを認むること、今猶ほ昔の如し、心と腦ととも、共に均しく體内の機官たるが上に、相互に密接の關係あること曾て疑はれず、誤謬の正され、不足の補はるゝとも、全く廢棄せらるゝの多からず。さらば現在地球の人類は何狀なるか、知られたる限りに於て副生界が何邊まで變遷し來れるかといふに、須らく意識に重きを置くこと

とと爲れりとすべし。

第四篇 意識

第一章 意識の有無

第二百二十八節 人類が周圍の物象を觀て徐らに感ずるは意識の有無といふことなり。謂へらく、我が同胞に意識あり、高等動物にも意識あり、下等なるにも、幾分の意識あるらし、植物には死んど之れ無く、礦物に至りて全くこれ無し、地球の最大部分は礦物なれば、以て意識なしと爲すべく、幾千萬として評へらるゝ星の最大部分も亦礦物なれば、同じく意識なしと爲すべし、乃ち宇宙間に於て意識あるは獨り星辰に存在する生物中の動物、特に高等動物、特に人類にして、之を除けば盡く無意識なり、頑鈍不知にして死物と異ならずと。(蘭生界が人類を是として他種別するに準じ、人類の時は皆、而も他より觀望には人類は甚しき種類に進歩の殊、或る他の動物、濃はざらん、進歩は人類にして最も進歩の意識の強き能はざるべし)是れ人々の自然に想ひ到る所なれど、宇宙萬象が處まで意識ありて、處より意識なきかは判然たらざらば、若し植物に意識の有無の疑ふべく

んば、礦物にも疑ふべからずとせず。意識の有無は元明瞭不明瞭の程度を意味し、礦物は意識の最も不明瞭なる者と認めらるゝに過ぎざるべし。

人類の意識といふも、常に同一程度ならず、覺醒せる時は明瞭にして、睡眠せる時に不明瞭、同じく昏睡しながら、或る時は特に明瞭にして、或る時は然らざるが、總じて其の明瞭なるに方りては、能く自徳を辨別し、未去する多くの事柄を聯絡して諒らず、且つ明瞭ならざる場合に、之を明瞭にせんとせば則ち能くすべく、眞に能くし得ずとも、能くし得べきかに思ふの常なり。顧みて渾沌たりし世よりの變遷を察するに、渾沌たりしものの漸次分化及び化合を遂げ、人類の現はるゝに至りて茲に地球進化の極度に近づけるを見る。他の星辰は現に尙ほ渾沌たるの多けれど、此等も漸次分化及び化合を遂げて生物を生じ、人類に相當する者の出づるに及びて其の進化の極度に近づくとすべきに似たり。幾億の星は幾億々々年の久しき間無意識にて存在し、全く無意識ならざれば、甚しく不明瞭なる意識にて存在し、生物の發現し進歩するに伴ひて初めて少しく明瞭を加へ、人類及び是れ以上の生物に於て明瞭を極めんとし、意識より

言へば宇宙廣しと雖も唯人類及び是れ以上の生物を貴しとす。漠たる宇宙の分化化合を遂げて人類及び是れ以上の生物を産するは、恰も嫩芽の成長して枝を分ち葉を生じ、漸くして花を開き實を結ぶに至ると同じ。人類は宇宙の花にして又實なり、地球の人類及び幾萬遊星中に生存する人類相當のもの意識の明瞭を加ふるは即ち宇宙全體の意識の明瞭を加ふる者にして、人類の出でざる限り、宇宙は徒らに活動するのみ、原生界も副生界も雨ながら黒闇となりとすべし。斯く考へ來ること強ち不自然ならざるが、假りに之を是認して宇宙進化の究極を尋ねれば、姑く左の二様に解説せられん。

第二百二十節

一は地球に於ける超人の意識の明瞭を加ふるなり。超人は常人よりも或る時に於て幾層意識の明瞭にして、後者の注意せず、空想を馳せしむる所も、前者は能く注意して其の因由を知る。過去に在りても常人の一顧だもせざりし所に於て、超人の頻りに職業を絞り其の本質を討究したるの幾何なるを知らず。人として、實の落つるを視ざるなけれど、是れよりして何の考ふる所あらず、何の得る所あらず、獨りニユートンは一見して探査の緒を得たりき。今日にても専門家は何問有り觸れ

の事に就て少からざる興味を感じ、大なる社會を小なる身體に比すると共に、一滴の水の一世界を形づくりに輝ける星の大陽系を包括して餘りあることを知る。其の多くは超人を以て目すべきに非ざるも、或る點に於て常人の全く解せざる所を解すと謂ふべし。將來の超人は當代の専門家、全く理解し得ざる所を理解するあるべく、現に難問題として苦心慘澹しつゝあることも、其の時に至りて或は容易に解決せられん。従來の例にては超人とすべき者も、意識の如何ほど明瞭なるやの疑はしく益々不可解事の多からんとする恐れあり、以て意識の最も明瞭なる者とせば、明瞭の價値なきを數ぜざる能はず、其の明瞭の限度を以て宇宙の意識の最高度たるを思ふが如き、顧る滑稽に類すべし。但だ人類の進歩は現狀に止まらず、超人の意識の明瞭なること今人豫想の上に出づべし。唯々數十年にして別段の變化なくとも、數百年にして少からざる進歩あり、數千年數萬年後に驚くべきものあり、數千萬年後に明々皓々、物として知らざるなく、事として解せざるなく、意識中一點の疑惑なく、視るとして聽くとして皆其の處を得、人も體の小なるを以て小ならず、宇宙も體の大なるを以て大ならず、

人の意識は宇宙の意識にして、宇宙の意識は人の意識なるの十分に明かなることと爲らんか。此の如くんば人の意識の最も明瞭と爲ることの即ち宇宙の精神を發揮するものたるを言ふも不可なし。

二は他星に於ける超人の意識の明瞭を加ふるなり。他星に於ける星には既に地球の數萬年若くは數千萬年後に現はすべき狀態を現はし、其の人類相當のものは地球の人類が數萬年若くは數千萬年後に爲すべき事を爲しつゝあり、吾人の解すべからずと爲すを彼れ早くより之を解し、更に其れ以上に解すべからざるをも解し、可知的もなく、不可知的もなく、平々坦々少しの障礙なからんも圖り難し。吾人自らも身體よりして地球に比較し有るや無きやの知れざる程なるに拘らず、絶大なる宇宙に對し進化の先驅なるかに思ふは、意識が周圍より一層明瞭なりと認むべき跡あるが故にして、吾人に優るとは主として、吾人より意識の明瞭なるを指す。或る星の超人は吾人より幾千百倍の體軀を有するとも、猶ほ未だ大なりとせず、依然として勝たるを失はざるべきも、其の割合に意識の明瞭ならんか、吾人の解法を得ずして悉ふが如きことな、吾人の困難に遭ひて煩悶するが如きことな

く、能く漸般の事を理解し悉し、漸く意識に現はれたるを根本より熟知し、少しの疑ふ所あらず。人も體の小さなを以て小ならず、宇宙も體の大なるを以て大ならず、人の意識は宇宙の意識にして、宇宙の意識は人の意識なるの十分に明かなることと爲るべし。或る星の超人は意識の明瞭なるに於て實に宇宙に冠たるべく、其の何處に位するにせよ宇宙は之を樞軸として存在すと爲して大過なからん。

現代の人類が明瞭を缺くといふに徴し、人類の體軀なきを斷言するは當りず、常人の想ひ到らざる所にして超人の既に想ひ到れる所あり、超人も種々なるべけれど、常人の畏るゝを畏れず、常人の懼んざるを懼んせず、意識の明瞭を加ふるを以て宇宙の進化とするの理由を了得するなきに非ざるべし、意識の明瞭を加ふるを以て宇宙の進化なりとせば、地球に於ける將來の超人の意識及び他の或る星に於ける現在の超人の意識に於て略ぼ其の極處を認むべしとす。今日觸るゝ所として難問題ならざるなく、宇宙の絶大なるに對して畏縮するを禁じ得ざるも、遠き將來若くは遠き星に於て其の十分に理解せられ、宇宙を観ること猶ほ已れ自らを觀るが如きことあらん。最も重きを人類に置

き、宇宙は人類ありての宇宙なりと考ふること必ずしも迷誤ならじ。

第三百三十節 されど斯く考ふるは宇宙の變遷し來れる一部分に就て考ふるもの、即ち近くは太陽系内の或る遊星、遠くは他の星系に屬する或る遊星に就て考へ、孰れも特別に一部分に注意せるなり。單に一部分を観れば變遷の順序此の如き者あり、無意識より有意識に移り、不明瞭なる意識より明瞭なる意識に移るとすべし、又全體を觀ざるべからず。宇宙を全體として觀るに至り、斯かる一部分にて往し難きあり。人類は生物中にて最も優等、生物は礦物中にて最も優等、其の種々なる機關を具ふるは金石の何物をも具へざると同日の談ならざれど、宇宙を全體として觀れば、其の機關の複雑にして多様なること決して今日語ふ所の生物に譲らず。人類の身體を組成せる細胞を抽出して仔細に檢するも、特に目醒ましき活動を演ずること無く、寧ろ水中の微蟲に劣り、絶えて人らしき所を見ず、人の人たるは若干の細胞に存せず、全體として活動する所に存す、一部分にては言ふに足らず。宇宙も或る一部分を見れば死塊と

掃ぶ無けれど、全體よりして大なる活動の認め得られざるに非ず。人類の腦神系に意識の伴ふことあるが如く、宇宙にも亦何等か意識に類するもの無きを信せず。人類の以て意識とする所の如きものありざるにせよ、無意識より意識を優れりとするが如く、意識よりも尙ほ遂に優り、別に超意識と名づくべき者あり、普通の意識ならずして而も地球に於ける人類の意識及び他處に於ける人類相當のもの意識と關聯しつゝ、あらんも知るべからず。是れ吾人の容易に判知し得ざる所なれど、將來の超人及び他星の超人は、之を判知すべく、己れの意識と宇宙の超意識と關係あるを知り、己れの一舉一動と宇宙の大活動と關係あるを知るに至らんか。今論よりして宇宙の觀察すれば、所謂進化なる者は、彼に二六部方の進連に過ぎず、幾億々々年の間進歩を々々日に進れるもの、前動し余り活動したる所、斯かる單純なる理法を以て推すべからずなし、必ずや遠く之を超越するものあるを想はざらんと欲して得ず。但だ物に順序あり、今日の智力を以て何程をも知り得ざるを許すべし。

第百三十一節 地球に於ける人類の億萬年若くは數十萬年後の意識よりすれば現在の意識は

極めて不明瞭なりとすべく、將他の或る星に生存する超人の意識を想像するも、現在の意識は猶ほ極めて不明瞭なりとすべし。或は又意識の明瞭不明瞭といふ以外、尙ほ別に人類の満足し得る意識の状態ありて、將來多數者に、少くとも超人に、通存と爲らんも測られず。現在の人類は甚だ力に乏しきも、今進に之を如何ともするに由なく、唯現に意識の明瞭なりと認め得る所に就き、愈々之を明瞭にするの外あらず。人類は一樣ならず、各々其の注意するの厚きに應じて意識の明瞭を致す所あり、戰爭に専らなる者は此に就て明瞭なる意識あり、貿易に専らなる者は此に就て明瞭なる意識あり、學事に専らなる者は、此に就て明瞭なる意識あり、意識の明瞭ならんことを求むるには、皆各々専らなる所あるを要し、一切に互りに明瞭なるを得ざるべし。人類が顧みて周圍の現象より優れりとするは、己れに意識あり、利へ意識あり、明瞭なりといふよりする者にして、意識の状態に就て多く考ふるものは此の點に於て比較的明瞭なるべく、意識に關しては其の人々に專らべき必要あり。是れとて一部分に明瞭なるのみにて、餘る偏する所あれど、一應参照するに若くはなし。

第二章 初級意識の本質 (上)

第百三十二節 他の無數の物象に意識なくして獨り己の意識あり、獨り己れに限らざるとも、意識の明瞭なるに於て己れに及ぶあらざるとは、人類の自ら以て尙ほ自に優れりと爲す所なり。而して斯かる意識ありとし若くは明瞭なる意識のりとして意識を重ねじ、延いて其の狀態を考ふことより、其の畢竟何事なるかを尋ぬるに至るが、其の難を茫漠に失すれど、問題は漸く微小と爲り、竟に認識の本質起源といふが如きに歸す。

世の聞ける時にも多少此に關する意見あり、人は眼にて形及び色を視、耳にて音聲を聽き、鼻にて香を嗅ぎ、口にて食を味ひ、手足にて物に觸れ以て實在を知るを得、咄嗟に覺りて思想の連續するは即ち實在の寫しの原々現はれ來るを憑ゆるなりと。是れ何れの時にも何れの地にも幾許か人の常識に存する所にして今日にても尙ほ斯く認めて置はざるもの最も多しと謂ふべし。而も此の如き單純なる實在論の疑はれしも亦早き時代よりせり、人々認識する所は果して實在の寫しなつか、將實在に關係

せざる所あるべきかと。人は寢ねて夢み、覺醒して然る後驚くことあり、未だ嘗て見ざりし山岳を見、未だ嘗て遊ばざりし都市に遊び、或は空中を飛行し、其の永く腦裡に印記せらるゝあるが、其の夢たるを知り、怪むことなきも、眼病に罹りて白色なるの赤色に映じ、恰も花の天より降るが如く感じ、或は口病に罹りて甘味なるを苦く感ずるなど、實在と違へるを經驗するの度々なれば、識らず知らずの間に人の認識するの必ずしも實在の寫しに非ず、實在を離れて別に存するあるを認むるに至り、心の働きといふ事も既に何程か考へ及べるなり。心焉に在らざれば、觀れども見えず、聽けども聞えず、食へども其味を知らず矣學。」といふは、心的作用の何處に及ぶかを知れる者にして、是れより萬物皆我に具はる(孟子)といふに想ひ到ること決して遠きにあらず。印度にては靜處に退きて沈思默考するの習はしあるが爲め、心を主とし、總て之に歸するの傾向ある、固より其の處なり。單純なる實在論を疑ひ、觀念論を以て之が正反對に出づるは上古よりの事とすべし。

第百三十三節 時代の進歩につれ、渾然たる心の働きといふを以て満足せず、一層之を明確

にせんことを務む。乃ち均しく實在を疑ふも、一々實驗に徴して云ふ、眼にて物を觀るとは何事を意味するか、物は實在、まゝに映ずること無し、或る形に於て網膜に映するも、細小なる神經を通過する際(何の形あるべきや、色も實在なるは或る波動の長短に止まり、以て色とするは其の長短に對せる感覺よりすること、譬へば刃の手に觸れる時、刃自らに何の痛みなく、痛しとするの手に於ける感覺に過ぎざるが如し)、音聲も實在なるは或る波動に止まり、以て音聲とするは之に對せる感覺よりすることのみ、香も味も實在ならず、皆感覺よりすることのみ、謂ふ所の波動も實在に屬すと想はるれど、是れとて感官及び筋肉の運動よりして延長及び運動を感じ、以て之を識別するに至れる者なれば、究極知覺を外して何等實在に就て知る所あらざるべき筈、斯くて認識する所は實在にあらず、實在に關係ありとも、其の關係を明かにし難、要するに對象として唯だ現象あるのみ、言ひ換ふれば皆觀念なりと爲さざるを得ずと(ハイク)然るも此の類の議論は單純なる實在論若くは觀念論に比して攻究の進みたるを證するも、是れのみにて安んずべきに非ず。認識する所は皆觀念なりといふ途に念ひ及べ

るも、さればとて己れの意に任せて其の觀念を如何ともすること能はず、外界は依然外界として存し、内界は依然内界として存し、之を變改せんとするも得べからず、青天に雷を聽かんとするも得べからず、困難に遭遇して困難ならざるを思はんとするも得べからず、赤羅漢(あせらん)象(ぞう)悉く觀念なりとするも、事實に於て常識に認むる所と少しの差違なし、唯名目の變ぜるのみにて、解釋として遂に満足すべきを覺えず。是に於て又種々なる辯護の下さるゝあり。

第百三十四節 或は觀念を以て神意に出で、人の自由にし得ざる所とし、或は觀念を以て自然に相合ひ相離れ、外界といひ内界といふの類を生ずるに至るとせるが、更に精密に討究するもの云ふやう、人の認識するは實在の刺激を受くるよりするも、空間及び時間(じかん)は感性的形式にして、物自らに存するに非ず、而して量的なる單一衆多總計、質的なる實在(じつざん)無制限、關係的なる本體屬性(ほんたいせいしつ)原因結果(げんいんけつこ)反對、様式的なる可能(かね)不可能(ふかね)存在(そんざい)不在(ふざい)必然(じつぜん)偶然(ぐうぜん)然るも如何なるものも其の形式に適合して然る後認識せられ、形式を離れて何れなるやの認識せられず、認識する所の己れ自らさへ形式を離れたる真相の明かにせらるゝなし、總じて認識

すべからざる實在より映し來れる現象に外ならずと。然るも認識する所にして此の如くならんには、實在たり現象たるを差別するも、原因たり結果たるを差別するも、皆已れし領域内の事に於て、以て他に屬するの認識たるが故に、此の論法よりせば、現象は即ち實在、實在は即ち現象たりと解し、觀念に順序を立つるに於て一切を包括すべしと爲す。即ち有るに非ざ無きに非ず、之を超絶せる所よりして有無に分れ、此の差別よりして質を生じ、質の定まりて單一を示し、衆多と對して量を生じ、かくて順次萬種の觀念を排列するを得るが、其の順序を追へば茲に宇宙の成立するを認むべしと。而も純有純無よりして如何に質の生じ、質よりして如何に量の生ずるか、斯かる觀念の自ら轉化すべくもあらず、轉化するには活動を要し、活動には意志を要するとして、有りと有らぬ者を意志に歸せるあり。(ハヴェルカ)又意志にて不足なりとし、之に并ずる智慮を以てせるあり。(マルト)又更に改測を加へ、或は別の面より出でんとせるあり。(フント等、互算同、主観を離れずの傾け此)種々なる體系の組み立てらるゝ中、幾許か怪むべきの混ずると共に、幾許か確實とすべきあり、嘗て確實とせる所にし

て、後に確實ならざるの證せらるゝあり。普遍的且つ必然的なものは確實なりといふも、其れさへ時として變ずること無しとせず。昔時は物體に重きあり輕きありといふの普遍的且つ必然的なりと思せられしかど、後其の認められたるなり。數學は普遍的且つ必然的なるの最も主なるものと信ぜられ、今も大體に於て爾く信ぜらるれど、其の範圍に入れるものにして後に變改せられたるの一として足らず、中にも最も確實と信ぜられしユークリッドの幾何學も今は種々の疑問を以て迎へられつゝあり。(前百四十五)況んや彼の如くに確實とせられざる所に在りては、其の變易せらるべきは豫め許さざるべからず。

第百三十五節 認識が問題と爲りてより先づ尋ねらるゝは其の何點に於て確實にして何點に於て確實ならざるかといふことなり。其の限度に就て既に多種議論あり、大に進めるかと思へば、又發足地に歸れることあり、其の歸れるは必ずしも進歩ならずとせず、新カント流は唯かに進歩せり。前來の問題を研究すれば、茫漠なるの漸く緻密となり、緻密なるの更に緻密を致すの疑ふ可からず。されど認識と關係する所甚だ廣く、單に前來問題と爲り居れるに従

事して満足し得るやは疑はし、此と離れながら多少の關係あるは少しとせず。前來の問題に拘れる者は、或は以て満足し得んも、苟も他との關係に注意するものは、是れ以外に考ふる所なきを得ず、特に認識論に専らなる者さへ尙ほ容易に満足し得ざる有様にして、更に他に考ふる所なからず。認識論としては議論の緻密を加ふるは固より望まじきも、之と伴ひて研究すべきの意らるゝは物足らぬ感なきにあらず。今は多くの科學者皆著しく進歩し、或る一の科學にて斯くくゝなりと定むる丈にて、以て十分なりとするに足らず。例せば普遍的且つ必然的なりといふも、斯かる觀念が遠き未開時代に如何の意味を有し、後如何に變遷し來れるか、溯りて默然の思想を確かむるを得ば尙ほ更ら可なるべきが、如何にして之を能くするを得べきか、空門時間といひ、原因結果といふの類も、斯く變遷の跡を尋ねずんば十分なるを期すべからず。是等の事は心理學の任にして、又人類學の任なり、又動物學の任なり、其の之に就て解釋を與ふるを得ず。認識論は獨立の學科と爲り得ずとせざるも、心理學なり、人類學なり、動物學なりより材料を供給し來るの多き支け、愈々満足を感じるの多か

るべし。此の類の科學とても進歩せりといふもの、大部分は認識論と倫理の間に在りて爲さざる能はざれど、最早前來の認識論のみを頼みとするを得ず、少くも之に接近せる科學を参照し、得べくんば有らゆる科學を参照するを要す。〔認識論が比較的不十分なるは一般に認められ、心學其の本質區別すべき者なるか、又は現代の具體にて區別するに止るは疑問として存す。理に之を決するの困難も、心學に轉じて更に歩べし、或る點を包括せざるに非ず。〕

認識論は近代に及びて重きを置かれ來りたれど、何れの世にも幾分か類似せる事なきに非ず、近來重きを置かるゝといふも、何れ科學の皆重んぜらるゝに伴へる者にして、往年に比し頗る緻密を加へたるにせよ、他の科學に比し進歩の稱すべきあるや否やは速断するに難し。哲學の管轄せる所は漸々分裂して幾多の科學と爲り、各自獨立して離れ去り、最後まで殘存し而も其の本域を形作るは唯認識論のみといふは、習慣に由來せる一種の偏見たるを免るゝを得るか。認識論は意識の明瞭不明瞭に關して先づ提出せらるゝ所なるも、意識の關係は殆んど際限なく、之が研究の如何の邊に及ぶべきは容易に決すべからず、各部分の研究を綜合するに非ずんば、明瞭不明瞭の意義を確定するに苦むべし。認識の本質を尋ねるは根本的研究を思

ひ立ち、先づ一切を疑ひて然る後に最も確實なる所に到達せんとする流義なれど、既に幾世代間の習慣に養はれ居ることとて、最も確實とする所の者に多くの事情を混ぜるは珍らしとするを得ず。特に分應して根本的に解釋し得るものなるか、或他の諸科學の進歩と相應し互に相助けて解釋すべきかは深く考ふるの必要ならず。〔アメリエルがエビステモロチの名を訳し、其と明白なる區別なきにせよ、エルケントヌチ。〕意識に存する所は粗にせよ密にせよ關係なきにあらざり、或る部分に專なるも、以て他より離るゝ能はず、他より離れて討究するの便利なることあるも、事は是れにて終るに非ずして、元一の手段に過ぎざらず。人類に關する諸般の研究を以てするに非ずんば、人類の意識を測定し得ざらん。

第三章 認識の本質(下)

第二百三十六節 認識問題は意識の或る部分の明瞭を加ふるより起れるもの、明瞭を加へて漸く認識の何狀なるやを尋ねることと爲れるなるが、之を尋ぬるに従ひ、其の尋ぬる所の必ずしも明瞭なる意識に存せず、明瞭ならざる意識に存し、無意識とすべきにも存するを認む。人

の平素爲す所の大半は明瞭ならざる意識若くは無意識の狀態に存し、普通に熟知せりといふ事も無意識に於てするの少からず。手を振り足を運び、又は口を開閉して語るは、如何に筋肉を動かすかの意識なきが多く、萬卷の書を讀破すといふさへ、記憶する所を一々意識に存するに非ず、僅か許りを意識に表はし來るのみ。尋ねれば尋ぬるほど無意識に爲すことの益々増加するを覺ゆべく、隨て問題は意識の範圍に限られず、更に無意識の範圍に入るの已むを得ざるなり。〔ハルトマン著く無意識〕

無意識といふも一樣なるに非ざれど、意識的なるを睿智に屬すとし、無意識的なるを意志に屬すとするの便利なることあり。〔ハウル〕意識の明瞭なるを重んぜば、睿智に屬する部分の増すを可とするも、實は意識に屬する部分の却て遙に多く、動物の多數は意志ありて睿智なく、意識あるものも極めて不明瞭なりと爲さざる能はず。人類に至りては睿智大に發達し、屢々意志を左右することあるが、睿智も亦意志に依りて支配せらるゝあり。多くの觀念相聯絡して睿智を組成するも、意志なければ統一する所なし、意志は活動の本にして、睿智は其の働きを安全にするに止まる。事物に接して良否を擇

ぶは、睿智に依るが如くなるも、本来は意志に依るものにて、初より意志なくんば、得失の判明し居るとも、何の爲す所あるを得ざらん。さりながら斯かる意志の働きは、一々意識と相伴はず、時としては不明瞭なる意識と伴ひ、時として全く無意識とすべし。

第三百三十七節 凡そ問題として研究を要するは意識に表はれての事にして、意識に表はれざるは有無をも知る能はず、有無の知らるゝは、少くとも間接に意識に表はれたるなり。注意次第にて明瞭ならざる意識が明瞭となり、無意識が有意識となり、有意識とならずとも、有意識同様に取扱ひ得ると認むべきもの多し。認識問題も意識に表はれたる事若くは意識に表はし得べき事に關するものにして、總ての事物皆意識の範圍内に在りとすべし。されど總て意識の範圍内に在りとすとも、均しく意識に在りなから意識以外と爲さざるべからざる無きにあらず、間接に意識に表はし得るとするも、間接なる方法に幾種もあり、目を閉ぢて來去する觀念の順序をたどるも間接なれば、他人の言動に徴して自らを推すも間接なり、生理學的に腦髓の作用を取調ぶるも間接、下等動物を取調ぶるも間接なり、成るべく直接なるを善しとするあらん

も、又間接なるを善しとし、更に間接の間接の間接よりするを善しとするあり、無意識の働きの考ふるの類は、間接にするに非ずんば得て能くすべからず。

前來認識問題として存するは、今後も研究を續くるの當然なれど、認識の本質を明かにするには、他、科學と與に俱にする必要なきに非ず、且つ之を明かにしたりとて、猶ほ以て満足し難きもあり。十分に之を明かにするは、意識に一の疑ひなからしむる者なるが故に、以て満足し得べき密なるも、其の限度を離かむるが如きは意識の或る一部分の究察に止まり、是れ以外に意識に表はれ來り之を以て解釋し得ざる所のもの、少しとせず、謂ゆる認識問題に専らなる限りは表は以て満足し得べきも、一たび思ひを他に轉すれば解すべからざるの多きに苦まざる能はず。数学問題の如き、理化學問題の如きは、枝葉に屬し、根本的なる認識問題を解決せば餘は從ひて解決せらるべしとするも、是れ爾らく急に斷定すべきに非ず。元根本の問題といふは顯る語彙を伴ひ、爲めに誤解を來せるの少からず。他にも本體的といひ、基礎的といひ、一見意義あるが如くして實は曖昧に流れ、特に習慣にて呼稱せるもあり。

第三百三十八節 初め根本的と認め、然る後漸次概念の變易せるは到る處に之れあり、思想の進歩は根本的といふ概念の變遷に徴して知るを得べし。未開の時代には萬事を或る一人に歸し、民衆の禍福、盡く此に因ると爲し、漸く進みて人力の程度を察し、國家の事は多數人民の加はれる所なるを解するに至る。戰爭の勝敗も、大將の一心にて決すと思はれしが、後多數人士の方に依るの明白なるを致せり。今は司令官のみに重きを置かず、兵員の性質、給養の良否、其他軍事一切を調査するを常例とす。佛國の獨國と戦ひて敗れしは、司令官其人を得ざりしが故にあらず、動員の速かならず、兵站の整はざりし事、孰れも昔原因たらざるなく、或る意味に於ては鐵道政策の過りたるが爲めともすべし。軍隊の狀態にして兼定と大差なかりしならば、凡將を以て優に勝を制するを得たらん。事は全體に在りて、部分は之が附屬たるに過ぎず、世の開けざる時は、部分を重ねて全體を之に附屬せしむるも、其の進むと共に全體を主と爲し、各部分の益、整備せんことを望む。稱して根本的とするは、昔時の君主又は大將を指目せしに類するもの、他との關係の最も密なるを看過せるなり。昔時の君主又は

大將として、其の性格及び行動を調ぶるの決して無益の業ならざるべきも、單に此に拘りて他を忘るゝは大なる謬妄に屬す。君主又は大將の彼の如く行動し得たるは、當時の社會の之を許ししに因る、特に當時の社會を討究せざるべからざることを言ふ迄もなし。認識問題は益々研究すべき價値あるも、唯斯くして人生の究極に關する知識慾を満足せしめ得るかに考ふるは、餘りに備せりと謂ふべし。認識問題を根本的とするは、意識中最も自我に關係ありと認めたるに出でざるか。

第三百十九節

總てが觀念なりといふは、動もすれば總てが自我に屬すといふに解せられ、其の實在論と相容れざるも主として此に因るとすべきが、而も自我は抑々何なるか、觀念は如何に存するかを尋ねれば、實在論とさまゝ隔れる所あらず。自我は種々に解せらるゝも、假りに思想の統治者にして他一切の觀念之れが附屬たりとすればとて、以て多くの觀念を奈何ともすべからず、花は依然として紅、柳は依然として綠、強ひて顛倒せんとするも、遂に能くすべきに非ず、附屬なる語は寧ろ不用意に使用せられつゝあり。附屬といふは主人に對する從者の關係の如く聞ゆるも、世間主從の關係

も時代の習慣によりて幾度も變ぜり、決して一定不變なるに非ず。曾て主從とせし所にして、後に備者被備者となり、資本家技術家となり、或は相互對立の状態となれるの珍しからず。總てが觀へなりといへば總てが自我の附屬なりといふの價値んとするも、自我の附屬なればとて自我の境にすべき所にあらざるは明かなり。自我と他一切と何等かの關係あるに相違なきも、主從の關係として悉く自我の思ふ存分なりとするは謬れり。斯る關係は身體と萬有との間にも存す、即ち吾が身體は地球と關係を有し、地球は太陽系と關係を有し、太陽系は星系全體と關係を有し、吾が一舉一動の宇宙に影響するの疑ふべからざるも、是の故を以て吾が身體は宇宙の統治者にして他一切の事物之れが附屬なりとするを得ず、吾が身體は宇宙に關係のるも、之を所有するにあらず、又之を主宰するにあらず。總てが觀念なりといふも、總てが自我の所有し主宰する所なるを意味せず、身體に相應の領域ありて其の外に力を及ぼし得ざると同じく、自我に相應の領域ありて其の外に自由にするを得ず。〔所有といふは主權より出く權利〕自我に制限ありて他に獨立の區域あるは、觀念論も實在論同様に許すことを餘儀なく

せらる。自我は實際な關係あるも關係の明瞭なるを望むるは僅の部分なり。總ての觀念が自我に屬するが故に、自我直接の認識問題を解決せば餘は從ひて解決せらるべしと速断せらるゝが、之を解決し得るとも、認識に關する或る問題を解決するに止まり、是れ以外に猶ほ解決せられざるもの擧げて計へられず、宇宙又は人生に關して討究する際、判明を缺きて満足を感じ得ざるの少からず。若し知識慾にして謂ゆる認識問題にのみ存せば、或は從來の状態にて満足し得んも、之を外にして諸方面に問題の起り、研究の方法も進歩せるに於ては、諸方面に互りて解決を試みざるべからず。意識に表はるゝは認識問題のみに非ず、尙ほ雜多の事の存し、中に判明を缺く甚だ多し、但だ少しづつ判明すべき傾向の疑ふべからざるものあり、諸方面より幾分かづつ解釋される所を集合せば、其れだけ渾一的知識慾を満足せしむるを得べし。認識の本質は認識の或る關係を究めて解決し得べきか、又は他の多くの問題を解決することが即ち認識問題の解決に主要なる部分を占め、少くも之に補助を與ふるものとすべきか、此邊宜しく考ふべきに非ずや。認識論は根本的なりとも、以て全體といふべからず、特に其の根本的なるの聊か疑はし

くんば、到底是れのみにて安んずるを得ず、他と關係あるの明白なれど、之を解決せば他は節々刀を迎へて斷たるべしと曰ふこと、既に過ぎたり。認識論の解釋も進み、他の諸科學の解釋も進み、相待ちて漸く可なるべし。

第四章 知識の擴充

第四百十節 認識の本質を尋ぬるは無益にあらず、益々此に従事するの望ましかれど、單に本質と認むる所を尋ね以て之を尋ぬるの目的を達し得んことを必ずべからず。己れの日して本質とする所のもの、人の必ずしも以て然りとせざること、猶ほ己れの人に於けるが如し。本質の概念は認識の内容にて等差あり、獨斷の失を避くるには、内容たる者及び内容たるべき者を討究するの必要なからず。

現に知識と認めらるゝ者の變遷の跡を尋ぶるに、種々雑多の研究の相續續し、豫め或る目的を定めて能く満足し得たるあり、又他人が別殊の目的を以て従事せし所の、意外に己れの副製品を止し、或は新材料を供給し呉れたるあり。(論叢八十一) 一事に専らなるは研究の爲めに稱すべきも、爾く専らなるは己れ一人に

あらず、他にも多く其の人あり。従事する所の互に相異なるとも、各自専らなる所に就て多少の満足を得るは則ち大差あるなく、己れの専らなる所こそ最も根本的にして、斯くせんば知識慾を満足せしめ得ずと考ふるの側面、人も亦専らなる所を根本的とし、却て己れを以て偏せるの甚しきものと爲す。己れより智力の遙に劣れる者は、如何ほど或る事に専らなるも暫く顧みずして可ならんが、智力の劣らざる優るを許さざる能はざる者に對し、己れ獨り得たりとして満足せんとするも得べからず。己れと同じき方面若くは異なる方面に於て相當の智力を以て研究に従事する者ある場合、必ず幾許かの重きを此に置かざるを得ず。同等以上の智力を以て異なる方面に従事し、而して同じく満足する所あらば、是れ研究の多岐に分れ、己れ唯一部分に與れるのみなるを表示せず

や。(智力の現るは一種ならん、甲に劣りて乙に優るあり、乙に劣る一を以て甲に優るあり、甲に劣りて乙に優るあり、乙に劣る一を以て甲に優るあり)

第四百十一節 社會の事概な分業及び共同

より成り、或る部分の業務を廢するは、延いて他の部分に影響を及ぼすの少からず、其の益々進むに從ひて相互の關係益々密接を加へ、一部分の獨り離れて存立するを許さず。知識に在り

ても各方面の研究相待ちて初めて擴充の見るべきあり、全く他の方を藉らずして得ることあらんは、之を今日に望む能はず。認識論は成るべく假定を設けざらんとし、他の力を藉るを欲せざるも、果して他の力を藉るを要せざらんには、遂に大に進むを得ざらん。苟も進む所

あらば、恐らくは他の力の加はれるあるべく、意識的ならずとも、無意識的に加はれるあるべし。知識の擴充は全般に互りに達げられ、各部別々にするにあらず、時として一部分の急進し、掛け驅けの功名を成ししかの觀あるも、久しからずして他と相共にするのみならず、其の急進も實は他より促さるゝ所ありたりと知らるゝの多し。宇宙若くは人生に關する問題は、哲學固有の領域として研究せらるゝ間、進路の塞がり、愈々勉めて愈々惑ひ、謂ゆる毛髮の分割に終れるの幾回なるを知らず。而して塞がれる進路を開きて新たに活動するを得せしめたるは、大抵極め理想せざりし所より來る。即ち地球を中心として宇宙を論ぜし謬説は、コペルニクスの地動説にて破れ、人類を特別創造となし、謬説は、ダーウキン、ワールス等の種屬變化説にて破れぬ。前者は遠くピタゴラスに系統を引き、後者も希臘の昔時に源を獲すとせ

られざるに非ざるも、而も久しく注意する者ある無く、各々己れの宇宙觀人生觀に専らなりしに、漸く降りて或る時代に至り、己れの從事せる所と全く異なる方面より全く異なる説の現はるゝに遭遇し、初め異端邪説として大に争へるも、後之を採用するの已むを得ざることを爲たり。

天動といひ地動といふは、經驗的判斷特に觀察より來れる所、日に映ぜしは天動にして、後詳かに計算して地動なるの知られたるなり。創造といひ進化といふも觀察より來れる所、人類の爾餘動物と異なるを觀て特別創造と爲し、後動物の種類を檢し、且つ地中より發掘せるを檢し、或る動物の漸次變化して人類と爲れるの知られたるなり。此の如きは經驗的判斷より來れるも、先天的なる知識、例せば數學の如き、經驗を超越し、經驗せざる所に出てて疑を容るべからずとの事なりしが、久しく動かす確定せし幾何學は、ロバチエフスキー、ボリアス等に依りて破られ、前に先天的とせし所の實は經驗より得來りたるの知られたり。認識論として認識の研究に専らなるは可なれど、其の經過より察すれば或る契へられし認識の材料に因りて研究するに止まり、一時此に依りて

十分とするも、一層廣く知識を求むるに方りて、種々不足を感じざる能はず。認識は材料を取り除きて猶ほよく考へ得るが如きも、成るべく多くの材料を收拾し然る後抽象するの尙ほ更に效能多からざるべきか。認識の本質に關し、或る材料に限ると、他の研究して得たる所を併すと、其の間に少からざる差違あり、たとひ形式と材料とを離し得るとするも、尙ほ材料を多くするの優れるに若かざるべく、特に之を離すの極めて困難にして、時に離すといふの唯比較的の事なるに於ては、材料に限るの妥當ならざることを知るべきのみ。己れの研究に専らなる所を以て満足し得るが如く、他も研究に専らなる所を以て満足し得べきを思はざり、廣く研究の結果を集めざる能はざるに非ずや。

第四百二十二節 今日知識は幾多科學の研究の相錯して成れるもの、己れ自ら全く他と離れて獨立せりと爲すも、識らず知らず他の援助を受くる所あり。直接に他と反對の地位に立ち、之が爲めに妨碍を受けしと見ゆるも、其の反對ありしに依りて、過を深くせざるを得たらんには、即ち間接に援助を得たりとすべし。知識の擴充は各方面よりすべき者にして、諸科學及び準科學に依るを要す。而も諸科學及び準

科學は希望通りに知識を擴充する者なるやと問はるれば、決して然りと答ふる能はず。科學の進歩は人類の想像と一致せず、歴史的事實にして時勢の影響を受くること最も甚しきもの、或る科學を必要として其の成立を希ふも、事實の此と背馳するの稀れならず。諸科學及び準科學は皆時代の必要に應じて進歩し停滯し、個人之力を以て之を奈何ともし難し、或る天才は個人として幾分の變化を與ふるも、其れさへ時勢に負ふの少からず。從來科學の體系を作らんとして企てし者一にして足らざるに、能く之を成し達げし者なきは、科學が吾人の想像する如くに發達せず、或る部分の善く發達し、或る部分の幼稚にして、他の或る部分の殆んど全く缺乏せるに坐す。均しく抽象具體の順序に據りながら、甲の爲す所は乙の爲す所と同じからず、或は數學、星學、物理學、化學、生物學、心理學、社會學と爲し、或は心理學を物理學と同じき位置に置し、星學を地學統計學と同列として最後に置く、其の紛々として決せざるは科學の體系といふ觀念を得るに猶ほ難ければなり。第五節 抽象具體の程度を以て順序を立つるといふは、或は聴くべきが如くなるも、其の果して科學の分類と稱すべきものなるやは容易に斷言すべからず

らず。最も具體的なるは最も抽象的なると同
じく體系上に位置を占むべきや否や。能ふべく
んば抽象具體の順序を以てせず、唯ほ同じき
程度に在りて抽象的たり又具體的たるを得る
如く、各々性質の異なるに應じて幾個にも分
類するの最も適當なるらしきが、斯かる分類の
實現は近き將來に期せられず。

科學の體系を考へんとせば、科學の餘りに進
歩せざるを憾まざる能はず。時勢に促されて幾
種か成立せる所あるも、今後尙ほ成立すべき者
あり、既に成立せる者も尙ほ大に進まざるべか
らず、現存せる所のみにては、體系の如何を判
定するに由なし。或は若干科學の成立せずと
も、體系を考へ得んと想はんが、こは思東な
し、體系を考ふる時は、既に之を満すべき内容
の幾分か判明し居るべき筈、嫩芽の萌さるるも
のは、其の如何なる性質を帯ぶべきやを豫定す
るの易からず。知識の不足は到る處に感ぜらる
れば、何ほど少くとも其の得られんことを望ま
るれど、由來科學は時勢の必要に應じて發達す
るもの、而して科學に關する時勢の必要を知る
こと、物質的の需用を知るに比して頗る困難な
り。新科學にして五年十年に出づるあり、又百
年千年に出づるあり、或は早く出で一幾百年

も進まざるあり或は晚く出でて急に進みあり、
相俟つとも、相並びて進むを得ず。目下人の心的
作用を研究する、物理學の如くならず、心理學
は或る點まで數理的に計算せらるれど、然るを
得ざる部分も狭からずとせず。認識論が自然科
學と研究法を異にすとせらるるも之が爲めにし
て、自然科學と同じく研究することの容易に望
むべからざるも、何時か科學的研究の悉く或
る一地點を指して集まり、自然化學なるが故に
云々、精神問題なるが故に云々、といふが如き
差別の消滅するを信じて差支なかるべし。而も
現状は猶ほ甚だ不完全にして科學とも準科
學とも爲し得ざるの僅かならざるのみならず、
最も進歩せる科學にも思想を交ふるの多く、總
ての結果を集めたりと何程のものに成らず、
如何にするも以て満足するを得ず。但だ今日此
より外に道なく、若し不完全なりとして之を探
らざれば更に愈々不完全に墮るのみ、不完全
なるを忌みて他に道を求むるは、假りに不可能
事ならずとするも、見るべき効果あるやに思は
れず。科學にて不足なるは科學外に道あるを意
味するに非ず、當代の科學の尙ほ未だ進まざる
を意味せん。

現在の科學的研究は、假定の上にて假定を設け、
且つ一方に備せるの少からざれど、相當の智
力ある人の多少該に満足する状態を見れば、
妄りに輕んずべきに非ず、缺陷の有無に拘ら
ず、何等か注意する所なかるべからず。己れが
此と異なる方法にて満足し得ればとて、他を
指して方法を譲れりとするは穩かならず、知識
の擴充の各方面よりするを記憶し置くべし。
科學の進歩は時勢の必要に出づる者にして、強
ひて或る部分の進歩を望むも效なけれど、從來
の傾向を以てすれば、遲速こそあれ、孰れも皆
歳を遂うて進むべきは疑ひなし。此に準據す
るも、絶えず望望の數を免れざれど、道を擇
ぶの宜しきを得たるものと謂ふべし。約するに
知識は其の時代の總ての科學及び準科學に存
すと見做すべく、現代に於ける知識は現代の科
學之を示して剩さず。人類が宇宙に關し何様の
解釋を下しつゝあるやは先づ科學の傾向に徴し
て察すべし。

第五章 科學の傾向(上)

第四百四十三節 人類社會には、時代の制限あ
り、科學的知識の變遷も之を免れず。科學は決
して間斷なく進歩せず、時として停滞し、時と

して退歩す。近く數百年來進歩の著しかりし爲め、數千年間の一進一退も適じて進化の時律と目せらるれど、中世の人の眼には古代の最も貴ぶべく見えたらん。科學の發芽は遙く有史以前に存じ、之を詳かにするの困難なるも、爾後知り得たる所にて察するに、初め或る必要の事ありて經驗し、以て幾許かの知識を得、延いて若干の公理を認め、更に此に據りて未だ經驗せざりし所に想ひ及ぶ。後事情變易して新たに必要の起り、苟たに經驗する所あり、前に公理と信ぜし所の必ずしも争ふべからざるに非ず、尙ほ別に公理と爲すべきもの存するをもし知り、復據りて未だ經驗せざりし所に想ひ及ぶ。幾回か此の如きを繰り返し、漸を積みて今日の状態に達せるなり。天才は必要に先ちて經驗すといひ、人は經驗に先ちて一種の知識を具ふといふも、歴史の上にて疑ふべきものあり。新工夫新發明は直接若くは間接に社會の多數若くは少數の要求に促されて出づ、要求なれば、久しくして出づるなく、要求の熾んにして此に應ずべき材料あれば、續々として出づ、而して要求の如何は内外多様の事情にて定まらば、天才と雖も突如として現はれず。

最初何事が公理として認められしかの判然た

らざるも、或る公理の認められたらんには、それは何事かの必要よりして經驗せる所ありしに基づけるものにて、先天的なるの必ずしも非ざれば、以て動かざるとし、早くも未だ經驗せざりし所に推し及ぼしつゝあり。後に至りて謬見たるの明白なるも、其の當時に於て知り得る限りを知らんと欲したるなり。知識に廣く淺くこそあれ、何れの世にも既知未知の混交、事實想像の混交あり、今日科學的知識は固より往年の比にあらず、安んじて活用するを得んも、何處より破綻するやも測られず、假定とし空想とすべきの幾何なるを知らず、而も現に進むべきにのみつゝありと爲さざる能はず。昨是今非の屢々にして不易の眞理といふも疑ひを免れざれど、疑ふと疑はざるを問はず、趨勢の察ぐべからざる者あり、特に當代の滑々たる流れは中途に途巡するを許さず、止まるをも動かさずんば已まず、而して其の間彷彿として方向の認むべきあるかに見ゆ。諸科學の整合は尙ほ頗る困難にして或は早くより幾分の體系の整へるあり、或は今に及びて尙ほ體系の整へざるあり、整へるは果して眞に整へるか、又は更に大に發展すべきあるか、整はざるは果して謂ゆる整へるより進まざるか、又は對象の複雑にして進歩の後

れざるも後れたりと見做さるゝか、科學の分類は勢にて決したるの多く、千萬の星辰を包括するをば一地球の生物に限れると同列にし、甚しきは古生物に限れると同列にするなど、頗る異様なり。すべきが、而も事の紛々たるに拘らず、其の由りて出で且つ進むの順序は略ぼ相同じ、皆測定し易きより測定し難きに向ふ。

第四十箇節 比較的最も早く發達し、先天的知識より成ると稱せられたる數學は、發達の順序よりせば、概ね或る必要に迫られ經驗を餘儀なくされしに出でにき。九章算法として、一曰方田、以御田畝診域、二曰粟米、以御交質變易、三曰衰分、以御貴賤象稅、四曰少廣、以御積募方圓、五曰商功、以御功程積實、六曰均輸、以御遠近勞費、七曰盈虧、以御隱雜互見、八曰方程、以御錯採正負、九曰勾股、以御高深廣遠とあるは一々事實といひ難きも、多尠の形跡ありたるべく、而して數學の實用の何處に在りしかは、以て見るべし。主として實用の爲にし、實地より離れざりしも、第一及び第九の如き、幾何學の應用せられたるの少からざりしを證す。(孫子算術小數而況於算學。孫子算術後) 實地より離れずして寧ろ身近を甘んずるも嚴密を失はざらんとせ

るらしきが、以勾股之法、度天地之高厚、推日月之運行而得其度數とあるが如く、頗る高遠に驚き、或る程度以上實行を保し難く、依五行之色、合六爻之變といひ、該天地而驗陰陽、測鬼神而知道化といふに至り、全く想像に入れり。體系の見るべきなけれど、實際の應用を過ぎ、數理の妙を看取せる所あり、元代の天元術は西人の知識を交へたらんも、彼が如きの出でたるは偶然にあらず、其の東漸してより、關孝和の名に於てライブニッツ及びニュートンの學を學せり。〔元儒咸三の交通を以て西儒入歐と稱するは、西儒の比して尤も實に〕

現在の幾何學も初め埃及王セソストリスの世に租稅徵收の爲め土地を測量せしに濫竽すと傳へらるゝは、根據なきに非ず。之る繼承せし希臘人は、更に研究して得る所あり、ピタゴラスは早くも數を以て宇宙の基礎と爲し、續いて幾多の人物出でて増補し改作し、ユークリッドに及びて集めて大成し、後尙ほ幾分の進歩あり、アポロニウスが楕圓雙曲線の名を加へ、アルキメデスが拋物線を加ふるありたり。爾來研究の絶えしに非ざれど、羅馬時代に入り、數學者といへばト塞家と同様に扱はれ、帝國の破滅してより益々衰へ、殆んど絶ゆるに至んたりき、

唯學者の回々教國に吸收され、茲に保護されしを以て、幸うじて繼續するを得しなり。近代再び歐洲に轉じ、ユークリッド盛んに稱賛され、これが翻譯若くは註解の行はるゝ頗る多く、其の列擧せる公理及び解法は萬々争ふべからずとて、少しの疑ひも抹されずして遵奉せられたること實に數百年、哲學書にも先天的知識の最好例として引用せられしが、五十年來種々の點よりして疑問を發せるあり、前に公理と認めしもの、實は先天的知識にあらず、經驗より得しなるを明白にし、今より思へば、曾て先天的知識と爲し、何故なるやの怪まるゝほどなり。〔十八世紀末、カントに至りて證明せられたカウ〕

第四百十五節 直線は二點間の最も短き距離なりといひ、一、直線は一點に於てのみ他の線を横截すといひ、直線の横截せるものは各々異なる方向を有すといひ、同じき方向の直線は決して相合ふこと無く、稱して平行線と爲すといへる如き、皆從來經驗せる限りに於て誤らざるの確かめられしに止まり、嚴密なる論理的意義を具ふるにあらず。單に直線といひ其の何たるを究めざれば其れ迄なれど、一たび究むるに至りて惑ふ所なきを得ず。若し居る處にして大なる球面なりとせんか、長と幅とに專

らなる者の以て直線とせる所は實に曲線にして二直線相平行して永遠に交又せずと見えしものも、球面を平行するに於て漸々屈曲し、何處にか相交又するを免れず。三角の角を合して二直角と爲るといふも、球面に在りて二直角たるを得ず。斯くて久しく確定して動かさずと信ぜられし所も次第に動き始めたが、事の此の如くなるは考究の精密を加へたるに因るも、遠因は新たなる必要の起りて新たに經驗する所ありしに存す。舊公理の疑はれ、新公理の設けられんとするは、數百年來各方面の活動し、革新の避くべからざるに伴ひしのみ。他に比して後れたる點なきに非ざるは、譬へば外郭を攻め落して漸次本城に迫るが如けん。科學の基礎と認められし丈け、其の疑はるゝも速く、論破せらるゝも速きものにして、新たなる經驗に由來せるに於て則ち一。

圓形の面積を測ることは夙に幾分か知られし所、即ち圓を多くの三角に分ち、分つ多きほど眞に近しと爲したりしが、當時曲線研究の必要を感ずるゝ多からず、直線を以て代用して差支なく、隨て直線曲線の關係を究むるの情ならざりき。暗黒時代となりて、全く研究の怠られしが、後幾世代を経て革新の氣運の

熟するに方り、第一の旗揚といふべかりしは天動説を變じ地動説と爲し、ことなり。何人も仰ぎ視る所の太陽の我が地球に於ける關係に一變を來し、こととて、一時世を擧げて驚き、實用の如何に拘らず、學者の注意を惹けることも多し。之が研究は愈々進みて際限なく、最も狭く觀察するも、地球及び爾餘諸遊星の運行を詳かにするを要し、斷えず曲線に就て計算せざるを得ず、他にも鍾線の振振など曲線にて攻究すべき甚だ多く、之と伴ひて事物を靜的に考へず動的に考ふるに傾き、一切のものを流動的と見做し、何事も唯程度の差にして、全く異なれりとは甚しく隔れるに過ぎずとし、引き続きて微分積分の算法を案出し、直線曲線の相容れざ、者にあらざるを知り、圓を測り、球を測るにも多大の便益を覺え、其の結果として前に平面と信ぜし所の或は球面ならざるやを疑ひ、遂に萬世に亙りて變ぜざるべき公理を打破るに至れるなり。是れ誠に新たなる必要の生ぜしに因れるが、後別に新たなる必要の生ぜるあり、今後も益々多く生ずべし。既に直線の測定よりして曲線に及び、運動に及び、有らゆる事情に於ける運動を測定するの難からざることを爲れり。而も尙ほ數を以て測定し得られ

ざる變化の多く、科學的ならざる知識若くは科學的ならずとせらるゝ知識は總じて斯く測定せられざる者なるが、他日皆同じく測定せられ、複雑なる人事も概ね數を以て表はされんも知るべからず。變化の上に變化あり、其の上にも變化あり、究極悉く數を以て表はし難きこと勿論なるも、數を以て表はし得るもの今日より遙に多きを加ふべきは言ふを俟たず。

第四百十六節 心的活動は數字を以て説き

明かさんと試みられ、未だ見るべきの成績なきも、嘗て三角形を以て圓形を測りしが如く、數を以て數の及ばざる處に近づき、遂に十分に之を測定するに至らずとせず。今日の勢は益々此に傾きつゝあり、漠然たりしものの現に數を以て表はざるゝは擧げて言へ難し、數の應用は殆んど制限なかるべし。されど當今の數學は尙ほ大に進歩せず、從來經驗せし所にても數を以て證明し得ざるの多く、更に幾層の進歩を望まざる能はざるが、從來經驗せし所に考へ及ばざるあると同時に、未だ經驗せざる所に考へ及びたるあり。人類は三廣延に於て認識するの常なるも、數字を以て四廣延を言ひ表はすを得、唯其の如何なるものなるや事實的に示すに苦むのみ。二個の點が一の直線を作り、

四個の線が一の方形を作り、六個の方形が一の立方形を作れば、若干の立方形が或る四廣延のものを作るかに想ひ及ばざる能はず。三廣延の知識ある者が方形又は圓形の内を知り得るが如く、四廣延の知識ある者が立方形又は球形の内を知り屋外に在りて屋内を知るべしと屢々言はれて屢々打消されし所なるも、今日猶ほ全く打消されず、此に就て種々の理論の提供せられたるあり。たとひ現代の人も、將來の人も、第四廣延を知るの不可能事たるにせよ、或る遊星中の生物に之を知る者なきを斷言すべからず。數學者が第四廣延に想ひ及べるは全く經驗し得ざる所を窺はんとせるならんも、其の據る所は久しき間の經驗よりせしもの、將來何等か得る所あらん。將此に似たる他の想像若くは是れ以上の想像の浮び出づることあらん。

數學は諸科學中の最も嚴密なる者なるが、其の知識の起原は暫く措き、其の發達は經驗と相伴ひ、經驗の多ければ夫れ丈け發達も著しく、かくて經驗よりして公理を發見し、公理に據りて多くの複雑なる事物を判斷し、更に經驗せざる所に想ひ及び、汝々として研鑽に勵む。是れ順序の然るべき所にして、今日既に複雑なる

運動を説き明かし、尙ほ更に進め、竟に最も複雑とせらるゝ生活状態にまで及ぶ。第四廣延を考ふるは當代人類の知識の及ばざる所に入らんとするもの、即ち人類の知識の及ぶ限りに目標を立て、此に近づくんとする者にして、故さらに期待せずとも、向ふ所は宇宙の究極問題なり。

第六章 科學の傾向(中)

第四百七十七節 公理の認知せらるゝに先ちて

其の公理の應用せられしこと少からず、科學の成立するに先ちて之を構成すべき公理の認知せられしこと少からず。何れの地、何れの世にも、幾分か科學的知識の存在せざるなきが、其の發達するか、將發達せざるか、若し發達すれば何様の順序に於てするかは、一に社會の狀態に因る。數學は公理の早く列擧せられし者なれど、應用の廣きと共に、或る處に算數の進み、或る處に幾何學の進み、組織の方法も亦同じからず。物理學及び化學の進み、特に甚し、科學と成りしは後世なれど、法則の發見せられ應用せられしもの頗る多し。支那にては四千年以前に於て既に陸路及び海路の方針を定むるに

磁石を以てせり。埃及には是れ以前に於て更に一層巧みなるものあり、三角塔の建築、木乃伊若くは染料の製造等、以て設計及び製業に關する知識を見るに足る。希臘は埃及より借れる所多し、多少の變改を加へしも、決して著しと爲し難し。羅馬は唯前代の知識を繼承せしに止まり、寧ろ却て衰頹し、遂に大部分を失ひしが、其の之を失ふに際し、能く之を維持し且つ發達するを得せしめたるは即ち亞利比亞にして、此より轉じて再び歐洲に入り、次いで四方に及べり。實に知識は數萬年前より漸積し來りし所、言ひ換ふれば原人時代より周圍の必要に應じて經驗し、幾世代を経過する間に少しづつ覺知し來りしなり。木を鑽りて火を得、艇にて物を揚げ、帆を張りて舟を馳するなど、皆記録の傳はらざる以前の事とす。

第四百七十八節 人類の必要とする所は計ふる

に勝へざるが、何事につけ不足を感ずるは幾許か新たに物を作らんとする動機と爲り、特に生命財產に關する者即ち壽と福とに關するは、全力を以て事に當らんとする跡あり、其の汲々として勤勞するは十の八九之が爲めといふも不可なし。一人によりて二者の孰れかに重きを置けど、二つを求むるとも一つを重んずると

も、因りて奮勵勉勵し、知識を開發すること少からず。時として本來を顛倒し利害を誤り、時として不可能事を敢てせんとするも、他人の鑑戒となるわけにても知識に益すと謂はざるべからず。東方にて壽を念とし不死藥の製造に勉めしは猶ほ西方にて福を念とし黄金製造に勉めしが如し、共に知識に益する所ありたり。秦始皇は不死の藥を求め人をして遠く海外を探檢せしめしが、此の類の事はその以前より存せし所にして、藥を求むるが爲めに植物の性質を知り、延いて動物に及び、礦物に及べり。神農本草經は後人の假託なるべけれど、宛

業を自然生る植物に求めず、更に之を製造せんとせり。煉丹は實に不死藥製造にして策て黄金製造の意味せしもの、書に併せて福を求めしなり。時を以て藥を考ふる者、一而して黄金製造の事は亞利比亞に於ても亦研究せられ、次いで歐洲にも流行したりしが、是れ御り黄金製造の目的ならず、溶解せる黄金は不死の藥なりとて、之が製造に熱衷せしもの、福に併せて壽を求めしなり。固より斯かる事の有り得べくもあらず、不結果に終りしの當然なれど、

此に因りて製造術に巧みなるを得たるは掩ふべからず(第二節) 他にも歴又は占卜の爲めに星を觀測せしが如き、知識の複雑を致し、所あるが、未だ一科學とすべき無く、總じて廣義に於ける博物學なりといふべき有様なりき。

此の時に方りて東西の知識は略ぼ平均し、孰れが研究に長ぜるやの言ひ難く、其の差別の生ぜるは是れより後の事なり。支那にては夙に格物致知といひ、萬有を觀察し實驗して眞實の知識を得べしとし、六合に就て知る所なかりしに非ず。然るに社會的變動の少く、僅かに朝廷の變革し、又は蠻族の侵入せる位にて、知識の上よりせば中央亞細亞及び南海を通過し來りしを最も主要なりと爲す。宋に及びて格物致知に重きを置きしかど、謂ふ所の格物致知は多く空想を交へ、徒らに文字の註解に註解を加へ、實物の知識は極めて乏しく、本草に關しても前代より進める所あらず。亞刺比亞は進歩の止まりしも、(第三節化學の開祖は亞刺比亞) 其の文明を承けし歐洲に在りては、偶々新世界發見の如き、封建制度破壞の如き、人心を新たにするの事件續々として起り、爲めに前より養はれ來りし知識は茲に勃然として發展の機會を得、密に既知の理の愈々緻密を加へしのみならず、密に之れ

が應用の愈々盛んなるを致し、のみならず、頻りに進んで未知の域に入らんとし、期せずして科學的知識の發達を促せり。而も新科學が如何の形に於て成り立つかは豫め知られしに非ず、前米諸重の勢に據るとも、其の勢の表面に現はるゝの果して何邊よりするやの知り難く、殆んど偶然と謂はざるを得ざるあり。動搖の始まりてより、種々の方面に研究の行はれしかど、中に大に進めるあれば、又進まざるあり、或は初め聯絡なしと見えしものの後合同して一の科學と爲れるあり。現在の諸科學は或る程度まで整備せりとすべきも、識者が理想より割り出し、に非ず、研究の結果が何時しか或る科學の名の下に纏りしなり。

第四百九節 黃金製造に苦心せし頃、何様の科學の將來成り立つべきやは想像だもされざりし所、多少の知識は種々の方面に得られしも、之を得たるは直接に關係せし人々のみ。數理に通ぜしもの、器械に通ぜしもの、業織に通ぜしもの、動植物に通ぜしもの等、各々修むる所に精しかりしが、中に就きて比較的理論及び應用の廣かりしは後結成し擴充して物理學及び化學の二つとなれり。物理學と化學と孰れが先孰れが後なるを決し易からず、前者は建基法

水等に關係あり、後者は醫藥材料等に關係あり、時として一の他に先だちし觀あれど、要するに與に俱に起りて與に俱に進めるもの、一にして二にして一、相離すを得ず。科學の名の附せらるゝに及びて分離し、化學は物理學よりも物體の分子の變化に重きを置くことせられし、今は再び近寄り來りて互に區域を犯すに至れり。元兩者各々或る一定の題目ありとし、後研究につれて前に考へ及ばざりし處に入り込めるなり。化學は初め無機有機に別れ、有機物は生命の作用の加はれりと爲し、が、無機物にて有機物を製造し得るに及び、曾て存せし差別を撤去し、更に是れ以外に物理化學と目すべきを分出し、あり。固體の液體と爲り氣體と爲るは、物理學の取扱ふ所なりしに、總ての氣體が強壓冷却にて液體固體と爲るの知られてより、化學は之が爲めに頗る忙し。氣發と溶解と同一法則の下に立ち、溫度容積壓力をも伴し得ること、亦二學の會合する所とす。(化學は普通扱ふ所なれど、ヘリウムアルゴンクリプトンの如き、他)

不動地動の爭論は、物理的研究に多大の刺戟を與へ、星辰の運行を測量し、其の形狀を觀察せんとし、器械製造に影響せしことも少からず。後重力の研究に依りて天地一體たるの判

明し、頓に世界の廣さを覺えたるが、而も當時主題たりしは重力にして、熱及び光の性質に就て、さすがのニュートンも大に誤れり。電氣に就ては僅かに簡單なる器械の造られしのみ。爾來研究の愈々進み、蒸學、光學、音響學、電氣學、磁氣學等、分科に分科を生じ、殆んど底止する所を知らず。區域の擴大しつゝ互に關聯するが爲め、何れの方面より新なる發見を得、延いて前に認めし公理を變ぜざるべからざるやも圖られず。新なる事實の意外なる處に認められ、新たな理論の敷衍せられしこと稀ならず。ヘリユムの發見せられ、尋常元素と異なるの知られたるも偶然に出でしが、ラヂウムの發見せらるゝに至りて推理に一大變化を及ぼせり。マルトンの原子論は化學及び物理學に互りての研究に大なる便利を與へ、アボガドロの分子論は更に附加する所ありしが、ラヂウムは此よりも一層深く研究し得るの便利を與へぬ。原子は電子より成る、電子の排列の變化よりして原子に變化を及ぼす、總ての元素は早晚變化を免れざるもの、宇宙を通じて唯電子の分合するあるのみとは、猶ほ一の假定たるにせよ、實に原子論發表の際に在りて想ひ當らざりし所。混んや其の以前に在りてをや、推理の急變すること

往々意表に出づ。曩に無機有機の差別の撤去せられしも、生命の事猶ほ明白を缺き、或は到底明し得ずとせられしに、電子論の出でてより今一步にして解決の端緒を得べき希望あり。

第百五十節 物理學及び化學は或は分離し或は聯合して進み來れるもの、其の内に進むや、遂きは宇宙間の星辰、近きは地球の生物を包括すべき順序なるも、星辰に關するは星學として獨立の科學を成し、生物に關するは生物學生理學等獨立の科學を成し、他にも別に獨立の科學を成せるあり、研究の進むに隨ひて更に新なる科學の出づべきが、皆時代の必要より出で、勢にて別るゝのみ。今後幾許の新科學の出づれば仍りて全科學の體系を完うすべきやを知り得ざるも、現在の諸科學の主體たるは物理學及び化學にして、他は此より分派する状態からず。事生命に關するに及びて二學も少しく差控へざるを得ず、精神上の諸科學も各獨立して存在し、尙ほ益々發達せんも、是れとて全く分離して孤立すべきに非ず、生命を以て物理學及び化學の與り得ざる所と爲すが如き、漸を以て改めらるべし。無機有機の差別一たび撤去せられてより、年を経ること少からず、心理上の事も數を以て計へらるゝの二三のみならず

ど、從來の習慣の常に習き續ひ、容易に變ずべからざるものあり。而も未だ變ぜざる迄にして、永く變ぜざるにあらざ。此等に關し各獨立の科學として研究し、物理學及び化學に資するの少からざるべきも、亦物理學及び化學よりして此の方面に入り込むも多かるべし。

電子論の何處まで眞實にして、何處まで影響を及ぼすやの判然たらざれど、既に從來考へ及ばざりし處に切り込み、且つ説明し得ずとせし所をも説明し來れり。若し更に生命問題に觸るに至らば、乃ち科學共通の事の明かにせられ、或は物理學及び化學をして現狀の儘に續くを許さず、科學としての體系の變じ、或る分科の他の或る科學と接近し、若くは合同するに及ばんも知るべからず。今は概ね個々別々に研究を事とし、各々以て一の科學とするも、今後如何に變易するやの推定し難きこと、恰も數世紀前に種々の理論の出でながら、當今の如き科學の成立すべきを夢想だに爲し得ざりしと同じからん。

第七章 科學の傾向(下)

第百五十一節 物理學及び化學に認められた

る法則は殆んど總ての事物に適用せらるべき筈なるも、今は爾く進歩し居らず、二學は或る一部の現象に限らる。現在の諸科學は各々時代の必要に應じて組織せられ、相互の間に聯絡の成り立たざるあり、物理學及び化學と密接の關係ありながら、全く關係なきかに取扱はるゝ無しとせず。之を譬ふれば猶ほ新大陸の發見せられて各國より處々に植民し、而して相互に何の關係あるか、將來如何に發達するかの知られざるが如し。物理學及び化學は既に比較的最も重要な地位を占めたれど、能く他を聯絡するの力を有せず、他も之れが支配を受くるを便利とせず、相隣りしつゝ深く交際せざる有様なるが、幾年かの後に自然に協合し、有機的體系を組み立つることならん。現に科學として存し若くは將に科學と爲らんとするの多く、孰れも幾許か類を以て離合すべく、特に總括し自然界に關すると精神界に關するとに大別するの普通なるも、是れさへ漸次相近づくの疑ふべからざるを覺ゆ。

自然科學の中堅といふべき物理學及び化學は曾て精神界に與り關せずとせられ、次いで無機有機の限界の破れ、頗る往年と趣を異にせるも、尚ほ何處となく生活力若くは生命的元

素の別に存在し、別に取扱はざる能はずと考へらるゝ跡あり。而も斯かるは多く習慣に基づける所にして、力にも元素にも特別のものあらざるは最早や證明せられたりと爲すべし。胃腸の營養攝取は海綿の水を吸收するより遙かに複雑、血液の循環するは水の水道を流るゝより遙かに複雑なるも、二者全く質を異にせるに非ず。悉く一律の下に説明し得ずとも、或る點まで之を能くし得べく、是れ以上多少の想像を混じ、遂に純然たる想像に陥るが、其の想像も後日説明を施すべき準備と見做すべからずとせず。自然科學の研究法は尚ほ幼稚にして、將來大なる變改を見んが、以て知識を擴充し來れるは事實なり。他に研究法を異にして科學たるあるは假りに科學と認定するに止まり、漸次方法を同じくするが如きこと無かるべきか。精神科學の獨立を計すも、其の今日迄の進歩は自然科學に接近するを意味し、而して自らの特長は自然科學に暗示を與ふるに存せざるか。(註)註は精神科學の具備する有機的なるを説き、昔に以て自然科學に接近すとする所に在り。

自然科學は尚ほ精神界に與るの極めて少きも、既に入り込みつゝあるは掩ひ難きところ、特に無機有機の限界の破れて以來、二者共通と

して説明すべきの順に多きを加へぬ。前に原子論の出でし際、以て物質を説明すべくも、精神界に何の參與する所なしとせられしが、電子論の出づるに及び、物質も生命も相俱に説明せられんとする傾向なしとせず。電子論は固より一の假定に外ならざるも、間斷なく活動しつゝある電子の配合如何に因り、或は甲元素と爲り、或は乙元素と爲り、或は化合物と爲り、化合物に蛋白質の類ありといふこと、以て生物の複雑なる作用を説明するに足らざるも、以て無生物と生物と根本に於て異ならず、唯組織の異なるのみと觀るに益する所あり、少くとも之を肯定するの之を否定するよりも満足を感じ易かるべし。精神科學の稱あるものは、初め治療の必要より身體の構造を研究し、修身の必要より心意の作用を研究するなど、人事に係れる零碎の判斷に多くの想像を加へしが、さるる必要の増進するにつれて益々研究の精緻を致し、強ひて自然科學に反抗するの陋を學ばず、其の取るべきを取ることに爲れり。東洋にては斯かる必要に迫らるゝの少かりしも、其れにても格物致知を當然の順序なりとなし、歐洲にては、各方面の活動一時に盛んと爲り、格物の意義の頗りに攻究され、身體より延いて心意にも觀察實驗

を覺ゆ。

を重んずるに及べり。

第五百十二節 身體に關するは眼に見えずに

聞えずに觸れて自ら自然科學に入るも、心意に關するは觸接し難く、今も自然科學より離るゝの遠けれど、初め身體に關するものも土工の法則と違ひ、別に攻究を要すとせられしに、後漸く同一法則の下に律すべきの判明し、身體に伴ひて心意に關するものも亦幾分か同一法則の下に律せられんとす。心意は氣なりといひ、火なりといひ、又は心臟の作用なりといひ、接觸すべき或る手掛りを得て解釋を下すの種々なりしが、神經系統と相伴ふの確かめられてより、必ずしも自然科學と分離することを務めず。従来疑問として遺れるは、腦髓と心意と密接の關係あるも、腦髓は心意にあらず、心意は腦髓にあらず、二者相離しつゝ兩立すること恰も鳥の兩翼車の兩輪の如く、如何に其の一を解決せるとも、以て他の一を解決せりと爲すべからずといふ事にして、研究法に在りても、客觀より主觀を區別すべく、心理學が最も生理學に近逼せるに拘らず、内省に屬するもの、即ち直接に感じ直接に考ふる經驗の如き、皆自然界に於ける經驗と同列に視るを得ず、況んや心理學的ならずして辨證法

的に概念の發展を辿るは、自然科學に於て如何ともすべからずとせらるゝが、實に未だ問題の到る處に存するに相違なく、今日の進歩を以てしては、永く自然科學の外に立つべきを主張する者あるも之を否定するに十分なる理由なければ、自然界の法則が次第に精神上に適用せられ、尙ほ益々適用せられんとするを許容するの穩當なるべし。

心理學は初め内省を主とし、幾分の觀察の加はれしが、謂ゆる心意物理學の試みられてより、實驗を主とし、生理學の一部と見るも差支なきことあり。機官生理學より細胞生理學の進出でしほど、心意に就て著しき進歩の見えざるも、他日大に進歩すべき希望なしとせず。内省よりするは自然科學の與り關せざる所とせられたるが、其の果して本來自然科學の外なるや、將此と特殊の差別なきに至るやは、急に判定し得ざるも、たとひ内省よりする所にして全く自然現象と異なるにせよ、幾許か數理の應用せられざる無く、連續の速度程度等、他に對比すべきあり。自然科學の研究法は或を返ひて改まり、心理の研究法も亦或を返ひて改まり、或は二者相近づきて終に同一の法則の下に立たんも知るべからず。物心の二元なるや一元なるやは

依然として疑問なれど、一元なるとも、二元なるとも、律せらるべき法則に差別なしとすること、強ち理なきに非ず。自然科學に於て既に萬有を電子の排列に歸せしが、一層研究を積むに及び更に善く物質を説明するに堪へん。

第五百十三節 科學に就て何の議論あるにせ

よ、自然科學の研究法に就て何の議論あるにせよ、科學の進歩は自然科學研究法の適用せらるる多少を以て徴せられ來れるが、精神科學の稱あるものは、自然科學より觀て適當なる研究法を得ずとせらるゝも、自然科學に暗示を興ふる所あるを争ふべからず。

（自然科學を精神科學より觀ては數月に専ら思ふ）幾多の學說中、何の利益なきも少からざれど、孰れも故なくして出でず、中には幾め目的物を假設し、研究に便せるの效能の舉ぐべきあり。物心の關係は早くより攻究せられ、今猶ほ解決せられざるも、ライブニッツの單子の如き、今日の電子論に何等かの暗示を興ふる所あらざるか。電子の何物なるやは判然たらず、或は假定其の物の全く誤謬なるやも圖られざれど、目下之を認めざるべからずとせば、同時に物質の概念の變せるを認めざる能はず。自ら活動して斷えず周圍との關係を變じつゝあるは普通死物視せらるゝと同じから

ず、生命の本素と見做すべきものを含まずとせず。生物の最小單位は細胞なれど、細胞は變化の速なる化合物にして、變化の遲速は化合物の如何に由り、化合物の如何は元素の如何に由り、元素の如何は電子の如何に由り、究極生物の生物たるは電子よりすと謂ふべし。生物は意識の伴へりとするべきあり、伴はずと見るべきあるが、意識の有無も程度の差にして、生物の根元たる電子に絶對的に意識の伴はずとすべからず。乃ち電子はライブニッツの單子に類し、其の相違ふ所は前者が廣延を占め、假りに意識を有し又は或る配合の下に意識を有し得るとして二元たるを免れるに在り。(ライブニッツの微積分に於けるニエートと先程を争はずとす。カントの認識論に於ける、物理の知識よりせしむる又哲學的單子とすべし。)

電子が單子と違ひ、極微ながら物心の兩面を備ふるとせば、二元なりと聞ゆべけれど、兩面にせよ、三面四面にせよ、或る一體の様式と認め得ざるに非ず。物には強壓に對する差あり、光波に對する差あり、音波に對する差あり、電磁氣に對する差あり、而も皆一體よりするを失はず。物心を二元とするの習はしなるも、物を主として心を解し、或は心を主として物を解し、或は併せて一元とするあり。廣延も解釋

次第にて全く精神的と爲る。物理學及び化學にて、諸元素を永遠に變易せずとせず、死生に類する者ありとすること、將に自然科學よりして生命を解し、次いで精神界に及ぼんとする徵候ならざるか。單子に關し、ライブニッツ及びヘルバルトの説明の不十分なりしかど、電子の解釋は漸々此に近づき、如きことあらざるべし。ライブニッツの單子論は永く維持せられず、無數の單子の代りに唯一の思想の認められしことあり、唯一の意志の認められしことあり、電子の解釋が單子に近づける後、如何に變すべきやの不明なるも、物理學及び化學よりして單子に類するものを説明するに及べるは、確かに知識の擴充せりと爲して可なり。

第五十四節 自然科學 研究法は尙ほ頗る不完全にして、今後幾多の變遷を經ざるべからざるも、其の研究法に據れる者に於て進歩の數々たりしを見、尙ほ其の勢の持續すべきを察すべく、此を疑ひて之より遠ざかれる者は徒らに勞して功なかるべき嫌ひあり。現在の自然科學は、精神界より隔り、容易に其の研究法を推し及ぼし得ざるも、而も歩一歩之を説明するに傾きつゝあり。(ブレイクが精神界に入りしと共に不見客體を方面より見るに於てヒステール、シモンペンハウエルと云ふ少少なり。哲學

物質學者及化學者にして此の類の事を試みんとす。哲學

ロツツ、ケントとを比較) 精神界の事にして科學若くは準科學と見做さるゝあるは、自然科學に比し假定的の上に成り立つ者にして、實際の順序よりせば自然科學の研究法に據りて證明を得るまでの假定なりとすべし。自然界と精神界とは甚しく隔離して取扱はるゝも、自然科學は自然界に偏しながら、既に已に精神界に入れるものあり。精神科學の稱あるものに自然科學の法則の適用せらるゝは、即ち科學の進歩と目すべく、恐らくは電子論を以て單子論を補ひ、更に形而上學の重要問題に入るの遠からざらんか。總ての科學は一たび萬有に生命ありと認め、次いで今日尙ほ想ひ到らざる所に及ぶべし。宇宙は何ぞや、人生は此處に何の關係あるかは、現在の諸科學及び將來の新科學に於て豫め期待し若くは期待せずして解釋を與へんとすべし。されど人類は多く此等の解釋を待つこと能はず、急速を欲する者又は簡單を好む者は動もすれば宗教にて満足を求む。

第八章 宗教の傾向(上)

第五十五節 人類の性質は一様ならず、或は智的に偏すと見るべきあり、或は情的に偏

すに見るべきあり、或は急に名狀し難きあり、概ね程度の差にして、共通の點の認むべきにせよ、多少の差違の現はれざるあらず。未開の社會には開化せる社會に稱するが如き科學なく、宗教もなければ、其の要素は何處にも存せずべく、而して何人に就ても科學に向ふか、宗教に向ふか、又は向ふ所の明かならざるかの尋ねべきあり。科學及び宗教は根本に於て相近く、而も末に於て相遠く、往々衝突の烈しきに及ぶ、而して人の茲に別るゝは性癖よりせずんば、則ち境遇よりせん。科學も宗教も自己及び環象に關し渾一的觀念を得んとする所あり。均しく渾一的といふも、全體を以て部分を輕んずるあり、一小部分に據りて全體を推定するあり、或は之を混交するあるが、其の種々なるに拘らず、攻究し得る限りを攻究し、得ざるに及び疑ひを存すると、攻究を或る處に止め、早く疑ひを除くことに從順すべく、人の多くは故さら其の一を擇びざるも、自然に其の孰れかに就かんとす。

人の性質は精細に觀察せられたるの少く、異同の説明せられたるの一層少けれど、廣く事實として知られたるなきに非ず。飲酒する者と飲酒せざる者喫煙する者と喫煙せざる者多病な

る者と沈黙なる者、干渉する者と放任する者、其の他さま／＼に別るゝは普通の事にして、境遇に因り變化の起るにせよ、幾許か性質よりするを疑ふべからず。攻究し得る限りを攻究し、得ざるに及び疑ひを存する者は、他の早く解せりとして疑はざる者を日し、以て淺薄なりとし迷信なりとするが、飄りて疑ふを欲せざる者よりせば、絶えず疑ひて已まざるは、煩悶に堪へざるかに見ゆ。而も疑ふ者も疑はざる者も、其の人自らに在りては各々多少満足する所あり、他より推察するが如きにあらず。研究を好む者は何處にも疑ひを挟まざる能はず、彼を穿ちて愈々彼に入り、火を探りて愈々大に到り、考ふるとして際限あるべきなく、既に確定せし所にして後に改めざるべからざるの願る多し。知識の擴充は前の誤りを正し、新事新理を認知するよりするもの、若し疑はずんば擴充は遂に期せられず。されど疑はずして疑如たるも亦必ずしも不可ならず。人は平日特に疑ふこと無く、疑ふをも要せず、日出づべしと信じて、日果して出で、春來るべしと信じて、春果して來る、明年の出來事も何程か豫定し得べく、生活上疑ふよりも信ずるの遙かに多し、如何なる懷疑家も疑はざるの少からず。

而も日常の事こそ其の儘に過し得れ、一たび森羅萬象を考ふれば、知識の足らざるの餘りに明白にして、其の足らざる所に疑ひを挟まざらんと欲して得ず、斯かる際には、已れを拘束する或る格式若くは已れの尊敬する或る人物に依りて疑ひを解くことあり。

第百五十六節 格式若くは人物に依りて疑ひを解く何れの時代よりせるやの言ひ難きも、初め動物が漸く人の形を受けし頃、既に幾分か此の形跡の存したるべし〔猿猴の類は分〕若くは家族の結合して簡單なる社會を成し、ととき、多少の格式の守るべきあり、又族長の命の從ふべきあり、服従の習慣の成り立ち、人々敢て罷にする所あらず。格式を守るの外、族長及び之に近き者の言行を標準とし、苟も此に違はざらんことを務む。或は偉人の言行の口碑に傳はれるあり、記憶する者は曰ふ、某は能く強敵を禦ぎ、吾人の祖先を救へり、其の性格は云々、其の言へりし所は云々、吾人宜しく之に則らざるべからずと。固より斯かる服従心は何人にも同じからず、極めて強きもあれば、爾く強からざるもあり、中には反撥の旨とするもあれど、概括して何等か服従する所ありとすべし。獨り人類に限られざれど、特に人類

は相集合して強きを致し、爲めに服従の頗る必要なることとなり、到る處に服従の行はるゝを見る。社會の發達して變化の頻りなるものは、服従すべきと服従すべからざるを區別し、場合に依り抵抗を事とし、破壊をも敢てせざるべからざれど、社會に存在する間、常に幾許かの服従を免れず。何れの時代にも或る格式に依り或る人物に依りて己れの所爲を律し、他人の疑ふを疑はざるあるが、其の稍々著しきを信仰と呼ぶ。

疑惑よりして科學の發達し信仰よりして宗教の重んぜられ、時に相助け時に相離れつゝ、共に自己及び環象に就て知識慾を満足せんとし、一は社會の全部若くは一部の變化に伴ひて益々進み、一は其の秩序に伴ひて益々固定す。如何なる社會も多少の變化ありて、疑惑よりすると信仰よりすると、衝突を免れ難く、變化の大なるに至りて衝突も大ならざるを得ざれど、或る部分に秩序の維持せらるれば、信仰も久しきに續くに堪ふ。前來の秩序に弊多く、必ず之を改めざる可らずんば、時の信仰も隨て動くべきも、新たな秩序の成るにつれ、前に疑惑と衝突せし所のものは、謬誤の明かなる箇所を除きて、新たな知識を攝取し、再び信仰と

して認めらる。新たな秩序も歳を経て敗壞すべく、而して信仰も亦動くべく、後更に新たな秩序の成り、更に新たな信仰の繋るゝが、斯く信仰の動搖し又は固定する反面には、科學の斷續して發達し來るあり。人智の少しく進みて微かに科學の形を現はし、次いで科學らしきものと爲り、更に明かに科學と爲るまでに、如何に宗教と衝突し且つ和合せしかを觀れば、以て之を察するに足る。

されど社會の進歩せりとて、之を構成する人々皆同時に同様に進歩せず、或る部分は著しく進歩し、知識に於て原人と違ふこと恰も人類的猿類に於けるが如しとすべきも、多數は然るを得ず、極めて遲鈍なるに至りては殆んど原人と大差なし。故に太古よりして幾多の大變化を経たるに拘らず、太古に在せしもの之を全く消滅し了れるの甚だ稀れにして、何時代の事物も幾分の遺れるあり。宗教は科學的知識と離合しつゝ進み來りたれど、原人時代の習慣と同じきもの持續せるあり、上世と見做すべきものあり、中世と見做すべきの更に多きは言ふ迄もなく、孰れも信仰の常人に在りて満足するに適せりと謂ふべし。宗教の變遷は頗る著大にして、或る部分に他の或る部分と全く別物なるか

に見ゆるも、要素とすべきの共通なるあり。初め渾一的觀念を得んとして得ず、而も唯徒らに疑ひて已むべきに非ざるより、從來の格式を守りて疑ひを止め、又他人の言行に微し某々の信ぜし所を信ずれば謬りなしと爲す。ひたすら攻究に勵みて知り得ざる所に疑ひを存する者の目には、其の満足せるの頗る淺薄なりと見えんも、信仰者自らは以て十分なりとして満足す。人々各々性質に於て違ひ、中に甚しく好惡及び長短を異にするあり、或は研究心に富み、如何なる細事をも究めずんば満足するを得ず、而して宇宙及び人生に就て漠然相關せざるあり。或は宇宙及び人生に就て頻りに攻究しながら、細目に少しの疑ひを挾まざるあり、或は日常の用事を外にして何の考ふる所なきが如きあり。一方の他の一方に於ける、其の何が故に勞するやを解し得ざることあり、皆稟性及び境遇に出づ。

第五百十七節 幼稚なる科學と幼稚なる宗教と相衝突し若くは相和合するは有史以前より

の事にして、其の經過を明かにすること頗る難し。宗教の起源に關し種々の議論ありて、而も今猶ほ決せざるは之が爲めなり。事は認知せらるゝまでに既に複雑を致し、其の起源を尋ぬ

るに苦むこと、さながら幾多小流の相合して河を成し、唯一の源を擧ぐるの困難なるが如し、複雑なる情狀を一々分析するまで、事を明かにし得ることを期すべからず。遺物又は口碑に據りて判知し得るは、既に多くの事情の加はれ

るあり、或る宗教に於ける渾一的觀念は、絶大の力を有する者が宇宙を創造し之を主宰すといふに存するが、是れとて表面に唱へらるゝ如く簡單ならず、説く者と聽く者との間に多少の差違あり、前者は必ずしも自らの信する所を以て人に説かず、後者の信する所のみにて其の當時の宗教思想を判斷するは連斷に失せん

何れの國にも創造説又は開闢説の存するが、大抵幾分の譬喩を交へざる無し、婆羅門の傳ふる所は、聽く者以て事實と認めれど、説く者以て譬喩と爲し、たとひ自ら譬喩とせざるも、其の根據とせる書類の上にて譬喩たるの明かなり

カルデアより猶太を通じ神が世界を造りし事、大洪水ありて罪人を絶滅せし事等の傳へらるゝが、此等は事實として信する者の少からざるにせよ、其の幾分は譬喩若くは傳説にして、未開人の觀察し得たる天文地理を加味せること屢々

見るべし。或る時代には其の信すべき人の口より出でしに因りて信せざるべからずとせられ、

降りて歐洲に入り、一たび希臘人の知識と衝突したりしが、次いで其の知識を吸收して世界創造説を敷衍し、之に反對する者を窮迫して新たに科學の勃興せんとせし際に多大の懸擾を惹き起せり。

議論の起れるは希臘より藉り來りし知識と後世の科學的知識と衝突せるの多く、猶太傳來の宗教が何故に希臘の知識を藉りしかといふに、蓋し併せざれば時人を満足せしむる能はざりしなり。宗教に就て種々の定義及び解釋あるも、實際多方面に關係し、いはゞ人事の大部分に關係し希臘の知識を傳播せし社會に對し此に相應せる知識を備ふべき必要あり、其の天動説を藉りて之を固執し、以て地動説を壓倒せんとせしこと、亦宇宙觀の缺くべからざりしのみ。

宗教の科學と衝突するは概ね宇宙觀に於てし、宗教の爲めに備する者は、斯かる衝突は宗教の本旨にあらず、宇宙觀は何様にても妨げずといふが、其の妨げずとは他に之を補ふものある場合の事にして、宇宙觀なければ何等か之を備ふる所なかるべからず。宗教は科學と比し成るべく簡單なる方法に依て宇宙及び人生に關する知識を満足せしめんとするもの、智よりも情に訴ふるの多きも、早く疑念を除かんと欲してな

り。されど深き探求をこそ要せざれば、知識を要せざるに非ず、宗教は屢々宇宙觀の爲めに累を受けしかど、全く此より離れんは得て能くすべきに非ず。

第九章 宗教の傾向(中)

第五百十八節

或る知識を有し、又は或る經驗を有する者は、或る事物に就て此等知識經驗なき者と解釋を異にし、其の信する所の誠れるを知り、而して往々誤れるを知りつゝ之をして疑ふこと無からしめんとす、大人の小兒に於ける、醫師の病人に於ける、屢々然り。他の言ふを聴き已れ之を説破し、互に議論を上下するは、知識の稍々平均せる場合の事なり。社會一般に知識の進まざる際、説教者に於て秘密説と世間説とを分ち、世間に説くに世間説を以てするの最も都合好かるべし。疑ふ者、漸く増加するや、則ち秘密説を漏らし、疑ひ、生じたるは實は斯く、解釋すべしと辯じ、以て之を満足せしむ。疑ふ者、更に増加するや、秘密説を漏らすこと一層廣く、遂に秘密の秘密たるを失ひ、秘密説即ち世間説たるの形を具ふ。かくて秘密を公にし、而して尙ほ疑ひを容れ

られ、諸方より侮蔑を被らんか、教旨若くは宗制を一變するのピむを得ざるに立ち到る。

第五百十九節

儒教は祕密の少なきもの、孔子曰ふ、二三子我を以て隠すとなすか、吾れ爾に隠すことなしと。而も子貢は曰ふ、夫子の文章は得て聞くべし、夫子の性と天道を言ふは得て聞くべからずと、孔子は性及び天道に就て考ふる所ありしかど、輕々しく之を語らざるを可としたるべく、丘の禱ること久しと言へるも、常人の禱ると意味を異にし、特種の意味を含みたらんと察せらる。後人の性及び天道を語りしは、或は簡單に説き、祕密の存せるかの如くに説き、祕密の存すべかりしは老莊若くは佛敎に近似せし處に在り。平素老佛排斥を口にし、且つ之が爲めに盡力せしも、説明の稍、高遠なるは思考の順序より推して排斥の目的物と相隔るの遠からざるを認めざる能はず。飽くまで

排斥して已まざりしは、果して氷炭相容れざるを信じての事なるか、又は竊に暗合を許容せし所あるかは、疑ひなきを得ず。韓愈の主張せし所は明かに老佛と異なれど、宋儒の耳に甚しく淺薄に聞え、意氣と文章との賞賛されながら、道學に於て多く採るべき無しとせられぬ。而も宋儒は、陸派にせよ、朱派にもせよ、形而

上學的説明に於て頗る佛に近く、感應と因縁、人欲と煩悩、天理と菩提、明德と佛性等、一々對比すべし。中興と中興釋教、明の王陽明は佛を排斥し、務めて此より離れしも、名教を見るの輕重こそ異なれ、靜坐の工夫に於て略ぼ相同じ。元儒敎の徒も間々沈思默考して自然に修禪に類するありしも、佛敎に壓迫せらるゝの少き時代には、自ら以て安んじ、又は若干の高弟に示すに止まりしが、壓迫の漸く劇しく、世間の人も簡單なる説明を以て満足せず、進んで玄妙なる者を求むるに及び、前來のまゝに成し置くる者をして待つもなりと知れ、新たに發展を計れば勿論、單に現狀を維持するにも、議論を以て議論に對抗し、高遠を以て高遠に對抗するを要し、性も天道も頻りに談ぜられたるなり。宋儒以下の説は牽強附會の跡あるに拘らず、前に祕密に屬せしを發表せし者とすべく、仲尼顔淵所樂何事とて拈華微笑を暗示せしも強ち安ならず、古語の意を敷衍すれば斯の如きもの無きにあらず。若し依然として訓詁に専らなりしならば、文字を記憶するの效用ありとも、知識に何の益する所あらざりしなるべく、さる狀態にて差支なきは即ち進歩の停滯せる徴候にして、現に清朝の考證に流れ、兩

して文選の武運と與に振はざるは其の一例たり。日本が考證より陽明流に傾きしこと、實に形式よりも實效を重んぜしに出で、特に維新前陽明を學ぶ者の多かりしは、一旦思想の自由を得、務めて儒敎の實相を窺はんと欲し、なり。王學振興、聖學、新、古今雜說、遂、沈澗、唯能信得良知、字、即是義皇以上人の一詩、高弟、以て潮流を見るべかりき。

第六十節

佛敎は夙に顯密二敎を唱へ、新

たなる敎派の出づる時、先づ己れ眞實の祕密を傳へたりと稱し、更に新たなる敎派の出づるや、己れこそ眞實の祕密なりと稱し、次いで又新たなる敎派の出づるや、前なるは皆假説にして、今回愈々祕密の發表なりと言ふ。元由りて來れるの久しく、隨一雜多事情の混じ、或は偶像の前に福田を祀り、或は冥想して開悟せんとし、敎派毎に方式の違へるが、後は後ほど新祕密を以て前者に優らんと計りたり。天台は唯有一乘法、所謂三乘方便、一乘眞實法門也と言ひ、眞言は其の上に出でんとし、釋迦の説く所を顯敎とし、別に大日如來の敎法を標榜し、これ即ち眞の密敎なりと言ひ、禪宗は更に其の上に出でんとし、一切の文字を排斥し、無言の言に寄りて直ちに絶言の眞理を顯はすべき

を言へり。何等の教派も幾計か残存するの常なれど、人智の益々進みて従來の教義に甘んぜざれば、前に秘密にせられたる所が漸次公然と爲り、秘密中の秘密たりしものも公けにせらる。禪宗の謂ゆる見性成佛は何れの派にも存し、合理的の基礎を探れば斯かる邊に入り込まざる能はざれど、容易に此を公けにせず、偶像を掲げ之を崇拜し得る所の利益を説くに止むるが、世人が此にて満足せず、漸く嘲笑を以て迎ふるに至り、則ち秘密を發瀾して解嘲の料に供し、初め秘密として秘藏せしもの、後に公示し説明して憚らず。早くより念佛類似の事の存じ、此に就て種々の解釋あるも、識者の稱ある者は、其の佛を解すること他と大差なく、但だ想像と感情とを加ふるの多きのみ、識者ならざる者の間にも、佛も下駄も同じ木の切れなど言ひ、純粹なる禪宗若くは禪意を含める念佛の行はるゝあり。今日略ぼ道理を辨識する人にして眞に佛教を信するあるは、概ね斯様な見解に於てす。幾多の經典中、荒誕無稽の説の混じり、妄想の甚しきものもあるも、要するに方便の爲めにして、推究すれば、或る眞理の存し、其の眞理を信じよせば、餘は問ふべきに非じとは、今や殆んど尋常の解釋たるなり。

第六十一節 基督教に在りても、神を説き基督を説くの甚だ簡單に聞えながら、經典に記載する所及び説教に引證する所、知識ある僧侶の一一々信する者にあらず。公衆に説く所は一通りの談話にして、別に深遠なる意義あること、彼等常に之を口にす。羅馬法皇は明かに顯密二教を分ち、顯教の爲めに如何なる變則手段を運らずも妨げなしとし、俗間の迷信を煽揚し、偶像を飾り、呪文を誦し、無智の民を成しつ賺しつするに力を致し、而して法皇自身及び關係ある神學者は、別に自ら信する所あり、時には冥想して神に接せんとし、文字や儀式の末に重きを置かざりき。新教出で、羅馬法皇を奉ぜず經典を奉ぜんとせしは、經典を以て神理にして犯すべからずと爲し、文字に拘泥するの甚しかりしも、依りて法皇の羈扼より脱し、其れだけ思想の自由を得たりしに相違なし。科學的知識の増進し犯すべからざる經典の説く所と撞着するの發見せられしや、經典を守れる者は初め自ら是として敢て下らざりしも、確乎たる證據の現はるゝを見、強ひて對抗せずして却て順應し、或は世界創造の七日を七紀の義とし、或は巴比倫附近より人類の分布せしを説き、科學の事理の豫め認定せられしを明かにせん

としたるが、附會に過ぎて知識ある人を満足せしめ難ければ、更に經典は一々文字に拘るべきに非ず、裏面に潛める眞理を求むべしとし、或は神は宇宙の本體なりといひ、或は絶對に對し相對の生じ、二者合一して精靈となり、茲に三位一體の成るありといひ、古傳に就て深く關する所あらず。往代より續きし儀式は急に變改せらるゝ無く、老弱男女舊に依りて寺院に出入し、壇下に跪きて祈禱しつゝあるも、合理的解釋を事とするの既に廣きに及べること争ふべくもなし。時には著名なる科學者にして經典を文字通りに信じ、奇蹟を疑はざるあるも、此等は一部腦力の格外に發達し、他の部分に缺陷ありと解せらる。合理的解釋は未だ一定せず、解釋の名を値する者もあらざれど、識者の信する所は既に已に此に傾けりと謂ふべし。而して是れ往昔秘密説として存し、後少しく公然となり、漸くして世間に説かれたるなり。

第六十二節 何れの教派にも多少の秘密なきにあらず、其の秘密は伴得らるゝ限り保ち、人智の進歩に伴ひて之を公けにする、謂ゆる窮して奥の手を出すものにして、教義の深淺は是れより初めて明白なるを得。神山王アリトレスありて王に告ぐ、アリトレスは基督教の書を出さず、エアリトレスを誦りて曰く、基督教にして公にせらるれば吾れ何を以て榮に算な

らんと。アリヌミヲ答ふる一而も深淺こそあれ、各
教の秘密は概ね觀念論の性質を帯び、古も
今も大なる差違なし。自然界の經驗に乏しき社
會は、或は日月星辰を拜し、或は森林中に鬼
神を認め、衷心より畏れ敬ひしかど、一部の
は其の眞に畏るべきに非ざるを知り、口に之を
敬ひて心に之を敬はず、自ら信するは別に在
るあり。説く者は時代の迷信を活用し、之を
誇張するを厭はず、稍々久しきに及びて離るべ
からざる關係を生ぜるが、後科學的知識の進
み、前に信せられたるの疑はるれば、初め之を
防がんとし、防ぐべからずして此に順應するに
勉む。而も自然界の事は多く秘密に與ること無
く、秘密は觀念に存し、自然界に何事ありと
も觀念の觀念たるを失はずとして自ら安ん
じ易く、此處に最後の根據地を置くの多し。觀
念論の單純なるは、萬物皆我に備はるといふの
類にして、偶々自我に疑ひの生じ、外に神あ
りて自我を支配するやに考ふるが、此の場合に
は神を大我と認めんとする傾向あり。即ち總じ
て皆觀念にして、大我の中に小我あり、小我の
大我を知るは即ち世の謂ゆる情なりといふに
歸着す。人智の開くと共に自然科學は駁々と
して進み、復經典に説く所を以て之に當り難

く、自然に斯かる觀入感論に籠城するの已むべ
からざるに至る。當初此に考へ及ぶは極少數の
人に限られ、大多數は迷信に甘んずべきものと
定まり、後知識の進歩するに隨ひ、前に極少數
に限られしもの、漸次多數の間に擴がり、秘密
が秘密の性質を失ふこと爲る。今日尙ほ經典
の文字に據るの多けれど、斯かる趨向の年を逐
ひて益々擴展するを事實とす。明白に見るべ
き變動なきも、冥々裡に之れあり。

第十章 宗教の傾向(下)

第六十三節 宗教にして知識ある人の信ず
るは概して觀念論に於てす。初より觀念論を
好みに非ずして、前來の習慣にて守るべしと
せられしを守り、祈るべしとせられしを祈りし
なるが、漸く批判に長じて漸く疑ひを生じ、曩
に空間に靈あるを信ぜしの誤れるを認め、之に
福を祈りて效なしとし、跪拜する者を迷信視す
るに至りたるも、尙ほ觀念論に興味を感じ、
茲に自らの信仰を繋ぎ止めたるなり。人は靜か
なる處に在りて沈思默想すれば、髮髯として小
我の大我に冥合し、世間の苦樂を遺忘し、一種
の悅樂を感得することあり。此に於て種々の名

稱の與へられ、種々の方法の講ぜられたるが、畢
竟するに思想の關係を辿り、變化の多き處より
其の少き處に徙る者にして、性癖よりするにせ
と、境遇よりするにせよ、斯かる事に長ずれば、
此に長ぜざる者の念ひ到らざる所に到り、
以て善く樂むに堪ふ。さる人の眼には、能く然
るを得ざる者の頗る憐むべく見え、如何にして
安んずるかの怪まれんも、自らの安んずる所も
必ずしも十分の理を盡せるに非ず。
思想の關係を辿りて或る邊に止まり得る者
は以て姑く満足する所あれど、止まり得ざる者
も少からず、特に或る邊に止まりし者も、一た
び思索を續くるに於て、前に満足せし所の實に
淺薄なりしを發見するなからず。總てが觀念
なりと斷定せる結果、自然界の轉むに足らずし
て、何様の事實も重きを置くべからずとするあ
るも、考察すること一層深きに及べば、總てを
觀念と認めしとして宇宙觀に何程の變化を生ぜ
ず、却て新事實に伴ひ新法則の確かめらるゝ
と共に此に順應するの當然なるを覺ゆ。且つ
均しく觀念論なるも、異論百出し、或る一派
の安んずるは、他派の安んずる者ならず、己
れの是認する所に安んじて可なりとするも、推
究を要するは轉た考ふるの煩はしきものあり、

抽象的に關係を消滅し、「スピリ」若くは神學的に概念の發展を迫り、「ヘーゲル」以て大衆と冥合すること、容易の業にあらず。其の煩はしきを厭ひて此より遠ざからんとせば、道理の足らざる憾みあり、推究と信仰と並び存せずとて、道理は道理、信念は信念として相別つの違ふべからざるに及ぶ。

第六十四節

世に觀念論を基礎とし、徹頭徹尾道理を以て立たんとする者なきに非ざれど、其の數甚だ少く、且つ普通に謂ふ所の信仰と違ひ、寧ろ純然たる哲學の範圍に入るを以て、信仰を事とする者は勢ひ他に途を求めざるを得ず。物質的な靈より脱して觀念論に歸せしも、次いで、觀念論の煩はしきに堪へずして、再び此より脱せんとするに至れるが、此より脱して何邊に向はんとするか。今日知識ありて而も信仰ありと目せらるゝ人は、古來の傳説を其の儘に信ぜず、經典に誤謬あるを言はるれば、之れあるを許し、奇蹟の有り得べからざるをも許し、敢て神聖を口にして辯護を試みず、中には特別に靈體といふ者の存在せざるを明言して釋らざるあるが、而も彼等は寺院に説教を聽き、家族と共に祈禱を捧げ、時として自ら神の功德を賞賛することあり。蓋し其の信ず

る所に他にあらざ、斯くするの即ち義務を維持する所以にして、又人生の義務たるを念ひ、形式の如何なるも、議論の如何なるも、靈はしき氣風を養ひ得れば足れりとするなり。是れ理なきに非ずして、或る社會に於て常識を備ふる者の自然に考へ及ぶ所、其の人の判斷にては、宗教は個人の信仰に存せず、徳性涵養の機關として存するもの如し。

初め寺院の建造せられしは種々の事情に因る、或は僧侶に於て收入を増さんが爲めにし、或は王侯に於て權勢を張らんが爲めにし、或は名聞家の喜捨に出で、或は迷信家の福を求むるに出で、原因は必ずしも稱すべきに非ざりしも、其の成りしより既に幾世代を經、多數信仰者の出入せしを以て、感化の及べるも少からず、弊害ありとも、利の之を償ひて餘りあらん。既に秩序の成り立ちて人々茲に安心を得、相共に善に就き惡を避けんとせば、之を維持すること之を破壊するよりも人類の幸福を増す以所のものなり。人類は理智のみの動物ならず、感情の加はれるの頗る多く、感情よりして生活の愉快もあり。神の有無奇蹟の有無等種々の議論あるも、今の不十分なる學問を以て何ほどの事を究め得べきに非ず、假りに之れ有りとするの人事に益せんには、則ち爾するの可ならずや、神を想像し奇蹟を想像するは少くとも詩的の興味を感ずるに足る。或は空想に止まるを非難する者あるも、空想とて一概に斥くべからず、神話なり、昔噺たり、無害の者は世に行はれて妨げなし。經典は何様にも批評し得れば、由來經典は批評すべき書ならず、一讀過すれば、一種の趣味の存し又教訓たるべき者あり、強ひて之を打壊し去らんとするは心なき沙汰と謂はざるを得ず。現に觀る所を以てするも、人々の寺院に留まる間、幾許か世俗の觀念を離れ、且つ若干信徒と稱合して友情を増進するなきに非ず。弊害なき限り、一般の習慣に従ひ、信ずべしとせらるゝ所を信ずるを最も穩當の行爲とすべしと。以上の如きは往々耳にする所にして、かく議論に執着すること無く、傳説の如何、觀念論の如何を差し措き、唯現在の事實に徴し、宗教の人道と離るべからざるに考へ及ぶは、識者の稱ある者の間に珍らしからず。

第六十五節

當代の宗教如何と觀るに、先づ幾種の建築あり、名づけて寺院といふ、内に管理者あり、日を定めて講演し、多少の聴衆あり。人死すれば此處に運びて或る儀式を執

するの人事に益せんには、則ち爾するの可ならずや、神を想像し奇蹟を想像するは少くとも詩的の興味を感ずるに足る。或は空想に止まるを非難する者あるも、空想とて一概に斥くべからず、神話なり、昔噺たり、無害の者は世に行はれて妨げなし。經典は何様にも批評し得れば、由來經典は批評すべき書ならず、一讀過すれば、一種の趣味の存し又教訓たるべき者あり、強ひて之を打壊し去らんとするは心なき沙汰と謂はざるを得ず。現に觀る所を以てするも、人々の寺院に留まる間、幾許か世俗の觀念を離れ、且つ若干信徒と稱合して友情を増進するなきに非ず。弊害なき限り、一般の習慣に従ひ、信ずべしとせらるゝ所を信ずるを最も穩當の行爲とすべしと。以上の如きは往々耳にする所にして、かく議論に執着すること無く、傳説の如何、觀念論の如何を差し措き、唯現在の事實に徴し、宗教の人道と離るべからざるに考へ及ぶは、識者の稱ある者の間に珍らしからず。

行す。初め建築の際に既に若干の基本資の備はりたるべきが、尙ほ新たに金錢を寄附すれば多寡に應じて尊厳を受くことと爲り、寄附金を勤むる者と此に應ずる者と相俟ち、或る局面に勢力を維持し又は擴張す。此に加はれるは雑多の事情よりせるも、多數は前來の習慣に依りて知人及び己れの福を祈り、間も前に信ぜしを疑ふあれど、他の疑はざる者は時に替ること無く、疑ひの生ずるは宗教の本質に關せず、宗教は人々相集まりて麗はしく和合するに存すとす。事は固より概言すべしに非ざれど、宗教として存在する所の實際は此の如しと謂ふべし。寺院といふ建築物は宗教の存續に影響するの少からず、此に關聯して組織せられしものは、甚しく衰微するとも、容易に滅亡するに至らず。古代の習慣が多大の變化を経て尙ほ持續するより察すれば、多額の費用を投じて建造せし寺院の下に組織せられしもの久しきに續くは事の自然なりとすべく、社會の秩序を保持するに缺くべからずと目せらるるも強ち迷誤ならず。

されど習慣に負ふ所、即ち惰力に負ふ所の多きは、言ふを俟たず。堅固なる建築物多額なる積立金の残存せるだけ維持の確實なる管

にして、信徒ありての寺院たるよりも寺院ありての信徒たりと見ゆるの稀れならざるが、信徒の思想の何時しか變化するは免れ難き所なるべく、大略知識の進歩に比例して變化し、其の變化は一面に於て社會の進歩を示すべし。宗教が徳義に必要ななりといふは殆んど確定せるが如く、實に爾か見做して不可なきあるが、又爾か見做すべからざるものあり。歐洲の西北部は、寺院の壓迫次第に弛解して漸く思想の自由を得、或る程度まで宗教と徳義と平行するあり、以て宗教の徳義に益するを言ひ得んも、其の南部は寺院の勢力尙ほ熾盛、果して徳義を高むるの效あるか、將人を困陋にする弊の更に大なるものあらざるか、疑ひなきを得ず。約するに今日の宗教は勢に由るものにて、其の效用を説きて之を盛んにするの困難なると共に、無益として之を排除するも亦困難事に屬す。盛んなるべき時に盛んならしむるに任せて、衰ふべき時に衰ふるに任ずの外なきも、現に識者の此に加はりつゝあるは、往年の如く福を希ふに非ず、宇宙觀の得らるべきを認むるに非ず、社會の秩序を維持し、徳義の廢類を防ぐには、多年存續せる機關に依るに若くはなく、若し此を破滅せんか、人心の歸する所を失ひ、各階級

間の友情も消滅し、人々貪婪の態を恣にし到らざる無からんことを恐るゝなり。且つ世間より神祕的思想を除き去るの曉、事々物々理窟詰めと爲りて餘りに殺風景に陥るべく、時に神を想ひ靈を考ふるは、詩を賦すると同じく情操を豊かにし、生活に趣味あらしむべしといふこと、亦與る所なきに非ず。觀念論の區々にして煩瑣に失するに及び此邊に防守すること爲りたり。

久しき習慣は變易しつゝ、幾許か存續するの常なれば、何れの教派も全く消滅すること無かるべきが、社會の知識ある部類の漸次範圍を擴むるは、順序の然るべき所にして、又最も望むべき事とす。此等は多く習慣を重んずるもの、秩序を維持し徳義を作興するに宗教の效果あるべきを認め、故さらに破壊を試むるが如きあらざるも、何時迄も知識なき者と行動を同じくするを得ず、如何に昔時の信仰其のままに存するあるも、永く然らんことを必ずするに由なし、思想の變遷を察し來れば、將來に於ける宗教の傾向は略ぼ知るに足らずや。宗教の附屬物は舊に依りて存するも、嘗て占有せし領分は漸く縮小し、既に宇宙觀に就て教權を失ひ、將に人生觀に就て失はんとす。而も宇宙觀及び人生

られずといふも不可なし、爲めに宇宙全體に關して知る所あらんとし、而して動もすれば科學に於て絶望することあり。加ふるに科學の進歩は多くの分科を意味し、前に一科なりしもの、次いで數科に別れ、更に幾科かに別れ、或る運動の研究、或る液の研究、或る蟲の研究等、各々一科として専らなる所あり、或る範圍を限りて閉ぢ籠ると同時に、全體に就て殆んど全く與り關する無し。科學の發達に伴ひて宗教に疑ひを挟み、昔時傳來のものを迷信として排斥するにせよ、神が世界を創造し、神が世界を支配すとして満足せし所をば、更に如何にして合理的に解釋すべきやの知られず、其の知られざるよりして、前に何事も科學に據らざるべからず、苟も科學的に研究せば事皆判明すとせし反動として、即ち科學萬能説の反動として科學其の物を疑ひて特に效能あらざるを言ひ、茲に宗教に復歸せんとするの催かならず。〔科學萬能説は外邦而も過去は勿論、而在も近き將來、科學の及ぶる所甚だ多し、唯其の諸明を人に、實に授けず、よそと早く科學を懸念するに至つては〕かくて知識慾の満足よりせば、科學は時として退歩し、信用を失ふことあるが、畢竟するに少しく退いて大に進むと見做さるべからず。

科學が幾分科に別れて小事に専らなるは、大

なるを忘るゝ嫌ひあるも、是れ亦斯くして未知の範域に侵入するもの、愈々微を穿ちて愈々知るの精なるべきが、各方面に知られたる徵を集むれば、前に茫漠として學藝だも得ざりしもの聊か理解せるが如く感ずること無きにしもあらず。固より短日月の能くする所に非ざるも、或る時期に達し、宇宙全體に關する何等かの解釋を得、以て姑く安んずるに堪ふべし。知識の進歩は須臾も已むことなく、遠からず種々の疑問の出で既成宇宙觀をして全く崩壞に終らしめ、更に若干の歲月を経過して或る時期に達し、又新たなる宇宙觀を得、以て姑く安んずること爲るべし。科學は宗教の満足せしめし所のものを悉く解釋し得ざるも、時として相近づくこと無からず。宗教は宇宙を或る靈體に附屬せしめ、全體を解釋する者にして幾分の論理を整合し、或る時代に於て知識慾を満足せしむるの效あり。而も其の解釋や頗る單純にして、科學の前に位置を占むるの難く、科學は故さらに宗教を破壊せんとせざるも、自然に其の勢力を減殺する所あり、又故さらに此に代りて解釋を與へんとせざるも、知識の組織立てるもの即ち科學にして、知識の足らざるを補ふは即ち科學の任なり。隨て宗教に於

て知識的部分を失へば、科學にて之を補ふこと、順序の然る所とす。宗教の對象は甚だ廣く、いはゞ絶大なりとすべく、科學の悉く解釋を與へ得べきに非ざれど、幾許か此に接近しつゝあるを疑ふべからず。知識ある者在りては、宗教に依りて満足するよりも一層満足するを得、現に満足せざるも、異日満足すべきを信するあり。

宗教の知識的部分に代るべきは哲學なりとの有力なる説ありて、往々微候らしき者の現はる。原理の科學といひ、諸科學の科學といふ所よりするも、宜しく爾あるべき筈なるが、近年の情狀を觀れば、哲學は徒らに過去を顧み、昔時斯く々の體系ありしを言ひ、其の脈絡を詳かにし、其の變遷を尋ぬるに勉むるも、現在の知識慾に満足を與ふるの極めて少く、尙も現在の問題に接觸すれば、それは認識論にして、其れさへ歴史に備せんとする跡あり。稱して精神科學とせば、或る一種の科學たるも、各種科學中の一の科學、多方面に於ける一方面に過ぎず。一方面に潛心して廣きを問はず、且つ眼を閉ちて得る所あらんとするが故に、眼前の森羅萬象に對し全く没交渉たることあり。今の謂ふる哲學は餘りに消極的に失して、宗教に失ひ

渾一的觀念を得るかと言へば、亦必ずしも然らず。

當代の社會は知識の材料に富み、此の點に於て遠く前代の上に出づれど、人々或る部分に専らにして、部分を以て全體を推すも、部分と部分との關係を尋ね、全體に及ぶの多からず、過去の渾一的の觀念を打壞りながら此に代るものをも求むるに急ならず。各部分の間、關係の密なるあれば、又疎なるあり、直ちに全體を統合し得べからざる事情の存し、ひたすら將來に於ける進歩を望まざるを得ず。今日にても全く統一の破れて支離滅裂なるに非ず、或る部分に缺陷ありて他の部分と聯絡するに苦むのみにて、缺陷を缺陷とし、全體に互りて統一を計り得ずとせず。實に人々自ら知らずして統一を計り、或は之を得たりとして安んずるもあり。

缺陷の多くして、最も整備せる部分に伴ふべき渾一的の觀念の得られざる憾みあれど、自己を圍繞する所のものが事實にして假空にあらずといふを認知する傾向ありと爲すべし。(社會狀態の複雑ならんとする昔の社會の統一し得へるは、所を再見しんば遂に能くす可らざるも、複雑たる社會の統一は、有機的の關係の各部分相互に一切の知識は總括に歸着するべき實地記録の各部分相互に知らざらずにて知ることも、他方にて認めざるのみならず、統一を求められざるに非ず、以下述べる所は即ち非つとも一致と意識の明瞭を加ふると共に、如何に宇宙なるを認識す可きかを説かんとする也。即ち能動的統一と爲すは、直接間接の經驗を三分し

宇宙の觀念を占めつゝ(關)

古より或る種類の認識論あり、現世の事實なるや假空なるやを討究するに務め、今日に至りて尙ほ同系統のもの存し、實在と現象とを別ちつゝあるが、假空と認むるだけは、大に減せりとすべく、偶々之れあれば、後年擴充し來れる知識に與らざりしに出づ。幾何か諸科學の成果を伺ひしものは、現世を以て事實とし、假空に非ずとす、而して其の益々事實と認むるは、即ち一面に於て各部分の關係の緊密なるを認むることを意味す。諸科學は必ずしも相互の間に密接の關係を有せず、専修家は他に何事の存するを顧みざる有様なるが、一部分に専らなるは他を無關係とするに非ず、各自専らなる所あれば、自然に相接近し相協合すべしと爲すもの、己れの領域内に若干小區分の生じ、微細なる關係を覺ゆると同じく、他の領域に於ける研究の報道を得、廣きに互りて關係の頗る緊密なるあるを知り、研究の進むに隨て

既に關係の外に關係を發見すべきを豫定せざらんとして得ず。研究は畢竟するに關係を尋ねるものにして、關係を知ること益々密なれば現世の事實たること益々明瞭を加へ、其の明瞭を加ふると共に益々之が關係を尋ねるの

必要を感じ、何處迄も尋ねざれば已まざらんとす。現世を假空とするは事物の關係を疎略にし、有るも無きも妨げなしと考ふるが故にして、關係の縱横に緊密なるを知れば、到底斯く考ふることは能はず。科學的知識を得たる者は皆現世を以て假空とせず、其の事實なるを信じて此に力を致すを辭せず。關係の明白を缺くものに對する處に存し、其れ支け疑ひを免れざれど、往時と較ぶれば大に明かなりと謂はざるべからず。

第七十節 小兒の成長して知識の進むといふも、關係を知るの多きを指すのみ。(參看七、四) 初め母の懷裡に在ることを知り、次いで家族との關係を知り、次いで近隣及び市街との關係を知り、然る後に社會との關係、各國家との關係を知り、更に此と共に祖先との關係を知り、建國との關係を知り、而して己れの何物たるを知ることを益々熟す。但し往時は既に成長して老年に至りし者も此邊の關係を知るに止まり、是れ以上に就て多く知ること無かりしに、今は關係の知らるゝ所遙かに廣く、且つ遙かに精微なり。前に地球を以て全世界と爲し、日月及び星を隕石又は電光と同類なりと心得しに、後算數の進み、望遠鏡の構造も改

まり、螢ほどの微光を放つものも實際地球と列を同じくし、容積に於て地球より大なるもの極めて多く、之に百萬倍する太陽の如きが略ぼ一億も計へられ、尙ほ計へられざるの幾何なるを知らず、且つ此等無數の恆星に幾個かの遊星の伴ふべく、而して全體を通じ關係の緊密なるを認むるに及べり。かくて遠くして大なる關係の愈々明かなる反面に於て、近くして小なる關係を尋ねんとし、分析の方法の進み、顯微鏡の構造も改まり、身體の元細胞より成り、細胞は即ち生物の單位なるを認めにき。今後研究の進まば、關係を知ること大は愈々大を加へ、小は愈々小に入るべし。

前に過去の事を知りしは、最も古くして建國の當初に止まりしに、後史的研究の進みて其の以前に上り、更に人類學、生物學等と相俟つて有史以前に上り、生物出現の順序を知り、地質學の進歩に依りて地層成立の順序を知り、尙ほ星學の進歩に依りて總ての星の成立せし順序を知らんとしつゝあり。かくて過去に測れば愈々遠く、殆んど無限を追ふの姿なるが、將來を察するも亦愈々遠し。嘗に十年二十年の後を測らざり、嘗に百年の後を測らざり、嘗に列國の興衰、人類の運命を測らざり、更に一層の遠き

に及ぶ。若し地熱にして甚しく冷却せんか、生物の存在に大なる影響を興へ、消滅するの頗る多かるべく、若し又太陽の熱にして甚しく冷却せんか、恐らくは何物も生存せざるに至るべし。或は能く生存するに堪ふるありとも、地球は何時か太陽内に没入して壞滅すべく、否らざるも太陽が巨星と衝突し若くは其の内に没入する際、地球は全く形を失ふべし。地球が壞滅し、太陽が壞滅し、壞滅して氣體と化し、後漸く凝聚し固結して運行し、更に又壞滅して氣體と化す。此の如く星界に變化の行はる、事、即ち人類の絶滅する迄かの後までも推測するに難からず。一切の生滅は何れの世にも考へられたれど、今日考へらるゝの詳かなるに苦くなし。今も不十分なるにせよ、大は幾億々千里より小は毫厘の幾萬分一に及び、過去は幾億々千年の前より、將來は幾億々千年の後に及び、何程か確かむる所あり。

第七十一節 眞に宇宙は網の極めて大、日の極めて小なる關係の網にして、吾人は盡く此に繋れるもの、之より脱するは全く不可能に屬す。

確して因縁とせば則ち深き因縁にして、上も下も東西も南北も際涯の知らざる空間に在りて密接の關係を有し、過去も現在

も將來も際涯の知らざる時間に在りて密接の關係を有し、今後各部分の研究の進むに従ひ、益々關係の緊密なるの明かにせらるべし。一毛の微も徒らに存在せず、皆絶大なる宇宙と離るべからざる關係あるの判然たるに至れるが、而も宇宙の絶大なるの知らるゝと共に、人類の殆んど絶小なるを想はざらんと欲して得べからず。曾て人は萬物の靈長にして、神は人の爲めに萬物を造れりとし、或る花園に居れば若くは意の如しと想像し、後地球の太陽を運るを知れるも、舊の如く自ら萬物に冠絶すとし、太陽は何ほど大なるにせよ、唯一個の灼熱體に過ぎず、苟も人生の如何を討究せば、以て宇宙に對する知識態を滿たすに足ると信じ、人生觀即宇宙觀たるの狀態なりき。近時知識の著しく進みしに拘らず、猶ほ斯く考ふるの少からざれど、一たび宇宙の絶大なるに想ひ到るに、己れの一微塵ならざるかを疑はざるはす。大

さに於て地球は有無を問ふほどの價值なく、此處に棲息する生物は眞に言ふを欲せず、將久しきに於て地球は存在期間の極めて短く、此處に棲息する生物は眞に言ふを欲せず。人生の何たるを觀るに、或る期間に成る個所に在るは、一小現象に過ぎず、其の物の存在せざるも、宇

宙は依然として宇宙たり、大小幾億の星各々或る軌道を定めて運行し、而して幾億々々年を通じて何等かの變遷を遂ぐ、如何なる人生觀の成り立つとも、宇宙の廣大と久長とを悟れば、自らの弱小なるを想はざらんこと難し、凡そ事として關係なきは無く、人と環象と固より相離れざるも、宇宙に對し此より一層大なる關係を有するものある處に之れ有り。考へ來れば、何人も人生の餘りに輕微なるに驚かざるを得ず、其の餘りに輕微なるに驚くと共に、絶大なる宇宙の何物なるや、唯徒らに運轉するに止まるや、或は別に深き意義の存するあるやと問ひ、而して惑ふ所なきにあらず。(三十五)

人は既に幾回も自らを最も貴しとし、人生は靈にして物質を超出し、幾多の星は大は則ち大なるも皆無生物無機物にして泥土に異ならずと言ひ、甚しきは一室に閉居し、靜思冥想して宇宙を吞吐せんと試みたり。されど知識の進歩は暫くも已まず、觀察に、實驗に、且つ數理的に研究の遂げらるゝや、自己と周圍の物象との關係漸く明白と爲り、初めこそ多く注意を拂はざれば、益々明白なるべきを覺えては、如何に之を打消さんとするも能はず、外界を疑ふは身體の存在を疑ふと同じく、若し己れの呼

喊し飲食するを信せば、人生も地球も太陽系も宇宙に於て極めて微小にして早晩消滅したるべきを信せんことを餘儀なくせらる。或は人の他に靈は自覺するに在りとするも、宇宙に於ける關係を自覺するに伴ひ、自己が特別の價値なきを自覺するなきにしも非ず。人は斯くまで價値なくして宇宙は唯徒らに運轉するものなるか、從來の宗教は頗りに人生を説きしも、此に至りて全く沈黙を守るの外なし、彼れは地球に於ける人生に注意し、他の一切を措いて問はざりき。人生なき宇宙は何なるか、果して絶大なる無生物無機物なるか、嘗て人生觀を重んじ宇宙觀を輕んぜしもの、今は一轉して宇宙觀を重んじ、大よりして以て小に及び、宇宙觀即ち人生觀たらんとす。

第二章 知能と宇宙(下)

第七十二節 人類も、其の居る所の地球も、宇宙に在りては equal として小なるは掩ふべからざる所、近世科學の進歩は之を證明すること益々著し。嘗て萬物の靈長として自ら高し自ら安んずし付け、茲に不快を感じ、何がなして價格を回復せんとし、爲めに心ならず

も科學に反抗し、附會說に如かんに附會說を以てし、實際の争ふべからざるに按じ、漸く默認するに至れること、屢々之れ有り。人類が靈敏と首先を同じくするといはれし時、如何にもして之を否認せんとし、而して遂に能くし得ざりき。地球が太陽を運り、太陽が一言大なる星を運り、地球が幾億遊星の一に止まるの知れし時、亦如何にもして之を否認せんとし、小は即ち小なれど、宇宙の中央に位し、最も能く進化せりとして滿足を計りしが、假りに之を許容するも、後百萬倍の太陽に没入し、吞らざるも何時か消滅の期あるべきを疑ふ能はず、何れの點よりするも、無限の空間無限の時間に在りて我が地球の有無さへ言ふに足らざるの明白にして、自ら人生の果敢なきに想ひ及ぶ。

人類の嘗々として奔勞するは何の爲めなるか、山中の蟻、穴中の蟻、若くは清濁中の微蟲と、果して幾許の差違がある、科學の進歩は其の差違なきを明かにせざれば已まず、之を認むるの不愉快なるよりして、務めて科學より遠ざからんとするあるが、全く科學より遠ざかりて舊の如く獨り妄想に耽るべきか、又は科學の提供する儘に唯事實を事實とすべきかといふに、苟も知識慾の熾なる限り、事實を事實とせ

ずして自ら安んずる能はず、短處を短處とするは強ひて短處を忘るゝに優るとし、效果の如何を慮るの違あらざらんとする狀あり。或は無益の事に屈託すと想はれんも、當人に於て到るべきに到るの外なく、到るべきに到らざるは何よりも苦痛に感ぜられ、人類の價格の減ずといふ恐れに代ふる能はず、實に勞の奈何ともすべからざる所といふべし。但だ事實を事實とするが爲めに人類の價格の減ずるが如きありや否やは疑問たるを免れず。人類の價格の減ずる故を以て事實を事實とするを禁ずべき理由を發見するに難かるべきが、姑く確實の理由ありとするも、謂ゆる人類の價格の減ぜんなど元恐る可らざるを恐るゝに出でたるに非ざるか。暗室に居ること久しく、而して卒然出でて日光に接せば、爲めに眼眩せんとするを常とす、眼眩せんとするを以て何時迄も暗室に居るべきか、又は忍びて暗室を出づべきかは多く考ふるを要せず。往昔萬物盡く人類の爲めに存在すと認めし時代に比し、人類が一小星の上に蠢動する極微物に過ぎずとすること頗る不愉快らしと思はるれど、之を不愉快とするは、恰も暗室を出でて眼眩せんとするに類せざるか。即ち豫め人類の最も貴きを想ひ、以下獸鳥魚

介より植物に至るまで生命を保ち一繁殖し、餘は一切骸骨と同様な死物なりとし、宇宙の廣大無邊なるを知るは人類が死物の絶大沙漠に葬らるゝを知ると同じく、何となく心細く感ずるに非ざるか。されど眼一たび眩せんとして之に堪へたる後、周囲の物象漸く明瞭を加へ來り、暗室に居りし時の却て不愉快なりしを念ふに至る。科學は人類の極微なるを證明すると共に、單に宇宙の廣大無邊なるを示さず、進歩すれば進歩するほど愈々或る深き意義の存するを示さん。

第七十三節 宇宙の大なるは夙に知られたれど、實は眞に知られず、大とても知るべき者にして、隨て侮蔑の念の伴ひ居りたり。當時大なりと云へば山や海やを指し、自ら著海の一粟に比せるも、是れ以上に多く大なるものを認めず、而して千山を踏破すといひ、四海を横絶すといひ、總て人力にて支配し得べきかに思ひにき。地動説につれて地球の一遊星たるを知りしも、尙ほ重きを置くは太陽にして、他に注意を拂ふの深からず、眼界の廣きを加へしも、宇宙の一小部分に限られぬ。既に太陽系と同大以上のもの幾千萬なるやの知られざること爲り、徐ろに其の廣大無邊なる

に驚かざるを得ず。前にも廣大無邊の語ありしかど、後と内容の大に異なる者あり、知られたる星數に於ても三千と一億との差あり。加ふるに無數の星辰は唯徒らに廻轉するにあらず、構造も運動も共に極めて複雑にして地球の生物より遙かに優れる所あり。若し生物を生物として死物より區別するならば、宇宙全體を如何に觀るべきか、普通に生物と名づくる所と形質を異にするの甚しく、遂かに生物とするの困難なるも、さりとて直ちに以て死物とするは更に當て失ふ。臆じて生物と同列にし得ずんば、寧ろ生物の上に置くべし、決して其の下に置くべからず、實に考ふるに従つて生物を超越する生物たるの明白なるを覺え、如何にするも死物とするを得ず。以て死物とするは一小部分を見ての事にして、僅かに一小部分を見れば、普通の生物にも死物とすべきものあり、人類の髪を切り爪を切るや、是れ皆死物として離る、而も人類は依然と存す、髮爪の死物たるを以て人の死物たるを斷定すべからず。山海を死物視するも、一旦宇宙全體の活動を察せんか、其の生物たること、若くは生物以上たることに考へ及ばざる能はず。宇宙全體としては關係の極めて緊密にして、大と無く小と無く皆相互に關

意識せずして解決し去る。かくて意識は必ずしも人事に伴はず、意識なくして行爲の誤らざるもあるも、意識なくば、明暗も苦樂も感ぜず、生存するの效能もなかるべしと言ふ者あれど、宇宙全體は人類に比し、力も遙かに大、機關も遙かに複雑にして、人類の身體に伴へるよりも更に遙かに超越せる者あらんも圖られず。其の何様の狀なるやは今日全く知るを得ず、幾億々々里の速きに彌り、幾億々々年の久しきに及び、活動し變遷する所、眞に茫漠を極む。但だ科學の進歩は幾分なりとも之を知るに近づくもの、而して之を知るは即ち人類の宇宙に於ける關係を知るものなり。生くるも、死するも、常に宇宙に在りて絶大なる活動に與る。生命の何たるやは未だ明白ならざれど、已れに生命ありといふより推し、宇宙に之と同等以上のものであるを想像せざる能はず。宇宙間に存在する一切は相互に密接の關係を有し、如何なる微物といへども之より漏るゝあらず、身體分解後の元素若くは化合物は永遠に何等かの關係あり。

一釐一秒の微も、或る必然の結果にして、又或る必然の原因たり(「新學九十四」)。人類は極微なれど、宇宙と密接の關係を有すること他、何

物にも譲らず。大なる物は小なる物の集團にして、小なる物は他と密接の關係を有し、關係の上より言へば大なりとして妨げなし。生命は長くて百年と稱するも、身體構造の元素又は力は幾億々々年の久しきに續き、其の久しき間に多様の變化を経過すべし。今は現に生命に認むるが如き生命あり、生命は此の如きものと斷定するも、幾億々々年に彌り、幾億々々年に續くの間、必ず想像の外に出づるものあらん。されど宇宙の絶大なる活動は曾て已むべくも考へられず、幾億々々年を通じ順序を逐ひて千變萬化する所、尋常の生命を超越すること遙し、此の中に存在して死すると見ゆるは一時の事のみ、宇宙全體の上に於て死といふを考ふる能はず。科學は人類を一分子として包含する絶大なる生物若くは生物以上のものの生活狀態を明白にせんとするを究極の目的とす。人類は科學の爲めに小にせられたる觀あれど、又之が爲めに絶大なる宇宙との關係を知り、生命の永遠なることを知るものと謂ふべし。科學の進歩は思はしからず、且つ常に想像を混入するも、科學の證明を畏れて全く想像に耽るに比し、知識ある者の知識慾を満足せしむるに適せん。

第三章 感能と宇宙(上)

第七十六節 知能に對し、宇宙萬象は相互の間に密接の關係を有し、如何なる部分も他は一切と關係ありとして現はる。身體は僅かの期間のみ存在し、次いで分解して元素若くは化合物に還り、或は新に化合し、遊離し、復化合し、後久しきを經て元素自らも變化すべきが、常に宇宙と何等か關係を保ち、其の點に於て誰かに不滅とすべし。されど斯かる不滅は全體と同じく、寧ろ全體の掃ぶべく思はる。古來人々の身體又は靈魂の不滅ならんことを望みしは、永く苦樂の附き纏ふとしての事にて、苦樂の、錯綜し、快感の増進するに非ずんば、特別の不滅を欲せざりしならん。宇宙が何様の組織なるも、身體が何様の關係を有するも、快樂の感ぜられざる處に少しの希望を賜するを得ず。肉は腐れ、骨は壞る、分子の散在するも、何の效あるなし。現在の人生の如きの永續せざる限り、宇宙の生物たるとも無生物と異なるなく、唯絶大なる死物の空しく横はるとして悲觀すべきことと爲るが實は是れ考ふるの足らざるに非ざる也。

第七十七節

人生の大部分は快樂苦痛より成るとせらるゝも、苦樂の存するは元來き範圍に於てす。平素同情反情を有するの何處に及ぶやといふに、最も汎愛なる者として一萬人を知るは極めて少く、千人を知るも多からず、多數は家族及び若干の親戚と若干の友人とに止まり、知らざる者に同情を表するも甚だ薄し。十五億の人類あるも、其の各々如何の生活を造るかは與り關する所に非ず。同情の廣きは、一は性質よりし、一は境遇よりし、而して後者最も多し。小區域を劃りて滋味方を別ちし時、捕虜を扱ふこと頗る殘酷なりしが、後相爭ふべきは別に存し、個人として敵をも愛せざるべからずとし、さる 狀勢の進むと共に、四海兄弟を當然とするあり。更に牛馬羊及び他の動物に憐愍を催し、鞭撻の爲めに之を屠るに躊躇し、務めて無益の殺生を戒めんとす。かく同情の擴まるも、其の擴まるは種々の事情によりし、或は情よりも知とすべきあるが、美感に伴へるの少からずして、中には美感一集中するあり、兩性の間、往々其の甚しきを見る。兩性の情を別とするも、美感を廣義に解すれば、同情に與ること最も多し。若し社會に美を感じしむるの少くんば、頓に人をして同情を減ぜ

しむべし。同情を寄せて離るゝ能はざるは、或る點 美を認め、恍惚として同化せるかの跡あり、下等動物を虐げざるも一分は其の形狀の可憐なるを覺えての事にして、孔雀の如き、美味たるの明白ながら、殺して食ふの甚だ稀れなり。美を認めて快を感ずるは、人生快樂の少からざる部分形づくが、美を認むべきは、自己の同類及び之に接近する動物に於てのみにあらず。

美と快感とに就て議論一ならず、或は別個とし、或は合同すとするが、全く合同せざるも、美の快感なること、少くも不快感に非ずして多くの場合に快感なることを疑ふべからず。鋭敏に感ずる者一而も生れて美を感ずるの鋭きあり、初め鈍きも後修養して鋭きを致すあり、人によりて種々なれど、孰れにせよ趣味の長ざるは美に接して快を感ずること多し。藝術家は其の鋭き者にして、常人の美を認めざる處に美を認め、此處に快を感ずるが、是れ亦種類多く、甲の感ずる所乙必ずしも感ぜず、乙の感ずる所甲必ずしも感ぜず、甲乙の感ずる所丙必ずしも感ぜず、されど要するに修養にて美感を深くするを得、又廣くするを得、恰も知能よりして總ての事物に關係を發見す

と同様に、感能よりして總ての事物に美を感じずべし。總ては望むべからずとも、漸次深き及び廣さの進むを許して可。

第七十八節

美に人工なるあり、自然なるあり、其の現はるゝ所を以て多少の快を感ずべし。(ハルトマンは人工なるものを自給する能はざるものとせ) 趣味の修養の厚きほど、快を感ずるも多く、人生より離れしものに同情を寄するに及ぶ。自然美の廣く認めらるゝは、同類の容貌を始め、他に此に準すべきの少からずして、觀察の進むに伴ひ、益々廣きを加ふ。原人も植物に美を認め、花及び葉を以て身を飾れるが、後年修養にて人に増進し來れり。花の美色佳香は蟲を誘ふ爲めなるも、人力に依りて美愈々美、佳愈々佳となれるあり。實に花を美にせんとして勞を厭ふこと無く、尙ほ葉の美なるもの、蔓の美なるもの、枝の美なるもの、及び幹の美なるものを選びて之を栽培し、益々之を美にせんとしつゝあり。家屋ある處、必ず庭園あるに徴するも、如何に草木に美を感ぜるかを察するに足る。東坡が海棠に就て也知造物有深意、故遣佳人在空谷、自然富貴出天意、不待金盤薦華屋、朱唇得酒暈生臉、翠袖捲紗紅映肉、林深霧暗 曉光遲。

日 暖風 輕春 睡足、雨中存 淚亦悽慘、月下無人更 清淑といひ、牡丹に就て一朶妖紅翠 欲流、春光回照 雪霜差、化工只欲呈新 巧、不放閑人得少 休、といひ、松に就て大公不救斧斤厄、野火解 釋米雪姿、爲問幾株能合 抱、殷勤取角弓詩と言へる類は、併かに一例に止まり、花下及び綠蔭に皆多少の快を感じざるあらず。テニソンは一小花に對し、若し吾にして十分に汝の何なるかを知るを得ば、吾は神及び人の何なるかを知らんと言へりき。

草木と動物と同じく生物なるが故に然りとせんか、土地及び水流に亦斯かる事あり、或は雛狀を成して特立せる、或は波狀を成して起伏せる、或は翠縹低く聳えて人工を施しに類せる、或は峰嶂、重疊して四時雪を戴き、永く人跡を絶てる、美麗と宏壯との差こそあれ、胸次の 當然たるを覺えしむ、李白 蛾眉に登りて曰ふ、青天倚 天開、彩錯疑 畫出、冷然 紫雲貫 果得 錦囊術、雲間吹瓊簫、石上 弄寶瑟、平生有微尚、歡笑 自此畢、煙容如 在 顏、塵累忽 相失と。或は山麓を榮り、激して瀑と爲り、灑して碧潭を成すもの、或は清流湍々たる者、或は瀑と爲り湖

と爲り、萬頃流瑣なるもの、更に大なる海に至り、無風にして油を流し、が如き時、微風起りて鱗浪層々たる時、若くは暴風怒濤を濺かし嘍唳喧嘩を聳にする時、各言ふべからざる感を萌かしむ。陸龜蒙潮を迎へて曰ふ、滄岸後兮光爛々、潮之德兮無涯際、既 充 其大兮又充其細、沒剛骨兮、款柴門、寂寞留連兮依希舊痕、波濤拍兮潮之恩、不月其巧兮歸於泥元、其他雲や雨や霜や雪や、一々特別の美を具へ、他の美と錯綜して幾層の美を添ふ。

第七十九節

快感に纏れ久しきに續かず、常に快を感じずるは、或る快感に纏りに他の快感を以てするのみ、人或は美感の永續性なるを説くも、美に對する快感は、飲食に於けるより永續するにせよ、快感として同じく増減するを免れず、而して其の増減よりして逕いて美の判斷を動かすこと無しとせず。正しく美なるものにして唯日常眼に慣るゝが爲めに懶く感ぜざるの幾何なるを知らず。滋味に飽いて淡泊なるを擇ぶものあると同然、本來甚だ美なるも、類多くして遙かに劣れるものより優はれざることあり。人の人工美を悦び、繪畫彫刻骨董の類を愛するもの、別に然るべき理由あるに因れど、單に美といふ點に於て大に之に優れ

の自然界に存するを拙むべからず、(マクソン、説) 山にも水にも眞に美とすべきあり、朝に夕に種々美觀を呈するが、若し夫の際雨前たに霽れて日光殘んの雲に映射し、悉く金色を成して紫色の之を纏どれるに至りては、如何なる天國の繪畫も及ぶこと能はず、畫工は此の光景に按して天國を想像し、雲間に天人を飛翔せしめたるに過ぎず。舜の時、歌に柳雲欄兮、纓纓々兮とあり。宋孝武慶雲贊に非、烟非 雲、曳 紫流 光、應 華 耀、奄 鬱 臺 堂、粲 休明、震 手 珍 祥、積 慶 有 文、靈 照 無 量とあり。

曾て太陽を鑑しことあらざる者が、偶然にも仰いで之を観んか、其の赫灼として正視し難きに驚き、神の出現として禮拜せん、之れ有るも之れ無きかに想ふは、唯珍しからざればなり、(説) 一美なりと雖も日慣れて美を感せず、却て遙かに思ふれる物を未とし得するの當なるが、是れ亦意を致すところと因りて美感を生ず。言ひ換ふれば平素日慣れたるが爲めに美と感ぜざる物も、其の美なる所以を尋ねて他と較ぶれば、自ら其の間に快感の湧き來るあり、詩人が世人と同じく自然界の物象に日慣れながら、獨り能く之を讚歎するは、美を發見するの明識

あるなり。仰いで望むも俯して観るも、自然界の美なる物は極めて多く、之を尋ね之を求むれば愈々益々美の表現するに會ふ。如何なる顔料も自然に於ける色彩に及ばず、如何なる妙手も自然界の美を盡すこと能はず。若し自然界に於ける美を盡むれば、此と伴ひて快を感じ、思はず知らず之に對し同情を寄するに至る。

第百八十節 草や木や、山や水や、雲の日に映射する光景や、皆美を感すべき者にして、普通に於ても美とせられざるに非ず、但だ特に清潔せられざるのみ。然るに普通に全く美とせられざる處にして尙ほ無量の感を惹き起すあり。グルウキンはバタゴニヤの曠野を忘るゝ能はずとて、曰へらく、其の曠野に何物をも見ず、人の住する無く、水の流るゝ無く、樹なく、山なく、唯儼かに矮樹の散立するのみ、滿目凄涼、全く荒地なるに逢に忘るゝを得ざるは何の爲めぞ、青々として人生に必須なる土地は地球上到る處に存するに、嘗て斯かる感を興へしあらず、余は其の感覺を分析し得ざれど、一部は確に想像に因る、彼の曠野は無限にして人力の及ばざる處、幾世代か斯くして存し、今後も亦永く斯くして續かん、實に人智の限られたる所を示すものなりと。一の見るべき無き曠野も猶ほ

此の如きものあり。〔フムボルトも憂鬱鬱然なるの現象を促し、唯、眞實を生ずるに非し、同一。〕

第四章 感能と宇宙(下)

第百八十一節 地上の美は天上のものと同待ちて美を宿すこと多し。色彩は殆んど悉く太陽の光に基づき、太陽なかりせば闇黒若くは黄昏たるべきが、動植物や、山水や、乃至雲霧及び空氣や、皆日光の下に或る色を映ずる如くに組織せられ宿り、太陽其の物に特に美とするに足るやの疑はる。されど太陽其の物も美の主なる部分を占めずとせず、時に赤球と見え、時に白球と見ゆるも、光の極めて強烈なるが爲め、相映する總ての物を輝かし、同じく晴天にても、片雲に蔽はるれば陰氣に感ぜしめ、片雲の去りて頓に陽氣を覺えしむ。行燈の微かなると白熱燈の煌々たると感覺に差違を生ずると同じく、太陽にして單に光を放つに止まるにせよ、光の強きと彼の如くんば、多くの場合に美景の中心たるを失はず、但だ餘りに日慣れて爾く感ぜしむるの深からざるのみ。月は光度に於て之に比すべくもあらねど、常に盈虧するに加へ、盈つるも雲に蔽はるゝの多く、偏々

満月の皎々として輝くは頗る人の儂ぶ所とな爲る。色彩を生ずるの少きも、日中の五彩輝爛たるに對し氣を鎮め心を靜かにするの效なからず、さる故を以て東に仲秋の月とし、西に收穫の月として賞せらる。星も亦美を添ふる所あり、螢に似たるものが計ふべからざるほど空に懸り、月無き夜に謂ゆる星月夜の景を早す。地上に美なるものあれど、若し天上の美を缺かば、人の感ぜる美觀の少からざる部分を損ぜん〔見しを具て生輝第一の條件とす。〕

第百八十二節 されど此等の美は皆地球より觀たる所、天上の美を悉せりとすべからず。假りに水星に居るとせんか、太陽は地球に於けるより幾倍の大を加へ、光も幾倍の強きを加へ、若し雲あらば、凄まじき色彩を現はすべし。金星にては太陽は斯くまで大ならざるも、確かに雰圍氣ありて光を屈折するの壯麗なるらし。

外遊星に在りて望めば、太陽は頗る小形にして光も微弱なれど、其の代りに多くの月を奉る、火星に二個、木星に七個、土星に十個あり。月數七又は十にして、中に大なるあり、小なるあり、各々盈虧するの區々なりせば、夜景は我が地球の僅かに一個の月なるが如くならず、必ず幾層の美を添ふべし。木星、土星は動植物

なく、山海きへも成立せざれば、月光の反映して美を逞しくする無かるべきも、空しく耀きて尙ほ我に優るものあり、特に土星の環は無数の小星の群がりにて、其の回轉し運行するの美は、我が何物を以てするも彷彿するに難し

此等は美は則ち美なるも、猶ほ宇宙に於ける美の一分のみ、以て極まれりとせば大に誤る。此に比すれば、太陽の如きは如何に美麗にして如何に宏壯なるぞよ、從來造り得られたる大なるレンズの焦點は其の光の幾分をも輸するに足らず、さる強烈なる光輝が地球の百数十倍大なる者を圍みつゝありとせば、美も壯も想像だに及ばざるに非ずや。(第八卷) 其の光を發するは概ね金屬の蒸氣にして、雲狀なるあり、粒狀なるありて、斷えず卷舒しつゝあり。黒點は大なる虧隙に蒸氣の逸逸きて蒸つるもの、粒狀なるは茲に急下して雨狀を呈し來る。燃焼せる水素は時々上騰すること數萬里の高きに及び、日蝕皆既の際に微かに見ゆるが、若し其の附近に在りて望まば、目を眩する光焰の瞬間に上騰し、一光消えて一光之に續き、五光十光顯滅する有様眞に驚歎するに堪ふべし。

太陽に對する所を以てせば、地球に於ける色彩の定は言ふを値せざるが、太陽とても單獨に懸り

て若干の遊星を統ぶるに過ぎず、幾千萬の恆星中、太陽と同質にして更に二三重に懸り、巴形を成して相互に回轉するあり、或は未だ太陽ほどに收縮せず自ら螺旋狀に回轉するあり、太陽に見るべからざる美觀壯觀を具ふるとして可、如何に美觀壯觀の有る限りを想像するも、其の一塵をだも形容するに過ぎず。

第百八十三節

美の多くは光に屬す、人は光を以て美を現はすに勉め、萬燈花火等を作り、今は電燈イリニネーションを主とするが、此等は孰れも自然の極光に劣ること遠し、而して極光は恆星の旁圍氣に對し、殆んど有りや無しやのものなり。若し電燈裝飾の類を以て美に非ずとせば則ち已む、苟くも以て美とせば、各有光星に於ける美觀に驚かざるを得ず、而も是れ皆各星個々として美なるもの、現に夜間觀るが如く互に遠く隔離し、宛ら豆を撒布せると一般なれば、如何に個々として美なるにせよ、全體に於て何程の美を示さず、唯黒黑なる空間に幾多小光の散點せるに止まるとせられんが、斯かるは元人の身體を標準とするに出でたりとす。人の身體にては到底十分に太陽の美を認むること能はず、眼珠の網膜に映ずるは僅かに物象の一部のみ、太陽は約四千萬里を隔てて

彼が如く見ゆる者にして、數百萬里を隔てて尙ほ其の全形を認め得んも、更に近づくと及びて一局部に限らるゝを免れず、黒點に猛火の渦まきさへ、小なるは數百里、大なるは數萬里、接近して全部を見るに由なく、而も接近せざれば壯絶の眞相を得るに難し。是れ地球の全形をも見ること能はざる身體を以てして奈何ともすべからざる所なるが、人類に於て不可能事なればとて、他に之を能くし得る者を想像し得ざるに非ず、假りに千里萬里のレンズありとせば、此に映じ來る所も隨て大なるべき筈なり。人は日に行くこと十里十日にして、百里に過ぎざりも、若し容積一億倍して日に行くこと十億里なるもの、若くは一層大なるものありとせんか、即ち能く絶大なる宇宙を逍遙し、忽ちにして赫灼たる太陽に近づき、忽ちにして他の星に赴き、更に轉じて星より星に到り、大なるもの、小なるものを屢觀せば、絶大なるイリニネーションを見るが如き感あらん。宇宙は幾億々々里に擴がるも、人類に億倍せる五體と億倍せる速力とを兼ね備へて轉徙せば、恐らく全體の美を悉し得べし。

各星互に相隔離し、甲星の傍に在れば、乙

丙等は點を打ちたる如く見ゆるも、是れ一處に定着して移らざるが爲めにして、若し迅速に一方より他方に轉げんには、相隔離すと雖も隔離せざるが如し。往時人の徒歩せし頃、今日或る驛を過ぎ、明日或る驛に達し、順次に若干の驛を通過したりしが、汽車の通じてより、十里二十里を行くは一二時間に於てし、前に十日を費し、處一日ならずして通過し了り、坐して沿道の風光を觀望すると同じく、大なる速力を以て宇宙を通行せば、互に隔離せる星も相接せるかに見え、甲を送り、乙を迎へ、正に應接に違あらざるべし。幾億の星の互に隔離するは必ずしも、美を傷ふ所以のものにあらず、相接せざれば個々に美の具なるも、既に接続するに於ては實に衆美の合して一と爲るを見ん、事は唯幾億の星を接続し得るや否やに在り。人の身體を以て接続し得ざるの勿論なるも、異なる身體を以て接続し得べきを合理的に想像し難きに非ず、即ち大なる身體と速力とを以て宇宙を歴観せば、全體として絶大なる美觀を呈しつゝあるを知るべし。

第百八十四節 人の物を視るや、燈火に於けると日光に於けると色の異なるあり、均しく日光に於ても、地球と水星と相同じきを必し難く、

或は亦よりも波の粗なるもの、紫よりも波の密なるものを感じ得んも測られず。光度を高めて新色を生ずること無くとも、視神經の變化に伴ひて新色の歷々として現はるゝことを想像し得ざるに非ず。さる場合に普通の物體も一層の美を加ふべく、轉じて宇宙美を視れば、美愈々美なるべし。物の美ならざるに非ず、視官の鈍にして之れを認むべからざるの憾みならず。されど美を以て視官に限るとするも亦偏す、盲人は眼ある者と同様に美を感じざるも、聴官にて美感を得るのみならず、觸官にて硬軟粗滑等を辨じ、其の悶快を感じるの多し。宇宙には色彩以外に美とすべき者の幾何なるを知るべからず。而も姑く美を以て視官の最も與れる所と爲すも、小なるは小なる處に於て美を認め、大なるは大なる處に於て美を認む。蜂や、蝶や、花より花に移り、以て美なりとして極ぶべく、又實に美なるに相違なきも、朝暉夕陰を美とすること之れ無かるべく、更に幾層か小なるものに至りては、花にだも美を感じ得ざるあるべし。人類が蜂蝶の感じざる處に美を感じるは一には腦髓の發達に由るも、又身體の大なるに由らずとせず。若し人類に似て遂かに大なるあらば、其丈け大なる處に美を感じるに、人

類の蜂蝶に於けるが如くならん。斯かる大なるものの存在すべくも非ざれど、僅に比例を以て推斷し得べき事にして、安りに怪力亂神を語るの類にあらず。人類は妙手として小なる者大なる處に大規模の美を感じ得ざるべきも、宇宙に大規模の美の具はるを争ふべからず。美の要素に就て種々の論あり、自然界に現はるゝ色彩は眞に美とすべきにあらず、人格の加はらざるは美といへども注意するに足らず、上星の環、太陽のコロナの如き、畢竟何か有ると言ふ者あらんも、想像を超越せる美の實在し、愈々攻究して愈々其の表現するは疑ふを要せざるべく、花若くは山水を美とする意義に於て宇宙は極めて美なりと謂はざるべからず。人死して身體分解し、或るものは元素に還り、或るものは他と化合するが、意識の有無に拘らず、常に美なる宇宙に存在す、其の美は水の如く、唯見て美にして甚だ冷かなりと速斷するを許さず、宇宙の組織及び活動を稽へ來れば美と伴ひて人情に對する情緒の如きの起らずとせず。固より人の性質は區々にして、總て人に擬する傾向のものあり、之に反し人をも木石視する傾向のものあり、隨て想像の狀にも多大の等差を生ずれど、幾許か宇宙の美を認むる者

は、同時に他の觀念を避けんと欲するも得ざるべし。科學の進歩して星辰に關する知識の増加すると共に、地球の外に美を認め宇宙の美の無限なるに驚くことと爲らん。科學は人類の情を冷却せず、若し相當の順序を以て進まば、人類をして絶美絶壯裡に存在するを信ぜしむるに至るべし。

第五章 意能と宇宙(上)

第八十五節 知能感能及び意能として、區分するは事の完きものならざれど、斯くすること一般に通用し、又多少據るべきなきに非ず。

而して他の二つも尙ほ明白を缺くの多きが、意能は特に甚し。人は自ら意能を認め、自己より推して他に意能ありとし、若くは之れ無しとし、意能の如何を以て人格を判定し、人類を萬物の靈長とするも此よりの事なれど、意能は單純なる者にあらず、衝動といひ、反射といひ、本能といひ、欲求といひ、意志といふの類を總括して稱し、而して其一々も亦單純なりとせず。而も單複の疑ひこそあれ、人事にして意能を伴はざる無く、其の稍々複雑なるは、動機より行爲の現はるゝまで歴々順序の見るべきあり、即ち或る目的の存し、之に達せんとして努力するなり。時として達せられ、時として達せられざるも、何等かの目的は斷えず現はれ、意能といへば目的あるを意味し、他の物象に對しても、意能ありや否やを問ふは目的ありや否やを問ふと大差なし。中に意能と目的追求とを分つあり、又合すあり、或は物象自らに意能なきも他に有意能のものありて特別の目的の下に之を活動せしめつゝありといふあり、或は斯かる者の有り得べからずといふあり、此等に就て議論の絶えざれど、意能及び目的に就て更に考ふべき無からず。

第八十六節 人に意能あり、自らも認め、他よりも認めらるゝが、目的の判然たることあれば、又判然たらざることあり。日常爲す所は一も目的なきはなく、起きて面を洗ふは、眼を淨め口を嗽がなが爲め、置に對するは、口腹を充たさんが爲め、其他各々何事かの爲めにすなり。幾日間を通じて勞苦する所の事も、幾月若くは幾年を通じて爲す所も皆或る目的あり、隨て總ての事は目的と手段との關係なりと言ふあるが、然らば一生を通し如何の目的あるかと問へば、能く答ふるに、躊躇せざる無し

或る事業を成すが爲めとするは聴くべきに似たり、人間一生は果して或る事業の手段なるか、將或る事業は一生を送るの手段なるか、世に一生運ぶ事業を以て貫くれば、幾個の聯絡なき事業に従事するあり、或は時と場合に應じ手當り次第に事を處するあり、或は日雇給金の如く當日を旨として明日を慮らざるあり、人生の目的の何なるかに惑ふは事實を見ての事なり。一生を通じての目的は、從來之を明かにせる者ありとすべからず、たとひ若干人の之を能くせるとも、以て人生の目的茲に在りといふを得ず、況んや大多數の之を能くするなきに於ては、滔々として醉生夢死の境なりといはるるも致し方なし。且其間世の中は變つてはして發せざれど目的の判明せずとて直ちに目的なしとすべきに非ず、目的あるも他人の知り得ざることあり、本人自らの知らざるも亦之れあり。

目的にして意識の伴はざるは珍らしからず。覺えず知らず爲しつゝ、後より觀て或る目的を達せる如くなることあり。英傑といふ者の大事を成し遂ぐるは、豫め計畫せる以外の事情に恵まれたるの多し。彙集は更に甚しく、惘然として動き惘然として止まるの觀あり。機帯地方に草を束ねて家と爲すもの連續するあるが、斯かるは常落として何の目的を有するか。

北米洋に氷を積みて家と爲すあるが、部落として何の目的を有するか。國家と移づくればる者も此に優れりとすべからず、興亡盛衰の勢頗る見るべきあるも、目的に至りて遂に證明に窮せざるを得ず。斯くの現はれたるは何の目的あるか、漠然として知られず。されど知られずとて決して目的なしと斷定すること能はず。目的ありとして解釋を下し、もの屢々之れ有り、或は歴史哲學に於て、或は文明史に於て、或は社會學に於て之を試みんとせり。甲の以て目的とする所は乙之を背んぜず、別に目的とすべきを擧げ、丙丁に及びて愈々争はるゝも、其の間幾分の進歩なきに非ず。過去を以て推せば現に目的の判明せざる所も後に明白を加ふべく、又現に目的の判明せる所も後に否定せざる能はざるに至るべきを察すべし。個人に在りても、群集に在りても、目的は此の如き状態なるが、何處にも目的の認められずして實に目的の存するあらんも測るべからず。

第百八十七節

人類に近きもの、即ち獸類鳥類は、爲す所に目的あるの明かにして、其の奔るや、其の飛ぶや、何の爲めなるを知るに難からず、而も一生の目的を以て單に生存の爲め

繁殖の爲めとせんは如何がはし。魚類蟲類も目的の知るべきあれば、又知るべからざるあり。更に下等動物よりして延いて植物に於り、意志なくしてトロピズムに依るとの説あるも、要するに廣義に於ける意向に屬し、目的の如何の推斷し得べきあり。顕微鏡の小蟲の進退は略ぼ高等なると同様に推し測らる、植物は漸く活動の見えざるも、種子より發芽し、成長して枝葉繁茂し、花開きて實を結ぶ、各或る目的あるを知るべく、如何にするも目的なしとするを得ず。而も全體として何の目的あるやといふに至り、頗に困難を感ず。實を結ぶは吸收すべき營養に限りあるが爲め、他に徙りて新たに吸收せんとするもの、人類社會の謂ゆる植民たるべきも、かく繁殖するは何の目的なるか、人類に役載せられて建築熱燄の材料に供せらるゝが爲めとするは餘りに簡單に過ぐ、後年研究の積みて或る解釋の與へらるゝならん。曾て目的なしとせられし所に目的あるの知られたるも少からず、單に美と感ぜられし花形が一々特種の必要ありと知られたる如く、例せば蟲を誘ふが爲めとせられたる如きことあらん。無機物の反應はトロピズムより劣るとせんか、而も是れ程度の差なり。雨降りて地面まり、

旱して沙塵るは、已むを得ざるに出でて已むを得ざるに容るもの、地球の事は悉く然りとすべし。初め液體なりしが、漸く固體と爲り、收缩して外面に殼を生じ、水は高度より降り、滴へて瀧と爲り海と爲り、將海中に流動の行はれ、或は地中に地震の起る、孰れか然るべき理の存せざるあるべき。過程よりせば、一々或る目的を具ふとすべきが、然らば地球の目的は何なるかと問はんか、何人も之を明言する能はず。或は進化を以て目的とすといふものあり、實に氣體より液體次いで固體に移り、散漫にして單純なるより統合して複雑なるものと爲り、動物を生じ、植物を生じ、動物を生じ、人類を生じ、人類社會の益々進歩する所略かに進化せりとすべし。木星土星を觀ればは渾沌たる状態にして、或る時代に地球に類し來るべく、日光を受くるの少くして外皮の進化の著しからざるも、進化は則ち進化たらん。太陽は更に遂かに渾沌たる状態なれど、進化の過程に在るは疑ふべくもなし。社會の進化の喜ぶべきより考へ、總て進化を目的とすと爲すの傾向あるも、由來進化に限りあり、或る邊に至りて退化を目的とせば、退化を目的とするを許

さざる能はず。進歩論者は進化を否定せず、而して進化を論じて多
 く「スベンサー」し、論を實より轉じしを以て、其の進化の或る現象
 を閉じて攻撃す。而して「スベンサー」は進化を主として進化を輔し、空想
 を實地に置き、種退化に有る地球は或る年代を経て地
 熱の冷知し、受くる所の日光も漸次微弱とな
 り、水分の悉く凍結するか、地中に吸収せら
 るゝかの一を免れず、かくて地上の生物は全
 く滅盡すべし。後史に或る年代を経て地球を舉
 りて太陽に吸収せられ、其の衝突の勢にて全
 然氣體と化すべく、後又何等かの變態を呈すべ
 し、或る邊まで進化し、次いで退化し、退化し
 盡して再び進化に轉ずとせば、以て何の目的に
 出づとすべきか、一部に就て目的を知り得るも、
 廣きに及びて茫茫然知る所あらず。

地球の目的は何なるか、太陽系の目的は何な
 るか、目的なしと答ふるの多からんも、爾く斷
 定するは果して當を得るか、地球又は太陽系に
 就て目的論の變更せしこと齊に一再ならず、神
 は人類を住はしむるが爲めに地球を創造し、日
 月を輝かして之を照らしりと唱へられ、爾後進
 化論の出づるまで種々の方法にて目的の説かれ
 たり。進化論は一部分の説明にして、大部分に
 對し何の益あらざるも、其の修正され、又は別
 説の出でて、解釋を進むるに至らんは期して待
 つべし。目的の有無も輕々しく決すべからざれ

ど、或る部分に目的あるの確實なるよりして、
 全體に想ひ到らざるを得ず。人類は自ら以て意
 能の最も盛んなりと爲しつゝ、人生の目的は斯
 く斯くなり明言し得ざるが、日常爲す所に
 目的あるを以て一生を想ふべし、一生を想ふ
 が如く他の物象にも全體として目的ありとす
 るに傾く。地球も太陽系も目的なしとせらるゝ
 が、其の各部分に就て幾分か目的の事を得べく
 んば、全體にも考ふべきあるに非ず。

第百八十八節 意志は複雑にして、其の認め
 らるゝは既に種々の事より成り、時として幾個
 かの動機より出づるあり、各動機は一々低度の
 意志とすべく、合して比較的人なる意志を組み
 立て、比較的なる意志も亦更に合併して一層
 大なる意志を組み立て、斯くして一生を通じて
 の大目的と爲るを見るべし。大なる人格に大な
 る目的の伴ふとせらるゝも、大ならざる者にも
 幾許かさるもの滑みつゝあるべく、唯急に知
 り得ざるのみにして、人類以外も是を以て推す
 べしと。但し斯く考ふは或る事實に依りて
 豫想するもの、必ず然りと確定すべからず。確
 定すべからざるも、爾く考ふるの頗る便利に
 して、誤謬の發見せらるゝまで安んじて妨げな
 し。而して謂ふ所の目的は比較的大なるの知

られて然る後小なるの知らるゝあり、又比較的
 小なるの知られて、然る後大なるの知らるゝあ
 り。且つ大なる目的の判明せると、依りて絶
 大なる目的の判明すべしと言ひ難く、又絶大な
 る目的の判明し得ざると、爲めに大なる目的
 も亦判明せずと言ひ難し。

第六章 意能と宇宙(下)

第百八十九節 目的手段の關係と原因結果
 の關係と、語の異なるが如く幾分か異なるべき
 も、或る目的を以て或る手段を施し、何等か得
 る所あるは、原因結果の關係ならずとせず、
 又或る原因ありて、相當の順序を進ると認むべ
 きは、目的手段の關係と爲し得ざるに非ず。普
 通には目的手段を有意識のものに就て言ひ、原
 因結果を有意識無意識に並び通じ、特に後者に
 就て言ふの狀あるが、最も有意識なるべき人
 の行爲は目的も最も明白にして、此より遠ざか
 るにつれ、漸次不明と爲り、遂に全く因果を以
 て律するに及ぶ。有意識のものとして、自ら以て
 目的とする所、他に於て然りとすることあり、
 又は然りとせざることあり、自ら意識しつゝあ
 るらしきも、眞の目的の別に存することの後に

至りて知らるゝあり。將或る目的の下に從事し
ながら、種々の妨害を被りて却て己れに都合
好く、事實に於て他の目的に向ひ、之を達し得
たることと爲るあり。謂ゆる人同萬事塞翁馬
とは、目的を達せられずして幸なることあり、
不幸の不幸なることあり、不幸の幸なること
あり、豫め目的とする所の拘るに足らざるを
指すもの、實 目的は當議にのみ存せず、無意
識なるの有意識なるに代りて實現せらるゝの稀
れならず。快樂の保存に於て失敗するも生命
の保存に於て成功し、生命の保存に於て失敗す
るも種の保存に於て成功し、種の保存に於て失
敗するも事業の保存に於て成功する等、他より
觀て種々に解するを得べし。而して無意識なる
目的は尋常の原因と差別するを要せず。
波斯も、羅馬も、軍隊送遣の爲め四方に道路
を開通せしは後に商業の爲めに大なる便利を
與へにき。本來の目的は軍隊の送遣に在り、他
國を征服するに在りしも、後人の得たるは交通
及び産業にして、文明の進歩に與れるの多し。
順序よりせば、波斯羅馬の社會としての目的
は文明に向はんが爲めとすべきが、初め之を意
識せしに非ず、意識に存せしは近隣の敵に過ぎ
ず。英國清教徒は時弊を憤りて奮闘し、久し

からず反動の勢に壓伏せられたれど、後米洲
植民地は此に則りて自由を唱へ、苦戦七年、
終に獨立を全くし、佛國民は之に同情せし餘
り、延いて自國の政府に改革を促し、大なる
革命の破裂するを見るに至り、更に四十八年の
革命流行と爲り、相伴ひて幾多の弊害の起りし
も、又爲めに積弊の除かれ、るの舉げて計へら
れず。清教徒は事の此の如くなるべきを想ひし
に非ざるも、歴史上に於ける効果を多ぶれば、
世界の革命の爲めに職ひし觀なからず。陸南
暴徒の蜂起せしは、或は不平に出でしといひ、
或は煽動せられしといひ、或は苦肉の策に致さ
れしといふが、當時激烈なる戦争の起りて軍事
に大なる經驗を與へしが爲めに、清國と戦ひて
之に勝つことを得、清國に勝つことを得しが爲
めに、更に露國と戦ひて之を破ることを得たる
なり。若し陸南に戰亂なかりせば、後の二大戦
役の起れるやの疑はしく、起るとも多少時期の
延長を免れざりしならん。暴徒は此の點に於
て帝國の發展を助成し、并せて列國の均勢に影
響せりと謂ふべし。
第百九十節 個人に於て、又群集に於て、目
的の意識せられざることあり。世には大なる目
的を意識して而も能く之を達し得たるを偉なり

とし、自ら意識せずして而も此と結果を同じく
する、德倅なりとするが、各行爲に目的ありと
せば意識の有無よりも、環象との關係を考ぬ
る適當なるべし。意識せずして事の成るは偶
然なりとせんも、必ずしも然るにあらず、生ま
れて大なる才能を與けたるは、事に臨みて特に
工夫する所なく、譚笑の間に之を處辨し、他の
細心深慮するの趣を異にし、寧ろ無意識とし
て不可なきが、而も其の然るの故を以て目的な
しとすべからず。人事は無意識の間に於て或は
成り或は敗るゝの頗る多し、社會の遷遷は殆
んど思はず知らずの間に於てするもの
如し。十分に之を判斷するには有らゆる原因結
果の關係を究むるを要し、其の能くすべから
ざるが故に大抵或る程度に於て概括し去るの
様にして、稱して目的とするは皮相に止まるの
嫌ひあり、眞の目的は急に知り難し。既に目的
を以て意識せらるゝ所に限らず、意識せられざ
る所にも之れ有りとせば、人類以外にも生物
以外にも爾か認むべき無からず、因果の關係
は總て目的を含むと爲し得ざらんも、或る部分
に於て之を認むべし。水の高きより低きに就く
は、順序を追ふ者にして、若し意識あらば、往
かんとする處に往くとすべく、唯他の事情の加

はり、順序を變ずるの避くべからざる際、或は低きを避けて高きに登ること、例せば旋風若くは地熱にて上騰するが如きあり。此と同じく地球及び爾餘一切の星に於ける變化も亦各々目的ありとするを得ん。

概に大小に拘るべきに非ざるも、小を合して大と爲らんには、小なる活動に小なる目的あり、大なる活動に大なる目的あり、大なるよりせば小なるの手段と見え、一層大なるよりせば大なるも亦手段と見ゆべし。かくて目的は順次手段視せられんも、是の故を以て一々に目的に非ずとするを得ず、如何に小なる處にも目的手段の關係は歷々存在し、大なるは之を總括する者にして、恰も原因が結果と爲り、若干結果が原因として更に大なる結果と爲ると同じ。或る活動に就て或る目的を尋ね、其れ以上の活動に就て其れ以上の目的を尋ね得るも、宇宙の究むべからざるが如く、究極の目的も得て知るべからず、而も或る邊まで究むべくんば、其れ丈け目的も知るべし。宇宙に貴ぶべきは眞に美に善に赴くに在りとは往古より言はれし所、(語は希臘より傳はり、支那には中庸に「性善天下之達者也」とり、日本の語と雖、劍之に當ると解せらるべし。今ざるが、是亦亦然と爲り)其の即ち究極の目的なるか、又は或る目的の手段なるかは決定すべく

もあらねど、後年の進化論は之が順序を説明せんとする意なしとせず。進化其の儘に目的なるか、將完全に達するの手段たるか、完全といふは比喩的の事にして際限なき者にあらざるか、疑問は一にして足らざるも、目的を進化の方面に求むる以上、現象を擧げて進化すとし、時に退化するは一層大なる進化に赴くの道程なりと爲すべし。地球は太陽に没入し、太陽系も次いで破滅するも、星系全體として絶えず進化すといふを得ん。幾億を以て計ふべき星辰の中、現に輝ける者の光度を減ずるあるべく、或は光度を増し、又は新たに光輝を發し來るあるべく、其の新陳代謝するは疑ふべからざる事にして、少くも或る邊まで進化を以て目的とすとて誤らざらんも、其の何等かの手段なうざるか、或は進化が大なる退化の道程にして、最後に盡く破滅し了らざるべきか、抑も別に全く異なる状態に化し去らざるか、幾億々々年を通じて如何になるやは人の想像し得る限りを超越すべく、たとひ尙ほ想像し得るとするも、無限の時間に就て言はんこと、全く獨斷に失せざる能はず。

第百九十一節

目的の概念を明晰にするに多少の困難あるも、日常の行爲より推し或る活

動に或る目的の伴ふとする趨向あり。人生觀に專らなる者が人生に目的ありとするは勿論、更に大觀する者は人事と物象と程度の差なるを想ひ、宇宙の一部若くは全部に目的ありとするに傾く。獨斷的にせよ、推理的にせよ、目的ありとし若くは目的あると同様に取扱ふの多きが、目的觀は人の氣質と境遇にて少からざる異同を生ず、即ち或は樂觀し、或は悲觀し、或は樂悲混合の狀を呈す。樂觀する者は宇宙を以て圓滿に調和すとし、惡が善の爲め、醜が美の爲め、偽が眞の爲めに存する、恰も谷愈々深くして山愈々高きが如きもの、惡醜偽は其れ自らに惡醜偽なるに非ず、唯善と美と眞とをして愈々發揮し得せしめんとするに外ならず、今日缺陷の多きは善美眞の未だ大に顯はれざるのみ、漸を以て善盡し美盡し眞盡すの域に到らんと説く。之に反し、悲觀する者は宇宙を以て善盡し美盡し眞盡すの域に到らんと説く。之に反し、悲觀する者は宇宙を以て安動を儉儉なくさざる者とし、一の満足すべしあれば更に多くの不満足を來し、永遠に存續するも、壞れて復成るも、唯益々苦悶を増すべし、善といひ美といひ眞といふが如き、一時の幻影にして、之に執着するも執着せざるも均しく一隅に蠢動する癡態に過ぎずとし、得べくんば

ず、更に大宇宙と同じきもの多からんことを察すべし。且つ時間の連続を考ふれば過去に限りなし、太陽系の星霧たりし時に遡るも、其のころ既に固體なる幾千萬の星辰ありしを思はざる能はず。假りに盡く氣體たりし時ありとするも、其の前の何状なりしかに惑はざるを得ず。現在は目前に視る通りなれば、たとひ過去の無限なるにせよ、現在の如き結果を生ぜしに徴し、略ぼ過去の要素を推し測ることを得べく、少くも推し測り得べき希望ありとせんも、將來の無限に對しては奈何ともするに由なし。月を以て地球の全く地熱を失ふべきを想ひ、太陽の全く光熱を失ふべきを想ひ、順次他の星も斯かる状態に終るべきを想ふも、之と同時に太陽の如きもの新たに成立すべきを想はざる能はず。實に新陳代謝の頻りなるを認むるの避く可らざるが、斯くして幾億々々年間の變遷を推察すべしとするも、其より以後は推察すべき限りならず、知識の進みて更に幾億々々年を推察し得るも、其の以後は漠として判斷を絶つ小を事とするも、大を事とするも、孰れにせよ絶対的知識を得んとするは爲すべからざるを爲さんとすなり。絶対的知識に對しての絶対にして、より絶対なる者に對し相對たらざるを

得ず、絶対の上に絶対あり、相對の下に相對あり、無限の連続に在りて無限の段階の認めらるべく、時に究極とするは其の時の知識に依るものにして、知識の進むと共に變化すべきを許さざる能はず。諸學科の進歩は連續を追ふの義、究極に達し得ざるも前に比して確實を加へ、認識せる者をして自ら進歩せりとして満足する所あらしむ。研究の足らざるに不満足なるも、前よりも研究の備れるに満足し、不満足と満足、満足と不満足、錯綜して離れざるは何れの世にも免れず。自然科學の盡く相對的知識なるに満足せず、別に絶対を求めんとし、往々求めて得たりとするあれど、由りて謂ゆる相對的知識に影響せる所幾、何もある無し、絶対を得たりとする後、殆んど其の儘に相對的知識を許容し、剩へ此に従て推理するを餘儀なくさるゝ無からず。認識に關する特別の研究も不可なるに非ざれど、有りとも有らゆる科學の進歩を望まざるを得ず、今日科學の性質を帯ぶべくして尙ほ未熟なるもの、若くは未だ發生せざるものがあるが、此等の發達する頃は、新たに明白を致すもあるべし。今の進歩を以てして百年を経過し、數百年を経過し、更に數千年を経過すれば、著しき進歩の現はるゝや必せり。後

人の成すべきを成さんとすは、現代の進歩を促す所以と爲ることあるも、時代に限度あり、如何に企つるも結果の得られざる無しとせず、現代は現代の状態にて知り得る限りを知りて満足すべし。

第九十四節 從來の經過に據れば、初め關係なしとせられたるの、後に關係ありとせられ、初め關係ありとせられたるの、愈々益々關係ありとせらる。多し。特別とせられし人類も他の動物と密接の關係あるの知られ、特別とせられし動物も植物も相互の間に密接の關係あるの知られ、生物と礦物とさへ根本に於て相離るゝに非ざるの知られぬ。最大問題は人類及び其の生存に關係ある地球及び太陽系にして、他の幾千萬の星は有るも無きも異ならずとせられしに、今や地球も太陽系も皆共に幾千萬の星の中に加はり、星系全體として相互の間に密接の關係あるの知られ來れり。數百年若くは數千年の後、近き星の知らるゝこと今の地球の如く、遠き星の知らるゝこと今の日月の如く、或は更に甚しきに至るべし。其の時とても明白を缺くもの多く、恐らく知らるゝ所の増加すべしに比例して知られざる所も亦増加すべし、宇宙が一の大なる機關として運轉するの益々知ら

れ、其の運轉の狀態の頗る明かなるを見るべし、意識と無意識との關係も今の如く曖昧ならざるべし。人類は地殼の變遷に伴へる一の現象にして、以て絶大なる宇宙と比較するの甚だ困難なるも、宇宙間に密接の關係ある以上、一を以て他を測り得ざるに非ず。現に人の善美眞とする所は永遠に成り立つべきか、或は區分の一變せられざるべきか、宇宙の完全とするは此の類に止まらず、人の想像すると全く異なるが如きあらざるか、皆知るの易からざるも、何事も他と何等か關係あるを疑ふべからず。〔此七色を分解するも赤を起して何者あること、動温器にて知られ、善を起して何者あること、質を起して何者あること、味人の心で感ぜざるのみ、而して感ぜざるの外に何者ある所と何等かの關係あるに非ず、此と同じく善美眞の外に何者あるならざるの疑はるるの知られざるを得ず、而も知られたる所〕

研究は微愈々微に入りて微を盡すを得ず、大愈々大に互りて大を盡すを得ず、今は無限の間に於て微なる電子より大なる星系までを限り、其の段階及び活動を調べつゝあるが、さる範圍にても解すべからざるの甚だ多く、唯無意義に排列せずして生物に意義ある如く意義あり、生物より複雑なる丈け其れ丈け意義にも富み、寧ろ超越的生物とするの當れるを認めんとす。今は各科學の進歩區々にして、相互の聯絡を缺き、宇宙を如何に取扱ふやに就て一致する所なきも、最早や生物より單純なりとすること有らざるべし。一たび其の複雑なるに考へ及べば、人生よりも妙なるを想はざる能はず。人生は妙なるも、之を微分子とし包括する宇宙は更に遙かに妙なり。人の眞とし美とし善とする所に於て果して其の全力を致す。價値あるべくんば、宇宙に之れ無しとするを得ず、執れをも大規模に於て待たざらんべし。現代に現代の限りあり、今尚ほ宇宙を輕々しく見るの少からざるも、勢の起く所を知るに難からず、歩一歩宇宙に意義あるを認め、從來考へられたる人生に劣らざるのみならず、之に優ること遠く、而して此と交渉する人生の從來考へられたるよりも意義多く、宇宙と一體たるに於て宇宙と同じく意義ありとすべし。されど連續は無限なり、究極は遂に達すべからず、數百年の後に至るも、數千年の後に至るも、判斷に苦むべき者あり、今日何ぞ窮極に達せんことを望むべけんや。而も今日の事、一も前後に連續せずして起るあらず、亦無限の連續の一部として缺くべきに非ず。

第八章 連續の一部(上)

第百九十五節

何れの方も連續の狀ならざ

る無く、而して何れの連續も十分に限界を劃せらるゝあらず、限界ありとするは一時的の事に於て、漸く熟察するに及び、他と何等か連續するを認めざる能はず。連續を追へば際限なく、何處に向ふも無限の感を免れず、大なるに限りなく、小なるに限りなく、久しきに限りなく、短きに限りなし。人の活動し及び意識するは連續の或る一部にして、連續の究極に達せんは得て能くすべきに非ず。實に人の生涯は連續の一部を形づくり、如何なる場合にも一部たるに止まれど、其の何の様式に於てするやは、盡く列舉するに堪へず。〔ライプニッツ式、ハイネ式、フーリエ式、ムンクト式〕而も今日まで幾分か判明せるも少からず、算術的といひ、幾何學的といふは、其の主要なるものにして且、最も普通なりと見ゆ。人の關係する所甚だ複雑にして一々數字を以て明かにし難きも、或る程度まで推定し得ずとせず、即ち増進するか、減退するか、又は増減せずして停滯するか、三者の孰れるかを判すべし。

熱帯の鳥嶼に居りて他と交通せず、芭蕉果タローを食ひて世を送るは、子々孫々同一事を繰り返し、二に次ぐに二を以てし、又二を以てし、二—二—二—二の狀態に於て連續す。

之に反し温帯の或る地域にては、代を果ぬるに從て多少の増進あり。各代同量の力を有すとせば、或る代に家屋を建て、城塞を築き、次の代に之を増補し若くは他に新造し、かくて次第に數を増すべく、而して其の増進の度は或は二四 六一八 十、或は二四 八 十六三十二なり。一八八二乃至一九一七の間に、殆んど停滯的にして、時に幾分の増進ありたるに過ぎざるが、希臘は此よりも増進の速かにして、或る年代の間頗る著しかりき。近代に及び、一層著しくして、算術的よりも寧ろ幾何學的とすべく、剩へ二八 三十二二百二十八一五 百十二として不可なきに似たり。

然るに減退することも亦之れ有り、或は早魃又は虫害の爲めに飢饉を致すが如き、或は運搬の便利に任せて有る限りの樹木を依り盡し、材木の缺乏せしに於て洪水の氾濫を致すが如き、皆之を誘ふの原因たり。依りて疲弊せし時に於り、偶々他國軍隊の襲來するに會へば、前に造り上げし繁榮は悉く毀損され、たとひ全く衰廢せざる迄も、一部分の衰廢せること珍らしからず。西亞細亞に帝國の盛衰興亡せしは即ち然り。且つ兵力強盛にして國家的活動の目覺ましく、特に商工業の進みて財源の開かれな

がら、知識の停滯し或は退歩するなきに非ず。秦始皇の書を燒き儒を坑にせしは、知識の進歩を止めしと謂ふべからざれど、多少の害を與へしに相違なし、アレキサンダーが書庫の燒失も少からざる害を與へにき、戰國の名ある時代は、戰略戰術の進歩、築城法の進歩、乃至武器の進歩を見るも、他に進歩せず却て退歩するあり。歐洲は希臘の知識を繼承し、而して是より劣れる陋態なりしこと一千年、近世に及びて各般事物の進歩し來りしも、進歩の速かなるあり、速かならざるあり、同じく學術にしても平行して進まず、同じく専門科に於て或る學説は或る程度まで進みて停滯し、後漸くして更に進歩するや、又或る程度に至りて停滯し、中には消滅せりとすべきあり。星占學の如き、前世紀の初期まで残存し、今も絶無なるに非ざるも、實用に於て消滅せると異ならず。

第九十六節 停滯及び減退の現象は決して少しとすべからざるも、今日までの經過に徴し、以て或る限りに於て將來を察すれば、地球上の人類は生活の状態も進み、知識も亦進むとして斷定するを得ん。其の盛衰は區々なりしかど、一部分の衰廢は他の部分の盛榮に依りて補ひ、總括して増進の減退より多かりし

を疑ふを要せず。埃及は滅亡して久しきも、其の文明は希臘に傳はりて後世を益せり。希臘は當今國として甚だ振はざれど、其の文明は羅馬を経て近代に及びぬ。中世知識の停滯し退歩したりしも、近代に現はれし長足の進歩を以て之れを償ふに餘りあり。墨西コ及び秘露の文明は、他に何の影響を與へずして消滅せしも、現代に於ける米洲の文明は遙かに優る所あり。尙ほ未開の種族の少からざれど、人類を概して昔時よりも大に進歩し、今後益々進歩するを必ずすべし。但だ將來永遠に此の勢を以て續くべきかに惑ひあり、現に地熱は斷えず減じ、地殼は僅かにせよ年々何等かの變狀を呈す、地熱の大地に減ざる時又は太陽の光熱の減せる時、依然として今日の進歩を續け得べしと思はれず、更に或る年代を經れば、人類の生存も疑はし。則ち永遠の進歩を保證し得ざるも、將來幾萬年の久しき間は從來の進歩を續くべしとして可ならん。人類の現はれて以來少くも十萬年を経過したらんが、事實の知らるゝは一萬年以内の事にして、是さへ稍々詳かなるを得たるは二千年以内の事、而して人類全體互に相交通して切磋琢磨すること爲れるは近く一百年以内の事とす。進歩は極めて遅々たりしも、後代は

後代ほど愈々進み、最後に最も急速なりしかば、此の勢を以て幾千年の久しきに續かんか、果して如何の進歩の遂げらるゝの測り易からず。時として災害の起りて進歩を妨げ若くは退歩に傾かしむる無きを保せざれど、全體に於て愈々益々進歩すべし。

人類は總じて幾分か進歩しつゝあり、知らざるを知らんとするの知識慾は抑へんと欲して抑ふべからず。時として知識慾の全く缺けたりと見えしことあるも、實は唯周囲の勢の然らしめしのみ。天災若くは兵亂の爲めに知識増進の便利を失ふことあり、即ち學校も破滅し、書籍も散失すれば、知り得る限りを知らんとするも、其の知り得る限りは何程のものに非ず、學校あり書籍ありし時に比し大に劣らざる能はず。偶々或る古書を手にするや、孜孜として讀み、玩味して金科玉條と爲し、甘んじて古人の奴隸となるは、同時代に古書に優るの知識なきが爲めにして、知識慾を満たさんとするに於て相異なるあらず、當時知識を増進すべき機會にあらば喜びて之を求めたるなり。元需用を充たすの供給なきもの、恰も食ふに相當せる肉なく、強ひて甘薯類を以て満足すると同じ。知識の減退する時代にして猶ほ然りとせば、其の

増進する際、更に甚しきを見る。知識慾の分量に差違なきにせよ、之を満すべく資料の多ければ、慾其の物を興奮し充進せしむる所あり。如何なる時代にも人は知識を増進せんと欲する者にして、但だ欲して得るあり、又得ざるあるのみ。

連續の間、殆んど同一事を繰り返して増進もせず減退もせざるあれど、多數を平均すれば幾分の増進あり、特に近代に及び、尙も増進に與らざるは常態を失へるに因るとせらる。前代に或る物の幾許が残存して後代を益せんに、たとひ代々能力の同じくとも、後の前より進歩すべきは勿論なり、況んや能力も亦代を逐ひて少しづつ進歩するに於ては速安の益々加はらんことを期すべし。少數に就て觀れば、昔時大に能力に富み今日の最も傑出せる者を以て尙ほ比肩するに足らざるが如きあれど、多數に就て觀れば、自然淘汰の争ふべからざるあり、最劣等なる者の常に存在せんも、中流に於て漸次優者の劣者に代り、或る年代の後に效果の著しく現はれ、當に知識の増進に勵むのみならず衷心より之を樂み一廢するに忍びざるに至る。かくて前代は後代に或る物を附け加ふるが上に、時代を經るたび優者の増加するを以て、知識の

増進せざらんことを欲するも得ず。

第百九十七節

人の生涯は連續の一部なる

も、多くの場合に於て同一事を繰り返すべきに非ず、宜しく前人の傳へし所に更に何物をか附け加へざるべからず。前人と同一の能力ならば必ず何物をか附け加へ得べく、之を附け加へ得ずんば前日より能力の劣り、増進的連續即ち進化の律は外れたりとすべし。知識に種類多し、或る部分に於て前より劣るの避くべからざるも、他の多くに於て必ず優らんことを望むべし。又或る部分の俄に進歩するを望み難く、前代の意見を繼承するに止まるあれど、前人の意見を理解して遺さば人んには、優らずとも劣る所あらず、此處に劣らずして他に較々として進むあれば、進むことありて退くことなし。〔フツツの知識〕、哲學の方面は、或る部分に於てカントより進まず、此より出立して失敗し、又出立點に歸ることあれば、カントの想ひ及ばざりし事の現に知られたるの少からず。〔カント〕特に科學の進歩は同日の談にあらず、今日兒童の知る所に、一當時有数の識者の知らざりし事あり、其の認識論に於ける影響一にして足らず。故に問題の種類は深く問ふを要せず、何れにせよ前人の遺し、所を繼承し、此に或るものを

附け加へ、之を後人に遺すべし。前人の遺し、所に安んじて何物をも附け加へざるは、初より生まれざるの簡單なるに若かず。人は連續的に生々死々して相繼承するもの、後者は前者の事を承けて或るものを附け加へ、後更に附け加へ、又更に附け加へ、順次附け加へんこと、今日の見解にて人の健全なる行爲となす。

知るべからざる過去より知るべからざる將來まで連續は傳はりて絶ゆることなく、而して人は各々其の或る部分を占め、前より傳はりし所に或るものを附け加へて之を後に遺す。均しく連續の一部なるも、後に及ぶほど益々知識に明白を加へ、前人の知り得ざりし所を知るに至る。連續無限なるを否定するに由なく、何れの方面も究極に達すべからざれど、現代の知識の近代より進めるの確實にして、今人は更に之を進めて後代に遺すべき順序なり。前に停滞及び退歩の跡あり、後には停滞及び退歩の恐れあり、或は人類の全く消滅すべき恐れあるも、連續は眞を求めんことを促して已まず、眞を求めんとするは無限の連續に關係ありとして信ずるに足る。心意の常態なる者は必ず此の如くすべく、此の如くせざる者は常態ならずと見做すべし。人は自ら疾病の苦より免れ、又他

の疾病なるを救はんとして連續を追ふ（今つては健康の消滅する死を人類生存の意義を關し）消滅の惡とするに足らざるを祈るべしと考へたる。

第九章 連續の一部（中）

第九十八節 人類の知識は一樣に増進せざるも、多數を概括して増進の跡の歴々たるを見る。而して其の進むは前より一層眞に近寄ることを意味するが、眞に近寄るといふに階級あり、均しく眞を求むるにも、極めて狭きに於てするあれば、又稍々廣きに於てするあり、或は又極めて廣きに於てするあり。狭きは無意識的若くは半意識的にして、漸く廣きに及びて益々意識的と爲る。農夫の鋤鋤を用ゐる、工匠の規矩を用ゐる、各々誤謬なきを欲する者にして、眞を求むるに相違なきも、眞を求むるに専らなるに非ず、種々の科學に於ける研究は之に比し特に眞を求むとすべきが、藥物學教育學に於ける研究は物理學心理學に於けると同くからず、最も廣きに於てする研究は意識の及ぶ所の總てに彌らざれば止まる能はず。かくて幾層の階級あり、或は何等かの手段として眞を求め、或は主なる目的として之を求め、關係範圍の區々なるも、概ね相前後して進歩し、人々其の孰れか

に於て一箇の到達の點より更に進み得んことを期すべし。美の感能に在りても亦然り。

人は多くの場合に於て故さらに美を求めざるも、無意識的若くは半意識的に之を求めつゝあり。時には他の意を混じながら頗る意識的なることあり。日常生活に於ける美は大抵純粹ならずして藝術家の藝術に於けると階級を異にすれど、而も階級をこそ異にすれ、一般に美を求むるの篤きを認めざるべからず。昆蟲の美を求め、鳥の美を求め、獸の美を求むるより推すも、人類の美を悦ぶの疑ぶべくもなく、實に人類は記録なき時代より既に孜孜として美を求め居りたり。蠻人は裸體洗足にして尙ほ身體の或る部分に角又は貝又は花を飾り、穴を掘り草を束ねて仕むにも幾分の裝飾を施し、或は泥を丸め木を彫り、或は笛を吹き弓を鳴らし、或は相集まりて鬼神の物語に夜を明かすなど、外見の甚だ粗なるも、美を求むるの熾なるを察すべし。美を求むるの熾なるも、外見の精なるを致すには時代の移るをたざる能はず、年々僅かづつ加はるもの、後積みて大なる結果を成す。普通の器具は必要を旨とし、無用の裝飾を避くるに拘りず、後は後ほど美を加へ、往代の裝飾より美なるあり（唯生計の要するに非ず）

歌山川感動せざる無しといふも、音楽の後代に
進歩せるを否定する能はず。名人は簡單なる樂
器を以て妙音を發せんも、精良なる樂器を以て
愈々妙なるを得ずとせず。樂器は種々に改造若
くは新造され、琴類よりヅルシメル、サルテリ、
シトール、ハルプシコルド等の出で、遂にピアノ
ノと爲るに至り、音を發するの自由なる、近代
樂家の求めて得ざりし、所に屬す。ヘードン、
モツアルト、ベートホーヘン等の顯はれ、十八
世紀が黄金時代の名あるも、器械の精巧なるに
恵まれし多し。黄金時代は去りしが如きも、
ワグネルを初めとし、次世紀の前に劣らざるを
證明す。詩は支那ニ離憂あり、他に類例なし、
印度にラマヤナ及びマハバラタあり、世界第一
の長篇とす、希臘にイリヤド及びオデッセイ
あり、世界の傑作として推さる、此等は後人の
模倣し得ざるものなるが、以て詩才も後人の及
ばざる所と斷言す可らず。ダントの如き、シエ
クスビーヤの如き、前代に例なく、而して近く
はゲーテの如きあり、後世も各々特長の稱すべ
きあり。目今此と拮抗するに足るなきも、前に
數人の傑出して他は甚しく劣り、今は大に
傑出するものなき代りに、相當に秀でたるの多
く、少くも數字の上にて今の劣らざるを判定し

得ん。大なる才能は百年或は出でざるも、二
三百年にして出で、又は千年にして出づ。歴史
ありて以來變遷一ならず、時として停滞し退歩
せしかど、全體を通じて進歩の趨向あり。
第二節 美の現はる、範圍は廣く、現はる
る狀態は階級に應じて違ふ。日用品より藝術
の最も高等なるものまで、美の歳を遂て益々
進むを認むべきが、人によりて無意識的若くは
半意識的に美を求むるあり、又全く意識的に之
を求むるあり、相互に異なるも、各々前代より
繼承せる所を以て満足せずして尙ほ更に付け
加ふる所あらんとし、間々力の足らずして附
け加ふる能はず、附け加ふるも附け加へざると
同じきに終ることあるも、力の及ぶ限り加へん
とするの勇ふべからず。凡そ人は皆多少前より
も一層美にせんことを欲するものにして、多く
は衣食住を美にせんとし、或は交際の間を美
にせんとなす。藝術に専らなる者の如く特に美
を念とせざるも、美を進むるに與る所少しと
せず。流行に驅られ、之を趁ふに苦心するは、
環象に順應せんが爲めなるも、幾分かは前
に美とせし所に甘んぜざるに出づる者にして、
頭髮も衣服も爾餘の器具も成るべく美にせんと
し、容易に目に觸れざる所をまで改むるを厭

はず。時には厭ふべき流行ありて、前よりも醜
陋と爲ることあれど、かゝるは寧ろ少く、人々
各々己れの意識し得る限りに於て、又力の及ぶ
限りに於て、愈々美を進めんと心掛く。
藝術は試みて能くし得るあり、試みて能くし
得ざるあり、多くの人は試むるも、努力して
妙を極むるを欲せず。而も藝術家の作りし所
のものを玩賞するの傾向は、世の進歩につれ
て益々増進し來る。蓋て藝術家に在らずして、
名畫の摹寫の行はれたりしも、寫眞術の進歩
に伴ひて益々擴まり、其の擴まるに因りて人の
繪畫に對する趣味の進むも亦著し。音樂も早
くより人の悦ぶ所なりしも、良樂器の多く造
られ、譜も巧みに作られて其の趣味の擴まり、
著音器の改造と共に愈々擴まることと爲れり。
詩歌も印刷術の進歩にて廉價に出版され、部
部動る所に擴まり、詩聖の作も村舎の棚に餘ら
れ、美に趣く人の趨勢は一般に互りに長ずとな
べし。美は實に一般の人の求むる所、求めて少
しづつ得るは曾て得難しとして珍重せられし金
銀寶石の年々増加するを以ても推し測るべし。
鑒識力の薄き者は、價格の高低を以て優劣を定
め、高價と聽きて貴重とするの謬見に陷るも、
其れとて美を求むるに基づかずとせず。何人も

前より傳はれる所を進むるに力を盡すの當然なるが、藝術を職とする者は、前代藝術家の遺せる所の以上に出でんことを念とすべし。前代に或る長處の存し、後人の做すべき事あるも、後代に後代の長處を發揮し之を後に遺さずして可ならんや。世は益々進歩し、材料も比較的多く得らるれば、新たに附け加へんこと必ずしも難からず。

美の現はるるに階級ありて、必要の主なると美の主なるとあるも、何れの方よりするにせよ、新たに附け加ふる所あれば美を進むるに與りて力あり。美を進むる程度に差あれど、各自其の美とする所を進むるは、其れだけ爲すべきを爲すもの、前代と同一の能力を有せんに、前代より優らざらんと欲して得べからず。美の増進の連續に在りて増進し得ざるは、何等かの疾病の潛めるなり。

第十章 連續の一部(下)

第二百一節 下等動物と雖も、食を尋ね、巢を造る、皆幾分か理否を判じ美醜を分つ所あり。(動物十九) 種屬保存の關係よりして多少共同生活を營み、共同生活の緊密なるだけ益々

各自の職分を重んずるに傾く。蟻の如き、蜂の如き、蟻に職分を守り、之が爲めに死をだも辭せざるあり。魚類に在りても、巢中に卵を收め、或は雌自ら守り、或は雄代りて守り、共同の見るべき無からず。鳥獸は或は群居し、或は索居するが、群居するは概ね同胞相殺害するが如き事なく、所有の區域を定めて他群の侵入するを許さず、侵入し來るれば協力して之を斥くるに努む。且つ雌雄の關係も略ぼ定まりて亂雑に流れず、或る期間確定するあり、間々終身確定するあり、一時に止まるは寧ろ多からず。かくて此等動物の間に何等かの規律あるは疑を容れず。即ち何等かの規律あり、往々秩序の整然たるなきに非ざるが、生活狀態の餘りに固定して殆んど全く進歩するなく、幾代を経るも依然として舊の如し。或る事情の下に或る變化の生ぜざるを保し難けれど、進歩の顯はるゝ程の事情は容易に起らずと爲さざる能はず。獨り人類は獸類と大差なかりしの幾萬年なるに拘らず、少しづつ進歩して漸く速度を加へ遂に大に進歩するを得たり。特種の規律に於て下等なるに劣るも、行動の複雑なるに比例して遙かに優る。

第二百二節 道德として意識し、斯くすべし

若くは斯くすべからずといふ時は、既に實際に於て幾許か其の事の勧められ若くは禁ぜられしなり。支那には仁義禮智といひ、尙ほ之に信を加へしが、こは印度に四戒として不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語を戒め、五戒として不飲酒を加へしに當る。抽象的と具體的との差あるも、二者相合ふ所あり、仁は事實として不殺生に現はれ、義は不偷盜に現はれ、禮は不邪淫に現はれ、智及び信は不妄語及び不飲酒に現はる。飲酒は文字通りに解せば範圍餘りに狭けれど、實は智を亂し信を失ふを忌めるなり。摩西の神より授かりしといふ十戒も、神に關する部分を除けば大抵此と同じ。此等は或る程度まで人類以下にも行はれし者にして、固より原人の間に

行はれ、犯すをば罰することと爲り居りたり、其の全く行はれざる種屬は到底永續を期すべからず。唯行はるゝの無意識的なるあり、半意識的なるあり、又意識的なるあるのみ。人類社會の愈々進みて愈々意識的と爲るや、特に道德の守らざるべからざるを説く者あり、最初は五常といひ五戒といふの類なれど、事物の複雑と爲るに伴ひ、單に大綱を以て甘んぜず、更に細目を擧げんとし、仁とは如何、義とは如何、禮とは如何、智とは如何と、一々之を辨別

し、人を殺すに就ても、殺害せし者のみを問はず、間接に此に關係せしをも咎め、物を盜むも、奪ひし者のみを問はず、手を下さざりしかに裝ふをも咎め、邪淫も姦通に限らず、此に類似せるを含み、妄語も欺瞞に限らず、力を搦らずして自ら欺くを含み、凡百に互り益々緻密を加ふ。

第二百三節 社會の進歩は各要素同時に於てせず、或る要素の進歩は他の此に伴はず、却て退歩するあり、政治軍事若くは商工業の進むとて、道德的行爲も亦進むとすべきに非ざるも、而も一言にて掩へば、隆盛に向ふの國は道德も進み、衰頽に就くの國は道德も退き、互に因と爲り縁と爲るとすべし。昔時より社會の進歩の疑はしくんば、道德の進歩も疑はしけれど、然らずして社會の進歩に遲速あるも、進歩するの疑ふべからずんば、道德も進歩して已むこと無し。若干の例外を除き、且つ民衆の多數より言へば、道德の進みも國益々富強、國益々富強にして道德益々進むべし。或は前に有名なる道德家あり、後に能く此に及ぶなきを見、乃ち道德の廢頽を説く者あるが、有名なる道德家の出づるは必ずしも社會の道德の高きを示さず、眞と美とに天才あるが如く、善

にも亦特に秀づる者あり、或は事實上に於て秀でずとも周圍の狀勢の爲めに秀づると認めらるるあり。前に如何なる道德家の出でしにせよ、後社會の大に進歩したらんには、道德亦進歩せりとすべく、少くとも進歩し得べきものとすべし。

傑出せる道德家、或る時代に在りて其の時代の習慣より離れず、言行も後世の標準を以て律し難きあり。孔子の言は今尚ほ人の格言として尊重する所なるも、時代相應に疑ひを被る無からず。堯舜を聖と爲し、も、舜が堯の二女を娶りしが如き、後世よりして禮に非ずとせらる、蓋し殷の時に五世同姓を娶るを許し、周の時に全く同姓を娶るを禁ぜしなり。孔子の曰ひしには、唯女子と小人と養ひ難し、之を近づくれば則ち不遜、之を遠ざくれば則ち怨むとあり。女子と小人と并べ言ふべき點あるも、後世社交の進むや、斯く言ふを以て不穩當とするに及べり、女子を輕んずると否とは時代に因る。又曰ひしには、甚しいかな吾が衰へたるや久し、吾れ復夢に周公を見ずと、切に或る事を思へば夢寐に見るらしきも、事實は決して之を確かめず。或は思ひて夢みることあり、又思ひて夢みざることあり、數よりせば平生思はず

るを夢みるの多からん、夢に據りて身の衰ふるに考へ及ぶは悲ひぬ。字子の畫寐ぬるを見、龔士の牆は朽るべからずと曰ひしこと、何等か事情の存せしならんも、文字の上にては甚しきに過ぎたりと爲さざる能はず。我を用ゐる者あらば非月にして可からん、三年にして成る有らんと曰ひながら、さる事の無かりしは、一に用ゐる者のなかりしが爲めとすべきか。齊景公に政を問はれ、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たりと答へしが如き、實際爾く言語の簡單ならざりしならんも、姑く言語に據れば、成績の擧らざるを察し得べきに非ずや。孔子と雖も毛を吹けば疵の求むべきあり、古聖賢は各々傑出する所ありしも、無瑕疵にあらざるや知るべし。

後世孔子の如く重んぜらるゝ人物ありと見えざれど、器の下らざるなきを斷言すべからず。諸葛孔明は聖たるに庶し、孔子は齊桓公を正しくして論らずとし、管仲の之を用けしを稱揚せしが、孔明は天下を一匡すること能はざりしにせよ、出處遲退に於て仲の上に立つる遠し。他にも人を擧ぐるに難からざれど、往昔言行の傳はれるの少く、後ほど傳はれるの詳かにして、詳かなるは缺點の見え易く、缺點の

知れざる人より劣ると思はる。支那は社會の進歩遅く、徳々退歩せしことあれば、三代を以て黄金時代とするの強ち理なきに非ざるが、社會の進歩の目醒しき處に在りて後の前に及ばざるを考へんこと極めて難し。ソクラテスは道徳家の模範とせらるる者、孔子は東倫を行ふより以上我れ未だ嘗て諱ふる無くばあらずと言ひしに、ソクラテスは其の上に出で、東倫の有無を問はず、自ら街頭に立ちて何人にも教へ、偏へに人を教ふるに務めしが、尙ほ時代の弊を受け、之が弊を悟らざりしありとして謙せらる。或はソクラテス以後ソクラテスなしと稱するが、一應然りとすべきも、果して德行に於て之に拮抗すべきもの無かりしかといへば、急に答ふるを得ず、後代にも亦稱揚すべき人なきに非ず。普通には表面に現はれし所を以て事を判定するも、實徳の如何は觸らざるにすべからず、無名にして有名に優れるは世其の例に乏しからず。基督は名聲の擧げるも、事蹟は詳かならず、詳かならざる丈に尊ばるゝ跡ありて、パウロに比し如何なるべきは疑問なり。基督の經典に次いで最も廣く讀まれ、經典ある處必ず之れ有りといはるゝ基督之模倣の著者として擧げらるゝトーマス・ア・ケンピス及びジャン・

ツ・ゲルソンは、兩ながら有徳の人なり。著名の書が二人孰れの手になりしやの明白を缺き、多分前者といはれつゝ、猶ほ正確の保證せられざるは、頗る奇とすべきか、孰れなりとも基督を模倣せんと欲して基督を模倣し得たりしなり。是れ以外に有徳の人の少からざるが、恐らくは基督と同等若くは以上なるもあらん。羅馬皇帝中にハドリアヌス、アントニヌス等あり、眞に賞賛すべし。

二百四節 社會の進歩の確實なる處には、德行の人を見るに難からず。英國は惡風の少からざれど、政治家にして道德家と見做すべきを出すこと他に多く例なし、ピットにして今少しく華奢ならざらんか、大徳の人として稱するを得たらん。グラツドストーンは種々非難すべき事あれど、遂に有徳の人たるを失はず、カムベール・バンナーマンの如きも同じく然り。伊國は衰運に陥り、道德の陵頽も著しかりしが、建國隆興の時に際し、ガリバルデーの如き、カヴェールの如きあり、瑕疵の掩ふべくも無けれど、共に心事の高潔なるを以て推すべし。北米合衆國も華盛頓を初め稱すべき人の現はれたるもの、惡風の加はれるに拘らず、其の駭々として進歩するの偶然ならず。日本も新たに長足の進歩

を遂げたりとすべく、惡風の長ぜるとも、稱すべき人物を擧ぐるに窮せず、仁齋藤樹の如きの擧げ難きにせよ、多数の上に於て道德の進歩の争ふ可らざるものあり。之に反し衰運に就ける國は、時に幾人か高徳なる輩出するも、多数は酒々相率るゝ惡風に向ひ、復救ふに由なからんとす、西班牙の如き、誠に悲むべき状態に在り。社會の盛衰は必ずしも富強を以て言ふを得ざれど、多様の點に於て進歩の明かなれば、道德も亦進歩しつゝありとして觀らざらん。地球上或る社會は進み、或る社會は進まず、中に退歩するもあるが、人類を包括すれば確かに進歩の途に在り、道德も進歩に洩れず。前代に善事として傳はりしもの、後代に守るべきの多きも、後代の人にして是を以て足れりとし、更に附け加ふる所あらずんば、増進の連續を外れ、正しく常態を失へりとなす。苟も普通の能力を具ふるからは、道德に於ても前代より幾分の進歩を遂げざるべからず。

第十一章 連續の迫隨

第二四五節 何事も連續の一部なれど、其の一部に致しめ到達點の定まれりと爲すべきと爾

か爲す可らざるとあり。植物は發芽し、成長し、繁殖すること、地質氣候等にて等差あるも、連續を追ふの程度は推測するに難からず、動物に在りても、蜂の如き、社會を組織し、其の社會に大小なきに非ざれど、概ね一定の形より外に出でず。鳥獸は時として大に増加し、時として大に減するも、要するに年々略ぼ同一事を繰り返し、一萬年を経るも、十萬年を経るも、格別の變遷なかるべしと想はる。(從來の状態に於ては進化し始めた) 獨り人類は到達點の定まりながら、他の動物に比し、限定の甚だ寛にして、さながら限定なきに異ならず 同じく人類社會に於て、多く限定せるあり、少しく限定せるあるが、孰れも下等動物ほどに連續を追ふの限度を確定すること能はず。

眞と美と善とは、下等動物よりして頻りに之を求むるが、彼等の求むる所は既に定まり、求め得るを求め、求め得ざるに及ばんとせずと見ゆ。人類も區々にして一ならざれど、眞を得て更に一層の眞を求め、美を得て更に一層の美を求め、善を得て更に一層の善を求めんとする傾向あり。多様の事情の下に求め、求むる所の眞と美と善の二者若くは三者の相互に衝突し、眞の爲めにすれば美を得ず、其の美の爲めにす

れば眞を得ず、眞若くは美の爲めにすれば善を得ず、善の爲めにすれば眞をも美をも得ずとの疑を生ずる無からず。要すれば七色の配合の如し、甲の美と善とを配するに於て、且つ眞といふの何邊まで合み何邊より合まざるやの明白を缺き、甲の以て眞とする所、乙以て然りとせず、如何なるの最も眞とすべきかは容易に決定せず。善も美も之と同じく一見して瞭然たるが如きも、最も美なる事、最も善なる事は、之を確むるに難し。則ち孰れに於ても最もなるを求むるに困難なれど、稍々欲望の大なる者は之を求めざらん

と欲して得ず。爲めに或は之を求むるに一生を費し、或は之を得ずして懷疑に陥り、或は強ひて假定を設けて安んずるが、種々に試むる間に得ざりし所の幾分を得ることあるが故に、何がなして更に多くを得んとする者の曾て跡を絶たず。されど如何の方向を指すも全く限定せるなく、時に限りありとするも、漸く其處に達すれば、別に何物かの前方に存するを認め、改めて之を追はんことを餘儀なくせらる。

第二百六節 欲望の大なる者は、複雑なる連續に在りて之を追ふに忙はしく、而も何れの方向に於ても到底極度に到達し得ざるべきが、幾分か前代より進むべき希望なきに非ず、下等

動物が一定の處に止まると同じからず。其の進むの度、年々に觀れば時に言ふに足らざるも、數千年を経過する間に頗る較著なるものあるべく、數千年にして尙ほ足らざらんか、數萬年にして必ず大に見るべきあらん。元連續に限りなく、或る時代に限定せりと認むるも、遠からず再び限定せざる状態に陥り、眞にも美にも善にも惑ふ所あり。或は自己意識に若くは無しとて、自ら以て眞とし美とし善とする所に據るの外なしと言ふも、自ら意識せずして眞を得、又は美若くは善を得たりと認めらるゝあり、甚しきは自ら以て誤れりとして却て他より眞なりとせられ、自ら以て醜なり惡なりとして却て他より美なり善なりとせらるゝあり、之に反し自ら以て眞とし美とし善として他より全く然らずとせらるゝあり、自ら意識すると否とは必ずしも問ふべきに非ず。而も自ら意識することなく、他人の意識する所に依るべきかといへば、決して然らず、己れ獨り知りて他人の與り知らざる事あり、己れ故らに知らしめずんば、他は如何にして之を知るべきや、他人が意識する所の依るに足らざるは以て推すべし。然らば何處に標準あるかとの疑問と爲る、或の群集の中に存すと爲すべし。一の小群集に存

するあれば、幾多大群集の會合せるに存するあり、言ひ換ふれば或る民族に存するあり、或は列國人士の間に存するあるなり。但し其の標準は常に一定せる者に非ずして、之を明瞭に認識するの困難なれど、不明瞭ながら多くの人々に認識せらる。

眞の求むべき、美の求むべき、善の求むべきは、一般を通じての事なるも、如何なるが最も眞、如何なるが最も美、如何なるが最も善なるかは、所在の人の盡く一致せんこと殆んど期すべからず。而して謂ゆる素愚の恃むべからざるは言ふ迄もなきが、有識の稱ある少数者も一々に信ずべきに非ず。斯くては標準ありて標準なきと同様の次第なるも、其の間幾許か依るべき無しとせず。何事に於ても總ての人の一致し難けれど、比較的最も擇ぶべきものが比較的多数によりて擇ばるゝ群集は繁榮し、否ざるものは衰微すといふべく、隨て繁榮する群集の擇ぶ所は比較的最も擇ぶべしとして妨げなき場合に乏しからず。(註三十八) 連續の極めて複雑にして、或る連續に於て進むも他の連續に於て進まざるあり、一部分を以て輕やくし隆替を判ずべからざるも、連續の大部分に於て進むとすべきは、概ね事の宜しきを得たるなり。繁榮す

る群集に於て標準とすと認むべきは、繁榮せざる群集自ら以て標準とせずとも、他よりして爾すべき者と認めらる。

眞と美と善とは必ずしも平行して進まず、其の一若くは二の進みて他の進まざることあり。繁榮する群集といふも、其の諸要素が皆齊しく進むに非ず、何れの點に於て進むかを見ざるべからざるが、而も繁榮すと認むべき群集の爲す所は、何等かに於て他に影響し、標準の如きも廣く則らるゝ點あり。世には深く研究して發見せる所も、多數若くは勢力家が奔走して顯はさず、苦心慘情の餘に成れる傑作も、多數若くは勢力家が拙作と爲して埋没し、同胞の爲めに盡瘁して到らざる無きも、多數若くは勢力家が罪惡とし排斥し去ることあるが、其の類りに行はるゝ處は繁榮せず、繁榮するも次いで衰微すべく、若し能く盛運を持續するを得れば、前に多數の爲めに壓伏せられし眞若くは美若くは善も相當の價値に認めらるゝことと爲るべし。固より連續は單純にあらず、愈々複雑して愈々岐路多く、一たび標準の定まり、後忽ちにして其の誤れるの知られんも、人類を總括して進歩するの疑ふべからずんば、其の次第に明白を加ふべきを信ぜざる能はず。究極に達せんは得

て望むべきに非ずして、究極に達し其れ以上に進むこと無きを欲するは、強ひて連續を斷絶せんとするものと謂ふべく、究極に達せずとも其の時代に進むべき限りを進むを得ば、以て聊か甘んずるに足る。

第二百七節 若し人類を總括して進歩すと爲し、年代を經るに隔ひ、前代の誤れるの知らるとせば、前の後より劣るの明かにして、前に眞とし美とし善とせし所の後に爾か認められず、後に眞とし美とし善とする所も、更に後年に及びて爾か認められざるに至るべく、即ち人は一に後の時代に出でざるを憾むべしとすべきに似たるも、實は此の如く考ふべきに非ず。數千年前に生まれ出でたりとも、當時進むべき限りを進みたりと認めらるゝは、後代に生まれ進みべき限りを進みたりと認めらるゝと何の優劣ある無し。人類は間斷なく連續を追隨するも、或る時代に僅に或る程度まで追ひて止まり、尙ほ大に追ふには更に若干歳月を經るを要し、而して前の時代に或る程度まで進み居らざりせば、後の時代に進まんを欲するも得べからず。前代に於て停滞し若くは退歩するは、何事か劣れるに因るべきが、若し後代の進歩に便益を興ふる所あれば、後代に缺くべからずとすべし、

單に時代の前後を以て事を推斷せんは誤れり。亞米利加、アフリカ、又は大洋洲の主人の如く、常に同一狀態なるは、進歩せる世より觀て生存の價値の低しとすべきも、支那に於て周を秦より低しとし、漢唐を宋明より低しとすべからず。歐洲の中世も、進歩中に進歩の勢を養ひ希臘羅馬と近世文明とを接續せるを以て、其の間に生死せし者を其の前後より價値なしとするに苦まざる能はず。

第二百八節 眞と美と善と、進歩に際して互

に先後あり、學問の獨り進むことあり、藝術の獨り進むことあり、信義を重んじ、職務を勵み、而して學問藝術の進まざることあり。十分に平行して進むの期し難きが、眞實の繁榮は其の成るべく平行して進むところに在り、即ち既に進めるは益々進め、足らざるは之を他に採りて更に進めんと謀る。國家として價値を認めらるゝは概ね然らざるは無し。孰れの國家も缺陷の多けれど、繁榮を以て目せらるゝは、同時代の他國に比し三者若くは二者に於て劣る所なし。或は國家は富強を旨とし、富強にて何事をも決すべきやに見えんも、兵力及び財力は善美眞を増進する手段としてこそ大に效用あれ、之を外にして何の效用なし。蒙古及び滿洲の支那

を征服して却て支那風に化せられしは、姑く措き、兵力其の物も道義と相待たずんば強を致す能はず。杜牧が六國を滅す者は六國にして秦にあらざり、秦を強うする者は秦にして天下にあらざれと言ひ、蘇轍が疆場尺寸の利を貪り、盟に背き約を欺り、以て自ら相屠滅し、秦兵未だ出でずして天下諸侯已に自ら困めりと言へりし類は、實を失ふと謂ふべからず。蒙古の軍紀嚴肅、犯す所なかりしは、宋を覆し、の偶然ならざるを見るに足る。「蒙古の軍紀」 歷山大王兵を提げて東方に進前し、向ふ處敵なく、波斯亦危し、時に波斯王大ダリユス、歷山の性行を聞きて曰ふ、斯かる人の爲めに滅さるゝは遺憾ある無しと。歷山は力のみの人にあらざり、徳を重んずること世に珍らしき程なりき。佛國は國威の發揚し萎靡せしこと數次にして其の發揚せるは即ち風紀の振作せる時、其の萎靡せるは即ち風紀の紊亂せる時なり。獨國と事ありし際、未だ戦はざるに早くも勝敗を豫言せし者あり、「エルツツ」獨國に弊風の少からざるも、佛國軍人の上下相率めて邊境に流し、同日の談にあらずと、而して結果は豫言の全く當れるを諷しぬ。然る後佛國漸く國威を回復するやに見ゆるは、往年より風紀の振作せりと相伴ひ、

尙ほ風紀の大に振作せざるは、國威の大に發揚するに至らざる所以とも解すべし。個人に就て觀れば、徳行ある者必ずしも榮えず、往々禍を被ることあれど、多數の上にては道義直ちに盛衰に關す。道義の頹廢するも、能く四隣を攻略せるありといふは、一時を見ての事にして、稍々久しきを見れば争ひ難き者ありて存す、否らずんば頹廢の一部分に止まり、他の部分の健全なるなり。「ハクスレーは生存競争に勝存す者の往々道徳上而も多量を節約すは諸部族の強は愈々平均し愈々其の強弱の顯はるを見る。レツキニー云、政治家は個人的人文は階級間に利益を與ふるも、多數人が善惡を制す。」列國の競争は、時に甚だ殘忍なるあるも、人類を總括して善美眞の連續を迫ひ、幾分づつ進むの疑ふべくも無し。

第十二章 幾分の満足

第二百九節 人々皆連續を追隨しつゝある

が、何れの方向にも無限を認めざる能はず。或る處に止まるは、周圍の事情に妨げらるゝか、又は自己の力の足らざるに因る。周圍の事情の變じ若くは自己の力の大ならんには、一層前進するを得べし。絶対的の知識は望みて得べからざれど、欲求の熾なる者は、勉めて絶対的なるに達せんとし、疑問を未解決のままに置く

に堪へず、如何にかして満足せんと試む。中にも主観客觀の關係は頗る明晰を缺き、認識する者なくば物象の有無を知り難く、認識する者ありての物象なりといふ。側、認識する者の無數物象の一たるを許さざる能はずして、含む者が何様に含まるゝかに就き、種々の研究の費されたるが、多少の進歩の見るべきあるも、究竟之に關せる知識の稍々精密を加ふるに止まり、何等解決の名を値するものなし。側、解決せりとするも、再三考ふれば十分に満足するを得ず。(近時學問)

元知識慾の熾んなるが爲め、或る動かざる基礎を發見し一切を其の上に築かんと欲せるあるが、其の熾んなるだけ、さる基礎を發見するに苦み、たゞ發見すと爲すも、之を確かめんとするに及んで際限なきを見る。欲求の弱きは或は早く満足せんも、其の強きは容易に満足するを得ず、認識論に専らなる者は、或る邊に至りて満足し得べき希望を有するも、其れさへ愈々穿ちて愈々深く且つ廣きを覺ゆるが、此に拘ること無く、更に廣きに互らんとする者は、斯くして満足し得べきにあらず。我は考ふ、故に我は在り、といふは知識の進まざりし時代の事、即ち自我以外を盡く疑ひ得たりし時代の事

にして、爾後知識の進めるも、尙ほ何程か斯かの色を帯び認識上或る基礎を求め得れば依りて纏て正當に解すべしとする狀あり。認識する者なくば、宇宙は何の狀態なるか、或は全く幻影ならざるかの疑惑の存し、絶對的に反證を擧ぐるの困難なるも、知識の愈々擴充すると共に、徒らに疑ふの好事家の遊戯なるかに感じ、事實を事實とし、事實に就て攻究するを厭はざらんとするに傾く。(今日にても重々發見する學問の發見の困難を、一)

第二百十節 近時種々の科學の進み、研究の結果の疑はしきもあれど、中に多く疑ふべからざるもあり、若干歲月を經れば、疑ふべからざるの又疑はるゝに至るにせよ、其の疑はるゝは現に疑ふ所と違ひ、現に信ずべしとする所に近寄らんとするなり。數學に於て、物理學に於て、化學に於て、若くは他の科學に於て確實とする所のものは、決して絶對的に確實なるに非ざるも、絶對的に確實ならざるの故を以て之を棄つる能はず、之を棄つる能はずんば、雜多の現象又は理法をも許容せざるを得ず。意識に於ける主客關係の未だ明白ならざれど、冥想して宇宙を造り出さんとする企畫は、漸く數を減じ、凡そ官能に觸れたるは、腦神經の

變質にてこそ異狀を呈すれ、腦神經の健全なりと認むべき限りに於て或る程度まで確實なりとすべき事とす。今日まで進歩し來れる諸科學の益々進歩せんことを望めば、斯く認むるの外なし。科學を以て信ずるに足らずとし、我が一身と共に宇宙の顯滅すべきを考ふるとなれば其れ迄にて、科學の進まざる處に此の類の徒あり、今も印度に之れ有るが、幾許か科學の確實なるを認むる間、斷じて斯く考ふるを得ず、我が一身あるも此の宇宙あり、我が一身なきも此の宇宙あるべきを想ふ。

科學は絶對的の知識を得んことを期せず、當時達し得る限りの點に達せんことを期するのみ。過去の進歩と將來の進歩との連鎖を形づく、前よりも確實と爲れりと信じ、後に愈々確實と爲るべしと豫想し得れば足る。以て満足せざるは達す可らざるに達せんとするもの、達す可らざるに達せざるも、達すべきの極めて多く、何の違か達す可らざるに達せんと試むるを要せん。達す可らずと見えて達すべきもあれば、時に試むるの可なるに似たるも、絶對に至りては到底達すべきに非ずして、達すべきは絶對にあらず、絶對とすべきあれば一時假定せる絶對にして、さる絶對は科學に於て到達するの

稀れならず、絶対學ともいふべき形而上學に於て到達せりとする所も此と大差なく、或る期間絶對と見做し居るに過ぎず。現在成すべきは此より外に出づる能はず、出でずとも何の不可ある無し。〔絶對も意識に存し、遠く可なる覺しといふ者あるとして無し。〕

第二百一節 科學は前代に比し少からざる

進歩を遂げたが、何れの點まで達せるやといへば、宇宙を有機體として説明し始むる迄に及べりとすべし。諸科學皆然りと爲し難けれど、知られたる約一億の星が相互の間に密接の關係を有し、此と關聯せる大小の物象も密接の關係を有すとせば、順序として有機體説を去ること能はず。趨勢を察すれば、諸科學相集りて宇宙の有機體たるを證明せんとし、少くも其の一端を證明し、今後愈々多くを證明すべきを豫期すべし。〔第四十二節第四十六節まで〕 其の證明せらるること、或は十年にして能くするあり、或は數十年にして能くするあり、或は數百年を費すもあらん。絶大なる宇宙を知るは難中の難にして、十分に解決せりとして満足するには無限の連續を追隨するを要し、地球の冷却し人類の消滅する時に至るも猶ほ能くし得ざるべけれど、年々歳々幾分づつ事の判明し來るを疑

ふべからず。從來科學は各々狭小なる範圍内に開踏し、或る局部の研究を旨とせしも、實は分立せる一部分に偏すべきに非ず、宇宙といふ有機體の一部分を研究し居るに氣附き始め、若くは氣附き始めんとしつゝあり。前には漠然として宇宙の有機體たるに考へ及び、種々の汎神教の行はれたりしが、今よりは科學的攻究法を以て宇宙の有機體たるを證明し、人類が其の絶大なる有機體の如何の部分に占むるかを明かにするに至らん。

宇宙は絶大といふを以て形容するに足らず、空間に於て銀河を限りとし、時間に於て星霧に始まり星霧に終るとするも、尙ほ絶大の絶大とすべきに、かくて究極の限界を定むるに由なく、或は銀河同様のもの他に多く之れ有るを假定し得、或は星霧の始まり以前に何物かの存し星霧に終る以後に何物かの存するを假定し得、無限に對し何ほど絶大の語を繰り返すも底なき井に石を投ずるが如し。而も現に知られたる所にては、全體として有機體を形成し、力に於て、組織に於て、普遍に生物と認むる所より遙に超越せりと爲さざるを得ず。生物に生命ありとすれば、宇宙に何等か生命に類する者あるに想ひ及ぶべく、宇宙の生命の疑はしとする

も、生物の生命の何たるかを考ふるに、是れ亦未だ十分に解せられたるに非ず。生命に就ては、今は寧ろ事實として認むるに止まり、生物の生命に關する知識の進むと共に、宇宙に關する知識も隨て進むべしと察せらる。生物の小さな知られたりとして、宇宙の大なるの同じく知らるべきに非ず、知らるゝも僅か一微分なるべけれど、宇宙の決して生物より劣らず、却て優るの遠きことの次第に知れ渡らん。〔第八十一節〕生物は或る星の成分の變化に伴へる現象にして、生存期間の認知し易きもの、宇宙は無數の星の集合し、何時活動の止まるべくも見えず。常に活動するは常に生命あるか、又は其の間に死とすべきあるか、將斯かるは尋常の生死を以て論ずべからざるか、惑の解き難きも、何邊よりするも、死物としての宇宙を考ふる能はず、何時迄も新陳代謝の行はるとすべき所、一步を移して永遠の生命に想ひ到る。生物は生まれて死し、腐爛して分解すれど、宇宙に在りて永遠の生命に與る。〔第五十七節〕かく永遠の生命に與るの何の效能あるやの疑はるゝも、事の此の如くなるを認め置かざるべからず。

第二百二節 諸種の物象は密接の關係を有し、生物の生死するも、宇宙が無限より無限

諸種の物象は密接の關係を有し、生物の生死するも、宇宙が無限より無限

に連続せる間に在りて缺くべからざる一部分を占む。各科學の進みて宇宙の事理の漸く判明するにつれ、人類の位置も漸く判明し、爲めに益々各科學の進歩を希望するに及ぶべし。各科學は單に星辰の遠近若くは山川草木の形質を云々するに非ず、實に吾人の叢れる疑惑を解くべき者として、宇宙の疑問と爲り居らば之を解かんとし、人生の疑問と爲り居らば之を解かんとするなり。有機體としての宇宙に與つべきあり、美とすべきあり、善とすべきあり、人は生くるも死するも此に與る所あり、或は是れ以外にも與る所あるべきが、今は研究の結果が總合して、漸く斯く大觀し得る迄に達せる者にして、精細なる解説に至りては之を後年に期せざる能はず。各科學關係者は絶えず従事しつゝあるも、一輪の花、一匹の蟲も、輕忽に附し難ければ、年々歳々進歩の微すべしにせよ、早く宇宙の解説の詳かなるに接せんは得て能くすべからず。人類の追隨する連續は頗る複雑にして、各々追隨すべきを追隨する間、相錯綜して愈々繁く愈々廣きを致すべく、己れ獨り急ぐも、多く效能ある無く、或る特別の事を除くの外、他の次第に進むを待たざるを得ず。今より數十年を經、數百年を經ば、必ず進歩の明

かなるあるべく、數千年を經ば更に大に進むを見るべく、數萬年の後宇宙の事を知ること恰も今日人體を知るが如くなるべし。認識する者が認識の連續を追ひ、全體なる原生界より一部な副生界に移り、更に一小部なる人類に移り、以て自らに及ぶに、意識の漸次明瞭を加へ無限の空間の此の一處、無限の時間の此の一刻に於て、斯く認識するあることを認識す。〔認識の連續を起るに無意識の次第に明瞭を加ふる體で、其の何れも一宇宙を起るべし。前記の如く、認識することと爲る、特に認識の起るべきを起るべしとせざるに非ず。認識する所の如何に順序立てるを認識する所とするも、得べき之を順序立てる間、思想の錯雜を來すの恐を免れず。此に於ては、同時に一種の統一觀あるべしとす。〕

第二百十三節 以上の如く考ふるは現代に於ける意識の統合にして、渾一の觀念を求め、聊か之を得たるなり。此に就て疑ふべきの少からず、何れの部分を觀るも疑ふべからざる無きが、凡そ連續は既に經過せるあり、當に追ふべきあり、知られたりとして或る事を信ずると同時に、知られずとして或る事を疑ふの當然なり。信ずるは過去より現在に及ぶ所、疑ふは現在より將來に及ぶ所、現在は信疑の中間にして、若し現に全く疑ふ無からんか、是れ進歩の停止せるに過ぎず。世には絶対に達せんとして頻りに勉むるあるも、其の遂に達し得ざる

は豫め必ずし、たとひ自ら以て達せりとするときも、他より觀れば達せざるの遠し。絶対に達し全く疑ふなからんとするは宜しく斷念すべきの事、唯比較的最も疑なき所に進まんとすべきのみ。爾するには何處より出立するも可なれど、既に過去の連續を繼承し、依りて多少の知識を蓄へたる上は、思ふとして幾許か過去に遡らざるを得ず。過去に徴するの判斷は必ずしも當らず、一千年前に在りて過去を稽すれば、一盛一衰の頼み難く、暫く傳來の教義に據るか、自己一人の定むる所に據るかの外なかりしならんが、現代に在りて過去を稽すれば、一盛一衰し、時に退歩することあるも、大體に於て連續着進の争ひ難きありて存じ、而して知識の及ぶ所、大愈々大、微愈々微、明確なるの愈々明確なるべきを認む。其の經過より察するに、觀察と推理と相合ひ相離れ、其の相言ふ時に知識の進歩を致し、其の相離るゝとき、或る程度まで益するあるも、其れ以上に及びて害するの多し。推理は須臾も缺くべからざれど、成るべく觀察より遠きからしめざるを要す。觀察に限りあり、其の十分なるを徴せば渾一の觀念を得ざるに終るべく、已むなく想像を加へざる能はざるが、其の想像も妄りにすべしに非ず、

苟も科學的研究の結果とあれば、何處迄も重きを置かざるべからず。先天的に然るべきや否やの疑はれんも、知識増進の跡を尋ねれば、斯く斷定せんことを促さるゝの感を催す。かく不完全ながら宇宙に關する意識を統合し以て幾分の満足を得(是より第一篇並一垂)

跋

書を校するは塵を掃ふが如く、一面掃へば一面生じ、三四校猶ほ既誤ありといふ。況や書を著すは頭に念想の涌き手に資料の入るに隨ふもの、筆せし後に新想新材を獲、獲るが儘に改むれば、更に新なるを獲、幾回改刪するも遂に完成を認むる能はず。完成を認めずんば世に公にせずと定めんか、永遠に公にすべからず。永遠に公にせざるは可、而も完成せざるを公にすべからずとの理、將た何處にか在る。有らゆる事物一も完成せず、苟子も天地全功なしの語ありき。進化といひ進歩といひ進取といひ向上といふは、完成と認むべき無きを意味せずや。怒るあり、泣くあり、大に笑ふありてこそ、世の中は飽

かなれ、之れ無くば空々寂々たらん。獨眼の跛に笑はれ、下戸の上戸に嘲らるゝ、各々一の喜劇たるを失はず。若し本書を以て著者自らの満足する所かと問はるれば、即時斷乎として答へん、決して然らず、缺點を知ることを豈敢て人に譲らんやと。缺點を知りつゝ世に公にするを憚らざるは、到底完成の期なきを思へばなり。これ憚らるゝにあらざ、謙にあらざ、尋常の最も尋常なるのみ。

庭前のコスモスの咲き初むるを觀て

語に云ふ、知者は水を樂み、仁者は山を樂み、知者は動き、仁者は靜かなりと。語の眞意判然せず朱註の、似たるが故に樂むといふが如きは疑はし。然るも大體に於て、多少形似無きに非ず。山に居る者は實質にして、水に備せる者は知巧なり。沿海線の比較的長き土地は開化に進むことも急速、我國の早く開化せるは瀬戸内海の周邊にして、歐洲の早く開化

山と水

せるは地中海の周邊たり。而して水に備する地に知巧の民多きに反し、山間に僻在せる者の大抵實質なるは、木曾山中の住民の實質にして、瑞西國人の亦概ね實質なるを以て推すべし。然れども山に居る者は必ず山を樂み、水に居る者は必ず水を樂むの理なし。之を言ふに至りては抑々諷る。且つ水に居る者の、却て山に住する者より知らざることあり。廣東の邊、舟中に生れて舟中に死する者、寧ろ山嶽の縱橫なる巴蜀の住民の知なるに若かず、固一概に言ふべからざるなり。又知者は動き仁者は靜かなりと言ふも、孔子の若き、始終動きて席暖かなるに暇あらず。特に今世の慈善は最も活動を要し、夫のカルネギーの若き、常に動きて止まず。而して軍人は尤も活動すべき者なるに、其の樞軸に居る者は、往々にして尤も靜止する者たり。モルトケの戦争に臨める、多く一室に屏居して地圖を參看し、自身打電して命令を四方に傳へり。何ぞ一概に言ふべけんや。かの語は畢竟するに、強ひて道理を附會すべき者ならず。註脚を讀むよりも和歌俳句を讀むが如くする、則ち自然に理會し能ふもの有らん。且らく之を試みんか。(初稿の「種より」)

眞善美日本人



(初版木表紙)

序

柳州記す、舟行窮るが若くにして、忽ち又係なしと。世態の移動亦然るか。多年の企圖一に立憲代議の政體を齎備するに在りて、朝は拮据して官制を改更し、野は鼓勵して政黨を樹立し、幾多の阻礙を經歷し來て、茲に漸く帝國議會の初期の了るを見る。而して得る所終に何物ぞ。大臣の暗啞のみ、議員の紛囂のみ、離間のみ腐爛のみ。士民多く鬱々として樂むこと莫し。吁

嗟呼家の事豈此に止らんや。必ずや峯轉じ、埃開き、曠日の及ぶ所纏滯として際涯を視ざる有らん。看よ、今日の狀勢に賣家湯に類するに非ず、寧ろ怒濤を冒し、炎熱を凌ぎて、亞弗利加之西岸を回航し、喜望峯の岸頭に立ちて、遙に泰東の富榮を推量するに均しからんか。日本人は有爲の種族なり、八荒の爲に偉大の任務を負へり。

二十四年の三月

宅雄誌

凡例

一 自國の爲に力を盡すは世界の爲に力を盡すなり、民種の特色を發揚するは人類の化育を裨補するなり、護國と博愛と交ぞ撞着すること有らん。本書を讀むもの幾度くは此理を了せん。

一 世の所謂國家主義なる者にして、果し

て國家全體の勢力を擴張せんと欲するものならんには、余固より之を取らん、然れども若し一部は獨逸學者に附和して、政府を最大主要とするの意味ならんには、余輒之を取る能はず。嘗て板垣翁に質し、翁云く國家主義にして國家全體を包含する者ならんには、予は國是の名を附して大に贊同せんと。本書を讀むもの庶幾くは此意を了せん。

一 本書は「日本人」雜誌停止中に起稿せしものなるも、推理の大意は嘗て意思の中に存せり。書中日本人の能力なる一篇は本年一月新年に際して日本人の地位を論ずると題して該雜誌に掲載せしと同じけれども、他は悉く新に起稿せしものに係る。急率梓行したる爲め、引用せし事實の如き撰擇宜しきを得ずして、且つ譏謬を免れざる有らん。幸に之を諒恕せよ。

一 本書は余が内藤虎次郎、長澤説の二氏に口授し、これに託して文字を成せしものなれば、全體の意義は分毫も責任を辭せずと雖も、文字の責任に至りては二氏の負ふ所とす。蓋し文字のみに着目して思想を輕忽に附するは、現今の通弊の如くなれば、

余は務めて之を避けたるなり。
一 今の時に際して日本人の爲さざる可らざることに頗る多し。本書實に此に論及し、且つ紙數僅少にして卒讀するに難からざれば、讀者の中途にして廢止すること莫からんことを希望す。

日本人の本質

日本人とは何ぞや。是れ何等の問ぞ。問ふ者既に日本人たり、而して自ら日本人たるを知り、問はるゝ者も亦日本人たり、而して自ら日本人たるを知るなり。されど日本人とは何ぞやといふ、此の間に接して嗒然として語なからん者皆是なり。日本人とは何ぞや。日本人なり。日本人の人は何ぞや。吾れ答ふる所以を知る、吾れ答ふる所以を忘る。日本人、日本人。默して想へば其の意義ありくとして幻像の如く眼前にちらつけども、口を開けば即ち忽焉として影を失ふ。室を照すの蠟燭はあれども、心底には却て暗黒の處あり、能く千里の目を極めて、乃ち臆上の塵を認めず、遠きに求めて近きに失するは、物屢く之あり。呱呱として地に墜つる

より雙眼一瞬するに至るまで、刻々刹那、一呼吸、曾て間斷なく消費する空氣、其の性質の明らかめられしは、極めて近世の事たり。社會なるものあらざや、人に資て成立し、人資て群居す、思ふ、所言ふ所、之と關係せざるは稀れなるべけれど、而も其の原理を尋釋敷演して、一の學科を形づくりしは更に近今の事たりき。日本人彼れ自ら日本人の何たるを明らめざるも、怪むべきにあらざるなり。思ふ、今代の知識は幻像的之れ尙ほす、説明的、論證的を主とす、況んや自ら知るを明といふ、自ら知らざる者何を以て他を知らん。則ち日本人が自ら日本人の何たるを言ふ能はざるは、今代の知識に缺けずといふべからず、而して自ら知るの明に乏しからずといふべからざるなり。因て自ら擲らず、聊か爲に論證して世に問ふことあらんとす。

日本人とは何ぞや、曰く日本の人なり、日本の人とは何ぞや、曰く地輿の圖を披展すれば、看る亞細亞大陸の東、太平洋の西、大陸小嶼相聯りて虬龍の如きを、名けて日本といふ。數千年來、元々茲に殖す、乃ち名けて日本人といふ歟、されども、廣海の水、船を載せ艦を漂はし、萬邦比隣朝に往き夕に還る、名けて日本

鳥といふと雖も、碧眼紫髯の胡人も居るなり、豚尾髮の清人も棲むなり、齒朝衣冠の名残を留めたる韓人も來り、捲髮厚唇にして裸體なる黒奴も往くなり、相生し相殖するとて必ず之を皆日本人の人ははんや。日本人とは何ぞや、曰く日本島を統轄するの政府なる者あり、命を此に聽く者斯に之を日本の人といふ歟。それ或はかなり、抑も何をか日本島を統轄すといふ。復曰はん、茲に殖するの元々を統轄すと。如何に之を統轄するか、元々相殖し、露爾として動き、雜然として群がる、蛆の蠢くが如く、野禽の集るが如く然らば、何處より手を着けて如何に之を統治せんとする、如何に之を管轄せんとする。朽索の六馬よりも、甚しく、善御者といふも爲すなけん。曰く既に相集り相殖す、亦相共に爲す所あらんのみ、相集りて、商業賣販を營むか、則ち日本は只箇の市場、日本人は只箇の市買たりといふ、可ならんや。更に工業技藝を作すといふか、市場に加ふるに職工場を以てし、市買に加ふるに大工左官銀冶陶漆の工を以てす、斯に之を日本といひ、日本の人といふ、可ならんや。更に宗教ありといふ歟、市場、職工場に加ふるに僧侶の寺院、教會を以てす、斯に之を日本といふ歟。教育を加へ、

學術を加へ、彼を加へ此を加ふ、加ふる所限りなく、而して雜然紛然も亦限りなく、限りなきの雜然紛然、乃ち將に如何に之を統轄せんとする。活潑潑地の元々相生し相殖する、斯の如く紛然雜然にして止む者ならんや。箇々の産業、箇々の作用、頑爾、盡爾として機械的に組織し、形成するのみにして止む者ならんや。彼れ其の集るや必ず一體の國家を形づく。其の啓發するや、微なる種子の苗として芽を生じ、單子葉を開き、雙子葉を開き、莖を長じ、幹を長じ、枝を岐し、葉を茂らし、而して花さき、而して實るが如く、純然たる有機體を爲して發達す。艸の如く、木の如く知覺なきの有機體にあらずして、總體に通じて意識を具有し、動物よりも、人類よりも莊嚴高大なる優等の有機體を形づく。通商、工業、宗教、學藝、皆之が一官能とし、一機關として發達し、而して所謂之を統轄すといふ所の政府其の物も、亦之が一官能、一機關として、かの統轄せらるると認むべき者と、同じく共に發達するなり。斯の如き有機體、徒然として集り、偶爾にして群する者の故さらに望んで輒ち建設し得べき者にあらず。知らずや人類の能、未だ些小なる芥の種だも其の手に於て造る能はず、況んや人

類それ自らよりも、高上なる大有機體をや。されば希臘の半島は、桑田未だ滄海となりしにあらず、環海依然、港津富の如く、雅典の規模、斯巴爾塔の殘墟、猶ほ指すべからざるにあらず、而もヘレニースの列邦一たび滅して後、此に入りて棲住する民族種を接すれども、レヲニダスの義勇、ソフオクレスの道德、プラトリーの觀想、フキチアスの美術、ホーメル、ソフオクレスの文學の希臘國は再び見るべからざりき。アベニンの峯蒼うして、チペルの海波自し、地中海を包括して三大陸に跨れる無前の大國を成就せし羅馬創基の半島は山光水色、昔にかはらずして、羅甸族の裔孫は連綿として猶ほ此に接住すれども、依武果敢、規度宏遠なるシビオ、グラツクス、該撒叔姪の經綸、サキルギル、カチニス、基涅魯の文字の羅馬國は一覆して復建つべからざるなり。人力の能く及ぶ所ならざるや乃ち然り、其の種子より萌芽し、發育し、繁茂するに至るや、齡を算する千百を以てす、亦其の必至の狀勢を以て啓發せるを見るなり。乃ち日本の國家あるが若き、亦豈徒然として集り、偶爾として群するの能く成す所ならんや。年曆の詳にすべからざる、神祕の古事記が現實に活劇せる數千年の昔より、生殖し、孳息し、分

合し、擴大し來つて、若のごとき無慮四千萬の親愛なる昆弟を致し、歲月の久しき、境遇の千種萬様なる、陶して之を治し、醜して之を成し、以て漸くにして若のごとき日本の國家を形づくりにしなり。斯の如き國家、輒ち望んで輒ち造り、日を期し舉手投足して辨ずること、主意書を廣布して會社を組織するが如く然るべからざるなり。斯の如き歴史ある日本の國家に分子たる人、斯に之を名けて日本人といふ也。抑も大塊の面は廣し、假に分つて兩半球とす、其の上に國するもの何ぞ限らん、人類として此に生じ、而して其の居る所の處を求む、亞歐墨漢、唯も吾が擇ぶ所のまゝ、然るに乃ち好んで局促して某の國家に屬すといふ、愚も亦甚し、蓋ぞ好む所に之いて好む所に棲住するの至當を取らざる、山の麋鹿、水の鳧鴨、爾が伴たり個たるを拒まざるに非ずや、嗚呼何の故にか人類は國家といふ鐵鎖の下に繋せられざるべからざる。是れ誠に故あり。夫れ石は冷々の物なり、鐵も亦冷々の物なり、而も石と鐵と相擊ちて而して火は則ち發す。人類を看よ、其の體軀の嬌小なる、或は某の禽某の獸に之れ如からざること屢々之あり、然れども嬌小なる其の體軀が潛藏する偉大の勢力、當然として案居

すれば、固より由つて見はるゝ所なしと雖も、
他と相觸ひ、同類相觸れて、之を磨し之を礪す
れば、璞玉光を放ちて漸々に其の能力を露
出し、獨居の無能は忽として他の一人と力を角
するによりて有能となり、一人の一人と競ふの
能力は、十人の一團、十人の一團と相角する
によりて倍進し、十人の十人と競ふの能力は、
百人の一團、百人の一團と相角するによりて
更に相倍進し、以て千に至り、萬に至り、十
萬に至る、百萬の團體、彼と此との二に止ま
らずして、若干の種數相對抗して相角し相競
へば、其の能力を暴露すること益々以て洪大を
致し、かくて人類の繁殖は原人の無量劫前よ
り急滿直下、自乘三乗の程を以て進み來り、
而して畫することなき能力の増大は漸く茲に
圓滿幸福の地位に向つて進むなり。圓滿幸福と
は何ぞ、眞を極め、善を極め、美を極むるの謂
なり。眞を極むること如何。太陽の距離を測る
が如し。金星の經過によりて太陽の距離を測る
者は、及ぶべく多く、及ぶべく異なる地よりし
て之を爲すを要す、一二の地を以て卒爾之を定
むるは精密幾すべからざるなり。異なる標準、
異なる目的、異なる關鍵によりて、異なる種類
を爲すこと及ぶべく多くし、而も以て一に歸す

る道理の眞、幾せざるべからず。廬山の形、か
なたよりは峯と見ゆるも、こなたよりは嶺と見
えん、峯を執り嶺を執り、彼是此非といふ、廬
山の眞終身見はれじ。善を極むるも然るなり。
突如として一朝思はずも一事を行ふ、更に之を
一事に徴するに謬らず、更に又之を一事に徴
するに適ふことあり、自ら事の甚だ宜しきを
得たるを確信し且つ人に誨ふるに、人聽いて而
して之を他事に行へば、到る處に格殺して排
撃せらるゝ、反り告ぐれば自らも亦疑ふことあ
り、而して後競々として畏怖し已れ取る所の
業務を凝滯するに至る、蓋し亦徴する所偏
局するの過のみ。邪惡、困難、害毒、災殃、投
ずるとして卓爾として立たざるなき、毅然とし
て守る所を失ふなき、庶くは善の極を見ん
か。利器の利や、必ず盤根錯節を待ちて而して
後に知る、鋌刃霜の如きも、外觀の人を畏く、
一たび觸ひて刀々相接すれば、脆くも折るゝも
のある也。美を極むるも然る也。純白と純黒
と、若くは純赤と純青と、以て色彩配合の妙
を盡せといふ、幾箇の直線、幾箇の曲線、以て
形象變化の致を極めよといふ、天下の至工と
雖も手を措けなきなり、必ずや萬種の色彩、萬
種の形象、組織配合、宜しきを料りて用ゐざる

なく、斯に美の極を見るを得ん。錦繡を織る者
の赤紫金碧兼ね用ゐるが如く、繪畫を作る者の
濃淡燥潤並び行るが如く、彫刻を爲す者の曲
直傾正盡く運するが如く、若し用ゐる所を
畫せば、奇は或は能くす、美は則ち知るべから
ざる也。之を總ぶるに眞なり、善なり、美なり、
個々の特色、之を彙集すること極盡し、之を
其處に實くこと法に合す、乃ち初めて其の極
致に達すべく、之を達するの道は亦最も特色
に秀絶せる特異の者をして、各々其の特能を盡
さしむるに在るのみ。人類億兆、坤輿を劃して
各々據有する所あり、曰く其の國家、某の國家
と、時には則ち相軋し、時には則ち相爭奪し、
時には即ち相談虐酷攻伐殺戮す、其の狀や
仁人君子の視るに忍びざる所の者ありと雖も、
豈知らんや、此の如き不祥慘憺の現象も亦か
の圓滿幸福に達するの驛程たり、舟後たるを、
其の相殺する所以は、即ち相觸りて人に
潛光を發する所以なり。國家を成す者多し、彼
れ皆各々其の特能を盡して其の特色を秀絶せし
むるの任務を負うて而して立てり。今や歐米諸
國の勢力強盛にして、向ふ所前なく、日月
に波及して殆んど將に寰宇を擧げて氾濫の中
に沒せんとす、沒す、則ち其の舊の特色を泯

滅して、其の自らの特能を伸ぶるあるのみ。是れ所謂眞を極め、善を極め、美を極むる所以に於て、果して損傷する所なしとする乎。自然が冥々裏に其の不測の勢力を應用するや、亞細亞諸國敗亡相續ぐの際に在つて、絶海の東、葦爾たる嶋國、猶ほ屹然として獨立の日本帝國と稱するを得る、是れ故無くして然るべからず、意

ふに將に大に其の特色に用ゐらるゝあらんとする手、日本人が大に其の特能を伸べて、白人の缺陷を補ひ、眞極り、善極り、美極る圓滿幸福の世界に進むべき一大任務を負擔せるや疑ふべからざるなり。粹然たる靈秀の氣の萃る處、赤人が詠みし不盡の根は、八面玲瓏舊の如く、石山寺に紫女の天才を揚揮せし驪ならぬ海は、花より臚なる松の影依然たり、五十三草、一夕に電過すれど、三保の松原、濱名の橋、夕暮の寂しき、心ある人の眺めに入り、和歌吹上玉津島、淡路島より須磨舞子、瀬戸内の月は、船を叩いて見る人なからんや、北海の浪險にして、奥羽信越の山峻し、風雨怒號、海若怒り、山鬼荒る、凄じさの程いかばかりぞ、此に生れ此に養はるゝの日本人、其の理想の特色、禮文風尚、醇章美藝、昔に於て彼が如く優秀なりしは、内外の漸く認めんとする所、彼れ

震旦身毒より遠なる域土を知らざる昔の日本人、其の成就する所既に爾く莊嚴美麗なりしを、東西開風の風尚一たび定まらば、寰宇の人類に對して重大の任務あるを自ら認むるの日本人、豈五洲の大局を其の特色ある理想中に融化して、圓滿幸福の地位に進むの一善策を與ふる能はずといはんや。

日本人の能力

日本人が重大の任務を負擔するを疑ふべからざるも、能く之を負擔するに堪へ得るや深く察すべきなり。縁の下の方持とは匹夫匹婦も畢しむ所の語、其の力なくして其の事を爲さんとす、志氣壯大にして謀計確傳なるも、識者奚ぞ取ること有らん。問へ、日本人の能力果して渠れが任務を全くするに足るか、憶むらくは人の多く茲に斷言するに躊躇するを。今や海風の夢に騰はるゝ困憊漢は論なし、其の内の尊むべく外の畏るべからざる、自らも唱へ人にも讒す一流の見識家に在つても、其の信念の底を叩けば、歐米人の優等人種にして我の軋く企及し難きを危まざるは、勢からん。苟に其の交際に於て、毎に一着を彼に譲り、彼の前をかねて自ら戒飭するが如き卑しき情念の胸にまつはるを

免れず、獨り工藝學術、制度文物多くは彼に學び彼に採りしが爲めといふのみならず、其の根底に於て、其の天分に於て、我國より彼に譲らざるべからずとの迷信、心眼の表に横はりて、外人崇拜の念は實に此處に萌芽し來れば、任務の輕からざるを悟りて、民性の發揚を圖る者の尤も先づ注意せざるべからざる所なり。

口く看よ、日本人が彼の歐米人に及ばざるが如き、一見して先づ感ずるは其の體格に在らん。アリアン種類の特徵として、彼れ皆骨格偉大、肢體の均衡宜しきに適ふ、而して日本人は即ち體軀矮小、やゝ俯屈し、步態矯直ならず、此に於て差違あるは明確争ふべからず。生物學者は既に人類競争の結果、優者が體格偉大にして肢體度に合ふべきを論じ、高名なる社會學者も其の著書に於て未開種族の孱弱にして、歐米開化の國民の偉大強壯なる所以を極論したり。されども今の開明國民が體格の偉大なる、何ぞ必ずしも體格が開化に關する所以を認するに足らんや。蓋し腕力競争の風久しく存せるの民に在つては、體軀長大、根を執りて格闘するに便なるもの毎に勝つて生存し、以てかの偉大なる種族を形づくるに至る。水草を越ひて轉徙し、猛獸と馳逐して山谷を跋涉し、群居相資く

るの法に拙き民族が、概ね偉大なる體格を具するは實に此が爲めなり。かの市邑を成し、耕耨を知り、各其の業に安んじ、昔に在つて邦土社會の早く平和の結合を成せる民族の若きは、其の戦ふや亦隊を作し伍を成し、勇者獨り進まず、怯者獨り退かず、曾て個々にして力を角し技を競ふことを爲さず、故に軀幹の長大、筋骨の弩張、必ずしも要せず、而して小弱なる者も亦併に存活するを得て、隨て民族全體の體格大に發達せざるを致す。故に軀幹の大小、肢體の均否は、唯其の民族が従前處する所の境遇に關す。アリアン種の彼が如き、日本人の此の如き、亦唯其の個人競争の風、其の社會に行はるゝを久しかりしと否とに由る、其の開化が此の異向に職由すといふが如きは妄の甚しき者のみ。且つ時代の推移して、機巧技術の漸く精なるより、筋を勞し體を動かすこと隨つて少きを致せば、體格の偏強は益々用ゐる所なきに至らん。戰に看よ、刀を振ひ槍を使ひ、短兵急接するの日に於ては、力の強き體の大なるは極めて必要なりしも、銃砲射撃の世となりては、鼎を扛ぐるの力、雲衝く大の丈夫も、大なる用を爲さざるにあらずや。斯に知る、開化に直接に關係するは、軀幹肢體の

偉大偏強にあらずして、寧ろ智力に在つて存するを。抑も智力は腦髓の作用なり、アリアン種族の頭蓋廓大にして、前頭の秀出せるは、以て其の容るゝ所の腦量の大を示すべく、更に以て其の智力の強大を證すべしといふか。かの鷹の眼光深々として、四附せるを見ずや、北海道土人が前額の秀出せるを見ずや。蓋し往古アリアン族が遊牧定居なきの民として山野を跋渉するに當り、雨澤き日曝すの際に往來し、睡を定めて前路を凝視するの習、眉頭の突出に與りて力あらずとせず。以て其の腦量の大を證すべしといはば、是れ北海道土人の智、亦日本人に過ぐといふべきか。抑も加ふるに頭蓋の廓大を以てすれば、其の腦量の大なる狀くべからずといふ乎。かの象を見ずや、其の頭顱の大なる、隨て其の腦量の大なるは人類に優ること若干、而も以て運らすべき所の體軀の廓大更に數倍の大を加ふるが故に、象の智は人類に下ること甚しきにあらずや。體軀の廓大は亦腦髓の大なる量を要す、其の本を問はずして徒らに其の末を較せば、數寸、僅も百尺の竿より長からしむべき也。則ち其の外貌を僞過して、直ちに日本人の智力、アリアン族に及ばずと斷じ去るは、輕卒、至りなり。要するに日本

人が他の種族に於ける優劣を評定せんには、精しく智力其の物に就て比較討究するより捷なるはあらじ。智力、其の處るや度以て其の大小を知るべからず、其の動くや數以て其の運速を記すべからず、之を比較すること極めて難し、而して日本人の智力を證明すること尤も難き也。功業事蹟之を量らんか、彼れ二千年來の成就する所域を出づる千里なる龍はず、瓊尼の楫といふべし。顧ふに時勢あり、地位あり、功業の偉大は以て智力の強大を證し、事蹟の繁多は以て智力の敏活を認むるに足らば、成敗の英雄を論ずべきや久しからん。ソクラテス、アリストートルの知らざる所にして、今日小學の生徒が知る所何ぞ限らん。球を環りて五大洲の存する、地球の太陽を回轉する、古人の夢想及ばざる所、而して今日茶話笑談して以て珍異となさず、然るに是に由つて古人の今人に及ばざるを斷じ、ソクラテス、アリストートルの智、小學生徒に如かずと斷ぜば果して何如。ペリクレスの治むる所は希臘の一小半島に過ぎず、而も其の爲政の技能ピスマルクが獨立大帝國を統轄せしに劣れりと言ふことを得んや。智力の優秀を斷ずる固と當に表面有形の結果を以てすべから

ず、而して其の内に蘊する力量の強弱多少是れ視るべき也。豊臣秀吉が西海を征して十萬人を擧げ、關東を討して二十萬人を擧げ、其の他十數萬兵を擧ぐる一再に止らず、而して發難指使、具さに矩度あり、且つ巧みに諸侯の藩封を配置して、盡く崩從せしむるを得る、是れ得易きの才ならんや。餘力更に能く十五萬兵をして海を絶つて韓を伐たしめ、八道風靡して燕京震動す、其の扶僱大に觀るべき者あり。看よ、歐米史乘、十萬の大兵を經致して海を渡せる者能く幾人をか留むる。徳川家康の封建制度は上下數千載、恐らくは全世界に比倫なからん。譜代親藩、之を舊家大藩の間に列植し、權衡宜しきを得却持相制し、兼併吞噬の患なく、以て數百年の昌平を致せり、時勢の然らしむる所といふと雖も、着眼夙に機宜に中り、能く百代の後を洞看し、以て後世子孫繼ぐべきの業を建つ、其の智力の非凡なるべきを見るべき也。歐米の史乘、後世を洞看するの明、家康の如き爲政治家能く幾人をか留むる。其の襟度の宏闊ガリバルヂの如く、而して公明之に過ぎ、其の心胸の公明ハムデンの如く、而して宏闊之に過ぐ、加ふるに俠義篤學經國の大略を抱懐せる、彼の西郷南洲の如き、歐米の史乘果

して幾人かある。獨力日本全海岸を測量し、製圖精細、差謬の指摘すべきなきこと伊能忠敬の如き古今東西何人か之に匹敵すべき。曲亭馬琴の如き、任他其の思想の豊富ならざるは一大瑕玆なるにせよ、著す所三百餘部、一部の多き者は數十卷を累ね、之を歐文に譯するも驚くべき大部たらん。其の構思狹隘に失するの嫌あるも、詞源混々として雜穢に流出する、凡そ文學あるの國、著作の家多しと雖も、之と比肩する力あるは果して幾人かある。更に女流に見るに紫式部が源氏五十帖を著せる如き、秀拔特異の趣味あるにあらざるも、國土の開化僅に近畿以西に局れるの世に在りて、彼が如きの著作あるは斷る驚くべき能力といふべし。閑秀の才情、他邦其の人に乏しからずと雖も、式部と並び馳すべき者果して幾人かある。更に徇究周計せば、強大なる能力を表示せる人物、極めて其の人少しとせず、日本人智力の劣下、未だ遽に證し易からざるなり。但く其の島國自ら磁源とし、鎖閉自ら局促すること日久しきを以て、大作用を做し、大能力を示すの機あらず、其の力全世界に於て幾許大の功業事蹟を爲し得べきか、彼れ未だ曾て自ら知らざる也。歐米人の今日、坤輿到る處に縱橫し、

傲然として世界史を以て單にアリアン種族の歴史なりと稱するに至る、而して日本人は即ち數百千年を経て常に一小島國に生息せり。其の直接に世界に於て成就せる事業を比較し、以て其の能力を量るを得ざるは、固より其所なり、然れども間接に比較する所を視ば、我輩歐米人の下に出でんや。日本人は所謂蒙古人種なり。言語の系統を察するに、滿洲韃靼と其の類を同じくす、支那とは全く異なれりと説き來りしも、語原の相類似せること近日に至りて證據數々擧げらるゝに至る、要するに其の蒙古種中に入るべきは疑なきなり。既に蒙古種たり、日本人が蒙古種中に在つて占むるの地位は何如、其の多く他に下らず、たとひ直ちに最高の地に居るを得ざるも、第二流より下る者にあらざるは又疑なきなり。乃ち諸々他の蒙古種民族が成就し得たる功業は、日本人も力能く之を爲すに堪ふと謂ふも不可なけん。蒙古種類の發達、之をアリアン種に比するに、何れの處にか其の劣れるを見る。彼れ希臘ありといふか、蒙古種の黃河近傍に其の開化を拓きし者、亦夏后商周の三代あるなり。ペリクレスの才は周公に何如、齊桓公の略進に歴山に譲らんや。孔丘はソクラテス

と殆んど時を同じうし、ゼノフランは恰も左丘明に應ず。彼れ羅馬ありといふか、此に秦漢の開化あるなり。六國を混一し、威北胡に加ふ、始皇の運は猶該撒の運の如し、陳勝の難に首たるカツシユスに彷彿す、儒教の漢武以下に興るは、基督教の擴張に均しく、王莽の周官を奉行ふはヒンデブランドの政教を合併するに類す。三國以下唐宋に至るは、正に泰西近世史の首より今日に至るに對す、晋武と訶露五世、魏武と伯得大帝、隋煬帝と路易十四、李世民と拿破崙亦正に相應するを見る。但、此相對する一連の時代に於けるアリアンの開化は、遙に蒙古種の上に出づるが如し、是亦由あり、蒙古種が處る所の邦、土壞千里、唯、山あり野あるを見る、河流の其の間に通ずるは黃河、揚子江三四に過ぎず、而してアリアン種の邦、海入り陸出で、河流數十、四走奔注す、交通往來の利、複雜頻繁の生を營むに於て狀勢甚だ同じかざるあり。且つ蒙古種の開化は四千有餘年の上に始まる、而してアリアン種は則ち後る、こと一千歳、故に他種族の成就せる開化、皆集めて大成するの利を享くるを得。歐洲今日の開化は亞刺比亞の人、即ち所謂セミチク種に探る所多し、亞刺比亞のアルケミイは支那の仙術と關係あ

り、蓋し支那の方士仙人と稱する者は皆技術に長じ、而して漢時張騫の西域に至るに先ちて早くより之と交通し、以て支那開化の西漸を致せるなり。亞刺比亞の開化、加ふるに印度埃及の開化を以てし、渾融して一となす。歐洲の開化が完全に發達して極めて勢力あるは、先づ此の三つの者に學ぶが爲なり。此等諸民種の開化が獨り西歐洲に入りて、東支那に至らざるは、亦地勢然らしむ、印度よりして陸に由れば則ち東北嶺を越え、海によれば則ちマラツカ半島を經る、之を歐洲に出づるに視れば、難易懸絶す。況んや亞刺比亞の如き、埃及の如き、壤地歐洲に接近せるをや。歐洲は實に幸福なる開化を享くる者、其の今日あるは當然のみ、之を以て發達をアリアン種の特性と誇るは僭越の至りなり。且つ近世歐洲の開化を以てアリアン種の能力に出づると爲すも、蒙古種は猶ほ實蹟に於て彼れと頡頏するを得るなり。彼れ近世の初めに於て米洲を發見す、坤輿の圓球にして西より一周して反つて東方に出で得るの理は亞刺比亞人の唱ふる所、之を歐人の智に歸するを得ずと雖も、其の能く此の理を實證して米洲を發見せるは、歐人が絶大の偉業と誇すも不可なし。曷ぞ知らん蒙古種族は更に早きこと數

百年、既に絶海の東に扶桑と稱するの邦土あるを認め、南宋の時に至りて其の事情已に詳に知られたるは、實に今日の米洲にてありしを。かの穆魯の開化の如きは、多く蒙古種より移せる所、之を考古の學に徴して歴々見るべし。今日の歐洲、鐵路の縱横せる、頗る驚歎するに足る、然れども、夫の歷世黃河の水を治むるの技倆、隋時運河の開鑿に比すれば、何ぞ必ずしも多く稱道せん。夫の萬里の長城の如き、頑大にして無用に似たりと雖も、冥々の裡、北狄を感服し、單子が南下して馬に倣、得ざるもの數十年、其の延長五百里、山を跋し溪を涉り、巍然として二千年の後に現存す、其の規畫の大、其の忍耐力の強き、眞に舌を巻くべきなり。此の能力を以て、此の氣力を以て、猶ほ東に於て交通頻繁、事情複雜、他國の開化に資りて自ら利するを得たらんも、機器の功利、物質の文明、歐人よりも大なるを得じといはば、誣妄の論なり。成吉思汗漠北に起り、亞細亞全土を席卷し、歐土を視ること彈丸黒子の如し、土を拓く數萬里、國を併する數百、規模の大なること實に曠古一人と稱す、是れアリアン種の望んで而して即く可らざる所にあらずや。思ふに胡元既に志を得て、一たび華

夏を覆せしより、進歩停滯して、今日に至るも萎靡振はざるが如し。只知る、一盛一衰は世の常、近代の言論自由にして理論に熱中し、學士書生、黨を割て派を分ち、以て相操弄す、餘風中ごろ絶えて又興り、明に至りて益々昌なり、而して忽然として胡元に伴せられ、滿清に亡ぼさる。印度の開化、世界に先ちて而して其の宗社の覆りしこと幾回ぞ、物極れば變あり、反動の必至、人力の支ふる所にあらず、即ち歐洲開化の邦國一朝忽然としてスラヴに蹂躙せらるゝなきを保すべからざるを。スラヴ薩勃の氣象、歐洲列國を蔽ひ、コサツクの馬蹄、靡麗なる數十の都府に逼きの日、彼等は猶に能く今日の如く智を競ひ巧を争ひ、駁々として日に進むを得んや。盛衰は常理、隆替は常勢、古今一轍、東西一揆、何ぞ獨り蒙古種に於て之を怪まんや。

夫れ今日蒙古種の人口六億に上る、而してアリアン種は四億に過ぎず、即ち過去幾十年間、生存競争の大勢に於て、我固より既にアリアン種に克てること多し、況んや其の世界の開化を催すの能力、彼が如く雄偉宏大なり。たとひ時勢の推移、一旦蹶跌、振はざること久しきに互ると雖も、其の實力の蘊蓄一たび轉達せば、

世界史の再び蒙古種の紀事に充たされんこと、決して疑を容るべからず。日本人にして既に蒙古種中の優等者たらば、其の能力優に坤輿の大局を轉旋して、偉大の功業を建つるに足らん、猶ほ何ぞアリアン種の強盛に時易し、頭を縮めて自ら屈するの爲すべきあらんや。十九世紀は將に終らんとす、而してアリアンの盛運、亦窮らんとす。彼れ今方に東洋問題に屹々するも、東洋問題に屹々するは正に是れ蒙古人種を固睡より醒起して、重大なる任務の在る所を知らしめ、それをしてアリアンと馳驅して世界の開闢なる極處を尋求せしむるのみ。三十世紀より後は蓋し蒙古種に取りて好望の世なり、而して日本人に取りて亦尤も好望の世なり。人自ら知らざるに苦む、苟くも自ら其の能力の在る所を詳知せば山を抜き海を倒すも亦爲すべく、天地を併せしめ、萬物を育ふも亦爲すべしとせんか。

日本人の任務 (一)

人類の國家を造る、故なくして然るにあらず、個々の人は大勢の運行するがまに、働作して、或は自ら其の故を知らざることあらん、されど人類は自ら爲すべきことを爲し、國家は

自ら爲すべきことを爲す、蓋し以て眞を極め、美を極め、善を極めて、能く圓滿幸福の域に到達せんとするなり。眞を極むること如何、相切磋し相磨礫することの以て美玉を成就すべきを見れば、智識を開はすの眞を極むるに已むなきを知らん。異なる境遇に於ける異なるれ、經驗より獲得せる極めて多くの異なる事理を彙集し、同異を剖析し、是非を甄別し、以て至大の道理に歸趨するは、眞を極むるの要道なり。既に稱して日本の國家と曰ふ、其の人當に人類世界に於て眞を極むるの一職分を擔はざるべからず、日本人果して寰宇列國に對して智識を開はすの力ある乎。大學は一國最高等の智識を蘊養するの處なり、今我には唯一の大學あるに過ぎず、専門の學校猶ほ他に之ありと雖も、皆遠處淺近の者、其餘は普通教育を主とする者のみ。歐洲の大國、大學の數十數に上る者珍らしからずして、中には二十をさへ超ゆる者もあり、衰爾たる和蘭、猶ほ四大學を有す。此の大學の唱説する所、彼の大學の排撃する所たり、彼の大學の是認する所、此の大學の否拒する所たり、以て相切磋琢磨し、學者の研究に非常の營養を與ふること、我が唯一の大學、晏然として天下の學術を總束すると大に其の觀を

異にし、加ふるに四圍の現象、皆文化の薫習を受け、學理討究に便利なること言を待たず。果して然らば我國の智識に於ける竟に彼の敵にあらざるべきか。

然れども是れ皮相の見のみ、若し其の實力を較せば、我の遽に彼の下に出づるを必ずべからざるなり。我國風に支那の文物を輸入し、印度の學說を傳承し、咀嚼して之を融化し、其の盛なるや、元和以降、元祿享保を経て寛政以後に及び、燦然として煥發し、其の發達の勢過むべからざるものあり。其の儒教の如き、一派の學識に統轄して、強ひて異説を立つる者の進路を塞ぎ、思想を束縛するの嫌ありしも、所謂統一は朱子學に據り、而して朱子の學は専ら格物致知を唱へ、理義を講究するを尚びしが故に、其の統一檢束は即ち其の弊處たるも、其の理義を究明するの風を養成せしは則ち其の利處たるを妨げざるなり。佛教の若きも地獄極樂の妄信、念佛題目の偏固、錯迷にして取るに足らざる者素より多かりしも、知識ある者が考修する所は、期ち超然として眞理妙諦の旨に契はんことを勉めたり。加ふるに封建の制を爲すこと日久しく、土に常祿ありて、俯仰衣食の資に促々たらざるを得、昇平數百年、力を蹶

血の場に伸ぶるの横なくして、人皆事理の講究に其の心力を傾けられたれば、利害得失の念に擾されずして、純ら理義を立つるの習を致せり、是を以て港を鎖じて殆んど外人の交通を絶ちしと雖も、苟くも事の理義に適ふが若きは、之が輸入採擇に怠らず、曆算刀圭、物理の事この如きは、早く已に泰西の文化を受け、一朝港を開くや、新文化、新學說、香室坐入、其の急速なること、眼應接するに遑あらず、制度文物、技藝習俗、其の理義を以て解悟すべきは、一時皆輸入採取して遺す無からんとす。之を支那が均しく東洋に在りて、其の泰西と交通すること

我に先つ數百年、通商貿易の道は大に進歩發達しながら、而も制度文物の如きは、充然として獨り自ら墨守し、曾て歐風に採るなきと、氷炭相反す。其の果して孰れか得、孰れか失、孰れか利、孰れか害、且夕の能く判するを得る所にあらずと雖も、邦人が理義を喜びて、之を容れ之を採るに躊躇せざるは、以て概見すべし。泰西學說の入りしより、年所を經ること未だ多しとせず、然るに其の教師とし、顧問とし、招聘せられて至る者、彼に在りて頗る聲名あり、識見ありと稱するも、其の言議する所を聽けば、必ずしも感激に値せざる者あり、而して我に在り

て俊逸の名あらざる學生が、彼に留學して毎々甚だ下らざるの地位を保つが如きあり、邦人の科學に習熟せざるや、加ふるに講究日淺きを以てす、指して其の智識を表示すべき著作、功業あるなしと雖も、智識を運用するの能力に至りては、素養の深きこと以て證すべきなり。或は云ふ、邦人徒に模倣に長じ、泰西の學說を聽きて而して之を記すのみ、曾て新たに發明創見することなしと。されども歐洲の學術に熱中するを以て、猶ほ且つ其の所謂碩學鉅匠、特に學術社會の趨勢に應じ、規定の學理を繼承して、之が爲に新材料を給し、細節の杆格を透明し、

以て多少の進歩を致し、多少の完備を促すに過ぎず。破天荒の新理論を組成し、果然として學術界の方針を一轉する、ニュートンの如き、ダルウキンの如きは、數百歳にして一邁するのみ。學理討究の材料、數世紀の經驗によりて整備せること彼が如きも、發明創見の新たに用ひがたきや此の如く、進化論出でて四十年、近日に至つては著作の多き、汗牛充棟なりと雖も、其の新理論を發揮して、自然、曙光を開揚せるものは、さながら中絶して續かざるの觀あるにあらずや。之を如何ぞ泰西の學說を聞くこと僅に二十年なる邦人に望むべけんや。斷言す、理義

究明の事に於て我の以て、泰西列國の後に落つるの思は決して之なからん、年を積むこと漸く多からば、彼に馳聘し、軼駕するに堪ふるも、亦疑を容れずと。

顧ふに世界智識の全體に關する理義を究明するは、必要之を待たず、而して日本人の力能く之に當るに堪へん。然れども一國家には一國家の特能あり、而して一國家の職分あり、則ち日本人として特に講究すべき學術なくばあらず、果して何をか日本人が眞を極むるの職分とすべき。蓋し二千餘年前此の國の基一たび創せられしより、其の領土、其の人民、其の風化會て此の群島の外に出でず、純然一様一色の發達を以て、往古來今を通過せること、他邦の類なき所、かくの如く純一なる變遷の狀態、曲折原因結果の若き、社會學上の問題として、大に特色の材料を供給する者たらん。外邦の感化、之を先にしては支那印度の文明の如き、之を後にして泰西の文明の如き、移易する所の勢力も亦大なり、而も其の關係の單純にして明晰なる、容易に其の若干の原因、以て若干の結果を表發せしかを見るを得べし。故に日本の史蹟を探究するは學術上得難きの新材料として極めて益ある者たり。スベンサルの

社會學を著すや、健胆早く已に大に日本の事蹟に注視して、多く材料を此に引用せしむ。其の報道の確實ならざりしが爲に、救を取むること絶えて無かりしに似たり。若し更に内地に在りて事情に曉通する者が、精確の報道を爲さば、社會進化の理論を完成するに於て極めて力なしとせず。但し從來の習慣、國民が秘密を守る者ありて十分に説明するを憚る所あり、且つ十分に説明せざるを以て、如く利とする者なきにあらざれば、國內の事情、以て破天荒の新説を造るに難然たるありとせば、更に全力を盡すべき

は、其れ東洋の事蹟か、亞細亞大陸は我が一葉帶水を隔てて相接する所なり、其の史蹟、文化の發達は之を彼に取りて研究するの容易なる、而も局外に立ちて掣肘せらるゝ所なく、公平に之を判斷するの利あり。印度、支那、及び之を統れる諸邦の事情、之を探究し、究明するは難きにあらず。加ふるに新たに輸入せる泰西の理論を擧げて對照對究の資に供し、以て公明の鑑定を下さば理義究明の事に於て、寧ろ居然として東洋のアレキサンドリヤたるの望あらん。近世泰西文物の新局面を開くや、實に重きを十五世紀なる希臘文學の再興に歸す、而して韓近印度學說の流入せしより、更に一生面を開くに至

る、蓋し將來に在りて更に又文化の新天地を裝飾し來らん者は、支那文物の感化に在らん。支那や當然として思へば、是れ僅に東洋の一國たりと雖も、若し其の壤土を言へば全歐洲よりも大にして、四千年の前より已に文物の觀るべきあり、一治一亂或は統一せられ或は列國分立し、數億萬民の國々が祖々繼承して作爲せる業は、實に宏遠偉大、尋常の短度で以て測るべからざるものあり、其の事蹟が研究の材料を出すこと夥多ならんは必然氣なき也。

夫れ印度は歐人が種族を同じうし、言語の系統を同じうする所、其の之を研究するに利なるは言ふを待たず。我も亦厥に佛教を傳へ、其の經卷の潜潛驚くべき者ありと雖も、而もかの歐人に倣ふこと能はざらんは、勢の已むを得ざるなり。支那の文化は則ち然らず。歐人の好學に熱中するや、諸子百家の學說、概ね之を其の國語に翻譯して、講究怠れるに非ずと雖も、語原の大差違ある、事情の大阻格ある、原文の趣味を通暢して餘蘊なからしむるは萬々能くすべからざる所なり。然るに我は則ち支那と人種を同じうし、其の文字の如き借用千有餘年、之を我が國字とし視るも不可なき程なり、況ん

や徳川氏の文化全く漢學流たりしより、支那の書を解し、支那の辭章を作すこと、殆んど其の士着の人に下らず、其の全く支那文明の趣味を得し得し之を全世界に傳ふること、極めて爲し易きの事たり。邦人にして苟くも先づ支那より始め、其の傍近諸邦に及び、東洋政治史なり、東洋商業史なり、東洋工藝史なり、東洋哲學史なり、東洋文學史なり、若くは地誌、風俗誌、動植物誌、又若くは豪傑の事、名家の事、大變動の事、斬新なる筆鋒を以て之を敘述し之を描寫し之を批判して對究せば、其の世界に於ける勳業、庶くは眞を極むるの道に於て遺憾稍と少きを得ん。思想精微、悟性明敏なる日本人、何ぞ其の力を此に及ぼさざる。

理義究明の事の如き、苟くも志あらん者は、敢て人に頼ることなく、進みて自ら力を致すべきは、當然の事なりと雖も、公共心の發達未だ盛ならざるの邦に在りては、政府の力を之に假すは、時として必要なくばあらず。我に在りて東洋の事蹟を研究するが如きも、亦政府の助を此に與へざるべからざる者あり。博物館の如き其の一なり。我が帝國博物館の狀態を観るに、頗る幼稚なるを免れざるに似たり、近日に至り少しく其の順序の整頓に着手し來りしも、其

の材料に至つては則ち猶ほ甚だ乏しきなり。是れ帝國唯一の博物館、材料を全世界に求むるは固より必要なりと雖も、主として東洋の材料を蒐集し、以て東洋博物館を完成せんは、當務の急ならん。儼然として帝國博物館と稱し、而して日本帝室に屬する者にして、資料寧ろ今日の如きは、國の恥辱たるのみならず、學者の研究に於ても亦甚だ不便なるものある也。我が博物館の歳費四萬四千圓、之を歐洲諸國の館が寄附の金積んで巨額を爲すに、更に年々巨萬を投ずるに比すれば甚だ過少なりといはざるを得ず、須らく他の冗費を節減して、大に此に増す所なかるべからず。されど今の歳費猶ほ其の多きに苦しむ、更に大に増額せんは或は爲し難からん、但し總額四萬八千圓、而して此の中購買費は一萬三四千に過ぎず、他の三分の二以上は之を不急の途に糜せり。帝室の理財、世人の嘆を容れがたき所と雖も、斯の如きの費途は早く注意して其の當を失せざらんことを務めざるべからず。且つ有志の輩が、資料を委託するの途を開き、大に藏品を増殖せるが如きは、處措宜しきを得ば、其の今に加ふことは數倍なるは難からざるべきなり。然れども此の博物館をして十分の材料を備へしむるは、其の費の賫られざ

る、決して朝夕の輕く望を屬すべき所にあらず、已むなくんば、圖書館の擴張か。今かの東京圖書館は且つこれを國立の圖書館といふを得べし。而も備ふる所の典籍甚だ少く、士民が資つて研究の料とするに極めて匱乏を感ずるが如し。是れ固より當然の事、從來館の歳費僅に八千圓、而して書籍購買の料は則ち二千圓に止まる、二千金の購ふ所、能く幾許の珍書を博するに堪へんや。帝國大學の圖書館に特に教授學生の閲覧に供ふる者、猶ほ歲に一萬二千圓の圖書購買費を有す、然るを一般士民の使用すべき東京圖書館が僅に二千圓の購買費に醜觀するは、厚薄度を失するの甚しき者なり。歐洲大國の歳入に對する圖書館の費用は、我が歳入に對する圖書館の費用に比して、三倍乃至五六倍なり。晚學新進の邦、銳意新智識を獲得して、先進の邦國に追及併馳せざるべからざるの地に在りて、緩慢此の如きは罔々の至りならずや。何の費用を節減するも、東京圖書館には少くも歲に三萬圓以上の購買費を給せざるべからず、若し五萬圓を投じ泰西書籍を蒐集するの餘、特に東洋の典籍を網羅するに從事するを得ば妙とせん。是れ國家の義務、日本人が眞を極むるの道に於て喫緊必須、他の費用を省き、以て此の費

途に充つるも亦爲さざるべからざる所なり。更に又爲すべきは、亞細亞大陸に學術探征隊を派遣することなり。たとひ研究の材料を蒐集し、書籍を積貯するも、百聞或は一見に若かず、深く其の實境を踏み、親しく其の實情を探討せざれば、隔靴搔痒、理義を辨明するの滑かならざるは免れ難き所、則ち學理研究に志篤き者は、當に奮つて自ら險を冒し探征を務むべく、而して有志の士が資金を寄贈して其の學を助成するを得ば、尤も幸ならん。されど政府若し志あらば、國費を以て探征隊を遣るも不可とせず。看よ、翻譯流の法律の取調に數百萬金を抛ち、不急の官舎に時として數十萬金を費し、瑣々たる狂暴の徒が國事犯を企つるに嫌はしければ、之が追究に賴ち數萬金を投ず。今少し此の費の用途を更め、十萬金を支度に當つれば、數十名の學者をして一團の探征隊として、千古未發の新學理を探究し、東洋の一國民が能力を世界に表彰せんこと優に做し得べきなり。かの在歐の留學生、歳々消する所幾萬千、而して彼に到れば則ち歐舌語言の好きを贏得し、若しくは彼に在りて數十百の書を讀了し、こゝかしこの教授の風來を倣ひ得て歸るに過ぎず。彼輩の參聽するは教授の講義ならん

なれど、學者が家言の神髓は寧ろ印行の著書に存すれば、數室并誦の講義、一知半解にして以て已むは、却つて萬里の外に在つて印行の著書を目眼精讀する者に劣ること少からず。其の歸朝するや、周月周歲の間は猶ほ風采彷彿として、稍々彼地學者の薫染を認むべく、外々觀瞻の新智識に充實せらるゝが若きも、其の實之を留學の前に比して大なる進歩なく、其の理義を究明するの力の若きは、内地に在りて熱心に讀書し、若くは實驗考究を勉むる者に勝らざるは、概ね然りとす。歐洲留學の事、之を排斥するは固より適當なりと雖も、均しく之れ國帑を消糜せんには、寧ろ東洋の新學理を探究して全世界の眞を極むるの歩趨を策進するの當れるに若かんや。要するに日本人が東洋の新材料に藉りて、未發の新理義を發揮するは、一日緩ぶべからざるの急務なり。

純粹の理論を研究するは必要ならざるにあらず、邦人の純理に偏傾せる、高等教育の程度一步を進めて研究の方法や、整頓熱煉するに至らば、此の一點に於て一機軸を出し、學術世界に一頭地を放出し得んことは、望なきにあらず。願ふに未だ世に知られざる東洋の事物を研究して、新材料を學術界に併給するは更に進

切緊急ならん。現に今日學術に就て多少の報道を爲し得るは、生物學、地質學、若くは人類學等なり。是等の學術皆新たに原理を發揮するにあらずして、特に世人の未だ着眼着手せざる東洋の新材料として、彼の喜んで迎へ入るゝ所なり。微々たる一二學術の報道且つ然り、一たび手大陸の探檢に着けば、其の材料の供給多きに堪へざる者あらん。夫れ貧弱の國、力を以て衡を強國に争ひ難し、則ち超然として理義を以て地位を其の隣に占むるは、事寡くして功倍するの道なり。知んや世界人類が圓滿幸福の域に進むの一道として、理義を正し、眞を極むるの方に於て、日本人が一臂の力を效すべきは實に此に在り。奮ふ所なかるべけんや。

日本人の任務 (二)

善を極むるの道途に於ては、先づ正義と認むる所を主持して背て一毛も假借する所あるべからず、然れども一端を認めて以て正義となし、のみにては以て盡せりとなし難く、右に左に、前に後に、種々雜多の邪惡と相觸れ、災殃と相衝き、茲に初めて蕩然として顯はるゝなり。而して正義の自在に發揚するは、相互の權力の差別を離れて全く平等に起けるの時にありと

す。若し夫れ權力に於て、大小強弱の差別あらんか、大にして強なるものは、小にして弱なるものを凌辱することあらん。羊兒の以て兎に敵す可らず、蟻螂の以て隆車に抗す可らざるは、權力の相懸隔するに外ならず。小且弱なるもの、大且強なるもの凌辱を反却し、自家の體面を保全するを得ずんば、彼れ非にして我れ是、彼れ曲にして我に直なること萬々明白なるも、恨を呑み取を包みて之れが臣妾となり奴婢とならざる能はざるなり。若し其の權力にして互に相讓ることなからんか、甲の以て乙を壓服せんと欲するも得る無く、乙に於て甲を屈服せんと欲するも得る無く、乃ち一方より他方に向うて非理を言はず、他方より一方に向うて驕稱の行爲をさす、互に情を放ち懲を恣にする能はざるより、斯に互に信を守り、義を重んじ、其の文や郁々、其の聲や洋々、其の條あるや、井然として大に見るべく、正義の發揚縱横無碍にして、善の庶くは極むべからんとす。是れ當に個々の人相關するに於て然りと謂はず、之を國家と國家との際に見るも亦復然らざるはなし。試に眼目して茲に強大なる國家と弱小なる國家とありと假想せよ、事に觸れ、弱者が強者の爲めに、凌辱せられ、損害を被る

こと貫るべからざるや必せり。されども若し此等の國家にして兵力富力相若かんか、凌辱の措置費用ふる處あらんや。理已に斯の如しとせば、正義の行はるゝには相互の權力の平等なるを要すと云ひしは儼然に非ざるを知らん。業て問ふ、我が日本現代の勢力たる、果して權衡の比平を保ち、海外諸強國に對して正義を伸ぶるの實力あるか、抑も然らざるか。

論者あり、動もすれば徒らに海外諸強國と我國との勢力を比較し、皮相より之を論斷して、彼我の勢力著しく相懸絶すとなし、曠々曠々として彼が後塵を望み轉た凌然たる者少からず。想ふに歐洲の諸強國や、其の兵員に於て我れに十倍して尙且つ算あるものあり、其の軍艦の數に於けるも亦我れに十倍して尙且つ餘あるものあり。加ふるに將帥の聰敏なる、兵卒の勇敢なる、操練の精熟なる、武器の銳利なる、亦人をして嘆賞措く克はざらしむるものあらん。夫れ斯の如く歐洲諸強國の軍備たる、獨り數量の上に於てのみ大に超越する所あるのみならず、整理の點に於ても大に超越する所あり。

若し夫れ之を以て我れに臨まば、猶ほ枯を摧き稿を振ふが如く、譏笑して而して屈服せられんのみ。且つかの支那の如き頻年軍事に意外の發

達をなし、殊に其の短とせる海軍も兵員、艦數兩つながら我が三倍以上に達せり。一朝太平洋上、日本海面、風波大に駭かば我島批を高うして安んずべけんや。然りと雖も細かに彼れが形勢を觀察せば未だ決して落膽喪心首を垂れて退縮するに足らざるなり。蓋し歐洲諸強國の兵備、整頓完具、屹然として動かす可らざるが如き勢あるは、其の内帯より自然に發達し來りたるものにあらざりして、四方を圍繞せる必迫の形勢に迫られ、驅りたてられ已むを得ずして茲に至れるなり。試に見よ、獨と佛とは骨を折き肉を喰はんとする深仇大敵にして、此

に兵員を増せば、彼も兵員増し、此に武器を改むれば、彼も武器を改め、彼に鐵道を國境に向くれば、此も鐵道を國境に向け、相對して同一の比例を以て進達す。譬と云ひ、英と云ひ、伊と云ひ、俄と云ひ、時に外面に於て羊服を裝ふあるも、内面を伺へば狼身ならざること殆んど希れにして、芒刺越盾、一日片時も其の兵備を緩くするを得ず。今夫れ物を壓迫せば熱を發す、壓迫すること益々甚しければ熱を發すること益々甚しく、愈々益々壓迫せば熱亦愈々益々發生す、壓迫の強弱の度は熱を發する多少の度と正比例を以て増進減退するなり。請ふ

此の理を移して之を國家の上に見んか。抑も或る國家にして四隣の國家と相比し、相併立し、建國の大義を汚さず、獨立の體面を辱めざらんと欲せば、之を保全し之を維持するに足るの勢力を時へ置かざる可らず。年々歳々、氣象恬和、雲起らず風來らざれば乃ち止むべきも、國家と國家との疾視讎嫌、往古來今未だ一たび休せし例あらず、苟くも戰爭激烈を加ふれば、從て内部の勢力を竭盡し、發露して之に應ずるの計を爲さざるを得ず、若し事の然る能はざるあれば一旦緩急、覆敗之に繼ぐべきのみ、試に之を佛國の歴史に見んか、夫の革命や特權を有せる種族は個々焉として危懼し、只管之を妨障せんと欲し、加ふるに一彈して、共和萬歳萬々歳の歡呼聲裡、王路易を引き來りて斷頭機械に上するや、歐洲各國の帝王皆爲のに戒むる所ありて、務めて佛民の躁躍を抑制せんと欲し、兵を連れて來り迫る、是に於て佛國の民起ちて之と戦はざるを得ずして、已むなく内部の勢力を發出して之に應ずる所以を計り、動搖りて反動の起る所、密に覆敗の慘狀を免れしのみならず、一時四隣を壓服し赫々の威名を擲にするを得たりき。亦かの波蘭土を見ずや、一時蹙然として歐洲に雄視せしも、衰運

の歸する所、内勢以て外勢と均平を保つ能はず、國勢陵夷、社稷遂に滅亡し、志士仁人の英魂をして永く地下に歎するを能はざらしむ。備へ得る者は存し、備へ得ざる者は亡ぶ。佛國現時常備の軍員は、恰も那破崙一青の華才を以て徵集せし戰時の兵數に對し、露國が那破崙一世を連らんとして十萬の兵を出すに苦みながら、今六百萬の戰兵を有するの狀あるも、戰爭の時世、斷力を維持するが爲め定に止むを得ざるなり。歐洲各國遂に之を望めば、秋々獵々、耀々として日眩し氣奪はれ、洵に曠世の觀あるも、是れ偏へに隣國互に相壓迫し相壓迫せられ以て之を致し、者なれば其の勢力は歐洲局面の支持に盡く、之を放ちて遠く天の一方に離飛せしむる能はざるは亦明けし。然らば則ち現代に在つて歐洲諸國の軍備井然として整頓し、將帥如何に靈敏なるも、兵員如何に夥多なるも、操業如何に熟達せるも、武器如何に靈利なるも、軍糧如何に豐饒なるも、之れ皆周圍の勢力を平均して自國を保護するに必需なるものにして、遠く離隔せるの邦土に在つては敢て之が爲に深く恐怖するに足らざるなり。かの支那の如きも軍艦兵員我に鮮少なりとせざれども、かの漢として廣濶なる大國と、かの德として

衆多なる民人とを保護せんには尙ほ其の足らざるを患へずんばならず。我が日本は國を東海の表に建て、四方相接する處唯夫れ清瀾として捲き來り捲き去る海波のみ、且つや堅く港灣を鎖し、復自ら巨大なる船艦を破壊し、以て外國と聲聞を通ずるに由なかしめたる爲め、周圍より來りて壓迫せる者の如きは絶えて之れあるなく、隨つて起きて之に應ずるの準備に汲々たるの必要を感じずなかりき。其れ然り、今日遽かに彼我の勢力を比較して我の彼に及ばざるの觀あるも、豈怪むべしとせんか。然りと雖も、今や宇内の形勢日に切迫し來るは洵に現代の一大現象にして、電氣蒸氣の發明より人口の過疎、細民の不平に至るまで皆此の一大現象を助長せずんばならず。乃ち此の現象は亦我が日本を驅つて其の中に没入せしめ、他國と等しく外來の壓迫に依つて進退せざる可らざるに至らんか、嗚呼我が日本果して如何の地位に立つべき。念ふに宇内現今の進歩や、決して遅鈍緩慢、少しも畏るゝに足らずといふを得ずべからずと難んずるに足らざるなり。恐らくは少くも尙ほ十數年、日本は彼等と離隔し、徐に自ら立つの計を爲すを得べし。外來の壓迫

に依つて自在に左右せられざるものあらん。果して然らば我國の軍備未だ十分に整頓せざるも以て強弩の末を折くに餘りあり、豈宇内に向つて正義を鳴らすの力なからんや。強國若し來りて我れを凌ぐが如きあらば、堅く正義を守りて以て斯の美なる邦土を保全すべき也。已に我國の勢力は以て今日に於ける國家人民を保全するに足るとせば、吾人は應に擊壤鼓腹、太平を謳歌して柳暗花明かなるの處に生死せんか。若し此の觀念にして然りの應酬を得るあらば、國家の滅亡夫れ茲に基せん。羅馬の滅ぶるは北狄の侵入に依ると謂ふと雖も、人々氣滿ち心驕りたるにやらざるべからず。氣滿ち心驕れば乃ち怠る、油斷大敵世は長へに柳暗花明の照々たる天地にあらず、一旦事變に遭遇して制止するに由なきを奈何。我國現今の勢力豈恃みて以て枕を高くすべき者ならんや。自國を揚げんと欲するは人の常情なるも、心ある者は斷じて今日の有様を以て満足を表する能はざらん。若し夫れ我國にして今日現在の勢力を保有せば、平時は以て晏然として國家の重きをなし、内國の紛擾は何時にても之を鎮平し得べく、外來の激寇も、容易に志を逞しうする能はず、遽かに國家危急の崖頭に立ちて、寸

進寸退容易に歩武を移す能はざるが如きことは萬々之なしとするも、苟くも宇内に向つて正義を鳴らし毅然として正義至善の首途に邁歩せんと欲せば、纔に自ら保して而して止むべからず、外國に於ける紛難葛藤の若きも時に或は其の間に周旋し、奔走し、以て至理のある所、公義の存する所を闡明せざることあらんや。兩刀の下兩虎の鬪、身を其の間に投ずるの危険を恐れ、常に途逸退縮するは、寧ろ身を俾する所にならんや。況んや宇内の形勢は一定の理法に従うて搖動する莫く、時としては不規則にして殆んど端倪す可らざるの事例を現はすことなきにあらざれば、何れの日か忽然俄然青天の霹靂、疾風暴雨を捲き來りて我が國土に投ずるも知る可らず。果して斯の場合に遭逢せんか、我國今日の勢力は以て二萬五千里の面積と四千萬の人口とを保全するに於て、斷じて其の足らざるを思へずんばあらざるを知る、其れ胡を以てか曼然放心すべけんや。千八百五十一年の萬國大博覽會はテンプル、ナブ、ピースの稱ありて、四海昆弟とし永遠の泰平を謳ふべき表象たりと思はれしも、久しからずして露と英佛の間、清と英佛の間、埃と伊佛の間、并に獨佛の間に大戦亂あるを豫告せしに非ずや。安南既にな

し、緬甸既になし、彼を思ひ、此を念へば軍備擴張の益々勉むべきは已むべからざるなり。軍備の擴張は暴君逆吏の唱へて以て人民の不平等を避くる所、行うて以て自己の私慾を遂ぐる所、乃ち然らずして能く公に能く正に施行するも猶ほ不正の贅澤物たるを免れざるの狀ありて、得の失を償ふこと甚だ明瞭ならざるあり、加ふるに今や官府の措置を視るに、往々にして嘔吐すべき者あり、此の輩に託して贅澤物を處分し、益々贅澤に畢らしむるは、太だ願はしからざる所なりと雖も、大勢を觀視し來りて、邦土の安泰を計るに止む莫きを察すれば、何爲ぞ熱中事に従はざるを得んや。軍備の擴張は益々勉めざるべからず。然れども軍備の擴張と富財の多寡とは正比例を以て進むものたるを知らば、少額の金圓を投じて盛大なる軍備をなさんと欲し、夙に起き夜半に寝ね、瘁厲奮發、期する處に赴かんとするも、其れ能く得べけんや。試に思へ、今一隻の軍艦を製造せんにも尙ほ千萬圓を投ずべきあり、一門の大砲を鑄造せんにも尙ほ十數萬圓を投ずべきあり、砲臺を築造するが如きも、堅牢なる鋼鐵を以てせんと欲せば、驚くべき莫大の金額を抛たざる可らず。而して百噸砲に用ゆべき一個の

破裂丸は一干圓に近く、發射百五十發に至れば
 砲身必ず大に修繕を加へざるべからずと云ふ、
 總て機械は其の種類何たるを問はず、改良に
 改良を加へて愈々益々精巧なるに至らば、之を
 製造し購求するに亦從て巨多の金額を要する
 なり。彼の火藥の如きも年々改良を加へ、愈々
 出でて愈々妙に、今日に至りては遂に無煙火藥
 の發明あるも、之を使用して奇功を收めんと欲
 せば、從來のものに倍蓰せるの費用を拂はざる
 べからず。且つや常時巨多の兵員を貯へ置か
 んには兵食、俸給、其の費費られず。夫れ斯の
 如し、軍備の擴張をして名のみ止めて足ら
 ば、費用を要するも亦多からざらんも、苟くも効
 力ある程、大に擴張せんと欲せば、大に費用
 を要せざるべからず、若し財貨混々として泉源の
 如く、涸々として河海の如く、縱横之を使用して
 意の如くならざるなくんば、茲に初めて初志を
 貫徹して軍備の擴張を遂ぐるを得ん。然らざ
 れば志士奈何に慷慨激昂するも民人奈何に發揚
 踴躍するも、徒爾にして終らんのみ。翻て我
 國今日富財の多寡如何を察するに、果して大に
 軍備を擴張するの餘裕ありとなすか。
 想ふに我國に於ける富方の層級や、取つて之を
 歐米の各國と相較するに、頗る低しと云はざる

べからずして、これを諸會社の株金に徴すも、之
 を労働者の賃銀に考ふるも歴々として明かな
 り。然れども發達の歴史に至りては、彼と此と
 事情の同じからざるあれば、未だ遂に失望す
 べからざるに似たり。蓋し歐米の社會は四境の
 壓迫に依つて發達し來れるが故に、其の富力の
 如きも壓迫に依つて膨脹し來れるものならざる
 べからず。之に反して我が社會は外國の壓迫を
 俟たずして、自ら發達し來れるが故に、其の
 富力の如きも概ね純粹の自然淘汰に依つて進
 み來り、所謂人為淘汰なる者に依つて制御せら
 れたるは甚だ稀れなりとす。今や形勢の切迫す
 る日に甚しければ、素より悠々緩々として
 純粹の自然淘汰の爲すがまゝに任すべからず、
 人為淘汰と稱す可きあらば、成るべく用ゐて以
 て富財の増殖を計圖せざるを得ず。頻年天下の
 志士意を茲に注ぎ、眼を茲に着くるもの次第に
 多く、競うて富力を増殖するの方策を立つる
 もの輩出す。實業といひ、殖産といひ、拜金
 の爲め玉石を混同し、而て國民の品格を顧
 みざる有るは、惡むべしと雖も、實業に注目す
 るの流行必ずしも賀すべからずとせず。言ふも
 のあり、宜しく工業を盛んにすべしと。言ふもの
 あり、宜しく海運を盛んにすべしと。工業を盛

にして、海運を盛んにする、共に美事として、贊
 同するに足る、而も此等は先づ物體を備へずし
 て強ひて作用を顯さんと欲するものにあらざる
 か。言ふ、工業を盛んにす、果して工業を盛ん
 して何物を製造せんと欲するか、富財を増大す
 るほどに殊に製造に着手すべきもの今之を得
 るの望あるか。言ふ、海運を盛んにす、海運を
 盛にして果して何物を運搬せんと欲するか、富
 財を増大する程のものを運搬するの目的、歴然
 として眼前に横はるあるか、然らば則ち工業
 を盛にして、海運を盛にする、皆富力を進むる
 の方策たるに相違なきも、今日の勢、銳意熱
 心に從事せざるべからざる者、尙之より急務な
 る者あるに非ずや。何をか急務とする、曰く、
 物質的の富力を増加せんこと即ち是なり。物質
 的の富力とは何ぞ、曰く生活に必需なる者の
 原料、即ち是なり。已に此等の物品をして大
 に増殖するを得せしめば、工業自ら盛大を來
 し、海運亦自ら盛大を來さむ、されば國家を
 豊裕にせんと欲せば先づ物質的の富力を増殖
 するに若くはなきこと、既に疑なし。執り國
 内萬般の狀況を看察するに、土地狭小なりと
 謂ふと雖も、物質的の富力は、綿々として之
 を現はし得るに足るに似たり。先づ之を礦山

に見んに、全國到る處山岳聯立し、北上山脈に、富士帯に、濃美山脈に、北陸山脈に、中國山脈に、九州山脈に、四國山脈に、一として其の中幾許の鑛山有らざるはなく、其の鑛を出すの尠少ななるは大に惜むべしと雖も、爾餘の鑛物に至りては決して缺乏せりと云ふべからず。如何せん今日は正に鐵の時代にして鐵なくんば大に事業を起す能はざるの觀あり、若し冶金術一層の進歩を致し、アルミニウムの類を鑄て鐵に代用するを得るの日に到らば、茲に苦慮するを須のざるも、今日の狀態に在つては我が鑛山は未だ較著の事業を隆起するに足れりといふを得ず、然れども貴金の豐饒なるは以て直ちに絶望するを要せざるなり。次に牧畜に見んに、我國現今の牧畜は未だ見るに足るなしと雖も、之を興起し之を發達せしむるは則ち大に望あり。乃ち外國に在つて山地に生育し、氣候の變換に馴致せる家畜を移し來りて、之を我が樹木茂らず、青草叢の如き山地に養殖し、若くは漸次將來の家畜を改更して、許多の異種を生じ、淘汰に淘汰を加へて他に類を見ざる、良種を獲得するも皆頗る利益あらん。蓋し西洋家畜の良種と雖も、彼れ其の初めより善良なるものにあらず、デボンと云ひチエビヤと云ひ、

エイヤシナイアと云ふも、曾て荒々しく養育のものを通へ來り、次第に養成し改良して究竟の良種となしたるなり。然れども我國に在りては、外常より強ひて移殖するを務むる無く土地氣候に順適したる從來の家畜を改良繁殖せしむるの却つて得策たりと説くものあり、此れ亦理なきの言とせず。次に水産に見んに、我國四面繞らずに海を以てし、且つ河流の疎通して南に北に注入するもの少からず、水産物の豐富なる、前途實に多望なりと謂ふべし。殊に北海道に如きは其の水産地たるの地位、以て諸國若くはニューファウンドランドにも比敵すべく、鱒、鰻、鰯、海獸の屬、舉げて言る可からざれば、若し、夫れ捕獲と賣鬻とに力を用ひ方を得るあらば巨大の利を博せんこと必せり。而して更に眼を脚下に注がば、最も手近にして、最も爲し易く、而して最も精力を勵まして從事すべきものあり、田地の改良是なり。田地の改良は方法百端にして、老練なる農學者も輒く説き盡すべき所にあらず、中に就いて灌漑排水等の如き、皆極めて必要にして片時も輕忽に付す可きにあらずと雖も、日下着當りの必要は蓋し肥料の改良に若くはなからん。抑も肥料は窒素、沒多斯、磷酸等を主要とするものに

して、若し其の分量宜しきを得ずして、三者の中其の一の格外に少量ならんには、他の一二部は如何に多量なるも、功用を顯はすこと能はずといふ。從來我國の肥料は人糞、油粕等を以て重要とし、時として多量に之を用ゐることあるも、磷酸の分量少きが爲め著しき機能を現はすことなし、然らば即ち今日に在りて、田地改良の材料として最も要すべきは磷酸肥料を加ふるにありとす。廉價にして磷酸肥料を得るは頗る困難なるが如くなるも、其の方に宜しきに適せば、實際思ふ程困難にはあらず。若し夫れ三冬農業全く閑に、寒風森々として窓戸を打つ時、一家相集まり、談笑の間に魚骨、獸骨を碎打して極微の細末となし、之に糞と石灰とを混じ、尿を注ぎ一蓄へ置かば、頗る用ゐるに足るの肥料となすを得ん。若し又土壤を分析し、仔細に其の特質を稽查して之に十分の肥料を加ふれば、耕地の面積今日のまゝにして其の收穫三倍以上に起乘するは誠誠に徴して明瞭なり。夫れ斯の如く土壤を分析し、地球に應じて肥料を加ふるは頗る難事ならんも、只肥料に磷酸を加ふるの一事、尙ほ且つ今日の收穫に二倍するを得んには、豈務めて勉めざる可けんや。夫れ我國の土質や、元來磷酸に乏しきも

のなれば、今日硫酸肥料を製造するに當り、其の原料を獨木より輸入せり。穀類の肥料は多く硫酸を與へざれば思はしき收穫を見る能はずして、米の如きも實に然りとす、而して我國輸入現狀を觀察するに、多く硫酸を要せる米穀を輸出して去り、而して却つて少く硫酸を要して收穫ある綿麻、砂糖等を輸入するの狀あり。蓋し温度の關係ありて、綿麻等の我國に於て十分の發育をなす克はず、從つて產出の少きによるならんも、豈頗る顛倒の措置にあらずとせんや。穀類は正に以て國民の食料に供する者のみ、強ひて不適當なる土地に培植して輸出するの餘裕あらしむるを要せず。若し輸出するの餘量ありとせば、何ぞ穀物の培養を止めて、之に代ふるに多く硫酸を要せざる他の農産物を培植せざるや。田地の改良に關して注意すべきもの許多なりと雖も、目下の急務は應に此の事に外ならざらん。念ふに今の田地にして其の面積を變せず、而して今日の收穫に二倍若くは三倍の收穫あらば、地租の輕減何かあらん。國民衣食の主要物として高まり來らば、則ち水産の業繁榮し、牧畜の業繁榮し、百工の業伴うて發達し、海運の業亦伴うて發達し、天涯地角照々として常に春の如く、邦家の富力月を経年を過

うて愈々益々膨脹増大するや必せり。司馬遷は貨に常主なく能者轉輸し、不肖者瓦解すと言ひしが、邦人たるもの能者となりて轉輸せしむることを務めざるべけんや。能者となりて轉輸せしむるの急務、先づ茲に出づるを安當の順序とするに似たり。知るべし今日の急務は寧ろ彼に在らずして此に在るを。概して論ずれば、今や我國、富財に於て人に缺乏する所あるも、而も潛伏埋藏して未だ世の知る所とならざる富源に至りては決して鮮少なりとせざるなり。茫乎として一も規畫する所なく、只手を擧げて幸運の來るを俟たんには、果して何の日か富財の増殖するを望むべけんや。而して今日の計をなす、恐らくは前に所謂目下の急務より手を下すに苦くはなからんか。夫れ已に富財を増加するを得ば、以て軍備を擴張するを得べく、隨つて毅然として海外の諸強國に當るを得ん。抑も此の事たるや朝に計りて夕に成り、今年下手して明年收穫すと云ふが如き遲滞なる結果を見る能はざるも、軍備を擴張する如き至重至大なる事業は苟くも前途一點の希望のあるあらば、月に寸を進め、歲に尺を進め、以て漸次に期する所に到着せざる可らず。かの小榭略、小術數に依頼し、蹶々

して一時を塗抹せんと欲する徒の如きは、共に以て國家の大計を談ずるに足らざるなり。可々我が日本人は正義を宇内に伸ぶるを以て自ら任ぜざる可らず、而して是れ即ち日本人が人類の權を極むるに於て應分の力を出せし得る要件にあらずして何ぞや。

日本人の任務 (三)

美を極むるには、美の觀念より生じ来る許多の意向を調和育し、之を淘汰し、之れを助長し、以て其の眞粹を發揮せんことを望む。念ふに、我が國人も一分の資料を宇内に給するを得んか。之れ國人の夙に確信して疑はざる所に於て、外人に在りても幾分か其の然るを許し居るもの如し。蓋し我が日本の國たる、氣候溫和、風物清純、三笠山より見れば月小に天高く、淡路島道々千鳥聲朗かにして波に應ふ。稱して三景と云ふもの外、其の景光の奇絶なる之れに次ぎ、若しくは之に超乘せんとするもの、決して僅少なりとせんや。藁靴を踏んで駕とせざるも、六七月を費して全國に周遊するあらば、必ずや到る處風光明媚、油然として心目を樂ましむるに足るならん。日暮れ、足勞れ、旅亭に投じて傳志録を筆し了らば、峯の嵐聲落

ちて夕の袖をひるがへし、已に被を擁して一
眠せば濁水響きて夜の夢をあらひ、身は詩中の
人となるにあらざれば、羽化して登仙するの想
あらん。要するに日本の國や、山水の美に於て
更に缺く所あらざるなり。國已に然り、而し
て元々や實に斯の美なる山水の間に生長するよ
り神氣自ら怡々たるの風を存し、事々物々專
ら實用に適するのみを以て主眼となす莫く、多
少の愚論を取つて其の間に補綴せんとするもの
の如し。試に見よ、其の收入は以て一家の糊
口に充つるに足らず、妻兒饑寒に泣くの貧家と
雖も、家に入つて之れを見れば壁に錦繪を張り
つけ、徳利に四季をりくの花をいけ、甚し
きに至りては吹笛、三絃、歌ひ且つ舞ふ者なきに
あらず。少しく騰りて富裕なる家に至らば、床
の間には幅を懸け、楣の間には額を飾り、鐵
瓶、土瓶、茶碗に至るまで華麗、古雅、數寄を競
ひ、而して此等の裝飾品中には意匠巧妙、製
造亦雅致にして、一見人を駭かすものなくんば
あらず。殊に花壇築山の如きは細工の巧なる、
掌大の地に天地の美趣を羅括して、自然に迫
るもの鮮少なりとせず、之を總ぶるに我國、古
來の美術たる、敢て甚しく希臘の下風に立た
ざるに似たり。建築に於てドリツク方の榮譽を

傳ふるパルセノン宮殿に企及すべきものを見る
を得ずと雖も、之れに近似すべきものなしとい
ふべからず、但く構造の様式を異にするのみな
らんか。佛法の傳來と共に寺院建築の法をも傳
來したりしが、殊に聖武帝の世、僧道慈が安那
に遊び、造寺の法を學びて歸りしより、規模結
構面目を一新せるの狀あり。帝の天平十三年、
東大寺を南都に建立せるや周尺にて堂高き十五
丈餘、東西二十九丈南北十七丈、柱の最も
大なるもの直徑七尺に達し、其の宏壯なる人
目を驚かすに餘ありき。其の他比叡の梵宇の
如き、高野の伽藍の如き、建仁寺の如き方廣寺
の如き、皆建築に於て莊嚴なる標本と稱すべ
きなり。南蠻築城の法を折衷してより、城砦
の構造に一變し、彼の亂雜を一統して四海に
雄視せる大岡の大阪城の如き、遺物の大半今尙
に儼として屹立するが、規畫小なりと雖も實
に堅牢なる建築物の模範と爲すべし。彫刻に至
りても金屬、木材自由地使用して更に困窮の色
あるなく、甲冑、鐵兜、刀劍、祭器、佛像等の製
作、高美巧妙鬼神を哭せしむるやに思はるゝも
の亦鮮少なりとせず。源九郎の使用せりと稱せ
らるゝ鐵兜鞍馬寺に寶藏しありて、三角形の薄
鐵板を以て造り、八幡座の上に鐵金せし青銅の

獅子を置き、雄健精緻觀者服せざる爲し、武田
信玄が所謂詭譎法性の兜の如きも明珍の作に
して村夫牧童、亦其の名兜たるを知る。刀劍に
至りては、厩戸皇子の槐林劍、七星劍を初め
とし、小鳥丸の如き、藤丸の如き人の熟知せ
る所、繼いで正宗、義弘等の名工前後輩出し、
其の技の殆んど最高の點に到達せしが、かくて
裝飾にも亦頗る華美を競ひ、柄の如き、鞘の
如き、鐙の如き、日貫の如き精工絶妙なる彫鏤
亦少なからず、中に就て青木金家、明珍信家、
埤忠明壽等が彫鏤の如きは世の擧げて珍重せ
る所なり。形像に至りても大に精工を極め、偉
大を極めたるもの頗る多く、聖武帝の世、鑄
造せる南都の大盧遮那佛の如き、源右府の時に
成れる鎌倉大佛の如き、其の他短小なるものに
至りては金製、木製の妙高なるもの隨處に之れ
を見るを得ん。殊に其の宏壯雄大なるものは
豐太閤が佛工の名手宗貞、宗印に命じて造らし
めたる大佛像とす。當時干戈初めて平らぎ、民
漸く其の土に安んず、乃ち命を發し各諸侯より
兵器を集め鑄て以て之れを作りしが、謂ふ所死者
の供養をなし之が爲に冥福を祈るにありて、像
高さ十數丈、仰視すれば宛として金銅の大丘
に異らざりしと云ふ、其の大想ふべきなり。丹

青の技に至りてもミケルアンジェロ、ラフェル、ルーベン等と角逐するもの、若しくは駕して上らんとするもの亦必ずしも無しとせざるべし。巨勢金岡の技倆は紫宸殿聖賢の像に現はれ、明兆、周文の技倆は佛像人物に知らる、古法眼元信は和漢を折衷して新機軸を出し、松策、永徳に傳へて皆美名あり。永徳の孫探阿蓋名天下に噪しく、筆を揮うて縱横に塗沫すれば山水、人物、花鳥風月一として活動せざるはなし。八丈島の流人英一、傑傑に神品と稱せられ、丹波の百姓應昇は皆川淇園をして、前代名畫顧陸倫、今觀君筆崑翹と嘆賞なしたりき。詩賦に於ては甚だ誇稱し難しと雖も、人丸貫之の模紫秀麗、固より尊重するに足る、降りて茶山、星巖等の漢詩に至りては、思を馳すること冲粹、詞を描くこと聊雅、而して他諸家の作も亦或は華便なる或は清麗なる感懐淋漓なるあり、凄婉委曲なるあり、清客亦爲に敬服するもの少からず。其の他琵琶や、箏樂や、謠曲や、陶器や、漆器や、觀察し來れば一として特有の美質を存せざるはなし。念ふに過去に於ける美術品の進運概して斯の如し、若し之を發達せしむるに其の道を以てせば、將來の運命大に好望を滿し居ること疑ふべからざるなり。

我が美術は、既に塵々として盛なりき、然りと雖も此の幾多の美術に就き、毅然として我國の特色を表明するは果して何者なるか、之を指示説明せよと言はゞ、何人も雖も錯愕吃訕、左右視して遽に解答する能はざらん。蓋し世常に許多の俗樂なし、故に槽檯の間に駢死するもの雖も、必ずしも悉く駭駭にあらざると云ふ可らず。美術の社會に於けるも世に聞えずとて必ずしも悉く拙惡なるにあらず、而して世に評高きとて亦必ずしも悉く巧妙なるにあらず、古來某の作なり、某の秘藏なりとせば、世人未だ其の物を見ずして已に其の巧妙なるを念ひ噴々賞揚して天にも昇さんと欲するの奇癖なきにあらずと雖も、而も平心鑒意、眼前の雲烟を拭ひ盡して仔細に之を觀察せば、其の所謂巧妙と云ふは果して何の點にあるか、殆んど判別に困むもの鮮少なざるなり。今日泰西一帯の人々が、日本の美術、日本の美術と唱稱して、日本の美術を賞賛し、貴重するは、日本の美術に於て大に見る所あるにもせよ、其の大半は一時の好奇心に動かされたる者に外ならずして、宛も小兒が竹馬を捨てて獨樂を愛し、獨樂を捨てて紙鳶を愛するに類する所なしとせず。夫れ然り然るに外人等が一時の

賞譽を千歳の確評と凍斷し、揚々として自ら欣ぶものあるは、豈思はざるの至りにあらずや。深慮せよ、我が美術、元決して輕侮すべきにあらざるも、之をして大世界に誇號し、街輝し、横行闊歩せんは未だ遽に不可なる者あらん。蓋し我が美術品中、進歩發達の高度を表せざるが爲め、却つてあどけなき興味を現はせるを以て世人の愛玩する所となるもの少からず。一二の曲線にて人馬を畫くが如き、或は竹を切りて簡雅に製造したる花瓶の如き其のななり。此等の畫や器や、平生の玩物としては雅趣無しと云ふにあらざるも、以て宇内の美術界に向うて、常勝軍の芳名を博取せんは斷じて成功の望なしと謂はざるべからず。憶むらくは今日世人が得々として誇る所の美術品を觀察せば、此の種に屬するもの頗る夥多なることを。然りと雖も抑人が美術に適するの資格あるは、更に疑ふ所なし。已に美術に適するの資格ありとせば、必ず特質の有りて存するものならん。單に好奇心の心を以て一時愛玩せらるゝものに非ずして、眞成に日本美術の特色として指定すべきは、果して何とかならず。莊嚴か、時に莊嚴なるものなきにあらずと雖も、莊嚴を以て特色となす、未だ其の可なるを知

らず。僞逸か、時に僞逸なるものなきにあらざと雖も僞逸を以て特色となす、未だ其の可なるを知らず。幽韻か、時に幽韻なるものなきにあらざと雖も幽韻を以て特色となす、未だ其の可なるを知らず。孤高未だし。沈痛未だし。然らば則ち通じて以て特色と稱すべきは只夫れ輕妙の一語ならんか。要するに我國の美術や固より偉大宏壯なるものありと雖も、概するに手輕くさら／＼として輕妙に染るの風ありとす。外人の初めに我國に来るや火輪の運轉、横濱の阜頭に已み、東京に來り、地方に遊ぶ、其の先づ眼簾に入るものは家屋の構造なり。我が家屋の構造や、大抵木材を組合せて之を作り、瓦、石等を用ゆるは小部分に過ぎず。されば石或は煉瓦等を以て建設せる家屋に住居し、之を以て其の日に染み、其の心に安んじ、其の體に習ひたる彼等外人、何處に適くとしてか我が家屋を奇なりとせざらんや。彼等見て以て兒童の玩物に彷彿し、而してや、大に羨るものと思ふと云ふ。亦所謂人力車に乗じて走れば宛も歐米に在りて小兒を載せ、侍婢後より之を推し、公園に街道に遊び戯るゝが如きものを擴大し以て大人を載せたるかに思はれ、車轅々として疾走する時、覺えず嘔然として失笑する者ありと云

ふ。蓋し初めて渡來せる外人の所見にして斯かる傾向を生ずるあるは深く怪むに足らざるものあらん。想ふに我が家屋の構造、器物の製造、其の簡略は著しき事實なりと謂ふと雖も、此の簡略なる構造製造の間、自ら巧を弄したるの痕歴然として見るべきあり。寺院の構造の如きは原明かに外邦の風を模擬せしものにして、頗る宏大雄麗、人を肅然たらしむるなきにあらざるも、漸次に其の風を移して、普通民人の家屋を造築するに至れば、大なるものは變じて細となり、雄なるものは變じて微となれり、かの玄關の構造の如き以て一斑を見るを得べし。彼の銅像の如きも初め印度或は月氏國より渡來せるものありて、體侷儻剛、頗る異相を現はせしも、星遷り物換り、邦人の倣うて之を作るに至りては久しくして愈々穆和の形相を現はし俗流の人物と徑底する莫きに及べり。能樂に使用せる假面の如きも、初め隋唐より渡來せし頃は頗る雄邁の表象ありしと雖も、たどり／＼て近世に至るまでの變遷を見るに、百歳、二百歳、四百歳、八百歳、次第々々尋常に移り來り、近世に至りては殆んど全く古代の異相を消滅し去りて更に求むるに由なきなり。丹青の如き亦然り、其の宋元を擧げし時や、能く壯、能く大、

巧に其の筆意墨痕を傳へ得たりしも、我自ら機軸を出すに當りてや、其の巧拙は宛もあれ角もあれ、亦遂に輕妙に傾くを免れず、かの浮世繪の如き以て見るべきなり。音樂に至りても亦然り、之を禮式の上に用ゆるや、甚だ鄭重にして用ゐる所の管絃鐘鼓、頗る翁如の妙を盡せしも、通衢世人の愛玩し、使用する者は三絃、尺八等の手輕きものにして、木葉を口にして朗々の響を發し、而して感歎措く能はざるもの少しとせず。詩歌を作爲するも亦然り、雄劍天を斬り、快馬山を馳すと云ふが如き、長篇大作は之を見る能はずして、十七字、三十一字、二十語、二十八語、其の最も長大なるものと雖も辭を列する二千に上るものなし。かく我が美術品の概して輕妙に麗くして壯大に麗しきは、抑も因由なしとせんや。蓋し國家久しく港を鎮して他國と交通せず、桃源、ニートビヤ、花自ら開きて自ら落ち、水長く流れて、鳥樂しく歌ふ。且つや其の山水たる、風光亦自ら輕妙の趣、あれば國民の思想も自ら伴うて輕妙に傾きしならんか。要するに輕妙は邦人が一箇の特質として言説するを得ん。稱して輕妙と云ふ、輕妙必ずしも敬重すべきの性質にあらざるも、美術上亦一種の趣味を現はすことを得る者なれば、果し

て邦人の特質にして、輕妙に傾きたりとせんか、益々此の特質を發揚する、誰か之を得策なりとせざらんや、現に支那との貿易に於て輕妙なるかのブリツキ製の玩物、大に販賣の望ありと云ふ。獨り玩具に満足せず、益々輕妙の品物を出して廣く宇内に傳播せしむるも、亦事の宜しきを測する者に非ずや。

輕妙の特色あること既に之を辯ぜり、然れども之れ邦人が固有の材能を抽象し、擬して以て言説せし者にして、敢て四千萬人悉く然りと云ふにあらず。或は壯大なる觀念を著へ、以て壯大なる製作に適するものあらん。或は固有の性質、輕妙の製作に適すと雖も、全然性と相反するものを容れ、巧に之を製作する亦決して寫し得ざることにあらず。若し策を茲に取り、以て外物を容れんと欲せば、須らく先づ其の容れんと欲する事物の性質を精査熟察し、以て將來の結果如何、得失如何を究めざる可らず。之を建築に就て例せんか、歐米の建築法は頗る堅牢なり、然れども今や之を我國に導き入れんには、先づ一考せざる可らず、我國の氣候風土は果して彼れの如き堅牢なる家屋を要するか、好し之を要するとするも、建築の材料を多量に得るの望あるか、如何を。復彫刻に就て考ふる

も、大理石の頭上より胸帯、腹腰、足下まで、眼中まで悉く白色なるもの、果して技士の心を磨きまじに足るか、好し技士の心を磨きし得るとするも、工成りて後、果して看者の心を動かすに足るか。亦繪畫に就て考ふるも、果して天女の麗々として飛行せる形相を現はし得るか、果して櫻爛美人を巧に現はし得るか如何。泰西の音楽は人其の感奮せるを露せ、蓋し然らん、而して其の最も發達せりと稱するは實に佛國なり。然れども佛人や、眞に音楽を聴き一感ずるより寧ろ音楽を聽くを以て習慣となすに固り、外より之を見れば頗る音楽を欣ぶが如きの風あるも、之を聴き之を感ずるは遙かに交趾或は馬來人に及ぶ能はず、とは之れかの國人トルノ一等の斷じて明言せる所なり、而して是

の樂を取つて直ちに之を我れに用ゐんと欲す、果して差支なしとするか。演劇の事の如き、一時驟然として事々物々彼れを良しとせる偏觀より、此處は彼れの彼處に倣うて斯く改めざる可らず、其處は彼れに於てあることなし、故に之を廢せざる可らずと云ふが如きは果して當を得たるものなるや、果して識者の見なりや如何。凡そ事物は其の前後より左右より上下より仔細に、公平に研究し、而して後に之れを用ゐるざれ

ば、知らず識らず意外なる誤謬に陥ることあり。近來洋服は便利として一般に採用する所となり、日本人が作曲せる體操に強ひて異形の洋服を着するも、之を着すること已に年所を經へ今や殆んど習慣となりたれども、便利の爲にとて之を採用せしものならば、其の初め微小にして存心曲りたる我が國民に適當せしむるの良法もありしならん。羽の露風を忍び不恰好なる見苦しき洋服を着けて外人に接す、抑も不潔にあらざるとせんや。細觀すれば、家庭飲食、器具等に至るまでかゝる變態の爲に不潔に陥りたるもの少からず。彼も一時、此も一時、一時拜西の風潮然として全國を吹倒せるや。起ちて之に抗する者あれば、人指日して以て頑固をとなし、又突に頑固を免れざる者ありしならんも、其の所謂改良家の所爲たる固より深息して而して施行せしにあらざれば、今にして之を熟考せば、頭痛み、眼眩み、空しく蒼を仰ぎて悔恨すべきものあらんか。亦風俗の上より見るも、苟くも進歩を宇内に占め、天長地久しく、日本國民として生存せんと欲せば、固土相當の風俗に依るを以て生存に巧なるものとす。今や外人往々にして支那人が豚尾の髮、チャンク

の服、依然として舊習を改めざるを見、嗚に笑

うて陰に畏れ、我が邦人が高帽洋装、不恰好を顧みず、競々として他に倣ふを見、陽に譽めて陰に侮る、之れ必ずしも支那と我とを比較し、彼が國大に我が國小なるを以て、敢て優劣を其の間に置き、而して然るにあらざ、公正にして局外より之を見れば或は實に然るものあらんか。彼我の形勢大に分明に洩り、坐して以て彼が内情を探知するも敢て至難とせず、然らば乃ち彼物を取りて以て我れに用ゐんと欲せば、緻め精緻に其の得失を考ふる所なかるべけんや。嘗て邦人の彼の開化を羨むや、國をして彼が如くならしめんと欲し、即ち宣言して曰く、彼の長を取りて我が短を補ふと。彼の長を取りて我が短を補ふは、頗る美事ならざるにあらずと雖も、從來の取長補短たるや、彼の長を取らずして寧ろ彼が短を取りたるもの多し。於戲其れ思はざる可けんや。抑も深思熟慮して其の得失を究め、能く我に應ずるものを以て我に移さんか、之れを滴養助長せば、他日必ずや我國の特色となりて宇内に現出せん。

已に然り、我が美術の美を宇内に發揚せんは、果して如何の方策を取るべきか。邦人の特質たる輕妙をして益々發達せしめんか、抑も他邦の美、我れに順應せるものを取り、之を涵し、之を育し、之を培ひ、之を磨し、以て遂に我が特色と化せしむべきか、念ふに兩つながら策の非なる者にあらず。蓋し本邦民人欲きにあらざ、而して人心の同じからざるは猶人面の同じからざるが如く、甲乙丙丁各々其の長所を異にし、其の嗜好を異にす。然らば則ち甲乙丙丁各々好む所に從つて、好む所の藝術を研磨するは何人と雖も之が不可を鳴らすものあらずと雖も、而も是を世界の競争場裡に投じ、各國の藝術と響を駢べて相競はんと欲せば、及ぶ限りは自國の特質を現はして之に當るを得策とす。就令其の特質にして口を極めて稱揚すべきものにあらずとするも、非難を容るゝの餘地なからんには、益々之を宇内に撒布せよ、之れ亦人類の美を極むるに於て一箇の手段なりと謂ふべきなり。抑も美術の事たる、議論區々にして且つ其の標準亦頗る動搖し易きを以て、動もすれば一時の風潮に動かされ、或は一時の煽動に吹き立てられ、前後を忘れ、將來を忘れ、有頂天に驕ぎ立ち、而して遂に見事に失敗することなきにあらず。今や我が美術は大に外人の賞譽する所となりたれば、淺くも我が美術を以て無雙のものとなし、些少の發達をなさず、些少の進歩をなさず、古物、近物只有

のまゝにして宇内に睥睨するに至らんと思ふものあり、洵に大なる誤解と謂ふべし。邦人が美術の念に富むは打消す可らざる事實にして内外人の共に是認する所なるも、之を以て世界に競争を試みんと欲せば、目前尙且の小利益と一時の煽動とを顧みず、尙ほ深く考へて遠く慮る所なかる可けんや。勿論望を冲天に絶ち、翅を蓬蒿に垂れ、碌々として終るは我が民人の本分にあらざるも、袒褐虎に暴して虎牙に育するの愚をなすべけんや。深く誓めて戒めざる可らず。昔猶太人困窮逆道殆んど生を安んずる能はず、而して自ら上帝の選民と稱し、上帝英傑を下して國人を救ふと信じ、自ら慰め、自ら樂み、日夜肅々として之を俟てりき、而して其の人遂に到らず。蓋し天は自ら助くるものを助くるのみ、突ぞ龍を一國にのみ與ふことをせん、天の猶太人のみ幸せざるを知らば、以て我國の美術にのみ幸せざるを知らん。起て、起つて早く計をなすにあらずんば、我が美術の前途夫れ或は墓土に葬られん。於戲苟くも人類の一部として全部の爲に美を極むる所あらんと欲せば、寧ろ苦勵精する所莫かるべけんや。

偽惡醜日本人

序

加州に河波有道先生ありき、曾て先人の爲に水哉亭記を作り、中に云ふ、

夫物自無而觀之、則天下無一不無用者、自其有用而觀之、則無一不用者、今夫穢汙之物物人之所憎也、然田圃非待此物、無繁殖矣、金玉之珍人之所愛也、然古今不籍此以招患害、鮮矣

と、去月余墨陀の芳堤に帝國大學春期總澁會を觀る。和田垣謙三氏卒然余に謂て曰く、パラダイスロスとありてパラダイスリグンドあり、ラレグロありてイルペンセロソあり、子彙に發行停止に際して眞善美日本人を刊せり、今復停止の厄に罹る、豈偽惡醜日本人を出すの意なきかと。余嗚然として大笑し、而して答ふる莫し、幾も爲く小冊子の稿を口授し畢れり、惟らく詩仙の妙趣に擬するに鄙俗の陋劣を以てするも

も亦可ならんかと。於戲「ニューズ、吾奚ぞ爾を煩さん、呵々。」

二十四年五月

三宅雄識

凡例

一 本年三月一書を公にし、稱して日本人と云ふ、表紙に眞善美の三字を題せるを以て、時に眞善美日本人と呼ぶ。本書は之に對して、偽惡醜日本人と名くるも、對照は豫期する所に非ざりしが爲め、全く關係を有せずと見做すも妨げなし。

一 國を爲すの弊多し、然れども其の最も直接に影響あり、而して又最も矯正し易きは、政治に在り。但だ今日に方り、政治の弊を言へば數々忌諱に觸るゝの恐あるを以て、姑く忍んで言はざるのみ。

一 本書は論旨の要領順序を内藤虎次郎、長澤説の二氏に演述し、託して文字を成

せり、故に文字の責は二氏の負ふ所とす。
一 林辨次郎氏偶々其の作る「濁」一篇を寄示す、其の意旨必ずしも著者の意と合せず、往々相抵牾する者あり、特に其の間、時弊に切中する所あるを以て、加へて參照發明するの資となす。(本報誌)

老子曰く、天下皆美の美たるを知る、斯れ惡のみ、皆善の善たるを知る、斯れ不善のみ、故に有無相生じ、難易相成し、長短相較べ、高下相傾け、青稜相和し、前後相隨ふと。ゾロアストルの教義には光の神アルムズと暗の神アリマオンと宇宙を分領し、陰あれば陽あり、表あれば裏あり、以て萬象を通貫すと云ふ。是れ蓋し偶然にあらず、苟あれば斯に無あり、吉あれば斯に凶あるは理の自ら然る所なり。夫れ既に吉あり、而して凶あり、此を抑ふれば、彼れ揚る。故に吉を揚ぐるは或は以て凶を抑ふるに異ならず見ゆることあり、耶律楚材が一利を興すは一害を除くに如かずといひしも、亦豈是を以てするにあらずや。

然れども吉を揚ぐること盡く凶を抑ふると同一なりと爲すべからず。家屋を改修するは家屋

なる者あればなり。既に家屋なくば、何の改修を要せん。唯夫れ既に家屋の存するあり、而して改修するあらんとすれば、今の改むる所の爲めには前の成る所必ず障礙となり、大に増修するあらんとすれば、必ず大に破壊するあらざるを得ず。夫れ進歩とは絶えず新造するの謂なるが、絶えず新造するには絶えず改修するを要す、其の新造するに當りてや、必ず吉を主とせざるを得ず。而して其の改修するに臨むや、則ち毎に凶を抑へざるべからず。吉の凶と相剋するや、寔に此の如きあるなり。我が國家、運方に一新に屬し、事ごとに新造を主とす。されども因習千年、其の間亦陳々相依り、大に破壊して而して改修せざるべからざる者多々あるなり。故に之が爲に眞を揚げんには、必ず僞を破らざるべからず。之が爲に善を揚げんには、必ず惡を辟かざるべからず。之が爲に美を揚げんには、必ず醜を滅せざるべからず。吉を揚ぐるは難くして、凶を抑ふるは易し。其の最も順正なる道は何如か、吉を揚ぐるに如かず、若し及ぶべからずば、凶を抑ふるも不可なし、然れども他山の石、玉を磨くべく、凶は以て吉を進むるの力たることあれば、頑空にして物なからんよりは、寧ろ其れ凶あれ。以て吉

を揚ぐるに足らず、更に以て凶を抑ふる能はずば、其の寂靜にして事なからんよりは、寧ろ凶を行へ、家屋を造る、正は新たに造築するに在らん、而して次は其の無用不便の處を毀壞するなり。然れども其の新たに造築するに於てすらも、故さらに加ふるに百種の妨害を以てすれば、爲めに其の建築の堅固を致すこと反りて増すものあらん。未だ構へざるに暴風之を倒し、未だ靴かざるに暴雨之を壞る、災は則ち災なり、而も其の災や、適く以て建築の牢固を促し、盜賊隙を續る、禍は則ち禍なり、而も其の禍や適く以て鎗鎗の嚴重を促すべし。泰西建築の宏壯偉大にして牢固瑰麗なるは、其の嘗て深き地に在り、而して掠奪盜劫の盛に行はれしが故なり。頑空寂靜、照々として唯泰平に樂まんよりは、困厄百端、飄飄して而して剪待するは、啓發の因あり。老子の無爲を尙びしが若きは、時を視て言を立つるなり。若し吉凶相回互するを以て、寂然として偏らざ、以て靜默を守るは眞意を得る者といひ難からんか。然れども是れ萬已を得ざるのみ。

僞

少年あり、其の質や穎敏聰慧にして、以て偉器

を成すに足り、而して好良の學校あり、充實の師資ありて就きて學ぶとせん、其の學術に於て、大に功を著さんこと固より期すべからん。されど若し彼が父は頑にして事理に濶に、知らぬ辨に學術の事に喙を容れ、不易の定理をも己がまゝに枉げせんと試み、加ふるに彼が朋友に寄りてたかりて只皆に彼を淫情靡靡に誘ひなば、彼たとひ理義を辯するの能あるも、墮抑に屈せられ、外語に接するの漸穢、其の心を措くこと定まらず、靈慧の性も爲に味まされて爲すこともなくて己みなん。嗟、我が日本學術社會の現状は方に是の如き者に非ずや。悲しい哉、我が日本人は理義究明の能力未だ遽に白人に譲る者ならざるに、唯遮らるゝ所ありて、十分に其の能力を展ぶること能はざるなり。蓋し封建制度階級の制抑を破りしより日を爲すこと未だ久しからざれば、一新の後、驚くべき進歩の形勢につれて學事の發達も目さむるばかりなれど、根深き階級制度の弊は、今に全く衰り盡されず。今日小學より遞して中學、大學に到る其の教職を待するは、皆行政の官等に準ずるなり。尋常師範學校の教頭が奏任に準せらるゝより以上、實立専門學校の教授は皆奏任なり、大學教授も概して奏任に

して、其の尤も昇進する者は数任たるを得。されど、其の昇進する所は此に止まる故に、親任官と同等の地位に到らんことは、學術上の地位を以て能くすべきに非ずと畫られたり。而して其の官等に準ずるや、幾等々々と等級を分つこと、毫もかの尋常一様吏胥の等級と異ならず、而して之を總ぶるは、實に行政部の官長たる文部大臣なり。官等に離れて、別に學位といふ者あり、學位令ありて博士大博士の位を定むれども、而も學位を授くる者は亦文部大臣なり。文部大臣の指揮を奉じ、其の議に參して授けらるべきの人と授くべきの學位とを評定するは、亦先づ高等の地位を占めし輩なり。かくの如く、學術世界の地位は皆官等に準ずるの形跡あり、以て、政府の一附贅として之に頼らざれば、榮譽の地位を得べからざるなり。加ふるに、世俗の學術を視ること、亦頗る之を鄙むの風あり。世俗の言に曰く、理論と實際とは並行し難し、理論に於て完全なりと稱するも、之を實際に行ふや、時あり處あり、其の完全を必し難きは毎々然りとなすと。かくて政府の吏事を司り若くは會社の事務に當るが如きも、學理に通ずる者は、却て實務に妨ありとし、下僚に沈滞せられ、閑地に放擲せら

れ、憂鬱不平に閉されて、活動の機會を得ること少し。殊に其の商業會社に在るが若きは、顧客に對する倨傲解曠、商業の斷引などには露ばかりも用に入らず。是に於て斷ずらく、實際の活世界に於ては、學術理論は些の必要なしと。又曰く、世は道理のみにて通るものにあらず、人情といふ者あり。曲折あり、纏繞ありて道理の進路を左右するなり。然るを學問ある者は、動もすれば、人情を顧みず、兀々として圭角ある理窟によりて求めて紛紜を來さんとす、苟くも理窟のみ之れ求めば、何事にか理窟の捏合すべからざる、少しく人情を融和せば、事なくして圓滑にすべきを、かの附會の理窟を飾弄して、自ら喜ぶの傾きは學問ある者の通弊なりと。

嗚呼學術社會が方に處するの境遇は、實に此の若く憐れむべき者なり。さればにや、學術を攻むる者も、自ら其の狀勢に制せらるゝ是非なき、學者にもあるまじき官等の昇級を希ふもの概ね然らざるはなく、徒らに地位高き者の尾に附きて進むに當々たるなり。問、志向庸ならず、官等の昇級には眼もかけず、専ら學理の講究を務めんとする者あるも、地位低ければ、研究の便宜も隨て惡しく、而して便宜

の善からんことを望めば、亦官等の昇進を望まざるべからず、學者の員數は年々に増殖し、而して官等に準せられて地位を得る者の數と度とには限りあり、則ち地位を得んと欲する者、昇進を希ふ者は、其の欲望の殷なる程、上官にありて己れを進退する者の意向を候伺して、之に順ふことを務めざるを得ず、其の上なる者、亦更に順ふ所あり、究竟する所は何ぞ、文部大臣なり。是に於て、國內の學者を擧げて唯一文部大臣の意向に背かさらんことを是れ務む。文部大臣何人ぞ、行政部の一官長として方略の才識あるも、必ずしも天下の大學者たるに非ざるべし、之が議に參し、之を輔翼する者は積歳の效を置りて梯を上るが如く進みし、老朽一般の徒多からずとせず、是れ其れ何物ぞ。然るに勢力の在る所、抑も之を奈何せん、彼等の意向に従はざれば、其の地位に安んずべからざるなり、されば、純粹潔直にして餘念なき學者が、初めてかの階級的學術社會に入るや、新たに沐する者の塵にまみれし冠を戴き、新たに浴する者が垢じみたる衣着くる心地して、堪へがたき不快窮屈を感ぜざるに非ず。但だ夫れ居の氣を移すや、四顧の境遇に順應することの常となりて、正義を踏みて

眞理を發揮せん決心も、涅にすれば、何時しか
縮み、塵けばいつしか靡きて、不知不識、自ら
枉げて虚偽の塵界に墮落するに至る。師範學校
の若きは、唯存司の命之れ奉ずる所、言ふを要
せざるべきか。大學の頗る自由にして地位低き
者も割合に勢力を保し易きを以てするも、儕輩
の榮進を競ふ者多ければ、左顧右盼、地位の爲
に心を擾されて、斷然として傍眼もふらず、學
理究明に身を委ぬること能はず、大臣の好尚よ
何如、總長評議官の意思は何如、自治か干渉
か、競々として之を醸定し、安んぜずして之に
順ふの習ひ度重なりては、竟に安んじて偽を眞
として自ら怪まず、故に一般官吏に比すれば、
心胸開豁にして論斷公平に必ずしも氣を助け
て惡を爲さざる大學教授等にして、猶ほ何處と
なく、因循卑屈の風を帯ぶるを免れず。況んや
之より以下の學校教職が心術の愈々醜陋に傾く
は、推して知るべきのみ。精金美玉、市に定ま
れる價あり、學位何物ぞ、而も之を得るに熱中
し、唯是れ幾年の後定期の試験を受けて博士の
位を得まほしさに大學院に入る者あり、精研草
思、何ぞ獨り大學院に於てせん、之に入るは、
所謂學位を得んが爲ならば、欲する所、豈學位
にして止まんや。其の俗臭鼻を衝く、等級の進

退に波々たるを怪むべきにあらざるなり。學士
奔騰の風乃ち爛り、昏々職々として俗の等級
高き徒に左右され、自ら枉げて眞偽を混淆し、
而して漸く以て下専門學校出身の徒を風化し、
師範學校よりして、更に小學教員に及び、竟に
以て幾百萬多量の幼弱子弟を風化し、天下を
舉げて、卑屈陋劣の風に浸潤せんとす、歎ずる
に勝ふべけんや。且つかの理論實際背馳の邪説
が流すの毒も亦大ならずんばならず。學理の蘊
著極めて厚く、精に詣り、微に通ずるも、之を排
して空論と曰へば、曾て一文錢に値らず、宏遠
精妙の理論を發揮して、之を唱説するも、空疎
迂濶として嗤笑せられ已むが故に、勢ひ進
んで之を爲す者なく、日常瑣屑の事情に順適
にして、以て實用を哀求す、官に在りては迂腐
にして、活用のなきの學者と視られんことを恐
れて、強ひて庸吏の態度を學び、足越超し、口
驕囁し、目を舉げ、手を搖かすの間、上官の
意を迎へて、巧に之に投じ、以て自ら才あり
と爲し、嘗て學ぶ所に正して意見の謬るある
も、誣ふるに、實際の然らざるを得ざるを以て
して、甘んじて、是非を顛倒す。初めや唯實際
の必要に由り、枉げて之を是とする者、終には
更に牽強して、爲に理論を附會し、以て辯疏を

試みて當爲となせば、則ち至らざる所なきな
り。商業會社に在るが若きは、學者といふ名
稱は、更に思むべき者たれば、物慣れたる商
人の風を植はんとて、世辭を稽古し、さもなき
事にも、餘計の追從して得意とし、嘗て刻苦し
て職業に必要な學業を習得しながら遺忘し
て惜まず、巧佞捷給、日又日を消して、却て世
才に長けたるに誇り、乃ち彼れ自らも又學術の
實際に益なしと曰ひ、以て濶達を衒ふなり。道
理人情の曲折に於けるも亦然り、必ず人情に
通じ、體も甘も嘗め盡したる粹人と云はれんこ
とを希ひ、務めて圭角ある道理を避け、突梯滑
稽、更に定見なく、行々以て鄙劣醜陋の行に
陥没するも、人情已むを得ずとして、一時苟
且の計に替々し、以て人を恕し、并せて己れを
恕するは亦甚しからざらんや。木偶の如く、
機械的に動作する官吏會社役員の如きは、俗
むべきの數にあらんとするも、職に後進の教育
に當る者だに此の風に浸漸して悔いず、益々以
て偽徳偽理の橫流を致す、滔々たる流俗あり、其
れ之を奈何せんや。

弊害の橫流は、既に此の如くなれば、たとひ邦
人の能力、白人に譲らずと雖も、學術の進
路壅塞し、事理研究の便開けざる、眞を極むる

の一路より白人の缺陷を補填して、一流の眞理を闡揚して、人類世界の進歩を助けんこと、到底思ふべからざるなり。今夫れ親父、其の子の教育を監督して其をして、放任に流れしめざるは固より其の職分ならん。されど學術日進の世に處して、其の子が習得する新學理、己の知らざる所に、喙を容れて、強ひて眞理を枉げしめて、順へば賞め、逆へば責むるは過ぎたりと云はざらんや。學術の發達も亦然るなり。肆まに極端の意見を主持し、急激の理論を唱道し、以て國家社會の秩序に害する所あるは、政府之を制するは不可とせずと雖も、學術の理論は必ずしも政府吏胥の能く辨ずる所にあらず、又其の之を論斷するの權利ある者にあらず。豈彼等が好惡に洵へて眞偽を混淆せしむべき者ならんや。且つ師範學校の校長といひ、教頭といふが如きは、彼れ固より官長の命令に唯々として、之れ従ふの徒、之を云ふも詮なからん、されど大學教授の如き地位を以て、盡く官等に準じ、某教授は奉任給等と等級を定めて省廳の吏胥に均しく、學識いかに高きも、恰も僅に書記官と上下し、異數の昇進によりて敎任に上るも、各省次官に對するに過ぎず。大臣親任官の資格は、萬々望むべからず。學術を研精するは、官職地位に求むる所あるにあらず、其の大臣親任官に望む所なきや固よりなり。されども其の修むる所の學術いかに進達して著大の功績を立つるも、之に過ぎずして、大臣に膝を屈して、其の下に拜せざる可らずば、是れ豈畢生身を委して従ふべき價ある事とするを得んや。而して人間として、不見識たり、學者として學術を辱しむる者とせざらんや。醫師に佐々木東洋氏あり、嘗て戯れに曾我中將に語りて曰く、若し軍醫たらんか、其の昇進を極むるも、總に少將に比肩す、則ち生涯の功勞いかに大なるも、以て中將に當るに足らず。我れ豈驕心必ず大將に當るの材ありと信ぜんや。さりながら一生を委して中將に當るに足らざるの業に従ふは惟らぬ心地せずんばあらず。我の軍醫たるを望まざりしは、是が爲めなりと。今の學術社會に生息する者、能く此の言に爽然たるなからんや。之を總ぶるに、學術の事は、務めて俗流を支配する官等位階の團套を脱せしむるに如かず。政府の監督は唯其の放肆にして、秩序を濫すを制するに止め、學術に關する處措は、其の社會の自ら治むるに任じて、吏務官司の事と全

然岐分し、其の社會に在りて、最高の地位を占むる者は、樞密顧問官の類に準じて、政府の最高官に下らしめざるを可とす。學位の若きも、歐洲諸國の如く、沿習の制を爲し、學術未だ進まざる時代の遺稱、今に於て猶任用ある者若きは、其の實に副はざるも怪しきに足らずと雖も、此の間、學位令の新たに制せられて、必ず幾多の學者をして、之に當らしめんとし、而して之を評定し、之を授與する者は、官吏たらば、たとひ其の撰にし一當るも、頗る奇怪の觀なくばあらず。是等無用の擧、斷じて之を廢除するを可とす。官等位階學位の若き、無用の階級、學者の地位を定め、苟くも之れなければ、學術社會に其の勢力だも得る能はず、學理研究の便宜亦隨て乏しきを免れず。是れ實に今日學術の獨立を妨ぐるの要因たれば、此の弊習を掃蕩せんが爲に、學職の官等に準ずるを停めんことを建議し、位階を奉還し、學位を返付して、超然として俗世界を脱すべきは、方今大學教授等の當に務むべき急となすなり。且つ學術を專攻する者が、理論の實際と並行せずと云はれんことを恐れて、勉めて廉々たる實際に順適せんとす、是れ大患なり。若し其の執る所の業にして、純粹の學術にあらず、

職あるの事業ならんには、其の實際の狀態に應ずるは、其の所なりと雖も、斯の如き區々たる實際瑣屑の業務は、固より概括せる學理の應用を煩すに足らず。此の區々たる者に強ひて應用せんが爲に、高遠の實理を下して、必ず之に就かじめ、以て其の吻合を求むるは分を知らざる者なり。而して學理の實際に叶はずと輕斷する者の若きは、謬妄の至りなり。一時の趨勢に適應して、一場の事情を表明し、繁瑣なる統計を列敘して、事實を辨明するが若きは、古今に貫穿し、東西に通徹して、精究證覈せる學理の證明に比し、果して大に價值ある者とすべし歟。理論の實際と合せずといふ、是れ固より信すべからざるの言たり。何となれば、理論なる者は、正確なる事實を説明するの貫線なり。果して實際に合せざらんか、所謂實際の虚偽なるにあらずば、理論の謬妄なるに過ぎず。理論を精研する所以は、正に此の謬妄を絶たんが爲なり。若し理論にして、其の精を極めば、求めずして自ら實際と一致せん、何ぞ枉げて實際に合するを求むるの必要あらん。道理人情の斟酌といふが如き、是れ亦正を持する者の患ふ所のあらざるなり。眞摯の人情、誠實の人情は、必ず道理を合同す、道理の人情を離る

るは、適切の道理にあらず、人情の道理に協はざるは、秀俊の人情にゆらず。乃ち道理の外に於て、人情といふ一傍遊を聞く。宜なり、人情なる語が、常に鄙陋の病處弱點を蔽うて、之が爲に分疏するの器たるや。欲望は人情なり。則ち纏ぐに傲尊を以てするも、亦人情ならずばあらず。人情にして想すべくば、世間何の罪惡か恕すべからざるあらんや。人情は實に道理を辨ずる力の進歩に促されて進む、側隱の心、人の爲に身を捨つることあらん、人の爲にするは、道理に通ずるなり。道理を知るの明徹せる、義務を感ずるの情を勵ますこと、極めて強く、人の事情を察すること、己れの事情に於ける如く、人の難を視ること、己れの難を感ずるに異ならず、卒然として之に遇ふも、身を捨てて之に従ふ、是れ人情の道理に促されて此に至るなり。人情の道理に協合すること此の如し、豈之を以て道理を昧まして、罪惡を教ふるの具となすべけんや。抑も學術の不幸、此の境遇に沈淪するは、學者の自ら取る罪亦多し。強ちに政府と世俗とを咎むべからざるなり。其の官位に束縛せられ、汚俗に超脱する能はざる所以は、彼等自ら上官及び世俗に對して、其の品位を保つる能

力なかりしのみ。彼等は曾て學術を専攻し、其の眞理を發揮し、上官の命に怖れずして、自ら伸ぶるの力あるなく、終生奔走して好官美俸を得んことを唯求め、得る者ほ此に満足し、得ざる者は徒らに惆悵す、何ぞ外間の輕侮を受くるを怪まんや。彼等が咄ふる所の理論、其の實際と背馳するや知るべきのみ。其の理論の高遠にして、直ちに日常瑣屑の事に應用すべからざるにあらず、彼等の能力に關之せる拘子定規に一を執りて變せず、變轉無窮の境遇に適用するの道知らざりに之れ由る。道理を執りて、人情と背馳するが若きも、實に之有りき、一知半解の法律家、文法を舞弄して故さらに道理の至當を離れ、好んで主角を生じて、人情を破壞せしが如き實際少からざるなり。凡そ此等の者は、皆學者の自ら致れて、其の神聖なる學術の獨立を失ひし所以なり。然りと雖も、去る者は咎むべからず、追ふべきは、尙任將來に在り。徒らに過去の失敗に泥んで、學術の獨立を妨げ、上官の意向のまゝに左右し、世俗の毀譽のまゝに浮沈して、是非を顛倒し、眞を滅して偽を長せば、學術の發達され何れの日か之を望まん。人類の以て下等動物に異なる所以は、正に其の知識の進歩に在りと

す。則ち知識の進歩は人類の榮譽ある大職として之を勉め、眞を極むるの路を開くべき所、是れ區々たる官司と憤々たる世俗との制抑に屈すべき者ならんや。貧弱後進の國が、以て富強先進の國と並び馳せて、其の品格を高むべきは、知識を磨礪し、學理を研究するより善きはなし。而して我が日本人の能力、恰も此に適當す。是れ以て勉むるなかるべからず。奈何せん、抑ふる者ありて其の發達を妨ぐ、豈速に芟除して大に伸ぶる所以を求めざるべけんや。其の任に當る者は誰ぞ、此に重ねて大學教授等が先づ其の官學位職學位を棄てて、學術獨立の基を建てんことを望む。因て延いて諸學校に及ば、庶くは學術社會を一新するの效旦夕にして辨ずるを得ん。

議會の喃喃、六百五十萬圓の經費削減は、其の影響する所頗る少からずして、風塵の表に卓出せざるべからざる大學をも、遂に驕り立てて波浪の中に入らしめたり。かくて日ふ、大學の經費良師を聘するに足らざるに至れり。果して然るか。抑も今の帝國大學、明治十年の以前に在りては、呼んで開成學校と稱せられ、其の教員は、大抵外國人にして、多くは師範學校の卒業生にあらずんば、基督敎の宣教師、然

らずんば陸軍の退職士官なりき。故を以て、學の淺く、識の高からざりしは、當然の事にして、但だ邦人に在りても、新知識の全く缺乏せる、輒く彼等の力量を判別すること能はざりしかば、大金を撥ちて、彼が如き淺學薄識の徒を聘用し、上下共に謹みて教授を拜聴したるは誠に已むを得ざる次第と云ふべし。其の後、開成學校は改め稱して、東京大學と呼ばれ、明治十九年更に革新して、帝國大學となれり。其の間幾年々々、校の内外、學問著しく發達したるのみならず、遠遊して泰西に學び、歸り來つて教師となりたるもの、亦少からず。且つ職員學生等に至りても、久しく外人と交際せしを以て、彼等の力量を判知せしもの頗る多く、爲に外人任用の事に至りては大に意を用ゐるの傾向を生ぜり。而して怪しむ、今日尙ほ外人の來つて、我が大學に教授となるもの、彼れに在りて僅かに業を大學に卒へたるのみにして、學識經驗見るに足らざる徒輩に過ぎざるを。夫れ我が五分科の大學中、最も高尚深邃の理論を教授するは文科大學に若くはなき筈なり。而して其の教授たる人物果して如何彼一ブッセを見よ、リースを開け、彼等實に本國に在りて、僅に業を大學に卒へ、而して直ち

に渡來したるものにあらざるか、曰ふ、ブッセは哲學者なりと。蓋し然らん。彼れ實に課業に於て、ロツチエの哲理を學びたる哲學者たるなり。其の人となりより觀るに、抗顔して哲學者といはんよりは、寧ろ美術家となるのふきはしきに如かざらん。曰ふ、リースは歴史家なりと。蓋し然らん。其の何の力量あるかは知るべからざるなり。彼等の本國に在るや、大學の教授はさて置き、學問に依て一身を立てんと欲するが如きも、稍々過分の望と謂はざるべからず。而して幸運運着して、其の我れに聘用せらるるや、惟に巨多の旅費を領取せるのみならず、三百五十金の月俸を得、且つ校内に在りて頗る重要な地位を占むるを得。彼等の學藝既に斯の如く、彼等の爲に費す所、實に斯の如し、是れ洵に學ぶもの爲に不幸なるのみならず、經費より言ふも、亦無勘定と云ふべく、好し是れ猶ほ忍ぶべしとするも、外國大學に對する面目を如何せんと欲するか。見よ、彼の大學に在りては、員外教員とすらなりて教授を受持つ能はざる徒輩にして、我が大學に來れば、一躍して重要な地位を占むると云ふこと、豈體面に關する大ならずとせんや。抑も外國大學の他國人を教師に聘用せるや、假令其の人にして、自國人の

企及すべからざる學識経験あるも、自國教師の
上位に置かざるを普通之事なりとす。而して
我に在りては事全く之に反し、なるべく外人
を優待して好地位を與へんと欲す。外人を優
待せんこと、強ち愚として非難すべきにあら
ず。特に我が教員の識力が、學生を信服するに
足らざる時は、鉄舌の人をして、意味ありげに
弄辯せしむること些の可かなしと雖も、莫大の
金額を擲ち、重要な地位を與へ、而して凡庸の
徒輩を聘用せんこと、豈事の宜しきを得る者な
らんや。苟も三百五十金の月俸と重要な地位
とを與ふとせば、秀逸の碩學を招くには足らざ
る迄も、猶ほ學識に富み、兼て教授の経験に富
める教師を聘用し來ること難しとせざるなり、
鴻儒必ずしも多額の金を食らはず、聘用するに
其の道を以てせば、欣々として到來せん。是れ
事實なり、架空の想像にあらざるなり。想ふに
我が大學の外國教師にして、眞正學者らしき人
物の來らざるは、又決して故なきにあらず。蓋
し我が教師を聘用せんと欲するや、先づかの文
部部内の吏胥を介して、之を求む、吏胥の之を
紹介するや、吏胥に縁故深きものにあらざるは
なく、吏胥に縁故深き程のものにて、庸流の人
物にあらざるは少し。是に於てか、前日僅に

學校を出でたるのみにして、數十金すら得るに
容易ならざる徒輩が、忽ち三百五十金の月俸
と重要な地位とを得、且や我國に來れば生計の
費用頗る廉なるを語り、吏胥乃ち自己に縁故
深き人物を求めて應ず。嗚呼是れ洵に大金と地
位とを擲ちながら、得る所は斗筭の人物のみ
なる所以なり。今我が大學の外國教師中、評
判よきはエツケルトにして、斯の人や我國に來
る前、某會の會長たりしと雖も、一度は本
國に在りて、教授の任に當りしこともあり、我
が大學の教授として敬て恥かしき人物にあらざ
るが、尙ほ且つ學識は其の短處たるを免れず。
他推して知るべきのみ。茲に何ゾブツセ、リー
ヌを詰責して快とするの要あらん、且つリー
ヌの如きは、亦頗る美質、研鑽力苦せば、他日精
然として傑出するなきを保せず。則ち之を咎
むること、太だ酷なるべからず。但だ經費既に
足らず、故に良教師得べからずといふものあら
ば、是れ大に非なり。苟も索むるに其の道を
盡し、學問上にて、良師を得んと欲せば、今
の經費にして足らざるあらんや。只選擇任用如
何を顧みんのみ。嗚呼外國教師を今のまゝに
して、而して經費足らずと云ふ、誰れか之を至
理と云はん。至當の進歩あれば、經費容易に増

惡

加し得ん、一國の品位を高むべき學術の事業を
案出せば、六百五十萬圓の大半をも制取する
を得ん。憾むらくは多々益々辨ぜんとするも、
多々益々辨ずるの資格を缺けるを。

惡
丈夫あり、休養惡息すること、已に久しく、
體力爲に勃々乎として上騰し來るとせん。然
るに、誤つて哲理の見解を懷き、運動するを書
ありとし、尙ほ永く休息するを以て心身を修養
するに足るとせば、則ち如何。若し之をして尙
ほ永く靜居沈坐せしめば、氣鬱し心塞がり、精
神快々、身體羸衰して事を取る能はざるに至る
べし。然れども人の世に處する、以て爲すべき
の業務なる可らず。乃ち起ちて、事に當らん
とす、而して敢爲の氣なし。進んで業を成さん
とす、而して堅忍の力なし。是に於てか、強ひ
て酒精の興奮劑を妄用し、快活猛奮の風采を
發揮し來り、頼て以て爲す所あらんとするも、
奈何せん興奮劑を以て振起したるの結果や、徒
らに脈搏の度數を迅速ならしむるのみにして、
其の體力と精神とに至りては、愈々益々衰弱
の深淵に墮落するを免れず。思ふに我國現代の
狀況、此に異なるありとするか。夫れ國已に

衰弱す。故に世界萬國虎欲狼貪、強大なる者、跋扈跳梁して、弱小なるもの、氣息奄々とし、公道隠れて光なく、僞善横行して寰宇に遍かちんとするも、爲に一臂の力を奮ひ、正義を主持して、之を四隣に伸ばし、以て人類福祉の一部を増進せしむる能はず。却て兇惡の迫り来るあらば、首を垂れ尾を動かさし、懼々焉として屈服せざる可らず。嗚呼これ我國現代の狀況なり。

我國の海外と争はざる幾世代、蘇俄作れ、平源作れ、北條作れ、足利作れ、而して織田豊臣は徳川と代りたるも、只面積二萬五千里の島中に起つ興作せしに外ならずして、其の外邦と兵陣の間に交渉せしは、僅々指屈するに足る。室内に盤居したること久しと謂ふべきなり。米

國水師提督の浦賀に來るや、唐土天竺三韓の外、世界別に國土あるを知らざりし邦人は、皆驚愕喫驚し、茲に初めて米利堅合衆國あるをりれり。かくて英來り、佛來り、露來り、白刃の下に根を吞みて、地下に入りしもの幾百人、五箇の港

は開かれて貿易場となり、三箇の土地は開かれて五市場となれり。夫れ斯の如くにして初めて海外と交通し、來者皆まず、往者追はず、自ら稱して維新と云ひ、忽然として國家快活の勢

力を現はさんとせり、これ猶ほ久しく盤したるもの奮はんことを思ひ、久しく伏したるもの起たんことを思ひ、永く室内に盤したるもの庭園に運動せんことを願ふに異ならず。特に昇平三百年、士民擧げて休息無厭に飽き、欠伸し居るに於てをや。此の時や、正に是れ外國に向うて十分の能力を伸張するに恰當せる時にして、物々たる士氣を鼓舞擧動して以て虎揚するあらば、一鳴して近隣を驚かし、再鳴して寰宇を驚さんこと、奚ぞ期して俟つべからざらんや。勃々たる士氣は、乃ち現はれて征韓の議となり、痛く朝野の人心を風靡し、激愾の氣慨然として海内に充滿し、戰艦備はらざるも三軍海を絶ちて露林の地に旭旗を翻さんとせしに、不幸にして、志や衰すべく、才や稱すべきも、皮相上より先進國の形勢を觀察し、

文明の真相全く、茲にありと觀察せし三箇の文臣、歐米の漫遊より歸り來り、盛んに非難論を唱へて、武を露國に漬すに策を得たるものにあらずとなし、軍艦を動かさし、同僚を誘ひ、遂に

響々として毛髮の機會をだにあらば、奮出躍躍せんとする士氣を抑壓し去れり。斯の如く發揚せんと欲する士氣を抑へ、敢て發揚する所莫らしめしが爲め、世上の事々物々、雍雍瀟瀟

して間接疎通する能はず、人心鬱々として鬱まざり、悶々として快からず、かく一内亂相繼ぎて起り、江藤新平佐賀に死し、前原一誠萩に斃れしも、不平の徒興熾然として國中に散在し、一火消えて一火燃え、一亂定して一亂起り、遂に西由戰爭の大疾患となりて出で來れり。是れ皆強ひて奮揚奮起せんとせし士氣を抑壓せし結果にして、又如何とする能はず。かくて金龜を擲つこと數千萬、人を殺傷すること數萬、僅かに鎮定に歸し、も、爾來庚午、天下の事業一に滯滞して更に振起の勢なく、轉た志士をして北斗を睥睨し慨然として涙下らしむ。然る

に泰西に於ける人口の遼雜と勢力の餘饒とは、年々歳々級数的に増加し來るを以て、彼等が方土に於ける事業と面談とは、之を容れて豊厚なる能はず、況んや彼等が冒險の志氣に富みて其の勢力を海外に伸張せしむるをや、是に於てか彼等が勢力の東進し來る、月に歲に其の益々猛烈なるを見る。然り、海外の形勢切迫し來るは應に現代の一大現象にして、我れ亦猛烈たる勢力を興發し、以て之に當らざる可らずと雖も、而も今や體力衰弱衰頹して事茲に出づる能はず、嗚呼余窮せる哉。

已に年に向うて勢力を伸張する能はず、乃

乃

ち内に顧みて運通を獎勵し、汽車汽船電信郵便等苟も、頼て以て運通の利便を補助するの力あらんものは、悉く發達助長せしめんとせざるはなし。故を以て期年の間にして鐵道は四方に延長し、電線は空中に縱横し、熙々として文明國土の外觀を備へ、而して商人最も其の恩恵を蒙れり。何をか商人と云ふ、抑も商人とは、此の地の物品を彼の地に運搬して販賣し、彼の地の物品を此の地に運搬して販賣し、以て彼此を疏通するにあり。古語に商而通之と云ひ、商不出則三寶絶と云ひしは、これに外ならず。今や汽車汽船の便大に開け、運搬頗る迅速頻繁を極むるに至りたれば、西洋船載の新事物或は都會の贅澤物、朝夕に飛び去りて山間の僻村、海濱の鹵地に至り、漁翁村廬の玩弄となるもの少からず。夫れ運通の便や大に開けたりと雖も、天産物若しくは製造物に至りては依然として進歩發達することなく、幕府爲政の日と今日とを比較するに、其の優劣の較著なるものある能はず。實に今日の狀況たる運通の利便のみ比較的に發達して、運通せらるる產出物に至りては、伴うて發達せず。所謂進歩は跛足的の進歩に過ぎず。是れ即ち世間の一般に開通しながら、一般に

不景氣々々々と呼ぶる所以なり。病源全く茲に在り。是れ猶ほ氣の鬱結せるを解放せんと欲し、強ひて興奮劑を用ひ、以て血液の循環を速められたれば、皮相上一時は頗る快活の外を現はしたるも、漸々衰弱し憔悴して容易に回復す可らざるに至りたるが如きか。

血液の循環をして迅速ならしむること、必ずしも非なりとせず。只血液の循環を迅速ならしめんが爲め、悪性の分子を注入し、之が爲めに精神及び身體に變動を起し、以て其の調和を失ひ、整齊を失ふに至りては、豈に長嘆に堪ふべけんや。燒酒、ブランドン等を用ひて以て心氣を興奮せんと欲する者、往々此の患を免る能はず。夫れ汽車汽船等を縱横に開通し、以て大に交通往來の便利を擴大するは、人の擧げて慶賀する所なるが、只如何せん、運通の利便急速に擴大し、而して運通すべき生産物の之に伴ふなく、而して交通の迅速利便なるが爲め、必用よりも幾倍か多數の商人を出すに至れり。此等の商賈や、物品を運搬販賣するよりも寧ろ高帽鮮衣、一時を購着し、空手にして大利を攫取せんとす。これ滔々たる山師流にして世人稱して紳商と云ふもの則ち是れなり。抑も紳商とは何者ぞ、彼等名を公益に假りて私利を

經營せり、有司に請うて官業を請負へり、姦商なり、博奕商なり、彼等は秀でたる財能なし、唯權家に入出し權家に寄託し、人の未だ知らざるに官府の内情を探知し、豫め法律政令の向ふ所を知り、市場の物質動搖せざるに乗じて算盤を撫し、機會一轉忽ち巨萬の怪利を攫取す、商賣の實なくして、富巨萬を積めるものは、實に彼の紳商なり。其の詭以て法網を逃れ、其の智以て愚民を惑はし大官を誘ふ。會社の起るあれば、彼等必ず其の重役たり、拂下あれば、先づ彼等が手中に落つ、其の他彼等が勢力、處として及ばざるなし。而して其の勢力の及ぶ所は、悉く變じて腐敗潰亂、惡臭紛々たる處とならざるはなし。嗚呼國家を腐敗せしむるものは、實に此の紳商なり。今や貧民に教育なく、自家の地位を疑ふこと能はざるを以て、意氣激昂、志氣跳躍、黨與を結び異説を唱ふるなきも、月移り歳換り、顧みて自家の地位を明知するの日に至らば、彼等夫れ遂に何をか爲すべき、豈他日と云はんや。想ふに紳商を抑制するにあらずんば、社會の百弊得て除く可らず。蓋し紳商の跋扈してより、真正着實に事業の爲めに勤勉努力するも、其の勤勉努力に伴ふだけの利益なく、却て事

に實際の事業に從はず、巧言令色、使佞媚、權家の門に出入し、官府の間に攀緣する徒與の爲に、巨額莫大の利益を獲斷占有せらる、此れ笑ふ獨り商のみならずや。農や、工や、皆擧げて然らざるはなく、勉勵の勞、酬の以て勞に當るに足るものなく、徒らに謀を窺ふ遊子の囊中を肥すに過ぎず。嗚呼分配の權頗何物か馬れに加へむ。されば國家の爲め爲すべく興すべきの事業、雜然として紛出するも、心身を纏ちて事業の爲めに黽勉し、事漸く緒に就き、利漸く擧るに至れば、忽ち多福なる紳商の乗る所となるを恐れ、以て興すべきの事業を興さざるもの豈絶無なりと謂ふべけんや。嗚呼事業の發達せざるは紳商の跋扈にあり。紳商は事業を獎勵する所以の者にあらず。今や政府の率先商導して計畫せる事業にして、今日の國家民人に必需緊要なる事業あるも、天下民人の異口同音に論難攻撃するものあるは、抑も何に依りて而して然るか、他の故なし。唯有司紳商相結託して陽に陰に悪性の分子を容るゝ所あるが故なり。又軍事上、國家の危急を知りし、歩騎砲工諸兵の兵員を増加し、砲臺を増築し、銃器を精選し、糧食を山積し、所謂常甲百萬積粟如山、四方の邦國をして隙の以て乗ずべ

きならしめ、或は甲鐵艦を増加し、巡軌艦を増加し、通報艦を増加し、水雷艦を増加し、軍港を増築し、大砲を輸入し、士官を選擇し、水兵を訓練し、四方の邦國をして望みて以て遊逸退縮せしめんと欲す。莫令然らざるも平和一朝に破れ、幾許の敵艦、袖手相接し海を蔽うて而して來り、鎗光沿岸に閃き、雷雨遶海に降り來るあるも、更らに周章狼狽の色なく、農夫は離散に耕し、商賈は市上に賣り、天下國家をして、不覺暇日如くならしめんが爲め、爲に歳人を高め、經費の増加を企圖せんとするも、國民の之に向うて同情を表はし、必用を感ずるなく、却て噴々器々として論難攻撃するは、抑も何に依りて而して然るか。紳商の姦智乗じて以て聚集せる金額の幾分を消費せんと企つるを恐るゝに依るにあらずや。軍備擴張の擧らざる、紳商其の責に當らざる可らず。蓋し紳商の社會に在るは、猶ほ腦中の血液に悪性の分子の入りが如きか。苟も腦中の血液にして悪性の分子の入りあらば、考察力を衰鈍ならしめ、理智力を廢鈍ならしめ、遂に甚重なる贖罪をして迷誤し錯亂して用ゆべからざるに終らしむ。紳商は社會の惡分子なり。有司と通ずるに因りて政府迷誤し、社會に跋扈するに因りて邦家錯

亂せり。これを要するに、皮相上歐米の文化年々歲々に膨張し來るの觀あるも、實際の事業進歩せず、民人衣食の度依然として上進せざるのみならず、却て年々歳々幾分づつ低落し來り、貧民窮困從一増加し、年一年次第々々に國力の衰弱せるは顯過すべからざる現代の實狀なり。此の衰弱せる體力を以て海外に當らんと欲す、猶ほ病者を驅つて壯夫に向ふが如きのみ、誰れか其の危難を危きざらん。而して國家をして、此の極に至らしめたるものは、彼等紳商の爲す所、極めて多し。然りと雖も、紳商をして此に到らしめたるは、曩に勃々たる士氣を壓抑して發揚する能はざらしめたる彼の姑息主義に基かずとせず。概して論ずるに、不景氣々々々の嗟聲、四方に遍しく、剛力年を追うて次第に衰弱に傾向するは、運通の利便一時に膨張し、而して運通の利便膨張したるだけ、運通すべき物品の產出せざるにあり。是に於てか氣徒らに勞れて前途頗る遠く、轉た悵然たるもの少からず。而して最も社會を傷へるは、彼の悪性の分子たる紳商の跋扈にあり。然らば則ち邦家隆興、國力振作の長策として、今日に施行すべき大急務は、社會の惡分子たる紳商の掃除にあり。

之を爲すの方如何、曰く、細大漏すなく、彼等が賤むべき、惡むべきの内情を天下に暴白し、天下の人心をして彼等が醜陋を明知せしめ、彼等如何に魏々たる家屋を建築し、燦爛として室内を裝飾するも、如何に鮮帽を戴き、鮮衣を穿ち、八字髭を生し、金時計を輝かし、車を流水の如く、馬は游龍の如く、揚々として驅り廻すも、紳商は眞商ならず、卑陋の種族なりとなし、之を擯斥して大に勢力を社會に得せしめざることを、尙ほ明治以前に於ける豊富なる××の如くならしむるにあり。日つや現今の選舉法たる、徒らに狹隘に失して、富者若くは虚假にて富者を裝ふの徒に便し、識見あり、才幹ありて、正眞に事業に關勉するも、些々たる資格の遮障する所となりて黜伏するもの眞に僅少なりとせず。されば宜しく選舉被選舉兩權の範圍を擴大し、以て暴富者と僞富者とを抑壓屈辱すべきなり。嗚呼紳商を抑制せざれば、實業振興せず、實業振興せざれば、不景氣挽回せず、不景氣を挽回するの策、茲にあり、國富を増すも策茲にあり、國權を伸ばすも策亦茲にあり。封建制度は人心を陶冶するに於て極めて必須たりき。人類の未だ發達せざるや、其の逕互協合の情に乏しき、強ひて而して之に迫るあるに

非ざれば、以て其の結合を牢うすべからず。是に於て兵戈絶間なく、單なる者は取れ、衆なる者は勝つが爲めに、此に一團、かしこに一團、兵力武斷に強制されて結合體を成し、而して數結合體を一團として之を統ぶる者、而して又數大結合體を一團として更に之を統ぶる者を生じ、遞して上り、遂に全く一國人民を統合して、此に一大範圍を形づくり、恣に藩籬法度の外に出づるを得ざらしむ。是れ封建制度の常態なり。一人の私利を輕んじて、他人の爲にし、邦國の爲にするの思想は、斯に初めて黨養育成せらる。所謂土風是れなり。封建時代の士族は、一般に義勇の風を崇尚し、國の爲にし人の爲にするの美德を具有せり。後世に及びて國民の德義風尙が尊ぶべきの資を備へたるは、概するに、往時士族の風尙が推擴して普く全人民に及ぼせるなり。其の業の商たり、工たり、農たるを論ぜず、其の志の尊くして、品格の高き者は、皆かの所謂土風に薰染するに由る。泰西のゼントルメンと稱する所の者は、實に封建時代の土風を傳承し、之に薰染せし者にして、其の或は商賈の業を執る者と雖も、彼れ皆私淑する所あり、務めて土風に嚮往せり。米國の拜金に熱中する、人皆其の徒らに個

人の利害に汲々として、政治の若き公共の大事は實に腐敗を極めたるを道ふ。されども親しく其の内に入り、地方農民の狀態を察すれば、彼等が自重に篤き、實に此の間士族の氣風を存する者あり。而して缺く所は吾が士流の虚誇驕傲の習のみ。故に其の氣象の高尙なる、毅然として、天下の大事を以て自ら任じ、眼中大統領國勢弱なきの概あり。放任自由の大甚しき、斯の邦の若きを以て、其の建國の根本牢固にして、日に強盛を致すは、美德の深く民心に根する、彼が若き者あればなり。然らずして、拜金の禮俗果して其の國風たり、商工の業を執る者にして、皆所謂町人根性の外、一も高尙なる特質なからしめば、四分五裂、潰散の極、反つて架點專壓の徒に統制せらるゝや久しからんのみ。吾が邦に在りて往時封建制度の整備は實に完美を致し、士族の風尙美德を薰養せしこと數百年、一旦事あれば、皆一身を擲ちて、公共の爲にし、死を視ること眞に歸るが如くなりしなり。是を以て初めて外國と交通し、國情紛々として天下皆其の危急を憂ふるや、士人の奮發挺進して國家に效さんと欲する者爲めに死に就く者、勝けて數ふべからず。繼いで細新の改革を成し、因て而して新

事業を企圖すること 踵を接し、今日に至るまで、身を公事に委して、經營奔走し、以て一世に勢力を占むる者は、皆士族なり。士風の國家に重んずべき所以、洵に此の如き者あり。切に怪む、近日士人が、漸く務めて町人の風を學び來るの傾向あり。其の衣服、其の態度、皆殊さらに簡嚴謹整を去りて、町人の靡淫瀟灑を爲し、以て得々として自ら喜ぶの風あるを。但しかの豪紳鉅商といふ者の若き、漫に自ら尊大にして、華族の驕蹇に倣ふ者間々之ありと雖も、又貴顯といひ、華族といふ者も、其の交際應酬に於て務めて鄙俚の商人を學ぶの風は、一般に行はるゝ所なり。士族の種に出づる者にして、冷嘲熱諷の日ある者は、彼れ必ず商人の風を爲す者たるの状あり、此の逆施の形勢、果して何の由る所ぞや。蓋し封建の制度、三百年の久しきに彌り、無事昌平にして、人心の鍊磨を缺き、弊害の積習、漸く上にして裕なる者は日に愚なるを致し、幕府初政に方りて、活潑に機務を振決せし老中の若き、諸大名以下の若きも、其の裔孫は皆婦人の手に生長せし纨绔の子弟なり、漠として世事を解せず、徒らに下僚の成を仰ぐのみ、故に幕府の形勢、方に一轉して維新の改革を促さんとするに際して

は、其の事に當り務む處するに堪ふる者は、僅に薄祿下等の士族、若くは足輕の類に過ぎず。此等賤士、足輕が、其の上を視て其の暗愚を嘲りしや久しかりしを以て、其の一旦志を得て、自ら天下を料理するの地位を得るや、甚だかの茫然として鼻を穿たる、舊上流の迹を襲ふことを厭服し、慧敏輕快にして直ちに效果ある商賈の徒と好んで交を結び、而して自ら其の風に感染せらるゝを致せり。加ふるに維新改革、士族の事一たび終るや、餘勇未だ索きず、沸鬱の情、道を得て之を發洩せんことを欲し、直ちに志を海外に馳せ、擣者内國局促の觀念を擴大して、日本國家といふの觀念となし、大に藻澤の氣を鼓して、千里の足を伸べんとせしも、端なく征讖論の一挫折に逢うて、此の壯大なる觀念感情は、節々に抑屈に竟へしめられたれば、折角に揮發せられたる國家公共の事に赴く元氣は、之を用ゐるに處なく、日銷月靡、次第に姑息に流れ、斯かる憚肉の數に堪へざるの觀をして、已むなく商賣投機の業を學び、以て聊か其の力を用ゐんと欲するの念を發せしめ、士人の心腸は、益々以て商賣私利の感染を受くることとなれり。今や顧みて前時の來路を視れば、茫として認むべからず。

自ら其の立脚の地を視れば米を覆み薪に坐するの思あり。乃ち國を擧げて絶叫して、國家の元氣係えたりと嘆息す。其の由る所實に歴々として指すべきを省せず、而して周章したる眼には正しく物を認むべからず、之を濟ふ所以の策に於ても、倉皇として爲す所を知らず、慨すべき哉。夫れ今代は、商業の世なり、財利の世なり。商業固より重く之を視ざるべからず、然れども今日我邦に於ける、所謂商人恨性を以て、大に商業の世界に振ふあらんとするは、至難といふべきのみ、目前の小利に汲々として、左支右吾、鏹を贏し鏹を刺す、是れ世界に濶歩する異邦商人と競争して大利を博得するの材ならんや。今や利口小慧の徒、一世に充墮す。若し商業を誘するに當りて、雜ふるに國家といふことを以てせば、人皆笑つて空論とし、嘲りて過大とするを常とす。然れども若し事業の始終を大觀して、更に大に我が商業の規畫を擴大し、かの異邦商人と馳騁せんとする者あらんか、往時士族が一身を委して國家公共に盡すの心を以て心とするにあらずば、能くすべからざるなり。其の爲す所にして零利を拾ひ、人節を越ひ、屑々として勞働し、外觀の醜陋

なる、支那人の若くするも可なり、外観の醜陋は必ずしも、土風蛮勇の氣を失ふ所以にあらず、要はその目的とする所、公にあると私にあるとの別のみ。支那人の世に厭嫌せらるゝを以てするも、其の商業に於ける、能く約束を守り、異邦萬里の途に流浪して、堅志事に當り、財を殖し産を興すこと、此の邦の所謂商人風なるものと大に逕庭あり。其の白人に畏懼せらるゝは決して故なきにあらず。嗚呼商業の世、財利の世、國家の元氣を維持するは、唯商人が往時士族の風尚を以て事に従ふに在り。但々夫れ趨勢の奈何ともするなき、此の風尚を興すも亦人力の能くする所にあらざるの疑あり。是に於てか此の元氣を發揚するの策を講ずる者、或は曰く、姑く末節に拘々する勿れ、唯外國と戦ふに在るのみと。戦は危道なり、豈漫りに欲すべきものならんや。而も且つ戦の欲すべきを道ふ者は、其れ見る所なからんや。幾を知るは其れ神か、嗚呼幾を知るは其れ神か。

醜

輕薄女子あり、輕薄男子戲れに之に謂ひて曰く、卿が容色天下に類なからん、假令然らずとするも、温乎たる卿が目、藹乎たる卿が眉

世間豈多く其の類を見るべけんやと。一片の贊辭忽ち女子の心を宙宇に飛ばし、得意揚々、自ら以て絶世の美人となし、鍍金の細釵を挿み、鍍金の指輪を飾り、衣帯はなるべく人の指目に留るべきものを欲し、故らに言語を裝うて優美の風を示さんとし、故らに歩行をしなやかにして人の顧盼を得んと欲す。若し夫れ傍観者より一瞥すれば、いやめかしき事限りなく、其の外形の醜陋、其の精神の醜陋、馬ぞ嘔吐を催さざらんや。而も輕薄女子自ら以て好しとなし、顔色は裝飾と共に燦然たる光彩を放つとなし、以て稠人廣座の間に出づるも敢て人後に落ちずと思ふ、豈言ふに堪ふべけんや。想ふに我國現今の美術たる、頗る之に類する所なきか。今や美術の語は殆んど天下を風靡し、美術と云へば、何となく人をして神聖高尚なるが如き思あらしめ、爲に美術を愛好すと言ひ、美術の製作に従事すと稱すれば、轉た世間の俗物をして開化超乘したる人物の如く思はしむ。然れども靜に美術とは何ぞや、何物を指して言ふかと問ふに至りては、確然として明解し、明指する者なく、只層々たる兒戲同様の者を日し、茫乎として美術々々と稱道し居るに過ぎざる

なり。されば髪を撫で付け、羽織の折目正しく、抜き頭に澄まし込み、而して以て美術の思想に富めりとなすもの鮮少なりとせず。すゝぶりたる大黒天、或は仁王等の彫像を見、譯もなく、妄に譽め立て、煙草入れの飾り少しく奇雅に馳せ、舌切雀などの金具あれば忽ちひねり廻したる文句を並べ、床の間に文晁の畫幅を掛け、柳の枝にても生け置けば奥ゆかしきなどさゞめきて以て美術の思想に富めりとなすもの鮮少なりとせず。風の神や、觀世音や、羅漢等の繪畫を見て只管に感服し、或は筆鋒を無遠慮に揮ひ立て、人にや案山子にや殆んど區別のなき者を稀有の名畫と感賞し、而して以て美術的思想に富めりとなすもの鮮少なりとせず。パイオリンやピアノの朗々嘖々として響くを聞き、只鼓膜に觸るゝのみにして精神には何の感動をも起さざるに、頗る感動したるが如き顔色を裝ひ、而して以て美術の思想に富めりとなすもの鮮少なりとせず。文字も練らず、趣向も練らず、思想に至りては固より卑陋下劣なる書き流しの短篇小説を讀み、文字が何、意匠が何、思想が何と利口氣に半分冷やかして批評めかし、而して以て美術の思想に富めりとなす者鮮少なりとせず。嗚呼豈鮮少なりとせんや。これ皆美

術の思想に富めるが如き、外見を装ひ以て世間
に誇らんと欲する徒興にして、滔々天下正に此
の深淵に墮落せり。且つ美術家と稱せらるゝ
徒輩に至りても、亦何ぞ之に異ならんや。試
に見よ、鑿匏等にて木村を削り立て彫り返し、
以て一箇の像形を刻み擧げなば、忽ち彫刻家と
賞賛せられ、繪具の使用法を心得、畫筆の選
び様を覚え、紙に向ひ、少しく勿體つけて、す
らすらと線を引き來り、さらさらと彩色を附し
去れば、忽ち畫工と賞賛せられ、ピアノの鳴ら
し方、琴の鳴らし方を一知半解せば、忽ち音樂
師と賞賛せられ、戀ひたりとか、戀はれたりと
か、美人とか、才子とか、何人も知れども口に
するに忍びざらぬ男女の癡情を記載せば、忽ち
小説家と賞賛せらる。嗚呼何ぞ美術家となる
の容易簡單なるや。

悉く納めて一の觀念に歸せざるを得ず。これ
を放てば發して種々の美術となり、之を收めば
潛みて一の觀念に歸す。美術の由つて現はる
る所、蓋し之れのみ。故に若し夫れ作家にし
て、美の觀念内に鬱勃するなく、而して外徒
らに美術の形狀を擬すものは、宛も鍍金と同
一にして、外面に於て光彩燦爛たるも、其の
實焉ぞ取るに足るものあらん。苟も其の實
取るに足るならんには、零雨寒雲忽ち放擲せ
られて識者の一顧にだに直せざるは知るべきの
み。嗚呼觀念の内に鬱積するなく、而して彫
刻と稱して徒らに木村を彫削し、觀念の内に
鬱積するなく、而して繪畫と稱して徒らに紅
緑を塗抹し、或は音樂と稱して、徒らに聲音
を放出し、或は詩文と稱して徒らに文字を排
列す、是れ醜婦にして白粉を塗り付けるなり、
乞食にして錦繡を纏ふなり、愚人にして才子振
るなり。據其の據にあらず、位其の位にあらず、
安より虚飾空飾し、鍍金を輝かして、以て世
に誇り、以て自ら喜ぶは、其の醜態洵に懨象
に堪ふべけんや。

箱、巧妙、仰ぎて欲すべく、氣きて親しむべき
美術の發現なきを以て、已むを得ず、觀者に在り
ては、今日のものを以て甘心せざるを得ずと雖
も、豈其の識力の進歩せんことを冀望せずして
かならんや。況んや作家に至りては奮發淬勵、
大に進歩發達せんことを冀望せずんばあらず。
作家等其れ悠々として消光すべけんや。抑も
雄邁の作家たらんと欲せば、雄邁の手腕なかる
可らず。若し夫れ彫刻家ならんには、鑿匏等の
使用に熟達せむことを要し、畫工たらむには
畫筆の運用に熟達し、兼て巧に色彩を辨分す
るに熟達せざる可らず。音樂師に在りては、
指頭の運轉敏捷巧妙にして、兼て音聲の清朗爽
快ならんことを要し、詩文に至りては、亘多の
詞藻を記憶し、籠統自在に之を駢列し、以て少
しも困窮の色なきを要す。只是等の技藝たる、
天賦の才能に屬し、強ひて學んで以て達し易か
らざるあれば、幸にして是等の才能の賦與せ
られたるものは、愈々益々其の能力を發達せし
めざる可らず。然りと雖も單に鐵金的に外部
の能力のみを發達せしめたりとて、未だ達し可
なりと稱すべからず。宜しく内部より思想を富
まし、觀念を富まさざる可らず。乃ち苟も
彫刻家にして英雄の肖像を彫刻せんと欲せば、

須らく英雄の意思を洞察する程に英雄を知らざるべからず。然らずんば、焉ぞ以て肖像の眉目をして躍然たらしむるを得んや。畫工にして山水の光景を描畫せんと欲せば、徒らに線の曲げ方、延ばし方のみの醒瞭せずして、十分に山の巍然として立ち水の濤然として流るゝの勢を感得し、胸中先づ一箇山水の好粉本を備へ、而して後に筆を下すを要す。澎湃轟轟たる海波を描寫せんと欲するが如きあらば、仔細に其の吞吐沃日、鯨を奔らし、虬を駭かすの勢を感得したるの後に於てせざるべからず。若し然らずんば、焉ぞ觀者の心目を動かすを得んや。音樂に至りても、聽者の感情をば其の心胸の奥底より呼び起し來り、之をして躍々として飛動せしめ、以て奏者の感情と同一ならしむるを要す。果して斯の如くならんには、奏者にして先づ自ら十分に感動せざる可らず。小説に至りても、苟も卓絶出色の逸作をなさんと欲せば、得意失意、悲痛樂觀、種々様々の境遇に入入するか、然らずんば活眼を開いて人情世態の動作變轉する處を洞察分析せざる可らず。若し然らずして、淺薄に人情世態の外面を瞥見し、依て以て不朽の大作をなさんと欲する者あらば、愚にあらずんば則ち狂なり、亦

彼の徒らに古語雅言を記憶し、意思もなく、觀念もなく、捏造し捏造したる詩歌俳諧の如き。焉ぞ以て同胞だも泣かすむるを得んや。何ぞ況んや鬼神をや。諺に曰はずや、詩を作らんと欲せば作者自ら詩中の人たらざるべからずと。是れ實に内に體積せる所と外に發現せる所と相一致するを要する謂にモテ、美術家たるもの皆然らざるべからず。抑も純念とは、内部外部共に純一無異の金質を稱呼せるものにして、徒らに其の外面にのみ金箔を展包するは、是れ人を欺き、筆で自ら欺くものにして、醜陋れりと云ふべきなり。然らば則ち苟も美術家たらんと欲するものは、常に區々たる手腕の熟達のみを務めずして、大に意想を之れ鍛鍊せざるべからず。而して意想を鍛鍊せんと欲せば、常に心を世界の形勢及び萬有消長の事態に着け、精密仔細に之を觀察するを要す。若し又一室に閉居して眞正の美術家たらんと欲せば、誠心誠意、神解默通、心と眼とを古來事物の最奥底まで透入し、古來事物の精神と自家の精神とを一致協合せしめ、漠然として別觀念の進出し來らんことを求めざるべからず。彼の小人黨を作りて咫尺の天地に醒瞭し、世態の隱微に通ぜず、世界の趨勢に通ぜず、萬

有の消長に通ぜず、古來事物の精神に通ぜず、少しく前人の精神を膏め、古人の胡蘆を賣くのみにして、意思もなく、觀念もなく、區々たる手腕に依頼して、得意自ら欣ぶ者の如きは、焉ぞ以て美術家の名稱を授與するを得んや。蓋し今の所謂美術家と稱せらるゝものを見るに、多くは卑陋賤劣の徒與にして、目して以て眞の美術家と稱するに足るなく、一見人をして不愉快の心を生ぜしめ、二見三見人をして嘔吐を催さしむ。是れ其の強ひて外面を美術的に塗抹するのみにして、美術家其の人の生涯と觀念とは美術中の人にあらず、俗囊塵裡の小才子、小細工者なればなり。故に心あるものより之れを見れば、彼等が自ら託して美術家と稱し、世人の之れを許して美術家と稱するは、洵に言語道斷の至りにして、寧ろ醜術家と云ふべきなり。彼のミケルアンゼロを聞かずや、鑿を取つて大理石に向へば、精神躍々として體外に溢れ出でんとす、此小の鈍角を缺く可き所に眉目高く張り、口唇堅く結び、全力を注ぎて鑿を打ち下す、工成りて之れを熟視すれば、雄偉優越殆んど活動せんと欲するの勢あり。是れ他の故なし、先生の生涯觀念は美術的の生涯觀

念にして、畢生の力集まりて茲に在ればなり。彼の古法眼元信が泉州一國寺に一椀と二十五鶴とを止めしは人の噴々する所なり。先生の畫師として此の寺に来るや、寓すること三年にして一番をも作るあらず。主僧怪んで故を問ひ、且つ曰く、拙僧固より先生衣食の費を厭ふにあらずと雖も、事少しく解すべからざるものあるを以て敢て問ふのみと。先生答へて、年來の謝恩として何物か畫く所あらんと欲すと云ひ、而して五六日を経過するも尙ほ未だ筆を下すを見ず、一夜更闌にして、雜僧、主僧の許に來り謂ひて曰く、畫師の舉動怪むべきものあり、主僧願くは之を見よと。主僧乃ち往いて先生の室を窺ふ、先生之を知らず、身を障子の腰板に寄せ、種々に姿勢を變じて、寝臥の形影を障子に反映せしめ、自ら眺め、自ら領し、展轉反側すること其の幾回なを知らず。其の翌先生筆を取りて、一室の杉戸に向ふ、而して其の現はれ出づる所皆臥鶴の圖にして、絶妙絶技筆下殆んど鬼神の寓するが如し。斯の如く先生夜は乃ち影を障子に寫して形體を案じ、其は乃ち筆を取りて杉戸に向ひ、十餘日にして二十五の臥鶴を畫き了れり。一夜主僧復先生の室を窺ひ、其の翌先生に謂ひて曰く、先生が今日畫

かんと欲するは、應に斯の如き臥鶴ならんと、具に姿勢を擬して之を問ふ、先生大に驚き惘然として云ふ所なし。是に於て主僧乃ち告ぐるに夜來の事を以てす、先生畫かず、別に一椀を畫き東國に向うて辭し去れり。先生往き、て函嶺に至り偶ま一椀を見、心人に感ずる所あり、乃ち歩を反して一國寺に歸り、囊に畫きし椀樹に一枝を添ふ、畫政遽に横生し、微風起り、綠翠滿らんと欲するの情趣あり。蓋し先生の半筆墨と雖も、後人の之を尊重寶藏すること珠玉帝ならざるは、豈偶然なりとせんや。復彼のベートヴェンは實に音樂の大家なり。一夕月に乘じて友と共に曠野を歩す、一茅屋、内に鬨鬨の音あるを聽き、歩を止めて之を聽取し、忽ち入りて訪ふ。一少年一少女あり、共に粗笨の衣服を纏ひ、少年はテーブルに向うて靴を造り、少女は頭髮五六莖垂れて煙邊に懸り、愀然としてピヤノに倚れり。而して此の女や實に首なりき。已にして先生情懷禁じ難く、少女に代りて坐をピヤノの前に占めしが、先生が指頭のキーに觸るゝや否や、切々啞々、次第に彈じ來りて次第に情多く、忽ち止まり、忽ち動き、忽ち浮び、忽ち沈み、其の妙音響ふるに者なく、少年は工事を止め、少

女は兩手を以て胸臆を押へ、座客好音に動かされ陶然として醉へるが如し。時に月光窓を射て、ピヤノの上に落ち、其の鬨音はん方なし。已にして曲畢るも先生心深く感ずるあるが如く、寂として一語なく、將に起て歸り去らんとす。諸人強ひて再びせんことを請ふ。先生乃ち思ふ所あるが如く、長空を隴め、星斗を麗して、復一曲を試む。初めは幽寂として、月光の下土を照らすが如く、後には閃爍として怪鬼の草間に舞ふが如く、人をして外圍物を忘れ、自家を忘れ、轉た身の人間にあるを覺えざらしむ。蓋し是れ世間希有の妙音にして、美術家の能事茲に至りて極まれりと謂ふべきなり。仙女の裳羽衣の曲を舞ひて天に登り、師曠の白雪の音を奏して風雨暴に至れるが如き、不審の傳説といへども其れ他あらんや。是れ皆初めより瑣々たる手先きのみに依頼せずして、全心を擧げて此處に注入するを以て、精神汪々として溢れ出で、美の觀念亦從て汨々として溢れ來るが故なり。

今、所謂美術家たるや、竊うて手先きの纖巧を尚び、而して意想を鍛鍊するなく、偶ま意想を鍛鍊するものもあるも、淺薄にして見るに足るなく、或は巧に感情を現はすものもあるも、

其の現はす所は、只一部分の感情のみにして、美術すきの稱號をもらひたき人物を観て以て感賞する所あらんと雖も、平心虚意に觀察せば、實は感ずるに足るなきなり。抑も美の眞粹を發揚せんと欲せば、先づ美術家其の人の生活をして、美術的たらしめざる可らず。若し美術家其の人の生活をして美術的ならんには、其の技藝少しく拙なる處ありと雖も、大に見るに足るものあること、猶ほ純金ならんが如し。今や我が梨園社會に在りて、團洲の技量優に絶倫絶佳と稱せられ、團洲にして一去せば、醜々たる幾多の俳優中、恐らく一人の起ちて後動たるべきものなかるべし。蓋し在來の俳優たるや、品行不良、性質浮薄、學問識見等に至りては分厘も之れあるなく、柔弱軟弱、身振假聲等を弄して得々たる怪物其の墮落集合したる所にして、少しく事物を識別するの眼光を具有せるものならんには、誰か好んで此の魔界に墮落せんや。已に然り、故に萎靡る、場開き、彼等の舞臺に立ちて舞ふや、飛揚活動、觀者をして肉動き、血跳り、殆んど席に堪へざる能はざらしむるなきは、職として是れ之に由らずんばあらず。若し夫れ忠臣蔵を演ずるに於

て、果して彼等の群中に一箇の寧馨兒ありて、大星由良之助の性質を感得し、人物を認識し、依て以て由良之助に扮したらんには、就令其の身振と假聲とに至りては左程妙かならずとも、必ずや大義漢として頗る觀者の心目を動かすに足るものあらん。然れども如何せん彼等卑々屈々、賤劣剛藏、英雄豪傑、佳人前婦、奇士哲人の性質志向等に至つては、毛髮も之を感得する能はずして、唯徒らに市井の無賴漢、或は姦婦等を扮せ罷出たりて觀者の心目を奪ふのみ。されば錦衣、疊の上の乞食かなの一句をして實境より出でたる實語ならしめ、或は人をして團洲死後赤團洲なかるべしと思はしむるは、豈必ずしも偶然なりとせんや。今や美術の語大に世間にもはやされ、従て俳優をば疊の上の乞食より推し上げて美術家の一座に列せしめたるも、蓋し他の美術家輩に於ては、俳優と思はるゝを恥づるのみならず、或は之と伍するを屑しとせざるものあらん。然りと雖も靜かに今的美術家と俳優と取りて相較するに、其の品位思想等に於て孰れか勝り、孰れか劣るの甚だ疑はしと云はざるを得ず。蓋し今的美術家たる、或は實に俳優と伍するを屑しとなすのみならず、或は實に俳優と思はるゝを

恥となさざるのみならず、得意揚々好んで俳優を學ぶものあり。是れ洵に自家の品位、思想、地位等を知るの明ある者と云ふべきも、彼等輩生團洲の弟子に竊從して墓土に葬られんものにして、到底美術界の團洲たるを得ざる徒輩とす。要するに現今我國の美術たるや、徒らに外形の粧飾に馳せて、内外の情致協和一貫せず。乃ち美の根本たるべき觀念に至つては、作家も、觀者も、共に捨てて省みざるもの如し。鍍金豈永く其の光彩を保つを得んや。世の作家たるもの大に自ら警戒する所なかるべからず。社會の非物笑ふべきもの固より多し。而して儻すべきもの豈又少なりとせんや。今や黒奴の日本に來るを見るに、皆洋服を敷き、洋靴を穿ち、洋服を着く、且つ彼等の亞弗利加本土に在りて歐人と交通するや、飲食、器具等萬般の品物悉く歐洲たらんことを願ひ、甚だしきに至つては身を化して歐人とならんことを願ひ、起りては身をも化して歐人の身振に模倣せり。若し又日本にして北米に航し、シャツトル若くはウェアの三々五々、相携へて逍遙するを見ん。是に於てか、懷郷の情禁じ難く、就て故山の事を

語らんと欲し、近づいて懇懇に問ふれば、婦人左右視して言語通ぜず、怪んで諦視すれば、宜なる哉。是れ米國の遺民インヂヤンの婦人なり。若し又マダカスカルに行きて其の官廳を訪ふあらんか、大吏より小吏に至るまで洋装洋飾宛如として我國の官廳に異なる所なし。

抑も模倣は、未開民人通存の性情にして、東西一揆、南北一轍、少しく珍奇の事物を見れば、直ちに之を模倣せんとすること、猶ほ小兒と大人の舉動を擬して欣々たるが如し。想ふに模倣の事たる、感化に依りて内部に入りたるものをして、一に反應の作用に循ひて、以て外部に表現せしむるなり。されば小兒の如く腦力未だ發達せざるものに在りては、模倣實に一種の效力ありて、徳才藝の發達を助長すること頗る少からざれば、固より切に密漚すべき所なりと雖も、已に長じて、二十餘歳に至り

なほ且汝々として模倣之れ務むるものあらば、其の人や供備の如く、俵倣の如く、幫傭の如く、到底車脚賤勞を免るゝ能はず。海に是れ巧言令色の怪物、獨立獨行の士人として言語道斷の至りなり。我れや國を開きて歐米と交通せしより僅に三十年、所謂世界文明後進の國土なれば、所謂先進文明の國たる歐米の新事物を容

るゝに急なるは勿論なりと雖も、而も靜かに二千年來の發達を稽查するに、風俗習慣、禮文藝術、他人と際するに於て敢て甚しく恥づるにも及ばざるなり。大凡社會の事物たる、他を模倣せんよりは、自家固有の特質を發達せしむるの便れるに若かざることあり。蓋し我國固有の風俗たる、奚ぞ悉く抹殺すべきものならんや。抑も外國の事物を取りて之を用るんこと敢て非難すべきにあらずと雖も、其の之をなさんには、豫め守る所なかるべからず。即ち明かに我を主とし、彼を客とするの本領を確定し、彼や只取りて以て我れの發達を裨補せしむるの用に供すべきのみ。初めより我の我たる觀念なく、只汲々乎として模倣之れ務む、馬ぞ其の可なるを知らん。蓋し北米聯邦に在りて、我が扇、傘等の需要頗る多く、且つ漆器類、麩の貴重せられ、又歐洲各國に在りて、支那産出の茶、陶器等の珍重愛玩せらるゝは、夙に世人の熟知する所なるが、彼等の之を用ゐるや、敢て模倣するにあらず、只取りて以て我が足らざるを補ふに過ぎず。抑も彼に取りて以て我が足らざるを補ふは、毫も非難すべきにあらずと雖も、頂より踵まで、左より右まで悉く他に模倣して變換轉遷せんと欲する

は、是れ自ら未開視するなり、野蠻視するなり。滄浪の水清まば以て繩を洗はれ、濁らば以て足を洗はる、人先づ自ら侮りて而後他人之を侮る、嗚呼何ぞ思はざる。若し夫れ我が日本にして、事物の何たるを問はず、一類異様の特色を現はし、以て外を裨補するを得ば、是れ實に宇内人類の爲に打ち消す可らざる功績を擧げしなり。若し又我にして務めて歐米の風俗習慣、文物典章等を輸入し、衣服飲食、灑掃應對等に至るまで、汲々乎として只模倣の巧ならざるを思ひ、全然國を擧げて歐化すとせんか、

日本として見るにあらずして、其の見る所、唯山の勝と水の景のみならん。而して彼等が我が哀々たる民人を見ること、猶ほ自國に於ける凡庸なる人物、賤劣なる奴婢と同一ならんのみ。然らば乃ち模倣の極りや、只國をして劣等なる歐米とならしめ、民をして劣等なる歐米人とならしめ、以て歐米國民中の賤劣なる種族を増加するに過ぎざらん。嗚呼是れ果して天地を首載せる造化の希望なるか。

は、是れ自ら未開視するなり、野蠻視するなり。滄浪の水清まば以て繩を洗はれ、濁らば以て足を洗はる、人先づ自ら侮りて而後他人之を侮る、嗚呼何ぞ思はざる。若し夫れ我が日本にして、事物の何たるを問はず、一類異様の特色を現はし、以て外を裨補するを得ば、是れ實に宇内人類の爲に打ち消す可らざる功績を擧げしなり。若し又我にして務めて歐米の風俗習慣、文物典章等を輸入し、衣服飲食、灑掃應對等に至るまで、汲々乎として只模倣の巧ならざるを思ひ、全然國を擧げて歐化すとせんか、

日本として見るにあらずして、其の見る所、唯山の勝と水の景のみならん。而して彼等が我が哀々たる民人を見ること、猶ほ自國に於ける凡庸なる人物、賤劣なる奴婢と同一ならんのみ。然らば乃ち模倣の極りや、只國をして劣等なる歐米とならしめ、民をして劣等なる歐米人とならしめ、以て歐米國民中の賤劣なる種族を増加するに過ぎざらん。嗚呼是れ果して天地を首載せる造化の希望なるか。

は、是れ自ら未開視するなり、野蠻視するなり。滄浪の水清まば以て繩を洗はれ、濁らば以て足を洗はる、人先づ自ら侮りて而後他人之を侮る、嗚呼何ぞ思はざる。若し夫れ我が日本にして、事物の何たるを問はず、一類異様の特色を現はし、以て外を裨補するを得ば、是れ實に宇内人類の爲に打ち消す可らざる功績を擧げしなり。若し又我にして務めて歐米の風俗習慣、文物典章等を輸入し、衣服飲食、灑掃應對等に至るまで、汲々乎として只模倣の巧ならざるを思ひ、全然國を擧げて歐化すとせんか、

冒頓

例言

一、昔者道灌歌を上りしに、御製、
武藏野は苜蓿のみと思ひしに斯る言
葉の花や咲らん

とありき、武藏野は苜蓿のみに非ざりしなり。況んや千里蕭條、牧馬悲鳴する地、豈二三豪傑の士の叱咤して起る莫からんや、蠻奴の鐵騎以て冠帶の縉紳を擡轡する、希罕ならざりしが如く然り、然るに世多く皮履都人士を言ひ、而して其の他に及ばざるは何ぞや、皮履都人士は由來俳優の風ありとせずや。

一、吾れ東大陸人變傳に於て、鐵木眞、忽必烈、ヌルハチを傳せんと欲しも、鐵木眞は決して胡帝國を稱造せしに非ず、事の成るは成るの日に成るに非ずして、必らず由て起る所ありといふ、清の前に元あり、元の前に金あり、金の前に遼あり、遼の前に匈奴あり、突厥ありて、漸く廻りて

匈奴に及ばざる可らざるが、匈奴の冒頓は秦の始皇と南北相對して東大陸の國家史に紀元を作りし者、先づ斯の冒頓を傳せざれば、鐵木眞の地位得て以て明にすべからざる所あり。

一、冒頓傳は詳にせんこと難し、勢ひ傳的史たるよりも、史的傳たるべき傾向あり、特に其の子孫に就て然り、而も傳は固より傳たらざる能はざるを以て純粹の史に關しては務めて大要を擧ぐるのみ。若し夫れ匈奴の歴史に至ては、地質學、地文學、人種學、語言學等を参照して研究せば、實に該民族の歴史として得る所あるべきのみならず、世界史として得る所亦頗る多かるべきも、是れ吾が意に企て及ぶ所に非ず、吾は唯聊か蠻人の姓名を世間に披露せば、則ち足る。

明治三十年十一月

雪嶺迂人識

第一章 疆域

人の世に存する、何故に爾く合同せずして、互に疆域を限り一相争ふや、一疑問なり、竊に惟ふ、其の相争ふは素只人類の爲めにして、切磋琢磨の人文を進むるに缺く可らざると同じく、國と國との競争は雙方の世慮を刷新するに於て避く可らざる自然の現象なり、古より敵國外患無ければ國亡ぶと言ひ傳へたりしが、争は一國の或方面より觀れば、勢力を無益に費消するかの感あれども、人類の生存上、競争は一日も之れ無かるべからずして、亦實に社會をして活動せしむる主要の興奮劑たるなり、人類の偏く合同せざる可らざるが如くにして、而して合同すべからざるもの、其の故此に在り。然れども人類の國を爲すや、自ら國を爲さんとして國土を形成するよりは、勢に制せられて然るを多しとし、又其の土地に於ても、適と不適との差別あり、稱して疆域といふも、對然たる限界が初よりし一之れあるべき筈無く、但版圖を擴大するに最も強く妨害と爲る所に在りと云ふべきのみ。要するに人は一定の有機的組織を成して、繁殖し得らるゝ丈け廣く繁殖せんとし、又勞作し得らるゝ丈け廣く勞作せん

とする者なれば、若し其の組織の下に於て、繁殖の希望もなく、勞作の希望もなきに至りて、此に所謂境界なるもの初めて生じ、一國國土は乃ち形成せらる、而して繁殖の希望や、勞作の希望や、其の之を抑制する所以のもの、或は道路の梗塞して通す可らざるもあるべく、或は土地の荒蕪して用ゆ可らざるもあるべく、若しくは寒氣の餘りに強く、暑熱の餘りに酷なるに過ぐるも亦其の主なる障害物たるべしと雖も、凡そ人口稀少にして社會の未だ開けざるに方りては、小なる山、小なる川、尙且つ優に一國の境界線たるべきも、人口にして繁殖し、社會亦漸く發達するに及びては、規模自ら宏大に、大なる山、大なる川も境とするに足らざるを常とす。希臘は小なる山脈起伏蜿蜒して縱横又錯又し、小なる社會の互に國を爲して競争するに適せりしも、是れ固より大なる國を造るには足らざりき、大國の境界と爲るべきものは、障害物の非常に大なるを要す、支那の戈壁に於ける、埃及の沙漠に於ける、若しくは支那の西なる崑崙山の如き、印度の北なる喜馬拉亞山の如き、是れ皆天然の境界たるべきもの、大國民の大障害物に依りて感せらるゝこと以て見るべし、彼の佛蘭西と西班

牙との間なるピレニースの如き、佛蘭西と意大利との間なるアルプスの如き、固より崑崙喜馬拉亞の大に比すべからざるも、亦久しく或國民の境界線たりしなり、造船の術未だ開けずして航海の業猶幼稚なるの時に於ては、海岸は亦一の明白なる境界たりき。天然の境界無き時は一國の限界を定むること此だ難かるべし、天然の境界は爾く便利好く存在するものにあらずして、たとひ一たび偶然たる區劃あるも、社會の發達すると共に、疆域混亂して此に紛争を生ずるが、我れ自ら進みて他を我が組織中に入るゝこと能はず、他亦我に勝ちて其の組織中に入るゝこと能はず、かゝる場合には條約を以て之が境界を規定すべく、乃ち若し我が強五分にして他五分ならば、境界は其の中央にあるべく、我れ七分にして他三分ならば、其の割合は正に七分三分の處に在るべし、然れども強弱なる者、常に的確として定まれるに非ず、情勢亦時ありて易す、人為的に定められたる境界は竟に永遠に持續する能はざるべきなり。亞細亞より歐羅巴に涉りて其の北半は殆んど境界無しとも稱すべく、中には烏拉爾の如き高山無きに非ざるも、其の高しといふは突兀として地を抜くに非ずし

て、漸を以て一高まり、八の此を經る者、何時其の絶頂に達せしやを知るなければ、固より以て境界線を爲すに足らず、此の間若し有力なる國民の生し、奮然歎起して風雲を叱咤するあり、勃海より波爾的に至る、之を平押に併呑すること難からず、東に起れば西を併せ、西に起れば東を包めるを得、彼の成吉思汗の黑龍江畔に出でて西の方歐洲の一半を席卷せしが如き、以て其の狀勢を察すべからずや、後現露西亞帝國の歐州より起りて、東の方領土を太平洋の沿岸に擴大せるが如きも、亦地勢の之を膨脹せしむるに便せしや知るべし、顧ふに幾許か力ある者ならざれば、固より版圖を大ならしむる能はざるも、版圖の大を以て強ちに其の力の強を誇すべからざるに似たり、亞歐の北一半は無境界の地なり、此に國する者、一あるべくして二あるべからず、中に就て最も力ある者、乃ちそが所有するを得んのみ。然れども世の進歩すると共に、人為的に境界を定むること必要と爲り、天然の境界無き處と雖も、自由にかゝる限界を附せざる可らざるに至る、合衆國はもと山川に據りて州を區劃せしが、國上の開發するに従ひ、障害物のみに依りて境界を定むるは不覺鮮からず、ミシシッピの潤す一帯

の地の如き、平野千里に亙りて殊に境とすべきなく、而して之を一州と爲すは誠に廣大に失す、かゝる所は多く經緯度に依りて分界せられき、固より此等は齊しく合衆國內の一州たりと雖も、國と國との境界にも經緯度一用あること無きに非ず、合衆國と加奈太との如き即ち是れなり、二者の間素セントローレンスの天然の境界あり、獨立戰爭の頃には一たび加奈太を合併せんとし、遂に成功なくして止みしが、今日に至りては昔時の自然に據る境界は特に重とするに足らなく、主として經緯度に依ることと爲れりき、輿地圖を繕く者は必ずや北米の東西に亙りて一直線の二國を分割するを見ん、是れ蓋し人文の發達に伴へる現象なり。然れども如何に人爲の境界は社會の發達に伴ふとはいへ、自然の地勢の離るべからざるは、昨も今も異なることなく、天然の境界無くして二國の分離せんことは難かるべし、合衆國と加奈太とは之を合併せざる可らずとは、是れ新大陸に於て屢々唱へらるる議にして、土地の廣大なること合衆國の如く加奈太の如きに在りては、たとひ緯度に依らずしてセントローレンスの類に依るとするも、以て二大國の境界たらしめんには或は足らざるやの憂も無き能はず、

今日二國の分離せざる能はざるもの、只加奈太が英國の屬領にして、英國と合衆國との天然に分離するが爲めのみ、加奈太にして英國と分離せば、其の忽然として合衆國と合併する、未だ必ずしも之れ無しと限るべからず、要は天然と人爲と相待ちて此に初めて正確なる境界を生ずるを得るなり。歐羅巴の人口は支那一國よりも少けれども、該國に國せる者彼の如く、互に曠野して以て繁榮することを得、支那は古來興亡常なきの國なりと雖も、其の最も著しく分裂せしは戰國の七雄にして、降りて劉氏の末路に至り三國鼎立の勢を見しが如き、先づ其の主なる者なるべし、其の他に至りては忽ち瓜分割裂して忽ち他姓の下に克服せらる、然る所以のもの、歐洲に在りては天然の境界多く、峻山其の中央に連互し、海岸亦大牙の如く出入し、小國の據て以て輪贏を爭ふには最も善く形成せらる、支那や則ち然らず、山岳の起伏稀にして海岸の屈曲甚しからず、揚子江は世界の大河を以て稱せられ、曹丕も其の洶湧の水を觀て、天の南北を限る所と嘆ぜしが、若し支那にして開發せず、人民猶稀少なるに方りては、或は揚子江の如きも優に自然の大限界たるべかりしも、

兩岸の沃野は茫漠として其の界限を知らず、隨ひて人民の繁殖する區域は極めて廣大にして、世界の大河と稱する者も、之を其の人民繁殖の區域に比すれば、固より言ふに足らざるなり、故に人民の住居する區域にして小なれば、小山小川と雖も、時に完全なる境界たるべきも、其の住居の區域にして愈々大なれば、愈々大なる大山と愈々大なる大河とを要する者とすべし。支那の幾たびか興り幾たびか亡ぶるが中に、山川の能く此を分界する能はざりしもの、是れ必ずしも山川の小にして境界線たる可らざるに非ずして、支那の田土の濶大なるに比例して境界と爲し難かりしに過ぎず、四方千里に垂んとして常に一國の形を存存し、唯一の國を社會として、他と競走せしこと少く、列國的觀念を惹起するの機會に乏しく、人民に敵愾心といふ者殆んど得て見るべからざるも之が爲めのみ。然れども以上は只從來の國を以て言ふに止まる、既往の歴史は猶繼じて小規模にして、歴史と開化とは正に其の度に適應せしなり、歐洲列國が東西の山を環りて各々國を爲し互に競争せし間には、シャルル大帝出で、オット大帝出で、ナポレオン大帝出で、天下を宰割して王侯を封じ、或は盟主と爲りて列國を震懾

せしめき、而も此等俊豪の崛起は、海に當時の一大奇觀とすべかりしも、其の運動の範圍は極めて狭小にして、最も大なる行軍と稱せらるゝ者すら、佛蘭西より露西亞迄の距離に過ぎず、亞細亞や、之を歐洲に比すれば、其の廣袤と民人と共に倍從し、其の規模の雄大なる、固より歐洲列國が小山川小海洋を以て隣國を分つが如きにあらず、歐洲の列國は瑞西なる小高國を環りて分布星列し、亞細亞は西藏なる大高原を中心として幾箇の大國其の襟に枕し、瑞西は、西藏よりして黄河出て揚子江出て信度出で恆進出てブラマブトラ出づるが如く、彼には佛蘭西と名け、伊太利と稱すれば、此には支那と名け印度と稱するが如し、大山川の間大邦國の現出するは固より其の處、亞細亞の古來大國の興じする者知るべし、但だ亞細亞や、從來の開化にては互に列國を形成して雄華を争ふ程の力あらず、大山岳、大川ありと雖も、空しく峙ち空しく流れて、閩津塊上の一裝飾たりしのみ。

皇我を妨ぐるのアルプスあらんやとは是れカールタゴの英豪の語、而も此の絶世の英豪も、喜馬

ラ亜に向ひては意氣全く挫けざるを得ざりしならん、歴史ありて以來、アルプスを越えたるの豪傑はあれども、未だ喜馬拉亞を踏えたるはあらず、亞細亞の地形一筆偉なるは今更一如くに説かざるも可なるべし、若し世界の進歩にして駁々進みて止まず、交通の網一層の發達を觀るに至らば、亞細亞の大勢必ずや此に一變すべく、印度よりして中央亞細亞の鐵道敷設せられ、歐洲より太平洋沿岸に西比利亞鐵道全通し、而して暹羅より支那に達する鐵道亦愈々全通するに至らば、西藏の大高原を圍繞せる幾多の邦國は、互に其の距離を縮縮して密通接近し、競争の霸長なるもの、乃ち此に由りて生ぜんとす、亞細亞の古來列國の間に交渉少かりしは、地勢の如何にも雄大にして、人文の發達之と伴はざりしに坐す、今よりして後人文の發達を催促する者ある、乃ち其の競争や固より知るに足る。

夫れ然り、古來亞細亞は、地勢と人文と、其の平衡を得ずして終に國民の大競争を觀る能はざりき、然れども亞細亞は古國として印度支那の大國を有せり、歐洲列國の未だ開けざるの前、既に文章を以て字内の魁となる、中る微にして振はずと雖も、昔二三競争の大なる者無

からんや、彼の支那帝國の夙に北方と抗争せしが如き、以て數ふべからざるか。蓋し支那北方の處なるに當りてや、其の南下して支那を苦しめたること一再にして止まず、太古よりして夙に北方の強を以て畏れられ、時に支那全土を併吞せしことも無きにあらず、而して其の一國と爲り、儼然對立して抗争せしは、匈奴より始まれり。

第二章 支那の北疆

エムパイヤ、ウオールド、普通に一を帝國と譯し、一を世界と譯す、而して英華字典、英華林羅府の類均しく天下といふ譯語を兩す、蓋し天下は國といふ意義よりせば宛も中國といひ中華といふと同じく、特に自國を指すに用ゆ、ローマン・ウオールドといふも、ローマン・エンパイヤといふも、支那流の謂ゆる羅馬の天下といふ義なり。

天下といふ稱は、素自國を世界視するより起る、自國を世界視する因由蓋し三あり。或は廣海に環繞せられ、或は山嶽に阻障せられ、域外の狀勢を知らずして、人類の生を享くる處、全く自種族群居の地に限ると思惟する、是れ其

の一なり、萬里懸絶せる孤島の蠻人、若くは層
岳重嶂の間に介在せる土蕃の如し。寰宇の
上、國を建つる多きも、五方俗を同じくする莫
く、文明の度我れ獨り優崇して他共に比肩する
に足らずと爲す、是れ其の二なり、希臘のビル
フスが、羅馬兵の軍規嚴肅なるを歎賞し、斯の
野蠻人は軍隊の組織に於て野蠻らしからずと言
ひしが如き、羅馬法皇アレキサンドル六世が、
命を西班牙、葡萄牙に傳へ、地球上に散在する
基督教外の諸邦を折半せしめんと爲し、東方に
國する者の甚だ與し難きを知らざりしが如き、
近時西人が世界の歴史を以てアリアン種の發達
を敘述する者とし、アリアン種が世界人類の一
半にも足らざるに思ひ及ばざるが如き、皆然り
とす。凡そ一國として優等の地を保するには武
力文化兩ながら他に挺秀せざるべからざるも、
武力の優等は必ずしも文化の優等と相副はざる
より、二者其の一にして他に挺秀せば以て優等
國たるに適すと思维し、武力に優等なる者は文
物下劣蠻風依然として存するも、尙自ら以て優
等なりと爲し、文化に優等なる者は武備不整、他
と争ひて全敗を速き城下の盟を締するも、尙
自ら以て優等なりと爲す、是れ其の三なり。儒

弱なる藤原氏の久しく雄強なる源平二氏を賤視
したりしが如き、支那の數次北狄に屈逆せられ
て猶ほ中華を以て自ら誇りしが如き、羅馬が雜
多の新民に壓倒せられて竟に至優たるの念を棄
てざりしが如き、普佛戰爭の終る、佛人某の論
じて佛は歐洲に在りて開化の中心たるもの、歐
洲各國は之を保護して戰亂より免れしむるの義
務ありしといひしが如き、皆然りとす。
虞夏之際九州を分つ、今く域外の狀勢に無知
なりしに非ず、西疆の外萬里を隔てて埃及ある
を識らざりしと雖も、舜といひ、禹といひ、
皆力の及ぶ所を窮して形勢を詳悉し、而して
武力文化兩ながら世界に冠絶するを認識し得
しなり。當時支那人の天下あるを知りて今日の
所謂國なるものを識らざりしは、以なきに非ず、
政權の行はれ、王化の及ぶ處、之を天下と稱
し、國として版圖を限るは唯諸侯の國、寧ろ各
種部落の疆域のみ。即ち國とは天下といふ大
團體を形成する一分子に過ぎずして、十百の國
を統合し、一令の下に綜轄するを天下といふ、
是に於て五服の制あり、五服とは甸侯、綏、
要、荒、即ち帝畿の中央より算して一面大約
六千里(當時五百)を甸服とし、之より大約六十里を
侯服とし、遞次大約六十里を隔てて綏服とし、
要服とし、荒服とし、他の一面も亦此と同じ

くして、兩面相去る凡そ六百里、之に次ぎて
東を夷といひ、西を戎といひ、南を蠻といひ、
北を狄といふの名稱ありて、皆當然土地の遠近
に應じて教化の度を甲乙したるに過ぎず、故に
此より以内は自國の版圖にして、此より以外は
外國なりといふ境界に就ては則ち知る所に
非ざりき。夏殷相踵ぎ滅びて周武位に即き、五
服の制を革めて九服を辨つ、王畿の外を侯服と
いひ、甸服といひ、男服といひ、采服といひ、
衛服といひ、蠻服といひ、夷服といひ、鎮服と
いひ、藩服といふ、次序精密を加ふるも、土地
の遠近に割合して教化の度を定めたるは則ち異
なるなし。西語野蠻をバルバルスとす、是れ希
臘人が一般に外人を指呼するの語にして、波斯
人もバルバルスといはれ、羅馬人もバルバルス
といはれにき、バルバルス初め必ずしも排斥の
意ありしに非ざるも、慣用の間に自然に野蠻
の義を含みたること、猶ほ後世基督教徒が異教
の民族をヘーデンとし、野蠻とするに至れるが
如し、上古支那人が遠人を夷狄と呼べるは希
臘人の波斯羅馬に於ける、基督教徒の異教の民
族に於けるよりも妥當なるもの有りしならん、
バルバルスと呼ばれ、ヘーデンと呼ばれるの民
は必ずしも野蠻獠なりしに非ずして、夷狄

は必ずしも野蠻獠なりしに非ずして、夷狄

戎蠻の稱ある遠地の民は實に野蠻なりしなればなり。

平王東に遷りて周室既に微に、五霸連に興り、大は小を併し、新は舊を壓し、廣狹大小、雜然交錯し、復當初の地制を以て律すべからざるに至り、其の初め盟津に會する八百と稱したる部落的諸侯も漸く其の數を減じ、附庸の屬を併して僅に百有餘國に過ぎず、而して華と夷とを分つて境界未だ現出せず、周襄王が狄女隗氏を娶りて后と爲し、戎狄と兵を合して鄭を伐ち、後狄后廢せられ、淑鬻、狄を將て入寇し、洛邑に至りて襄王を逐へるは、是れ邊疆未だ書定せざるなり。戰國に至りて七雄食ね併せ、領土漸く大を加へて境壤愈々窄狹し、而して戎狄は次第に隔離して北地に遷移し、時二役入して掠奪を事とす、是に於て戎狄に邊する三國互に禦邊の要を思ひ、秦は陝西より上郡に長城を築き、趙は代より陰山に並ぎ、燕は造陽より襄平に至り、赤岡じく長城を築く。斯くして戎狄に對する長城相連して一華夷の境域、茲に劃定し、始皇六國を滅して天下を統一するに及び、大に役夫を發して長城を修造し、増築し、所謂中國の北疆と稱すべきもの、此に至りて初めて定まりぬ。

支那は方里八十萬、口數四億、版圖の大を比ぶれば歐洲より大、口數の繁多を較ぶれば今歐の民を擧るも猶足らず、一個完成の陸土として視るに、山嶽に江河に臨るゝに足るあるも、一國として降替推移の迹を考へ、過去五千年の變遷を察せんと欲せば、必ずや其の内藩即ち所謂支那本部に限らざるべからず。蓋し支那人の發達は黄河に起りて、南は海に、東は海に、西は崑崙山重疊して東は海に、南は平ば山に連りて海に、西は海に、三方の邊疆は天成に依りて劃定せられ、容易に外人の侵寇を蒙らざりしも、北邊の地は獨り漠として境を失し、正方形に近き領域は三方閉塞して一方洞開したるの觀を呈し、宛然と雄偉はり一門樓壞れたる若く、門樓の壞れ、門算の撤する、其れ何を以て之を補はんかと、實に歷代の帝王をして叫食せしめし所なり。秦の天下を併して帝業を創むや、三方の邊疆は天然に據りて堅に保んじたるも、北邊一帯の領域は盛に役夫を派し、前代遺業を修繕して、

守るの方を畫る、以來代々三方の邊疆を天然し、一方を入爲にし、北邊の防備は其の最も力を竭し、所たり。支那の北邊も天然の境界なきに非ず、漠々たる戈壁の黄沙、莽々たる陰

山の山脈、何れか據りて以て疆域を劃定すべき天然の險塞ならざらん、若し此に據りて守らば、則ち北方の邊疆、儼然として鞏固せん、而して是れ實に秦皇漢武の經營せし所たり。然れども其の地たる千里蕭條の野、群山之を限り、所謂風塵日彌り、蓬蒿え草枯るの地、夫の水草を逐ひ射獵を事とする漠北の蠻族が得て以て事朕を喜ぶべきも、中土に繁殖したる支那民族を樂みて居るべき處に非ず、隨ひて運輸困難にして軍隊の常置に便ならず、是れ天然の邊疆を擧げて之を拋棄し、退きて人爲の長城を守りて境域とせざるを得ざりし所以なり。

國の衛策古今異なるは、一には列國の關係の變更せるに依り、一には堡壁等が衝破器に應じて變遷せるに依る。今とて列國互に相監視し、機を相て侵略せんとするは、免れざる數なりと雖も、少くも表面に於て宣戰媾和の義理を明にし、砲相見ゆる迄に必らず國を踏して奪ふ已むを得ざるを認知し了るの狀あり、徒らに貨物を求め、忽ち來りて忽ち退くが如きは、殆んど爲すべからざる事なりとす、古に在りても帝々の陣を張りて戰鬪せること頗る多きも、兵器を提げて盜賊を業とせる者亦少からずして、目して夷狄と呼ぶ所の如き、掠奪の爲め

不意に邊疆を侵襲するものと定まら居りたり。五つ現代に於ては、城壁は砲臺を以て攻められ、何様の堅壁なりとも、相當の角度を存せず、唯長く連互するのみにては、何處よりも彈損し得らるゝのみならず、内より敵を撃つに當りて、甚しく便利を失ふべしと雖も、古矢石を受け矢石を投するを主とする時代には、野を清めて壁を高くせば、則ち糧食の續く間、以て防禦するに足りしが故に、不慮の變を慮りては、都市に壁郭を續らし、邊疆に長城を築くは、一般に行はれしなり、バビロンの壁郭高さ十丈厚さ三丈餘、此より小なるは諸國に之れ有り、邊疆に長城を築造するは最も多く羅馬帝國に行はれ、セウエルス帝が英國のチーン河よりソルウェー河口まで横切らしめたる長城は今尚ほ遺址を存す。凡そ古代の城壁、今よりして視れば、笑にだも値せざるに似たれども、今日に於ても形狀こそ異なるれ作用に於ては都市の壁郭邊疆の長城更に昔日に異ならざる者あり、佛國巴里の如き益々意を郭壁に用ゆ、歐洲の島國が海岸に砲臺を備へ、大陸各邦が互に國境の要害に砲臺を設くるは、何ぞ往時の長城に異なりとせん、後人の今の砲臺を見るは、猶ほ今人の往時の長城を見るが如くなる日あり

のや必せり。人の萬里長城を言ふ者を觀るに、一として其の規畫の宏大なるを稱せざるは莫く、又其の無用の長物たるを嗤はざるは莫し、特に獨士の若き萬口一音、以て始皇が唐詩暴虐を表彰するの一語を爲す、然れども長城は固く嗤笑すべきの長物に非ざるなり。丁湖南曰く、始皇築長城、以限華夷、可謂功在萬世、中略所謂王公設險以固國者非耶、城一也、在萬世、則衛民而使之生、在始皇、則殃民而使之死、在萬世、則爲華夷之嚴限、在始皇、則爲華夷之厲階、在萬世、則所以保其治、在始皇、則所以促其亡也、李翼軒、王鳳洲の徒亦始皇の爲めに冤を雪げり。北邊の築城は戰國に至りて創まりしに非ず、詩に曰ふ、王命南仲、往城于方、田車彭々、旂旐央々、天子命我、城彼朔方、檉林南仲、覆瓿于襄、夫れ北方備禦の要は既に三代の際に於て、忽にすべからざりし所、而も大小の侯伯、五服の下に封建の態を作し、加ふるに華夷交錯して國家の境域明ならず、故に文教を宣べ、遠近をして信從せしむるを勉め、所謂守在四夷を以て自ら居り、敢て兵戈を事とせざりしのみ。

戰國に至りて華夷の別稍々判明し、始皇に至りて力を長城の改修に揚し、乃ち蒙恬を遣りて諸般の工事を督せしめ、時に胡人を逐却し、時に謀謀を驅殺し、形勝を相て改造増築する所頗る多く、自ら以て絶大の事業と爲せり。然れども臨洮より起りて遼東に至れる此の工事には前代の規模に據り、廢を興し頽を修め、兼ねて險を用ひ塞を測せしに過ぎず、決して未曾有の大工事を創設したるに非ざりき。然り而して長城は未だ以て鞏固固むべき唯一の屏障たるにあらざり、北方の邊疆を明確にし、出入去來を恣にしたる寇盜を拒ぐに足るのみ、長城の北、陰山の南、戎狄の大部落を成し、兵力雄強、帝國の大患たるもの頗る多し、長城、一帶五百里に亘るの間に凸起したる偉巖幾千百、過く守兵を充てて防備を嚴にせんか、適々以て軍費の多大に過ぎ國力の匱耗を來すのみ、至愚と雖も其の爲し得べからざるを知る。戎狄兵力を結合して來り定さは、何れの方面に向ふも侵入掠奪たゞ擇ぶ所に任す、始皇茲に考ふる所なきを得ず、長城既に成るも北方の邊疆は尚ほ以て命城千里、子孫百王に傳へて靖康を保し難きを慮る、乃ち長城を以て平時の用に供し、別に軍道を開通して急

變に應ずるの要を感ず、仰て山を離り谷を瀕め
て直道を通じ、雲陽より九原に抵る二百里、
數萬の歩騎列を正して肅々進行し得せしめん
とせり。而して其の直道を以て始皇、秦の攻
す所と爲し、逸樂遊蕩、民力を弱して憚らずと
し、長城を非とせざる者も前は且つ之れを以
て始皇を罪す、然れども不毛の原の如き地を遊
行して何の快樂がある、始皇や鶴に墮五十歩
の大路、所謂馳道なるものを作り、東、齊燕を
竊め、南、吳楚に通じたる者、若し逸樂遊蕩の爲
めに更に大道を開通するの意を懷けば、則ち應
に齊燕の地に通じて其の意を滿すべし、何ぞ故
らに北方不毛の地を擇び、崑山、嶺谷、直道を開か
んや、始皇憫といへども、斯の如き好事の舉に
出でじ。漢馬遷は北地に進み直道より歸り來
りし者、云ふ、直道北邊、直道道歸、行
觀家、婚所爲秦、築、長城亭障、嶺山、地
谷、通直道、固、燔力、突と、始皇が
百姓の力を盡し、遺徳を勞らし、は則ち之
を言へるも、直道を以て逸樂遊蕩の爲めに作る
所を爲し、因て長城を別事なりとは決して言
はざりしに似たり。彼の徒らに遊遊の二字に
拘りて遊樂の義なりと據ふるは洵に陋に至りな
り、要するに直道に軍隊を送還し、以て急變に

應ずるの道路たるに外ならざりしなり。始皇
自ら視ること人に過ぎ、非常の企圖を懷きて、
而して中道にして崩せしは、其の萬事阿房宮
と共に愚に見ゆる所以に非ざるなきか。

第三章 匈奴の地

支那の國たる、江山雄麗して自ら天下を成す、
北を除くの三面は共に天塞に據りて固と爲し、
以て外寇の侵入を阻遏せしや久し、時に疆界
を踏えて侵略を志にする者ありしも、概ね一
部の地に限りしのみ、全局に互りて擾亂を醸せ
るが如きは未だ嘗て之れ有らざりしなり。獨り
北邊一帶の地は天工の據りて以て固とすべき無
く、僅に人爲の長城に倚り、障蔽を修補して
疆域を守れるに過ぎず。而して邊外の民は城
郭の常處とすべき無く、田畝の耕種すべき無
く、水草を逐ひて遷徙し、射獵を以て生業とし、
急なれば人々兵器を執りて侵伐し、利あるを則
ち猛進し、利あらざるや則ち遁走す、蓋し其の
常情なり。其の習俗此の如く慷慨を極め、之
を限るの境、曠彼の如く鞏固を缺く、是を以て
北方邊外の地は實に數千年來支那紛亂の淵源
にして、歴代の帝業、廢亡多く之に因る、その

上下恬安、秦平に馴れて姑息の風漸く扇ぐや、
乃ち韓、魏を亂打して之が情眼を醒覺し來るは極
に此處よりせり。彼れ素より支那の民の呼んで
以て戎狄と稱せし所の者、其、俗皮革を衣と
し、畜肉を食ひ、壯健を貴び、老弱を賤み、父
死すれば其の後母を妻とし、兄弟死すれば其の
妻を娶り、文化の度遙に支那に及ばざりしも、
氣力の旺盛なるを以て毎に之を打震するの概あ
りしなり。

北方の邊外は頗る特異の奇象あり。東西は茫
漠たる大野を爲し、突兀たる隆起の限界を遮る
數く、西南を指しては砂磧の土斷續して游牧の
民其の間に居るを以て、波斯の沙漠と爲り、亞
比亞の沙漠と爲り、更に超えて亞弗利加の大沙
漠に達す。古來英豪の主、戰圖を擴張し、邦
土を併吞し、最も強兵を擁めし者、多くは沙
漠高燥の地より崛起し來る、成吉思汗の若き、
回教教主の若き即ち是なり。然り而して葱嶺の
天山と喀喇崑崙を結び、滿原の曠原を縱にして
東西に分つより、是より以東に居る者は湖に以
東の盛衰興亡あり、以西に居る者は、亦別に特
殊の盛衰興亡あり、各、別種の色を有し、彼
此を合一せざりしなり。葱嶺以西の地は自
ら以東と異にして、天然の疆域地を畫し土を

限るあり、裏海の若き、黒海、若き、地中海、紅海の若き、更に下りて波斯灣、亞刺比亞海の若き、悉く疆域を限る所以たらざんばあらず、隨て此の間に起りて版圖を擴張したる者は、民人を團集して國家を創成し、權力の擴がる處、久しく一合の下に之を統治したり。アツシリア此の地に興亡し、バビロニア此の地に降替し、波斯此に起りて此に仆れ、セルキデイ亦此に榮えて此に衰ふ、上下幾千年、此の際に起りたる者、皆能く國家の形を成さざるは莫し。然るに葱嶺以東に居る者は則ち否らず、曠遠の野、四境殆んど際涯なく、會々之れある、則ち丘山の漸々に高まり漸々に下れるのみ、縱し地勢斯の如きも、人の以て土着して繁殖すべき處の在るあれば、此を中心として四方を統轄し得べきこと、猶ほユーフラテス、チゲリス兩河に挾まれる沃地、若く、以て國土を形成し得べかりしなり。黒龍江は紆曲繁廻すること一千里、幹枝の滂、壤土を潤すこと九萬方里、是れ以て繁殖の好適地と爲すべきに似たれども、而も層山交錯し、冬時寒凍烈に過ぎ、全土を拓開して一國とすること頗る易からず。且つ其の沃地、直ちに支那に接するに非ず、其の力を養ひて支那と事あるの筋、必ずや先づ長城附近の地に

變動なきを得ず、而して附近の地や即ち活々乎として平沙垠なく所謂戈壁の沙漠の縱行して横行する所、國を形くらんこと至て難きもの、是れ幾千歳を經過して北方に國家と稱すべき者の輻く形成せざりし一大原因たり。戈壁の沙漠は純然たる沙漠にあらず、寧ろステツペとするを適當とすといふ、表面は概ね塘母狀若くは粗粒狀にして砂利を雜へたる沙土より成り、黄土は周邊部に限り、其の量も亦少し、南倫より南に出でナリン・オラに至るの地は北方の如く變化に富むも、鹹湖の平川廣濶なる鍋谷あり、南方平原の間丘陵深谷相交錯し、谷中時に泉水を見るのみならず、二處に水流あり、ボグド・オラの南に平原あり、ダイティン・タラといふ、原中數多の鹹湖あり、最も大なるをイレン・ダバス・ノルといふ、此より以南は即ち高臺地にして陔陰たるステツペを爲す、此の高臺地より垂直に窪地に下降するの狀、恰も亞刺比亞、亞弗利加の沙漠に所謂ツオイゲンなるものと相似、只彼は大氣の割剝により起り、此は水の營力に起因す。更に南して地形の變化漸く甚しく、丘阜は層一層高く、ダブシ・ボグダに至りて一千四百五十米と爲る、山間に數小湖あり、淡水のもの、

泉水のものとな雜す、是よりカルガンに通ずる山嶺に至るステツペは稍々扁平にして谷中に數湖あり、以上は近時旅行者の戈壁を以てステツペなりとする惡憑の一端として聞ける所にして、土地の平たよりせば則ち此の如く然るべしとせんも、他に又此等地方の天候に就て解説する詳なる者あり、曰く、氣候の劇變少からず、幸に風雨宜しきを得て寒暑服なれば、青野幾百千里、水利好く通じ、生々の活氣充滿して帳幕の色更に鮮かなるを覺は、乃ち外に出でて茶を嚙し、器を列ね、或は乳を搾り、或は馬を馳せ、無數の家畜群を成して行動するの狀、大海の波を揚げて澎湃たるにさも似たり、斯くする若干年、游牧の地愈々擴がりて人力頓に強大を致し、時に南方に出でて大に威を示すことあり、然るも一朝天荒の兆あり、酋長令を傳へて遷徙するや、數日ならずして生物素然として竭き、復一物を残さず、或は霖雨窪地に溜留して平野忽ち泥濘の漸減と變じ、或は氷雹石塊の若く、幾百千の家畜一時に斃死し、爲めに邊地に轉徙して活路を求め、偶々不幸にして反擊を蒙れば、則ち四分五裂して潰滅するに至ることあり、道光十二年の大飢の若き、以て見るべしと。是れ言の誇張に過ぐる所ある

べけれど、幾許か斯の若きの現象無きにしも非ずとせんか、此等の地に住居するに於ては、成るべく支那の北邊に密接せんことを企め、時に陰山に沿ひ、時に賀蘭山を踰え、以て驛内地を窺ふは、自然の勢なるべきが、水草を逐うて漂泊するの間、或は大集團を成すあり、或は小部落を形くるあり、相争ひ相戦ひ、而して雄強なる者は能く國家を成す者を壓するあるも、自ら國家的觀念を懐くこと厚きを得ず、其の各部落を結集して大に戰鬥を企つるも、亦歴史的關係よりするに非ず、一時の勢に驅られて離合集散するを多しとす。英豪の出でて許多の部落を併合し、支那の北陲に侵入し、將に長驅して雄雄を中原に決せんとし、而して天變荐りに疎り、踵ぐに饋敵を以てし、爲めに勢力を衰損して遠く居を移さざるべからざりしこと稀なりとせず。乃ち時ありて雄強を極むるも、以て永久に互りに定住し、國家を形成するに至らずして已み、東する者は黒龍江の溪地に住處を索め、西する者は天山の麓に寓所を搜ね、或は更に北行して林野の間に散居するなり。是れ葱嶺以東に國家の牢固ならざりし所以なり。

往時軒輊氏國土を奠めし以來、北方の民族絶え

ず來り寇し、堯の時華粥といひ、周に猷猷といひ、秦に何奴といひき、三者互に名を異にすと雖も種族は則ち相同じ、今の時に在て上代の語音を確知せんこと不可能に類せんも、誰かに董といひ、獫といひ、何といふ、元北人の己れ自らを稱する所の音を表せしもの、他に胡といひ、羌といへるあるも、又恐らくは音に於て多少の關係を有せしならん。現時の語音にては董(hun)と獫(hun)と何(hun)とは胡(hu)と共に皆同じく彼方に屬するが、昔時は地方によりて加行し、漢の國廷にては或は加行を普通とせしなるべし、而も雜胡に Hunni とあれば、少くも西行せし者だけは自ら波行に呼びたりと看せすべきか。歷史上より推し、言語より察すれば、何奴は突厥即ち土耳其族と爲すべしと雖も、各族を擧げて今の土耳其人と血屬一なりと謂ふ可きにあらず、土耳其族に土耳其人、韃靼人、キフチヤクス、カララッパクス、ウスベクス、カラキルギス、カザクス等ありとせば、何奴は姑く土耳其族の總名の下に立たしむるを適當なりとせん。獨りチヌートン、佛のケルツと稱しなから、細查すれば獨りにケルツの混じ、佛にチヌートンの混する、意外に多きを見ると等しく、何奴にも決して異

殊の民族の混じせざるに非ず、水草を逐うて各地に遷徙し、離合集散常なれば、異殊の民族の互に混淆雜糅するは固より免れざる所、唐虞三代の時、華夷の疆域判別せず、表伏蠻に乗じて恣に入寇し、時に諸侯と協合して事を擧げ、支那の民亦北に移りて錯居するあり、往來の際、終に相混じり、爾後歷代の間、南より北に投じて何奴と雜糅したるの跡、史籍に歴々たり。顏真卿の使命を奉じて河隴に赴ける、宋參胡筋の歌を作りて其の行を送る、中に言ふ、君不聞胡笳聲最悲、紫髯綠眼胡人吹と、夫れ紫髯にして綠眼なるは却てアリアンたるの特徵、以て混化の著しきを察すべきに非ざるか。然れば則ち何奴を目して今の土耳其人と同じと斷ずるは概括に過ぐれども、土耳其族の最も衆くして能く殊氣を化して之を併合したるあるは、幾ど争ふべからず。近年單騎大陸を跋涉せし人、蒙古に入りて左の報告ありき、以て地況の一斑を察するに足らんか、曰く、

烏蘭達巴嶺(九千二百八十八)より布多に至る通計三百五里、此間常に山道にして巨岩大石砂礫常々として騎行頗る困難、殊に蒙古魯嶺と異り、山上溪谷灌木なく一望荒れ果たる山野のみ、又此間一大家な

く細流の水濱野草生ずるの所、間々水草を透うて遊牧する蒙古人の帳幕あるのみ、且つ此邊蒙古人頗る不親切なるのみならず、地方官吏更に助勢を興へず、毎日土人帳幕の一隅を借るに又容易ならざる困難を爲せり、又此地草料乏なきを以て毎日水草あるの地を求むるに又非常の困難を爲せり、故に騎行意の如く迅速ならず俚に三百五里を騎るに九日間を費し十月一日科布多に到着せり。

馬は魯國に於て選定せし屈強の駿馬にして亞爾泰驛より四頭を以て發程せり、則ち乘馬二頭、馱馬二頭にして馱馬には豫備飼料の燕麥を駄したり、而て此四馬強健能く高蘭達巴嶺の峻峻を越え、巖石磊々水草を乏しき科布多街道の困難に堪へたりと雖も、科布多以東因障火第に加はり一馬は最も憐むべき有様にて纔に烏里雅蘇台に達するを得前差思ひも寄らざるを以て一頭の蒙古馬を購うて之に替へたり、又烏里雅蘇台、庫倫間は其距離更に遙遠にして漠北喀爾喀の二大部則ち三音諾顏親王部及び土謝圖汗部の腹心を貫き、地圖に記載なきの

道路を跋涉するの決心なりしを以て、豫備飼料の燕麥を増加へ、燕麥四百四十斤を用意して又之を二馬に駄したり、而て烏里雅蘇台、庫倫間安正の道は科布多、烏里雅蘇台間と異り大に水草に富むと雖も、帳幕あるの地に達するや、其近傍は既に已に喰ひ盡して蕪草なく、又寒威凜冽水源枯れて汲水堅氷を結び、飲水屢々缺乏せり、勢ひ此の如きを以て遠大の距離を騎ること能はず、成るべく早く帳幕の地に達して馬を休め、夜間部落の群馬と共に數里外に放牧して枯草を食はしめ、毎朝曳來て燕麥を與ふるを習慣とせしが、嗚呼憐むべし、強健なりし一馬又此艱難に堪ふること能はず十月十八日午後六時行進中途に倒れ死したり、此日寒風骨を削り道尙遠し

と雖も死馬の駄量を他馬に分載せしを以て進に行進すること能はず、俚に星の光に依りて屢々澆水の水上を渡り、十時三十分哈不他加烏拉と名る一部落に到着して零點以下の幕内に一睡し、翌朝更に一馬を購求して直に發程せり、(中略)愈々明十八日庫倫を發し寶買城を経て西比利亞に入り、蒙爾克斯科に赴くべき筈なり、今夏月夜行

の危険、蒙古冬騎の困難を回想せば、西比利亞の積雪堅氷を破る是情兒戲のみ。

第四章 冒頓の崛起

匈奴の支那を濟めしは、太古より之れあり、周の初世に迫り、屢々南下して邊疆を擾し、遂に古公亶父を攻めて之を岐下に移しぬ、古公乃ち有民立君、將以利之、今戎狄所爲攻戰以吾地與民、民之在我、與其在彼何異、民欲以我故、殺我父子而君之、予不爲忍と言ひ、其の去るは一に民を愛するの慈心に出でしといふも、元戎狄の張大し、強弱の勢抗す可らざりしが故のみ。其の後幽王の申侯と御あるや、申侯犬戎と謀りて幽王を攻め、之を驪山の下に殺し、遂に周の焦穫を取り、涇渭の間に居て侵暴すること連歲絶えず、其の子平王に及び、則ち戎寇を辟けて東の方維陽に遷り、劣かに秦、襄公、來りて周を救ふに遭ひ、社稷由て以て安きを得たり。序で襄公遠く戎を追ひ岐に至り初めて列して諸侯と爲りぬ、既にして由戎寇を越えて齊を伐ち、齊、魯公與に齊の鄰に襲ひ、未だ幾ならず、山戎又燕を攻めて燕支ふる能はず、急を齊に告げしに、

齊桓公兵を出し之を伐てり。越えて二十餘年、戎狄復來りて洛邑に至り、周の襄王を伐つ事あり、襄王乃ち鄭の汜邑に奔り、外に居ること四年、其の間戎狄恣に周の地に侵盜し、國人其の暴に堪へず、詩人乃ち戎狄是應、薄伐獫狁、至於太原、出與彭彭、城彼朔方、の語あるに至る、襄王因て使をして急を管に告げしむ、時に管文公初めて立ち、霸を天下に稱せんとし、正に功名に之れ急なり、是に於て奮然起ちて師を興し、戎狄を伐ちぬ。是よりして後、遼境或は靜に或は擾れ、互に盛衰あり、消長あり、記錄之を載するもの極めて少く、匈奴の常に畏るべかりしや否やは知る可らずと雖も、其の燕といひ、趙といひ、秦といひ、凡そ匈奴と境を接する者、悉く長城を築きて堡壘と爲し、規復の宏大にして築造の堅固なる、之を當時の民力に比して頗る不相應の財と勞とを費し、を觀ば、支那民族の如何に其が侵略に苦みしやを思ふに足らん、況んや始皇一統の餘威を以てして全力を此に傾注し、營々役々、北邊の防禦に之れ日も足らざりしもの、以て勢の益々侮る可らざりしを證すべきか。

然れども當時北方の強族統合して最大優勢を

形成せるに非ず、遼東の北に東胡あり、西域の北に月氏あり、匈奴乃ち其の間に介在し、勢孤にして振はず、蒙恬の北邊を經營するに會し、力遂に抗せず、遠く連れて北に移れり。此の時に當り匈奴の王を頭曼單于と號す、單は音善又は蟬とありてジェン若くはチエンとすべく、于は今音ゴナれども、暗(ゴナゴ)、奥(ゴナゴ)、扼(ゴナゴ)に例してゴナゴに似たるべく、單于はジェング若しくはチエングと讀むべきなり、廣大といふ意義を有し、君主の稱たり。其の後蒙恬死して防備漸く寛く、始皇亦幾くならずして逝き、諸侯秦に降く者多く、禹域漸く將に動搖の機を見んとす、匈奴乃ち間を得て復稱々大に、南方河南を陵りて支那に入りぬ。時に單于に一子あり、冒頓と名づく、冒頓や、之を普通の音よりせば hantun 或は mantun と讀むべきも、冒音没又は墨、頓音突又は時などありて、若くは没突、若くは沒時、若くは墨突、若くは墨時と讀むべきに似たれども、四種の多きに涉りては孰れを是とするに由なく、寧ろ冒頓の讀み易きには若し。土耳其斯則に口碑の傳ふるあり、ブクテケン若くはブクカン若くはボカカンと稱する者、嘗てベラサグンの都を經始せりと、ベラサグンは土民が稱して世界の

中心とし、大地の驛と名づけし所、後にカヲコロムの建城せし地、乃ち此の類の名は或は英雄の尊稱たりしやも知るべからず。

是時に當り頭曼愛する所の女あり、少子を生み、鍾愛に至らざる無し、冒頓を廢して少子を立てんとし、乃ち冒頓をして月氏に質ならしめ、既にして忽に月氏を撃つ、月氏怒り冒頓を殺さんとす、冒頓先づ之を報知し、密に其の善馬を盗み、騎して亡げ歸れり、頭曼以て太だ壯なりとし、萬騎を興へて之に騎たらしむ。冒頓乃ち鳴鏑を爲り、其の騎射を習熟し、令して曰く、鳴鏑を射る所にして悉く射らざる者は之を斬らんと、行て鳥獸を獵し、鳴鏑の射る所を射らざる者あれば鞭も之を斬る。已にして冒頓鳴鏑を以て自ら其の善馬を射しに、左右鏑或は敢て射らざる者あり、冒頓立に射らざりし者を斬る。居ること之を略くし、復鳴鏑を以て自ら其の愛妾を射しに、左右皆恐懼して射らず、冒頓又復之を斬る。後數日、冒頓出で獵し、又鳴鏑を以て單于の善馬を射しに、左右皆一皆之を射る。是に於て冒頓其の左右の大に用ひべきを知り、一日其の父單于頭曼に従ひ獵し、機を窺ひ鳴鏑を以て頭曼を射る、左右亦皆鳴鏑に隨ひて單于頭曼を射殺し、遂に其の後母と弟と

及び大臣の聽從せざる者とを殺し自立して單
子と爲りぬ、事實せし傳記に在り。見れば後人永
く傳へて以て信と爲すと雖も、眞に此の事あり
しや否やは疑はし、冒頓の慳吝なる或は此の
種の行を爲すに足るべかりしも、又頗る支那
人の思想より割出せる定文句たる形あり、支
那人には富國強兵の道之を措きて亦他ある可
らずと爲すの結果、苟も兵を修め其の國を
強くし、政を正して其の民を富まさんとす
者ある、輒ち附會するに此等の奇事を以てし、
而して後世此の種の事を讀む者、一讀三歎、或
は雖胡人其兵謀在邊疆之上と云ひ、或は亦
冒頓治兵之略と云ひ、稱揚措かず、而も同種
の讒柄は、支那上下數千年の歴史に於て、常に
繰り返されつゝあるなり。

司馬穰苴孫武は兵家として支那人の風に推重
する所の者、而して二人者の兵を治むる、事殆
んど冒頓と一轍に出づるが如く、穰苴の初めて
齊景公に仕へ、兵を將ゐて燕晉の師を打ぐや、
穰苴景公に謂て曰く、臣もと微賤、今之を閭伍
の中より擡でて大夫の上に加へらる、然るも士
卒未だ附かず、百姓信ぜず、人微に權輕し、願
は臣が軍を監するに君の寵臣國の尊ぶ所を
以てし、之と行を俱にするを得せしめよと。景

公之を許し、莊賈をして往かしむ、穰苴既に辭
し莊賈と約すらく、且日中必らず軍門に會せ
よと、穰苴先づ馳せて軍に至り、表を立て溝を
下して賈を待つ。賈素より君寵を恃みて、以爲
らく將已に軍に之き己れ則ち監たり、亦必らず
しも急にするを要せじと、親戚宏旨の送る者と
留飲し、日已に天に申すれども至らず、穰苴
乃ち表を仕し溝を決し、入りて軍を巡り、兵を
勅し約束を申明す、約束定まりて夕時に莊賈至
る、穰苴問ふ、何すれぞ後る、ことを爲すと、
賈謝して曰らく、不佞が大夫親戚之を送るあり、
故に留り終に期を失す、將軍幸に之を諒と
せよ、穰苴曰く、將命を受くるの日に其の
家を忘れ、軍に臨み約束すれば其の親を忘れ、
砲鼓を援るに急なれば其の身を忘る、今敵國深
く陵して邦内騒動し、士卒境に暴露し、君寢ぬれ
ども席を安んぜず、食へども味を甘しとせず、
百姓の命や、一に懸りて監軍に在り、胡爲ぞ相
送ると謂ふや、因て急に軍正を召し問て曰く、
軍法に期して後れ至る者を何とか云ふ、對て曰
く斬に當す、莊賈懼れ人をして馳せて景公に報
じ救を請はしむ、使者往きて未だ反るに及ばざ
るに、既に莊賈を斬て軍中に抛へ、三軍の士皆
振慄して色を失ふ。久くして景公の使者節を持

して來り、賈を赦すの命を傳へんとし、馳せて
軍中に入る、穰苴曰く、將は軍にありて君命
も受けざる所あり、軍正に問て曰く、軍中の法
馳すべからず、而して今使者馳す、何と云ふや、
曰く斬に當す、使者大に懼る、穰苴曰く、君
の使は殺すべからずと、乃ち其の轡車の馬を斬
り以て三軍に抛へ、使者をして還り報せしめ、
然る後行く。士卒の次舍、井竈飲食、疵を問ひ
醫藥する、身自ら之を拊循し、將軍の資糧
を取て之を士卒に給し、身士卒と糧食を平分
して最も其の羸弱なる者に比し、三日にして
後兵を勅す、病む者皆行かんことを求め、争ひ
奮て之が爲めに戰に赴く、晉師之を聞て爲め
に懼め去り、燕帥亦河を渡りて退きぬ。孫武の
吳王闔廬に見るや、闔廬問て曰く、子が十三篇
吾れ盡く之を觀たり、庶くは吾が爲めに兵を
勅するを得んか、曰く可、闔廬曰く、試に婦人
を以てするを得べきや、曰く可、是に於て宮中
の美女を出し、百八十人を得たり、孫武分て
二隊とし、王の寵姫二人を以て各々隊長と爲
し、皆戟を持せしむ、令して曰く、汝、爾の
胸と左右の手背とを知るか、婦人曰く之を知れ
り、曰く前と云へば胸を視よ、左と云へば左
手を視よ、右と云へば右手を視よ、後と云へば

背を視よ、曰く諾、約束既に布く、乃ち鉞を設け之を三令五申し、鼓して右と言ふ、婦人大に笑ふ、武曰く、約束明ならず申命然ざるは將の罪なり、復三令五申し、鼓して左と言ふ、婦人復大に笑ふ、武曰く、約束明ならず申命然ざるは將の罪なり、既に明にして法の如くならざるもの、罪吏に在りと、乃ち左右の隊長を斬らんとす。吳王之を臺上より觀、忽に使用して命を下さしめて曰らく、寡人已に將軍の能く兵を用ふるを知れり、寡人此の二軍に非ずんば、以て食、味を甘しとする無し、願くは斬ること勿れと、武曰く、將は軍に在りて君命を受けざる所あり、臣既に命を受け

て將と爲る、軍中の事唯臣が意に欲する所なりと、遂に將軍二人を斬り以て徇へ、更に其次を用ふる隊長とし、是に於て復之を鼓す、婦人左右前後驚起して皆將軍の罪に中り、敢て一人の聲を出す者無し、武乃ち使をして王に報せしめて曰く、兵既に整齊す、唯試みて下て之を觀るべし、吳曰く、將軍體休して命に赴けよ、寡人下り觀ることを願はず、武曰く、下能らば言を好みて、實を用ふる能はずと、是に於て鬪

盧孫武の能く兵を用ふるを知り、卒に以て將と爲し、西臨楚を破て野に入り、北齊晉を威して名を諸侯に顯せり。冒頓の爲し、所素より二人者の爲すと同じからずと雖も、其の意に至りては、則ち一なるもの、他の商鞅の秦に於ける亦然らずや。

商鞅は衛人なり、秦孝公初て位に即き、四方の賢者を招き、穰公の遺業を修めんとするや、衛田景監に因て孝公に見え、首に奇道を説き、中ら奇道を説き、終に霸道を説き、論じて強兵の術に及びしに、孝公以て奇とし、鞅を左庶長とし、卒に變法の令を定め、民をして什伍を爲して相牧司連坐せしめ、鞅を告げざる者は

鞅を殺す者は殺に降ると罰を同じくし、氏二軍以上ありて分異せざる者は其の賦を削し、軍功ある者は各、重を以て上賞を受け、私闘を爲す者は各、重を以て罰せられ、大小力を以て其の身を復し、東利を事とし及び意りて賞しき者は擧げて以て牧宰とし、宗室軍功あるに非ずんば、高じて屬籍を爲すを得ず、（此等諸事）鞅を明にするに各、泝火を以てし、田宅臣妾衣服を名づくるに家次を以てし、功ある者は

榮し、功なき者は富ありと雖も芬華する所なく、令既に具りて未だ布かず、民の己れを信ぜざらんを恐れ、乃ち三丈の木を國都の南門に立て、民に募りて曰らく、能く從して北門に置く者あらば十金を與へんと、民之を信しき敢て徒す莫し、復曰く、能く從す者には五十金を與へんと、一人あり、試に之を從す、輒ち五十金を與へて謀かざるを明かにし、卒に命を下す、

令民に行はるゝもの明年、秦民間都に踰りし初め令の不便を言ふ者千を以て數へき、是に於て太子法を犯す、鞅曰く、法の行はれざるは上より之を犯せばなり、然るも太子は君嗣、刑を施すべからずと、其の師傅二人を刑戮す、明日

秦人皆令に遵く、之を行ふこと十年、秦民大に悦び、道遺ちたるを拾はず、家給人足り、民公戰に勇に私闘に怯く、鄉邑大に治まり、初め令の不便を言ひし者、斬りて命を言ふ、鞅皆以て化を顯るの民とし、盡く之を邊域に遷しぬ、其の後民敢て命を議する無く、是に於て鞅を以て大良造とし前君に封ず。冒頓は乃ち

商鞅に類するあるか。之を要するに支那に於ける、國を富まし兵を強くするの術、一應に此の種にありとせらる、特に秦漢の國に於て然りき。故に戰國を去る道からず、匈奴を張大して勢顯る

狙撃なるや、前より養ひ來れる支那的頭腦は、

冒頓の崛起を聞ききて、滿蒙百出、本實に此の事あるべしとし、乃ち附會して此の説を爲すに至りしが如し、然れども傳説此の若くなるもの、獨り支那のみに非ず、古より兵を強くせんとする者は、多く此の筆法に従ふを常とし、彼のスパルタの如き亦此の種の説を傳ふるなり、願ふに冒頓が其の父を殺し、及び後母と弟とを殺し、は、事頓の人情の外に逸出し、未だ避に信を實く可らざるも、當時野蠻の習俗と冒頓が勇悍とを以てして、加ふるに其の父時に非道を爲さず、必ずしも其の事無しと謂ふ可らざるなり、儻し果して之れ無しとする、冒頓が非常の斷を以て統一を圖りし丈は、之を事實とするを得んか、是れ亦姑く疑を存すべき者、但だ冒頓の崛起に觀て其の術に及ぶ、乃ち兵を治むるの必らずや尋常に逸出せしを推すに足るべし。

第五章

冒頓の經營

冒頓既に匈奴を統一す、時に東に東胡あり、西に月氏あり、南は則ち支那と界す。種族よりせば、匈奴も東胡月氏に異なるに非ず、幾多變遷の間、分離疎隔するに至れるのみ、筑れも人寮くして土廣く、所謂膏地なるものを介して

相距る各々數百里、侵犯叢奪の患なきに似たりと雖も、元是れ水草を遼うて遊するの民、且つ其の兵け馬を主とし、進退馳突、頗る快捷を極む、故に邊徼の際、動もすれば自他觸着し、互に侵犯攘奪せんとするの勢あり。匈奴め冒頓の未だ匈奴を統轄せざるや、東、東胡に迫られ、西、月氏に窺われ、而して南方には始皇の遺意北邊を經營するあり、獨り三強の間に介まりて手足を伸ぶる處なかりしが、後久しからずして蒙氏天下を喪ひ、劉項爭奪して中國兵革に罷れ、幸に南方の以て憂患とすべき無く、却て柔すべきの憂を啓く、若し此の機に投じ、南に進みて大に地を拓かば、頗る勢を逞くするを得しならん。たゞ當時冒頓の月氏、亦勢の傷るべからざる者あり、是に於てか兵を擧げて暫く動かざりき。長城以北は多く不毛の地、之を席卷するは、豐富多産なる南方を略するの優れるに若かず、而も南を圍るには先づ後顧の憂を絶たざるを得ず、東、東胡を滅し、西、月氏を併せ、然る後全力を集注して南に臨む、是れ順序の自然、故を以て冒頓速に南に下らず、先づ東西の一掃に努めたり、冒頓の土地を經營する、恆

に一定の方策を執りて進められて終始易らざるあり、初め使節を示して議を徹らし、然る後不意に起り一掃へざるを冀ふ、是れ方策の本序なり、其の東胡を滅し、月氏を併し、南、漢高を白登山に窺めたる、皆此の方策に依れるのみ。史に傳ふらく、冒頓の立つや、東胡の勢甚だ強盛、冒頓の父を殺して自立すと聞き、乃ち使を遣はして千里の馬を得んと欲す、冒頓群臣に問ふ、群臣皆曰く千里の馬は匈奴の寶馬なり、與ふる勿れ、冒頓曰く奈何ぞ人と國を隣して一馬を愛せんやと、遂に千里の馬を與ふ。居ること頃くして東胡以爲らく、冒頓之を畏ると、乃ち使をして單于の一女を求めしむ、冒頓復左右に問ふ、左右皆怒りて曰く、東胡無道にして乃ち妾を求む、請ふ之を伐たん、冒頓曰く、奈何ぞ人と國を隣して一女子を愛せんやと、遂に愛する所の妾を取り、東胡に與ふ、東胡王愈々驕りて西侵す、匈奴と東胡との間、中に膏地あり、居るなきこと千餘里、各々其の邊に居て隔版を爲す、東胡使を遣はして冒頓に謂はしめて曰く、匈奴我と界する所、斷絶外の膏地、匈奴能く至るにあらず、吾之を有たんことを欲すと、冒頓群臣に問ふ、群臣或は曰く、此れ棄地、之を予ふるも亦可なり、予ふるなきも亦可

なり、是に於て冒頓大に怒りて曰く、地は國の本なり、奈何ぞ之を予へんと、諸々之を予へんと言ふ者は、悉く之を斬る、冒頓馬上に上りて國中に令す、後るゝ者あらば斬らんと、遂に東、東胡を襲ひ撃つ、東胡初め冒頓を懼じて備を爲さず、冒頓擊ちて大に之を破り、東胡下を滅し、其の民人及び畜産を虜にす、既に歸る、西、擊ちて月氏を走らせ、南、樓煩、白羊、河南王を併せて燕代を侵し、悉く復蒙恬の匈奴より奪ふ所の地を收め、漢と故の河南の塞を界とし、朝那腐危に至れり。

先づ怯弱を示して敵を傲らし、然る後備なきに乘じ之を伐つに、古より支那人の行ふに慣れし所、越王勾踐が裏敗の餘を以て能く強兵を滅したるは、毎に其の轍者の事例として引かる。越王の扶馭に敗るゝや、餘兵を以て會稽に棲保す、吳王追て之を圍む。越王范蠡に請て曰く、子の言を聴かざるを以て此に至る、之を爲すこと奈何、蠡對へて曰く、滿を持する者は天に與し、何を定むる者は人に與し、事を節する者は地を以てす、辭を卑くし禮を厚くして以て之に造り、許されざれば身往て之に事へよ、勾踐曰く諾、乃ち大夫種をして成きを吳に行はしむ、膝行頓首して曰く、君王の臣勾踐、

陪臣種をして敢て下執事に告げしむ、勾踐請ふ臣と爲り、妻は妾と爲らんと、吳王將に之を許さんとす、子胥吳王に謂て曰く、天、越を以て吳に賜ふ、許す勿れ、種還りて以て勾踐に報ず、勾踐妾子を殺し、寶器を燒き、觸れず、以て死せんと欲す、種、勾踐を止めて曰く、夫の吳の大宰嚭、合れり、誘ふに利を以てすべし、請ふ間行して之を言はん、是に於て勾踐乃ち美女寶器を以て種をして間かに吳の大宰嚭に獻ぜしむ、嚭受けて乃ち大夫種を吳王に見えしむ、種頓首して言て曰く、願くは大正勾踐の罪を許さば盡く其の寶器を納れん、不幸にして殺されずんば勾踐將に其の妻子を殺し、其の寶器を燒き、五千六百皆死戦せんとすと、嚭因て吳王に説て曰く、越、服して以て臣と爲る、若し將之を殺さば此れ國の利なりと、吳王將に之を許さんとす、子胥進て諫めて曰く、今越を滅さずんば後必らず之を悔いん、勾踐は賢君、種蠡は良臣、若し國に反らば將に亂を爲さんとすと、吳王聽かず、卒に越を殺し、兵を罷めて歸る。勾踐の會稽に困めらるゝや、喟然として嘆じて曰く、吾れ此に終らんか、種曰く、湯、夏桀に擊がれ、文王、受軍に囚はる、皆の千辛萬に藉り、齊の小白菑に藉るも其れ卒に朝たり、此に由り

て之を觀れば何ぞ遽に福を爲さざらんやと。吳既に越を殺す、勾踐國に還り、乃ち身を苦め思を焦がし、躬自ら勞作し、夫人自ら織る、食、肉を加へず、衣、采を重ねず、節を擇りて賢人に下り、厚く賓客を遇、貧を賑はし死を弔して百姓と其の勞を同じうす。范蠡をして國政を治めしめんと欲す、蠡對へて曰く、兵甲の事は種や蠡に若かず、國家を興無し百姓を親附するに蠡や種に如かずと、是に於て國政を擧げて大夫種に屬し、范蠡と大夫種を辭として成りて七年、其の士民を招循す、士民用おられて以て吳に報いんと欲す、大夫逢同諫めて曰く、國新に流亡し、今乃ち復殷んに給す、繕飾利を備へば吳必らず懼れん、懼るれば則ち難からず至らん、且つ鸞鳥の撃つや、必らず其の形を匿す、今夫れ吳の兵齊晉に加へ、怨、楚越に深し、名は天下に高くして實は周室に害あり、微少くして功多し、必らず淫にして自ら誇らん、越の爲めに計るに、齊に結び楚に親み、晉に拊て以て吳に厚くするに若くは莫し、吳の志廣ければ必らず戰を轉せん、我れ其の權を連ねて、三國之を伐たば、越其の弊を受けて克つべきなりと、勾踐曰く、善し。居ること二年、吳

王齊を伐ち、之を交陵に敗り、齊の高國を虜にして歸る、越の大夫種曰く、臣、吳王の政を觀るに驕れり、請ふ之を試み要を借りて以て其の事を下せんと、借らんことを請ふ、吳王與へんと欲す、子胥諫む、與ふる勿れと、王遂に之を與ふ、越乃ち私かに喜ぶ、後吳王子胥を殺し、部に政を任す、居ること三年、勾踐范蠡を召して曰く、吳既に子胥を殺す、導諫する者衆し、可なるか、對へて曰く、未だ可ならず、明年に至て吳王諸侯に黃池に會す、吳國の精兵王に従ふ、惟ゞ獨り老弱のみ太子と留守す、勾踐復范蠡に問ふ、蠡曰く可なり、兵を發して吳を伐つ、吳師敗る、遂に吳の太子を殺す、吳、急を王に告ぐ、王方に諸侯に黃池に會す、天下の之を聞くを恐れ、乃ち之を祕す、吳王既に黃池に盟ふ、乃ち人をして禮を厚くして以て成ぎを越に請はしむ、越自ら度るに亦未だ吳を滅す能はず、乃ち吳と平定、其の後四年、越復吳を伐つ、吳の十民罷弊して輕銳悉く齊晉に死したり、而して盛大に吳を破り、因て之を圍むこと三年、吳王遂に姑蘇の山に自殺す、越王乃ち吳王を葬りて大宰嚭を誅し、吳の封土を併す、夫れ取らんと欲して先づ與へ、奪はんと欲して先づ讓るは、支那の權謀者流の慣手段として聞

ゆる所、戰國の際には特に常規定式の觀ありしなるべく、冒頓の敵を傲らして其の備なきに乘せしか若き、毫も以て奇とするに足らざるが如し、料るに是れ亦當時の風説子の捏造に出でしに非ざるならんや。然れども仔細に觀察せば、此の間の思想自ら他の史乘に散見する所と大に趣を異にするあり、冒頓の爲す所、唯敵を傲らし、不意に起りて之を撃つといふのみに非ず、彼れ東胡の王、馬を要むれば則ち之を與へ、嬖妾を要むれば則ち之を與へ、獨り土地を要むるに至りて乃ち赫として大に怒る、是を以て越王の爲す所と比するに、次第順序、井然として分定し、自ら他と同じからざる者あり、若し越王の例に準ずれば、必らず先づ彼我の力を料り、我の彼に若かざるを知れば、戦る彼の要めを容れて地を割くに吝ならざるべし、而して冒頓は乃ち一言土地の割讓に及ぶを聞かや、斷々として之を排斥し去り、決然として起ち、猛然として攻む、是れ其れ一定の旨意、一定の方策の豫め胸裡に存するに非ざれば、斯の若き果斷なるを得ざるべし、寧ろ凡常と違ひて頗る趣味あるもの、遂に以て一時の流語、史家の弄筆に歸する能はざるなり。但だ匈奴、東胡と相距る數百里、月氏と距る亦遼

遠、如何に其の兵は馬を主とし、進退馳突快捷を極むるとも、暗喑の間に掩撃し得べきに非ざ、其の際當に措畫の大に觀るべきもの有りしならん、先づ怯弱を示して敵を傲らし、不意に起りて之を襲撃すといふは、特に其の表式に過ぎざるのみ、豪邁なる冒頓の如く、多計なる冒頓の如くにして、英斷奇策の以て後世に傳ふべき固より史乘の記する所に限らざるべし、唯匈奴内部の眞正の歴史なるものは之を詳細にする能はず、故を以て是を闕くのみ、必ずや更に大英斷、大奇策の史家の手に漏れしものあるは、冒頓の既に兩胡を併せ、新勝の勢を鼓し南に下りて漢の邊疆を侵略するに當り、變幻飄忽、善く兵を操縱して敵を窮窘したるを以て推量するに足るべきなり。

第六章 冒頓と漢高

冒頓北方を統一して將に南に得るあらんとす、時に漢高祖方に項羽を滅して天下を併せ、勢威隆々として旭日の昇るが如く、遠近懼伏して海内の豪傑復起たんとする無く、劉氏の朝業漸く其の緒に就かんとし、兩塞南北並び起りて、二者が衝突は早晚必ずや免る可らざる勢

と爲れり。由來北邊は支那に在りて禍災の伏在
地、始皇一統の威を以てして尙且つ北邊の經營
に勵心し、全力を傾注して之が備を爲しぬ、高
祖の天下を平定し、自ら立ちて帝と爲る、乃ち
必然の事業として爲さざる可らざるは北邊の防
禦なり。

然れども北邊は屢々匈奴の犯す所と爲る、其
の地守るに難くして攻むるに易く、攻守の難易
は勢力の消長に繫るがからず、北邊の難を被る
ことは年一年より太しく、匈奴と接壤せる地
の治め難かりしは、海内紛亂の後を治むるより
も、更に一層の艱險を加へき。高祖既に勝ちて
各功臣を賞封する、愛する所あり、憎む所あ
り、其の北邊に封せられし者、多くは平生怵ば
れざりしに非ずんば、則ち幾許か貶黜の意味を
有し、任に此に往く者亦怏々として樂まず、北
邊唯一の事業たる防禦の如きは、能く力を勞し
て之を爲さんとばせず、事若し困難に及べば、
輒ち日一漢に背きて匈奴に降らんとし、北
邊の防禦之が爲に益々弱く、而して冒頓巧に策
を以て漢將を已れに接かんとす、高祖の終に北
邊に苦しむべきは、蓋し避く可らざる所なり。
加ふるに冒頓や、翅に兵の操縦に巧みなのみ
ならず、漢人を用ゐるに於ても、亦一種の技倆

を有し、地勢の利と鐵騎の精とに據り、屢々南
下漢を挑みて止まず、僅し漢にして自ら進みて
之と力を角せんとせば、勝敗の數は固より兩
軍相對するを俟たずして知られぬ。高祖や、も
と布衣を以て山澤の間に崛起し、屢々辛酸を嘗
めて幾多の境遇を経歴し、容易に危きを犯す
の愚を爲す者に非ずと雖も、彼が匈奴の遠征
は、洵に彼が一生中の最大失計なりき。

是より先き高祖の禍亂を勘定するや、其の五年
を以て漢王信を潁川に王としぬ、越えて一年、
高祖以爲らく、韓信材武、王たる所の地、北華洛
に近く、南宛葉に迫り、東淮陽あり、皆天下勁
兵の處とす、乃ち詔して韓王信を徙して太原に
王とし、以て北の方胡を禦ぐに備へ晉陽に都せ
しむ。信乃ち漢王に上書して曰く、國邊を帶
び匈奴屢々入るも、晉陽塞を去ること遠く、以
て胡を拒ぐに足らず、請ふ馬邑に治せんと、高
祖之を許し、信是に於てか徙りて馬邑に治す、
居ること頃々、適々冒頓大舉來りて先づ信を圍
むに會ふ、信又ふる能はず、屢々胡に使して和
解を求めしが、漢信の胡と往來頻多なるを見、
密に其の二心あるを疑ひ、人をして信を責讓せ
しめしに、信讓せられんことを恐れ、因て匈奴
と約して共に漢を攻め、反て馬邑を以て胡に降

り、南匈奴を驅えて太原を攻め、晉陽城下に
至れり。高祖自ら兵を率ゐる往て之を撃つ、時に
冬大に寒くして雪ふること甚しく、卒の指を
墮す者多し、是に於て冒頓陽り敗走し漢兵を誘
ふ、漢兵遂て冒頓を撃つ、冒頓其の精兵を匿
して故らに羸弱を見はす、漢方ち其の歩兵三十
二萬を以て之を追ふ、冒頓遂に退きて代の上
谷に保す、高祖晉陽に居り、人をして冒頓を視
せしむ、還り報じて曰ふ、撃つべきなりと、高祖
乃ち先づ平城に至りしも、歩兵未だ盡く到ら
ず、冒頓之を禦、急に精兵四十餘萬騎を繼ち、高
祖を白帝に圍むこと七日、漢兵中外相救餉す
るを得ず、匈奴の騎、西方は盡く白馬、東方
は盡く青馬、北方は盡く烏驪馬、南方は
盡く驊馬、眞に宏壯の至、雄大の極、一統
の威を以て孺子何かあらんとせし漢高も、今や
北方一蠻酋の爲めに掌中に飄弄せられぬ。

白登の重圍は高祖が爲めには洵に死活の境なり
き、高祖が如何にして之を脱するを得しやは、
今に至る迄世人の齊しく疑問とする所、史漢
匈奴傳に言ふ、「高帝適ち使をして密に厚く閼
氏に遣らしむ、閼氏冒頓に謂て曰らく、兩王相
困せざれば、今漢地を得るも、單于終に能く之に
居るに非ず、且つ漢主神あり、單于之を察せよ

と、而して冒頓傳信の將王黃越利と朝し、兵
久し言く來らず、其の漢とあるを疑ひ、赤闐
氏のに取り、乃ち圍一角を圍く、是に於て高
帝士をして皆滿を持し矢を傳けて外郷せしめ、
解角より直出し、大軍と合することを得、而
して冒頓遂に兵を引き去り、漢赤兵を引て罷む
と。韓王信傳に云ふ、土乃ち人をして厚く關氏
に遣らしむ、關氏乃ち冒頓に説て曰ふ、今漢の
地を得るも猶居る能はず、且つ兩王相厄せず、
居ること七日にして渴腸稍々引き去る、時に天
大に霧ふり、漢人をして往來せしめしも胡覺ら
ず、誑軍中尉陳平上に言して曰ふ、胡は全兵な
り、請ふ強弩をして、兩矢を傳けて外に擣はし
めんと、徐行して圍を出で平城に入れば、漢の
救兵繼で到り、胡驚遂に去し、漢赤兵を罷めて
歸る。此に由りて之を觀え、則ち一は圍一
角を開きて之を通ぜりとし、一は大に霧ふり、
漢人をして往來せしめたるも胡覺らずとし、一
は士皆滿を持し矢を傳けて外郷せしむとし、
一は強弩をして、兩矢を傳けて外郷せしむと
す、其の執れを是とし執れを非とすべきやの判
然せざるは、記事の正確なきざる證據なり、然
るに陳平傳を讀む、事更に怪、而して是れ却て
當時の消息を窺ひ知るべきか如し、陳平傳に云

ふ、「其の明年護軍中尉を以て從ひ、反者韓王
信を代に攻め、卒に平城に至て匈奴に圍まる、
七日食することを得ず、高帝陳平の奇計を用ひ
て單于の關氏に使し、圍以て開くるを得たり、
高帝既に出づるも其の計秘せり、故に世得て聞
く莫し」と。乃ち其の計秘し世得て聞く莫しと
云ふもの、是れ高祖が如何に重圍の中に苦みし
かを知るべく、其の出づるや如何に醜體を顯は
し、かを知るに足らん。然れども、何處新論の
如きは之が秘策を解して曰ふ、或は云ふ、陳
平高帝の爲めに平城の圍を解く、則ち其の事秘
して世得て聞く莫しと言ふもの、此れ工妙踴躍
を以ての故に蔽隠して泄さざるのみ、子能く斯
事を解り知るや奇やと、吾れ之に應へて曰く、
此の策乃ち反て薄摩拙意、故に隠して泄さざる
なり、高帝圍まるゝこと七日、陳平往て關氏に
説き、關氏單于に言ひて之を出す、是を以て其
の説を用ゆる所の事を知れり、彼の陳平必らず
言ふ、漢に好麗の美女あり、其の容貌天下有る
無し、今聞急し已に使を馳せ、歸り取て單于に
進め與へんと欲す、單于此の人を見れば、必らず
大に之を好愛せん、之を好愛せば關氏日に以て
違離なり、如かず其の未だ到らざるに及び、漢
主をして應去せしめんには、漢主一たび去る、

則ち亦女を持して來らじ、關氏は婦女、始の
性あり、必らず憎惡して之を去らしめんことを
事とす、此の説筋にして要を得たり、其の用を
得るに及び、則ち神怪せしめんと欲す。故に隠
匿して泄さざるなり」と。陳平行ふ所の策、果
して此の如くば、秘計やもと言ふに足らず、而
も策にして秘せざる可らずといふもの、自ら
別に秘せざる可らざる、秘事無くんばあらず、平
生率直せらるゝ所の如に告げて美女の必らず來
るを言ふ、是れ古來多く在る所の例、獨り高祖
に於て之を秘せざる可らざるの理なし、新論説
く所の如き、兒見のみ、計の秘せざる可らざる
所以は、自ら別に之れあるべし。
然らば則ち其の計を何とか爲す、事もと秘して
知る可らざるも、之を當時の情勢に察す、其の
約せる所のもの、殆んど靡服に類せしは、蓋し
疑ふ可らざるが如し。顧ふに白登の重圍、高祖
大小百餘戰を経て既に天下の主と爲り、新勝
の勢を以て戎狄を伐ち、却て其の圍む所と
爲りて活殺を敵の掌中に委す、高祖にして死
して追るゝを得ずんば、是れ所謂九仞の功を一
簣に缺くに似て更に甚しきもの、高祖の必ら
ず免れて生を全せんとなせしは固より其の處
なるべく、之を爲さんが爲めには如何なる約束

も拒む能はざりしは、是れ亦當時必然の勢なりしならん、況んや約する所の事、稱して陳平の奇計に出づると爲す、則ち其の事の醜劣にして寧ろ降服に類せしや知るべきのみ。其の士をして皆滿を持し矢を傳け外、總せしむと云ひ、強弩をして兩矢を傳けて外、總せしむと云ふもの、是れ修飾の言に過ぎずして、強弩に兩矢を傳くるは之を爲し得るとせんも、滿を持し矢を傳くると云ふに至りては、抑々事を解せざるの言、終始語り詰め得るのひなりせば、初よりして用を爲さざるべき者、別んや漢兵にして、尙も尙幾分の敵意を有するある、冒頓たる者、易ぞ知らざる爲ねして之を逸出せしめんや、又胡んや李布の言に、天下敵之、口、平城之下亦誠苦、七日不食不能鼓弩とあり、七日食せず、弩を放る能はざるの事實なるに於てをや、史漢諸書載する所の信を措く能はざる、是に於て愈々明なり。且つ試に高祖をして果して軍容整々として圍み出づることを得せしめたりとせんか、人の疑は益々甚しきを加ふるなり、夫れ高祖既に自ら力を以て容易に展出す、則ち彼れ再舉大に報復を圖るべき筈、而して諸書其の能く大軍と合するを得たりと云ひ、漢の救兵亦到ると傳ふるに拘らず、高祖之に對して嘗て

何等の爲すある無く、但だ冒頓兵を引て去るといひ、漢亦兵を引て罷むといひ、或は馬騰遂に解き去るとし、或は漢亦兵を罷めて歸るとし、其の述遂に得て聞くららず、後人の疑惑をして益々甚しからしむるもの、亦宜ならずや、高祖既に免る、其の後冒頓屢々來りて代の地を侵す、恐らくは是れ高祖の約を履行せざるに由れるか、高祖之を患ひ、趙も強敵をして宗室女公注を嫁じ、單于の闕氏に嫁せしむるを爲ししめ、或毎に匈奴に樂給酒食物を奉ずること各々數あり、約して兄弟と爲り以て和親し、冒頓適ち少しく止むを得たり。平生尊大を以て自ら居り、已れを言ひて中華とし、人を稱して夷狄とするの支那の口吻に據る、謹辱や此の如し、若し匈奴よりして之を言ふ、或は見て以て漢匈奴に賓貢せりと爲し、ならんか、冒頓の威勢は實に此の時を以て發揚せり、而して冒頓驕傲の意の勁ける、亦實に此に在り。

第七章 冒頓と呂后文帝

匈奴起りてより幾世代、而して其の最も事を南に生ぜるは漢初に如くはなく、後年北人の或は膨大して威力を支那に加ふるある、只當時の爲し、所を再びするに過ぎずして、爾來支那の對外策と稱するもの、亦多く高祖呂后の外交を套習するに外ならず、邊外と支那との國際的交涉の由來する所を知らんと欲する者は、宜しく漢初ノ北方史を審み、夫の強敵が胡漢の間に往復して辛くも平和の局を結ぶを得たりしが若き、必ずしも講究に備せずとせんや、匈奴は齊人なり、初めて高祖を洛陽に見、勸めて關中に都せしめ、遂に高祖の帷幕に參して獻替する所あり、功を以て拜せられて郎中と爲り、奉春君と號しき。韓王信に反する、高祖自ら兵に將とし注て之を撃ち、遂に進みて信陽に至るや、高祖信の匈奴と約し、共に漢を撃たんと欲するの計ありと聞き、大に怒り人をして匈奴に使せしめ、以て其の狀を探らしむるに、匈奴其の壯士肥牛馬を匿して、但だ老弱及び羸弱を示すを見、以て匈奴を恐る、に足らずと、差遣する所の使者十餘輩、急に復命し頻りに其の撃つべきを言ひて已まず、高祖乃ち復々教をして匈奴に使せしむ、故遣り報じて曰らく、凡そ兩國の相撃つや、此れ宜く存分して長ずる所を見はすべきを當とす、然るに今臣往て難しく之が狀を繼る、則ち其の剛健強

壯なる者を隠して、徒に其の羸瘦老弱なる者を示しぬ、是れ必らず短を見せ奇兵を伏せて我を誘はんとするなり、愚以爲らく匈奴は撃つべからずと。此の時に當り漢統一の威を以て大舉匈奴を撃ち、北るを追うて北の方注を越え、驍して師三十餘萬と稱す、高祖氣沛ち意驍り、只進まんことを欲して退くを肯んぜず、劉敬の言を聞き人に怒り罵つて曰く、齊虜口舌を以て官を得、今適ち妄言して吾が軍を沮すと、劉敬を廣武に械繫し、之を牢獄に投じ、遂に往て平城に至る。果せるかな匈奴奇兵を縱ち、四方網集し來りて高祖を白登に圍み、糧兵相繼がざるもの七日、然る後劣に身を以て免れ廣武に歸る、敬を召し謝して曰く、吾れ卿が言を用はず、以て平城に困めり、深く卿に愧づと、乃ち前使十數輩の交々撃つべしと言へる者を斬り、劉敬を二千戸に封じ關内侯とし、號して建侯侯と爲しぬ。

既にして高祖平城を罷めて歸り、韓王信亡して匈奴に入る、此の時に當り冒頓單于國制を一新し兵漸く強く、控弦者十萬、南下して漢を犯すと急なり、高祖之を患ひ劉敬に問ふに策を以てす、劉敬曰らく、今天下初めて定まり、士卒兵に疲れり、未だ武を以て服すべからざるなり、

冒頓其の父を殺して代り立ち、群母を妻とし力を以て威を爲せり、未だ仁義を以て説くべからざるなり、獨り以て爲すあるに足るべきもの、久遠の子孫をして臣たらしむるを計るに在り、而も陛下の遂に或は爲す能はざるを恐ると、高祖曰く、誠に可ならば何爲ぞ能くせざらんや、願ふに爲さんこと奈何と、劉敬對へて曰らく、陛下誠に能く適長公主を以て妻はし、厚く之に奉遣せよ、彼れ漢の適女の送ること厚きを知らば、蠻夷必らず慕て以て閼氏とすべく、子を生まば必らず太子と爲し、代て單于たらしめん、陛下乃ち歲時に漢の餘す所彼の鮮き所を以て數々問遣し、恩澤已に施きて然る後因て辯士をして風諭するに禮節を以てせしめよ、冒頓在らば固に子婿たるべく、死せば則ち外孫單于たらん、外孫にして敢て大父と抗禮する者、日月ありてより未だ臣の間かざる所なり、是れ兵戰ふ無くして漸を以て胡を臣とする所以、若し夫れ然らず、陛下長公主を遣る能はず、宗室及び後宮をして詐て公主と稱せしめ、匈奴にして一旦之を知るあるが如き、則ち彼れ背て貴近せじ、此の如くんば固より益無からんなりと。劉敬や、前には冒頓父を殺し群母を妻とし仁義を以て説く可らざるを言ひ、而して外孫に

して敢て大父に抗禮する者未だ之れあらざと言ふ、説く所一定の脈理なく、福絡なく、前後或は矛盾の嫌無きに非ざるも、其の匈奴の暴威を挫くは、究竟兵力に依る可らずして、漸を以て之を和げ、然る後徐に控制の策を講ぜざる可らざるは、當時の勢情、劉敬が説く所の如く、嘗て劉敬を怒りて、廣武に拘繫せる當年の高祖も、邊境の憂患を緩うせんが爲めに、漢室の醜辱の如き終に顧るに暇あらず、乃ち劉敬の進策を可とし、呂后に諭して長公主を遣らんと欲す、呂后日夜に泣て曰く、妾唯太子と一女とのみ、奈何ぞ之を匈奴に乗つるに忍びんやと、高祖竟に長公主を遣る能はず、爲めに家人の子を取り、名づけて長公主とし單于に妻はし、劉敬をして和親の條約を結ばしむ、劉敬が適長公主を遣るの議は行はれざりしも、彼が和議の説は全然用ゐられぬ、劉敬の徒の重用せらるゝ、豈以て當時の勢を測度すべからざるか、寧々たる帝王の國幣を厚し辭を卑し、而して其の平生夷狄萬獸とする所に結ぶ、既に醜の甚しきもの、然るも後世胡人に宥めらるゝ者、習ひて以て之を外交の慣手段と爲したるなり。

劉敬の議一たび行はれて、胡漢の和親條約は此

に締結せられぬ、後幾ならず、燕王盧綰等の
 の反し、其の黨萬人を率ゐて匈奴に降り、屢々
 往來して上谷以東を苦しめたるあるも、愚や
 未だ大なるに至らず、之が爲めに兩國の平和を
 害するが如きは之れあらざりき、而も高祖已に
 世を終へ、時代は惠帝呂后の時と爲るや、冒頓
 寢く驕傲にして動もすれば人を驚かさんとし、
 廻ち書を爲り、呂后に遣り曰らく、孤憤の君、
 沮澤の中に生れ、平野牛馬の域に長じ、數々邊
 境に至る、願くは中國に遊ばん、陛下獨立、
 孤憤獨居、兩主樂まず、以て自ら虜んずるな
 し、願くは有る所を以て其の無き所に易へん
 と。呂后見て大に怒り、丞相陳平及び樊噲
 季布等を召し議すらく、使を斬り兵を發して之
 を撃たんと、樊噲は生平勇を以て任ずる者、鴻
 門の會や、以て彼が壯時を知るに足る、呂后の
 言未だ了らざるに、噲自ら進みて曰らく、臣
 願くは十萬衆を得、匈奴の中に横行せんと、
 季布傍らに在り、徐に曰ふ、噲や斬るべきな
 り、前に陳豨の代に反するや、漢兵三十二萬の
 多きあり、噲實に之が上將軍たり、而して高
 帝を平城重圍の中に陥れ、自ら圍を解くな
 く、士卒食せずして爲めに戈を執る能はざる者
 あり、今傷疾の者甫めて起たんとして、噲復

天下を動搖せしめんとし、徒らに妄言を吐き、
 十餘萬衆を以て匈奴に横行せんと言ふ、是れ
 面護するなり、且つ夷狄は譬へば禽獸の如く然
 るに足らざるなりと。呂后之を善とし、大謁者
 張澤をして書を報せしめて曰く、單于繁邑を
 忘れずして、之に賜はるに書を以てせらる、弊
 邑恐懼、退て日に自ら離る、年老い氣衰へ、
 尚髮墜落し、行歩度を失ふ、單于過聽、以て
 自汚するに足らず、繁邑罪無し、宜しく赦さる
 るに在るべし、竊に御車二乘馬二駟あり、以
 て帝駕に奉ずと。冒頓書を得、復使をして來り
 謝せしめて曰らく、北方中國を去ること遠く、
 未だ禮義此の如きあるを聞かず、吾れ前に不禮
 を以てして陛下幸にして赦し給ひぬと、因て
 馬を贈りて遂に和親しぬ、冒頓も頗る滑稽者た
 り。胡漢の和親將に破れんとして厩に事無きを
 得たるもの、漢家の幸といへども、體面は業已
 に傷けにき。
 既にして文帝位に即き、復匈奴と和親を修む
 るの事ありたり、其の後匈奴右賢王入りて河
 南の地に居り寇を爲す、文帝乃ち詔を下して
 曰らく、漢匈奴と約して昆弟と爲り、必らず
 邊境を侵す無きを言へり、吾れ匈奴に輸遺す

ること甚だ厚き所以のもの、盟約定に前に在れ
 ばなり、今右賢王其の國を離れ、衆を將る河南
 の地に居る、常故に非ず、往來塞に入り、吏卒
 を捕殺し、土郡を侵侵す、約束に非ずと。乃
 ち邊吏車騎八萬を發し高奴に至り、丞相灌
 嬰を遣し右賢王を撃たしむ、右賢王走り塞を出
 て、文帝太原に幸す、適々濟北王の反するに
 會し、文帝歸りて丞相胡を撃つ兵を罷めし
 む。明年單于書を漢に遣りて曰く、天立つる
 所の匈奴大單于、敬みて皇帝に問ふ、恙無き
 や、前時皇帝和親の事を言へり、乃ち書意に
 稱ひて驪靱を結びぬ、然るに貴國邊吏妄りに
 右賢王を侵侮するの故を以て、右賢王我に請は
 ず、後義盧侯難支等の計に聽き、漢吏と相恨み、
 遂に二主の約を絶ち、昆弟の親を離れしめぬ、
 皇帝議書再び至り、使を發し書を以て報せし
 も、留りて爲めに還り來らず、而して貴國又更
 に使をして匈奴に至らしめず、漢其の故を以
 て和せず、隣國附かず、今小吏の約を敗るを以
 て、故に右賢王を罰し、西方に至り月氏を求め
 て之を撃たしめ、天の福、東卒の良、馬力の
 強を以て、遂に月氏を夷滅し、盡く斬殺降下
 して之を定め、樓蘭烏孫呼揭及び其の旁近二十
 有六國、皆已に匈奴と爲り、諸々弓を引くの

民并に一家と爲り、北州以て定まれり。願くは兵を寢め士を休め馬を養ひ、前事を除き故約を復し、以て邊民を安んじ、以て古始に應じ、少者をして其の長を成すを得、老者をして其の處を安んずるを得せしめ、世々平樂せん、未だ皇帝の志を得ず、故に郎中解庫淺をして書を奉じ請はしめ、豪駝一、騎馬二、駕三馴を獻す、皇帝即し匈奴の塞に近くを欲せずんば、則ち吏民に詔し遠く舍け、書驕傲の餘に出づるとせば則ち驕傲、而も勇頭書するに天立つ所の匈奴大單于と云ひ、右賢王約を敗るの罪を問すと稱して、實は月氏を夷滅し、樓蘭烏孫呼揭及び傍近二十六國の既に己れが有と爲り、右も弓を彎くある、滅亡せらるる意を寓し、語々堂々として大體を得たるもの如く、人をして一讀乃ち大單于冒頓が威風を想望せしむるもの、以て匈奴が宇内を呑むの機を見るべし。書至る、漢大に會議を開き、擊つと和親すると孰れか便なるを諮る、公卿皆單于の威を恐れ曰らく、冒頓時に月氏を破り、勝に乗じて長驅南に下る、勢必らず猖獗、擊つ可らざるなり、且つ匈奴の地を得るも、澤鹵にして居るべきに非ず、和親甚だ便と、漢之を許し乃ち匈奴に書を遣りて曰ふ、皇帝敬て匈奴大

單于に問ふ恙無きや、前に保庫淺をして朕に書を遣らしむるに云ふ、願くは兵を寢め士を休め、前事を除き、故約を復し、以て邊民を安んじ、世々平樂せんと、此れ古聖王の志と相合ふもの、朕甚だ之を喜べり、願ふに漢の貴國と約して兄弟と爲りしより、漢の貴國に奉ずる所を以極めて厚し、其の約に背き兄弟の親を離る者、常に貴國に在り、然れども右賢王事已に赦前に在り、深く責讓する勿れ、單于若し書意に稱はし、明に諸を吏に告げ、約に負く無からしめよ、洵に此の如くんば、謹みて教を奉ぜんかと、乃ち服繡給綺衣長襦錦袍各一、比毼一、黃金飾具帶一、黃金犀毗一、繡十匹、第二十四、赤緋練綵各一、四十四中大夫意、調者令厨をして齎し單于に遣らしめぬ。之を要するに高祖の一人たび白登に圍まれしより、匈奴の威日に益々張り、漢其の患に遭ふ毎に、必らず先づ和議を以て計と爲し、營々彼々として其の怒に觸れんことを恐れ、會々匈奴擊つべしと言ふ者ある、徒らに壯言天下を亂ると爲し、曾て之に耳を假さんともせず、和議を主とする者は忠臣たるかの如く、和議を非とする者は不忠臣たるかの如く、亦後世和議を主とする奉楹の徒の不忠臣とせられ、和議を非とする岳飛の徒の忠臣

とせらるゝが如くはあらず、同一事に處して、或は忠と爲り、或は奸と爲るもの、洵に前後の勢の同じからざる者あらん、宋や北方の侵略に遭ひ社稷傾覆の難を受くとして稱し、而して國人猶幾分の開志あり、戰を主とする者を和を主とする者と相半ばす、然るに漢初一帝の威を振ひながら、舉天下の人幾ど萬口一聲和議を唱へて怪む勿きもの、冒頓の威を見るべきに非ざるか。悲いかな漢の報書至り、未だ幾くならず、一代の英俊冒頓は死しぬ。

第八章 冒頓後の匈奴

冒頓既に死し、餘威尙任天下に震ふ、子稽鞮立ち、老上單于と號す。是より先き高祖劉敬の言を納れ、宗室の女公主を嫁して閼氏と爲し、梁酒米食物を歲々匈奴に致すの約を締びしより、匈奴漢室の以て與し易きを曉り、言動漸く驕恣に涉りしが、文帝位に即くに及び、益々甚しきを致せり、稽鞮の立つや、文帝復宗室の女公主を嫁して閼氏と爲し、宦者中行説をして公主に傳らしむ、説行くを欲せず、之を強ふるに及て、説曰く我が行くや必らず漢の患を爲さんと、竟に往て單于に降れり。高祖の時より漢

の將士匈奴に逃るゝ者少からざりしも、大に用ゐられて漢の患害を成したる中行説の若きはあらず、説や、匈奴人の漢の糶絮し食物を好み、標悍勇武の風漸く更まるを見、謂く説て曰く、匈奴の人、棄きこと漢の一部に當る能はず、而して強き所以のものは、衣食異にして漢に御ぐなきを以てなり、若し單于僞を變じて漢物を好めば、漢物什の二に過ぎずして、匈奴盡く漢に歸せん、乃ち漢の糶絮を得ば、草屨の中を馳し、衣袴甚裂散せしめ、以て旃裘、善きに如かざるを示せ、漢の食物を得ば、盡く之を去りて、以て遁落の美なるに如かざるを示せと、仍て又單于の左右に疏記を教へ、其の人衆畜物を記誦する事とせり。漢の書を單于に遺る、一尺一寸の牒を以てし、辭に「皇帝敬て問ふ匈奴大單于恙無きや」とあるに、説、單于をして書を漢に遺らしむるに、尺二寸の牒を以てせしめ、嚮に「天の立つる所の匈奴大單于敬て問ふ皇帝恙無きや」とありしをば、更に誇大にして、天地の生む所、日月の置く所、匈奴大單于、敬て問ふ漢皇帝恙無きや」と改めしめたり、式に於ては夷狄高く中國の上に在りき。

説、身を匈奴に委ね、漢使辯論する者あれば、一々之を挫げり、漢使或は言て曰く、匈奴の

俗、老を賤むと、説曰く、漢の帝、屯戍軍に從て當に養すべき者、其の老親自ら温厚肥美を脱して以て飲食を行式に齎送せざる有るか。漢使曰く、然。説曰く、匈奴明かに戰功を以て事と爲す、其の老弱、聞ふ能はず、故に其の肥美を以て壯健者に飲食せしむ、蓋し以て自ら守衛を爲すなり、此の如くんば、父子各久しく相保するを得べく、何を以て匈奴老を憐んずといふや。漢使曰く、匈奴の父子、乃ち皆盡く同じくして死す、父死すれば其の後母を妻とし、兄弟死すれば盡く其の妻を取て之を妻とす、冠帯の飾、闕庭の禮なし。説曰く、匈奴の俗、人は畜肉を食ひ、其の汁を飲み、其の皮を衣、帝は草を食ひ、水を飲み、時に隨て轉移す、故に急なれば則ち人々騎射を習ひ、寛なれば則ち人々無事を樂む、其の約束輕くして行ひ易し、君臣略易にして一國の政、猶ほ一身の如し、父子兄弟死すれば其の妻を取て之を妻とするは、其の種、胎の失を惡めばなり、故に匈奴亂ると雖も必らず宗種を立つ、中國詳に其の父兄の妻を取らずと雖も、親屬益々疎なれば、相殺して姓を易ふるに至る、且つ禮儀の傲は上下交々、怨望す、而して室屋の楹は生力必らず屈す、夫れ耕桑を力めて以て衣食を求め、城

郭を築きて以て自ら備ふ、故に其の民急なれば則ち戰功を稱はず、緩なれば則ち作業に罷る、嗟々土室の人、顧ふに多辭する勿れ、喋々として語々たらしむ、何を着ると雖も因に何か着らんと。是より後漢使辯論せんと欲するあれば、重亂曰く、漢使多言する勿れ、顧ふに漢の匈奴に輸す所の糶絮未幾、其の量中でて必らず善美ならしむるのみ、何を以て言を爲さんか、且つ滌する所、備へ善なれば則ち已まん、備へずして苦惡なれば則ち秋熟を候て購を以て汝の糶絮を購せんのみと。匈奴の爲めに歸する所、太だ智巧、詎は眞に歸者なりと謂ふべし、蓋し説は宮中に在りて深く國勢に通じ、試みに單于を轉けて人に私智を奮はんとせるなり、此の類の事情種種々あるよりして、冒頓の死後、嗣王の摩路父に背ざるも、傲慢驕僂の却て冒頓の時よりも甚しきを見るなり。

匈奴慶、邊境を擾し、漢兵少ければ深く入りて殺掠を恣にし、授軍饒て到れば、倏にして引き去る、斯の如きこと歳々、民大に安んぜず、此に於て文帝の十一年、晁錯の言を納れ、民を募りて塞下に徙し、衣服、食を給與し、匈奴の人寇に際し、其の當る所を止獲する者は其の半を予へ、以て邑甲相救助せしむ。越えて三

年、匈奴十四萬騎、朝那、肅關に入り、北地の都尉印を殺し、人民畜産を虜にする甚だ多し、遂に彭陽に到り、奇兵をして入りて、回中宮を燒かしめ、侯騎進みて雍の甘泉に到る。是に於て文帝、中尉周舍、郎中令張武を以て將軍と爲し、車千乘、騎十萬を發して長安の旁に軍し、以て胡の意に備へしめ、昌侯盧卿を拜して上郡將軍と爲し、薊侯魏遼を北地將軍と爲し、降虜侯周寵を隴西將軍と爲し、東陽侯張敖如を大將軍と爲し、成侯董赤を前將軍と爲し、大に車騎を發し往て胡を撃たしむ、部署整齊、而して單于塞外に去るや、漢兵之を逐ひ僅に塞を出でて乃ち還り、獲虜する所ある能はず。匈奴愈々驕慢、連成塞内に入り人民畜産を殺掠して已まず、雲中遼東寇を蒙る最も甚し、乃ち文帝の後二年、匈奴に書を遣りて曰く、

先帝制、長城以北、引弓之國、受命單于、長城以内、冠帶之室、朕亦制之、使萬民耕織射獵衣食、父子無離、臣主相安、俱無暴虐、今聞漢惡之民、貪降其進取之利、倍義絕約、忘萬民之命、離兩主之驩、然其事既在前矣、書曰、二國既和親、兩主驩說、寢兵、休卒、養馬、世世昌樂、闔然更始、朕甚嘉之、聖人者日新改作更始、使老者得息、幼者得長、各保其首領而終其天命、朕與單于俱由此道、順天恤民、世世相傳、施之無窮、天下莫不咸便、漢與匈奴隣國之敵、匈奴處北地寒、殺氣早降、故詔吏遣單于秣粟金帛絲絮作物歲有數、今天下大安、萬民熙熙、朕與單于、爲之父母、服過念前事、薄物細故、謀臣計失、皆不足以離兄弟之驩、朕開天不願覆、地不偏載、朕與單于、皆捐往細故、俱蹈大道、墮壞前惡、以圖長久、使兩國之民若一家子、元元萬民、下及魚鼈、上及飛鳥、跂行喙息蠕動之類莫不就安利而辟危殆、故來者不止、天之道也、俱去前事、朕釋虜逃民、單于無言章尼等、朕開古之帝王、約分明而無食言、單于留志、天下大安、和親之後、漢過不先、單于其察之。

詭詞寬語、諂々として説く處、一として他の意志を迎合へて和親を要むるに非ざる莫し、單于書を得、乃ち和親を約す。居ること四歲、稽粥單于死す、子軍臣立つ、文帝復匈奴と和親す、而して中行說復事を行ふ。文帝後六年、匈奴又和親を絶ち、大に上郡雲中に入る、各三萬騎、殺略甚だ衆し、烽火甘泉長安に通ず、將軍令免飛狐に屯し、蘇意句注に屯し、張武北地に屯し、周亞夫は細流に次し、劉禮は霸上に次し、徐厲は棘門に次し、以て胡に備ふ、月餘にして匈奴塞に遠かる、漢兵亦罷む。後歲餘文帝崩す、景帝立つ、帝の三年七國反を謀れる時、趙王遂陰に人を匈奴に遣はし、趙と謀を合して邊に入らんことを欲す、既にして漢、兵を遣りて趙を破る、匈奴乃ち止む。五年、漢帝亦匈奴と和親し、公主を遣りて單于に嫁し、關市を通じて匈奴に給遺す。中六年、匈奴大に雁門上郡に入る、久しからずして去る。爾後景帝の世を終る迄、時に入りて抄掠するあるも、遂に大寇なし。高祖より景帝に及び、匈奴に對する常に退守の策を探り、和親を締ぶこと前後九回、贈賂を厚くして公主を降嫁し、偏に其の意に忤ふを畏るるが如く、匈奴約に背き騎を率ゐて侵寇すれば、則ち戎兵を邊塞に駐屯して以て之に備へ、去れば則ち已む。蓋し高祖新に帝業を創め、舊未だ瘡えず、且つ萬民久しく兵亂に猥みて更に強臣の内に窺密するを兼ね、其の力を外に專にすること能はず、呂后に祿産を指使して非望の成就に汲み、意復北邊の鎮定に有らず、獨り文帝に至りては三世の遺業を紹ぎ、以て北邊を經略し得べきの餘力を蓄へしも、遂に

進取の地に立ちて大に攘逐を圖らざりしは、
 嬴秦の覆轍に鑑み、北邊の經略の適く以て禍亂
 を速くに足るを思ひたればなり、故に恭儉自
 ら持し、行を修めて萬民を撫綏し、遂に天下の
 財を盡さず、復天下の力を竭さず、靖寧の間に
 一生を終りせり。然るも文帝の世を通じて何
 奴と和親を結ぶもの五たび、而して何奴三た
 び約を背きて來り侵し、晩年に至りて塞を越え
 て侵盜するもの概ね歳々相踵ぐ、幸にして大
 擾亂を惹起するに至らざりしは、積弊軍臣の
 二單于、父祖の遺業を受けて心驕り意盈ち、且
 つ父祖の豪邁英武なるに肖ざりしなればなり。
 景帝亦前代の遺策を探り、公主を降嫁し、和親
 を約せしが、晩年に至り、何奴の反覆常なく、
 和親の以て長く靖康を維ぎ難きを悟れり、中三
 年、何奴王徐盧等六人來り降るや、帝之を侯と
 して以て後に勸めんを欲し、周亞夫の諫を排し
 て悉く侯に封じ、曰く丞相の議用可らず
 と、何奴の降王を封じて侯と爲すは即ち單于
 の意に背ふ所以、而して之を以て後に勸め愈々
 何奴の來降を促さんと欲する、其の深意以て
 察すべし。武帝に至り何奴に對するの政策倏
 然一變し、大に進取を圖り、軍を塞外曠漠の
 地に派するに及べり。

第九章

匈奴と武帝

高祖より文帝に至る、時や嬴秦の暴政を去る遠
 からず、漢亦國內の統一に急にして、力を域
 外に用ゐるに暇あらず、加ふるに一たび冒頓と
 蠻を啓いて大に挫かれ甚しく懲りし所あり
 り、爲めに匈奴に對する常に和親の策を執り
 て唯無事を之れ務むるの有様と爲れり。念ふに
 冒頓死して後、何奴の勢、冒頓の時に加ふるあ
 る無くして、而して漢を窘むること一層甚し
 かりしもの、因や素より多きも、特に國家の基礎
 未だ鞏固ならずして、和親を以て唯一の對外
 方針と爲し、に歸すべし、然るに年を経る漸く
 久しく、既に景帝の時と爲るや、三代蓄積の餘
 を以てして漢業漸く固く、降て武帝に治び、劉
 氏の天下愈々繁榮し、和親を以て國是とせる漢
 廷は、今や其の方針を一轉し、我より進みて何
 奴を挑むの、勢を呈せり。
 武帝の初めて位に即くや、首に和親の約束を
 明にし、厚く遇して關市を通じ、何奴亦深く
 漢の舊交を忘れざるを德とし、單于以下皆親み
 信じて長城の下に來往せり。然るも帝は既に
 何奴を滅すの意あり、馬邑の下人聶翁壹をし

て私に禁を犯して物を出し匈奴に交らしめ、
 詐て馬邑城を賣ると稱して單于を誘ふ、單
 于之を信じて馬邑の財物を貢り、十萬騎を以て
 武州に入る、漢乃ち三十餘萬を馬邑の旁に伏
 せ、御史大夫韓安國を護軍とし、以て單于の至
 るを候てり。單于將に漢の塞に入らんとし、未
 だ馬邑に至らざる十餘里、畜の野に布き人の牧
 する者無きを見て、心密に怪む、適く邊を守る
 所の尉史、單于に漢兵の居る所を告げしかば、
 單于大に驚て曰く、吾れ固に之を疑へりと、
 乃ち兵を引て還り出でて曰ふ、吾の尉史を得た
 りしは天なり、天汝をして言はしめぬと、尉史
 を以て天とせり。漢自ら事を讓して全く利あ
 らず、是より後何奴和親を漢に絶ちて當路の
 塞を攻め、入て漢の邊に盜すること擧げて數ふ
 べからず、然れども何奴漢の財物を嗜みて其
 の通商を便とし、漢亦關市を以て何奴を中つ
 るの具とし、和親は既に絶たれし觀あれども、
 通商は猶依然隱密の間に行はれり。馬邑の軍よ
 りして後凡そ五年、漢又四將軍をして各々萬
 騎を率ひ、何奴を關市の下に撃たしむ、將軍
 衛青は上谷に出で、龍城に至りて胡の首虜七百
 人を得しも、公孫賀雲中に出で得る所なく、公
 孫敖代郡に出で胡に敗られ、李廣亦雁門に出

で戦利あらず、却て胡に生得せられ、究竟得ること少くして失ふこと多きに了り、廣く後亡げて歸りしが、漢囚へて放と共に獄に下し、厓に贖て庶人と爲れり。是より匈奴の漢に寇すること漸く繁く、難を受くる漁陽尤も甚し、漢乃ち將軍韓安國をして漁陽に屯して胡に備へしむ、其の明年秋、匈奴二萬騎漢に入りて遼西の太守を殺し二千餘人を略し、水で漁陽の太守の軍千餘人を欺り將軍安國を圍む、安國時に手兵千餘騎、重圍の中に置り素亦其に盡きんす、適く燕の救至るに遇ひ、匈奴厓に解け去る。之を頃くして匈奴又雁門に入て千餘人を殺略す、是に於て漢將軍衛青をして三萬騎に將として雁門に出で、李息をして代郡に出でて胡を撃たしめ、首虜數千人を得、其の明年又雲中以西に出で雁西に至り、樓煩白羊王を河南に撃ち、胡の首虜數千と牛羊百餘萬とを得、漢遂に河南の地を東て朔方に築き、秦時嘗て蒙恬が爲りし塞を繕ひ、河に因て固と爲し、漢の成初めて邊に行はる、是れ實に武帝の元朔二年なり。

此の時に當り匈奴の軍臣單于死し、弟左谷蠡王伊稚斜自立して單于と爲り、代、定襄、上郡を侵し、而して右賢王亦漢の河南の地を奪ひて胡方に築きしを怨み、屢寇を爲して邊に寇し、河南朔方の吏民殺略せられし者甚だ衆し、漢乃ち復衛青を以て大將軍とし、六將軍十餘萬に將とし、出でて拒がしむ、右賢王以爲らば漢兵能く至らずと、潛を襲みて讎ひ、漢に備ふる莫かりしが、漢兵之を察知し、夜に乗じて之を圍み、將に右賢王を縛んとし、右賢王劣に身を以て免れ、漢其の衆男女萬五千人と輜小五千人を得、初めて大勝を得、其の後衛青復六將軍十餘萬騎に將として匈奴を攻め、首虜と得る前後凡そ一萬餘級、然れども漢亦兩將軍三萬騎を亡び、右將軍建寧と匈奴に覺られんとし、前將軍衛青遺信の兵利あらずして匈奴に降り、謂失言にす、此の役寧ろ相當るに近し、若し遺信と匈奴の小王、嘗て漢に降り、漢拜じて翁侯とし、任ずるに前將軍の重き以てせる者、而も勢可ならず、是に至り再び匈奴に降す、匈奴既に翁侯を得て大に喜ぶ、進ずるに白次王を以てし、其の姉を以て之に妻はし、與に漢を謀るの計を謀り、翁侯單于に致へ、益々北の方沙漠を經りて漢兵を誘ひ、其の彼るを要して之を取らしむ、單于其の計を用ひ、明年上谷に入りて數百人を殺し、も、驃騎將軍去病の大軍に遭ひ、力抗する能はず、

適く大に張るあるが如きある、終に漢を壓するに至らず、唯相當るのみ、其の後匈奴海邪王の其の衆を將る漢に降るの事あり、是に於て漢威益々張大し、陜西、北地、河西、胡也、漸く少れに、關東の貧民を徙して、其所の匈奴の河南新秦中に處らしめて之に實て、北地以西成卒の半を渡す、軍にして漢又謀らく、翁侯信單于の爲めに、漢北に降、漢兵以て能く至る無しと爲す、是れ宜しく撃つべきなりと、乃ち馬に實して萬騎を發し、大將軍衛青驃騎將軍霍去病をして軍を中分せしめ、衛青は定襄に出で、霍去病に代に出で、沙漠を覆絶して、匈奴を撃たんことを約せるが、單于之を開き、其の輜重を逃け、精兵を以て漢北に降、衛青の軍と戰ふこと終日、會々風雨晦暝、衛青等絶擊之を攻め、遂に單于を圍む、單于自ら勢の敵せざるを知り、挺身壯騎數十と圍を潰し、西北に走り、漢兵北るを追せしも夜暗くして單于を得る能はず、行、匈奴の首虜を斬りて、こと凡そ一萬餘級、北遠く闕頰山の趙信城に至りて軍を遷せり、初め單于の逃走するや、衆と離れて久しく合するを得ず、其の右谷蠡王以爲らく、單于死せりと、自立して單于と爲りしが、既にして眞の單于出で、右谷蠡王乃ち其の號を

去りて再び右谷蓋王と爲れり、當時匈奴の混
 亂以て觀るべし、是より以往匈奴遠く北に去
 て、漠南庭庭無く、漢、河を渡りて朔方より以
 西令居に至り、往々漢を通じて田官を置き、吏
 卒凡そ五六萬人あり、積と穀食して地遂に匈奴
 の以北に接しぬ、是より先漢の兩將軍大に
 出でて單手を圍むを、殺勝す、所八九萬と稱す
 ると雖も、漢の士卒死する者數萬あり、馬亦十
 餘萬の多きに及び、漢大勝を得たるが如きも、
 實は民力を竭してゐる疲弊せり、匈奴是に於
 て賈誼の計を用ひ、儲を好くして和親せんこと
 を請ふ、武帝其の議を下して和親を問ひしが、
 和親相半して決せず、丞相の長史任敞の如
 きは云ふ、匈奴今や疲困す、宜しく外臣とし
 邊に朝請せしむべきなりと、武帝其の議を可と
 し、任敞を匈奴に使せしめしに、單于敞の計
 を聞て大に怒り、爲めに之を拘留して遣らず、
 蓋し亦漢の胡使を留めて還さざるに相當てしな
 り、和親は爾く遂に成らざるに了りしも、其の
 高祖を平城に窘め、爾來皆て膝を屈せしこと
 無き匈奴にして、反て和親を以て求むるに至
 ては、形勢の變以て察すべきなり、
 是時に當り漢會、驃騎將軍去病を失ひ、久し
 く匈奴を伐たず、又事を南越に生じて力を北

方に用ゐる能はざりしも、匈奴遂に威を邊塞に
 加ふること能はざりき、既にして南越を滅して
 南疆の患なく、故の太僕賀を遣り、萬五千騎に
 將として九原を出づる數百里なりしに、匈奴
 の一人を見るなり、又故の從驃侯趙破奴を遣り
 萬餘騎に將として令居に出づる數百里なりし
 に、亦匈奴の一人を見るなかりき、是に於て武
 帝遂を巡て朔方に至り、兵を勅する十八萬騎、以
 て武備を示し、郭吉をして單于に風告せしむ、
 郭吉匈奴に至り、禮を申くし辭を好くし、單
 于を見て曰ふ、南越王の頭已に漢の北關に懸
 れり、今單于能く戰ふべくんば則ち戰へ、天
 子自ら兵に將として邊に待てり、儻し能はず
 んば即ち南面して漢に臣たれ、何ぞ徒に遠く
 走て漢北塞苦水草無き地に亡國することを爲す
 と、單于聞て大に怒り、郭吉を留めて歸さず
 之を北海上に遷せり、然れども單于終に寇を漢
 の邊に爲さず、休養して土馬を養ひ、射獵を習
 はし、數く使を漢に遣し和親を請ひ、其の後
 又詐て其の太子を入れて漢に質たらしめんこ
 とを言ふ、漢傷信を遣し、往て其の議を定めし
 む、此の時漢、東、濶、朝鮮を拔きて歸とし、
 西、酒泉郡に至り、胡と寇と通ずるの路を絶ち、
 又月氏大夏等の諸會に通じ、或は公主を以て烏

孫王に妻はし、以て匈奴西方の接國を分ち、又
 北地を廣めて臨雷に至りて塞とし、匈奴日に
 盛迫せられて、漢の提供する所匈奴得て拒
 ぐある可らざらんとす、而も漢使既に至りて言
 太子の質に及びや、單于軻之を以て故約に非
 ざるとし、漢使を辱しめて曰く、故約は漢常に公
 主を遣、饗祭食物を爲す品あり、以て和親
 せり、而して我亦約を重じて敢て邊を擾さず、
 今古に反して吾が太子をして質たらしめば故
 約を終に奈何、且つ匈奴の俗、漢の使中貴人に
 非ざるを見る、其の儒生をば説かんと欲すと爲
 して其の端を折き、其の少年をば刺さんと欲す
 と爲して其の氣をき、毎に漢使の我に入るあ
 る、軻ち報償して相當るを期し、漢我が使を留
 むれば、我れ亦漢使を留むと、儒信報を得ずし
 て歸り、漢又玉鳥を使とす、單于漢の財物を得
 んとし、爲めに給て言らく、吾れ漢に入り天
 子に見え、面り和約して兄弟たらんと、玉鳥歸
 りて漢に告げしが、漢之を信じ單于爲めに都
 を長安に築けり、匈奴曰く、漢の貴人の使を
 得るに非ずんば吾れ與に談語せじと、匈奴乃
 ち自ら其の貴人をして使とし先つ至らしむ、貴
 人漢に至り南あり、漢施樂器養して之を癒さ
 んとし、不幸にして死す、漢路充國をして二千

石の印綬を佩が往て使せしめ、因て其の喪を送り、厚葬せらざる無し、單子以て漢匈奴の貴使者を殺せりとし、乃ち路充國を留めて歸さず、諸々言ふ所のもの、單子空しく烏島を續くに過ぎずして、殊に漢に入り及び太子を遣し來り質するに意なく、漢帝んと愚にせらる。路充國匈奴に留ること三歲、單子死し兒單子立つ、實に漢の元封六年と爲す。

兒單子既に立つ、漢兩使をして一は單子を弔し、一は右賢王を弔し、以て其の國を乖離せしめんとなす、使者匈奴に入るに及び、悉く捕へられて單子に致され、留めて歸さず、漢の使者匈奴に留る者、是に於て前後凡そ十餘輩、而して匈奴の使漢に來るも、漢亦爾するなり。是歲貳將軍廣利をして西大宛を伐たしめ、因て杆將軍敖をして受降城を築かしめぬ、其の冬匈奴大人に雪り、人畜多く饑寒して死せしも、兒單子年少氣銳にして、好んで殺伐を事とし、國人其の堵に安んずるを得ず、左大都尉怒みて單子を殺さんと欲し、人をして私に漢に告げしむ、受降城の築かれしも實は之が爲めなり、然るも猶以て遠しとし、其の明年浞野侯破奴をして二萬餘騎に將として、浚稽山に至らしむ、左大都尉發せんとして覺はれ誅に服し、浞野侯

亦匈奴の八萬騎に圍まれて生捕せらる、兒單子大に喜び、遂に奇兵を遣て受降城を攻めしも下すこと能はず、明年自ら往き攻めんとして、適く陣中に病死し、國人其の季父弟を立て、單子と爲し、未だ一歲ならざるに又死し、其の弟立ちて單子と爲れり。

是より先廣利の大宛を撃つや、連りに勝ち、遂に其の王を斬り、威遠近に震ふ、武帝因て匈奴を困めんとなす、詔を下して曰く、高皇帝朕に平城の憂を遣し、高后の時單子の書絶だ不遑なり、昔は齊の襄公百世の讎を復して春秋之を大としき、匈奴は中國の深仇、撃て遺類無からしむべきなりと。且親使單子弔めて立つや、漢の之を莫はんことを恐れ、乃ち自ら謂ふ、我れ兒子安ぞ敢て漢の天子を望まんや、漢の天子は我が丈人行なりと、漢中郎將蘇武を遣り、幣を厚して單子に賂遣せしむ、單子益々驕て禮甚だ倍り、全く漢の期する所に反せり。其の後漢復貳將軍廣利因杆將軍敖騎都尉李陵等をして大軍を以て匈奴を撃たしむ、一勝一敗、互に勝敗ありしと雖も、要するに漢兵多く利あらず、李陵廣利等前後相率ゐて匈奴に降り、因杆敖亦戰ひて一の得るあるなく、墜に身を以て遁れ歸れり、彼の蘇武が匈奴に在りて十

年苦節を守りしといふもの正に此の時に屬す、蘇武や羶境に處し人臣の義を竭して、而して其の忠節を噴稱せらるゝもの、以て當時の勢を察すべきなり。廣利降るの明年、匈奴書あり云ふ、南に大漢あり、北に強胡あり、胡は天の驕子、小禮を爲し以て自煩せじ、今漢と大關を開き、漢女を娶りて媿とし、歲に我に藥酒萬石、糶米五千斛、雜畜萬匹を給遣せんことを欲す、它是故約の如けんとなす、漢使を遣し報じ其の使を送らしむ、單子左右をして漢の使者を難ぜしめて曰く、漢は禮儀の國と稱す、而して貳師云ふ、前太子兵を發して反せりと、諸れ有りやと、使者答らく、諸れ有り、丞相私に太子と争闘し、之を尺子に誣ふ、太子乃ち兵を發して誅讞を行ふ、此れ天子の兵を弁する者、罪咎に當り、素一小過のみ、夫の冒頓單子親ら其の父を殺して自立し、後母を妻とし禽獸の行を爲すと、同日にして言ふ可らざるなりと、單子聞て悦ばず、使者を留むること三歲過ち還ることを得たり。貳師廣利の匈奴に在る單子女を以て之に妻はし、尊寵匈奴の重臣衛律の上に在り、衛律其の寵を害し、廣利終に屠られて死す、會々雨雪數月に連り、疫癘盛行し、人畜斃るゝ者多く、黎黎爲めに熟らず、單子恐れ貳師の爲めに祠を

建てて以て祀れり。廣利没して後、漢名將士卒を失ひ、兵を出さざるもの三歳、而して武帝崩ず。武帝の匈奴を伐つ、曲や漢に在り、威威を以て外に誇示せし、觀あるも、是は一時に過ぎずして、全局に計較して其の得失は未だ盡に知るべからず、然れども帝は一世の家後、拱手して空しく無爲を事とする者にあらす、匈奴の交渉は獲る漢史の花とするに足るべし。

第十章 武帝後

武帝遊取に決してより、漢と匈奴と、兵能れ其苦む、單于常に和親を欲するの意あり、元始二年狐鹿姑單于死す、閼氏左大郡尉を殺し、單于の命を疑ふ子左谷蠡王を立つ、是を審衍鞮單于と爲す、單于年少初めて立ち、母閼氏正しからず、國內乖離し漢兵の襲はんことを恐る。單于立ちて三年、漢使陸郎と名する者審武馬安等八人を遣して善意を通ず、明年左右部二萬騎を發して四隊と爲し、並び邊に入りて寇を爲し、漢兵の拒ぐ所となり、遠く西北に去り、敢て前して水草を逐はず。是より先き烏桓先單于の家を發く、匈奴怨み乃ち二萬騎を發して烏桓を撃つ、大將軍霍光之を聞き烏桓の弊に乗じて

撃ち斬殺太だ多し、匈奴恐怖し兵を出す能はず、使を烏孫に遣はし漢の公主を求めんとし、撃ちて車連嬰蘭の地を取る、烏孫の公主書を上り救を求む、漢未だ決せず、昭帝崩じ宣帝位に即く、本始二年大に關東輕銳の上を發し、烏孫の兵を合して二十餘萬、道を分ちて、匈奴を撃つ、匈奴漢兵大に出づと聞き、老弱奔走、畜産を毀して遠く遁れ去る、故を以て漢の得る所多からず。單于烏孫を怨み、冬自ら將として之を撃ち多く老弱を獲、而も還らんとするに當り、天會、大に雪り人民畜産凍死し還り得る者十の一に過ぎず、而して丁令烏桓烏孫の三國弊に乘じ襲み攻めて大に匈奴を破る。是より匈奴大に虛弱、諸國羈屬する者皆瓦解し、攻盜理むる能はず、後漢亦三道より並び匈奴に入り斬殺數千人、匈奴終に敢て報復せず、和親を求めんと欲する意切、邊境事少し。地節二年審衍鞮單于死し、弟左賢王立つ、是を虛聞權鞮單于と爲す、此の時匈奴既に寇意を爲す能はず、漢因て城外を罷めて百姓を休息せしむ、單于聞て喜び貴人を召し漢と和親せんことを謀る、然るに前單于率する所の顛渠閼氏の父左大且渠、心其の事を害み、詭計を上り漢を欺きて大に侵掠せんと欲す、計漏れ引き

去る。秋匈奴前に得る所西域の左地に居る者數千人、畜産を驅り南下して漢に降る、明年西域城郭共に匈奴を撃ち車師國を取り、其の王及び人衆を捉へて去る、而して漢倍々屯士を遣り車師の地に用して之に實てしむ、後三歳、匈奴再び漢の車師城に用する者を撃ち、下すこと能はず、明年丁令等人入りて匈奴を劫し、人民を殺し馬畜を驅りて去る、翌年單于十餘萬騎を將る塞に傍りて獵し、遂に入りて劫掠せんと欲す、未だ至らず、匈奴の騎漢に降る者あり、漢因て狀を知り、乃ち後將軍趙充國をして緣邊九郡に屯し之に備へしむ、月餘單于血を嘔き、還り去る、匈奴使を遣はして和親を請はしむ、未だ報せず、前爵二年單于死す。是より先顛渠閼氏黜けられ右賢王屠香堂と通ず、此に於て單于の死に乘じ、弟左大且渠都降命と謀り、右賢王を立てて探衍鞮單于と爲す、單于既に立ち復た和親を修め、弟を遣り漢に入りて獻見せしむ、探衍鞮單于憤るる兇惡、殺伐を志にし國中附かず、日逐王單于と陳あり、其の衆數萬騎と漢に歸す、漢封じて歸德侯と爲す。單于立ちて三年、烏桓匈奴東邊の姑夕王を撃ち人畜を殺掠す、單于怒る、姑夕王恐れ、即ち前單于の子稽侯緡を擁立して單于を伐つ、探衍鞮

韓單于志欲自殺す、其家悉く懼、侯得に降る、是を呼韓邪單于と爲す、時に神爵四年なり、呼韓邪單于庭に歸る數月、兵を罷めて各、故地に歸らしめ、人をして右賢貴人に告げ、右賢王を殺さしめんとい欲す、冬、一、蘇奇、右賢王と號り、日逐王、呼韓邪を立二、單于と號し、兵數萬を發して、呼韓邪單于を襲はしむ、呼韓邪單于敗走し、呼韓邪單于庭に居る、明年秋、日逐王、右賢王等を烏菴都尉と爲し、東方に屯して呼韓邪單于に備へしむ、是時西方の呼韓邪王來り、右賢王を殺し自立して烏菴單于と爲らんと欲す、呼韓邪單于右賢王を殺し、復其の寃なるを知る、呼韓邪王を恐る遂々味き、自立して呼韓邪單于と爲る、右賢王之を聞き、自ら車鞞單于と爲る、烏菴都尉も立ちて烏菴單于と爲る、凡て五單于争て攻掠す、屠耆單于最も強大、烏菴、呼韓邪、西北に走り呼韓邪單于と兵を合す、烏菴、呼韓邪と謀り共に單于の號を去り力を併して車鞞單于を尊輔す、屠耆單于之を聞き、兵を分ち東方に屯して呼韓邪單于に備へしめ、自ら將として、西、車鞞單于を擊つ、車鞞單于敗れ、西北に走る、明年呼韓邪單于、其の弟有谷蠡王等を遣はし、屠耆單于の屯兵を襲はしむ、屠耆單于之を聞き、自ら六

萬騎に將として呼韓邪單于を擊つ、未だ到らず、遂に呼韓邪單于の兵と逢ひ戦ひ敗れ、自殺し、少子有谷蠡王、都隆奇と亡げて漢に歸す、而して車鞞單于は東して呼韓邪單于に降る、是時李陵の子復、烏菴都尉を立てて單于と爲す、呼韓邪單于捕へて之を斬り、遂に復單于の庭に都す、屠耆單于と弟休屠王、左大臣渠犂を殺し、其の兵を併せ自立して閼振單于と爲り、西邊に在り、其の後呼韓邪單于の兄左賢王呼都奔斯亦自立して鄯支骨都侯單于と爲り、東邊に在り、其の後三年、鄯支單于、閼振單于と戰つて之を殺し、其の兵を并して呼韓邪を攻め之を破り、遂に進で單于の庭に入る、初め呼韓邪の敗るや、左伊の警王呼韓邪の爲めに計り、臣と稱して入朝し、漢に事へて以て助を求めんことを勸む、呼韓邪諸大臣を集めて謀す、諸大臣皆其の不可を言ふ、左伊執言曰く、然らず、強弱時あり、今漢方に盛なり、烏菴城郭諸國皆臣交と爲る、且、復單于より以來、匈奴日に削られ、取復する能はず、此に屈強すと雖も、未だ嘗て一日も安せざるなり、今漢に事ふれば則ち安存し、事へざれば則ち危亡せん、何の計か之に過きんと、呼韓邪遂に其の言に従ひ臣と稱し、子右賢王をして入て侍せしむ、是歲甘露元年なり、

鄯支單于之を聞き亦子右大將をして入り侍せしむ、明年呼韓邪單于五元塞に歎し、國珍を奉じ三年正月朝賀せんことを願ふ、翌年正月單于天子に甘露宮に朝す、漢寵するに殊禮を以てし、位諸侯之上に在り、費湯臣と稱して名をいはす、帝遣下、單于をして邸に長安に就かしめ、建章宮に置活して之を襲賜す、二月、國に歸らしむ、單于先緣塞下に居らんことを請ふ、漢乃ち士馬を發して匈奴を衛送し、又邊穀米糲を轉送すること前後三、四、千斛、以て其の食を給賜す、是歲鄯支單于亦使を遣はし奉獻す、是より兩單于年々漢に入朝す、初め鄯支單于以爲らく、呼韓邪單于漢に歸す、兵弱くして復自ら還る能はずと、即ち其の衆を率ゐて攻めて右地を定めんと欲す、會と屠耆單于の小弟自立して伊何日單于と爲り、進に鄯支に逢ふ、鄯支之を殺す、漢の兵數を出して呼韓邪を助くと聞き、自ら度るに方匈奴を定むる能はず、乃ち烏菴と力を併せんと欲し、復烏菴に遣はして小昆彌烏菴屠見えしむ、烏菴鄯支の使を殺し、頭を持して都護に在所に贈る、鄯支烏菴を擊ち之を破り、因て北、烏菴丁令を降し、西、堅昆を破り、三國の兵を併せ數々、烏菴を擊て之に勝ち、遂に堅昆に留りて之に都す、

元帝初て位に即き、雲中五軍の殺二萬石を賜
 じて呼韓邪單于に給す、郅支單于漢の難を呼韓
 邪を擁護するを怨む、且つ遺途を遠く博み、
 使を遣はし上書して侍子を求む、漢谷吉をし
 て之を遣らしむ、郅支吉を殺し西康居に走る。
 明年韓昌張使命を奉じ、呼韓邪單于の侍子
 を送り、匈奴に至る、昌等單于の富盛を見乃ち
 白馬を賜して盟を爲し、約して曰ふ、今より以
 來、漢匈奴と合して一家と爲る、世々相許り相
 攻むるを得る母れ、竊盜する者あれば相報じて
 其の誅を行ひ其の物を償はん、寇あれば兵を發
 して相助けん、漢匈奴と先づ約に背く者天の不
 祥を受けん、其れ世々子孫をして、盡く盟の如
 くせしめよと。其の後呼韓邪竟に北庭に歸る、
 人衆稍之に歸し、國中遂に定まる。郅支既に
 漢使を殺す、漢、使を遣はし康居に至り谷吉等
 の死を求む、郅支使者を困辱し、詔を奉ぜず、
 建昭三年西域副校尉陳湯、詔を矯めて兵を發し
 捕護甘延壽と郅支を襲撃して之を斬る、呼韓邪
 單于郅支の死を聞き、且つ喜び且つ懼れ、入朝
 し、自ら言ふ、願くは漢氏に婿とし以て自ら親
 まんと、元帝後宮良家の子王昭君を以て單于
 に賜ふ、單于上書す、願くは塞を保せん、請ふ
 邊塞の吏卒を罷めて天子の人民を休せよと、

郅中侯應邊事に習ふ、以爲く許すべからずと、
 乃ち干策を上りて之を論ず、元帝車騎將軍蕭
 望之を遣はし單于に諭さしむ、單于稱謝して庭に
 歸り、王昭君を贖して寧胡閼氏と爲す。
 成帝建始二年、呼韓邪單于死す、大閼氏の子雕
 陶夷單立つ、是を復株鞮若鞮單于と爲す、石
 致唐兒玉體一屠奴侯を遣り入て侍せしむ。
 河平元年單于伊邪莫訥等を遣はして奉獻し、正
 月に朝せんことを願ふ、四年正月入朝す。鴻
 嘉元年復株鞮單于死す、弟且康胥立ち、搜粟
 若鞮單于と爲る、子を遣はし入りて侍せしむ、
 既に立ちて八歳、元延元年朝を爲さんとし、
 未だ塞に入らず病で死す、弟且英車立ち車牙
 若鞮單于と爲る、子をして入り侍せしむ。綏和
 元年死す、弟囊知牙期立つ、是を烏珠留鞮單
 于と爲す、子をして入り侍せしむ。漢中郎將夏
 侯湛等を匈奴に使す、或は帝の舅王根に説き
 匈奴漢に斗入したる地を得るの利を言ふ、根
 帝に具し、上の旨を以て藩に曉す、藩匈奴に至
 り語次を以て説て曰く、竊に見るに匈奴漢地
 に斗入し張掖郡に直る、漢の三都尉塞上に居
 る者士卒數百人、塞當侯望久しく勞す、單于
 宜しく上書して此の地を獻じ、兩都尉士卒數
 百人を省き以て天子の厚恩に報すべし、其の

報必らず大なしん。單于曰く、是れ天子の詔語
 なるや、使使者の求むる所に從るや。鞮曰く詔
 指なり、然れども藩亦單于の爲めに善計を書す
 るのみ。單于曰く、孝宣孝元皇帝、父呼韓邪單
 于を哀憐し、長城より以北は匈奴をして之を
 宥せしむ、此れ温僂餘王居る所の地なり、未だ
 其の形狀生ずる所を曉らず、請ふ、使を遣は
 し之を問はん。後漢復匈奴に使す、至れば則
 ち地を求む、單于曰く、父兄より五世に傳へ、
 漢未だ此の地を求めず、知に至りて獨り求むる
 は何ぞや、已に温僂餘王に聞く、匈奴西邊諸侯
 穹廬及び車を作るに皆此の山の材木を仰ぐを、
 且つ先父の地は敢て失はざるなりと。藩還る、
 單于狀を以て聞す、天子藩、漢に詔を矯む
 と稱し、仰て曰く、既に藩を從して濟守太守と爲
 す、匈奴に當らしめずと。明年僂子死す、復
 佗子を遣り入り侍せしむ。
 哀帝建平二年烏孫、庶子卑提覺人衆を率ひ匈
 奴の西界に入り、ハ畜を寇盜し、其の民を殺
 す、單于聽を發し烏孫を撃ち、殺掠甚だ多し、
 卑提覺恐れ子趨連を遣り匈奴に質たらしむ、單
 于狀を以て聞す、帝使を遣はし匈奴を諭責し
 質を還さしむ、單于詔を受け趨連を還す。四
 年單于上書し、五年に朝せんことを願ふ、黃

龍竟寧の時より單于朝すれば輒ち大故あり、帝是に由り之を懲らじ、以て公卿に問ふ、皆以ふ、虚しく府帑を費すのみ、許す勿きに若かずと、單于の使辭し去らんとし、未だ發せず、揚華上書して諫む、天子痛り、匈奴の使者を召還し、更に書を報じて之を許す、單于未だ發せず會も病む、復使を遣はし明年朝せんことを願ふ、帝之を許す。元壽二年單于來朝す、賜與甚だ厚く、河平の時に比すれば遙に加はるあり、既に罷む、中郎將韓固を遣はし單于を送らしむ。此の歲安帝崩じ孝平皇帝立つ、太皇太后制を稱し下莽政を執る、會西域車師後王匈奴去胡來王唐兜皆都護校尉を怨恨し、妻子人衆を率ゐて匈奴に降る、單于使を遣はし狀を言て曰く、臣謹く己に受くと、詔して中郎將韓降王昌等を遣はし單于に告て曰ふ、西域は内屬なり之を受くべからず、今之れを遣れ。單于曰ふ、孝宣帝元皇帝發降し、爲めに約束を爲す、長城より以前は天子之を有ち、長城より以北は單于之を保ち、塞を犯す者あれば輒ち狀を以て聞し、降る者あるも受くることを得ずと、臣が父呼韓邪單于無量之恩を蒙り、死せんとし遺言して曰ふ、中國より來り降る者あるも受くる勿れ、輒ち送りに至り以て天子の厚恩に

報ぜよと、然れども是れ外國なり、之を受くるを得ん。使者曰ふ、匈奴骨肉相攻め國幾んど絶えんとす、中國の大使を蒙り、危亡せんとして復續き、天子完安、累世相繼ぐ、宜しく以て厚恩に報ふるあるべし。匈奴罪を誅し、二虜を執り使者に付す。漢使還り以聞す、乃ち西域諸國王を會し斬て以て之に示し、猶ち約四條を造設す、漢人亡げて匈奴に入る者、烏孫亡げて匈奴に降る者、西域諸國中國の印綬を佩び匈奴に降る者、烏桓匈奴に降る者、皆受くるを得ずと、因て中郎將王駿王昌等を遣はし、四條を班し單于と函封し單于に付して奉行せしめ、故宣帝爲る所の約束封函を收めて還る。時に王莽奏し、中國の民二名あるを得ざらしめ、更に使を以て單于に謁せしむ、單于之に従ひ、上書して言ふ、臣の名董知牙斯、今謹く更めて知と曰はん。漢既に四條を班す、後烏桓を護する使者烏桓の民に告ぐ、復匈奴に皮布税を與ふる勿れと、匈奴故事を以て使を烏桓に遣はし税を督せしむ、烏桓曰ふ、天子の詔狀を奉ず、匈奴に税を予ふべからずと、匈奴の使怒り、烏桓の酋豪を收へ縛して之を倒懸す、酋豪の昆弟共に匈奴の使を殺す、單于之を聞き烏桓を撃つ、烏桓分散し或は走り山に上り、或

は東して塞を保す。王莽の漢を篡するや、多く金帛を齎して單于に重遣し、諭曉するに命を受け漢に代るの狀を以てし、因て單于の故印を易ふ、故印の文匈奴單于璽といふ、莽更めて新匈奴單于章といふ、單于の左右易ふるなきを勸む、漢使遂に故印を欺き取りて去る。是より先き單于漸く漢を怨む、此に至り益々怨恨し、或は兵を朔方塞下に鞠し、或は車師の降王を受け、遂に車師を撃て後成長を殺し漢の都護司馬を傷く、戊己校尉史陳良、終帶等匈奴大侵せんと欲すと聞き、吏卒數百人と劫掠して匈奴に合す、單于良幣を號して烏桓都將軍といふ。王莽是を聞き即ち大に匈奴を分ちて十五單于と爲さんとし、中郎將荀彧副校尉戴綬を遣はし、兵を將ゐ雲中塞下に至り、呼韓邪單于の諸子を招請し次を以て之を拜せんと欲し、呼右擊汗王威を誘き、脅し拜して孝單于と爲し、其の子助を拜して颯單于と爲す、單于之を聞き怒て曰ふ、先單于漢宣帝の恩を受く、負くべからざるなり、今天子は宣帝の子孫にあらず、何を以て立つを得ん、兵を遣はし雲中塞に入り大に吏民を殺し、左右部諸邊王に脛告し塞に入りて太守都尉を殺し、吏民畜産を劫掠する計ふるに勝ふべから

ず。王莽府庫の富を恃み、威を匈奴に立てんと欲し、孫建等十二部の將卒を拜し、三十萬の兵を發し、三百日の糧を齎し、道を分ち並び出でて匈奴を窮追せしむ、莽の將嚴尤其の不可を陳ず、莽聽かず、依然として兵穀を轉し、而して邊にある諸將大衆集らざるを以て未だ敢て出でて撃たず、天下騒動す。

建國五年烏珠留單于死す、匈奴事を用ゐる大匡右骨都侯須卜當は、王昭君の女伊嫫屠次云の婿なり、云常に漢と和親せんと欲す、而して孝單于威と善し、威前に莽の拜する所と爲るに因り、遂に威を立てて烏累若鞮單于と爲す。天鳳元年、云當の勸を聞き和親の策を決し、人を遣り西河虎猛胡塞下に之き塞吏に告げしめて曰く、和親侯を見んと欲すと、和親侯王載は王昭君の兄の子なり、妾、敏及び敏の弟展徳侯璽を使として匈奴に行き、黄金衣被絹帛を賜て初立を賀せしめ、詔將卒屯兵を罷め但だ游擊都尉を置く、單于秦の賂遣を貪り、故らに陽に漢の故事を失せざるも、陰に寇掠を利とし、又前に其の子登漢の殺す所と爲るを知り頗る怨恨す、仍て寇虜在地より入る者絶えず、漢使問ふれば單于意ち曰ふ、烏桓匈奴無狀の點民と共に寇を爲し、塞に入る、嘗へば中國に盜

賊あるが如きのみと。二年五月莽前に斬る所の侍子登及び諸貴人從者の喪を奉歸せしめ、多く單于に金珍を遣り、諷諭して其の號を改めしめ、匈奴を恭奴と曰ひ、單于を善子と曰ひ、骨都侯當に印綬を賜うて後安公と爲し、當の子奢を後安侯と爲す、單于秦の金幣を貪り故らに曲げて之を絶す、然れども寇盜故の如し。

天鳳五年單于威死す、弟左賢王興立つ、是を呼都而尸道單若鞮單于と爲す、單于與既に立ち賞賜を貪利し、使を遣はし奉獻して長安に至らしむ、莽、和親侯敏及び奢等をして俱に制虜塞下に至り云當と會し、因て兵を以て脅かし當を將て長安に至る、莽拜して須卜單于と爲し、大兵を出して之を輔立せんと欲す、匈奴之を聞き益々怒り並び北邊に入る、北邊此に由りて壞敗す。更始二年冬、漢中郎將馮、大司馬護軍陳遵を匈奴に遣はし、漢舊制軍綬王侯以下に印綬を授け、云當の餘屬貴人從者を遣る、單于與驕る、邊疆に謂て曰ふ、匈奴本漢と兄弟たり、匈奴中ら亂る、孝宣皇帝呼都單于を輔立す、故に臣と稱して以て漢を尊ぶ、今漢大に亂れ下莽の篡する所と爲る、匈奴本兵を出し莽を撃ち、其の邊境を空しくし、天下を以て驅動し漢を思はしめ莽遂に以て敗る、而して漢

復び興るは我の力なり、當に我を尊ぶべしと。明年赤眉長安を陥れ、淮陽王降れり。

第十一章 終末

光武漢業を中興し、専ら内治を務め、外難を平せざるを旨とす。是の時匈奴南北二部に分れ、南邊八部の大人共に漢し日逐王を立てて呼都邪單于とし、五原塞に據して内亂し、漢の藩籬と爲り、北匈奴は蒲奴立て單于となり、時ありて入寇す。北匈奴の衰弱する、馬武破害上書して之を伐たんことを請ふ、當書を報じ告ぐるに、黃石公の包桑記を以てし曰ふ、柔能く剛に勝ち、弱能く強に勝つと、乃ち玉門關を閉ぢて西域を謀絶し、功臣を保全し復任するに兵事を以てせず。明帝位を継ぎ漢意を北邊に用ひ、復西域都護、戊己校尉を置く、都尉竇固匈奴を伐ちて伊吾廬の地を取り、假司馬班超西域に使し鄯善を附け于寔を降し、西域諸國皆侍子を納れて漢と通す。帝の末年北匈奴左谷蠡王を遣はし車師を撃ちて大に之を破り後王安得を殺し、轉じて戊校尉耿种を金蒲城に攻む、恭之を拒ぐ。章帝の初、西域叛して都護陳睦を殺し、北匈奴已校尉關寵を圍み、車師亦叛き匈奴

奴と兵を合して耿恭を圍む、適々大表に會し救兵に至らず、關龍敗亡し耿恭窮困す、後漢の救兵至る、匈奴走り車師亦降る、都護及び戊己校尉を罷め、疏勒獨り留まりて疏勒に屯す。章和元年北匈奴五十八部來降す、時に北匈奴衰耗し黨衆離れ離れ、南單于前より迫り、丁零後より飛し、西域其の右を攻め、鮮卑其の左を撃ち自立する能はず、因て部衆來降したるなり。和帝の初、竇憲耿恭朔方塞より出で北單于を戰ひ大に之を破り、二十餘萬人を降し、塞を出づる數百里、燕然山に上り石に刻み功を勒し、漢の威徳を紀して還る。後耿恭を遣り復單于を金微山に圍みて大に之を破り、塞を出づる數百里、若し漢の師を出して以來未だ嘗て至らざる所なり、北單于走りて死す、漢其の弟を立つ、久しからずして復叛す、遂に南單于を撃ちて之を滅す。右、僉王逢侯、南單于に叛き塞外に於て左右三部を立て、自ら右部を領して涿野山下に屯し、左部は朔方の西北に屯す、安帝の時鮮卑の破る所と爲り漢に降る、桓帝の時永壽元年、南匈奴左部渠堂者等叛き東羌多く之に附く、屬國蒲類張奐討て之を降す。是より先き鮮卑、匈奴の分裂に乗じ倍々漢の境に移接し、永元中北匈奴の故地に據りて漸

く強盛なり、後或は降り或は叛く、帝の時、大人檀石槐勇健にして智略に富み、部衆畏服す、庭を彈汗山鞬仇水の上に立つ、實に代郡高柳の北にあり、東、大谷を絶め、西、烏孫を寇し、南、緣邊を劫かし、北、丁零を拒ぎ、其の地を大別して東西中の三部と爲し、更に小分して東部二十餘邑、西部二十四餘邑、中部十四邑と爲す。靈獻の際、匈奴時に亂る、國人單于葱渠を殺して須卜骨都侯を立つ、葱渠の子、於扶羅圖に至り自ら訴ふ、時に群盜蜂起し天下大に紊れ、復北方の擾亂を顧るに遑あらず、乃ち河東に止む、須卜立ち一年にして死す、南庭遂に慮し、於扶羅入りて塞内に居る既に久し、總て編戸と同じ貢賦を輸せず、弟嗣ぎて單于と爲る、後鄴に入朝す、曹操之を留置し、錢穀を給して列侯の如くし右賢王をして歸りて國を監せしめ、其の衆を五分して左部右部中部前部後部と爲し各々貴人を立てて帥と爲し、更に漢人を撰みて司馬と爲して之を監せしめ、而して貴人皆劉氏を冒す。漢魏より以來、鮮卑葱胡の降附する者、多く之を塞内諸部に處く、其の後數々、忿恨に因て長吏を殺害し、稱々民患を爲す、司馬氏の弔魏を併せて帝業を創むるの際、勢漸く強盛を致せり、惠帝位に即き賈后

政柄を竊奪して八王五に殘害するに及び、天下大に亂れて蒙塵茲に啓く、此に於て劉淵は晉陽に、石勒は上黨に、姚氏は扶風に、苻氏は臨渭に、慕容氏は昌黎に、交々起りて華を亂る。劉淵は冒頓十九世の裔、於扶羅の孫なり、父豺左部の帥と爲る、幼にして、尙異、上黨の崔游に帥事す、經史を博習す、嘗て同門生に謂て曰ふ、再れ隋陸が武なく高帝に遇て封侯の業を建つる能はず、絳灌が文なく文帝に遇て序序の教を興す能はざるを取つ、豈惜からずやと、是に於て武事を兼ね學ぶ、長ずるに及び皆善く射る、膂力人に過ぐ、初め侍子と爲り洛陽に在り、王愷李憲は用ひべしとして之を重んじ、孔恂賜就は患ふべしとして之を害む、武帝の咸寧五年父約死す、乃ち左部に遷り父に代りて帥と爲る。後、左部の帥と爲り、蒙倣多く之に歸す、惠帝永熙元年五部大都督と爲し、成都王頽表して左賢王と爲す、兵を將て鄴に在り、子貳駿勇人に絶す、薄く經史に涉り善く文を屬す、弱冠京師に遊び多く名士と交ひ、淵が從祖富其の族人に謂て曰く、漢亡びて以來我單于徒に虚號あるのみ、復尺土なし、自餘王侯降りて編戸に同じ、今我衆表へたりと雖も猶二萬を滅せず、奈何ぞ手を斂め役を受け奄として百年を過さ

んや、左賢王、其武世に超ゆ、天荷も匈奴を興すを欲せんば必ずや虚しく此の人を生ぜざるなり、今匈奴氏骨肉相殘し四海鼎沸す、呼韓邪の業を復せんこと此れ其の時なりと。乃ち相與に謀り淵を推して大單于と爲し、其の黨をして鄴に至り淵に告げしむ、淵、頻に説く、請ふ五部を帥みて來り助げんと、穎悅び淵を拜して北單于と爲す。淵左圍城に至る、劉宣等大單于の號を上る、離石に都す、既にして王波の兵鄴に入り穎の帝を奉じて洛陽に還るに及び、淵兵を發して救はんとす、劉宣等謀めて曰く、吾人我を奴隸御す、今其の骨肉相殘す、是れ天彼を棄て我をして呼韓邪の業を復せしむるなりと、淵曰く、善し、大丈夫當に漢高魏武と爲るべし、呼韓邪何ぞ效ふに足らんやと、乃ち左圍城に都す、胡晉之に歸する者多し。淵群臣に謂て曰く、昔漢、天下を有つ久長、恩民に結ぶ、吾は漢氏の甥、約して兄弟と爲る、兄亡び弟紹ぐ亦可ならずやと、仍て國號を建てて漢と曰ひ、自ら漢王と稱し、天下を討定して劉漢の故業を興復せんと欲す。此の時に當り李雄蜀に在りて成都王と稱し、慕容廆燕に在りて鮮卑大單于と爲り、各一隅に割據して晉室を窺密し、而して張軌亦涼に居す。懷帝永嘉二年淵都を蒲子に

徙し、皇帝と稱す、四年死す、子而立つ、弟聰執して自立す。五年漢將劉曜洛陽を陥れ、懷帝を執へて平陽に徙し、六年之を弑す、建康四年漢將石勒長安を陥れ、愍帝降り、西晉滅ぶ、明年帝を殺す。大興二年聰死す、子欒立つ、新秦業を殺す、石勒討て之を殺す、族子曜立ち都を長安に徙し、國號を趙と改む、曜幼にして一瞻慧、膽量あり、長するに及び儀觀魁偉、性折節高亮、讀書を好み、能く厚一寸の鐵板を別て之を洞す、劉聰之を重じ、以て漢光魏武の流と爲す、咸和三年石勒の爲めに殺され、趙遂に滅ぶ。石勒は羯人、後漢に降り、勳を襲うて王波を殺し、段匹磾を降し、勢漸く強大なり、元帝の大興二年後趙王と稱し、鄴に都す。既にして石勒、李雄相踵で死し、石虎末期後逆を行うて位を繼ぎ、元老多く鎗落して二國漸く衰ぶ、而して慕容氏愈々疆盛、遼東を取りて自ら遼東公と稱し、子毓を立てて世子と爲す、魏、雄毅權略多し、傳へて偶に至り後趙を滅し、勳を取りて之に都し、永和八年、皇帝と稱す。穆帝大和六年苻洪自ら大秦王と稱す、健、生を歴て堅に至り、勢最も雄大、燕の亂に乗じ之を滅して其の地を取り、涼を併せ代を討ち、氏を歸附する者八萬有餘、是より先き成既に晉

に降る。此に於て秦、天下を九分して其の八を有ち、東晉の政令を奉ずる者僅に其の一に居り、東の西域概ね秦に屬す。秦武帝太元八年大華して晉に奄す、大に肥水に敗れ、秦國爲めに亂る、後燕王慕容皝は鄴に起り、西秦王乞伏國仁は隴西に據り、姚萇は長安に秦王と稱し、西燕の慕容冲は阿房に帝と稱し、呂光亦自ら涼州の牧と爲る。苻登亦最も強大、秦を破り長安に入り皇帝と稱し、西燕を滅す。既にして後涼後燕相前後して滅亡し、魏、南涼、北涼、南燕、西涼、夏等國號を併得する者繼て起り、天下愈々混亂す。安帝の元興三年劉裕義を下邳に偕へ、桓玄を誅し、南燕を滅す、時に姚興後秦にあり、拓拔珪魏にあり、赫連勃勃亦大夏天王と稱し、雄視して相下らず、赫連勃勃は匈奴劉衛辰の子なり、太元中、匈奴劉衛辰、代王什翼健の迫る所と爲り、救を秦王堅に求む、代王南部大人劉庫仁をして之を拒がしむ、秦兵大捷、庶子寔君、什翼健を執し、部衆潰す、堅代を分ちて二部と爲し、河東劉庫仁に屬し、河西は劉衛辰に屬し、以て其の業を統べしむ、而して匈奴振はざる久し、勃勃豪邁にして大志あり、既に朔方に據り、自ら大夏天王と稱し、勢頗る大なり、都城を黑水の南に築きて曰

ふ、朕方に天下を統一し、萬邦に君臨せんとす、宜しく純萬と名くべしと、因て新城を名けて純萬城といふ。劉裕の策を擧つヤ、勃勃之を聞き曰く、裕の關中を取る必せり、然れども久しく留まる能はず、必ずや前に躡らん、若し子弟及び諸子を留めて之を守らしむれば吾之を取る芥を拾ふ如きのみと、乃ち馬に秣ひ士を養ひ、進みて安定に據る、劉裕後衆を滅し、子義眞を留めて東に歸り、尋て關中亂るヤ、勃勃乃ち襲うて長安を取り、皇帝と稱す。宋の元嘉二年死す、子昌立つ、三年魏の大武帝純萬に入り、別將を遣はし蒲坂を取り、長安に及ぶ、翌年魏主と純萬に戦ひ敗れて上即に走り、五年執らる、弟赫連定平涼に帝と稱す、魏兵を破り長安を復す、八年正月西秦を討ち之を滅す、六月、北涼を撃つ、吐谷渾の襲ふ所と爲り、遂に滅ぶ。此に至り夏、後秦皆滅びて魏獨り盛なり、道武より明元を歴て太武に至り盛威を耀す三世、北燕を平け、北涼を降し、遂に群胡を一統し、宋と土を分ちて天下を争へり。所謂五胡十六國、概して匈奴の地より出でし者、之を列擧するに左の如し。

漢後に趙と改む

冒頓十九世の倫 劉淵、武帝成寧五年左部

の帥と爲る、惠帝永熙元年匈奴五部大都督と爲り、永興元年自ら大單于と稱し左國城に都す、胡晋之に歸する者多し、鮮下に謂て曰ふ、漢天下を有つ久長、恩を施して民に縛ぶ、吾は漢氏の甥、約して兄弟と爲る、兄亡びて弟給ぐ亦可ならずヤと、乃ち國號を建てて漢といふ、懷帝永嘉二年皇帝と爲る、四年死す、子和立つ、弟聰執して之に代る、五年聰洛陽を陷れ、懷帝を平陽に遷す、愍帝の建興四年聰長安を陷る、愍帝降り西晋滅ぶ、愍帝を執す、東晋皇帝の大興三年聰死す、子榮立つ、斬準衆を執す、石勒準を殺し、劉曜立つ、都を長安に徙し國號を趙と改む、咸和四年石勒の滅す所と爲る。

五世 二十六年

後趙

石勒は羯人なり、匈奴の別部、世々上黨武鄉朔至に居る、汝桑と壯士を結合して群盜と爲る、公師藩起るに及び桑と駒を率ゐて之に歸す、懷帝嘉元元年漢に降る、愍帝建元元年前を襲ひて石浚を殺し段匹磾を降す、東晋元帝の大興二年趙と稱し都に都す、成帝咸和五年帝と稱す、八年死

す、子弘立つ、石虎弘を執し、自立して居攝天子と稱す、穆帝永和五年正月皇帝と稱す、五月死す、子世立つ、兄遵執して自立す、其の年石鑿遣を執して自立し、明年石閔の執する所と爲る、石閔立ち國號を魏と改む、石祗襄國に帝と稱す、七年趙將劉顯祇を殺して自立す。八年石閔劉顯を殺す、其の年燕の滅す所と爲る。

七世 三十四年

燕

鮮卑莫護跋、魏の末年塞外より入りて遼西韓城の北に居り、慕容部と號す、孫孫歸に至り遼東の北に遷り世々中國に附き、征討に従て功あり、大單于に稱す、晉の大康二年取して昌黎に都す、十年慕容廆晉に降る、以て鮮卑都督と爲す、元康四年徙りて大韓城に居る、永嘉元年自ら鮮卑大單于と稱す、大康四年遼東公と爲り、子軌を世子と爲す、軌雄毅權略多し、咸和八年魔死す、子軌立つ、咸康三年軌、燕王と稱す、永和四年軌死す、子儁立つ、儁趙を伐ち前を取り之に都す、八年皇帝と稱す、升平元年都を魏に徙す、四年儁死す、子曜立つ、大和五年秦王堅鄴に入り燕

王略を執へ身じて新興侯と爲す、燕滅ぶ。

三世 三十年

後燕

太元九年慕容垂樂陽に至り自ら燕王と稱し、大に秦兵を破り都に至り改元す、十一年慕容垂と稱す、十九年西燕を滅す、二十一年魏の平城を襲ひ之に勝つ、還りて上谷に至り死す、子寶立つ、隆安二年爾汗討て之を弑す、長樂王盛汗を討ち皇帝と稱す、五年段機を弑す、所と爲る、盛の叔父熙討て之を殺し、自立す。義熙三年猶子高雲熙を殺し自立して天王と爲る、五年國人雲を殺す、馮跋自立して天王と爲り後燕滅ぶ。

四世 二十六年

西燕

太元九年慕容冲、阿房城に據りて帝と稱す、十一年二月國人冲を殺し、段隨を立てて燕王と爲す、三月隨を殺して慕容忠を立つ、六月復忠を殺し、慕容永を立て、永、長子に帝と稱す、十九年後燕王垂、長子を圍て之を抜き、永を殺す、西燕滅ぶ。

三世 十一年

南燕

慕容皝の小子慕容德、范陽王に封ぜらる、

安帝の隆安二年都より戸四萬を帥み南滑

二世 十三年

北燕

馮跋安帝の義熙五年後燕の亂に乗じ自立して天王と爲る、宋元嘉七年跋死す、弟弘、太子翼を殺し自立す、十一年使を魏に遣はし藩と稱し、太子王仁をして入朝せしむ、十三年魏軍來り迫る、燕王弘高麗に走り、北燕滅ぶ。

秦

二世 二十七年

蒲洪は略陽臨洮の氏酋なり、懷帝永嘉四年自ら略陽侯と稱す、咸和八年後趙王石虎、蒲洪を以て龍驤將軍流民督と爲す、永和五年後趙王遵、洪の官を罷む、洪怒り晉に降る、其の年秦雍の流民洪を立てて主と爲す、六年洪自ら秦王と稱し、姓を符と改む、洪故の趙將麻秋の符所と爲る、子健、秋を斬り、使を晉に遣はし來り

命を請ふ、八年皇帝と稱す、十一年死す、子生立つ、和平元年東海王暉、生を殺し自立して天王と爲る、大元十年五月慕容垂長安に入る、秦王五行山に奔る、七月後秦王五行山を圍み、秦王堅を執へて歸る、子不位に晉陽に即く、十一年西燕秦を撃ち秦王丕を殺す、符登南安に帝と稱す、十九年後秦王興と戦ひ敗死す、子崇立つ、西秦代伏乞乾歸を撃ち、敗死す、秦滅ぶ。

六世 四十五年

後秦

太元九年秦の司馬姚萇兵を北地に起し自ら秦王と稱す、十一年長安に據り皇帝と稱す、十八年萇死す、子興立つ、十九年秦王登を撃ち之を殺す、隆安四年西秦を撃ち之を滅す、義熙十二年死す、子泓立つ、十三年王鎮惡大に後秦の兵を破り長安に入る、泓降る、建康に還り之を斬る、後秦滅ぶ。

三世 三十四年

西秦

乞伏國仁は隴西の鮮卑たり、秦の前將軍と爲る、太元八年坂を隴西に據る、十年自ら單于と稱す、十一年西秦王と爲る、十三年國仁死す、弟乾歸立つ、都を金城に

遷す、十九年前秦を滅す、隆安四年後秦王興の攻むる所と爲り大敗し、南涼に奔り遂に後秦に降る、義熙五年亦王と稱す、義熙八年乞伏公府、乾歸を弑す、子熾碧之を討じて自立す、十年南涼を伐ちて之を滅す、宋元嘉五年熾碧死す、子睿未立つ、八年夏の滅す所と爲る。

夏

四世 四十七年

赫連勃勃は匈奴劉衛辰の小子なり、初め後秦王興に事へ朔方を鎮す、義熙三年秦に叛し自ら大夏天王と稱す、十四年進で安定に據る、冬十一月長安を陥れ皇帝と稱す、明年赫連璜を長安に留め統萬に歸る、宋嘉元二年勃勃死す、子昌立つ、四年魏太武帝兵を進め統萬に及ぶ、五年上郡に戦ひ魏主に執へらる、弟赫連定帝涼に帝と稱す、魏人之を追ふ、撃て之を破り長安を復す、八年正月西秦を伐ち之を滅す、月北涼を撃つ、吐谷渾の襲ふ所と爲り遂に滅ぶ。

前涼

三世 二十五年

張軌涼州刺史と爲り河西に據る、永嘉元

年苻、西平郡公に封す、趙、涼州を伐つ、張茂降る、封じて涼王と爲す、二年茂死す、子駿立つ、茂將に死せんとし、駿の手を握り泣て曰く、吾家世々孝友恭順を以て稱せらる、苻室微と雖も汝之に奉承して失すべからざるなりと、永和二年駿自ら涼王と稱す、五月死す、子重華立つ、是より先き民富み兵強く、龜茲鄯善を撃ちて、之を降す、九年死す、子靈曜立つ、國人之を廢し張祚を立つ、十一年祚を弑し張元觀立ちて涼王と爲る、興寧元年張元錫、元觀を弑し自立して涼王と爲る、太元元年秦兵涼州に迫る、張元錫降り涼滅ぶ。

後涼

九世 六十九年

呂光は略陽の氐なり、秦王堅の臣と爲る、太元九年龜茲を破り入りて其の城に據る、十一年自ら涼州牧酒泉公と爲る、十四年自ら三河王と稱す、二十一年自ら涼天王と稱す、隆安元年段業及び沮渠蒙遜叛す、三年光卒す、子紹立つ、庶兄纂、殺して自立す、五年呂超纂を弑し其の兄隆を立つ、元興三年滅ぶ。

西涼

四世 十八年

張軌涼州刺史と稱す、宋永初二年蒙遜敦

南涼

安帝隆安元年秃髮烏孤自ら西平王と稱し、涼を攻めて金城を取る、三年樂都に徙る、其の歲死す、弟利鹿孤立つ、西平に遷る、元興元年死す、弟儼權立つ、義熙十年西秦南涼を撃ち儼權を執へ歸りて之を殺す、南涼滅ぶ。

北涼

三世 十八年

安帝隆安元年段業涼州に叛き自ら建康公と稱す、沮渠蒙遜、業を以て之に歸す、三年涼王と稱す、五年沮渠蒙遜、業を弑し自立して長掖公と爲る、義熙八年平姑臧に徙り河西王と稱す、元熙二年西涼を滅す、宋元嘉十年死す、子牧捷立つ、十六年魏王北涼を撃ち姑臧潰ゆ、涼王牧捷降り北涼滅ぶ。

西涼

二姓三世 四十三年

安帝隆安四年北涼、李暠を以て敦煌太守と爲す、李暠自ら涼公と稱す、義熙十三年死す、子歆立つ、元熙二年北涼王蒙遜の誘ふ所と爲り殺さる、冬、弟利回敦煌に入り刺史と稱す、宋永初二年蒙遜敦

焔を屢り李愬を殺し西涼滅ぶ。

四世 二十二年

魏太武既に群胡を一掃し、漠を截りて柔然を追ひ、更に鄯善を降し、龜茲を取り、又大に吐谷渾を破る、而して宋と連年相侵伐し互に勝敗あり 檀道濟を以て殺されてより宋復雄傑の將帥なく、魏兵長驅して建康に迫り、宋漸く衰へて魏益々盛なり。文成より傳へて獻文に至り黃老浮屠の術を信じて遺世の志あり、太后の殺す所と爲る、孝文位に即き、顧精治を圖り魏を制し樂を作し、州郡を改置して三十九郡と爲し、都を洛陽に遷し、蔚然として太平の風あり。宣武立ち、兵を南方に出し、梁の十四郡を攻り、此と戦ひて互に勝敗あり。宣武死して孝明猶ほ幼、胡太后放淫にして嬖倖事を用ひ、魏國大に亂れ州郡多く叛き、封疆日に蹙まる。孝明死して孝莊、帝暉、閔節或は廢せられ、或は獄せらる、孝武細きて立ち、長安に奔りて宇文泰に依り、高歡孝順を洛陽に立つるに及び、北魏遂に分れて東西と爲り、高歡東魏に在り、宇文泰西魏に在り、互に兵を出して雄を競ふ。高歡は鮮卑の一部族、冀州に據り、魏の亂を平けて勃海公と爲る、滄より洋に傳へ齊王に封ぜらる、遂に東魏を篡し北齊と號し、

三たび長城を築く、時に柔然衰へ、突厥初めて強大なり。是より先き齊既に宋を篡し、梁又齊に奪ひ、敬帝に至りて陳に遷る、其の後蕭春江陵に梁王と稱し、宇文氏亦西魏の禱りを受けて周と稱す。此に於て齊、周、陳、後梁、天下を四分して各々其の一に據り、互に相攻伐す、北齊最も早く滅びて後梁之に次ぎ、隋公楊堅周を篡して皇帝と稱し遂に陳を滅して南北復一に合す、而して變遷の系統より觀れば、匈奴の後、竟に大權を得たりとす。

第十二章 歐洲に於ける匈奴

匈奴は水草を逐う一轉徙するの蠻族氣候宜しきを得て平原に丘阜に草艸繁茂し、以て牛馬羊豕を畜ふことを得ば、則ち此に永住し、次第に勢力を扶植して一大強族と爲るも、而も一旦氣候の變あり、牛羊得て逐ぐべからざる、其の強きは他の民族を壓して兼併を事とし、土地財寶を奪ひて己が有とし、剽掠して以て遷移すべく、其の弱者は或は離散して異種族に服従するもあるべく、或は互に争闘して自ら滅するもあるべく、氣候の變動は直ちに是等蠻人が權勢の消長に關する少しとせず。冒頓の起る、

時や匈奴の全盛を致し、もの、冒頓死して稽餘威の振ひし無きに非ざるも、武帝の時に至りて、既に漸く動搖の兆を呈し、分裂は早晚必ず免るべからざるの勢たりき。武帝が能く匈奴を撃ちて、武威を遠近に振ひしは、是れ漢の數代平和の後を享け、國富み強く、人々擧りて事を好むの勢ありしに由るべしと雖も、其の匈奴の内部に動搖の生ぜししも、亦實に與りたりと謂はざるべからず。然れども匈奴の積重したる勢力や、冒頓死するも未だ邊に侮るべきに非ず、其の南に於て大なる強壓を受けしは、適く以て西北に其の勢威を擴張するの機と爲りぬ。

冒頓死後、幾許か歲月を経て部落動搖し、外、漢の強壓に遇ひて志を得ず、匈奴は將に四分五裂の勢に逼らんとし、或は他と合併する者あり、或は他に服従する者あり、或は終始戰鬪を續續する者ありしが、其の中東部に在る者は鮮卑に加はりて東方に繁榮し、西部に在る者は亦漸く一團と爲りて土地を西方に開き、強きをば避け、弱きをば合し、行々多數の部落を併せて遠くヴォルガ河畔に至れり。當時ヴォルガとドンとの兩河の間にアラニ族の國を成せるあり、人衆く兵強く、全力を竭して匈奴の

西進を拒ぎしが、遂にドン河の血戦に、アラブニ全く勝利を失ひ、大軍潰敗して國王戰没し、戰敗者は悉く戦勝者に従ひて、匈奴の軍勢此に一層の強を加へ、更に長驅して西のかた歐洲の中原に向へり。此の時に當り黒海及び波爾的海の間なる茫々たる曠野はゴツス族の占むる所、該族は從來幾多の戦闘を経來りて、勁敵引受けし事も多かりしが、匈奴の掩來は洵に彼が未曾有の大敵にてありき。彼等は、之を以て曠の類とせり、シジャの女巫の罪を犯して世間より放逐され、沙漠中にて鬼と野合し、其の間に設けられて生れし者とし、之を畏怖すること特に甚しかりき、然れどもゴツス固より勇を以て夙に威を振へる者、匈奴如何に猖獗を極むと雖も、寧しく之が爲めに地を奪はるるは志にあらず、乃ち其の王ヘルマリツク老年の身を以て親ら戦陣に臨み、潮の如く寄せ來れる匈奴の大軍に抵抗せしが、業遂に敵せず、戰敗れて其の相續者たるウキチミル之に代り、又利あらずして戰没し、國土は全く他の蹂躪する所と爲れり。ゴツスはに於て東羅馬のヴァレンス帝の保護の下に、羅馬兵と共に匈奴を拒ぐべきを約し、ダニューブ河を渡りぬ、是れ實に基督紀元後三百六十七年支那に在て

は燕の慕容垂管軍を破り、晉の桓温亦方に虜を獲て、男子勞を百世に流す能はずんば亦當に莫を萬年に遺すべしと言へりし時なり。ゴツス既に去り、匈奴乃ち代りて其の地に入れり、然れどもゴツスのダニューブ河を渡る、羅馬兵と協力する約なりしに、羅馬の官吏の苛酷にして殘虐なる、ゴツス到底之に堪ふる能はず、遂に反旗を幟し、進てアドリアノブルに激戦して帝を殺し、が、此の時匈奴亦ダニューブ河を渡り、動もすればゴツスと結びて羅馬を攪亂せんとする勢あり、但だ未だ奪略の威を逞うするに至らざりしに、漸くにして同種族の新に加はり來るや、勢ひ頓に張大し、テオドシヌス帝の世に及びて、其の王ロアスなる者、羅馬を侵害せざるが爲めにとて、毎歲夥多の財貨を貢賦として得たりき。四百三十四年、ロアス死し、甥アツチラ、ブレダの兩兄弟其の後を繼ぐ事と爲りしが、十年後アツチラ同胞を殺して獨り權を執り、勢威中外を壓倒し、蠻族の中には彼れ神劍を握りて全世界を一統すべき使命を有すと信ぜられ、基督敎國には上帝が人類を譴責する鞭撻イムメネンチア、ペツカトルム、フラゲラ）として畏られたり。蓋し此の時稱して匈奴といへる者、必ずしも悉く純粹な

る匈奴に非ずして、其の管轄内には、匈奴は固より言ふを須めず、フストロゴツスあり、ゲビデーあり、ヴァンダルあり、フランクありて、勢力極めて大、四百四十七年には一たび波斯に進軍して利あらざりしも、更にイクリヤの方面に進み、黒海中海附近の諸國を蹂躪し、剽掠至らざるなく、苟も死を遣れんとする者は皆其の軍勢に加しして等し進退せざるを得ざりき、テオドシヌス帝は如何にもして其の侵入を拒がんと決意し、大軍を整へしも、三大戰の後遂に敗餽し、コンスタンチノブルは辛うじて其の難を免れたるが、周圍の諸國は悉く荒廢せられ、七十有餘の殷賑なる都市は潰毀せられ、凡て蠻人の過ぎし所、大風の一過して落葉枯艸を掃ひ去りしが如く、東羅馬の山野は一日唯寥憐の光景を留むるのみ。テオドシヌス帝、詭術を以てアツチラを暗殺せんと企て、事成らざりして、終にダニューブ河の南岸を制し、貢物を贈還して和を求めぬ。四百五十一年、アツチラ更に西の方ガウ（今佛國）を攻めんと欲し、千軍萬馬震動して進む、羅馬のアエチヌス將軍、ウキシゴスのテナドリキツク王等奮戰拒止せしが爲め、オリアンズの圍を解き、シャンパンに退てマルンの曠

野に陣を張り、今のシヤロン・スール・マロン市の在る處に、東西の兩軍並々として對抗し、兩軍互に戰爭の全局を支配すべきニリ近傍の山を爭ひ、猛兵咆勃、健闘奮撃、死力を竭して争ひしが、非常なる激戦の後、羅馬ゲユシゴツスの軍終に利あらず、隊を亂して退き、テオドリツク王戰没せり、アツチラ以て、戰既に決すと爲し、此の時王子トリスマンド、亡父に繼ぎて其の軍を統率し、復讐を叫びて敗兵を激戦し、高處よりアツチラを襲撃し來る、匈奴苦戦を極め、一時退きて休養を圖らざる可らざるの止むを得ざるに至りぬ。口碑に據れば、當時戰地に委棄せられたる死人、實に三十萬の上に出でしと、又一説には此の時アツチラ既に死を決し、車、橋、轡車を蒐めて之を火し、自ら其の中に投ぜんとせしが、羅馬のアエチヌス將軍の助言に由り、事なく退軍するを得たりと、是等は信ずべきに非ざるも、當時激戦の狀は因りて以て略ぼ推知せらるべし。

感えて一年、アツチラ又伊太利に進撃し、ミラン、パデウア、其の他の都市を殘暴し、民人遁れてアルプス山、アペニン山、或は島に隠れたり。當時羅馬人の間に一の奇話あり、羅馬府は全く防禦の策盡きしが、法皇レオ一世親ら匈奴

の軍中に到り、百方解兵を懇諭せしに、蠻人等其の威儀の端嚴なるに畏服し、遂に殘害の念を絶ちしと傳へ、又彼得保羅兩使徒の靈がアツチラの軍に出現して之が目的を變ぜしめたりとも傳へり、然れども是れ固より疑ふべきもの、匈奴が兵を解きしは自ら別に其の理由の在るあらん、唯事實の今日に傳はらざるのみ、翌年アツチラ又大率伊太利を犯さんとし、羅馬の民、風を聞いて震懼せしが、而も其の絶世の美人イルデコと稱儀を擧げし唯、卒然臨充血にて命を殞しぬ。其の葬儀は非常なる盛大を以て行はれし者にして、先づ三重の大棺を造り、第一は金を以てし、第二は銀を以てし、第三は鐵を以てし、生前用ゐし所の珍器は悉く之を埋め、而して其の墓を設くるに使役せる捕虜に、亦苦之を殘殺し、以て其の棺槨の何處に埋められしヤを知るに由なからしめしと云ふ。

アツチラの羅馬に於けるは、猶ほ冒類の漢に於けるが如し、其の一代にして地を拓きしこと同じく、南下して百年文明の大帝國を嘗嘗せしこと同じく、而して冒類ありて後、漢人が其の常に夷狄視せる北人に征服せられしは、アツチラありて後、羅馬の嘗て野蠻人とせる者に奪略せられしと、恰も符節を合するが如く、二人の版

圖を合算すれば、匈奴の地たる、東瀝細海峽に起りて西地中海に沿ひし者なり、後世尤の天不能く之に類し、而して元は決して匈奴と別なるに非ざるなり、若し彼れ二人の一をして宋末に生れしめば、其の鐵木眞たり忽必烈たるは又何の疑をか容るべき。鐵木眞、忽必烈、既に已に蠻ならず、冒類とアツチラと、豈必ずしも粗厲にして悍惡ならんや、若し記録の備はりしならば、或は、意外に美德の在るありしを觀るやも知るべからず、惜いかな、實傳の永遠無窮に湮滅せしこと。

附錄

對匈奴的思想

支那北邊の問題たるは古より然りき、而も支那人は天下の觀念に當み、國家の觀念に乏しく、其の匈奴に對ししや、儀式、往復等に於て、時に或は兄黨の國とし、若しくは華夷中外を正して純然之を外視する無きに非ざりしも、國民一般には其の強といひ或といひ匈奴といふ、等しく天下の下に團結を合せる一種族に過ぎずして其他の區別甚だ明瞭ならず、恰も自己が領土内に於て少しく露進なる片田舎の如くに思惟し、其の邊疆時に擾擾して混

亂を極むるも、敢て之を以て敵國の侵入とせず、
従て全力を竭して之を拒守撃退せんとする念
極めて薄かりしなり。然るも之を支那政府に觀
る、たとひ國民の邊寇を觀るは一に片田舎の紛
擾と爲すに過ぎざるも、一國の統治上之を委棄
して顧みざるは其の爲す能はざる所、政府にし
て一刻之を棄つれば、則ち一刻大權を棄つるも
の、且つ君主にして苟も武を好む者ある、大に
兵役を起して其の威を張らんとするは勢にし
て、武職を帯ぶる者、亦出で以て功名を策せん
とし、而して事遂に此に至るある、則ち君主が
平生愛能する所をして功名の地位に立たしめん
とするは是れ亦免れざる所、爲めに任選其の
人を得ず、全然不能を以てして一驥將相の尊
位を取る者之れ無きに非ずして、殊に國家外
役にあり若くは大士工あるに及べば、國事の多
端を名として租税を征る自ら嚴苛に、所謂收
斂の吏なる者あり、國家事無きに當りては特に
利を獲る能はざるも、一朝不祥の事の起りて、
國政漸く緊肅を缺くに際しては、乘じて以て
奸曲を此の隙に行ひ、民を虐げ人を害し、弊
の及ぶ所徒に戰禍の慘且つ大なるが如きにあ
らず、故に國家に忠なる者の此の間に於ける、
成るべく戰を止むるを以て之れ急務とし、驕

傲なる武人に對抗して其の非を争ふに至れるは
固より其の處なり。然れども北邊の紛擾漸く
久しきに亙り、五胡十六國よりして突厥契丹を
經るに及び、北邊を見ること亦唯片田舎の如く
なる能はず、其の屢々寇し屢々窘しめ、支那を
して幾百年の久しき、經營慘酷、北邊の防守に
之れ日も足らざらしめしは、隱約の間自ら支
那國民の腦裡を支配して北狄の恐るべきを知ら
しめ、外國なる觀念此に漸く成熟し、趙宋の
天下に至りては、外敵と干戈相見ゆるの概あり
て、國民的競争の大活劇は其の酣甚を極めん
とす。然れども其の秦漢の交に於ける、匈奴
を絶對的の敵とするは未だ之れあらずして、君
主の時に武を嫌さんとし、若くは將軍の功を
立てんとせしは間々あり、所謂精神之儒則
守和親、介冑之士則言征伐といふもの即ち
是れなりしが、一般人民は成るべく戰の之れ
無からんことを欲し、民を思ふの士、亦深くそ
が塗炭の苦を受くるを憫とし、概ね主戰を排
して平和を旨とし、其の上書して國事を言ふ
もの、亦實に平和を策して斯民を焚溺に拯ふに
非ざるなく、武帝の時、主父偃、徐樂、嚴安等
時を同じくして上書し、匈奴を撃つを諫めに
き、偃の言に曰ふ、

臣聞明主不惡切諫以博觀、忠臣不敢避重誅
以直諫、是故事無遺策、而功流萬世、今臣
不敢隱忠避死以效愚計、願陛下幸赦而少察
之。司馬法曰、國雖大、好戰必亡、天下雖
平、忘戰必危、天下既平、天子大凱、春
蒐秋獮、諸侯春振旅、秋治兵、所以不忘戰
也。且夫怒者、逆德也、兵者、凶器也、爭
者、末節也、古之人君一怒、必伏尸流血、故
聖王重行之。夫務戰勝窮武武者、未有不悔
者也、昔秦皇帝任戰勝之威、蠶食天下、併
吞戰國、海內爲一、功齊三代、務勝不休、
欲攻匈奴、李斯諫曰、不可、夫匈奴無城郭
之居委積之守、遷徙鳥舉、難得而制也、輕
兵深入、糧食必絕、踵糧以行、重不及事、
得其地、不足以爲利也、遇其民、不可役而
守也、勝必殺之、非民父母也、靡敵中國、
快心匈奴、非長策也、秦皇帝不聽、遂使家
恬將兵攻胡、辟地千里、以河爲境、地因澤
鹹鹵不生五穀、然後發天下丁男以守北河、
暴兵露師、十有餘年、死者不可勝數、終不
能踰河而北、是豈人衆不足、兵革不備哉、
其勢不可也、又使天下蜚芻輓粟、起於東陲
琅邪負海之郡、轉輸北河、率三十鐘而致一
石、男子疾耕不足於糞土、女子紡績不足於

雖幕、百姓離散、孤寡老弱、不能相養、道路死者相望、蓋天下始畔秦也。及至高皇帝定天下、略地於邊、閉匈奴衆於代谷之外、而欲擊之、御史咸進諫曰、不可、夫匈奴之性、獸聚而鳥散、從之如搏形、今以階下盛攻匈奴、臣竊危之、高帝不聽、遂北至於代谷、果有平城之圍、高皇帝蓋悔之甚、乃使劉敬往結和親之約、然後天下忘干戈之事。故兵法曰、興師十萬、日費千金、夫秦常積衆暴兵數十萬人、雖有覆車殺將、係虜單于之功、亦適足以結怨深讎、不足以償天下之費、夫上虛府庫、下敝百姓、甘心於外國、非完事也。夫匈奴難得而制、非一世也、行盜侵疆、所以爲業也、天性固然、上及虞夏殷周、固弗程督、禽獸畜之、不屬爲人、夫上不觀虞夏殷周之統、而下終近世之失、此臣之所大憂、百姓之所疾苦也。且夫兵久則變生、事苦則慮易、乃使邊境之民、蒙敵惡苦而有離心、將吏相疑而外市、故尉佗章邯得以成其私也、夫秦政之所以不行者、權分乎二子、此得失之效也、故周書曰、安危在出令、存亡在所聞、願陛下詳察之、少加意而熟慮焉。

して一定の把持あるなく、初め戦の非を言ひし者も、已れか地位の爲めには忽然豹變して之を是とする者鮮からず、偃の如き雖に人品の卑下なる者、後重用せられて位漸く尊貴を加ふるや、前に匈奴を伐つての不可を切言せしもの、今や頻りに其の可を言ひ曰らく、朔方地肥饒、外沮河、蒙恬城之、以逐匈奴、内省轉輸成漕、廣中國、滅胡之本也、臣嘗懷斯して人主に阿諛するの態、以て其の小人を見るべし、武帝乃ち議を公卿に下して可否を覆す、昔曰く、伐つ便ならずと、公孫弘も亦曰ふ、秦時常發三十萬、衆築北河、終不可就、已而棄之と、而して主父偃盛に其の便を言ひて已まず、武帝遂に偃の計を用ゐて朔方郡を立てぬ、是れより偃倏く驕傲、人を凌ぎ財を貪り、遂に誅せられて三族を夷せられき、傳へ云ふ、偃の貴幸せられしに當てや、一世皆阿附して賓客常に千人の多きに及びしが、而も其の族死するに及びては一人の之を收むる者無かりしと、偃の如きもと深く追害に値せざるべきも、要するに武帝の時、國事を憂ふる者、多くは武を窮めざるを以て國家の長計とし、武帝亦晚年に及び頗る悔いる所ありき。

むる者は唯偏に匈奴を撃つての不可を論ぜしが、時世漸く下りて形勢亦更まり、匈奴と相親するも、言ほ邊郡の侵寇ありて、絶對的に不和を期する能はざるに至りしと雖も、而も其の是とする所は攻勢に在らずして守勢に在りし、備へて之を守るは寧ろ當時の輿論として認むべく、ただ防備を嚴にするとのを寬にするとの差違ありしのみ。元帝の時、單于曰ふ、願くば上谷より以西敦煌に至るの間を保塞し、之を無窮に傳へん、請ふ邊塞に備ふる吏卒を罷め、以て天子の人民を休めんと。帝、有司に下して議せしむ、議者皆以て便と爲す、郎中侯應漢事に習ひ、以て許すべからずと爲し、乃ち曰く、

周秦以來、匈奴暴桀、寇邊邊境、遠興尤被其害、臣聞北邊塞至遼東、外有陰山、東西千餘里、草木茂盛、多禽獸、本冒頓單于依阻其中、治作弓矢、乘出爲寇、是其窺固也、至孝武世、出師征伐、斥奪此地、攘之於幕北、建東徼、起亭障、築外城、設屯戍以守之、然後邊境得用少安、幕北地平、少草木、多大沙、匈奴來寇、少所蔽隱、從塞以南、徑深山谷、往來差難、邊長老言、匈奴失陰山之後、過之未嘗不哭也、如龍邊戍卒、示夷狄之大利、不可、一也。今聖德廣被、天覆

匈奴、匈奴得蒙全活之恩、稽首來臣、夫夷狄之情、固則卑順、誠則驕逆、天性然也、前以罷外城、省亭障、今裁足以侯望通燧火而已、古者安不忘危、不可復罷、二也。中國有禮義之教、刑罰之誅、愚民猶尙犯禁、又況單于能必其衆不犯約哉、三也。自中國尙建關梁、以制諸侯、所以絕臣下之觀欲也、設塞徵、置屯戍、非獨爲匈奴而已、亦爲諸屬國降民、奉故匈奴之人、恐其思背逃亡、四也。近西羌保塞、與漢人交通、吏民貪利、侵盜其畜產妻子、以此怨恨、起而背畔、世世不絕、今罷乘塞、則生變易分爭之漸、五也。往者從軍、多沒不還者、子孫貧困、一旦亡出、從其親戚、六也。又邊人奴婢愁苦、欲亡者多、日聞匈奴中樂、無奈侯望急何、然時有亡出塞者、七也。盜賊築點、群輩犯法、如其窘急、亡走北出、則不可制、八也。起塞以來、百有餘年、非皆以士垣也、或因山巖石、木柴僵落、豁谷水門、稍稍平之、卒徒築治、功費久遠、不可勝計、臣恐議者不深慮其終始、欲以壹切省繇戍、十年之外、百歲之內、卒有它變、障塞破壞、亭燧滅絕、當更發屯繕治、累世之功、不可卒復、九也。如罷戍卒、省侯望、單于自以守塞守

御、必深德漢、請求無已、小失其意、則不可測、開夷狄之隙、虧中國之固、十也。非所以永持至安、咸制百蠻之長策也。侯應之言、當時在りては誠に能く其の要を得しものなるべし。哀帝の時、黃門郎楊雄上書して曰く、
臣聞六經之治、貴於未亂、兵家之勝、貴於未戰、二者皆微、然而大事之本、不可不察也。今單于上書求朝、國家不許而辭之、臣愚以爲漢與匈奴從此隕矣。本北地之狄、五帝所不能臣、三臣所不能制、其不可使隕甚明、臣不敢遠稱、請引秦以來明之。以秦始皇之疆、蒙恬之威、帶甲四十餘萬、然不敢窺西河、廼築長城以界之、會漢初興、以高祖之威靈、三十萬衆、困於平城、士或七日不食、時奇譎之士、碩畫之臣甚衆、卒其所以脫者、世莫得而言也、又高皇后嘗忿匈奴、群臣庭議、樊噲請以十萬衆、橫行匈奴中、季布曰、噲可斬也、妄阿順指、於是大臣橫書遣之、然後匈奴之結解、中國之憂平。及孝文時、匈奴侵暴北邊、侯騎至雍甘泉、京師大駭、發五將軍屯細柳棘門、朝上以備之、數月迺罷、孝武即位、設馬邑之權、欲誘匈奴、使韓安國將三十萬衆、徵於便塞、匈

奴覺之而去、徒費財勞師、一慮不可得見、況單于之面乎、其後深惟社稷之計、規恢萬載之策、迺大興師數十萬、使衛青霍去病操兵、前後十餘年、於是浮西河、絕大幕、破寅顏襲王庭、窮極其地、追北遂奔、封狼居胥山、禪於姑衍、以臨翰海、虜名王貴人以百數、自是之後、匈奴震怖、益求和親、然而未肯稱臣也。且夫前世尊榮傾無量之費、役無罪之人、快心於狼望之北哉、以爲不壹勞者不久佚、不嘗費者不永寧、是以忍百萬之師、以摧餓虎之喙、運府庫之財、填虛山之壑而不悔也。至平始之初、匈奴有桀心、欲掠烏孫侵公主、迺發五將之師十五萬騎獵其南、而長羅侯以烏孫五萬騎震其西、皆至質而還、時鮮有所獲、徒奮揚威武、明漢兵若雷風耳、雖空行突反、尙誅兩將軍、故北狄不服、中國未得高枕安寢也。逮至元康神爵之間、大北神明、鴻恩薄洽、而匈奴內亂、五單于爭立、日逐呼韓邪攜國歸死、扶伏稱臣、然尙羈縻之計不顛制、自此之後、欲朝者不距、不欲者不强、何者外國天性忿鷙、形容魁健、貞力怙氣、難化以善、易隸以惡、其疆難誦、其和難得、故未服之時、勞師遠攻、傾國殫貨、伏尸流血、破堅拔敵、如彼之

西郷隆盛とガリバルデー

第一 古英雄の再現

如何か是れ英雄、議論百出、紛々として未だ歸一する所あらず。而も英雄といふ語に、漠然ながらも人の頭腦を刺戟する何者かあるべく、地の東西と時の古今とを問はず、其の事殆ど一轍に出づるが如く然るもの、寧ろ奇とすべきなり。夫の大事業を爲し、若くは大戦争を爲し、

者の、大英雄として崇めらるゝこと稀ならざるも、概して何處となく物足らぬ感無きに非ずして、普通人に人の理想なりとし描き出す所は、功業の遠く衆に抜くあるの外、幾許か人寰の上に出で、世俗の妄執を超越せる所無かるべからずと爲す。此の如きは多く之を實際に求むべからざるも、英雄としては必ず此の資格あるを要すべく、彼の遼漠の古代に在りて、此の種人物の絶えず輩出したるが如く見ゆるは、必ずしも古人の今人に優れりしに非ず。環航ある所埋滅して傳はらず、唯其の偉大なる箇所のみ今に存して、人之を尊敬崇重するのみ。若し其の實際

を求むる、則ち意外の失を摘發し得る、何ぞ之れ無しとせんや。然るも眞の古英雄とし描き出さるゝ所、即ち比較的純性の發露せる所は、自ら英雄の理想とし認むべく、而して此に近似せる者の出づる、往々にして之れ無きに非ず。

伊井太公は、千載の下尚ほ其の遺風を欽せらるゝ者、初よりして秋毫己れの爲めに求むる所あらず、蒼生の爲めに奮然として起ち、功成る、即ち人間の事止むと爲したるやに想はるゝが、歴史の事實に於ては能く其の然る所以を見るに由なく、俗寰に脱然たるが如き、寧ろ其の関く所に屬す。降りて魯仲連の如き、張良の如き、祭遠必ずしも志願に非ずして、稱し私なる慾念に遠ざかれる所あり。其の後諸葛亮あり、支那帝國中古の偉人として、盛名今に至りて没びず。進退の度、去就の節、公明にして正人、正々として堂々、洵に以て後世の鑑と爲すに足れりき。但た是れ亦往代の事、近世を距る既に遠し。事の詳細なるの得て知られざる、或

は以て幸とすべき所なりと爲さる能はず。轉じて希臘羅馬に觀る、其の半神半人とし崇敬せらるゝ者、多く此の類にして、シンシナタスの如き、千載の間、西人の等しく欽仰して描かざる所、天下事無き、即ち曠史と伍して田園に高臥し、一旦緩急ある、即ち劍鞘を抜じて劍を帶び、禍亂鎮定して國家再び靜謐なるに至れば、乃ち復野に下りて耕鋤を事と、漠然として求むる所ある無く、今日よりして之を然る、洵に以て偉とするに足るべきも、歴史の傳ふる所に虚飾多く、若しニープールの指摘せし所を以てせば、全然無根の事實にして、毫も信を措くを得ずとせらる。

古英雄とし人の腦裏に描き出さるゝ者、多くは世人の想像に止まらるべくして、之を實際に觀んこと最も難く、人品の或は之に近きも、事功の之に伴はざるあり。事功の稍も稱するに足るも、人品の之に謂はざるあり。眞に英雄なりとし、歴史の崇敬を惹くに堪ふるは、百代に一人を難しとすべく、只後世華盛頓の如きは、良之に近き者、近代に至りて世益益と複雑と爲り、復古の單純なる動作を以て立つべきに非ず。乃ち所謂古英雄に近似する者の輩出するを望む、豈亦得べけんや。然るに何ぞ國らん前

世紀の中葉に於て、之に近似せる者、東西各一人を出さんとす。願ふに此の如き素是れ時勢の促進せるを多しとすべく、此の時西には彼れ伊太利の統一あり、東には我れ日本の統一あり。俱に前古稀に見る所の一大變革にして、彼には乃ちガリバルディーを出し、我には乃ち西郷隆盛を出しぬ。

ガリバルディーと西郷とは、不思議にも其の時を同じうして出でぬ。但だガリバルディーや西郷より二十年前に生れて、之より五年後に死したりき。彼には才藻の絶妙なるあるに非ず、功業の絶大なるあるに非ず、事業家としては失敗多く、將軍としては戦に長ぜりとせず、且つ又劣情の弱點なきに非ず。而も其の人と爲りや自ら一種氣品の高潔なるあり、山高く水長く、人其の風を聞いて食も厭も立たんとし、ガリバルディーの名は尚に天下の人心をして意を強くせしむるの概あり。若し其の才を以てせば世界の廣き、彼に優る者數ふるに違なかるべく、若し功を以てせば、億兆の多き、彼に優る者數ふるに違なかるべく、而も英雄の英雄たる所以に於ける、彼れ固より古今に上下して些の遜色あらざるなり。西郷亦然り。世の一般に西郷を重しとせるは、無意味の事に於てすること多

く、殆ど平凡稱するに足らざるを俦として、推服し景慕し崇拜する無きに非ざるも、而も其の之を俦とする、常人の到底成て及ばざる所と信ぜざるあるを疑ふべからず。只我邦の事たる、多き世界の耳目に接觸せず。是を以て西郷の名、ガリバルディーに比して、頗る劣るあるも、其の氣魄の偉大なると行度の豪爽なるとは幾ど彼を凌ぎて餘りあるべく、固より一長一短は數に於て免れずと雖も、若し前世紀に於て、古英雄に類する最も過き者を擧ぐる、即ちガリバルディーを推すよりも、寧ろ西郷を推すべしとせん。我邦近代に至り、人物の輩出せる、斗以て之を量るべきも、之を歐洲諸國の偉人に比するに、概ね其の下に掩蔽せられて爲めに光輝を失ひ、人物の存在すら認むべからざるあり。

大久保、木戸、高杉、大村の類も、之をピスマルク、ゴルチャコフ、モルトケに比すれば、言ふに足る無く、大隈、板垣の徒も、グラッドストーン、チエールの爲めに鞭を執ると雖も可なるべく、議院に於て如何に鼎快の舉動を爲す者ありとも、ガンベッタの爲めに顔色を失はざる莫かるべく、其の他如何なる方面に於ても、彼には常に偉大せる代表者あり、我れ殆ど彼に儼行だも爲し能はざるなり。然るも若しガリバル

ディーを擧ぐれば、是れ或る點に於て西郷に譲るべき者、ガリバルディーを以て古英雄の再現セバ、西郷は少くも同等に置かざるべからず。

第二 起身

ガリバルディーと西郷と等しく微賤の生れなりき。系統よりせば、ガリバルディー少しく優れるが如くなるも、其の祖父及び父は共に船乗りを業とし、彼れ自らも夙に船業に従事したりき。脊力案に勝れ、骨格太く逞しく、又能く游泳に熟達し、屢々人の溺れしを拯ひしことあり。職業既に斯の如くなれば、其の教育も隨ひて一定の規則立てるは無く、只僅に母の監督の下に在りて日常動作の法を習ひ、又僧侶よりして多少讀書の知識を得し位にて、世の謂ゆる教育の意に於ては、彼は殆ど無教育なりしなり。然れども母の感化は極めて大にして、彼常に自ら言へらく、吾が愛國心は實に我母より胚胎しぬ。海陸に危険に遇ふ毎に、信心なる女の神前に祈跪し、其の兒の爲めに奮るを想像する時、男婦として眼前に之を目標するの感ありと。西郷亦狀貌魁梧、崖然則ちガリバルディーに譲り、巨然則ち之に勝り、巨然として肥大なる所、

即ち他が超捷なるに似ざりし所なり。教育として擧ぐるに足るなきも、當時の教育の程度より觀ば、寧ろ相當なりとすべく、或は藩の學館に入り、或は大久保長沼の徒と目を定めて近思錄を講じ、或は伊藤茂右衛門に就き傳習錄を學び、或は那波禪師に従ひ禪學を修めぬ。家貧にして早く郡方書役となり、心を學事に專らにする能はざりしとはいへ、武士たる教育に於て特に遺憾のあるなく、知識の分量は、西郷の受けし所とガリバルヂーの受けし所と大差なかるべきも、西郷や思想粗雑なる諸藩の土に應接して、毎に練々として餘裕ある迄に修養するを得たりしと評ふべし。

ガリバルヂーの郷里ニースは、國勢に於て何等の價值あるなく、彼が事に著手するに當りて諸方を流浪し、蓬累して轉輾せざる能はざりしも、西郷の生れたりし鹿兒島は、此の時既に優強の勢力を養ひ來りて、隠然海内に重きを爲し、而して其の風に島津齊彬の知遇を受けしは、境遇として頗る順適なるなきに非ず。然るも僅に丁年に滿つる頃よりして、一身國家の重きに任じ、備に世事の辛酸を嘗めしは、二人者共に之を等しとすべく、ガリバルヂーは海に航して、オデッサ、羅馬、土、京を巡歴し、

千八百三十一年改革後、マルセーユに遊び、マヂニーと親善し、少壯伊太利を組織してサボイ遠征を試み、事遂に成らず、軍艦を奪ひて、カラビニエリの砲臺を取らんとし、復も失敗して如何ともするに由なく、遂にニースへ奔竄し、捕へられてマルセーユに放逐せられ、再び船手と爲りて黒海チユニスの間を航行し、轉じて大西洋を横ぎりて南亞米利加に到りぬ。西郷年二十三、藩内總制論の爲めに二分し、一は順當として齊彬を擧げんとし、一は側室と結びて其の生む所の久光を擧げんとし、高崎五郎右衛門、赤山勳負等諸士、側室の徒與を推かんとし、事露れて自刃するに至りしが、西郷は親しく赤山の別辭を聞き、悲歎感慨措くこと能はず、血痕斑々たる衣に打伏し、泣いて夜を徹したり。

幸にして齊彬困難の中に相續するを得、而して藩政漸く改革の途に就きたりしに、藩中尙ほ此に快からざる者多く、頗に妨害を加ふるあるより、西郷も一時決然として君側の惡を清めんと欲し、實に自ら刀を執りて起たんゝ爲しにき。而もガリバルヂーの如く、爾く無謀の舉に出でざる可らざるの必要に迫られず。たとひ事意の如くならざるにせよ、當時海内第一の名主と仰がるゝ島津齊彬に信任せらるゝに及びて

は、則ち勢可ならずと雖も、猶ほ優に事を圖るに足るべかりき。西郷のガリバルヂーに比して幾許か胸中餘裕あり、練々として迫らざるが如くなりしもの、固より天性の然らしめしところあるも、少壯時代に於ける境遇の如何に繁れりしも、亦少からざらん。但しガリバルヂーは冒險的動作の已む可らざる丈け、其れ丈け變轉極り無きの間に處して、能く其の危矯の技を揮ふを得たり。西郷も冒險の事蹟に富まざるに非るも、等しく冒險にして、越へば則ち異なり。之を波に喻ふ、西郷や大海の山來して層々秩序を失はざるが如く、如何に冒險を試むるも、猖狂の態をなすことなく、ガリバルヂーや、狂瀾の洶湧して澎湃空を打つが如く、或は泡沫四散して縱橫亂飛し、或は渦旋と爲りて旋轉混淆し、其の間自ら亂脈の行動を免れず、動もすれば七顛八倒の奇觀を演ずること之れ無からず。西郷の擧手投足ガリバルヂーに比して儘に一歩偉大なる所あり。而して其の偉大なる所、即ち比較的凡常の觀を呈する、是れ宛に避く可らざるの事とす。

第三 死地に陥る

世には西郷を以て死を鴻毛の輕きに比し、成

敗れ鈍く如何を顧みざる者と爲し、其の舉動の磊落奇偉なる、蓋し前古稀れる所とするあるも、此の點に於ては一籌をガリバルヂーに輸すべく、西郷が一生の經歷は、時に奇變極り無きが如くに視らるゝ無きに非ざれど、其の中に於て自ら整然たる秩序の存するあり、未だ變動して無分別の舉に出でしは曾て之れ無く、其の爲す所は固より時勢に恵まれたりしなるべきも、事毎に蹶め結局の成功を期して進みたりしものの如く、猪突して前後の計を忘るゝに至るは、是れ其の眞面目にあらず。其の萬難の間に出入して試爲に至らざる無く、九死に一生を得て僅に新生面を開き、波瀾あり、頓挫あり、後人をして其の短歴史を通過して、思考に違あらざらしむる者、即ちガリバルヂーに在り。ガリバルヂーの一生は複雑にして急劇變轉、瞬時に底止する莫く、忽ちにして大空一碧、明澄鏡の如く、忽ちにして陰雨晦冥、一天墨を流すが如く、一たび猛進するや、前後を辨するなきが如く、頗る智慮を缺く觀ありて、而して其の一難は一難を経來るの間、勇氣益々倍加して、奇能縱横に進出するを常とす。彼れ本國に事成らず去つて南亞米利加に航するや、時にリオグランデ、共和国、ブラジル帝國と疊端を

開き、干戈方に酣なり。ガリバルヂー乃ち輕舟に駕し、十二人に長とし敵艦を撃ちて之を奪ひ、屢く戦ひて屢く勝を制せしも、時遂に利あらず、重傷を蒙りて身亦擒へられ、牢獄に投ぜられて、顔面をしたゝかに管撻せられ、適く人の救助するに遇ひ、逃れて虎口を脱し、復共和國の爲めに戦ひ、或は寡兵を以て堅壘を攻め、或は單身敵陣に入りて奮闘し、或は屢く數隻の小舟を以て優勢なる艦隊に當る等、あらゆる權數を盡し、も、寡は衆に敵せず、舟は破碎して、其の股肱と恃みし者、或は溺死し、或は負傷し、僅に身を以て岸に逃れ、此にアニタを娶り、妻と爲し、が、共和国の形勢日に益々非にして、己れ亦一子を擧げ、公私の困迫愈々急に、復策の施すべき無く、去つてモンテビデオに到り、或は家畜を飼はんとし、或は仲買と爲り、或は數學教師と爲る等、専ら衣食の計を爲し、も、未だ幾くならずして、ウルグエー共和国とアエノゼレーとの間兵争俄に開始す。共和国乃ちガリバルヂーに委嘱し、小艦隊を以て敵の大艦隊を巴拉ナ河に撃たんとことを以てせり。而も是れ實に敵が彼を殺さんとす術策に出で、若し一步を認る、則ち徒死の外

局を脱し、以一取無きを得たりき。其の後共和国益々振はず、四百人を一隊とし、海に陸に、經營慘憺、然る後微し功あり。四百人乃ち共和国中軍隊の首位と爲れり。其の伊太利本國に事あり、報に接して本國に歸りしは、實に斯る地位に在りし時なり。西郷は少し此れと異なり。彼れ素より夙に島津齊彬の爲めに重用せらる。彼は當時の所謂武人なりしかど、自ら劍を抜きて戦ひしこと無く、其の江戸に出でて天下の志士と交遊するや、時に阿部正弘閣老として幕權を執り、能く諸藩の説を徴して忠言を納るゝに吝ならず。島津氏の如き、蓋し其の最も善遇せられし者、而して水戸は徳川の親藩にして勢威宗家、右に在り、人材の彬々として多士なる、時恰も列國の交通五帝に請ふに際し、一藩の中早くも既に議論の一定せるあり、皇室を尊び、幕府を援け、民心を一にして大に海外に當るに在りて、之が爲めに廣く諸藩の有力者と結び、各其の藩主の爲めに説くあらんとせしに、水戸の有力者は不幸にも地震の爲めに死し、阿部亦久しからずして逝き、次いで幕府の基礎漸く動搖して、内には曾て争鬪の絶ゆるなく、而して端なくも將軍繼嗣の問題茲に起りたり。此の時に方り、

幕府の事を用ゐる者、多く紀州を推し、朝廷及び諸藩有志は多く水戸に傾き、兩を執つて相下らず、朋黨比周の増長する所、擠搦構陷を之れ事とし、井伊直弼の如き、殊に力を紀州に致し、かば、紀州遂に立ちて將軍たることを得、井伊乃ち大老と爲る。是より軋蹙益々甚しく、井伊は徳く迄國家の統一を信じて、斷乎として政務を執行し、殆ど快刀亂斬を爲つた概あり。然れども井伊や、剛毅餘ありて頤る時勢を誤解する所あり。當時幕府の漸く衰運に達し、其の力以て諸藩を壓伏するに足らざるあるに拘らず、乃公ある即ち幕府を磐石の安きに置くべしとし、一人威嚴を粧ひて徒らに時勢に對抗し、己れの才を恃みて諸藩の浪士を鎮壓せんとし、志士之が爲めに慘禍に罹る者多く、西郷の月照と、大君のためには何か惜しからん薩摩の迫門に身は沈むとも」といふを辭世とし、相擁して海に投じたりしも、實に此の時なり。西郷蘇生して、薩藩幕府に諱む所あり。乃ち以て死せりと爲し、之を大島に流しぬ。其の海に投じて蘇生し、死せりと稱して大島に流されし所、是れぞ西郷の一生をして戲曲的ならしめし所以の第一たるべく、當時他の幾多濟々の志士に比して、之が傳記に波瀾あり趣味

あるもの、實に此の事あるが爲めにして、其の人物の常短を以て準すべからざる、此の事を以て之を察するに足る。然れども西郷の月照と海に投ぜしは、世人の往々にして議論する所に於て、或は之を以て、西郷を義に勇みて遠國なき者の如くに誇り、或は月照を生かしむる能はず、故に殊更に斯くして死せしめしなりと罵る者之れ無きに非ざるも、而も其の一たび身を海に投じて再び生くるを得、而して遂に流島せられしもの、兎も角、人をして其の凡俗の流ならざるを想像せしむる所以とす。

然れども西郷の此の一事件、之がガリバルデーの崎嶇間關たる酸鼻の生涯に比するに、其の奇は殊に奇とするに足らず。其の一たび溺れ大島に流されしは、ガリバルデーの南亞米利加に飄聞せしに當るべく、自ら死地に陥りしは、即ち一なりと雖も、流島は窮る易々の事、天下擾亂し、志士身を容る、處無きに際し、悠々として閒日月を樂み、以て讀書に親み、以て思慮を練り、坐して上國の形勢を靜觀することを得たる以上、乃ち流島は西郷の爲めに苦痛たらざして、却て以て偶然の幸福とすべく、今日を以て之を言ふ、寧ろ世事遁れの洋行に幾かるべく、之をガリバルデーが南亞

米利加に於て諸方に轉聞し、辛酸を嘗め盡して僅に一縷 血路を開きしよりせば、即ち傳記の材料として、頗る其の奇を減すべきなり。然るに西郷や、ガリバルデーの胸中常に切迫せしに反し、其の器局や極めて博大に、其の氣宇や極めて廓闊に、雖大なる難に於て優にガリバルデーを抜く者、境遇亦之を然らしめしならん。西郷の死地に陥りしや瀟灑なり、ガリバルデーの死地に陥りしや粗糲なり。

第四 時なる哉

天下の事固より一人の能くする所に非ず、時勢亦自ら然らしむる所のものあり。醫の疾を治むるや、其の術他あること莫し、之を自然に愈ゆるに導くのみ。身體の組織は常に新陳代謝して絶えず健康の狀態に向ひつゝある者、疾治は此に幾許かの便利を與ふるに過ぎずして、手を下すも全く其の效無きあり、施術せざるに漸次に平快に赴くあり。其の患加減は體の巧拙の分るゝ所なるべきも、病の愈ゆると愈えざるとは多くは病者自身に在り。英雄の由りて以て成功する所以に就きて之を察するに、其の勢の爲めに惹まれしを多しとすべく、彼の勢威赫々として天下を顛倒し、功名永く後世

を照らすが如き、自己の能力の興る無きに非ざるも、其の周圍の形勢に促さるゝや洵大にして常人の思むるよりも二層甚しきものあり。ガリバルヂーは南亞米利加のモントビデオに落魄し、西郷は薩摩の大島に蟄伏し、自心手を下して企畫經紀する所あらざりしも、勢は突如として變轉し、羅馬法王代り、シシリー謀反し、佛蘭西共和國と爲り、埃地利一揆に苦み、從來專制政治を主張せる者、悉く憲法を發布せざる可らざるに至り、ミラノ人は五日間の激戦の後、遂にラデツキーを放逐し、カルロ・アルベルトは國旗を懸けてチシノを馳え、而して伊大内の内部は正に沸騰して、紛亂其の極に達す。ガリバルヂー是に於てか、乃ち初めて歸國を發念せり。西郷の時亦此の如く、當時幕府の專横なる、何處迄も其の權力を張らんとし、苟も幕府の意に反して、施政の障害たるべき者は、之を一打掃蕩して復餘類ある無からしめんとし、有志の拿捕せられて獄に投ぜらるゝ者踵相接し、西郷も海島に隱るゝの已むを得ざるに至りしが、此の時俄かに岸伊大老の櫻田門外に殺害せらるゝの事あり。國家最上の權力を把持せる者、一朝忽然として白刃に斃れしは、其の天下の人心を

驚動せるや洵に多く、殊に當時の勢、久しく封建の制に慣れて、人々皆門地を重んじ、非伊の大老たるは列藩の毫も疑を挟まざる所、其の極死は尋常一大臣の死と同一視すべきに非ず。櫻田の異變は實に天下の一大事變と見るべかりしもの、當時天下雲の如く雨の如きの志士が、之を聞きて如何に跳躍して氣運の到來を歡呼せしやに察するも、以て其の一斑を窺ふを得べく、爾來乃ち此に一變したり。而して西郷の此の狀を日學せしは、彼が正に大島に流竄中の事にして、西郷もガリバルヂーも、等しく降服せる間に、時勢に轉轉して進行したりしなり。然れども、來る者は或に去るべく、氣運の二人者に順適なるが如くに見えしも、未だ其の二人に舉飛すべき時機に非ざりしこと、後にこそ知られたれ。

ガリバルヂーは新法王の大に救世に意あり、將に埃と戰鬪を開かんとするを聞き、直ちに之を援助せんとし、往復して知照するの或は時日を遷延せんことを恐れ、八十五人と砲二門とを以て、倉皇として程を起し、大洋を亂りてニースに上陸し、進みてゼノバ、ミラノを撃ち、アルベルトのクストツツアに敗れて埃と休戦せるを聞き、乃ちマジニーと合し、之を謀反者とし

て布告せり。然るもマジニー戰將の器にあらざりして、ガリバルヂー亦軍意の如くならず、ミラノの陥落を聞きて大に失望し、其の徒與多く瑞西に罷走し、従ふ者僅に三百人、且つガリバルヂー途にして、救を獲、新法王も人心を失ひ、其の下の爲めに宰相を殺害されて逃亡す。其の後マジニー羅馬共和國を組織し、ガリバルヂー能く軍旅を整へて、傭兵を御けしに拘らず、遂に其の功無く、傭人漸次に侵入して、勢を奪、アベニン山を踞えて埃の大軍に扼せられ、サンマリノに籠れて一夜傭兵を擧ぎ、船に乗じてベニチアに航し、復埃に迫る所と爲り、轉じてラベナの近岸に上陸し、森林の中を漂泊するの際、妻アニタ勞働して死し、平生親善する所の諸友、頻々として逮捕に遇ひ、詰問を經ずして銃殺せらるゝもの多く、自らも遂に擒はれて、艦軍ゼノアに送られ、此にラーマルモラが優遇する所と爲り、幸にして衣食に窮せざるを得て、チユニスに到れり。然るにアルベルトの子、ゼクトリオ・エマヌエレ敗北して埃と平和を締結し、ベニチア陥落して大に力を失ひ、艦隊を再び大洋を横絶してニューヨークに著し、或は蠟燭を製して生業とし、或は

勢に服して少許の貨金を得、止まること六年、然る後去つてサルヂニアの海岸、岩石島のカブレラに地を下して微かなる住居を定めぬ。

西郷は藩命に依りて鹿児島に歸りしが、時に島津齊彬已に歿して久光繼ぎ立ち、藩情一變して復昔日にあらず。小松帶刀、大久保利通等議、參して「道漸く將に熟せんとするの勢ありしも、藩論區々に於て會て歸一する所なく、久光の意見、西郷の執りて以て不可とする所のものなり。蓋し久光の意に以て爲らく、薩藩を以て朝廷と幕府とを助く、即ち事最も可なるに幾しと。而して西郷や列藩を合同して、廣く天下の有志を糾合し、以て國政を更始一新するに在りしが、斯かる西郷の議は、大に變革を要するの困難事にして、事遽かに行ひ難く、久光の一極端者を將軍の後見とし、存望を以て之を輔くるの意見は即ち行はる。然れども當時此の如きの爲す所を以て人心の動搖を鎮靜し、以て逼迫急促して間髪を容れざる中外の危局に當るべくもあらず。海内の尊王を唱ふる者、萬口一辭、必ず一大變革の之れ無かる可らざるを翹望し、所在の勢ある諸藩、亦多く時勢の必至に鑑みて、漸く此に傾くの趨向あり。是に於てか、其の京師に集來して國事を談するの徒、

動もすれば急喚して過激の言動に出でんとし、人心恟々、久光最も之を憂ひ、國家を誤る者は必ず此等浮浪の徒にありとなし、成る可く秩序を亂さざらんとして、益々妹息の策を取り、因循して一も果斷の處置に出づる能はず。固より當時の動搖を制する所以に非ざりき。久光衷心誠奮りあり、而して時勢は彼れ竟に之を達観する、明無かりしなり。西郷や、必ずしも兵を用ゐるの意あらざりしが、當時門閥の徒は概れ謀るに足らず、國力を充實して大に外に向はんとするある、即ち大に志氣を振氣し、新たなる人物と經營を興に俱にせざる可らずして、常に門地ある者を排し、所謂浮浪の徒と事を圖るの狀あり。久光之を見、心に之を快しと爲さず、遂に譴責して徳之島に流し、尋いで沖と永良部島に移し、牢獄に投ぜり。西郷は二年の歲月を幽囚の間に費したり。之を要するに西郷は一の政治家なり。尋常の政治家を以て目すべからずんば、則ち破格の政治家なり。其の議する所は列藩士の合同にして、其の爲す所は王として志士の間に交遊するにあり。曾て兵を執りて立ちしこと無ければ、従ひて戰場に經歷を有する無く、此の處頗るガリバルヂーと趣を異にするの點たるべく、

ガリバルヂーは如何程少數と雖も、必ず之を兵とし率として引率し、事あれば軌ち戦ひ、其の生涯や一箇純然たる武人となすべく、固より時勢の差違は即ち之れあるも、西郷は深沈にして遠慮あるに於て長じ、事變に臨みて猛進し、猪突して退くを忘るゝが如き、是れガリバルヂーの長とする所にして、西郷の一籌を輸せざる可らざる所、快男子としては、ガリバルヂー實に一の好標本たり。但だ其の島に在るの日に於ては、二人者概ね境遇を等しうし、猛烈ガリバルヂーの如きも、カブレラの閑居に於ては、最も平和に、最も沈著に、悠々排憂に従ひて、密かに時機の到來を期待せり。通常所謂豪傑とするは、間斷なく事を持ち續して會て屈撓の迹を示さざるに在るべきも、二人者の殊絶して群豪に異なる所のもの、忽ち活潑して忽ち靜止し、大に力を振ひて一世の耳目を聳動するかと思へば、遽然として身を社廟の外に潛めて復時と相關せず、行動時に波瀾の妙を極むるに在るならんか。是れ二雄の特徵なりとす。

第五 功成り名遂げ身退く

大に動きて時に全く身を世外に逸し、傍觀して密に之が迹を察す、即ち其の人に取りにて意

外の益たること鮮からず。局に當る者は屢々危疑して是非の判斷に苦むことあるも、一たび退きて靜かに變動する所のものを觀る、能く勢の向ふ所を會得し、又兼ねて、己れの何たるやを分明にするを得て、富貴安樂の外、脱然として別に存する所のあるべく、大悟徹底と進に行かざるも、其の人生に就き、多少の悟入するあるは保證すべきなり。ガリバルヂーが一本強漢の故を以てして、幾許か修養の在るが如くに視らるゝ者、一に彼が隱遁して突に社會に望み、世俗の繁華を離れて心を幽靜の界に養ふを得たりしが爲めなるべく、西郷は一般の薩人と略々其の性質を同じうし、寧ろ之を代表者とし指すべきも、而も薩人の特質たる、深慾にして繁華を貪るの習癖あり、己れ官位にありて何等の爲すある無きも、其の地位を固守して失はざらんことを之れ阻め、外淡泊を粧ひて實は金錢を愛しむこと甚しく天下の猾窟なる者薩人に限るとせらるゝ如くなるも、西郷の此の點に於ける頗る脱落せる所あり。斯かるは元天性に出づるを多しとすと雖も、而も其の孤島の中、必ずや靜修し得たる者あるべく、彼が熱誠の迸發する所、冷淡に國事を看過する如きは、到底爲し能はざる所なるべきも、隔絶

せる西南の一孤島よりし、遙かに上國の變動を窺へば、其の狂奔して或は急喚し或は煩悶する狀の、時には喧劇に類するの觀の之れ無きに非ざるべく、又自ら之に據はりて行動を與に俱にするも、必ずしも終始身を此に投じて事に従はざる可らざるの必要無きを悟り、離るゝも離れざるも、成功に於て毫も異なる無きを感じこらん。

ガリバルヂーのカブレラに在ること四年、其の間半島の風雲益々急に、佛蘭西とビードモンとは塊地利に向ひて宣戰を布告せり。ガリバルヂー乃ちビクトリオ・エマヌエルに屬し、佛軍の到着せざるに乘じ、自ら手兵を提げてアルプスに進み、佛兵のマゼンタ、ソルノエリノ等に勝利を得たると同時に、ウアレリス、サンフェルモ等に澳兵を破り、ベルガモ、ブレッツシヤに進みて、遂にステルピオモの絶頂に達し、而してピラフランカの平和條約は此に締結せられ、夫れよりゼノバに到りて伊太利統一の策を劃し、マルサラに上陸してカラタヒミに勝利を獲、尋いでパレルモを降し、遂にミラツオの一勝殆ど全島を平げ、是よりカラブリアに航し、連戦連勝、サンタマリヤを陥れ、カセルタを取り、而して周圍の形勢亦速かに一變し、

全權ガリバルヂーの掌中に歸す。伊太利の死命は、今や彼が意志のまゝたるなり。

然れどもガリバルヂーは、當然に行使すべき權力を用ゐんとせず、ビクトリオ・エマヌエルに會し、庶般の國務を擧げて悉く之に附託し、一切の名譽一切の俸祿之を把握すること能も敵愾を棄つるが如く、飄然として去りて再びカブレラの岩屋に棲進し、淡然として天然を樂しめり。彼や半生落難、雨に沐し、風に靡り、屢々危道を踏みて幸に死せず、辛酸酸め盡して然る後初めて國家統一の功を樹て、己れ才利を享くるに及ばずして遠く海上に退隱す。是れ常人の爲す能はざる所に於て、又豪傑の士心概ね難んずる所、歐大陸人のガリバルヂーを稱して已まざるもの、要は此の爲し難きを爲ししに歸すべく、彼は之が爲めに、有らゆる歐洲の人より其の風采を想望せられて、殆ど半神半人の人たるやの感あらしめぬ。是れ西郷が維新の功業を大成しながらも、衣冠を一擲して故郷に歸農し、時に雄魂を逐ひて日の西に存くを忘るゝの境涯に比すべく、東西英雄の爲す所符節を合はすが如き者ある、異とすべし。

ガリバルヂーは伊太利の統一を圖り、西郷は日本の統一を圖れり。其の統一を圖りしよりし

て之を言ふ、即ち二者相異なるなけれど、ガリバルデーは常に兵力を恃みて之を切り従へんとし、西郷は寧ろ政治家の態度を以て之を遂行せんとす。固より西郷といへども、其の恃むべきは武力なりとし、一目も之を忽にせしことあらざるも、而も其の事を爲すや、逆め謀りて能く利害得喪を稽へ、獨力若し能はずんば、他と聯合してなりとも必ず勝利を期して事に著手し、其の天下の形勢を揣摩する所、頗る巧みなものあり。然れども此の處往々にして薩人の代表とも見るべき者無きに非ず。薩人は外朴實にして事を解せざるもの如く、義のある所突進して顧みざるの風なるも、實は利害を見る甚だ敏に、己れの愚を利用して私福を營み、名聞に殉ふるよりも勢に依りて事を爲すに長じ、之が名聞は最も其の勢に適合せる所のものを選ぶに在りて、初より必ずしも之を重んじてには非ざるなり。西郷は比較的道義の念貫徹の情に富める者、而も其の勢の間を巧みに潛行する所、薩人の特徴を失はず、決してガリバルデーの如く爾く疎狂なるに非ず。長州人は頗る狡猾の邪智に長するが、而も名の爲めには時の満腹の野心を離きて事に當り、動もすれば名の爲めに倒るゝ事無きに非

ず。元治元年長人の兵を執つて京師に向ひし時の如き、實に他に率先して勇進せるもの、若し薩にして尊王の二字を以て事を斷ぜば、此の時を以て宜しく之に和すべき者、而も西郷や之に應ぜず、却て兵を以て之を撃破し粉砕したり。蓋し是より先き、薩長屢々相合はず、時ありて薩或は長に凌がれんとする恐れあり。薩之を快しとせず、機會を得て一たび大打撃を加ふるを欲し、這回の事の如き、實に此の意に出でしものなり。西郷や此を以て毫も幕府を助くるの意なく、一たび長を挫きて然る後之と連合せんと欲し、もの故に其の既に長を破るや、之が處を好遇して放還し、又征長の師に従ひて其の議に參し、急速事を了して簡易の處分を行ひ、尙ほ種々恩恵を施し、以て長と結ばんことを謀れり。長は困厄して他と結ぶを怯し、高杉の徒、殊に薩を罵詈し、降參せば或は許す事もあらんと言ひ、銳氣當るべからざりに、西郷乃ち從容として答ふらく、降參との仰せに候はゞ降參を仕らんと。長の壯士は、之が爲めに拮据の拔けたる感なりしとぞ。此の時の場合の勢、既に已に周圍より促進せるも、薩は暫く長を翻弄したりしのみ。幕府が長に處する所以の道に於ては、未だ十分と爲す

べからざりしも、而も當時勢運已に衰微して、飽く迄事を遂行せんとすの意無かりしに、朝廷に長は長を強禁關に近きしを怒りて幕府の處分に屈き足らず。長亦再び事を起すの用意頗りにして、親藩の士往々當路者の優柔を議して已まず。勢ひ幕府は再び征長の師を興し、腐敗して以て威信を樹つるに従事せざるを得ず、窮厄の中僅に兵を募りて軍を起し、が、薩は戦の名無きを言ひて之に應ぜず、斷然斷絶して密に恩を長に賣れり。幕府の疲弊其の極に達し、兵を出し、糧を養みて戰ふは更に最も困難事とする所、而して諸藩の勢に應じて長陽の境に蒞む者、亦死を決して戰はんとする無く、只儀式迄に兵を繰り出し、のみにて、かの薩にして無名を辭とし之を謝せる以上、之に倣ひて此を以て之を辭せんとする者多く、幕府の苦悶は殆ど言語の外に在り。二百里の外に兵を集むるは、平時と雖も易しとせざる所、戰ふの實利あらざるは分明にして、幕府の識者或は之を知りて之を止むるあらんとせしも、而も勢の驅れる所奈何ともする能はず。第二征長の師興りて幕と長と二つながら苦み、薩獨り力を此の間に養ひて態揚として笑ひ、乃ち長を率ゐて諸藩合同の中心たらんとし、西郷等

の胸中自ら成竹の在るあり。薩人は單純ならず。

是時に當り、幕府の困迫益々甚しく、必ず軍斷決以て一大變革を要するの秋に逼れり。國事の紛擾日に甚を加ふるに、諸藩の間、氣脈の疏通するある無く、三百諸侯各々三百諸侯の心を有して國政爲めに一致を缺き、之を匡濟し之を刷新する、必ずや大の根本的更革を求めざる能はず。時に慶喜入りて任に將軍職に當る。其の人忠悃にして國事を憂ふる淺からず、又能く時務を知るの明あり、懇勉して治を圖り、銳意して弊を矯め、能く人言を聴き、遂に政權を奉還して朝廷の下に列藩を會同し、以て庶政を議するに至るの氣勢に及ぶ。然るに幕府に快からざる者、事の爾々容易に行はるるを欲せず。薩は既に其の與し易きを看破し、必ずや兵力を以て之に加へ、以て天下の耳目を一新せざる可らずとす。陰雲漲り黒風催し、天空濼々たるに方りて、乃ち雷霆の轟然雲下するを免れず。海内の情勢已に紛擾殺亂す、即ち一たび血を流すの快舉に出づる無き、以て人心を治むるに足らざるべく、所在の人士皆殺氣を帯び、徒らに骨肉の數を爲して軼々たるに於ては、何れかに發散洩泄するの餘地あるを要す

とし、勢の向ふ所に月に明白を加ふ。慶喜の主張する所道理に合し、天下の諸侯と會し等しく國政を議す、即ち國家の事はより漸く緒に就くべかりしも、殺氣を洩らすの一策は遂に得べからず。國政統一の順序は一定して動かざるも、先づ戰爭に由りて天下の耳目を驚動し、人心を一新して然る後事を行ふの已むを得ざる者あり。事を好むの徒、強じて幕府の爲す所を妨害し、故らに會津桑名を激せしめ、遂に鳥羽伏見の戰爭と爲り、而して幕兵一敗地に塗れて、三百年の霸業此に全く墜落し了る。若し其の經る所に就き一々之が名義を正す、即ち幕府の順序を得たるを多しとせんも、而も靈の蕩きて天の晴るゝは勢なり。人間亦終生謹嚴なるべからず、時に笑ひ、時に怒り、時に泣くことあり。社會の動靜を胸中に潛め、靜陰の積重するや、一震して之を崩す。西郷は理の能動的なる者、ダイナミックなる者か。幕府の與し易きは、當時苟も常識を有する者の等しく看破せる所なるべきも、而も偏く唯嗟の間に戰爭の起るべしとは、諸藩の多く待ち設けざりし所土佐の如き實に然りき。但だ幕府に在りては勝の如き、夙に大勢を洞觀し、事の必ず此に到らざるべきを豫知し、官軍大舉し

て東に下るや、早くも策を決し、江戸城を開きて之を西郷に引渡せり。事此に至り、會津に、長岡に、函館に、偶々戰爭の起るあり。唯大潤の一餘波たるに止まり、毫も大勢に關するある無く、權力果して朝廷に歸し、西郷功第一に居り、而して身放山に歸服し、暫く政界の風塵を避けて自ら休養す。其の勢を起く所に由りて進退する所、眞に巧妙の技あり。固より西郷といへども、其の自ら豫めせざして、知らず識らずの間勢に乗せるの多からんも、之をガリバルデーに比するに、必ず初より大勢に由りて動くことを期し、無事第一に出づるは、決して驚かざる所、而も一世の潮流を匪例に挽回して赫々の功業を立てし所、西郷もガリバルデーも、共に勢に恵まれたる無くんばあらざるなり。若し勢の爲めに勝てば、勢の爲めに或は敗れん。成功と失敗とありて、茲に初めて人物の眞價を明かにすることを得んか。

第六 再び起つ

ガリバルデーの死せる、タイムズ記者之を傳し、且つ曰く、將軍が一切の功業を君王に委ね、榮譽報酬悉く其を辭してカブレラ島に隱退せしは、誠に光榮の絶頂に達せしもの、若

し航海の間に破船したるか、或は是再び大陸の土を踏まざるの決心を以て程に上りしならば、其の一生の偉績は永く冥陟に屬し、世人は應に彼を尊崇するに平神人等を以てし、全く凡俗の感情を脱離せる者と爲し、ならん、凡俗の感情は實に神的分子を滅殺するものなり、而も情いかな事は遂に然る能はざりきと。西郷の南船北馬大功を維新の際に樹て、然る後飄然去りて故山に歸りしや、一時の境遇亦ガリバルデーと相似たるあり。當時西郷にして郷里に病歿せしか、然らずんば隱退の後再び廟堂に上らざりしならば、必ずや後世其の人物を想像して、襟度の量る可らざるを驚歎したらん。而も是れ亦遂に然る能はざりき。何ぞ兩者の境遇相類するの甚しきや。然れども西郷のガリバルデーと其の趣を殊にする所亦之れ無きに非ず。ガリバルデーは素膽大にして敢爲の氣に富めるも、慎重周市の慮に乏しく、進退動止唯一旦の意に判りて決し、忽然として進み、倏然として退き、擧手投足毎に輕卒に失するも、西郷、此と違ひ、一進一退必ず大局の上に於てこれを定め、決して苟もする所あらず。故に一代の功績、其の最も重要なものは即ち維新の際に在りしと雖も、維新の後に經營せる所、尙

ほ頗る觀るべきものありて存せり。ガリバルデーは企劃して已むなく、孜々として倦まざるも、其の企畫する所餘りに疎漏に過ぎ、曾て深謀遠慮の在るあらず。西郷や一代の才す所多く他人の手に依りて設計せられ、時には則ち事意と相背馳するありしかど、而も其の進むや苟もせず、退くや亦苟もせず、一旦敗るゝも泰然として動ぜず、宛も一定せる順序の豫め其の胸裏に存せるが若かりき。維新前の事を以て論ずれば、二人者の功業は殊に軒輊するあるを見ず、或はガリバルデーの如て古英雄の資格を具備せること多きやの形なきに非ざるも、爾後二人者、共に失意の境遇に沈淪せるの時に方り、均しく失意の境遇に在りて猶ほ舉措行動の大に觀るべきありしは、西郷遂に他に優れり。普通に謂ふ所の名譽よりせば、西郷の傳記は、維新後に於ける行事の虧缺せるを可なりとせんも、其の人物の雄大豪爽なるを表するが爲には爾後の行事の一をも缺くを得ず。其の一代の事業に抑揚頓挫大波瀾を示すの趣あるもの、實に此に在り。ガリバルデーは一たびカブレラに隱退して静境に居りしが、後議員に推選せられて議場に出席せり。議院に於ける駈弓は其の得意とせざる

所、事の不適當なる之より甚しきは莫かりしも、四圍の勸誘止む可らざるありて遂に口舌を以て議會に争はんとするに至れり。偶々ガリバルデーが墳墓の地ニースを佛國に割讓すること、及び其の嘗て將あるる義勇兵を親兵と合し、組織皆均一ならしむること等の議案、前後して場に上り、彼れ乃ち議會に參して大に討議に従事せしも、議論は元より其の長ぜざる所、カウールの巧に精明反駁し、論理的鋒銳の當るべからざるありて終に自ら言ふ所を知らざるに至り、友人が斯場に討論するの徒勞なるを勸告するに會ひ、暫々として去りて再び巖窟に歸れり。西郷は此の若く輕卒ならず、一たび郷里に還るや復容易に出づるを肯せず。乃ち黨政に努力して郷黨の爲めに盡し、出でて大政に參與せんことを強請する者あるも遽に應ぜず。其の強請せられて尙ほ出でざりし際、實に多少世を連れんとの心なきに非ざりしが、當時の形勢、未だ直ちに從來の功業を以て甘んじて隱退するを許さざるあり。又將來を考慮せば更に大に力を致さざるべからざるあり、且つ此に應ずるには實力の養成を必要とするよりして、藩地に隱退せる間も徒らに優游自適せず、偏に實力の養成に汲々とし、根據を鞏

くし兵力を蓄へて然る後大事を斷行する方法を畫せし者にして、其の靜止するや、即ち大に行動しつゝありしなり。時に中央政府の威信猶ほ未だ遍及せず、加ふるに革創の際として、施設すべき事餘りあり。人皆不安の念を懷き、西郷の勇斷を須つに非ずんば維新の鴻業終に完成すべからずと爲し、仍て數千人を派して意を致ししも、彼れ敢て動かず。後岩倉の救命を荷み、大久保木戸等と與に到りて大命を傳ふるに及び、輒ち蹶然として起ちて東上せり。

西郷既に郷里を出でて廟堂に登る、果然種々の改革の斷行さるゝあり。鹿兒島に在りて訓練せる五大隊の兵、唯其の一を留め、四を朝廷に入れて親兵と爲し、權方の基礎を茲に定め、次いで政治區々に出でて統一を缺けるに因り、宜しく木戸をして之を綜理せしむべしとの議を提出し、而して木戸の辭退するや、大久保の議を納れ、木戸と相並びて政務を綜理せしが、實際首腦と爲りて綜理の任に當りしは、即ち西郷其人なりき。是より廢藩置縣の議の決行せられ、徵兵の令の新たに施かれ、帝國の面目益々革まらんとす。斯かるは悉く西郷の發案に係れるに非ず、又爾し施設するの考慮の豫め彼の腦裡に存せしにも非ず、多くは他人が設計し

審議して西郷の賛成を求めたるものなるも、若し西郷の此に賛成する微かりせば、其の決行や實に難かりしなり。設計し立案する才は西郷の缺く所といふと雖も、大勢を達觀して概略を鑒識するの明に至りては、他の輒ち企て及ぶ所に非ず。故に議案の出づるに方り、其の條款項目の若きは特に査問するなく、唯大體を聽收して是非を辨識し、時の狀態に應じて國家に須要なりと認めて、然る後に一言賛成の意を表す。而して其の一たび贊否を言明する、復敢て事を二三にせざるなり。當時西郷の無かる可らざるや斯の如く、隨て其の負へる威望も決して皇師を率ゐて東下せし時に譲らず。

其の後時勢の推移意外に急劇にして、國事の變替せる、西郷の豫め想察せしよりも更に一層速かなるあり。西郷は大難の必ず起るべきを憶ひ、身を以て其の衝に當らんことを期せり。以爲らく、維多の事務は他人當に此を爲すべし、時運最も困難なるに際して我れ自ら此に當らんと。乃ち兵力を以て彼の頑硬にして朝命に服せざる者を屈服せんこと、眞に其の期待せし所、而して周圍の人亦皆此を以て望を西郷に屬せしが、事の實勢は決して斯の如き困難を惹き起すべくもあらざりき。是より先き封建

の制は既に壞敗の狀を現はし、閩閩者流は唯空位を擁して實務に與らず、實際事務に執掌する者は則ち庸筆足輕の徒にして、夫の維新の時所謂志士なる者が實權を掌握したりしといふも、決して志士其の人の才力超過なりしか故に非ず。當時三百諸侯は猶ほ舊時の面目を保ちて居然儼立せしも、閩閩者流は概して名ありて實無く、苟も實務の擧げざる可らざるあるに際して其の衝に當る者は、閩閩者流に非ずして即ち卑賤の地位に在る者なりき。偶と運船の近海に出没し、次いで各國の交通を強迫し來りしは、實に此の活動の機會を與へしもの、乃ち内部に潛匿せし勢力の、之に促されて遽然として外面に發露し、虛名は其の要を喪ひて、實才ある徒の次第に地步を占むるに至れる者にして、所謂志士なる者が頻に要路に立ちて

政務に參畫せしは、即ち自然の順序なりしなり。斯くして維新の大業成り、廢藩置縣の令も容易に行はるゝを得たり。然れども裏面の潛勢は容易に判知し難し。當時局に當る者は猶ほ多く形式の存在に重きを置き、以て難事の必ず發生するべしと爲せり。西郷も自ら決心し、他人亦西郷に倚りて劃討の功の擧ぐべきを思ひ、皆風雲一過然る後維新の大業初めて成就し得

べしと爲せり。然るに其の至難と爲し、所も、一令にして直ちに行はれ、爾後命令更改の憂は則ち之れ有りしも、兵力を假りて違背者を責罰するの必要あること無く、死を以て事に當らんを決心を懐ける者は、事の案外に無異なりしに失望し、空しく刀を敲いて、其の用ゐるべき處無きを嘯てり。西郷は初めより此の機に乗じ、軍隊を提げて大に爲す所あらんことを期せし者、而も遂に何の爲す所も無くして已まざるを得ざるに至り、其の養成せし健兒も皆用務無きに苦みて、竊に存事の時の到らんを望みしが、時に細新の事業漸く其の緒に就き、政府の事務は復往日の若く壯快なるを要せず、寧ろ却て小心周慮、繊細なる條目を遂うて案を立つるの必要あり。従て種々の法案の提出さるゝある、殊に西郷の斷乎たる勇決に須つ所あらざるなり。西郷は大事に當らんことを欲して大事無く、唯日夜繊細なる雑務の處理さるゝを見るのみ。而して繊細なる雑務の處理は、事務の能を抱く者に須つ所多し。爲めに嚮に己れの小人なりとして重視せざりし者、案外に手腕を伸ばすことあり。延いて廟堂の上に權力の競争を生じ、動もすれば己れ自らも、要無しとして除外視せらるゝ無きにあらず。

元西郷は官職に戀々として久しく空職を守らんことを望む者に非ず。特に細事の爲めに他の争闘し猜疑する状をみて、彌と心に快きことを得ず。但だ偶々岩倉大使と爲り、木戸大久保之に副として政府の者多く海外に出で、朝廷の大事皆還歸の目を俟ちて決すべしと爲ししに因り、暫く忍びて眞に備はりしのみ、然れども當時國家の事、猶ほ正に改革の機運に際せり。若し爲さんと欲すれば爲すべき事多く之れ有り。更に眼を海外に注げば、多様の冀望亦隨て萌生し來る。而して是れ皆西郷の勇斷に須つあるに非ざるは莫し。是を知る、西郷の繊細なる雜務の處理に與るに適當せざりしは、恰もガリバルヂーの議事に短なりしと比較すべく、寧ろ失意の境に沈淪するを免れざりしと雖も、亦ガリバルヂーの如く徒らに喪敗を以て終る者にあらず、其の胸中猶ほ雄圖の遠く尋常人の思想を邁絶するものありたり。

第七 進退の機

人事は一律に解すべからず。此の人の性は此の如し、故に其の計畫する所應に此の如かるべしと言ひ、彼人は彼の事を開始せり、故に其の性應に彼の如かるべしと言ひ、性質に判りて

事業を察し、事業を見て性質を稽ふ。而も其の真相を猜し得て能く申れるは多からず。蓋し事や概して四圍の勢に支配され、或る事の經營さるゝ、必ずや幾回か個人の力の顯るゝあるも、四圍の勢の強き、此を掩没して殆ど見る能はざるに至らしむ。特別に個人の力量の大ならんには變動の起るに際して彷彿の間に之を認め、以て少しく其の人と爲りを料るべきのみ。人の事業を經營する、此が動機と爲るもの素一にして足らず。強ひて此をして一ならしめんとして互に相争ふは、寧ろ笑ふに堪へたり。ガリバルヂーと西郷とは、共に個人としての力量十分に外に發現し、其の特色は如何なる境遇に在りても認め得られたるも、只状態の變する方りてや、即ち事の心と違へること亦渺からざりき。今夫れ百事創業の時に際し、強ひて改革を計れば、二廢一興一壞一成遂に限りあるべからず。而して紛々擾々之間に處する自ら二陳の見解の在るあり。眼を境外に瞻せて國權の擴張を計る、一なり。意を國內に注ぎて内治の改良に務むる、二なり。凡そ國の立つや、獨り離れて存在するに非ず、交るべき幾多邦國の域外に存するあり。乃ち外に對して計る所無かるべからず。然れども内部の審議、國政の安寧、

亦須臾も忽にすべからざる所、宜しく意を此に致さざるべからず。國權の擴張と内治と整理との偏廢す可らざるや明かなり。而して其の偏廢す可らざるは人皆之を知るも、兩者の孰れに傾くかは、實に其の人の性質如何によりて別る。試みに人の山水に癖する者を觀るに、同じく風景を愛するも、或る者は前麗の美を好み、或る者は跌宕の壯を喜ぶ。而して其の流麗と跌宕と孰れが勝れるかに至りては、誰人も明言し能はざる所と雖も、其の各々偏する所あるは、則ち孰れかに癖すればなり。之と均しく、國政に臨む者にして、或は内治を先にし或は國權を先にする、必ずしも初めより考慮の熟せるあるに非ず、其の時の勢に依りて是認する所を主張し、却て恰も年來確信する所なりしかの如く見ゆることあり。而して是とて一に性質にのみ囚れるに非ず。性質に於て應に然るべしと考へられざる者にして却て爾く傾くことあり、又爾く傾くべしと考へられたる者にして全く之に反するありて、之を多數の上に徴すれば、頗る怪訝すべきものあり。ガリバルヂーと西郷と亦共に、勢の動かす所となるを免れざりしが、其の衆人と同じく勢に動かさるゝの際に在りて、尙ほ個人的特色の顯然たるあるは、即ち偉大

なる力量の存したる所以なりと雖も、其の主張し實行せし所を以て、或は年來の熟思に出でたりと爲し、或は臨時の偶思に過ぎずと爲し、臆測を逞しくする所あらば、恐らくは、人に望むに多きを以てするに失せん。

伊太利統一して國家の事情に更始されんとする時、偶々二派の政黨の議會に現はれたるあり。一を右黨と云ひ、他を左黨と云ひ、而して兩黨更に幾多の小派を包有せり。右黨はカヴール此を総理し、次いでリカソリー、フアリニ一等早く歿し、セルラ、ミンゲツチ、ヴィスコンチ、ヴェノスタ等、皆黨中の錚々たる者なり。左黨はラツタツチー此が首領たり。初めカヴールと與に俱にせしが、後分れてガリバルヂーの一派と結び、クリスピエ、ニコテラ、カイロリーを率ゐて共に立てり。元ガリバルヂーは必ずしもラツタツチー輩と事を共にする者に非ず、而して其の此に至りたるもの別に故あり。ラツタツチー性願劣にして權數に長ず。ガリバルヂーの名望隆々たるを見、此を利用せんとして頻に結託を計る。ガリバルヂーは豪放の質、思慮粗大にして周密を缺き、能く隱微を洞視して人の心胸を料察するの明無し。是を以て屢々他の利用する所と爲るを免れず。但畢生の主

眼とする所は全伊太利を統一して、外に向つて人に國權を伸張せんとするに在り、夫のカヴール派の内治に汲々たる全く相反せり。カヴール派は只管内治の改革に邁め、動もすれば外交に讓る所あり。其の戰勝の後、久しからずして地を佛國に讓與せるは實に之か爲めなり。此に由りて改革の効果の擧り、百事稍々整備に就きしと雖も、其の内治を計るが爲めに外に讓れるあるは、ガリバルヂーの特に不快とする所。ラツタツチーの一派能く這間の情を察し、乃ち此を挑發して遂に彼に反對せしむるに至れり。是れガリバルヂーのラツタツチーと共に立ちて、カヴールに反抗せる所以なり。ガリバルヂーの主眼とせる所は、斯の如く國權の擴張に在りて終始渝るあらざりしが、其の考慮の淺薄にして舉措の輕卒なりしは、寔に憫むべきものあり。初めカヴール歿してラツタツチー權を執り、右黨と結びんと欲してガリバルヂーに約するに、埃地利人と戦ぶが爲め一百萬フランを供給することを以てせり。後其の事行はれずして止むや、ガリバルヂー人に勧誘せられ、佛人を羅馬より逐斥せんことを計り、僅に部下數人を率ゐてシシリーに上陸し、更に少許の壯丁を聚めてカラブリアに渡り、此處に佛兵驅逐の軍隊

を組せんことを期せり。ラツタツチー事の餘りに暴なるに吃驚し、倉皇帥を遣はして其の進路を遮り、蹶ひてガリバルデーを傷け、之を捕へ囚置すること數日、終にカブレラに送還せり。當時美は深くガリバルデーに同情を表し、大醫バルドリツヂを遣りて治療に努めしめ、後ガリバルデーの英國に來り遊ぶや、非常の款待を以て之を迎へり。而してラツタツチーの内閣は、ガリバルデーに對する處置の宜しきを失せるの故を以て終に倒れぬ。後二年にして、普塊の驟起り、ガリバルデー兵に將として普塊爲めに由て戦ひしが、壞兵の敗る所と爲りて傷を被り、且つ病を得てカブレラに歸れり。尋いでラツタツチー再び權を執り、頗るカヴェールの外交を踰襲する所あり、以て能く拿破崙帝を欺瞞し得べしとして羅馬を圖れり。是に於てガリバルデーの子メレッツチは法王領の境に義勇兵を囂衆し、ガリバルデー自らゼノバに上陸し、更にフイレンツに進みて群集に告示する所ありしが、政府其の言を過激なりとして此を咎責し、捕へてカブレラに送還せり。ガリバルデー更に逃れてレッグホンに上陸し、再び法王領に迫る。而も法王の兵に加ふるに佛兵の救援を以てするありて、之が爲めに敗られ、失

望して又カブレラに歸れり。ガリバルデー島に在ること三年、偃々獨佛軍を啓きて佛兵羅馬より撤退し、斯くて羅馬は伊太利を領有する所と爲りて、統一の業茲に全く成りしが、ガリバルデーは遂に最後の功に與ること能はざりき。既にして獨軍連勝、勢破竹の如く、鼓行境を踏えて佛國を蹂躪するや、ガリバルデー乃ち一種の俠氣に動かされ、多年已れを審めたりし仇敵を援助するの念を起し、島を出でてカムベッタとツールンに會し、兵に將として獨軍と戦ひしが、ベルデルに破られて全軍敗虜に歸せり。而して佛人の輕薄なる、却て其の敗虜を怒り罵りて止まず、終にガリバルデーをして罵詈聲裡に退きてカブレラに歸らしめたり。斯の若くガリバルデーは終始兵を執りて國權を伸張するに汲々とし、而して常に失敗してカブレラの嚴窟に退かざるを得ざりき。此を以て維新後に於ける西郷の行事に比する、勢頗る似たるありも、而も西郷は決して彼の若く無謀ならざりしなり。

初新の初、西郷は衆と共に國事に奔走し、頻に國政の爲めに盡瘁する所あり。而して和衷協同は夙よりして既に困難なりしが、西郷は猶ほ其の困難中に在りて殆ど内閣の中心と爲り、以て改革を斷行するを得たりき。此の時に方り、政治上の意見は區々に岐れ、未だ政派として分立するの甚しきに至らざるも、相互の間に於ける權力の抗争は亦頗る熾烈を極めり。岩倉大使と爲り、木戸大久保、藤之一副とし、歐米巡回の行を了へて歸るに及び、内治國權の二派遽然として分立せり。實に當時の事情は多樣にして、人の考慮する所は其の面々同じく異ならざるを得ず。其の争ふ所は獨り海外に使したる者と内地に止まりたる者とのみならず、海外に使せる者は海外に使せる者と相争ひ、内地に止まれる者は内地に止まれる者と相争ひ、斯くて木戸は大久保と好からずして又伊藤と好からず。而して井上は財政の困難よりして職を辭し、爲めに頗る騷擾を致し、後幾くもなく征韓の論起り、西郷は江藤後藤板垣等と議を同じくせり。由來征韓論に就ては疑議の存するもの二三のみならず、人の考ふる所は固より一以て斷ずるを得ざるも、而も此に贊成するとせざるとは、猶ほ幾許か其の人の本來の傾向の現はるゝ無しとせず。西郷は毎に國權を擴張するに意ありし者、其の果して如何なる手段を以て孰れの方に向ふべきやの成算は之れ無かりしも、國家を負ひて大に世界に雄飛せ

んとの志望は居常秀麗の間に露はれたり。是れ其の人の爲りの然らしめたる所にして、如何にして世界に雄飛すべきかに就ては、明かに計畫の定まれるるに非ず、唯力を東洋に伸べざるべからざるを信じ、苟も力を伸ぶべきの機ある、即ち悔びて此に應ずるの状あり。機を相て勢に乗ずるは即ち其の長ずる所、勢の來らざる間に茫漠として定まらざるか如くなるも、一たび機の到るを察すれば、乃ち斷じて疑ふあらず。征韓の事を以て、直ちに西郷が本來の思考し計畫せる所なりと謂ふは大に不可、西郷の此の議を主張して敢て讓る所あらざりしは、此の好機會を利用して以て東洋に雄飛するの手段に供せんとせしのみ。且つ當時維新の役變に終へ、武人皆用兵の念に切なるの際、朝鮮政府我が日本人の其の地に在る者を攘斥するの難動ありと謂く、更に兵を此に加へんとするは其の自然に想ひて到るべき所、是に於て西郷は一意征韓の切要なるを唱へ、板垣此を贊し、江藤後藤亦此に利せり。而して此の議を主張するに最も愚めしは、西郷よりは寧ろ板垣等なり。是れ薩長に對して別に工夫を運らせざるありて然りし者にして、後藤江藤の如き特に然りとす。即ち大に外征を利用して、以て内

地に於ける權力の位置を一變せんとするに意ありしなり。獨り西郷は彼の若き個人的考慮を度外に置き、敵愾の念大に勃發せるの時に乘じて力を海外に揮ふの利なるを判斷して、此に意を決せるもの。而も其の部下よりして見る、即ち此に由りて大に薩摩の勢力を養ひ得べきこと、亦略々たりき。其の各自の行ひし跡に徴して眞意の存する所を察すれば、實に奇怪の至りとす。即ち眞意の存する所を察すれば、爾く奇怪なるもの存するありしと雖も、西郷は此の時既に意を決する所あり、征韓の事竟に已む可らざるを説き、直ちに兵を彼に加へず、己れ先づ使節と爲り、彼國に渡りて彼と談判を開かん、若し不報にして其の殺す所と爲らば、然る後諸君大に進みて兵を加へよとの議を執りて動かざりし如き、事に臨みて頗る順序を得たる者あり、而して彼に對する作戰の議、當時亦實に之れ有り。西郷は所謂袋攻めを主張し、盛に北方の境壤より兵を進めて京城を包撃するの利なるを主張、兩島之に賛成せしが、板垣は執て不可なりと曰く、畿北邊の境壤より包撃するも、此をして孰れの方角より進進するに道無からしむる事に極めて難事に屬す、寧ろ江華灣の方面より兵を進め、其の

進ぐるを追ひ、更に汽船を以て北方に急進し、之が道路を遮るの可なるに若かざるべしと。西郷乃ち英爾として笑つて曰く、兵の事は君の長ずる所、それ必ずや君の言の若くならんと。是れ固より眞の軍議ならざりしも、當時實に此の議ありき。斯かる時に於て、海外より使節の歸り來りたるあり、岩倉木戸大久保伊藤等皆朝に列せり。是れ皆和合勸導せしに非ず、行旅に在るの間より往々意見拮据して懐に不愜なき能はざりしが、歸來閣議に列せるの時、皆非征韓の議に一致せり。其の此に至りしもの、固と種々の事情の存せるあり。諸氏皆親しく歐米の地を踏みて其の文物の盛なるを觀、大に内治を語るの切要なるを曉りて、著手に一日も忽にすべからずとし、特に岩倉は甚だ努むる所あり、海外の形勢に臨じて、今の時徒らに兵を朝鮮に加ふるの得策に非ざるを唱道し、遂に群議を廢し非征韓に決せり。仔細に内治の諸政を考へ親しく施設の任に當りし者は、實に此の非征韓者流にして、明治の政府は即ち此の一派の權を執り來りしもの、内治の改善、勸業の具備に於て負ふ所誠に夥しとせざるも、征韓の議に對しては、見く明必ずしも當を得たりと謂ふべからず。

獨り當時論せる所の曖昧なりしのみならず、其の暗闘せる所、亦多く諷安を極めり。朝鮮に兵を加ふるを以て非常の困難事と思へるが如き、實に然り。當時征韓論者中にも、同じく此の感懐を懐く者無きに非ざりしが、偶々西郷の部下に朝鮮の國情を偵察して歸れる者あり、切りに朝鮮の伐つべきを言ひ、且つ手兵を提げて以て八道を蹂躪し得べしと爲せり。之に反し、非征韓派は征韓の舉を以て大困難事と爲し、究極の勝利遂に孰れに決すべきやすら、豫め判知し難しとせり。されど其の國力の懸弱なるは、日清戰役の時に至りて全く判明し、總に手兵を提げて八道を蹂躪し得べしと考へたりしの、決して妄想に非ざるを證せるなり。露の干渉來らんことを憂慮せしも亦然り。露の此に干渉するに意無かりしに、後に至りて明白と爲れり。憶ふに當時戰端開け、而して政府にして能く慎むべき所を遺れざりしならば、寧ろ兵を彼に加ふること、却て利益ありしならん。征韓の軍、戰勝ちて將士功に誇り、爲めに二三の強藩、兵威を恃みて權力を獨占し、橫肆至らざる無きが如きことあらんか、國家の不幸焉より大なるは莫きも、若し征韓派にして意を用ゐること周到、豫め深く此に戒懼する所ありしならば、兵を

加ふるは我國に少からざる間ありしならん。而も此れ發顯せざる現象にして、輒く得て證明すべきに非ず。征韓派の遂に一着を驗するに至りしは、全く非征韓派の勢力の猛烈にして當るべからざりしが爲めにあらず、西郷の決心の一たび定まりし所、即ち當日に在りて大勢力の存せし處たり。若し西郷にして一意唯此が決行に終なりしならば、以て十分に斷行するを得しならん。且つ其の決然官職を辭して、郷里に歸りたるは、是れ足らざるを感ぜしが故に非ざりて、却に其の力を恃むこと多かりしが故なり。たとひ官を捐てて郷里に歸るとも、苟も爲すこと有らんと欲せば優に爲すに足るの力ありと信じたるが故なり。一意征韓の決行を之れ望み、議收れて志を得ず、坎壈迫迫して帝座を去りたるに非ず。維新後に於ける西郷の舉措實に斯の若し。カブレラ隱退の後に於けるガリバルデーの行事と比較ふるに、目的を達し得ずして、郷里に歸りしは後者と酷似せるも、其の郷里に退きしは、力盡きて如何とすべからざるの餘に出でしに非ざり、猶ほ大に勢力を蓄へ、東隅に失ふ所之を桑榆に收め得べきを期して退けるなり。夫の到る處に志望離し、進退困難の域に附り、

第八 勢力の蓄積

人の世に處する、越に進むの難きに非ず、退くも亦難し。風雲に際會して一代に雄揚する、固より容易ならざるも、退きて終を克くするも豈易事ならんや。且つ風雲に會して功を紀籍に勒する者を觀るに、宏才雄略群を抜くの實に非ざるの人を以て、能く機に投じ、勢に乗じて湧業傳績一時に纏たるありて、闔扉下村の流猶ほ頗る見るべきの功を植つる無きに非ずと雖も、而も其の退くや、眞相乃ち現發して全く馬脚を露はすこと無からず。實に退くの難きは、寧ろ進むの難きより更に難きものあるなり。ガリバルデーと西郷とは同じく進退を屢くせし者、特にガリバルデーは進退動止西郷に較ぶれば更に屢くにして、其の一進一退する往々輕舉に過ぐるの跡無きに非ざりしが、其の退くや常にカブレラの巖窟に閉居し、俗を離れて、飄然仙客の風あり。累りに大陸に渡りて事毎に意の如く留らず、失望の極、最後に巖窟に退きたる、略々自己の位置力量を考察して悟る所あり。羅馬に出でて事を擧げんことを勸むる者

の至りしかど、斷然斥けて應ぜず、且つ口く、伊太利は今や獨立して自由を享有せり、我が爲すべき事既に了る、我れ何ぞ又政治に意あらんや、唯公共の事業を經始して残年を送らんのみ、乃ち先づチベルの堤防を修築し、カンパニアの疏水を開鑿するより始めんと欲す。此の言は敵味方をして頗る意外の惑を懐かしめたりき。若しガリバルヂをして斯くして功を擧ぐるを得しめば、老餘の事業として遙かに優るありしならん。然るに堤防の修築、疏水の開鑿は素と技術に屬する。其、爲めに往々山嶺の集まり來りて種々の提督を爲すあり、其の經費の多大なる、限りある資金の能く辦する所に非ず。是に於て公共の事業亦殊しく甚簡に歸し、乃ち永く窟窟に閉居して一切他の勸誘に應ぜざらんことを期せり。西郷に至りては、其の業むや苟くもせず、退くや亦苟くもせず、進む時大に爲すあると等しく、退く時亦處するに力なり。兵を擡して大に海外に雄飛せんと欲し、議解れられずして故山に歸るや、即ち獵犬を偲ひて山野に狩りし、又孜々として吉野村の開墾に従事し、自ら馬を飼ひ、肥料を運び、更に子弟を勵めて力を此處に致さしめ、猶ほ且つ將來の勞力を蓄積せんが爲め、彼の所謂私學校を興し、

私財を抛つて子弟の教育に悶めたり。是れ普通に言ふ所の學校とは頗る趣を異にし、武を練り兵を講ずるは軍隊に似たるあり、時務を談じ政事を議するは政黨に似たるあり。而も又學として唯晤の聲聞えざるありて、其の讀も所獨り和漢の書に止まらず、間々洋書をも交へ講ぜり。蓋し薩摩は維新改革の時に際して一の重要な勢力を形成し、此に由りて居然權位を天下に占む。若し薩摩をして始新斯の若く原動力を保有せしめざるべからずとせば、其の力を支持し且つ之を開發するの必要なるは固より言ふを依たず。西郷の私學校を興したるは之が爲めなり。從來養へる薩摩の勢力を支持し且つ開發するには、此を指いて他に徇あらず。

西郷の教育に著眼して一意方を此に致せるは、此だ宜しきに協へるもの、其の達達意に揚するに堪へたり。但だ其の制や、教育といふの意味に於て一種の嫌無きに非ざるも、子弟を教導し訓練する所亦教育たるを失はず、寧ろ薩摩武士的教育と謂ふの可なるに通し。其の教育方法の全帝國の大勢と伴はざる所あり、爲めに折角の努力も左程の効果を顯はし得ざりしと雖も、殊に其の教育に重きを置きしは、以て清國と稱せざるを得ず。或は後の教育より觀

て、其の制の殆ど價無きを備すれども、後の教育は此を薩摩に施せば、亦實に缺點多きを免れず。私學校流の教育は、彼に於て多少存置する所無きを得ざらん。後學制の進歩と共に此の地に高等中學校の設立するに方り、其の新學制の殆ど薩摩人の教育に益無きを證せしに非ずや。教育をして後に言ふ所のものに限らしめば、薩摩人の特色は遂に復て養成し得べからずと斷念せざる能はず。

第九 勢力空しく散す

國家の事、其の成るや勢に因る。夫の所謂英雄豪傑の士は、實に其の成らんとするの勢を活用するに過ぎず。況や他の碌々人に依りて事を成すの輩に至りては、一に其の僥倖のみ縱令斯の徒無きも、勢は則ち駁々として進前すべきなり。ガリバルヂも西郷も、共に退きて悠々日月を樂めるの間に、天下の勢は自ら其の向ふ所に進前せり。伊太利は國政益々整ひて憲章既に備はり、ピクトリオ・エマヌエル崩じてウムベルト新たに位に即きしも、社稷は磐石の泰きに居て、國內亦動搖せず。此より先き、マジニー已に死して其の黨はす。マジニーは夙に共和主義を懷抱し、終始共和政

治の創建に努めし者、有ゆる手段を盡らしして大に盡せしが、遂に效無くして止みにき。ガリバルデーは同じく共和主義を唱へしも、忠誠の念暫くも已まず、常に忠愛の情を正に寄せり、マジニーは異常ガリバルデーを忌妬し、嘗て参事の序で、ロシエリイを誘て彼の上席に措けり。時にガリバルデー此の慥色無く、曰く、我れ國の爲めには一兵卒として戦ふも猶ほ産ぜず、此の如きは毫も意に介する所にあらずと。而も之が爲め幾何か感情を傷ひしことは疑ふべきに非ず。是より後唱ふる所の主義、則ち兩者相等しかりしも、其の關係は常に冷かなりき。然るにマジニー死して其の黨大に衰へ、頻りにガリバルデーの黨と合して俱に與にせんことを計れり。當時伊太利は已に統一せりとはいへ、歴史上より考ふれば、猶ほ外國に占略せられたる處からずして、悉く此を恢復するに非ざれば、以て眞の統一と謂ふべからず。是れマジニーの黨が、ガリバルデー一派よりして贊成を得たる所とす。ガリバルデーは忠誠の念、衷に熱せるも、苟も國權を張らんが爲めには、何等の場合にも劍を抜くに躊躇せず。乃ち時の政府に對して不平を懐く者は、皆此の弱點を捉へて彼を挑撥使喚し、誘致して

以て自己に黨せしむ。斯くて版圖を恢復して國權を奪ぐべきの必要なるを口にする者の續いて到るや、彼れ乃ち千八百七十九年を以て再び羅馬に現はれ、頻りに論議して民衆を鼓舞し、更に武器の購買、民兵の募集に幹旋せしが、屢々王に請して其の盛徳を仰望せると、又嘗て右臂と情みしメデツチーの現に参謀總長の職に就けるありて、親しく其の語る所を聞けるとに因り、遂に默止して動かず。周圍の人來りて種々勸諭を説きんとするも、戸を閉ぢて應ぜず。尋いで、荷駒再發し、且つ周圍の勸諭を煩はしとして、遂に巖窟に復歸せり。後義子カンチオ、共和黨に與して政府の拘囚する所と爲れりと聞き、憤然立ちて、誓つて此が赦免を得んと欲し、若し已む無くんば力を用ゐて奪回すべき由を言へり。偶々王の特赦に遭ひて事なきを得、更に諸方に徘徊して到る處に歡迎せしが、終に復カブレラに歸れり。爾來島に在る數年、而も徒然爲すこと無く、既に死せる人と擇ぶ無し。要するに其の殘年は、實に觀るに足るもの無かりしなり。

西郷の議協はせずして故山に歸居せるや、四圍の人來りて起たんことを勸むる、一再にして止まらず。而も西郷は進退去就を決すること、ガリバルデーに較ぶれば更に慎重を加へ、其の一旦意を決して退くや、勸説する者の言如何に巧なるも、頑として應ぜず。明治八年大阪會議あり、木戸板垣等再び入りて参議と爲り、西郷亦就かんことを勧められしも、固く執りて應ぜず。時に政府に對し不平を懷ける者、竊に恃みて以て己れに與せしめ易しと爲し、遂にこれに應をざりき。此に先だつ一年、江藤兵衛佐實に擧げ、翌年神風黨熊本に起り、前原赤胤を棟に擡へしも、常に持重して動かず、又應援の議にも與らざりき。實に西郷は容易に人言に動かされて進退を苟もする者に非ざりしなり。然るに十年に至り、辭至せる他の勸誘を擧げて些も應ぜざりし明を以て、忽ち大兵を擧げて東上を計れり。世間は西郷の擧兵を以て、實に當時の政勢を轉覆するに意ありしなりと謂ひ、或は眞に擧兵の意あらざりしも、私學校の徒一たび擧發しては此を止むるに由なく、唯此に生命を授けたるのみなりと謂ひ、其の擧兵の眞意に至りては、今も尚ほ疑問に屬す。而も是れ必ずしも理想し難きの事に非ず。西郷の既往に行動し來れる所に徴すれば、自ら其の眞意を判知するに餘りあるべし。西郷の事を爲すは、畢竟薩摩人的なり。豫め自己の意見を立

て、此に據りて事を決するよりも、勢の向ふ所に依りて善く此を活用するに長す。其の初より、當時の政府と相容れざりしは則ち明かなりしと雖も、又直ちに起ちて之を攻撃せんと之意を懷きしに非ず、唯徐るに實力を養ひて他日の用に供せんと欲し、のみ。政府を侮後さんと企て、此に處するの謀策を建つるに若くは、毫も思ひ到らざりしもの所といふべし。然れども大勢の向ふ所は徐々に觀察するを怠りず、天下の變と政府に對して不平を懷けるを聞知したりしが、平素來りて事を告ぐる者は、故に存大の言を弄して事實を卑賤せる無きに非ず、其の聞ける所は寧ろ事實を距るの遠かりしも、注意すべきは注意し歸りしなり。國家亂れて如何ともすべからざるに至れば、己れ身を挺して此を定めんことを期待しつゝ、他の使令に従ひ相應じて事を舉ぐることは、其の願ふ所にあらず。是れ佐賀の亂、熊本、薩の亂の起るに際して、與り闘するを期しとせざる所以にして、往に薩新の前、長藩勤王を唱へて京都に戰へる時、兵を以て遣に之を伐ちしと當も相同し。居常大事を以て自ら任じたるだけ、瑣々たる細事の如きは深く意に介せざる所、海内大に亂るの時、乃ち兵を將て其の據に赴

くか、否らざるは人に兵を濱外に動かすの時乃ち進んで其の勢に當らんとは、常に胸中に決する所にして、又嘗て自ら明言せし所なり。之を外にして、事一に勢の向ふ所に任ずのみ。苟も大勢の向ふ所、己れを迫らば則ち此に應じて動き、逆へずんば則ち止まる、漫りに懊鬱する無し、私學校の徒に擁せられ兵を遣げて起てるに方りては、直ちに此を用ひて如何せんとの計畫、心裡に畫かれたるに非ず。隨て當時自ら進みて此を鼓舞振勵せるの行動なく、又其の強請を下るに由なくして已む無し、起ちしにも非ず。但だ己れの養ふ所は則ち一箇の勢力たるを失はざるを知り、以爲らく、業に己に其の據する所と爲りて事を舉ぐ、幸に我れ勝を制するを得ば、即ち能く之を抑へ、機を相て以て兵を海軍に用ひ、事若し成らずんば、即ち此と共に變れて已まんのみと。當時の心情、實に其の事、成功せんことを願はざりしに非ず、又必ずしも成らんことを望みしに非ず。此の如き際に處して悠々綏々、唯勢の向ふ所に従りて最後の斷案を下さんとせしのみ。是を以て兩陣相闘するや、時に自ら兵を振作するの舉措あるかと見れば、又特に戰つた爲めに浮腫するの差無く、依然犬を餌として山野

に狩獵し、而して其の間に在りて、胸中既に數後に處するの策を決せり。要するに、豫め胸裡に成策の畫ける無く、唯勢の向ふ所に依りて事を成さんとするは、即ち普通の薩人と相似たるも、普通の薩人は、一意勢に依りて事の己れに利ならんを思むる者、勢の向ふに任せて從容死に赴く、西郷其の人の如き多からず。是れ西郷の普通の薩人より超越せること一段なる所。

當時の戰爭は實に悲惨の極なりしが、畢竟政府に人無かりしに坐す。大久保にして一層の伎倆を備へしならば、更に此を轉じて大に利益の途に利用し得しなるべし。然るに唯剛毅果斷を以て能と爲し、苟も國家秩序を保持するに要あらば、用兵且つ厭ふ所に非ずとし、爲めに維新の際に當りて事を與に共にせし同志と離絶せり。其の木戸と離れしや此に因り、西郷と離れしや亦此に因り、而して私學校の徒をして激發せしめしむ、亦此に因る。當時西郷の爲し、所は多少時勢に後れしやの嫌ひ無きに非ざりしも、國權を張るの方面より觀れば前に缺くべからざる所、然るに強ひて此を應屬せしむ爲め、有用の勢力をして空しく消散し了らしめたる、何ぞ當路者の無能に歸せざるを得んや。大

久保は政治家としての伎倆を備へしと雖も、
經綸の略に至りては深く稱するに足らざるなり。
西郷の兵を提げて起ては、固より不穩の
跡あるを免れず。而も西郷に責むるに斯の若き
事を以てするは、則ち謫なり。或は又其の大事
にして而も起るの名無きを責むる者あるも、是
れさへ猶ほ西郷を諫する所以の道にあらず。西
郷は時局を大觀して勢力を養ふに専心し、其
の勢力の向ふ所に依りて事を決せんことを努
む。而して時の政賢者、眼識に乏しく、徒らに
内事に拘々として、遂に其の勢力を無用に解散
せしめて顧みざりしは、誠に痛歎するに堪へ
たり。是に較ぶれば、伊太利政府は更に賢明な
る所あり。若し彼をして代りて我が當時の局に
當らしめしならば、乃ち此に處するの良途、
猶ほ他に存するありしならん。惜い哉當路者事
を解せず、西郷をして雄強なる勢力と共に城
山の藁と消えしめたることや。然れども其の最
後や眞に戲曲的なり。勇壯彼が若きの死は、
容易に遂げ得べからざるもの、其の速去り勢
盛まるを見、從容豁流を捲んで訣別を表し、
従士を促して我が頭を刎ねしめ、而して同志
の上前後相俵いで皆刃に伏して彼に従ひしが
如き、何ぞ其れ勇敢にして悲壯なるや。ガリバ

ルデーの餘命を以て無爲に終りたるに較ぶれ
ば、却て事を勇壯偉大ならしむる所無きに非
ず。實にガリバルデーの餘命を保ち、寧ろ毒に
して喰多かりし一生は、西郷の刃に伏して却て
掉尾的運動を全くし得たるの優れるに若ざる
なり。ガリバルデーは終始經營に忙しく、東奔
西馳暫くも止まず、且つ屢々危難を踏みて此
も難色無きは、定に勇とするに足る。而も其
波瀾や區域小に過ぎ、更に洶湧澎湃の蕪無
し、西郷は動くこと彼の苦く頭々たらざるも、
一進一退宛も泰山の崩るが如く、其の生より
死に至る一代の行事を檢すれば、數回の波瀾、
皆滔天浴日の勢あり。中に蕪て最終の大飛躍
に至りては實に洪波狂瀾變々岸を拍ち巖に激
せるの觀を極む。若し此を筆畫に寫さば應に
無限の趣味あらん。

西郷とガリバルデーとは共に武事を以て天下
に立ち、終生軍人的生活を爲せる者、而も兩
ながら共に兵略に長ざりと謂ふべからず。特
にガリバルデーは殆ど將帥武略の見るべき無
く、一たび股肱と頼みしアンザニーの死してよ
り、戰隙は實に拙劣を極め、自らも己れの兵
事に堪能ならざるを慨し、アンザニーを懐ひて
已まず、愜然として曰く、若し彼にして幸に

生命を保ちしならば、外人を驅逐して統一の業
を完成すること敢く、既に其の功を竣へしなら
んと。而も戰鬪の術は其の特に長ぜし所に
して自ら兵を將ゐ、高處に陣して敵を俯臨し、
機を察して轟然下り來り、縦横に突撃する所、
頗る敏にして巧なるものあり。西郷も亦兵略
に長ぜず、敵に臨みて畫策するに、大村の畫
謀善籌なるに如かざりしや明かなるも、將に
將たるの略は誰かに之れ有り。是を以て幕下の
諸將頗る作戰に長ずる者あり。嘗て皇師に
參謀として東海道を下り、後私學校の徒に擁せ
られて兵を擧ぐる、皆親しく手を下すあらざり
しにも拘らず、其の威望は儼に群將を服する
に足りしなり。ガリバルデーは如何に大兵を率
ゐるとも、百戰して大陸を征定するは其の能く
する所に非ず。西郷は百萬の大軍に將とし、
敵に臨みて勝を制するの能を具ふれども、兵を
率ゐて自ら戰を決するは未だ嘗て試みざり
し所、想ふに兵を執りて戰ふことは、西郷或
はガリバルデーに劣りしならん。然れども兩
者共に一種の徳望を具備し、嘗て將士の心を
衷ひしことあらず。ガリバルデーの臨む處、部
下の將士常に水火に投ずるを避けず、其の人
心の歸服する殆ど神に通さざるあり。但だ其の

弊とする所は、紀律の嚴ならざるに在り、老幼の別なきに在り。而も斯の若きを率ひて、猶ほ能く四方に横行するを得たりき。西郷の人に於ける、亦然るものあり。其懐人を得む、宏量物を容れ、威を示さずして將士服し、坐がらにして人心懐く。是れ洵に一代の群英を指揮し、大事に臨みて善く斷するを得たる所以にして、西郷たる所以又此に在りとす。

第十餘音

英雄の性は常に獅子を以て喻へらる。其の剛柔兼ね備ふるを以てなり。世のガリバルデーを言ふ者、萬口一辭、皆之を併せ具ふるを稱す。而して威ありて能く柔に、寛にして狎るべからざるは、西郷亦甚だ類せる所あり。ガリバルデーの人に接する、威容嚴として犯すべからず。而して又温容藉として親むべし。其の赫として怒るや、恰も山壑を震動し、百獸を懼伏せしむるの態あり。而して舊怨一掃して心胸の豁如たる、宛として光風霽月の趣あり。レオナルド・ミランは彼を鞭答して囹圄に囚へし者、遺恨何ぞ忘るゝに堪へるや。而も其の失敗して頼み無きに方り、摩塞隆々爲さんとして成らざる無きの射を以て、毫も舊怨の報復を念はず、唯

僅に一瞥を施し、以て往日の怨恨は銘記して敢て忘れざるも、謝劣汝が如きの特に心に介するに足らざるの意を示せり。居常共和の思想を懐き、立君政治を視ること毫も密ならざりしが、ビクトリオ・エマヌエルに對しては嘗て忠愛敬重の情を失はず、政府との軌轢如何に極頂に達する時と雖も、少しも斯の情に於て變らず。頗る哲學的疑問を抱き、時に萬有間の不可思議を懷疑せしも、神の存在は常に信じて疑ふこと無し。但だ粗豪の質、人を見るの明を虧き、薰猪趾び纏れしに囚り、爲めに頗る紛擾を惹き起せることあり。家庭の修まらざる、にして寛弘なるは、宛に常度を過ぐるあり。宏量能く敵を容るゝは、恰も洪海の清濁を分たざるが如きあり。忠君の情甚だ厚く、意見扞格して最も政府と忤逆する時と雖も、國を憂至尊を念ふの切なるは普くも溢らず。多少王陽明流の思想を懷抱し、其の見る所頗る奇重と趣を異にせり。人を知るに敏甚ならず、其の濶擧する所往々器に非ざるありしかど、ガリバルデーに較ぶれば則ち勝る所無からず。家庭に於ても、彼に比して、頗る修れりとす

べし。二人の互に一長一短ありて、其の短なる所亦甲たり乙たるあるべきも、其の威ありて能く柔に、寛にして而も狎るべからざるは、伯仲の間に在らん。二人は共に馬上を以て事を成す志を懷けり。故に善後を籌畫し守成を全くするは能とする所に非ず。乃も平素の徳義は武備に在りしも、文事の嗜好とて亦之れ無かりしに非ず。ガリバルデー、カブレラの嚴當に閉居せるや、書を讀み文を愛し、マジニーの著、ユーゴの作は、特に好みたる所たり。少時の教育行届かずし知識に乏しかりしは、夙に自認する所にして、數々明言する所なりしも、而も猶ほ事に當りて斷案を下すに際し、往々意に任せて、繼身の處置を致せるを憚らず。又公會に臨みて演説するに當りても、或は事實を謬り、或は迂説を繕述して恬然たり。爲めに同派の士をして傲然音に汗せしむることありき。西郷も隱退の後、書見自ら樂みしが、涉獵博からずして聞知する所の以て恃みとするに足らざるを悟り、知識を要するの時に切なる時に方りては、好みて他に譲り専ら之に託して、術に當らしむるを題め、漫りに議論を上下して自己の無識を暴露する如きあらざりしは、智なりとすべきなり。

ガリバルデーは毎に筆を執りて一代の作を試むるに意ありしが、文壇の聲譽は武名の赫々たるに及ぶべくも無し。然れども全く文筆の材無きに非ず。「其の議論はマジニーよりも正しく、其の着想はニーゴーよりも條理あり」とは一徹の認むる所にし、「夫の戰爭日記の若き、事の顛末を叙ぶる頗る委曲に、情緒の纏綿して外に溢るゝ所、尚に愛の拘すべきものあり。或は之を稱して曰ふ、是れ到底ナポレオン、ピスマルク等の企て及ぶ所に非ざるなりと。憶ふに、其の武事に盡せる所を轉じて此を文事に移し、藻思を養ふに専らならしめば、頗る雄偉佳作の傳ふべき者ありしならん。西郷は先人の書に批見を加へ、又自ら詩を賦し毫を揮へり。剛より彩筆の以て詞林に列するに足るあらざりしも、雄豪の力量が優に見るべき無きに非ず。中村數字其の所作を見る毎に則ち曰へり、西郷の作りたる所誤謬無しとせず、然れども尋常人の畢に企て及ばざる所なりと。ガリバルデーは平素赤色のシャツに長劍を帯び、王侯貴人の席に列るも嘗て將風を更へず、居常自ら考ずる極めて淡泊なり。西郷も好みて綿衣を纏ひ逢幅を飾らず、心は己れの美田の上に在らざりしなり。

弱國に出づる英雄

英雄は強國に起り、個人の力が強國の力なること多く、齊桓晉文や、歴山該撤や、乃至太閤奈翁や、皆然るが、時として弱國に出で、弱國なるを以て利を受く。最も歴史に轟ける奈翁は、弱國を變じて強國と爲す所に蓋世の雄たるを示す。佛國が政府瓦解し、内憂外患と見えたる時、一孤島の青年が四隣之敵を排撃し、大陸を蹂躪せるは、即ち世界を驚かせる所なり。生れて強國の君主たらば、奈翁の力も彼の如く明かならず。若し英雄が群衆の波動にて上下せば、弱國の強國と爲るの際に最も飛躍するに堪ふ。されど弱國の儘にて英雄の出でずとせず。

サン・ドミンゴ島の黒奴ツァンが、奈翁に反抗し、獨立を企てしは、今日こそ多く忘れられたれ、一時歐米に鳴り響けり。是れ眞に力あるよりも、世間の同情を引く事なるが、チロルのホフェルや、匈國のコツスト

や、南阿のクルーゲルや、相應の力を認められ、一時のヒーローたるを失はず。愛蘭獨立運動者も之に類似すれど、獨立の必要が他國に理解されず、奮戦徒勞するに比し、英雄視せられず。音楽家パデレウスキーが波蘭大統領と爲りたる時、音楽にても同情を集めたるが、在職期間餘りに短く、就職せざりしりの優れるに若かざるが如し。

近來異人種にて注意を惹く者續出し、米國に於けるガーヴェーの黒人共和國建設事業、印度に於けるガンヂの印度人救済事業、聊か歐米人を驚かせるが、近頃土耳古のケマルが希臘と驚ひ、英佛伊等の強國と談判する所、從來の外交圈に意外の感を齎しつゝあり。

土耳古は久しく瀕死の國と呼ばれ、講和會議に死人扱ひせられたるに、今や死人が甦り、新たに強國と對抗するに及ぶ。既に希臘を撃破しながら、唯正義の爲にし、他に何の望む所なく、強國に於て之を諒とせば、幸なりと言ふが如き、情理兼ね備はり。外交圈の多く經驗せざる所に依る。

(日本及日本人より)

二元帥を中心に

大正六年は明治五十年に相當し、曾て萬國博覽會を設けて記念することになつて居つて、今は其事が無いけれど、尙或は維新五十年と稱し、特別の歳とする。此半世紀間は、日本歴史中で最も多事でも重要で、最も幅廣い部分を形作つて居り、人物の上からも相應に考へることが出来る。

歴史は同じことでも、一二の人物を中心として見方が替る。人々已れの立脚地に於て自分を中心とするが如く、何時の時代でも、或人物を以て凡ての事件の聯絡を求め得られる。一農夫でも無数の關係があつて、次から次と尋ねれば隙眼がない。況して多數の人が重きを置く所ものは、猶更關係が著しい譯で、此點に於て、近く歿した大山元帥は頗る便利が多い。而して大山と云へば、必ず西郷元帥を連想することになり、此二人程相致し又相違ふものは、例がない。之を中心として薩州出身の人物

物を考へ、薩州と連合した長州の人物を考へ、更に一般の人物を考へるのだが、頗る順序を得て居る。

起因は西郷吉兵衛にある。吉兵衛に就て知られた所は甚だ少いが、維新の機運が今幾年か早かつたならば、この吉兵衛なる者が大に現はれたかも知れぬ。兎も角も身體が大きくて、力に於て當時の力十九級龍に匹敵したと云ふことである。隆盛は其長男で、從道は三男に當る。吉兵衛の弟彦八が大山家に養子となり、其次男が巖である。

同町内から色々人物が出た中にも、大久保利通が隆盛と鼓んで重きを爲して、明治六年迄、西郷大久保の二人が薩州を代表した。其年征韓論で分離して、西郷は野に下り、大久保は藩に止まり、二人の間隔に集つた人々は二派に分れ、十年に此二派が衝突し、西郷派は九州の一隅の兵を以て起り、大久保派は政府に謀つて全國の兵を發し、之を討伐することになつた。全國の兵と云うても何程のものでなく、鎮臺兵で足ら

ず、巡查を派遣し、警備時に巡查を募つた程であるが、何にしても、官軍の名に於て當時利用し得る限りの機關を利用し、究極の勝利を得ることになり薩州は西郷に歸するに至つた。所が翌年大久保が發奮され、其後繼者として薩州を代表するものが、黒田清隆にならうとして聊か貴目が不足し、寄合所帯の已むを得ざる状態となつた。

長州では維新の高杉、久坂二人が出たが、維新前に歿し、木戸、廣澤、大村等が出で、木戸を除いて相前後して歿し、木戸一人で薩の西郷大久保に當り、稍、遜色を免れただけけれど、西郷大久保二人が相分離し、次で一人が倒れてから、長州の勢ひが大に衰り出した。西郷と大久保と或點に頗る似て、或點に甚しく違ふ。自ら國家の重きに任じ、是が爲に全力を致さうとする所は同じであるが、西郷は薩藩の力を基礎として經營を事とし、大久保は全國の勢ひに依りて經營を事とするに傾く。此傾嚮は薩をして維新の業に與らしむるに大なる便益があつたもので、西郷の手で薩藩が統一され、其言へるが儘に動き、大久保の手で、全國の勢ひに響應することが出来た。本來の性分が、斯く分れるヤシになつた所もある。西郷は何で

も郷黨の爲に倒れようとし、大久保は随くまで中央政府の維持に骨を折らうとし、西郷だけでは藩として大に力を伸し得ずにしても、新政府を築き上げるに妨げとなる所があり、大久保だけで政府の經營を能くするにしても、國內を威壓するに足るの力を缺いて居り、二人が相結んで齒となり日向となるので一方に薩藩を挟んで多くの藩に服従を迫ることが出来、一方に藩を眼中に置かず、廢藩置縣後の政府を作り上げるに努むることが出来た。

二

初め近衛兵が薩摩兵を以て成り西郷が其都督となつたのは、如何にも藩閥に偏して居るが、薩兵はそれだけの實力を備へて居つたのである。他の藩で彼の如く軍隊の整備したのはなく、長州が見ん事奇兵隊で功を奏してさへ、逆も是れほど纏つて居らず、西郷が鳥羽伏見の砲撃で薩藩の統一を遂げ、官軍の中心と爲つてから、薩藩の兵力は一般に憚る所となつた。

九州の一隅に於ける兵力が、それ程の勢力あるとは思議のことであるが、二百八十藩あつても、別れ／＼になつて居つては、孰れも之に對抗することが出来ぬ。幾藩か固く結合せば、

之に當るは容易であるにしても、多年外様と譜代と錯綜し、互に疑ひ互に嫉みあふ習慣で、結合など思ひも寄らぬ有様である。薩隅日三州の兵は知れた者にしても、是れ程善つたの外にないの仕方がない。而して能く之を纏め、能く之を練り、當時第一の模範的軍隊とするには、西郷の力が最も多く與つて居る。

西郷自ら兵事に精しからず、戰略戰術など特別に知りもせぬが、己れの利福を圖らず、郷黨の爲に一切を擲つと云ふのは、多數の悦んで命を懸く所である。大久保のやうに天下の政治に着眼し、何藩からも人材を探ると云ふ調子では、薩藩の者は安んじて従ふことが出来ぬ。根據となる軍隊がなければ、新政府を維持すること甚だ困難であつて、大久保も此邊で西郷の力を藉りて居る。併し一利一害は免れ難く、新政府を作るに必要な薩藩の軍隊も、廢藩置縣と共に解散せねばならぬことになり、彼の軍隊は解散を好まず、容易ならぬ面倒が起つた。その解散を好まぬのも無理はない。他藩の軍隊は有つても無くても同様であつて、解散するに造作もないが、薩藩はさうは行かぬ。維新の際に、

何の力を恃んで新政府を成立し得たか。我が薩藩の軍隊が中堅となつたではないか。とは彼等

自らの信する所である。實際何程かさういふ形跡がある。が如何に信じたとして、廢藩置縣の勢ひを防ぐことは出来ぬ。西郷も廢藩置縣に同意を表し、廢藩置縣となれば一藩特別の軍隊を備へ置くべきでないのは定つたことである。定

つて居るが、他藩と異つて居る薩藩では、他の諸藩と同列に見られぬ事情がある。大久保は全國劃一に廢藩置縣を實行することに努め、薩藩をも同一に取扱はうとしたが、西郷は廢藩置縣に異議がなくても、直に軍隊の解散を行はうとはせぬ。大山綱良が縣令となり、大久保内務卿の言ふことに従はぬ。大久保も急にどうすることも出来ず、特別扱ひにして一年と過ぎて往く。他縣から見れば、鹿兒島のみが特別扱ひを受けるのは甚だ不都合であつて、動もすれば大久保の處置を非難する。其反對に鹿兒島縣では、特別扱ひの當然なるを認め、改めようとはせぬ。此點が明治十年迄の難問題であつて、何れも解決の方法を見出し得なんだのは、維新前後よりの國家の組織が産み出した結果と言はねばならぬ。薩藩に特別の重きを措くやうになつたのは、何人の意に出でたと云ふ譯でなく、唯自然に出来た癖であつて、之を取るに覺悟を以てするか、又は少しづつ癒すことにするか、其一

を擧げ外ない。西郷と大久保と、此邊に處するの能力があつたならば、無難に解決し得たらうが、斯る能力は殆ど人間に望むべきでない。

三

西郷は廢藩置縣の必要を知つて居つても、如何に其軍隊を解散すべきかに就て苦心する方ではなく、何人か其案を授ければ、之を行はうともしようが、然らざる限り其儘にして置く。彼はさる方策を考へる側ではなく、一段大きなことに着眼して居る。島尾等が廢藩置縣の必要を説いた時西郷は承諾しただけで、之に就て何事も言はず、唯國外に事のある時大に盡力しくれと言つた。人は其承諾を得て大に意を強くしたが、西郷自らは何程の事に思つて居らなんだ。彼は實に海外經營に志があり、國內の事は人任せである。

軍隊解散の順序を考へたりするのは、政府當局者の任であつた。其衝に當つて居る大久保は、情實に拘泥するの大勢に害あるを考へ、爲すべきを爲すに果斷ならねばならぬとして居る。若し西郷と打解けて軍隊解散の順序を説いたならば、西郷は縣令其他と談合ひ、何とか處置したかも知れぬ。所が大久保に一種の意地

があり、強ひて江藤新平を梟首するやうなことがある上、他から顔に水を差すので、何とも始末に卒へぬ。

明治四年、大久保が岩倉大使に副使として出た時、その知事袋は長伊藤博文である。時として伊藤と肥の大隈である。大久保は同郷人よりも他縣人を用ゐる、他縣人は喜んで其下に働き、種々様々と獻策する。長州側では、常に薩州の勢ひの強いのを忌み、何とかして内輪割するのを望んで居り、間がな陳がな大久保の耳に入れ、大久保は漸次之に動かされる。

西郷が征韓論で官を辭して歸る時、大久保に暇乞して、跡を直しく頼むと云うたのは、友人の情として、國家を思ふの心よりして、順序を履んで居る。大久保が素氣なくも、彼は知らぬと言ひ、他に何も言はず、送り出しもしなかつたのは、西郷の無責任を恨んだ所もあらうが、一國の大政を掌る身分として、足りない所がある。從來の關係を考へたならば、斯く素氣なくすべきでない。實に心なき挨拶振である。

併し大久保の意地は別として、敢て西郷の機嫌を取り、薩摩の反抗を和げようとなせぬ所は、持前の剛毅の所である。但、剛毅ばかりで事は成らぬ。剛柔相濟ふを要する。

既に東西に相分れ、之を取巻いて居る者が互に拮据するとあつては、勢ひ兵力を以て相争ふに終らう。西郷は何とかして日本の勢力を外に伸ばさうと考へ、是が爲に強大なる軍隊を必要として居る。強兵を旨として、兵は多々益々募すべき譯であり、鎮臺の整ふのを希望するは勿論、薩摩に一廉精練した軍隊あるを見て、心強く感ぜず居られぬ。私學校に軍隊を訓練するのは、如何はしい次第で、早晚何とかせねばなるまいが、大事の前に小事を考へる暇がない。何でも兵として動かすべきものがあれば、有事の日に備へて置かねばならぬと思つて居る。

桐野等原等の訓練する兵は、實戦を経て來て居るだけ、精兵の名を値する。且色々歐洲新式の兵器を調査し、その良いのを取寄せ、何時戰争が起つても立どころに出發し得るといふ心構へである。西郷は之を見る毎に頼もしく覺え、外の鎮臺兵と比較にならぬとし、弟の従道が臺灣征討に出掛けた時も、其一隊を懇望して連れて往つた程で、之を引率して朝鮮に渡れば、如何なる敵をも突破し得ると思はれる。桐野は二大隊を以て西伯利亞を横行し得ると言うたが、其當時にして、強ち空論でない。西郷は兵を以て國威を發揚することを希望し、此存爲なる軍

隊を以て西伯利亞を横行し得ると言うたが、其當時にして、強ち空論でない。西郷は兵を以て國威を發揚することを希望し、此存爲なる軍

隊が、徒らに内亂で消滅するとは、想像だにしなかつた。彼は餘りに國威を念とし、制度の上で何うであるかを考へようとはせぬ。

四

所が政府の方では、其儘にして置けず、私學校で軍隊を練れば練る程、事の容易ならぬの心配し、何うにかして之を廢せねばならぬ、一年延引すれば一年だけ危険が増すと思ひ、そこで櫻島に貯藏してある火薬を積み出さうとした。之を積み出すは政府の機密の事、當然の事をするのである。併し私學校側では、是れ我々が國家の爲に努力して居るのを妨げるのである、先佐賀や萩の例で討伐しようと云ふのである、先んずれば人を制す、後るれば人に制せらるゝ、進んで熊本鎮臺を陥れ、政府をして改心する所あらめねばならぬと考へた。

西郷は困つたことになつたと思ひはしたが、何うする譯にも往かぬ。私學校側では早く出發しようとし、政府側では堅く決心して掛つて居るやうであり、大久保が例の意地を張つては、唯では濟まぬ、政府に位置を占めて居る連中は、己れの利福を圖るに専らであつて、何をするか分らぬ。内地で可憐軍隊が競争するのは、惜み

ても餘りあれど、今は致し方がない。まゝよ、斯くなつた上は勢ひに任せて、其内何とか爲すべきこともあらうし、爲すべきことがなければ、幾年が相互に助け合つた人達と死ぬるばかりであること云ふことになり、愈々軍隊と共に出發した。

大久保は、まさか西郷が政府を攻める爲に兵を起すとは思はず、西郷も實に之を思はなんだけれど、西郷が桐野、篠原等と共に出發したのは確である。長州側では南州連を擁へる時機を待たへて、今は其時と勇んだ。彼等は内地で權力を固めるに専らであつて、常に苦心して已まず、頗る其選に巧な所がある。大久保は西郷が起ると思はず、桐野が暴舉を敢てする位に考へて居り、西郷初め結束して起つたと聞いて、意外の感に打たれ、斯くては自分が直に鹿兒島に往き、西郷と直々話をしようと言ひ出した。

若し其時直に出發したならば、西郷に於ても身を以て大久保を庇ひ、何とか話が付いたであらう。或は征韓問題も出で、或は何年かを期して私學校の兵隊を廢止することを約したらう。けれども長州派では之を好まず、頻りに大久保を引止めて言つた。斯くなつては事は難か

しい。若し九州に往かれるならば、暴徒が何をするか分らぬ。貴下は政府の柱石であつて、萬一の事があれば、政府の運命も露もない。今日の所、全國の兵を以て暴徒を殲滅し、政府の基礎を鞏固にせねばならぬと。遂に力任せ金任せに戦ひ、八箇月を経て、日の上の掬とした所を取除いてしまつた。癖は荒廢治で取れたが、其代價は少くない。薩摩の模範的武士を失つた外、政府で費した金額のみにても、四千萬圓に上る。當時の歳入の半分であつて、今にすれば三億の損失に相當する。

西郷と大久保と分離した時、薩摩出身の人物は、此二人に屬して相分れた。中にも西郷の實弟なる從道、及び從弟なる巖が政府の爲に働き、曾て西郷の下で働いた黒田樺山も、政府の爲に働いた。政府より官軍として向つたのは、山縣中將の下に、長崎三好、三浦、薩の野津兄弟があり、昔面の將として、薩の黒田中將の下に、薩の大山川路、高島、長崎山田がある。主腦は長であつて山縣山田の意見が最も徹つた。けれども薩も多く之に賛らぬ。西郷の從弟なる巖が、少將として黒田軍で轉戦したが上、實弟なる從道は、中將として自ら戦地に臨むの希望もあつた。中將として山縣黒田と同格の

所もあり、隆盛と最も近親なる所もあり、戦地に出るを要せぬこととなつたが、留守居として随分働いて居る。兄弟が趣味方となつて相争ふは、保元ノ亂にあり、關ヶ原役にあるが、逆い所で之を最も重なるものとする。

五

從道及び嚴は、西郷と意思が相違したかと云ふに、然うでない。二人共に常に敬意を拂つて居つた。黒田の如きも然うである。熊本鎮臺に籠城した中佐堀山資経も、然うである。何うして斯く分離することになつたかと云ふに、何程か西郷と大久保と相分れた様な所がある。意見及び感情の衝突でなくして、性格の差である。郷黨に重きを措くのと、政府に重きを措くとの違ひがある。一概に言へぬが、郷黨に重きを措くのは、利害を共道にする所があり、政府に重きを措くのは、己の位置を主にし、個人主義に傾かうとして居る。

私學校連に團體で生活し、己一人の財産を重く見ず、西郷の謂ゆる、我家遺法人知否、不爲兒孫買美田と云ふ所がある、私學校の存在してゐる間に、之に關係した財産人は多少その形跡があつて、私有財産を輕んじて居る。

即ち一旦事あれば僚友相助け危難に赴かうとし、金銭を溜めるのを、町人の野卑な行爲と心得て居る。起れば共に起り、倒れば共に倒れ、個人よりも團體の爲にする状態である。政府に位置を占める者は、事務職務の爲であつて、愛情が少い。職務に盡すには、私心がないと云ふのが肝要のことになつて居る。此區別は性質若くは境遇から來て居り、或は二者相混じて居る。

西郷派と大久保派とに分れたのは、此關係から來て居り、性質から言へば、團體的生活を好む者が西郷派となり、個人的生活を好む者が大久保派となつたものとして妨げない。別語を以て言へば、兒孫の爲に美田を買はぬ者と、兒孫の爲に美田を買ふ者とに別れた。維新前後、共同一致して尊王討幕に働いた者も、自分等が勢力を得た後、馬に思連れ牛は牛連れとなり、左右に別れ、其中間のものがないではなく、黒田の如き、權に之に屬し、西郷派のやうな所もあり、大久保派のやうな所もある。

從道及び嚴が西郷派から離れたのは、他にも事情があるが、性質から來て居る所が多い。此二人は薩摩で兵兒連と團體的生活するを好まず、一本立て自由の己の位置を求めようとする。

西郷兄弟四人中、吉次郎が戊辰の役に北越で戦死し、權吾が從道と名を改め、小平は十年の役に戦死した。三人が共に死し、一人が離れたことになつて居るが、隆盛は吉次郎に望みを屬し、その死んだ時に大いに働いたのである。後に永らへば如何なる運命であつたか。小平と同じく死んだか。或は兄に代つて私學校の始末を付け、内亂を陽ぐ機になつたか。或は從道と同じく官に就き、大臣となり元帥となつたか。死ぬ迄の所では、少くとも從道に劣らななだけである。

從道と嚴とは、隆盛よりも年齢が十幾歳も下で、相談相手でなく、書生扱ひで、走り役を務めて居つた。併し他の兵兒連と違ひ、同郷人と結ばず、自由に各地の有志家と交り、相當に認められた所がある。二人は體格が隆盛程ではないが、尋常よりも大きく、腕力もある。薩摩の力を頼むよりも、自分の能力を頼む方であつて、何處でも榮達するに便利な方に頭を出し、兵兒連からは御薄才の様に見える。兵兒連は兒連が時代遅れの野蠻の様に見える。兵兒連は一にも二にも薩藩といひ、鹿兒島といひ、彼二人は然うでなく、單に國內の形勢を觀察し、之に應じようとする許りでなく、世界の形勢を觀

察しようとし、或は世界の風俗に同化しようとして、明治の初めに歐洲に赴いて、猶更その傾向を増した。

六

大久保が西郷と違ふ所は其處にある。自ら重々しくして筆を荷もせず、他人の觀察などを溜んで居つたが、容貌や衣裳に餘程氣を付け、朝一時間も之に取掛つた。外國を廻つて氣付いた所もあるが、西郷は外國人と扱しても別に變りがなく、日本人に禮を失はぬ程度に於いてした。大久保の頭髮及び髯は中々念が入つて居り、衣に至りては袖に至りては連中と反りのあはぬ所がある。桐野の如きは頗る華美好きで、鎌苦しいのを好まぬにしても、華美な薩摩流であつて、日本刀を洋刀に仕込み、金銀で飾るといふ工合である。従道及び巖は、歐洲に往つて歐洲風を好み、努めて之に真似ようとし、後で言へばハイカラに屬する。ハイカラ程輕薄でなくキザでないが、分類すれば、さうなる。同じく歐洲に往つても、村田新八は是と違ふ。能く歐洲風を呑込みながら薩摩武士を以て居り、大山の流儀を好まず、事ある毎に大山を擁護した。岩倉大使一行が佛國に著する時、新八は巖に大

使到着との電報を發し、巖が其時刻に停車場に到れば、一行の影も見えぬ。巖色を作して問へば、新八は笑つて答へぬと云ふ有様である。新八は巖より、一枚上と見られて居つた。巖と同じく大佐の職に居つたが、軍人よりも政事家に適し、政事家としては首相になつたらうと思はれる。従道及び巖は之と趣を異にし、兵兒連から好く言はれぬけれど、時勢が何時まで兵兒と一緒になるものかとの調子で、巖の如きは早く山縣の下に馳せ參じた。維新前より薩長二藩が兵力を以て幕府に反抗し、各々天下に雄飛する勢ひであつたが、薩は良司令官が居つて兵數が多く、長策謀計畫の上手なのが輩出し、兩々相下らうとせぬ。高杉は天來の名將であつて早く病死し、次で大村が計畫の妙に於て第一に推され、之が殺されてから、前原が後繼者となつたが、木戸等と折合が悪く、退隱を餘儀なくされた。之を除いては、山縣及び山

田が最も頭角を現し、山縣は高杉の副勝格であり、山田は大村の衣鉢を繼いで居る。山縣は高杉に従つて起り、能く幕府の兵を境外に遣出したので、夙に名を知られた。山田は才識を以て之を凌ぎ、兎角相容れぬ間柄であつて、山田より見れば、山縣は將として凡庸であり、人

物も稱するに足らぬとして居る。若し山田が軍事を專務としたならば、山縣と何の關係にあつたか、推察が難かしい。西南戰役に於ける彼の手腕は、薩に群を抜いて居る。山田の智と野平の勇と雙璧である。唯彼は才を頼み、翁の強流を以て居らうとし、戰亂があれは馬鹿の功を擲て、戰亂がなければ法典を編纂し、後世に垂れようとする行ふやうなことを考へる。

山縣は後、議會で一介の武弁と云ふ如く、初め軍人を以て一貫しようとし、其點に於て頗る執着力が強い。他人から政事家扱ひにされず、勢ひ軍職に立籠つた所もあるが、他人が次から次と變るに、彼一人眞面目に軍事に勤務したのは、軍事に忠實といはねばならぬ。實際の働きは如何にしても、兎も角も危げなく、人が自然と任せる氣になる。軍事は造業仕事でなく、國家に缺くべからざる事業であつて、維新前後の人が考へたよりも全國の軍制を整へる必要があるが、山縣が謹直に従事して居るので、關係者は一般に之を信用し、長州側之を代表的軍人とするのみでなく、薩州の大久保派は、之に依りて西郷派を押しやうとし、西郷の去つた後、其帯びた職務を擧げて山縣に當らしむることにした。近衛も最早薩摩派でなく、

山縣が其都督となり、尙陸軍卿として一軍制を執るることになつた。

七

山縣は實戰に臨んでこそ、運用の妙も何もなければ、軍制を整へるは格別事務に盡すに越した事はない。薩州の軍事に關する書を編譯せしめ、之を讀んで探るべきを探れば、漸次改良して往かれる。從道及び巖は薩州の兵制を見て歸り、軍制を整へるの必要を感じ、山縣の其例に當るのを見て、信頼すべきを覺えた。大久保派に屬してより、軍事に於て山縣と共にすることになり、征討論の破裂する際にも、西郷派と共に歸郷せず、大久保派と共に政府に止つた。西郷派と性分の合はぬ所が、愈々現れて來た。二人が西郷の血縁なるに拘らず、之と分離したのは、性分の合はぬ所あるの外、大久保派で前より頻りと引留めた所もある。

陸軍では西郷を除いて山縣が先輩であり、他は之に従ふ順序になつて居り、巖は甘んじて之に従うたが、從道は巖が違つて居る。從道の才は巖よりも早く現れ、大久保派は之と共にするの無難なるを感ずると同時に、之を相當の地位に置いて薩州を率制しようとした。西郷が

陸軍大將となり、その去つてから大將がなくなり、山縣が職務に於て其後継者となり乍ら、大將となる譯に往かず、大將となつては、西郷に對して釣合の取れぬやうに見える。そこで中將を四名にし、長の山縣と島尾とに對し、薩から黒田と從道とを擧げることになり、巖は與らぬ。山縣及び黒田は、維新の際に相應の軍功あり、中將たるの閥歴あるが、他二人は大程でなく、

年が若くて中將になつたのは、非常の才物と見られたのである。實際此二人は、何處に居つても特殊の才が現れる方で、後島尾は折角の才を用ゐずして終り、從道は次第に之を用ゐて頼る榮達し、壽命が長ければ、更に榮達する筈であつた。巖は才よりも忠實なる所を認められ、十年の役が終つてから、從軍少將が多く中將となり、巖も其列に入り、從道が山縣に次で陸軍卿となり、之に次で巖が陸軍卿となり、二人各々時として他の官職を帯びながら、巖は陸軍を事務とし、從道は轉じて海軍に入り、爾來二人が陸軍及び海軍に重きを爲すに至つた。明治十八年の末に官制大改革あり、初めて内閣制が定まり、大山陸軍大臣、西郷海軍大臣の割振になつた。長州の伊藤、井上、山縣、山田に對し、薩州の大山、西郷、松方、森が擡つたの

であつて、首相は伊藤であるが、最初黒田に語る話が出て、黒田とすれば、薩の四名中、一名を閣外に出す順序であつた。併し、大山西郷は變らぬ所であつて、一應長が文權を占め、薩が武權を占める形が現れた。薩人は多く是れで満足し、我輩は軍人適當であると云うたが、大山は山縣の代理と云ふべき姿で、陸軍は長州出身者が勢力を占め、薩州は其一隅に割込んで居るに過ぎぬ。之に反し、海軍は殆ど全く薩州出身者が占領し、他より之を如何ともし得ざる有様となり、長の陸軍、薩の海軍と相對することとなつた。大山西郷が勉んで仕事をし居ながら、結果が斯くの如く違つたのは、單に二人の性格が違つたのでなく、別に由來する所がある。

毛利島津共に、關ヶ原役で徳川に負けたが、毛利は元五大老に列し、剩さへ八州の領主で、位置も勢力も徳川に拮抗したのであるのに、戦

八

争に敗れて、八州から二州に縮小し二仕舞ひ、島津は初から中央の政權に關係なく、別扱ひにされて居つた上、戰後にも依然三州を領し、特別に不平があるべきでない。毛利は二州に屏

であつて、首相は伊藤であるが、最初黒田に語る話が出て、黒田とすれば、薩の四名中、一名を閣外に出す順序であつた。併し、大山西郷は變らぬ所であつて、一應長が文權を占め、薩が武權を占める形が現れた。薩人は多く是れで満足し、我輩は軍人適當であると云うたが、大山は山縣の代理と云ふべき姿で、陸軍は長州出身者が勢力を占め、薩州は其一隅に割込んで居るに過ぎぬ。之に反し、海軍は殆ど全く薩州出身者が占領し、他より之を如何ともし得ざる有様となり、長の陸軍、薩の海軍と相對することとなつた。大山西郷が勉んで仕事をし居ながら、結果が斯くの如く違つたのは、單に二人の性格が違つたのでなく、別に由來する所がある。

息して、徳川の疑ひを避けるに努めたものの、機智もあらば朝を弄つたしとの心掛があり、等玉讓夷を以て薩軍に反抗したのも、之に關聯して居る。如何に幕府を倒し、權力を占めようかを考へて止まず、養ふ所の軍隊は、國內で權を争ふの目的に於てし、隨つて軍人として出る者は、概ね陸軍方面であつて、三田尻に海軍を設けても、出身者は坪井有地等數名に過ぎぬ。薩州は琉球をも領し、幾分か海外の事情に通じ、幕府を倒さうとするよりは、國防を嚴重にするに心懸けた所がある。尊攘の運動に於て長州に遅れて居るが、夙に海軍の忽せにすべからざるを考へ、三田尻より大規模に著手し、人物も多く出た。三田尻も當時の海軍に適した地であるが、鹿兒島より櫻島にかけて、最も適して居る。

薩摩は藩が大きいだけ、他藩に比して軍備が整うて居り、陸軍でさへ、長州よりも數に於て優つたが、其軍人は二分して、一半は薩に歸り、残る一半は長州と共にし、事實に於て、山縣を長官に仰いで居る。長は早く勤王の旗を擧げ、朝廷の覺もめでたく、公家は多く之と共にし、三條太政大臣の如き、深い關係がある。岩倉右大臣は稍之と違ひ、寧ろ大久保と共にす

るが、その大久保の智謀は伊藤であつて、中央政府は長州人が基礎を築き上げたことと云へる。薩の軍人が二分したのは、長の最も喜んだ所であつて、西南不穩との報告を得るや、斷然兵力を以て抑へ付けねばならぬと言ひ、それ人手密を極めた。長州人は常に權力を争ふに傾き、名義を擧ぶに長じ、率先して勤王の爲にした程であつて、西郷一派が薩摩に兵を擧ぐるに對しても、有村川宮を總督とし、全國の兵を官軍とし、逆徒征討といふ事にする。西郷側では名義が甚だ薄弱で、單に大久保川路を責め、或は新政厚徳の旗を立てるなど、寧ろ滑稽に聞える。さしも勇を以て鳴る薩軍も力と金とで抑へられ、遂に滅亡に歸し、而して將才の惜むべきは、滅亡した方にある。順序に於ても、桐野大山の上に居り、實に天性の軍人である。逸見十郎太は官等こそ低けれ、軍人として天才と云ふべきである。他にも種々の人物がある。此等が存命して居れば、陸軍に於ても長州を凌駕するが、少くも同等の地位で續いたのであらう。所が滅亡に歸してしまひ、跡に残つたのは相應に力あるにせよ、進も長州に當るに足らぬ。長州では、維新の際に働いた軍人は概ね存命して居り、薩摩征伐に位置が高まつて、

要部といふ要部に、悉く坐る様になつた。大山は官に於て山縣に次ぐの位置であるが、特別に薩長の權衡を考へず、長州人を要部に置いて平氣な態で、歸化長州人とも見られた。薩摩の陸軍の衰へたのは十年の役からで、謂はゞ保元の亂に源氏が二分し、平氏が全盛になつた様なものである。

所が、薩摩は早くから海軍に著眼し、其將校を養ふに心掛け、陸軍と並んで海軍を整へる場合主として薩人側で事に當ることに爲つた。長州では國內の權力に重きを置き、陸軍の最も重要なを認め、海軍に注意を拂はず、外國との戰爭を考へず、寧ろ海軍を飾物に如く心得、薩人が種々と言ふが故、何でも宜しく頼むと云ふ調子である。

九

西郷は海軍を何とかせねばならぬと云ふので、事を川村純義に委ね、川村は夫々人を引連れて事に當ることになつた。西郷と別懇なる勝安芳を海軍卿にし、其指揮を仰ぐことにしたが、事實は薩摩海軍で、勝を顧問に依頼した形である。西郷一派が去つてから勝も罷めたが、その去つた時に、海軍軍人中にも共に去らうとした

のがあるけれど、西郷は之を許さず、鹿兒島へ来た者をも戻らした。折角海軍創業に與つて居るのを罷めさすのは、日本の海軍に不利益であるといふ所があり、又海で育つたのが陸に上がったとて、別段力にもならぬと云ふ所もあつたらう。兎に角海軍は、薩摩で養成したのが中軸となり、軍艦の數を増し、形だけでも海軍らしくすることになつた。

他にも佐賀縣なり藤縣なり、海軍に心懸あつて居るものがあつて、此等は皆海軍に加はり、切實に依つて、薩と鼎足の勢ひを呈した。長州は海軍に意を用ゐず、薩州の爲すに儘にしたものの、漸く整備して力を伸ばしきうに爲つては、之を抑へたい心もあり、何とか他より人を入れることを望んで居る。幕府側は長州よりも薩摩に近く、而して海軍の知識及び技術に於て一日の長あるので、薩摩でも之に位置を與へることを好み、長州でも異議がない。幕府出身は組織に富み、新井三浦等、軍艦採集に於て群を抜いて居る。横須賀で軍艦の出入れするに、古川の右に出づるものがなく、其巧なことは外國人も舌を捲いたる根本は、早く和蘭に留學し、函館の實業にも經驗があり薩の黒田が常に肩をいれて居り、參議と稱とを分離した時に、之を海軍

のがあるけれど、西郷は之を許さず、鹿兒島へ来た者をも戻らした。折角海軍創業に與つて居るのを罷めさすのは、日本の海軍に不利益であるといふ所があり、又海で育つたのが陸に上がったとて、別段力にもならぬと云ふ所もあつたらう。兎に角海軍は、薩摩で養成したのが中軸となり、軍艦の數を増し、形だけでも海軍らしくすることになつた。

軀にした。根本が薩人の爲す儘にして居れば、何事もなかつたらうが、多少海軍の知識があり、徒らに傍觀し居れず、改革を試みようとしたので、薩人が俄に怒り出し、薩參した賊のくせに生意氣な事をするので、實力沙汰に訴へ、之を他に轉任さすことになつた。そこで薩摩と佐賀とが相闘ひ、佐賀は中々屈せず、中幸田が將官の先遣者として、一方の力になつて居る。川村海軍卿で何とかな事務を運んで居るものの、事を定める段に議論が湧いて、海軍を議物にして置くに差支ないが、次第に其實用をも感じて來、此儘にして置けぬと云ふことになつた。政府は國會開設の準備で忙しく、其以前に總ての事を片付け、一覽非難の人入れられぬやうに仕たいと云ふので、本氣に働かうと考へ付いた。

海軍は何うしよう。どうも川村でまぢまぢ往かぬ、海軍部内を廻へ得る様な者を兼つけねばならぬとて、薩で重望ある西郷從道及び山本義和を、陸軍から海軍に轉任することにした。此二人は何程も海軍の知識がなくして、陸軍中將少將から海軍中將少將に轉じたので、誠に奇なる轉任である。實に當時陸海軍が、さまざま分業して居らず、海軍卿の川村とて、海軍に

のがあるけれど、西郷は之を許さず、鹿兒島へ来た者をも戻らした。折角海軍創業に與つて居るのを罷めさすのは、日本の海軍に不利益であるといふ所があり、又海で育つたのが陸に上がったとて、別段力にもならぬと云ふ所もあつたらう。兎に角海軍は、薩摩で養成したのが中軸となり、軍艦の數を増し、形だけでも海軍らしくすることになつた。

就て何程の知識もなく、維新前より海軍に卓越したやうに聞えた根本さへ、實際に臨んで見當の付かぬことが多い。留學して居つた當時の海軍と著しい差がある。海軍の眞の知識は、新に教育を受けた者に限り、その發達するまで、重望あつて斷行の力ある者が、左右の言を聽いて事を決するの外ない。西郷山ならば、薩摩出身も頭が上らず、佐賀人も之を何うともすることが出来ぬとて、此二人が乗込んだのである。

此二人は以前から色々關係があつて、海軍にも同様に興味を有つて居り、臺灣征伐の如き與つて力がある。當時征伐のことは、土佐の谷に託さうと云ふのであつたが、谷が色々註文を出すので、廟議が決せぬ。西郷は谷を訪問して曰ふ。御邊は色々難かしいことを言ふさうだが、俺に任せて呉れまいか。俺は全く註文せぬ。一編に出掛けようぢやないかと、谷は數から棒に出られて困つたが、其態度に感心し、之を諾することになつた。西郷は訓育を命ぜられ、樺山等と準備して出發した。

のがあるけれど、西郷は之を許さず、鹿兒島へ来た者をも戻らした。折角海軍創業に與つて居るのを罷めさすのは、日本の海軍に不利益であるといふ所があり、又海で育つたのが陸に上がったとて、別段力にもならぬと云ふ所もあつたらう。兎に角海軍は、薩摩で養成したのが中軸となり、軍艦の數を増し、形だけでも海軍らしくすることになつた。

十

廟堂では次から次と面倒があり、何うも出兵

せぬ方が宜いとなつて、大久保内務卿自ら中止の爲に長崎へ出向いた。長崎に到着すると軍艦は居らぬ。人を以て話をすると、西郷は、最早中止する譯には往かぬ。政府で止めるならば儘出發して往。海賊扱ひも宜からう。」と云ふのである。大久保は之を聞き、さうかの一音で歸つて仕舞つた。西郷の隣行と大久保の思切りと、茲に能く現はれて居る。西郷は後不得要領に見えたが、爲すべきに爲すだけの膽力あることは、友人の間に知られて居る。特別に海軍の知識なけれど、海軍に興味を有つて居り、船に乗ることが好きで、いくら船が動いても、酒を飲んで戯れて居る。海軍を何うとかせねばならぬと云ふ評議の出た時、人も名指し、自分も出ることになつた。

大山が陸軍卿となつたのは、山縣の代理格である。初め卿の下に大輔少輔があり、後から言へば、次官に上下の二人があつたが、大山は山縣陸軍卿の下に少輔を勤めて居り、即ち下級次官であつた。山縣の後繼者となつたのは西郷であつて、その去つた後に大山が之を繼いだので、山縣に對しては、大山は西郷より格が一級下になつた。陸軍卿は陸軍大臣となつたが、山縣が軍人として現役に續いて居る間、大山が

萬事之を先輩とするは、言ふを待たぬ。山縣が此等の後繼者としたのは、己れの意に背かぬを熟知しての事であつて、大山が陸軍大臣をして居るのは、山縣が之を勤めて居るのと變りがない。西郷は、山縣とは斯く迄の關係がなく、其上海軍にあつては、何の顧みる所がなく、何人も喙を扶まうとせぬ。計畫は人にして貰つたのであるが、己れの印判一つで、何とでも實行が出来る。海軍は西郷の海軍と云ふべき状態である。所が元々何時迄も斯して居ようと云ふ氣もない。自分は別段海軍で養成され來つたのでなく、飛入で勝手なことをして居るので、好い潮時を見計らつて人に譲りたいと思ふ。大山も何時迄も同じ事をして居るでなく、宜い加減に人に譲りたいと思ふ。内閣では、對議會策と云ふのが頗る難問題となり、大臣として議院に答辯するなんか、誠に困難な次第で、自在に答辯の出来る人がなからうかと云ふ話が出る。

伊藤内閣が黒田内閣となり、山縣内閣となり、夫迄勤めたので澤山であつて、他に轉じようと思ふので、高島を陸軍大臣とし、樺山を海軍大臣とすることになつた。此二人は政治の心得もあり、人を相手に談話するに長じ、議員の質問

に、何と答辯し得るであらうと考へられた。本人は他で考へたよりも意氣が強く、百姓議員なんか何程の事がある、議論で埒があかねば随力を以てする、云ふ調子である。衆議院の多数が頻に藩閥を攻撃し、何事をも否決しようとするのに激し、篤く迄之と争ふことになつた。内務大臣には品川が居り、生命廳に衆議院と争ふと云ふ勢ひであつたが、事ば然る簡單に定くものでなく、彼等が生命を差出さうが差出すまいが、政治の事は然る無作法に違るべきものでないと、後になつて知れた。何處までも選舉干渉しようとしたが、結果は思つたよりも何分一にも足らず、唯跡始末に困るだけである。無理して遣つた運動費は如何にして償ふか。命令を奉じて法律を犯した者を如何に處置するか。随分困ることになつて内閣は倒れ、此二人も去ることになつた。そこで伊藤が新に元勳内閣を組織すると云ふので、元勳格なる大山及び西郷が又しても陸海軍に當ることになつた。

十一

伊藤内閣の下に二十七八年役が行はれ、山縣が第一軍司令官となり、大山が第二軍司令官となつて出征した。二人は早く歐洲の兵制に

注意し、之を我國に適用するに努め、何程か佐賀萩等の亂に實驗し、大に鹿兒島で試験し、必要からして軍事の調子を知ることが出来た。其以前既に獨逸軍に出張して、實戦を口撃し、獨逸軍の優つてゐるのを認めたが、未だ眞に獨逸の優る所以を考へず、佛國は半年で獨逸に負けたけれども、多年陸軍第一を以て鳴り響き、その敗れたのは兵の弱いではなく、政府と人民との軋轢から来て居り、プロイセンが新に勝ち誇つて来たのは軍隊の優つてゐるよりも、佛國の弱點に乗じたので、僥倖の嫌を免れぬとした。佛國が本氣になつて戦つたならば、ナポレオン一世の當時の勢ひが、再び現はれることないとも限らぬと察せられた。佛國は戦争で負けても、日本では猶其兵制に則り、ナポレオン一世を最上の模範と崇め、少しでも其兵法を試みようとした。ナポレオンが川を挟んで戦ふ場合、或一面を猛烈に砲撃し、夜間に橋を架けて渡つてゐるので、西南戦役に肥後で、何でもない河に之を行つたりした。さ程のことをしなくとも宜かつたのに、ナポレオンの眞似をして見たかつたのである。獨逸戦役にモルトケが大に現はれたけれども、日本では割合に深く之に注意せず、實は多く理解する所がなかつた。其中

に漸次獨逸帝國の勃興し來つた順序を知り、萬事に就いて之を參考とし始めた。政治の方面では、自由黨が米國獨立、佛國革命を手本に取り、改進黨が英國の議員政治に倣はうとするので、政府に於ては、新興國なる獨逸を驚して、是等に鼻を明さうとし、伊藤が憲法取調の爲に歐洲に出張した時など、最も重きを之に措いた。伊藤がビスマルクに背る故りがあつたか否かは、明かに言ひ難いが、背つたと言はれても仕方がないだけのことはある。卷貫の咬へ挨拶など、強ちビスマルクに限りはせぬが、ビスマルク流と云へば云へる。ヘルリオンで伊藤の世話した井田は、歸つて之を視、一あのバクリ〜と卷貫を吹かすに驚く」と笑つた。ともかくも獨逸から歸つて、前と聊か違つた所がある。憲法發布の際に、地方官を集めて述べた所では、ビスマルクを引用せずしてカールを擧げたが、是れは世間で、ビスマルクがぶれを取晴したにも因らう。井田の言ふ所に據れば、「ビスマルクも好いが、グナイストを通じて解したビスマルクで、眞のビスマルクでないで困る。」とあつた。

所が、伊藤が獨逸に行つた頃、他の閣員も、種々の用向で歐洲に赴き、中にも大山が、軍制

取調の爲に赴いた。伊藤も幾人かの下役を伴ひ、之をして取調に従事せしめたが、議會開設の準備に就いて、自ら種々の判断を下し、議論に於て屈することを好まず、人は概れ其意を察し、之を迎へるやうにした。大山は同じく下役を伴つたけれども、初めから是等に委任するの狀態であり、已れ自ら細かいことに與らうとせず、中にも川上操六及び桂太郎の二大佐に、多く委ぬる所があつた。獨逸の軍制が優つてゐることは既に知られ、此二人が最も力を致すべき關係になつて居り、大々取調に従事し、愈々成案を定めて歸り、爾來獨逸式と決定さるゝことになり、教育も根本的に改めねばならぬと云ふので、メツケル少佐を伴ひ出した。時に他の方面にも獨逸より顧問を聘し、テヒヨ一、エツゲルト等續々來たが、概れ是れぞと云ふ効果なく、獨りメツケルは、著しい成績が擧つた。其以前の士官學校は舊式の儘で、獨逸戰役後の軍事の進歩に伴はず、士官學校出身者は、メツケルの辛辣なる教授法に、一方ならず面喰ひ、上官で散々な目に遭つたのもある。後から見れば、メツケルの爲した所は尋常一様で、何等珍らしいこともないが、珍らしくなく覺えるのは、獨逸式に馴れたが爲であつて、

初めの間は、なか／＼の騒ぎであつた。

十二

其頃からモルトケが、ナポレオンと並び稱せられ、互に甚しく用兵の兵法を異にしつゝ、何れを優るとすべきかを決するに惑ふ。ナポレオンは天来の名將であり、獨備戰役の際に出でたならば、如何なる働きを爲すか測り知られぬが、是れ天才の能くする所であつて、常才の敢てすべきでなく、常才は常則に依つて必勝を期するが肝要である。獨逸式は實に常才を以て勝を制するに適して居る。常才中にも段階があり、その秀でたのは天才と違はぬにしても、其人が居らなくとも相應に戦ひ得ることになつて居り、參謀本部が愈々重きを爲すことになつた。伊藤が比斯馬克かぶれた時に、山縣がモルトケかぶれたと云はれたが、山縣は獨逸の複雑なる軍事の理解し難いを知り、此點に於て相應の人を得ねばならぬとした。そこは用心深く、人に笑はれることを禦いで居つた。

十九年官制改革より、二十三年議會開設迄に、種々の事が決行され、川上が少將で參謀次長となり、新に腕を揮つたのも其間にある。

二十三年初めて天皇陛下を統監として、大演習を尾張に舉行することになり、川上が其衝に當り、頗る執旋盡力した。其大演習は、後の大演習に較べてこそ頗る小規模であれ、其當時に於て、實に大軍を動かすの方針に於てしたのである。一方の司令官は高島中將、一方の司令官は黒川中將、高島は第四師團長で気聲隆々、前途測るべからずと言はれた。後軍隊の増加すると共に、愈々規模の人を加ふることになり、軍や師團や、旅團や、聯隊や、秩序整然一絲紊れざるの調子で、平時假想の敵を設け、如何に之と戦ふべきかを講じ、一旦宣戦すると共に、疾風迅雷の勢ひを以て進まうとして居るが、元はといへば、川上が獨逸で目撃したのである。獨逸でも後と違つて、親切に教へて呉れた。モルトケが八十九歳で參謀總長を辭職する前數年の事である。

川上は有栖川宮を參謀總長に戴き、下に人材を集め、役々として講究する所があり、朝鮮で日清衝突の免れざる勢ひを見て取り、豫て用意した通りに運ぼうとして、或程度迄意の通りに進んだ。山縣及び大山が軍司令官として出發したのは、軍事的技倆の秀でて居るよりも、重望を以て人を威服するに足るからであつ

て、計畫は、參謀本部から夫々參謀部で出来上り、其通りして必要に應じ必要の事をすれば足り、神出鬼没の妙を現はさなくても宜いと云ふのである。大抵のことは、練り通りに爲しよへすれば済む。

拿破崙は神出鬼没の妙あるが、今は拿破崙時代でなく、モルトケ時代であると云ふことになる。拿破崙戰役のやうに面白い話に乏しくても、一定の方式を以て進み、能く勝を制することが出来る。實はモルトケに拘泥した所がある。後から考へれば、平壤を攻圍するのは、彼が如くしくても宜かつたのに、隨分心配して掛り、京城から往つたり、元山から往つたり、手に念が入つて居る。敵も新式の軍隊であるから、浮としたことでは行けぬと見たのであり、又それが大丈夫であるか、支那へ新式は何程のものでなく、京城から進むばかりで澤山であつた。弱敵と見て侮らぬに越したることなけれど、定石を知らぬ者に向つて、定石通りにしたのである。山縣は大でさへ縮心し、野津が愈々平壤を攻めようとした時、自分の到着まで待てと云ふことであつた。野津は其到着を待たず、一舉にして攻め落してしまひ、全く心配する程のものでなかつた。谷なんか大同江

を渡すだけでも重大の事に考へ、抵抗なしに渡つたと聞き、敵は何故に岸で防がなんだかと怪しんだ。敵は戰略に於て、定石をも心得て居らなんだ。更に奇なるは、敵の海軍を恐れたことであつて、陸軍は船で運送して、仁川に上陸すれば何でもないので、釜山から遙々陸行したのである。隨分手数を掛けたものである。念には念を入れとは、斯かる事であつて、決して悪くは言へぬ。

十三

大山一行が獨逸から歸り、川上桂等が新に改革に従事した頃、海軍でも奮發する所あつたが、海軍では初めから英國式であつて、改革の必要を認めず、日將校が屢々英國に行くので、是は驚く程のことがない。併し陸軍の改革するのを見て、其儘にして居れず、軍艦を新造すると共に、大刷新しようと云ふことになつた。伊知地が海軍兵學校長となつたのも、従來の情氣を一掃するの意氣込からのことで、意氣込ほどの効果はなかつたが、其日暮しの因循風は改まつた。時に西郷が海軍大臣、樺山が次官であつたが、伊知地は樺山が言ふことを聞かぬので、腕力を以て迫り、樺山は腕力に於て負ける方

でなく、逆之を室外に押し出したことがある。それ程であるが故、兵學校生徒を責責するに峻烈を極め、疲勞して倒れるのを何とも思はなんだ。知識がないので、奮發がひがなかつた様だが、陸軍に劣らぬ實りであつた。

西郷は特別に海軍の事を知らなくても、海軍の帝國に必要なを知り、如何にもして之を有力にしようと思つて、足が爲に努めた所がある。前に海軍が裝飾物と見えたとをば、實戰に適するやうにせねばならぬことが明かになり、高給を拂つて佛國のベルタンを聘し、軍艦製造を依頼したりした。艦壁に木屑を入れるなど、何とか日本特別ものを造らうとした。效能は少かつたが、海軍で本氣に成り掛つたことは察せられる。參謀本部で假思の敵を設けた様に、軍令部で之を設けて、準備した所がある。併し陸軍は確に支那に勝てると信じ得ても、海軍は之と違ひ、何分にも支那には鎮遠定遠といふ戰艦があり、我は之に比して劣つて居る。此二艦が我國に回航した時、我將校は稍氣恥しく感じた。將校及び水兵の伎倆は、我邊に彼に優るも、軍艦が劣つては如何であるかの心配がある。樺山が衆議院で百噸砲の演説をしたのも、單に隆閑を維持するばかりでなく、列

國の海軍の事を聞いて、成る程と思つた所がある。日清戰役に、陸軍が我海軍を頼まず、釜山から上陸したのも、一艦に海軍を侮つたのでなく、支那の陸軍を買被つた程で、一層其海軍を買被つて居つた。愈々開戰となるや、時の軍令部長は中牟田であつて、彼我の海軍を比べ、妄りに進まうとせぬ。東京灣に水雷を布設し、船舶の出入を警戒したのは、事實よりも見せかけであるにせよ、如何に敵の海軍を憚つたかが分る。

所が陸軍では、釜山より京城に兵を進め、更に平壤に向ひ、今にも戰はうとして居るのに、海軍が唯陸軍の運送を護衛するのみでは、陸軍の附屬たるに過ぎぬ。陸軍が進むならば海軍も進まねばならぬ。とは海軍部内に高まつた意見である。斯う云ふことにかけては、樺山は随分強く、引込んで居らうとはせぬ。西郷海相は、何とか海軍で一働きたいと考へ、樞機の人々と商議したが、各軍令部の計畫を全く改め、國防の爲に軍艦を彼方此方に分けず、之を集めて敵と決戦すべきであるとなつた。そこで新しく樺山が軍令部長となり、伊東を艦隊司令長官とした。

いけれど、其處は、陸軍に山縣及び大山が軍司令官となつて居ると、違ひはない。伊東は薩摩海軍の中で重望がある。艦隊の相へとするに宜からうと云ふのである。敵は黄海を往來するので、必ず其邊で出會はうとして、出發することになつた。樺山が軍令部長になつたのは、西郷の力に依つて居つても、軍艦を集合して決戦するに定まつたのは、樺山の責任に歸するので、樺山は何とかして敵の艦隊と會戦したいと思ひ、司令長官をして機會を求めしむるに努めた。遂に希望通りに會戦し、相應の成功を収むることが出来、陸軍の成功に譲らぬやうになつた。

十四

樺山が自ら西京丸に乗り、戰場を馳け廻つたのは、戰爭として無用の事をしたもので、我艦隊は、之が爲に迷惑を感じたこと一通りでない。軍令部長が危険を冒すのを捨置く譯に往かず、之に氣を取られて困つたことがある。西京丸から發砲したと何程の效力もなく、敵に打沈められては、容易ならぬことになる。誠に厄介なことをした者である。けれども樺山としては、斯くせねばならぬ羽目になつて居る。

彼は進撃論者であり、司令長官の卓抜を擲論つたこともある。自分が引込んで居つて人に戰爭を勤めるのは、餘りに得手勝手のやうに思はれる。自分は何時でも戦ふ者である、と云ふを見せる必要を感じて居る。戰爭なんか何でもないこと、武装の無い船でも此通りである、と云ふを見せようとしたのである。戰爭の邪魔になつたが、人の奮戦を奨励するに、利益がなかつたとはせぬ。行掛上あの通りの態度に出でなければ、ならなかつたのである。時に取つて大出来である。

日清戰役に、陸海軍は相應に成功したが、平和條約を締結すると共に、露獨佛三國が干渉し來り、遼東還附を餘儀なくした。外交當事者は、軍人の希望で遼東を取ることになり、遂に干渉を招くに至つたと云ひ、軍人側では、軍隊で爲すべきを爲したのに、外交の拙なるが爲に、折角の獲物を奪はれたと云ひ、互に責任を他に嫁したけれども、何にしても三國干渉は一大打撃であり、同時に陸海軍軍人をして、三國に者眼せしむるに至つた。既に支那に勝つて見れば、腕力も捭り、可なり大きな戰役を取つし得るを信ずることとなり、一層の事、大なる露國を相手にしたらばどうかと考へ始めた。

歐洲列國は、初め支那を買被つて居り、一旦日本に破られてから、甚だ興し易しとし、干渉した者は、干渉を恩に着せて色々要求し、干渉に關係ない者は、權衡を言ひ立てにして要求する。露國では、一の帝國を東亞に樹てる勢ひであつて、全權を總督に任せ、本國政府は與り關せぬかに粧ひ、日本は屈するか、之と戰端を開くか、其一を擇ぶの外なく、寧ろ覺悟して取掛るが得策であるとなり、其準備に着手した。所が川上は參謀總長となり、愈々力を振はうとして病死し、田村怡與造が參謀次長として後を引受け、隨う力を致したが、是亦病死した。大山は參謀總長となつたものの、殆ど悉く人任せで、次長其人を得ると否とで參謀本部の效能が分れる。そこで兒玉源太郎が次長となり、露國に宣戰するが早いか、大山が總司令官となり、兒玉が總參謀長となつたが、順序から言へば、川上若くは田村が、總參謀長たるべきであつた。兒玉は臺灣總督で陸相を兼ね、次で陸相に專任したけれど、内相と爲つたり、文相を兼ねたりして、參謀本部に閉籠るべき柄でなく、次長となつたのは、一時隨機應變の才を揮はうと云ふのである。モルトケ流と違つて居る。

而して山縣が總司令官となるべきを、大山が任命されたのは、主として山縣の健康状態から来て居り、その執れが任に當つたとて、何の變化があるべきでない。共に先進者として、各軍司令官の押へとなるに足る。軍人は順序を重んじ、第一の先任者山縣、第二の先任者大山を重んずるに定まつて居り、其伎倆如何は問ふ所でない。兒玉は前からの參謀本部の準備があり、應變の才を以て能く敵軍に對するを得たが、初めより露國との戰役を念としたのでなく、當事者の病死したが爲に任に當つたので、時々際どい事をして、ハラ／＼させる所がある。野津は、あの小僧がと言ひ、自分の立場は自分でサツサと造つて除けた。獨逸では、丁抹との戦ひ、奥國との戦ひ、佛國との戦ひ、皆モルトケの作戰計畫に依つたが、日本では、斯る中心人物がない。

十五

山縣及び大山は、全軍に重きを爲すに相違ないが、自ら作戰計畫する方でない。一通りの計畫は出来るけれど、モルトケが七十一歳で、獨り地圖を前にし、諸方より電信の報告を得、自ら電信機を手にして諸方に訓令するが如き、固よ

り及ぶべきでない。山縣大山等は、日本に會社の重役のやうなもので、伎倆は餘り問題でない。モルトケは偉大なる技師長であつて、苟くも事の戰役に關することは、細大となく自ら處置した。川上も此眞似は出来ぬ。併しモルトケは自ら任じ過ぎて居つて、時として計畫を誤つたことは、後に元帥アルメンタールが指摘した。日本では是れ程一人で任ぜぬ代りに、非難する者もない。海軍に於ても、英國ならば、曾てネルソンが一人で當つた形になつて居るが、日本では、日清戰役に伊東大將が出て、日露戰役に東郷大將が出て居る。伊東が歿したのでなく、新に人を得るの必要を生じたのである。日清の役に軍令部長の職が頗る重かつたが、日露の役に軍令部は別段の事なく、殆ど悉く艦隊に決した。艦隊の運動如何が、最も主要なることとなつて居つた。何人を聯合艦隊司令長官とするかに就て、評議があつたが、ネルソンの如くに一々自ら計畫する者を望まず、之を望んでも人がない。東郷大將が沈著にして勇氣あり、而も輕卒に危険を冒さぬと云ふので極つたが、日本は軍艦の數こそ多けれ、戦闘艦の數は露が優つて居るが上、波羅的艦隊が廻航し來らうとして

居り、此等と戦ふは容易でない。東郷が全勝を收むるものと豫期せず、初めより後繼者を設けて置いた。東郷が聯合艦隊を以て奮戰健闘し、幾つかの軍艦が破損し、東郷も戦歿すると、破損した軍艦を軍港で修復し、新に艦隊を整へ、柴山大將が長官となつて出る。是亦戰歿し、破損した軍艦を軍港で修復する。我艦隊が破損する時、敵の艦隊に大打撃を與ふるに相違なく、敵は軍艦修復の便利を缺くが故、最後に我艦隊の勝利に歸する。と云ふのである。所が露は多くの戰艦を備へながら、旅順に引込んで容易に出でず、出ても日本艦隊を見れば引込んでしまひ、而して波羅的艦隊は途中に止つて到着が遅く、廻航し來つた時は、既に旅順全滅である。日本でも、數の少い戦闘艦の中で、敢なく水雷に觸れて沈んだのがあり、意外の損失で、一通ならず心配したが、露の艦隊は思うに程に強くなり、大決戦に次ぐに大決戦を以てするが如き必要がなかつた。爲に東郷は全軍の英雄となり、百年を隔て、萬里を隔て、ネルソンと相對立することになり、柴山は何處に居るか、多くの人は名をも記憶せぬ。海軍大臣は、川村海軍卿に次で西郷、樺山、仁

禮となり、更に西郷となり、次で山本となり、日露戦役に於ける海軍は、薩摩全盛と云ふべき勢ひであつたけれど、西郷は之に先んじて歿し、功名に與ふことは出来なうだ。存命して居つたならば、當然公爵となるべきである。陸軍は官職に於て、大西郷が元帥若くは大将の名に於て第一位に居つたが、實務は初めから長州が専ら當つて居り、大村兵部大輔に次で前原が出で、次で山縣が出で、後大山となり、高島となつても、其後長州人で續き、繼に上原で幾分の變化を呈した位のものである。大山は陸軍に於て、薩の勢力を張らうとせず、張らうとしても張ることが出来ず、卻つて位置を失ふことになつたであらう。軍事に於ける山縣の代理と云ふべき有様であつて、其點に於て諷へ向に出来て居る。

十六

西郷と大山は従兄弟同士であつて、何程か大西郷に似て居り、容貌からして多少人の注意を惹いたが、西郷は一見して只物ならぬと知られ、大山はそれ程でない。大西郷は容貌及び様子で豪傑らしく見え、如何なる能があるとも知られず、才智に於てき程でないと思はれたりし

たけれども、弟の西郷は、兄より聊か格格が小さくても、頗る押出しが好く、且利口らしい所が現れて居る。兄程頼みになると思はれぬが、さりとして頼みがひなき方ではない。而して應對に至つては、如何なる場合でも巧に切つてのけ、知らぬことは知らぬとし、出来ぬことは出来ぬとし、之をさらけ出して、何等輕蔑を招く所がない。幾人が口角泡を飛ばして、今にも掴み掛らうとする勢ひがあつても、西郷が中に入れば、何時の間にか怒りが笑ひとなり、話が片付く。

笑ひの愉快なのは、西南人の一の特色であつて、中にも薩人は然うである。豪傑でなくとも豪傑笑ひをする。「大西郷の笑ひは、實に春風の吹き来るが如く、英雄の襟度さこそと思はしめた。」と接近したものは云ふ。西郷も笑ひ方が頗る似て居つて、一層才智が現れるだけ、殊更笑ひを以て、人の青筋立てて議論するのを混ぜ返し、機を見て混ぜ返すに妙を得て居る。威を造れば中々嚴めしい面相であるのに、一度大口開いて笑へば、人共に笑はずに居られぬ。大山も幾らかさう云ふ所はあるが、西郷ほど打解けて磊落に出ることが出来ず、普通の薩摩人といふ所がある。

西郷が常に大山に先んじて立身したのは、初めの間、兄との關係もあつたが、兄が死んでから全く己れ一身の力である。西郷が来れば何とかが難りが付くだらうと云ふ様に重んぜられ、又調法がられた。多少氣概があつて意氣を喪び、一度嘗つた所を果さうとする傾向がある。馬鹿話に耽つても、要點を忘れぬ。けれども兄ほど深入せず、難かしいと見れば巧に身を躲して避け、追窮せらるれば、側の笑ひで笑ひこけてしまふ。大山は意氣を以て許すと云ふことは滅多になく、何事も秩序的に事務的に取扱ひ、可もなければ不可もない。有難くもなければ腹も立たず、當り前の事をすれば當り前の事をして呉れるといふ形である。

二人共に、初めから必ずしも軍職を専らにするの意でなく、適當なる位置に何でも當るを辭せなんだ。西郷は内務でも農商務でも何でも来いで、文部卿にもなり、自ら文官卿と稱して笑つて居つた。到る處、次官任せ局長任せであつても、同僚間に幅が利くだけ、其長官となつて居る省が勢力を張り、文官卿時代の文部省は、可なりに成績が擧がつた。大山は是ほど官職を遍歴しないが、大警視になつたり、文部大臣を兼ねたりしたことがある。

後こそ軍職が一の専門となつたれ、初め軍職で大に力を伸ばし得ると考へられず、板垣が軍職を棄てたのも、軍職に見切りを附けたのである。況して西南戦役が終つては、最早世が太平になつたと考へられた。若し外國と戦役のあることが豫期せられたならば、他の職に移つたり、之を兼ねたりすることなく、一意専心軍職に専む譯であつたが、外國と戦ふなど殆ど夢想だにせず、唯治に居て亂を忘れずの古代の格言の下、成るべく軍備を整へ置かねばならぬと云ふ位のことである。

十七

山縣が内務に据り込んで勢力を積付けたのも、軍職より治に移つたのであつて、内閣として洋行し、自治制度を調べるなど、殆ど政治専務とならうとして居つた。唯前の來歴よりして、軍事上第一の先進者であり、軍事のことは一應其承諾を経ねばならぬことになつて居る。大山が陸相をして、之に對して次官格である。鐵道の旅團が師團となり、漸次將校の昇進すると共に大將を置かざる順序となり、さる場合に、まづ山縣に次で大山と云ふことになる。山縣が内務省専らであつても、軍人は

之を第一の先進者として敬ひ、軍人が功を立てべき時に、山縣も功を立て得ることになつて居る。山縣が軍人として一貫した姿あるのは、自ら求めたことよりも、他から守り立てたのである。眞に外國との戦役を豫期したならば、内相になつたり仕つかつたであらう。内相になつたり、首相になつたりしたのは、世の中を太平として軍職を軽く見たのである。元帥の筆頭で治まり返つて居るのは、軍人の先進者であると云ふだけで、心太を押し出すやうに、軍隊が功を立てる場合に、何時でも論功行賞されることになつたに過ぎぬ。

山田の如きは、山縣よりも軍事に長じて居るが、功が立てられぬと見限り、早く軍職を去つて仕舞つた。戰事に掛けては、何時でも山縣以上の事が出来る。平時に軍隊を取扱ふのは、山縣位が適當といふ測子に出掛ける。日が射いただけ思切が早かつたか、今少し生き長らへて居たならば、軍事に面白味を覺え、或は之に専らになつたかも知れぬ。彼にして眞に外國との戦役の近きにあるを知つたならば、大山のやうに、川上及び陸に事を任せず、自ら參謀職長となつて畫策する所があつたであらう。思ひで法律に専らになつたにしても、十年も生

き長らへれば、別に花を咲かした所があらう。死んだ時は僅に四十九である。

山田に較べれば、西郷大山などは軍事に通ぜぬ者であつて、自ら軍事に關らず、何事でも立身が出来れば宜いとし、後に元帥として大に功を立て得るとは、思はなかつたらう。殊に西郷は、特別の才能なきに拘らず、行くとして可ならざるなく、何事か大働きをしたいと云ふ所があつて人に擔がるれば平氣で擔がれ、緒に歸つたりする。

革命が設けられてから、兎角官民の軋轢が甚だしく、如何に落着するか知れぬと云ふ測子である。品川が内相となつて、之を如何にかせねばならぬと考へ、憲法干渉といふ非常手段を取つて、事が愈々むづかしくなり、革命も起りかねまじき勢ひである。品川の云ふには、政黨ならば政黨で戦はう、新に一大政黨を設けようではないかと、西郷と共に國民協會を組織し、政黨で勝を得ようとし、二人共に彼方此方遊説して廻つた。其頃品川が衆議院で重きを爲し、新に議長となつて時の勢ひを語つた。西郷は擔がれて廻つて居るが、兄と同じく始末に等へなくなる。あればあゝして倒れるのである。

星の眼には、西郷は兄と同じく見えた。男の心中するものと見えた。何程か同じ所あるに相違なく、西郷も多少意氣を以て許す所があり、一概に己れの利害を顧みはせぬが、併し兄ほど一身を抛げ出しはせぬ。兄ならば、擔がれた以上何處までも擔がれて、倒れても構はぬ。弟はさうでなく、先が何うなるかは能く見え、大抵の所で打切にして仕舞ひ、而して何人にも恨まれせず咎められもせぬ。頻に遊説して廻つた時、品川は悲憤慷慨な演説をするが、西郷は何もせぬ。宴會の席に、都々一を喰つて高笑ひする位のことである。それで世間が明けて通し、政治運動を止めたとして、人が何とも思はぬ。妙な性分もあればあるものである。

十八

西郷は、鞆に利害の爲に足を洗ふと云ふやうに輕薄でなく、國民協會を起し、之が爲に遊説したので、財産の損失少くなかつた。擔ぐ者が負債を起すとなれば、平氣で之に應じ、何萬圓が何だか知らぬ體たらくである。その漸く財産に穴の明くのが知れて、關係者は色々忠告し、政治運動を止めさせた。忠告が親切であつて、さらば止めようと思ふことになつたけれど、そ

れて財産がなくなつたかと云へば、然うでない。兄のやうに、兄孫の爲に美田を買はぬでなく、誰が買つたか相應に買つて居る。西南戦役に死ななだ陸軍人は、大抵善財に抄目ないが、西郷も御多分に漏れて居らぬ。大山よりも自腹を切つて窮するやうでも、窮するが如く達するが如く、窮達を超越したとも云へる。

政治運動を止めて何をするか。再び海州となつて、總て支那との戦役に臨み、海軍の活動を見る事が出来た。山縣大山が陸軍大将となつたのは、順上りであるが、西郷樺山が海軍大将となつたのは、陸軍より轉じたので、海軍の經歷及び伎倆は問題でない。兎に角其頃迄、大將は壓が利けば宜く、壓の利くに於て、西郷は殆ど第一である。兄の大山西郷は一層壓が利くにしても、壓が利き過ぎて面倒が起りはせぬかとの心配がある。弟は宜い加減にして面倒が起らず、大抵に始末が付いて往く。兄は擔がれて利害得失を顧みぬやうになるが、弟は其邊の調子を心得て居る。

飛勢の大體を察し、帝國の爲に計ることは、兄に似て居る。彼は磊落で纏りがなく、頗る不得要領でありながら、國家の爲にする赤心だけは随分固い。但し手段は餘り構はぬ。名分など

分るか分らぬか疑はしく、譲る時は幾らでも譲り、取る時は幾らでも取るを彈らぬ。弱くもなれば強くもなる。此邊は大山と違ふ。

大山は何程か縁りが付いて居る。大山西郷に私淑する所あつたと云ふが、全く私淑せぬではなからう。血筋を引いて居つて、似た所ある筈である。併し本来稱平凡に出来て居るが上、趣味及び經歷よりして、山縣に私淑する所ありはしなかつたらうか。山縣が大久保に私淑する所あるとも云はれるが、大山は或點で山縣に似て居る。體が肥つたのと瘠せたのとの大違ひがあつても、事を苟くもせぬやうに心掛ける所が、相似て居る。何ほど本来の性質で、何程養成し得たかは、分り悪いけれど、何にせよ磊落と云ふ調子がなく、人に氣を置かす所がある。

西郷は誰とでも交はり、酒を浴びて他愛もないことを言ふばかりでなく、何處でも必ず女に關する話がある。時として醜く金を取られたことももある。大山は人と話の出来ぬ方ではなく、何人をも相手に出来るが、實く交はらうとせぬ。定まつた社會の外に出ようとせぬ。而して女に關して話の少ないのは、一つは自らの醜男なるを知つた所もあらう。西郷は維新前後から花柳界を荒し廻つて、相應に持てたので、面

白きの餘り、變つたことを好んで失敗するのである。又餘り世間に知れるのを心配せぬ。

大山は自然の儘にし、無理なことをしようと思はず、其位置を以てしたならば、随分贅澤も出来るけれども、眞から女に受けられぬのを知り、受けられぬのを強ひて受けさせるのを面白くないとして居る。世間では、鬼が逃げ出しさうな恐ろしい面相で、念に飽かせて平山戯るのがあるが、實は金のため、嫌々お世辭を言はれるのである。之を樂むのは、自惚で其邊に氣付かぬのであつて、氣付いたならば、面白くも何ともなくなる。心のない人形を相手にするより、面白くない。大山の聰明は、其邊を見ることが出来る。自分は強ひてお世辭して貰つて、愉快を感じることが出来る、下手な事をして笑はれるよりも、謙直にして居る方が、何かにつけて利益であるを知つて居る。

十九

初め殊更軍事を専らにせず、何の場所でも力を伸ばさうとしながら、軍事以外に出ることが少かつたのも、之と同じ。人が政治に不適當と見て呉れるのに、強ひて政治舞臺に出ようなどとはせぬ。陸軍に在つては、誰も異議を唱へ

ず、當り前のこととして居り、他へ出るやうに勧めものも少い。文部大臣を兼ねた時、食堂へ出て、普通の辨當を喰つた位のものである。簡單な所はあるが、西郷ほど面白味もない。詰り自分が豫期したよりも、軍事に専らになつたのであつて、日本第一の將軍となり、外國の或新聞から拿破崙以後第一の將軍の如く賞められたりするのは自然の勢ひが然らしめたのである。山縣元帥に次ぐの元帥として、而も滿洲軍總司令官として諸將に冠絶しながら、歴史に何程の印象を残すかを言ひ難いのは、其處である。個人の力よりも、時勢の力であると認められて居る。總大將は名が第一であつて、豊太閤が朝鮮を征伐した時、初に宇喜多秀家、後に小早川秀秋を總大將にして居る。共に丁年を越えたばかりの青年である。何人も總大將自らの力を認めせぬ。大山は之と大に進歩にしても、分量の違ひで、性質の違ひでない。確に總司令官に適當であつたが、將材を以て戰史に輝くべきものがあるかは、疑問に屬する。

西郷に於て見る。彼は軍服を脱いでも、群雄を駕御する力がある。大山も將に將たるに足り、滿洲に於て西郷よりも適したうけれど、是れ秩序立つた時のことで、亂世には一方の驍將たるに過ぎまい。西郷は徳度も氣魄も、共に英雄らしく備はつて居り、有象無象を手玉に取ることも、何程の事が無い。併し智慮に富み膽も振つて居つて、意志が割合に弱い。兄は出来ぬことでも、己むを得ずとあつては敢てするを辭せず、それだけ事に無理が出来ても、場合に依つて、何人も成し遂げ得ないことを成し遂げる。大西郷は是れで成功し、是れで失敗した。西郷はそれ程成功せず、それ程失敗せぬ。人物として、伊藤、山縣、井上等より大きく、又能く人を操縦するの途を知りながら、歴史上に是程現はれぬやに疑はるゝは、圓轉滑脱の自在なるにも由る。誰にも悪く言はれず、衆と共に笑ひつゝ、元帥となり、帥となり、長命すれば公爵となるに定まつて居つたのは、巧みは巧だが歴史に掲ぐべきことが少い。首相とならうと思へば、なることが出来るのに、爲らうとせぬ。井上も伊藤山縣と同格であつて、首相とならなんだのは、自分の長短を知つて居つた爲と言へるが、全く其意が無いではなかつ

た。一時臨時首相として議場に出で、出し抜
けの質問に面喰ひ、自分も大きり嫌になつたの
である。當時後藤象二郎が之を見、廊下で議員
を相手に之を笑つたが、井上は首相として失敗
するに定まつて居る。

西郷は全く首相となるの意は無かつたでも
ないが、井上に比して一層已れの長短を知り、
窮屈な思ひをしながら行く行れぬことを行ふの
を愚とした。そこで何とあつても、首相になら
うとはしなかつた。彼は失敗を避くるに於て、
何人よりも賢明である。併し、失敗する程でな
くては、生涯に波瀾を生ずる所がなく、波瀾
がなくては傳記が寂しい。首相として失敗する
にしても、失敗した首相は他にもあり、さ程心
配するほどのことでないで、一度首相になつ
た方が宜かつたかも知れぬ。賢明といふ方から
言へば、首相にならぬが宜い。

二十

西郷自ら、何とか考へて居つたらう。首相
になるは絶対に斷念しても、海軍を擴張し、
外國との戦役に大に力を現はさうと思つたら
う。彼は露國皇太子遭難の際に内相職に居
り、強國に威壓せらるゝの苦痛を経験して居

る。當時日本の過失であつたにしても、露の權
勢は随分烈しい。露艦隊の碇泊地に於ける舉動
が、甚だ穩かでない。新聞紙には一切之を報
道するを禁じたが、西郷は只管恐縮しつゝ、
つゞ、弱國の悔めを知つた。後、三國干渉に
て、愈々事々容易ならぬを覺え、早晩吾が努力
すべき日あるを考へずに居れぬ。實に日露戦役
は、陸海軍互に相助け合つたけれど、時々衝突
することがあつて、若し西郷が居つたならば、
其間を能く融和し、事實に於て陸海軍の總帥の
やうな位置になつたとも思はれる。彼は斯るこ
とが適任である。彼は細かい作戦計畫が出来ぬ
にしても、大略を括ることが出来る。彼は樺山
ほども海軍の事を知らず、殆ど盲判ばかり捺し
て居ながら分らぬやうで分り、多數の軍人は能
く歸服し、不平を言はうとせぬ。樺山はそれ程
でない。山本は大佐にして權兵衛大臣の名があ
つたが、其力を伸ばさしたのは、西郷が主であ
る。海軍の將官は權兵衛を忌み懼つても、西
郷は之を小僧扱ひにし、人に語つて曰く、權兵
衛は我輩と歳は餘計に違はぬが、感心な男で、
海軍の事は何でも知つて居る。艦の構造から噸
數まで覺えて居る。あれに聞くと皆分ると、西
郷の頭では、權兵衛が餘程調法であつて、我儘

しても、何程の事に思はなんだ。西郷が居れば、
權兵衛は彼の如く失敗せず、失敗しても恢復す
ることが出来たらう。

彼は元老となつて居つても、山縣のやうに人
に忌み嫌はれず、而して内閣を滑かにする
に與つて力がある。山縣のやうに奥の院に引
込まず、自由に、政治界の人を相手に、酒を飲
み談笑して、舉國一致に利益を興へる所があら
う。山縣ほど纏つた考へがなく、時々滑稽な
ことがあつても、それだけ責任あるやうな無い
やうな位置に、最も適して居た。元老は必ず
しも無益有害でなく、其人を得れば調法な所も
あれど、山縣では、折角の元老を恨めにする
ことがある。西郷が現に元老であれば、山縣等
と他の人々との間に立ち、滑らかに事を運ぶこ
とがあらう。

西郷にして、平時元老であり、一旦事が起りて
陸海軍に總帥となれば、明治大正に眞の英雄を
出すことになるが、希望があれば憂慮もある。
或は飛んだ日に逢はぬと限らぬ。何にせよ、西
郷の死は少し早かつた。死んだ時は、今の後藤
内相位のものである。見たからに豪傑らしい
人物で、彼の如きは少い。維新前後に輩出した
人物は、多少之と相似た所があるが、其後に居

たのは次第に官僚化し、面白味が減じて居る。今日英雄氣取の者があつても、どこか型が窮屈で、同じ虎でも狸でも、山野と動物園との差がある。西郷が歿してから、事業の後継者は幾らでもあるけれど、性格の後継者が無い。文武官を通じて、概ね技師であつて、手腕が逞しくて、事業を離れて何等人を感發する所がない。技師も結構であり、良技師が甚だ必要であるが、幾人か技師プラスといふのが欲しい。

廣瀬中佐の銅像を、人馬の往來繁き萬世橋畔に建てたのは、他にも事情あるにせよ、斯く人を感發するものが少いからである。勳功としては、廣瀬は何程のものでなく、是ほどなのは他に澤山あるが、併し單純な技師でないだけは明かである。陸軍に於て、乃木大將が敬はれて居るが、是さへ勳功としては、さ程傑出して居らぬ。その敬はれるのは、人を感發する所にある。乃木以前に山岡が居り、人の信頼する所となつたが、今の島村は、多少その面影がなからうか。見掛倒し、見掛倒しでないか。西郷は庇流儀とは違ひ、何等悲壯の感を催さしむることがなく、或は好んで悲壯を打消さうとする。併し豪快にして英雄らしく思はれる所は、頗る尋常と違つて居る。

二十一

兄西郷は、乃木式の規模を更に大にし、弟に乃木を加へたやうな所がある。弟西郷も、別の方面に於て之に譲らず、斯くてこそ男の中の男と思はしめる所あつたらうと祭せられるが、體のよい飄箏餘で過ぎたのは、惜いものである。大山は功を終へて内大臣となり、眞に功成名遂げ身退くの道を得、誠に圓滿なる生活であつて、四時の序功を成して去つたが、西郷の様に、面白味を遺想させる所がない。政府部内で、西郷が伊藤化し、大山が山縣化し、共に長州に併呑せられた形があるが、大山は特別の事なしとし、西郷が機會を得れば、別方面に大に活躍したであらう。

西郷と大山と年齢相若き、而して西郷が常に先んじて要地を占めたのは、比較的多く能力に富んだが上、維新の英雄時代に相應したに由る。大山の生き残つて高位高官を極めたのは、官僚流儀の模範といへる。人と衝突せず、勤むべきを勤め、順次昇進し、安樂に世を終るのであつて、今は官僚のみでなく、一般に此状態となり、大山は後の時代を代表して居る。今日から見れば、西郷の英雄なるが時代遅れであ

つて、大山の官僚的なのが現代式であるが、時勢の變遷は決して單調でなく、斯く簡單に進歩不進歩を言ふべきでない。歐洲で平和會議が屢も催され、永遠の平和を樂むやうになるかと思へば、絶大の大戰亂が勃發し、有りとあらゆる人が、悉く職務に關係するのを見る。人々官僚らしくなり、物事が几帳面に片付き、何でも機械的に運ばうとする頃、何か變つた性格を求めたくなる。今の政黨首領は、何れも型が小さく、大山と較べて是ぞと云ふことがなく、西郷の磊々たるに較べて、性格が餘りに迫つて居る。大山でさへ、面白味こそ少けれ、後陸相よりも大きく、どつしりとした所がある。知識は岡大島等の何分一にも足るまいが、据つて居れば、据つて居るだけの事がある。彼は茫漠として居ながら、時として決斷する。御前會議で、聲を厲まして發言もした。やはり維新の盛んだに對して、併し西郷ほど益達な所がない。西郷は兄西郷に對して平凡であるが、官僚と型を異にし、人間の眞相の現れる感じがする。過去人物とばかり見ることが出来ぬ。假に今日、西郷の如き人物が宮内閣にありし又は斯る人物が議會にありしとすれば、事は頗る違ふであらう。彼は知識に於て言ふに足ら

ず、議論も出来ねば、策略とても餘り無いけれど、その居る所は何となく温味があり、敵にも愉快を覺えさせる。隆盛ならば、兄の死を見て居らず、城山に閉ぢ籠つた所で、特赦の取計らひに努めたらうに、従道は其處までの俠氣なく、死ねば死ぬ儘にしたが、可なり濃族の世話をした。兄ほど情に生きず、それだけ熱がないとして、相應に情もある。理性一方のむづかしい男と違ふ。

彼は政治運動に失敗し、其下に働いた佐々は、今の安達ほどの働きも爲し得なかつたが、是れ時勢が違つて居るためで、佐々が居れば安達は頭が上らぬ。安達が頭が上る程ならば、佐々は猶更高く上らう。佐々は大分型が小さくなりながら、安達より大きく安達より血の氣が多い。今日安達に使はれるものが多い所から見れば、人は餘程型が小さくなつて居る。西郷に佐々が取入つたのは、安達が加藤に取入つたのと同じであつて、佐々は、安達より型が大きく、型の大きい佐々が西郷を取返し、西郷が日清戦役の大舞臺に現はれた所を視れば、安達に頸筋を押へられる加藤と、同日に言へぬ。而してその加藤が最大政黨の首領とあつては、今の人は随分型が小さいとせねばならぬ。物窮まれば通ず。小

さくなり過ぎ、は、大きくなる必要を生ずる。今は未だ窮まるに至らぬけれど、早晚何とか變らねばならぬ。

英雄人を欺くとか、英雄色を好むとか、だらしなき英雄の眞似も困り者であるが、毎日楊枝で重箱の隅を突いて居るのも、面白くない。西郷と大山とは、大西郷の肉親にして其反對の行動を取り、薩州を代表し、薩長の連鎖となり、明治歴史の大立者となつたのは、種々の點で暗示を與へることがある。大正の人物が、明治よりも事務的なるは善い。秩序を重んずるは善い。併し型を小さくせねばならぬ必要はない。大正に英雄豪傑が出なくても差支なけれど、せめて國務大臣及び政黨領袖は、今幾段か型を大きくして然るべきである。

(大正六年一月)

成功に就き(一)

近時成功を論ずる者多し。是れ實に我國のみならず、他國に於ても亦然る所、而も成功は元一概に論ずべき事ならず。人の生る、時、

既に幸あり、不幸あり。少より長に至るの間、幸にして成功するあり、不幸にして失敗するあり。其の成業の跡に觀る、則ち千種萬様なりと雖も、多數を概括すれば、成功する者は自ら成功する所以の理存し、工業たり、商業たり、政治たり、皆それと特色とすべき事あり。政治として、一概に言ふべからざるも、之と我國の現状に察する、名の實に浮るより危険なるは無し。夫の多くの政客が年壯にして名天下に馳せ、而も老年に及ばずして寂然聞ゆるなきに至るもの、實に此の危險を踏むに因る。彼等の初めて名を得る、餘りに名に溺するに急、唯勉めて名を得んと欲す。是の故に、瑣細の事も必ず之を新聞紙に載せられんを欲し、將已自ら通信社に通報し、かくて名聲噴々、一時世上に喧傳するを致す。然れども、斯くして得たる名は畢竟何の稱すべきかある。唯徒らに名の揚るに止まり、實の之に伴ふなく、愈々實力を發揮せざるべからざる時に際し、人をして失望せしめざらんと欲して得ず。而して世人にして、一旦其の名其の實に適はざるを知るや、群衆接いで起り、遂に名を沒せしむるに至る。

東西英雄一夕話

凡例

一、本書は「東西南洋の英雄」と題して大阪朝日に連載した者で、新聞に日を以て分割してあるを、茲に題を以て分割して置く。文中幾分の改削もある。

一、各英雄に相當の行數を割宛つべきに、後世人口多く、英雄多く、限りある紙數に於て後ほど割合を減ずるの比むを得ぬを遺憾とする。

一、校正は八太三吉二君を累はした。

總説

人間學の捷徑

「人間の學問は人間である」とは、希臘で言ひ始め、英國詩人ボーンが之を詩の中に引用して

より、廣く英語の行はれる範圍に知れ互つた。其語は斯くして一の格言となつたが、其意義は昔から何處にでも知れて居り、近世科學の勃興する迄、學問と云へば殆ど、悉く人間に關する事に限られた。儒教の經典なる大學の劈頭に「大學之道、在明明徳、在親親、在止於至善」とある。而して人間を知るに其代表者たる英雄を知るを捷徑とすることが、自然に人の頭腦に浮び、東洋で史記、西洋でブルタルクが、功名心ある者の最も愛讀する所と爲り、今も其形跡が遺つて居る。

直接に人間より離れたる事業、即ち理化學の研究の如きは、全く英雄に興味なくも支那なく、人間に關係あるものでも、社會的現象の統計に從事するなど、英雄を棄て置いてよい。英雄に氣をとられて冷靜なる判斷を妨げられてはならぬ。併し政治家として立つに至り、英雄に興味を感ぜずして到底日憂ましい運動を敢てすることが出来ぬ。政治家に種々あり、幕僚として政務調査に専らなるのは、冷々淡々水のや

うにして勤まるが、自ら幹部で指揮し、又は陣笠となつて活動するには、多少英雄に興味を感ずるを要し、之を感ぜねば政治家に成り甲斐がないといふべきである。

多數の力を考へ、群衆に注意せねばならず、人口の増加し、古代の簡單なと進うては尙更であるが、其の統率者若くは指導者として現はれる者を認めるの必要がある。事理を研究する場合は格別、實際の取扱に於て、ニーチェの如く群衆が有つても無くても何うでも宜いとして置ける。出陣準備に色々と思案し、輻重の末まで注意するとして、扱て敵軍と砲門の間に相見えては、何人が指揮するかと云ふ事が重大なる問題になる。如何なる政治家も手の着けやうのないことがあれど、權力者が近づけ出した時、一人勇進して衆を引纏め、優に政界を支配することがある。百年の後より見て何程のことがないにしても、其當時にあつて頗る重大なる事件たるを失はぬ。勝と西郷とが談判せねば、江戸が丸焼に爲つたかも知れぬ。丸焼になつても回復するに極まらぬ居るものの、一時の騒ぎは何とも嘗へやうがない。人は其時代に生きるもので、百年の後に生きるのではなく、其時代に其時代が肝要であつて、亂を平定し人に

安心させるのが、其時代幾千百千萬人の利益に
なる。

是れは政界ばかりでなく、人間より離れたと
見える自然科學の研究に於ても認め得られる。

科學界には何人が大政治家であるかを問はず、
斯かる事は何の痛痒がなければ、新發明新發見
を成し遂げたものを重んぜず居られぬ。某國の
某か云々の發明をしたと云ふのが強い刺戟を與
へ新發明を促すの原因となる。ニウトンなり、
ダルウインなり、其人が出なくとも早晩其説が
知られたらうが、其人の爲めに何程か年數を早
めたのを打消す譯にゆかぬ。スペインサーは英雄
よりも南洋の土蠻に重きを置いたが、夫れにし
てもアダム・スミス富國論の影響を稱し、眞の

權力者であるかに論じ立てて居る。普通の英
雄豪傑を好まぬだけで、或る個人の勢力を打棄
つて置くことが出来なんだのである。日本にも
東京帝大に ウトン祭、ダルウイン祭がある、
科學界に案外英雄崇拜がある。

英雄と凡人

英雄と凡人と違ふのは、程度に過ぎぬ。若し
尺度で測り得れば、其の程度も大きなものでな
い。幾百の相撲取の中で横綱が傑出し居り、

特に太刀山が傑出し、或は古今獨歩と稱せら
れる。併し他と何程の違ひがあるか。春が高い
とて宮内省の山口氏位であり、體量が重いと
て衆議院の野田氏より少し重い位である。相撲
仲間では驚くべき程の者でなく、實に僅かの違
ひである。僅かの違ひであつて優劣が明かに
定まり、幾年間も一人の之に勝つものが無かつ
た。美人といひ、醜婦といひ、全く違つたも
ののやうに取扱ひながら、其違ひは僅かばかり
目の上り下り、僅かばかり鼻の高い低い、僅か
ばかり口の大きい小さいと云ふ所で、尺で測
つて二分か三分、全く言ふに足らぬ。普通に
優劣と云ふは、皆僅かの差を指して云ふに過ぎ
ぬ。

劣等の間は差が多く、優等進むに従つて
差が少くなり、其少い差が著しい違ひと認
められる。草木の成長するや、初め日々目に
見える程伸び、漸くにして日に見えなくなる。
春を習ひ始めれば、井目風鈴より幾日も経たぬ
に風鈴が取れ、八日となり、七日となり、質が
良ければ一年の内に初段に四日まで漕ぎ付け、
或は夫れ以上に進むが、夫から後の進歩が甚
だ遅い。天才と云ふので、二十歳に三四段に上
るのがあるが、八段まで進むのは稀である。而

して四段と八段とは一日の差あるか無いか位、
實に僅かの差であつて、僅かの差が本陣場の位
置を決する。總てのことが然うであつて、最初
ほど進歩が早く、漸くして殆ど平等に達する
が、平等にたらうとして容易になれぬ。四人

の横綱は殆ど平等と云へるし、前重の上なる
も平等に近いけれど、遂に太刀山に譲らねば
ならぬ。人は殆ど平等まで達するを得、
人を以て悉く平等とするのは、大體に於て
誤りなく、畢竟するに昔かの差に止まるが、
其の僅かの差を認むる所が人智の發達した結
果である。運動會で記録破りと云ふのは、一
時に足らぬほどのことがあつて、それだけ違つ
て何程のことがあるかと言へば言ふものの、人
類が微細なる差違に注意したればこそ、能く大
なる社會を組立て得たとする。英雄彼れ何者
ぞ、蓋世の雄とて、凡人との違ひは僅かである。
凡人と同様に食衣住し、婦人が短刀にて突け
ば立るに死んで仕舞ひ、甚だ脆いものである。
併し僅かの差があつて、其差で著しい優
劣を生ずる。臺灣の生蕃が繪書展覽會を見て
も大抵同じやうに思ひ、優劣を云へば内地人の
判斷と顛倒するやうなことがあらう。繪書に
僅かの差を認める判斷力を養つて居らぬので

ある。

英雄を賞美するのは、人物としての向上心あるを暗示する。同じく賞美するにしても、軍に高嶺の花と眺め、之を取らうとせぬのがあり、或は崖を登つて取らうとするのがある。恭を打つても、恭恭で満足し、別段進歩しようと思ぬのが深山ある。常人自らそれが愉快であつて、初段になるなど夢にも思はない。何も初段にならねばならぬ必要がなく、刻苦黽勉を以て無用な心配と云へる。英雄なんか何うでも宜く、凡人で澤山であると云へるが、是れ年長ト向上心の上の止まつた頃のこと、進歩し得る間は進歩するに努むるのが宜い。運動會で選手になつたと知れたもの、記録を破つたとて大ままでのことと云へても、運動會に加はつた以上、選手にならうとして勵むのが、運動會全體の能率を高める所以となる。

人が悉く英雄と爲らうとして爲れず、爲れぬのに努力するのは無駄骨たるを免れぬが、多少努力するだけ社會に於ける活動の程度を高める。三才を越えて體格が定つてから力士になつても仕方がないが、二十で力士にならうと思へばなるが宜い。必ずしも三役に上れると限らず、幕内に入れぬかも知れぬけれど、何れだけ

か力上らしくなれるに違ひない。力士を志したとして、幾分か志を達し得たことになる。斯かる志望者の多いので相撲が繁盛する。暗い中からヒヨロ／＼した小僧が十俵で投げたり投げられたりするのには、随分難儀であつても、其中に將來の三役がある。若し誰も彼も力士になつたとて仕方がないとすれば、力士は消滅して仕舞ふ、英雄も其邊の處である。

英雄趣味

大隈侯は、維新の英雄が消滅したから、自分には生き残つて其の後繼者を作らねばならぬと云つたりするが、其場限りの放言にしても、大英雄を心掛けて居るとも云へる。別段賞めた事ではないけれど、其の元氣は此の氣分に伴ふ所があらう。老人が後進者の路を遮ればこそ邪魔になれ、邪魔せず自ら向上に努めるのは、效能が無くても害にならず、少しでも效能があれば、大それた益になる。

老人になつて早く引退し、新陳代謝を速かにするのは宜い、場塞ぎはわるい、併し引退してブラ／＼して居るのは社會の厄介者であつて、何がな働けば大それた利益があらう。青年も相應の年齢に達して引退しよう、官吏の恩給を

得、貴族院議員に爲らうと考へるよりは、一つ思切つて努力し、英雄の列に入らうとすれば、普通よりも力が伸びるであらう。氣ばかり高くてもせぬのは困り者であつて、平生ぶらついで居りながら、一旦機會到来せば天下を驚かして遣ると口癖に云ふが如き誇大妄想狂でも、餘り面白くない方であるが、只ぶら付いて居るのでなく、ヨリ以上の事を爲さうとしてヨリ以上に努力せば、英雄になつてもならぬ。多く努力して居るだけ、當人の爲めになり、少しでも國家社會の爲めになる。國家の發展は之を組織する人々の努力を以て成し遂げられ、國民の努力の多い國家が、其の少い國家を壓倒することになる。

意識的に英雄にならうとすのが宜いか悪いか、是は疑問であるとして、向上心の熾んなる頃に凡人を以て甘んぜず、成る可く向上しようとして努力するのは宜い。眞ツ直ぐな樹木の間に成長すれば、自ら眞ツ直ぐになる、英雄に趣味を持っては、其の英雄の悪い所に倣はぬ限り、何等かの益がある。凡人たる事は決して悪い事でないが、内心凡人を以て居るを欲せずして、努力を厭ひ、外障を憚り、殊更凡人を標榜するが如き、自ら欺き人を欺くの嫌を免れぬ。

且つ世間の多数が斯くして強ひて安心を求めたならば、列國競争の烈しい時代に於て、國家の進展を遲延し、後れを取らずやうなことが無からうか。人は成る丈け向上心の長續きするが宜く、其の續く間強ひて凡人としての安心を求むるにも及ぶまい。

歴史に英雄として顯はれて居る者は、概ね英雄に趣味を覺え、自ら之に私淑し、或は其れ以上に用ようとして居る。豊臣秀吉は殆ど全く書を讀まんだが、向上の精神に富み、羽柴と名乗つたのは丹羽長秀、柴田勝家に背かつたとも言へるし、此二人分の働きをする意氣込であつたとも言へる。鎌倉で頼朝の像を見、之を撫でて曰ふには、空手で能く天下を取つたのは貴公と吾輩であつて、吾が氏素性のないのは貴公に優ると言つた。是れ前より頼朝に背かつて居たが爲めであるのは、一時足利義昭の養子となつて將軍職を得ようとしたのでも察せられる。西郷隆盛の詩句に「建業只期華盛東。鬪争獨希拿破崙」と云ふのがある。果して西郷の作であるかは疑はしく、壯上の言草に似て居るが、或場合、其類の事を言はなんだとも限らぬ。諸葛孔明が自ら管仲樂毅に比したのは、儒家の悦ばぬ所であり、標準の宜しきを得なんだ

と言はれるが、管仲樂毅は實務の才に於て多く得難いもの、未だ志を得ざる前、此邊に私淑したのは不思議でない。

奈翁一世は古代希臘の英雄を稱し、羅馬帝國に倣はうとした所があり、奈翁三世は該撒傳を作つて居る。傳は時の文相の作つたものであつても、私淑した所もあり、自分の政策を辯護した所もある。奈翁系統の理想は羅馬全盛の再現に在る。現代では獨逸の現皇帝が少壯の時に歴山王の再生を以て居つたことが、何程か日今の戦亂を豫定せぬではない。ルーズヴェルトは何かと云へばワシントンとリンコンととグラントとを挙げ、自分が其後繼者であるかに仄かし、人の笑ひを招くを辭せぬが、凡常と違ふ丈けは認めねばならぬ。古代希臘羅馬を賞讃するは、猛獸狩したり、出征しようしたりするのと照應する。大抵世に多少の印象を遺して居るのは、前代若くは他國の偉人物の印象を享けて居る。自ら著名の英雄に擬して何事も成さず、笑ふに笑はれぬのもあるけれど、其故を以て偉人物に私淑するのを、悉く笑ふ諷刺に往かぬ。柄にない性分を以て私淑するのは滑稽とし、私淑せずして單に趣味を覺えるのは悪くない。

英雄談

荻生徂徠が豆を嚼んで古今の英雄を罵るを以て最も愉快とすると云うたのは、英雄に趣味を覺えての事である。自ら何物かを以て任じて居つたかも知れぬ、天の靈龍にて李王の書を得たと云ふので、李王に背かつたとも言へる。李に背かつたは志が小さいやうであるが、企て及ばぬものに背かるよりも宜いと言へぬではない。徂徠が努力すれば李を凌ぐに難くない。其の英雄觀が何うあつたにしても、豆を嚼んで英雄を罵るの愉快は随分世間で知つて居る。寄宿舎でも、下宿屋でも、英雄豪傑を批評し合はぬ所がない。何の益もなく、時間潰しとすれど、少くとも樂みになり、何れかと云へば好い樂みであつて、其の間に人間に關す知識を得る所がある。藝術として埒もない不具者を取扱ふのがあつて、單に藝術よりせば其れも宜いけれど、國家社會を念としては、今一層堂々たる心掛を要する。書物を讀んで書物に讀まれるものが珍らしくないにしても、同じく書物を讀むならば、精神の不具なよりも、其優越した者の進退動作を知るのが宜い。講談物が流行し、全國の新聞に載つて居るの

は知識の低い階級に於て、英華に趣味を覺えて居るが爲めであつて、舊幕時代の下流教育は概ね此邊から來て居る。今日學校で種々の知識を話込みつゝ、人間に關する知識が割合に少く、教育敎語の講義も形式に流れ易く、男らしい男、女らしい女に對する知識を滿たして呉れるものに乏しい。そこで古びた講義が續まつて居る、無いよりも増しとなつて居る。英國にスコット物が續まつたのは種々の事情があるにしても、多少之に似た所がある。戀愛の纏れ合ひも宜いけれど、誰も彼も此類の事のみで没頭して居れぬ。没頭しては興國の氣分ありと云へぬ。低級の社會に娛樂と利益と並び得られるとすれば、今の所で趣味の粗糲なる講義類を推さねばならぬ。

支那に水滸傳が何程行はれて居るかは判らぬが、今日の支那は依然水滸傳流であつて、其の百八人の如き者が活動して居る。水滸傳は八犬傳より舞臺が大きいにしても、人物は浪花節流儀である、博徒式である、切つたり張つたりである。日本の講談物は水滸傳ほど曲折に富まぬ代りに、締りがある。水滸傳は支那の社會に適して、其以外に適さぬ、場面が餘りに他と違つて居る。舊幕時代から色々な譯あるに拘ら

ず、割合世間に擴まらなんだのは、娛樂の分子又は利益の分子が缺けて居るからであらう。磊落不羈、事に臨んで乾坤一擲する所が面白く、普通の束縛を脱するの氣分を養ふに效があるにしても、要するに博徒仲間類に終る。博徒の親分分子は頗る面白いところがあるにせよ、普通の筋道を立つる所に適合せぬ。日本でも最も長篇の小説なる八犬傳は、水滸傳の眞似をして舞臺狭く、常に房總半島に限られて居る。併し只舞臺が大きいと云ふのが尊い譯でなく、空間に於ける大ききから言へば、西遊記の、きつめて大、實に天地を一にして居るが、人間に關して頗る單純である。

日本でも八犬傳より舞臺の大きいのが色々あるけれど、其の割合に人生の曲折を悉くして居らぬ。普通に講談物となつて居る所は、略々普通の人情を現はして居る。講談師の道德及び知識が低いとしても難かしい、道理を説くなら格別、普通の人情を説くに於て、必ずしも資格を缺いて居るとせぬ。何代か前から言ひ傳へ聞き傳へて居る所、人情の尤もとする所に落ちて來て居る。高尚になり難かしくなつては、狭い範圍に向いても、廣い範圍に不向にな

例に於て進まず、中學若くは高學を卒へた程度で飽足らなく感ぜられる。歴史小説の好いのがあれば結構であるが、歴史を小説にしたのよりも實録の儘で興味を覺えるのが少いとせぬ。歴史及び傳記で娛樂と利益とを兼ねるのが澤山ある。

謂ゆる東洋の豪傑

徂徠は古今の英雄を罵つて樂しんだが、其當時の眼界では、廣いと云うても全く東洋に限られて居る。新井白石の頃から少しく歐洲の事情が知れ、林子平がカタリナを賞讃し、頼山陽がナポレオンを詩に入れるやうになつた。けれど今日と較ぶれば、舊幕時代の所謂英雄豪傑は世界の一局部に偏して居り、之を罵るを樂みにした徂徠も氣の毒なものである。今は取敢ふべき英雄の數が多に多く増加し、之を罵るを樂みとせば樂みが大いに増加して居る。罵るとは強ち惡口雜言することではなく、惡くも言へば善くも言ひ、批評と云ふ位の所で、徂徠の語も語まり英雄談が面白いと云ふに過ぎぬ。

純粹の歴史として種々研究すべきことがあり、何の方面からでも研究の歩を進め得るが、普通に傳へて居る傳記のみで今更の様に思ひ當

ることが多い。西洋の史傳が知れて來てから、從來の英雄を「東洋の豪傑」と呼ぶことが行はれ、今尙ほ其の末流を汲んでゐるのがある。何かと云へばそれは東洋の豪傑であつて、此の文明時代に合ぬとし、それが尤もらしく聞えて居る。其の尤もらしく聞えるのは西洋の英雄談が耳新しかつた爲めで、漸く馴るゝに伴ひ、それ程でないことが分つて來、ハらぬのは分りつつある。「東洋の豪傑」は「西洋の豪傑」と何の點が違つて居るとするか、西洋の豪傑とは何人を指すのであるか、之を尋ねねばならぬ。東洋の豪傑と云ふ語を使つた連中にも、全く異なる見解があつた。一つは東洋が勿れ主義で窮屈、人物も社行着たやうな調子であるとし、又一つは東洋は眞の道徳が無く、英雄人を欺き、英雄色を好み、豪傑は不品行の別名であるとす。而して孰れも相應に例を擧げられる。然らば西洋の豪傑はどうであるか、之と全く異なつて居るか。何かと云ふと經典の句を引き、窮屈で人の氣を詰まらせるのがある。品行とても、方正なのがあれば、方正でないのがある、西洋の豪傑に甚だ不品行のを求めることが出来る。東洋と西洋と相異なつたものを對照すれば、相違ふと見えるのが當り前であつて、其の反對に相

同じきものを對照すれば、相似ると見えるであらう。何を東洋とし、何を西洋とするか、多少の反省を要する。冷笑の意義に於て「東洋の豪傑」と云ふのは、何と考へての事か、實に思はざるも甚だしい。

東洋と西洋と、種々違つて居る中に似た所があつて、其最も似たものは英雄豪傑である。啻に東西相似たばかりでなく、今古相似て居る。動物の進化は漸くべき程度に行はれて居るが、其の最大部分は數百萬年間に於てし、近く數十萬年に個體として餘り著しい事がない。人類が數十萬年前に現はれたとし、歴史が始まつてから約一萬年、稍々明白を覺えてから約五千年、社會として著大の變化を呈しながら、頭腦に特別の變化あるかが疑はしい。自然淘汰で幾分の變化はあらうが、牛馬犬鶏の遺傳する様な譯に往かぬ。遺傳の率が明白でない。凡人視せられた家から偉人が出で、偉人視せられた家から凡人が出て居る。偉人が遺傳しても精々で二代、もつと續いても強ひて尋ねる位、新たに精良な種族が出た例がない。今後は兎も角、今日迄遺傳が人類に大なる力を占めたと云へず、偉人が出るのは、遺傳よりも偶發及び境遇に因るのが多く、五千年前に傑出したものが、略々

同様の境遇で現代に現るれば、現代にも傑出した得ると思はれる。

二三千年来となつては尙更であつて、孟軻なり、プラトーンなり、現代の大學教授に優るとも方りさうにない。政治家も然うである、殊に群衆を取扱ふ政治家に至りては、今古東西を通じて最も相類似する。學術は對象が違へば研究も違ふが、政界の對象は何處でも群衆に限つて居る。小群衆を支配するの能ある者が、必ずしも大群衆を支配するの能がないとも限らず、一地方の長官が一國の首相たるに堪ふことあるが、假りに小と大と趣を異にするとし、東洋と西洋と群衆に於て特別の差違がなく、寧ろ東洋の方が數に於て優つて居る。印度歐羅巴として數が東洋に匹敵しても、歐洲だけでは不足する。先づ之を同等と見做せば、群衆に對する政治家の用心が相似、隨つて政治家として成功する英雄が相似て來る。

地形が違ひ、氣候が違ひ、人情が違ふと共に、群衆を支配する政治家の態度も違ふけれど、違ふのは外觀のことで、手心に變りがない。個々人々を観れば、性情も區々であるが、多數を概括すれば、性情は略々定つて居る。酒を飲んで泣き上戸怒り上戸笑ひ上戸があるに

しても、一般の人が斯く三通り分れて居るのではない。大略喜怒哀樂の情を具へて居るとして取扱へば間違なく、特別の場合に事が違つても、多數を代表した場合に相一致し、其の多數を支配するに何等かの呼吸がある。其の呼吸の宜しきを得た者が政治家として秀で、或は英雄と稱せられる。別段に今古東西の差別がないと見てよい。嚴密に云へば、二人として同じではなく、人心の異なること其の面の如しとは、英雄の上にも言へる。殊更違つたものを求めれば求め得られ、違はぬものを求めれば求め得られるが、今日から觀て著しい差があると氣付くのは、時代の變化である。東洋と西洋と著しく違つたのは、西洋に近世史が始まつてからであつて、古代と中世とは其程でなく、頗る相似て居り、延いて英雄家傑も頗る相似て居る。東洋の英雄と近世歐洲の英雄とを較ぶれば、何處となく異なるを得ゆるが、古代及び中世の歐洲に較ぶれば、相符合するのを見る。而して近世の英雄にて古代及び中世と異なるは、内實よりも外觀に於てである。

英雄の特性

何處でも英雄といへば、何事かに於て尋常に

優らねばならぬ筈であるが、單に他人の及ばぬ所を優るとせば、誰でも或點に於て尋常に優つて居る。何人も容貌で特色を備へて居るが如く、精神にも特色を備へて居り、其特色は他人の眞似し難い所である。兩手が無くして足で様々の藝當をするなど、他人は到底企て及ばぬ。企て及ばぬとて夫れで英雄と稱する譯に往かぬ。常人よりも能力を備へ、多數の人を動かすのは、英雄に列しざうであつて、必ずしも然らうでない。古來、權力を得て大國を治める者が幾人となき出て居り、廣い意義で、悉く英雄とし得ぬではなけれど、普通之を英雄と稱せぬことになつて居る。藤原氏の盛んな頃に隨分權力を振ふがあり、津々浦々まで其の命を聽いて畏まつて居つても、公卿連中では英雄らしく思はれぬ。百人一首の法性寺入道前關白太政大臣は世に知らぬ者がなく、又智略あつて保元の亂に關係し、能く大亂を泳ぎ切つて居るが、どうも英雄とすることが出来ぬ。戰争で強いのが英雄かと云へば、梶原景時、高師直、源智光秀等、如何に善く戰つても、英雄の列に入りにくい。

「群衆割據」といふが如き場合、多少其頭を擡げる者は、悉く英雄とするも、稍、意義を限る

時はさうは往かず、一種英雄らしき氣分を備ふるを要する。金や、銀や、銅や、鐵や、各々色が出來、繪具で書き現はせるが、特殊の光澤を書き現はすことは出來ぬ。金は單、黃色でなく、銀は單に白色でなく、黄色白色のものも他に幾らでもあつて、金銀と見えぬ。同一の能力を備へながら、甲は英雄であつて、乙は英雄でない。普通と言ふ所の神は人間の造つたもので、人間と同じ心持をして居りながら、普通の人間に見る可からざる所があつて、何處となく神々しい。古代の英雄は概ね半神半人の相を備へ、漸く歴史に入つて神の分子を去るに至り、尙ほ天籟とか、神籟とか、インスピレーションを得たかに感ぜられる。均しく人間の體を備へ、心を備へ、慾を備へても、何處となく一二段高いやうな氣がする。頭を回らせば英雄皆神仙と云ふが、頭を回らさずとも神仙の分子を含んで居る。普通の俗人であり、極めて俗物であつて、而も世俗した所があり、或、普通の俗情を以て推すことの出來ぬやうなのがある。

天下の重きに任じて居るかと思へば、其かのことには感激して、死んで仕舞ひ、死生を見るや甚だ輕い。輕いかと思へば、艱辛に堪へ、恥辱を忍び、容易に死なうとせず、尋常の規律と以

て律し難い所がある。斯かる特色の多いのがあり、少いものがあるが、全く之を缺いたと見えるのは、何程の能力を備へ、何程の事業を成し遂げても、狭い意義の英雄とならぬ。徳川時代二百餘十年、大老若くは老中として太宰に貢獻したのは、一通りの勤勞でなく、中に能力の稱揚すべきものがあるが、謂ゆる英雄は有るか無しかである。英雄たるべき者か否かと問はれば、然りと云はれぬ。斯かる久しい間に英雄の居らぬ筈がなく、英雄として顯れる機會のない所もある。判で捺したやうに繰り返つた所では、英雄の特色を發揮しやうがない。

何時の代でも英雄たるべき者がありながら、其の顯るゝに適した時代があり、其の顯はるゝに適しない時代がある。鱈の刺身を食へば腸に條蟲が宿ると云ふことであるが、鱈に條蟲の如き長いものがなく、人の腸に入つて幾らでも長くなる。他では伸びることは出来ぬが、腸に入つて思ふ存分に伸びるのである。是れは悪い例であるが、英雄が或る境遇で愚物扱ひされ、一旦境遇の變じて大に力を伸ばすのも、之に似て居る。或は之を蛟龍の雲を得るに譬へ、雲を得ぬ間は蛟龍同様にあつて、雲を得ると共に天上に飛躍するといふ。何にしても蛟

龍竟に池中のものでないと云ふ例がある。世間で英雄と稱するものに随分如何はしいのがあり、餘り當になるものでなければ、全く無意義でなく、當にならぬ中に幾分か要點を得て居る。脱俗と云ふか、垢抜と云ふか、半神半人として往かなくても、十分一或は百分一、神妙な所がある。或は「眞摯」と稱し、或は「至誠」と稱し、或は「熱」と稱し、或は「涙」と稱し、又別の名稱を以てし、世間有り觸れの食うてはこして寝て起きて只其の儘に死ぬのと違ふ。斯かる類が何處にでも潜んで居り、或機會を得て天下の槍舞臺に躍り上り、觀客に片唾を呑んで凝視せしむることがある。其が古來如何なる状態で見られ來つたか、歴史の大部分は之を示すに努める。

太平洋側と大西洋側

人類が初め東半球に現はれ出でたやうに、英雄も東半球に現はれ出で居る。太平洋を東にして大西洋を西にする絶大の陸上に、幾多の英雄が出没した。近世史は西半球の發見から起り、近世の英雄は西半球と關聯し居るのがあり、今後愈々西に輩出するを見るであらうが、古代及び中世は東の方で太平洋側、西の方で大西洋側

を主にして居る。中間なる印度洋に而して特別の人物がある。普通に神と云ふをば佛とするが如く、普通の英雄を英雄とせず、特別の人物を揚げ、場合に依つて普通の英雄より廣く力を及ぼして居る。而して南方でこそ木の蔭に坐つて沈思冥想するに専らなれ、北にヒマラヤ山を越し、或吉思汗なり、タメルランなり、東西の何人も及ばぬ飛躍を敢てした。而して驚天動地、眞に千古を通じての蓋世の雄かと見れば、此にして後が消滅し、洪水の氾濫して直ぐと元通りになつたやうである。驚くべき現象でありながら、人類に何の印象があつたか、殆ど判つて居らぬ。人類の歴史の正系を形造るのは、太平洋を東にした方と、大西洋を西にした方とである。

面積及び人口に於て一方に支那を主にし、他の方には歐大陸を主にする。支那は國の如くして國でなく、「天下」である。七國となつたり、三國となつたりしたことがあり、統一して一國の形を成しても、普通の一國と違ふ。歐大陸も羅馬帝國の下に統一して居つたことはあるが、此れとて多くの國を寄せ集め、「ムンズス」として存在し、後に列國分立して現在の状態となつたのに不思議はない。支那も歐大陸も、一國で

あつて一國でなく、さりとて列國分立するに及んで、其間に少からぬ共通點があり、自づと大陸的氣分のはの見える所がある。

英雄が舞臺を代表する所より言へば、人數の多いほど活動舞臺が廣く、夫れだけ手腕を揮ふことが出来る。普通に英雄とするは、所謂中原に鹿を逐ふの徒である。中原とは支那四百餘州を指す。歐の英雄も、大陸を闊歩した者のこ

になつて居る。大きな舞臺でなければ、思ふ存分に活動し難い。けれども量の大なるものを以て注意を惹くは未人感しの類に屬し、質から言へば小さくて差支ないことがある。今日游泳の達人は熊本人が多い、水が有るか無いかの

川で泳ぎ馴れたのであつて、水の満ちた大川で修業したのでない。それで大川に於ける游泳の師範となつて居る。牛津、劍橋二大學のテームス河に於ける端旋競漕は、世界の評判

ものであるが、劍橋の川は曲り折りして獨艇の自由を妨げる。不便な處で練習するので、却て勝を得るやうなことがある。古代及び中世に英雄の活動する大舞臺は支那若くは歐大陸であるけれど、支那と海を隔てて日本があり、歐大陸と海を隔てて英國がある。

孰れも島國であつて舞臺が小さく、對岸の舞臺

の十分一に足らぬ。併し英雄の活動すべき餘地があり、大陸の英雄に比して劣つて居らぬ。但だ日本は支那より隔ること比較的遠く、多くの事業に於て相互の間に關係がなく、英國は大陸に近いだけ密接の關係があり、大陸から島に渡り、島から大陸に渡つて活動した者が多い。

表面のみに注意を拂ふ者は、日本に支那程の英雄なく、英國の英雄の大陸を驚かしたのと違ふやうに思ふが、是れ思ひ違ひの甚だしいものとする。全く距離の關係であつて、日本が朝鮮半島に位して居れば、今幾層か彼の中原に關係が多い。滿洲が明を滅したのには、豊臣秀吉の朝鮮に出兵した兵よりも弱い者を以てして居る。

日本が失敗して滿洲が成功したのは、全く距離に由來する。往昔の帆船を以てして日本は日本で別天地を造るの外なかつた。舞臺の大なる所よりせば、支那又は歐大陸でなければならぬが、技術を現はすに於て、舞臺の狭いので少しの障りがない。甚だしく小さく、例せば琉球の様では、如何なる英雄も手の伸ばしやうがないが、日本や、英國や、左まで狭いものでない。國內に腕を揮ひ得れば、大陸に押し出しても相應に揮ひ得ることは、疑を容れぬ。

曾て支那の書を読み、寧ろ書に讀まれた者は、

日本を以て中華の人なるに較ぶべくもないとしたが、近頃支那の動搖する所から觀れば、日本に於て何等及ぶ可らざるを感せず、戦へば勝つと同じく、活動の力に於て優るとも劣らぬのが明かになつて居る。追が假令舟は海に於て傑出した丈の事がある。彼は支那に行き、當時の書家の頼むに足らぬを知り、名畫及び自然を寫して歸つた。雪舟ほどなのは支那にも多く見當らぬのである。英雄も然うと云へる。所で人の活動は或る程度まで舞臺に順應するを餘儀なくされ、支那と歐大陸と多少趣を同じくして居り、前者の英雄と後者の英雄と相對照し得るのがある。之と共に日本と英國とを並べ言ふの便利を覺える所がある。舞臺が狭くて、質に於て往々妙神に入る。

往昔の日本と英國

傳説時代及び其以後

何處でも歴史が古ければ神祕的傳説が残り、半神半人が知られて居る。日本では神代の英雄を擧げ得ぬではなく、伊弉諾尊を純粹の神と

を擧げ得ぬではなく、伊弉諾尊を純粹の神と

し、素養鳴尊や、手力雄や、金剛力を想はず所がある。けれども後の英雄と同列に扱ひ難い。神武天皇は確か一英雄であつても、皇祖として特別に敬意を表することになつて居り、猿田彦や、八咫鳥や、長髓彦や、英雄とするに餘り後世の事情と違ふ。英雄の始まりは、景行天皇とせねば、日本武尊とすべきであつて、後者は英雄としての傳説が十分に出来上つて居り、若し史詩又は神史にしたならば、世界の傑作となるであらう。何程傳説で何程事實かは議論を免れぬが、英雄の氣分は遺憾なく認むることが出来る。其の三十歳で薨去あつたのは更に懐俗の感を加へる。實に勇氣に於て秀で、智略に於て秀で、而して多感多情、人情の極めて麗しいところがある。御陵より白鳥が飛ぶが如き、最早普通の人間界より離れ、餘韻を遺す所が多い。

英國ではアーサー王の傳説が略々此邊に當つて居る。王であつて太子でなく、且つアングロサクソンの侵入に抵抗し、後遂に不利に終り、日本武尊の國內を平定し、皇室を完全にするに違つて居るが、アーサー王ほど後に神史の材料となつたのは少い。英國内種々の物語となつたばかりでなく、廣く大陸に傳はり、各地

で種々の物語に作られ、後英國に逆輸入し、何かにつけてアーサー王が引用され、近い所でテニスが詩に作つて居る。王は勇氣があり、智略があり、而して情緒纏綿、物語となつて頗る興味に富み、單に物語に止まらず、其の古蹟と傳へらるゝの諸方にある。エチンバラを見下して居る高臺は、アーサー座と言はれて居り、此の高臺を見上げるものは、多少アーサー物語に懐ひ及ぶこと、恰度伊吹山を仰いで日本武尊の舊事を懐ひ起すやうである。而してアーサーは死んで靈魂が鳥に宿り、再び人として現はれる時があると待設けられたのは、尊の白鳥化と相對して面白い。東西に於ける英雄談は斯くして始めると見て宜しからう。

普通の年代記にては、日本武尊とアーサー王と約四百年の差あるが、眞實の歴史に於て更に接近しきうに思はれる。景行天皇に續いて、成務天皇も、仲哀天皇も、英仁の姿を備へ、剛健の時代といへる。仲哀天皇と神功皇后との間に何か行違ひの事があつたと察せられるが、皇后に對つて武略の程長く後世の推稱する所に依り、事實が傳奇以上に傳奇の實を帯びて居る。歐洲に類似を求め難く、先づ西亞細亞のセミラミスで以て最も近いとせねばならぬ。俄し

セミラミスの事は大部分事實で無い。皇后より數百年間日本に於て半島の一部を領有し、屢次出兵し、其間に相應の良將が出て居る。大伴旅手彦に其一人であり、松浦佐川媛との關係も一の神曲を形づくる。けれども半島より文物を輸入し、佛教の普及するに伴ひ、尚の勇武の氣風が衰頽し、彼半島が唐に併せられ、日本が大陸に足場を失つてより、全く外に出兵するを降念し、只内地の政治を整備し、之を調節するに汲々たる有様となつた。唐が全盛になつて威力を輝かしたので、日本で之と争はうとせぬのみでなく、成る可く唐に續擬するに努め、英雄らしいものの輩出す機會がない。桓武天皇は英主であり、同時代の坂上田村麿は蝦夷まで進み、幾許か稱揚すべきものがあるが、何分にも多年の勢で、國內一般に懦弱になり、唐の風俗に倣うては尙更の事、殺伐なることを野卑と考へ、男が化粧して女と歌の酬答するが如きに全力を盡すに至つた。日本が半島に兵を用ゐたのは、英國が佛國の一部を領有したのと同じ勢であるが、英國では其間に英主良將が幾人も出て居り、「黒太子」の名を傳へたのは、日本で前に日本武尊、後に大伴旅手彦に當る所であつて、戰爭が烈しいだけ、勇健

國の自覺ましい事蹟が遺つて居る。日本の平安朝は商工業の發達に利益があるにしても、英雄の活動に過ぎず、他愛もない状態に打歸たとせねばならぬ。

英雄は必ずしも軍人たるを要せぬ、和氣清静にも相應に働くことが出来る。和氣清静の如き、毅然たる大丈夫と言へるし、菅原道實の如きも、尋常人でない。藤原氏の氏長たる者は、概ね少からぬ經歷がある。併し孰れも所謂英雄の偉を認めるに難かしい。

奥羽と蘇格蘭

英雄らしい英雄は支那の感化を受けない處に出で易く、即ち自由の土地に自由の空氣を吸ひ、自由に活動し得る處に於てする。田村磨の類が代々朝廷に住へて居らば、其儘平穩に過ぎたであらうが、公卿が懦弱に流るゝに伴ひ、遠方の地で獨立の實を示すやうなのが多い。源氏は軍職を帯びて關東地方に屯し、京都公卿の生活状態と離れて別に生活して居る。京都の權力の下に立ち、公卿より劣つた官位を得て満足しながら、事實に於て殆ど獨立の位置を保ち、偶々安倍頼時が奥州に割據し、子貞任が之を襲ぎ、源頼義及び義家が征伐に馳せ向

ふことになり、幾年間も戰つた。源氏が力を逞うするは是からである。

貞任は他くまで抵抗して遂に滅亡したが、是れ英國で蘇格蘭のロバート・ブルースに當ると言へる。ブルースは英國で存數、英雄の中に計へられて居る。其の蘇格蘭の獨立を謀り、英軍と戰つて屢々敗れ、とし一死んだと噂され、突如として英軍を襲ひ來るなど、後少青年の喜んで語り合ふ所である。將門は言ふに足らぬけれど、貞任は氣魄及び勇武の稱すべきものがないとせぬ。奥羽を合せば蘇格蘭の大きになる。蘇格蘭が多年獨立し得た所から見れば、奥羽獨立も強ち無謀でない。其の一賊魁として取扱はれるのは、國內の統一を標準として見るからであつて、安倍氏が源氏に對抗するは相當の理由あると見ねばならぬ。多年我が管内として支配し來つたものを、朝廷の命を奉ずるとは言へ、源氏の爲めに土地を奪はるゝこと、祖先に申譯ないと信ずる所がある。何處までも抵抗し、斃れて後己んだ所は、形勢を知らざり順逆を辨へぬながら、多少祖國に意ある所を諒とするを要する。

英國でブルースを賞讃するのは、蘇格蘭人が今尚ほ勢力を張つて居るのにも因る。蘇格蘭は既に大不列顛として英國と合一して居るが、陰然獨立の地歩を占め、外國人に英人と呼ばれて慄はず、「我はスコッチである、ブリチッシュと呼ばれるのは宜い、イングリッシュと呼ばれるのは迷惑である」と辯ずる。而して英人の名に於てする世界の事業の重要な部分は、此の蘇格蘭人の手に成る。蘇格蘭人の忍耐勤勉は英人の畏れ憚る所で、其れ丈彼はブルースが偉人物と稱されて居る。

日本では之と同様に見ることが出来ぬが、奥羽人が蘇格蘭人程の力なきは、安倍貞任をして一賊魁たらしむる所がないとはせぬ。源義經は奥州の秀衡を頼つて寄寓し、源氏の旗擧げまで待つて居り、後頼朝に斥けられ、再び秀衡に寄寓することになり、秀衡は頼朝に對して陰然獨立の勢ひを占めて居つた。英國ならば斯く獨立を維持するの勇氣を賞讃して措かぬであらう。朝廷の命を受くべきは論であつても、氏族競争に獨立を謀るは勇氣なくして能くする所でない。共同の敵に對して合一する以上、平素獨立に努めるのは、即ち己れの力を發揮する所以となる。英國が統一の困難を感じたのは日本の比でなく、今尚ほ幾許か英倫と蘇格蘭と愛蘭に分れ、愛蘭自治案は難

問題になつて居る。威爾斯さへ特色を失はうとせず、今のロイド・ジョージは其の爲めに驅いだことがある。斯かる事は統一害になれど、一面から見れば各々獨立するに努め、容易に他に降らうとせぬのは、日没せざる英帝國を造るに與つて居る。安倍貞任が今少しく規模を大にしたならば、一の英雄として顯れたであらう。腰圍七尺四寸といふ所、容貌だけでも尋常でない。坂本龍馬は西郷隆盛の容貌を之に比したことがある。

源氏、北條氏、足利氏

源氏は頼義、義家等皆武將たるに恥ぢず、用兵の術に於て他に能く及ぶ者なく、兵を以て争ふ場合に、一世に雄飛し得られる。併しさう云ふ氣分を養成するに至つて居らず、京都の公卿に従ひ、其言ふが儘になつた。正直と云へば正直、單純と云へば單純、個人ならば少年時代又は青年時代で、まだ大人になつて居らぬ。所が保元の亂に政權争奪が一に兵力を以て決すると知られ、兵力が頼に重きを成し來つた。源氏側は殆ど一人の臆病武士がなく、平氏と段違ひである。但だ何處となく若く、徒らに勇を顯して傍若無人の振舞ひする迹があ

る。爲朝は實際若く、實に年十九、僅かに少年から青年に移らうとする所で、其割に能く事に通じて居るのを稱揚せねばならぬ。爲朝が作戦計畫に就て發言し、容れられずして事の必ず敗るゝを知りつゝ、尙ほ職分を重んじて奮戦し、故さら兄義朝の兜を射るなど、危急に臨んで紳々餘裕がある。其調子で大舞臺に出たならば、理想的英雄に成り得たらうと思はれる。

義朝は武略に於て當時第一に居り、今少し少しく思慮周密であつたならば、權力を握るに何の難いことが無い。思慮を缺くのみか、惜しい事に爲朝のやうな英雄的氣分がない。爲朝ならば決して父爲義を殺さうとせず、何とかして一族を助けようとしたであらう。義朝に人情の微妙な所がなく、力ばかり恃んで孤立に陥るを知らぬ。武將として兵を用ゐるには頼朝よりも遙かに優つて居らうが、頼朝の事に臨んで急がず慌てず、徐ろに大勢を察し、萬全の策を決するのと較べ物にならぬ。頼朝に至つて、義朝の智略が幾段か圓熟し、人の殆ど端倪し得ざるものとなつて居る。父祖の遺傳に加ふるに境遇の練磨を以てし、實に煮ても焚いても食へず、敵も味方も手の附けやうに苦しむ。但だ何を云う

ても家柄であり、お坊さん育ちの所を免れぬ。蛭ヶ子島に流されて居つても、北條時政及び其他に侍つかれ、眞實の事情に疎い所がある。義經は武略の天才であり、源氏が皆武に長じて居る中で最も長じ、眞に天下第一品であるが、案内普通の世情に通ぜず、下らぬ所で面相を變へ、戦争で敗れずに、一場の座談で取返しに付かぬ失敗を演じたりする。

それから觀れば、北條時政及び子義時は實事に明るく、特に義時に至つては總ての人の肺腑を看破り、知らぬ顔して打過ぎ、事ある場合に機先を制すること、誠に掌を指すやうである。彼は面白い所なく、愉快な所なく、英雄に見えるやうな慕はしきを感じさせぬけれど、人を打つて磐石の如く信頼せしめる所がある。是非曲直は兎も角、義時に従へば損する事が無いと思はれて居る。彼は英雄の神妙な所、殊勝な所がない代りに、英雄の辛辣な所を備へ、如何なる亂亂が起らうとも少しも狼狽せず、勢に隨つて勢を制し、必要と見れば晴天に霹靂を迸らするを辭せぬ。實朝や、尼將軍や、其の手の手の中にある。京都で鎌倉征伐の議あり、檄文を發するや、若し頼朝ならば、流石に腹黒い男も多少處置に迷うたらう。源氏と戦つても、

義經の來る迄物が抄らず、大事を取るだけ事が後れる。其處は義時であつて、豫て斯かの事を承知し、其際とれ丈けの事になるかを看破つて居る。武勇の譽ある和田義盛が兵を起した時でも平氣であつた程で、素人の公卿達が兵を起したとて何程のことがあるかと多寡を括つて居る。

彼れ自ら職圍に長せず、戰線に立つて我こそはと大音聲に呼はるは全く出来ぬ藝當である。併し鎌倉の諸將を括り、我が意の儘に指揮することが出来る。事が起つたとて、自ら先んじて當らうとせず、成るだけ人の意見を聽かうとし、時として自ら處置に惑ふやうな顔をするが、併し泰時をして單身出發せしめ、道々兵を集め十九萬に達するなど、誠に必勝の算があつたと謂はねばならぬ。京都を處分するに就ても、少しも惑ふ所がない。三上皇を島流にするは由々しき大事ながら、保元の亂に先例の明かなものがあつて、其通りにすれば宜いと云ふのである。源氏が關東で獨立生活を營み、京都の氣風に遠ざかつてから、絶えず武骨を鍛錬し來つたのが、義時に至つて其の絶頂に達した。

普通の語を以て云へば、源氏は主に膽液質で

あつて、頼朝の如きは殆ど血の氣がないほど膽液で充ちて居る。遺傳よりも境遇であつて、北條氏も代々膽液質で、只高時に至つて違ふ。之に較ぶれば、北條氏の亡びた後に足利尊氏の出でたなど、甚だ手軽く、單に勢に漂ふに過ぎぬ。尊氏は多血質であらう、或は神經質であらう、粘液質のところもある、併し決して膽液に當んで居らぬ。豫め何を爲すかに就て一定の見識がなく、只度量の大きな所を取つとする。度量は圖抜けて大きいと言へる。却て新田義貞に鎌倉流即ち膽液質を見る。鎌倉ほどの氣魄もなく、才幹もなければ、信ずる所に向つて進み、如何なる困難にも耐ふる執着力がある。尊氏のやうに勢ひ次第といふのと違ひ、其れ丈け風向が悪ければ困難に陥る。併し如何に南朝側で事を成すのが困難であるにしても、義時、泰時、時頼、時宗の如くんば、何とか勢ひを制し得たらうと察せられる。

英國のクロムウエルは義時に似て居るか、尊氏に似て居るか。之を合せた程の力はないけれど、何程か之を合せたところがある。而して日本で義時及び尊氏を巨物とし、英國でクロムウエルを英雄とするは、國體の關係もあり、他にも事情があるが、義時及び尊氏は朝廷の爲めに

利祿を奪はれるのに抵抗して居り、クロムウエルは人民の權利を擁護するを主眼とする事になつて居る。利祿の爲めに君主に抵抗するとあつては、卑劣の感を受けることが出來ぬ。利祿も根本に於て權利であるけれど、權利として餘りに原始的に屬する。利祿の爲めに力づくで争へば、始末に了へなくなる。英國でクロムウエルを以て英人の精神を發達した者とするのは、時代の進んだ所もある。クロムウエルは尊氏より三百年後に出で、義時より四百年後に出で居る。其れでも英國でクロムウエルを賞め出したのは一世紀案の事であつて、其以前は逆賊として取扱つて居り、今でも逆賊扱ひにして居るのが少くない。彼の義時及び尊氏が利祿の爲めに朝廷に反抗したのは甚だ下種な居つても、彼れ自ら利祿を貪らず、頗る貞素に過した。

北條として高時、足利として義満が豪傑を事とする様になり、義時及び尊氏は單に己れ自らの事を考へなだやうである。高時が驕り散らし、北條氏が滅び、義満が驕り散らして長い間の戰亂となり、共に相應の制裁を受けた。義満が一時平定し得たのは、自分の力もあり、世が亂を厭うた所もある、孰れにしても勝に乗じて驕り散らし、世が亂れる上に亂れたのは、義時及

び管氏に及ばぬ所であらう。

義時及び管氏がタロムウエルに似て居るの
は、政治的運動の上のことで、思想上に似て居
る所があれば、殆ど無意識と謂ふべく、一方は
封建武士であり、他の一方は平民の自由の爲め
にし、年數に距離があつて、思想にも距離があ
る。クロムウエルとなれば、全く近世の人物に
屬し、古代及び中世と離して見ねばならぬ。

東亞大陸と歐大陸

史記とプルタルク列傳

近世に入つて、日本が東洋で主要の位置を占
め、英國が歐洲で主要の位置を占めるやうにな
つたが、古代及び中世では、大陸が本舞臺であ
り、日本や、英國や、其の附屬物たる形を免
れぬ。古代の英雄は史記とプルタルク列傳とで
略々盡し、後世英雄豪傑を語る者は概ね之に據
つて居る。此の二書は相一致する所多くとも、
支那では歴史が連続し、即ち夏殷周より秦漢に
連続し、歐洲では大略希臘と羅馬に分れ、變
遷の順序が違ふ。根本的に違ふので無く、周

と秦と起原を別にし、希臘と後に羅馬に併合し、
外國よりも做て居る。但だ支那は土地が全く
接續して渾一の度が強く、希臘と羅馬とに區別
するやうな點にいかぬのである。

人智の發達に應じ、史記とプルタルクと同様
の體裁で出来上り、言はず列傳體に編纂されな
がし、史記では帝紀、世家、列傳として種類別
に年代を逐ひ、プルタルクは一々希臘の人物と
羅馬の人物とを並べて居る。史記では同じ型の
人物でも、時代を異にすれば別々に取扱ひ、プ
ルタルクでは希臘と羅馬と時代を異にしても、
同じ型の人物と見て一緒に取扱ふ。此點で互
に違ひつゝ、自然に相一致する所がある。史記
には時代を以て列し、同時代に二篇對と見做す
べきものがある。項羽本紀と漢高祖本紀と續い
て居るのは、後世此二人を對照するに便利を與
へて居る。齊太公世家と魯周公世家と並んで居
る。孫子吳起が一列傳となり、蘇秦張儀が並ん
で居り、孟嘗君、平原君、信陵君、春申君等
が並んで居り、廉頗、藺相如が一列傳になつ
て居る。屈原と賈誼を一列傳にしたのは、全く
時代を異にした者を併せたのである。期せずし
てプルタルクと一致し、英雄豪傑を考へるに便
利が多い。

プルタルクでは希臘と羅馬と相對し、全く時
代を異にする者を比較する爲めに、氣球の出来
て居るのがある。日に希臘と羅馬と云ふものの、
多くの事情に於て相違ひ、人物も違ふ。違ふの
を一緒に取扱ひ、其傳何時でも並べ言ふことに
なつて居る。後世英雄の標本と云へば、アレキ
サンダー(原名アレキサンドロス)とシーザー
(ケイザル)であり、漢字で歴山該撒と書けば、
直ぐと理解される。所が、人は時代を異にし、
延いて活動の範圍をも異にし、必ずしも並べ
言ふべきものでない。希臘で最も能く遠征した
者と、羅馬で最も能く遠征した者とを合せたに
過ぎぬ。デモステネスとキケロとも、時代を異
にして居り、同時代の蘇秦、張儀を並べ言ふの
例に依れば、デモステネスとエスキネスとを並
べ言ふべきである。史記は時代を以て言ひ、プ
ルタルクは時代に關はず、希臘と羅馬とを對
するに務める。けれども希臘と羅馬と全く國を
異にすると思はし得るだけ、同時代であるかに
取扱ふことが出来、英國のシエクスピアと獨
逸のゲーテと相對するやうな所がある。之も傾
利であつて、一長一短、一得一失、史記とプル
タルクと、古代の英雄を書き現はすに遺憾なし
とする。

史記は支那に限り、プルタルクは歐洲に限り、雙方に連絡がないが、連絡を付ければどうなるか。萬里相隔り居り、希臘と羅馬との比でなければ、年代に於て略々一致するが上、活動の範圍に於て相背する所がある。夏殷周が黃河附近に聚え、後漢に統一した所、希臘半島が文明の中心となり、後羅馬帝國の下に統一したのに當り、雙方に輩出する人物も、相比較するに難くない。史記を讀む者は夫々興味を以て讀むが、同じく帝紀、世家、列傳でも、多く讀まれるのがあり、少しく讀まれるのがある。項羽本紀や、高祖本紀や、頗りに讀まれる、蘇秦張儀も頗りに讀まれる。プルタルクも然うであつて、歴山該撒の如き、最も多く讀まれる。デモステネス、キケロも、能く讀まれる。人に好き嫌ひがあり、或は此等を讀まずして、全く他を讀むのがあり、且つ多く讀まれるのが必ずしも人物の傑出したと限らぬ。何の時代にても、人氣者と云ふのがあつて、實力及び事業の如何に拘らず、世間で持て囃される。歴史の人物も然うであり、英雄に人氣英雄がある。何でもない事で、英雄らしく知られて居るのがある。の者であつて、千年二千年、格別世に知られぬ

のは、實力に於て蓋世の雄を凌いでも、人心に關係が薄いとせねばならぬ。歴史家の見解は別とし、普通英雄家徳と稱するは、世間で最も多く知られる所を主にする。最も廣く知られても、堯舜の如きは餘りに太古に屬し、事業も簡單であり、英雄中に加へにくい。プルタルクには、初めに希臘のテセオスと羅馬のロムルスとを擧げてあつて、此れとて餘りに太古に屬し、歴史よりも神話に近い。所で支那では聖人が天下を治める様に傳へられ、歐洲で英雄が權力を握ることになつて居るのと違ふ。史實がどうであつても、支那太古の執權者に英雄らしいのが少く、歐洲では概ね英雄の氣分を帯び、腕力にさへ勝れたたがある。支那に平和主義が勝を制して居つたとも言へるが、是れ土地の事情に依ることであつて、猶太などは執權者に皆豫言者の風がある。支那にしても、愈々國家の形を整へては、執權者も多少後世の所謂英雄に似て来る。希臘のレコルゴスなり、ソロンなり、テミストクレスなり、皆當時に傑出した、後の英雄に劣らぬにしても、事蹟が詳かに知られて、眞に英雄らしく感ぜらるゝのは、ペリクレスであり、支那ならば武王

か、周公か、太公望に當る所である。

周と希臘

ペリクレスが希臘の全盛を代表するは、彼れ一人の力でなく、其の下で働いた多數の力であつても、ペリクレスの名を以て一切を代表することが出来、且つ彼に夫れだけ資格があると言へる。周の始めはさうはいかぬ。文王は後世周の第一人として推す所なれど、是れ亦例の聖人の列に居り、英雄らしく見えぬ。武王に至り、自ら兵を率ゐて時の執權者を倒し、自ら權力を掌つたのであるが、何程の實力を備へて居つたかは明瞭でなく、普通に知られて居る限り、餘り實力に富まず、兵に於て太公望に任せ、政治に於て周公に任せ、事實上此の二人が分擔して居る。而して太公望の人物は明白を缺き、別に影武者があるやうにも考へられる。周公は事業として傳へらるゝ所より推し、頗る政治の才に富んで居つたのを察し得るけれど、何分にも之を詳かにすることが出来ず、何でも善い事を周公に歸することに爲つて居る。併し先づ此の三人が相寄つて周の天下を造り得たと云ふべきである。實際はどうあるにしても、周室が鞏固になり、名義だけでも三十七世八百六十七年續いたのは、那に珍らしい事で、

彼の三人は此の珍らしい例を作つた者として記憶せられる。勢の順調ばかりでなく、何程か實力を備へて居つたらう。

ペリクレスは此三人の力を併せたものとは言へぬ、時勢もあるが、周のやうな太平を致す特に往かなんだ。けれども三人よりも約六百年後れて出て、文明は周の都々手たる文明に優るとも劣らず、而してペリクレスの手の善く行届いたことが、記録を以て比較的明かに知り得られ、國家に首長として、三人の誰にも優るを斷定して不可ない。希臘は後内亂にて衰弱し、マケドニアに併されたが、若しペリクレスの計畫通りに行はれたならば、實に能くフイリツプに抵抗し得たばかりでなく、羅馬にも抵抗するを得、アドリア海を境として、兩立し得たらうと推察される。ペリクレスは當時の施設に於て最も宜しきを得、後世の爲めに圖るにも最も宜しきを得、只反對者が其の計畫の實行を妨げたが爲めに國家の衰滅を來したといふは、確かに一理がある。是にも種々の事情が交り、名門の利益あり、小國分立の不利あるが、少くも表面の道筋に於て然うなる。ペリクレスは周初三傑を合せた程の力がなくとも、之を合せて三分したよりも力があり、折半若くは三分二に

達するであらう。ペリクレス以後、希臘各地に幾多人物の輩出し、中に英華を以て目すべきものが少くない。雅典のクレオン、ニキアス、ノンナリ、スパルタのプラシダス、リサンドロス、アゲシラオスナリ、テベのニバミノンダス、ペロピダスナリ、其他相應に實力を示すのがあり、單に群衆を支配して國難より救ひ得るのみでなく、甘んじて己れを犠牲にし、人格の頗る興味しいのを見出す。けれども此等を知るは、歴史を調べる者又は傳記を喜ぶ者のことであつて、一口に英雄と云へば、歴山を推すことに定まつて居る。歐洲で英雄らしき英雄は歴山を以て始まる。

マケドニアの興隆

支那で誰が歴山に當るか。時代の似て居る所から言へば、秦の始皇と羅馬の該撒と明かに當るが、之に先んじて支那に如何なる英雄が出て居るか。聖人を標準にする丈、歴山に匹敵するものが出て居らず、強ひて言へば齊桓晋文と云ふ所とする。桓公は躬自ら實力に富まず、功業は管仲の手を以て遂げられたが、周領に權力を振ひ、國外に威力を伸ばした所、歴山の活動範圍に劣つて居らぬ。桓

公と管仲とを合せば、武略に於て歴山に及ばず、治國の才に於て之に優る。支那に相應の英雄的人物が出て居ながら、兵力を以て經營するものがなく、兵力を以て經營しても、其兵力は程の知れたものと思はれる。春秋戰國に於て、盛んに兵力を用ひ、名將の續出けれど、歴山の獅子奮迅の勢あると同日に言ふことが出来ぬ。君主自ら兵を率ゐて活躍するは極めて稀れで、戰爭好きといふのも、將の出征を命ずるに止まり、將は命を承けて出發し、敗北すれば嚴刑に處せられ、一の受負帥たる形がある。馬上を以て天下を取るの最も目覺ましいのは、項籍及び劉邦であつて、支那の英雄らしい英雄は茲に始まる。

記録の傳へる限り、歴山は如何にも英雄らしい英雄と云へる。若し蓋世の雄を想像に描くとせば、自づと歴山の如く男らしきものとなる。歴山該撒と並べ稱するけれども、快男子たる點に於て、該撒に多くの缺點がある。歴山は三十四歳の元氣盛りで歿し、餘計な缺點を現さなんだ所もあり、或は短命で幸ひとも言へようが、兎も角も一生を通じて自分の隙なきまでに蓋世の雄たる備を留めて居る。該撒は之に較べて何處となく俗物と見え、大人

物として凡人の大きな者に属する。歴山は天馬の昇りて空に行き、降りて地に走るが如く、何人にも手に汗を握らすやうな興味を覚えさせるところがある。項籍は武勇人に勝れ、又人情に厚く、氣分の歴山に似た所があるが、割合に薩張せぬ、心に嬌まりがある、韓信が言うたやうに、人の病氣を見て涙を流しなから、與ふべき物を惜んで與へず、餘り器局の大きい方でない。歴山は此點に於て頗る綺麗で、只世界を切り従へるに力を致し、區々たる財寶の如き、土地の如き、何とも思はぬ。廣大なる土地でも、人に異れてしまひ、頗る薩張して居る。力山を抜き氣世を蓋ふと云ふは、實に彼の事である。

父なるフリッブは、夙に其の英才を認め、其の能く悍馬を御するを見て曰ふ、「我領土は汝に取つて餘りに狭い、汝自ら新たに領土を得るの外ない」と。新たに領土を得るは其改の氣風であつて、歴山も只之を念とし、有りと有らゆる國を悉く平げようと思ひ込んだ。父も遠征を志したが、暗殺されて仕舞ひ、歴山は二十一歳で位に即き、國內の反抗を鎮壓し、隣國の昔いたのを壓伏し、三十三歳で三萬五千の兵を率ひ、波斯征伐に出發し、屢々其を以て

衆を破り、遂に全く征服するを得た。運用の妙ばかりでなく、勇敏にして陣頭に立ち、往々劍を抜いて敵と渡り合ひ、兜も鏝も傷だらけになる。而も敵に對して徒らに殘虐を事とせず、王族の捕虜となつたのを待遇すること頗る宜しきを得、王ダリウスも之を聞いて嘆息して曰うた、「若し勝利を得れば、歴山の如く敵を取扱はう、到底滅亡を免れぬならば、歴山の手に滅されて満足する」と。歴山は後更に印度に遠征し、最早他に進むべき土地なきかと嘆息して兵を返した。歴山は幾何か波斯の奢侈に感服し、酒色に溺れる趣はあつたが、常に自ら節制することを忘れず、當時の風に比して能く節し得たのを認めねばならぬ。感情が強くて怒り易く、怒れば一刀の下に斬りたくなるのを出来るだけ忍耐し、最早耐へ切れなくなつて痲瘋王が破裂する。功臣クリトスが罵つた時、林檎を面に投げ付け、側の劍を取らうとし、周圍の人が仲に入つて輒りに詫言るので、氣を靜かにして柔らいたが、其の愈々増長して傍若無人の振舞するや、槍を取つて一撃の下に刺し殺した。殺して我に返り、槍を自身の咽喉に當

て、左右に遮られて俯伏し、其夜も翌日も、悲嘆の涙にくれ、人が之を慰めるに餘程の困難を感じた。多情多恨、動もすれば情に馳せて止まる所なく、只自ら節制に努めて、其の甚だしきに至らぬのである。感情も強いが、意志も強い。千軍萬馬の間に起臥しつゝ、政治に深く心を用ゐる、死ぬる頃、波斯の經濟事業を思ひ立つて居つた。

歐洲の文明を西亞細亞に傳へ、印度の富を歐洲に知らしたのは、實に歴山であつて、平生我が位置のみを念とせず、其の死する時、誰に帝國を引渡すかとの問に對し、「最も適當の人物」と云ふに止まつた。英雄らしき態度は、歴山傳の何處にも附屬して居る。彼は感情が強過ぎはせぬか、英雄は喜怒哀樂を色に現はさぬが宜いではないか、時と場合とあるが、事々物々、一々打算し、利害得失を圖るに專らなるよりも、豪快を感じさせる。彼は猪突猛進するけれども、決して無謀の戦ひをせぬ、進むに臨んで必勝の算を立てる。直覺して勝敗を知り、其の直覺が減少に誤らぬ。沈思冥想して複雑なる問題を解するの能力を具へながら、大抵の事は即斷即決、何等感ふ所がない。熱慮せずして熱慮したと同様の結果を得る。歴山の如き人物は、支那に類を求め難く、日本の上杉謙信に似て規模の大なるものと云ふが適當である。

歐洲の文明を西亞細亞に傳へ、印度の富を歐洲に知らしたのは、實に歴山であつて、平生我が位置のみを念とせず、其の死する時、誰に帝國を引渡すかとの問に對し、「最も適當の人物」と云ふに止まつた。英雄らしき態度は、歴山傳の何處にも附屬して居る。彼は感情が強過ぎはせぬか、英雄は喜怒哀樂を色に現はさぬが宜いではないか、時と場合とあるが、事々物々、一々打算し、利害得失を圖るに專らなるよりも、豪快を感じさせる。彼は猪突猛進するけれども、決して無謀の戦ひをせぬ、進むに臨んで必勝の算を立てる。直覺して勝敗を知り、其の直覺が減少に誤らぬ。沈思冥想して複雑なる問題を解するの能力を具へながら、大抵の事は即斷即決、何等感ふ所がない。熱慮せずして熱慮したと同様の結果を得る。歴山の如き人物は、支那に類を求め難く、日本の上杉謙信に似て規模の大なるものと云ふが適當である。

謙信は入道となつて冷かな所があるけれど、時に感激して殊更に困難を招くことがある。動員の兵數も歴山に譲らぬ、京都に攻め上らうとし、時の兵は三萬五千位でなかつたかと思はれるが、何分にも百數十里の活動で、距離を以て云へば甚だ狭い。謙信をしてマケドニアに在らしめたならば、歴山になつたであらう。共に俠氣に富み、利益を得るよりも、危険を冒すのを愉快とする迹がある。

危険を冒すの性分は、歴山の遠い種類に當るエベイロス下ピルロスに於て著しく現はれて居る。ピルロスは歴山に私淑し、歴山が東に進んだ代りに、西の方羅馬及び其他を併さうとした。歩兵二萬、馬三千、象若干等を率ゐて出帆し、南伊太利で羅馬兵と戦つて勝ち、羅馬城へ七八里の處まで進んだが、數回の激戦で自ら兵を損すること多く、引續いて追撃する譯に住かなんだ。其後或はカルタゴと戦ひ、或は羅馬と戦ひ、遂に利なくしてエベイロスに歸り、マケドニアと戦つて之に勝ち、更にスパルタと開戦し、アルゴスに進んで四十七歳で戦死した。羅馬は波斯より強く、歴山の如く連戦連勝するを得なんだが、冒險の氣象に富むことは更に超えて居り、用兵の術に於て孰れ

が優つて居るかは言ひ難い。若し西歐に勝利を續け得たならば、歴山と並び稱せられるのである。其れでなくても、戦史の上で並べ稱するの價值がある。

漢登戰役

支那では君主は概ね軍事に長せず、良將があつても、君主に使はれるだけで、必要の場合

に使はれ、必要がなければ殺され、後死免分、良

狗烹」といふ事になつて仕舞ふ。政治の技倆

が軍人を制するに足る。秦の白起王翦の如き、

眞に名將であるが、兵事に於ける一技術家に

止まる。支那で活動の範圍の最も廣いのは秦

の始皇に始まり、規模の雄大なる羅馬の該撒も

及ばぬ位である。併し彼れ自ら何程の實力を

備へたかは分らぬ。平凡でないのは確かであつ

ても、自ら兵を率ゐて戦つたことが無く、將

としては將に將たりとでも謂はねばならぬ。

是れ君主の位に登つてのことであつて、位に

登られれば、諸將が命を聽かぬかも知れぬ。制度

が定まり、百法が整ひ、永く後世の模範となつたのは、幾多官吏が從來の制度を考へ、統一の事情に鑒みて制定した所に繋る。萬里長城ととも、前代からあつたのを修復したり、増築したに過ぎぬ。彼の如く連互して築き上げるのは、始皇にして初めて爲し得るとしても、扶蘇蒙恬等が與つて力がある。始皇は專して英雄を撰擧するの形がある。而して是れ支那に於ける英雄の理想であつて、眞に劍を抜いて立ち、軍隊の力を以て權力を握り得たのは、霸王項籍を除いて幾人もない。

歐洲の所謂英雄らしき英雄は、項王を第一に

推す。彼れ實に兵に長じ、兵を以て進む處、

能く敵し得る者がない。如何なる戰術を以てし

たかは分らぬけれど、到る處碎げざるなきを以

て、將材の最も優つた者なるを察し得られる。

彼の如きが國外の遠征を企てたならば、東洋に

歴山該撒を出現することになつたらう。實

際支那の統一は、歴山該撒の侵略と大差がない。

歴山は自分の領土が狭いので他國に討

つて出で、該撒は他國に出られるので出ること

になつた。支那戰國は列國分立して居り、之を

統一するのが功名心の絶頂を形づくりに足る。支那を統一して、夫から何處に出征すべきであるか。北に匈奴があつても、漠たる沙漠で之を得たと何の利益がない。始皇は政治的技倆あつて軍事的技倆がなく、長城を築いて自ら守るの外ないと云へるが、項王は軍事的技倆

に於て何人にも優り、若し地位を鞏固にし得たならば、何處へか出征しようかと考へ、歴山と同じく世界は是れで終りか」と嘆息したかも知れぬ。或、後、漢の武帝の如く、匈奴を併さうとし、武帝が將を遣はしたと違ひ、自ら出征したらうとも思はれる。何にしたも項王は兵力を以て天下を治める珍らしい例に屬する。

支那で馬上に天下を治むると云ふのも知れたもので、何程も兵を動かして居らぬ。其れさへ拙策とされ、只能く文武の才を用ゐると云ふものが最も宜いことになつて居る。自ら兵を率ゐて東奔西走する時、眞の英華とされず又實に兵に長ぜぬものに破られることがない。項と劉との競争が之を例證する。兵を率ゐて進んでは、勢ひが一局部に限られ、群雄を操縱することが出来なくなる。今日支那で電報を以て戰ふと云ふが、電報を打つに巧みなのは、一部の將よりも智慧が優つて居る。項籍は兵に將として向ふ所敵なく、夫れだけ精進の操縱を忘れぬ虞れがあり、遂に劉邦をして漢高祖と爲らしめた。

支那英雄の模範

劉邦なる漢高祖は、支那の漢への英雄で

ある。彼は項籍と戦ふ毎に敗れるばかりでなく、自ら無能を以て得意として居る。方略に於て張良に若かず、軍事に於て韓信に若かず、經濟に於て蕭何に若かず、只能く之を用ゐて天下を得たと明言し、之れを聞く者は皆成程と感心した。支那には、さう云ふのが權力を握るに適して居る、即ち飽天大風呂敷で、肝腎の所に括りを付けると云ふのが、群雄を駕御する所以である。高祖は生れも悪けれど、随分不法千萬で、偏つて冠に小便したり、人を罵り飛ばすことを何とも思はぬ。何とも思はぬが、斯くするのが不利益と氣が付けば、何時でも改める。

無禮講が悦ばれるやうに、不法な事をする、人が遠慮せず集まる。併し不法ばかりで治まりが付かぬと、正直な連中は不快を感じる。そこで不法なのに顔を押め、今少し御注意を願へば、直ぐに恭しくなる。今惡口雑言して居つたかと思へば、膝を直し恐れ入つて詫びるなど、小言を言つた者が、餘りに早く諫めを容れられたので恐縮せず居られなくなる。特別に自分を尊敬し呉れたと已惚れた。實は不法にして急に改めるは難かしくない。氣が咎めて取てすることが出来ぬだ

けで、是れほど手もなく出来る事は世にない。頭を下げさせば其れで済む。頭を下げたと、痛くも痒くもない。其何でもない事が普通に出て来ぬので、喧嘩が絶えぬ。頭を一寸下げ下げぬで、背筋を立てて争ふは割に合はぬ。彼れ劉邦は其邊を見て取り記びると云ふなら幾らでも詫びると、一種の悟りを開いて居る。度量の大なること驚くばかりと言はれ、無能の身を以て群雄を手玉に取ることが出来た。彼の如く人を容るゝは、實に他人の及ばぬ所であるが、斯くして權力を占めるは、支那に適用すること、歐洲に多少其形跡があつても、今一層個人の實力を備へなくてはならぬ。漠然取止めのない大風呂敷で群雄を引括めるのは頗る難い。

地形が違ふ程、其點が違つて居る。支那の漢然たるのと、歐洲の錯綜するのとを較ぶれば、有能の士を多く集めたのが勝つ。歐洲では有能の士を集めねばならぬが、夫ればかりでは人の侮蔑を招き易く、何等か能力に於て他に優るを證明するを要す。高祖は攻みに人を用ゐるの能があつて、其の能で勝を制したにしても、人の能を使用するのと、自分の能を發揮するのと、英

卑として差違がある。單に人を使用するのは、秩序を回復し又は事業を擴張するに適するけれど、其人の生存した爲めに新たな現象の起るのを望む譯に往かぬ。歴山が人を使つたのみならば、歐洲と印度との交通を開くに至らなだらう。當時歴山の此舉に反對して、大抵に思止まらざうと努めたのが幾人もあり、中には公然不平を唱へたものもある。歴山は自分の思立つた事を何處までも決行しようとし、又之を決行するの力を備へて居つたが爲め、萬難を排して大遠征を遂ぐることを得た。後何時か此交通が開けるに極つて居るけれど、歴山の力で何程か早くなつたのを認めねばならぬ。彼の遠征があつてから、歐洲と印度との交通が一の大なる希望となり、千八百年後の新世界発見も之に關聯して居る。コロンブスが米洲に到着したのは、印度に到着する目的に於てし、バスコ・ダ・ガマが喜望峯を回つたのも印度を指したのである。前に企てられななだ所をば、進んで道を開き、幾代も人をして「印度へ、印度へ」と憧憬せしむるが如き、歴山ならではの出来まい。

人を使ふに止まるのは、當時の人の考へる所の外に出づることが出来ぬ。高祖は人の註文を

聞き、成る可く之に應ずるだけで、破大荒の事を企てるなど、殆ど想像したことも無い。併し支那では斯かる傾向を自然とする。支那は内地で事が足り、内地の平和を維持しさせば、功名心の限りを悉すことが出来る。支那から印度を征服するのが不可能ばかりでなく、内地だけで果てしない世界を形づくつて居ると云ふのが自づと人の頭に浮び、隨つて高祖の如き人物を最大英雄とすることに爲る。歐洲では新たな道を開くの可能性があつて、能力がなければ夫までのこと、人に優るの能力があれば、何等か現状を打破し、局面を展開して呉れるであらうと望まれる。人の能を借るのみで、英雄たるに至らぬ。英雄とせられても、大英雄とせられぬ。

支那の對外發展

高祖は内地の平和を念とし、其の平和を維持し得れば足るとしたが、惠文景三帝を経て、武帝に至り、斯くして満足せず、世界の有る限りを統一しようとして、衛青、霍去病、李廣利等を遣はして、匈奴を撃つた。是れ普通の支那流と異なる所で、歴山、該撒が支那に現はれたものと具做されさうである。實に支那に珍とすべきであつて、秦始皇と並べ稱するに足り、剩へ其に兵を國外に用ゐながら、秦皇は守勢を取り、漢武は攻勢を取り、漢武こそ歴山、該撒の經路ありと言へるらしい。所が然う言ひにくいのは外でない、武帝が世界統一を思立つて領土を擴げたことは、歴山、該撒を凌ぐにしても、自ら坐して事を成さうとし、歴山該撒の自ら兵馬の間に起臥するのと違ふ。

高祖は無能と云はれても、相應に戰つて居る。負けるだけで、戰ふの勞を厭はぬ。自ら兵を率ゐて匈奴と戰ふなど、始皇の敢てしなかつた所を敢てして居る。彼は匈奴を征服しようと思ひ込んだけれど、何分にも軍事に長ぜず、物の見事に負けて仕舞ひ、進退難谷まつて體の好い降参をし、辛うじて平和を克復し得たので、實に懲々し、成るだけ兵を用ゐぬことにしたのである。後繼者も其方針を守り、何處迄も恥辱を忍んだが、漸く年數を経て財政が裕かになり、尙ほ匈奴が衰弱したとの報道を得たので、之を引括めて領土にしようと思はるやうになつた。太平で功を立つるに苦しんだものや、出兵の騒ぎで大儲けしようとする者や、相依つて武帝を煽て上げた所もあるが、何にせ

よ、武帝に大に勇奮し、志に於て歴山、該撒に優つても劣らぬ。併し高祖よりも人を頼りにして居り、戦功があれば賞し、失敗すれば罰し、單に賞罰を以て世界を統一し得るかに考へた。前よりも領土を擴大し得たけれど、得る所、失ふ所を償はず、歴山、該撒が分捕品を以て本國を簡つたのと、同列に言へぬ。斯くても、武帝を以て英雄とし得るか、英雄とせば、蓋世の雄とするに躊躇せねばならぬでないか。併し夫れとして支那の事情から来て居り、支那では之で済むのである。済むが爲めに蓋世の雄たるの志あつて、著世の雄たるを得ぬこともある。若し武帝が項籍であつたならば、幾層か面白いことをしたらうと思はれるが、何うであらうか。

羅馬帝國の建設

歐洲で希臘の歴山に次で羅馬の該撒を擧げ、該撒の大陸を一統した所は、正しく秦始皇に當るが、始皇以前に有力な人物があるが如く、該撒以前に有力な人物がある。技倆よりせば、誰が最も傑出して居るかを言ひ難い。始皇若くは該撒と同等の技倆あつても、氣運の熟するまで始皇若くは該撒と同様の事を爲

す事に往かぬ。始皇は現はれた所に於て、最も政治的技倆に富んで居り、軍事上に見るべきことがない。懷手で天下を取つた形である。該撒は幾年も身を戰場に曝し、歴山と並び稱せられるのも其の爲めであつて、時代の遅れて居るだけ、歴山よりも規模が大きく、眞に蓋世の雄と稱せられさうであるが、果して軍事上に傑出して居るか、軍事上よりも政治的技倆で統一の業を了へたのでなからうか。該撒以前のマリウスなり、スルラーなり、一廉の人物であつて、軍事に於て、該撒に劣ると思はれぬ。該撒は軍事に長じたに相違ないけれど、他に類のない種に見るのは見過ぎて居る。其の遠征して勝利を得たのも、軍略の卓越した所を證明するのが少い。

軍事にかけて歴山は天才であつて、該撒は能才である。歴山は殆ど鬼神と稱するに足り、何事にも秀づる能力を具へて居つたが、何分にも早く歿し、何處まで到達し得たらうかを知らることが出来ぬ。之に次でピルロスが天才であり、カルタゴのハンニバルも天才である。ハンニバルは軍人として傑出し、後の該撒の比でない。併し該撒は軍事こそ非常に卓越して居られ、其の當時一切の事に於て尋常に優り、政

治的運動を以て彼に他を優伏するに準へた。其の能く政敵を滅ぼし、全權を握つたのは、政治上に勢ひを制するの巧みな所から来て居る。當の落たるポムペウスと戰場に相對し、無造作に之を破つたのは、戰場の驅引に通じた所もあれど、ヨリ以上に政治的運動の巧みな所がある。ポムペウスが如何がほしい軍隊を以て對陣したのは、眼の利かぬ所あるにせよ、早く勢ひを制せられ、十分に準備を整へることが出来なんだ。或は其の餘りに剛甲斐なく負けたのを鬼神の異狀に歸する。

該撒が賽を投じた」と叫んでルビコン河を渡つた時は、早くも勢ひを制して居る。之を渡るに就て躊躇し、幕僚も議論風々になつたが、遂に斷然馬を河に乗り入れた所、追がに勢ひをるに機敏である。而して其の機敏は戰場に於てよりも、政界に最も著しく現はれ、羅馬の實勢が何、狀態で、何人を操縦し、何處より如何に支配すべきか、之を打算するに妙を得て居る。政治上の勢ひを察し、敵の機先を制し、遂に能く大帝國を建設したのは、正しく始皇と東西に相對する。

始皇の人物は、詳かに知られず、時の政府の施設を以て其の方寸に出でたと假定し、智略の

群に抜いたのを推察するの外ない。實に秦の制度は後世歴代の則る所となり、全く其範疇より脱するのがなく、此點に於て歐洲列國皆多少該撒の制定した所に據ると似て居る。始皇、該撒が百世に傑出する人物と云ふのでなく、大勢の趨く所に始皇、該撒の名を附け加へたとし得るが、普通の君主若くは大統領と違ひ、個人として特別の能力を具へたのを認めずに置けぬ。該撒は比較的經歷が詳かで、明かに才能の如何を知ることが出来る。殆ど何事にも秀でて居り、辯舌に於てもキケロに次ぐの勢ひである。始皇の事は分らぬとし、漢高祖は無能で天下を得たと評判されるが、該撒は確かに有能で、多藝で、何にかけても相應に達つて除けることが出来る。首判を採す所か、人一倍に物が判る。けれども如何にも多能多藝なるにせよ、大帝國の權力を握つたのを以て之に因るとする譯に往かぬ。軍事上に左程傑出せずして能く戦勝を収めた如く、政治的技術に傑出せずとも、權力を握り得ぬとは限らぬ。

該撒は高祖ほどに人任せでないが、大勢に乗つて權力を握つたのは、高祖と大差がない。其のポムペウスに勝つたのも、高祖が項王に勝つたのに似て居る。ポムペウスより能力が優つて

も、其の事業の大なるほどに能力が優つて居るのではない。ポムペウスは餘りに多寡を括り、羅馬政府で該撒を公敵と布告した以上、該撒の軍隊は該撒に背いて歸服するであらうと見込み、一向準備を整へず、弱き貴公子達を連れて輕々しく戦つたので、譯もなく負けて仕舞つた。相當に準備すれば、決して彼の如く脆くない。準備せぬのが智慧の足らぬ所としても、其處は驕る者久しからずで、該撒に取つて勿怪の幸ひとなつて居る。一方は一生涯懸命、一方は油斷大敵、勝敗は戦争を待つまでもない。韓信は高祖を「所謂天授にして人力でない」というたが、該撒は高祖より有能でも、何程か斯かる跡がある。人物の知れた所で、該撒に對し高祖を引合に出すが、勢ひの上で、該撒が始皇に當り、甥の 아우グストが高祖に當る。

秦は漢に滅ぼされた形あれど、是れ外面のことで、漢は専ら秦の制度及び政策に據つて國を治めて居る。秦と戦つたものは、何でも破壊しようとしたのに、高祖は其れ程でなく、殊に其の隨一の羣僚蕭何は秦の圖書を取出し、之を參考にして秩序を回復し、且つ維持するに努めた。始皇は名義をこそ高祖に奪はれたれ、事業に於て高祖といふ好い後継者を得て居る。高祖

を始皇の養子と見做して妨げない。該撒はブルッス一味の徒に殺され、羅馬は自由になつたと呼ばれたが、幾ほどもなくアントニウス及びオクタヴィアヌスの爲めに復讐され、尋で此二人が相争ひ、後者が勝利を得てアウグストになつたこと、恰度項籍と劉邦と相争ひ、後者が勝利を得て高祖になつたのに似て居る。支那は高祖の即位を以て政治變動に一段落を告げ、歐洲はアウグストの尊號を以て政治變動に一段落を告げた。

對君雄辯と對民雄辯

周より秦漢に至る間、種々の人物の輩出したことは、希臘より羅馬に至る間に於けると相對する。周が春秋戰國を経て秦に一統され、封建が群衆となるの際、雄辯家が頻りに出で、中には蘇秦張儀が飛躍して居る。七國が戰争に忙殺され、何事も武力を以て決するの側、辯舌を以て勢ひを動かさうといふ奇妙なる現象を呈し來つた。劍と舌と孰れが強いかといふ所であつて、動もすれば舌が劍に勝たうとする。何處でも良將を求め、良將が優待せられるに拘らず、蘇秦が六國の印綬を帯びたやうな盛んなことが無い。張儀が妻に向つて我尙ほ有

りやと閉ひ、有りと答へられて宜しと言ひ、遂に秦に宰相となり、六國の盟約を解いたなど、事實は記録ほどに無造作でなく、頗る込入つた曲折があるにしても、大體に於て雄辯の效力の著しく認められたのを否定することが出来ぬ。歐洲でデモステネスが之に匹敵して居る。舌はそれほど力あるものかどうか。

舌といへば簡單に聞えるが、腕力のみで辨ぜず、別の力を要するのである。軍艦のみで解決することが出来なくては、他の力を必要とする。七國の聯合及び分離に關して、外交が最も重きを占め、外交上の技倆として、最も雄辯を要し、味方を増すも、敵を増すも、辯の如何に因る。其時代に雄辯家多く、單に蘇張のみでないけれど、時務に適切なものと、適切でないのとのある。往々に雄辯者々、人を煙に捲き、而して煙の如く消え去るのがある。蘇張は共に奥谷子に學んだと傳へられ、多少の素養あるに相違なく、刻苦龍勉は諺になつて居る。書を讀んで睡むたくなれば、雫を以て股を刺し、血が流れたとある。何を讀んだか、何を考へたか、兎もかく口先ばかりを恃んだのでなく、議論に根柢があつて、時務に適切と聞えた所がある。其列國に説く所は、一定の順序に於て

し、形式は蘇秦と張儀とに變りがない。奥谷子の門に斯かる雄辯法若くは修辭法があつたか何うかは判らぬにしても、同一形式を以てする所、何處かで練習したとせねばならぬ。形勢を説くの評かなる所より推せば、常に辯舌を練磨したのでなく、頻りに材料を集めて調査したと考へられる。

歐洲で雄辯はデモステネスがフイリツプを攻撃する所で大いに振つて居る。希臘は以前より雄辯を重んじたが、劍か舌かとの争ひで、此時が最も盛んである。デモステネスに對し、同じく雄辯を以て名あるエスキネスがある。少し下つたが、或る程度まで蘇秦に對する張儀に較べ得られる。所で支那の雄辯家は列國の君主に説き、歐洲の雄辯家は一般公衆に説き、其處に違ひが現はれる。支那では雄辯を以て公衆を説かうとせず、只君主をして、承知せしめようとし、其の納得しきうな、理解しきうな、悟らさうな事を言はうとする。デモステネスは公衆に訴へ、之を激勵し、德迄フイリツプの侵略に抵抗させようとし、エスキネスは之に反して能ふ限り公衆の心を鑄め、不利に傾かさうとする。蘇秦とデモステネスと、萬里を隔てつゝ、略々同時代に雄辯を以て鳴り、而して訴ふべき對手を

異にして居る。君主と公衆とに分れるのは、國情の違ふが爲めであつて、支那に民主思想があつても、必ず特別の執權者なかる可からずとし、歐洲で民主政治の名ある時に、寡頭政治の實あるにせよ、先づ多數民衆の同意を得るを以て得策とする。歐洲も外交政略の爲めに列國君主に説くことの行はれたが、其の普通となつた後でも、雄辯と云へば公衆に對するものと考へられ、君主に對する雄辯は特別に注意せられて居らぬ。外交家は辭令の巧みなるを要すれど之は雄辯を以て目すべきものでないといふと居る。外交は概して秘密を尙び、如何なる調子で事が運まつたかも知られず、雄辯よりも他の事情で決することが多い。戰國時代には、雄辯が君主に對しながら、蘇秦が何と辯じたが、張儀が何と辯じたか、一々記録に上り、殆ど今の議會筆記錄の如く傳へられたらしく、國事に注意する者の皆等しく知る所となつた。其點で支那の對君雄辯と歐洲の對民雄辯と、多少一致する所がある。

蘇秦張儀は立派に政治家の資格を具へ、特別に雄辯を以て顯れたのである。共に自身の功名の爲めにし、只黨連をさへせば宜いとして居るが、蘇は張よりも人物が淡泊で愉快、一の

快男子であつて、夫れだけ締括りの足らぬ所
があり、張は之に比して頗る腹黒く、煮ても
焚いても煮へず、夫れだけ強く締括つて、相手
をして身動きも出来ぬやうにする。張は黙つ
て居つても、優に勢力を贏つ得たであらう。
デモステネスは人格に於て此等の比でなく、只
愛國心に驅られ、如何にしてもフィリッパの伎
略を撃退しようとして居る。單に口先のみでな
く、實行の筋に當つたが、何分にも希臘の民心
を一に、全力を以て敵に當る體に往かぬ。前
から議論が多く、何事でも直ぐと議論が分れる
が上、マケドニアから手が入り、マ探が跋扈す
るので、進んで戦ふのに甚だ困難である。デ
モステネスは其の困難を知りつゝ、何處までも
努力し、歴 山王の死んだ時に、再び獨立を
圖り、捕へられて獄に投ぜられ、是より脱出
し、勢ひの窮するに及んで毒を仰いだ。デモス
テネスは人物として最も稱揚すべき者の一に
居る。支那で特殊の興味及び同情を以て屈原
を見ることになつて居るが、デモステネスは屈
原の心を以て蘇秦の辯を振うものと云へる。
其の演說筆記は、今日に遺つて人の讀む所であ
り、屈原の離騷と趣を異にして、人に悲愴の
感を與へる所が相似て居る。今日フィリッパ及

び歴 山王の跡形なく、而してデモステネスが
生ける如くなるは、或は最後の勝利を得たの
であらう。
支那で蘇秦が六國を聯合して秦に當り、遂に
秦に滅ぼされ、蘇秦の雄辯が徒勞に終つた。け
れども秦が一統するにも、張儀の雄辯を用ひ、
雄辯が軍隊よりも劣勢でないことを示す。デモ
ステネスに對抗するエスキネスは、失敗してロ
ーデスに退き、雄辯學校を設けて評判高く、一
日嘗て振ひし雄辯を再演した時、人が怪しんで
尋ねた、「斯かる雄辯を以て何故に負けられたか」と。
エスキネスは徐ろに答へて曰ふ、「君がデモス
テネスの雄辯を聞けば、何等怪しむべきを覺え
まい」と。實にデモステネスの雄辯は天下能く
敵する者ない勢ひであつたが、其の驚くべき雄
辯が全く劍の先にて破られ、舌の劍より劣る
を證明した。支那で雄辯が勝ち、歐洲で雄辯が
負けたのは、雄辯の質を異にし、即ち對君と對
民との差違から來て居るが、支那で雄辯が強
いのでなく、軍隊が弱いのであつて、歐洲で雄
辯が弱いのでなく、軍隊が強いのであると解せ
らる。
軍隊も時勢に依つて強くなつたり、弱くなつ
たりするけれど、支那は大體上に弱いとして差

支ない。項籍が負けて、戰ひの罪でなく、天罰
を乞はすと言つたのは、負け惜みでなく、眞實
を語つたもので、實に軍事に劣つて居らず、政
治的技術の足らななのである。軍隊は政治的
技術で集まつたり散つたりする。劉邦は信信の
如き良將あるにせよ、然る如く戰爭に長ぜ
ず、自ら兵を率ゐて進めば必ず負けるに極つ
て居つて、而も能く天下の權を得たのは、政治
上に運動するに巧みなのに因る。該黨は兵を用
ゐること神の如しと行ふほどでないが、劉邦に
比して大いに優り、それだけ優つて居らねば權
を得ることが出来なかつた。人を使ふだけでは、
天下分目の合戰に勝つことが出来ぬ。支那
で權力を握つた者は、兵を用ゐぬではないが、
軍人として稱揚するに足るのがない。大帝國
に君臨した始皇及び高祖は、何の戰爭にも戰
略の妙を現はしたことがない。夫から見れば該
黨の優つて居るは勿論、アウグストゥスへ優つて
居る。兵力が弱くして政治的技術の最も重き
を爲す處では、對君でも、對民でも、雄辯が大
いに力を現はし得られる。支那では大抵天下一
統し、君主が一人と限られて居るが爲め、對君
雄辯を振ふの餘地に乏しいが、幾國かに分るれ
ば雄辯の必要を感じる。

君の英雄と臣の英雄

秦漢の宰相と羅馬の君主

支那は戰略の力ある國でなく、政略の力ある國である。而して獨裁君主の名ありながら、必ず宰相が補佐することになつて居り、政治的技術に於て君主よりも、宰相の方が世に知られる。殷湯に伊尹あり、周武に呂望あるは言はずもがな、始皇に李斯があり、高祖に蕭何、張良等がある。君主と宰相と必ず相映ち、或は龍の雲に於けるが如しと言はれる。希臘及び羅馬は君主自ら最も力を伸ばし、宰相は其の命を聽いて勤務するの形がある。該撒なり、アウグストなり、各々有力なる輔佐ありながら、輔佐は權力者の名に掩はれ、特別に擧ぐる價値ないと思はれる。是れ一つは兵力に關聯するのであつて、常に軍隊を動かしては、大元帥たるべき者の命を待たねばならぬ。合議體などは迅速に事が運ばず、最高權で事を決するやうな習慣になつて居る。支那は政治的運動が主になり、一々大元帥の命を聽かねばならぬ程

でなく、大事は君主が決し、小事は宰相以下百官が決するとし、事實上宰相が專斷して妨げない。且つ支那では君主が世襲に定まり、希臘羅馬では夫れほどに定まらず、世襲でも選舉の形にしたりする。世襲にては、幼少で位に即き、或は低能で位に即くので、有力なる宰相の輔佐を待たねばならぬ。名君は名君で、良宰相を得て愈々力を伸ばさうとし、太平の世は勢ひ國務を宰相に委ぬるに傾く。それで事が済むのである。隨つて「暴君汚吏」といひつづ、暴君といふ程の者が少く、宰相の責任が重くなつて居る。選舉の形にては、如何に無能とて世だしく無能でなく、只宰相に任せて甘んぜず、有徳なるは力を善政に致し、不徳なるは力を惡政に致し、善かれ、悪しかれ、何事をか成す。歐洲で宰相が力を表はすのは、列國分立して後のこと、即ち世襲の君主を輔佐し、政治的手腕を振ふる所に於てする。

秦始皇や、漢高祖や、英王と稱せられても、宰相の力が大に現はれ、宰相に英雄があるやうになつて居る。宰相は君主の任命する所、一旦其の怒りに觸るれば、職を免ぜられるのみか、死刑に處せられ、一家斷絶するにしても、其の全盛なる時は、君主に代つて事を行ひ、動

もすれば君主を蔑るに、甚だしきは其位を奪ふに至る。従つて君主に英雄を求めざるも、宰相若くは將軍に英雄を求め得られる。始皇の政治上に施設した所は、殆ど悉く李斯の手になつて居るかと思はれる。實に其の始皇に於ける、大江廣元の頼朝義時に於けるよりも力あつたらしい。若し秦の政治が其計畫になつたとすれば、誠に一大政治家と稱せねばならぬ。新たに帝國を建て、帝政を布き、細大の事悉く改めるは容易の事業でなく、而して始皇が世を終るまで、李斯が一門の繁榮を極めたのは、驚くべき妙手腕又は怪手腕である。併し始皇が歿するや、直に失脚し、一門悉く亡びたのは、專制時代の常とは云へ、餘りに脆い。趙高に利害を説き附けられ、善い頃に回められて仕舞つた。權力者の下に手腕を振ふに適し、自ら權力者として手腕を振ふに逆せぬのである。事務官の優秀なのであつて、英雄として取扱ふことが出来ぬ、又英雄として取扱はれて來て居らぬ。

項籍の謀主なる范增に至つては、初めの間何れが上か分らぬ。増は智者に於て籍に優つて居り、只だ籍の勇氣及び武略なく、之に臣として従ふの餘儀なきに至つて居る。智略に於て李

斯に劣つても、此れよりも英雄の資格がある。籍が己れを疑ふを察して斷然隱退した如きは、思ひ切が宜い。不滿々で死んだのも面白い。

一層早く思ひ切れば宜いと言はれるが、何しても思ひ切る所で思ひ切つて居る。李斯は斯か

る思ひ切がなく、能く政治を扱つても、自分の利害得失となれば、とつおいつ甚だしく喜び、愈も怒うて愈も拙い。籍が増あるが如く、劉邦

と張良がある。良も初めより劉の臣でなく、之に従ふの世に活動するに便利なるを認めて

臣となつたのである。併し邦が皇帝となるまで、悉く指導して居る。邦の度量の大なる

所もあるが、邦をして天下を取らしめた良の才幹も偉大である。帝王の師とは彼の如きを指

す。併し邦に力を添へるは良ばかりでなく、蕭何あり、韓信あり、陳平あり、其他幾人もあつて、中にも蕭何は女房役となり、邦に取つて最も功がある。其外に現はれずして内に畫策し、能く邦をして過なからしめたのは、或は邦よりも度量が大であつたかも知れぬ。其眼から見れば、若干豪傑の血眼になつて奔走して居るのが氣の毒なやうに見えたであらう。宰相として理想的とすべきである。併し英雄とすべきであるかどうか。廣い意義に於て然りと云

へるが、英雄に銳氣潑刺なる所を要すとせば、然らずと言はねばならぬ。謂はゞ循吏の最も大なるものに屬する。

支那には宰相として現はれるのが多い代り、君主として現はれるのが少く、而して宰相として雇人の形あるだけ、英雄の面目を發揮するに難く、君主として世襲の故を以て徒らに虚位を擁するやうに爲り、一世の雄として特筆大書すべきものが僅かしか無い。羅馬の政治は支那

の政治に似て居るが、君主が比較的多く權力を振ふだけ、明君として大いに稱するに足るのがある。漢では文帝景帝共に明君であつて、武帝

が英略を以て顯はれ、後に宣帝が明君であり、光武帝が中興の業を擧げてより、明帝昭帝が明君である。明君と目せられないのは、何等稱す

べきものがない。羅馬ではアウグスト以後、チベリウスを初め、暴主暗君が續き、ヴェスパシヤヌスに至つて成績が擧り、後一のドミチアヌス

を除いて、百年間明君が續いて居る。暴主暗君と呼ばれるのがあり、英主明君と稱せられるの

があり、同じ君主で餘りの違ひであるが、暗君ばかり續く譯に往かず、明君ばかり續く譯に往かず、多少相錯するので單調を破る。漢の明君は實に君主の資格を具へて居るけれ

ど、能く治平を維持すると云ふに止まり、英雄と稱するに距離がある。時勢もあるが、卓掌不羈、縱横に手腕を伸べすと云ふやうなことがない。羅馬のチツスなり、ネルヴァなり、トラヤヌスなり、ハドリアナヌスなり、アントニヌス。

ピウスなり、マルクス・アウレリウスなり、皆明君であつて、中に英雄の氣魄に富んで居るの

がある。漢と同じく國外の蠻族に侵され、之を防ぐに努めねばならず、漢よりも蠻族の力強

くは、武帝も匈奴の力が一層強ければ、君主若くは宰相が更に多く力を伸べたらうと言ひ

得るやうで、聊か考ふべき事情がある。「盤根錯節、以て利器を判つべし」困難があつて才幹が顯はれる筈ながら、支那の兵力を以てして

は、種族の強いのを禦くことが出来ず、五胡の亂をして一二世紀早からしめたかも知れぬ。武帝のやうに英邁で遠征を好んでも、自ら戦鬪に

長ずるのでなく、自ら出發しては、高祖が北方で敗北したと同じく敗北せぬと限らぬ。之に較べれば、羅馬は兵力の衰へたにせよ、君主自ら兵を率へて邊境に戦ひ、種族を懲したことが屢々である。邊境に戦ひつゝ、國內

民衆の幸福を推進するに努め、殆ど聖人と稱するに足るのがある。

聖人的英雄

マルクス・アウレリウスは立派な聖人といへる。ストア派の嚴肅で慈悲深く、賢明で學問あり、寧ろ退いて靜かに沈思するを好みながら、皇帝として内憂外患に當り、二十年間劇務に奔勞した。本来健かならぬ身體で、絶えず戰場に出で、能く紛亂を鎮壓しつゝ、餘暇に書卷に親しむ所、聖人と英雄とを兼ねて居る。堯舜の如く神祕的でなく、事蹟が詳かであつて、缺點もないが、實際の人間の上に見る所として、理想に近いと謂はねばならぬ。基督教を迫害したけれど、基督教徒に於て其の最も基督教教的なるを許さずに置けぬ。何にしても斯く明君が続いては、時として暗君が出づるや、其の陋劣が甚だしく日に立つ。是れも悉く記録を信じ難く、種々の事情で誤り傳へられたものもあるが、陰謀を企て、詐術を逞くし、人を陥れ人を殺すを厭はなんだのは確かである。時代の風潮として少しく恕するにしても、所謂暴主暗君とは斯の如きものかと思はしむるのがある。中に全く話にならぬものもある。ス

エトニウスの十二該孤傳は、面白い書物として廣く讀まれて居るが、之を譯せば風俗壞亂で禁止されるかも知れぬ。

漢代は英主明君が羅馬程多くなく、暴主暗君も羅馬ほど多くなく、總じて羅馬の程度を低めて居る。而して君主が羅馬に劣つて居る代り、宰相の類はれたのがある。中で聖人と英雄とを兼ねた形あるのは、漢末三國の諸葛孔明に於て見る。マルクス・アウレリウスの如き大なる領土に君臨せず、活動の範圍が狭いけれども、頗る之に似た所がある。三代聖人の傳説があつても、事實が詳かでなく、只形容詞を多くして聖人と崇めるに止まり、果して聖人とするに足るやの疑はしいのがある。孔子は言行が精しく、詳かである。眼前物語を聞くが如きを覺ゆるが、事蹟の精しい所よりせば、孔明を推さねばならぬ。因より精しいとて比較的事、且つ演義三國志は今の所謂歴史小説であるが、小説の材料となつた所でも、他に類のない性格を認め得られる。

何程事實に誤りあるにせよ、出師表が遺つて居り、それで推せば、普通に傳はつて居る事實も多少據り處ありとせねばならぬ。孔子の言語は談片的に傳はり、出師表は順序立つて首尾一貫して居る。論語を經典とせば、出師表は別に一種經典の實を備へる。表に現はれた所でも、其の出處遺遺は普通に人の理想とする所である。孔明は利祿に念なく、蒼生を救済するの意に於て奮つて起ち、功が成れば人に譲り、功が成らねば倒れて已まうとして居る。斯かる事は、夙に人が聖人的英雄として描き出した所に屬し、世界史に一の理想とし泛んで居る。

事なければ田を耕したり、魚を釣つたりし、事あらば劍を佩じて世を救ふといふのが、誰れ言ふとなく理想の英雄の生活の如く考へられ來り、伊尹や、呂望や、此種の人として知られ、羅馬のキンケンナツスも然うとされて居る。併し何程差事實なるやが分らず、歴史を穿鑿するほど事が疑はしくなる。久しく景慕された人物が、ニール等の調べで消が引けたりした。只斯かる人がないとはせぬ、近い所で、華盛頓とガリバルデーとが、此型に入り、日本で前に楠木正成後に西郷隆盛、亦さうと云へる。記録の傳へる限り、孔明は凡ゆる美點を備へて居つたと見做し得られる。三國志は作り事が多いけれど、千數百年も信ぜられて居り、若し事實でなければ、假良的人物として最も完全に近いものとせねばならぬ。能くも彼の如き立派

な人物を抜き出したのである。最初は伊尹の傳説に似て居り、傳説に滋味を以て湯に説いたと云ふのと、湯が五たび人をして聘迎せしめたと云ふのと二つあるが如く、孔明に就て二説あり、出師表で隆敵に辨し三顧されて玄德に仕へたと云ふのを論かとするが、勇頭に三分の計を立て、吳と聯合して魏を破り、次で軍事に政治に智略を運らし、往くとして可ならざる無きを示して居る。併し智略だけでは他に類なしとせぬ。困難に陥つて愈々職分を重んじ、至誠盡忠の人として現れた所に、其の眞骨頭を見る。世に智略ある者は誠意なく、誠意ある者は智略なく、其の最も併せ難き智略と誠意とを併せ、遂に一身を至誠の結晶とするに至つて、殆ど人間を超越する。彼の如き智略を以てせば、能ふだけ榮華を求めぬのが普通なるに、絶えて其の形跡なく、豫め桑八百株、田十五頃を以て家族の生計に供へ、少しも他に求めようとせず、全力を國家に效し、自ら斃れて已み、子なる瞻、瞻の子なる尙、亦戰死した。誠に天晴れと謂ふべきである。出師表は政治家の經典とするに足り、其の出處進退の記録に遺つて居るのは、後世にどれだけ影響を與へたか知れぬ。キンキンナツスのことは傳にしても、後に好

影響を與へて居る。孔明は之に比して實傳が多く、少くも否定の證據の擧げぬ間、聖人的英雄とせねばならぬ。羅馬の明君中で、マルクス・アウレリウスは聖人的英雄といへるが、孔明は宰相で、活動の範圍こそ與けれ儘に此と對立するに足る。

群雄續出

所が三國では獨り孔明が傑出するのみでなく、他にも稱揚すべき人物が多い。孔明が野に在る時に伏龍若くは臥龍といはれ、之に對して龐士元が鳳雛といはれた。士元は大に伸びる事が出来なだだが、伸びる資質を備へて居つた。孔明を玄德に紹介した司馬徽及び徐庶も、尋常の人物でない。後世業績に於て之に譲らぬ人物があり、歴代其人を見ると言へるが、何分にもそれほど興味を覺えぬ。三國の人物は徳不徳となく、どこか氣分が面白く感ぜられる。講談流に作られたが爲めかと云ふに、幾分か其の迹があつても、悉く然うであるとはせぬ。當時幾多人物の輩出した理由がないでは無い。支那數千年の歴史中、二つの著大なる事變がある。一つは周が天下を一統し、後に分裂して七國となつたこと、一つは漢が天下を一統し、後

に分裂して三國となつたことである。周の天下は北部に偏つて居り、秦を経て漢に及び、初めて後の所謂支那を形づくり、同じく一統しながら、小と大との差がある。七國の争ひは比較的狭い範圍に於てし、三國の争ひは、全土の大競争である。周の文明を承けて七國が分立し、其の競争が頗る見るべき價值があり、後漢の文明を承けて三國が分立し、智見の上に一層向上した跡を認める。其後幾回も變亂があり、何等かの進歩があるけれど、退歩した所もあり、畢竟するに漢末の變亂を繰返すのみとして差支ない。特別に新しい現象を認めると謂へぬ。支那で人物の活動すること、七國及び三國に於て略々盡して居る。後に出でた者は、前の人に請賣りたる形を免れぬ。周代の四書五經が經典として永く傳へられた如く、政治家及び軍人として七國及び三國の人物が模範視せられて居り、後の人物と較べて原版と複寫との差がある。複寫は綺麗に出来ても、物足りなく感ぜられる。七國の人物も、十分に能力を發揮したものの、舞臺は三國ほど大きくなく、支那に於て十分に能力を發揮するとなつては、主なる標本を三國に求め得られる。後世に同一模型の人物が出づれど、三國は何處か若々しく、青年らし

く、愉快に感ずる。劉備にしても、關羽にし
ても、張飛にしても、事情が入組んで居りな
がら、後の人物よりも隆張した所がある、轉運
きき氣分が清々して居るやうに思はれる。後世
の人物は是になり夕になり、分別があつても睡
氣を催すやうになる。曹操は治世の能臣、亂
世の英雄、云はれ、當時第一の英雄であるが、
割合に餘り腹黒くない。必勝の算を立てば大得
意で「周公吐哺、天下歸心」など歌ひ、計畫が失
敗して危くなるや、這々の體で逃げ出し、それ
で辛うじて安全になれば、前のことを忘れた如
く、又々天下我物顔で、太平樂を並べ立てる。
可笑しいといへば可笑しい。高祖ほどに度量が
大きくなくても、可なり大きく、才幹及び義能
に於て之に優つて居る。或は治世の能臣として
顯はれる方が宜かつたかも知れぬ。

吳の孫策孫權等、皆日本で源氏流の人物に屬
する。智慮があつて、勇氣があつて、計畫が堅實
である、卑怯なことをせぬ。劉備が曹操に迫ら
れて逃げた時、孔明が吳に使ひして攻守同盟を
結んだ。吳は人に富み、魯肅の如き、私財を以て
軍費を辨じて居る。蜀の關羽が後に神に祭ら
れ、關帝廟が多く出来たのは、一種の迷信から
であつても、支那で軍神を擧げれば先づ此邊で

ある。軍人として鐵腕的と稱し得られる。白起
なり、韓信なり、用兵の術に於て此れ以上であら
うが、軍人としての性格に缺けた所がある。關
羽は如何にも軍人らしく、盡にかいた容貌もよ
い。馬から落ちて捕虜にされたのは支那流とな
つたが、是れは思はず不覺を取つたのであらう。
生命惜しみに捕虜となつたと思はれぬ。所で吳
に周瑜が居る。用兵の術に於ても、當時最も
傑出し、眞に天品たる觀がある。若し天死せな
んだならば、何處まで到達したか測り知られぬ。
關羽は戰間に於て第一に居り、周瑜は戰略に
於て第一に居る。關羽は戰線に立つて能く刃
向ふものなけれど、作戰計畫に長ず、其の爲
めに取返しの附かぬ失敗に終つた。孫ならば其
の失敗を免れ得たであらう。

蜀では孔明が政治と軍事を兼ね、寧ろ國家
全體を擔任し、作戰計畫に攻みでも、手廻り兼
ねることが多い。軍事を専らにせば、一層立派
な勝利を得たらうが、一人で餘り多くの業務
を負擔するので、遂に負擔倒れになつて仕舞つ
た。玄德は死に臨んで孔明に「君の才は曹孟に
十倍する」といひ、實に其の才は驚くべきもの
であるが、最後の勝利を得るは必ずしも才に
比例せぬ。孔明が兵を率ゐて出づれば、敵は容

易に迫らうとせず、司馬仲達は何と云はれても
進んで戦はず、弱蟲として婦人の敵を贈られて
も忍んで居り、遂に死せる孔明生ける仲達を走
らすに至つた。けれども其處は支那であつて、
既に曹操が孔明ほどの才なくして最大領域を
占め、子なる丕が皇帝となつて如く、仲達は人
に笑はれながら、次第に位置を高め、其孫なる
炎が皇帝となり、天下を一統し、司馬氏が最後
の勝利を得た。

時代の成功者

時勢にも依ることであつて、仲達が今少しく
早く出て居れば力を伸ばすに苦しみ、或は無能
として侮られたらうが、既に豪傑が大抵奮ふ
だけ争ひ、世間が漸く疲れて太平を希望する
頃に出たので、誠に謙へ向の人物となつた。
もつと晚く出れば尙更良かつた。彼は如何に
して勢ひを制すべきかを考へ、其も最も宜し
きに従ふのみで、何と言はれても氣にかけず、
守つて喰止めて居りさへせば、其中に死するも
のは死し、敵陣に事變が起らうし、何も懼てる
ことがないとする。曹操よりも誰よりも落付い
て居る。鳴かぬなら鳴く迄待たう子規と極め込
んで居る。果して事が清々思ふ處に操より、氣

運と言はるか、能侍と言はるか、勝利は待つ者の手に歸した。何處でも此類の事があれど、支那では殊に著しい。三國各々獨立し、相争つた結果、左程の人物と思はれなんだ司馬仲達に運が向き、曹操や、劉備や、孫權や、若し地下で知るならば、嘆賞多く思つたであらう。

併し權を得ると否とが、人物の高下を決せぬ、後に仲達を見ること孔明の如くでない、關羽周瑜ほどでもない。權力を得るに巧みであつて後世の人と精神上に没交渉である。支那が司馬氏の下に晉として一統しつゝ、人物が三國六十餘年の間に輩出し、後の人物は只繰返すと見えるのは、歐洲で百年間に羅馬の明君が續いて出で、後に明君と云うても之に及ばぬかに感ぜられると同じ。晉で一統したと云うても、何分納まりが付かず、常に何處かが亂れ、五胡十六國が出来、南北朝に分れた。羅馬が東西兩朝に分れたのは之と事情を異にするが、絶えず種族に侵されたのは、之に似て居る。雙方共に一君主の下に大帝國を結轉するのが難かしく、自づと二つに分れたのである。支那は縦に長く、南北に分れ、歐洲は横に長くて、東西に分れた。孰れも相應の人物が出で、若し一層勢ひが宜かつたならば、更に力を伸ばし得たらうと

思はれるが、詰り三國の人物を繰返すか、羅馬全盛の皇帝を小模型に現はすかに止まる。或は如何なる人物も十分に力を伸ばし得ない時代とも云へよう。

同じ滿洲にも、普通の滿洲があり、大瀾といふのがある如く、順境逆境にも大小がある。秦皇なり、漢武なり、該振なり、アウグストナリ、大瀾に乗出したもので、誰でも之を望むことは出来ぬ。潮干狩に驚くほど魚介を獲たやうなものである。南北朝の間又は東西朝の間、隨分働きの手が出て居りながら、獸り場に組打して居る形がある。斷えず陰謀をたくみ、陰謀に於て到らぬ所なく、實に陰謀が尋常になつて居つて、其の割合に成功が少い。人間が事業を成就するよりも、智力を練磨する時代と云うて宜からう。中に豪傑肌の人物があり、隨分性格の愉快を覺えるのが、矢張り詐欺取財のやうな迹を免れぬ。後趙の石勒が「大丈夫事をなすべし、當に諸々落々、日月の皎然たるが如くすべきであつて、曹孟徳や司馬仲達やが、寡婦孤兒を欺いて天下を取つたに做すべきでない」と云ひ、其の語が一の格言となつ。傳はつたのは、時代の弱點を喝破したのである。其後は何等珍らしいものでなく、石勒の事業も知ら

れたものであるが、餘りに詐欺的權謀が行はれるので、偶々斯かることを言ひ、幾らか之に近い行をしたのが、闇夜に一の提燈を持出したやうに見えた。微かな光でも、人が是れは目をつけたのである。他の時代にも陰謀が盛んなれど、それ程甚だしくなく、甚だしくなければ、斯かることを言つたとして別段人の注意を惹かぬ。石勒の語は恰も「正直は最良手段」と言ひ出したに似て居る。彼は陰謀の競争を見、それだけで何程の事を成すに足らぬと見抜いた所があらう。孟軻が戰國に仁義を説いたのであり、理窟で考へ附かず、實際に悟つたのであらう。相互に陰謀の奥の手を出して争つたとて、好い結果がない、何もさう云ふことをするに及ばぬ、正々堂々、天下晴れて濁せせば善いと認めたのであつて、世間では成程と思ひ、頻りに語り傳へた。平凡の語でも、南北朝に於ける一の名句である。

東西羅馬の對立する頃も、之に劣らぬ陰謀時代で、人を陥れて位置を奪ふことが當前になつて居る。コンスタンチヌスは新たに基督教を普及したので、基督教徒の間に評判が好く、或は羅馬第一の明君の如く言はれ、大帝と稱せられるが、陰謀にかけて實に逞しく、陰謀の

競争に於て、何人にも勝つ。辛辣で、殘刻で、子をも、妹をも、叛逆罪で殺した。若い時に苛められて鶴んだが爲めとの説があるが、後の人が全く疑へ及ばぬやうな陰險なことを敢てした。案外暴君の名ある者が、夫れ程でないこともある。案外といふだけで、暴君たるに相違ない。暴君でも、臣下でなくても、一般に人を馴したり、殺したりするを何とも思はぬ。基督教が行はれたとて、刑罰關係のない時に、尤もらしい事を言ひもし、思ひもし、必要の前に何事とも難せぬ。暗世では、支那でも、歐洲でも、有力者が己れの位置の定まらぬ間、畏まつて居り、位置が固まると共に、君主に迫つて位を譲らしめ、又は之を殺して位を奪ふが普通の順序となつて居る。能持山のやうに、剛い君主を好い加減に捨てて仕舞ふ。其間に力量の秀でて群衆を駕御するに堪ふると見えるのがあつて、詰まり闊討上手、青天白日に出られる身分でない。

隋唐と神聖羅馬帝國

長い間、攻めたり攻められたりして居つた舉句に、支那では南北朝が第一統一し、文帝及び武帝が一統の勢ひに乗じて大いに力を伸ばさう

とし、歐洲では一度羅馬が亂れてから、又以前の如く一統せぬが、シャルルマン(カロロ大帝)の下に比較的大なる帝國を作ることになつた。前は僅かに三代で亡び、唐となり、太宗が支那歴史を通じて第一の英主と謂はれる。シャルルマンも之に較べて遠く及ばぬやうに思はれる。併し唐に限りはせぬが、太宗は頗る勢ひに富まれたものであつて、秦の後に漢が出たと同じく隋の後に唐が出で、太宗は第一統一異れたのを感謝せねばならぬ。隋の文帝は専制に過ぎ、煬帝は奢侈に過ぎ、二人共に凡物でなく、之を併せれば優に秦始皇に當るに足る。一統してから年を経ること少く、未だ地盤が固まらぬのに、急いで經營しつゝ、餘りに奢り散らしたのが爲め、平和を維持し難くなつたが、今少し地盤が固まつて居れば、煬帝が唐太宗の位置を占める所である。高麗に遠征して國力を消耗したりしたのも、天下の經營を急いだからであつて、個人の能力に於て何等太宗に劣りはせぬ。隋で一統し、再び亂れて唐となり、大隋が降つて地盤が鞏固になり、そこで太宗が思ふ存分に力を伸ばすを得た。

煬帝は奢り散らす癖があつても、事業好きであり、思ひ切つて大事業を起し、其の事業で後

に永く益を遺したのがある。酒清渠や、永濟渠や、江南河や、幾つも長い運河を開いた。事に運河を開いたのと、秦に長城を築いたのと、孰れが益を後世に遺したであらうか。シャルルマンは戰役に從事するの傍ら、文物技藝を奨勵し、尚ほライン河とダニューゲ(ナウ)河との間に運河を作らうとした。其邊で皇帝とシャルルマンと相討して居る。固より悉く一致すべきでなく、シャルルマンが羅馬全盛後の第一英主として後に稱する者がない所、書、太宗と比較するも宜からうけれど、一言順序を正せば、シャルルマンが隋の時代に當り、オットト一世が唐太宗に當るべきでないか。オットトは領土が狭く、太宗の領土の廣大なると違ふが、支那は統一するのが順當であつて、歐洲は一度分裂すれば容易に統一せず、オットト補々となる。シャルルマン帝國が興り、オットトが其の後継者たる形である。隋が一統して唐太宗が之を承けた所より推し、オットトを太宗に配當することが出来る。事は文帝及び武帝を合一せば勿論、合一して二分したとて相應の君主を得たであらう。大抵新に君主として大領土を得れば、之を失ふまいとして儉約に過ぎるか、意の儘になるので奢侈に過ぎるか、どちら

か、意の儘になるので奢侈に過ぎるか、どちら

かに備する。唐太宗が創業と守成と執れが難
きを尋ねたのも其處であつて、之を程よくす
るのが難かしい。文帝も煬帝も、英主の備あ
りながら、勢ひの不可なる所があり、英主の
名を唐太宗に奪はれ、煬帝の如き、動もすれ
ば亡國の暗君として取扱はれる。殷鑒貶褒は成
敗の跡に於てせられるので、幸不幸がある。骨
を折つて成績の悪いのがあり、骨を折らずに成
績の好いがある。太宗は骨を折らぬではなけ
れど、骨折に比例して遙かに好い成績を得て居
る。英雄の氣分から言へば、煬帝の方が優つて
居らう。用意の足らぬ所があり、進業息子が
身代を讓受けた形あるが、彼れ一代の爲めに
社會の進歩を促したことと少くない。日本へ使
節を派遣した所でも眼界の廣いのを察し得られ
る。各地より草木鳥獸を集めたのは、珍し物好
きからであつても、此の爲めに動植物の知識を
増して居る。月夜に宮女數千騎を従へて馬上
に清夜遊の曲を奏するなど、風流も尋常でな
い。馬鹿遊びも意表に出て居る。締るべき時に
締つたならば花もあり實もあるとでも云ふ所で
あらうが、締ることが出来ず、徒花ばかりで取
なく落ちて仕舞つた。利養な生れでも、放蕩を
仕過ぎて眞に愚になることがある。

唐太宗は此等の後に出で、能く利害得失を
辨へて居り、決して下手なことをせぬ。人物と
して餘り有徳の方でなく、随分情慾が勝ち、
勝手なことを仕兼ねぬが、權力を得るの念が強
く、之を得且つ之を維持するに必要とあれば何
でも忍耐する。情慾が勝つても勘定高く、煬
帝のやうに飛離れた事をする氣にならぬ。而し
て太宗の代に著しいのは、偉人物が並び出で
たことである。何の朝でも、朝の代毎に有力
の人物が出づるが、唐は太宗が支那切つての英
主と見做さるゝが如く、之に仕へる相將も傑
出して居ると思はれる。秦始皇の時、良い相
將がありながら、皆秦始皇に蔽はれて居り、
漢高祖に至つて、相將皆各々力を振ひ、高
祖は木偶の坊のやうに見られたりするが、唐
太宗は木偶の坊でなく、殆ど何事にも堪能であ
つて、而も相將亦之に讓らず、君君たり、臣
臣たり、實に人材の躍いて居る觀がある。漢
が亡びて、三國に人材多く、後六朝に爭奪が續
き、隋を経て唐に及び、漢に優つた帝國を形づ
くるを得、頻りに人材が出るやうになつた。其
の後唐ほど盛んなことなく、此れと同等以上の
人物があつても、其れ程に見られぬ。
太宗が支那第一の英主と稱せられるのは、

英雄時代の終らうとして居るのを示すとも言へ
る。實に領土の廣人なることは前代に優つて
居るが、軍隊を以て征服したよりも、外交政策
を以て妥協したのである。太宗自ら高麗を征伐
して失敗し、魏徵が居れば征伐を思ひ止まら
たらうと云うたのは軍事に長ぜぬに因る。歴代
陰謀が行はれても、國頭より兵力を用ゐる
こと多く、秦漢を通じて兵力を恃み、三國に
軍人の秀でたのが輩出して居るが、唐に軍人の
秀でたのが稀れで、其代りに政治の才に長じた
ものが群がって出て居る。軍人も政治家庸であ
る。「力拔山兮氣蓋世」と云ふ類が出てず、
出でても顯はれることが出来なうであらう。
驍駿馬と處美人とをこんぐらからせて別れを
惜むやうなことが無くなつた。之を眞に英雄ら
しいとすれば、英雄はないことになる。寧ろ慾
と色といふことになり、色も待合式の色になつ
て居る。けれども大なる帝國に權力を振ふのを
英雄とせば、可なり有る。
支那では兵力があつても無くても、能く人心
を收攬すれば、權力を得ることになる。兵を用
ゐたとて、眞に戦ふことが少く、多くの兵を列
ね、多くの旗を飄し、威嚇して屈伏させるのが
主である。軍人よりも、策士が力を伸ばし易く、

三略にも、主將之法、在務攬三英雄之心、と書いてある。唐太宗自ら陰謀の名人で、兄が太子となつて居るのを、兄と弟とを殺して自ら太子となり、次で父に位を譲らした。併し人心を収むるに妙を得、且つ能く人材を集めるとの評判で、功名心ある者は我もくと集まつた。太宗の政策が唐朝及び其以後の治世方針となり、太宗の時代に人物に富んだのが常に

一轉して文學の才となる。以前より文が武に勝たうとしたが、明かに勝たず、右文左武か、左文右武か、明白を缺いた。唐に至つて、表面は兎も角、文が一切を形づくり、文學が盛んで、政治と文學と互に相交つて居る。太宗からして

一應の文學者であり、宰相以下、文學の達人がある。項王が軍事、方、敗れ、灌高が單に人材を集めて權力を得た。勢は、次第に程度を高め、軍事の代りに文事を以て處置するやうになつて来た。軍事を離して専ら政治より見れば、唐に立派な政治家が幾人も出て居る。房玄齡及び杜如晦は、申分のない政治家であり、魏徵も大臣として立派であり、他にも幾人もある。而して軍事に秀つただけ文學が盛んで、學問に秀づるのがあり、文藝に秀づるのがある。是れは

斯くして世を経ることが出来るが爲めで、軍事に長じ軍隊を以て迫る者が出れば、之を何うすることも出来ぬ。國內にも國外にも威嚇と妥協で太平を致すことになつて居り、太宗も國內で天子と稱し、國外で天可汗と稱し、華夷の區別を掩蔽するを願せぬ。

陰謀の競争

蠻族が兵力を以て進んで來ねば、内地で權力争奪を専らにし、陰謀の有る限りを運らし、最も陰謀に巧みな者が權力を得、若くは之に近づくとことになる。陰謀の盛んなる所では、必ず婦人が勢力を得、姦婦が出で、女豪傑が出る。陰謀では、婦人が男子に劣らず、即て之を凌ぐことがある。陰謀が政治に必要となつて、延ばして婦人が勢力を占めることは、唐に於て漢を繰返して居る。漢には呂后の亂があり、唐には武后の亂があり、共に女政治家として傑出する。

高祖の粗豪に較べて、太宗が多智多藝のやうに、高祖の粗豪に較べて、太宗が多智多藝のやうに、高祖に對して、或る點で武后が知術ありさうに見える。太宗が第一の英主ならば、武后が第一の女政治家であらう。内行が治まらず、世間に非難されながら、豪傑の心を得ることが頗る巧みで、婁師德とか、狄仁傑とか、當時第一流の人物と稱せられるのも旨く丸められた。意に逆ふのは何時の間にか殺して仕舞ひ、活殺頗る自由である。少那では丸めたり丸められたりするのを政治家の特色として差支ない。太宗が儒學を奨励し、孔穎達、顏師古など、一流の鴻儒を用ひつゝ、大義名分を正すことが少なく、正したとて、帝自ら破つて居り、形式ばかりにならうとし、只文字を穿鑿するのが主になり、皆相率ひて勢に従ふ。武后が八十二歳で死ぬまで思ふ存分に天下を我物にしたので、當時の勢ひを察することが出来る。

後に創業時代程に人材が輩出せぬが、之に似て小なるものが絶えず出て居る。陰謀に於て勢を得、寧ろ婦人の性格を備へたのが軀を利かす。玄宗は有爲の君主が墮落したものとせられ居るが、大抵の者が然うなるやうな勢ひになつて居る。國務に當る者は、相結託して陰謀を行ふに餘念なく、制度を整へたり、法律を作つたりするのは、實際の操縦に逆せぬ學究のこととする。機微に迫るのは、李林甫と云ふ所が最も適任と認められて居る。表面は頗る柔和で、盡も殺さぬ顔して、而も人を陥れることが甚だしく、口に蜜あり腹に劍ありと言はれた。十九年も宰相の位に居つたのは、斯かる陰險の性

能の爲めであつて、當時諺へ向の人物である。併し陰險で何時如何なる事をするかも知れぬと云ふので、人が忠實を装ひ、畏まつて居るけれど、之で長く世を治めて往くことは出来ぬ。李林甫が死んで安祿山の亂が起つた。漢ならば王莽の亂と云ふ所である。此二人は全く出處を異にして、飛跡の上で同列に言はれる。

王莽は外戚の親に居り、同族皆顯榮の位を占め、廢立でも何でも出来るやうに爲り、先づ假皇帝の祚を踐み、次で眞皇帝の位に即き、國を新と號し、根本的に國政を改革しようとした。天下の田を玉田と稱し、賣買を禁じたなど、一種の國家社會主義を實行した。銅で北斗の形を造り、出入に之を側に置いた所も、頗る空想を逞うし、或る點に於て宗教的信念が強いと言へる。漢には五行を始め、幾多の迷信があつて、學者も之を免れぬ。莽が永く勢力を得たならば、羅馬法皇に類するものになつたかも知れぬ。眞か僞か、其の愈々敵に圍まれた時「天の徳を予に生ずる、漢兵其れ予を如何」と云うたとある。孔子の口眞似て滑稽の次第ながら、何等か信念なく出て來ることでない。安りに改革して世間を騒がし、兵に長ぜずして兵を用ゐ、遂に敗滅したが、其れでも十五年間位に

居つた。改革を流行せず、平穩無事を旨としたならば、もつと久しく維持し得たらう。彼は惡漢でも、空想的改革家である。法皇として大に活躍し得たらう。

蠻族の勢力

安祿山は之と違ひ、蠻族から出で、罪せらるべき所を助かつたのである。肥えて太つて、調子が好く、愛嬌澤山で、宮中に取入り、大に用ゐられた。楊貴妃の兒となつた所などは、如才がない。王莽の威力を利用するのと違ふ。併し莽は都育ちで兵に長ぜず、何人か兵力を以て

迫り來れば、何うする譯に往かぬ。祿山は宮中で他愛もなく戯れ、無邪氣で面白い人とされて居るが、蠻族の出だけに、兵力を控へて居り、いざとならば軍隊を持出さうとする。馬三千匹を獻ずると申出し、是で事を起さうとしたが、流石の玄宗も疑ひ始め、之を差止めた。祿山は使に對し傲然として「馬を獻ぜずとも宜い、追つて都に上る」と云ひ、兵十五萬を以て出發し、自ら太燕皇帝と稱した。遊びに耽つた朝廷は、之を何うすることも出来ず、顔眞卿と柳果卿とを防いで、防ぎ止められず、玄宗は出奔し、楊貴妃を縊り殺すの餘儀なきに至つた。祿山は

兵を起し、天下を騒がしたものの、病に罹つて精神が狂ひ、相續者を替へようとして實子の爲めに殺され、一年ばかり世間を騒がしたに止まる。王莽のやうに國家的理想なく、天子になつて驕りたいばかりで、取り止めのない、粗巧らしい愚物である。併し若し祿山が病に罹らず、兵力を以て權を占めたならば、唐はそれで終つたであらう。

祿山死して肅宗が大權を收め、後幾代が續き、中に明君になれさうなものもあるが、何分にも基礎が腐り、一時無理して維持するのみで、盜賊が力を得れば、之に官職を與へ、不穩にさせて置くといふ位のこと、宰相其人を得ても、見るべき功がなく、其人を得なければ、尙更である。遂に大に亂れ、忽ち梁となり、忽ち唐となり、忽ち晉となり、忽ち漢となり、忽ち周となり、遂に宋となつて、一先づ治まつた。所で其の代變りとなるのは、安祿山の如きことを爲すに過ぎぬ。祿山は殺されて再び唐の天下となつた爲めに賊と呼ばれるが、五代は祿山の流儀を繰返して居り、而して主なる兵力は蠻族にあつて蠻族から皇帝が現れたりする。實は蠻族が力を得たのは古い事で、支那は歴代之に否しめられて居り、唐太宗とて、初め起

つた時に突厥の兵力を借り、一統後も蠻族を手懐けるに餘程力を用ゐた。蠻族の酋長は、兵力を控へて居つても、智慮が足らず、中央政府で宜い工合に取扱つて呉れれば、それで承知する。支那を悉く取らうとは、滅多に考へることがない。但だ支那自ら亂れ、全く抵抗力なとなつては、蠻族に於ても何とか手を出すことになり、遂に天下を乗取らうとするに至る。祿山が今少しく智慮を備へて居れば、祿山から五代が始まるべきであつて、是れシャルマンの帝國が分裂したのに相當する。歐洲では一度分裂して、又統一することが出来なだが、支那では分裂する代りに頻りと代變りする。支那も歐洲も、兵力が蠻族に移つて仕舞ひ、以前に文明を以て鳴つた所は、蠻族の酋長の蹂躪するが儘で、只體能く蹂躪を免れようと努めるに過ぎぬ。五代の時に北方の蠻族が力を備へて居り、宋が天下を一統したとて、之を何うすることも出来ぬ。之を征服しようとしたけれど、戰へば敗れ、危險を嘗すばかりであつて、莫大な賄賂を贈り、其の亂暴を思ひ止まらずの外ない。契丹なる遼が宋の北部を侵し、女眞なる金が宋を半分にし、尋で蒙古なる元が宋を丸呑みにして仕舞つた。シャルマンは唐太宗に當

るとし、太宗よりも一層蠻族の力に依つて居る。其後神聖羅馬帝國若くは獨逸帝國の名に於て續いたのは、支那で遼と云ひ、金と云ひ、元と云ふの類であつて、支那では元の下に全く統一し、歐洲では神聖羅馬帝國が一張一弛して、小さくなり、多くの國が成立した。斯かる時代は蠻族に英雄が出て、文明國に英雄が出ぬ。

外和内爭

支那では宋朝が到底蠻族と戦ひ難いとし、懷柔に全力を致し、眼前の平和を維持するに専らになり、治安策の上で相應の政治家が出て居る。蠻族に對して賄賂と甘言で宥める一方に、國內で簡治天子の威嚴を保ち、蠻族の方から服従を強つて來て居るやうに吹聴する。其處は文字の扱ひが巧みで、負けても勝つたやうにするに困難がない。何時でも普天の下、率士の濱というて居る。蠻族から兵力を以て迫つて來ぬ間は、四百餘州の天下を治めるだけで、政治家の大手腕を振ふの價値がある。最後の案は如何にして蠻族を防ぐかと云ふにあつても、其處まで考へて施設する者が稀れで、大抵位置を得、位置を高めるに汲々とし、黨を樹て、他黨を排斥し、權力争ひに忙殺される。蠻族

を防ぐに兵力を要し、兵力のことは多年の習慣もあり、急に強くなる譯に往かず、殆ど全く諦めて居り、斷然兵を以て戦はうとするのがない。強がりを言ふけれど、眞に戦はうとせず、偶に戦へば大敗する。實際の事情に通ずるものは、強がりを言うて亂を惹起すよりも、勢ひのまに、自身若くは自身の黨派の利益を圓るに傾き、黨派の對立に於て進歩を呈したと言へる。昔から黨派を樹てて争ひ來つたが、宋に及んで頗る秩序立ち、殆ど政黨と稱し得る程に至つて居る。明の是非に就ても議論が盛んで、歐陽修と藍先震と「朋黨論」の題で弄ぶ所、後の政黨論に類似する。君子を以て居る者が明察を是認し、小人視せられる者が之を否認するも面白い。政治を論ずるとて、人身攻撃を主にする形あれど、人身攻撃にしても、中々議論が立ち、堂々と議論を發表する。政治の議論に於て、宋が最も秀でて居る。兵力を問題外に置けば、宋は立派な政治家に富んで居るが、之を問題にすれば、全く言ふに足らぬ。強ち將材がないのでは無く、兵を強くするには、兵制を改めて新たに訓練せねばならず、是れ急に望み得べきでない。其の勢に韓范の並び稱せられ

て、敵軍に重きを成したのを多とする。支那流の貴族でも幾分の跡形があつたらしい。特に韓琦が歿して神宗自ら神文を作り、兩朝顯命、定策元勳と蒙したのは偶然でない。琦は實に一大政治家たるを疑はぬ。琦は歿した時、年六十八、最早限りに達したが、琦の調子でゆけば、餘計な内輪喧嘩なくて済んだであらう。琦が歿してから、黨派間の權力争ひが始末に了へなくなつた。一方で自ら君子黨として小人を排斥すれば、他の一方で百方抵抗し、君子と云うて何が君子か、自分が小人でないかと反駁する。神宗の志望は頗る良く、實に朝政を刷新し、國を富まし、兵を強くし、以て外敵に當らうとするのであつて、王安石をして大改革を決行せしめたのも、其爲めである。併し改革が實際の事情に適合せぬのみか、安石が爾後で、要らざる所に衝突する。若し安石が今少しく學問自慢でなく、實際の事情に注意したならば、何とか成績が擧つたらうし、成績がなくても、驕ぎが起らなうであらう。異議を唱へる者があれば君は書物を讀まぬだらうと云ひ、書物信仰が迷信になつて居る。兎角支那で改革を企てるには、唐虞三代を標準にせねばならず、周の制度が斯々と云へば、人が承知する。承知する

けれども、之を行ふは至難の業に屬し、色々と骨折つて、詰り無駄骨折りに終る。骨折つて失敗すれば、之を全廢して他の政策に取掛り、國政が試験管で試験せられる有様である。之に慣れては黨族の威嚇も餘り心配にならず、徒らに權力争ひに目を送つて往く。徽宗の如き、細書を專一にすれば、大天才とし顯れたかも知れぬが、其れが皇帝となつたので、自身の不幸福、國家の不幸福となつた。藝術の鑑識があつて、政治の鑑識がなく、嚴様の商賣で、眼前の利を外交に求め、少しく儲けて大に損し、健康の變に皇族三千人及び宮中の財寶悉く奪ひ去られた。

對外軋轢

高宗が南方に移つて、夫れで大丈夫かと云へば、移れば移つたで壓迫され。既に南方に追はれたほどで、其儘にして居れば遂に滅亡を免れぬとて、愈々兵力を以て當らうとするのが出て來り、中にも岳飛が傑出して居る。自分で兵を募つて敵と戰ふので、確かに特殊の技倆を備へ、孔明と關羽とを合せた人物と言はれるのも、強ち賞め過ぎでない。合せた儘では過ぎる、併せて折半した所が適度であらう。けれど

も夫れで果して勝ち誇つて居る金を滅ぼし得るか何うか、或は堪て禍を招きはせぬか。政府關係者は多年の経験で之を覺えなく感じ、強硬手段は必ず失敗すると定めたりする。殊に黨を分ちて片意地を張り、岳飛が撃手な振舞をするを攻撃する。

首相は秦檜であつて、開戦を不得策として居る。怒上岳飛が兵を以て戰つては、或は金が濼して思切つて兵を送り來るかも知れぬ、金とて安りに戰ふよりは、坐して宋の贈物を受くるに若くはないので、租税の一部を與へて居れば、平和に過ぎて往かれると云ふのである。此意見の下に、岳飛を以て宋の運命を縮めるものとし、之を殺すことになつた。後世一般に飛を憐み、檜を憎み、飛の蘭に謁する時、前に置いてある檜の像を打つたりするが、日本で西郷と大久保の争ひに似て居ると、井上梧陰の如き、檜の思慮あるを説いたりした。宋が新たに大敗して、到底戰ふことが出來ず、檜が苦心して、南宋が百五十年も續いたといふに歸する。

大久保の系統に此類の説が行はれて居つた。併し是れ二大戰役前の説で、其以後に自然と立消えになつた。檜が南宋を百五十年も維持したとし、其れだけ政策の宜しきを得たとすべからず、

父は荒れ治して薄死に一生を求むるを擇ぶべきか。岳飛のやうにして滅亡を早めたかも知れぬか。秦檜の如くして情々で百五十年、それも敵の都合と見える所がある。天子が金に臣と稱して僅かに命脈を繋ぐが宜いか。飛が思ひ切り戦つたならば、勢を盛返し、金に勝つやうなことが無かつたらうか。

支那で兵力を以て征伐と戦ひ、勝利の希望あるのは、飛を最後とする。後に文天祥が戦ふけれど、是れ亡國の死物狂ひで、自分で言ふ通り、父母漸死の痛に投棄するに外ならぬ。若し國論一致して飛を援助したならば、支那に珍らしい英雄を出すやうなこともあつたらう。其の唯一の人物が消滅しては、武器なしに盜賊に出逢ふと同じく、言葉巧みに説き付けて、財物の半分で事が済むことがあつても、賊が承知せずには刃物を振り上げたが最後、何とも抵抗することが出来ぬ。宋の外交は一時遇れて、背後に何の恃むべきものがない。契丹に攻められて服従し、女眞が強くなつたので、之と共に契丹を滅ぼし、女眞に攻められて服従し、蒙古が強くなつたので、之と共に女眞を滅ぼし、而して蒙古の爲めに滅ぼされた。外交だけで國家を維持しようとし、利へ小策を以て恨み、暗ら

さうとあつては、さうなるに極つて居る。恨みを耐へ忍び、契丹をして女眞に當らしめ、女眞をして蒙古に當らしめたならば、尙ほ何程か命脈を長くし得たらう。

思想上の勝利

軍事に全力を注がず、思想を練つたが爲め、思想の方で進み、政治家の多くは相應に知識に富んで居る。無益な知識にしても、中々知識がある。程兄弟の如き、朱熹の如き、思想に於て戦勝者なる蒙古を化した所があり、其状態は蠻族が西羅馬を滅ぼし、羅馬の基督教を奉じたのに類似する。獨逸帝國が神聖羅馬帝國と稱したのも、基督教に從つたのを標榜したので、兵力で勝ち、思想で負けて居る。支那には法皇のやうなものがなく、時として出ようとしたが、出ずに終つた。漢代に王莽が長續きたならば法皇のやうになつたかも知れぬが、一の推測に過ぎぬ。唐は老子を尊重して太上玄玄皇帝と追號したけれど、特別に道教を以て支配しようとしなかつた。佛教が盛んになつても、政治と混一するに至らぬ。けれども上流に儒教が行はれ、上流及び下流に道教が行はれ、其の思想は戦勝者が如何ともすることが出来ず、却

て之に同化するやうになる。文天祥の如き、謝枋得の如き、基督教の謂ゆる殉教者に當る。陸秀夫が舟中大學を講じたことと笑はれるけれど、最後までバイブルを離さぬのと違ひがない。意氣地なく負けたものの、節を守つて死んだのは、儒教の爲めに力を添へて居る。基督教ならば、随分之を賞め、頭に光の附いた像を造るのである。斯かる殉教的行為の影響は、支那よりも日本に效能が多かつた。兵力に乏し、支那も、異なる方面に於て勝利を得るの力があつたと言はねばならぬ。

併し是れ普通に所謂英雄と違ひ、謂はゞ功利的の仕事である。髪が長く袈式に立會はぬが、浮世離れて居り、力を以て迫らるれば、只投げられるだけで、抵抗の仕やうがない。英雄としては、力を以て迫る者に對して力を以て應じ、物の見事に取つて投げねばならぬ。さなくとも、弱くないのを證明するを要する。さう云ふ力あるものは宋朝に居らず、羅馬の皇帝に居らず、英雄は蠻族の仕事となつて仕舞ひ、蠻族の間に英雄が居り、偉大なる英雄が居る。支那は分裂して直ちに統一し、列國分立して互に相争ふ期間が短く、歐洲では羅馬が分裂して以來、神聖羅馬帝國が出来ても、一統するよ

りは列國分立して互に相争ふのが盛んで、力を以て攻めたり、攻められたりするのには、歐洲の方々が遙かに多い。けれども支那には此類の英雄こそ少けれ、蒙古から絶大の英雄が出で、一人で幾十英雄を兼ねた形がある。

東西兩洋の聯絡

絶大の領土

契丹にも女眞にも、各々英雄が出で、蒙古に至つて、成吉思汗が太平洋より大西洋まで力を及ぼした。元太祖なる成吉思汗の功業は、人力よりも地勢に依る所が多く、空前絶後の大領土を得たとて、其割合に能力が優つて居るとは言へぬ。けれども空前絶後の事を成すに堪へる人物が居つたのを認めねばならぬ。彼が絶大の領土を占めたのは、主に地勢であつて、天然の境界のない茫漠たる草原では、何處までも押して往かれる。後世露國が別段兵を動かさずに略と之れに似た領土を得たのも、其の爲めである。成吉思汗は單に無人の土地を得たばかりでなく、敵と戦つて勝ち、之を併せて他を攻

め、又之を併せて更に他を攻め、幾多種族を統一するを得た。既に支那に入り、必ず之を征服し得べきを確信し、死ぬ時に方略を遺言し、相續人は謬もなく領土して仕舞つた。其の向ふ所敵なきに就て、土地の乾燥も一の原因に算へられる。病人が雨天で氣が鬱し、晴天で快くなると同じく、亞細亞の乾燥し切つた沙漠附近で成長しては、時として氣が晴々しく、身體が極めて活潑になり、世界を征服せねば満足せぬと云ふ調子になつても云へる。乾燥は或る時代に限らず、何時でもあつて、英雄が其れほど出ぬ所を見れば、此に重きを置くことが出来ぬけれど、乾燥した氣分とするのも面白い。如何なる原因からにせよ、世界に類を見ぬ戰勝者が飛出した譯であつて、彼の爲めに種々の變革が起り、奈翁の用兵術にまで影響を及ぼして居る。彼は支那人でなく、蒙古の種族であるが、支那が主な舞臺となり、彼をして絶世の大英雄たらしめた。歐洲列國分立し、各々英雄が出で、眞の能力に於て之に優つて居るのがあるも誤り難いが、活動の範圍に於て其の何分一にも足らぬ。支那方面から劍を掲げて立つた英雄が數い代り、諸々時を以て大陸を横行し、悉く斬り従へた者が出たのは、其の不足を補ふに

堪ふる。

事は成吉思汗に始まらず、昔から蒙古沙漠に徘徊する種族に、東に支那を壓迫し、西に歐洲を壓迫し、時として東西に跨る。酋長の傑出したのは、産れ落ちてからの慣ひもあるが、頗る用兵の術に長じ、秦始皇も、漢高祖も、之を禦ぐに苦しんだ。弱きを示して高祖を深入りせしめ、俄に騎兵の大軍を以て之を圍み、莫大の利益を得た冒頓は、戰爭に於て眞に妙を得て居る。北方の野蠻として注意を惹かぬが、世界の名將の中に算へねばなるまい。約五百年を経て、アチラ(何番ニツエル)が歐洲に攻め込み、現代の佛蘭西伊太利邊まで蹂躪し、歐洲諸國が全力を以て禦い、中々禦き切れなんだ。日支戰役後に、現獨逸皇帝が黃禍を言ひ出したのは、此邊のことを聯想して警戒を興へようとしたのである。アチラは豫惡兇暴、只破壞を事としたかに傳へられる。併し實は左程でなく、戰爭で必要なことを爲すに止まつたらしい。羅馬に攻め込んだ時、法皇レオ一世が之を宥めて還したなど、宥めた事際よりも、宥められて穩かに還つた温情を稱するが適當であらう。ペテロとパウロとの雲が現はれて之を却けたとか、種々のことが傳はつて居る。隨分勝手な事

を觸れ廻してある。アテラは飾り物の分るもの
 のでなく、**振舞**する者は容れなく斬殺しても、
 柔順なる者に對して當當に保護を與へたと見
 れる。殊惡一方で、實い歐大陸を自由にし
 れるものでない。之に従ふ家柄が如何に強
 した所でも、統率の宜しきを得たのを察するに
 足る。美人イレンデゴと清姫し、其腕に麗麗
 歿し、棺を三重に造り、第一を金銀二を木、第
 三を鐵にし、埋葬に使つた掃帚と悉く焚し、
 其棺が何處にあるかを永遠に知れぬやうにし
 と云ふことである。

約八百年を以て、成吉思汗が現はれ出で、東
 の冒険と西のアテラを襲ね、東向を合一するの
 勢ひとなつた。成吉思汗のことも色々と傳へ、
 文明の破壊者と言はれ、其の打撃つた土地に文
 明が消滅したとなつて居る。けれども成吉思汗
 は大れほど分らぬ者でなく、戰爭の必要も都市
 を破壊したこともあらうか、文明の利益を十分
 に認識して居る。耶律楚材の智幹を見出し、大
 の我家に賜ふ所として國政を委ねたので、**哲**
チが推し測られる。楚材は一大政治家であつて、
 當時の學藝に通ずる所がない。而して楚材の方
 針は一行を樂すは一言を難くに措かずと云ふ
 に在る。又更に文明を破壊する如きは萬々な

い、而して文明の像でない證據に、元になつ
 て歸りに文物技藝を獎勵して居る。

成吉思汗が四方を征服し、子なるは、**哲**
 を兼ぎ、之を元の大皇帝とし、稱なる忽必烈
 が世祖として絶大の帝國を形づくることになつ
 た。清洲から聖徳まで將軍の這ふ大皇帝を造
 り、幾つもの女傑を設け、觀察を以てし、謀て
 も安全に旅行するを得た。世界を一にし、各地
 ついては悉く定めようとし、**儒**も宜し、**道**
 教も宜し、**佛**教も宜し、**回**教も宜し、**基督**教
 も宜し、宜いことは何でも取入れ、人が之を
 愛ひ、最も好いものを講究用あつては如何にと
 忠告した時、**世**の答へに聽て宜いといふのを
 取入れれば、何れかか宜からうとあつた、**星**
學に**算**術を得て發見し、**一**より**漢**、**算**術
 より宋漢まで、**算**術の測驗所を設けた。**器**
學も發見し、凡そ支那の學問工業は、治と昔此
 時代に發達して居る。蒙古國に君する何れ點で
 文明を唱うたかを知ることが出来ぬ。或點で破
 壞しても、他で之を償ふだけ建設する所なく
 は、ある處に有利の機を、**算**術に仕かぬ、
 科學の知識を承へること、元は實かに實利に
 繋つて居る。

如何なるほど順境に、**一**の、**自**、**一**
 にせよ、**表**に現れた。實に、**世**を以て支
 那英主中の英主とすべきである。唐太宗がど
 うあるにしても、シャルルマンがどうあるにし
 ても、之に及べて**聖**が**小**、實に對て
 劣しぬとせば、**一**に於て大に劣るとせねばな
 らぬ。古今を通じて、**忽**ほど**大**なる領
 土を得たものかない。若し一代の如く文明の利
 益を備へたならば、大なる領土を皆々に**用**
 し、中央亞細亞の國になつたらうし、**鐵**道が
 四通八達して、**地**力を**持**するに困難でなかつ
 たらう。けれども如何に良い道路を造り、**蒸**氣
 の往來に便利であつても、**支**那から**露**國まで統
 一するのには、寧ろ**人**力の及ぶ所でない。一時
 の勢ひに乘じて之を統一したものの、分裂は
 遂に不可らざる勢ひであつて、遂に八十年ばかり
 経て元が滅びた。

日本の發展

海を隔てて居る日本に、最も適切な應酬を與
 へたのは忽必烈である。支那とは異し、**支**那で
 あるが、彼より日本に兵を加へたのは、**日**が**支**
 那進後になつて居る。支那でも忽必烈の名に與
 へられ、**コ**ラウチが寧ろ**支**中では**支**に
 仕つて居る。支那の如き其の驕悍に似し、

今でも半蒙古状態たるを免れぬ。而してマルコポーロが忽必烈の朝廷に居り、之を本國に告げ知らしたのには、歐州人をして、東亞細亞に對する興味を深からしむるに最も與つて居り、日本も其れで知れ渡つた。ジバングには黄金を以て家根を尊いた宮殿があると云ふので、人は如何にかして之を見舞ひたいと思つた。コロンブスが西から廻つて東に出でようとしたのは、印度へ到着すること組であつても、得べくんば此黄金國に立寄りたいと思ひました。新世界發見は實に近世史を開いたが、其起りを尋ねれば、忽必烈が世界の人を集め、世界の知識を求めた所から來て居る。元が滅びて支那が獨立し、明に相應の人物が出たけれど、漢唐ほどに盛んにならず、宋よりも幾分か兵力が強いといふ位の所で、其れでも遂に滿洲に征服されて仕舞つた。

忽必烈の時代は盛んであつても、其後支那は進むよりも退き、幾分か歐州の人物に接し、古い店を維持するに努める形がある。忽必烈に刺戟されて國力の伸張し始めたのは、日本である。本は天れ大勢上に支那の附屬物たる観あるが、之れ戰つてから、眞に獨立の氣運が盛んになり、新たに亞細亞に日本あるを明かにするやうになつた。其の以前も日本で絶えず大陸と交通したけれど、其の以後國家として支那を見、場合によつて之と雄雄を争はうと云ふ勢ひを生じた。若し日本内地が固く統一して居つたならば、元軍が敗れると共に新局面が開かれたらう。さなくとも時宗の壽命が長ければ、何とか別に考へた所もあらう。其の早く歿し、鎌倉の威令が遠く關西に及ばず、京都で北條征伐計畫があり、北條が倒れて足利が起り、足利の威力が足らなくて、群雄割據の委となり、内亂に幾代をも送つたのは、順序に於て先づ内地を統一し、尋で國外に及ぶと云ふ所である。人は之を意識せぬけれど、勢ひは自然に動いて居る。

日本の分裂及び統一

後醍醐天皇の鎌倉征伐は、何の事情があつても、要するに國內統一の爲めである。元寇が攻め來つた時、鎌倉で時宗が斷然之を討ち拂はうとし、京都で龜山天皇の神への祈願あり、眞に舉國一致の實を擧げたが、明かに國內に二個の中心點がある。愈々統一する場合に、鎌倉を中心とするか、京都を中心するか、迷ふことになる。鎌倉の威力の衰ふるに伴ひ、京都を中心にするに努める者が増加し、曾て鎌倉に從つた者も、鎌倉征伐に出掛けることになり、北條氏は誰もなく倒れた。けれども未だ京都を中心とする勢ひが然して居らぬ。京都で國內を統一しようとするれば、威力が遠く關東に及ばず、關東武士は公卿連に従ひ、駄々を摺ねて曰ふ、自分等は生命がけて戰つたの、宮中で遊んで居る公卿の下に附くとは何事か、位など何うでも宜いとして、倅まで減らされたり取上げられたりしては、此儘にして居られぬ、何とかせねばならぬと。恰度其時に管氏が武士の味方となつて現はれ出で、武士は救ひの船の如く取附いた。武士には將軍でなければならぬとした。けれども京都の勃興するは勢ひであつても無くても、京都に集中力がある。急に力を關東に逆戻りさす譯には往かぬ。遂に二個中心の衝突となつた。南北朝の競争が半世紀も続き、此間に特殊の人物が現れて居る。主として足利氏と新田氏との権力争ひの形になつたが、眞に朝廷の爲めに忠を盡さうとするのも少くない。武を以て立つた方にも、楠木正成なり、名將長年なり、種々ある。中にも正成の出處は眞に人生の最高美を

發揮したと言へる。正成は千劍破城を守り、關東の大軍を防ぎて以來、各所に戰つて勝ち、智略に於て無盡藏の形がある。捕流の兵法と云ふは、後の作り物であるが、事に臨んで奇々妙々の策を遣らす人と見られ居る。所が若し正成が作戦計畫の巧みを盡し、南朝の下に國內を一統し得たならば、稀代の名將若くは良相として知られたであらうが、後世の人が認めやうな正成とならぬ。正成の正成たるは、涑川の討死で斷家が下された。諸葛孔明が人に勝れた智略を以て國事に當りながら、難局に處して倒れて已んだ所に、其の眞價を見出し得る如く、正成も滾々盡くなき智略を以て、勝算なきを知りつゝ、討死をした所で、永く人を感發させる所がある。幾干か時勢が相似て居る。三國中、蜀が漢の正統であつて、既に倒れた漢を回復するのは甚だ難い。難い所で、鞠躬盡力するのは、利祿を念とする者の到底企て及ぶ所でない。後醍醐天皇は蜀が漢を受けたところでない、明々白々の正統であるけれど、禪の分らぬ公卿連が多く、家筋ばかりで威張り故らし、武士に愛想を盡かされて居り、勢ひの振ふ可くもない。公卿が武士に頭を下げて、多の武士が擁護する北朝と争ひ難い。正成は事の困難な

るを百も承知し、飽迄力を盡して倒れようと思ひ、其通りにした。舞臺が狭いけれど、聖人の心を備へたのは、保元平治の亂が産み出した平重盛に次で、南北朝が産み出した正成である。重盛は順境に能く英雄たるを得たかは疑はしい。正成は順境で英雄となり、單人的英雄となり得たであらう。北畠親房は之と性質が似て居つても、其の智略がない。正成が今一層廣い舞臺に活動したならば、日覺し、人物となつたに相違ない。

正成は職分を守つて勢ひに抵抗し、勢ひの爲めに討死したのであつて、其の勢ひが一定形に纏まるまで、多くの歳月を要する。南北朝と分れるばかりでなく、四分五裂、分れ得るだけ分れ、新たな中心を得て統一しようとするのである。南北朝に分れたのは、寧ろ其の幕明きに過ぎぬ。實は北條氏が治めて居つたのは、公家流と武士流とを縫合させた儘に過ぎて来たので、何時か之を混ぜ合さねばならぬ。器械的を化學的にせねばならぬ。全國の隅から隅まで震ひ動かさねば濟まぬ。二百幾十年間種々有力なる人物が出て、何とも統一する事が出来ず、一時統一しても、直ちに亂れ、亂れるだけ亂れる外はない。山名宗全、細川勝元の如き、隨分

力を備へて居つても、只力で押合ふだけで、何程の事をなすことも出来ぬ。遂に六雄八將、相争ふ事になり、織田氏を経て、豊臣氏が初めて一統した。

豊臣氏前に出た者は、必ずしも信長又は秀吉に劣るのでなく、武田信玄なり、上杉謙信なり、毛利元就なり、力量に於て秀でて居るが、時代が早かつたり、土地が偏したりして、活動の範圍に限りがある。一層有力なる者が出たならば、早く平定し得なかつたらうかとの疑もあるけれど、斯かる人物は殆ど望み難い。普通に英雄とする所では、矢張り勢ひの熟するを待つの外なく、それ以前に出た者は、災難と諦めねばならぬ。況して中央より隔つて居つては、働いた程の效能が顯はれぬ。秀吉は好い時分に現はれ出でたが、其國內を平定したのは、總て力を外に伸ばす事になり、朝鮮半島を経て支那を討たうとした。元代に支那軍が朝鮮を経て日本に攻め來つた反對に、同一の道を取つて明代に支那に攻め入らうとするのである。王朝時代に畏れて居つた支那に對し、元寇以後に稍、度胸が据り、秀吉の頃に對等以上の位置を占める信念を固めるやうになつた。東洋方面に於て、支那以外に日本あることが世界に知れたのは、元軍

が敗れてマルコポーロが之を記載したに始まり、秀吉の遠征を以て大に明白を加へた。歐洲で東洋通を振り廻す者がタイコーサマの名を知るの必要を生じた。

歐洲の列國競争

支那は元が滅びて明となり、又清となり、廣大なる土地を領有して居つたが、元の如き勢ひは再び見ることが出来ぬ。康熙帝及び乾隆帝は、前代の如何なる英雄にも倣ふと言はれるけれど、恰も多くの編纂物を作つた如く、國家社會として前代のものを拾ひ集め、之を接ぎ合はしたに過ぎぬ。英雄が自由手腕を振ふは、元で絶頂に達し、實に世界史で絶頂に達し、其後何者か出て其影に隠れることを餘儀なくされる。成吉思汗の勢力に長く残らなだか、次から次に東方より西方に侵略し、歐洲は常に之を助ぐに苦しんだ。様々の民族が押し移り、力に應じて國を立て、或は國を立てた者の藩となつて従ふ。歐洲全體に亘つての變動で、騒ぎは一通りでない。變動の間に大小幾多の戦争があつて、中に大いに智を振ひ勇を奮ふのがある。シャルマンの祖父は捷(マルテル)の純名を取り、十字軍及び其他の戦争に勇名を轟かし、傳

奇的人物の主なるものである。列國分立して相争ふの際、國々に記憶すべき人物が居り、中には今日尚ほ生きて居るかに知られるのがある。佛國のジャンダルクの如き、今でも繪畫彫刻に色々と製作され、實に一の不思議なる女傑である。けれども斯かる時代は支那で五代の長引いたやうなもので、舞臺が鬧くて、槍舞臺を見やうな心持にならぬ。支那では列國分立せず統一したものの、前と同一の事を繰返して居るとしか見えぬ。何時でも同じ外題で演劇して居るやうで、入がなければ忠臣蔵が宜いと云ふが、忠臣蔵ばかりで往けるものでなく、況して忠臣蔵ほどの興味なくて、尙更仕方がない。歐洲は斯く統一せず、列國分立して頻りに争ふが、後から見て餘り興味あるものでない。列國相争ふとて、相争ひが多く、君主の血統で國が合一したり、分離したりし、御家騒動の大袈裟なものである。御家騒動も注意を要するが、御家騒動ばかりでは飽いて仕舞ふ。斯かる時代も、順序として細ねばならぬとし、日本の足利時代の如く、何事があつても多く興味を惹かぬ。有力者は皆力に有る限りを振つて居つたらうが、緞帳では餘り榮えたものでない。緞帳と槍舞臺と同様に働かざる芝居であつても、

緞帳は芝居だけのことがある。歐洲で芝居を作り變へ、槍舞臺で打出したものは、近世史の初期に於てであるが、忽ち烈か日本を撃つて失敗したので、東洋の局面が變り始めたやうに、西班牙のフィリップ二世が必勝艦隊を以て英國を討ち、全く失敗したので、英國が大陸に力を伸ばし、新局面を開いたと言へる。英國は大陸に近く、必勝艦隊を破る以前にも大陸を攻めたり、攻められたりし、大陸との戦役が珍らしくない。アルフレッドなり、ウキリヤム一世なり英主の中に算へられる。けれども愈々英國が力を伸ばし始めたのは、彼の艦隊を破つた勢ひに乗じてのことである。元寇が暴風で苦しんだ程でないが、彼の艦隊は暴風で苦しんだに相違なく、日本で何人も元寇に對比しようとする。所が日本で元寇に撃たれたから、頻りに船を以て支那海岸を荒し廻ることが行はれ、支那では倭寇の處分が頗る難問題になつた。倭寇は秀吉の明征伐の前提となつて居る。英國では世界に植民地を得ることに努め、西班牙の勢力の縮む反比例に其の勢力を伸ばした。大陸では西班牙の衰へるに伴ひ、佛國が勢力

教が宰相となり、内に貴族を抑制して君權を擴張し、外に列國と聯合して國國の優越權を覆へしたものは、後のビスマルクを聯想させ、政治家として英雄の現はれ出でたのである。昔から此類の事があつても、ビスマルク式の人物及び態度は先づ此邊で著しく眼に着く。リシウリユーは十七世紀佛國のビスマルク、ビスマルクは十九世紀普國のリシウリユーである。リシウリユーは死に臨んでマザラン主教を後繼者に推薦し、適當の人物を得たと言はれ、マザランは手段の辛辣に於て或は前任者を凌ぐが、貪慾で吝嗇、自分で巨額の貯蓄した丈、國家の財政を紊亂した。リシウリユーは澤山取込んでも、政略に違ひ棄て、人物は誰かに上に居る。

佛國の榮華

マザランが死んだ時、路易十四世は二十四歳、直に實權を收め、内に專制、外に覇を稱するの勢ひを呈した。路易大王の朝と云へば、王權の全盛で、榮華の絶頂と知られて居る。コルベルが巨大なる財政を整理し、ルーボアが依りて大軍を動かす、英主良相並び出でた形がある。併し是れ大部分は中世の残り物であつて、羅馬皇帝の飾り秀でたものでなく、隋煬帝の規模

を小さくしたものに過ぎぬ。是ほど英華らしくして英雄らしくないのも珍らしい。其の盛んな時は、到る處に戰勝を得、大に國威を輝かし、列國は其の機嫌を伺ふに汲々とし、現在の獨逸皇帝位のところ、無かつたけれど、晩年甚だ張はず、國內は財政に窮し、國外は敗戦續きとなつた。彼れ自ら最後まで威力を逞うし得たのは、仕合せものやうで、實に覇を後に殘した。本來左ほどの人物でなく、而して一世に傑出すると見せびらかすに長じ、俳優として世界的舞臺に活動して居る。演劇の舞臺で扮装するのてなく、實際の政治舞臺に扮装し、能く人を瞞着するのは、面白くも可笑しい。列國の君主及び貴賓を集め、大廣間で談話し舞踏する時、恰好も辭を抜いて堂々たる偉丈夫と見え、流石英雄は違つたものと思はれたが、愈々崩御となつた節、侍女が靴の踵の幾りも高くなつて居るのを發見した。常に、傍に伺候して居る者が其時まで知らなだと云ふので、如何に扮装に巧みであつたかを察し得られる。

路易十四世は、今でも何かと言へば例に引かれ、近世第一の驕り者、第一の派手者であるが、後七十年ならずして大革命が起り、君主が斷頭臺に上り、盛者必衰の顯著なる例を示して居る。

斯かる君主の附物として、文物技藝が進み、後に養ましく思はれるけれど、後に割合に忘れられて、用兵の術に傑出し、戰史上に記憶すべき者にコンデ及びチユーランがある。是れ眞に名將と言はねばならぬ。路易治世の初、至る處に戰勝を得たのは其力である。奈翁戰敗後、奈翁が以前の名將の名を擡うて仕舞つたが、其の以前は彼の二人が重きを成し、少くも佛國に於て將帥の模範とせられた。奈翁が古來の名將を批評して居る中で、此二人をも賞讃して居る。路易十四世が晩年に張はぬが爲め、其の惡政に與つたものばかりでなく、國威を發揚した者まで賞められぬやうになつたのであつて、用兵の術を言ふ場合には必ず彼の二人を挙げねばならぬ。單に用兵の術より見れば、驚くべき才能を備へたと云へる。此の二人が敵味方になつて相戰つたこともある。コンデは晩年退隱し、詩人ラシオン、モリエル等と遊んだ。

英國革命

佛國で路易十四世が六十幾年も位に居つて威權を振ひ、榮華の限りを盡し、末が何うなるかの疑問になつたが、其間に列國に種々の變革

があり、中にも對岸の英國で二回の革命が行はれて居る。最初はクロムウエルが兵を率ゐて君主チャールス一世を斷頭臺で刑したのである。

クロムウエルは毀譽褒貶區々の人物であつて、近年兎も角も一の英雄たるを許されることになつた。他に何の缺點あるにせよ、自信が甚だ強く、國家は斯くあらねばならぬ、人民は斯くあらねばならぬとし、己れ自ら神より使命を受けて居るかに思ひ、我が罪惡と決定する所、斷然罰して容赦せぬ。

路易十四世が繁華な都で派手を極めた正反對に、クロムウエルは全くの田舎者で、四十歳まで何等知らるゝ所がない。君主が政治を誤り、紛擾の起つた所で、クロムウエルが鐵腕を以て現はれ出で、反抗する者を片端から壓伏し、遂に自ら權力を握つた。王冠を斥けて受けなんだけれども、事實に於て全く君主と同じで、歿して位を子に傳へることになつた。そこで篡奪者と言はれ、反逆者と言はれ、國賊と言はれる。併し平素の行ひが、詳かになるに作ひ、權力に懸々たるものでなく、國民の安全の爲めに斯くするの外ないとし、多くの私心を挾まぬと知られ來つた。君主同然になつたに就ては面白くない所があつて、後の華盛頓のやうに

したならば、明かに美德を認められたと思はれるが、彼が權力を握つて居る間、國內で畏れ憚るのみでなく、國外でも畏れ憚り、其の怒りに觸れぬやうにした。清教徒の方が與つても、クロムウエルの堅實なる性格は、之を統率し之を代表するに適當なるを證明する。特殊の時代に特殊の人物が出たのである。併し後繼者は夫れほどの力なく、勢ひは逆戻りしてチャールス二世が位に即き、クロムウエルの死骸を發掘し、其首を斬つて議會の屋根の上に曝し、腐つて下に落ちる儘にした。民心も清教徒の嚴肅なるに飽き、其反對に浮華を喜ぶやうになり、前よりも多く墮落した。ジェームス二世の代に愈々墮落し、曩に清教徒が嚴肅を旨として革命を起したのが、全く跡方なくなり、無益な騒ぎを起したものと見られ、クロムウエルは惡人で、愚物で、惡魔であると言はれた。路易十四世は熟る革命の有害無益なるを思ひ、それ見たかと言はぬばかりで、愈々君主の權力を増大するに努め「朕は國家である」との意を貫徹しようとした。實にクロムウエルの爲した事は下らぬものとか見え、英國でも今更之を後悔して已まぬ状態であつて、佛國では愈々君主の權力を重んじ、何でも獨裁專制に關するや

うに心得、面白可笑しく世を渡るのが當世の事、倫理道德など皆野暮の骨頂とした。英國も其通りである。所が英皇は其の儘で過ぎ往かうとせず、是ではならぬと考へ始めた。若しぎ往いたならば、英國は大陸の支配を受くるを免れぬやうになつたらう。

クロムウエルの起つたのは幻でなく、英國人の代表者としてである。動あれば反動ある順序で變動の急激な爲めに間もなく反對状態になつたが、漸くにして落着いて見れば、チャールス二世及びジェームス二世の治世は餘りに不任賢で、何とも話にならず、斯くては仕方がないと云ふやうに考へ、其處でチャールス一世の孫に當り、ジェームス二世の娘と結婚した和蘭總統オーレンジ親王を、ウイリヤム三世として迎へることにになり、此人は餘り人望がなかつたに拘らず、英國の政體は此處で確定し、責任内閣といひ、政黨内閣といひ、要するに此邊より

す。世に「英國革命」といふは、クロムウエルの分よりも此分を指す。佛國では依然路易十四世が位に居り、英國で餘計な騒ぎして居るのを冷笑した。ウイリヤム二世は之に反抗し、聯合軍を以て當つただけ、彼は之を好まず、革命の起る國家を以て禍ある國稱とする。路易自ら何

を言うても、何を行つても、世間は服従して居り、實は此處に測る可らざる程が溜みつゝあるを知らなんだ。勢ひは到る可き所に到る、英國でクロムウエルの首を獄門にしても、それで必ず世が治まるものでなく、若し第二の革命が平和の間に行はれなかつたらば、幾年かを經て第二のクロムウエルの出るのを防ぐことが出来なかつたらう。路易十四世は英國で餘計な騒ぎするのを冷かに笑つたが、英國君主の位は之で安全となり、後再び革命を起さうと企てないやうになり、早く巨拂ひをして仕舞つた。英國では路易十四世が奢れるだけ奢り、十五世が放蕩爺の放蕩兒として悪い點を眞似、國政は紊れる。一方で、何とも救済の道がなく、流石不仕鱗な君主も死に臨んで一脈の後は洪水トビひ、而して十六世は斷頭臺で刑せられ、皇后も同じく刑せられ、英國の革命よりも、層悲惨な状態を呈した。クロムウエルは佛國で冷笑するやうなものでないと思はれた。

北歐の英雄

佛國のブルボン朝は勢ひに乗つて全盛を極め、後下り坂となり、七崩瓦の速く可らざる有様となつた。英國は一時内亂に苦しみなが

ら、次第に國家の基礎を固くし、海外に發展し、海上權を占むる様になり、而して露國は新たに彼得(ピートル)の下に一大帝國とならうとして居る。路易十四世は自ら蓋世の雄と心得て居つても、後から見れば英雄でなく、英雄の假裝したものであつて、内兜が飾りに見え透いて可笑しい。英雄らしいものは、蠻威から出て來つて居つて、彼得は路易よりも英雄らしい。蠻族も國を成して秩序が整ふと共に、都會風になり、蠻風が無くなり、彼得も務めて文明國に作り、文明を輸入したが、彼れ自ら蠻族の酋長たるを免れぬ。頻りにハイカラにするけれど、容貌からして、態度からして、蠻族の垢が抜けず、蛮族に蒙古人の血が混つて居り、ハイカラ振つても蠻リヲたるを免れぬ。蠻音變々であつて、必要なる點に僅く迄文明を活用する所に、近世の英雄たる面目が現れる。文明を活用せねば、中世の暗喑に目を暮した豪傑連と違ひがなく、或は中央亞細亞の土家のやうに見えるであらう。彼得に精力が餘りあり、腕力も強く、腕づくで人に勝つた、それで我を折つて新知識を吸收するに努め、到らぬ所がない。宮中の陰謀を切抜けて、國家の經營に從事し、人に國外視察を命ずるが上に、自分で出掛け、自

分で學問もした。和蘭で造船術を學んだ如き、眞に能く勉強し、天文地理から解剖外科にまで及んで居る。彼は絶倫の精力を以て新知識を活用し、東歐に大帝國を新設し、世界に力を伸ばさうと考へ、都をも莫斯科より海岸近くに遷した。現代の彼得具羅士は、初めイングリシアといひ、彼れ自ら造つたものである。土地は決して良くな置を選定したであらう。併しイングリシアも辛うじて得たので、何でも之を首都にせねばならぬとし、沼地で仕方がなくても、彼れ彼得は斯かる事で屈せず、自ら仔細に計畫し、一切を監督し、都らしい形を成さねば已まなんだ。彼は建築の設計をするばかりでなく、自ら大工になり、細工人になり、馬車も造れば、轡子も造る。力仕事でも、普通の労働者は逆も叶はぬ。而して夫れが政治の餘暇であるとするれば、驚く可き精力と謂はねばならぬ。今でも其の製作した器具が残つて居る。政治の方では此れ位のこととなく、國內を平定しつゝ、尙ほ、漸たに土地を得ようとし、絶えず軍隊を動かして居る。露國が後歐列國の畏るゝ所となり、世界の畏るゝ所となつたのは、此からである。所で彼

は精力が強く、努力を惜まず、自分で何でも爲し得るけれど、餘り器用でなく、天才よりも勉強で勝ち、忍耐を以て總てに勝たうとする。生來暴戻で、淫縱なのをも忍耐で大分抑制した所がある。其の頻りに帝國の建設を圖つて居る時偶々瑞典に軍人としての一天才が現はれ出で、彼を容めて容め抜いた。即ちカロロ二世である。此系統からは、前にも英雄は現はれた。グスタフ・アドロフの如き、人格も、才幹も、英雄の名を備ふる。若し三十九歳で戦死せねば、一層飛躍し、且つ後に好い影響を遺したらう。カロロも眞に英雄肌であつて、彼得との競争は項籍と劉邦とに較べられ、又謙信と信玄とに較べられ、性格の純粹で依氣ある所は謙信流で、更に猛烈を加へる。謙信及び信玄が全く性格を異にしつゝ、各々英雄たるを失はぬが如く、カロロと彼得と相對して居るのが面白い。片意地が強く、思ひ立つた事は、誰れの言ふことにも耳を假さず。戦争の爲めに戦争する形あつて、思慮を缺く嫌ひあるが、何人も及ばぬ長所がある。軍事のみでなく、商工業の事も能く判つた。三十七歳で彈丸に中つて歿し、『北方の狂人』或は『光輝ある狂人』と言はれるが、若し生存して圓熟したならば、何うなつ

て居らうか。軍人の常として勝どいことを敢てする場合がある。死地に陥つて死なぬことがある。カロロは死地で死んだが、其の勇敢、其の智略、眞に天才として瑞典の爲めに氣を吐くに足る。カロロと彼得との競争は、路易十四世の晩年のことで、京都に於て謙信と信玄との競争を聞くの思ひがあつたらう。彼の二人は殆ど事毎に正反對である。

歐洲七年戰役

次に普魯西に弗列特力(フリードリヒ)大王が現はれ出づる順序となる。既に近世史が開けても、中世と混合すること多く、殊に英雄は餘り時代に關係ないが、少しづつ變遷し來つたのが、漸く近世史的と認められるのであつて、弗列特力に及んで其の色氣が頗る濃厚を加へる。

七年戰役は著大なる事變であつて、後余翁戰役で形勢を一變したに拘らず、印象が深く刻まれて今に及んで居る。佛國は一度大に膨脹して、直ぐと元の狀態に收縮し、根柢ある發達を遂げ來つたのは、獨逸と英國とである。將來の獨逸帝國を形づくるべき普魯西は、弗列特力の手で建設したと云ふべきであつて、王國及び帝

國の興隆と共に、其の活動の跡が知れ渡つた。一種特別の人物で、性格が随分複雑である。若い時は軍隊式に育てられるを嫌ひ、逃げ出して父義に凝り固まり、政治に役立たずと見え、父に責め訶まれたが、二十九歳で位に即いで以來、政治に熱中し、名將として大陸に傑出した。露國、奧國、佛國等を敵に引受け、英國と提携して戦ひ、勝つたり、負けたり、度々の變化があつた。けれども思ひ掛けもなく敵間に變が起り、窮した勢ひが俄かに通じ、通じた機會に乗つて露國に進み、大勝利を得た。現代の大戰艦とは、塊が味方になり英が敵になつた逆ひがあるが、或點で似て居る。大敵であつた露國の女皇が崩御し、其の後繼者が味方となつたのは、現代の獨逸が露國革命で一方の弱が助かつたと同じである。七年間勝つたり負けたりして、最後に何程かの利益を得て終結し、之が獨逸帝國の基礎となつた。英國は普魯西を助くるに、兵を以てするよりも金を以てし、自らは海外に於て佛國と争ひ、其の植民地の大部分を奪ひ、世界政策の基礎を築いた。今は此二國が兩横綱となつて、大陸に勝負を争つて居る。

七年戰役に變亂が複雑なるだけ、有爲の人物が現はれ出で、昔には弗列特力が君臨し、英にはピットが首相となつて政界を指導し、喚には女主人公としてマリヤテレサが控へて居る。

政治界は陰謀が多く、殊に外交には變に富み、詐欺に對するに詐欺を以てするを免れぬ、愈々固く約束し、互に笑つて喜ぶかと思へば、其の裏面に之を破壊する陰謀が熟して居る。油斷も欺もあつたものでないとは外交界の常で、

其の機微に達する者でなくては、飛躍するに堪へぬ。近世は中世の陰謀ばかりなものと違ふと見えるが、外部こそ文明を以て裝飾すれ、一皮剥けば中世の陰謀丸出しである。陰謀を專一にすれば、其當時に儲き得ても、世界に逆進に與ることなく、流賊が宮殿に住つて居るとしか感ぜられぬ。陰謀に於て負けて居らず、詐欺をしても敵の上に出でながら、將來の方針を指して向上する所あるので、政治家の價値を認めることが出来る。弗列特力は目的の爲めに手段を擇ばず、辛辣なこと、惡辣なことの限りを

行ふが、それで何程か文明を心得て居る。戦亂に忙殺されながら、民力の休養を慮り、禍を被つた地方の租税を二年も免除し、其れだけ極度に政府の費用を削減めた。而も借金

せぬのが妙である。尙ほ法律を正しくし、宗教言論を自由にした。勢ひ窮して自殺しようとする場合、徐ろに詩を作るが如き、面白い餘裕があり、政務の餘暇に著作も少くなく、七年戰役後史も書いて居る。昔傳文で書いて、編纂人が苦笑するが、何にしても近世に現はれ出でた英雄である。

ピットは國柄として己れ軍隊で事を成し得べきでなく、君主と黨派關係とにて色々と射撃せられるが、それでも國策を決定し、之を遂行し、英國の世界に於ける利權を擴張したのは、勢ひの自然とは云へ、權局に相應しき手腕と謂はねばならぬ。自ら兵を用ぬけれど、能く勢ひの宜しきを制する所に英雄の面目を見る。併し此等は種々の事情が附き纏ひ、何程まで當人の力であり、何程まで勢ひの致す所であるかが判明せず、痛快を覺えることが少い。其邊になればクライヴは天性の軍人で古代の英雄が再現した調子がある。

英國の印度領有

英國は海外に植民地を得るに努めたが、政府の施設は餘り手際好くなく、佛蘭に較べて兎角遅れ走せにならうとし、實際の成績は政府の

力より居留民の方で軍が、特に印度を轉徙へたるが如き、クライヴが驍手にした所として宜い。彼は東印度商會の一書記として印度に渡つたものであつて、何の能力あるかが知られず、下りには活け男と輕蔑された。一旦印度人が佛蘭人と共に英人を壓迫しようとし、衝突が起ると共に彼れ英軍人としての天才を閃かし、兵を募集し、之を訓練し、旗を以て敵の衆に當り、連戰連勝した。印度の兵は言ふに足らず、緞帳で纏き集えがないが、緞帳でも十分に能力を發揮し、此れならば掃蕩軍に出して何れだけ働んであらうかと、人をして想像を逞うせしめる所がある。

印度方面は前から特別の人物が出没して居る。成吉思汗の帝國が分裂し、後其の後裔なる精木兒(チムルレンク)が活躍し、成吉思汗同様な事を成さうとし、殆ど之に匹敵するの勢ひになつて病んで歿し、其の曾孫なるバベルが印度を征服し、波斯人の所屬モガルス帝國を建設し、子孫を承て二數百年に續き、デリーに、アグラに、幾多の遺蹟を遺り、當年の全盛を想はしめる。支那より離れ、歐洲より離れ、別世界を成して居つて、他で深く注意を拂はなんだが、人口では多く支那若くは歐洲に及ばず、

其興亡は世界の重大事たるを失はぬ。現に建築物の遺つて居るのに婦人の勢力を證明するものあるは奇である。「女が種族として奴隷扱ひせられる處に個人して權威を振ひ、男女平均する」とは、最も著しく印度に於て見る。皇后

盾ヌール・ジェハンは「世界の光」の名あつたが、其姓なるムンタザ・ゼマニは「時代の最高」を意味し、其遺言で建てられたのが今日世界の

一美觀なるタジマ・ハルである。伊太利人の手に成り、構造に幾分の非難あつても、建築物で此皇后の廟ほど莊嚴と美麗との感に打たれしめるものがない。夫なるシヤ・ジェハン帝は、

河を隔てて自分の廟を造り、橋を以て繋ぐ積りであつたのに、國が亂れて皇后の側、葬られて居る。彼の女が美人としての評判は、支那で楊貴妃といふ所で、略と同齡で歿したが、楊よりも賢明、楊よりも幸福、楊よりも一般の氣受

けが良い。印度の繁華は歐洲人が常に想像に描き、寶の山と考へたが、クライヴは空拳を振つて寶の山を奪つて仕舞つた。帝國が既に衰微して居つたけれど、居留民を引纏めて之を征服した所、餘り類のない手並と謂はねばならぬ。英國は政府の施設が運鈍で、間々大に失敗する代り、政府の力を借らずに活躍する者が出る

のは結構である。斯くして印度を領有し、他にも大なる植民地を造るを得た。

東亞細亞の動搖

七年戰役で獨逸及び英國の基礎が成つたが、七年戰役の名に拘泥するでなけれど、東洋に於て約百五十年前、朝鮮半島に日本と支那と相

衝突し、七年戰役を實現して居る。歐洲では幾多の戰亂が續き、漸く纏まつて七年戰役と云ふ大戰亂になつたが、東洋では國內に亂亂が絶えずとも、國と國と斯く迄戰はず、順序が違つて居る。併し豊臣秀吉の朝鮮に出兵したのは、東洋に新たなる勢ひを造り、歐洲の七年戰役と並べ言へぬではない、東洋の新形勢は實に茲に兆して居る。古代日本が朝鮮の一部を領有し、

屢々其處で戰つたけれど、支那と戰ふには餘りに隔つて居り、唐天竺と云へば、月の國と擇ぶ所がない程である。忽ち烈烈が軍艦を以て襲ひ

來り、全く失敗してから、日本で支那を相手にすべきことを考へ、西國の船持が彼の海岸を荒し廻り、只内亂續きで外に出兵する暇がなかつたのが、秀吉の代に一統して、愈々支那と争はうと決心した。王朝から門閥續きで、相當の氏族でなければ、權力を得ることは出來ず、北條

氏が三上皇を島流しする力ありながら、名ばかりでも、將軍を蒙りて居り、足利氏が之に代つて實權を握つたのも名門としてである。群雄割據皆氏族の競争に過ぎぬ。所が次第に氏族が破滅し、遂に氏素性の分らぬ藤吉郎が關白となつたのは、明かに社會狀態の一變化を示す。單に主權者に反抗して實權を握つた所から云へば、義時や、尊氏やクロムウェルに似て居るが、素町人が實權を握つた所では、秀吉とクロムウェルの相對立する所がある。而して其の勢ひは秀吉に止まらず、長く後に及んで居る。新たに封建制度が整ひ門閥で固まつても、其門閥は多く百姓上りか何かで、御用學者に系圖を造らしたのであり、新大名として無事太平で續くのみで、一度事が起れば、門閥で間に合はず、足輕連が天下の事を行ふやうな勢ひになつて居る。秀吉の頃に幾多の豪傑が輩出し、秀吉を初め、家康と云ひ、利家と云ひ、孝高と云ひ、氏郷と云ひ、一本立で何處へ出しても相當の力を振ふに堪へ、國の狭い割に人物が有り過ぎると見える。そこで大陸に押渡つて思ふ存分に力を伸ばさうと云ふことになつたが、日本で英雄時代と云ふほどに人物が多く、それが七

年間只徒らに戰つて何の結果がなかつたのは、

不思議でないかとの疑ひがある。

秀吉が大陸で成功しなかつたのは種々の事情がある。土地の不便もある、即ち支と戦ふに運送の不便ばかりでも容易でない。幾百年も戦亂が続いて、漸く太平になつたので、一般に戦争に倦み果てて居る所もある。且つ愈々朝鮮に押渡つて、何がな分捕物と見れば、我が内地より貧弱であつて、糧食も敵地で得ることが難かしく、折角支那へ押渡つても、結構なこととはなからうと云ふが武人の頭に浮び、如何にして北京迄進まうかと云ふよりは、如何にして早く切上げようかと云ふのが先になる。而して秀吉自ら年老い、若い時分の元氣がなく、自分で海を渡らうと考へたり、又之を止めたり、頻りに惑ふやうになつた。若し土地の便利が宜かつたならば、大陸に大變動を起したであらう。明政府では出来るだけ日本を防かうとし、兵を半島に送つたが、是れ亦容易の事ではなく、随分其の爲めに人民に負擔を迫り、世間を騒がした。そこで滿洲から奴兒哈赤が起るやうになつた。

日本と滿洲

十六世紀の末より十七世紀の中頃まで、東亞

細亞の大動搖する氣運となり、先づ火蓋を切つたのが秀吉である。日本は群衆割據したのが次第に纏つて一大勢力となり、支那は明朝が二百數十年を経て衰弱し、動力が日本より支那に流れ込まうとした。明は強くなつても、流石に宋より強く、國事に與る者に元氣がある。

明の儒者が宋に如く性命を講ずるを以て満足せず、劉基の如き、王守仁の如き、自ら進んで難局に當つたほどで、一般に比較的氣概がある。日本が朝鮮に攻入つたと聞き、思切つて之を防がうとし、元を除いて例のない位に出兵し、又之を維持した。其の結果、財政が逼迫し、政府内に内訌が起り、諸方に亂を起すものが出で、其處へ滿洲から奴兒哈赤が兵を以て攻込まうとする。奴兒哈赤は成吉思汗のやうに獨立して力を得たのでなく、初め明朝に屈服し、世の紛亂に乗じて反旗を翻したのである。多少兵に長じて居つても、成吉思汗とは較べ物にならぬ。其の類りに勝を得たのは明の内憂外患に因る。大なる領土を得た所から言へば、英雄とするに足るけれど、愈々一統したのは其死んでから三十幾年後の事、清と號してから二十年も纏居る。

秀吉が何の得る所がなかつたのは、彼數が少

かつたが故で、大陸で争ふには七年位で事の決すべきものでない。支那の内地が大に亂れて居る時、滿洲が四十年を費して漸く屈服し得たのである。實際の戦争にかけて、殊に傑出した所を示しはせぬ。明も宋と違ひ、矢鏢に逃げ隠れせず、務めて踏止まり、都で滅亡することになつた。而して相應の將が居る。袁崇煥が參將魏大猷と共に大砲を以て遼遠を守り、奴兒哈赤が撃つことか出来ずに憤つて死んだと傳へ、或は負傷して死んだと言はれる。明が滅びた爲めに袁の名が埋没したが、當時の主なる名將として宜い。袁世凱が此の袁崇煥を以て先驅としたのは、眞に袁系統に感ずるのか、或は同姓が清に反抗して功があつたので、革命が起つてから其末孫と名乗り出でたのか、何にしても袁崇煥は滿洲に對して漢民族の意氣を發揮したものである。支那の軍人として此名を忘れてはならぬ。其反對に明朝に亂を唱へ、殆ど權力を得るまでに至つて、滿洲の爲めに屈服した李自成等に、幾分の滑稽を感ぜず居られた。左程

ぬ。滿洲の爲めに道案内をした形がら。左程諷劣なる人物でなかつたかも知れぬが、結果に於て如何にも諷劣である。若し日本で秀吉の後繼者が其の志を繼いで大陸へ兵を用いたなら

十六世紀の末より十七世紀の中頃まで、東亞

ば、滿洲と孰れが勝を得たらうか。朝鮮で戦つた頃は、事に馴れぬので色々と失敗したが、十年二十年を經れば、戰爭に於て暗かに滿洲に打勝つる力をたでないか。只何分にと航海術が十分でなく、陸續の滿洲に較べて不便が多く、そこで最後の勝利を疑問にして置く外ない。明の遣臣は、滿洲の勝利を以て、官軍と李自成等の争ひに乘じ漁夫の利を得たものとしたが、之に先んじて秀吉が明に打撃を與へ、動搖を惹起したことを忘れて居る。明が清となつたのは、舊來の例と違ひ、日本が新たに東亞細亞の勢ひを動かすことに由來して居る。鄭成功が臺灣に據つて清朝に抵抗したのも偶然ではない。

前には支那の勢ひを變ずるは、北方の蠻族であり、即ち匈奴であり、蒙古であつたが、後に海を隔てた日本が與つて居る。徳川家康は我家の安全と國家の太平とを旨とし、事勿れ主義を採り、三代の家光に多少大陸經營を考へ、壽命が長ければ何事か企てたとも思はれるが、幾代も續いて愈々太平の心となり、其上に康熙乾隆の評判が盛んに傳はり、逆も齒が立ちさうに見えず、其儘太平に酔ひ、約二百年間、東亞細亞が夢中に經過したと云へる。併し東亞

細亞は最早陸上の關係ばかりでなく、海上の關係の忽せにすべからざることとなり、時々外國の船が夢を醒まさうとする。醒めにかゝつて直ぐと眠つてしまふ。

米國獨立

歐洲では此の二百年間、絶えず變亂續きて、誠に七轉八回の苦しみ、其間に能く勝を占めたものが覇を世界に爭はうとする。七年戰役は歐大陸で弗列特力を中心にして、列國が取つたり取られたりしたが、英は弗列特力を排けつゝ、海外に領土を得、到る處に國旗を翻し、國旗の下に商船を流泊させる。大陸で盲探しに騷ぎ廻つて居る間に、英は新世界に立派な領地を造つて居る。アングロサクソンに連鈍のやうで賣い。所が新世界の事は歐大陸の豫想以上であるばかりでなく、英の豫想にも違つた事がある。立派な領地を得、一國の形を成した時は、最早英國の命を聽かうとせず、相當の權利を得たいと主張し、主張が容れられねば獨立する外ないと調子である。本國で多寡を拵り、力を以て壓伏しようとしたのが間違ひで、歐洲七年役が終つて、十三年目に、北米合衆國獨立と云ふことになつた。英は植民

地を見送つても、大西洋を越えての颶風で、兎角思ふに任せぬ事が多い。印度で手腕を顯はしたクライヴを米に廻さうとの議が起り、若し其議が成立つたならば、米に取つて頗る危険である。クライヴの天才を以て兵を指揮したならば、植民地の兵は到る處に敗れたであらう。佛國が兵を遣つても、援兵諸共に敗れたらう。

將來獨立するにしても、一時は植民地の敗北に終つたと考へられる。併し植民地の幸運か、開戦に先んじてクライヴが精神に異狀を呈し、自殺して果ててしまひ、後に適當の人物がない。海軍に良將ハウが居られど、陸軍に深入りする調に往かぬ。陸上の將帥は凡將で、後に降参する。

新世界が開けて新英帝が出づる順序で、墨西哥を征服した。ルテス、秘魯を征服したピザロは、冒險家の筆頭に位するが、歐洲の英雄と並び稱せられるのは米國が獨立してからである。

華盛頓は何の才能あるか、將略に長ずるでなく、政治に長ずるでないとは、時として問題になるのであつて、或は一切を徳に歸し、華盛頓の徳即ち天才であると確定する。華盛頓は特別に何と云ふ才能を顯はさぬが、一生を通じて考へれば實に立派な生活で非の打ち所が極め

て少い。戦争も屢々退軍するけれど、其の退軍は最後の勝利を得る所以である。クライヴならば、小軍でも之を提げて敵の大軍と戦ひ、能く勝つやうなことがあつたらう、僅かの期間に戦亂を平定し得たらう、併し或は後に内輪割れがして、纏りが付かぬやうなことがないとはせぬ。華盛頓は七年掛つたにしても、それで纏りが付き、日鼻が明くやうになつた。而して最初の大統領となり、二回職に居り、三度選ばれた時に辭退して、ヴァーノン山に還つて耕し、後佛國と開戦の虞れありて、總司令官に推された。喉頭加答兒に罹り易かつたが、或る雪ふりの日に、數時間馬上に在りて劇しく喉を痛め、三日目に自ら死するを明言し、埋葬の事を遺言して絶息した。凡ての態度が實に圓滿無碍、聖人的英雄を聯想させる。本來怒り易い性分であつて努めて之を抑へたのは、彼れ自らも言うた所、後眞に温厚玉子如くなり、只聊か冷たく見える疑ひがある。新世界で舊世界に誇るに足るの人物である。

英國では折々海外に領土を得たのに、其最も主なる植民地が獨立したとあつては、大打撃を感ぜずに居ぬ。新たに亞洲を開いて、何程か之を償ひ得たと慰める位である。佛國は

英國との海上に於ける競争で、到る處に迫立てられ、散々な目に遭つたが、米國獨立を助成し、英國に鼻を明かせ、是れ見たかとの状態で復讐をした。併し其處は佛國政府に取つて頗る危険なる次第で、米國を獨立させて英に鼻を明かさせたは宜いが、他人の家の火事を消しに出掛け、自分の家に火が付いて来て、防ぎ切れなくなつた。

佛國苦命

佛國は路易十四世以來、十五世を経て、十六世に至り、貴族及び僧侶の跋扈最も甚だしく、國內土地三分の二を領有し、何とも始末に出来ぬ。政府の財政を維持するだけでも困難を極め、造幣廠に窮し、愈々民衆を壓迫する。而して新世界で理想中の國家が出来上つたと知れ渡つては、心ある者は舊國家と新國家と餘りに違ふのに驚き、我々國家を如何にすべきかと云ふに思ひ及ぶ。何とかせねばならぬとして何ともすることが出来ず、先づ破壊せよ、破壊せねばならぬ。一聞け、一聞け、一聞けよと飛び出したので、火の手が一面に上り、到底消し止めの得なくなつた。政府財政の危機が近づくと共に有能の財政家が出て、チュルゴーなり、ネツケルなり、實

に一廉の人物であるけれど、詰り事務に卓越した方で、亂世に活躍するに達して居らぬ。革命の勃發し、突如として英軍府の男の現はれ出でたのはミラボーの名に驚てした。彼れミラボーは侯爵家の放蕩息子で、身を葬り崩して獄に何度も入り、只向う見すだけの事、風上に置けぬ人物と思はれたが、議會の召集された時貴族から「彼れをよと望み、貧乏一故を以て排斥され、一覺えて居れ、貴族を打ち倒して見せる」とて、第三輪から出て、大に活躍した。實に四十歳になつて絶大の手腕を逞し、二年で驚くべき活動を演じ、過勞と放蕩の結果で死んだが、或は其の二年間に成し遂げた所を以て、常人の一生掛つても尙ほ遠く及ばぬ所とする。其の活動振りは眞に猛烈異常、難く人海が何程の働きを成し得るかを示す好例となる。其の巨大なる體軀を以て群衆の頭を撃つれば、群衆はそれだけで動かされ、己に動かされたやうになる。朝廷と民衆の間に入り、之を纏めようとして思ふやうに往かず、或は殺されたとして非難されたが、生きたるへては如何とか革命を爲め、政府を改造しつゝ、君主を無事にし得たらうと思せられる。何々の人物が現はれ出でなばら、英雄らしいものが出でなかつ

たのに、ミラボーに至つて、少くも亂世の奸雄を見た。奸雄として大奸雄の資格がある。其の死んでから小英雄が群がり出で、互に殺したり殺されたり、ロベスピエール、ダントン、マラーが主なる立物となる。

異様の時代に異様の人物が出るもので、ロベスピエールの如き英雄とこそ呼び難たけれ、一時民心を得、権力を振つたのは、素晴らしい、勢ひである。如何にして民心を得たか、風采が悪しく、調子も善くないが、ミラボーは夙に之を認めて口うた、彼は遣らう、彼は自分の言ふ事を悉く信じて居る」と。ミラボーの死後、大に信用を博し、清廉を以て稱せられ、又清廉を以て一貫した。其の権力を得た時は、恐怖時代の絶頂であり、毎日多くの人を斷頭臺で殺すことになり、如何にも殘刻の人物と思はれるが、本来はさうでなく、寧ろ氣のやさしい所がある。自分では死刑を好まず、人の續々殺されるを聞いて嘆息するけれど、其名義に於て片端から人を殺すことになり、互に手を取つて倒いた者も殺されて居る。ダントンが殺された時、ロベスピエールも亦此の通りと言ひ、後幾何もなく其の通りになつた。民心が沸騰しては、癡癡的に當面の必要で事を決し、其の當座に必

要でも、直ぐと勢ひが盡り、何の必要あつたかが判らず、只殘刻な事をした丈が記憶される。當人は殘刻なことを好まなくても、勢ひに驅られて殘刻なことを敢てし、次から次と殘刻なことをせねばならなくなり、顧みて呆れる様なことがある。ロベスピエールは歎じて曰ふ、「人殺しは何でも吾が責になる、吾は生きて居る甲斐がない」と。彼に従つて懐刀の役を勤め、實際當時の中心人物なるサン・ジュストは、死んだ時二十八歳、女にして見まほしき顔であつて、大獄を起し、多くの人を殺すを何とも思はぬ。内政外交共に強硬なる策を立て、少しも怯む所がない。潔白で、嚴肅で、固く自ら信じ、都に血を流したのも、自ら信じた通りにしたに過ぎぬ。ロベスピエールと共に死刑に處せられる時、一言も發せず、平然として死んだ。殘刻でも一概に其人を咎めることが出来ぬ。彼の如き時代には、大抵の人が局に當れば、人を殺すの必要に迫られ、今日人を殺すかと思へば、明日覆へされて殺されて仕舞ふ。ロベスピエールも、ダントンも、餘り悪い人物でない。只マラーが性來殘刻で、人物が下劣と思はれるが、一女子シャロット・コルデーの爲めに短刀で殺された。コルデーは羅馬のブルツスに倣る

と評判され、其の斷頭臺に上つて花鬘の散らうとした時、如何にも麗しいので、之を戀慕うて自殺し、自分免許の心中を遂げた者がある。誰が局に當つても必ず反對が起り、之を抑へようとせば、續々斷頭臺に引上げねばならず、司法處分で事を決して中々間に合はぬ。元斷頭臺は、一々首を刎ねては手取るので、早く首の斬頭臺に上げずに始末を付ける方が簡便である。そこで一青年ボナバルトが手腕を顯はす事になる。

佛國中心の戰亂

佛國革命で君主が斷頭臺で殺され、皇后も殺され、皇族貴族皆國外に逃げ出すことになり、列國では其火が燃え移るまいかと心配し、聯合して消防するに努めた。實に政治狀態が似たり寄つたりで、何時民衆が騒ぎ立てぬと限らず、何とか國政を改めねばならぬにしても、差當り其の方法を見出さず、驟取つては我家に火が付きさうなので、兎も角も火元の佛國を消止め、殺された君の系統を位に直さうと云ふことになり、諸方から兵を以て追つた。所が其處は君主をも斬り殺し、血に濡れた佛國の人

民であつて、列國が君主を戴いて居るのが間違つて居るのに、理由もなく我國に兵を差向けるとは不埒な仕方である、其儀ならば目に物見せて呉れんずとて、之を遣へ撃ち、其必要に應じ、夫れ相當の人物が出た。カルノーや、パールスや、其他或は兵を練り或は戰場に戦ひ、必死の勢ひなので、列國は屢次時易する。但何分にも國內が纏まらず、権力争奪が已まぬ。シエヌスが有力者を中心として國內を纏め、列國に當らうとし、之を特色して奈翁ボナバルトを得た。奈翁の埃及より歸るを待受け、策を獻じクーデターを執行し、忽ち奈翁の天下となり、餘りに権力集中し、シエヌス自ら面喰ひの體である。併し既に國內が纏まつては驚天動地の活動が待たれる。革命の勃發して以來、國內に國民の力が滿ち切り、内で衝突するか、外へ突出するか、孰れかの外なく、若し外から兵を以て臨まねば、まだ内地で軍ひ、一層血で血を洗つたらうが、外から兵を以て迫つたので、汽鑪の安全罫が聞かれた。一齊に突出する勢ひは、何物も遮ることが出来ぬ。奈翁は其の勢ひに乗じたのであつて、其の勢ひがなければ奈翁もない。併し誰でも其の勢ひに乗つて奈翁の如きことを爲し得べきでな

く、これを扱ふには夫れ相應の手際が要る。下手に扱つては自ら怪我し、器械を壊して仕舞ふ。種々の人の盡力で兵制が整ひ、國民の覺悟も定つた所で、奈翁が運用の術に當ることになつたが、從來の慣例に捉はれて居る列國では、新佛國の勢ひが吞込めず、而して奈翁は我を妨げるアルプス山なしとの意氣込で、高山の雪を過ぎ、雪崩の如く伊半島に攻め入り、引續いて戦ひ、戦ひ毎に勝ち、到る處勝つと云ふので、佛國民は大喜び、我佛國の下に何の國が能く抵抗するか、我に奈翁が居る、抵抗する者は片端から毀散らして遣るとて、奈翁を皇帝に擢戴した。國民の意を以て帝位に登つたので、謂はゞ民選皇帝である。前に君主として續いたブルボン家は、他國に逃げて之を傍觀するに過ぎぬ。列國の眼には、眞に不可思議なる現象に見え、何が何だか薩張り分らぬ。前に革命の亂が擡がつては大變と云ふので、佛國を抑へ付けようとしたが、逆に佛國より兵を以て各國に攻入らうとし、何時兵力で蹂躪されるかも知れず、何とかして奈翁を叩き落さねばならぬとて、頻りに出兵するけれど容易に勝つことが出来ぬ。折角聯合して大軍を編成しても、一度奈翁が馳せ向へば散々に敗れる。

英國の對抗

流石英國は海を隔てて居つて、奈翁の兵に足踏みさせず、幾代も練りに練つた海軍は、佛國の一夜造りの海軍で何うする譯にも往かぬ。不可能は愚人の語であると云ふ奈翁は、尙諦めず、英國とて何程の事がある、海軍は熟練して居つても、上陸しなへすれば、一溜りもなく蹴散らし得られる、何とでもして兵を上陸させようとなふので艦隊を米國へ送過すと言觸りして出帆させた。途中から急に回航して英國に上陸しようとなふのである。英國ではネルソンが油斷なく監視して居り、敵艦が米國へ向つた、之を撃つとて、遂にトラファルガーで追ひ詰めた。一時はネルソンも弱されたのである。若し佛國艦隊で兵を英國に上陸させ得たならば、艦隊は英の爲めに破壊されても、陸兵は英を危難に陥れたらう。大體の戰略は好いが、海軍となつては奈翁の意の如く動かぬ。トラファルガーで敗北したと共に英國征伐を斷念するの餘儀ないことになつた。當時の軍艦は後に較べて簡單であつて、ネルソンは何程敵に接近しても、船が沈まぬと信じ、機會を見て、進二無二敵を衝くのである。艦の操縦は英國が遙かに優

り、將も幸も海上で戦へば必ず勝つと定めて居る。而してネルソンは國家の安危の一に海上で決するを認め、何とかして敵の軍艦を悉く滅らうとして眼を離さぬ。

ネルソンが居らねば英國が助からなんだと云へぬ、何人か代りが出たであらう。併しネルソンの人物が其の大任に堪へただけは確かであつて、英國も深く之を感謝し、別扱ひにして居る。其情婦ハミルトン夫人との關係は、英國普通の道徳で大に擯斥する所であること、後のデルク、バーネル等で察し得られるに、ネルソンに對して少しも擯斥する跡がなく、却て情婦との手紙を公にして居るのは、餘程其戰功を難有がつての事である。實にネルソンの性格及び才幹は一情婦の如きで、累を受けず、却て人に一興を覚えさせたりする。情婦は大使夫人として人妻とはいへ、高等賣笑婦の如き女で、ネルソンの愛國一方で單純なのに附込んだのである。夫なる大使も變り物で、之を構はずに掛いた。所でネルソンはトラファルガーで戦死し、英國を佛國の戰禍から救ぎ得たが、大陸では奈翁が到る處に勝を得、英國が聯合軍を助けて何程の效能がない。英が海戦で大勝利を得て大悦びしてから一箇月半後に、聯合軍が

アウステルリッツで手酷く敗北し、さしも英國の名宰相幼ビットも落膽し、二箇月を経て歿した。

ビットは父の聲望で出世の便利を得たにしても、二十六歳で首相となり、常に舞局に當り、國政を發揚した所、多々類のない人物である。凡そ大事業は全力を集中して成るが、ビットの如く全力を政治に注いだ者はない。在學中から首相となつて國政を料理しようと思へ、する事なす事只其爲めであつて、政治以外に少しも力を分たず、結婚もせず、自ら國家を裏とすると云うて居る。元其積りでなく、婚機を失つたとも云はれるが、若し失つたならば其れで愈々政治に専らになり得たらう。金錢のことも全く考へず、年に十萬圓以上の收入があつても、負債が山の如く積み、人が飲食して往く儘である。死後に議會で四十萬圓を贈つて負債却償に充て、それでも足らなんだとの事、當時の四十萬圓は今の價に直せば隨分大金で、ビットが今少しく金錢に注意したならばとの説があるが、身を國家に委ね、他に何の係累なく、子孫の爲めに美田を買ふ買はぬ所の話でない。子孫があつて負債を残し、弱きへ大儲けしようとして儲けそこなひ、分不相應の負債

を残すは不心得千萬であるが、一身一國家に獻じては、之れに金を用達てたものは、國家に用達てたと考ふべきである。彼は政治の爲め、英帝國の爲め、又對奈翁聯合國の爲めに生まれ出でたと謂はねばならぬ。何人も斯くあれかしと望むべきでなく、英國でも斯く金錢に構はぬのが尠いが、一身を政治に委ね、それだけの効果あつた所、英に於て誇りとするに足る。ネルソンと同じ頃に歿し、一は政治に、一は軍事に輝いて居る。英國で此の二輩が歿した時、大陸が奈翁全盛の勢ひとなつても、英國自ら戰亂の禍から免れた。二雄は本望を遂げ得たこととなる。

蓋世の雄

若し智力を發揮した分量で英雄を評價せば、奈翁は驚く可き人物である。他に此れほどの能力を具へた者があつたかも知れず、又實に具へたと推察し得るのがあるけれど、斯く明白に分つて居るのがない。奈翁のことは隨分詳しく分り、毀譽褒貶區々ながら、彼れ一人に關する書物が約二萬種出て居るので推し測られる。隨分細かい事まで知れて居る。戰略戰術は言ふ迄もなく、内政及び外交に相應の知見を顯

はして居り、法典編纂の場合、第一流の法律家が列しつゝ、皇帝の時々意見を發するのが要點を得るに感服した。世間有觸れのお世辭で賞め立てるのでなく、眞に法律の精神を盡つた所がある。奈翁は軍人として大天才を現はした、軍人とならねば、他に何等かの天才を現はしたに相違ない。數學者としても、有数の大家となつたらう。實に智力に富むに於て人間の絶頂に上つて居る。而して只智力一方でなく、膽力も之に敵らず、人情も相應にある。殘忍非道のやうに云はれたが、さうではなく、特別に德義を稱することが出来ねば、少くも人並とすべきである。克くも一個の頭腦に絶大の能力を蓄へ得たものと不思議に思はれる位である。けれども如何に智力の勝れたりとして、限りがある。大なる戰亂で、何人も判斷し兼ねることがあつたにしても、自分の力と外界の勢ひとの均衡を見誤るを免れぬ。世に不可能の事なしとは其頃の法行語と見え、ミラボーも之を言ひ、ピットも之を言ひ、獨り奈翁のみでないけれど、奈翁が連戰連勝し、他國の君主を自由に廢立し得てから、何でも出来やうな氣になり、多少の打撃を被つても、其の愛心が挫けず、自分が一度力を振へばとの自信、悪くば

へば、自物が強過ぎる。奈翁が大抵に勝利を得た所で緊縮の方針に出たならば、自身及び佛帝國の位置を安全にし得たらうが、其處が難かしい所で、苟くも反抗する者があれば、力を以て叩き付けねば氣が済まず、廣い大陸の事、一方を抑へれば他の一方が揚り、悉く鎮壓するのは容易の事でない。而して儘にならぬは衰徳質であつて、早老の遺傳があるといひ、さう長く絶大の力を振つて居る譯に往かぬ。衰弱しても、當人には分らず、依然前の奈翁であると思ひ、吾を妨げる者あれば、吾が馬蹄で蹂躪し得ると信じて居る。遂に露國が吾が言ふことを聽かぬとて、四十萬の兵を以て征伐し、戰へば勝ち、攻むれば取り、遠く莫斯科まで進み、其處で冬籠りしようとして敵に火をかけられ、留まるに留まらず、一軍千里の雪の野を逃げて廻り、軍師の残る者は三萬しかなく、是で運命が全く傾いた。力を恃んで深入りし過ぎたのである。今ならば四十萬は大軍といへず、且つ半國兵は割合に少いけれど、其の當時力を竭した形があり、其の大軍が空しく雪中に埋没したことになる。併し其の遠征を以て強無謀の舉とすることは出来ぬ。偶然にも例年になく早く大雪が積つたので

あつて、例年通りならば、雪が降つたとて左程困難でない。初めより露國へ遠征しなかつたのが安全であつても、例年通りならば、自分の意の如く露國を征服し、一時なりとも大陸を一統し得たと思はれる。軍人は幸ひにして勝つことがあり、不幸にして敗れることがあつて、露國にての敗北は不幸と謂はねばならぬ。併し莫斯科で年を越さうとしたのは、輕率の譏りを免れぬ、確かに有頂天になつた所がある。但其の大敗して逃げ歸り、再び兵を募つて出陣し、列國の兵を籠ます所は、流石と數賞すべきである。僅かの兵でも奈翁が居ると知れば、敵が遂に迫らぬ。又實に用兵が巧みで何處へ切つて出るか測り知られぬ。自分でも敵を驚かさうと思ひ、意外の邊に現はれ出で、却つて失敗したこともある。以前は意外の邊に現はれれば、敵が慌てゝ逃げるのであるが、神通力を失つたと知れては、夫れほど畏れる所がなく、詰まらぬ眞似をするなどの勢ひで攻め掛つたりするので、遂に帝位より逃ぎエルバ島に流されるの餘儀ないことになつた。

島に居るに於て居ることが出来ず之を通り出で、再び佛國で兵を擧げ、ウィテローで聯合軍と戦ひ愈々最後運命が決した。若し奈翁に當

年の元氣があつたならば、一層巧みに戦ひ、能く勝利を得たらうが、獨り彼のみでなく將も卒も逃つて居る。併し負けても、戰略は殆ど遺憾なきまで妙を現はし、最後を飾るに足る。生憎雨が降つて路が濡り、得意の砲兵運動を妨げられたが、夫れでも散々に敵軍を苦しめた。敵將ウエリントンには特別の戰略なく只防守する一方である。奈翁は慣手段に依り、一面を猛烈に攻め、敵が懸命に之を防がうとする時、他の一面より全力を以て攻め掛り、實に思ふ處に嵌まり、普通ならば敵が敗れる所であるが、ブルドッグなる英兵の頑守は一通りでない。幕僚がウエリントンに如何にすべきかを問へば、答は只「踏止まるだけ」とあつて、何でも斯でも踏止まり、而して語を洩らして言うた。夜か、ブリュッヘルか」と。即ち踏止まつて夜になつて呉れれば宜い、左なくば早くブリュッヘルが來て呉れれば宜いと云ふのである。果してブリュッヘルが到着して、佛軍に砲丸を浴せかけ、佛軍は總類れする外なくなつた。奈翁の戰略に誤りがなく、豫定通りにグルシーがブリュッヘルの到着を妨げれば、勝利となるのであつて、グルシーの失踏の爲めに事が收れた、惜しい事をしたのである。此れとて當年の

奈翁であるならば、事毎に注意を拂ひ、グルシーをして失錯せしめまいが、夫れほど心を配ることが出来なくなつて居つた。併し島から逃げ出し、急に募集した兵を以て、彼ら如く戦ひ得たのは、軍人としての天品を證明する。奈翁は米國に通れる積りであつたが、英國の軍艦の警戒が嚴重なので遂に之に降り、大西洋の孤島に流された。孤島で随分窄められながら、忍耐して運命に安んじた所は、餘り人が注意せぬけれど、却て蓋世の雄の末路を興床しくする所がある。そこで古來の名將の得失を語つたりした所は、實にもと感ぜさせる。風雨の烈しい夜に絶命した。

世界の動搖

奈翁と太平洋

奈翁戰役は歐大陸に限られて居るが、奈翁は眼を世界に配り太平洋の經營にも手を出した。直接に與らぬにしても注意を怠らなんだ。濠洲は既に英國領と認められたのをば、一八〇七年テールナポレオンの名の下に其一部を領有

しようとした。航海の便が好かつたならば、東洋も相應に戰亂の影響を受ける所であつた。只船が小さく、帆前であるので、影響といふ程の影響が感ぜられぬに過ぎぬ。歐洲が既に世界に新領土を求め、奈翁戰役前から英佛の海上競争が烈しく、地圖に北海道と樺太の間をラペルーズ海峡と記すのは、佛國のラペルーズが通過したからであつて、其目的は亞細亞東北の探検に在るが、是から轉じて濠洲ボツタニー灣に入り、次で行方が知れず、後久しくして難船したことが判つた。彼は伯爵で、米洲ハドン灣に英國砲壘を破壊したことがある。太平洋は浪基だ平かに日本も支那も安眠を貪つて居り、昔より東洋に此れほど平和の時代がなかつたけれども、是れ眠つて居るので、眼が醒むれば世界と共に活動すべき勢ひになつて居る。其の活動すべき勢ひは豊臣秀吉の時に大に勃興し、東洋に大波瀾が起らうとしたのである。秀吉が出で、次で奴兒哈赤が出た後、日本では家康で治まり、家光で愈々固まり、支那では康熙乾隆で太平に酔ひ、其の儘滿腹して眠り、時として騒ぎが起つても、寢返りする位のものである。

家光は功名心が熾んで、單に内國を治むるば

かりで満足せず、多少秀吉の如きことを企てようとしたが、其事なかつたのは、四十八歳で歿したからでもあらう。其の歿した時に、幕府を覆し、大變亂を起さうとしたのが、由井正雪である。正雪は正成と秀吉とに宵かり、一大事を匠み、又大事に韃ふるの才幹あるも、事が中途に敗れ、如何なる匠みであつたかが精しく知られぬ。正成は尊王、秀吉は攘夷、正雪は尊王攘夷を思ひ立ち、明治維新の先驅者となつたとも言へる。其の時海内が亂れたならば東洋に別の波瀾が起つたらう。正雪が英雄として顯はるか、何うか。丸橋忠彌と相棒になつたとして、左程の人物と思はれぬが、忠彌も戦國に出たならば、一國の領主になり得たらう、福島正則位になり得たかも知れぬ。時が時とて、大逆扱ひにされて仕舞つた。東洋は眠つて居つて、歐洲に幾多の亂が續き、奈翁の大騒ぎがあつたことも何も知らず、僅かばかり噂に聞き、頼山陽が之を詩に作つた位のものである。

治維新は百年も早くなつたらう。歐洲は多事多端で、力を他に伸ばすの餘裕に乏しく、且つ例の帆船船で、事が抄らず、漸く汽船が出来上り、米國で之を使用して日本に開港を迫つたので、そこで大騒ぎが起り、眼が醒めて見れば、世界に大變動があつたのである。

英國の名將

奈翁戰役で、英國ではネルソンが名を轟かし、次でウエリントンが名を轟かした。其れ迄は約百年前のマルボローが隨一の名將と知られて居つたが、ウエリントンが出て其名を奪ひ、マルボローは有るか無しかに取扱はれる。或はマルボローの方が優つて居るとし、元帥ウオルズレーは其説であつて、自らマルボロー傳を作つて居る。戦争に長ずることマルボローが優らうけれど、人物に缺點が多いが上、ウエリントンが音に聞えた奈翁に勝つたと云ふので、評判の高いのも無理はない。ウエリントンは戰略こそ見る可きものなけれ、何事も堅實であつて、能く英國人を代表して居る。ウエリントンは奈翁と同年に生まれ、奈翁より三十一年も活き延び、幸福の身を以て歿した。將材は段進ひであつて、奈翁が其の兵事に通ぜぬの

を言うたのは強ち自惜みでない。上官學校に入れば直ぐ不可を知る處に、輻重兵を置いたと云ふやうなことを言うて居る。奈翁に勝つたとて之を賞讃するのは普通世間のことで、玄人でないとなつて居る。其邊は致方なからうけれど、英人の氣質を代表して居り、英人が特別に秀でた才幹なくして世界に濶歩する如く、彼は英國に、世界に、地歩を占めたと云へる。貴族的で保守的で我部下に名門の子弟ばかりを集め、自由民権に反抗したが、内亂が起りさうに思ふや、意見を改め、自ら貴族に説得し、民衆と調和させたなど、英人として模範的態度である。勢ひの許す限り踏止まり、勢ひの許さぬと知つて斷然改める一種變通の能を具へて居る。

奈翁後の佛國英雄

佛國は奈翁の下に國威を發揚し、歐洲の覇權を握るの勢があつたが、其の倒るゝと共に頗るに縮小し、善後策の爲めに幾回も變動を經、立君となつたり、共和となつたり、度々變り、中に英雄膚の人物の現れぬではなく、ラマルチンの一時期非常の人氣を集め、忽ち人氣を失つたのは、近頃のケレンスキーに似て居る。人氣はカ

ペーニヤクに移り、是れ軍人として威力あり、難局に當るに堪へたけれど、大統領候補者として總票數七百五十萬中、約百五十萬を得、ルイ・ナポレオンが五百五十餘萬を得、事が決した。ウエリントンが歿した年、其のイが奈翁一世の甥として奈翁三世の名で帝位に即位した。クーデターを以て位に即位したのは、後から考へて餘計な事をしたので、非常手段を取らなくても、自然に勢が向いたのである。餘計な事をして餘計な敵を造つたことになる。併し即位以來、國威回復の徴候が現はれ、英國と聯合して露國と戰つた時、國威が明かに揚つた。英はホルソンが大勝利を得、海上權を我物領にして安心したが、油斷大敵 佛國では軍艦に蒸氣を應用し、潮に逆つて進行し、英は帆船で何うする事も出来なだことがある。佛國は軍事のみではなく、總て文明的に裝飾し、パリを以て歐洲の中心の如くし、三世は一時一世よりも智慧あるかに評判され、又評判される事が巧みである。けれども叔父ほどの才能なく、精力なく、執れかと言へば實戰より觀兵式に適し、戰はずに戰勝者たらうとする形がある。自ら伊太利に出征して奧國と戰つた時、遅延と見えて夫れで勝利を得、名將は違

つたものと思はれたが、後繼と開戦し、出發しようとして出發せず、敵に機先を制せられ、連戰連敗するもので、前に遅延したのは策でも何でもなく、性分で敏活の働きが出来ぬのであると知られた。獨逸と戰ふのは本意でなく、國內に不平が高まり、何等か目覺しき事をせねば革命を免れぬとの皇后及び宰相の勧めに因つたので、實は頗る判斷に惑うたのである。一世と同じ羅馬に背かつたけれど、矢張り路易十四世のやうに外面を塗り立て、芝居掛りで事を爲すに長じ、愈々力業となつて馬脚を露はすの餘儀ないことになる。第二帝國は第一帝國の幻影であつて、幻燈で長続きするもので無く、何でも堅實に準備せねばならぬと云ふことが、其處で分つて來た。クーデターで内を成歴しても、外を成歴することが出来ぬ。同じ奈翁でも、大奈翁(グラン)と小奈翁(プチ)の差があると云はれる。併し國民は第二帝政を倒しても、兎角大奈翁の全盛時代を夢み、何かして再び彼の如くしたいと考へ、英雄が現はれ出でたならばとの希望を抱かずに居れぬ。英雄の需要があるので、眞に英雄らしいのが出で、英雄の假面を被つたのが出で、色々の人物が出る中で、先づ

傑出したのはガンベッタである。彼は雄辯を以て知られて居るが、其の意氣及び才幹亦之に伴ひ、如何にかして民心を鼓舞し、再び兵力を以て獨逸と戦ひ、國威を發揚しようとの熱心が進んで居る。事を急いで陸頭したけれど、今少し活き長らへば大統領になつたらうし、大統領になつて只居らうとせず、何事かを爲したであらう。英雄の資格を具へ、四十五歳で空しく志を抱いて歿した。之に續いてブーランゼーがパリで評判者となり、佛國救世主なるかに見られたが、武官の身で文弱な首相に決闘を挑み、雙方劍を以て關つて、譯もなく負けて仕舞ひ、人望頓に落ち、末路甚だ振はなんだ。英雄が出ればと望んだのが、徒らに之を望んでも益なく、各々眞面目に勤勞し、勢ひの熟するを待つの外ないことになつた。

英國の政治家

英國で奈翁に勝つたと云ふのが空名に屬しても、其處は英人のこととして、如何なる處でも實利を見通さぬ。只國威を發揚するのみでなく、之と伴つて商工業の利益を得、ウエリントンの歿した頃、富國強兵の實を擧げ、國內で

平和を樂し、國外で敬意を拂はれた。佛國のやうに強ち英雄の出でて國威を發揚して呉れるのを望まず、英雄が出でねば國民の力て事を成さうとする。十八世紀の末は議會が雄辯の花盛りであつた如く、多少英雄膚の人物が活動し、ビットが二十六歳で首相となつたのも其の勢ひに依る。奈翁戰亂の過ぎてから、其の勢ひが鈍つて、實際の利益を重んじ、選舉法改正の如きに力を注いだりしたが、手腕ある人物が出ぬではない。對岸で奈翁三世が飛躍した頃、バルマーストンが首相として外政に力を振つて居る。身體強健、運動に長じ、其の氣力を以て政務を處し、八十二歳で歿するまで劇務に従事した。英雄として餘りに實際的と見えても、他國ならば英雄として顯はれたのである。

ヂスレリーは大陸の權變ある政治家に似て居る。英國女王を印度女皇とし、尊稱上で獨逸露等の皇帝と同格にした如き、芝居に類するが、國威の發揚に伴つての事である。小事も大事も此の調子で往き、派手に手を伸ばさうとする。而して之と絶えず議場で争ひ、内閣の遣り取りしたのがグラッドストーンで、一方が自由黨より保守黨に轉ずれば、他の一方は保守黨より自由黨に轉じ、各々首領となつて政界に龍

虎の勢を呈した。カーライルの云ふには「ヂスレリーは自ら良心のないことを承知して居り、グラッドストーンは良心なくて何でも良心で事を成すと思つて居る」とある。ヂスレリーの權變は名題のもので、其れで通つて居るが、グラッドストーンは宗教家として僧正も及ばぬ所がありながら、政治家として意外に權變に富み、無邪氣なる鳩と狡猾なる蛇と一つにしたものと云はれた。隨分際といことをする。たゞ八十七歳で退隱するまで奮闘を續けた所は餘り例がない。全くクロムウエルと性格を異にすると思つた、彼の勢ひでは或はクロムウエルとなつたであらうと察せられることがある。併し世が世とて、傳奇的英雄の現はれる機會に乏しい。ヂスレリーは中世英雄の癖がありながら、何處か英雄に事缺けて居ると感ぜられる。戰場に出ぬが爲めでなく、議會を相手にしては、手品の種を二階から見下される氣遣ひがある。是れでは世を驚かすやうな働きが難かしい。それに較ぶれば、大陸の方には英雄として活動する餘地がある。

獨逸の英雄

ヂスレリーは伯林會議で獨逸宰相ピスマル

クと會合し、互に天下の英雄、使君と我との概があり、雙方大なる國家を代表するに堪へたが、ピスマルクは英雄の面目躍如として現はれて居る。大陸は何程變化しても、羅馬の昔風がある。ヂスレリーは獨逸で、大に歡迎され、グラッドストーンは受けが悪かつた。時が時ばかりでなく、グラッドストーン流儀が好まれぬのである。ピスマルクは容貌魁偉、斗酒も辭せざる風、見るからに給平の英雄らしく、日本人で木戸孝允、伊藤博文、後藤象次郎等、皆其の威風に感心した連中であつた。後藤は獅子を見るやうな氣がしたと云ひ、伊藤は巻煙草の銜へ方を似せたと噂された。奈翁一世時代の普國に、スタインの如き政治家があり、稱揚を値するが、此時勢も違ひ、ピスマルクは佛國のリシウリューに當るべきもので、權力を君主に集め、之を藉りて國を富まし、兵を強くし、以て威力を世界に張らうとするのである。往昔佛國と獨逸と合一したり、分離したり、後一方が上がる時に、他の一方が下がり、大奈翁の雄飛した頃に、獨逸が雌伏して其の命を馳せ、次で勢が變じて、獨逸が次第に力を養ひ、小奈翁に對して當年の復讐をすることになつた。ピスマルクは獨逸興の勢ひに乗じ、思ふ存分に手

腕を振ひ得たのであつて、佛國に勝つて歸り、市民一齊に其の勳功を讚美した時、彼れ挨拶して曰ふ、「戰勝の功はモルトケにある、自分は獨逸統一に與つたのみ」と。實に統一が主なる功で、索惹のボイストとの競争に克ち、遂に普國王を獨逸皇帝にした。併し彼れ自ら單純なる政治家を以て居らうとせず、成らうことならば戰場に飛躍せうとも望んだ。皇帝に奏上した語に「臣が將校の肩書あるは何よりも名譽とする所」とある。彼は古英雄に肖かり、劍を提げて大陸を横行したかつたのである。容貌魁偉、三軍を叱咤しさう見え、モルトケが却て文官のやうに見えたのも、一喜劇とする。而して政治家たるビスマルクは、議會で議員に對するに拙であつて、要らざる所で感服を試み、平地に波を起したりした。暴風雨に船を運轉するに長じ、好天氣に客の相手するは平凡なる船長にも及ばぬ。順境であつたけれど、抱負及び手腕に比して頓々拍子と言へぬ。併し流石に外交に人馴れただけ、人をさらさぬ。岩倉大使一行が訪問して歸る時彼が大聲に「ミストル・アンドウ」と呼び、呼ばれた者が振り返つて見ると、「此は君の帽子であらう」と云うて渡した。名は帽子の中に書いてあつたのであるけれど、

ど、ビスマルクは此位のことには氣を配る方である。アンドウとは今の安藤禁酒會長(太郎)であつて、偶然に大酒飲みから斯く挨拶されたことがある。モルトケは奈翁と全く軍人の型を異にし、而して軍事の能率を同じくし、世界の戰略戰術を一變するに與り、實に稀有の名將たるを失はぬが、恰も本因坊の碁に於けるが如く、一の技術家たる形がある。ビスマルクと合一して奈翁を形づくるに足り、離しては物足りなく感ずる。

新時代

獨逸が勃興して統一し、種々の人物が輩出した頃、伊國が勃興して統一し、ガリバルデー、カヴール、マジニー等が輩出した。ガリバルデーは古代の英雄をそっくり近世に現はした形があつて、事有れば、シヤツの儘に劍を帯びて奮戰奮闘し、事が成れば、去つてカブレラ島に退く。富貴功名全く興り關せず、英雄的態度は當時の群政治家の比でない。けれども軍事に長ずるのでなく、戦へば屢々敗れる。政治のことも分らず、議場に出では屢々嘲笑を買つた。獨逸戰役に兵を率ゐて佛を助け、獨軍に攻められて散々な目に遭つた。若し當初統一の功

を立て、一切の利得を新君主に獻納し、カブレラ島に歸る時、途で難船して歿したならば、神か、人か、測り知るべからざる印象を後に遺したらうと云はれるが、物はさう誂へ通りに往くものでない。人間の強點があれば、弱點もある。流石羅馬の興亡した土地、英雄的人物の出したのを推稱すべきである。

ガリバルデーが南歐で活躍するに對し、英國にゴールドンが出で、到る處に任侠的活動をして居る。支那で働いて「チャイニス・ゴールドン」の名がある。埃及で働いて「ゴールドン・パシヤ」の名がある。埃及に聘せられた時、斯かる貧乏國で俸給を貰へぬとて、公用に抛つた。平素麵包を食ひ、水を飲むのみで、貰ひ受ける金は、之を人に分ち、勳草も潰して人に與へて仕舞ひ、深く神を信じ、人間の利慾を超越して居る。類似性格の人物がジャクソンの名に於て米國の南北戰役に驅れたのも面白い。南北戰役はモルトケこそ軍事上に注意する價値なしとしたれ、雙方から名將が出で、グラントなり、リーなり、世界の戰史に省くことが出来ぬ。歐洲にあつても、相應の働きを爲したに違ひない。北方の大統領リンコンに至つては、華盛頓以來の人物であり、或る點は之に優り、實に西半球切つて

の偉丈夫である。けれども其れは其れとし、南軍のジャクソンは軍人として能力の秀でた外、利慾を超越し、黄金萬能の米國に異彩を放つて居る。英雄として規模が小さく、氣魄が薄いやうでも、我が職分と信ずる所に一身を抛ち、何等利慾に惑はないのは、氣分に於て英雄の最高境に近づいたと言へる。ゴルドンは支那太平洋の亂に三十三戦して勝ち、常勝軍と稱せられたが、李鴻章は其の餘りに無慾なるを見て、油斷のならぬ僞君子とし、後熟々其の行ひを見て大に感服したとの事である。李に彼の如き無慾が想像し得られなんだのも無理がない。ゴルドンが支那で戦ひ、ジャクソンが米國で戦つた頃は、東洋全體に機運が動き、幾多人物が現はれようとして居る。

支那は康熙乾隆以後に特別の人物なく、人物の顯はれる機会がなかつた。歐洲の力が東洋に及び伴ひ、前来の泰平が動搖し、洪秀全が殆ど清朝を覆へず勢ひになり、若し今少しく外交を巧みにしたならば、英雄として顯はれる所である。朝廷側では各國落が出て、之に従つて左宗棠李鴻章等が出て、乾隆以後、清朝第一流の人物となり、中にも李が外交に當るだけ、名聲が廣く喧傳し、グラントが世界を

廻つた時に、之を世界の第一人と賞め上げた。若し日本との戦役以前に歿したならば、相當の名聲を維持し、李が生存して居つたらばとなつたらうが、不幸にも壽にして辱多い次第となつた。日本で初めて甲鐵艦を得、東北で戦つたのは、ストンウォール・ジャクソンと稱し即ち彼の米洲南軍の名將の名に因んだのであつて、ジャクソンは全く日本に縁がないではない。而して西郷隆盛の生涯はガリバルデーに似て更に優つて居る。ガリバルデーの如く自ら陣頭に立つて戦はぬにしても、層氣魄あり、器度あり、思慮あり、大事を成し遂ぐるの能力がある。ガリバルデーは後愈々働いて愈々人に輕んぜられたが、西郷の死んだ時、人之を形容するに苦しみ、眞に悲壯の絶頂である。若し志を達し得たならば東洋に雄飛し、歐洲と模倣を異にした英雄を現はしたであらう。西郷の出た機運は種々の人物を出し、讀べば、木戸なり、坂本なり、皆英雄の氣分がある。併し西郷と並び立つて眞に英雄らしく見えるは、高杉晋作である。標度にして西郷に及ばぬが、意氣に於て、智略に於て、其上に出づる。西郷は將に將として大事を成すの器であり、自ら兵を率ゐて何程の事を爲し得るか、人物として遂に大山

巖に倒りつゝ、軍事上に此位のものであり、或は之に劣るかも知れぬ。高杉は天來の名將で健康と境遇とが許せば、カロロ十二世の如く、クライヴの如く、或は奈翁の如くなるを得たらう。幕府の倒れ掛つた時であるにせよ、自ら兵を練り、自ら之を率ゐ、悉く敵を撃退し、名譽ある平和條約を結んだのは、偉大なる智力及び膽量と謂はねばならぬ。其の二十九歳で歿したのは、可惜英雄を失つたものである。

東西兩洋 相分れて英雄が出て、只七百年前に成吉思汗が殆ど東西を合さうとしただけである。近年雙方より接近し、日本で支那との戦役を經、露國と開戦し、此處で雙方の力競べがあつた。明治天皇は英國のウイリヤム三世に優り、ヴィクトリアとエドワード七世の合一といふ形があり、乃木希典はゴルドン式の最上を形づくる。支那で袁世凱が失敗せねば、奈翁三世位に見えたらう、孫文もマジニー邊に置けることは無い。東西相接近し、互に影響することになつたが、塞耳雜人が曠甸國皇嗣夫妻を殺害したのが動機となり、世界的大動亂を捲き起し、事變の大なるに於て古來之に較ぶべきものがない。併し何人を英雄として擧ぐ可き

か、軍事では獨のヒンデンブルグ、マツケンゼンなり、佛のジョッフル、ペタンなり、英のヘーグなり、確かに傑出して居るけれど、英華とすべきであるか何うか。獨帝維廉二世なり、佛國大統領ポアンカレなり、英國首相ロイド・ジョージなり、米國大統領ウィルソン及び前大統領ルーズヴェルトなり、英華の資質あるが、今は少數者が多數を統率し、之を指導すと見るとよりも、多數者が少數を推戴し、之を活動させると見え、それだけ英雄として顯はれ難い所がある。といふ間に終結の期限が到着した。前に挙げ來つた所の外、古來多くの英華があり、現代にも能力の大に稱揚すべきものがあるけれど、此處でワルハラ大舞臺の金櫛の幕が下りて千秋樂。

成功に就き (二)

名一時天下に高かりし者の遂に辟殺の取巻く所と爲るや、前に名を于むるに急なりしに反

比擬して、動もすれば自暴自棄に終る。凡そ人の世に爲すあらんとする、必ず短日月間に成功せんことを望むべからず。長き年月の間に於て功を收めんとする。須らく名の実に浮ぐるを避けざるべからず。たゞ能ふ限り名を顯はるゝを防ぎ而して能ふ限り勉強するを要す。若し名を避け事に忙むると伴ひて偶爾名の顯はるゝを致すある、猶ほ成るべく之を防ぐに務むべく、諒するに、名よりも實を先にするに専らなるべし。斯く専ら名を避け實を先にするの餘、多少名の顯はるゝに至らんか、依りて得る所の名は、決して危険なる性質のものならず。其の根柢既に鞏固にして、以て疾風に抵抗して孤立するに足る。たとひ雷震身を周るあるとも、單に葉落ち、枝折るゝに止まるべく、疾風一過、更に益々長を借し、大を加ふるならん。名の實に浮ぐるは、根柢猶ほ未だ張大せざるに、早くも枝葉の繁茂せると同じ。偶々疾風の吹き到るに會ふ、堅拔せざるもの少し。政治家は由來業務の派手なるもの、多少新聞に誦はれ、世人に稱せらるゝは可とすべきも、瑣細の事をまで通信社に通報して新聞紙に誦はしむる如き、到底大に發達する所以の途にあらず。但だ早

く成功なる名を贏ち得べく、實に浮ぐるの名を于むるを得んも、究竟失敗を免れず。文學なり、音楽なり、繪畫なり、彫刻なりに至りては、特にラスキンの語を記憶せざるべからず。曰く、汝若し價をして畫を支配せざらしめば、後畫をして價を支配せしむるを得んと。多くの文學者は、餘りに價をして文を支配せしむるに傾く。彼等とて濟ざるを得ず、樂まざるを得ず、種々の事情の纏綿すべければ、單に作る爲めに作り得ざるは勿論なるも、その間自ら差別すべきものあり。金の必要ありとて之を求むれば、謂ゆる多々益々辨すべき有様にて、遂に際限あること莫けん。書肆を擇ばずして、朝に文を賣り、夕に文を賣り、變る所日に多くして、品格日に衰へ、識らず知らず幫閭者流と異なるなきに至る。而して是よりして發達を望むも、復得べからず。前に天才として囑望せられし者の、後言ひ甲斐なき状態となるは、果して事實ならんとするか、而して是れ獨り文學にのみ言ふべきに非ず。

(根柢の修養より)

東洋へ來れる歐米人

東洋というても、印度まで多くの歐洲人が來り、夙にアレキサンドル大王が遠征して入込んだ程であり、後に英領となるまで、絶えず多少の人が入り、英領になつてから、英國人の關係多く、歴史上著名の人物も少なくない。クライヴとか、ヘスチングスとか、廣く知れ渡り、マコーレーの如き、クライヴとナポレオンとを比較し、孰れが優るかを評して居る。印度總督は日本で朝鮮總督・臺灣總督といふ格で、指折りの人が派遣される。時として情實で如何がはしいのが起すれど、兎も角、重要な位置たるを失はぬ。騒ぎが起り勝ちで、軍備も忽せに出來ず、ナポレオンと撃つて勝つたウエリントンも滞在して居つた。マコーレーとか、ミルとか、學藝に秀いでた人も居り、印度といへば、英人が自分の國と考へ、行かぬまでも行つたと同様に心得て居る。

それより東になれば、羅馬皇帝アントニヌスの使節が漢代に支那に來てから、若干僧侶を除いて何の言ふべき無く、マルコポーロが元

世祖即ち忽必烈の代に支那に居り、初めて日本の名を歐洲に紹介したので、東西の交通が始まつたけれど、印度に較べて關係が甚しく薄くなつて居る。何程かの人が往來し、物品を傳へたり技術を傳へたりしたが、一時盛んであつたのは、葡萄牙・西班牙と共に、その宣教師であり、日本で信長時代ザビエル(原名ハビエル)が大に活動し、多くの信徒を作つた。宣教師の勢力が衰へてから、貿易を主にするやうになり、殊に日本で長崎以外に外國人の立寄るを禁じ、東洋に日立つた歐洲人が來なくなり、時として支那政府又は我が幕府に備はれたのがある位の事、歐洲人が力を示したのは、ゴルドンが變亂の亂を平けるに與つたに始まる。一八六〇年英佛聯合して北京を陥れ、英將はゼームス・格蘭トであつて、ゴルドンは之に附屬したが、次いで支那政府の爲めに働き、三十三回撃つて連勝したのを以て知られて居る。支那で戰つたとて、何程のことでないやうでも、清朝の維持にゴルドンの後助が與つて力あるを打消すこ

とが出来ぬ。初め特殊の人格を以て知られず、普通に歐洲人は鞏固の爲めに來り、金次第と知られて居るのに、ゴルドンは全く之を措いて問はず、唯自らの職分とする所の爲めに盡し、居常恬淡、何處か違つて居ると見える。李鴻章は之を見て、さういふ無慾の男は油斷がならぬ、大慾は無慾、必ず何等か求むる所あるとし、其の心得で遇つて居り、漸く交際して眞に金錢を上げ視するのに驚いた。正心誠意職務に當り、他に何の求むる所が無く、天晴れの人物として感心せず居れぬ。ゴルドンも自らの認められたので満足し、支那に同情を表し、チャールス・ゴルドンがチャイニス・ゴルドンと云はれたりした。後に阿弗利加及び其他で働き、關係の國から種々の勳章を貰ひ受け、片々から潰して人に與へ、唯支那の黄金勳章のみを保存して居つたが、其の後その唯一の勳章も見えなくなり、人が詮索したれば、これも潰して或る困つた人に與へたのであると知れた。ゴルドンは官職が高くなけれど、其のカルトゥム城を守り、樂々辭せず、遂に殺された時、世界に感動を興へたこと日本の乃木大將の如く、大膽になり、内閣更迭をも惹き起した。ゴルドンが日本で働いたならば、一段の興味があ

つたらう。

一八六〇年には露國無政府黨員バクニンが、西伯利から逃れて日本に立寄り、米國へ赴いて居る。今日バクニンといへば、稍々其の邊に興味あるもの、誰一人知らぬのが無く、一の大立物と見えるが、近年まで日本に來つたことは、少しの注意を惹かず、今でも餘り知られて居らぬ。一八六〇年といへば、井伊大老が櫻田門外で殺された年である。

これより先き、一八五三乃至四年、米國からペルリ提督が日本と通商條約を結びに來り、日本で大騒ぎになり、井伊の殺害も之に基づくが、提督は當時六十歳前後、數年後に歿し、斯かる騒ぎを知るべくもなく、米國では、日本の開國を以て來り爲した所とし、相當に注意を拂ふものの、ペルリの名に於ては、其の兄が英國と戰つた方を多く知つて居る。

ペルリ一行に譯官として従つて來た米人ウイリヤムスは、二十二歳で印刷職工とし支那に赴き、支那語を研究し、これに關して種々の著作があり、語學に貢獻した所多く、エール大學支那語教授となつた。これと略ぼ同年代に、英人レッグが宣教師として馬刺加及び香港に來り、四書五經を翻譯し、後にオックスフォード

大學支那語教授となつた。日本では米國のヘボンが來り、日本語を調べ、和英辭典を作り、少なからぬ利益を興へた。岸田吟香が辭典に就いて補助したので、日樂として精琦水製造を教へられ、一時評判の日樂となつた。

幕府では外國と條約を結ぶを餘儀なくされ、交際して外國の學術技藝の優るを知り、之を學ばうとし、種々の人を備ひ、相應の人物が來り、横須賀造船所如き、佛國ツローンの規模を三分の二に減じたのであり、技術の點に於て注意を値し、技師にロートルといふのがある。

當時外交のことは、米國のハリリス、佛國のレオンロセスに聽くことが多かつた。英國が薩長を助け、佛國が幕府を援け、薩長が勝つて新政府をつつたといふので、英國公使パークスが頗る勢力を得、新政府の官吏は屢々其の壓迫に苦しめられた。パークスは支那で働いて位置を得、日本に公使となり、後更に支那に公使となつたもので、東亞細亞の外交に最も密切の關係がある。パークスは一徹者で怒り易く、隨分我儘を言うたり働いたりしたが、親切心があり、理非も分り、此方の出様に依つて都合の好いことがある。英國を背景として居る所もあれど、パークスが承諾しきへせば、事が纏まるこ

と多く、承知すればやつて呉れるので、頼みになる所があつた。後に種々の公使が來り、昇格して大使が來たけれど、パークス程印象を與へたのが一人も無い。パークスは馬に乗つて彼處此處通行し、人が能く其の顔を覚えて居り、馴染のやうな心持をして居つた。其の頃は觀兵式というても、今の日比谷公園で舉行し、拜觀者も鹵簿に接近し、人々の言ふことが能く聞えた。パークスが無遠慮に批評するのも聞える。

定つて大演習といふほどのものがなく、觀兵式に足並が揃ふか揃はぬか位が主なることになつて居り、パークスが見て「これは駄目(ヴェレレ、ビヤツド)」、それは少し宜い(ベツター)というたりして居つた。パークスは多少此の邊に心掛けあり、特に注意したのである。今日大使公使で斯かることをいうたと知れ、ば、或は問題が起り、少くとも問題が起るとして遠慮して居る。遠慮の仕方が一通りでなく、日本の外交官が官儀式と云はれるが、他國の大使も官儀式であり、官儀式にならざるに居れぬと見える。一つ間違へば大變と氣遣ひ、戰々兢兢といふ有様になつて居る。それから見ればパークス時代は違つて居り、當局者も西郷とか副島とかいふのが居り、それが退いても皆三四十歳の若

手、今の侯爵大隈も元氣盛りで、不慮に之と議論したのである。明治初年の官吏は一般に書生風の所があり、パークスも飾氣なく、丁度適當して居つた。パークスが時間の間進ひを詰責した時、西郷が金時計を床に置き、漸くなものがあるので間違ふといふなど、又と見ることの出来ぬ國である。

其の頃歐米で志を得ず、何か面白いことをしようと思ふものは、東洋に渡り來る風があつた。支那は大國で治まつて居り、手の着けやうに困るが、日本はどうなるか知れず、備き甲斐ありさうに考へられ、一時浪人が支那に渡り、宮崎滔天が王様にならうとしたのに似た所がある。日本で政府にも學校にも外國人を備ひ、英語など外國人でありさへすれば宜いことがあり、兵卒辛うじて字を書き得るものが教師となつたりした。米國南北戦役に出たものは、何か好い口もと求めて來り、戦争に出たといふので面白がられる所がある。其の中で傑出したのはリゼンドルである。本佛國人であり、ルジャンドルと發音するが、米に移住し、北軍にビネラルとして戦ひ、場数を踏んで居り、何にしてもゼネラルといふので、リゼンドル將軍として迎へられた。日本政府で何等かの便宜を與

へたが、臺灣へ往つたのは何の意に於てしたか、單身土着の間に入り、事情を観察し來つた。口癖に武器を持たねば何處へも行けるといつて居つた。ピストルとか何か武器を持つて居るので疑ひを受けるが、手を擡げ何一つ持たぬといふ所を示せば、害を加へるものではないといふのである。片眼を入れ目して居り、士者に目玉を出したり入れたりして驚かしたともいふ。何にしても日本に臺灣征伐を勧め、これに就いて斡旋して居る。北海道の開拓はモルモン宗で一夫多妻にするに如くはないとして、強ひて司法省顧問ボアソナードに草案を作らせ之を政府に持込んだことがあつた。大隈は相應に之を待遇し、其の好意を得て居つたが、外務卿としての井上はさう行かないので、頻りに井上は政治家でない、話にならぬといふやうなことを口走つた。小石川に家を構へ、物の分りぬ男を置き、探偵が聞いても分らぬやうにして置くとのことである。机に原稿の如きものを並べ立て、前の田圃を指していふ、一事が無ければ田圃を離れ、日本に關する著作に従事し、一旦事あれば筆を執つて起つと。外出する時粗末の服で汚ない

人力車に乗り、幾らか英雄の風ありと謂ふべきであるが、英雄の時を得ぬのか、又は出来損ひ

か、事が思はしく行かず、其の取掛つて居つた著作もどうなつたらうか。日本に志を得ずして朝鮮に移り、其の政府顧問となり、日本に反抗するの運動を勧め、日本で前に同情したのも不快を感ずるやうになり、其の歿した時も特別の感傷を生じなかつた。今はリゼンドル將軍といつても、記憶するものが極めて少くなつて居るが、一時リゼンドルといへば、外國人が恐れを懷き、米國人に敬意を構はずに居れなんだ。南北戦役の功勞者といふもあるが、磊落で普通の儀式を構はず逃慮會稽ないので困られる。何かといへば馬鹿者めといふ調子で出て來る。大學教授フェノロサ夫人が、其の附近をリゼンドルが通るのを見て、是非立寄つて呉れと勧め

て已まず、ミストルが居ては嫌といひ、ミストルが居らぬと呼入れたが、後にリゼンドルが人に語つていふ、「居らぬといふ男が出て來り、あゝいふ男を見ると胸糞悪くなるので直ぐ歸つた、馬鹿々々しいと。外國人の中で鼻つまになつたが、誰でも顔を含すと其の機嫌を取らずに居れなんだ。兎に角一種の變り者である。臺灣に従軍したのに米人でワツソン少佐といふのがあり、帝國大學の前身開成學校の教師となり、風采立派に見えたが、後に竊盜罪を犯して入獄

し、リゼンドルは之に話し及び、「卑劣な男」(ミーン・フェルロー)と云うて居つた。

リゼンドルは東洋ゴロの雄なるものであり、凡介常備と違つたが、日本で秩序の整はぬ頃こそ何事かをなし得れ、西南戦役が終り、帝國議會が開けるやうになつて、最早面白いことが出来得なくなり、そこで冒險氣質のものは朝鮮で一仕事して見ようといふやうになり、獨逸人モルレンドルフが朝鮮政府に聘せられ、自ら朝鮮人と稱し、朝鮮生れといふを憚らぬ。西洋へ往つて皮膚の色が變じたと稱した。日本に朝鮮使節として來り、たくらむ所あつたが、日本へ來ては別の態度に出で、人が朝鮮人かと思はれ、大笑ひして、「もうさういふことをいふのを罷めた」というた。リゼンドルに較べて大分劣つて居つたらしい。

朝鮮では舞臺が狭く、面白いことが出来ず、餘り働かぬ手か腕試ししようと思へ。支那では英人ロバート・ハートが長らく税關の權を握り、他國人は勿論支那人でも其の不承諾をどうすることも出来なんだ。實際に最も多く勢力を張り、公使以上と思はれた。人物よりも位置の關係であり、金の集まる所に權がある譯になつて居るが、日本で隨分之を目的の仇のやうに見

たものがある。支那は帝政の間、何というても表向き秩序が立つて居り、他から飛入りで掻き廻し難く、備はれて俸給を多く貰ひ受ける位のことである。日清戦役の際、獨逸人で從軍した

のがあり、黄海の戦ひの如き、ハンネツケンが頗る奮闘し、支那兵が拙いので旨く戦へぬと憤慨した。軍艦が日本に優つて居り、勝利の希望あるにしても、日本に對することゴルドンの長妻に對する如き考では間違つて居る。共和制度になつて色々の顧問が入込み、面白いことをしようとして、割合に面白く行かず、排日熱を煽つて景氣が宜いといふだけである。併し何分にも國內容易に治まらず、何事か爲し得さうに思はれ、東洋浪人といふべきものが腕に撻りを掛けることがある。

日本では二十七八年役で事が極まり、其の後外國人で何事かを爲さうと思つても、齒が立たぬ形になつて居る。リゼンドルの如く唯事あれがしに望むものもあるが、多少貿易の開けると共に、入込んで來たのは宣教師である。天正年間の際ザビエルの如き有力者があるかどうか、同等の力あつても、時勢が違ひ、同等のことを爲し得ぬか、何れにしても宣教師の盡力は賞讃を値するのがある。未開國を神の道に導い

てやらうといふのであつて、並一通りの盡力でない。學校の教員で宣教師が兼ねたのが澤山あり、大學に幾人も居つた。日本人で植物學の教授となつて居つたのが、講演で基督教を攻撃したとして、大騒ぎになつたりした。今日日本人で

教師になつて居るものは、大抵宣教師の教を受け、其の感化を被つたのであつて、恰も今の教師が古い信徒であるが如く、外國宣教師も古いのが力あり、新たに之に代つて日星しいのが無い。基督教が或程度まで發展の氣運に向ひ、漸くにして振はぬのは、此の勢に伴ふ。矢張り知識の進まぬ間、外國人の手に合ひ、其の進むと同時に手から離れた所がある。今は基督教の信徒として同化せず、同化するとして割合が甚だしく、却つて信徒ならざるもの間に、基督教氣分又は趣味といふべきものが弘まりつつある。宣教師の手を離れ、哲學又は文藝の方面より擴がらうとして居る。牧師の元老と謂ふべき海老名小崎、横井等數氏が、熊本花岡山で誓つたのは、英學校教員ジェンズの力であり、洵に一大感化と稱するに足る。英語を教へて居る傍らに生徒を集めて説教し、説教するの熱心なる、人が聴いても聴かぬでも構はず、誰も居らぬでも罷めぬといふ程であり、之に動かされ

て彼の人々が誓ふやうになつたのであり、當時
随分騒ぎであり、横井の如き、母が家に濟まぬ
自殺するといふ騒ぎが起つたさうである。花園
山に誓つた人々は、後に傳道に従事し、元老の
形になつて居るが、之を感化した肝腎のジメン
スは、如何なる事情よりしてか基督教より遠ざ
かり、後に京都の高等學校教員となり、一種の
皮肉を示した。

宣教師が熱心なのは、明治十五六年までであ
り、其の後は時に大舉傳道の如きあるに拘ら
ず、前の如き熱心が見えず、熱心になつても効
能が少く、熱心が足らぬと思はれる。明治の初
め宣教師が良いのでなく、内地人が幼稚なので
あつたかも知れぬが、フルベッキの如き十七ヶ
國の語に通ずるといふ評判であり、其れだけで
も偉いとされた。實際何程のものかは別とし、
今日宣教師で如何なる人があるか。歐米の第一
流といふのが來れば知らず、尋常の宣教師は日
本の老牧師に劣り、大學生を取扱ふ任に堪へぬ
やうである。熊本で幾人かが誓つたのは、中學
程度であり、其の頃と今と、中學と大學との差
があらう。

明治十五六年まで、長くて帝國議會開設ま
で、更に長くて日清戦役まで、最も長くて日露

戦役まで、外國人は日本で何か一仕事しよう
とするのがあり、或は戰爭をさせて之に乗込ま
うとし、或は基督教を以て人心を變じ、宗教界の
功勞者とならうとしたが、後に其の困難を知り、
寧ろ不可能を知り、敢て試みようと思はず、其の代
り日本で與へられた職務を忠實に果さうとする
のが多くなり來つた。幕末から學術技藝に外
國人を聘し、明治に入つて更に之を盛んにし、殆
んど學術技藝として全く外國人の與らぬのが
無い位であり、日本人で出來ることまで、外
國人に委ねるに至つた。明治十九年英人チャン
バレンに日本文典編纂を囑せし如き、其の著
しいものに居る。當時各方面に外國人を儲ひ、
何れも山氣無く、相當に働いたにしても、總じて
日本を劣等視し、之に教へる態度に出でて居
り、日本でも實に後進生として學ぼうとした。

陸軍に獨逸人メツケルが來り、海軍の造艦に佛
人ベルタンが來た。メツケルは少佐であつて、
日本の將校を頭ごなしに叱りつけた。將校は
學術に通ぜずとも、西南戦役で經驗があり、佐が
と思ふ所があるが、叱られて我慢した。メツケル
も日本を輕蔑したのでなく、當時獨逸で新たに
考へ出した案があり、加ふるに彼自ら一種の性
格を具へ、日本の陸軍を改造するの意氣及び親

格を具へ、日本の陸軍を改造するの意氣及び親

切心があり、無理も無いと見なければならぬ所
があつた。メツケルの教へる所後から見れば
何程のこと無けれど、當時德に有效の藥を注射
したと云へる。ベルタンは佛國でも高い位置を
占め、日本で前例に無い高給を拂つたが、其の割
合に効果があつたかどうか、多少禮法を教へた
にしても、寧ろ看板倒れの所無いとせぬ。

日本が支那と戦ひ、一國として實力を具へ
ることの明かになり、聘せられて來る外國人
が濺りに劣等視せず、本國で教へると略ぼ同様
の心持に於てするやうになつた。大學の教員
になつても、會社の技師になつても、忠實に職
務を盡さうとする所があり、以前の如く宣教師
の傍らに教へるといふのでなく、學術の爲めに
教へ、爲し得る限りを爲さうとする。日本で教
へ本國に歸つて大家になつたものもある。併し學
術に於ては、細菌學のコツボが來たのが最も主
な人物とすのであらう。帝大の醫學教授は、
コツボが六十幾歳で我々德まぬのを見、俄に奮
發する氣になつた。其の去つてから元通りにな
つたが、一時は體に刺戟があつた。

軍に位置の重い職よりせば、英國の現皇帝
ジョージ五世が、兄君と共に親王として來られ
たことである。德が腕に入墨して歸られた管で

あるが、我が東宮殿下に示されたかどうか。英傑として米國前大統領格蘭ト將軍が主である。支那で李鴻章が之に琉球處分を託したとて、日本で伊藤、西郷等がこれと日光で會合し、協議したことがある。露國廢帝ニコラス二世が太子として来て、大洋で傷つけられて騒ぎが起つたりした。露國陸軍大將クロバトキンが來り、皇族の待遇を受け、幾許もなく之を敵の總司令官として戦ふに至つた。支那匪徒事件に、獨逸元帥ワルデルゼーが總司令官として支那に來たのは、後より顧みて價値の無いことであるが、其の頃は模範的陸軍國の將官として重きをなした。英國の現内閣に列するチャーチルの父ランドルフ・チャーチルが日本に來たことあるが、神氣衰弱の療養とやらで、人を訪ひもせず、人に訪はれもせず、殆んど知られずに過ぎた。近以内に東宮殿下御訪問の答禮として、貴賓名士が來られるといふことである。英國皇太子、白耳義皇太子が來られ、佛國名將なる元帥ジョフルも見えるといふことであり、始めて外國と交際した時に較べ、大なる進歩を認めず居れぬ。而して近く米國に開かれる軍備制限會議は日本及び東洋に最も直接の關係がある。

(大正十年八月一日)

我が日本の雄大性

白國に對して樂觀悲觀あり、國自慢と國嫌ひと並び存するが冷靜に考へて我が日本の世界史に相應の位置を占むるを認めざる能はず。建國以來、漸次發達し、島國を以て元軍と内地に戦ひ、明軍と對岸に戦ひ、常に大陸の大國と頡頏し、遂に清軍に勝ち、人口七千萬を計へ、文化に於て東大陸に率先し、西大陸と馳逐する勢を呈するは、他に何の缺陷あるにせよ、人類の進歩に與かること少からずと謂ふべし。古今東西、一層國力を張大せるあり、一層文運を進展せるあるも、要するに期間長からず、日本の如く久くして愈々熟するは稀有の例に居る。

日本は如何にして斯の如くなるか。種々の事情あるも、主因は普通と言ふ如く、能く吸收し、能く同化するに在り。祖先教を以て立ちながら、儒教を採用し、佛教を採用し、南蠻を採用し、紅毛を採用し、之を日本化し、日

本民族の發展に資せずんば已まず、孔孟も日本に入りて日本化し、陽明も日本に入りて日本化し、釋迦や、外道や、皆日本に入りて日本化せり。或は模倣を以て半開民族の事とし、日本の猿眞似を罵るが、其の單に猿眞似を以て終らず、模倣以上に出で、出藍の域に入るは、嘗て之を罵りし者が後に我々警戒するを以て察すべし。

忽ち烈は儒教、道教、佛敎、西敎の自由宣傳を許し、人が其の一を擇ぶべきを勸むるや、彼れ答へて曰ふ、四敎各々自ら眞實と稱す、悉く之を許せば何邊かに眞實あるに非ずやと。彼の度量は領土の天なる如く大なりき。元寇の變、元僧祖元鎌倉に住み、間諜と疑はる。時宗が之に師事して替らざるは、度量忽ち烈に譲らず、大事を決定せる所以ならずや。戰國終熄期に出でたる秀吉封建破滅期に出でたる隆盛等、互に性格を異にしつゝ、海瀾從二魚一躍一天空。任二鳥飛一の概あるに於て一致す。是れ我が雄大性を表示する者、之に較べて小なる哉疑心暗鬼を生ずるの徒。

(日本及日本人より)

黑黃白人對等觀

普通に黒人を最劣等とし、少しの疑ふ所無く、黄人が之に次ぎ、白人が最も優等と考へることになつて居り、概括して有色人と白人とに別ち、前者は劣等並びにする。色の黒い程劣等、其の薄くなる程優等とし、有色人種も之を打消さうとせぬ。若し斯くて眞に優劣が分れるならば、さう認めるの外なく、さう認めるを當然とする。何れの場合にも眞偽を顛倒してはならず、何處までも眞を眞とし偽を偽とせねばならぬ。

處で白黄黒は果して優劣を示すかどうか。現に白人が最も勢力あり、黄人が之に次ぎ、黒人が最も劣るのみならず、解剖上で黒人は白人よりも腦量が少ない。白人と黄人との腦量の比較が判明せず、或調査に據れば、黄人で優るのがあるけれど、何處となく白人に劣ると考へるに傾く。黒人を最劣等とする以上、之に近い程劣等になり、黄人が有色とせられるだけ、黒人の列に近づく程である。併し黒人は眞に劣等であるか、現に勢力無いのが之を證す

るか、暫しの少いが何よりの證據なるか。人と猿とを比較し、黒人が猿に近いので劣等と斷定すべきであるか。一應さう考へられ、又實にさう考へられ來つたが、斯く考へるのは根本に於て誤つて居る所が無い。其の誤つて居るが爲め、今日豫想せざる禍根を後に残すが如きこと無い。

初め如何にして黒黄白の區別が出來上つたか、種々の議論があり、容易に決すべくもないが、今日まで知られた限りに於いて、人類が熱帯地方に出で、殊に印度の東南風味附近に出でたらうと察せられる。類人類が熱帯に棲むのを見ても、斯く考へるを自然とする。黒人が猿に近いといふのも之に伴つて居る。進化の律で、類人類に似たものから人類が出で、これが進んで黒人となり、黄人となつたと思はれる。黒人が黄人となつて白人に化したか、將黒人が一部黄人となり、一部白人となつたか、要則に屬するとし、兎も角も黒人から他の人種が分れ出でたとする。現在の黒人と同様のものから他の

人種が出でたか、今日見るべからざる黒人から黄人及び白人が出でたか、何れにしても黒人を以て最初の人種とせねばならぬ。

黒人が熱帯地方に適する如く生れ出でたのは、何人も疑ひを容れぬ。黄人でも、白人でも、夏になれば顔が黒すみ、暑いと黒いと澤るべからざる關係があり、人類が熱帯地方に出でたので、黒く生るべきものとなつて居る。黄人及び白人と較べて腦量の少いのは、頭蓋骨の厚い爲めであり、其の厚いのは、突次に障すの必要あるに因り、寒帯に住居するには、黒人の如き體格を具へるに越したことが無い。今でも熱帯地には黒人が多く住み、他の人種は之と同等に上り難い。黄人及び白人が、熱帯を離れて出來上つたものであること、夏に黒くなつたものが、各々果味を去るを以ても察し得られる。熱帯地方に居る間、黄人となる事も出來ず、白人となることも出來ず、黄人及び白人の出來上つたのは、熱帯より離れたが爲めと定めねばならぬ。

そこで何故に熱帯を離れたかを考へべき順序になるが、過去及び現在に行はれる所に徴するに、他國へ移住するのは有力者でもなく、無力者でもなく、有力者は國內に於て相當に

満足する所があり、他に移るの必要を感ぜず、無力者は不自由なる生活をして不自由を感ぜず、他に移つて新たに運命を開かうと、意氣も無く氣力も無く、先づ中間に居る者が移住民となる。富貴なるが他國に移住するなど、或特別の事情を除いてあり得べきでない。權力争奪か何かで失敗し、國內に居れぬので移住し、さうでない限り住み馴れた土地を離れず、植民の必要を説いて廻つても、自ら國を離れて他に永住しようとせぬ。貧乏人は國內でみじめな生活するよりも、他に移住する方が得策と思はれ、敢て動くを厭ひ、前の如くみじめな生活を續けて居る。そこで移住して新たに身を起すものは中間の人物、即ち氣力もあり才幹もあつて位置を得ず、新たな運命を開かうとする方である。歐洲各國から米州に移住したものが多

いが、國內で第一流と見られるのは移らず、幾らか失意で不平を懐いて居るのが多い。米國獨立に運動した人々で、誰が母國の第一流若くは第一流の子孫であるか。次男・男といふ所があるにしても、第一流の直系といふのが無いでな

いか。第一流といふは語が弊あるにせよ、世間で斯く認めるものが全く開けぬ土地に引移らうとすることが無く、日本でも北海道へ移つたの

に、男爵位の所あり、指折りの大名中に一人も無く、密に自ら移らうとせぬ許りでなく、移らうとしても左右から押し止め御自身お出でにならなくても、他に譲らでも移つて事業を起すものがあるといふ已まぬ。此れに由つても、熱帯地方から離れるのは、有力者でもなく、無力者でもなく、其の中間に於てしたのであることが出来る。

熱帯より離れるとて、急に遠くに行くのでなく、住かづつ離れるのでありながら寒い地方に移るのは、何かにつけて不便があり、好ましくなからう。椰子も芭蕉も生長せず裸體で居れぬ所に移る氣にならぬ。それにも拘らず移るのは、天變地異に慣儀なくされるの外、安んじて生活し得ない事情あつての事、即ち喧嘩することあり、思ひ切つて飛び出さうとするやうな所がある。第一流と最下等とは長く熱帯に止まつて居り、天變地異を除いて之を離れることが無い。數十萬年間種々の異變がある、地軸が動いて米河が出来たりしたが、現在の熱帯附近に何程の變化があつたか。寒帯が熱くなつても、割合に變化少く、變化があるにしても、有力者及び無力者は、成るべく遠くへ移らうとせ

ぬであらう。今日黒人中、大きくて強いのがあり、小さくて弱いのがあり、著しい差があるのは、有力者と無力者とに分れたが爲めでないか。而して中間なるものが熱帯に移りて黄人となり、更に寒帯に移るか、移らずとも氷河に苦められたものが白人となつたのでないか。白人は皮膚がらして太陽の炎熱を受けなんだからであることが分り、寒い所で幾代も經過したに相違ない。白人の體格は寒い地方に生活するに適して居る。

精しいことは分らぬけれど、人類が亞細亞の東南より出で、黒人が熱帯に據まり、寒帯を離れて熱帯に住んだのが黄人となり、之に容れられなんだのが遠くに移り、氷河の融ける頃に西亞細亞及び歐洲に住居し、白人となつたのでないか。黄人が黒人よりも文明に興る所あるのは、熱帯で年が年中纏綿んで暮らし得るのに、温帯で秋に涼しく、冬に寒く、氷雪をも防がねばならず、何とか工夫を運らすを要し、能く防ぎ得ぬものが消滅するを免れぬに因る。寒帯同様の土地に住居する白人に於ては、耕作が温熱の土地ほど宜からず、狩獵若くは牧畜で暮らすことが多く、それも温熱の土地で過半分にすると違ひ、必要に迫られて趣向を凝らさね

ばならず、智慧を録らうと勉むるの習慣を生じ、僅かづつ録るのが積り積つて目立つやうになる。初め熱帯から寒い土地へ移り、愈々寒きへも移つたのは、郷里に留まつて居ることが出来ぬからの事、其の當時に於て不幸の境遇と謂ふべきであり、寒さに難儀するなど、餘計の災難を被つた次第であるが、後から顧みれば、必要に應じて身體を鍛へ智慧を録り、安樂に過して居るものよりも活動し得るやうになつただけ、幸福を受けることになつて居る。斯かることは後にも常に見る所であつて、榮枯盛衰が幾度繰返されて居るか知れぬ。

黒人の有力者は熱帯に留まり、之を離れるを要せず幸福の身分であつたのが何時までも黒人として續いて来た所以であり、黄人が温帯に移るを餘儀なくされたのは、其の當時に於て不幸であつて、後に黒人に優るの働きをなすやうになり、白人が更に一層寒い所に移るを餘儀なくされ、艱難辛苦したので、後に幅を利かし、現に白人が最も力あり、黄人が之に次ぎ、黒人が最も力を缺くといふことになつて居る。

それならば此の儘何時までも白人が優り、黄人が之に次ぎ、黒人が最も劣るの状態で續く

かどうか。同じ温帯の中にも、熱い所と寒い所で違ふが、熱帯で住居するのは、黒人が最も適して居り、黄人、白人、黒人が最も不適當である。黒人は熱帯に生長し、天然の恩澤に安んじ、智慧を録ること少く、智慧を録りに録つた白人の爲めに、奴隷とし他に運ばれて牛馬同様に取扱はれるに至つた。其の餘りに甚しいので、奴隷解放の聲が盛んになり、遂に其の實行を見たが、智能に於て白人と較べものにならず、解放に盡力したのも、白人と同様に取扱ふの困難を知り、表面こそ同胞人類とすれ、事實上於て最劣等の運命づけられたものとし、別扱ひすることになつて居る。多數は斯かる同情なく、無遠慮に之を排斥するを憚らぬ。同じく電車に乗るにも白人と共にするを許さず、同じく罰するにも白人と同じくせず、私刑を加へ、生きたがら其を殺したりする。合衆國の人口九分の一を形造りながら、人であつて人でなく、日本で××扱ひされるよりも甚しい。

處で黒人は眞に斯くして運命づけられて居るか。時として黒人中に傑出した人物が出て、白人をして後に瞻若たらしむることがある。ブー・カー・ワシントンの如き、さうであつたが、唯彼は純粋の黒人でなく、半黒であり、且つ白人と

の對等を望んでも、勢ひの許さぬ所としたらしい。世界戰役の開ける頃、ジャマイカ島から純粋の黒人マーカス・ガーヴェエが米國に移つて活躍し、阿弗利加合衆國を建設すべきことを唱へ、黒人進歩協會を統率し、會員三四百萬人に達して居る。而して文明は黒人が始めたものであり、基督は黒人であるといふやうに説き、白人が承知せぬ計りでなく、黒人中にも合點せぬのがあり、中にも黒人宣教師が白人の感情を害するの不利を恐れ、攻撃の鋒を差向ける。

ガーヴェエは殊に之を反駁し之を喝破して已まぬ。黒人のみを株主とする資本二千萬圓の汽船會社を創立する時、ピストルの弾を受け、急所を外れたとて綱帶をし、松葉杖をついて會場

に現はれ、黒人をして歡喜措く所を知らざらしめた。ガーヴェエの説く所黒人を鼓舞するに急率強陣會のやうに聞えるが、實は相當の理由を具へるかと見ねばならぬ。ガーヴェエ自ら何の理由に於てするかは別とし、黒人が最初の文明を築き上げたといふに誤りは無い。實に人類が熱帯に出で、文明を始めたのは、専ら黒人の手に成つて居り、文明の基礎は黒人の築いた所として差支無い。枝葉が茂り、花が咲き、實が結

の對等を望んでも、勢ひの許さぬ所としたらしい。世界戰役の開ける頃、ジャマイカ島から純粋の黒人マーカス・ガーヴェエが米國に移つて活躍し、阿弗利加合衆國を建設すべきことを唱へ、黒人進歩協會を統率し、會員三四百萬人に達して居る。而して文明は黒人が始めたものであり、基督は黒人であるといふやうに説き、白人が承知せぬ計りでなく、黒人中にも合點せぬのがあり、中にも黒人宣教師が白人の感情を害するの不利を恐れ、攻撃の鋒を差向ける。

るのは、昔人又は白人の力であつても、根や幹を黒人の培養したところに倚る。是皆は猶太人であつて、白人に屬するものとされるが、神學の解釋で如何になるべきか。神は自らに象つてアダムを造り、其の肋骨でエベを造つたとあるが、原始人類の黒人であるは、少しも疑ふことが出来ぬ。人ならざる動物が初めて人と認むべきに至つたのが、黒人であつたことは確かであり、神に象つて此の黒人を造つたとあれば、神の容貌が黒人であり、神の子なる耶穌も黒人たるべき順序となる。ガーヴェーが、基督を黒人とするのは、一體に笑ふべきでなく、黒人宣教師の説く所を木片微塵に打ち破るのも偶然でない。

ガーヴェーが黒人の爲めに、アフリカ合衆國を造らうとするのは、夢のやうな話であつて、明かに道理を具へて居り、少くとも猶太人が猶太再興に従事して居るのに譲る所がない。猶太再興は久しい間の計畫であり、一つの空想とされて居つたのに、漸く着手するやうになり、近頃エレサレムの城壁の破損したのを修復しつつある。アフリカは白人諸國の間に分割され、黒人の領土は小さなりベリヤとアビシニヤ位であり、ガーヴェーの計畫では、黒人四億の

アフリカに大國を打立てるにある。黒人の数は明かでない、或は其の半分に計算したりするが、何にしても相應の數に上り、集まりて大國を造るに足る。アフリカは既に白人に於て領有を定めて居り、黒人に於て國を立てる餘地無いでないかと疑はれるが、黒人に云はすれば、白人が如何にアフリカを領有したか、前に羅馬法皇が世界異教徒の土地を分ち、東を葡萄牙に宛て、西を西班牙に宛て、日本は葡萄牙の占むべきものとなつたが、白人がアフリカを領有して居るのも、之と同じく、領有して居る領りだつて居らぬ。領有が兵力を以てし、黒人は必ず屈服せねばならぬというても、アフリカの四分の三は熱帯であり、熱帯の大部分は平均八百度以上に居り、白人は熱帯以外、北に百萬、南に百萬、今後増加するとして熱帯に尙程のことをなし得るか。若し黒人が政府を設け、國家として團結したなら、他からどうすること

も出来ぬでないか。斯く團結し得るかが疑問であるが、最近の戰役で、黒人の働き目醒ましいものがあり、佛國及び白耳義の之に負ふ所少なく無く、米國の黒人がガーヴェーを戴いて運動し始めたのも、戰役に於ける功績に意を強く

した所がある。聯合國が勝つたのは黒人の力でないかと廣言するのは、誇張に過ぎるけれど、決して之を輕んずべきでない。戰役の公債募集に應ずること四億五千萬圓、白人の應募額に較べられぬにしても、金力でも相當の準備を整へ得るは明かであり、若し黒人がアフリカに國を建てようとして列國に通知した時、關係諸國は全然之を拒絶すべきであらうか、將何程か其の言ひ分を入るべきであらうか。

白人でアフリカの四分の三なる熱帯區域を開墾し得るならば、黒人に對するの德義は兎も角、世界の文明より見て許容し得ぬでなく、誰が開いても開きさへせば宜いとするけれど、これまでも白人がアフリカに事業を起すのは、黒人を使役してのことであり、其れさへ熱帯區域に於てすること甚だ少い。熱帯に黒人も耐へ難い風土病があり、今後土地を開拓し衛生設備を整へ之を改め得るとし、白人の無難になるまで容易のことでない、今日白人に於て領土を定めて居るものの、其の儘幾代も續くやうなことがあるまいか。黒人の有力者をして事に當らしめたならば、從來白人の着手したよりも効果が多

く其れ文け少しも文明を促進することにならう。黒人が相應に資金を備へて居り、自ら事業

した所がある。聯合國が勝つたのは黒人の力でないかと廣言するのは、誇張に過ぎるけれど、決して之を輕んずべきでない。戰役の公債募集に應ずること四億五千萬圓、白人の應募額に較べられぬにしても、金力でも相當の準備を整へ得るは明かであり、若し黒人がアフリカに國を建てようとして列國に通知した時、關係諸國は全然之を拒絶すべきであらうか、將何程か其の言ひ分を入るべきであらうか。

に従事し得るが、他から援助を興へたならば、一層開發を速かにし、嘗て暗黒大陸の名ありしものを變じて、光明大陸とするが如きこと無いとせぬ。黒人が之を企てるの意無ければそれまでの事、白人の力を注ぎ得る時を待たねばならぬが、黒人自ら開發しようとするならば、之を妨ぐるよりも之を奨励し援助すべきでないか。之を妨ぐるのは文明を妨ぐると同じく、白人の恥辱とすべきでないか。力が盡きて決するもの、黒人が何を言ふとて、何を爲すとて仕方が無いとするか。今後果して長く之を抑制し得るかどうか。

前に黒人が世界のことを知らず、白人の言ふが儘に従うたが、近來知識の増進すると共に、勢を變じ來り、未だ自強と謂へぬにしても、幾分か之に近づいて居る。現に白人中一本立ちでガーヴェーと争ひ得るものが、何の割合であらうか。多数は平境して斷量が少いだけ、白人に劣るといはうが、純帯區域で事を成すに達すること魚の水に棲むに似て居り、純帯で優に白人と對抗するに堪ふるであらう。ガーヴェーを假大統領とし、アフリカ合衆國の建設に努むる所、天晴れの次第と謂ふべきでないか。之に較ぶれば、愛蘭の獨立、朝鮮の獨立など、甚

だ小さな問題に屬する。それが獨立したとて、世界の文化に何等影響あるか。支那で米國の援助を得、日本の勢力を縮進しようとするが如きも、日光きのみの往事に過ぎぬ。今に黃人の狀態、黒人に劣るところ無いとせぬ。併し、黃人は何時までも現狀を以て續くであらうか、或は現狀よりも悪くなりしはせぬかとの疑ひがあり、借款國で支那分劃の端を磨きよせぬか、白人が支那に勢力を占めるのは、日本を島の内に閉ち籠めることにならぬか、黃人は遂に白人に屈すべきでないかと云はれるが、斯かることが絶対に無いと保證し難く、時として之に似たことが起らぬ。限らぬ。けれど、白人が勢力を抑ふとて畢竟何程の事をなすか、東亞細亞の人民を他に移すことが出来ず、現に安んじて居る所に安んぜしめねばならぬ、之に反して再び成吉思汗、帖木兒の如きものが崛起すること無いと云へぬ。戈壁から亞喇比亞沙漠に掛けの乾燥した土地は、幾條の水溝が潤れ果て、人の繁殖に困難でも、時代に依りて水草の便を加へ、再び彼の如き活動を敢てする可能性を具へて居り、其の出づるの曉、支那が如何に之を防ぐか、支那が之を戴いて政府を造るに至らば、力を波斯、亞富汗に及ぼし、延いて印度

に臨むことが出来、印度人が之を逾へるとあつては、何の結果となるか。成吉思汗及び其の子孫は、渤海から波爾的海まで領有したが、今は單純なる征服の行ひ難しとし、此の廣大なる原に特殊の大波瀾を巻き起すこと無いと謂へぬ。或は之に先んじて露國より赤化運動を起すかも知れぬが、亞細亞が何時までも現狀で續くものと定むることが出来ぬ。

東亞細亞の黃人は、黒人よりも知識が進み、一ガーヴェーの下に閉居同するやうなことが無けれど、ガーヴェーの如きものが全く現はれ出でぬと限らぬ。英雄豪傑として能力に限りあり、知れたものとするが、今日支那で鈍衆の脊較べて居るものよりも、少しく傑出したのが現はれ、衆を壓いたならば、幾年も不安狀態で居つたものが、相率めて之に馳せ向ふやうになりしはせぬか。夢のやうな話になるが、全く不可能でなく、半世紀一世紀に現はれぬでも、今後幾世紀間に其の可能性あるとする。遠き將來に於て列國が組織を變じ、今日と全く趣きを異にし、さういふもの出づる餘地無いやうにならば格別、現狀の甚しく崩れぬ限り、亞細亞の或る部分に異變が起り、黃人が奮ひ起るやうなこと無いとせぬ。今の儘で推し移つて

行けば、黒人がアフリカの大部分を初め、世界の熱帯に住居し、黄人が亞細亞の大部分に住居し、白人が歐洲及び亞細亞の西南、アフリカの南北に居り、北南一兩米洲は白黄黒人混合の土地となるべき順序である。濠洲は現に白人濠洲を唱へつゝあつても、熱帯に居るは他の人種の力を併らねばならぬ。開かぬ積りならば論外であり、開く積りならば白人濠洲といふべきでない。

今日の所、白人が最も強く優越権を占むるに努めて居るけれど、世界の文明より云へば、各人種を以て區域を定めるのが穩當であり、便利であり、要するに最も有效である。人種の差別を撤廢し、色を以て毛嫌ひせぬことになれば、申分無けれど、さう行かぬとならば、各々分擔を定むべきである。厭でも應でも白人に於て優越権を占めようとはせば、幾多の變化の後、事實に於て此の邊に落附くことになる。

(大正十年七月一日)

世界外交の三勢力

國際聯盟の何狀なるを問はず、五大國が世界の外交の最大勢力なるに相違なく、其の共同の前に何國も能く抵抗するを得ず。實に五大國は世界の趨勢を左右するに堪ふ。されど五大國が何處まで共同するかが疑問に屬し、曩に米英二國が他と離るゝかの觀を呈し、漸くして米一國が特別の態度に出で、東西兩半球の事情を異にするを示す。五國間に何等龜裂の跡なきも、唯一無二の大勢力と認めず、二個の勢力と認め、少くも二勢力と爲るの恐れあるを察すべし。四國の共同は最も優勢なりとし、モンロー主義の範圍の相應に有力なるを示す。

戰役以前、五大國の外に三大國を計へ、後者は歐大陸に覇權を争ひ、時として五洲を震動するの勢あり。戰役以後、三大國が當年の雄姿を失ひ、恰も鷲が變じて鳶と爲れるが如し。而も填こそ小國に降りて再興の殆ど全く

絶望なれ、獨や、露や、困難は則ち極めて困難、尙ほ未知數たるを失はず。獨は戰禍を被れるが上、土地を削られ、賠償を迫られ、甚しく疲弊せるに拘らず、未だ基礎を崩壊せず、大國の再築を始め、場合によりて汎獨逸を企つべし。露は紛亂の極に陥り、混沌狀態ながら他國を脅威し、他國は之を奈何ともする能はず。

獨及び露が國富ます、兵強からず、強國の資格を喪失し、而して尙ほ不安の念を他國に興ふるは、單に過去の幻影よりせず又必ずしも危險思想を醸生するよりせず、何の日にか回復すると見え、若し兩國提携し、附近小國を誘ふ、曉、之を防止するの容易ならずと想はるゝに由る。彼等は積極的に畏れられざれば、消極的に畏れらる。孰れにても今日は斯かる獨逸の勢力を計算外に置くを得ず。今後新形勢の下に世界の頗る多事なるべきが外交の重要動力と爲るは以上の三勢力にして、其の關係の如何にて平和を保つべく、或は變亂を起すべし。

(日本及日本人より)

明治年間に於ける思想變遷の一斑

思想界と云へば、甚だ範圍が廣い。此處には、たゞ國家に於ける關係を主として述べることにする。

我國は明治四十五年の間に、歐洲の近世史を短く繰り返して居る。如何にして繰り返したかといへば、明治以前の日本が、宛も歐洲の主たる國々が近世史に入らむとする状態に似て居たからである。因があつても縁がなければ結果は現はれぬ。譬へば、支那が日本に先んじて歐洲に交通して居りながら、日本のやうに影響しなかつたのは、縁が無かつたからである。支那は元來國としては歐洲各國と違つて居る。是を前にして羅馬、是を後にして露西亞が、幾分か似てゐる位である。然るに歐洲の近世史に最も活動した國は、最も日本と似てゐる。交通機關が益々進まうとする今後は別として、是迄の國は、人口及び面積に制限がある。餘り大きくても、餘り小さくても可かぬ。日本は其歴史中、歐洲列國と違ふ所があつても、國情を分類する場合には、略々同じ階級に入るべきで

ある。
明治以後に變化すべきことは、其の以前に已に素養があつたのであつて、變遷の系統は、歴史に徴すべきである。而して明治以前に最大問題となつたのは、尊王攘夷であつた。既に米國軍艦が到来し、引き續き各國の軍艦も到来し、新しき時代に應ずるには、斯くてはならぬとした。是に對し、舊來の政府を維持しようとする者は、佐幕開港となつた。自ら唱へたるあり、自ら唱へずして人から斯く呼ばれたのもある。尊王佐幕は對内問題である。攘夷開港は對外問題である。初めは唯漠然として争つたが、後漸く具體的になり、互に豫期した所と違ふに至つた。而して是等の名稱は、維新の變革と共になくなつたが、勢は依然として存在して居る。

簡單に云へば、民選議院論が尊王の代りに唱へられ、征韓論が攘夷論の代りに唱へられた。征韓論が初めに出で、是が破れて民選議院論が出たのであるが、前後あるにしても、事は關聯してをる。民選議院論から民權論が出で、立憲政治の實現を見るに至つた。而して征韓論から國權論が出で、帝國主義が出て、領土擴張の實現を見るに至つた。併し細かに見れば、明治政府は初め征韓論を争ひ、非征韓論が勝つた。非征韓論必ずしも非國權論者でないが、非國權論者として差支ない場合が多い。非征韓論が勝つて、佐賀の亂及び西南の亂に全勝を得た爲に、此の點に於て思ふ存分になり、而して民選議院設立にも反對し、十四年大隈伯の國會開設意見にも反對し、同時に、十年後に國會開設を豫約することになつた。政府に位置を占むる點に於て、國權論にも勝ち、民權論にも勝ち、所謂薩長藩閥の全盛を諒ふに及んだが、勢に乘じ、遂に自ら行詰まるやうになつた。征韓論を全滅し、國權論を攘夷の名残とし、成るべく平穩無事に國家の體面を善くしようと思ひ、風俗を歐米と同じくし、歐米人の感情をやはらげて、條約改正もしようとした。同時に民權派に勝ち、獨逸の憲法に開り、政府の權力を増大しようとし、苟も反對する者を十分に壓迫しようとし、つまり外に對して弱く、内に對して強いといふ關係になつた。一方では頻りに鹿鳴館で舞踏し、或は假裝舞

踏を演じて、時の諸大官離出になり、而して一方では保安條例を執行し、政府に反対するものは、東京より三里以外に放逐した。

斯く外に弱く内に強くなつたのは、前よりの勢からして、殆ど知らず／＼そこに立到つたのである。即ち國權論に反対し、民権論に反対し、反對の極の奇異なる状態になつたので、當局者も自ら後に省みて、思はぬ始末になつたと爲たであらうが、其の當時、勢に驅られて何の怪む所もなく、變る得意であつたのである。

斯くの如くして到底終るべくなく、明治二十一年に内閣が更迭となつた。其の後、前内閣に相當の位置を占めた伊藤山縣井上の三人は、長州の三尊として政府に最も重きをなしたのであるが、明治二十年迄の思想は、殆ど一變したと言つて善い。即ち是等の人々は、其の後思ひ返したのである。思ひ返さねばならぬのである。而して表面重要な位置に居つたにしても、實際の働きはそれ以下の人々が爲したのが多い。征韓論に勝ち、民選議院論に勝つた連中は、明治二十年に、至るべき所に至り、遂に自ら非を悟らざるを得なかつた。

明治二十年迄は、官吏は歐米に旅行し、或

は遊學した者も随分あつたが、規則立つた教育を受けたのは甚だ少い。所が、其の連中が政治に擔はつてゐる中、規則立つた教育を受け、或はそれと同様に見做すべきものが増して來、前には振實論者が國權論者となり、尊王家が民権家となつたのであるのに、今少し、知識に富んだ者が、同様の問題を取扱ふことになつた。二十一年大學卒業生及び札幌農學校卒業生の中國粹保存を唱へたのも其の一種である。國粹保存論は名の宜しきを得ないので、國體論と改稱したが、保存の語は前に出來ただけ、世間に行はれた。それは後の語を以て言へば、稍知識を備へただけに、日本國民として自覺することになつた一端と云ふべきである。政府に於ても、初め反對派を壓迫する爲遂に思はず知らず、外に強く内に強いやうになつたが、或る部分に於ては、已に／＼此の時の外に出で始めた。

外國と交通してより最も多く入りこんだのは、米國の書物である。米國の宣教師で、英語の教師となつたものも尠くない。ヘンリーの「自由か死か」の語は、廣く行はれるやうになつた。而して明治三年、佛國でナポレオン三世の帝政が消滅し、共和政治となつた。共和となると共に、革命當時の事が新たに記憶から喚起され

て、ルソウの民約論が新たに出て、盛に歡迎された。米佛の此の思想が合併して、自由民権論に變じた。次いで英國流の政治が、改進黨の理想となつた。所が、佛國も容易に以前の勢に恢復し得ず、而して獨逸が新勝の勢で、誠じ目の出の勢である。何でも彼でも獨に則らなければならなくなつた。加ふるに政府の權力を重んずる方で、執權者に都合よく見える政治向である。伊藤公が隨行員を従へ、憲法取調の爲に歐洲に行つたのも、主として獨逸を參考にする爲であつて、ビスマルクが老いても猶全權を握つてゐた時分である。其の時獨逸で公の爲に斡旋したのは、非田少將であるが、少將は公の卷煙草を吸ふのを見て、「あれはシガラのビスマルクである」と罵つた。確にビスマルクにかぶれたのであるが、ビスマルクの如く戰役の起るのを豫期したのではない。所が十七年、大山公が三浦、野津、川上、桂の諸氏を引率して歐洲に行き、川上、桂の獨逸で調査する所があり、大陸に出兵する順序をも考へた。

十五年及び十七年に朝鮮の騒ぎがあり、事支那に關聯して居たので、陸海軍に於て支那に目を著けたが、初めの聲は、眞に戰爭にならうとは思はなかつた。併し天津條約を結んだりする

後、早晩戦争の遂ぐべからざるを考へるやうになり、其の準備の爲、川上等の興る所が擧ぐなかつた。之に應じ、海軍に於ても準備を怠らず、議院で製鐵費を許決し、宮中より毎年三十萬圓支出すると仰せ出されたのも大それである。而して遂に二十七八年役となり、次いで三十七八年役となつた。曩に征韓論に反對したものは、俄に歲月を延ばしただけで、理に於て全く屈辱した順序になる。而して民選議院に反對したのも、帝國議會の開けてより、初め超然内閣を唱へたのが、後伊藤公が大命を受けて憲政黨に開け渡し、次いで自ら政黨を組織し、山縣亦に於ても政黨と妥協し、或は情意投合と云ふやうな事が絶えぬ。之も初め反對したのが、歲月を延ばしただけである。今の所、外に對して帝國主義、内に對して憲政主義と云ふやうな調子である。即ち幕府を覆へた所、尊王攘夷の發展である。

黨化主義と云へば、法律論及び民選議院論に反對し、それに關聯なく政治を行はむとして明治二十年に至つた間に現はれてを。即ち議院の舞踏を冠頂として居るのである。その後特別に黨化主義と稱すべきものもあるが、悉く國民性に同化し、又同化し得ると認めら

れて居る。國家を主として考へれば、攝關を廢絶するが、是に關聯してさまゝの事がある。初め自由民権を唱へたのは、時の執政者に反對したのであつて、皇室は何處迄も管ばうとするので、民選議院設立の建白にも、之を明かにして居る。軍制政治に霸道であつて王道でない。幕府に對し皇帝を稱へたのも、將軍政治に對して王者の邊の行はれんことを望んだ所がある。自由民権が説かれた後に明白なる連絡はあるが、多數の中には意見を異にしたのがある。即ち自由民権よりは個人主義に専らになつた者がある。明治十五年頃、大阪の門田某が憲政黨に無禮したのは、共和にかぶれたのらしい。それから少し後れて、東洋社會黨の組織された事もある。が較々詳らかに社會主義が論ぜられるやうに成つたのは、獨逸思想の輸入に關聯して居る。マルクスの著書の英譯になつたのも、興つて居る。

以前より待ち置けた所のもの、即ち尊王攘夷が變遷して皇室の方面に於て立憲政治が行はれ、攘夷の方面に於て二次戰役が行はれたが、何事にも末に見ればさほどでもなし富士の山に意がある。海軍競争はすんで、議院が議

場で議したとて、別に感心した事はない。前に自由民権を唱へたのは、官吏の位置を取つて代らうと云ふ私情を交へたのが擧ぐないが、文官發用の規則嚴重であつて、官吏たるを斷念さればならぬ。折角高等科を受けて如何にかする。法律を修めれば文官試験をも受けられるが、受けても採用されるは幾何もない。憲法があつた西郷が征韓論を唱へても、反對が多かつたやうに、國權擴張を書けぬものも擧ぐない。或は二三年のため負債が重くなつただけで、何の利益もないと思ふ者もある。あれや是やで、國家は諦らぬものであると思ふ者もある。

個人主義には種類が多い、各自勢力を發揮し得るだけ發揮するので國家が發展すると云ふのは、個人主義であると同時に國家主義である、個人が基礎である。國家は其の基礎の上に成立つ、國家を維持せねばならぬか何うかは、期間である、先づ個人の思ふ通りに爲ようとするのが順序である、と云ふのは、國家に多く關係のない個人主義である。而して更に、國家は個人の行動を促せるものである、國家を擁護せねば、人として生存する意義を解し得られぬ、とする者もある。或は、國家のあると否とは興り

關せぬ、己の欲する事のみにて生活する、世の中に善し惡しんかは無、さう云ふものに拘泥するのは迷ひである、と云ふのもある。それに似たのは何處の國にもある。意見を發表するに、論文にしたのも小説にしたのもある。併し世界を通じて、國家的競争は年々愈々劇烈を加へる。相互に顧みて軍備を擴張する。従つて負擔が重くなる。然るに富が其の比例で増加するのが困難である。

近來歐洲に著しきことは、社會黨員の増加である。英佛獨甚さうである。日本に於ては政策的の似たのがあつても、其の名を思ふことが甚しい。社會黨の名に於てする黨は、絕對的に禁止する。無政府黨と同様に取扱ふ。鹿鳴館で舞踏の眞似した者は、其の當時に觀れば、如何なることを眞似るに至るか計り知られぬことを思ふであらう。其の輩は何時迄も社會黨を禁じ得るとするか。幕があらば因が結果を生ずる。縁がなければ因が結果を生ぜぬ。世の中は廣い、様々の事がある。近い處を見れば、小さい山も大きい。人々各々己れの山を大きく言つて居る。併し富士山の上から見れば、其の山の他に色々の山がある。全く大體を失はぬやうにするが善い。

(大正元年九月)

驕奢階級への反感

驕奢階級への反感は世の常なれど、他の階級が力に乏しく、運命と諦めし間、反感の聲低く、何程の反感なやを察し難かりき。封建時代は御上の御無理御尤も、地獄の沙汰も金次第、貴族及び富豪が氣配氣儘、勝手放題、不可抗の勢と知らる。成金こそ邸宅を宏壯にし身分不相應として誇せられる、外様藩主は藩治に關精して疑を被り、往々放埒を極むるを餘儀なくせらる。昇平の久きに伴ひ、高確なる者が閑居して不善を爲し、幕末の變動に周章狼狽し、廢藩置縣後、謂ゆる士族の商法を以て將倒しに倒れ、素町人の嘲笑する所となる。

一朝にして三百藩の消滅せしは、廢藩の勢の成熟せしに出で爾後外面よりも内面の變遷頗る急、若し尙ほ舊習慣にて上下の區別を嚴にせんか、反感を招くこと舊幕に千百倍す。士族が勢力を失ひしに反し、商工農

間に成金の續出し、驕奢に於て諸侯を凌ぐ者少からず、間々將軍に擬し、田舎源氏に倣ふ。これに阿附するの徒は、殿様と呼び、御前と呼び、單に稱呼に止まらず衷心より敬意を拂ふが如し。されど利害に關係なき大多數は、貴族に對し、富豪に對し、殆ど平等に感じ、偶々傍若無人の振舞を見るや、愕然怒り、或は鐵拳を加へんとす。

歐洲の階級争鬪は由來劇烈なる者、特に近年に甚しく、萊因河以東に如き、三大帝國の破滅し、貴族及び富豪は勞働者の同意なくして安全を保障し得ざるの觀あり。是れ戰敗の影響を外にし、多年民衆が驕奢階級に反感を懷きし結果ならずや。當代に咎むべき無くして銃殺放逐等に遭遇せるは、前代に關係階級が驕奢に耽りたりし禍害とすべし。父母の父母不善ならずとも階級に不善者多ければ、其の餘殃を蒙るを免れず。世界に於ける變亂の大部分は、驕奢階級への反感に關聯す。我國は此と趣を異にするも、驕奢階級は自ら省みて戒むべし。

(日本及日本人より)

言と字と文

音

とは「コトダマ」に當てし漢字にして、萬葉に事
 靈と書し、字異にして意同じく、「そらみつやま
 とのくにはすべかみのいつくしきくにコトダマ
 のさきはふくにとかたりつきいひつがひけり」
 とあるが如く、日本に於ける一の重要な概念
 とあるが如く、特殊の妙味を備ふると知らる。普
 通に「コトバ」といふは單に口を閉閉して音聲を
 斷續するに過ぎざるが、一たび其の由りて起れ
 る所を尋ねれば、精神の奥底より出で、愈々尋
 ねて愈々測るべからず。多少汎神教を加味すれ
 ば、「コトバ」は神の意の現はるゝ者なり。希臘
 語に據りて「ロゴス」と言ひ來れるは正しく「言
 靈」に當り、プラトーン派は神の意の現はるゝ者
 とせり。基督教にて舊約全書にメムラといふは
 之と同じく、新約にはロゴスをも使用し、皆コ
 トバと譯し、神智を意味す。約翰傳第一章に、太
 初にコトバあり、コトバは神と偕にあり、コト
 バは即ち神なり。このコトバは太初に神と偕に
 在りき」とあるの類、明かに之を表明す。印度

は特にコトバに重きを置き、發音にも重きを置
 き、動もすれば音を以て直ちに理と爲す。眞言
 に「阿字觀」あり、龍猛菩薩の偈頌に、八連白
 蓮一肘間、炳現字素、光色、禪智俱、入金剛
 縛、召入如來、放靜智」といひ、初め音を妙と
 し、次で之を現はす字を妙とし、神感を極むる
 に及びたり。今日

と稱して尋常視するは、社會の狀態の複雑に
 して人事の繁劇を加ふるに出で、若し靜かに其
 の基づく所を考ふれば、神感、感を免れんは難
 し。韓愈が「大凡物不得其平則鳴」と言へり
 しは、不用意に出でたれど、精神と音聲と離るべ
 からざる關係あるを認めての事にして、實に音
 聲ある處、何等かの事件あり、摩擦に非ずんば
 衝突、然らずんば他の事故にて平和を破れるな
 り。氣鬱なければ音聲を傳へ難、日輪に事變
 あるも、地球の空氣に觸れざる限り、耳に聞え
 ず、唯目を驚かすのみ。月輪の如く空氣なくん

言語

ば、人の到達するも無言ならざる能はず。音聲
 は光の如く、熱の如く、電氣の如く普通のなら
 ず、殆ど全く空氣に限るが、空氣ある處に於て

音聲は心情を發表す

るに最も便利にして、動物が肺にて呼吸し始む
 ると共に、音聲を以て心情を發表せしと謂ふべ
 し。魚類が音聲を聞くが故、水中に在りて既に
 其の效用を知りしとせんも、之を聞くのみにて
 自ら之を發するを得ず。自ら音聲を發し、之を
 他に傳ふるは、陸上に棲息して以來の事に屬し、
 蝌蚪が水中に對靜する間、全く聲なくして沈黙
 し、一たび蛙に化して陸上に棲むや、啞々聲を、
 音聲を濫用する觀あり。「蛙鼓」として花鏡に「一
 蛙鳴、百蛙皆鳴、其聲甚壯、名蛙鼓」と
 説く。進化の順序に於て魚類より劣等なる昆
 蟲さへ、陸上に棲息するが爲め、音聲を以て心
 情を語る者少からず。「蛙鳴蟬噪」といひ、蟬は
 能く彼の喧囂なる蛙辭に拮抗するに堪ふ。固よ
 り陸上に音聲を活用するの便利ながら、之を
 活用すると否と、其の標ぶが儘にして、他に適
 當の方法あれば之を活用せざるも不可なく、陸
 上の動物にて少しも音聲を用ゐず、特別の方法
 を以て心情を發表するあり。胡蝶の戯るゝ、
 蟻の業務に従事する、皆無言に於てす。されど

肺を以て呼吸しては、幾許か之を使用するに傾き、沈黙なる蛇も時として微かに發聲し、空中を翔翔する鳥類の如き多少發聲せざる無く、中に隨る巧みなるあり、若し人類の如き智能を備ふれば、人類よりも辯に於て巧みなるべしと思はる。獸類は之に比して音聲を發すること少きも、鳥の如く語ふこと無けれ、同類間に喜怒哀樂を表示するに十分なり。

人類は音聲を活用すること最も大

にして、頭腦の發達するに作ら、之を活用する方法の進歩し、生活上に一日も缺くことを得ず。動物としては、陸に上りて發聲し、爾來幾萬代、以下今日に到達し、今は最早や空氣の傳達にて満足せず、電氣を應用し、電信に、電話に、工夫して到らざる無し。暴風雨の爲めに電信電話の線の遮断するや、關係地方に大なる恐慌を惹き起す。國と國と開戦する場合、一方に於て電信電話を使用し得ざらんか、必ず大敗す。音聲は人類社會の神經系を形成すとすべく、「コトバ」なる「言葉」の實、是に於て大に顯はる。斯く人事に必要な者は、人に於て忘るを得ず、小兒の漸く發聲する頃より、年長者は種々に教ふる所あり、「コトバ」を教ふるは、教育の第一著手なり。之と同じく、言語に

辨なる者あれば、之に巧みたる者が種々の方法を以て教ふ。文明が高まりては吸收すべき知識の多く、一々言語に注意し得ざるも、さまで知識の進まざる時代、師の關係は往々年長者の小兒に於けるが如く、言語應對に熟練するを主眼とす。論語に「子曰、從我於陳蔡者、皆不及門也。德行顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、言語宰我、子貢、政事冉有、季路、文學子游、子夏」とあり。昔陳蔡に從ひ、復久しく十哲として祀れる者、而して德行、言語、政事、文學の四科中、二科は明かに言語に關聯す。孔子が如何に授業せしやの知り難けれど、言語に重きを置きしは、疑を容れず。宰我及び子貢の言語に巧みたる、明かに史實の傳ふる所なり。孔子は剛毅木訥仁に近しと言ひつゝ、尙ほ言語文學を重んじし程なれば、開通を求むる者が之を念とするや言ふを待たず。

蘇秦張儀

が鬼谷に學びしとは、事實の如何の判明せざる者、而も共に辯舌を以て一世を動かすの意ありたるは、歴史の傳ふるが如く、張儀が盗と疑はれて咎たるも、數百、漸く釋されて家に歸るや、妻は曰ふ、讀書遊説する無くんば、何ぞ此の辱を受けんや。儀は曰ふ、吾が舌を視よ、尙

ほ在りや否や。妻が笑つて舌は在りと言へば、儀は曰ふ、然らば是ると。是れ舌力を恃みての事にして、戰國縱橫の士は概ね之と大同小異なり。單に舌力のみにて能くし難く、對手を首奪せしむる丈の知識輻すを要するも、主として使用するは音聲にして、列國が武力を離るの時、代能く口舌を以て將相を腐蝕し得たるなり。略々同時代に

デモステネス

が希臘に雄辯を揮ひ、マケドニアに對抗するに努む。或は希臘の滅亡を以て口舌の無用なるを證すとするが、之を反駁する者は曰ふ。蘇山王の威力は一時の專、デモステネスの雄辯は千歳に傳はりて種多の人を奮起せしめぬ、鶴は舌に若かずと。羅馬のキケロは之に次ぐの雄辯あり、説教の威力に壓せられて斃れしも、後に範を垂るゝ所少からず。後世斯くまで雄辯を以て鳴る者なきは、社會狀態の複雑にして力を伸ばすべき方面の増加せるに因るが、尙ほ相應に雄辯を以て鳴れるあり。十八世紀にもあり、十九世紀にもあり、今世紀にもあり、之を志して練習する者は、到る處に見る。多くは志ありて能なきの徒なるが、時として大に秀づるあり。雄辯雄辯の效用は未だ消滅せずと謂ふべ

し。如何にして雄辯と爲るべきか、之に就て説ける書は擧げて計ふべからず。米國の如く歴史の新たなる者は、初めより政治的・生活の理想を描き、之を實現するに努力し、建國の初め、パトリック・ヘンリーあり、辯を以て一世に鼓舞す。彼れ實に天來の雄辯家、何等學ぶ所なく、自由の身を以て、自由の地に住み、壓迫を被るに臨んで、自由か死かを叫破し、自由の民に共鳴す。自然の國は自然の人をして自然の辯を揮ひ、自然の法を説かしむ。後年數を經、青年團は青年團ならず、知識も増し、勇氣も加はりたるが、共和政治は民衆各自の意思を表明するを要し、延いて辯に長ずるを要すると、辯を學ぶ者、辯を教ふる者、續々として出で、或は學校の必修科に加ふ。歐洲に雄辯家の絶えざれど、故さら之を獎勵するは新世界の幸國にして、ウエブスターよりブライアンまで、代々雄辯を以て鳴るあり、黒奴ブーカー・ワシントンの如き、亦其の列に入る。地方議會皆各々雄辯家、不辯なる者も尙ほ幾分か辯の形を整ふ。凡そ雄辯は一部分天性にして、一部分練習に因る。天性は個性にして、他人の學ぶ難き所、練習して得べきは擔任教師の教ふる所なり。雄辯法と稱する書は大抵米國の出版に係り、皆練習に

關して助言し、其の説く所殆ど悉く言葉に中り、天性の適せざる者も依りて多少の益を得べし、されど

雄辯の目的

は對手に獲得するに在り、懸河の辯を揮ふも、駁敵に水を漬すが如くなるも、人の聞いて感ずる所と爲らざれば、目的を外れたりとすべく、目的を標準とする間、無用の長物たるを免れず。雄辯にし一損なる者あり、能辯にして捕なる者あり、多辯にして不辯なる者あるなり。之に反し、多く辯する所なくとも、目的を達し得れば、巧みなりとすべし。而して如何に對手を首肯せしむべきや、千種萬態、到底一を以て獲すべからず。有識者の喜ぶ所は必ずしも無識者の喜ぶ所ならず、年長者の喜ぶ所は必ずしも年少者の喜ぶ所ならず、軍人の喜ぶ所は必ずしも商人の喜ぶ所ならず、同じく軍人中、海軍の喜ぶ所は必ずしも陸軍の喜ぶ所ならず、同じく商人中、雇主の喜ぶ所は必ずしも雇人の喜ぶ所ならず。昔寧ろ反對にして喜ばざる所に向つて喜ばざるべき事を言へば、黙して去るか、又は怒りて知害せん。辯に秀でたる者は、喜ばざる所に向つて如何に説くべきかを知り、能く反其を變じて贊成と爲

す。ピーチャーは米國南北戰役に北方に盡力し、役終りて南方の南境に立つや、妨害百出、絶えて耳を傳げず。彼れ光つ突如として滑稽一瞥し、人をして笑を禁じ得ざらしむ。一たび笑へば、彼れ之を避りて何處にも尋くべく、乃ち續いて樂極に辯論し、己れの言はんと欲する所を言ひつゝ、大喝采を以て終れり。ピーチャーと同様の妙辯なるも、

運用の妙

を解せざれば必ず失敗す。數萬人に徴するの雷聲を具ふるも、音楽と辨なきの鉄管を具ふるも、之を運用すべし。宜しきを得ざれば何の效用なし。譯ゆる無對法は此の邊に就て注意せざるに非ざるも、一觀に説く所は、順序如何、材料の如何、音調の如何等にして、筆鋒の筆に攻みたるも仕合に辨、仕合に巧みなも眞實に描きたるも如きを免れず。雄辯の目的は多數の聽衆をして吾言はんと欲する所を承認せしむるに在れば、苟も此の目的を達し得んか、他は問ふを要せず、苟も此の目的を達し得ざらんか、千百萬語、萬々語、息をも續かずして述べ得たりとて全く徒勞に屬す。勞して功なきは無濟法の最も思ふ所、少しの勞を以て多くの功を擧ぐるは、能率著道の旨に違ふ。多辯なる者は多辯

を勞とせず、多く辯じて得ざるに苦痛を感ずれど、多く辯じて聴かざるは少くも時間に於て損するなり。説き去り、語き來り、三時間費し六時間費すは、口を動かすの精力を稱すべく、或は音聲を稱すべく、知識を稱すべく、縦横自在の證明を稱すべく、唯辯論として稱すべからず。毒蛇を打つや、徒らに打つも效なし、頭を一撃すれば足る。何事も急所を衝けば事は終結し、急所を外れば愈々奮撃して愈々徒勞と爲る。老子に「大巧如拙、大辯如訥」といひ、莊子に「大道不稱、大辯不言」といひ、禪宗の「不立文字、亦畢竟するに此」と意義を同じくす。言はず語らずして對手に理解せしむるを得ば、之に過ぐる無し。或は大聲一喝し、「大喝一聲」し、

一言にて盡く

も可なり。釋迦の「拈華にして、一塵に不立文字」の出でし所ならば、其の拈華は富婁那の辯に優り、蘇秦、張儀、デモステネス、キケロ等、皆顧みて慙けたらざる能はず。されど釋迦は單に拈華して終らず、迦葉に向ひ、「吾有正法眼藏、涅槃妙心、付屬於汝、汝當流布、勿令斷絶」といへり。斯く言はざれば、意を迦葉に通ずるを得ず、一般會衆の理解せざるは勿論の次第にて、釋迦も遂に尋常の言語を假らざる能はざりしと

見ゆ。人の食物が營養分のみにて足らず、無益なるものを加へざるべからざる、猶ほ呼吸するに酸素のみを以てせず、窒素を加へたる者を以てするが如し。千言萬語すべき場合に千言萬語し、一喝すべき場合に一喝し、沈黙すべき場合に沈黙し、必要に應じて處を出し、必要に應じて佛を出す、之をこそ眞に言語の妙を得たりと爲すべけれ。言語に妙を得るとは、病に應じて藥を與へ、技の神に入るが如きを指す。其の理想的なるは、未だ嘗て世に出でず。釋迦の説法も無縁の衆生を度する能はず、言語の力も遂に限りあり。言語の力に限りあるに非ず、宜しきに應じて使用するの困難なるなり。天台は釋迦が最初の説法に失敗し五時八教の順序を履みしを説く。若し更に工夫を積みしならば、無縁の衆生を度するに至れりとすべし。言語の效用の甚だ大にして、人類相互の關係は殆ど悉く言語より成ると謂ふべきが、言語の使用は動物が肺を以て呼吸して以來の事、人類獨得の技能とすべしに非ず。人類獨得なるは言語の表號として

文字

を作るに在り。言語は思想の交換に缺くべから

ざるにせよ、達する所の距離の短く、且つ口より發して直ちに消滅に歸す。如何なる雄辯も、眞に聞き得るは最も多くして四五萬、而して聞いて悉く記憶し得るは僅かに計ふべく、恰も花火の空中に輝いて消滅するに異ならず。言語を更に廣きに及ぼし、且つ之を保存するが爲めに文字を作れること、即ち人類の他の動物に超越したるを證明す。猿猴は火ある處に身を温むべきを知り、而して薪を以て之を他處に傳へ且つ久しし保存すべきを知らず。氣候の寒くして火に近づくは直覺を以てする者、動物が肺を以て呼吸し、呼吸の際に聲の出づるある、亦自然の作用にして、人が發聲するとして特別に智力の秀でたるを示さず、唯文字を使用するに至り、明白に智力の秀でたるを示す。動物に超越せるは、先づ薪を以て火を保存するに始まり、次いで文字を以て言語を保存するに現はれたりと謂ふべし。文字は由りて來りし所遠く、何時何處に起りしを言ふべからず、文字なき土地として、謂ゆる文字なる者なきのみにて文字に代用すべき者の存在するを見る。日本紀神功皇后卷に「以皇后所杖、矛、樹於新羅王門、爲後葉之印」、故其矛今猶樹于新羅王門也」とあるは、事實は兎も角、矛を以て新羅王に誓約を

記憶せしめしなり。岩又は木に圖を描くよりして漸く文字の端緒を得るが、初め一字一語に當り、次いで多数の字より發音に必要な者を擇び、音聲通りに言語を表はし、即ち

漢字より音字に轉化

す。されど種々の事情の爲め、義字中より音字を擇びて思想を發表し得ざるあり。支那の言語の如き、音字を以て記載せば簡單に過ぎ、誤解を招き易し。其の言語が如何にして彼の如く爲りしやは明白を缺ける所、原始時代の遺習かと言へば、必ずしも然らず、或は前に發音にして後に單綴に變ぜしと察すべき跡あり。何にせよ、支那の言語は音字を使用するに不便にして、之を使用するに少からざる注意を要す。古來義字を使用せるは、單に守舊の癖よりせず、又事情の已むを得ざるに出でたり。而して之に接近せるは、即ち北方の民族なり、東南諸島の民族なり、甚しく言語を異にし、殆ど正反對の狀態にて續けるは奇なり。支那の語が短きに過れば、日本の語は長きに過ぎ、往々一語が支那の一句に相當す。日本が支那と接觸してより、幾多漢語を採用せるは、支那の文物を尊崇してより、長きに交ふるに短きを以てし、長短の宜しきを求むる所ありたりとせん。日本

の語も全く放任し置けば、短きの伸び、長きの縮まり、最も便利なる處に落ち着きたらんが、簡單なる漢語を得ては、之を採用せんとするの避くべきに非ず。自ら言語を調節するの可なりし、支那に按して漢語を混用するの可なりしか、議論の餘地あるも、勢が後者に決定せるは事實の示すが如し。日本は支那と言語を異にし、支那に適當とする文字を以て必ずしも自國に適當とせず、初め漢字に據りて漢華假名を使用し、次いで平易なる假名を使用す。母音

子音を分たす、一々之を合せるは、印度歐羅巴の例に照して進歩の半途に居るも、實際之を分つる必要を感ぜず、歐洲よりも巧妙なる字形を得ざる間、之を合すを便利とす。而して單語の比較的長く、悉く之を假名にする時、閱讀に時間を費す。漢字ならば一見して直ちに理解すべき者も、假名ならば一たび之を口に誦するを要し、全く漢字を知らざる者こそ假名のみを使用すれ、少しにても漢字を知りては之を混用するの便利なるを覺ゆ。既に日常の漢語にも漢語を使用するの少からざる以上、漢字を使用するを以て尋常事とし、之を使用せざるを不自然なるかに考ふ。假名の製作が梵字に據りしならば、或は別の方向を指して進みたらんも測り難

きが、漢字に據りて製作し、漢字を簡單にせる形ありては、漢字を混用すること談話に漢語を使用するが如く、日本に

漢字假名混用

の避くべからざる勢を醸致す。漢字は直ちに目より刺戟し、假名の目より耳に迂廻するに比して、人を感じしむること多し。漢字は初め象形なりしも、後は然らず、一日月の如き、象形の明白なるさへ、人は以て日月の形とせず、唯符號とし、隨て直ちに目より刺戟すること象形の如くならずとの疑あるが、象形は初學者の目を刺戟するに反し、轉寫せる者の注意を保存する所多く、人は其の原形を識別し得る代り、之に拘りて作家の眞意を解するに遅し。埃及にも符號と爲れるあれど、速書の爲めにして支那の草書に類し、楷書の如きもの無し。支那の文字は悉く符號と爲り、象形を豫想する者の失望する所なるが、象形を離れて全く符號と爲れる之は、其の符號に慣れては直ちに作家の意志を解すべし。漢字は最早象形ならず、悉く符號と爲り居ること、假名を以て書し羅馬字を以て書せると同じく、但だ字毎に概念の符號にして發音の符號なると違ふのみ。「漢字構

利水清波、暗香香韻、黃昏と書すれば、一字の象形なる無く、單に視て全く解すべからざるも、漢字に慣れたる者は、其の境に臨みたるが如く、殆ど恍惚我を忘る。而して是れ練習楷當にて目に映ずる場合にして、草書にては然らず、草書にては、一たび楷若くは行に直して讀まざるべからず。草書は符號として簡單に過ぎ、十分の理解を促すに足らず。練習は幾代の經驗にて書籍に適當なる如く工夫され、讀者が特殊の感想を起すを禁ぜざるなり。歐洲の文字も幾代の經驗に成り、其の言語に適當なる者なるが、今も尙ほ往昔の形を残せるあり。夙に母音子音を分ちながら「q」の如く之を合せるあり。且つ初め字形を確定し、後發音の變ぜるに拘らず、依然舊の如く前の字形を使用するあり。英佛の文字の如き

音字の實なき者

少からず。音通りなると然らざると孰れの多きやを言ひ易からず。音字の實を失ひ、其の儘に使用せらるゝは、音の變ぜるに隨て之を改むるよりも便利なるが爲めに於て、其の便利とは一に意義の確定、二に義字としての趣味なり。領域内を通じて發音の一定せず、地方の訛音の儘に書しては、他の地方にて誤解すべく、成るべ

く文字を一定するの必要あり。一定の爲めに或る程度まで已れの發音を犧牲にせざる能はず。支那が義字を視守せる、一部分之に因る。地方毎に發音の變じ、音字にて之を表はすが如き、到底統一を望むべからず。歐洲は大體に於て音字を主とし、之に適當なる字形を工夫し得たれど、既に文字を使用しては、一語として目に慣るゝあり、目に慣れたるは趣味も伴ひ、遂に之を變ずるを得ず。印刷の行はれては尙更らにして、兩讀の際、目に視て興味の多きを覺ゆ。刊行本は

目讀の利益

を計り、或は一語一語を分離し、或は固有名詞の頭字を大にし、或は「等」を用ゐ、發音と關係なき者少からず。歐洲の刊行本の文字は、何程か漢字に類すと謂ふべし。隨て日本の假名にて印刷せるに比し、羅馬字にて印刷せるは目を刺戟すること強く、其れだけ讀み易し。假名とて必ずしも一々字を讀むにあらず、「せざるべからず」といふが如き、一見して了解し、一々拾ひ讀むこと無し。されど羅馬字の更に目讀し易きに若かず。假名より目讀し易き羅馬字も、漢字ほど目を刺戟せず、一目瞭然たる者さへ、漢字の如く感動を興へず。形容の巧みなる

は、讀み來りて漢字よりも感動すべし、是れ讀みたる上の事に於て、謂はゞ徐々に感動し、漢字の電撃すると違ふ。月光と「Moonlight」、前者は雷を觸るが如く、後者は筆を置くが如し。漢字に慣れたる者には、漢字ほど讀み易きに無く、眞に一見一行を解すべく、時として敷衍を解すべし。日本に漢字交り假名文の行はれ奉れる、多くの事情の誘へる者にして、日本に在りて最も適當なる方法を採れりとすべし。漢文は日本の語法と一致せず、假名文は字に興味薄く、讀むに遲し、運用するは長短相補へる所あるなり。されど是れ既に讀み得る者の事にして、之を讀み得るまでに費すの勞力が羅馬字文を學ぶと異ならずんば、特別に説明を生ぜず、之を生ずるも、現に行はるゝ所の精力を以て壓倒し去るべきのみ。

漢字を學ぶの勞力

の多大にして、之を他の有益なる事に移せば、更に得る所多かるべしとは、稍々心ある者の自然に考へ及ぶ事、固字問題が喧しきは主として之が爲めなり。漢字廢止は五十年來の議論にして、教育よりする者、文壇よりする者、經濟よりする者等、議論は略々盡き、大抵廢止に決し、唯實行に苦むが如し。而も漢字を學ぶは羅馬字

を學ぶより困難なるの種かなれど、其の困難に就て餘の考へ置くべき事あり、即ち難易が人の性癖に因ること多き、是れなり。人に依りて漢字を學ぶに大困難を感ずるあり、さして困難を感ぜざるあり、或は全く困難を感ぜず、甚だ易きを覺ゆるあり。大困難を感ずる者は、漢字の有無無益なるを口にし、斯く困難を感ぜざる者は之に對處するに對す。山口縣嶺が十三歳に召出され、二百石を給せられしは、其の年齢を以て當時漢學者の讀むべき書籍を讀み了り、漢字を使用することも頗る自在なりしたり。彼之の如くんば漢字に少しの困難を覺えず、人之之を困難とするを怪むべし。斯かるは一種の天才に屬し、妄りに人に望むべきに非ざるが、十三歳にして圖書を讀了り、一通り漢字を讀み得るは普通にして、維新前後に奔走せし者は、概ね詩を作り、漢文を作り、尙ほ餘暇を以て歐洲の學を修めたり。漢字を學ぶが爲めに特別に多く歲月を費したりと謂ひ難し。されど全く漢字を讀み得ざる者あり、三浦長の一人と呼ばれし三浦少將の如き、其の一人、岡山西郷の名ありし杉山の兄なる中川横太郎の如き、其の一人、斯く甚しきの稀れなるも、之に近きは少からず。困難を感ずる者より窺はれ、漢字の爲めに

損すること幾何なるを知らず、漢字廢止を唱ふるは理の當然なるが、已れの困難なるを以て何人も困難なりとするは誤りなきを得ず。漢字を學ぶに少しの困難を覺えず、何故に困難を訴ふるやを解せざる者あるを許すべし。漢字廢止に反對する者の絶えざる、必ずしも、頗る下獄ならず、自らの易きを以て人の易きを察する所もあり。されど漢字を學ぶの羅馬字を學ぶが如く易からざるは、何人も認むるは、漢字を學び易しとする者も之を否定せず。且つ既に或る方面に困難を感ずるを明白にして、世間の多數の羅馬字とも困難を覺ゆるとありては、

現状の變改

を企てざるべからず。羅馬字は或る點に於て漢字に劣るも、他の點に於て之を價ふに餘りあり。全く漢字を學び得ざる者あり、全く羅馬字を學び得ざる者なし。一般國民の爲めに計るには、一般國民の便利とする所を察すべく、一部分に漢字を便利とする者あるも、他の然らずして、漢字を便利とする者さへ他の文字の更に學び易きを知るに於ては、相當の手續を踏まざるべからず。初めに問題と爲れるは、漢字を廢して假名のみにするとの事なるが、假名は漢字に附屬して起り、常に之に附屬せるが爲め、漢字を離

れて全く獨立せんに甚だ難し、何人も讀み得るの利益あれど、其の利益を減殺すべき種々の事情あり。今日まで漢字を混用せずんば格別、既に之を混用し來りては、今更らざるを廢止せんは、大なる不便を感ずる所以と爲らん。

羅馬字

ならば、漢字ほど目を刺戟せざるも、一字一字に吟讀みせず、一語として讀むを得、而して何處か形に於て興味を添ふる所あり。羅馬字文に慣れずしては、興味に感ずべきも、英佛文を讀むと同様になるべきを確定すべく、一層著と字と一致する丈け讀み易し。されど其の故を以て羅馬字に改むべきかと責へば、他に考ふべき事多く、彼軌道道を廢軌にするより更に困難なるを心得ざるべからず。

羅馬字採用難

として與へべき事種々、第一に羅馬字は既に之を使用せる國に於て屢々改善を企てたる所、適當の良案をこゝを得ざれば、缺點の少からざるは疑を容れず。完全なる文字は到底得べからずとし、現行羅馬字に優る者あれば、國字改善の意義にて採用すべきも、單に現行羅馬字を採用するは、現に歐米に行はるゝ所とするに止まり、缺點を缺點として其の儘に從ふことと爲

る。小國を以て居れる頃は兎も角、世界の勢力として聊か自負心を傷つくべく、國民の自負心は愛國心に隣りし、計算外に置くを得ず。第二に羅馬字は音字として、漢字を記號するの勞を省くも、世界共通として利益を得る所少し。文字を共通にするも、言語を共通にし難く、日本が羅馬字を採用すると、歐米の書を読むに何程の益なし。歐米人は漢字交り文よりも羅馬字にて日本語を學び易きを覺ゆべけれど、英佛獨人が互に學ぶと同日に語るべからず。互に學び易き歐洲列國に於てさへ、各國民の大多數は他國語を知らず、文字共通の何邊に利益あるやを言ひ難き程なれば、羅馬字採用後に就て豫想するが如き利益を享け得るやは頗る覺束なし。第三に羅馬字を國字としては、古代の書類は勿論、大正時代の書類をも讀み得ざる事なり。圖書館藏書の最大部分は漢字を使用し、之を讀むには必ず漢字を知るを要す。日本は支那と密接の關係あるに、支那の書籍は全く漢字を以て成り、漢字を知らざれば、此等の書を読むことを斷念せざる能はず。漢字を知らずしては、書籍上に過去なく、寧ろ現在もなく、將來のみの國と爲らん。國家として過去の重んずべくば、此の邊の事を忽せにするを得ず。第四に費用多

き事なり。現代の法律は漢字を基礎にして記載し、羅馬字に直して解すべからず。新たに羅馬字を以て解し得るが如く、書き改むるには、編纂委員を設けて討究するの外、決定せるに従つて刊行し、之を公布すべし。一公と一僕と、孰れかの一を變音する等、改むべきこと多し。他の一切の事、皆之に伴ひ、目前の公務を辦する丈けにも、頗る費用の嵩むべし。學校の教科書及び參考書を初め、一般國民をして相當に日本の國家を知らしむるが爲めに編纂する所、莫大の費用を免れず。國事多端の際、斯かる餘裕を見出し得るや否や。以上は羅馬字採用に關する主なる難點なるが、

究竟費用の問題

にして、假りに數億の金あり、幾千の編輯人を置き、普通に必要なる書類を悉く羅馬字に直し、延いて比較的 unnecessary なる者に及び、無代價に頒布せば、當初數月間の動搖のみにてやがて人は不便を感ぜず、顧みて漢文若くは漢字交り文を使用せし時代の不便に驚くに至らん。羅馬字を國字とするには必ず廣きに及ぶを要し、一部分に止まりては、新たに得たる便利は新たに感ずる不便を償ふに足らず。普及せざる限り、自ら羅馬字に慣れ、併せて世間の通用文字を學ばざ

るを得ず。普及するが、然らざれば行はれざるか、其の一に居る。同好者の間に通用するが如き、自らの道樂にして、實際の利益は言ふに足らず。一舉にして現に使用しつゝある所を悉く羅馬字に改むるを得ば、漢字を學ぶの勞を省く。其の利を以て他の不利益を忍ぶを得べく、但だ其れ支拂の費用を辨じ得るやば恐らく何人も明言に苦む所、學校の改築さへ豫算會議に後廻しにせらるゝ勢にて、國字改訂の爲めに數千萬圓を支出するの餘地を生ずべくも無く、數百萬圓さへ疑はしく、今は數千萬圓も疑はし。場合により如何に著手すべきか。羅馬字の書き方邊より如何に著手すべきか。羅馬字の書き方を一定し、簡單なる書を印刷し、之を世間に配るとして、畢竟何の効果あるか。廢置置縣の頃に國字變改を斷行せば、今日に比して頗る容易なりしならんも、今は謂ゆる法治國と爲り、法律が普及せる如く漢字が普及し、之を改むるのみも容易の事ならず。一過り羅馬字に改むれば可、漢字及び漢字交りの書は學者若くは特別の志ある者に限るとせんか、現に漢字交りの書類の庫に填まる程にて、全く漢字を讀み得ざるは如何にも素養なき者と見らるべし。羅馬字のみにて用事を辨じ得るとも、銀行會社にて人を

採用する際、漢字を讀み得るや否やを一の條件とせん。特殊の技能に秀でたるを除き、均しく採用するならば、全く漢字を讀み得ざること歐米人の如くなるを斥くべし。就職難の逼迫しては、比較的無用の事まで條件に加へらるゝの常にして、今日人が頻りに高等教育を受けんとし、高等學校が之を收容し得ざる有様なるは、一は高等教育を受けたりとの證明が就職に便利なるに出で、學校に學ぶ所が必ずしも實際の業務に關係あるに非ず。特別の學者の外、全く漢字を知るを要せざる迄に羅馬字本の世に行はるれば、羅馬字のみにて十分なるべきも、然らざる以上、漢字を學ぶの努力を省く目的を以て羅馬字を用ひ、更に漢字を學ぶの必要を感じ、却て努力を多くするの結果に終らん。一舉にして羅馬字を普及するの希望なき間、之を採用するも徒勞に屬するとして差支なきが、さらば其の希望の有るや否や、是れ殆ど人毎に豫想の異なる所なり。されど

日本の富

は確かに増進し、御料の財産は五億と計算せられ、財産一億と見積らるゝ者二家、数千萬なる者五指に餘り、其の冠たるは遠からず一億に達すべしと察せらる。今日國字變改の爲めに巨

萬の金を投ずるが如き、妄想も極まれりとせんが、將來は如何なるべきや。一舉にして普及するとは著手して直ちに普及するを意味せず。或は三十年計畫とし、或は五十年計畫とし、年に幾千萬圓を支出して準備するは、全く想像し得ざるに非ず。幾年後に羅馬字を國字とすると定め、之に先んじて十分に準備し、期日に及んで官公の悉く羅馬字に限るは、一概に不可能とすべからず。漢字の不便と其他の事情とを差引し、孰れが餘るべきやを以て決定すべく、個人が決定せざれば國家の趨勢が自然に決せん。されど國字改善の問題が眼前に横はるとて、徒らに其の解決を求むべからず。或は曰ふ、宮中にて決定せば解決を告ぐべしと。或は曰ふ、濟生會に三百萬圓下賜されしが如く、同額を國字の爲めに下賜されるれば實行の端緒を啓くべしと。其他種々の希望想像の浮ぶが、空しく之を浮べたりとて少しの益なし。現に交通の極めて頻繁にして、思想の交換にも忙殺され、文字は文字とし、

文章

の如何を考へざるべからず、國字は議論の多きも、當面に國文を活用するの必要の迫り、其れ

相應に整備及び改善を要す。國字問題も國文問題と離れず、現行法律が羅馬字に直して解し得らるれば、羅馬字論に幾層か力を得べく、唯其の殆ど全く解し得ざるが爲め、空論益なしとせらる。而して獨り法律のみ然るに非ず、法律の然るは普通文の然るが爲めにして、普通文は羅馬字にて解し難き者の少からず。其の解し難きは、主として

口語と文語

と分るゝに因る。今は文章として口語體も相應に行はるれば、悉く口語體としては如何にせとの説の出づるが、口語體が文語體と分るゝ所は、「なりを」である。「若くは」だに變ずる位にして、漢字の分量に於て大なる變化なし。「者を」「ものとし、一食ふ」を「くらふ」とするが如き、漢字の分量を減ずるも、行を長くするのみにて、何程も解し易くせず。知行文や、寫生文や、日常の事を寫すには、全く漢字を使用せずして妨げなく、其れさへ稍々意義を嚴格にする場合、漢字を使用するを餘儀なくせらる。「喉々」といひ「鬱着」といふ類を使用せざるも、「水成岩とか火成岩とか、稍々術語らしくなれば漢字を使用す。是れ翻譯の弊と言へば弊なるも、翻譯に漢字を使用せず、全く訓のみにするには、大

に覺悟する所なきを得ず。漢字を以てするが如く簡單にせずして、長き語を以てすべく、即ち「水成岩」の代りに「ミツデキタイロ」と言ふべし。長き語も慣るれば不便を感ぜざるが、慣るまで少からざる不便を感すべし。日本の言語が漢語を加へて緊縮を覺えたる如く、假名に漢字を加ふるは、目の爲めにする外、實に耳の爲めにす。「水成岩」といふは單に漢字を使用せしに非ず、習慣にせよ、「スライセイガン」といふ力、「ミツデキタイロ」といふより精確らしく耳に響く所あるなり。さる習慣の存續する間、口語體にても漢語を使用し、實際上に著しく便利を増さず。紀行文は古來假名にて能くするあり、猶ほ和歌、假名にて解し得らるゝが如くなれど、嚴密に意義を正すの論文、總じて漢語を使用し、其の漢語を解する漢字を止さざるを得ず。而も過去は過去、今後口語體及び文語體を一にすべしと言ひ得ざるに非ず。共に漢字を使用するの已むを得ずとし、兩様に語を分たず、「なり」を「である」調に改むれば其れ丈け統一に近づくべく、且つ「なり」にては勢ひ漢語を使用すること多く、「である」にては之を減するに傾けば、若し口語體にて十分に文語體の代りすべくんば、悉く口語體にすべしと斷定するを得

ん。されど今日は未だ標準語の成立せず、「である」と「だ」とも區々に分る。一である「は」確かなれど冗漫に流れ、一「だ」は簡單なれど卑俗に聞ゆ。口語體の標準とする東京語も疑問に係り、平時に差支なくとも、儀式の際に疑を生ず。或る方法にて之を一定すれば、何れの場合にも口語にするを得んが、今は之に眼をせず、詔敕なり、法律なり、全く文語體にして、已れ自ら口語に專らなるも、區役所にも通用せざるを奈何ともすべからず。將來次第に口語文語の一致すべしとし、今は二者各行はれ、日本の文章は二體に分るゝと謂ふべく何人も多少

二體を使用す

べき状態なり。強ひて言へば、今は口語體使用者は時に文語體を使用すべく、文語體使用者は全く口語體を使用せざるも妨げなし。幾年かを經れば變化すべきが、當分は此の如くして過ぐべし。元勢の決する所、一個人の力及びぶ所ならず。世には手段を重んずる者と目的を重んずる者とあり。金錢は幸福を得るの手段として専ら之を財帛するに務むるあり、幸福を得れば足るとして金錢を眼中に置かざるあり、文章も亦同じく然り。文章思想若くは感興を發表するの手段にして、其の目的は人をして己れ

と同様に思ひ又は感ぜしむるに在り。然るに一方は手段なる文章に勞苦し、如何にして之を完全にするべきかを考へて已まず、他の一方は如何なる手段にても、思想若くは感興を發表し得ば可、形式の如何は問ふ所に非ずとす。手段も善く、目的も善ければ、議すべき無けれども、人の孰れかに傾くを棄てべからず。或は國字國文を以て重大事と爲し、之を改善せざれば日本の文明の永く妨げらるべきを認め、或は單に己れの嗜好よりして一字一句に苦心磨滌し、金玉の文を綴らんとし、或は此の類の事を念頭に置かず、文は何様にて可、句は何様にて可、唯思想若くは感興を發表して満足せんとす。衣服に注意する者あれば、之に注意せざる者あり、注意する者に際限なく、甚しきは衣服の好ましからざるを以て外出し得ざるに至り、之に反し、注意せざる者は敝れたる襦袢を衣て狐貉を衣る者と立ちて恥ぢず。斯かるは如何に討論するも、遂に決定すべきに非ず。文章に畢竟するに手段にして、眞に思想若くは感興を發表し得れば、文章として異議を唱へ得ざるべく、唯不用意の文を以て斯くするを得ず、十分に目的を達するに十分手段を盡さざるべからずとす。然るなり、されど不用意の文を以て十分に思想若

くは感興を發表し得れば、女の目的を達し得たるに相違なく、

露達して已む

とは文に於ける原理なり。意を達して復何をか求むべき。意を達するは文の目的を達するに同じ。普通「達意」といふは、事理のみを述べ、感情の蘊を降くを指すが、是れ眞の達意に非ずして、眞の達意は己れの思ふが如く人をして思はしめざるべからず。史記に「詩以達意」といひ、詩は感情を主にす。何ぞ勃窣の理窟のみを達意とせんや。

達意と修辭

と強ち相反對せず、達意も必要とあれば文飾を事とす。其の修辭に反對するは、文飾の爲めに無用の語を弄し、意を枉げ意を傷つくるを恐るるなり。世には金鏡の貯蓄に専らにして使用を考へざるあるが如く、語句の彫琢に専らにして意想を輕んずるあり。四六駢體の文は皆手段に拘りて目的を忘れたる者にして、東坡が「退之を以て文八代の表を起すとせる、其の弊風より脱せるを指す。日本の漢文を學ぶ者が文章軌範に據り、八家文に據れる、亦其の弊風に罹らざらんとせるなるが、一弊去りて一弊來るの習はし、臍麗をこそ念とせざれ、覺闢法は云々、

照應の云々、量押の云々、一々古法を考へ、之を適用するに務む。八家は一々斯かる關係を慮はず、不用意に記せし所あるべきに、一語一句皆法則の定まれるかに考へ、之に據らざらば、文章を成さずと思ふ。後人の作る所を讀めば、一字一句、典故あり、何人の何文に據れるかを釋ぬべし。されど起稿者は依りて何程思想若くは感興を發表し得たるや、

外形に拘泥

して眞意の發表を妨げられたること幾何なるを知らず。幾分が發表し得たるも、古人の如く化粧し、古人の如く被服し、古人の聲色を試み、全く古人の如しと言はれ、最も得意の色あり。徂徠は八家文を捨て、古文を修むると稱し、而して明の李王に準據し、唯之に類似せざるを恐る。漢文を學ぶ者が概ね此の弊を免れざる。要するに手段に拘れる結果にして、手段に拘れば、總じて此の如し。明治年間に漢學の衰へ、漢文を學ぶ者も減ざるが、新たに歐米の何人かに準據し、形式に拘泥する者の續々出出し、是れも文章の巧拙に重きを置き、眞意の何處に在るを問はず。批評家と稱するは大抵形式に拘泥する徒にして、思想若くは感興を發表せる文章の形式を味ひ、其の美不美を分つ。さる嗜好な

き者より覆れば、斯くして何の益あるやを怪むも、さる嗜好ある者の斯くして目を奪らすこと、骨董遊業者の終日骨董を弄ぶに異ならず、其の嗜好に熱する者こそ少けれ、幾許か之を具ふ者の頗る多く、凡そ書を讀む者は皆多少其の嗜好ありとすべし。人々互に

嗜好の差違

あるが上、各自時を経て嗜好を變ずることあり。上戸あり、下戸あり、肉を好むあり、茶を好むあり、其の相異なること面の如く、而して多くの人の同一の食を續くること稍々久しければ之を厭ひ、他の食を求め、幾月かの後に又以前に好みし所に復る。言語の巧拙は世間に於て注意せざるに非ず、何人が能く、何人が鈍く、何人が冗詞など、稍々知る所あるが、演説の類を除いて深く注意せず。言語は人の最も不用意に使用する所の一にして、不用意に語り、不用意に聞き、不用意の間に過ぎ、一々注意を拂ふ能はず。文章も不用意なるあれど、故さし筆を手にするのみならず、一時に發して一時に消ゆると違ひ、多少永久的なるが故、言語ほど不用意ならず、時として用意周到、眞に心血を盡ぐ。されど其の文章の記する所に、時と處とにて違ひ、或る時に拙とされ、或る時に巧とされ、或る處

・に・非・難・さ・れ、或る處に稱揚され、衆人の悉く一致する無し。韓退之が試験に苦み、幾回も落第し、而して後に文章の模範とせらるゝは其の一例なるが、退之の文章が果して第一なるかと云へば、必ず條件附きにせざるべからず。或る文は退之ならで作るを得ざるも、退之の作り得ざる文も少からず。唐宋八家

各自の特色

を具へ、甲はこの文を代用するを得ず、乙は丙の文を代作するを得ず。簡單なる者は差別なかるべきが、八家文讀本に載れる所は概ね其の當人に限るべし。冷靜なる論文は退之の長所ならず、孟軻を推して老佛を排斥せし所に勇を顯はし、宋代の重んずる所と爲れるが、著作の事業に於て宋人の方頗る之に優る。東坡が歐陽修の文を誦し、一論大道似韓愈、論事似陸贄、記事似司馬遷、詩賦似李白」といふは當れり。修は文に於て退之の及ぶべからざるを見ず。彼れ唐書の編纂に與り、己れの能を仰ばずを得ずとして五代史を作り、規模の狭小ながら、史記に拮抗するに堪ふ。退之は史官と爲りて斯かる作なし。「唐宋八家」の目は元は吳澄より言ひ始め(但し小蘇を言はず)、唐順之、茅坤を經、沈德潛の讀本を以て擴まる。而も是れ之

を好む者の事にして、全く之を採らざる者も少からず。明に謂ゆる七才子の出で、古文を主唱せるが如き、之に満足せずしての事なり。明代の文章は

秦漢派と唐宋派

とに分れたる者にして、清朝に於て唐宋派の行はれ、延いて日本に及びたり。日本にも律律の如く秦漢派の出でしあれど、支那に古文辭の衰へ、唐宋派の行はれ居りたるを以て之と同様の勢に従ふ。古文辭を唱ふる者は、自らの才を恃むこと甚だ大、唐宋を凌がずんば安んじ得ざりしが、如何に唐宋を凌ぐべきか、他國ならば新たに一機軸を出し、明朝の文章を發揮すべき所なれど、標準を古代に求むる支那の習俗として古文と稱せり。進歩を鑒ふの歐洲にも、或る程度まで進みて行詰まれば、復古の勢を生じ、ラファエル以前と號し、カントに歸れと叫ぶ。唐虞三代を理想とする支那に於て、標準を古代に置き、以て信を世に傳するは事の然るべき所、先秦を稱するとして必ず之を模擬するに限らず、秦漢の語句を以て明代の思想若くは感興を發表する者、尋常の力を以て成し遂ぐべからず。彼の七子は文辭の記憶に長じ、單語に豊富にして、何處にか之を適用せんと欲し、簡

單なる思想をも富麗なる文辭を以て飾り、文の意を書するを顧みず。元韓柳も富麗を事としたれど、漢く平易と爲りて宋代に及び、己れの思ふ所を表明するに於て遺憾なし。確實に意を傳ふるには、語句を平易にするに若かずして、理義を重んずるに隨ひ、愈々平易に流る。さすが宋は議論倒れと言はるゝ迄に議論に力を致し、其れ丈け語句を平易にするに至れるが、世に入りて議論を轉輾にするよりは、知識の博くして文辭の富麗なるを競ふ。宋に平易を極め流洩に過ぎたるが爲め、

動反動

として文を修飾し味を濃厚にせんとせる、模擬にせよ、剽竊にせよ、強ち棄つべきに非ざるが、秦漢の語句に限りあり、或る程度まで模擬すれば、同一の語句を繰返すことと爲り、加ふるに特別の才ある者は、勢の盛んなる時にこそ勇奮して止まる處を知らざれ、漸く世間に於て慣れ、さまで奇を感じざれば、看發心の減じて努力を廢するに及ぶ。明朝八股文の舉業に必要と爲り、榮達を希ふ青年は古文辭を修むるの努力を移して八股文を修むるの得策なるを認む。力ある者は七子の驕慢に權らす。力なき者は先秦の學び難きを厭ひ、相率ゐて之を排撃し、而

・古典的なは唐宋八家を推し、非古典的なは三袁に従ふ。日本に雙方の入込みたれど、諸藩の儒教を重んずるに伴ひ、文を學ぶ者は八家に則り、三袁の流を以て嚆矢とす。袁徐よりして金李に至り、世態人情を諷し、或る點に於て達意の妙を得たるも、儒の態度と協はず、稗史小説と列を同じくすに見られ、藩校の教官學生は經を重んじ文を卑めば已む、苟も文を作れば殆ど悉く八家の規矩に依り、或は八家に就て吾が最も好む所を採び、或は八家を集めて大成するを期す。元明清を通じて八家とし傳はれる、單に文章を以て優れるに非ず、

文體の種類

を標示し、學ぶに便利なる所あるなり。八家文讀本三十卷の中、韓六、柳三、歐五、三袁十二、曾二、王三なる、少くも間接に重んずる所を示す。而も其の比例は人々の嗜好にて違ふ者に於て、三蘇十二卷、即ち十分四なるは、最も重きを占め、曾華二卷、即ち十五分の一なるは最も輕き者の一と謂ふべく、而して朱熹の如き、三蘇を喜ばずして却て曾華を推稱す文に關しての事ならざるも、文も他人ほど蘇を稱せず。曾は最も振はずと見ゆるに、既に之を稱し、明に至りて愈々之を稱し、清に至りて

愈々益々之を稱し、而して日本は遂に然らず、蓋し蘇を好めば曾を好まず、曾を好めば蘇を好まず、蘇曾正に相反す。王安石の曾と同じく二卷なるは、其の人物を好まざるに出づべく、單に技能よりせば、分配法を變ぜざる能はず。歐響震の區々なるは八家の免れざる所にして、多數の嗜好に對するに、必要に應じて其れの體をも使用し、曾を好む處に韓を以てし、柳を好む處に柳を以てし、歐に歐、蘇に蘇、曾も可、王も可なるを要す。人の才に限りあり、韓は柳の具建論を能くせず、柳は韓の原道を能くせず、歐は蘇の策論を能くせず、蘇は歐の五代史を作り得ざるも、能不能は別とし、十分に意を人に通ずるの目的に於て、一學に拘泥せず、如何なる體をも使用すべき道理にして、某の文體は善しといふは、狭き範圍に限りての事、他の方面に當飲らず。經學者の喜ぶ所は戲作者之を喜ばず、君子と流の喜ぶ所は豪傑と流之を喜ばず、意を一部分に傳へんと欲せば之に適當なる方法を以てすべく、同一の方法を以て東西南北に論むは、言葉を以て萬端に應ずるが如し。但だ名藥は或る種類の病に適し、他に適せざるも、或る種類に特效あるの故を以て、優に藥價を雜するに堪ふ。

マコーレーとカーライル
と、同時代に出でながら、文體に於て、思想に於て、正反對なりと謂ふべく、カーライルを好む者は、マコーレーの平凡を厭ひ、マコーレーを好む者は、カーライルの奇矯を思む。マコーレーはカーライルに後れて生れ、カーライルに先んじて顯はれ、マコーレーの死する頃、カーライルは未だ大に顯れず、マコーレーの死後十年にしてカーライルは一代を壓倒するに至る。カーライルの大作なるフレデリック王傳が他人の追隨を許さざるに因る。マコーレーにしてカーライルの如く長壽ならば、更に觀るべき者ありたらんも、英國史を半途に捨つるの已むを得ずして、大なる力量の認むべき無し。されどカーライルとマコーレーと南極に立ちつゝ、英國の史界を飾り、好むと好まざるを問はず、何程か推稱の辭を吝む能はず。一面に於て
カーライルとスペンサー
とも正反對にして、スペンサーは思想に於てマコーレーに近く、即ち自由思想に於て相近く、而して生活狀態に於てカーライルに近く、即ち一生を、遠に委ねたるに於て相近し。カーライルとスペンサーと、病弱の躬を以て長壽し、而して能く豫定、事業を完成するを得、卒

業の眞價の何様なるとも、永く後世に傳ふるに足る。此の三人は罪惡の勢を成すと謂ふべく、而してスペンサーは白ふ、マコーレーも、カーライルも、一文體あり、マコーレーたるべきにマコーレーにし、カーライルたるべきにカーライルにし、適所に適當の文體を以てすべしと。彼れ自ら幾許か此邊に心掛け、教育論と心理學と社會學と、互に多少文體を異にし、各々宜しきに應ぜんとする跡あり。さまで效果の顯はれず、其の意志あるやさへ知れざるが、其の言ふ所は一應の理ある者にして、必要に應じて如何なる文體をも用ひべし。之を實現するの甚だ困難なるも、文體を論ずる、先づ此の出發點よりし、以て他に及ぶべし。然らざる限り、唯己れの好む所と言ふに止まり、己れが肉を好むを以て之を推稱し、他に肉食を好む者あるを知らず、之を聞いて罵るに異ならず。されどスペンサーは彼の如く文を論じ、自ら必要に應じて文體を變ぜるも、己れの文才を恃まず、相當の教育を受けずして正當の語句を使用し得ざるを告白せり。彼れ不文ならず、記者として従事せしことあるが、文を以て自ら任ぜず、種々の文體を試みたるは必要を認めての事、如何なる文體をも使用し得ると信ぜざるに非ず。假りに絶

大の文才あり、如何なる文體をも使用し得るとせば、硬なるべきに硬、軟なるべきに軟、縱横自在、往くとして可なりとざる無しと爲すべきに似たれど、茲に考ふべきは必要に應ずる文體の事なり。豫め文體に分類あり、云々の場合に云々の文體を以てするを得れば、特別の疑問なけれど、世に幾種の文體あるやを定むるは世に幾種の人面あるやを定むるより難し。文體は多少人毎に異なる所にして、或る點に於て各自獨得なり。マコーレー以前にマコーレーなく、カーライル以前にカーライルなく、ラスキン以前にラスキンなし。其の各々人の注意を惹きしめて、之を何の場合に適用すべきが、マコーレーに限るべき場合、カーライルに限るべき場合、ラスキンに限るべき場合のあるや否や。有りと有らざる文體を使用し得るも、實際之を使用すべき場合を見出すに苦まずや。且つ彼等が十九世紀の英文學に傑出せしにせよ、其れ丈け文に巧みにして他に之に優る者なきやも疑を容るべき餘地あり。單に文に巧みなるよりせば、之に優るは必ず之れ有り。

作文の教員

をして指摘せしむれば、孰れにも語句の妥當を缺く者あり。カーライルの如き、毀譽錯綜し、

全く文を成さずと明言せる者あり。學校の作文に彼の如きを教へれば、點數必ず低し。斯く文名なく、寧ろ全く文名なき者の中、文法に巧み、修辭法に適ひ、二點非難を加ふべからざる文を能くするあり。オクスフードや、ケムブリッジや、エデンバラ、必ず文名を馳すべしと期待せらる、者何時も其の人あり。而して校を出で筆を執るや、果して校友の希望に負かず、到達する所の測るべからざるやに想はるるに、三年五年にして漸く聞えず、前に聲を囑せし校友も何處に住居するやの知り難きは何ぞ。元文章を重んじ、文才を恃むは、重んずるに足らざるを重んじ、恃むに足らざるを恃み、更に幾層か之に優るの力あるを忘れたるなり。

文は衣服

の如く、適當の場所に適當の衣服を着るは社交上に便益を得ること多く、延いて己れの目的を達するに都合よし。寶石を閃かせば商店に信用を得、破れたる背廣を着れば乞食扱ひにせらる。されど美服のみにて長く信用を得べくも無く、美服を着る者が性格能力の言ふに足らず、徒らに服装を以て人を矚著すると知れては、服を美にして却て侮蔑を招くを免れず。之に反し、粗末なる背廣を着るも、人物の尋常ならざ

るの明かならんか、粗服は側も以て身を飾るに餘りあり。世俗の間、多く美服を喜ぶが如く、華麗なる文を喜び、深く内容を問はざるは事實なり。英の桂冠詩人は時の権門勢家の選定する所、權門勢家は情實を以て選定せず、情實の多きも、亦別に技術を察しての事、平生其の文才を知り、是れならば世間も承知すべしと思へるなるが、實際際々言ふに足らず、ウオーウオウオースや、テニスや、例外に屬すとすべし。技巧の末を見、眞の能力を看取し得ずしては、此の如くならざるを得ず。謂文と同様の現象は、散文にも見るべく、何處にも技巧の末に混する者多し。初対面の際に衣服の重要な關係あるが如く、初めて世に出づるに華麗なる文を以てするあり、華麗なる文は誰かに出世の第一著たる利益あり。されど能事が此に止まれば、幾くもなく捨てらる。女子に在りてこそ往々衣服が生命を形づくれ、筋骨の逞しき男子に於て、區々たる衣服何かある。禮式に之を缺かすんば可、故に人に不快を感じしんば不可、以て人を喜ばすを念とすべきに非ず。

男子は力を以て立つ

經驗の力、頭腦の力、手腕の力、何にても力を以て自然界に打ち勝ち、文明に貢獻するを貴ぶ。

文に巧みなるは出世の第一著なりとし、其の後の如何なるべきや、容易に言ふを得ず。文を以て運を開けりて、何處迄も文を以て立たんとせば、備わべき小丈夫たらざらんは難し。文學上に名を成す者が文に於て其の時代に最も巧みとするは、誤謬に屬す。後に文豪と稱せらるる者が、學校教員に惡文を罵られしあるを考ふれば、思ひ半に過ぎ。必ずしも教員の誤りに非ず、平素教ふ所の標準に照らし惡文なりしは海かにして、後に文名を發するに、其の標準に合格するに至れるが難ならず、文を通じて特殊の能力の發揚せるが爲めたり。文は一時被れる衣服に過ぎず、初め異様にして笑はるも、漸くして實力の彰明し、妄りに笑ふべきに非ずと知らる。ベンタムは文に於て全く言ふに足らず。大陸に紹介されしはデュモンが其の文を按排し、人をして讀み易からしめたるなり。彼の如くんば、文は何様にても差支なし。これを英語にするも可、之を佛語にするも可、將何語にするも妨げず。彼れ自ら如何に文章を考へしにせよ、事實に於て彼の思想は他人の文章を以て擯まれるなり。カントも文に巧みなる者ならず。絶えて華麗の稱すべき無し。唯言はんとい欲する所を言ひ得るだけの事は之れ有り、以

て足るとすべし。間と比喩の適切にして、今少しく文を舞はすの能あらば、或は頗る妙文を綴り得たらんかとも察せらるるが、何にしても文を喜ぶ者の排斥すべき所なり。而してカントの思想を研究する者に取て、其の文章は少しの不足なし。時として曖昧に流れ、解釋の困難なるが、是れ思想の徑路の致す所にして、如何なる文を以てするも明瞭にし難し。カントの思想は、カント自ら文を以て發長し、讀者をして理解せしむると謂ふべく、但だ文の華麗なるを喜ぶ者には、乾癡無味、穢を嗜むが如し。之に較ぶれば、ヘーゲルは文に長じ、シヨペンハウエルは一層長じ、後者は文章に於ても其の思想の位置を占むべし。ハルトマンも然り。されど思想を擧げる文章は究竟何程の價值あるべき。童に哲學的若くは科學的の文に限らず、詩若くは小説に於ても、價值が文に在るか、想に在るか、想を現はすの方法に在るか、言ひ難きことあり。第一流の作家として、單に文章よりせば四五流なる者も企て及ばざるを覺えず、或は更に巧みにするを得ん。ゲーテとて、ロゲルとて、其の傑作の一部を改作し、改作の原文に優るなきに非ず。五六間の區内には、據手に於て游泳術の達人に優るあり、潜水に於て之

より久しきに堪ふるあり、而も以て游泳の名人とすを得ず。達人は少距離に於て劣るも、能く東京灣を横きり、紳々として餘裕あり。

文の巧みは恃むに足らず

誇るに足らず、之を恃み之を誇りては末技の外に出づる能はず。固より何處にも多少文を重んじ、文體に注意す。マコーレーは二十五歳にてミルトン論をエヂンバラ評論に登載し、文名一時に揚る。評論の主幹ジェフリーは賞賛して曰ふ、軀は何處に其の文體を得たるかと。實にマコーレーは其の一文を以て世を驚かし、次いで續々論文を發表し、依りて政界に出で、相當の功績を擧げたるが、其の能く然るを得たるは、單に文の巧みなるが故ならず、政治的良心と放膽的判斷との讀者を刺戟せし所あるなり。而して在學中に文を以て望を囑され、出でて天下の寵兒と爲り、自ら文才を恃むに至れる跡なきに非ず。若し文才を恃まず、更に堅實を心掛けたらんには、一時に花々しからざる代り、更に後世に残すべき成績を多くしたるべし。同時代にプロハムあり、マコーレーに比して更に多能多才、青年の頃にエヂンバラ評論を一巻悉く己れ一人にて筆せしことあり。後政治に、法律に、學術に、到る處多少の成績あり、誠に

驚くべき才能なるに拘らず、マコーレーに劣ること遠きが如くなるは、餘りに才を恃み、何事も成し得ざる無しと信ぜるに出づ。才を恃む者は危し、特に文才を恃む者は危し。

頼山陽

は日本に於てマコーレーの位置を占むる者。而して曰ふ、吾を才子と言ふは當らず、吾は善く勉むる者なりと。彼れ初め才を恃み、後漸く之を恃むの努力に若かざるを知らるなり。米國ボストンに世界文豪の名を刻し、日本人二名を擧ぐ、一は菅原道真、一は頼山陽、文を以て世に影響せるより言へば、或は斯く指定するを得ん。されど此の類の事は異議の多き所にして、土井鞞牙の如きは曰ふ、文に於て山陽は言ふに足らず、日本には

徂徠と馬琴

となりと。此の二人は文才に於て尋常に超越し、文字を救ふに自由なること遠く山陽の上に在り。若し必要に應じて如何なる文體をも使用し得るを大才なりとせば、徂徠は之に幾し。天の寵靈に倚りて鱗氏の教を奉ずといひ、古文辭を事とせるは、他派の大人に惜む所なるが、徂徠にして才に乏しくんば、決して彼の如くせず。李王の文は模擬剽竊にせよ、古語を記憶せ

ずして學ぶこと能はず。徂徠は普通の文體に於て少しの困難を覺えず、何等か新文體もがなと思ふ時、徂々李王の文を得、以て一世を驚かすべしとせるなり。彼は實に如何なる文體をも能くし、桃太郎を興ふれば桃太郎の如くし、水滸傳を興ふれば水滸傳の如くしたらん。されど彼は文に力を致し、之が爲めに成し得べきを成さずして終れる所あり。仁齋の徳、蕃山の才、之に加ふるに吾が學を以てせば、東瀛に一聖人を出すと曰へりしが、古文辭に勞苦せず、一層力を注ぎたらんには、其の學や彼の如き止まらず、東瀛白石等より大なる業績を残したるべし。古文辭は才よりも記憶にして、多く秦漢の語を記憶せば足り、山本北山の如き、普通の文を古文辭に改め、其の容易なるを證せり。古語を解し、之を配列せば、古文らしく見え、易しといへば易し。斯かるは徂徠派を賣むるに效あるも、北山が此の如き事に力分ちたるは自らの文才を恃み、文を以て雄飛せんとし、成し得べきを成さざるに終れるなり。馬琴の文才の大きなは、和漢を混淆し、百味筆筒の如きを作るを以て推察すべし。彼は稗史小説を以て人を喜ばすに満足せず、必ず之を教へんとし、常に多く事理を列擧するのみならず、難解の語を陳列し

て振(ふる)り假名(かりな)を施(ほ)せり。一の八(や)尺(ぢ)傳(つた)は、當時(たうじ)に在(あ)りて普通(ふつう)學(がく)の數(かず)書(か)したる形(かたち)を備(そな)へたりと謂(い)ふべし、才(さい)の小(こ)なる者(もの)の到(いた)り底(そこ)企(こ)て得(え)べきに非(あら)ず。されど意味(いみ)簡(かん)簡(かん)的(てき)なるは、純粹(じゆんじゆい)の藝術(ぎゆつ)として高(たか)き位置(いち)を占(お)みず、明治(めいし)に入りて種(たぐ)々の非(あら)ざるを執(と)り、文字(ぶんじ)の小(こ)なる西(せい)鶴(かく)に劣(お)れるかに取扱(と)はる。馬(うま)琴(こと)が半(はん)熟(じやく)なる者(もの)を多(おほ)く結(むす)合(あ)せるは、學(がく)術(じゆつ)に非(あら)ず、文(ぶん)藝(ぎ)に非(あら)ず、執(と)れにも似(に)て非(あら)なる結(むす)果(くわ)を殘(のこ)せる所以(ゆゑ)にして、若(わか)し才(さい)を狭(せま)くし、少(すく)くも難(がた)解(げ)の語(ことば)に勞(あ)せざりしならば、世(よ)界(かい)に類(る)例(れい)を求(もと)め難(がた)き物(もの)を産(う)出(だ)したらん。ウオ(ウ)ター・ス(ス)コ(コ)ットは負(お)け負(お)け却(かえ)りて爲(な)すに相(あ)い違(ちが)ひ、馬(うま)琴(こと)は志(こころ)望(ぼう)多(おほ)きに過(あ)ぎて内(うち)容(よう)の混(ま)亂(らん)を招(まね)けり。されど上(じやう)下(げ)賢(けん)愚(ぐ)を過(あ)じ、老(らう)少(せう)男(なん)女(にょ)を過(あ)じて廣(ひろ)く讀(よ)まれたる彼(か)の如(ごと)きは、多(おほ)く見(み)出(だ)すべからずして、其(その)の然(しか)るは父(ちち)の外(ほか)に力(ちから)を致(いた)せるに因(よ)ると謂(い)ふべし。文(ぶん)は簡(かん)々(ざん)巧(こう)みなれば之(これ)を情(なさけ)みて類(る)りに進(すす)用(よう)するに傾(かた)み、之(これ)を情(なさけ)む、極(ごく)、文字(ぶんじ)に拘(こ)り、内(うち)容(よう)を忽(たち)ちせにするを顧(かへ)みず。白石(しろいし)馬(うま)東(とう)觀(くわん)瀾(らん)等(とう)と交(ま)りたる數(かず)嚴(げん)が、道(みち)學(がく)先(せん)生(せい)迷(まよ)道(みち)學(がく)、風(かぜ)流(りゅう)才(さい)子(し)醉(すい)風(かぜ)流(りゅう)、山(やま)鏡(かがみ)蕭(せう)家(か)夢(む)萬(ま)象(ざう)雲(うん)收(しゆ)月(げつ)滿(まん)樓(ろう)といへる如(ごと)く徳(とく)川(がわ)時(とき)代(だい)に、

道學先生と風流才子

と相(あ)い違(ちが)ひして下(くだ)りず、而(しか)して「風(かぜ)流(りゅう)才(さい)子(し)一(ひと)は概(がい)

ね文(ぶん)才(さい)を恃(たも)む者(もの)なり。山(やま)陽(やう)は初(はつ)め之(これ)に屬(ぞく)せんとし、之(これ)と俱(とも)にして得(え)意(い)なりしかど、世(よ)を弄(もよ)ぶより免(まぬ)るゝを得(え)たり。一(ひと)道(みち)學(がく)先(せん)生(せい)が「風(かぜ)流(りゅう)才(さい)子(し)」を卑(ひ)めたるは、自(みづか)ら才(さい)なくして之(これ)と遊(あそ)び得(え)ざりしが爲(な)ると限(かぎ)らず、「風(かぜ)流(りゅう)才(さい)子(し)」が即(すなは)ち短(たん)評(ひやう)文(ぶん)を作(つく)るの能(あた)るを誇(こほ)り、浮(う)世(ぜ)輕(けい)能(な)い、何(なに)等(とう)實(じつ)益(えき)を世(よ)に與(あた)へざるを認(たづ)めしなり。明(めい)治(し)の改(か)革(かく)は、各(おの)づから影(かげ)響(きやう)を及(およ)ぼし、従(したが)ふの學(がく)問(もん)を根(ね)本的(てんてき)に變(か)改(か)せず。ば已(いと)まらず。道(みち)學(がく)先(せん)生(せい)は多(おほ)く、學(がく)的(てき)に無(む)用(よう)の長(なが)青(せい)と爲(な)り、交(ま)際(さい)の媒(ま)介(かい)しして詩(し)文(ぶん)流(りゅう)行(ぎやう)の勢(せい)を來(きた)し、經(きやう)學(がく)家(か)も詩(し)文(ぶん)を以(もつ)て其(その)に立(た)つを得(え)、表(あ)面(めん)に於(お)て風(かぜ)流(りゅう)才(さい)子(し)か、一(ひと)を驚(おど)せる形(かたち)あり。實(じつ)に政(せい)府(ふ)は簡(かん)便(べん)に於(お)て勿(な)く、一(ひと)を復(たが)する毎(ごと)に文(ぶん)章(ぢやう)を正(ただ)すの必(かなら)ず。朝(あ)令(れい)變(へん)改(か)の誇(こほ)りありし程(ほど)にて、法(はふ)令(れい)下(げ)し、一(ひと)々(ざ)案(あん)を起(た)し之(これ)を筆(ふで)するは容(ゆる)易(い)の事(こと)ならず。加(か)ふるに昭(しやう)代(だい)の事(こと)業(ぎやう)として修(しゆ)史(し)館(かん)を設(た)け、皇(すう)朝(てい)の歷(れき)史(し)を完(かん)成(せい)せんとす。

漢文に長せる者

を網(あみ)羅(ら)し、唯(ただ)及(およ)ぶざるを恐(おそ)るゝ有(あ)る様(さま)にして、經(きやう)に精(せい)しく文(ぶん)に粗(こ)なる者(もの)が、爾(しか)に窮(きゆう)居(こ)するに反(さか)し、苟(なほ)も詩(し)文(ぶん)に巧(こう)みなるは皆(みな)皆(みな)庸(よう)庸(よう)せらる。而(しか)して中(ちゆう)樞(しゆ)なる太(たい)政(せい)官(くわん)に於(お)て早(はや)くも重(ちゆう)野(の)川(がわ)田(でん)二(に)派(はい)

に分(わ)れ、文(ぶん)人(じん)界(かい)の二(に)大(たい)黨(たう)を現(あら)わす。此(こ)の二(に)人(にん)は強(きやう)く詩(し)文(ぶん)に專(せん)らならず、經(きやう)學(がく)の盛(さか)なる時(とき)代(だい)に、文(ぶん)章(ぢやう)を以(もつ)て立(た)ちたらんが、普(ふ)通(つう)の經(きやう)學(がく)家(か)と違(ちが)ひ、文(ぶん)章(ぢやう)に於(お)て八(はち)家(か)の壘(るい)を斷(た)すべきに考(かう)へらる。歴(れき)史(し)編(へん)とて、左(さ)史(し)を祖(そ)とし、通(つう)鑑(かん)に據(たも)り、水(みづ)戸(こ)の大(たい)日(にっ)本(ほん)史(し)を繼(ついで)承(しょう)せんとする者(もの)、史(し)實(じつ)を輕(かろ)んぜざるも、最(さい)も文(ぶん)を重(ちゆう)んじ、文(ぶん)に於(お)て明(めい)治(し)時(じ)代(だい)を簡(かん)るを得(え)ば足(たり)とす。重(ちゆう)野(の)も、川(がわ)田(でん)も、官(くわん)史(し)として相(あ)應(おう)に事(じ)務(む)を執(と)るを得(え)、史(し)家(か)として相(あ)應(おう)に資(し)料(りょう)を攻(こう)究(きゆう)し得(え)んが、詩(し)文(ぶん)を重(ちゆう)んずるの勢(せい)に驅(か)られ、自(みづか)ら之(これ)を專(せん)らにし、一(ひと)字(じ)一(ひと)句(く)を練(ねん)するを以(もつ)て能(あた)りしれりと考(かう)ふ。其(その)作(つく)る所(ところ)は、能(あた)りし古(こ)文(ぶん)に似(に)たりと謂(い)ふべく、一(ひと)字(じ)、一(ひと)句(く)、根(ね)據(こ)あり、某(たが)書(しよ)の何(なに)處(ところ)に在(あ)るを明(めい)言(げん)すべし。而(しか)も、要(かなら)ずして支(し)那(な)の古(こ)文(ぶん)に似(に)たるに止(と)まり、新(しん)たに何(なに)の文(ぶん)體(たい)の出(い)で、何(なに)の思(し)想(じやう)の潛(ひそ)むやを見るべからず。百(ひやく)篇(ぺん)千(せん)篇(ぺん)、題(だい)を異(こと)にし、事(こと)を異(こと)にすれど、體(たい)裁(さい)に於(お)て數(かず)百(ひやく)年(ねん)前(ぜん)の作(つく)として妨(たが)げなし。明(めい)治(し)年(ねん)間(かん)に斯(か)く支(し)那(な)の古(こ)文(ぶん)を善(ぜん)くする者(もの)ありしを示(し)すの利(り)益(えき)あるも、之(これ)を外(ほか)にして多(おほ)く言(げん)すべき無(な)し。修(しゆ)史(し)館(かん)は大(たい)日(にっ)本(ほん)史(し)に劣(お)らざるの文章(ぶんぢやう)を以(もつ)て編(へん)纂(さん)せるにせよ、斯(か)かる編(へん)纂(さん)の必(かなら)ず要(かなら)なしと定(さだ)まるや、折(せつ)角(かく)名(な)文(ぶん)を以(もつ)て成(な)れる草(そう)稿(こう)は高(たか)關(かん)に束(たば)ねられ、之(これ)に據(たも)りて出(い)版(はん)せる者(もの)は

英制所に訴へらる。多大の勞と金とを費し、而して何等見るべき結果なく、空しく書庫の故紙と化す。重厚は多才にして原史編纂法の變ずべきを知り、新式に指を染め、抹殺を以て物議を醸せるが、年老いて人に成す所あるに至らずして已む。漢學者は漢文の能を以て世に立ち、明治十七八年頃まで漢文が頗る盛にして、皆能を八家文に採り、之と稱贊なき域に到達するに務む。漢學者の能事が此に了るならば、其大に稱するに足らざるの明かなれど、斯かるは獨り漢學者に非ず、新進の洋學者にして

時文に長ずる者

動もすれば此と大差なき態度に出づ。福地團藏は漢學者の國體を笑ひ、新時代の人物を以て居れるが、文才を恃み、文章に長ずるを誇れる。漢學流の文人に異ならず。元洋學よりも漢學の素養あり、漢學とても金澤歎茶筵翁の流を好み、謂ゆる風流才子の列に入り、文章を以て第一人と稱し、依りて屢々樞門勢家に求む。岩倉大使一行に隨ひし頃より木戸の知遇を極り、其の旨を承けて東京日々新聞に執筆し、木戸が政府に重きを成すに伴ひ、政府の辯護は福地の一手賑費と爲り、福地ならでは用を辨ずる能はずと知らる。初めて木戸が議長と爲りて地方官會

議を開ける、福地之が書記官たるは、後にて言へば貴族院若くは衆議院の書記官長たるに相當す。西南の役、戰地よりの通信は福地に拮抗する無く、福地は戰地より歸りて情況を御前上にて語す。政府よりも、實業界よりも、頗りに褒譽され、吾が文を以てせば、白を黒くし、黒を白くすること自由自在、苟も吾に依頼せば能く言はんといふ所を盡すべし、と人に言ひ、又自ら信じ、

文章上の護謄士

たる。斯期す。彼れ大官に向つて之を明言し、政府の意思を世間に貫徹するの任に當らんとし、大官より再三再四之を愛せらる。されど木戸の歿せる後、大官は實に屬性を得、必ずし、福地に遠つを要せず。往りに福口を恃むの護謄士は三百着流、福地は文才を恃み、知識を養はず、護謄の上乗なるを得ず。政府の施設に就て一々説明を聞き、單に之を筆にするが如き、何程の事ならず、偶々私意を加ふれば却て大官の意志に背く。帝政黨の擯排してより、大官及び民間の信用を失ふこと多く、彼れ亦稱し捨鉢と爲り、愈々文章の受負を心掛け、一枚幾圓の割にて如何なる文章をも作るべきを公言す。或る事件にて法廷に出づるや、一文章にて幾何

金を得たりしことあり、斯ばかりの金を貰ひしとて何かあると曰へり。彼は斯く心の荒み、而して文を巧みにするの大に稱すべきに非ざるに氣付かざる、氣の毒の次第と謂ふべし。彼は一時政府の辯護を引受け、論議を専らにせしむ、其の長ずる所に敘述にして、衆論も當らず障らず事の顛末を述ぶるに於て巧みなり。反對者を絶らすこと無く、怒らすも永く怒ますこと無し。されど其論學問の論議に通せず、前提より議案を下し、是非曲直を問かする場合は、餘りに薄弱なるを免れず。大學の學生に社説を作らしむるに至りたる、自らの短處を知りしに出でたりとすべく、而して數處を添削して宛然吾書子流と爲れる、亦文章上に特殊を具へたるを示す。其の任ずる所は文章に在りて、議論に在らず。何人も屍理窟を持ち來れよ、吾は之を金玉の文にすると、其の最も得意として誇れる所、文章の妙を以て無上の能と心得、遂に區々議論を後進に任せ、自ら文才を戯曲小説に據にし、本來の面目を發揮せんとす。實に戯曲小説に著眼せるは善し、當時舊派の行詰り、新派未だ展びず、此の間巨腕を揮ふは時機を得たる者なり。さすが機を見るに敏なりとすべしが、斯かるは單に文に巧みなるを以て成し

得べきに非ず、従来の盛名を以て俳優間に信用を得たるも、何事か黙阿彌に加ふる所あるか。小説も色と慾う題にて人情を穿たんとし、両して送迎して果さず、一行をも發表するに至らず。筆の丸るも想の伴はざるなり。吾が文を以てせばとは一の空想にて、文のみならば何程の事、成すに足らず。福地は確かに文に巧みなれど、彼れ屢々談話して平清岸機匠に文を成さしめ、其の文は全く吾等子流、或は吾等子以上にして、文のみならば無名の人も企て及ばざるに非ず。福地に元詩を作りしが、成島轉北之を廢すべきを勧め、福地は成島の書を廢すべきを勧め、互に廢絶を誓ひしとの事、若し他の事に於て之と同じく

能不能

を知りたらんには、益する所頗る多かりしならん。彼にして文才を養はず、別に使命を考へたらんには、才能を發揮すること律の如きに止まらず、抱負通りに一代の才子たるを得たるべし。福地は艶書に巧みなるを誇りしが、其の何れの程度なるやは明かならず。成島は漢文を以て情事を言ふを好み、柳菴新語等の作あるが、此の類は別才に屬し、必ずしも文に巧みなるを證せず。一時點綴論一が之を專らにし、其

の編輯に係る東京新聞人に行はる。今日より觀れば毎時風俗褒貶にて發賣を禁せらるべき者なり。石井南橋は詩文を以て自ら任じ、艱部漢學秀才なるを罵倒しつゝ、唯閑房の事を言ふに於て天品なるを稱す。福地は艶書を以て文の最も困難なる者とせしが、一の短篇論文を作り得ずして其に巧みなるあるを察せざるべからず。中江地は福地と大に性情を異にし、文才を恃むに於て同じ。其れ實に文章に長じ、又之を疎視して到らざる無し。文藝省に於て省内外及び省外の人に稱讃せしめし所、金額約十萬圓に上り、其の最も賞分は事に續き重ねて藍魚の食ふに任せるが、中に就て中江の翻譯最も傑出し、出版せらる他人は綺麗に満書して譯文は言ふに足らず、中江に對して感嘆して讀み來れば其のあり。其の素行も其の如きならず、文章に苦心せしこと、以て察すべく、其の文才を恃み、文に於て神に入ると考ふる、決して已惚れとせず。されど文才を恃み、文に専して比較的見るべき者少し。ルツソーの宣傳書の如くして、敢て一言せず、彼等所の文才を廢きたがら、文にすべき情事に感ぜざり。之に感づれば、福澤澤池。絶えて文才を恃むの跡なく、文章の何たるを考へざりしが如し。固より彼の執

經澤なる野心

筆する、頗る注意深く、用語をも慎みたるが、思想を發表するに十分なるを屬し、故さら文學を巧みにせんとせず。己れの思ふ所、之を筆にして世に公けにするに止まり、巧みに於て人に優らんとする。

如何に言ふべきかを考へず、何を言ふべきかを考へしは、旨を承けて意見を二三にすること福地と大差なきに拘らず、常に思想の充實し、文才を恃む者よりも久しく文に従事し、文に於ける産物の多き所以と知るべし。今は人が文章に注意すること律年の如くならず、小説にて紅蓮事件等が首きを成せる、他に其の如きもの、西條の文章に注意を惹ける所多き、今日斯かるが特別に承きを成さず、何れの文藝にて興味を興起せざる可なりとす。其の如き文章は人の斥くる所と爲るも、是れ實なる思想を纏せる情緒が、極端なる文章にて表出し得ざるが爲めにして、巧拙なる句調の求めらるゝに非ず。凡そ口にすべき事も、筆にすべき事も、思想若くは實を旨とし、能くといひ、能文といひ、

目的に協へるや否やに於て判定すべし。或る程度まで滞りなきを要

すれど、其れ以上に境に應じて得失ある者、豫め巧拙を決すべからず。言ほざるは言ふに優る場合、黙するが最も雄辯なると同じく、一字を書いて能文なることあり、無字にして能文なることあり、何ぞ必ずしも千萬言にして能なりとせんや。而も是れ或る場合の事、其の場合を誤れば、一喝の當に益なきのみならず、無量なりとして大に怒られん。黙すべきに黙し、千言萬語すべきに千言萬語し、萬言して忽ち黙すべきに亦能く斯くする、之を能辯雄辯とす。文に於ても同じく然り。珍味も屢々すれば珍味なるを覺えず、珍味は時に於てすべく、平時は常食を用ふべし。常食として、日々多少變ぜざるを得ず。文章も常に珍なるは珍ならず、珍をして珍ならしむるには、他を尋常にすべし。珍に驚くは、未だ文を語るに足らず。尋常を厭ふは亦之を語るに足らず。日々々の獻立、非常の獻立、之を尋ねて然る後に料理の巧拙を知る。文は思想の糧、感興の翼、文明の必需品として、普通の食物より遙かに複雑、一日々にたく飯さへ硬し柔かし、文の出来ばえに氣を採めば其れのみにて歲月の過ぎ行かん。

(大正五年九月二十日)

梅花趣味は今何狀

日本の梅花趣味は固有と外来とに分れ、寒梅雪月梅等、漢文に現はるゝは悉く支那より來り、玉骨清絶を表明し、隱逸趣味と謂ふべく、人として林和靖の如きを指す。要らず、梅を妻とし、鶴を子とす。漢學者は此趣味を悦び、往々隱逸の生活を送り、若し現に送らざれば、閑を得て然るべきを望む。日本には倪原の子が旅に梅を採みて戰ひしに、興味を覺え、鶯宿翁が普通語と爲り、春雨の端歌が擴まり、頗る情味の緩和する所あり。一は梅を敬ふべき者に解し、一は梅を愛すべき者に解し、而して或る點に合一し、素艶を以て弄殺するの情を失はず。百花に先驅たるを聯想するは、雙方相一致するが、日本は陽春に重きを置き、支那は嚴冬に重きを置く。晩れては梅も櫻に劣るらん魁けてこそ花も香もあれといふは、暮末志士の味にして、日本普通の思想とすべし。支那にも此類ありとし、寒に堪ふるを稱し、

歲寒特妍、氷疑霜互、擅美專權、相彼百花、孰敢爭先

といふが如きに傾く。支那も土地にて趣味を異にし、北方と南方と同じからざるが、何處にても春雨の端歌に類する情趣を覺えず、之を歌ふに他の花を以てするが如し。高士の風を慕ふは眞に高士なりや、將慕ふに止まるや、疑ひあり。

梅花趣味は昔景にて違ひ、斷崖茅屋が之に適し、普通の洋館は適せず。近年前よりも植梅の減じたるは、建築の變化に伴ふ所少からず。傳染病研究所にて幾株の梅が池に臨み、大に賞すべくして然らざるは昔景に因る。銀世界の梅林が芝公園に移り、前ほど賞せられず。今は東京附近にて古野が吟客を誘ふの狀あれど、東京人の趣味を促すこと幾何なるべきや。一たび觀梅流行となり、群衆殺到し、斷絶を好むの士の歌ふべきや。趣味の變遷の避く可からざるも、過去文化と密接の關係ある梅花趣味が廢頓すること、全く放任すべきや、心ある者は考へよ。

(日本及日本人より)

歲

時

【二月】

新年と舊年

舊年と新年と、日を以て言へば一番一晨の差のみ。時を以て言へば一分一秒の相距のみ。更に細かに見れば、時計の鐘子の左右に一振差する瞬間に於て分るのみ。かゝる瞬間に於て社會萬般の事物皆悉く截然一新すといふの理は固より之れ無く、舊といひ新といふは單に月を限りて呼べるに過ぎざれど、而も人は新たなる心を以て新たなる年を過へ、茲に將來を察して人なる希望を屬すると同時に、又往々過去を顧みて痛切なる感慨を催す。而して其の人を殊にし、従ふ所の事業を殊にし、且つ事功の成否を區々にするに因り、個々人々の感ずる所亦隨て一様なるを得ず、全く相異なれりる感想を擧ぐも少からず。即ち功成り名遂げて閑地に保養する者は、往事を追憶して能く崎

嶇を踏え艱難に打撃あたるを慶ぶならん。事業未だ半に到らず、前途尙に成すべきの事多き者は、既往の順なりしを賀し、更に將來に向ひて新たなる希望を屬するならん。或る事業を経營して熱心之に躍めしに處措置しきを得ざりしが爲めに失敗を招ける者は、悔悟し發憤して過を責せざるを誓ふならん。職事業に勤め悔慮事を盡し、意外の阻礙に逢つて蹙蹙せる者は、一段の勵精と悔慮とを以て、転禍の矢を桑榆に收めんことを期するらん。將刺苦幾年、學業を卒へ、新たに社會に出でて爲す所あらんとする者は、新日岸角に立ちて水光瀲灩を觀るが如きを感じたらん。

實に舊年は絶然によりて訓誡を與ふべく、新年は希望を以て成業の途に進ましむべく、過去に成功せる者は由りて意を強くしつゝ益々業務を發展する所あるを得、失敗の歴史を有する者は由りて自ら戒め、更に新たに計畫する所あるを得、かくて平坦にして波瀾なき日常の徑路にも一鴻溝を劃するあり、新年と舊年との畧

に別るゝが故、刹那の差ながら、節序の舊きより新たなるに入ると共に、人心も亦之に伴ひて多少改まり、此の際を以て一の段階と爲し、既に中止せるを再び始め、既に始めたるを銳意進行し、一層の勇氣と一層の決心とを以て、完備の域を指して歩を進めんとせん。特に事業を成就せるの確實なるは種々多きは失敗を記念とし、或は失敗すべき恐れあるが爲め、新年は一般の人に反省の時を與へ、發憤し奮勵するの機を與へ、個々の活動を導かんとし、延いて社會全體の活動を盛んにするに與ると謂ふべし。獨り夫の平素懶惰、悠遊して日月を徒過せし者の、思ひ出ししが如く慙かに悔悟し、自ら奮うて年と共に改まらんことを期する、是れ一時の刺戟を受けて然るのみにて、日の移ると共に醒め、再び懶惰の舊態に復せざるべきや、聊か豫東なし。

但だ往時は四季の終始すると共に年も亦終始し、加ふるに年末年始の儀式の備はりしを以て、新舊の區別頗る判明し、上下を通じて均しく新年に會ひたるの感ありしに反し、今は或る方面の新たなるも、或る方面は依然舊の儘にし、動もすれば人をして新年を迎へながら何卒新年らしく感ぜざらしむることあり。而も概すれば

舊年を送りて新年を迎ふるの際、或る者は成功に伴ふの満足と喜悅とを以てし、或る者は失敗に伴ふの悔悟と發憤とを以てし、而して兩者俱に新たな希望を抱き、光明を前途に望みて新たな行徑に上るを見る。今の新年を以て之を昔の新年と較ぶれば、昔の儀式多きが如くならず、今更ら昔の如くならんことを求むるも、得て能くすべきに非ざるが、試みに新年に臨みて一言せんか、則ち此の如し。

老か壯か舊か新か

一新なるは常に好まる、舊なるの却つて良きの履きなれど(ニツト。エル。アルチド。キエルト、ガムメルト。エル。スツドム。ペドレ)とは北歐の語にして、何處にも事實に現はる。守舊の名ある支那人さへ人心隨レ歳改、世事逐レ時新といふ。實に新浴者振其衣、新浴者曝其冠、冠入之情也とあるが如く、新なるを好むは人の情なり。

人の情にして、又人に缺くべからず。新陳代謝は生命の繋る所、其の停滯するは即ち衰頹を意味す。青年の意氣旺盛、新に青春を求むるは、自ら進み、併せて他を進むるもの、其の

猪突して顧みざるは寧ろ賞讃するに足る。而も好む所必ずしも良からず。好悪は判断なりとするも自ら種類あり。普通に好む所は一時の感想よりし、遠からず好まざる所となる者少からず。間斷なく新分子の注入を要するも、新分子は一様ならず、新なるの一標準を以て其の良否を決するを得ず。新舊の良きを探るをば老練と謂ふ。

且つ壯時希望の盈ち、事として成し得ざる無しと考ふるも、後何事かを成すは幾人なりとする。春風に富むは一種の資産にして、以て事を成し得べきに似たれど、事は時のみにて成らず。力を發揮せず、能を發揮せずんば、時は空しく過ぐ、數十年も數月の如し。

少壯の怠るは老年の勉むるに劣る。雨森芳洲八十一にして古今集を誦する一千遍、自ら賦する一萬首、カート八十にして希臘を學び、ブルタルク同年にして羅何を學びぬ。チヨーサーの傑作は五十四に始まりて六十一に終り、モルトケの塊國を攻めしは六十七、佛國を攻めしは七十一。チチアン及びクーバーは百歳まで畫筆を離さざりき。

少壯は最も有望なるも、徒らに齡を待たばきに非ず。老年は前路幾くもなければ、尙ほ爲

すこと有るに堪ふ。新年に臨み、一を戒め、一を勵ます。

生命の長と幅と厚

一歳を加ふるは一歳を失ふもの、春秋の漸く減するなり。門松を以て一里家とするは故なきに非ず。而も生まれて直ちに死するあり、或は五歳十歳にて死するあり。必ず百歳と定まれば、一歳を加ふるの即ち一歳を減する者なるも、死生命の在るあり、何時死するの測られざらんか、一歳を加ふるは其れだけ壽命を得るに外ならず。一歳を加へ、二歳を加へ、三歳を加へ、歳を加ふるの多きほど、生命を承くるに於て成功すとす。死せば萬事休す。命ありての物種子ともいふ。年數は成るべく加ふるに若かず。

されど徒らに長きは恰も織の如し、必ず幅なきを得ず。世に百歳時としては百五十歳なるありながら、生存せるや否やの問はれざるは、長ありて幅なきが爲めのみ。項羽や、賈誼や、歷山や、ラファエルや、モツアルトや、三十年前後にて死し、事功の廣く知れ渡れるは、實に生命の幅に於て秀でしなり。長三十にして幅

百なるは、長百にして幅三十なると同じかるべく、之に比し、長も足らず幅も足らざるは、頗る短命なるを免れず。長の期すべからずんば、成るべく幅を廣くするに務むべし。

されど長あり幅あるは平而たるに過ぎず、又厚なきを得ず。長百にして幅百なるは、眞に生命の豐なるらしきも、厚十なれば、長四十、幅四十、厚百なるより短命なり。長幅の少く厚の多きは、往々世間に見る所、中江蘇州の如き。壽命僅に四十一、近江の一村に隠れて外に出ず。而して冥々裡に感化の深く及べるの疑はれざるは、徳を以て優りたればなり。凡そ事は或は聞え、或は聞えず、名聲は必ずしも言ふを値せず。唯だ長と幅と厚とを合せ、比較的積の最も多きを以て最も長命なりとすべし。其の多きは即ち福の存する處。

勤勉と餘裕

十二月より一月に移るは、當ほ十一月より十二月に移り來れると異なる無きも、歳の茲に新たなるや、舊年を回顧して、略々如何に變化し果開し進歩したるかを觀察するを得べし。而して歳の更まること幾回し、年々歳々舊を

送り新を迎ふる間に在りて、何れの變化を致し、やの容易に知覺し能はざる所とせんか、世紀の改まるに際し、舊世紀を一掃して瞥見せば、其の變化の跡、影響として眼前に現はれ來る。今や十九世紀正に去り、二十世紀新たに到るに會す。乃ち新年に臨みて舊年を顧み、新世紀の首端に立ちて前世紀一百年間の事を依へば、其の表現せるの最も彰著なるは、朝人の益々増進に赴けること是なり。之を十八世紀に比する、十九世紀中の人々は實に勤勉の稱を稱すと謂ふべく、是より生き、官位無き人々を奴隸視して酷役唐使する風の一概に存し、遊食の輩の外は、殆んど終歲何の爲すこと無きを以て通態とせり。今は遊食の名を冠せらるゝ者と雖も、必ず何事かを爲しつゝあり。茫然として唯腹食に耽るは、究に人たるの本分を盡さざるかの如くに考へらる。我が國情に看るも、幕府時代に較ぶれば、近年は總じて義務に勉勵するの形あり。曩に集十八萬と稱せしは遊食の徒にして、其の外にも悠遊賦食せる者太だ衆かりき。今も猶ほ遊食の徒あるにせよ、其の數や大に減じ、隱居の身分さへ少しく減まる。明治に入りても、初め政府に仕官せる者は、概ね

用少く間多く、一定の時間に出省し、一定の事務室に参集し、簿册を點檢し、整理し、茶を飲み、煙を喫し、而して一定の時間に退廳す。是れ謂ゆる日々の勤務なり。大學より出でて官に仕ふる者は、嘗て斯かる習慣に通ぜざりしが故に、出省して用務を命ぜらるゝ、直ちに之を擧し、然る後何の爲す所も無く、惘然として天井を眺めて時を過す。同僚の其の人に對して致す事あり、曰く、事務は漸く迅速に濟了すべからず、出仕の時間中に濟了し能ふ如くして辦ぜよと。當時事務に慣るゝと漬れざるとの相違は則ち此に在り。事務無くして而も事務あるかの如くに裝ふ者、尤も事務に慣るゝと爲せり。十八年の事、官制改革ありてより、大に各省の事務を省簡し、且つ勉めて繁文縟禮を除き、更に勤務時間を増しぬ。此等の事久しからずして一旦廢せられんとせしが、漸くして次第に勤勉に復し、今は猶ほ十分ならずといへ、前年に比すれば、大に勤勉の風を加へられりとす。而して獨り官省のみならず、一般の會社製造場皆然り。察するに今日以後益々然ることならん。

然れども大に勤勉なるの風を養ふと共に、又成るべく餘裕を作るに力めざるべからず。世

上の事如何に進歩を促むるありとも、唯其の機械的なるは、荷りに殺風機に過ぐ。林立せる煙突の暗黒なる煙の間に映ずるのみにて、他に一物の影を投けず無からんには、人の生存する所以の尊厳に在るや知り難きに至らん。又必らずして、空の無かるべからず。樹木の生ぜざる禿山、船楫の通ぜざる細流は少しの益無くして、徒らに交通の煩悶たるに過ぎざれど、煙突と煙との外一物の目に映ずる無きよりは、禿山細流の點綴するあるを憐れりとすべく、若くは煙を隔てて青山碧水の間に人を以て、更に大に心に快しとすべし。人の生を享くる、亦此と似たる所あり。過々忙々として終日些の閑無く、殆ど身の養育、所を知らざるは不可なり。斯の如きは守鏡奴の黄白を垂積し、鑽然繁然たるに據して愉快を獲めんと揮ふこと無し。須らく勤勉なると共に、爾く職事に忙殺されざる大げの餘裕を作るべきを要す。世運益々隆昌に起きて、市街の建築爛々密を加へ、汽車汽船の往來一層の頻繁を致すに隨ひ、更に益々公園設置の必要を生じ、且つ名所保存の肝要を感ずるに非ずや。一般に勤勉の風を養ひて、勤勉其の者を愉快と感ずるの念を長ぜしむるは、洵に努むべきの緊切事たるも、又同時に、善く

遊樂するの道を求むべし。一に勤勉を旨として多に苦むが如きは、特に稱するを得ず。若し夫れ多忙を口にして自ら勤勉なるを誇るに至りては、固より言ふに足らざるなり。

(明治三十四年一月)

寒月梅花を照す

同じく一月の月、昔は春月といふの多く、今は寒月といふの多き、曆の異なるに出づ。「誰か梅花毛久歷之清月夜爾幾許散來」我前に咲きたる梅を月影によたぐ來つゝ見む人もがな、此等は寒月とも春月とも知れず。一春の夜は新雪の梅を照る月の光もかをる心地こそすれ、是れ春月梅花を照せる者にして、「由吉能字留爾天晴流輝久欲爾能掃奈乎理て於久良牟波之伎故毛我母」は歳の暮、寒月梅花を照せるなり。寒と春との別なく、梅花の月に照さるるは特殊の光景、して愛でられ、「秋よりも梅かをる夜の月を見む鹿こそ鳴かね袖は露けし」、斯くて秋の月よりも賞せらる。

されど和歌は春の和きが如く、漢詩は冬の嚴しきが如く、寒月照梅花の興趣、漢詩を以てする方、和歌にて詠ずるより易し。漢詩な

れば春月も往々寒月と見え、竹中、元絶、月寒梅白に於て極るらし。雪照清霜、霜射、氷骨眞高比、酒房、後苑向、風香必郁、疎籬迎、月影參差、蘭麝、寒月ならざるも、寒月と稱はず。梅花得月、太清生、月到梅花、越樣、明、海月蕭疎、兩、奇絶、有、人踏、月、綫、花、行、作、月と梅と相照れず、謂して解し得ざる所、察するに足らざるや。漢詩、梅、清、香、浮、動、月、黃昏に至りては、月光、照、影、漸、然として、寒月に限らざるも、他の天文地文を以て言ひ易からず。

若し東邦の趣味にして西邦に之れ無く、而して特長とし譽ぐべきありとせんか、寒月梅花を照すの清麗なるを其の一に計ふべし。歐米に寒月あり梅花あるも、遂に此の趣味を解せざる、猶ほ東邦に草花の趣味を解せるの少きが如し。月梅の妙趣を感じるは、蒙に富める支那、或は日本に優るも、日本も決して多く感らず。稍々異なる趣味よりせば、優るとも劣らず。日本は東西文明の接觸する地、既に西風を容れ、之を同化し、多々益々辨ずべきが、西人の未だ解せざる所當に一ならず。歲端に臨みて寒月梅花を照すに想ひ及ぶは、極東に生れし者の幸福なるかな。

の白色を使用するに拘らず、ソアツソンの緑色を使用するは、後者が緑色を以て希望の表號と爲しに用づ。實に雪去りて、山野の緑色を帯ぶるは後日來るべき豊熟を示すもの、希望を慮ふるに適當ならん。或は自然を愛する者の點想するより、草木の緑色と默想とを聯結するあり、其の他一ならざるが、若干の例を除き、白も綠も兼意に用ゐらる。古那にも白徒といひ白徒といひ綠林といふが如きあれど、同じく多く兼意に用ゐらる。雪中松は自ら意義の証ひ難きあるも、色より積ふるに、亦必ずしも意義なしとせず。

【二月】

大寒よりして立春

冬至後十五日にして小寒、又十五日にして大寒、又々十五日にして立春とは、事餘りに人為的に失し、自然の推移と關係するあるも、多年の平均に於て幾許かさる順序の尋ね可らざるに非ず。二月は冬より春に遷るの月、月其の物は冬か春か、土地に依りて異同を免れず。北米は以て冬とし、寒は以て春とするが、我が日本に

は未だ定まらず。冬に入れて可なると同時、春に入るも亦不可なく、舊慣にて一月をさへ春とすれば、二月を早春とするの中を得るに似たるも、桜の季節を早春と爲すの如何のものにや。此等は強ひて明晰にするを要せじ。

概して懸けれど、東京は大寒に於て冰點を極度とし、以北は是れ以下、以南は是れ以上とすべきが、正に冰點なるは寒冷の甚しからず、特に朝夕のみにして、且つ數十日に續かざるは、呼びて嚴寒とするも、肌膚の疼痛を覺ゆるに至らず。されど寒は期ち寒にして、時に北風の凜冽たるあり、以一奥羽北海道乃至樺太を想察し得ざるに非ず。緯度三十を占むる帝國の領域は、寒の感ぜざるあると共に、其の感ぜられ、而も大に感ぜらるゝあり。南方の一部を除き、寒の去るの切に希望せらるる、偶然ならず。去るの望まるゝも、大寒に疾病少く、變災少し。積雪なき限り、人皆寒に馴み、馴まずとも他より暖まし易し。農事の間かるゝは、種々の事情ある中、農家の開眼といふあれど、冷氣の討議に便なる無しとせず。他の季節に在りては、怠惰なるは愈々怠惰に流れ、亂雑なるは愈々亂雑に陥り、一層醜狀の露れん。積雪あるも、屋内に執務すべく、剩へ最も讀書に利益

あり。嚴寒雪三尺、寒空月一輪、曠野天地氣、泰に讀書人一掃、眞に冬夜讀書の感なり。而も春は待たる、常に春ならんことの望まる。冬の此の如くして、春の益々待たれ益々望まるるか。

紀元節の意義を知れ

三大節中、元旦は古來の習慣、天長節は小兒も解する所、唯紀元節は幾分の疑を免れず。明治に入りて設定し、初め専ら皇祖を追憶せんとし、或は基督紀元に對せんとし、或は米國獨立祭の如くせんとし、年月日にも異論を來し、今尚ほ一致せざるが、紀元の語よりしてか、建國の鴻業よりしてか、創業、新設、維新、革新等を聯想し、此の日に憲法を發布し、此の日に金鵄勳章を創設し、民間にても此の日に以て開業せる者少からず。されど元旦に舊新を區別し、自ら新たにするに務むるに比し、紀元節は殆ど言ふに足らざるの狀態とす。

故さら案出せしならねど、元旦は世界の始めを觀し、紀元節は國家の始めを觀し、天長節は今上の始めを觀し、三大節皆始めを觀するが、紀元節は國政に關し、苟も國政を念

ふ者は此の日を以て更新の如何を考ふべし。
菊日新、日日新、又日新、安註にも、
其身に日新の如きは、大なる財家に年々弊害
の積むに似て、大浴して垢を去るが如く、
改修若くは改革して弊害を除くを要す。抑々建
國とは何ぞぞ、總べて各節を統一し、之を統
序立て、内に業務を統らしめ、外に事業を操は
しめざりしや。

新しう創れば、汗の流れ、塵を被るが、辱に
するも身に堪へなきを得ず。變時に根本變遷を
敢てすべきは勿論、平時に弊習を改め、自ら新
たにするに務むべし。變時は弊害の卸賣、平時
は弊害の外賣、小費 積みて積弊と爲る。建國
紀元は一回なれど、爾後新たに除くべき者、新
たに設くべき者、曾て絶えず、今も其の多きに
苦む。紀元節に、各家は頭みて弊の改む
べし。無きやを察し、他の人々も關係事項に就て
勵まされし。積弊の極まれば、革新的運動あるの
み。但し新は真なるべく、奇を意味せず。單に
奇を追へば、新ならざるに劣らん。

紀元節と梅の節句

五節句の行はれし頃、上巳を麓 節句、蹴

午を蹴鞠の節句、重陽を菊の節句といひ、一
種、起原を推ふる所ありき。今日と二節句の全
廢せられしに非ず、上巳及び端午は相應に盛
んなるも、曆の異なる爲め、事の同じきを得が
たし。人或は四季の花を大祭日に配當し、新
節句と爲さんとせるあるが、固より實、行は
べくも見えざれど、新節句が舊節句となり、
天長節が舊節句となれるは、事實の示すが如
し。而して二者共に、偶然にも意義の伴へるは
面白し。

梅は元日本に産せざりし山なるも、上古花と
いへば梅を指し、其あるのみならず、不二、是
花也、一、誰見花、也、とて百花に魁け、一歳
の元始、斬虎の開張を賜じ、且つ歳字を成ぎつ
つ、花色 清香、香、夏燦爛なる、正に草昧、世
に於て國家の基礎の成れる觀あり。西山公が
不復 陽陽桃李時、庭前 梅雷獨分坡といひ、
我今許、吹花王、誰、却下 看南園 故といひ、
畠山公が好文書は無威武、雪裡占 春天下魁
といへる、吹花を以一言ひ易からんや。

素朴に笑して、歡樂に遊せずと謂へど、花
に萎れしをらしやなど、清の淡なる者なきに
非ず。但だ歌無吟吟夕陽に醉ふは、異ならず
人ば能くせず。百華に魁けたり、萬葉集と爲る

といふも、亦此の意なるべく、必ずや文に先
んじ賢なる可らず。國體は最も堅固なるを要
す。

かくて人は梅に愛し、成るが、梅なき文
那は梅を承くるに 桃李を以てし、平生不喜凡
桃李、看子 梅花一睡過 春の效あり。梅の
開くに似て、梅あり、カリフォルニアに梅の
の移殖せられしが、草花を愛する者、概ね木
に果を求め、花を求めず。彼にはクローカス
が梅に相當せん。我が日本が、古來東洋人の
花を愛する能を以て紀元節を祝する、實に特
殊の例に屬す。

梅花

梅花は雪中に在りて最も傲気を見ふるもの、
天氣晴晴、春光麗かなるに方りては、梅花
の爛漫たるに若かずとせらるべく、嚴冬未だ去
らず、萬木雪に掩はれ、一望たゞ皚白なる時に
こそ、此れ獨り姿を凌ぎ、蕾を持ち、其の花
其の數、共に清香を放つに適すれ。古より梅
花の節句に引かるゝ、總じて二様の意義に於て
す。其の一は他に魁けること、其の二は節を守
ることなり。百花に魁けて後き、清香を放ち

て、兩性を別つは、久しき歴史上の變遷に出づ。變遷の結果として存続する所、意義なきが如くして意義あり。男女各々節句を定め之を守りて相犯さざるは、同權若くは同等を指ふる者の首肯すべき所ならずや。女兒祭の舉行さるゝ猶ほ男兒祭。如く、孰れの重きか孰れの輕きかを言ひ難し。何國か斯く公平に祝日を兩性に配當す。男兒女身は未開の狀態といひ、日本を以て其の樂し甚しとする者、幾許の舊案を修正せざるを得じ。

されど雖と雖と全く趣向を異にす。猶ほ、槍、扇、式、人、等と共にし、出陣に擬し、女子を加へず、若し加ふれば功皇后又は巴御前の如し。儀に之に反し、袴着を認め、男女一列にし、軍に一方なるは男子官女等附屬物に過ぎず。袴、袴、中、袴、袴等、女用なるものも、此の儀に用ひし、是れ以てに出でず。漢に男女を重せず、一日と等々にしなから、一を以て外に勝すとし、一を以て主人、儀に内を分るとする、明白に分籍を認めたる者にして、分業ありてこそ協合もあるなれ。時節を通じて自然に想ひ及びたる所にせよ、蓋し多く誤ること無し。

現に舉行するは人其の何を意味するを問はず。問はずして不可なきが、之を舉行するや、貴族的の家は舊曆に於てし、平民的の家は新曆に於てす。得失を考ふる價値なきも、新曆四月は桃花爛漫、季節、人皆外、出でて遊樂するを欲し、家に籠りて儀を飾るに當りて陽氣するを免ゆ。舊曆は舊習にして變あれど、漸大節節に由るの増加し、他日晴氣を通じ朝日、一定するに至らざるべきか。雖と儀と何の實益なく、寧ろ無用の長物たるも、世に無用の用あり、奢侈に流れるる間、國民精神遊逸たるを失はず。但し今幾層か整備せば、外人を招くに足る。亦小に計て小ならず。

同季といふは、春、夏、秋、冬にして、然る地方殆ど四季の如くなく、寒帯地方ありて春秋なし。南洋地方に之れ有るも、何時よりして春、何時よりして夏、何時よりして秋、何時よりして冬なるや、一定せず。或は緯度に従りて異なり、或は地味に従りて同じからず。何れの國も其の能く孰然確定したるは有らず。我國も舊曆太陽曆を用ひ、正月を以て春の初めと爲し、舊曆で太陽曆を用ひしより、舊

時の正月は後るゝこと一箇月若くは二箇月、爲めに春季の例れの日よりするや、益々意味と爲れり。或る者は其の歳首よりするを謂ひ、或る者は後るゝこと一箇月の時よりするを謂ひ、或る者は以て陰曆正月、初の日とすといひ、或るは錯雜するを免れず。一概には只漠然春心の感ぜらるゝ頃より春なりと爲し、時に定まれる日あるを認めず。元四季の區別は重に農家に於て必要とせるもの、大體の區別に既に世に存するありしが、是れ皆経験より得たる所を整理して定められたるなり。我が太陽曆の由りて來りし所の歐米諸國は緯度、緯度、緯度、皆一様に二三月を以て春季の初めと爲す。是れ太陽曆を用ふる國を通じて習慣とせる所なれば、之に倣ひて、三月より春とせるを要せず。之に倣ひて、三月より春とせるを要せず。之とすべし。歐米に於ては三月は春の初めなるのみならず、天候に就ては、三月より春とせる一月を以て、春の初めと爲せるは、既に十八世紀の中頃に在り。ロングフニローは十二月にして春、日本所あらしめしが、其の三月は春に曰ふ、吾はマルチユニスなり、吾て第一、第二、第三たり、春と爲むるは、春の初めたりしに、人間の一言にて之を變じ、更に人間のヤーマスをして吾が地位に當らしめぬ、

に若し人間に對して、戰を乞む、狂風歌を都
 市を修濶し、海を濶らし雨を降らし屋舎を濡れ
 しむと。三月に至りて狂風の歌々たるは我國
 も亦然り。所謂花に嵐なるもの、即ち此の邊
 よりす。四月、辭に曰ふ、大に春の門を開きて
 百花の麗麗たるを遊ぶ、謂はば、高橋、唱
 し、陽光の和煦なる、人の心、宜しと。五月
 の辭に云ふ、白鳥鳴き、黃鸝鳴じ、吾が來る
 を恨す、是れ即ち吾が使なり、而して看よ、
 吾が名は山麩子の花に書きしと。我國に在り
 て春光、最も人心を愉快ならしむるは
 四月の節と爲す。五月に至れば、動もすれば梅
 雨の節に入り、紅雨霏々、陰鬱もに集がる。
 春の遊びを爲すは殆も人心の最も榮しき時に
 當る。両手執れの節も皆其の序に應じて繁榮を
 感ぜざる莫しとはいへ、心氣最も待暢、繁榮
 を感ず。最も遊ばば、即ち此の季節を以て第
 一と爲す。飄ゆる春の野に遊ぶが如しとは、眞
 に心を快遊せしむるの趣あるを學ぶ。而し
 て此の作好の季節に際してや、郊外の漫步を以
 て最も適せりと爲す。春の野に遊ぶ、則ち軟
 風面を拂ひ、心氣爲めに暢快、樂々遊り無
 く、最も人心に達し、又最も身體に宜し。其
 の時に於てせて了して猶ほ其の時の如くなる、そ

【四月】

是より花の季節

れ唯修養あるものかな。
 季節の語は意義頗る廣く、議會季節、相撲
 季節、白鳥季節、蜜柑季節等、隨意に適用すべ
 きが、多く一部に偏し、甲の禁裏する所、乙之
 を斥逐し、或は全く異り置せず。英國の倫
 敦季節は、貴族紳士市中に住みて交際に忙し
 く、各種劇場の開演あり、各長展覽會の開催あ
 り、禮券に鑽さるゝ時と人に趣を異にす。露
 國は冬期之に相當し、他の國も同情に應じて幾
 許か之に擬するが、東京は市區の統一を缺くと
 同じく、季節も明かに定まらず。春は青、夏は
 夏、秋は秋、冬は冬、各々能く勉めつゝ、大に
 勉むるに至らず。能く遊びつゝ、大に遊ぶに至
 らず。
 而も比較的明かに定まれる無きに非ず。中に
 も花の季節は、貴族富貴の差別なく、老幼男女
 の差別なく、皆齊しく遊び、宛ら社會の渾然
 として融和するかの如く見ゆ。固より人々嗜好
 の遊び、或は芝居に較べられずとし、或は閨

妻に若かずとし、或は花より團子、或は酒なく
 て何の己が權かな、花のみにて愉快の皮の甚だ
 深きを得ざらんも、最も範圍の廣きを致し、常
 に帝都を遊じ花下に遊ぶのみならず、都とな
 都となし、日本全國を通じて、時日の運送こそあ
 れ、悉く花に浮れ花に戯れ、一年の氣晴ら
 しすと謂ふべく、人心の舒暢、特に花の季節
 に觀る。
 趣味の階落すといひ、現金主義に流るゝとい
 ひ、現にさる形跡の認むべきも、花の季節に國
 民率つて遊び、其の來るを待ち、其の去るを惜
 むは、たとひ事情の種々なるにせよ、自然の
 美を解せりと爲すべく、自然の美を解する間、
 安に俗惡觀するの福ならずや。櫻花が花の正な
 るや否や、多少の議論を招くも、殊東の櫻花
 の秀でたるは疑を容れず。四月三日の皇祖
 祭は往々櫻の節句と稱せられ、花の季節も感
 じ始めるとして妨げず。碧雲の遊ぎて天地春に
 滿つ。
 皇祖祭と櫻花節
 上巳を二月後れにせば、皇祖祭は櫻の節句
 に當れど、都會にて一般に陽曆の儀にし、皇

眠り、能く勤むる者は能く遊ぶ。最も勤勉なる者は最も遊樂す。現今英國第一の外科醫士トリーは最も勤勉なるを以て名あり。而して一年の三分一を都外の遊樂に費す。實に勤むる者は遊ばざるべからず。一日に遊ぶべき時間あり、一年に遊ぶべき季節あり。遊ぶべき季節、何ぞ遊ぶべきべけんや。

而も花の季節は櫻花の爛漫たるのみに非ず、寒暖正に膚に適し、花なしと雖も尙ほ快とするに足る。花の人を快にするか、氣候の人を快にするか、是に決し易からず。嚴寒若くは酷暑、櫻花の咲くも人甚だ之を賞せじ。陽春四月、花なきも人必ず出遊せん。況んや山野縁を呈し、往くとして心魂の舒暢を覺えざる無し。花ある處、遊ぶに宜しく、花なき處亦遊ぶに宜し。呼びて花の季節とする頃、唯當に遊ぶべし。遊びて然る後大に勤むるに堪ふ。

如何に遊ぶべきかは、人皆知るが如し。而して動もすれば之を言ふに惑ふ。されど事や皆單純ならずや。遊樂と勤勉と相反する者、若し遊ばんと欲せば、平素從事する所の反對に出でんのみ。營々として室内に勤むせんか、須らく室外に遊ぶべし。室内に籠るの久しければ、室

を離れ、家を離れ、市街を離れ、遠く郊野に遊ぶべし。骨牌は勿論、碁將棋、管絃、讀書之を避けよ。而も軍人の如く、城外に遊樂するの多きは、室内の遊樂却て妙ならん。決して一に拘るべからず。要は反對せる者を轉換して相救ふに在り。

櫻花の季節は短さか

本年は例年より開花の早く、東京には、上野の如き、漸く綻ぶべき頃、既に落花紛々、殆ど街頭にも上らず、四落は眞に倏忽の間に於てす。隨て季節と稱するに足るやの疑はるるが、土地と種類とにて遲速を生じ、上野の盛なる時、向島は未だ開かず、向島の盛なる時、小金井は未だ開かず、落つる者、開く者、將に開かんとする者、相連続し、東京附近にて確かに一箇月開花を観るを得べし。吉野は麓の花、中の花、奥の花、順次開きて一箇月を経る由、花の季節は約一箇月間として不可なし。況んや同一の土地にても、八重は晩く開きて久しきに堪ふるをや。

花の季節は短きに似て短からず、一箇月に互るは寧ろ長からずや。さど早く開けるは早く

落つ。晩く開けるは久しきに堪ふるも、是とて比較的の事、要は知るべきのみ。季節として一箇月に互るも、新陳代謝の流るゝが如く、一々に樹上の花を觀れば、命の甚だ短しと感ざる可らず。其の人を招き來め、歡呼して已まざらしむるは、驚許か命の短きに存すべく、嘗し悉く一箇月も吹き續かんか、隨て日影を遙に感ぜざるのみならず、白けて遊ぶべきを覺えん。季節の長短は兎もあれ、花の久しく咲に留まらざるは、自らの價値を高むるに與ること多し。

強き刺戟は久しくするを思む。范蠡が大名之下難く以久居と言ひ五湖に浮びしは、反動の遠からざるを知りしに出づ。去るべきには去るべく、死すべきには死すべし。敦盛にして首を全くしたらんには、後世誰か之を申す將ぞ。死すべきに死せざれば死に勝るの場ありとは幾代の經驗に基づきぬ。而も命ありての物種、生を偷み辱を忍び久しくして事業を遂ぐるあり。事業よりせば花の開落するが如きも可、常緑樹の人に注目せられざるが如きも可、一天稟及び境遇に依るべく、花の全盛期の短きを數する、則ち常緑樹に全盛期なきを怪むと同一。

(明治四十四年四月)

都下第一の好季節に就き

東京都下の好季節、即ちトーキョー・シーズンには、未だ一定せりと爲すべからざるも、時候につれて老若男女の着しく遊ぶ、春の野に遊ぶが如しとの語ある四月、此に次いで、謂ゆる秋の小春なる十一月なり。

昭和改まりて二月には花露香を放ち、三月に桜花開き、四月に櫻花飄漫、楳の花の世界を現出し、遊覧の士女事の内外に舞闘す。時や寒からず暑からず、草木は萌芽を萌し、花の淡紅なると共に陽光の和煦なるに副ふ。夏去り秋來りて十月後に入れば、幾種の草花、紅葉、紫、白、紅を競ひ、而して霜に飽ける紅葉の錦を染め出して一段の美觀を添ふるに及ぶ。櫻花紅葉兩つながら全圖に展りて遅速なきに非ざるも、纏ね四月五月に春色の盛麗を呈し、十月十一月に秋の小春を表し、一般の人心此に適ふと見ゆ。廣く各國の上よりせば、光榮と南半球と時候全く相反し、同半球の同緯帯にても處に依りて異なるを免れざるが、稍々北方なるは五月を以て好季節とするの多く、倫敦の如きは五七を以てシーズンとす。而も櫻花を以て季

節を代表するは一も之れ無し。櫻なきに非ざれば、花の飄漫たらざるなり。十一月に出葉の變色するの常なるも、黄葉するの多く、紅葉するの少く、美は美なるも、萬丈の錦を以て飛容し難し。我國に於ける四月の櫻花と十一月の紅葉とは、自然界を飾るに大なる不足なし。

都下の櫻花は年々増加し、復江戸時代の向島上野等を各所として限れるの比にあらず。今は向島上野等に増殖し、而して前に名なかりし地に幾千百植の多きに昇れるあり。櫻花の季節には諸都府花ならざるなし。其の人の眼を悦ばし、人の心を歎まし、延いて市中全般を賑はすこと寧ろ驚くべきものあり。花より團子といへど、花の力も竟に打ち消すべきにあらず。而も東京時代に増殖し花は唯櫻花のみ、他の花は與らさず。舊藩は堀堀に限られ、儼々として振はず。前に秋草を以て名ありし地も、既に附帯されて回廊と爲り、甚しきは家屋の列して附名の呼ばるゝあり。廣凡の如き、復秋草の觀賞すべき無し。紅葉も減ぜりとも増せりとは思はれず。紅葉の名所として知られ、而して傳かに名残りを留むるに過ぎざるあり。今日秋草を賞し、紅葉を賞せんとせば、遠く淺間磯氷若くは日光關原に於てするに若くはなき

有様となれり。東京としては櫻花の季節を最も遊樂に適すと爲すべきもの如し。是れ一には春暖の膚に適するに因るも、櫻花の飄漫たるが一の主因を形づくらずとせず。櫻標の年を逐ひて増加せしは、淺島の大信心といふにも由來したるべく、其の他種々の事情ありたらんも、竟にかく人心を淨き立たしむること疑を容れず。

當代の東京は史的遺物の消滅して、而も新たな娛樂機關の備はらず、趣向に富むの客をして後風景を歎ぜしむるの感ひなからず。而積及び人口に於て世界の大部に計へらるゝも、史的に注目すべき者甚だ少し。倫敦の二大寺院なるウエストミンスター及びセントポールは千數百年引き續き來り、巴里の中央なるノートルダムは千六百年前の遺跡に八百年前建設せしなり。而も東京には何等斯かる遺物の見るべき無く、唯二百年間中央都府たりし故を以て、封建遺物の存すべき密なるも、是れさへ最大部分に既に壊滅し、將軍の大輿、諸大名の屋敷、櫓城地を稱うて空しく、僅かに残れる五六の處園も種々に變改せられつゝあり。此の點に於て到東京都比肩すべきにあらざり。京都とて千年以前に遷るべきの稀れなるも、神社佛閣の

見るべきもの多からずとせず。多少懐古の趣味ある人は、遊覧園茶に日の逝ぐるを志することあり。東京には此の類の遺物なく、恰も石燈籠の若むさがる有様なるが、さらば興樂を求むべき設備の新たに整へられたるかといふに、是れ亦然りとするを得ず。公園あるも千萬坪を越ゆるは二箇所のみ。園は數の少からざるも大抵粗造なるを免れず。豪堂は幸うじて二三箇所を擧ぐべし。遊覽場としての淺草は、一日二日を樂しく費すを得んも、其れ以上は莫東なし。料理店に入るも、快を取るに十分ならず。芝居の高からざる者は、勢ひ遊園待合に入るの遅くべからざらん。田神の名ある者は、或は斯くして酒色の慾を充たすを得べし。外來觀光の客も、一時はゲーシヤの前に停かるゝことあるも、少しく高尚なる趣味を具ふるは、一箇月以上の日子を愉快に經過するを難んじ、往々甚しく失望して去る。風光の美を求むるも、山川の觀るべき無し。兩川はテームスより小、セーンより大、改修の宜しきを得ば、頗る興樂を供するに足るべきも、今日のところ特に言ふを値するあらず。斯かる状態にては、柳樹を多く植を附けられ、春に會ひて一時に花吹雪、蒲柳の人の浮かれ舞きて狂するが如くなる、偶然ならず

と謂ふべし。都市の愈々盛んを致し、而して心を弛ましむべき設備の整はずば、四月月開社の候は都下唯一の好季節ならん。興樂の設備にして整へ、人の遊ぶは時候の如何を問はざらんも、其の整にざる間、自然界に支配せらるゝの多からざるを得ず。如何に人工の造むとも天造に相應するの多く、隨つて何國の交際季節も或る時候を擇ぶ次第なるが、露都に在りては、冬日を以て最も好季節なりとし、訪問し會食し、舞踏し、聴樂し、觀劇すること、最も此の際に行はる。斯く寒國にて嚴寒に遊ぶは、恰も我が北國地方に恒置若しくは園畫裡に集まりて谈笑嬉戲すると同じく、唯其の大規模に行はるゝだけなるも、設備の整へること聊か稱せざるを得ず。固より專制國の首都として能ふ限り人工を加へし者にして、其の盛大なるに比例して地方村落の荒廢し、慘憺見るに忍びざる狀あるも、氣候の變に備ふるを得ること以て見るに足る。我が東京にて人の遊ぶは、必ずしも時侯に依らず、寒暑共に相應に遊び樂むは、一月に兩度及び芝居の賑ふを以て推すべきが、老若男女の齊しく遊び樂むの即ち陽春四月なるは、其の時候の最も心身に順應すればなるべし。四月が散歩に善く、陸上

運動に善く、水上運動に善く、殆ど凡百に善きより觀れば、櫻花の爛漫たるに相應じて第一の好季節たらしむるの可なれど、一歳興樂の茲に集中する觀あるは、幾許か都市の殺風景にして清興を供するの少きに由らずとせず。東京の如き史的土地にても、櫻花紅葉の人を吸引するなきに非ず。時候は絶えず直接に人事に影響するも、四月を曠きて他月なきかに發ひて遊ばんとするに至りては、稍く過ぎたりと爲すべし。時侯に相應せざるべからざるも、斯くまで放棄すは如何のものにや。東京は四時人の群集する處なるが、其の群集するは事業の上にてし、元已むを得ざるに出づ。興樂の設備の整はずとて、平素之に慣るるを以て特に不足を感せず。遠隔より來れるは却て其の餘りあるに驚くに似たれど、一旦賄灣たる春光の下に櫻花の爛漫たるを觀れば、おのづから氣浮き魂、飛ぶを禁ずる能はず。外人の歸りに日本の大だ愉快の土地なるを稱揚するも、多く此の季節に來遊せるに因るが、而も四月は決して時候として完全なりとするを得ず。舊來ニッパチケグアツは風の月といはれ、其の二月は今の三四月に當り、狂風の吹き荒み、否らずんば謂ゆる花曇りなる曇天なるが多

し。櫻木の樹下に匂ふべき時天には狂風を誘ひ遊し、花に風の嘘へを事實にする寧ろ普通なりとす。天氣晴朗にして風少きは十一月に若くはなし。天寒更に蒼蒼、夜に入りて月星の最もかなるは、實に冬季に於て見るべし。四月は温暖和煦なるも、露もすれば狂風沙を捲いて眼を揉み、其の騒定を持つ間に櫻花を吹き散らされ、爲めに最好季節の何れも観るべき無くして終ること珍しからず。

好季節の遊びは樂しみは則ち樂みなるも、自然に支配せらるゝは、不意に廢止せざる能はざることあり。従來四月を以て最好季節と爲し、此を外にして心を煩ましむるの少かりしが爲めに、成るべくは四月を好季節とし、存し、而して別に清潔なる櫻葉栽培の備はらんことを望まざるべからず。幸にして、勢は次第に此を促しつゝあり。今日、東京を以て二十年前と較ぶれば、事物の整へ、同日の業にあらざるを認むべし。京都は久しく美人の地と稱せられしも、今は最早然らず。謂ゆる美人なるものは漸次東京に吸寄せられ、又吸寄せられんとすること、争ふを許されず。劇場の如き、東京の如き、美術館の如き、皆序を逐ひて盛はんとし、動物園の如きも、幼稚至極と

非難せられしかど、何等となく村莊の増殖し来りたり。進まざりしものは多く消滅し、依然存在するは皆多少進歩せる跡あり。かくて櫻葉栽培も、是からず進歩し、盛はんと稱せば十分に遊び得らるゝに至らんが、而し四月の好季節なるは遂に變ぜず、唯樂集中の少しく緩和せらるるのみなるべし。人工の重んずべくとも、自然に遊び自然と冥合する事も永遠に存藏せしめざるべからず。櫻葉は感じて潤るれば弊あり。清氣徒が之に反對せしは、反動として理あるも、一編に矯潔に笑すといふを得ざるも、苟も濡れざる限りは、深く之を咎めず、其の清潔なるに至りては務めて勸奨し鼓勵すべし。一日に善く勉め善く遊ぶべき時あると同じく、一年に善く勉め善く遊ぶべき季節あり。但だ其の遊びをして最も清潔最も純潔なる方法に於てせしむること、是れ心ある者の意を用ゐるべき所なり。

花下の清遊

花下に遊ぶは何れの處にも行はる。桃李や林檎や、皆人の賞する所、花下に賞遊して行街を開くもあるが、我が櫻花を賞するが如きに至

り、他に類例なし。朝霞として雲か花かと思まがふ時、さながら全國を通じて祭の如く、老若男女花下に群がりて嬉遊す。我國に在りて四月花に負く勿れといふは、支那に在りて八月月に負く勿れといふと同じく、風雨の到るは人の失望を招くこと甚し。

我國に於て櫻木の人為淘汰を經しこと櫻花の如きはあらず。野生の櫻花は素直にして單瓣なるに、培養の效にて淡紅色を帯び、複瓣と化し、或は八重一重と爲り、遂に花王と稱せらる。特に明治の世春日に匂ふ山櫻といふに因みて、全國の市邑に櫻樹を栽培するの風を長じ、其の爛漫たるや、季節といひ、花色といひ、最も人の遊びに適す。

櫻樹は既に各地方に栽培せられ、殆ど到る處花ならざるなきが、爾後此を以て盡きたりとし難く、更に一層栽培するを要す。元畿内地方は芳野より移植され、關東地方は大島より移植され、漸次廣きに及びたるも、尙ほ花を遊ばして市街の空處若くは郊外の地に栽培せば、愈々益々美觀を添ふべし。仙臺地方は枝重櫻の如き、頗る觀るに足るもの、是れ亦他に及ばすべし。西抑は實を重んじて櫻花を賞せず。隨て

實の大且つ美なるあれど、花は驚くに堪へず。時として花の賞せらるゝあるも、實に比して及ばざること甚し。我國にも、櫻花の賞すべきもの既に多ければ、今後須らく實を得るに専らなるべしと言ふ者あり。一説するを尖はざれど、ミザクラは實の爲めに培養し、花は花として益々美を備ふるに努むるこそ宜しけれ。

櫻花の季には、この階級の人を其の下に見るを得。總ての階級の平等に見ゆるは實に相撲場に於てし、此を外にして櫻花の下に於てなり。されど櫻花の下に階級の間ふべきなきにせよ、亦自ら趣味に據りて別るゝ無からず。社會の下流と上流とに不健全なる分子の多きが如く、花を賞するにも、花より園子といふの缺に最も顯はるゝを見る。

下流の人として花の美を感ぜざるに非ざれど、主とする所は花に託して飲み且つ食ふに在り。亂離し狂歌するを以て快樂の絶頂と爲す。上流の人は此の如く疲風景の善だしからざるも、花に託して飲食し若くは流連するは、寧ろ一般の風とすべし。中流の人とて一概に言ふべからざるも、自然界を美として遊遊するは多く此の階級に屬す。學生は長じて下流に落つるか上流に躍るかの未定なるも、意氣に於て中流に

類すとすべし。中流なるは園子を主とするもあれど、亦流かに花を主とするあり。

櫻花の觀賞は種々の事情の伴ふも、櫻を花として賞すること、心身を健全にするに效あり。市内に於ける櫻花の地は雜園を極め、自然の美を賞するに宜し。去りて郊外に赴き、林の中に交雜せるもの若くは噴水に散立せるものを觀て徘徊し、又歸じて他の處に向ふ、微風面を捲め落英繽紛として飄る。自然界に身を置き、自然の高麗に接するは、謂ゆる自然の氣を養ふものならずや。

眞實なき櫻樹は無用なりと思はるゝも、樹は材木として實用多く、不良なるは薪材として善し。花のみにても、人をして悦んで郊外に遊ばしむるに於て、衛生上の一須要事たるを失はず。他國に類なき美花の櫻なれば、樹を多くし、遊びを清くし、國民の誇るべき一特色とすべし。

福は心にあり

花の季節に入り、老若男女皆若しく出でて遊ばんとす。遊ぶべきに遊ぶは事の然るべき者、今より大に遊ぶの望まし。されど花より園子と

いひ、酒なきは何の己れが櫻かなといふ。園子若くは酒を念とせば、花ありと雖も猶ほ花なきが如し。之を念とせざるも、心に響く所あれば、人の觀て樂む所も樂しからず、人の觀て悦ぶ所も悦ばしからず、爛漫たる花の下、獨り自ら舞々として過す、動もすれば人の遊ぶを見て憤懣に堪へず。花は歡樂を促すべきも、歡樂は心に在り、花に在らず。心焉に在らざれば、觀るも何の見る所ぞ。

豈唯花のみならんや、一切の事物も亦此の如し。心の樂めば觀るとして樂しからざる無く、心の苦めば觀るとして苦しからざる無し。心の樂めるは善、心の苦めるは不善、心外物情に著大の差あるも、苦樂の上に何の差を及ぼさず。糧食して糧を儲ふあり、美食して衣服に寶石を飾るあり。而も誰か二者に觀て孰れか幸福なるを判斷し得べき。貧にして苦むあれば、又絶えて苦まざるあり。富みて樂むあれば、又絶えて樂まざるあり。心に立つ入れば往々意外なるあり。

シラクザ王ヒエロは詩人シモニデスに語りて曰へりき、人間の多くは王位の莊嚴に欺かる、實に彼等は眼に見る所を以て人の幸不幸を判斷す、而も吾は經驗して詳かに知る、王位最大

悦楽の最小部分を得、最大禍災の最大部分を得と。ヒエロは後世傳ふるが如き賢王ならず、其の言へりし所も爲めにする所ありての事ならんも、時として斯かる形跡あるを疑ふべからず。最大といひ最小といふは過ぎたらんが、他より想ふほど樂しからざるべし。人の情不常は、表面を以て知られず。

其の家を観れば高さ丈餘の石壁を繞らし、中に大庭あり、高樓あり、廣き開池あり、其の甍を問へば巨萬に及ぶ。其の主人たる者は欲するとして得ざる無きが如し。實に欲するとして得ざる無く、耳目の快を縱まにすべき者、一命を傷へて直ちに得べきも、唯一の必し難きあり。其の果して心の安きを得るや否や、是れ誠に難問題なりとす。綺羅を重ね、珍味を陳ぬるも、或るものの心を責むる無きか。夜静にして人定まれば勿論、晝間にても閑寂なく心を悩まし、忘れんとして得ざるあらざるか。悲痛の状態は、間々深窓に見る、深窓に聞く。

固より物質上の満足を得て兼ねて心の満足を得たるあり、人生の幸福を極むるに庶し。而も他に外觀と内實と顯露せる者の頗る多きを認めざる能はず。例證は計ふるに堪へず、且つ之を公にするを忍びざる所に屬す。廣く世に知

れ渡る者にては、福堂家の如きあり。華族中有福を以て稱せられ、何の不足なき等なれど、指して幸福とせんは未だし。而も是れ不慮の過失よりせるもの、或は懊悔の甚しきに至らざらん。罪惡を犯せるは、到底此の比にあらず。

貧は人の嫌ふ所、又嫌はざるべからず。世を舉りて貧に安んじ、移ることを肯せずんば、國は永く貧乏たるを免れず。されど種々の事情よりして境遇を變ずる能はず。正當の途を踏みて貧なる者、謂ゆるオネスト・ポヴァチーなるは、此の限りにあらず。其の或る事業を以て世に貢獻するの稱揚を値すべきは固よりの事、世に貢獻する所なきも、惡事を働かず、顧みて疚しからずんば、常に心の平和を失ふこと無し。九尺一間に住みながら、愉快なる氣象の眉目の間に浮ぶるは、之が爲めなり。

天國は汝自らに在り、心の樂しきは何物か樂しからざらん。但だ器の小なるは早く満足し、器の大なるは遂に満足せず。向上の慾なきは稱すべきに非ず、人々方の及ぶ限り發展に勉めざるべからざるも、如何なる場合にも心に暗黒なからんことを期すべし。人一日も憂なきを得ず。一身に憂ふべきなきも、親戚友人に憂ふべきあり、或は國家に憂ふべきあり、世界に憂ふ

べきあり。范仲淹の天下の憂に先ちて憂ふと言へる、故なしとせざれど、心に疚しきことなくんば、憂ふと雖も度を失ふに至らず。心の樂しますんば、花を觀るも樂まず。心の樂まば、花を觀ざるも樂む。花を觀て樂み、花を觀ずして亦樂む。ラスキンは何かなる天候も樂しからざる無しと言へり。要は心に在り。

春風の心と秋水の腦

春と秋と暑からず寒からず膚に適するに於て相同じく、而して氣分に及ぼす影響に於て甚しく相違ふ。夏と冬との如く正反對なるに非ず、同中に異あり、異中に同あり、極點照して頗る興味を覺ゆればこそ、萬葉に早く比較の歌の出でたりしなれ。王羲之の蘭亭集序に天朗氣清惠風和暢とあるは、春景秋景の區別を知らざるに出でしと言はれたるが、斯く言はるゝも致し方なく、實に暮春には惠風和暢して天朗氣清ならず。月なれば謂ゆる春の夜は臨み月夜に若くも其容清明天高日屆とも形容す。

〔五月〕

五月幟と五月柱

之を決するよりは、雙方の特長を考ふるを便益ありとす。春風秋風の二語は古より並び通用せるが、春風に花笑ひ鳥歌ふに反し、秋風起雲白雲飛といふ類は、有趣は有趣ながら、光景として荒寥に過ぐ。春水秋水の二語も並び通可せるが、秋水の澄みて劍光を聯想せしむるに反し、流水落花色、春洲杜若、香といふ類は、美は則ち美、而も興趣を促すこと深からず。春の風は日々温暖に向ひ、身の寛かなるを感じ、秋の水は日を透うて愈々澄澈し、眼識の紙背に徹するが如し。

臍を大にし心を小にすべしとは、意義の解すべきも、之を人に澆明し易からず。心を温くし臍を冷くすべしといふも此と列を同じくし、精神を心臍及び腦髓に歸せし往昔の習慣に由来せるが、情及び智に配當すれば少しの不可なし。温心冷腦の必要は、語の如何に拘らず、人の一般に認むる所、解せざる者には、更に語を換へて曰ふべし、心を春風の如くし臍を秋水の如くすべしと。冷腦といふと暗と同意義にて、俗にクリヤー、ヘッドといふが、鋼鐵を斷つが如き秋水は冷にして明晰、凡そ判斷は宜しく斯くあるべきに非ずや。而も情は和暢なれよかし。

新緑の満る頃、葉を飾りて歳を祝するは、自然崇拜の社會に一般に行はる。東洋に於て、五月五日菖蒲を採り或は菖蒲を採るの何に基きしやの明かならざれど、其の由りて來りしや頗る久し。屈原此の日を以て汨羅に投じ、楚人哀みて之を祭りに始まるとは、恐らく附會の言のみ。英國及び或る國に於て五月一日山権子の花を以て裝飾を施すの常なるが、是れ蘭若くは菖蒲に當る者、元羅馬にて四月二十日より數日間を、フロラリアと稱し花葉を以て遊びしと何等かの關係あらん。陰曆五月は陽曆六月なるも、此の節句なる上巳と菖蒲の節句なる端午と陽曆五月を被み、他の五月祭に相當す。歐洲にて五月祭は漸く衰へ、特に英國は清教徒の打撃を被りしが、後幾許か回復し、英にも時として盛んに流行せらる。上巳の如く人形を飾るあり、或は一地方の樂望ある少女をメークキンとし、童男童女にかしづくあり、或は百

噸船の帆柱ほどの木を、トポールとし、之を周りに舞踏するあり、間々甚だ盛んなるを見る。端午の儀式も漸く衰へ、市町に菖蒲又は蓬を使用するの多からざれど、東京の如き、戸内に武者人形を竝べ、戸外に鯉の吹流しを樹つる、童男ある家の常例なりと爲す。五月幟と五月柱と趣を異にしつゝ、東西相對立せる跡あり。多くの事物が支那より傳來して日本化せしが如く、端午も日本化し、兩國の差別を表示す。封建時代に裝飾を軍事に象り、尚武の氣風を義ふに務めしこと、實際の效能は兎も角、心を用ゐるの何状なりしかを察すべし。明治に入り軍事の比較的最も整備せしも故なきに非ず。今各要素の複雑を加へ武につみ偏すべからざれど、端午の裝飾を軍事に限り、當代の軍裝をも加ふる、強ち惡しからず。但だ近來意匠の巧みよりも、價格の高きを憂ふの風あるは如何のものにや。五月祭は殆ど世界的なりしと謂ふべく、故さら維持するを要せざるも、若し均しく存續する、則ち成るべく趣味を多くしたし。

兩節句

三月三日の雛節句及び五月五日の端節句

は今尚ほ行はれ、特に近來其の衰ふるよりも寧ろ漸く盛んなるを見る。

雛は女子の爲めに祭られ、幟は男子の爲めに飾らるゝが、今は以前の層と相違し、前に雛節句に櫻花開き、そを境の瓶に挿し、幟節句に菖蒲咲き、菖蒲の太刀を作りて佩きしも、今は月こそ同じけれ三月は舊二月に當り、梅花殘香を放ち桃花正に開くの頃にして、五月は未だ菖蒲の咲くあらず。室内に祭る所、庭前に飾る所、今昔の差なきに似たれど、天然の光景は全く相異なり。

五月は西歐に於て一歳中の最好時節として目せられ、人々皆郊外に出で、謂ゆる春の野に遊ぶ如しといふを事實にす。我が日本にて此に相當するは四月にして、今の雛幟兩節句の間に介まり、暑からず寒からず、郊外に出遊するに適す。加ふるに學校の學年も此の時を以て改まるが多く、其の改まると否とを問はず、到る處に運動會の催さるゝあり。但だ時として烈風沙を捲き、或は雨を伴ふを免れざるも、要するに一歳中最も陽氣なる季節とすべし。

櫻花は元雛節句に開き、女子の記號らしきも、男子の記號として用ゐられしは頗る以前よりの事にして、人は武士花は櫻といひ、大和心を

地に匂ふ山櫻に喩ふるなど、一にして足らず。かゝる事よりして櫻花を以て日本を表はし、呼ぶに櫻花國を以てし、櫻花の徽章は到る處に用ゐられ、女子の記號たらずして、全く國民の記號と爲れり。

今日我が國民の最も多く遊樂するは、雛節句にあらず、幟節句にあらず、其の中間の四月にして、此の季節は男となく、女となく、幼となく、老となく、皆同じく遊び、而して雛は特に女子供の爲め、幟は特に男子供の爲めに行はれ、稍々長ぜるは則ち與り知らず。節句の名ありて儀式は舊の儘なるも、天然の光景よりして著しき差違を生ぜり。

花風去り葉風來る

北方の地猶ほ五月山櫻初放し、雷鳴聲自二樹間傳の處あれど、一般に花風去り葉風來り、收盡紅雲一展翠帷と謂ふべく、春色愜人彼一時とも歎すべし。固より櫻花後に花なきに非ず。躑躅藤花等序を逐ひて咲き、特に草類の花、正に是より研を篋ひ、紅紫野に満たんとす。但だ謂ゆる花風は樹上よりし、草下よりせず。これはくと歎美するが如き、仰い

で觀ずんば能はず。歐米は木花よりも草花を好み、草花の盛なるを花の季節とし、我國亦漸く此の嗜好を長じ來れるが、草花は最も栽培の宜しきを要し、自然の趣味と人工の趣味と孰れか多きを決し難し。

自然と人工と區別の判然たらず、花の美を進むるは自然美人工美を并す所以と爲し得んも、人工を加へて自然に優るある共に、竟に自然の總てを奪ふ可らざるを認めざる能はず。時には人工に飽きて自然と俱にするを欲する、恰も牢獄より娑婆に出でんとするが如きあり。自然美の多きよりせば、七寶花瓶の薔薇より庭園の花壇を擇び、庭園の花壇より野生の梅櫻を擇び、更に花なき翠色綠陰を擇ぶべき無しとせず。垂柳陰を交し、疎松翠を滴らす處、往々去るを得ざらしむ。

花風の期間は短く、葉風は長し。長きは珍らしからず、珍らしからざれば出でて遊ぶを欲せず。而も心を曠すに宜しく、氣を養ふに宜しく、最も體を健にするに宜しきは、翠色綠陰に若かさらん。松や、杉や、檜や、樺や、榎や、千樹萬樹天に參はる、則ち自由の氣の磅礴して鬱積するを覺ゆ。自由が山中より出でしとは單に文字の末に止まらじ。影掃三千尺一龍蛇動

聲感平、天二風雨寒といふ類、誠に大丈夫を形容するに足らずや。花は惜ばしきも、常に満開なれば、幾人か之を越ふべき。綠蔭を越ひて逍遙するは、凡衆の樂まざる所を樂む者、眞に幸なる哉。

【六月】

正に六月の霖雨

江南毎歲三四月霖雨不止、而物微腐、俗謂之梅雨、かく江南は陰曆三月より梅雨に入る。四月江南梅正黃、如絲如霧接、江長、これ一月晚けれど、尙ほ我が五月雨より早し。三月雨謂之迎梅、五月雨謂之送梅、とは彼我を包括するが如きも、我に五月雨の語の行はるゝ、必ずしも事實と符合せざれど、概括して當れりとす。曆の改まりし以上、更に六月雨と書してサミダレと讀み、五六月の交を迎梅、六七月の交を送梅と爲し得んも、元雨期の明白に定まれるに非ず。入梅出梅の類は、迷信の伴へる陰曆に伴はずの適當なるやも測られず。姑く習慣に任せ置くべし。

梅雨或は微雨と書す。音相同じ。梅雨は梅の

熟するに因み、微雨は微の生ずるに因み、孰れも意義の備れるあり。梅よりも微の遙に昔きを觀れば、微雨といふの適切なれど、語の雅なるを求むるに於て、因より梅雨を推さざるを得ず。而も梅雨は要するに一種の久雨たるを免れず。年々歳々社會の事物の増加する、梅雨の増加より速かなれば、文字上單に久雨とするの理解し易きことと爲らん。キウ・ウが發音に障りあらんか、凡雨、日以往爲霖、霖雨を通用語とするも不可なし。普通に六月の霖雨と呼ぶも可。

六月の霖雨は九月の霖雨と造ひ、田植に最も必要にして、時に出水の恐れあるも、利の害を償ふや造し。隨一首歌賦ひ嫌はれつゝ、特殊の興味を促し、詩歌の材料と爲りたるも少からず。一かざしをる人も通はずなりけり。輪の檜原の五月雨のころ、五月雨は田子のもすそや朽ちぬらん衣ほすべき隙しなれば、一何の奇なけれど全く趣味なしとせず。されど梅雨は總じて風微不動、葉雨細未、霽去といふべき傾向あり。之に較ぶれば、南方のモン・スーンは風力強く雨量多く、苦絶ならざんば快絶、少くも壯絶とすべき場合なきに非ず。我が六月の霖雨は餘波の及ぶもの。

優等生よりも實力生

官私大學生は今や學年試験若くは卒業試験に忙しく、概ね全力を注ぎつゝあり。小學に入り一以來斷えず試験を受け、頗る試験に長ぜるも、尙ほ試験ほど心を傾ずは無し。及落を憂ひざれば級順を憂ひ、或は優等生たるや否やを憂ひ、宿敵に試験を忘れず。官廳を初め銀行會社等、特別の事情なき限り、皆級順にて人を採用せんとし、下より算へらるゝ徒は何處にも相手にされざるが故、平生不勉強を極めても速に勉強家に變ぜざるを得ず。銀時計には及びも無いが貴めて上から算へられろ。斯かる了當にて、警覺著々たる男兒も頻りに筆記を讀む。

獅子象を搏つに全力を以てし、兎を搏つに全力を以てす。況んや狐の如き、全力を以てすんば兎を獲す。學生が全力を以て試験に臨むは事の然るべき所、何の怪むべき無し。されば全力は意義廣汎、獅子の兎を搏つ時一心不亂なるも、決して象を搏つ時と同じからず。千鈞之弩不爲一塵風、萬石之鐵不下以二尺挺、一起音、試験を專一にし、優等生た

るを期するには、關係教授の思想及び趣味に同化するに若かざるが、天稟の特質ある者が、斷く強に憚るは、果して其の人の利益、其の社會の利益なるか。自ら任ずるの大なれば、如何にして他に同化するべきや。

被期は守るべく、試験を受けよとあれば之を受くべきも、學校は學力を養ふべき處、學力を養ひ得れば足る。試験に優等なれば、その便利を得べけれど、さる便利は人に依りて事を成す者の喜ぶ所、雄偉個體の士に於て何か有る。實力の備はらんか、十年二十年後學生に及ぼざるも、最後に高く飛翔して其の上に出せん。優等生は初め吉、後に凡、實力生は初め凡、後に吉、其の孰れかを擇べよ。孔明が三分を圖り、ピットが首相と爲りし年數に於て、汝々汝々試験の點數を争ふなど、固く一恥かしからずや。試験は存爲の青年の心を動かすべき者ならず。

【七月】

七月の學生

四月は學生の新たに試験を了れる者多く、而

して大氣和暖、到るところ花ならざる莫し。乃ち日光に浴して運動會に出で、郊外を散歩す。七月も亦學生の試験を了れる少からず。大勢に屬するは概然り。中に全科を卒業せるもあるが、大抵半休を得て留宿す。

今は汽車の便全に通り、徒歩して旅行するの多からざるも、旅行は一、二の門はしと謂ふべく、而して旅行して身嘗するは人生の大なる快樂の一なり。在學中なるは卒業の近づくを樂み、卒業せるは活世に出づるを樂み、各々希望に充ち満ち、父母兄弟と手紙を以て慰ぶ。

されど、是等學生の大に堪へし故にや、將に他事情の存するにや、何等、無聊氣なりしと頗る遠くを見る。前に一筆に在りて單に學事を念とし、業を卒ふれば必ず満すこと行るべきを信じ、特に將來を憂ふる所あらざりしに、今は無聊氣なる中に行路難を忘はず、何物が業として最も割合良きか、如何にするが立身の捷徑なるかを考へ、時として之が爲めに煩悶して已まず。若し當分の學生に意氣鎮沈といふこととあらば、其の幾分は實に益に原因せん。前途の困難を慮れば、夢ごとく真諦の缺くを免れず。

さりながら、學生の行路難を憂ふるは或は

甚しきに過ぐるなきか。何事も前々を慮るの要すべきも、來年の事をいへば鬼が笑ふとは一分の理なきに非ず。如何に將來を憂ひたりとて其れだけ良果を得べきやは疑はし。唯平素勤し得る限りを爲し、愈々の場合に臨みて亦勤し得る限りを爲せば則ち何世に立ち世に處するは勇々とせざるも、或る青年の考ふるが如く勤く固なるものにあらず。

行路難の弊に今日に對まりしに非ず、何れの世にも之れあり。困難も或る程度まで存せしに相違なきも、少しく耐へ忍べば實に打克つに足ること、論ずる迄もなし。人のウニブスターに耐へ、かく困難の苦を、こは難に非難所を開くも如何あるべきかと問ひし時、答へて曰ふ、少ししに出でよ、盡く空なりと。是れ何の職業にもこひ得べき所なり。宜しく憂に過ぐるなく、唯能く限り身心を健全にするに務むべし。

本月輩出の新人物

例に依りて本月官私共學に卒業式を舉行し、學業生活より社會生活に移らんとする數千名を世に紹介す。社會は時々刻々新陳代謝す

る者、新人物の出で、新活動を敢てするを切望して已まず。社會の盛衰は新人の舊人に優ると劣るとを以て決す。新人は單に大學より出でず、大多數は其の外より出づるが、大學に修業せしは比較的高遠の目的を以て準備せる所ありと謂ふべく、其れだけ多く希望を囑せざるを得ず。過去數十年間の卒業生を合せ、尙ほ全國人口の一千分の一に過ぎず。新卒業生たる者は己れの特惠を被れるを考へ、衆に超えて努力すべし。

何處に新人物あるか、何點に於て新人物なるかを明言し難く、一に今後の経過を以て知るべきは勿論多くは生涯聞ゆること無く、聞えずとて無力なるに非ず、寧ろ進歩を以て多數無名の徒に負ふとすべきも、千人の手細工は往々一人の器械應用に若かず、多數の寸進するよりも少數の尺進するを擇ぶべきことあり。英雄時代去りて平凡時代來るとは、小成者流の口にすべき事、血氣の壯なる青年が初めより平凡を以て居りては、九十里の半を往かんとして、遂に十里にも足らざるに均し。幾多新卒業生中、果して一人の能く吾人の耳目を驚かす無きか。就職難は事實にして、之が爲めに心痛し奔走するは責むべき事ならず。単官車役に就きて

稱すべき者少からず、或は志を得て大事業を成すもあらん。されど此等は姑く措き、秀才として職員に目され、代表者として友人に推され、眞に將來の大人物なるが如く、而して官廳又は既設會社に入るに汲々たるを何と見るべき。前條に徵すれば、局長知事に終り、富豪の番頭たるに終らざるは少し。是れ強ち不可ならざるも、斯くて舊人物と何の差違あるか。新人物の多き中に眞新人物は甚だ稀れ、大正維新の聲ある時、新卒業生より若干眞新人物の出でよかし。

卒業式か始業式か

卒業は學校所定の課業を卒るの義、事甚だ明白なるも、小學中學にこそ一時の段階と認められ、大學となれば、往々人の修むべき總てを修めたりと考へらる。實に大學卒業生の多數は卒業式と同時に學問を廢し、或は官廳會社等に入り、或は低度學校に教鞭を執り、文字通り學業を卒れる有様なれど、さる文字は幾分の影響なしとせず。恐らく心理的に當人をして早熟に傾かしめ、父兄をして其の早熟を喜ばしむる如きあらん。人は盡く學者たるべきに非ざ

れば、爾後全く學はずとて特に咎むるを要せざるも、何事に拘らず小成を以て甘んずること、聊か憾みなきをを得ず。

英米にて學位を受くるをコンメンスマント、米國にて卒業式をコンメンスマント・デーといふは、無位若くは下位より或る位置に登るを意味し、別に深意あるに非ざるも、始めといふは終りといふと違ひ、人を勵まして向上せしむる緣あるらし。我に卒業式といふの善きを致せるは、小事にせよ、一の面白からざる出來事とすべし。慣用の久しき、もはや變せずして妨げなきも、とかく卒の字が目障りなり。始めて事業に就くに因みて始業式とせずんば、責めて修業式といふ位に止めたまきならずや。名は何様にても差支なしとするも、大學卒業式を舉行する、宜しく始業式の如くすべし。更務なり、商工なり、將學藝なり、己れの業とすべきに従事するは是れ以後にして、一生の苦樂運不運は茲に始まる。優等生たるべき要素、即ち勤勉なる事、規則正しき事など、何れの方面にも缺く可らざれど、活社會の事は此のみにて足らず、氣魄膽力の一層與れる多し。或は一時に可にして永きに不可なるも少からず。校内經驗の校外に於ける、恰も出水練の觀な

きに非ず。卒業式の祝賀は新たに旅程に上るを祝すると異ならざれ。

卒業に伴ふの悲哀

本月は大學年度の諸學校が卒業式を舉行するの月、新たに學校生活より實世間に移る者の數千に上るを見るべく、皆各々、課業を修め、修業を積み、幾回の試験に及第し得たるを喜び、父兄の満足するは勿論、學校關係者齊しく智識を述べ呉れ、生れて最も愉快を感じ、併せて將來の活躍を想像すると同時に、轉た行路難を察し、惘然畏るゝ所なきを得ず。人物及び境遇にて難易を異にするも、多數は大學教育を以て就職の路とし、凡そ職業といふの概ね漸員り形を呈し、剩す所の少きを爲め、難關後に大難關あるを覺え、往々進退度を失ふに及ぶ。

學生當時に考へしが如き如意世界の存在せざれど、卒業の際に考ふるが如く不如意なるやは、聊か疑ふべし。卒業生は餘りに世界を狭くし、官廳に入らざれば既設銀行會社に入らんとし、他に全く居るべき處なきを思ひ、百廢參りの競争するに至るが、若し學商より職

闘むべきに非ずや。官廳も一生を託するに足り、既設銀行會社も然れど、孰れも日本帝國に在りて勝たる小機關、國家社會主義を極端に實施せざる間、是れ以外に身を立つべき位置の頗る多きを爭ふ可らず。何ぞ自ら世間を狭くすべき。

比較的早く位置の定まるよりせば、卒業生の考ふる所の決して誤らざるも、一生は學校を出で直ちに安固を求めざる能はざるほど短からず。特別の事情あるは姑く措き、十年家を成さずして差支なきは、普通の能力を具ふる以上、必ず一兩地を抜くの基礎を造り得べく、家を成すとも、紳士を裝ふに急ならざれば、初めこそ人に侮らるれ、十年寒窗無人問、一舉成名天下知といふの空言ならざるを證せん。卒業に伴ふの悲哀は、生存競争の烈しき社會に免れざるも、究竟氣力の缺乏に由來する事、至高教育を受けて此の有様なるは、其れ誰をか咎むべき。

何處へ旅行する

旅行の好季節に非ざれど、暑熱の爲め休暇を得、休暇を得て旅行を念ひ、宛ら正に好季節な

るかの觀あり。況んや必ずしも惡季節に非ず、日は長く夜は短く、衣服の薄くして携帶の簡單なる、他に類を求むる能はざるをや。未だ休暇を得ざるに、早くも目的地を定めて、旅裝を整へ、或は將に目的地を定めんとするも深く懐むに足らず。されど目的地は何處なるか、往いて何を爲さんとするか、疑なしとせず。各自欲する處に往き、欲する所を爲して差支なからんも、趣味及び嗜好は向上すべく、向下すべし。何處に旅行するかは、先づ一考を要す。

夏期の旅行者は大別して四種とす。一は學生、二は普通の家族、三は大官富豪、四は虚榮に驅らるゝ者、是なり。學生は概ね汽車汽船にて歸省し、途中名山を眺むるに過ぎず。登山するは少く、盡く徒歩するは愈も少し。小中學の體操にて比較的體格の宜きに拘らず、脚力の老人に劣るを免れざるは、由來なしとせず。徒歩旅行に適當なる青年期は、成るべく徒歩するの望ましからずや。普通の家は避暑するも可、避暑せざるも可なるべく、轉地にも高價ならざる地域を選ぶの常なるが、花々しからざれど、相當の氣味を感じて歸る。大官富豪は所有の別荘に往く。都會の生活を地方に移し、往々奢侈を絶ふこと都會より

甚し 時に甚しきを加ふるは成金者流及び高等部間にして、體汚、荒淫言語を絶つに及ぶ。心ある者は煩累に堪へず、新装を欲して之を得ざるを歎息す。既に之を歎息す、則ち何ぞ去つて樺太に往き、朝鮮に往き浦羅に往き、支那に遊ばざる。確く心遣ひの多きも、全く樂む可らざるに非ず。而して不用意の間に得る所の少きにあらず。期間の續々進歩するも却て妙を見ん。何處に旅行する、如何に旅行する、各々自ら顧みて第一等とする所を行へ。

歸省する幾萬青年

夏期休業中、高等學生、各地方に歸省する、萬を以て、地方の學校より郷里に歸るも少からず。地方より首都に歸る、亦之れ有り。京都大學及び第一以下高等學校よりする即ち然り。而して全國を廻り歸省する者も多き、七八月に若くはあらず。七八月は歸省の季節なりと謂ひて妨なし。樹欲、靜而風不止、子欲、養親下、待矣とは履く世間に見る所、人は此の悔なきを期すべきも、而も是は唯子を養ふを樂み、必ずしも子に養はれんとせず。普通の順序よりせば、親にとりて、一家團圓より悦ば

しきは無し。然るに歸省するは誠に孝の一端、父母在、不違遺、進必右方、若し歸省し得んか、務めて歸省せよ。

歸省は他に意義あるに非ざれど、學校教育の外、家庭教育に重きを置けば、特殊の意義を認めずとせず。家庭の子弟に及ぼす所、種々除外例、存し、職務の家に放蕩兒の出づるも、多数を擁護するに、青年の墮落するのと、主として家情よりすと回言せざる能はず。家庭の温くして起る多き處、己れ一身を專にし、人生を嘲り、社會を嘆ふが如き、寧ろ顧るべからず。樂觀主義は生理的に基づくも、家庭に缺陷の少くれば、均しく悲觀しなから、僻み根性の見えす、煩悶憤懣の中、絶えず救済を敢てする跡は、見はる。

父母は實父母、兄弟姉妹は實兄弟姉妹、謂ゆる水人らずなれば、或る出来事なき限り、順當の善法を遂ぐるに何の困難を見ず。時として内に離れ、殆ど違數の一種、特に苦々しき事なし。斯かるは歸省して得る所の多からん。之に反し、無父母なるか、養父母なるか、爰の跋扈するか、多少人情の自然を缺けるは、一概に言ひ難けれど、往々拮据れるに傾く。斯かるは歸省して得る所の少からん。間々養父母

にして實父母に變り、或は假子にして世に傑出するあるが、歸省の價值を考ふれば、此の邊に想ひ及ばざる可らず。幾萬青年、家庭は何の狀、其の平穩なるは幸福なりかし。

休暇は惰眠を強ひず

官吏は本月十一日後、例に依り多少の休暇を賜はるべく、官立學校の職員は殆ど皆二箇月の休暇あり。公私立も略々此に同じく、少くも一箇月以上の休暇あり。銀行、會社等斯く長きを望み難きも、事務を都合し幾日かの休暇を得べし。暑中休暇といふは酷暑に堪へずして休息するの義と解せられんが、學校に夏期休業といふは必ずしも然らず。冬期休業の嚴寒に堪へざるが故ならず、春期休業といふの何等堪へざる所あらざるより考ふれば、夏期休業も酷熱の故と解すべからず。幾分か酷暑の興るも、寧ろ比較的長き休業中に酷熱の氣ありとするの當らざるや。

されど暑中休暇といひ、夏期休業と云ひ、酷熱に堪へざるが爲と解せらるゝが普通に、休業の必要あるや否やは往々世間に上れる所、實に全く休業せざる場處なく、新聞社の如き、

少し、平日と異ならず。新聞記者は暑中、故を
暑中休暇、何たるに念ひ及ばず。中
に休暇を請するあれど、是れ中に限らず、執
れかといへば、花、秋、月に休暇を得るを
羨ふ。酷熱に堪へずとは、身體、虚弱なる者
の訴ふべき事、尋常の體質を備ふる限り、斯
く訴ふべきに非ず。熱しとせば熱く、懶しとせ
ば懶きと、懶しとするの極、管を上ぐるにも
懶きに至らずや。

暑中休暇は常に酷熱の爲めならず、種々の事
情に由來せる者、一週に一日休むが如く、一年
に二箇月休むと爲し得んが、兎にかく官廳
の職員及び學校の教員生徒等は休暇を得るに
定まれり。一週に一日休むの無益ならんば、
一年に二箇月休むも無益ならざれど、益無益は
休無休にて決せず、如何に休暇を過すやにて決
す。假りに日曜に何事をも爲さずとせば、一年
の中、五十二日何事をも爲さざる割合にして、
二十歳より六十二歳まで、一年に二箇月何事
をも爲さずとせば、四十二年の中、七年間何事
をも爲さざる割合なり。

シドニー・スマスは日へりき、青年は時の價
を考へず、若し汝が七十二歳まで生きなば、

汝の生活に左の如し。一晝夜の一時間は三年に
相當すべく、而して二十七年間睡眠し、九年間
化粧し、九年間飲食し、九年間小兒と遊び、
九年間散步し塵埃し、六年間高賣し、三年間
喧嘩すべしと。世間の人は悉く此の如くなる
に非ざれど、此と大差なき者の少からず。人
生短しといひ、而して短き人生をば斯くして
過すか。

年々歳々休暇は同じけれど、歳々年々人事は
同じからず。上官にして下僚と爲れるあれば、
下僚にして上官と爲れるあり、或は大臣と爲
り華族と爲れるあり、後の輩の先に爲れるの珍
ろしからず。虚心平氣、此等の變遷を眺め、雲
煙と一般なれば其れ迄ながら、幾分か負けじ根
性を具へんか、自ら奮勵せずして可ならんや。
人の好事を羨むは人情なるも、徒らに羨むは
氣力なき者の事、人の好事を嫉むも或は人情な
れど、徒らに嫉むは氣力なき者の事、隨、潮
美、魚、不如三退而結網、均しく羨み、均
しく嫉むならば、奮發して此に抵抗し凌駕する
に努めよ。

人一たびして能くせば己れ之を百たびし、人
十たびして能くせば己れ之を千たびすとの孔子
の言は何人にも望むべきに非ざるが、休暇を利

用して用過するが如き、必ずしも困難の事なら
ず。官吏の休暇は一年を通じ四箇月に上り、
即ち一年の三分一に居るあり。三分一爲すこと
有ると爲すこと無きと、數年の後に少からざる
差違を生ぜずや。三十年にして十年の差あり。
十年は中學を再で帝大を卒業するより長く、小
村が無得より侯爵に陞りし期間より長し。勉
むるも死し遊ぶも死し、同じく死するならば、
遊びて死するに若かずといはんが、多數は果し
て之を肯んずるや。

遊ぶとは、畢竟何事なるか。平素如何に日
曜を過し、如何に暑中休暇を過すか。遊ぶとい
ふよりも、空しく日を過すといふの適當なるが
多からずや。日曜に人に接し人を訪問せんか、
或は日曜なりとて晚く起き、何事をも爲さず、爲
すとも蕭條を諒ふに止まるあらずや。暑中休暇
には、温泉に行き、海水浴に赴く少からざる
が、行いて如何に日を過すか。宅訓べし、或は
讀書するあれど、横ね月日のたつの早きに驚い
て歸るのみならずや。

善く勉め善く遊ぶとは良教訓なれど、是れ
少青年に最も言ふべく、漸く長じて漸く適
切を缺き、老成すると共に勉むると遊ぶと接近
し、遂に殆ど區別すべからざるに及ぶ、多くの

官吏はさまで老年ならざるが故に、尙ほ之を區別する必要あれど、能く之を區別するは幾人あるか。若し英人の如く年老いて少青年と共に運動場に遊ぶならば、身心を活潑にするの益あらんも、食ひ且つ寝ね、寝ころびて日を過すは、勉むるに非ざるは勿論、又遊ぶに非ず、唯空々寂々たり。

同じく大臣といふも種類あり、謂ゆる仲食なるの稀れならざれど、屬僚に比し頗る繁忙なるを疑ふべからず。應接し、訪問し、會議し、密議し、自ら調査し、人に調査せしめ、絶えず何事か屬僚に往來し、時に數日間休養するも、其れさへ全く安閑たるを得ず。冠を掛けて閒を覺ゆとは眞に大臣の事とすべし。大臣職に就くは能力よりも他の事情なれど、彼の如く繁忙なるは、其の高く屬僚の上に位する所以ならずとせず。大臣の如く繁忙に堪ふれば、屬僚は、屬僚として沈淪せじ。

楚王莊子を聘す。莊子曰ふ、楚に神龜あり、死して三年、王中筈に之を藏す、此の龜寧ろ死して骨を留めて貴からんか、寧ろ生きて尾を泥に曳かんかと。使者曰ふ、寧ろ生きて尾を泥に曳かん。莊子曰ふ、吾も尾を曳かんと。斯くて尾を曳きて世を送るは一見識なれど、天下泰平なる

か、泰平ならずとも内亂に止まるか、特に同胞民族の運命に關する無くんば、自ら尾を曳き、人をして尾を曳かしむるも可。されど五大洲を擧りて競争の渦中に陥り、列強の弱者を壓屈せんとする時代、唯個人の自由を得て安んずべからず。

官吏として全く怠れたるに非ざるが、一日にて辨ずべきを十日二十日も延引し或は數月に及ぶは、事務の滯滞ならずとせず。而して彼等自ら怪まざるは、久しき習慣に因へられたるに非ずして何ぞ。兒童は夏期休業に遊藝がつけば課業を厭ひ、爲すべきを爲さざるが故に、近來、休業中に何等か課する所あるが、是れ獨り兒童ならず、鬚髯ある六尺の丈夫も此の傾向を免るゝ能はず。暑中休暇に惰癖のつける者は、敏活に事務を執るを得ず。敏活にするには、成るべく惰眠を貪らざるを要す。

夏は天然娛樂多し

一歳の別名を春秋とし、夏冬とせざるは、前者を後者より重んずるに出で、詩歌に詠する分量も之に正比例するが、若し春秋が熱からず寒からず其の中を得んには、夏冬は其の孰れか

に偏し、而して夏は最も天然娛樂多く、冬は最も人爲娛樂多しと謂ふべし。春に花を賞し、秋に月を賞するも、其の娛樂は一半天然、一半人爲たるの形あり。喻にも春の野に遊ぶが如しとあれど、一家相攜へて出で、いはゞ家庭の娛樂を郊外に移すに止まり、眞に天然に親近し此と冥合するの分子を缺く。花より團子を好み、女子に綺羅を飾りて群衆に示さんとするも少からず。

夏とても人々好惡を異にすれど、有意識無意識の差こそあれ、多少天然に親まざる無し。酷熱に悶ゆるの際、必ず天然にて慰むるの常に、夜熱依然午熱同といふと共に、開門少立月明中といひ、城中暑如燬坐甌甌是生源といふと共に、淼湖開三頃一清海別一家といひ、救援を人に求めずして天然に求む。遠雲巖壘斗、疎電閃金蛇、雷氣須臾敏、東山月可賒といふ類は、夏雲の奇峯と相待ちて天然の奇觀なり。春は夜露を戒められ、秋は中秋の月の既に冷に過ぐるを救ぜらるゝが、夏は夜に入りて一段の快適を覺え、燈火に親まらずして月星に親むを欲す。

河海に游泳するは固より夏に限るべく、登山は或は他の季節の可なるも、高山に宿泊する

は殆ど夏に限る。交通の不便なりし時、登山迄に幾日をも費し、之を敢てする者の少かりしも、今は九州北海道より二日目に富士に登るを得、加ふるに暑中休暇あるを以て、登山が一つの主要なる遊樂と爲り來り、游泳か登山かとは、世界を通じて夏日人の選擇せんとする所、天然に接納し、之を樂み、之を羨美すること、夏の如くなるは他に之れ無し。若し大れ冬に至りては、満日荒寥、唯屋内の無樂を事とするの外なく、露宿國は其の故を以て、冬を交際の季節とす。

避暑地域は廢物利用

暑熱に堪へず、塵埃に堪へずとて之を避くるは、懦弱か、奢侈か、癖か、慣れか。或は恐暑病、恐塵病と名づくるの適當なるを覺ゆるも、之が爲めに廢物利用の少からざるを認む。現在の避暑地域は概ね谷で、荒蕪とせられ、不便とせられ、生産上に無益とせられし所に、毎年二箇月間にても都會の光景を呈すること、維新前に全く考へ及ばざりしならん。淺間山の麓は、秋草を観るの外、何等人事に關係なかりしに、今は温泉の湧く、空氣の良きに加へ、オゾンあり、噴煙に殺菌力あるなど、

夥しく效能の説かれ、輕井澤の名は廣く世界に傳はれり。

鳥飛、歸林、散走、于澤、登二丘、陵二而徒、倚空、訪英華於陳迹、とありし鎌倉、沙中日暮、少二人、行一とありし大磯、大官富豪の群集に於て殆ど當年の霸府に履行する勢を示すは、土地の海岸なるが故にして、海岸は利用に困難なりし者、其の困難なるを利用せるは昭代の一事に計ふべし。高山といふ高山に登る者の歳を遂うて増加する、亦然り。避暑旅行する者は、一時職務を抛ち、高等遊民たる形あるが、之を吸收して土地の繁盛を謀るも、均しく廢物利用たるを失はず。廢物の地に廢物の人を集め、相待ちて社會の進歩を補ふは、眞に廢物利用と謂ふべし。

更に廢物利用を利用し、益々利用せんとし、却て妨害を興ふるあり。荒廢せる地は初め代價なく、進呈せられて購する調子なるが、一たび避暑客の集まり、別荘新築の事あるや、急に附近の土地を買占め、坐して地價の騰貴するを待つ。少しの騰貴は需要者に於て忍ぶも、法外なる價にては、何人も躊躇し、多くは斷念す。若し輕井澤に買占なく、海岸の勝地に買占なくば、其の發展は今日に止まらざる筈、實に折

登山か水泳か其他か

青年にして、若くは老いて青年と同等以上の壯氣ある者にして、空しく休暇を過すを欲せざらば、是の意思の種々なる中にも、差し當り登山か水泳か其の一を擇ぶと見ゆ。見ゆるは必ずしも事實に合はざれど全く見えざるに優らん。衛生家は登山及び水泳の體質にて效能を異にし、孰れかの一方に限るべきを説くも、病身ならざる間、特に擇ぶこと無く、唯嗜好と便利とに従ふべし。普通の身體なれば、富士山に登るに堪へ、且つ少くとも隅田川を往復するに堪へざるべからず。何れの地方に在りても、之に相當する登山水泳を事として可。

山にせよ、水にせよ、身體の運動に適するが、精神に益する所もあり。孔子東山に登りて魯を小とし、泰山に登りて天下を小とせしは、傳説の疑はしきも、強ち形跡なき事にあらじ。川の上に在りて遊者如斯夫、不復晝夜」と言へりしは、さもこそと思はれずや。將門が純女と

比叡山に登り、帝城を望み、不軌を圖りしは、人寰の差別を超越し、遠慮を誤用せしと謂ふべく、遊獵を誤用せずして正用せば、其れ未だけ益を愛くるを得ん。川に泳ぐと池に泳ぐと、事の違ふも、尋常の境涯を離れ、敢て新方面に入るの猛進性を養ふに與らざとせず。

高山に登り海水に浴するは夏期のみなれど、休暇を利用すべきは此に限らず、比較的長期の休暇として旅行に遊すと考へらる。而も他の季節に旅行し得ざるは格別、將軍衣冠裝を便利とするは格別、然らざる上は、暑中の炎火を以て旅行に遊すと明言し難し。然れよりせば、讀書は樂に兼りて利益あり、決して多きを厭はず。坐禪も少しく之に類せん。或は坐禪の眞劍勝負なるを言ふも、深く拘泥すべきに非ず。已むに賢れる者に至りては、恭あり、儉あり、茶あり、釣あり、他にも幾種之れ有り。但だ徳川時代と時代の違ふを思へ。

【八月】

陽曆に於ける八朔

舊曆時代に八朔を五節句同様にして、重

きを置くこと元旦に次ぐ。五節句の式は今日多少残存し、中にも上巳の鵜及び端午の幟は頗る盛んに飾られ、聞く往昔を羨がんとす。唯重陽の殆ど全く忘れられ、而して八朔も忘れられたること重陽に譲らず。八朔は徳原も明かならず、鎌倉時代に傀儡と爲り、室町に重きを加へ、江戸に及びて盛まりたるが、其の極まるは、徳川家康が天正十八年八月朔日を以て江戸に入りしか爲めといひ、或は元和元年八朔に天下統一統の首儀を上げしが爲めといひ、未だ決定せず。而も要するに八朔の吉日なるに出づ。

八朔の初め農家に由来せしこと、田實の節と稱せしを以ても採ずを得、誠に穀を収めて麥ふに適當なる日とすべく、政府が之を佳節とせしは農産を重んずるを示す。陰曆は多くの點にて陽曆に劣るも、陽に改めて最も打擊を被るは月日の習慣と爲れる者にして、上巳端午の如きこそ、筆織等の人造物を以て是れ、悉く天然に順應すべき八朔は、陽曆にて全く意義を失はざる能はず。年賀は陰陽二曆並用ゐられ、節句も然るが、陽曆の八朔は收穫するに稍々早きに過ぎ、一月後れとせば九朔と改すの必要を生ず。農家の八朔を祀ふは専ら陰

曆に於てす。されど陽曆の八月朔日は、歴史上の八朔を聯想せば勿論、きなくも注意の價値なきに非ず。若し暑中休業の缺く可らずんば、一年十二朔日中、八朔の如く平素の業務より離れたる無く、斯日や山中に、温泉に、湖水浴に、多數の遊客皆各々態々自遊す。最も閑暇なる日は最も輕思に遊す。自ら省みて心に依しき無きか、疚しきは何にして排弒すべきか、之を思ひ之を慮れば、何等か得る所あらん。ハツガード農家年中行事を讀むに、斯日を以て櫻草同盟祭を舉行し、舟を漕ぎ、弓を射、戶外劇を演じ、愉快に遊べるを記す。日を擽べるは偶然ならず。

冷靜熱動共に銷夏す

心頭を滅却すれば火も亦涼し。三昧に入り寂滅に遊ぶ者一切の繁華を絶つ。區々たる暑熱は何か有る。されど暑を忘るゝには心頭を滅却せずして可、坐禪せずとも、身を静にせば動くほど汗の出です。目を半眼に開いて坐するは、一部分睡眠状態に陥る。昔し眞に睡眠し熱睡せんか、生理的に心頭を滅却し、冷が熱

か、全く興り知らず、謂ゆる自己儘は坐禪と睡との中間に停し、冷熱を知るが如く、知らざるが如し。孰れ、冷熱の故を以て暑を忘るる者、如何なるの最も適當なるかは、體質に依り、習癖に依り、境遇に依りて決せん。

坐禪に坐禪と違ひ、暑を忘るゝと共に精神に益し、一舉兩得たる形あるが、さる意義に於て讀書、此と列を同じくす。書籍に種々あれど、知識を進め、興味を促すは、讀み去り讀み來り、自我を忘れ、時處を忘れ、讀み了るの時、識らず知らず得る所多し。百代の経緯、俚俗の識見、當時固若くは當日明に見聞すべし。生花茶湯等、何等知識を進むる無きも、興味を驅るがまゝ、環境の如何を忘れ、尙ほ時に修養の利ありては、洩して雨得ならずとせず。凡そ身を靜にするは、精神上の利益の多寡にこそ差違あれ、一も銷夏の效なきは無し。

單に身を靜にするに因らず、身を動かし、汗の流るゝも、苟く注意を最熱の外に注ぐは、盡く銷夏の效あり。漢語の間に事務を執る者、電に炭を入るゝ者、自転車に乗る者、大八車を挽く者、背に小兒を負ふ者、活動寫眞を興行する者、其の他身を動かす者、爲すべきを爲しつゝある時、暫く暑熱を忘るゝ、恰も筒箱に

て火筒を忘るゝが如し。冷熱なると、熱動すると、其れ的好ましきやを辨とし、共に銷夏の效あるは疑を容れず。一言ふまいと思へど今日の暑さ故とは別人の語、勤務勞働して偶々此に考へ及ぶは、緊要とし氣力の疲れるに出づ。

銷夏法に就き

銷夏法を考ふるは、昔我國に存せざりし所、孟嘗監宮に業を休むの習ありしも、故さらに炎暑を嘗みて之を避るゝ工夫を運らざるあらざ。温泉に浴する者あれども、病癒養益の目的に出で、特に盛夏の候に限れるに非ず。銷夏法の事、著し輸入物に係る。然れども銷夏法は必ずしも少明と作はず。希臘にオレムピヤ競技の行さるゝ、葡民廣集し、域外の使臣亦來り觀る。時にベリケレス露頭にして炎陽の下に立ち然たり。他國人の場に在る者、看一喫驚せりと傳ふ。當時の希臘人は、暑熱に堪へ能はざるを以て濡弱卑しむべきの行と爲し、寧ろそを口にするを恥とせり。一に昔人の然るのみならず、今日英人の雄洲に植民せる、地の熱帯又は準熱帯に位するに拘らず、居常本國の衣服を著して苦慮なし。本國の衣服は即ち

我國に言ふ所の冬服なり。盛夏の炎大にスコツチの厚きを著し、傘を翳さずして行歩自若たり。以て西人の必ずしも、夏日を厭苦せざるを推すべし。元來銷夏法の歐美に噴しきは事實にして、如何に夏を消過すべきかは、炎暑の候に於て毎に必ず起る疑問なれど、其の謂ゆる銷夏は、單に熱を苦んで涼處に就かんとにあらず。夏季には精神、体養を計ると共に、又運動の爲め良好の時たるを知り、涼岸に在る者は頻りに清水に游泳を試み、湖畔又は河邊に在る者は水上に輕舟を賃り、而して暴飲の下必ず運動場を設け、然らざるも、平地稍々廣き處に於て、テニス若くはベース・ボールを戯る。總するに市街を離れて適意の地に運動を試むるは、最も愉快とする所たり。是を西人の銷夏法と爲す。

頭みて本國の銷夏法を觀るに、夏季に至れば、各地の海水浴場は浴客を以て填充するも、唯少く時水中に浸るに止まり、一日の多くは室内に横臥して之を消す。温泉に赴く者の如き、惘然儼臥するに非ずんば、則ち圍坐骨牌を弄し、噉々暑熱を誦へて已まず。斯種の銷夏法は、猶ほ健全の身を以て病あるが如く、百方苦慮徒らに煩悶すると似たり。夏熱さが故に如何に之を避けんかとして決々たるは、一種のヒポコンヅリ

アに過ぎず。盛夏の季節に際し、涼爽なる地を擇びて能るは、其れ丈け精神を快活ならしむるの效あり。而も終日横臥して徒然消光するは、採るべきの良法にあらず。宜しく横臥せずして銷夏し能ふ工夫を運らす可とす。

游泳

夏季に人れば海に河に游泳盛んに行はる。これ運動として最も愉快なるものの一、而して其の身體何れの部分も皆動かさざる莫き、又筋骨を鍛錬するに於て效ある鮮からずとす。且つ游泳は少しく之を覺ゆるに因りて、生命を保つ上に大なる益あり。海國に人と爲るものは特に然り。大風暴かに起りて恐濤山立し、船之が爲めに依撒撒飄せられて終に覆没する、游泳に熟せる者と雖も、能く活を求むるを得ざるべきが、船に乗り移らんとして棧橋より顛落し、其の他或る事故の爲め海中に墜落せる時、平生少しく游泳を能くし、水面に浮ぶこと十分間なるを得ば、以て幸に命を全くすることあるべし。全く水心なくして、宛ら瓦石の水中に没すると一様なる、たとひ速に他の救助を得るも、死を免れんこと甚だ難し。即ち游泳は身

を護るの必要事とするも謂り無し。

凡そ人の水中に游泳し得るは、水と人體と約んど同一比量なるの故にして、水中の游泳は寧ろ最も易事たりとすべく、空氣は人身と比して重量遙かに異に、一たび身を此に投ずれば、急下して直ちに地上に墜落す。而して其の地たるや質甚だ堅硬、中に潜没して運動するに由なし。獨り土華若くは蟲類の、能く土を穿ちて通行するあり。夫の隧道は實に蟻の土中を往來するより突出せられたりとのこと。而して工兵は戰時土沙を掘りて潛行し、以て作戰に便す。斯かるは器械を用ゐて行ふところの一種の游泳と謂ふべし。

飛艇遊艇の類は空氣より重くして、而も空中に在りて自在に游泳す。是れ亦人の器械を使用して爲し能ふ所、其の水素を用ゐて人體を空氣より輕からしむる方の成功せるに反し、他の飛行器械は百年來種々に工夫せられて猶ほ未だ完成の域に到らざるとはいへ、將來電氣應用の裨益を進步するに伴ひて更に愈々整備し、或は空中に在りて飛行自在なる禽鳥と同じく、加ふるに一層大なる速度を以て飛翔し能ふ時あるべし。さすれば游泳の範圍益々廣く、游泳の方法亦彌々安全なるを得ん。かの社會を游泳す

といふ若き、決して意味無きの言ならず。仔細に検査すれば、事の游泳に類する實際太だ繁く、たゞ謂ゆる官海游泳の類に至りて特に剛なるを得ゆ。

然りと雖も、最も游泳し易き水中に在りて、人は何故にそれを能くせざるか。たゞ身を水中に置きて虚心静息すれば、其の一部分は自然に水面に浮び出づるを得るに、墜落して忽ち沈溺するは、卒然水中に没して慌惑し、身をもがきて脱せんとするに急なるに因る。實に身をもがくは游泳に於ける禁物にして、虚心静息するは、生命を水中に全うするの秘訣たり。飛行機にて空中を飛行するに際し、少しく倉皇慌惑するある、方寸爲めに錯亂して進止其の度を失ひ、圖らずも墜落して命を殞することあり。而して是れ社會に處するに於て亦然るを見る所、濫りにもがござらんやう度胸を定むべし。

無休暇より良成績

暑中休暇二箇月に加ふるに、歳末歲始、大祭日、日曜及び土曜半日を以てせば、一年、五箇月以上を休むの割合にして、休暇の多きに過ぐるとの非難あるが、若し毎日若干の業務を果

し、一日の休暇が一日の損失と爲れば、五箇月の休暇は驚くべき損失と爲るべく、之に反し、昨日の事は今日成して可、明日成して不可なきの有様ならんか、休暇の多寡は深く影響する所無し。常に一日を争ふ程に多忙ならず、さりとして手を束ぬる迄に閒ならざればこそ、一年の小半を休暇とするなれ。悉く戸位素餐と呼ぶも醋、公務多忙といふも誇張に失す。必ず毎日爲すべき事なく、時に忙、時に閒、勤むべきに勤め休むべきに休むべくんば、休暇の多少を論ずるよりも、一年間に於ける成績の良否を問ふべし。一年間に成績の見るべき無きも、數年間に見るべき有れば、一日も休まずして何の成績なきに優る。小吏は日々小事を成すべき者、謂ゆる皆勤を成績とするも、大吏は小吏に小事を委ね、尋常の勤務以外に特別の成績を擧ぐるを要す。井上侯が皆勤を以て愚なりとせしは、小吏に通用せず、大吏に適用して痛切なるを勉む。大吏の屢々皆勤して成績の見るべき無きは、蓄に無益なるのみに非ず。

出勤の缺點に優るは勿論、皆勤は一の美事なるも、他に稱すべき無きは、大吏として言ふの價値なし。一般に出勤を促すは善し。全員悉く皆勤するに若くは無し。而も更に注意すべきは

成績の如何にして、其の顯著なるは勤惰表を以て律するを得ず。専職なるを除外し、職務ある者に對して最も重きを置くべきは、一に成績に存し、良成績を養ひ、無成績及び悪成績を貶すべし。多數の有職者が續々良成績を擧げんには、休暇の多きこと何の怪むべき無く、多きが上に多くすべし。但だ從來の状態にては、五箇月は多きに過ぎ、暑中休暇も長きに過ぎ。

暑中何をか得る

得ると得ざるとは初中級考ふべき事ならず。得る得ざるの明白なるは生涯の一小部分、大抵得るに非ず、得ざるに非ず、得るが如くして得ず、得ざるが如くして得るの有様、其の不明白なる處にこそ面白可笑しき四方山話の織り出されるれ。暑中何をか得るとは、緩風景なる問題らしきも、得るとは金錢に限るに非ず、仁を求めて仁を得るは即ち得る者、樂を求めて樂を得るは即ち得る者、廣義に解せば、何事か得るに別れざらん。暑中を経過する状、人毎に異なるも、得る所を言はざる能はずんば、皆各々言ふを躊躇せじ。

或は轉地して脚氣を免れたりとし、或は魚を釣るに熟練したりとし、或は歸省して父母を安んじたりとし、或は取調の用向を卒へたりとし、或は海上十町を泳ぎたり、或は富士、妙義、淺間に登りたり、或は新刊書十冊を讀みたり、或は原稿百枚を書きたり、或は大磯に滞在して大官と結託したり、或は年賦拂ひの別荘を無代價に爲し貰ひたり、或は新種の故を發見したり、或は初段へ四日と爲りたり、或は秋に入りて相場を狂はすの視機を握りたり、或は俳優の鄰室に居り之と懇意にし之と舞踊したりとせん。

尙ほ他に種々存在し、稱すべきあり、稱す可らざるあるが、此等を超越し、別に得る所ありと爲さざるか。ルツソーが自然を善として教育を説きしは、甚しく論理を失ひしにせよ、一分探るべき無きに非ざりき。今日の醫家、間々自然療法を口にするが、凡そ身體を人為的壓迫より開放する、暑中の如きは無し。單衣にて山林を徘徊し、裸體にて河海に游泳する、精神の件は、正に振衣千仞、濯一濯、三足萬里流に類し、更にその上に出づ。天地の間に呼吸し、浩然の氣を養ふは、是れ此の時ならずや。但だ一步を誤れば蠻人と稱ぶなきの境に陥る。若し自由の利を享け、其の弊を享けざらんか、得

る所や大。

暑中休暇の意義

暑中休暇の意義は、明白に似て明白ならず。

炎熱の甚しくして執務に堪へずと解するか、斯かるは誤解に出でたりと謂はざる可らず。炎熱の甚しきは則ち甚しきも、元比較的事にして、他の季節に較べてこそ然るなれ、果して執務に堪へざるやは疑はし。華氏六十度が最も適度と稱せらるれど、人類は下等動物の如く寒暑に支配せられず、日中数時間の九十度は何程の事にあらず。若し暑熱の爲に休業すべくんば、香港、マニラ、新嘉坡、孟買の公館及び會社の職員は常に休業せざる能はざる筈然るに絶えてざる事實なきに非ずや。

日本人は暑中執務に堪へざるが如き弱質の種族にあらず、一層炎熱なるとも尚ほ能く忍ぶべし。而も執務に堪ふるが故に休暇を廢すべきかと云へば、決して然らず。暑熱の爲に休業するの愚なるも一週に一日休業すると同じく、一年に一二箇月休業するの必ずしも悪しからず。善く勤むるには善く休むを要す。一年に一二箇月休むとして、何れの季節に休むの適當なるか

との問題に對し、先づ業務に倦み易き暑中に若くは無しといふ見解の出でたるならん。されど休業は無業を意味せず、休暇は自墮落を意味せず。日曜に終日睡眠す可らざる如く、一二箇月暫然として無過すべきに非ず。平素職務に追はれ一他を顧みるの違なければ、此の際足らざるを補はんとて、心を靜にし、自ら爲し、所と爲さざりし所とを考ふべし。昔を曲げて机に凭れる者は、時に直立して運動する必要あり。日々簿書の暇に儼然たる者は滞れ私用を辨じ、若くは疎遠なる交際を温め、若くは自由なる空氣を吸ふべき順序とす。暑中休暇には必ず爲すべき事あり。心任せにて氣樂なるにせよ、爲すべき事あるを忘るゝ勿れ。徒らに苦熱を口にするは心得違ひなり。

陽氣なる夏

冬を以て最も陰氣なる時候とせば、夏は最も陽氣なる時候なり。烈日の赫々たる、樹葉の葉々たる、眸に入る光景孰れか陽氣ならざらん。若し陽氣を好むとならば、時候として夏に若くはあらず。一年を春秋といひ、表裏といふも、英語のサムマーは年に通用し、三夏は即ち

三年の義にして、實に夏が或る意味に於て四季の最も主なるものなるを示す。

世に陰氣を好む者あれど、陽氣を好む者の更に多きを見る。好まずとも、陽氣の恵みを受くるの多きを争ふべからず。暑熱につれて流行病の蔓延する恐れあるも、肺病患者の類は夏に入る毎に多少輕快に起き、春寒の頃、ともかく夏季まで維持すべしとて、其の時の拘るを待つ。或は常に夏の如くならんことを欲して南方温暖の地を擇び、往々臺南の邊きに移る。されど病氣の中、暑熱を忌むもあり。或は特別の疾病なきも、暑熱に堪へずして之を避けんとするあり。避暑といふは、或る部類の人に避くべからざるもの如し。

夏季に入れば、大官は梅ね休暇を得、其れ以下の者も多く休暇を得、之と伴ひて諸學校も休暇と爲り、教員も生徒も一樣に避暑の工夫するが常なり。温泉及び海水浴場は多額の費用を要する處あり。即ち伊香保の如く、大磯の如く、駒倉を競ふ場所と爲れるあり。而も又半圓以下にして一日を過し得るもあり。彼此相異なるの甚しきも、避暑といふは、既に一般に行はるゝに及べり。休暇を得たる者の、或は水に游ぎ、或は山に登るは皆可、適當なる時候に

適當なる運動を行ふものにして、延いて精神の健康を増進するあらんも、保養を念とするに至り、聊か注意すべき無からず。

同一地方に留まるの病を招くべきを慮りて轉地するは、健康なる身體に在りて決して薄すべしに非ず。毎年必ず避暑する者は、偶々事情ありて然るを得ざる場合、暑熱に苦みて病に罹ること、平素飲食に注意し過ぐる者が、僅かの不消化物の爲めに胃腸を傷みあると同じ。病身ならば避暑するの口をわざと、幸に健康なる身體を享けながら、病人氣取りして時候の變化に堪へずなるは、不心得の次第とす。

現在の社會にては、到底十分に規則づくめにするを得ず、何時如何なる變化に逢はんも測られず。隨て健康なる時に於て、成るべく變化に應じ得らるゝやう身體を鍛ふるを可とす。即ち暑には著に堪へ得る如くし、寒には寒に堪へ得る如くすべし。格外に不攝生を敢てするは咎むべきも、或る程度まで不攝生を行ふは、攝生の一法たりとせず。さる不攝生は、羸弱なる者にこそ害あれ、強健なる者をして益、強健ならしむる效能あり。日本は夏著く冬寒きも、暑しとして比律賓の如くならず。寒しとして蒲潮港の如くならず。斯

かる處に在りて寒暑を云々するは、強健なる人と謂ふべからず。從來の經驗に據れば、日本人は白人よりも一層寒きに堪へ得と見ゆ。既に寒きに堪へ得て、而も又暑きに堪へ得んには、競争に於て何か有るべき。然るに夏季なりとて之を避けんとし、病へ人を誘ふに汲々たるは、果して事の宜しきを得るものなるか。須らく暑には暑を樂み、寒には寒を樂むこととすべし。其の間必ず樂むを得るものあり。之を得ざるに得ざる者の過失のみ。

夏期休暇の坐禪

夏期休暇を如何に過すべきかに就き、考察一ならず。中に頗る異様なるあり、坐禪求法すと云ふが如き、面白からしとせず。坐禪に盛行と謂ふべからざるも、相應に行はれつゝあり。政客及び實業家にして之を試むるも少からず。俗人大石正巳氏、頗る熱中せらるし。若手の人、毎月三月俱樂部に會して何等か催すらし。高等商業學校生徒は修養の必要を感じ、基督教に傾かずんば神に傾かんとするらし。佛に關する書類の賣れ行き著きに徴するも、其の注意を拂はるゝを察すべし。

坐禪の利を擧ぐる者は曰ふ、是れ常に安心立命する所以のみにあらず、體力を練り、并せて機略縱横、一舉手一投足可ならざる無きに及ぶと、其の害を擧ぐる者は曰ふ、元消極的の安心法即ち失意者流煩悶者流の道路を求むる所、積極的進取的、活動的、奮闘的と相容れず、嘗て少壯有爲と目せられ、一たび禪に入りて頗る不活潑と爲れるあり、且つ果して體力を練るに益すべきを必し望し、幾年か坐禪して意外に卑怯なるを見るに非ずやと。かくて各自自ら足認する所を主張するが、實は利のみならず、害のみならざる、猶ほ世間普通の事物の如し、利を受くるもあり、害を受くるもあり、一概に拘泥すべからず。

されど初より禪信たるを欲せば已む、單に修養の爲めにし、而して多くの時間を坐禪に割くも如何にし。罪處を極むるに尋常ならぬ勵勉を要すれど、爲めに職務を怠り日課を廢するは心すべき事とす。爾後が禪に専らなるは、已れの職務に忠實なる者なるも、普通の人の如く日夜一塵尚、植樹などに苦心焦慮する、事の守しきものと思はれず。特別の職務ある者が坐禪に志すや、禪閑暇に於てすべし。苟も日課を妨ぐるが如きあるべからず。而して閑暇に坐禪

するは能く開暇を利用せりと稱するに足る。

禪に得ると得ざるとは必ずしも時日の長短

よりせず。最も上根なるは一旦にして徹底す

べく、下根なるは五年十年、或は一生涯を費して

得る所多からず。時日は豫め問ふべきに非ざ

るに似たれど、古來名僧の刻苦難勉せしを考ふ

れば、容易に得ざるを認むべし。僧職に居らざ

れば、僧の如くならずして可なるも、既に禪を

修むる以上、成るべく堂奥に入るを期すべし。

毎上曜若くは毎日曜の敷時間を割くのみにて、

多く得る所あらじ。事は皆車を坂に押すに類

し、少しく手を緩むれば則ち降る。今日少しく

工夫し、一週間後更に工夫し、二週間後更に又

工夫するは、全く得る所なしとせざるも、遂

に言ふを値せざらん。若かず夏期休暇に際し、

毎日續けて工夫するには、一二箇月心を籠むれ

ば、鈍根と雖も少しく得る所あり。

傳ふるが如くんば、菩提達磨は南印度香至王

の子なりと。香至の所在に就て議論あるも、兎

もかく達磨は熱帯地方に人と爲り、なり。風土

の人に於ける、萬能力あるに非ざれど、多少の

力あるを争ふべからず。印度人の沈思冥想す

る、必ずしも暑熱に由來せざるも、烈日熾くが

極き時、綠蔭の中に時間を費すに頗る適する

所なきか。扇にて風を生ずるは海岸に近き處の

事、泥沙灰に均し内地は空氣炎熱、少しく身

を動かせば其れ丈け熱を感じ、唯靜坐靜臥し、

稍く不快を忘るゝのみ。慣れたる者は比較的

苦まざるも、勢ひ活動を厭ふを免れず。此の

間獨り冥想に耽るは、適當なる地に於ける適當

なる事なり。禪を以て盡く此の如しとすべか

らざるも、幾分かさる趨向あるを許すべし。坐

禪に季節なけれど、暑熱に於てするは事の自然

を得たりと爲す。樹蔭の下に坐し、拂子を以て

蚊蚋を拂ふ、則ち一種の想念の湧き來り、時と

して無念無想の境に到らん。

夏期は開暇多くして工夫を凝らすを得、且つ

炎熱にして達磨の境涯に居るが爲め、禪を修む

るの好時期なり。寒中冥想に耽る、たとひ理路

の明かなるも、理窟に陥り、理窟づめと爲る。

暑熱の堪へ難く、夢を辿るが如き際、彷彿とし

て了得する所、特殊の妙味なしとせず。斯く

て何等か得る所あらんか、廢物利用の上乗な

る者に非ずして何ぞ。得るの多からずとも、週

一回月一回參禪するに優るや遠し。坐禪の效

用に就て異論紛々たるも、利あるを信する者は

夏期に於てするを最も適當なりとすべし。或

は避暑の良法として、誹謗者の羨むが如きあ

るに至らん。

何處に如何に暑中を過すか

暑中休暇といひ、夏期休業といひ、夏に入り

て或る期間、業を休み若くは業を少くするは普

通の習はしにして、其の何の爲めなるを問ふの

必要なしと考へらる。されど休む者が暑熱に堪

へざるが爲めと解し、幾分かさる意義の加はる

も、學校に冬期休業あり、春期休業あり、堪へ

難き事情なくして休暇を規定すれば、單に暑熱

の爲めとすること、適當の説明たるに足らず。

我が日本は土地にて温度の差あれど、概して言

へば、さまで暑熱の堪へ難きに非ず。商工業

者は平日の如く職業に従事するの多く、官廳

關係者及び學校關係者に限りて特別に暑熱を

感ずると爲すを得ず。假りに暑熱の稍く烈しと

するも、歐洲の北部には我が五六月の温度にし

て休業するあり。英國の裁判所は、八月十三

日より十月二十三日までウエケリジョンとす。

我國は維新頃まで今日の如く休業の多からず。

官吏が一年の三分の一の休暇を賜はり、銀行會

社員の幾許か之に準ずるは、歐米の例に依れる

なり。或る部分には必要に出で、或る部分は儀式

に出で、或る部分は理由の不明にして、簡單に休業の原因を解説し得ざるが、知りてか、知らずしてか、一たび休業を規定し、容易に之を廢せざるは、勤務に休業の缺くべからざるが故ならん。神が六日間勤務して第七日に安息せしといふの信ぜられたるは、神とても休業を要すとせるなり。晝は起き、夜は眠る。眠るは死するが如くなれど、活動せる後は死するが如く爲らざるべからず。業務の繁劇を加ふるに伴ひ愈々休業の必要を感じ、前例なき休業日を設くるに及ぶ。エサペリー卿ラポックは銀行休業日を設定せしめて感謝せらる。如何に勤務すべきかと、如何に休業すべきかと、孰れか問題なるやは急に決定し難し。労働者八時間労働問題に世間を騒がせること少からず。暑中に休むは、暑熱の如何よりも更に根柢ある問題なりとす。

兎もかく、今は暑中に休業を休む若くは業を少くするの規定あり、二月休まざらんば、一月休み、或は同僚と交代して休む。全く休まざる者も少からざれど、七月十一日より多くの停車場は平日と異なる客を以て滿ち、旅行用の書留器具は羽根を附けて飛ぶが如く、之に準じて世間一般に幾分の變化なきを得ず。暑中休業の必要不必要は疑を容るゝの餘地あるも、今は最早

中確定して動かすべからざる者と爲れり。休業の由りて承れる事情は一にして足らず。暑熱は傷に一部分たるに止まり、若し單に暑熱の爲めとせば、御れるの甚しき者にして、實に休業の何たるを解説せざるなり。されど休業の何の爲めにして、如何にするの最も效能あるやは、特別に研究するの價值ありとすべく、唯何事も研究して結果を得るに先んじ、或る程度まで實行を觀るが普通之の順序にして、未だ暑中休業の意味の明かならざるも、休業する者は目下も適當とする所に出でざるべからず。暑中休業の規定には、今く暑熱の與らざるに非ず。暑熱に苦む者は、之を唯一の理由とするも不可なく、疾病ある者、疾病なきも體質の弱き者、體質の強からざるも肥滿して暑熱を感ずること多き者、皆休暇を得て避暑すべし。人は、病氣に勝つ難し。保養するの必要あれば、保養するの機會を得ると共に保養するに若かじ。暑熱に堪へざるを以て、一概に懦弱を咎むべからず。而も世には強く暑熱に苦む者の多きや否や。其が社會の比較的有力なる部分が多く暑熱に堪へずとありては、國民の脆弱なるを推斷すべく、世界的競争の甚だ尙東なき次第ならずや。暑熱に堪へざる者あるも、それは極少數にして、大

多數は避暑するよりも、別に爲す所あるの當然なり。

暑熱に苦む者は其の保養するに任せ、其の健康を傷はず、又は傷へるを回復せしむべきが、かかるを消極的休業法とせば、暑熱に苦まざる者、休暇を得て平素爲し得ざる所を爲すを、積極的休業とすべし。消極的とて從らに時日費す者ならず。恰も睡眠に氣力を回復し、晝間に勉強し得るが如くんば、誠に積極的に補ふ所あるが、常に氣力を回復するのみならず、更に氣力を増進するに於ては、一層利益の多からずや。暑熱に苦まざる者、苦むも能く堪ふる者は、休暇を利用して何がな爲す所あらんとすべく、病人を視て之に爲すが如きあるべからず。如何にすべきかに就ては、千差萬別盡く列擧し得べくも非ざれど、人の能力及び行爲に限りあり、絶倫の英傑とて、人たるを免れず、編別すれば千差萬別なるも、性質極端にして空しく日を送る者を除き、大體に於て身體を強健にするか、知識を増進するか、趣向を豊かにするか、安心立命に得る所あるか、其の一出で、或は二三を兼ねる一外あらず。固より皆留意にして、何等督促せらるゝ所なく、督促せられてさへ苦痛を避くる程度なれば、好ん

で苦痛を迎へず、多少の愉快を感じずして何事にも著手せず。考ふること、行ふこと、皆遊び半分にすることは、兼め許容し置くべし。

命ありての物種子とある如く、生命は最大多数の最も重きを置く所にして、身體を強健にするを望まざる殆ど全く之れ無し。如何に生命を延長すべきかと、如何に身體を強健にすべきかと、相同じからざるも、或るべく二者を併さんとし、一を得れば二を得るが如く考ふ。

今は不元の薬を尋ねず、此の點に於て體念せし形まれど、長壽を得るに熱心なること、時代の上に少しの變化なし。苟も長壽の秘訣を解せりと見ゆるあれば、如何にかして其の秘訣を得んとし、勉めて到らざる無し。大隈伯の百二十五歳説を唱へたる、人の教を受けんとする者少からず。富貴にして餘命幾くもなきを考ふる者、人生の果敢なきを感じざるも、頗る物足らず意すべく、或は邸宅を宏壯にし、公債を累積せるの爲の爲めにせしかを恨むに及び、願くは長壽にして更に生活の幸福を味はんと、さてこそ伯に教を請はんとするなれ。伯は徐ろに説いて曰ふ、壽なるも、老するは益なし、壽にして老せざるの途は、貪慾を去るに在り、善く集め善く散すべし、學校に寄附するが如き、最も

効能ありと。聽く者解するが如く解せざるが如く、其の特に寄附せざるより察すれば、教に従ふを欲せずと見ゆ。斯かるは言ふ者一部眞面目、一部滑稽、聽く者も一部眞面目、一部滑稽、遂に要領を得ずして終る。腹式呼吸の流行せるは均しく長壽を導き出すものも、今日聽きて今日行ひ、得あり一瞬なきが爲めならずとせず。壯年なるは以て身體を強健にせんとし、老年なるは以て壽命を延ばさんとし、往くとして腹式呼吸の聲を聞かざる無し。初め腹式呼吸は歐洲の説に基づき、醫師及び体操教師に依り一傳へられ、次いで自體導師の灌輸として新たな方法の出で、此に似て形を異にする者と共に世に行はるるに至れるが、其の廣く行はるるに徴し、如何に人が身體を重んずるかを推すべし。

此の如の事は益なきに非ず、筋肉の鍛練のみにて身體を強健にする能はず、内臓に注意を拂ふあるは善し。體操柔道等、或る運動にて筋肉を強め、腹式呼吸にて内臓を強むべしとの説は、當れりとせんも、體操柔道等は人工に過ぎ、深呼吸も人工に過ぎ、たとひ依りて身體を強健にするに十分なるも、精神轉換より觀て何様なるかを考へざるべからず。休息するには、疲勞を起せる勉強状態と全く状態を異にするを要す。少しく異なるのみにては十分に休息するに足らず。睡すべきに隱眠すべく、能ふ限り蒸睡すべし。床に横はりて眼を閉づるも、輾轉反側しては休息の效を缺く。平素見慣れ聞き慣れ行ひ慣れたる事は、勉強に附隨せるは精神状態を變ずるに堪へず。疲勞せる部分は疲勞せる儘に續き、其の儘に久しく置けば精神を不活潑にし、延いて身體をも不活潑にす。幾分の變化にて幾分の回復するも健全と稱するに至らんと難し。若し熱睡して精神の爽快なるが如きを欲せば、耳目を新たにし、固定せる精神状態を變ずるが、斯く痲症なきも、久しく同一状態の續けるは、時に眼界を變じ、業務の如何を忘却すべし。日曜日とか祭日とか、一日の遊びにて眼界を變じ得るも、大に變ずるを得ず。一月の暇を得ば、大に變じ、精神を刷新して歸るべし。人に依り、或は海を好み、或は山を好み、或は原野を好み、或は都會を好み、各々嗜好に従ふべきも、何事にせよ、神境飛越といひ胸次豁然といふが如きを感じるを要す。如何なる奇觀も、屢々接すれば奇を覺えず。特別に奇異なる無きも、初めて遍歴するは心を快に

する所あり。屢々遊びし地も、幾年をか隔つれば新味を感ずべし。今は舟車の便利にして數十年前に十日二日を費し、一日にて辨ずべく、便利の加はれる丈け、古人の奇とせし所に奇を覺えざるのれど、我が内地に於ても、心曠神怡と形容すべき處少からず。見跡各府縣に及べるの珍らしからざるも、大部分汽車にて通過し、遂に山川を望みしに止まり、親しく跋渉せし處何れも無し。遂に望むと、近づきて踏足すると大なる差違あり。一の黒點と見ゆる者も實は斷崖千尺、其の上に登りて、魂の飛ぶを覺ゆるなり。日本アルプスは信越の汽車より望むべく、一日を出でずして悉く指點し得るも、漸く近づき、漸く山の火を極へ、遂に其の一山に登降して、實に世を忘るべきを覺り。山又山、谷又谷、連日自然界と對峙せば、睡りて覺る欠け、神祕を突快にすると同じく、歸りて風物に従事するに當り、意氣の壯なる、常に驚愕すべし。最上川の山に沿へる、初めて遊ぶものは舟に見ざるの風景とし、或は雲間に彷彿たりとして讚歎す。海に航し、朝鮮臺灣等に渡らば、耳目を新たにする者、嘗て千百ならず、毎年同一の別荘に行くは、幾分の清淨を覺ゆるも、特に驚歎すること無く、精神の固定

するを免れず。身體の強健は人の切望して已まざる所なれど、知識の増進を必要とする、往々其の上に出で、知識の爲めに身體を犠牲にするも稀れならず。書讀に當書を禁ぜられ、尙ほ隠れて讀者は隠れ之れ有り。多きは知識を求むるに熱心ならず。官吏は概々卒業を以て讀書を終れりとし、爾後調査業務及び營業書類の外に書まざるが、能を以て推さるゝ者は書を讀み、又は人に期き、知識の増進に怠らず。天才の才能の備はれるを別とし、常才にして讀書せざるは、發達すべき見込なく、發達するも一時の事のみ。讀書に過ぎて精神の病的と爲るあれど、讀書の足らざるは、時代の進歩に堪へず。往代と較べて現代に讀書する者の多きは、社會の進歩して知識を増進するの必要なるよりし、我が國人と較べて歐米人の多し讀書するは、生存競争の劇烈なるよりす。水平以下に生活するの意ならば其れ違なるが、苟くも之を超越せんとせば、などて知識の増進を怠るを得べき。多く讀書して少しく得るあり、少しく讀書して多く得るあり、頭腦の消化力にて結果を異にするも、各自相應の讀書せざれば、向上せざるは勿論、次第に向下して、早く落伍者の群に入ら

ん。八九時に出勤し、四五時に退出するは、職務の過酷なるも、何程か身體を窮屈にし、精神を窮屈にしては、家に歸りて疲勞を覺ゆべく、歐米人よりも精力の足らざるに非ざるも、職務以外に勉強せずとの久しき習慣とな爲れる者にして、今更ら急に咎むべくも無し。一月二月の休暇を得るは之と違ひ、懶惰性を成し往々に時間を通ずる傾向ある者も、讀書するに苦痛を感ぜず、或は聽かし嫌き石の一たび動いて止まざるが如く、初め嗜好なかりし書も、漸く讀みて手の舞ひ足の踏むを知らざる無しとせず。居る處の何地たるを問はず、平生書を讀まざるは、休暇を得て多く讀むに心掛くべし。無益の暇白ならざる限り、何書にても可、何書よりも何等かの利益を得べし。銀行會社員も同じく然り。今の商人は封建時代の町人と違ひ、市民とし紳士として世に立つを要す。事務を興る以上、他に興り關せずとの一子にては、見地の餘りに低しと謂ふべし。紳士として性格を形づくするには、廣く讀み、若くは深く讀み、職業以外の事にて人と談話せざるべからず。職業以外の事にて人と談話するは、職業に關係なきが如く、而して實際關係の少からざるに於ては、尙更ら事なり。店に籠城して

活動範圍を狭くしては、大規模の事業を企つるに堪へず。

書を讀み、人に聞き、知識の増進するも、性格の整全を期すべからず。學者が偏癖の別名たるは、或る種類の知識に偏せるが爲めに、人皆學者たるべきに非ず、知識を追求するに専らなるを要せず。趣味を涵養することは、直接に知識に益せざるも、別に利益を受くる所あり。娛樂が世に必要なや否やに就き、幾分の議論あるも、娛樂なき世の興味索然たるを想はざる能はず。藝術が娛樂なりや否やに就き、幾分の議論あるも、藝術の趣味は、廣くせば愈々廣く、深くせば愈々深し。憲法に關し、財政に關し、科學に關し、知識らしき知識を吸收せざるも、能く趣味を養へる者は、斯かる知識に富む者よりも愉快に世を渡り、或は事業を成すに適することあり。知識のみにては人事を處するに足らざるなり。唯趣味を行とせば、早く識居じみ、若隱居と爲り、浮世を茶にするに傾く。圓滿なるは安全なれど、盤根錯節を斷つには鋭角なる刀劍に若かず。人に骨あり、肉あり、孰れかの一方にて不可、相交はりて體格を形成す。骨は硬きを貴び、軟きを卑む。軟骨は硬爲すこと有るを得ず。英國の紳士は紳士の標本

と稱せらるゝが、其の紳士は徒らに命令に聽かず、食事の末にまで禮を事としつゝ、體人と腕力を較べ、體人と同じく露營するに堪ふ。紳士たるには、人に相撲打ちて演劇談し骨董談するのみにて足らず、千萬人の反對するとも我れ往くの概なかるべからず。而して斯かるは天稟に用でずんば、性根を鍛錬せるに出づるが、人は性格の鍛錬を念とし、參禪の如きも、其の意よりする者少からず。參禪にして眞に此の邊に效能あらば、一二箇月の累中休暇は最も適當なりとすべけれど、二三の僧を相手にするは、平素全く知らざる方面の人と交はるに執れぞ。

價れたる方面にて奇蹟が如く、一を聞きて十を知りながら、慣れざる方面にて一小事の爲めに狼狽して色を失ふは、實際に鍛錬する所なきが故とすべく、若し鍛錬に意あらば、成るべく新たな經驗を心掛くべし。累中休暇に世間を知らんと欲せば、壺中に天地あり、市にも、町にも、村にも、唯語るべき人の多きに過ぐるを見ん。

現に位置を占むる者は、日暮れ道遠し。暮れざるも既に中し、洋々として春海を望むが如くならず。學校に籍を置き、全く位置なく、又は位置の定まらざる者は如何なる事をも考ふべく、

如何なる事をも企つべし。少しも急ぐの必要なく、念に念を入れ、大成を期して可なるが、歲月人を待たず、青年期は幾年限の事ぞ。早く用意せざんば、顧みて悔いるに至らざるや。卒業の差、千里を致すとは、青年にも戒むべき所、

同商の友として君と呼び、儼と應ずる者、十年後、二十年後、三十年後、如何の變遷を見る。或は藝に後進視せし者一觀の紐を俗儀なくせられずや。而して其の差異の生ずるは他にあらず、己れに適當なる順序に於て適當なる道を進みたるや否やに在り。人に能不能あり、能者に不能あり、不能者に能あり。低能兒と生れざる限り、各々己れの能を發揮すれば、何人の前に出づるも恐るべき無し。而も之を發揮するには、徒らに時日を費すの惡癖を作るべからず。一月二月の休業は、學校に課業なきを意味し、爲すべき事なきを意味せず。若し之を善用すれば、在學中に利すべく、或は在學中よりも更に卒業後に利すべし。課業に關係なき事は、課業に益せざるも、身に得る所多し。小人閑居して不善を作す。爲すべき事なしとて不善を作すに至りては不良少年とし取扱はるゝの年齢を過ぎ、直ちに罪人と爲らざらんこと難し。不正不明なる官吏に壓迫されて刑に就くは政方

なけれど、破厩恥の嫌疑を受くるが如き、單に
觀演したるのみに非ず。單に問はれざるも、爲
すべきを爲すを厭ふの習癖となりては、生活に
苦みずとも、空々寂々、苦もたなく樂もなし。醉
生夢死にて差支なしと言は言へ、愉快の少き
を如何にする。一月二月の休業、人々各々己れ
の爲さんと欲する所を爲すべく、一を以て得す
るを得ざるも、光陰を濫費するの天物を暴殄す
る者なるを知らざるべからず。

夏日將に盡さんとす

今は晩夏か早秋か。陽曆にて七月は盡に夏
九月は盡に秋に轉るれど、八月は秋に屬するか。
北米は夏とし、英國は秋とし、日本は或は夏と
し或は秋とし、未だ決定せず。決するの目ある
か、決するの必要あるか、如く之を措き、漸次夏
景の秋景に移りつゝあるを見る。温度は七月よ
り高きことあり、下旬の上旬より高きことあ
るも、日を送うて盡は空の青きを加へ、夜は星
斗及び銀河の明輝を加へ、一葉の落つるを視す
して秋の近づき來れるを覺ゆ。されど夏は去れ
るに非ず、去るも遠からず。風聲雨聲蟲聲、影
月色、絶え一寂寥を感ぜしめす。

春秋に富むとは少壯の事、春秋の高しとは
老年の事、單に春秋といへば、偏家の五經の
一なるが、曾て夏冬を以て歳を意味せし無し。
春と秋と氣候の相懸し、歳の別體として夏と冬
と氣候の相反するに若かざるに、春秋の語ありて
夏冬の語なきは聊か奇ならずや。其の何故
なるやの早明せざるも、夏冬の代りに表裏の語
あり。夏葛して冬裘し、一たび葛裘を被るは
一たび裘を解る者、一裘葛といふ方、一春秋
といふより意義あるらし。春秋には表裏とい
ふが如き無し。外界の變ずること、夏冬は春
秋より遙に多く、實に極陽よりして極陰に轉
ず。

支那に三條とて、冬は歳之餘、夜は日の餘、
陰雨は時の餘とあり。冬を歳に入れざれば、夏
冬の語の出づべくも無きが、夏を歳之餘とする
事は決して之れ無し。春秋は歳に屬し、以て
表裏のみなるの望るれど、夏は不快なる
季節に非ず。苦熱の業あるも、條りに酷ならず
條りに長からざる間、先ら海に浴するが如き
愉快あり。常に輿船に住居するの好ましからず
して、而も時に印度東洋等に滞在するの愉快
なると同じく、夏日に特殊の愉快を感すべし。
而して其の夏日は今や漸く盡さんとす。秋景の

【九月】

休暇後に精神爽快か

大に稱すべきも、顧みて少しく残り惜し。
暑中休暇の必要不必要よりも、休暇後に如何
の精神状態なるかを問ふべし。睡眠は一晝夜
に三時間をして餘るとするあり、十時間を以て
足らずとするあり。前者が勤勉にして活潑後
者が怠惰にして不活潑なれば、優劣は言ふを要
せざるが、睡眠の短くとも、居常元氣に乏し
く、夢が現かの差別し難きは、睡眠の長くして
覺醒と共に盛んに活動するに非かず。一月
月の休暇を得るも、一年の半分を休むも、常人
に幾倍するの氣力を以て計畫し執務するは、
休暇なくして惘然起居するに較ること遠し。但
だ多く休みて精神朦朧たるは、糞土の牆と擇ば
ず。
休暇を賜りたる者、及び之に準すべき者は、
日を費すの一樣ならず、中に全く意外なるあ
れど、概ね幾日間かは避暑又は寒業の意に於て
旅行したらん。或は別荘に遷り、或は一等旅
館の大半を占め、或は農家の小室を借り、或

は居處を定めず山川を跋涉し、孰れも多少苦勞を念とし、而して之を念とするは、至不職勞に忙殺され、白沙青松の間に心魂を養はんと欲するに出づ。而も果して能く養ひ得たるや否や。歸り來りて爽快を感じ、新鮮を感じ、腕の鳴る如きを得えんか、巧みに休眼を活用し得たる者にて、少くも無用の用を得たりとせん。

執務の效果よりし、午前は金、午後は銀といふ謬あり。蒸睡より覺め、水浴し、五體を伸ばせば、天地我と一新し、讀みて解せざる無く、考へて通ぜざる無きに似たり。其の一時間に成す所は、心魂み身疲れて従事する所の十時間より效あり。此と同じく、長き休眼にて疲勞を癒し、新鮮の氣力を以て事に當れば、山路の崎嶇も回々驚の如し。驚むべきは考考よ。驚も疲れて驚に當る。宜しく考考より回復するに務め、事に當りて爽快を感じ、新鮮を感じ、フレッシュを感ずべし。休眼を過ぎて依然元氣を缺き、職務を怠るは、老朽ならずんば若朽。

如何に學業に就くか

暑中に業を休むは、官廳及び準官廳に普通なるが、中年以上さまで感ぜず、残務を片付

け、酷暑の地を擇ぶが如きに止まる。最も重きを置くは在學の青年にして、一年の愉快を茲に求めんとし、休業期の盡るや、頗る失ふ所あるに似たり。失ふ所あるは得る所ある者、遊びで勉め、勉めて遊び、循環して已まず。官吏の多量な業務に臨みて愛動的なれど、略々運命の定まり、習性となれる状あるが、青年の教育を受くる、一層愛動的にして、而も運命の定まらず、習性とならず。休業期に愛動的を免れて復活せるかに感ずる、偶然ならんや。

教育を受くるは已れの爲めなるも、之を意識するの深からず、校則を以て強ひられ、試験を以て脅かされ、備儀なく勉勵するの跡なきに非ず。青年の頭腦の柔軟なる、圓にすべく、方にすべく、或る程度まで型に容るゝの可なるを見る。振業法も、教養書も、時に如何はしけれど、要するに多年の經驗に成り、有るの無きに優るや明けし。規則の煩はしきさへ、規律の習性を養ふに與はずとせず。服従すべきに服従するも一の美德とすべく、學校の規定通りに爲し居れば、智能を磨發し、徳器を成就するに庶からん。課業を怠るは損失に終る。

されど彈力ある謙遜も斷えず伸ばせば復損まず。彈力なき謙遜は何の用かある。學校の課業

は有益なるも、餘りに課業に専心し、餘力を盡さざるは、成績優等、延いて卒業後の立身に利せんも、大なる任務に當るやば甚だ疑はし。優等生にして相應の位置を得ざるの爲めなると共に、自ら運命を開拓し社會に一紀元を作れるも稀れならずや。人の指定する儘に従はんか、調法がられ、引立てらるゝの便利あらん。個性を完成し、發揮し得ざるを奈何せん。されど堅實なる性格は少し。少きを以て自ら居り、課業を輕んずるは、我々圖勉するに若かじ。

天漸く高し清し

天高氣清、天清氣和、又は天氣高明は、秋を形容する舊套語、天高しと見ゆる、氣清きよりし、氣清しと見ゆる、蒸發少きよりし、蒸發愈々少く、氣愈々清く、而して天愈々高し。避暑の地を擇びて幾くもなく、空色漸く變じ、高く且つ清きを覺ゆ。何時まで夏、何時より秋、判然たる區劃なきも、便宜的に秋を始むる、英國の如く八月とすべきか、將來國の如く九月とすべきか。舊曆七月の秋たりしより推せば、一月後れに八月とすべきも、其の尙ほ酷暑なるを思へば、九月とするの適當なり。而も九月や、

天漸高く、漸く清し。

秋三月一候なるに非ず。初秋は夏に近く、晩秋は冬に近く、其の間の差遙少からず。初めは入秋三日無涼至一與し月五人詠夜遊といひ、略々夏と同じ。中秋の月も悲観を伴はず。されど心なき身にも哀れを知るといひ、悲哉秋之爲氣也蕭瑟兮、草木搖落而變衰といひ、英語界にて秋をフオールとし、落葉即ち秋を意味し、悲觀を伴ふの最も多し。而も此等の晩秋の景、必ずしも秋の景に非ず。秋は收穫の季節、寧ろ快樂多し。木葉の下るも、萬丈の鐘を響くは、一歳の第一美觀ならざや。フオールの語の近年漸次用ゐられずなれる、故なしとす。

されど秋は悲觀を促す傾向あり、之を欲すれば骨身に之を感。賦に詩に悲觀するの多き、懐むに足らず。而も歡樂極分哀情多の反面、悲觀して樂観する無きに非ず。悲觀なき樂観に對して樂観、小兒の樂観、悲樂錯綜するの妙あるに若かず。春月可レ喜、秋月使二人愁一耳といふも、秋月豈愁ひしむるに止まらんや。歌人や詩人や、愁ふるか、喜ぶか、喜びて愁ふるか、愁ひて喜ぶか、自ら解するに苦まん。況んや秋に入り、食進み體肥え、

覺えず憐肉の歎を發す。匈奴立威、向さ奮折膠を以てせんや。天漸く高し清し。個人及び團體共に動く。

燈火稍可親とは何ぞ

時 秋積雨霽、漸涼入二知處燈火稍可親、簡編可レを舒、韓愈の此の詩句ありて、秋に入り燈火親むべき語の行はるゝが、是れ愈の創めし語に非ず、普通の事を普通に言へりしのみ。夏の夜は短夜として眠る間もなく明けんとし、たとひ早く眠りざるも、涼を尋ねて去り、室に閉ぢ籠ること稀れ、燈火あるも多く要用を感ぜず。夜の漸く長く、涼を尋ぬるよりも涼を避くる、燈火の下に時を移し、之を假り之を用ゐんとし、夜愈々長く、涼愈々加はり、而して其の愈々親むべきを感ず。事に何の奇なく、唯親むべしといふの最も適當なるを認む。

されど秋に入り燈火親むべしと云ふに止まらんか、特に傳ふべき無し。年至二十二三一頭角稍相疎、二十漸乖張、清海賦二竹葉、三十骨酪成、乃一龍一猪といひ、問レ之何、因爾學與不レ學歟と斷定し、更に不見二公與二相起自身自黎鑄、不見二三公後、家穢出無歸と

戒め、朱熹の少年易老學難成と言へりしと同じく、學問を勵ます點に於て引用され來り、燈火親むべしとは、學問せよ、學問すれば立身出世すとこの意義を含む。支那の學問は讀書の事、讀書は立身の主要なる階段、燈火なくして書を盛りに照らし讀書せし者を賞讀し、燈火あれば讀書せよと勸む。

活動に可、安靜に可

讀書せずして學問し得べく、學問せずして立身し得べく、支那にも英雄何 必讀書史との言あるが、學問せざるも、讀書せざるも、日暮れて直ちに眠るは、何事をか爲すに優るとせざ。燈火に親むべきは單に讀書に限らず。されど業の何たるを問はず、燈火にて勵勉するの望ましきも、晝間意り勝ちにし夜間汝々營々たるは、寧ろ晝間大に勉め、夕刻より遊び若くは眠るに若かず。燈火に親むの可否は、晝間の行爲にて決すること多し。而も晝間全く遊み暮らすは、晝に於て多からず。業言か勉めたらんには、夜間幾許か勉むること、事の適當なるべし。

華氏六十三度は熱帯に最も適當なる氣温と稱す。奮に執務のみならず、遊樂にも然り、

質もあるべけれど、平均數に於て疑を容れず。日下七八十度、時に八十度を越し、尙ほ残暑の僅なるが、日一日低下し、漸く至適の度に近づく。春の温度は略と秋と同じく、爽氣既に適するも、一は寒より熱に向ひ、恰も體の膨脹し溶解するが如く、幾許か倦怠し、間々逆上の氣味を生じ、一は反對に熱より寒に向ひ、氣を收縮し凝結するが如く、精勁し凝慮するに傾く。實に秋は神魂飛越の趣に於て春に若かざれど、進むに由なること、匈奴の出軍に類し、退いて安んずること、歸去來辭に類せしむ。

扇させ懼させと蟲の聲を聽くは、秋と共に勦絶を聯想する者、蟲の聲即ち自らの聲に過ぎず。裁観を想ふは寒苦を察するよりし、寒苦を察し、茲に陰氣を感ずるが、防寒の如き、世間活動の一部分、他に孜孜業務に取掛るの幾何なるを知るべからず。馬は肥え、人は肥ゆ。人にして爲すべき無き、則ち腕の鳴るを覺え、何處にか、何事にか、發せざる能はず。水陸運動會の盛なるが如く、政界、學界、藝界、商界、工業、皆齊しく多少の活氣を添へ、變化なき農界さへ正に收穫に忙しく、且つ明年の爲めに計る。凡そ秋に入りての執務は殆ど全力を致す者、以て一年間に於ける各自勤勉の最

高度を測定するに足る。

探菊東下、一突然見二南山、陶滑の去りしは別に事情あるも、田園の秋景を思へる無からんや。官に務めし張翰、一日秋風の起るを見、鄉里の蓴菜鱸魚を思ひ、辭して去る。曰く、人生適志を貴ぶ、何ぞ數千里外に名爵を要せんやと。他に事情あるも、秋風二誘はれし所なしとせず。秋は寂寞なれど、寂寞に寂寞の趣味あり、散步に適し、讀書に適し、默想に適す。吾心似似秋月、碧潭光皎潔の概あり。秋や進んで活動するに可、退いて靜居するに可、將二者相兼ねるに可。道學先生迷三道學、風流才子醉三風流、一山鍾、萬壑雲、收月滿樓、秋の月を詠ぜし鮑參寥の此の詩一興。

秋色を觀じて人事に及ぶ

春花の爛漫たるは妍にして、秋葉の霜に飽きて丹化するも亦稍と相似、其の優劣を諒ずる、古より之れ有り。天智帝の春山萬花の豔と秋山千葉の彩と何れか優れると宣へる、額田姫應へて、

ふゆごもり、はるさきりけれど、なかさざりし、とりもきなきぬ、さかさざりし、はな

もきけれど、やまをしみ、いりてもとらず、くさふかみ、たをりてもみず、あきやまの、このはをみては、もみぢをば、とりてぞしぬぶ、あをきをば、おきてぞなげく、そこしおもしろし、あきやまわれは

と、朝露の二月つ花に優るを陳べにき。兩も嬌の操びし所に他の必ずしも背んぜざらん所、人各々情斷を異にし、決著に到らんこと難し。今は婦く言はじ。但だ春を觀るに、寒風楊を吹くの時、梅花光つ蕾を破りて、清香衣袖に溢れ、此に續きて桃、續きて櫻、海棠、然る後、花妍を競ひ、紅紫山野に滿つ。花に嫩葉の縁を添ふるあり、添へざるあるも、皆枝條に點綴し、秋風の吹かれて繽紛飄落するは、眞に優にして莫なるを示すもの、稱して美とせんか、春は即ち豔麗とすべし。

更に秋を觀るに、秋碧空に浮びて宇宙朗曠、滿日晴濃黃と爲り、溥丹と化し、黄なるは黄金を敷き、丹なるは錦欄を彫り、蟹に懸り澗に互りて、錦障を聯ぬるの狀を現す。色彩を以てすれば、遙かに春花に優るとすべく、兩して丹朱爛然として野火の焔が如きは、寧ろ甚しきに過ぎ、同じく稱して美とせんか、秋は即

ち宏壯とすべし。

秋の景色は實に天高く氣清み、草木齊しく色を變じ、野に山に、燦爛として光彩眼を奪ふ。而も其の轉まるの時は、正に是れ樹葉飄零して寂寥の觀を呈するの時。歐陽修が秋聲の賦に、初、漸、漸、以、蕭、蕭、忽、奔、騰、而、經、滄、如、二、波、濤、夜、三、風、雨、驟、至、其、節、二、於、物、一、也、鏗、鏘、鏘、鏘、鏘、皆、鳴、又、如、二、赴、敵、之、兵、衝、秋、疾、走、一、不、聞、二、號、令、一、但、聞、二、人、馬、行、聲、一、云々、その秋聲とは、即ち凋落せる樹葉の互に接觸し、若くは飄零して窗を打ち地に墜つるを指せるもの、其の一、望、丹、黃、華、麗、を、盡、せ、る、所、は、斯、く、し、て、搖、落、し、慘、澹、慄、烈、た、ら、ん、と、す。

古來人の春花を引いて譬喩するもの多し。

春花の寒を凌ぎ雪を冒し、玉肌芳香を放ちて而して散り去る、謂ゆる魁けてこそ色も香もあれといふの類なり。されど秋葉の凋化し、錦を葉め錦を綴り、瓊瑤として目を眩し、然る後飄零して擧げて一空に歸するも、亦頗る見るべからずとせず。之を人事に喩ふる、少壯事を起し險を冒し、一敗して命を殞す、悲慘愴情人をして哀れを催さしむるも、年既に老い經歷あり功勞ある身にして、猶ほ發憤事を擧げ、運命に安んじて從容生を授くるは、他の感を惹くの一層深

きことあり。敦盛の一人谷に陣破せる、今に及びて尚ほ人の説くところ、須磨の邊に種々の遺物あり、或は敦盛番琴などいふもあり。遺物の偽造なるは言ふまでも擧げれど、附近の地に名勝古蹟の人言に上る、能く之が右に出づるものず、而も是れ唯事情の突れるが爲めにして、宛も春花の咲く香を散ら、秋風に吹かれて飄落すると同じ。常盤實盛卿七十、髮髮を黒くして戰場に臨み、軍利あらざして餘衆皆退散せるに、乃ち單身留まり戦ひ、我が頭を斬り木曾公に獻ぜよと呼はれて死したる者、將又三浦義明の九十に垂として頼朝の擧兵を援け、戦敗れて頼朝の死を聞き、其の子に語りて曰ふ、公は一敗を以て死する者ならず、汝等必ず索めて隨へ、我は年老いて行く能はず、留まりて此處に死せんと、遂に命を敵刃に殞し、が若き、一種限りなき愴情、感る人に與ふ。年老いて其の終りを潔くするは、普通の事情の哀れを催さしむると違ひ、秋葉の爛然として萬丈の錦を綴り、而して秋風に搖落するの形あり。

禽鳥の死に臨みて美音を發するあると同じく、人も亦老後に奮躍して死を妙にするあり。清盛の位人臣を極め、驕倨放肆憚ること無きや、誰れとて之を憎く感ぜざるは無きも、其の病みて將に死せんとし、吾れ死するの後は必ず佛に供へ經を唱ふること勿れ、唯願はくは頼朝の頭を斬りて墓前に懸けよと言へる、幾分の同情を惹くに足るなり。頼朝は業遂げ志成り、手に兵馬、權を握りて永久の基を立てしかど、臨終の際に特に見るべき無く、或は兎手に斃れたりとさへ傳へらる。彼れ資性善く忍び、喜怒哀色に現れず、深く謀り遠く慮り、坐ながら天下を制御するに至れる、以て器度の一世に超卓せしを見るに足るも、天眞を發露して人心に愉快を感ぜしむるに至りては、却て之を清盛に看ること多し。秀吉既に天下を一統し、騎亦漸く傾くに及び、乃ち鷹揚萬里、師を朝鮮に出し、進みて關に入らんとし、陣營に勞すること約そ七年、前には必勝の算を立て一々皆中りしに、是に於て計る所數く蠲酪し、竟に何の得る所なくして終りたるが、其の豪邁雄辯人心を發動するの大なるは、即ち茲に存す。是れ亦終りを壯んにせる者と謂はざるべからず。家康は憤計密謀、謂ゆる子規に對し、鳴くまで待んとせしもの、勝利を萬一に期し、敢て危道を踏みしが如き事なく、隨ひて大難事なく大快事なきも、上杉氏東に起りて機を傳ふる、直ちに起きて之を伐ち、而して石田等以て計策の中

れりとし、虚に乗じて大軍を西に集むる、遽に軍を旋して關原に會戰し、親ら馬を躍らして諸軍を指揮したるは、戰陣の見るに足る無きにせよ、意氣の頗る壯なるを見るべし。後十餘年を歴て義隆に七十を超え、會々大阪の役あり。前後二役共に大軍を督して之に臨み、終に關原を定めたる、老いて益々壯んにして往々に安きを奢らざるを知るべく、其の行爲の人に愉快を覺えしめざるに拘らず、猶ほ當時に傑出したるの譽はれざる所以なり。

西郷陸奥功成り名遂げて叢山に雲臥し、然る後壯丁を掲げて三太郎を越え九州を震動せしが、此の如きは理を以て見るべき無く、若し養成せし所の健兒の既に事を發して復制する能はず、己れ獨り生く可らずとして之に一命を授けたりとする、餘りに力なきに過ぎたり。將力能く之を制するに堪へしも、實に自ら之を率ゐて政府を覆し以て大に志を逞くせんとする、則ち餘りに無謀に過ぎたり。孰れより見るも稱するに足らずと雖も、而も老西郷の一生は、即ち此の戰爭を以て更に一段の生氣を添ふるあり。其の可愛の岳に籠守し、四面迫るゝに地なかりし時、部下數百を將ゐる奮闘を歴し、故山に還り笑を含みて死したる、殆ど終り

を詩的にせるなり。何の爲めに起りて何の爲めに戦ひたるか、意志判然たらざるも、其の判然たらざる所、却て豪傑の豪傑たる所を表はす。若し彼をして非命に死する無く、徐るに天命を終へしめたらんには、位は元勳の首座を占め、聲望當代に並び無かりしならんも、其の孰れか生涯を豪壯ならしめたるかは、言はずして知らる。

孔明歳二十七、出でて三分の計を畫し、奇策縱横、謀る所成り、成る所功ありしも、而も皆其の人に乏しからず、而して多く稱するに足らず。只夫れ窮時に方りて顧託を受け、遺孤を擁して艱險に當る、誠意忠節、少しも權を濫み私を營むの跡なく、成敗利鈍、逆め夥り難く、鞠躬盡力死して後己まんを期し、出でては將、入りては相、病を方めて大事を處し、遂に陣中に終りしが、群雄の中に特出し、人臣たる者の儀表と爲れる、實に此に於てし、彼れは是を以て殆ど聖の域に到り、三代荒唐の時代と雖も能く及ぶ鮮し。成吉思汗アノン河畔に起りて四方を縱略し、華師向ふ處、朽ちたるを推き替へたるを拉ぐが如く、西亞を蕩定して東歐を侵占す。然るも其の望りに領土を拓けるは、

宛も蠻酋の暴力を振ひて止まるを知らざるの觀あれど、還りて六盤山に到り病て死せんとする、左右に諷りて曰ふ、金の精兵渾關に在り、南は連山に據り北は大河を限る、以て遽に破り難し、道々宋に震るに如くに莫し、宋と金とは尙無、必ず能く穴に計さん、則ち兵を唐鄧に下し、直ちに汴京を擄け、汴急ならば必ず兵を瀋陽に徙さん、然して數萬の衆を以て千里起き撥はり、人馬疲弊し、戰ると雖も戰ふ能はず、之を破らんこと必せりと。其の敵を料り勢を察する、實に掌を指すが如く、眞に智略の遠く人に超えたるを見る。

チャタムは一代の偉績、英國の威名をして隆々世界の表に擡揚せしめ、世に第一流の政治家を以て目せらる。而も其の大なるの感ぜらるるは此に在らず。既に官を罷めて後、英政府の米洲植民地に苛政を施きて訴求到らざる無きを攻撃し、以て雙方の間を善くするに努め、而して一旦米の傷と勢を聯ねて逆ひ抗し、而してリッチモンドの戰爭を不利として媾和を主張せらるに及び、驟然南詔を棄て、病を扶けて議院に臨み絶明すらく、ブルボンの前には決して膝を屈すべからず、飽くまで戰爭を繼續して最後の勝を占めざるべからずと。氣昂り胸塞がり、其

の場に卒倒し、泉かれて家に歸り、終に瞑したる、是れ誠にて七十年の生涯を振はしむるに足れり。フキリツブ。シドニーは、エリザベス女王の眷顧を被り、名を當代に馳せにき。而も後人の感歎して掛かざるは、特に其の臨終の光輝を放てるに於てす。英軍に將として和蘭を撥け西班牙と戦ひ、飛丸に腿を貫かれて倒れ、流血淋漓、湯を喝ゆる頻りなり。従者百方捜索して僅に一杯の水を得、捧げて其の前に到る。傍らに一兵卒の傷き倒るゝあり、氣息奄々、從者の杯を捧ぐるを凝視して心大に羨むもの如し。シドニー杯を口にせんとして偶と之を看、乃ち曰ふ、彼れ之を要する吾れよりも多からんと、杯を垂死の傷兵に與へたり。是れ後人の今に追びて尚ほ嘖々として稱する所、若し彼れが最期に於て此の事無かりしとする、シドニーの名は或は遺れられたるやも知るべからず。而も年壯なるシドニーの光輝ある最期や、寧ろ濃たる春花の嵐に散ると賦を一にし、麗は則ち之れ有るも、未だ壯とすべきに至らず。之に反し、前に列記せる數者の、齡傾き二尙ほ志せる所に渾身奮勞し、斃れて而して後に已みしは、麗とすべからずと雖も、壯は則ち餘りあり。

人の世に處する、事を遂げ功を奏せる者何ぞ限らん、身を顯榮の地位に陞し、者亦甚だ多し。然るも爾して後、十年二十年若くは三十年の餘命を保ちながら、却て一事の成る無く、一功の擧がる無く、唯碌々無爲、食ひて臥し覺めて食ふこと犬家と擇ぶ無く、爲めに前年の功績を遺れられ、甚しきは死生の分明ならざるあり。彰著の功を樹てて、幾くならざるに世を捐つるか、吾れずんば老に及びて掉尾の飛躍を演ずるか、孰れか其の一に出づるに非ずんば、以て英雄の面目を完うし、盛名を久しきに傳ふる能はず。即ち春の景色と爲るか、秋の景色と爲るか、必ず花々しき最期を遂げ、以て一生を豈麗若くは宏壯ならしむるを要すべし。但し秋に入りて草木多く色を變じ、光彩爛爛、一時の壯麗と盡し、然る後雲霧凋殘し去るとはいへ、是等多くの草木を伴にして、更に松柏の蒼むに後ら、あり。固より灌木悉く然りとし、一を以て總てを待すべきにあらざ。彼の松柏の屬、四時を貫きて綠を變へず、目を眩するの紅彩、人を悦ばすの麗色を缺き、一歳の間、特に觀て賞美するの時なしと雖も、其の蒼翠數十丈、亭亭として空を挿ぎ天に參り、枝條は四方に張りて蓋の如く、蒼鬱として烟霧を籠め、隆冬を

秋草

經、霜雪を自し、長へに青を更めざる、實に變化の外に出づるものと謂ふべし。之れあるか、之れあるか、是れ亦察せずんば有るべからず。

日本にて花の季節といへば先づ春にして、多くは木の花、即ち梅、桃、櫻、李、梨、海棠等なり。次いで初夏に入りて牡丹、菖蒲の類あり。孰れも人の豔稱する所なれど、花の最も多きは秋を推し、謂ゆる七草は其の主なるを指せる者にて、咲く所は總て草の花、殆ど野といふ野、原といふ原に之れ有らざる莫し。

萩は顯る觀るべきもの、既に西歐に移植されたり。桔梗、女郎花、赤蠶るべし。其の廣き野に於てせるは自然のままにして、幾種參錯して咲き纏るゝ、言ふべからざるの雅趣あり。近來開戀の盛んなる結果、野らしき野の花は市街に近く見るを得ず。遠くとも猶ほ見るに難し。繪畫上の武藏野の如き、今や全く想像に止まる。

今日七草は庭園に栽培せらるゝが多し。若し庭園を専らとする、則ち寧ろ能ふ限り手を入れて品質を良くし、種類を多くするに若くは

なし。菊の如きは、我國にても栽培に苦心せざるに非ざるも、其の厥米に移植せるは却て我が上に出づるの勢あり。他の秋草も、或は彼より移し植うる時あらんも知るべからず。

秋の花は野生なるを好しとするも、之を賞すべき土地の甚しく減ぜる以上、其れ支けを著くするに思ふべきは勿論の事なり。今は草花といへば盡く西洋礼にして、秋の花の観るべきを棄てて顧みざるは、聊か面白からず。園藝者は之を忽せにすべきに非ず。

されど火山の多きこととて、鐵錫の及ばざる所少からず。硯石の散在せるは、秋の花の咲き亂るゝ地と看做して妨げなし。淺間の麓は、富士の其れに優るとは夙に言ひ囃されしが、秋の景色は眞に美観と謂ふべし。汽車の便を假りさへせば、自然のまゝなるは尙ほ到る處に存す。其の或る者は、造物主が風景の爲めに長へに保管せる形あり。

齊しく彼の月を賞す

團扇の十五夜が満月に當るの甚だ偏なるに、今十五夜は月多き月の中と稱する。中秋の月にして、僅に言語の末ながら、奇は確に奇

と謂ふべし。明月を賞するは唐の玄宗の代より尙も盛行し、而して本年が玄宗即位千二百年に相當するも聊か奇ならずや。爾後支那は之を賞するを一年の重要事とし、詩會に宴席に心を盡すの儀例なるが、近頃革命の變亂に妨げらるゝ所なかるべきや。我國も夙に之を賞し、源經信が旅宿の大橋の光を遮るを見、即時に之を仇らしめし體にて、時代の隆汙、嗜好の變遷あるも、今尙は都鄙に芋明月の名の行はる。

東邦に謂ゆる月卿雲客の賞し、西邦に收穫の月とし農夫の賞するは何ぞ。原野の種々なるも、一方が時候の快適なるを悦び、一方が農事に利益あるを悦べることを、最も與らん。日支にも、秋分頃の満月夜數夜、月、新月より早く出でざるに非ざれど、一般に緯度の高く、羅馬さへ北海道に當り、パリ倫敦が樺太に當るの歐洲には、更に一層早く出で、日光に續いて月光の輝き、作物の取り入たに少からざる便利を與ふ。隨て満月よりも後の數夜に重きを置き、東邦の専ら満月を賞すると同じからざるが、東邦も或は無意識的に便利を感じ居らんか。

されど貴族より平民に及ぶと、平民より貴族に及ぶとの差異こそあれ、齊しく秋分に近き満月を賞す。南半球は春分にしし收穫に關係なく、寧ろ時候の快適なるを賞ぶ。之を賞する感興に強弱あり、之を賞する態度に異同あれど、今夜の月は世界の最も多數が仰いで觀る所。九秋今夕半、萬里一輪圓、たとひ瓦斯電氣の爲めに月を賞するの減ずるとも、若し雲霧の鎖す如き、必ずや失望せん。感興の如何に至りては、悲觀、樂觀、非悲非樂觀、數ふるに堪へず。唯我國には、昨年の今頃、乃木大将夫妻の御大葬に殉せしを追憶するを禁ずる能はず。

(大正二年九月)

【十月】

秋は高く露氣清し

夜、靜、月華、明、秋、高、露氣、清といひ、地、連、柴、門、靜、天、高、夜、氣、凄といひ、語異に意同じき者擧げて計へ難し。時として徒に語を連れし狀あれど、秋色の目に映ずる、概れ此の如し。夜靜なるも雲あれば濃く、秋高きも風あれば露なく、露氣の清きは風なく、雲なきに出づ。風入レ秋而方勁、露如レ珠而正

圓といふは、相伴はざる光景を並べし者、同時に存在すとせば、認見たるに過ぎず。吾なくして雨粒を呈する此の露は、支那に於て神靈の意識を含み、屈原は「朝飲木蘭之露露、夕塗秋菊之落英」といひ、漢武は承露盤を作り雲表の露を取らんとせり。

一轉して人生の果敢なきを喩ふるに使はれ、人生一世若し朝露之託、朝葉一草、其與露何とあり。日本には傳教の據まり、斯かる着想の類りにして、露の世、露の命、若くは露の身といひ、「草の庵に消えもはてなで露の身になに故郷におきあかすらむ」とあり。風流の疑はしき豐太閤も、「露とおき露と消えぬる我身かなの辭世ありと傳ふ。露の語の人生觀に與り、文學に與れる、以て察すべし。されど太閤は厭世家に非ず。王朝以來厭世の傾向の生じ、少くも言語に表はすの習慣なりしに、後漸く變じ、露の身も、腹十文字に置き切りて長期を壯にせ

歐洲に於て露を天の涙と稱する等、之を悲みと有りたるも、少壯の露といひ、美に喩ふること多し。露の早朝に置かるゝに出づ。而も佛人こそ朝露をロゼー、夜露をスレインとすれ、一般に之を區別する無く、露を以て早朝に限らず。

且つ科學の進歩し、簡單なる露の如き、既に十分に説明せられしに似たれど、實は然らず。久しき間、空中の水蒸氣の凝集する者と解せられしも、寧ろ地若くは葉より出づるの多しと解せらるゝあり。されば、東西の差別なく、露は詩歌の名句に入るを失はず。世に星と並といふも、露は僅に此に列せん。

百鍊して秋水の光

正氣の凝りて百鍊の鐵と爲るは、東湖が文山に倣ひ、文山の想はざりし所に出でにき。東湖の正氣歌は比較的切迫せる疑あり、或は以て馬國の故なりとするが、寧ろ鐵火を恃むと否との與りずや。謂ゆる馬國大陸の差は、英佛に於て如何にか見るべき。支那は鐵の使用を熟知せず、古に銅爲兵、至於秦時、攻争紛亂、兵革互興、銅既不克供給、故以鐵足之など、鐵を動の補助視せしは、武器の製作に精しからざりしを證す。國外より輸入せしが爲め、金偏に夷を書するとの説は、必ずしも附會ならず。凝爲百鍊鐵一鏡利可斷盤、正氣に就て此の句ある、支那に於て考へ及ばず。

秋水帶レ霜寒といひ、凜凜寒光耀雪霜

といひ、支那の刀劍を形容する略も盡したれど、秋刑官也、於レ時爲陰、又兵象也、於レ行爲金といふが如く、修辭の末に過ぎず。日本は語を假り、同じく秋水といふも、漠然たる形容に止めず、武士の魂にして、之を忘るゝは即ち身を忘る者と爲せり。腰間秋水鐵可斷、人騎斬人、馬觸斬馬、時に弊の弊ひしも、此の類の意氣や、一旦外國と接觸し、刀よりして銃砲を以て戰闘、百鍊千鍊の鐵鐵鋼鐵を以て國土の疆域を擴大せし所以ならずや。國も人も自ら勝つを信じて然る後に勝つことを得。日本は鐵を生命とし、兎に角今日あり。

鐵なる哉、鐵なる哉、日本の支那より小、而も支那より強く、支那より進めるは、鐵を貴びしに基づく。歐洲は鐵を使用する我に倣り、爲に動もすれば先進國の名を受く。伊に獨逸皇帝世々戴きし鐵冠あり、拿破崙一世之を戴き、鐵冠勳章を設く。普王之に對し更に鐵十字勳章を設けり。一種の例證よりせしなれど、鐵に重きを置くも照應せざるに非ず。不屈不撓なるは、身を鐵、鐵を鐵、意といふ。

支那にもさざる語あるが、歐の普通なるに若くは無し。東湖が正氣の表現として、百鍊の鐵を言へりしは善し。發爲三萬染櫻」と言へりしを以

て愈々益と善し。

九月十三夜の賞月

今夕は九月十三夜、謂ゆる豆明月に相當す、八月十五夜に表那に於て仲秋の月とし賞し、歐洲に於て收穫の月とし賞するが、今夕の月を賞する、日本以外何れの地にか有る。我が之を賞する、種々の異説の存し、或は初め支那に起り、其の傳を失ひし者にして、明代に八月十三夜を賞し、毎月十三夜を賞せしある、皆之に關聯せりと解釋するを得べきも、明白に記録に遺り、且つ延喜より斷續しつゝ一千年の後に及べる、須らく雲が特色の二に計ふべし。歐洲は陰曆を廢し、月齡を輕んじて久しきのみならず、俗間往々十三の數を忌み、豆を煮るが如きに想及ぶべくも無し。

日本にても之を賞すること半明月に若かず。法性寺入道前關白太政大臣なる者、十三夜影勝於古、數百年光不若、今の句あれど、殆ど記憶する者なし。之に較ぶれば、前にして菅公の去年今夜侍二清流一秋思詩篇獨斷、眼後にして謙信の霜滿三軍營一秋氣清、數行過雁月三更、疑問の伴へるに拘らず、遙に多く人

口に膾炙し、近年人の十三夜を賞するに與る所少からず。仲秋は雲多く、別に賞月の夜を定むるの便利にして、加ふるに日本の陰曆八月は初秋の光景あり、同じく九月時節を恐れるも、茲に十三夜を設けしこと、無月の歎聲を減ぜる效なしとせんや。

天曆七年、先帝の御忌にて八月十五夜の御遊を翌月に延し、日次を忌みて十三夜と爲しきとの説あるが、其の實否は兎も角、明十六明後十七日の兩日三州田原に渡邊華山七十年祭を執行せらる。華山の性格及び事業は既に廣く世に知らるるも、小藩に人と爲り、俗に驚天動地とするが如き無く、又自らさることを望まざりしならんが、事實に於て偉大なる人物、幾多宰相將帥の上に位するに足る。繪畫は素志にあらざりしも、畫家たるの天才を具へ、餘人の漸次忘れらるるに反し、年を逐ひ、益と力の現はるるを認む。本年本月の十三夜、乃至十五夜は、特に華山の爲めに賞し可。

(明治四十三年十月十五日)

月星の光に親むも妙

時秋、積雨霽、新涼入二郊墟、燈火稍可親、

簡編可卷舒、轉愈の此の句は讀書を勸むる者、之を勸むるは修養の爲め、修養を勸むるは榮達の爲め、即ち學ぶと學ばざるとを以て、一は龍一は豬、一は馬前卒一鞭青生二蟲一爲云云與相、潭潭府中居といふ。是れ幾世紀聞の支那の通憲にして、大官は概れ讀書子、讀書にて身を修め、讀書にて國を治め、讀書は殆ど中流以上の一切を形づくり、而して何の書と問へば、愈が人の能爲る人、由三腹有詩書一と言へりし如く、所謂詩書なる者なるが、今は勢の變じ、詩書も榮達の利器たらず。

我國に燈火親むべしと云ふは、此と典故を同じくし、讀書を意味するも、依りて修養をこそ念とすれ、榮達を思ふは甚だ少く、榮達よりは樂の爲にする狀あり。されど目的の何たるに拘らず、秋に入り燈火の下に讀書するの行はれ、讀書を獎勵するの普通にして、斯るは順序の然るべき所ながら、事は決して之に限らず。我が内地特に太平洋沿岸は、朝鮮と共に、秋の頃より月色雪の如く、月なれば星斗爛然、露を踏みて散策するに適す。何ぞ當書問の天宇清朗、遊情を動かすのみとせんや。燈火に親まず、月星の光に親むも妙。

學而不レ思、則、思而不レ學、則、殆、讀

書するは即ち學者なるも、或は思はざるの
癖なからず。學はざるの殆けれど、思ふの必要
をも記むべく、思ふには、燈を燈らず月星を
照るの一室をならすや。とスマルクは夜中單
身犬を捕へて外に出でしが、捕獲犬は實
に此の間に成りにき。ケランドストリンは半
獨逸より徒歩にて歸り、若し雨大なりば馬車に
て歸せし、真に雨具を整へて闇夜に歩行せり。
此の類の事は擧げて計へ難し。紅樓夢酒に夜
を深かすも多けれど、一世に爲すこと有る。土
は、月星の光に親むの珍しからず、闇夜も必ず
し。妨げず。

全鏡 不鏡

鏡の季節と爲りたれば、是よりして、鏡を備
にし鏡を賣にして街路を往來する者を觀る、當
に多かるべし。トーマス・ジェファルソンの曰
ふ、遊園法としては散歩を好しとすれど、鏡を
備へて兼ねて精神の爲めに宜し、鏡に裏に最
好の運動なりと。獵は身體を健全にし、兼ねて
精神を暢活をらしむ、其の遊園法として適當
なるは常に此の言の如し。然れども我が今日の
遊園の若く、以鏡の遊園に意を勞し、袖印鏡に

ては恥かしとしてグリーナー式二連銃を探り、價
は則ち百圓二百圓乃至三百圓、價に其の高
きを以て池に誇り、而して眼裏赤心に輝ひ、人
車を驅り案内者を導ひ、水邊に入りて多分の茶
代を投與し、以て適當を裝うて得たる、固よ
り銃黨の旨意に違へりとせず。固んや其の歩行
する處は則ち平夷の路、たゞ犬を繋ぎ鳥を
繋り出さしめて射撃するのみなるをや。斯くし
て煩むの必ずしも不可なりとせざれど、美音
を奏せしむる小術を射殺して得ずとも、視樂
を得るの途は他に多く之れ有るならん。

均しく多くの費を要すとす、徴々たる小高
を得んが爲め之を費すよりは、更に邊陲の地
に赴きて一層大なる鳥獸を獲るの、身體に益あ
り且つ費多きに當らず。特に現今銃黨の衆
を、通常人跡なき山野川にては、口説きまし
き獵徒を期すること常し。深山幽谷行、罕れな
る處に於て試むるか、然らざれば僻僻に行き、
又は支那に赴きて大に鳥獸の癖を獵るべし。
朝鮮には虎狩なるものあり、而して邦人の之を
試し者未だ多からず。若し多數相率つて徒
に渡り、處置に其の技を試むる、亦頗る興多
からずや。

るべく爽快なるを旨とすべく、銃の高價なるを
誇り眼裏の美なるを耀ふる俗なき僻地に赴き
て、其の技を揮ふべし。蓋し斯る僻地の地に於
て銃を備へ馳驅するに非ざれば、以て銃黨の效
を馳する能はず、單に獲物を獲して走るを冀すに
非ざれば、以て銃黨の技を感ずる能はざれば
なり。美音を奏する小術の如き、獵師の捕獲し
て獵に供するれば、亦を賞味するの不可な
らざれど、自身獵に赴くの際に、必ずそを眼
中に置かさざれ。若しかる小術を射殺するの已
れの伎倆に適するを信ずる、乃ち銃黨を假し
て射的若くは玉突に身を委ねよ。將そを外にし
て、類似的遊興は尙ほ多々之れ有り。

但た夫の俸代なる銃の如きを用ゑ、而して是
に依りて身術一技を得せ得るとする、亦全體に
於て殺伐なるを念とすべく、深山幽谷行人罕れ
なる處に走獵を逞ふより良きことなし。徒らに
其の高價なるを誇り、眼裏の美を耀ひ、人里
近き田野に逍遙して小禽を射殺するは、寧ろ銃
其の物に對して述べべきの所行なり。近年銃獵
する者は、山中標會所同好者に對して餘り
る無からんと欲し、勉めて此の點に專心するの
狀あり。眞に銃黨の旨意を解せざるもの事な
り。改めずんば有るべからず。

氣象に彷彿たり。

日本晴れる哉。我が天然美にして我が國人の未だ十分に價値を知らざるは日本晴れなり。

書家は何地にも形體の研究を遂げ得るも、伊半鳥に往きて初めて色彩に悟りし所ある者少からず。或はマロロッコに往きて更に悟りし所あり。若し日本に生れ、日本晴れを畫にせんとせざる、思はざるも甚しからずや。雨に雨の美、雪に雪の美あるも、溶霽して碧瑤瑤なる、返照して光彩陸離なる、美の美なる者に非ずして何ぞ。帝國は南北に長く、北歐の天に接すべく、南歐北阿の天に接すべく、而して天に於ける天然美に通ぜざる、責は人に在り。日本晴れる哉。

(明治四十三年十一月一日)

霜露降り木葉落つ

明十六日は陰曆十月の望、蘇東坡が月白く風清く此の良夜を如何せんと言ひし日に相當す。されど東京以北こそ、霜露既降、木葉盡く脱とすべきあれ、以南なるは、山地を除き、霜の降れるの少く、木葉未だ盡く脱せず、水落ち石出づるの光景も無し。赤壁は九州の南部と同緯度なるに、事の斯く違ふは其の土地

の特別に冷氣を催し、爲めか。又は陰陽兩曆の齟齬し、當時の謂ゆる十月が今の十二月に當りしが爲めか。或は前賦に白露横江とあるの疑はしきが如く、事實を以て形容を律するの酷なりとすべきあるか。され、均しく人影在り地、仰見明月一顧みて樂むべし。

日本には殆ど到る處に常緑樹の交り、見渡す限り木葉盡く脱するは少し。而も落葉樹の多からざるに非ず。常に葉を脱せんとする、若し時節の順なれば、紅變する者、黃變する者、錦變も當ならず。若し不順ならんか、變色するの遅たく、或は早く褐變して落つ。昨年

は冷氣の漸々に到り、紅變黃變に利し、櫻葉の美なるを見たるが、本年は然るを得ず、櫻葉の如き、概れ跡なし。本年とて冷氣の速に到れるに非ざれど、暑熱の弱きに加ふるに、雨量の多きを以てせるが故にや、頗る趣を異にす。變色の美觀も毎年望むこと能はず。赤壁の早霜も或は下腹に出でしか。

一白雲風浩蕩二坡老一功名不復畫三周郎二畫雨赤崖賦に就て種々の説あるも、其の廣く漢字

國に論せられしは、疑を容るべからず。グレイは東坡と別性格なれど、ストーク寺に於けるエレッジほど廣く英語國に論せられしは多から

ず。勝たるストーク・ボージスは、此の一詩の爲めに知られ、世塵を避けしグレイは、此の一詩の爲めに顯はれぬ。著名なる戦場が著名なる人物に東書せられしこと、誠に此れと正反對なるべきが、歳月の必ずしも價値に關せざるにせよ、一は今日まで百六十年、一は八百年の上に出づ。霜露既降、木葉盡く脱の語、今猶ほ新月白く風清くんば、遊ぶべきを覺えん。

(明治四十三年十一月十五日)

日英兩國の黃葉季

十一月の晩秋か初冬かを問ふは、華氏五十度の温か冷かを問ふに均しきも、一年を三月宛に四分せば孰れかに入れざる可らず。米國は以て晩秋とし、英國は以て初冬とし、我が日本は未だ一定せず。北日本は初冬の景にして、南日本は然らざるが、北日本も二月に春を見ざれば、時下一般に晩秋とするの當らん。秋三月一様ならず、一様に言ひ難きに、秋としいへば、詩に歌に悲觀するに定まれるが、悲觀すべきは晩秋の光景にして、横立つ山の秋の夕暮、鳴たつ潭の秋の夕暮、浦の苫屋の秋の夕暮、皆晩秋に屬す。實に晩秋に霧の立ち登るは、寂寞の感

を促す。

されど暮立ち登る秋の夕暮、一種心を曠くする興趣を伴ひ、曉にも曉霧懸り、江來、一軒人欲、白、何の不快を覺えざるが、之に較ぶれば英國は大なる差違あり。英とて地方にて異なれど、倫敦は名にしおふ霧の都市、九月より漸く深く、十月愈も深く、十一月既々驟々、白晝燈を點するの普通なるに及ぶ。剩一幾萬工場より吹き出せる煤烟の混入し、清霧を變じて濁霧とし、宛ら闇黒世界を現出する所、若し悲觀せば、宜しく此の邊に於てすべし。南日本の高く氣清く、謂ゆる日本晴れなるに際し、寧ろ遊興の勃々たるも、何ぞ鬱々悲觀するが如きことあるべけんや。

晩秋が初冬かは深く問はず、日本も英國も黄葉の季節なるに相違なし。但だ幾分か早晩の存し、英は黄色の既に桐變して落ちつゝあり。日本は正に黄色の普く、公孫樹より雜草に及ぶが、別に紅色なるの多く、コノ葉といへば黄葉を意味せずして、紅葉を意味す。紅と黄と綠と交錯して榛圃萬丈の錦を織り出すは、天智帝が春山萬花秋山千葉の優劣を尋ね給ひ、額田姫が後者を擇びし所以なり。英は唯鶯の紅なるのみ。而して秋景を悲觀する事、我れ彼よ

りも多きは、我が眞に感悟せしなるか、將佛教の習はしなるか。ともあれ、今は往年の如くならず。

秋景漸く冬景に變ず

菊花節より半月、秋景漸く冬景に變ず。殘楓晩菊上冬天等は十月望の事、今は晩菊にして必ずしも殘楓ならず、正に燦爛として錦を織るあるが、是れとて數日の中に落ち、爾後僅に常緑樹の遺るのみ。十月の望、支那の赤壁は霜露、既降、木葉盡く、曉人影在地、仰見三明月、顧而樂之、行歌相答、木葉盡く脱するの早きに過ぐるも、彼の附近は斯かる種類の木なるにや。眼に映するの全く冬景にして、而も明月を見て樂む所は、冷氣の甚しからず、夜間散策に適するを示す。實に小春日和は非秋非冬、秋と冬との過渡期なり。

秋の夜といひ、「秋の夜は、長い者は、眞圓な、月見ぬ人の心かも」といふが、夜の長きは冬至前後にして、秋よりも冬なり。然るに秋の夜を長しとするは、未だ寒冷ならず、屋内にも屋外にも夜深しするを得るが故にて、秋なればこそ月を見て感ずれ、冬なれば月を眺むる無く、

且つ夜の長きに慣れて、特に長きを覺えじ。されど氣候に制せらるゝは、社會の程度の低き時代の事、其の高まるに從ひ、冬に夜深しすること秋の如く、或は夏の如し。天凝り地閉ぢ、風厲しく雪飛ぶも、屋内を春にし、不夜城を現出するに難からず。玻璃窗より月を見るべし。

秋の夕暮の淋しければ、冬の夕暮は愈々然るが、寒氣の烈しくして感慨の浮はず、冬の自然美を賞する迄に設備の整ふも容易ならず。而も今や屋内なるは略々備はり、秋に入りて活動の旺盛を加へ、冬に入りて愈々其の盛んなるを見る。議會の開院式は、豫算編制の後れて十二月下旬にするの屢々なれど、元冬三月を期せる者にして、政治熱も此の際に最も高く、或る點に於て交際季節たるを失はず。冬の自然美を賞し得れば格別、然らざれば暫く此と別れ、人事に於て努力し、人事に於て遊樂すべし。冬は秋の繼續にして、一層勤勞を促す。

【十二月】

冬に入りて何の感

草木の搖落し、人生を聯想するは、秋を悲觀す

る所以。變すべきの變じ、事既に定まれば、復惑はず。順序に於て冬の秋より悲むべきに、却て之を悲まざるは、陽運命に安んずるが爲めか。而も冬に入り一何等の感想なきを得ず。それ如何の感想か。悲観ならず則ち樂觀なるか、將悲観ならず樂觀ならざるか。答ふる者、北日本と南日本と正に相反せん。凡そ南北の異なる、冬季より著しきは無し。南は初雪を喜び、草木も大の足跡梅の花を口ずさみ、北は一夜にして積むこと三尺、數月間家もる共雪中に埋没し了り、宛ら乾坤を別にす。

日本と英國と俱に島國、相似るの多きも、英國は高山の連なせず、南北の差断く甚しからず。我が差の如き、アルプス山の南北に見る。獨逸の天壤り地閉づる時、伊國は風日和煦、寒帯の植物にも、通應し、山北を過じ、寒の度に比例し雪の厚の少きも、大體に於て北日本と光景を巧しくし、極めて陰鬱なりと謂ふべし。されど南極端の合ふが如く、露霜の交際季節は此の間に存し、音響等最も盛に行はれ、他國の寂然たると同列に言ひ難し。北と南と地文を異にし、若し陰氣鬱氣を以て悲觀樂觀を別を得ば、頗る便利を覺えんも、事は固く單説ならず。

日本にて春秋といふの普通なるが、十二月より一月に於り、活氣の添ふを認むべく、特に帝都に於て實際季節を形づくる狀あり。議會も茲に開け、延いて人の聚ること多し。裸體なる相撲の一月場所は舊曆の四襲なれど、今は全く室中に於てし、又寒中にて暑なし。太平洋沿岸は多く天候の晴間を、遊情を馳かす。東京に、名古屋に、大阪に、其れ以南に、冬を堪み春を待つは大に諷る。北方の然らざるは、氣の毒の次第ながら、心臓を轉換せば、雪の瓊、溜氷の寒池を樂むに足らん。ラスキン曰ふ、天氣に悪しき無し、若し天氣の種類のみと。見る所あるの言。

政治季節と火事季節

本月の議會召集迄に議員は上京し、各其所屬團體の協議に従事すべく、今より日を遡うて政治季節の熟するが、年内は委員等の選舉及び開院式の舉行を主にし、委員長に就て幾分の注意を盡くも、議事は漸く末月下旬に始まり、其れまで特に言ふべき無し。初期議會は十一月二十五日召集、同二十九日開院式あり、十二月は議會に火花の散りし月なるに、年々内閣の準備の後れ、遂に一月後れと爲り、事實上於て殆ど二月後れと爲り、今は議會召集の月とし政治季節に入るも、開院して議事の進行せず、恰も力痛を入れて拍子抜けするが如し。されど政治季節は依然冬期と一致するを失はず。冬期の漠然たる如く彼の季節も漠然にして、綿入れを重ねる頃より、政治に熱を加ふとすべし。院内も、院外も、尖塔に雲の倦むは勿論、風日和暖、遊情を馳かすの候も討論に遮せず。寒風膚を硬せば、人皆懲ると見え、面に怒りて然る後に心に怒り、罵詈雑言を銜いて出づ。彌次の恥しきを厭ふべきも、議論の聽くべき時こそ之を厭へ、或は土産談土産賣の續き、或は濫に議決を促す際、痛切なる場合に若くは無し。議論を隔はさず、談笑の間に事を纏むるは、却て他の時候の好都合なるを爲す。

政治季節は實際の頻繁なるも、是れ必ずしも冬期に限らず。政治季節とて、議會開會を冬にするの便利なるのみにて、政めんとは何れの月にもすべし。斯く大馬的をらす自然の冬期と平行するは火事にして、冬に入りて増加し、冬を出て一減少し、冬は正に火事季節の作を領す。往昔より、同敷の波じ、江戸の花と云

ふが如き無きも、尙ほ冬期に最も警戒を要す。内閣の冬期に苦心するは、如何に議會を切抜くるやに存し、議會を見ること都市の火災に於けるに類す。而も妥協といひ盲従といふ例の開けてより、憂慮の著しく減じ、唯時に油斷大敵を思ふ。

(大正二年十二月)

雪

死の運命は天下何人も終に遭ふことを免れざるもの、長しと雖も百歳を出でず、多くは則ち五六十にして歿し、短きは數年若くは數月のみ。蓮如の「御文章」にいふ、「我やさき、人やさき、今日とも知らず、明日とも知らず、後くれ先だつ人は、もとの雪、末の露よりもしげしと云へり。されば朝たには紅顔ありて、夕べには白骨と爲れる身なり」と。

想ふに夫の雪の空よりして降る、音無くして到り、而して萬有を埋没して遺さず、丘山川澤、竹本蘆舎、凡て白装に化し、謂ゆる江山一色三千里、眼に觸る、所平等にして差別無く、白皚々たる景、極めて莊嚴、極めて靜寂、試みに之に觸るゝ、則ち冷寒骨に徹するを覺ゆ。あはれ死の象ならずや。葬儀に列する者、總て

悉く白色にして行く。或は總てを黒色にするの即ち國風たるあるも、黒は是れ白の反面を表はせるに外ならず。其の著くる所のもの、黒ならざれば即ち必ず白、二者其の一に居らざるは有らず。堆雪百物を銀装する間、草壘あり、樹木あり、眞黒を點綴するの狀、豈相似たりとせずや。賢となく愚となく、貴となく賤となく、均しく死に會ひて空するは、庶物の雪に會ひて兪見えざると同じ。春生じ、夏茂り、秋實り、而して總て盡く此の白色界に没し、復能く免るゝ莫し。雪は寧ろ死神の現はるゝものと謂ふ、非か。

然るも、雪多きは又豐年の兆と稱せらる。これ幾許か事實なり。將又氣候酷寒、終歲雪を絶たざるの地、罷熊の兒を抱きて雪中に埋まり、僅かに呼吸せる氣息の煖まりに囚りて上方に一小孔を穿ち、以て大氣を通ずるあり。彼等は實に斯くして暖を取るなり。抑又此の北方の地域に住するエスキモー人のごとき、氷塊を層積して屋舎と作り、其の内に居住す。是れ亦暖を取る所以の者なり。極日唯積雪層、一點の紅線を看ざる處、却て生氣の其の裡に包容せらるゝあり。酷寒嚴冷、觸るれば膚を刺し骨に徹するの感を生ぜしむる物體の中には、又

却て溫暖の時へらるゝあり。火山の雪に掩はるて、譬喻を引かずとも、以て雪の凡てを葬ると共に、又限り無き冀望を齎めるものなるを察すべし。雪の降らんとして未だ降らざる、如何に積陰の氣鬱して散ぜざるの感あるか。其の滿地銀色なるもの、漸く光に映ずるの後、如何に陽春の氣につれ心情の舒暢するあるか。死や、生や、斯の若き者あるか。其の知るべからざる、猶ほ北極の窮むべからざるが如きか。

年の終末

ハツガード、農家の一年と題して日々の経過を記し、十二月三十一日に回へりき、氣候よりせば本年は善き歳なり、斯かる豐年は多く之れ無し、若し豐凶の如何が最大事ならんか、農家は明日互に新年を慶祝せんも、他の一面に於て、本年の如き厄歳の稱なるを察何せん、農産物は甚しく下落し、收益殆ど費用を償はず、必ずや初等教育改正の外、一に資金の貸附、二に地租の輕減、三に租稅の整理、四に器用輸入の取締を行ふを要す、勞働者は農家を攻撃すれど、彼等は農家のみて地主苦み、地主苦みて勞働者苦むべきを知らず、斯く記しつゝある

際、歳は盡く、さよなら。

我が現狀は此と同じからざるも、亦全く異なりとせず。我は彼よりも農事に重きを置く者、商工の發達に伴ひ、多少の變化なきを得ざれど、伴ふべき損失を能ふ限り少くするに勉めざる可らず。市場に於ける不景氣の聲は、多く憂ふるに足らず。何れの地にも不景氣の聲ある歳は、其の聲なき歳より少し。狂する如き好景氣は久しきに續かず、其の終るを以て不景氣とせば、不景氣は寧ろ常のみ。不景氣に大小あり、日今の不景氣は、外、世界の趨勢よりし、内、戰役の影響よりし、決して小とせざれど、人の希望を絶つに至らず。氣力ある者は利器を試むべき好時機なるを信ず。

靡く不有初、鮮二克有終、實に終を善くするは少し。而も有終、必有終、始ありて終なきを得ずるも得んや。歳の終末、人の待つと否とに拘らず、必ず到来す、半途に躊躇するを許さず。終末の明瞭なる斯の如きは無し。されど終して始まり、復活の明瞭なるも斯の如きは無し。本年不可と悟らば明年より改めよ。本年可と認むれば、明年より更に進めよ。個人に於て然り、社會に於て然り。努力の前に不景氣ある無く、有りとも挽回するに堪ふ。本年

は吉歳なるか、凶歳なるか、吉ならず凶ならざるか。人々信ずる所に向つて勇進し努力するの必要なる、歳末諒か感ぜざること。

老の到る到らざる

人生天地間、忽如一過行客、知る可らざるより出で、一年にして一族舎、數十年にして數十族舎、而して再び知る可らざるに去る。一年を過ぐるは一年を失ふもの、前路幾何ぞ。歳暮に臨み浮世夢の如しの歎ある、強ち怪むに足らず。老の到るを奈何せんとは、古今東西に互れる疑問にして、而も未だ満足を感じ得られず。死後に於ける靈魂不滅を別にし、現在のまま永遠の生命を享くるに就き、大略二種の説あり。一は或る方法を以て身體を存続せんとする者、二は事功を遺して後人の記憶に存せんとする者。

不死の業は人の欲する所、或は自然生なるを尊む、或は之が製造を工夫し、殆ど得べきが如く考へられ、而して遂に得べからざりき。軍に仙丹といひ、西に黄金水といひ、一たび之を服せんとせし者擧げて計ふるに堪へず。今も尚ほ神仙の薬の懸念せられざるが、唯過去幾多

の經驗に餘儀なくせられ、眞の不死を此に求めず、之を他に求むるの狀あり。即ち我が人格の後人の記憶に存し、幾代を過ぐるは、死すと雖も猶ほ生くるが如しと爲す。百年千年前に死して現に在すが如くなるは、之を事實上に徴するに難からず。

現在の世に不死なるは、此の如くなるべきか。太上は立德、次は立功、次は立言とて、并せて三不朽の稱あり。更に下りて、芳名百世に流さずんば臭を滿年に遺すべしと唱ふるあり、名に留するも此に至りて極まれり。而も生前死後の名の、範疇何程の價値あるやは疑なきに非ず。有用の材の忘れられ、無用の徒の備はれる、何ぞ一なりとせん。名を求むるも事の至らざる者なり。孔子が發憤食を忘れ、樂み以て憂を忘れ、老の終に至らんとするを知らずと曰へりしこそ、事の可なるに照りけり。知らざるの如何はしきも、斯くして老の理を、我るとも何か有る。

前原 一誠

序幕

第一場 前原庭園の場

時

明治九年九月

人物

前原 一誠

佐世 彦七

父

母

妻

養子

妾

僕

婢

探偵

源 助

(前原は大柄で、頑丈、顔に痘痕あり、
歳四十二、父は六十四、養子は弟
の子で幼兒、諱早は風采よく、氣が

利く。)

本舞臺、上手四阿、自然木の腰掛配置、庭
石、石燈籠、下手四日垣、木戸などあり、
萩吹亂れ、菊の鉢仕立五六個見ゆ。

僕源助、婢キヨ、箒及び手桶を持ちて立
ちかゝりてゐる。

源助。水を拵いても撒いても乾いてしまふ。此
の早り續きで大旦那様や大奥様の大切な菊を
枯らしてはならぬい。

キヨ。さうとも。精出して水をおやり。私はあ
の諱早さんがよく何から何まで働くので、負
けない氣を出す、大抵ではない。

源助。諱早さん、ありや一體、どういふ人な
んだ？

キヨ。あの人は先に御令様から御不審がかゝつ
て殺される所を、内の旦那様が助けてあげな
さつたのださうだ。命の親だといつて、一生
懸命の働きぶり、大旦那様や大奥様の足腰ま
で揉みなさるのだ。

源助。それは親孝行の旦那様、どんなに喜んで
おいでだらうな。

キヨ。此間、諱早さんが先生に天下を取らして
あげたいと、それは／＼えらい襟裾で喋した
わ。

源助。いかさまなあ、天子様に忠義を立て、あ
つちこつち働いた働きをなされ、越後で諱
りも手柄を成されたが、みんな水の泡となつ
て、今はかうしておいになる。御友達が一
等官とかで二頭立の馬車を乗り廻し、肩で風
を切る世の中に随分口惜しくつて御出でにな
らう。廣澤様が殺されたから、どんなに力が
落ちたであらう。此の頃は若い人達が寄ると
障ると其の噂をしてゐる。——一臆動ぶちま
け、旦那様の思ふやうな天下にしてあげた
いもんだ。

二人の噂を先から石燈籠の陰に佇んで諱
早が聞いてゐる。ハラ／＼と一しきり木
葉が散る。

キヨ。おや／＼また木葉が散つて来た。掃いて
も掃いても、(諱早の姿を見つける)あらま
あ、諱早さん、其處においででしたか？

諱早。あは／＼、おキヨどんが掃けば、後か
ら後から木葉が散つて来る。大方其の木がね

キヨさんを驚すまいと思つて居るのぢや。なんと今日は美しい見えないぢやないか？ さゝ箒を貸し給へ。掃除は男が上手ぢや。さゝ箒を渡した、渡した。

キヨは箒を渡すまいと争ふ。前原一誠木鉢を持ち、昌一と共に木戸から出る。妻

諫早。や、先生、今の先、御居間で御書見と存じたら、いつかもう、おいでになりましたか。朝夕御散歩なさつて、清然の氣を御養ひなさらば、如何に家傑の方でも養生になりませぬ。老先生が今年は蜜柑がいつより大きくなつたと言つて御出ででしたが澤山なりました。

前原。父に御運動のため、庭造りを御勧め申し、御丹精の蜜柑を見ずにおいては濟ませぬ。

諫早。いや、は、陰先生も感服なされた先生の御孝心、何につけても御孝心のほど恐入つて作次郎肝に銘じて敬服致します。（他を顧みて）孝は百行の本、舜は孝子、聖人も孝行が肝要、實に天下第一の人。（謙曲をうたふ）

親の敵を討つことも、孝行深き故により、名を末代に留めけり

昌一。お父様、蜜柑がこんなに大きくなつてま

すよ。一緒に見にゆきませう。あ、それより今、お祖父様を連れて來ませう。（入る。諫早つづく。）

おクリ。では私も、（立ちかゝる。）前原。いや、おぬしは此處に居たがよい。多分ヒデが來るであらう。あれも不愍の者ぢや、目をかけてやつてくれ。

おクリ。ほんとにお父様や母様の御世話から、私の身の周りの事までもよく氣をつけてくれます。

前原。そのよい心掛けが何より、まゝ今更是非ない事と思つて睦じうしてくれ。おクリ。勿體ない事でございます。仰しやるまでもございませぬ。

木戸の方から聲が聞える。諫早。おとゝゝゝ。お危い、敷石が澤山なので危うございます。

彦七。いや構はんでくれ。まだ老いばればせぬ。

言葉の中に老父佐世彦七、昌一に手をひかれ、老妻とヒデとを隨へて出る。諫早隨いで出る。

前原は腰掛を請じて下手に來る。彦七。八十一歳は通稱八十郎、珍しく庭に

出たな。これからは小春日和、日中はまだかう暑うても段々と時候がよくなるわい。（腹掛ける。）

前原。今年はすべて氣候が順調で、御丹精の蜜柑もようなつて居ります。

昌一。御父様、今御祖父様とみんで見て來ましたよ。ねえ御父様、東京にあんな大きな蜜柑が無いと言ひますね。僕東京へ行きたいなあ！ そして威張つてゐる奴に大きな蜜柑を見せてやるわ。御祖母様は東京へ行きたくないの？

スエ。東京へ行きたくない人は、まあありますまい。一度は誰も行きたいでせう。天子様の御下と更どんなに榮華なこととせう。

諫早。江戸が東京となつて僅かの間に、何處も此處も立派になり、其の上、文明開化の風が吹き廻して、有平の菓子やうな西洋館が澤山建ちました。

昌一。有平の菓子やうな御家が？

諫早。有平のやうな家ばかりではありませぬ。羊羹の様な煉瓦といふ石を地面に敷いてな。

昌一。をかしいな、そこを通る人は、喚べながら歩くといふやねえ。ヒデ。諫早さんの御冗談でいつも笑はされて

みます。(煙草盆を側におき、老母に煙草をつけて渡しなどする。)

前原。諫早は口上手ぢやの。

おクリ。御口ばかりではございませぬ。何から何までよく氣をつけていたゞきます。

諫早。奥様、奥様、そんな事はありませぬ。先生ががかるの故山に引籠つて有爲の身を閑散におかるのを、實に心外に思つてゐる。私は、

せめてどうか先生の御用でもして萬分の一の報恩をしたいと願つてゐるのです。私は先生に救つて頂いた時に、一命を捧げてあるのです。——あゝ世が世であればなあ！奥様、御残念ではありませぬか？

彦七。いや、皆天命ぢや。天を怨みず人を咎めずぢや。己れは此の田舎がよい。何處へも往きたくない。こゝで果てよう。然し働き盛りではさう往くまい。どうぢや、このまゝ果てる積りでもなからうてな、八十。

おクリ。諫早さんは大分御志が大きいやうで、おほムムム。男は何か花を咲かせたいものと見えます。

スエ。花は咲くか散るかといふもの、常磐木の常に青々したのも見飽きはしませぬ。

ヒデ。私は何が何やら、おほムムム。春は花、

秋は月とか、何も時節、御隠居様、お笑ひになつてはいけませんぬ。

スエ。花に嵐、月に叢雲で、儘ならぬが浮世の習ひ。

前原は腕を拱いて下を向いてゐる。突然、木戸の外で叱々といふ聲が聞える。

皆々願みする。諫早は立ちかゝる。

諫早。なんだ。

源助。(木戸から顔を出す)。犬が入りましたで。

諫早。えつ、何？犬が？(ぎよつとする。)

源助。何處の野良犬か、お庭を駆け廻つて荒してゐますから追つてゐます。いやな犬、畜生！畜生！

彦七。犬はいかんな、庭を荒して。

おクリ。あの其處ら、吠き廻るのが氣味が悪うございませぬ。

ヒデ。私はもうく、犬は大嫌ひ。

昌一。諫早君、君も犬きらひか、僕追つて来てやもう。

諫早。(まご／＼して苦笑ひし、更に高々と大笑ひする。) あはムムム。昌一様、追つて来ませう。

昌一。うん。行かう。

昌一、菊の杖になつてゐた棒を抜取り、振り上げて駆け出す。と出會ひがしらに源助入つて来る。

源助。御來客です。

諫早。なに、御來客？(名刺を三枚源助から受取り、一寸思入れある。)

前原。誰か？(手をもつて名刺を受取り、西郷隆盛の書状持参といふを聞く。彦七もぞき込む。) 座敷に通しておけ。疎末にせぬやう。(妻に目くばせする。)

おクリ、ヒデ立上る。

前原、彦七と思入れあつて、道具廻る。

第二場 西郷隆盛僞使者の場

時

前場の數十分後

人物

前原 一誠

諫早 次郎

石塚 清武

指宿 辰次

澁谷 正雄

おクリ

ヒデ

正面床の間、獅子の置物、掛物あり。花を活けて座敷の體。

石塚、指宿、澁谷、紋附羽織袴、風采立派、座蒲團に坐して居り、前に茶菓子があつた。斜に前原對坐し、煙草盆を控へて咄しつゞける。石塚指宿は薩摩辯、澁谷は越後訛り。

石塚、實に先生を載かねば、今天下の穢れを一掃する事は思ひもよらぬ儀にござれば、是非とくと御傍慮下されたい。

指宿、いやそれは、私共が喋々をまたず、先生は夙くに御心配になつて居られる。さう御心配相成ればこそ、先に二度まで御上京あつて、御歸國なされたのでござる。

澁谷、さればとよ。先生も此の僻地が如何に御生國とは申しながら、存爲の身を以て此の儘埋れて御しまひにならうとはなざるまい。先生、思召は如何でございますか？

石塚、それはもう、御答がなくとも知れてあつた。西郷先生も所謂以心傳心、好漢好漢を知り、英雄英雄を知るとやら、其の邊の御心得

がござつたので、(懐中より紙紗に包みたる書状を取出す。)かやうに私共親書を御渡しに相成りました。先生、御心底を伺ひ、差出すやうにと御傳言でございました。

前原、さやうかな、西郷大將の書状とは……(受取つて披見する。)

諫早、此の時間、換を開いて出で、そつと流坐し、何となき合圖のこなし。

前原、いや、實に厭難な此の書状、掛者論に取入る。其の後會談の便宜なく、遠隔の地に住居致しをれど、國を懐ふ心は一つ。西郷君も随分御心配相成つてござるな。

指宿、實に西郷大將に於て、天下は最早や危急存亡の場に立到つて居り、片時も猶豫なりがたしとの御せでございます。

澁谷、先生と西郷大將とが御意ちになれば、中國と九州とは何の御念慮にも及ばぬこと。殊に私の生國越後方面は深く先生の御高徳を欽慕し、何がな先生の爲めに犬馬の勞を盡す機會もやと相待ち居る次第、東西相應じて起

たば、奸佞の徒を倒し、國家を安泰にし、衆庶を安んじ奉らんこと、容易の業かと思はれます。

指宿、天下の奸物は薩摩で大久保利通、川路利良、長州で木戸孝允、伊藤博文、その奸物が政府を搔擾す間は國が治まらず、外國に侮られるばかりです。誠に喰いかなあ々々手たりでござる。

前原、西郷君の書状によれば、實際鹿児島方面は私學校の徒が到底留むべき様子もなし、此地とても一朝掛者が指揮するならば、忽ち大事に及ばうが、奈何せん、時が到らず、力の及ばぬ事を論めてゐる。まあ、退いて一層に聖賢の書を讀んで居らう。

諫早、(少しせきこんで)先生、先生、其れは何を仰しやる、私は實に齒がゆくて堪らんとす。

前原、お、諫早、其處に居つたか。(心づいて)これは諫早作次郎と申して手前方に宿宿してゐる遠慮なき者、御見知り置かれたい。

三人、諫早と殊更めかしく名乗り、談渉する。

諫早、先生、今の御言葉は、何に原因して居りますか？先生の徳を以てし、先生の才、先生の器、先生の人望、一つとして缺くる物はありません。私は先生に救はれてより、かやうにして御當家にあるのが構内の敷に堪へ

ぬのです。先生の御奮起なさるのを待久しく存じて居ります。私は先生の馬前に死ぬのが本望です。

石塚 先生の五ヶ條の御申立は實に我々涙を揮つて讀みました。先生、未だ言論や文字の上の世にはなりません。西郷大將もさう申して居られます、何れでも赤心ぢやと。

指宿 今は方の時代です。長州で前原先生、薩州で西郷先生、土州で板垣先生、天下に重きを成すは、此の三英雄でござつて、惜しい事に板垣先生は近頃西洋の邪道にかぶれました。自由とか民権とかスペンサーとか、(低い聲で)なに、四國猿はどうでもよい。(石塚、

澁谷、諫早大に笑ふ。)外はどうでもようござる、薩長の兩英雄が起られさへせば、天下は筆食壺してお迎へ申します。

澁谷 實に其の通り、心ある者は誰でもさう思ふ。兩英雄の提携は天下を水火の中に救ふの道と存じます。

前原 いや、拙者はとても西郷君に及ばぬ、並べ言はれては困る。拙者は薩尼に附くのみでござる。然し、長州を纏め、中國を動かす位の事は拙者に於て出来ぬこともござるまい。

但だ長州は薩摩と違ひ、兵器の貯へがなく、

それに困却して居る。若し銃の三千もあらば志を得るに難い事が無い。

指宿 いや、其の儀は御配慮に及びませぬ。西郷大將の方に、十分用意して居られると申すこと。

石塚 大砲は何門都合が出来ませうか。薩摩にも少く、先づ五門位のところと考へられませうが、小銃ならば数千、立ろに御用立てられます。先生より一筆御書面でも御遣はしなれば、船で運んで参ります。西郷大將もさぞ本望の事せう。

指宿 一筆御認めになつて 私共に賜つては如何でせう。急度御用立致します。内々大將より承つて居ります。

澁谷 大將に對して何分の御返書あるべき筈と存じますが、其れに一寸御書添へ下さらば結構間に合ひます。荷ほ口上を以て宜敷く御取なしを致しませう。

石塚 こゝは先生の御決心一つでござります。指宿 西郷大將は既に決心なされて居ります。前原 西郷大將が淋漓たる筆蹟を以て、紙背に徹する赤心を腹藏なく吐露されたる此の書状、如何さま此方の存念、慥しだてなく申上げてでも差支へないであらう。

石塚 申す迄もない事。大將の正心誠意は先生に於て百も御承知の事と推察致します。大將も先生の正心誠意は感服してござつた。では何も今即刻と申す儀ではござらねど、御返書賜らば、何かと便宜に存じ上げます。

指宿 御返書賜らば數ならぬ私共は、先づ役目もすむと申すもの、相成るべくば早く御認めおき戴きたく天下の爲めに願入ります。諫早立上つて後の方に硯、巻紙など揃へて置く。

澁谷 いや、諫早君とか申さるゝ御方、御硯此方へ。

諫早 硯、巻紙を前原の前へ持ち來る。前原は腕を交いて暫時考へてゐる。

石塚 (他の三人と目交し、不安さうに) 先生、何か御氣掛りでもござりますか？

澁谷 天下の大事を謀るには固より構思熟慮せねばならぬ。英華の心事は我々凡夫の測り得る所でない。決して烏滸がましく御助言申す次第でござらねど、然し先生、西郷大將は既に決心せられました。

指宿 篤と御考へあつて然るべき儀ながら、斷じて之を行へば鬼神之を避くとか。何よりも斷の一字でござらぬか？ 西郷大將に一人で

も起つと腹心の人に渡らされました。私もそれを承りました。諫早。先生！私如きが口を入れる所ではございませぬが、平常先生の申して居られる事でもあり、諸君の口添へのあること、此の長州の志士のため、天下のため、御奮起決断の程願はしう存じます。

前原。(筆を取つて) 暫考へて後、漸く決心したやうに、さらば、餘り不厭のやうでござれど、諸君の御言葉もあり、西郷大將に御絶り申し、兵器を借用致しておき、時節を待たしと致さう。(巻紙を取り上げて、諫早の墨をすり居る硯箱を引きよせる。)

三人の士、ほつと思入れ、諫早は茶を入れかへたどする。

諫早。とにかく四五日は御逗留でござらうなと石塚。相成る事ならば、他の志士にも御面會して西郷大將の土産話に致したいと存ずる。

満谷。宜しく御紹介の勞を願ひたい。

此の間に前原は書状を書き終へ、諫早を呼び、封印をさせて石塚に渡す。石塚内懐に納める。前原人を呼ぶ。妻と妾、衣を改めて出で来る。

前原。用意はよろしいか？

おクリ。御口に合ふやうなものはございませぬが、一獻さし上げたく用意致しておきました。柴ヒデ、ずつと下手にて辭儀をしておきまして。前原。何かしらのもてなしぶり。さあ諸君、諫早。御案内申してくれ。

諫早。先生の御せでござれば、どうぞ此方へ。石塚。さやうでござるか。遠慮なく頂戴致さう。

第二幕

第一場 前原門前の場

時

明治九年十月

人物

前原父 佐世 彦七
同 弟 山田頼太郎
玉木分の進
義山 俊彦
大橋 清實
諫早作次郎
大勢

書生

大勢

婢 僕 源助

キヨ (山田は容貌秀麗、婦人の如くで、勇気があり、事に臨んで陣風、歳二十七。横山は俊貌巨眼、歳二十七。大橋は風采堂々、歳三十。)

源助。楊枝と齒磨の袋を持ち、手拭を腰に下げて出て来る。後から諫早大風呂敷を下げ、あたふたと出て来る。

源助。お早うございます。何處へお出かけ？

諫早。いや其の……先生の急用で旅行する。

源助。はあ、さうですか？ 此頃、御人が出たり入つたり、且那樣も何だか急に御忙しい。

諫早。では暫む。(そこへ)と行つてしまふ。)

源助。餘程いそぎと見えて慌てゐなさる。わつは……。

門内から源助々々と呼ぶ聲が聞えて、やがて佐世彦七、四邊に注意しながら出て来る。

佐世。源助、諫早を知らぬか？ 何處に御座る？

源助。今がた、先生の御用で旅行すると、大橋、包を持つて出てゆかれました。

佐世。何？ 大橋を持つて旅行するとは？

何處へ行くと申した。

源助。唯、先生の御使とばかり、何かそは／＼して居られましたか。

佐世。昨今、諫早の落ちつかぬ様子に何となく不審を感じてゐるが、……それとも鹿児島より歸る大橋等の出迎へに參つたか？——それにしては大橋は何のため？（門内に入らうとする。）

源助。（ふと向うを見て、）大旦那様、どうやら大橋様の御歸りのやうでございます。

佐世。朝露でよく見えぬが、（すかし見て、）大橋君に横山君、玉木先生も一所の様ぢやな。

出迎へに行かれたと見える。存外早く戻られた。（花道のつけ際に来る。）

花道から旅支度の大橋、横山、玉木、急ぎ足で出る。

大橋。（佐世を見かけて、）これは／＼尊堂、わざわざ御出迎へで恐縮至極。

佐世。存外御早い御歸りに御座つた。

横山。何かと心急ぎ、一途に急ぎ歸りました。

佐世。して先づ承りたきは、彼方の首尾、如何で御座つたか？

大橋。其の儀はゆる／＼御話致しませうが、早朝から門前に御出なのは、何ぞ變つた事があ

りましたか？

佐世。いや、別に異變といふではなけれど、諫早がどうしてか未明に旅行するとして出て往つたとの事。

横山。何？ 諫早か？ 今朝早く！ それは變！

大橋。何か用事の御心當りがございますか？ 佐世。併し用と申したよし、源助に承つたが、伴の用事と今朝さしてあるべき筈がない。

大橋。兼て彼の態度不審に存じ、途すがら横山君とも、歸つた上は彼を糾問なす積り。（残念さうに一風を喰つて出奔致したに違ひない。

老先生、彼は確かに御座います。老世。二三日以来、いよ／＼彼の態度に不審を抱きをりましたが、探偵で御座つたか？ どうも残念。——とにかく未ださう遠くは行くまい。源助、引捕へて連れて来い！

横山。選しては愈々後の助け、僕も共に……横山、源助か入る。人々見送る。

佐世。横山君は疲れてあらうに、元氣な事ぢや。して、どうして諫早が探偵といふ事が解りましたか？

大橋。其の儀は御物語り申上げますが、此處は門前……

佐世。何さま、それでは此方へ。

佐世先に立ち、大橋、玉木黙々と隨ふ。

道具半纏しになり、玄關敷家を見せる。正面さや形の襖。

佐世は敷臺に上り、玉木は玄關の上段に腰をかけ、大橋は敷臺にかける。

大橋。（頭をかゝへて、あはす顔がないといふ意。）先生の心中を御推察致し、かうして歸國致すこと心外千萬！（涙を落す。）

佐世。どういふ儀で其の言葉、玉木先生、様子御話し下され。

玉木。途上はからず兩君歸國の所とて出逢ひ、あまり力なく悄然となし居られる故、委細承つたが、先頃、西郷大將の書状を持參なしたる彼の使者は、使者であつた由、西郷の書書を偽造し、返書を得て立歸ると見せ、眞は其物の探偵として諫早と心を合せ、一誠どのに免れがたき罪名を負はする企て、憎

いたくらみであつた。

佐世。何、それでは西郷大將は何事も存せぬと申されたか？

大橋。大將に面會致し、先達ての兵器借用の儀申入れたるに、一向に御存じなく、種々物

語りの末、全く敵の手段に乗りたること分明。西郷大將申されるには、桐野の所にも此方に参つたと同様に参つたなれど、桐野に偽使者と看破され、這々の體にて逃歸つたとの事。正義實直、人を疑はぬ前原君は、奸物の爲に謀られるも是非がない。君子は欺くべし、油斷のならぬ世の中、向後深く御注意頼むとの懇々の物語、實に面目を失して立歸りました。

佐世。諫早といひ、佐々木といひ、先般の偽使者といひ、謀りに謀つて作を陥入れる計略に乗つたか、誠に残念！正義一途の作の心中、御推察下され。何はともあれ、餘す方なき奸譎邪惡の沙汰、もはや躊躇する場合でない。是れ程までに非道な事をせぬと思つたのは、我ながら不覺の至り！

玉木。諫早と佐々木とを問者に入れ、種々の證據を取入れ、偽使者まで出して有無を言はせぬ計略、憎みても餘りがある。早く山田君に相談して計畫を立てねばなるまい。

大橋。先生に御咄するのが實に苦しう御座る。さりとて今使者の役目立たずとあつて腹切ることもならず……。

玉木。それは拙者がよく申さう。山田君を呼ん

で善後策を講じなさい。

佐世。どうもそれは、思案しながら、作も早や起させよう。奥へお通りなされ。

玉木、大橋下駄を履き、三人奥へ入る體にて道具もとの門前の場に戻る。

花道から山田頼太郎が續着流しにて出て来る、書生五人ついで出る。

書生甲。山田様、山田様。

山田。立止る。何ぢや、大勢揃つて何處へ行く？

書生甲。我等は今、前原先生の御宅へ行く所、幸ひあなたを見掛けて御呼び申しました。

山田。大勢揃つて何事ぢや？豫て餘り日に立つ行動は慣まねばならぬと申してあるではないか？

書生甲。先刻源助に出會ひ、諫早は其筋の探偵と承り、先生の身邊氣遣しく、護衛にまゐりました。

山田。諸君の手を煩はす事あらば、豫て其の様に手配するの約束がある。今は時が早い。歸りたまへ。

書生乙。では御座れど、一刻も猶豫する時で御座らぬと存ずる。二千三千の兵は我々並つて

糾合致す。先んずれば人を制するとは此處でござらぬか？

書生丙。是非我々は先生を守護し、一方に同志を召集するの手に致したい。

山田。諸君の至誠は感じ入る。有難い。然し前原は今この所、諸君の厚意を受入れる事はすまい。諸君の尊敬してくる兄、いや前原一誠の意志に反して、諸君は騒擾を事とされるか？命令を待ち給へ！時を待ちたまへ！まだ早い、早い！さ、御歸りなさい、花道から書生三人、昂奮の體にていそぎ近づく。

山田。遙か向うを見やり、驚ける體にて、や、や、後から後につゞく三々伍々の人数！え、君道はかく騒擾すること、却つて前原を害する者と悟らぬか？事は今日前に迫つてゐる。けれど火蓋を切るには尙早い。まだ歸らぬか？

此の問答の間、キョ出で来り、騒がしい様に驚いて、門を出たり入つたり、閉めたり開けたりする。

山田。僕の言葉に了解がいつたら、各々自家なり熟なりへ引上げたたまへ！

書生甲。(他の書生と何か領さ合ふ。)さらば、同志打寄つて命令を待たう。山田様、敵に騙

らぬか？

されてはならぬ。

山田。よし！ しつかりやる。さらば前の者は

右へ、後の者は左へ、三々伍々別れて解散し
たまへ。續く後のは引返さねばいかん。歸り
たまへ！（手を振つて指揮する。）

書生一同。失敬、御免。

前原の門前を通る時に一體して、書生一

同解散。山田注意して見送つてゐる。玉

木、キヨを制する様にて門内より出て來

り、山田と見合ふ。

玉木。お、山田君。

山田。先生、餘儀ない結果になりさうですな
あ！

第二場 奥座敷の體

時

前場の同日

人物

前原 一誠

妻 おクリ

妾 ヒデ

机の前に一誠手紙を破り捨てなどしてゐ

る。妻妾も共に文庫など片付ける。

前原。門前の人は皆歸つたか？

おクリ。頼様の説諭で歸つたさうに御座いま
す。

前原。打寄つて一評議せねばなるまい。御兩
親に御心配かけて濟まぬが。

おクリ。御相談の上は戦争が始まるで御座いま
せうか。

前原。豫ておまへ達に申聞かして置いたれば、
さのみ驚きもせぬであらうが、今少し準備

も整つて後と思つたに、かく破綻をきたして
は、やる所までやらねばなるまい。

おクリ。日頃潔白なお心から、人をお疑ひなさ
らず、諫早如きに欺かれ、色々證據をとら

れました上は、是非ない事と仰しやれど。

ヒデ。どうか仕様がありませぬものでせうか？
御維新の戦争に惹なく御出遊ばして、此の頃

は御睦じく御揃ひ遊ばした御一家の御方々
様。私はお嬉しう存じておましたに、又々々

の戦争は、どうなる事で御座いますやう？
は、心細うて悲しくてなりませぬ。

前原。ヒデの心配は尤もの次第、氣の毒ぢや。

奥を頼り、よく扶け合つて御兩親様や昌一
の世話してくれよ。いゝか？ おクリもよく

ヒデを見てやつてくれ。二人心を一致して御

兩親に仕へ、昌一の世話をしてくれよば、わ

しは安心して居る。家を辱しめ、わしの名を
汚すやうな事は……いや、いふまでもない

事ぢやが、よく氣をつけねばならぬ。我兒
弟、各々一途に心を傾け、孝養の道をよそ

にする事にならうと思ふ。實に天下の爲とは
言ひながら、相濟まぬ事ぢや。……事が、志

と反して怨をのみ、三人が三人獄に下り斬罪
の刑に首を並べんも測りがたい。前例も澤山

ある事ぢや。したが、かくて正義の血は永久
に流れるのぢや。歎く事はない。歎いてくれ

るな！（涙を拭いて懇にいふ。）
おクリ、ヒデ、前原の膝もとに居より泣

伏す。

前原。泣いてくれるな。わしも引込まれさうぢ
や、あはゝゝゝ。何でもない。あはゝゝゝ。

何程の事があるもんか。笑はうよ。あはゝゝ
は、覺悟はいつでも致しておくがよいが、さ

う急に負けぬ積りぢや。此の地に利あらずと
見れば、越後方面に同志の士が數多ある。彼

處に往つて又一機軸を出さうと思ふ。まだま
だ泣くには早いぞ。今は愉快に笑つて先途を

祝せんではいかん。二人睦じう留守して、わ

しが、どの様な働きをするかを見てくれよ。さ、泣かぬがよい。家の内も必ず探案といふ事があらう、笑はれぬやうに取片付けておくがよい。（氣を引立てて）では此の箱の中の残りの物を入れてくれ。さ、彼方へ行つて客人に取持の用意をせねばなるまい。わたしも早く行かねばならぬ。（立上る。）

妻妾 兩方から一寸袖をひかへる。
前原。（左右を見て肩へ手をかける。）どんな事を聞かうとも驚いてはならぬ。からだの毒ぢや。養生を第一にしてくれ。いか？ 御兩親の事、昌一の事、皆養生が第一ぢやぞ！
二人、泣伏す。 幕

第三幕

玉木文之進屠腹の場

時

同年十一月六日

人物

玉木文之進

住持

納所

老婆 婆
後家
花屋 娘
門弟 五人

（玉木は老實質素、清廉其者の如く、歳六十七。）

本舞臺下手に井戸あり。正面寺の本堂の横面、樞の木あり、墓大小並列す。

納所坊主を先に、老婆と若後家と出て来る。線香、花など持ちてあり。

納所。南無阿彌陀、南無阿彌陀。實に早や氣の毒な事ぢやな。此の世を去らるれば、どのやうな佛でも一運託生ぢや。が、此度の前

原殿の義舉は御立派な事ぢやで、戦死された方には一層よく御回向申す事にしてある。御立派な事ぢや。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀

佛。老婆。さう仰しやつて下されるのが何よりの御回向。停も心よく成佛致されませう。した

がまだ嫁入つてまもない此の嫁女、病氣でもあらう事か、むごたらしう官軍にさいなまれて無念の最期、諦めようと致しても愚癡が出来ます。

二人歎く。

納所。それも是も皆御間諒ぢや。此度の戦争では色々怪我人や死亡者が此の寺へ擔ぎ込まれて参つたが、愚僧は生得慈悲のたぢで、皆それれれ手當をしたり、埋葬致したりした。

老婆。それは御奇特な事で御座います。若後家。傷ついで御果てなされた御方など、御氣味が悪うは御座いませぬか？

納所。なんのく、形骸は空に歸する物ぢや程に、少しも怖しいとは思ひませぬわい。

老婆。それこそ御出家様。よい御心掛けで御座います。

納所。どら、御墓前で御經をあげて参らうか。

老婆。どうぞ御願ひ申します。

納所坊主についで老婆若後家墓の後に入る。花道から花屋の娘が桶に桶を入れて先に立ち、玉木後より出て来る。

娘。先生様、御久しう御座いました。いつも月々御かゝしにならぬ御墓参に暫く御見えにならぬやうぢやと、御噂申してゐました。

玉木。俗事に紛れて墓参も怠つたは清まぬ事ぢやつた。暫く見ぬまに澤山新しい卒塔婆が建つた。

娘。戦死なされた方々は、内々御埋葬がすままして、御標を御建てになりませず、其れ故卒塔婆が建ちました。

玉木。うむ、戦死した人——嗚呼、あたし有爲の若者が無残の犬死に終らしたか！（感慨無量のこなし。）

娘。壇家の方が幾人も戦死なさいましたので、和尚様は毎日御回向なされて御出でで御座います。若し此の戦が負け戦でも決して負けたのではない、跡から跡と志を繼ぐ人が出来て、前原様の敵は必ず斃れる時が来ようと申して居られます。（ふと氣づいて、あわてて袖で口をふさぐ。）

玉木。御出家のみまでが其の様な事を申して居られるか？

此の咄の間、娘は井戸から水を汲んで手桶に入れ、かひなくしく禱などかける。

玉木。つまらぬ咄に手間どらせた。さう、此處でよい、其の桶はわしが持つてゆく。

娘。いえ、勿體ない。御年寄がお危う御座います。

玉木。は、は、は。さう年寄扱ひにせぬでもよい。娘。は、は、は。さういふ譯では御座いませんが、ではちよつと御先に御掃除を致してまゐりま

す。（墓の後へ行く。）

玉木。（椎の木を見上げ低徊する。）此の椎の木の下に實を拾うたのも久しい昔ぢや、思へば月日は早くたつもんぢや。

問。娘。（出で来る。）お待たせ申しました。

玉木。や、御苦勞ぢやつた。おぬしも娘らしくなつたな。さう、儲けがよい。先刻逢うたが親父も達者の様ぢやな。今まできつい世話になつたと禮をいうてくれ。

娘。あらたまつた御言葉恐れ入りました。ではゆるりと御参詣なされませ。（一寸思入れあつて下手へ入る。）

玉木、娘の後見送つてゐたが、思を決した狀にて墓場の後へ入る。一舞臺、暫時空。前の納所駆け出して来て尻餅をつく。後から老婆、若後家かけて来る。

納所。た、大變だ！ 大變だ！ 誰か居ぬか？ 腹切りぢや！ 腹切り！

老婆。御騒ぎにならんでも静になされませ。御怪我は御座いませぬか？ さう御立ちなされませ。

納所。さあ起きようとは思ふが腰が言ふ事を聞き居らいで。——やとまかせ。（へたへ）とま

た踊る。早く、方丈様に知らせ、あゝそれ、門番の爺に知らせて下され。あの苦しうな顔。澤山血が流れて——怖しやう！ 後家。形骸は空に歸するもんぢや。怖しいとは思ひなされませ。あの切腹して居られる御仁に介抱してあげて御出でなさいませ。

納所。いかな事。それは先刻はさう申した。それは方便ぢや。愚僧あやにく血を見る事が大禁物。切腹を見たら急に足がすくんで胸震ひが止まぬ。

老婆。頼りない御納所様。其れでは此處へ一人お置き申して、私達が方丈様へ御知らせして参りませう。

納所。いや、これ、これ。其れは情けない。あの苦しうな様子が目に見える。一緒に連れて行つて下され。

後家。でも御腰が痛うては、——あゝそれ。これをかうついで御出でなされませ。卒塔婆をぬいて杖にさせ、二人で腰を押して、兩肩へかけて立たせる。

納所。（大聲をあげて。）大變ぢや。大變ぢや！ 腹切つた人がある。腹切りぢや！ 一同下手に入る。花道より書生三人慌しく出で来る。

書生甲。腹切りといふ聲が聞えたが。

乙。誰か人を呼ぶやうぢやつた。

丙。先生が今朝御墓参に御出でになる時、御様子に気がかかり、

甲。御供せうと言つても御許しなく、

丙。今以て御歸りないのに、

乙。今の人を呼ぶ叫び聲、諸君！

互に目くばせして墓の後へ入る。姿は見えず、聲のみ聞える。

甲。先生、先生、御氣をたしかに！ 先生！

乙。あゝ、先生御解りになりませぬか。迎かつた迎かつた。もう少し早ければ何とか！ どうも仕方がない。

丙。真に御立派な御覺悟で御座いますなあ！

(間) とにかく誰か……

此の時書生丁、戊、かけつけて来る。

丁。(陰の書生丙と顔を見合せたるこなし) お、君、先生はどうか？

丙。(小聲に何かいふ。)

戊。さうか……

書生戊丁、側(かたはら)の墓によりて泣く。

甲。乙。(出で来り、)とにかく始末をせねばならぬ。手を貸せ。

戊。丁。うん。(泣き)墓の背にゆく。

乙。(立ちどまり)意外の珍事、茫然自失とは此の事。

甲。嗚呼、先生は我が長州の魂であつたに！ 今はこの有様！

乙。實に先生は吉田松陰先生の叔父で、實父も及ばぬ程に世話なされ、其の上に師匠として懇々教へ導かれた。先生は先生の先生、誠に大先生なのだ。

甲。松下村塾は全く玉木先生が始められ、一時松陰先生が預られたのに過ぎない。

乙。「百衛不如一清」と印をほられた如く清いことは廣い天下に第一ぢやらう。昔は橋良基、今は先生ぢやつた。

甲。さうだ、爪の垢ほども私利がなかつた。今の世で誰が及ぶものか。

乙。嫡男彦介君は慶應元年に戦死し、それで養子を買ひ、その養子正誼君が今度戦死した。

天晴れでないか。

甲。養子正誼君は陸軍少佐乃木希典の弟といふが、兄はどういふ人物か？

乙。兄も永らく玉木先生の宅に居り、薫陶を受けたと聞いたが、僕は會つた事がない。話では兄弟が似て居るさうな、悪いことは無か

らう。何にしても、弟は立派に死んだ、先生の養子たるに恥ぢない。

甲。僕は、兄希典から直ぐ聞いた。十六歳から玉木先生の宅で御夫婦の世話になつたと、餘程有難がつて居つた、一通りの感激でなかつた。今度先生の切腹を聞いて何とか考へよう。

乙。僕は木戸や伊藤井上、山縣に先生の此の切腹の有様を見せたいなあ！ 血だらけの所を、本當にあいつ等に。

甲。あいつ等が何と思ふものか。あいつ等はああいふ奴だ。何とか思ふ位ならば今度の事件は初めから起らない。あいつ等は外道ぢや。輕薄漢ぢや。

乙。それはさうだが、それにしても先生の血は空しく流れまい。先生は引込んで居つて世間に知られないが、精神は何處かに正氣となつて傳はらう、先生の薫陶を受けた乃木希典とやら、何とか心得て居るか？ 聞いて見たいものぢや。

甲。(心づいて)こんな事を言うてみたとなつて何になる。

乙。早く御跡を見苦しくないやうに取り片附ければならぬ。

甲。早く御跡を見苦しくないやうに取り片附ければならぬ。

先から始終を陰で覗つてゐた花やの爺、娘、納所出で来る。

甲。爺さん、其處にゐたか？ 駕籠を一丁頼んで貰はう。

爺。はい。どうもとんだ事で。

娘。さつきまで此處で御話して居りましたに。

(泣伏す。)

書生乙。お前までさう泣いてくれるか。先生の徳は人が知る以上だった。先生は死んでも死なれませぬ。先生の風は山高く水長し！

第四幕

前原父挿縛の場

時 同年十一月十日

人物

前原父 佐世 彦七

母子 スエ

養子 昌一

妻 おクリ

妾 ヒデ

僕 源助

捕吏 大勢

處は雁島村番邸にて、横手玄關あり、佛壇に花など供へ、すべて質素な住居の體。

おクリ、ヒデ結髪にて裁縫をしてゐる。

おクリ。朝晩は俄に寒うなつた。松江へ御さし立てになつたといふが、御召物も汚れたであらう。

ヒデ。東京まで御出でになれば、どうか御助けなさる方も御座いませう。今一度なりとも御目に懸りたら御座います。

昌一の手を引き、老母スエ外より歸り来る。二人出迎へる。

おクリ。お歸り遊ばしませ。

スエ。二人共、裁縫ばかりして氣をつめては身の毒、あの様に養生せよと言ひおかれたではないか。ちと外へなと出て見るがよい。

昌一。お母様もヒデも明日は一緒にお詣りに行かう。

ヒデ。毎日の御詣り、産土様も御利益がなうてはなりません。御父様の御歸りを少しも早くなる様に、ヒデも祈つて参りたら御座います。

スエ。いや。ヒデ、わたしの毎日の參詣はそれを祈るのではない。萩の家を出て行かれた時、もう決心はついてゐる筈。色々手をかへ品をかへ、陥入れうと企んだ上の事、計略に乗つたのは此方の不覺。とはいふもの大且那樣もいつも御申しかの通り、一點秋しい事のない正義の志はいつか貫く日がある。

天子様に忠義一途の心からかういふ事になつたの故、死ぬのは疾くに覺悟して御座つたものを。私は命を助かるやうにも望まぬ。玉木様が老いからの身で最期を遂げられたのも萬々望みないからの事、もはや甲斐ない事を望まぬがよい。唯一日でも其の日を安らかに居るやうにと其れを祈つて居ります。子福者の家、よく人から羨まれ、男子もついでに皆丈夫に育てあげて、御維新のいさを話、俸が出

世の基と聞いたのも東の間、今までの忠義は水の泡となつたれど、今に必ず晴天白日の身となつて後の世の鑑となられる事があらう。

三人の男の兒を一つ繩目につながられても少しも悔むことがない。彼の桶の一旗を見なき

い。湊川の合戦に兄弟がさしちがへて死んだのも只君の爲ぢや。それもこれも皆天運、正成が運よくば尊氏が同じあの様になる所ぢ

や。七度生れて仇を報ずといふ精神は後々まで人が傳へてゐる。今更よしない事に頼みをかけて生き恥を曝すは、よくない事ぢやほどに、早やないものとあきらめて、佛様に御燈をあげ、阿彌陀様に皆様の後世を御覧み申すがよい。

始終此の間、おクリとヒデ泣いてゐる。

昌一。楠正成のやうな父様や小父様は忠義者ぢや。嬉しいなあ。僕は忠義が大好きぢや。

彦七。奥から出て来る。

昌一。御祖父様も、忠義がお好きでございますね。

彦七。忠孝は人間の大本ぢや。お父様のやうな孝行者はないと世間で取沙汰をして居る程ぢや。松陰先生も父様の孝行をえらう褒めて御出でになつた。昌も世の褒め者にならねばなりません。男勝りのお祖母様や母様の教を聞かねばなりません。

昌一。孝行して褒められたうても御父様が御出でがない故、孝行が出来ないで僕はつまらないなあ。

スエ。昌。(しばし無言に涙を拭ふ。人々も吸り泣く。)何をいうてゐるのぢや。孝行は二十四孝の咄の様に、米の中から鯉を釣り、雪

の中から筍を掘る事ではない。本當の孝行は父の志を継ぎ、世の爲になるのがお前の孝行ぢや。さう偉い人になつて御父様の名を辱しめぬ様にしや。

おクリ。御祖母様の仰せの通り、御祖父様にいつものやうに教へて戴くがよい。勉強すれば偉い人になれるのぢや。

昌一。お祖父様、あつちへ行つて御講釋して下さい。

彦七。ほう、これはめづらしう催促を受けた。どりや〜教へてあげませうぞ。(昌一を連れて奥へ行かうとする。)

花道より一散に源助が貧乏徳利を下げて駆け出して来る。

スエ。源助、あわたどしい。何事ぢや? おクリ。顔色かへてどうしたぞ。

源助。た、た、唯今、酒屋で買物をして居ましたらば、萩から参つた警察の人だとして、佐世彦七を捕縛するの、前原の親父を拘引するのと大勢騒いでをりました。手向ひする時は其

の時の覚悟で往けと命令してゐる人があました。彦七。何、彦七を捕縛する? ふ、世にも不思議の事を聞くものぢや! 此の鷹島村に世

を避けて居る俺に何の嫌疑、あまりうろたへた命令ぢやな。おクリ。さう申して居るうちに、もう逸查が参りませう。一寸のびれば尋のびる。少しも早く裏口から御逃げ遊ばしませ。

ヒデ。さ、早く御逃げ遊ばしませ。立騒ぎ、逸支度をさせようとする。

彦七。いや待て。逃げればとて何處まで逃げられよう。倅三人名捕られ、畢竟は斬罪と極

つて居る。若い書生達が生先長い身を今度の義舉で犠牲にして仕舞はれた。何の顔ばせあつて鐵面を朝夕安穩に過して居られよう! たゞ倅達の前途を最期まで見届けたい爲又は女子供の行末を今少し安泰に極りのつく

を見た爲、それもこれも皆無駄になつた。今日は總て心のまゝに身を處する日が来た。立騒いでくれるな。女子供は別に捕はれる事もあるまいが、家宅搜索などはやりかぬまい。よく片付けておくがよい。

スエ。如何にも、今更立騒がず、たゞ成行にまかすやう。かひない今のの上と、ちつと辛抱して居ませう。

捕吏幾人も三尺棒をもち、家の其處此處を覗き、そつと忍んで五人入り、突然彦

七の前に立つ。

彦七。何者ぢや？ 無禮するな！

捕吏甲。命令によつて佐世彦七を捕縛にまゐつた。

彦七。何者の命令？ 彦七に何の罪がある？ 手

續きを踏んでまゐれ。貴様は家宅侵入ぢや。

捕吏甲。何を雑言。家の周りに大勢の捕吏が居

るぞ。懸がず繩にかゝれ。手向ひするな。

女達三人彦七の後に立掛つて庇ふ。

彦七。備はぬ〜。奥へ行つて居れ。懸ぐま

い。決して短氣な事をするな。昌一を大事に

せよ。

彦七段々と居ざり寄り、佛壇の下の箆崎

の抽出から短刀を取出す。

捕吏甲。手向ひするか？ 早く繩にかゝれ。

捕吏乙。やゝ、短刀を抜くか？

捕吏。手出しを爲兼ねてわめいてゐる。

表に様子を覗ふ他の捕吏は此の聲を聞いて、どや〜と入つて来る。彦七は悠然

と短刀の下げ緒を解きながら捕吏を一睨する。

彦七。無禮者！ 手出しをするな！（じり〜と座を進める。）

捕吏は氣おされて段々後に下る。彦七は

次第に玄關の方に進み出て、妻や嫁を音の方にして、短刀を腹へ突き立てる。

捕吏乙。や、腹切つたな！

捕吏。皆して腹切つた腹切つたと騒ぐ。

驚いてスエ、おクリ、ヒデ、昌一、取纏る。

彦七。うろたへるな、後を頼む、短氣な事をするな！

氣丈なスエも取亂して泣きまどふ。

捕吏甲。切腹したとて、其の儘には出来ぬ。手

當を早く！

女達白木綿を持つて来る。捕吏短刀を取上げる。彦七は次第に弱る。

捕吏乙。戸板はないか？ 氣にする。戸を外してくれ。

捕吏の立騒ぐのを色々妨げする源助を捕

吏丙は羽がひじめにしてゐる。

スエ。え？ そりや此の怪我人を！

捕吏乙。捕縛に来た罪人ぢや。無論つれて行く。

おクリ。餘りの事に無道なしかた！

捕吏乙。するだけの事はする。上官の命令です。

スエやおクリは憤に堪へかねて立ちかかる。

捕吏甲。安心なさい。静になさい。お上でも無理なことをせぬ。出来るだけ療治をする。

捕吏戸を外し、彦七のをせる。昌一、助け

るをつき倒す。戸を繋いで行かうとする

時、おクリとヒデと懸ぎ棄てた羽織をか

けてやり、取纏つて泣く。彦七、戸板の上にて苦しみながら手を上げて家人を制

する。捕吏丙、源助を投げ大勢の捕吏と戸板をかこみ、さつさと行かうとする。

昌一。お祖父様、お祖父様！

スエは昌一を抱いて慟哭する。おクリ、ヒデはうらぶして泣き倒れる。幕

第五幕

本願寺別院假獄の場

時 同現 同十二月十二日

人物

- 前原 一誠
- 山田 頼太郎
- 佐世 一清
- 隆吉
- 弟
- 弟
- 縣令
- 關口

警吏 三人
小坊主 二人
下男

(佐世は慄慄で、快活、歳二十五。關口は江戸子肌で老練、歳四十。)

本舞臺正面書院の體、上手に小間あり、板間をなし、庭の竹など矢來にて閉み、假獄の體。書院の方は横蓮の形二枚あり。床の間に掛物などあり、火鉢をおきてあり。

小間の方にて前原は書見、山田と佐世とが圍碁をしてゐる所にて、幕あく。

山田。は、あ、來たな。かうと、其處でこの隅を切るとするか？

佐世。切る！ 斬罪に處すべしか？ よし、ではこつちをから繼いでおくか？

山田。いかん／＼。いつか坊になつちよるぞ、あは／＼。

前原。何ぢや、騒々しい。明けても暮れてもやつてゐる、よく飽きぬものぢや。少し助言してやらうか？

佐世。助言してはなりません、何、負けるものか。(あわてて手を振つことめる。)

前原。(笑つて元の席にもどる。) 負けぬ氣の

男ぢやが、その負けぬ氣も役にたゝぬ時となつた。

佐世。(前原の顔を見上げて、) 明日は死刑ださうだ。名残りの負けぬ氣を出すか？

山田。掌に數十を入れ得る此の石でさへ、一日で自由にならぬ、臂を大澤に揮ふ天下の局面はなか／＼思ふやうに往かぬ。小癪な奴に勝され、思はぬ所で失敗する。同じく失敗するにしても、尙ほ遣り方があつたのに残念ぢや！

前原。いや、もう何も言はぬがよい。總ては運ぢや。父上が亡くなられた。兄弟三人共に國の爲に働き、共に首を斬られるのも、武士として疊の上で死ぬよりもいさぎよい。つまり此の兄が國を愛ふるの餘り、うかと雜草の手に乗つたのぢや。

山田。遣りそこなひは僕の手落です。僕が不注意でした。今少し氣を附けたならば、かういふ事にならんだ。

佐世。いかん／＼。僕は後悔もせねば諦めもせぬ。唯、我本分を盡せば足れりだ。失敗が何です？ 明日が何です？ 斬罪が何です？

生きている死んでも精神に類りがありませぬ、兄さんの過ちでも何でもない。

前原。あは／＼。元氣ぢやなう。(寂しく笑ふ。)

佐世。何度でも生れて國賊を誅する。明日は再生の端緒につくので、寧ろ大いに負すべしと思ふ。(大聲にいつて手で碁盤を打ち、碁石がばら／＼と飛び。)

此の時、警吏三人、庭木戸より鏡前をあけて入り来る。

山田。何用か？
警吏甲。御客様。

佐世。誰ぢや？ 品川か？
警吏甲。いや、縣令閣下で、今奥平の所で御咄して御出でになる。

前原。奥平と咄してゐる？ 宜しい。
警吏木戸から出で、鏡を下して行く。山田と佐世と碁盤を片づけなどして待つ。

關口は警吏を従へて出で、後から小坊主二人、重箱と徳利を捧げて出て来る。

關口。(庭から小間の方を見。) やあ、御無沙汰して済ませぬ。窮屈な所で御困りでせう。もつと廣くしませう。此方へ御出でなさい。

(二重へ上つて襖のしまりを取り外し、書院の方へ三人を連れて来る。) さあ／＼、久しぶり一杯やりませう。(小坊主に、小僧、其

の徳利を持ち行つて燗をして來い。

小坊主二人おづ／＼徳利を持ち、木戸を出る。

關口。(聲をひそめて、) いよ／＼明日はお別れになりさうです。どうも、はや。

前原。(微笑。) さう、お別れになるなう。厄介掛ひとなりませうか？

關口。素面では話にくい。まあ一杯召上つてから。

前原。これは大層御馳走ぢや。鴨の吸物でもないね。

山田。鶏卵に酒は面白くない。チリで一杯といふ所だ。

關口。チリ？ よし、わけもないこと。取りよせよう。(手をたたく。)

前原。小坊主が出て來る。

關口。和尚さんにさう言つて、向う通の魚やにチリを注文してくれ。十人前持つて來いと言つてくれ。

山田。和尚に魚の注文はひどい。あはムムム。關口。なに、肉食妻帯だ。本願寺は昔からだ。小坊主、行かうとする。

佐世。まて／＼。關口。何ぞ用か？

佐世。酒あり、肴あり、酌をとる人がないか、注文しよう。

前原。いや、住有佳酒、關口君の手酌は新橋金春の藝妓にも優らう。(一寸一禮する。)

關口。どうして、思ふやうに往かぬので粗末ですが、まあ一杯。(徳利を取り上げて酌をする。小坊主出て行く。)

前原。よい酒ぢやなう。

關口。酒だけは良いのを選んで來た。飛び切りといふとこ。

前原。久しぶりで結構、あなたはよく尋ねてくれた。品川も尋ねてくれたが、尙、後々よろしく頼んでおく。

小坊主、チリ鍋を持ち出で火鉢にかける。山田と佐世は手酌で唯飲み、唯喰べてゐる。

關口。いや、さう言はれて赤面する。一向力を盡し得ないで此の有様ぢや。然しあなた等が時を得、處を得れば、相携へて國家の爲に盡さうと思つてゐるが、こんな所に別離の宴を張らうとは夢にも考へなんだ。實に先輩であり、舊友であるあなたに別れるのは辛い。

嘆はしい。それが浮世といふものか。

前原。如何にも永久の別離の宴ぢや。父を先立たし、幾人も青年子弟を先立たし、一日も安穩に生存するのは心苦しい。母や妻子は覺悟して居る。今更別に思ひおく事もないが、あなたがさう別れを惜むならば、一層一緒に死んでくれたらどうか？ (からかひ顔にいふ。)

關口。(手を振つて、) それはまあ／＼御免、暫く御免、今死んでも、何時か死ぬよ。

佐世。(大聲に笑ひ出す。) あはムムム、死んで花袋が咲くものか、命あつての物種ぢや。先日一散に運げたでないか？

關口。まあいゝさ、大いに飲まう。お互に飲めるだけ飲まう。先日運げたのは死を恐れたのではない。死ななくてよい處で死ぬに及ばぬ。

男兒死ぬ位の事は何である。死を視ること歸るが如しだ。吾輩は明日死なるといふだけの事、死すべき時に何時でも平氣に死ぬ。

佐世。あはムムム。關口さんは死なうと言はれたのには弱つたと見える、大分言譯が出る、面白い。あはムムム。

山田。よく嘔ふな、餘り見苦しいがまずまいぞ。飲みも飲んだと見えて顔が眞紅ぢや。庭の眞盛り紅葉にも負けない。

佐世。さうぢやらう。何にでも負けない。先輩

高杉東行が語つた。(高聲で語ふ。)

龍田川、川を渡れば紅葉が散るし、渡ら

にや聞えぬ鹿の聲。

川を渡りそこなつて、紅葉と心中するか？ 宜

からう、あはムム。(手拭で頬被りし、徳

利を手で下げ、立つて語ふ。)

まゝよ三升梅、片手に下げて破れかぶれ

の頬被り。

山田。愉快々々。僕はさういふ野暮でない、端

唄でゆかう。(語ふ。)

龍田川には紅葉を流す。わたしやぬしゆ

ゑ浮名を流す、よいさ〜。

佐世。僕も端唄でゆかう。かう意氣にやらにや

いかん。(語ふ。)

龍田川邊に舟とめて、まだうら若き娘氣

の、どういうてよからうやら、しんきま

くらのそら疲いり。

關口。(調子を合せて手を叩く。)吾輩は詩を吟

じよう。(吟。)

吾儕報レ國志、

雖も則人不知、

もう一つ

満世人不知、

若天將レ知之。

去築神洲基一

天道爰復疑

前原。ありがたう。よく記憶して居られる。其

れは先師が吾輩の獄に赴くを送られたものぢ

や。今は其れを再びするのであつて、今度の

獄は此世の納めになる。

關口。人事通塞あり、大丈夫は天道を信じて

疑はない。大丈夫何を疑ふものか。

前原。(微笑。)やはり君は聊か知己とするに足

らうか？

關口。大いに知己のつもりだが、さうゆかぬか

なあ。

前原。(笑つて)どうぢやらう？ さあ一杯

山田。(警吏に向ひ)君達の世話になつた。明

日が別れぢや。いつやらぬか？

關口。あれ等は職務でやれない。人の飲んで

居るのを見るだけだ。可哀さうなものさ。

佐世。今日飲まなくても、幾らでも飲めるさ。

僕は明日まで飲み通してやらうか。首を斯ら

れる時に血が酒になつて居るのも、さけ〜

面白からう、どうぢや？ あはムム。

關口。さあ、何時までも豪傑の相手したいが、

吾輩も縣令の職がある。職務は職務だ。大

分久しくなつた、そろ〜歸らねばならぬ。

前原。さうか。餘り迷惑をかけてならぬ。

關口。いつまで居ても名残りは盡さない。...

では歸らう。何ぞ用がないか？ 言傳がある

なら、言うて貰はう。証文がないか？

前原。今更用とてもないが、(低い聲で)思へ

ば未練が残る、どうも残念ぢや！ (漸く聲

高く) 反問苦肉の策で醜い目にあつた。吾

輩の一家は是れで亡びるが、こゝ兩三年の

間に髪が起り、吾輩と同運命になる者が幾人

も出るぞ。西郷もさうぢや。吾輩を見殺しに

すれば吾輩と替りがない。薩摩に兵器があつ

て、戦争が幾らか大きくなるのみぢや。今年

兵を興せば何とかなつたらうに、明年では黒

日ぢや。反問苦肉の策に陥つてしまふ。吾輩

も引込んで居つて時勢を解しんだが、西郷

も解しない。解して居るやうで解しない。吾

輩ほども解しない。負けると定つても、吾輩

のやうに早く兵を罷めて亂を小さくすること

も出来まい。徒らに戦つて世間を騒がし、

追詰められて覺れよう。それで木戸や大久保

がどうかといへば、決して無事でない。世は

治まつても、あれ等は太平を樂む譯にゆか

ぬ。人を呪はゞ穴二つぢや。首を斬られなけ

れば、天が始末をつける。源平は敵も味方も

亡びた。見給へ、吾輩の云ふ事は誤つて居ら

ぬ。維新の三傑とか稱する者が兩三年の間、片附いてしまふこと、鏡を掛けて見る如しぢや。前原の最後の言は斯々であつたと要路の人に告げてくれ給へ。

關口。維新前後に随分有爲の人物が死んだ、尙ほ幾人も死なねばならぬかなあ！ 困つた事だ。舊幕出身で、たかが縣令の位置で何程の事が出来るか、先づ出来るだけの事をして見ます。人間の力の及ばぬ所かも知れぬ。…では歸らう。(残り惜しげに前原と目禮して立上る。)

下男。木戸をあけて額を出す。

下男。皆様、風呂がわきました。早く入つてよく垢をお流しなさいませ。(悲しげな調子である。)

關口。湯がわいたと？ (三人の方に、ゆつくりお入りなさい。)

山田。浮世の垢を洗ひ流して無垢清淨に歸るは明日。

佐世。垢は身にあつて心がない。身の垢を流すとしようか、酔が醒めやせぬか？ あは、は、は。

前原。呼出しの聲、松蟲や秋の末。

關口。呼出しの聲、松蟲や秋の末——ふ、感慨

無量です。

關口涙をかくす。下男蹲り、警吏等下を向く。

(大正十四年四月一日)

幕

職業としての文學 (一)

文學は職業とすべきや否やは、一の問題として存す。否定論者は曰ふ、文學は職業とする者の多く窮困に陥るは、東西皆然り、文學者は大抵文學にて一生を誤り、子孫をして復之を職業とする無からしめんことを欲すと。

親切に他の爲めに計れば、種々の事業を擇ぶべきあり、此の職業よりも彼の職業の可なるべきを言ひ得んも、而も文學は果して職業とすべからざるやは、速かに斷言し難し。從來文學者として立ちし者の、早く他の職業に就きしならば抑々如何の有様なるべきか。大會社に入りて好地位を占むれば生活の裕なるを得べく、或の富豪と爲りたらんも、悉く皆然らんことは得て望むべきにあらず。

我國に於て多くの文學者をして他の職業に就かしめんとする、先づ中學教員たらしむべし。中學教員は最上の年俸千五百圓にして、其の人や僅々計ふべきのみ。他は大抵千圓以下にして、甲中學より乙中學に徙り、轉々遷徙する間に年漸く老い、得る所の俸給亦低下するを免かれず。小説家にして書肆に哀求し、辛うじて糊口するあるも、中學教員の所得よりも、更に多額の収入ある者亦少しとせず。一概に報酬の多寡を言ひ、他に轉せしむべからず。

文學者が多く己れの従事する所を非難し、子孫をして誓つて己れに倣はしめざるを言ふは事實なるも、而も是れ單に文學者に限るにあらず。官吏にして自ら官吏たるを恨ぶは少く、子の銀行に入り、或は鐵道に技師たらんを望むが常なり。醫は代々醫業を廢せざるも、養子をして業を繼がしめ、實子は却て他の業に向ふあり。他の職業も概ね然り。豪商の子息にして只父の遺産に甘んずる者は、特に言ふを要せず、自力を以て働かんとする者は、各々他の新たな業務に就かんとする傾向あり。

邊見十郎太

序幕

第一場

新宿豐登倉屋の場

時

明治六年五月四日夜

人物

淵邊 醉平(少佐)

田代 清丈(同)

兒玉 八之進(同)

別府 晋介(同)

邊見 十郎太(同)

岩元 平八郎(大尉)

相良 五左衛門(同)

桂 宗右衛門(同)

淵邊 三十四歳、邊見 二十五歳、他は
幾らか邊見より年長。

藝者 五人

お酌 二人

女中 二人

騒ぎ唄で幕開く。

正面に床の間、進棚、置物など總て廣間の體。

臺の物おきて、髪を抜けた散髪の士、紺緋或は木綿黒紋付に駒高白紙、腕を捲つて、盃を廻らしてゐる。藝者、お酌が踊る。

さつま／＼と急いで押せば、いやなきつまのかな山しよんがえ。酒やめて沈む咄にくろもじを、鳴らす奥歯のいぢらしく、それと知らさぬつとめ氣は、まつてつらいぢやないかいな。

桂。止めろ／＼、薩摩々々と何をぬかす。やめろ！一立上らうとする。

藝者一。(驚いて下座に直る。)ほんとに悪いよ。あたし達の唄が氣に入らないなら、御自

分でお唄ひなさいよ。

お酌。さあ、聞かして下さいては。徳利を持つて側により桂にさぐむ。

桂。うん。聞かしてやらう。おいがよか聲出して唄うてやる。(扇間聲で唄ふ。)

肥後の加藤が来たならば、煙硝倉に團子ゑしやく、だあご、なんだご、なまり團子。

藝者三。(手を振つて止める。)およしなさいよ。人おもしろくもない。團子、團子だとさ。

藝者二。此間もあれ聞いたわ。團子、だあごだつてさ。

藝者一。薩摩ならお芋をそそくでせう。お酌二。なまり團子つて鉛の團子？

お酌一。なまりの團子だか、喰べられないわね。

相良。何、團子々々が面白くない？よし、面白か歌を唄うて聞かす。(唄ふ。)

御ごじよ道、ちよと出ち見てみせれ、櫻島、づだんばらから月がはつ出た。

上が一齊に手を拍いて唄ふ。

づだんばらから月がはつ出た。

藝者三。まるで唐人のちい／＼ばあ／＼だわ。

藝者二。何だか分らないけれど、月がはつ出たつて、お月様がお出なされた事ではせう？

藝者一。はつ出たは可笑しいね。

お酌二。づだんばらつて薩摩原みたいな原なの？

藝者二。唐人の寝言ならメ子ちゃんか上手だね。唄つて御覽。

お酌一。いやよ。

藝者三。お唄ひよ。

お酌一。さう、ちや唄ふわ。(唄ふ。)

唐人の寝言には、さいごさんまいこわうしようてれんがてんちうさい…

別府。やかましい、黙れ。べちや〜囁りよる。

田代。近詠を二つ何はう。是枝大人の高弟といふ所を。

田代。いや、こんな所で披露でもない。

別府。さうでない。一つ御高吟を願はう。

田代。さうか。では一つ僕が京都の守護として勤務の時分、志賀の舊都に遊んで詠じたものを。(座を正して、)

鶉なく野とあれたれど大宮の跡と思へば
えこそ踏まれね。

音吐朗々と叫び、皆盃をおき感嘆の耳を傾ける。

田代。腰折れて面目ない。

淵邊。なに、腰折れ？ 武士に腰折れは宜しくない。苟くも腰折れとは。

兒玉。いや、腰は折れても、抜ければよい。岩元。大砲の玉で腰が抜ければ響の腰抜けぢや。

淵邊。それがしやれちふものか？
別府。何處で聞いて来た？ 聞いた事を申すではないか？

邊見。(人々の言ひ騒ぐ中に、先程から手酌で酒を飲んで居たが、つと立ち上つて、) 酌もこれも面白くない。蚊の鳴くやうな聲で何を言ふか。どけ〜、己れがやる。(中央をよるめきつゝ、のさ〜出ていきなりに、)

雷ごろ〜、電びか〜、電びか
びか、雷ごろ〜、どど…、雨風ぢや〜

兩手を振り廻し、大殿で壘を踏み轟かす。

女共、電びか〜とやれ、おいが雷ごろちや。

又始める。塵埃の濛々と立つのに藝者達

はあわてて盃を片よせる。一座、袖で口を覆ひ、埃を拂ふ。邊見之等に一切構

はず。
電びか〜、雷ごろ〜、どムムどんと落ちた。

圖轉倒と大の字に寝てしまふ。

別府。雷が落ちた。どら引上げとしようか？ 皆々歸り支度をする。

相良。今日はどういふものか一向酒が興を催さぬ。

桂。宵節句の祝酒も是れまでぢや。

淵邊。早く歸りをいそぐとしよう。

別府。(邊見の側へ立寄り) 邊見、こら邊見、歸るぞ。

田代も傍により、手を掛けて揺り起す。ごろり向うをむいて、一向に答がない。

別府。こら、起きんか！

田代。皆歸るぞ。

邊見。む、歸れ〜。

別府。なに、歸れ？ では置いて行くぞ。あとから歸れ。非番でもあり、臨分酔うてゐる。途中も歩くは難儀であらう。置いて行かう。

兒玉。女子達、介抱頼んだぞ。

藝者。よろしうございます。御案じなさいませう。

な。私達が御相手致して居りませう。
別府。何、お相手？ あは、ゝ、女子の相手で
はこいとも勝負にならん。
皆々邊見の寝姿を指して笑ふ。

道具廻る

第二場

豊倉屋裏座敷の場

時
前場の翌早朝

人物

淵邊 群平
相良 五左衛門
桂 宗右衛門
邊見 十郎太
藝者 二人
女中 二人
男衆 一人
豊倉屋裏座敷 上手の小間に障子立廻し、
早朝の何となく静なる場。

後の障子をからつと開けて、男や女の
止めるのも聞かず、三人の士どやくと

入り来る。

淵邊。邊見、邊見は何處に居る？
女中。まあ、御待ち下さいまし。邊見様は昨
日から御寝なりつづけ、今お起し申しますすか
ら、どうぞ暫くお待ち下さい。

淵邊。いや、待つとる場合でない。案内せい。

相良。邊見どん！

桂。邊見どん！

口々に呼び立てる。

邊見。今、其處へ行く。

上手の障子を明け、しどけない風姿で
邊見は出て来る。藝者達が後から羽織と
刀を持って随ふ。なほ酔のさめぬ邊見の
有様に、おつとり刀に立ちはだかつた三
人は力ぬげの様で顔見合せる。

邊見。いや、諸君。

淵邊。邊見、寝ぼけて居れぬぞ。大事件が起つ
たぞ。

桂。酔ひどれて居つてはならぬ。

相良。こら邊見どん、しつかりせぬか。

邊見。(へたくと其處に坐してしまふ。)何、
大事件ぢや、今の世に何の大事件？(すまし
てゐる。)

淵邊。こら邊見、昨夜一時三十分臯城より出

火、今曉四時二十分迄炎上、臯城は全部焼
失したぞ。

邊見。何？ 臯城炎上、して御上には？

淵邊。いや、なに御上には御安泰。

桂。したがおはんの姿が見えぬとあつて、人々
不能、事情を知つとる我々は何とか庇護つて

居つたが、誰いふとなく、邊見は昨夜遊廓に
遊び居り、かゝる大事も知らず、うつゝをぬ
かして居ると口々の噂。

相良。日頃寛大な西郷どんも以ての外の腹立
ち、

淵邊。邊見を早く連れて来いと待つて居られ
る。

桂。他の藩への手前もあり、
相良。切腹せねばならぬかもしれぬぞ。

淵邊。西郷どんは、どの位氣遣うて居られるか
知れぬ。

人々ほろりとする。

邊見。(立上つて身づくろひをする。)解つた。
萬事は歸隊の上。西郷どんの指圖をあふぐと
せう。(刀を差し、女中に向ひ)大きに世話
になつた。

差擽して邊見さつさと先に立つ。後の人
達はその平氣の状にあきれて隨ふ。女

透氣遣しげに見送る。

幕

第二幕

薩摩屋敷評議の場

時

同日午後

人物

西郷 隆盛
 高城 七之丞
 邊見 十郎太
 別府 晋介
 淵邊 群平
 田代 清丈
 兒玉 八之進
 岩元 平八郎
 相良 五左衛門
 桂 宗右衛門
 兵卒 四人

(西郷四十六歳、高城二十七歳)
 正面、丸に十字の釘隠しの大長押、黒縁、大さや形の襖、二重つねあし階段があり、鏡を下手に立て掛け、軍服が釘にかゝる。

薩摩屋敷控所の體。

幕開くと、見廻りの兵卒四人立ちかゝり
 むて、何か言ひながら入つて行く。別府、
 田代、岩元、兒玉を初め、人々後の襖を
 あけ出で来り、程よき所に坐す。

岩元。どうも詮ない事となつた。後輩の戒め、
 先輩への申譯、腹切らせねばなるまいが。
 田代。幼い時からの友を一つ亡くさねばならぬ
 か。

別府。他の失策ならば、又何とか法もあらう。
 宮中に關係した事故、西郷どんも心痛して居
 られる、結局、死は免れまい。昨夜引立て
 て連れて歸れば事なく済んだものを。
 田代。今更是非ない事になつた。

いろ／＼噂をして邊見の身の心配してゐ
 る。兵士の一人花道より出で、邊見少佐
 を迎へて歸隊になりましたと報告する。
 別府。直ぐにこれへ。

兵士が入ると、邊見眞先にさつさと出て
 来る。淵邊、相良、桂は早足に追ひつか
 れず、少し疲れたる態にて隨ふ。邊見は
 不安さうにしてゐる同輩の中にむざと坐
 し、人々座を開いてそれ／＼席に就く。

別府。邊見、詮ない事になつた。

田代。今も皆で評議したが、罪は輕からぬやう
 ぢや。

兒玉。何とか取りなしせうと思つても甲斐ない
 やうぢや。

田代。何か申しおく事あらば、今の中承つて
 おかうぞ。

岩元。我輩の心事も察してくれ。此の始末が國
 評の藩内の事ならば、如何にも取做しがつか
 う。が、今は天下の守護する役目のおはんぢ
 や。まして他藩の耳目は只管我輩等の上に懸
 がれてゐる。

淵邊。長州土州の者は、事あれと我輩等の落度
 に目をつけて居る場合ぢや。庇護のしようも
 ない。

兒玉。裁判うけて罪を待たうより、邊見、自決
 してしまへ。介錯は己がしよう。

淵邊。其れが上策ぢや、切腹しろ。

兒玉。どうぢや？(邊見の肩へ手をかける。)
 後の襖をあけて、西郷隆盛出で、皆々下
 座に直る。

西郷。(邊見の正面にむざと坐して、邊見、御
 身はいかん事をしてくれたなあ。

邊見。……。(膝においた手をするつと落して首を垂れる。)

兒玉。邊見、何とか挨拶せんか。我々君公を奉じて朝廷に盡し奉り、漸く下政復古の實を擧げ、聊か志を達したやうで、まだく之から爲すべき事が多い。今後彌々國家は難儀を經ねばならぬ。

岩元。此の時にあたり、あたたら有爲の士を大死させんこと！

田代。西郷どん。西郷。む。

淵邊。残念ぢや！

別府。邊見、どうぢや、覺悟しちよるか？ 邊見。(この時、やつと口を開く。一覺悟？ 覺悟は何時でも。)

別府。さうぢやらう。おはんの氣性ではな。此の魂ありながら、いや、なぜに無理にも連れて歸らんんだか。

淵邊。免せ！

岩元。免せ！

田代。免せ！

一座の人々萎れる中に涙を拭ふもある。西郷も當惑の體。兎も角も早く何とか處置せねばなるまいといふ時、下手より高

城七之丞が入り来る。

西郷。おゝ、高城。困つた事が起つたわい。

高城。(邊見の下を向いてゐる様子に同情の體よるしくあつて坐る。一承つた所では、皆々邊見に切腹せいと勸めてをらるゝとの事、眞か？)

淵邊。他に仕方なからう？

岩元。他に方法がない。高城。已はさう思はぬな。

別府。何、思はぬとは？ 高城。いや、皆々、邊見は何の職務に任じて居るのでござんす？ 邊見の職は近衛少佐、一朝事ある際、至命を守護し奉らん爲の近衛隊では御座らぬか。今、天下泰平に歸して人民安堵してをるに、何のさまでの詮議立、御無用かと存ずる。殊に邊見は當夜非番、非番の若者が一夜の遊興をまで、餘りそれは酷にすぎんかと思はれる。

淵邊。いや、唯一夜の遊興、それを過失と申すでは御座らぬ。長州十州の兵卒ども、燃え盡る炎の中に身命を忘れての働き、邊見の姿が見えなんだと専ら取沙汰。

岩元。薩州兵の名折れで御座れば、是非なく白決させうと計議一決して御座る。

高城。なに、燃え盡る炎の中に十州長州の兵隊が働きましたか。それはさうあらう。邊見の姿が見えなんだとの非難は誰が申し纏らしたか存せぬが、邊見は御身邊を守護の近衛少佐、其の噂今申された十州長州の兵のやうに消防隊の眞似は致すまい。尤も其の場にあらば、消防隊の助勢も致さう。懸命に働かう、荷物を運び、水をもそまごう。なれども邊見は武士で御座る。將校で御座る。消防では練習を積んだ意ほどの働きが出来るに御座らぬ。皇城炎上は全く以て大事件で御座つて、誰でもが働かねばならぬ場合であつても、武士が戦場に出ると、聊か違つて居らう。戰場に出れば、其れこそ武士の恥辱、消防に出られてそれで恥辱となるであらうか？ 徳川幕府は人を案山子にする事ばかり考へて居つた。人を活かして使ふと、案山子にするとは、偉かの遊ひのやうで餘程の相違が御座る。邊見は果して案山子の役目にくさはしいと思はれるか？

淵邊。いや、さういふ儀では御座らねど、他藩の者の噂もあれば。

高城。他藩の噂？ 他藩の噂によつて邊見の

一命を左右されるとは、さてもあまりに言ひ

甲斐ない次第。彼此の噂は此の高城一人でも引受け申す。何藩の何者とも、議論ならは議論致さう。果合ひならば果合ひ致さう。彼の輩、畢竟何程の事があらう。(改めて西郷に向ひ) 邊見の進退は篤と御高慮を煩はされたく願ひ奉る。(一禮する。)

西郷。(黙々と聞いて居り、暫くして皆に向ひ) 此の評議、一人の不同意なく、邊見切腹と事定らば格別、高城の抗辯もあり、どうしたもんぢやらう?

桂。いかにも一理はある。

岩元。尤もぢやな!

田代。おいは氣がつかんぢやつた。

兒玉。然し何處か腑に落ちぬ、何とか他に方法はつかんかな?

相良。何かよい考がありさうなもんぢや?

高城。かく同藩でも切腹の義の出る程故、他藩では随分やかましからう。他藩の噂を氣に掛けるを要せぬとして、理窟ばかりでも通れまい。

面倒のないに越したことない。邊見は少佐に昇進して未だ間もないが、此度の罰として大尉に下げたらば、處置がつきさうに思はれる。

先の長い邊見の事ぢや、此の位はよからう。

桂。妙ぢやな!

田代。妙策ぢや!

淵邊。長州土州も異議はいへまい。

別府。西郷どん。如何で御座らう?

西郷。(晴々とした面をあげ、如何にも納得したやうに) 宜しい。わかつた。(邊見に向ひ)

邊見、これから身を慎んで勉強せねばならぬ

酒も氣をつけるが宜い。(立上る。)

邊見、黙禮して西郷を見上げる。 幕

第三幕

第一場 大口方面戦争の場

時

明治十年五月十日

人物

邊見 十郎太

薩兵士 十五六人

人夫 五人

官軍兵士 十人

遠く大砲の音が聞える。山嶺まで所々に煙が昇る。民家が點綴し、納屋が彈丸で破壊されてゐる。田畑の書割より下手麥畑へ

ついでに上手に土堤が築かれ、壘壕の趣。

邊見下手より、十五六人の兵を隨へて出で、後から人夫が兵糧を持つて出る。

邊見。よし、御苦勞、さあ腹を拵へてくれ。

(人夫が兵各々に辨當を配り邊見にも渡さうとする) いや己れは要らぬ。敵の退却は目の前に見えて居る。御馳走は先方でもらはう。

お前達は先づ、腹を拵へてくれ。(砲聲が聞える。)

邊見。まあいゝわ。さあ、己れのも喰べてくれ。

花道より町人が大風呂敷を背負つた男、女が子を連れて逃げて来る。

町人。皆様此處に御いでになりましたか。官軍が進んで参ります。御危うございます。

邊見。近づくのを待つて居る。お前途こそ危い。早く逃げるがよい。

女。官軍はえらい勢でございます。澤山来ましたよ。

薩兵甲。まあいゝから早く行けよ。

町人。では御免下さいませ。御氣をつけなされませ。

皆々入る。

邊見 其處は危い。こちらへ行くがよい。此の先を左へ道を取つて行つたら大丈夫。(町人等禮して行く。) 全軍用意!

雷撃隊を主にし、正義隊、干城隊が壘を分つて守る。傳令をもつて熊本隊に間道より官軍の背後を襲はしめる。砲聲次第に烈しくなる。

邊見 危い、危い。出てはならぬ。(兵の頭を出すのを押へてあるく。) 又頭を出すか。あぶない。要らぬ死方をするでない。代り／＼寝て居れ。まだ間がある。よいか? わかつたか? (壘壕の外に出て、敵軍との中央に進む體にて、靜に徘徊する。)

官軍。(陰にて聲だけ聞える。) あれば邊見だ、邊見だ! 打て! 直ぐ打て! 小銃の音烈しく、硝煙上る。

官軍の聲。打て! 打て! 邊見更に近づいて指で何か數へる。

官軍の聲。打て! 狙ひ撃! 邊見。わつは、ムム。(官軍の方を見、高笑して靜に歸る。)

薩兵甲。あぶないでは御座らぬか? 邊見。あれはあれでよい。 薩兵乙。あれでは打たれますぜ。

邊見。打たれる時はどうしても打たれる。靜に歩くと、敵がじれて急いで却つて中らぬ。(近くに小銃の音して邊見の後の杉の梢に火花が散る。それをきつと見て) 勝。今度ばかりで斷つ。我軍が今少し多ければ砲兵を全滅させるが、残念ぢや。しかし大砲一二門は取れよう。(官軍の聲小銃の音愈々間近く、邊見敵と味方の様子を見て銃。) 進め!

壘壕より薩兵抜刀にて進み、官軍幾人か出て銃劍で渡り合ふ。官軍の發射一しきり盛になり、一面煙となる。薩兵若干倒れ、二三名退却する。邊見顧みてその一名を斬り、尚ほ他を斬らうとする。皆一齊に立直つて進撃し、敵壘に飛込み、更に官軍の遁げるのを追ふ。

邊見。止まれ! (一同止まる。) どうぢや? 獲物は?

薩兵甲。アームストロング一門、彈薬が澤山、食糧は山と積んで居ります。

薩兵乙。アームストロングは一門でも、我軍に丸で大砲がないので此の上もない良い獲物。

薩兵丙。食糧品はアリキ詰が多く、何よりなのは大樽の酒。官軍さん養澤やつちよる。 邊見。大いに飲めるか、今夜敵が來れば感心ぢ

やが、さういふ事はあるまい。大分狼狽して居る。おいが番をしてやる。ゆつくり飲んで休め。

幕 兵卒皆えいそくとしてよるこぼ。幕 第二場 涙松の場

時 明治十年六月二十日 人物 邊見 十郎 太 官軍兵士 四人 降参兵士 三人 百姓 五人 村娘 三人

眞中に大きな松があつて、下草が茂り、眞夏も稍々秋の風景。遙に山を見せ、人家の其處此處にある書翰。官軍の喇叭が遠く聞える。

官軍の斥候四人立ち、村娘三人下手に茄子などの籠を持つて居る。

官兵甲。何處へ行く? 何時も野菜を持つて道

行するが、何處へ行くのだ？
村娘い。何處へ行かうと、早く通して下さい。
官兵乙。行先を言へ。

村娘ろ。わたし達は之を薩摩さんに上げるのぢや。

官兵丙。なんぢや？ 賊軍に造る？ 馬鹿な事を申すな。賊軍はもう全滅ぢや。それ見ろ、白旗を掲げて彼方へぞろぞろと行く。皆降参したのだ。降参せぬ者も負傷したり、討死したり……

村娘ろ。何いふんぢや。まだ桐野どん、邊見どん、別府どん、官軍がどれほどかよつても負けぬ大將が居らあ。

官兵乙。そりや知らぬが佛といふもの。そりやどうでもよいとして、此の邊に大將らしい者が見えぬか、どうぢや？

村娘は。大將らしい人は山越えにあちらへ行きなかつた。

官兵甲。なに、山越えに？
村娘ろ。いや、此の道を眞直ぐに肥後の方へ行かれたと聞いた。

官兵乙。なに肥後の方ぢやと？
村娘は。知らぬ。皆違ぢや。此の邊には誰もみやせぬ。

村娘い。ろは。(口々に)誰もみやせぬ。
官兵甲。本當に誰も居りさうもない。降参せぬのは皆逃げたらう。外へ行かう。

官兵乙。その茄子を隊へ持つて来い。めづらしい早なり。持つて来い。

村娘い。いやぢや。誰がやるものか
村娘三人茄子を打つけて逃げ去る。官兵後から入る。下手より邊見、馬上で見返り見返り出て来る、百姓體の男一人隨ふ。

邊見。餘り不覺の敗軍に味方もちりくばらばらになつた。残念な事ぢや！
百姓。私共も精々御加勢申しても、何分百姓の事、其處處に負傷しておいでの方隊さんを宥に入れて御手當する位の御用が相應。せめて方々にかくれて御座る兵隊さんを、探し集めて参りませう。

邊見。しばらく此處に休息しよう。よく世話をしてくれ。(大松の下で馬から降り。百姓、馬の口を取る。)ありがたう。此處から歸つてくれ。(百姓、禮をして馬をひいて入る。)大きな松ぢや。しつかりして居る。立派ぢや。こゝは新納武藏守が大岡秀吉を相手に城を守つた古跡ぢや。新納は島津の君公

が降参しても、降らなんだ。何處までも戦つた。天晴れぢや。思へば、羨しい。西郷先生の宿望は遂げられず、外國を相手に戦ふべき我が薩摩兵を大死さす残念さ。それも思ふ存分に戦つたならば、尚ほ武士の意地づくとして諦める。此の敗軍は何事？ 誠にざまがない！ 田原坂で戦つた私學校の兵が居るならば、かくむざむざと負けるものか。如何なる敵でも蹴散らして、勢を變ずるものを！ 遽かに寄せ集めた田舎の兵、腹もなく、腰もなく、言ひ甲斐なく降参してしまふ。それも一月訓練したならば、何とかなつたらう。

引張つて来て、直ぐ戦ふのは何とも仕方がない。弱いの無理がない。(激昂して)己れに私學校の兵を與へてくれ！(調子を落して)最早、私學校の兵は残り少ない。返す返すも残念ぢや。先生の志は事と反して此の有様。誰が先生の志を繼ぐか？アレキサンドルは三十歳で印度まで征服した。ナポレオンは二十八でイタリヤを征服した。アルプス越えは三十二の時と聞く。己れは二十九で此處から落ちて行く。何といふ膽甲斐なし、意氣地なしぢや！(松に取纏つて男泣に泣く。ふと氣をかへて松を見上げ、昂然と)そ

れでも男兒、この儘で果てるものか。何處ぞで官軍の眼を驚かし、眞の戦争を教へてやらう。あれ等は戦争らしい戦争を知らぬ。兵器を携へて行列するに過ぎない。戦争を教へてやらう。何時か役に立つ日があらう。大きな松、見事な枝ぶり、おはんは百萬兵にもびくともせぬ。己れにあやからせてくれ。己れは松にならう。

百姓五人、降参兵士三人に繩をかけて来る。

百姓甲。降参の兵を連れて来ました。

百姓乙。殺して仕舞ひませう。

百姓丙。拳固で打つてやらう。(一人を打つ。)

邊見。いや、放してやれ。兵器だけ取上げて。

百姓二。(顔を見合せてためらつたが、)命冥加な奴ぢや。(繩を解く。兵士横這ひ逃げる。)

邊見は松と別れを惜んで立つ。

幕

第四幕

可愛獄脱出の場

時

明治十年八月十八日未明

人物

邊見 十郎太

西郷 隆盛

桐野 利秋

別府 晋介

池上 四郎

村田 新八

近衛兵士 若干

薩兵士 若干

番兵 四人

険しい山路、竹矢來を設け、要處々々に砲臺が見える。舞臺下手斜に竹矢來を廻し、拂曉の景。

番兵四人限さうにしてゐる。東天が胸か白む。バリ／＼と竹矢來を破る音が聞える。

番兵、誰だ？

音は次第に大きく、人聲がまじる。

番兵四、誰だ？ 誰だ？ 誰だ？

邊見。(朝霧の中から霧のやうに出て、大音聲に叫ぶ。)

雷撃隊大隊長邊見十郎太通行致す。番兵驚く。續いて英式喇叭で進軍の音が

聞え、薩兵どや／＼と来る。

番兵。賊軍が来た！ 賊軍！ 賊軍！ (非常喇叭で官軍が慌てて集まる。)

邊見。あわてるな。ぶつ拂ふぞ。(刀を抜いて) エーッ！

薩兵の一部抜刀で躍込み、一部射撃する。射撃は命中する。官軍は不意に驚き、軍服を着けかけて逃げるのがある。

薩兵續々入込み、將校もまじつてどきどき逃げ捨てる。

邊見。これしきの山路、何でもない。敵は驚いたらう。あのさまでは追撃は出来るまい。(後から来る味方への印に立木に紙片を結び結び入る。舞臺暫時、空。)

三四十人の人夫に交り、別府、桐野、村田、池上などつき随つて、西郷を駕籠に乗せて出る。

別府。(邊を覗ひ紙片に眼をつける。)む、此の方角ぢやな、此の分では鹿兒島まで大丈夫ぢや。

桐野。もつと遣つ付ければ宜かつた。あれなら仕様もあつたが、惜しい事をした。

池上。野津が近衛の上族兵で固め、三好の隊も居るので、もつと手剛いと思ひよつたら、無

造作に破れた。初めからさうと知つたら。惜しかつたな!

桐野。突田を目的として前中後の三軍に分たず、前軍を多くし、之に主力を注ぎ、突撃に次ぐに疾風迅雷の追撃を以てしたならば、愉快な勝利を得たらうに。下司の智慧は跡から出る。あはよゝゝ。

村田。さうぢや、それも野津や三好が餘り油断したからの事、先づ破つて出たので宜いさ。(西郷の籠に近づき)先生、一寸景色を御覧なさい。

西郷。おゝ、皆草臥れたらう。うつかり睡つてしまつた。相濟まぬ。實によい景色ぢや。段々と明けて行く山の色は何ともいへぬ。かういふ人家に遠い所は熊が居らうな。

村田。から人が多くては熊が居つても隠れておませう。

西郷。出て来ても獵銃が無うては仕様がな。まさか軍銃で打てもしまい。(微笑)

別府。スナイデルの分捕品が大分ごわす。西郷。それで先刻の怪我人はどうぢやつた? 何人位ぢや?

村田。後軍は續かないと見えます。熊本隊、協同隊等は仕方がありますまい。

西郷。邊見は元氣な男ぢや。戦争にかけて勇氣ばかりでなく、不思議に智慧が出る。大軍を動かすことも出来るよう。

桐野。初めに大隊長にせねばならぬのでした。村田。戦争では全く天品ぢや。例の一件で、人が承知しまいと思つてさうしなかつたのは日

が利かなんだのぢや。西郷。露西亞と戦ふに詭向ぢやが、惜しい男を……。

皆、感慨深い眼を見合せる。幕

第五幕

城山の場

時

明治十年九月二十一日夕

人物

邊見 十郎 太

同 岩次郎

別府 晋介

兵士 若干

おはつ

おとよ

おきく (岩次郎は十郎太の弟、十六七歳)

城山山中、大きな岩が其處此處に見え、幾つもの穴が掘つてある體。雨上りのむし暑い宵。

一つの岩穴に兵士若干屯してゐる。

兵士甲。もう九月の末だといふに何時まであついか。

兵士乙。暑いはいいが藪敷に恐れる。

兵士丙。彈丸に恐れぬ此の勇士も藪敷に退却する。

兵士丁。それはさうと、おはつさんや、おとよさんは穴の中で針仕事ばかりしてゐるが、用意はもう出来たといふ事ぢや。可愛絨を脱出した手際で、邊見どんが此度もきつとうまくやらう。一方を切開いて脱け出せば、又よい計畫があらう。

兵士乙。さうぢや、命令で直ぐ間に合ふ様に準備しておかう。

兵士甲。今宵は十五夜ぢやさうな。月の出るまで支度の残りをしておかうか。

皆、下手に入る。邊見、頭に細帯をして上手から出る。

邊見。用意は大方よい。可變機は大掛りぢやつたが、今度は小勢でやる。支度さへ出来れば出掛けよう。

下手から、おはつ、おとよ、おさく、手に手薄を持って出て来る。

おとよ。邊見さま。此處においでなされましたか。先日の御怪我、御痛みは如何でございませう。やつと脚絆が出来上りました。他に残りの物が少し御座いますが、氣ばかり急いで手が運ばず、申譯がございませぬ。

邊見。いや、休む間もない針仕事、何慰むるものもなく、聞えるは彈丸の響や人馬の聲、御難儀の事と御氣の毒に思うてゐる。今宵は十五夜、見れば薄を持つてござるな。

おはつ。お月様にこれを供へて、どうか先生の御身につゝがなきやうお祈り致さうと存じて一寸手を休めて今其の山で折つてまゐりました。

邊見。其れはよい所へ氣が附いた。したが兵糧とても少し。昨今、飢い中で日に夜に手仕事、いたはしいと申したいが、其れを申す場合でない。どうか少しも早く折へ上げて下さい。

おとよ。仰しやるまでも御座いませぬ。かうし

てゐる間も心せき、御免なされませ。

三人上手に入らうとする。前の兵士達、山葡萄や柿の實を持つて出て来る。

兵士甲。少しお待ちなされ。麓近く偵察に赴いた者が見知りの者に貰つた柿の實、少しまだ青うござるが御持ちなさい。

兵士乙。纏の代にせうと藤づるを探して谷間で見つけた山葡萄、さあ御持ちなさい。

おさく。これは、皆様の御心づくし、かういふ所にめづらしい柿の實。お月様に供へませう。

おはつ。おとよ。(口々に) ありがたうございます。(行く)

別府、兵士二人と出る。

別府。邊見どん。居るか。

邊見。(兵士と共に物など片づけてゐたが) 居る。どうした?

別府。西郷どんが十五夜の酒祝、分捕品の残り物、備かでも皆して飲まうと、おいが使に持つて来た。

邊見。そりや有難い、珍しい酒の味。肴はなんぢや?

別府。肴もある。罐詰ちや、今夜は静か、敵も月夜の宴をひらきやらう。さあ飲め! みな

飲め!

邊見。今少しの間のちぢや。一方から一齊に切つて出て、敵の反駁を抜けば、又自ら通じる路もあらう。

別府。さあ前祝ひに飲まう!

愉快に備かの酒を飲み交してゐる。突然、下ド、と烈しい音響。一同總立ちとなる。

邊見。何か?

別府。何事ぢや?

邊見。見て来い。

兵士甲。駆け出さうとする所へ、上手から兵士の一人走り出る。

邊見。何ぢや?

兵士。大變でござす。

邊見。大變ぢや? 何か?

兵士。第三窟の女子の仕事場の岩が崩れて全部下敷になりました。

邊見。むう! して女子達は?

兵士。直ぐに掘りをしますが、助つては居りません。僅か残つた兵糧も埋れてしまひました。

邊見。貯へおいた兵糧——任立ててゐた用意の脚絆や衣服……。失望して頭を掻へる。

別府。皆、土砂大岩に埋没したと申すか。河畑
とよは懐妊してゐる。命はどうか。(邊見を
一寸見て) 少しも早く行つてみよう、邊見、
あとから来い。

別府、兵士等走り入る。

邊見。(つつ立ち上り、地を踏み轟かし、やたら
に歩き廻る。) 残念ぢや! 絶體絶入叩ぢや!
到底勝てぬ戦ながら、せめて戦ふだけ戦ふ
決心ぢやつた。まだ其の餘地はある。今一度
圍を破り、敵を奔命に破らす積りぢやつた。
此の間から兩で地が地んで居たのか、思はぬ
災難に萬事休する。(投げ出すやうに) 思ふ
事、爲す事、皆喰ひちがひぢや。唯一つの計
畫も、かなつては此の先、西郷どんを助け
る途はつきはてた! (氣をかへて見づぐるひ
をし) 嗚呼、天命のまゝぢや。行く所まで
行つて見るまで。もう他に途はない。どりや
其の場へ行つて見よう。(行きかゝる。)

道具半廻しになる。薄、生繁り、蟲の
音聞えて、山の遠見よき風景。月上りか
かる。

岩次郎。(慌しく駈けて出る。邊見を見て)
兄さんか?

邊見。お、岩! 無事か?
岩次郎。兄さん、怪我はどうか?

邊見。なにもう癒つた。痛まぬ。

二人嬉しげに近々と寄る。

岩次郎。今の響、わしの屯所まで聞えた。何事
かと聞けば、實に珍事ぢや! 此の先、どう
する?

邊見。どうするとして——行く所まで行くぢ
や。先生も能く言はれる通り、人事を盡して
天命を待たう。(少し苦笑して) 天命もわか
つて居るが。(瞑目する。間。岩よ。兄の頼
みを聞いてくれるか?)

岩次郎。頼み? 何でも言へ! 何ぢや?

邊見。此處へ来よ。岩次郎の肩へ手を掛け已
の前に坐らせる。岩よ、お前は元來、臆弱ぢ
やつた。親達のいとし兒ぢやつた。弱蟲ぢや
と此の兄からいちめられては泣きをつたな。
思へば大きなるもんぢや。

岩次郎は平げに外面をむいてゐる。

邊見。そのお前が此度の勇氣には驚き入つた。
兄はどの位力強く思つたか知れぬ。西郷ど
んも賞めてござつたぞ。もう十分ぢや。よく
働いてくれた。したが此の戦争も早や先が見
えて。もう三四日ぢやらう。生先長いお

前が此の戦で一身を捨てたとて、何も勝負に
係はる場合でない。頼みといふはこゝぢや。
薩摩の上は數多いといへ、眞に國家を思ふ者
が幾らある? 西郷どんほど正心誠意に思ふ
のはない。その西郷どんが一寸の行違ひか
ら、かういふ仕儀となつてしまはれた。大久
保等が長州に曠されたのでも、今更言つて
も返らぬ。我が薩摩で残る者は情ない状態
ぢや。そりやまだ市藏もござる。横吉もござ
る。了介もござる。彌助、助左衛門もござる。
高位高官に登つたり、金持になつたりする
のは幾らでもあらう。(岩次郎だん／＼眞面
目になつて聞く。) 我々が亡びたとて薩摩は
長州や土州に負けるものでなく、相應にや
つて往かう。然し、眞の人傑として國家に盡
さうとする者は、此の戦争で全滅にならう。
位もいらぬ、余もいらぬといふのは、是れで無
くならう。官軍に眞劍で實地演習させたこ
とが切つてもこの事にならう。(形を改めて)

岩、そこでお前はまだ若年ぢや。今日までの
戦で本分は十分盡して居る。今から身を百
姓に扮して此處を去つてくれ。捕はられたと
て、敵は殺しはせぬ。お前が生きて居て、西
郷どん初め戦死者の精神を傳へてくれれば、

岩、そこでお前はまだ若年ぢや。今日までの
戦で本分は十分盡して居る。今から身を百
姓に扮して此處を去つてくれ。捕はられたと
て、敵は殺しはせぬ。お前が生きて居て、西
郷どん初め戦死者の精神を傳へてくれれば、

岩、そこでお前はまだ若年ぢや。今日までの
戦で本分は十分盡して居る。今から身を百
姓に扮して此處を去つてくれ。捕はられたと
て、敵は殺しはせぬ。お前が生きて居て、西
郷どん初め戦死者の精神を傳へてくれれば、

岩、そこでお前はまだ若年ぢや。今日までの
戦で本分は十分盡して居る。今から身を百
姓に扮して此處を去つてくれ。捕はられたと
て、敵は殺しはせぬ。お前が生きて居て、西
郷どん初め戦死者の精神を傳へてくれれば、

岩、そこでお前はまだ若年ぢや。今日までの
戦で本分は十分盡して居る。今から身を百
姓に扮して此處を去つてくれ。捕はられたと
て、敵は殺しはせぬ。お前が生きて居て、西
郷どん初め戦死者の精神を傳へてくれれば、

岩、そこでお前はまだ若年ぢや。今日までの
戦で本分は十分盡して居る。今から身を百
姓に扮して此處を去つてくれ。捕はられたと
て、敵は殺しはせぬ。お前が生きて居て、西
郷どん初め戦死者の精神を傳へてくれれば、

岩、そこでお前はまだ若年ぢや。今日までの
戦で本分は十分盡して居る。今から身を百
姓に扮して此處を去つてくれ。捕はられたと
て、敵は殺しはせぬ。お前が生きて居て、西
郷どん初め戦死者の精神を傳へてくれれば、

岩、そこでお前はまだ若年ぢや。今日までの
戦で本分は十分盡して居る。今から身を百
姓に扮して此處を去つてくれ。捕はられたと
て、敵は殺しはせぬ。お前が生きて居て、西
郷どん初め戦死者の精神を傳へてくれれば、

岩、そこでお前はまだ若年ぢや。今日までの
戦で本分は十分盡して居る。今から身を百
姓に扮して此處を去つてくれ。捕はられたと
て、敵は殺しはせぬ。お前が生きて居て、西
郷どん初め戦死者の精神を傳へてくれれば、

岩、そこでお前はまだ若年ぢや。今日までの
戦で本分は十分盡して居る。今から身を百
姓に扮して此處を去つてくれ。捕はられたと
て、敵は殺しはせぬ。お前が生きて居て、西
郷どん初め戦死者の精神を傳へてくれれば、

岩、そこでお前はまだ若年ぢや。今日までの
戦で本分は十分盡して居る。今から身を百
姓に扮して此處を去つてくれ。捕はられたと
て、敵は殺しはせぬ。お前が生きて居て、西
郷どん初め戦死者の精神を傳へてくれれば、

岩、そこでお前はまだ若年ぢや。今日までの
戦で本分は十分盡して居る。今から身を百
姓に扮して此處を去つてくれ。捕はられたと
て、敵は殺しはせぬ。お前が生きて居て、西
郷どん初め戦死者の精神を傳へてくれれば、

又薩藩の、いや日本の幸福ともなる事があらう。解つたか？ どうか直ぐ此處を去つてくれ。

岩次郎 兄さん！ そりや本氣で言ふか？

それはそんな卑怯な者とはちがふぞ。兄の先途も見ず、先生に背き、どの顔で逃げ出さう。餘り無慈悲な言ひ分ぢや！

邊見 さういふと思へばこそ、先から頼みというた。兄の頼みでない、其れが國家へ報いる道ぢや。

岩次郎 國家へ報いる道は忠孝の道と聞いてゐる。今の場合、忠は西郷どんの爲、孝は兄さんの爲ぢや。二人を捨てて、一人何處へ往かう。此處を去らぬぞ。

邊見 去らぬか？

岩次郎 (強く) 去らぬ。

邊見 命令ぢや！

岩次郎 命令かぬ。軍罰に處せ！ 一寸も動かぬ。

邊見 (脅すやうに) どうでも去らぬな。

岩次郎 憤つておし黙る。邊見はつくつくと見て涙ぐむ。

邊見 岩、こつち向いてくれ。よし、おゝ、そんなら兄と一緒に(つかく)と寄つて手を取

り、死んでくれ！
岩次郎 兄さん、許してくれるかつ！ (飛上るやうにしてしがみつく。)

二人相擁く。間。月上る。

邊見 お、兄が無理ぢや。ゆるせ。これから西郷どんの所へ行き、後の方策を定めよう。お前も共にゆかう。

月魄がだん／＼光をまして晝のやうに輝き渡る。

邊見 月が昇つた。明月ぢや。い、月ぢや。あの水に映る所は明皎々たる玉が砕けるのぢや。玉と砕けよう！ 玉と！

二人月を仰いで立つ。

舞臺裏にて

幾線二幸酸一志 始 堅。

丈夫 玉 碎 恥 二 觀 全

我家 遺 法人 知 否。

不 下 二 兒 孫 一 買 中 美 田

靜に幕

(大正十四年一月一日)

職業としての文學

文學の職業として良からざるは、報酬の少きを以て言ふべからず。從來文學者にして、多額の金を得たるは之れ有り。中には大學教授の収入よりも遙かに多くの報酬を受けたるあるが、概して身を處すること不規則にして、時に多額の金を得るも忽ち消費し、已むなく借、錢に衣食する珍らしからず。一たび高利貸に追はる、則ち此より脱するの難きは、各種の職業を通じて一、特に文學者は、自墮落よりして困厄に陥ること多し。然らずんば、職業として別段の困難なかるべし。

文學を職業とせずして他に生計の途を得ば、之に優るなきは勿論なるも、人に迫られずして勉強するは稀れ、多くは半ば嗜好し半ば餘儀なくされて事を成すもの。全然遊樂の心得にて大家と爲りたる無さにあらざれど、窮困よりして傑作の成りたる事例亦少からず。人の運命はもと種々、豈一を以て律すべけんや。

(「櫻痴」の「雅より」)

年 譜

萬延元年 (一七歲)

陰曆五月十九日、加賀國金澤城下新野町に生る。父は恒君、立軒と號す。母は瀧井子、黒川氏。先生は其の第三子、次男なり。實は第四子、三男なるも、長男雄太郎君の夭死を以てなり、初名を雄次郎、次に雄叔、更に雄二郎とす。

慶應二年 (七歲)

河波有造氏に就いて四書五經の素讀を受け、傍ら地理、數學、習字を學習し、明治四年に至る。

明治四年 (十二歲)

郷里金澤の佛語學校に入り、次いで英語學校に轉す。

明治八年 (十六歲)

二月、尾張の愛知英語學校に移る。

明治九年 (十七歲)

九月、東京に出て、開成學校翌十年、東京大學と改稱)に入り、明治十一年、故ありて退學す。

明治十二年 (二十歲)

東京大學文學部に入り、哲學を修む。

明治十六年 (二十四歲)

東京大學文學部哲学科を卒業す。

東京大學準助教として、東京大學編輯所に就職し、日本佛敎史の編纂に従事し、同十八年に至る。

明治十七年 (二十五歲)

十一月、自由新聞記者の肩書にて秋父暴動の實狀視察の途に上る。

明治十八年 (二十六歲)

東京大學を帝國大學と改稱、東京大學編輯所に改革あり、文部省編輯局に入り、同二十年に至る。

明治二十年 (二十八歲)

十月十二日、父君立軒先生、病に罹りて長逝、六十二歲。東京專門學校講師として、論理學等の講義を擔任す。哲學館講師として、西洋哲學史の講義を擔任す。

明治二十一年 (二十九歲)

哲學館關係の井上圓了、辰巳小次郎、棚橋一郎、加賀秀、島地默雷、及び東京英語學校關係の杉浦重剛、宮崎道正、志賀重昂、松下丈吉、菊池熊太郎、今外三郎、杉江輔人諸氏と協力の下に、政教社を創立し、四月三日(神武天皇祭日)を以て日本人第一號を發行す。宣言の末尾に云ふ、予輩同志は、日本人の降尊と進退去就と共にし、始終全力を極盡して、之に關係する萬般の事業を幹旋し、兼て平生懷抱する處の精神を、姓名と共に定時刊行雜誌上に告白せんことを誓約する者也。と。
陸長の前途を占ふ— 日本人第二、三、五號の三回に續く。
「維新後政府外の政治家」 西郷、阪垣、後藤、谷、大隈、井上七氏の月旦。
「三千の奴隸を如何にすべきや— 當時一世の問題となりし高島炭礦坑夫の後狀を述べ、末尾の墨句に、「高島炭礦舎が三千の奴隸を虐使するは、正當の工業を妨得せんとする者なり。高島炭礦舎が三千の奴隸を虐使するは、仁慈の名ある帝國人民の體面を毀傷せんとする者なり。高島炭礦舎が三千の奴隸

を虐使するは、銳意文化に進まんとする東洋
全般の榮光を消滅せんとする者なり。高島炭
礦令が三千の奴隸を虐使するは、千載萬載
を経て進化發達し來れる人類社會の大道を阻
礙せんとする者なりとあり。

明治二十二年 (三十歳)

その他「天皇長節を賀し、日本人に望み、兼ねて
所懐を述ぶ」「帝室安泰の爲め」「彈劾の切要な
時あり」「森文部大臣に望む」「決闘に關して
犬養毅氏并に新聞雜誌記者各位に質す」等、
雜誌「日本人」關係者として、後藤象二郎伯
に招待せらる。是れ蓋し大同團結の前準備
と視るべきもの、大石正巳等の提議に係る。
十一月、一哲學涓滴」を書肆文海堂より出版
す。

「日本人」所載時事評論、感想文の主なるは、
「余輩國粹主義を唱道する者偶然ならんや」
「畢竟尙殖民政策を主張する者は何等の人物
ぞや」一晝中休暇に臨み一言を歸郷の學生に呈
す、進學の解「古戰場」(ヘウキクトル・ユーゴ
の「哀史」)に載するワテテルロウの抄譯「大
日本帝國憲法を評す」伊藤伯爵著帝國憲法義解
を讀む「紅葉山人の色懺悔を評す」法典編纂
の事業」大隈伯の遭難を傷み改進黨員の舉動

明治二十三年 (三十一歳)

を憾む「支那人の内地雜居を論ず」自由黨の
再興「藤長の割和」等。
大内青巒氏の部刊經營に係る「江湖新聞」に執
筆す。意に適せざることありて退社し、辰巳
小次郎氏を主筆とする新聞に執筆す。
「江湖新聞」に執筆中、同紙の記者たりし宮崎
晴瀨氏を介して、板垣伯より面會を求められ、
一日會談す。伯は個人主義對國家主義「關
係よりして、國家なる語に不快を感じ、國家」
といふ代りに「國是」といふを強調したり。
「新年を迎へて一言す」紳士論、十放論、壯
士論「富を以てせんか、徳を以てせんか」大
政治家の纏綿あるか「歲晚に際し天を仰いで
絶叫す」英と佛「二亞細亞纏綿集」政黨競争
の弊害「帝國議會」獨立主義の必要「其他
二十餘篇を日本人に載す。

明治二十四年 (三十二歳)

三月、一眞善美日本人を、次いで「偽惡醜日
本人」を、政教社にて出版す。
六月二日發行「日本人」第七十三號所載の論
文が、其筋の点諷に觸れて發行停止を命ぜら
れしと共に「日本人」を廢刊し、六月二十九
日、別に週刊雜誌「亞細亞」を發行す。

九月四日發行の「亞細亞」第十一號に「我觀」
と題する一編を設け、その二諸言を掲載す。
「國會」新聞に執筆す。
九月二十日、海軍練習艦比叻に便乗し、南
太平洋諸島巡航の途に上る。グアム島、ニュ
ープリテン島、濠洲アリスペンを経て、十
二月九日、シドニーに着す。その夜、スタ
ンレーの阿弗利加探検の講演を聴く。同月二
十九日、シドニーを出航し翌二十五年一月
四日、メルボルンに着、バララットの金坑を
見物し、同月二十一日、メルボルンを出航し、
二月五日、新ガレドニア島のヌメア港に着、
同二十五日、新ギニア島のヴィルヘルム港に
着、三月八日、ズールー島のズールー港に
着。香港を経て、四月十日、品川に歸着
す。艦内に後の廣瀬中佐、加藤大將、安保大
將等あり。

「日本人」二亞細亞」所載の評論中の主なるは、
「國體を機として異主義者を摺附する鄙劣無
恥漢。大に兇變を利用する者を戒む」進歩
黨とは何ぞ、保守黨とは何ぞ、在野黨は宜し
く聯合せざるべからず「學生諸子の歸郷を送
る」謂ゆる黒幕なる者「帝國大學の學生」大
學出身の官吏「二特命全權公使」二武臣と財

憲「半學半俗」咄々「政治上の新陳代謝」進退を潔くせよ「權略家と新聞雜誌」立憲改進黨に過を貳びせざらんことを望む「帝國議會」と日本人等。

明治二十五年 (三十三歲)

四月十日、南太平洋諸島の巡航を了へて品川に歸着し、五月中旬より再び「亞細亞」誌上に執筆す。その主なるものを擧ぐれば、「教職と司法官との腐敗」伯爵後藤象二郎氏に對す「官員風と議員風」五人の品藻(谷干城、鳥尾小彌太、佐々木高行、副島種臣、勝安芳五氏の月旦)「評難」武人の政治干渉「奸物」加藤弘之、渡邊洪基、井上毅「今回の内閣」大學總長板垣伯「小人」我觀「則死」同「則覺醒夢幻」一人間の弱點「英雄」君子「豪傑の壽命」伊藤伯の虚位「滔々たる平凡」等。

明治二十六年 (三十四歲)

本年十月十日、曩に廢刊せし「日本人」を復活す。蓋し明治二十四年六月、「日本人」を廢刊して、代ふるに「亞細亞」を以てしたるに、

「亞細亞」も亦頻りに發行停止の厄に逢ふこと「日本人」に譲らざ。依りて「亞細亞」に代らしむべく、茲に「日本人」を復活せしむ。十一月十日、「亞細亞」解停の命を受け、十二月一日を以て、その面目を改め、第一號を發行す。

「雜居派」と非雜居派「伊藤と次期議會」大臣職と後藤伯「現内閣の威信」「現代の少壯年」等。

明治二十七年 (三十五歲)

七月、東邦協會の囑託を受け、朝鮮視察の途に上り、八月、歸京す。間もなく日清戰役開く。

四月、長女多美子嬢生る。

四月、「馬鹿趙高」を出版す。

五月三日發行の「日本人」第十四號及び八月十八日發行の第十六號、累りに發行停止を命ぜられ、十二月二十五日、漸く第十七號を發行す。

明治二十八年 (三十六歲)

四月、長男勤君生る。一時「日本人」を休刊す。七月五日、「日本人」改卷第一號を發行す。改卷第一號以下、毎號に掲載したる時事評

論、感想文中の主なるを左に掲ぐ。論、感想文中の主なるを左に掲ぐ。

「不成長の豪傑」臺灣に客死せられたる令兄恒徳君に對する憫々の情を筆に表はせり。

「立軒隨筆」先生の先考立軒先生が、失明の爲めに醫を廢されて後三年の間、即ち明治十八、十九、二十年の三年間、與に觸れて書き記されたる隨筆の一半を抄載したり。

以上の他、「名譽と財産」夢に釋宗演を訪ふ「民人悟々」天定て人に勝つ」等。

明治二十九年 (三十七歲)

「日本人」八月二十日號より連載し始めたる「人生の兩極」は「我觀」の姉妹篇とも視らるべきもの。豫告の一節に云ふ、「時局の變化は轉瞬のみ、轉瞬の經理談は、暫らく之を他の慧敏なる論客に委し、迂疎なる余輩は、時に世間の稱する空理空論を説道して、悠揚として人生を稽ふるも、亦太だ不可ならずと信ずる也」し。

「大谷派本願寺を打撃す」第一、第二、第三。「美名の下に醜奴あり」自由黨の危機「自由黨の改革」第十議會「曖昧と曖昧」等。

十二月、次女小枝子嬢生る。

明治三十年 (三十八歲)

「日頓」を政教社にて出版す。東大陸人豪傳

の第二卷なり。

「男子世に處するの道」大隈伯と陸奥野。陸奥伯と伊東野。已代治と大隈。東海、東山、北陸の三道。新登庸の利。新登庸の害。嗚呼是れ藩閥を助長する者。大政治家たるべき資格。所謂世界主義と所謂國家主義。軍人を如遇すべし。之に阿諛すべからず。出でよ軍人を畏れざる政治家。一貫の氣風を養成せよ。英雄人を欺くべきや否や。進歩自由兩黨の合同何以。歳晚の辭」等。

明治三十一年 (三十九歲)

「大丈夫の氣魄。自恃庵の特色。女性性の君主を論ず。藩閥内閣の再興。大隈板垣二氏の闘く所。國權擴張の二面。殺伐的擴張と平和的擴張。政府對政黨の變遷。軍備擴張、外形の壯大と内質の整備」等二十餘篇。

明治三十二年 (四十歲)

「日本人」新年號の巻頭に「英雄論」を掲ぐ。二月二十日號に「西郷隆盛」を載せ、三月五日號に終る。
「三種の侵略論」三黨弊と吏弊。非國體保存。「青年の宜しく思慮すべき所」キツプリングの帝國主義。「内國に於ける新聞紙の變遷」。新聞紙は有力か無力か。等六十餘篇。

明治三十三年 (四十一歲)

「新世紀第一年人兒の志」を論ず。邦人の早熟。早老たる所以。藩閥觀念を滅殺するに要素。一現世界の偉男兒。ローズの思想。文明主義の紀國屋文左衛門(カーネギー)月旦。暮春に春服すべし。櫻の開落と人種の盛衰。如何に舊思想と新思想とを觀ん。如何なるを是れ風流とする。處行の範圍及び其の種類。朋友を論ず。如今若何か自由を觀る。ハイカラ一及び新知識。等六十餘篇。

明治三十四年 (四十二歲)

「舊世紀を顧み新世紀を想ふ」吾我慢の説に就き。策士の行動を解説す。偉人の死去。星氏の死。所謂武士なる者の性行。一何様に名聞を認むべき。秋色を觀じて人事に及ぶ。彼の獨り長嘯する者。體操の説を以て歳を送る。の外六十餘篇。

明治三十五年 (四十三歲)

四月下旬、世界漫遊の途に上る。東より西へ一周する計畫の下に、香港、新嘉坡を経て、極暑の候に印度に入り、アグラ市にタジマハルの美觀を探り、錫崙、紅海を経て、英京倫敦に起き、刺冠式を降觀し、倫敦より和蘭に入り、獨逸を経て、極寒の候に露國に入り、オデッサに出で、土耳其よりブルガリアを経て、伊太利に入り、瑞西より再び獨逸に入り、白耳義を經、佛國に廻りて、再び倫敦に歸り、大西洋を絶つて米國を通過し、布哇に寄りて翌年六月歸京す。

明治三十六年 (四十四歲)

六月初旬に歸國せられ、同月二十日發行の「日本人」誌上に「洋行といふ事に就き」を掲載せられ、以後遂に誌上に「宇内軍備の中心」としての獨佛境界。既定の英佛獨及び未定露米阿。海外に散住する日本人。日本の社會と英國の社會。日本の社會と佛國の社會。日本の社會と獨國の社會。日本の社會と伊

明治三十七年 (四十五歲)

「深山の虎と籠牢の虎。君子流英雄流才子流。既成政黨の擴張計畫。英國との同盟に就き。島國根性と海國思想。遊歴に就き」の外、十餘篇。

「日本の社會」日本の社會と英國の社會「亞米利加」即ち西洋「阿弗利加」の發展「北米合衆國の趨勢」と題する十一篇の觀光論の評論を連載して十一月五日號に及び、後之を單行本とし「大塊一塵」と題して政教社より發行す。

一來るべき水力時代「今期議會」政黨運動「政友進歩の聯合」と現内閣の外、「雜誌を論ず」新聞紙を論ず等二十餘篇。

明治三十七年（四十五歳）

二月、日露戦端を開く。

六月十二日、海軍の滿洲丸にて觀戰の途に上り、朝鮮より長山列島を經、七月下旬歸京。後の財部大將が中佐として監督官たり。

元旦號以下十二月十五日號までに掲載せるもの、一斯翁悲觀の自由對帝國主義「各國の主なる公團」征露後は彼の禍心を打壞す「一國難に乘ずる惡徒」戦争は如何に進行すべきか「戦争の露國に及ぼす影響」亞歐北一半の統一及び分割「露西亞分割は如何に行はる」露國は如何に自ら處すべきか「支那分割と露西亞分割」日露孰れか懸軍長驅「露西亞處分に關する意見の種類」露西亞處分論

と黃禍の聲「露軍の擧行を論じて」文明列國の態度に及ぶ「蒲羅斯德攻撃を如何にする」露國は今後如何の狀態「露帝の親戚附國」實際的婚嫁「東洋は知り易からず」韓國の將來極めて明白「カーライルとスペンサー」當代非戰論者の三種類「名譽心と義務心」東京日々新聞主筆「舊日本新日本の差別を排す」一四頁以上の雜誌等六十篇。

明治三十八年（四十六歳）

日露講和條約ボツマスに於て成る。

「日本人」軍定力と忍耐力「今後の露國は如何の狀」旅順攻圍の人生に於ける教訓「露國革命の徵候」戦後後の日露の關係「今の青年は戦争に冷淡なるか」日英同盟範圍擴張の主要條件「露國の名將續々消滅す」軍事の進歩を安樂する勿れ「偉人主義と凡人主義」殺人罪と天下晴れての人殺し「昔時の武將と現代の將官」戦後の國防を如何にすべき「哲人と哲學者との區別」三時代、戸位素餐と徳傳と勤勉「仁齋二百年祭及び東湖五十年祭」等の他四十餘篇。

明治三十九年（四十七歳）

二月二十日發行の「日本人」に「原生界と副生界」の第一篇を掲載、爾來毎號連載す。

十二月四日、故ありて新聞「日本社員十八號」と連法して退社し、「日本人」を「日本及日本人」と改題す。

「人々自ら新たにすべき機會」官尊民卑の減減すべき徵候「ウキリヤム・ピット」百年祭「時代を超越せよ」時代の爲めにせよ「倫敦タイムスの偉人觀」無名なるも可「隱居排斥老人排斥の矛盾」勤の後継者たるもの一成就を超越せよ等の外「日本人」誌上に載録せるもの六十餘篇。

明治四十年（四十八歳）

一月一日「日本人」創刊號を發行す。巻頭の題言は、我が敬愛する同附國并「四洲五洲の兄弟姉妹」、外に我が日本人の體分「政界三老の今後及び」原生界と副生界「第二十一」を掲載す。

明治四十一年（四十九歳）

尚ほ二月號以下に掲載したるもの五十餘篇。中に就いて主なるは、一「思想と活動」人格と文章「陸羯南氏の死を悼みしもの」今次作節の吾人の感懐「好む、好まざる」等。

いて連載さるべき「東西美術の關係」の準備として、十月十五日號に「人類攻究の方法」を掲げたる後、十一月一日號に「東西美術の關係」の第一篇を掲載し、爾來毎週連載す。全編通じて六十四回、明治四十四年六月十五日號所載を以て完了す。次いで「學術上の東西西洋を連載すること八十回、更に「東洋教政對西洋教政」を連載すること一百二十回、蓋し三編を以て「美」と「眞」と「善」に配置し、「總論」なる「原牛界」と「副牛界」(即ち「宇宙」)を加へ、通計三百二十七回に上る。

新年號以下の誌上に掲載したる時事評論感想文、其他合せて五十三篇。
六月二十三日、神田美土代町青年會館に開催したる「日本及日本人」講演會に臨席、
「現代の道徳」に就て講演をなす。

十月十八日發行の「日本及日本人」臨時増刊「吉田松陰」に二十一回「猛士吉田松陰」を掲載す。

十月「題言集」を、十二月「宇宙」を政教社にて出版す。

明治四十二年 (五十歳)

「日本及日本人」に掲載したる五十餘篇中の主なるは、

「日本及日本人」第五百號「政治家の傑出すべき機會」二議員を彈劾し得る議員一憲法發布滿二十年となる「政黨界の最も望ましき變化」帝國議會の產出せる人物一福は心に在り一何處「模範人物」を求むる「政權全權と言論」首相としての山本伯爵内子一伊伊直樹と貴會人久保、冬星一酒匂氏と江木、中野、平沼、豐島一安樂騒亂及び風俗壞亂「百鍊して秋水の光」東湖五十年祭「國務大臣たる名譽」隆演は何故に長派に劣るか「天長節」の過去將來、嗚呼斯くして五人は逝きぬ「伊藤公の後繼者」陸上競争水上競争空「中競争」山縣公下の桂西園寺兩公。
三月七日、故外山名譽教授記念學術講演會に臨席講演をなす。演題は「コムトとフムボルト」。

明治十三年 (五十一歳)

「小池十種」を丙午出版社にて出版す。

一月二十四日、日本青年會發起の義士研究會に臨席講演す。演題は「吉良上野介」。

「日本及日本人」所載五十八篇中の主なるは、「模範的の武士模範的の紳士」帝國議會の益無益「純元節は何を教ふる」神武天皇とエグベルト王「一は決意奮闘一は懷疑頹廢」此

の良季節を如何に社會に於ける官私大學出身一如何に既成宗教を維持する「米獨兩雄の會見」破格なる有徳の上。
九月二十四日發行の臨時増刊「南湖」に「國威宣布の犧牲西郷南湖翁及び西郷隆盛とガリバルデー」を載す。

九月二十四日神田美土代町青年會館に於ける政教社主催の西郷南湖三十三周年祭典に臨席、講演を爲す。演題は「偉人大西郷」。

明治四十四年 (五十二歳)

「日本及日本人」元旦號の、「寒月梅花を照らす一優位の倭的人物、劣位の倭的人物」大陸日本の初元旦以下逐號所載の時事評論、感想文、其他合せて四十八篇。

連載中の「東西美術の關係」は、六月十五日發行の第五百六十號掲載の第六十四回を以て完了し、七月一日發行の第五百六十一號より「學術上の東西西洋」を連載し始む。

明治四十五年 (五十三歳)

元旦號所載「如何に一生を送るか」本年は有事有望と見よ「新年を迎ふる日出國及び東大陸」獨帝の外交漸く習巧「學術上の東西西洋」第二十回、以下各號所載の時事評論其他四十篇。

十月の初、先生バラ窓扶斯に罷り、東京帝國大學附屬院青山内科に入院せられ、十一月一日號以降十二月十五日號まで題言並に社説を缺く。

十一月十七日、先生全癒退院せらる。

大正二年 (五十四歳)

元且號には「大政は大正を期せよ」改元以後第一次の新年を迎ふ二今年の豫想事追想事「紳士とは何ぞ」を掲ぐ。以下各號所載の題言並に社説長短篇合して六十篇。

「藝術天才の記念」(リヒャルド・ワグネルの月旦)「先帝崩御より滿一年」二人爵愈多く天爵愈々貴し「力行を解して奉賀の辭に代ふ」等あり。

大正三年 (五十五歳)

元且號に「陽氣なる歳の第一日」虎の嶋を負ふが如き人及び國「大正三年の大事小事」の外「生存慾の發展」と題する長篇を載す。以下各號所載の長短篇約五十篇。

中に「英國老政客の退隱」(チエムパレンの月旦)「即位禮前の再度諒問」(昭憲皇太后の崩御を悼み奉る)「現内閣は如何に玉碎すべき」(血族宗門に自然の事)「政友會總裁の新任」(人生の快事)等あり。

「學術上の東洋西洋」は、十二月十五日號所載の第八十回を以て完了す。

大正四年 (五十六歳)

元且號に「本年の希望と警戒」大破壊後の新經營は如何「多事且つ多望なれ」の外「東洋教政對西洋教政」の第一「教政の意義を掲ぐ」。

「汝の敵は誰れ」人皆な天才「稱富強及び動大瀛」江戶より東京へ「その他各號所載の長短篇合して六十篇。

大正五年 (五十七歳)

「龍の靈怪」本年の大事と舊事「高杉東行及び高杉聖人物」殺人機「關益」擴張「浪人の位置」本月の英文家記念(四月二十三日)誕生並に忌日とするシークスピア(三百周年忌)、シャロット・ブロンテ(四月一日誕生)「百年、カライル夫人(四月一日五十年忌)の三人を記念したるもの」銀河白雲草花並に「積極的克己」言と字と文「故に横暴を慎めよ」故に變説を慎めよの外、時事評論、感想文、其他六十餘篇。

大正六年 (五十八歳)

「蛇の怪智」興きよ興國興運の民族「人類の勝利」日本は變態の太平「奮闘の勇と斷念

の勇」神慶並進「半百年の急進展」半百年生死録」の外六十餘篇。

大正七年 (五十九歳)

「手綱の控制」世界の戰亂の第五年「意馬の奔馳」春正に懸す「山陽と個卷」休戰提議より講和迄」其他六十餘篇。

大正八年 (六十歳)

「浩然と自由」世界の春光「此間政界何の進歩」二講和會議にて經驗二期待と幾何の差違」其他六十篇。

大正九年 (六十一歳)

「東洋教政對西洋教政」は第一「二百二十回に達し茲に全篇の完了を見たり」。

大正十年 (六十二歳)

一月一日發行の「日本及日本人」に「人類生活の状態」の第一篇を掲載す。「大戦後より大改造」(對露策を誤る勿れ)「政友會の重要時期」失敗者は勇奮せよ「戒むべき早骨化風」其他六十餘篇。

「日本及日本人」は、歳を重ねること三十三、八百號に達す。「支那革命十年記念」富豪の呪はる、理「彼の位倒れ金倒れ」缺點は氣力の不足「の外通計六十篇。

十二月十一日、大阪中央公會堂に開催せる關西大學三十五年記念講演會に臨席し、講演をなす。演題は「外より觀たる大阪の教育」。

大正十一年 (六十三歳)

「頭腦」の政變別二大任ある青年二人間の創造力、「官僚的國家經濟變改」割奪より超特建へ「武器は威嚇と欺瞞」罪跡、徹底的進歩「見苦しき權勢争ひ」全世界停頓の時代、「信用失墜して辭職」誤りたる榮辱、觀念「大帝國五解の跡」(獨逸露の三大帝國について)の諸篇の外、六十餘篇。

大正十二年 (六十四歳)

「日本及日本人」元旦號に「合羣超羣人」を、春季増刊「日本研究叢」に「日本と大陸」を載す。共に二十六頁に及ぶ長篇。ほかに主要なるもの「大陸人より大量なれ」。

九月一日の大地震に續いて熾りし大火災の爲め「日本及日本人」發行所、社社も、印刷所も、共に全焼す。仍りて「日本及日本人」は、當分の間、休刊する事とし、十月十五日に雑誌「我觀」第一號を發刊す。發刊宣言の一節に云ふ「瀛洲の神話に風凰フェニックスは自ら身を灰燼に燒き、灰燼中より若き姿を以て出現すとあり。幾多の言論機關が帝

國の焦土と化すると共に、我等の思想發表機關は、新基礎の上に出現するの適當なるを認む。新たなる雑誌は「我觀」と稱し、新たな思想は「我觀社」と稱し、云々と。

大正十三年 (六十五歳)

「我觀」新年號以下の誌上に發表されたる時事評論、感想文、雑誌中の主なるものは、政界に起れる大動搖「總選舉と政界」(歸國)紳士的に競争せよ「停頓超羣」傾向「新政治後の重要資格」優秀民族たるの道「列國皇室の分岐點」及びカント政後三百年とバイロン政後一百年とを記念したる長篇「哲人と哲人」。

「人類生活の狀態」は十二月號に掲載したる「究極安定」を以て完結す。回讀すれば、去る大正九年一月號に其の第一篇を掲載して

より今日に至るまで、回を重ねること一百十五、初めて「原生界」と副生界(即ち「宇宙」)を連載してより通計四百四十二回、歳を閱すること二十年に三月を缺くのみ。

大正十四年 (六十六歳)

「我觀」の新年號に續曲の處女作「見十郎太」を、同誌十月號に戯曲「前原一誠」(五幕八場)を、同誌十一月號に戯曲「人將軍の離離」を掲載す。新派俳優澤田正二郎は人を介して、「邊見十郎太」を赤坂溜池座に上演せんことを求め、滔々準備を進めつゝありしに、偶々同座が火を失して全號したるを以て、遂に上演を見るに至らず。

時事評論、感想文、雑誌中の主なるものは、「世界の國家的階級」歐米人に劣るか「社會關係の研究」日本紳士の禮儀「政黨擴大の二途」帝國主義の意義「東京の天然人造」精神的飛行「民族の獨立合同」日本の民族と風景「自國を誇る國」無産の將來「第三黨の位置」公明正大の自信「社會黨と共產

黨ニ失敗の責任ニ民族の缺陥補正ニ朝黨野黨の關係ニ精神と形骸。

大正十五年 (六十七歳)

一月一日の「我觀」新年號に「同時代觀」の第一篇「萬延元年」を掲載す。前號に思想大系の最終篇を掲載され、茲に同時代史に筆を染めらる。萬延元年は先生誕生の歳たり。卷末に戯曲「大久保と西郷」三幕四場を載す。

本年の「我觀」に掲載された時事評論、感想文、雜録中の主なるは、

- 「低調の道德感念」二「我田引水」二「加藤伯と若槻氏」二「自分の教師」二「大國民的の襟度」二「政黨の進歩保守」二「自分の同僚」二「思想の善導と取締」
- 「職務と名譽と利得」二「他國の幸不幸」二「議會政治の將來」二「各名士の犯罪」二「支那及び印度」
- 「政治興味の變化」二「紳士的政治家」の外四十餘篇。

「同時代觀」は萬延元年より應應三年に至る十二篇を載す。

十二月二十五日、大正天皇崩御。今上陛下、御踐祚あらせられ、昭和と改元す。

昭和二年 (六十八歳)

雜誌「我觀」誌上に掲載せられたる長篇短篇

中の主なるは、

- 「天皇崩御 皇嗣踐祚」
- 「同時代」への寄與
- 「英雄國と紳士國」
- 「活動期間の延長」
- 「日本憲政の特質」
- 「帝王の教養」
- 「政治家の策略」
- 「黨籍なき選舉人」
- 「倫理化と道德化」
- 「列國協調の地獄」
- 「文明文化の進展」
- 「黨首格の競争」
- 「新支那の政治難」
- 「就職難の意義」
- 「二大政黨の對立」
- 「政局安定の日」
- 「政黨の公明程度」
- 「教育界の刺戟」
- 「危險思想の去來」
- 「法網を滑る大盜」
- 「中華民族の現状」
- 「自己進善の持續」
- 「朝野兩黨の對抗」
- 「政策の積極消極」
- 「中央地方の關係」

同時代觀は「應應三年」に續いて「世界八年間」上下二篇。明治元年(上、中、下)、明治二年(上、下)、明治三年(上、下)、明治四年(上、下)を収録す。

- 五月二十八日夜、夫人同道、東京驛發、二十九日、京都公會堂に開催の府教育會に講演、宇治に宿泊、三十日、伊勢二見ヶ浦に宿泊、三十一日、内宮外宮を参拜、鳥羽に行き、六月一日、東京驛着、歸宅。
- 八月六日、夫人同伴、東京驛發、大阪に赴き、寶塚ホテルに宿泊、翌日、山林精常園の講堂に講演、園遊會に列し、夜、寶塚歌

劇を觀覽、八日、有馬温泉に宿泊、翌日、特急にて歸宅。

昭和三年 (六十九歳)

戊辰より戊辰へは元旦號の題言にして、以下の誌上に連載せる主なるは左の如し。

- 「世界の優越區域」
- 「普選議員の誕生」
- 「第一流の政治家」
- 「第五十五議會」
- 「總選舉後の政界」
- 「英雄政治と衆智政治」
- 「皇室關係の標語」
- 「新興勢力の先驅」
- 「酷烈政策の効果」
- 「郷土新景の發見」
- 「三種の生活方法」
- 「誰が將來の強者」
- 「思想善導の解釋」
- 「昭和戊辰の大禮」
- 「軍備減廢と武的精神」
- 「其他五十餘編」

同時代觀は、明治五年(上、中、下)、明治六年(一、二、三、四)、明治七年(上、中、下)、明治八

年(一、二、三、四)、明治七年(上、中、下)、明治八

年(主)の二十四篇。
七月二日、嫡孫立雄君(長男勤君長男)出生。

十二月一日、長男勤君、日本橋區役所新築工事監督中、奇禍に罹りて入院、同夜逝去する。

昭和四年 (七十歳)

「惡化よりも惡化」模範級の過現未、「支那の統一問題」依然たる支那と印度、「世界の五大聯邦」基督教徒の異教觀、「國民の覺醒程度」其他長短篇七十餘篇。

「同時代觀」は第三十六回より第四十七回に至る十二篇。

六月十三日、夫人同行、夜汽車にて加賀金澤に赴き、十四日、市公會堂に開催の市祭に参列し、祝辭を陳ぶ。十五日、栗ヶ崎遊園地に觀劇。十六日、本多男邸に開催の加能越史談會に講演。十七日、市教育會に講演、演題は「廣義の教育問題」。十八日、能登七尾より乗船、宇出津に赴き、祖先の遺跡を尋ね、和倉に泊り、十九日、金澤に歸り、醫科大學に講演。二十日、上野着、歸宅。

十月二十六日、夫人同伴、阿賀野川の紅葉を賞し、十時、新潟に着。醫科大學に講演、演

題は「獨創と追隨」。途を信越線に探り、曉天に稚米峠を過ぎ、上野着、歸宅。

昭和五年 (七十一歳)

「印度三億民の力」中華は民國なるか、「不景氣の教ふる所」二人造人間の劇留、「苛烈なる經濟訓練」現代文明の強點、「政治家の急務」

「軍縮會議」總選舉の示す所、「大人の試験地獄」文明國の消化程度、「日本の民族」政友會の必要人物、「中華の政争」遺傳の助長と矯正等六十餘篇。

連載中の「同時代觀」は、第四十八回より第五十九回に至る十二篇を載す。

十月十七日、夫人同伴、上野驛發、十八日、金澤着。野田山の墓に展し、十九日、第九師團招魂祭に臨席、教育會館に開催の教育救語御下賜四十周年記念式に臨席、續いて縣教育會に講演、演題は「教育救語參考資料」。教育會館に於ける祝宴に列し、翌二十日、能登七尾に赴き、同市中學校に於ける教育會支部に講演。次いで和倉に赴き、二十一日、羽咋に講演、金澤に歸り、夜、懇談會に出席。二十二日、美川に親戚原田氏を訪ひ、大聖寺に親戚稻坂氏を訪ひ、片山津に宿泊。翌日、金澤に歸り、第一中學校に講

演。翌日、上野着。歸宅。

演。翌日、上野着。歸宅。

此の「年譜」は、主として先生が直接に主筆し居られたる雜誌「日本人」、「亞細亞」、「日本及日本人」、「我觀」を参照して起稿したる者なれば、「江湖新聞」や「日本新聞」に所載のものは固よりの事、「婦人之友」(明治三十八年頃より毎號寄稿)、「實業の世界」(明治四十一年頃より毎號寄稿)等諸雜誌に所載の者を含まず、若し此等をも過く参照して記述したるならば、年譜の量は更に加はりて、一層其の長きを加へたるならん。又た著書と講演と旅行とに就いても、上記の「日本人」以下四雜誌に所載の記事を参照したるに止まれば、此の二つも亦た單に其の幾分を記述するに過ぎず。他日稿を改むる機會あらば、更に記述漏れの一切をも参照して、些かの遺漏も無く、完全に近きを起稿せんことを期す。

昭和五年十二月

八太徳三郎記

昭和六年一月七日印刷
昭和六年一月十日發行

現代日本文學全集 第五篇

著 者 三 宅 雪 嶺

發 行 者 山 本 美

印 刷 者 杉 山 愛 二



發 兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四〇番地

改

電 話 芝 (42)
接 替 重 京 八
番 番 番 番 番
社



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03063 6898



改造社